

ソードアート・オンライン
イン アリシゼーション
Imaginary Fabricte ~
光を照らす執行者~

熊0803

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「必ず、お前を取り戻す」

ルーリッド村で衛士の天職に就く少年、ルーク。

幼馴染のユージオとアリス、■■■■の三人と暮らす彼の平穏な日々は、突如村にやって来た整合騎士によって打ち砕かれる。

連れ去られたアリスと、殺されていた果ての山脈の白竜。

公理教会に疑念を抱いた彼は、白竜の骨で作られた剣を携え、鍛錬に明け暮れた。

—それから6年。村からの出立を考え始めたルークとユージオの前に、記憶を失った謎の少年、キリトが現れる。

運命の歯車は、ここから切り替わる。

夜空抱きし黒の剣士と、氷の薔薇携えた青の剣士。

そして、守護竜に選ばれし白銀の剣士。

黄金の少女を取り戻す為、三人の少年は剣を執る。

この作品はリア充応援団長heroさんとの共同開発作品です。多くの方に読んでいただけると嬉しいです。

ルークのイラストです。

目次

【第一章】 竜の産声

幼馴染 1

北の洞窟 18

氷の庭園 32

別れと戒め 47

目覚め 75

そうして、出会った。 91

キリト 105

負い目 118

覚悟 132

再び洞窟へ 149

勇気を吠えろ 163

ここから、始まる。 188

【幕間】 現実

デザインナー 210

【第二章】 研ぎ澄まされる牙

ザツカリア剣術大会 前編 223

ザツカリア剣術大会 中編 237

ザツカリア剣術大会 後編 250

ミステリアスな先輩 265

貴族 279

休息日 前編 294

休息日 中編 310

休息日 後編 324

邂逅 336

古い物語

351

稽古

370

再会

384

【第三章】 幼竜の咆哮

新しい学院生活

401

秘める意思

414

先輩とは

428

課外授業

441

炎の騎士

454

焦燥

472

失いかけて、掴み取り。

488

責任と権利

513

予兆

535

凶兆

557

産声を上げて

575

再会と、邂逅と

606

【幕間】 現実2

デザイン12

639

【第四章】 白き翼

牢獄での出会い

655

始動

672

白翼と蒼角 前編

693

白翼と蒼角 後編

708

整合騎士エルドリエ

725

白燕

750

箱庭の真実 (1/3)

764

箱庭の真実 (2 / 3)	785
箱庭の真実 (3 / 3)	806
ライオット・シユトルツ	825
四聖竜	841
決意	857
戦いに向けて	872
桐谷和人にとって	889
白き牙の真髄	913
出立	933
炎纏いし、黒盾の狩人	959
白き翼	981
運命の刻へ	1022
その心に残ったもの	1046

イーデイスという騎士	1071
黒の使者	1107
騎士との別れ	1132
騎士長ベルクーリ	1159
道化の元老長	1185
青薔薇の騎士	1213
ルークの答え	1238
使者の最期	1266
使命を糧に、命を贅に	1292
願いを追いかけた者	1328
御魂斬り	1355
最期のその時まで	1390
終幕	1424

【幕間】 現実3

第一部 登場人物紹介

デザイナー3

【第五章】 真の心

仮初の平穩

喪失という名の絶望

失い、彷徨い、それでもなお。

1535

かつて誰かだったモノ

母の意地

残酷な再会

鉄拳制裁

抜け殻の心

16601642161515851559

15191494

14741458

惨劇

勇気を以って、誇りを叫べ

集う騎士達

一家団欒？

新たな旅立ち

【第六章】 嵐前

羽化を待つ欠翅

暗黒騎士イキシア

闇の神

犠牲

大義の為に

未来への布石

終末へのカウントダウン

1933191418921876185818361818

18001782175617171681

戦場にて

愛の発露

心の行方

竜の王

心を一步、踏み出して

これからも隣に

【第七章】戦乱の狼煙

軍議

三冥将

出陣

終末の崩門

2143212621052078

206520492031200619831958

【第一章】 竜の産声

幼馴染

カンツ……カンツ……

森の中に響き渡る、何かを打つ音。それに耳を傾けるのは燦々と陽光を大地に注ぐ太陽と、森の木々たち。

その木々の中央にそびえるは、天を貫かんばかりにそびえる漆黒の大樹。その根元から、音は断続的に森に広がっていた。

「四十、三……四十、四！」

漆黒の大樹……「ギガスシダー」の幹に向かって、一人の少年が汗を流しながら無骨な斧を振るっていた。

サラサラの黄金の髪の間から覗くのはエメラルドグリーンの瞳、白い肌をジリジリと太陽の光が熱し、集中力を奪っていく。

それでも、少年は体を動かす。腕を引きしぼり、腰をひねり、両足で強く地面を踏み

しめ、そして……

「五……十一！」

最後の一回は、わずかに軌道がぶれて無傷の部分に当たった。金属を叩くような音とともに火花が散り、少年は斧を手放し尻餅をつく。

「ふう……はあ……やつと終わった」

「ははっ、今日は50回中3回いい音がしたな。だから……えーと、合計で41回か。今日のシラル水はそつちのおごりだな、ユージオ」

荒い息を吐く少年……ユージオに、ギガスシダーの根に座っていた黒髪の少年が笑って言う。

少年は少しむすつとしながら黒髪の少年のいたずらげな顔を見た。それに対して同い年の幼馴染にして親友はニカツと笑う。

十分に息が整うと、ユージオは立ち上がる。そこに根から飛び降りた少年が皮の水筒を投げ渡した。ユージオはキャッチして、ぬるくなつた水を飲む。

「ん……ふはっ、＼キリト＼だつてまだ43回じゃないか。すぐに追いつくよ」

「おお、そりや楽しみだな、つと」

はい、と手渡された斧を受け取つた黒髪の少年……キリトは、斧を肩に担ぎながらギガスシダーを見上げた。

幅四メ、直径七十メもあるこの化け物大杉は、二人の生まれ育った《ルーリッドの村》が生まれた以前からここに佇んでおり、ずっと切られてきた。

その年数、実に三百年。気の遠くなるような年月を六代の刻み手が斧を振り続けてなお、まだ四分の一削れたかどうかと言ったところだ。

「こーんなでつかいもの、倒せるわけねえよなあ」

「こらキリト、そういうこと言っちゃいけないよ。これを削り続けるのが、僕たちの《天職》なんだから」

説教するユージオにうへえ、という顔をするキリト。自分たちの約七十倍の大きさの代物を、どうやって切り倒すというのか。

こうしている間にもギガスシダーは、陽神ソルスと地神テラリアの《恵み》から栄養を取り込んで《天命》を回復している。明日の朝には今日の分は完全回復だ。

ちなみに《天命》というのは、草木から人間にまで、あらゆる生けるものにある命の値だ。成長とともに限界が増え、やがて減っていき死ぬ。

なぜ、ギガスシダーを切り倒さなければいけないのか。

その理由については、ここが《人界》を統括する四大帝国の一つ《ノーランガルス北帝国》の果て……つまり世界の果てだからだ。

周囲の三方向を山脈に囲まれているため、村を開拓するためにはこれをなんとかするしかない。それが村長から聞いた話である。

「ていつても鉄より硬い、火はつかない、掘り起こすこともできない。この《竜骨の斧》がなきや傷一つつけられないってんだからたまったもんじゃない」

「まあ、それは確かに……」

村長に《天職》を授かってから一年と三ヶ月、未成熟な子供二人でいくらやれども焼け石に水というものだ。

《竜骨の斧》をプラプラとさせていたキリトが、不意に何かを思いついたような顔をした。嫌な予感がするユージオ。

「なあユージオ、これの《天命》を見てみようぜ」

「なっ、そんなのダメだよ！」

「いーからいーから」

斧を置いて幹に近づき、《神聖術》を行使するときを使う蛇のような紋様を描くキリト。仕方なしにユージオも歩み寄る。

《神聖術》を行使すれば、自分や他のものの《天命》を《ステイシアの窓》から見ることもできる。

ものによって難易度が違い、ギガスシダーの《ステイシアの窓》を開けるようになって

たのはここ半年のことだったりする。

キリトがボンと幹を叩くと、半透明の紫色の板が浮かび上がってきた。二人がそれを覗き込み、見た数字は……

「……23万、5542」

「確か先月見たときは、23万5590くらいだったよね……？」

ユージオの言葉に、大げさな動きでがっくりと膝をつくキリト。無理もない、二ヶ月も懸けて減ったのはたったの50程度ともなれば投げ出したくもなる。

「こんなんじゃない生かかってもおわんねーよ！」

「そりやそうだよ。三百年かけてったったこれしか削れないんだから。少なくとも、あと九百年くらいはかかるよ」

「お、ま、え、は〜！」

真面目に解説するユージオに、バツと顔を上げたキリトは躍り掛かる。びっくりして固まり、もろにキリトのジャンプ攻撃を受け止めてしまう。

「そう小難しいことばっか言ってるんで、この現状をなんとかする方法を考えろよ！」

「ちよ、痛いよキリト！」

馬乗りになつて髪をわしゃわしゃとしてくるキリトに、ユージオは反撃せんと体をひっくり返してキリトを押し倒す。

突発的にはじまった取っ組み合いは、すったもんだの大乱闘の末ユージオがキリトの脇をくすぐって優勢にもちこんだ。

「ほら、これでもくらえ！」

「うひ、ちよ、おまそれ反則」

「くら——っ！」

キリトが涙目になって負けかけていると、二人の耳に甲高い怒声が響いてきた。

やべっ、と慌てて二人が立ち上がって背後を見ると、そこにいるのは怒り顔の美しい少女。腰に手を当て、二人をジロツと見ている。

「二人とも、またサボってたでしょ！」

「い、いや、ちゃんと午前中のノルマは終わらせたよ。なあユージオ」

「う、うん、そうだよ、アリス」

少女……アリス・ツーベルクは二人の言葉に、本当か？と疑わしげな顔をする。背筋を正して冷や汗を流す二人。

ザッ……

そんな二人の背後にあるギガスシダー……その影から、ぬつと人影が現れる。

人影は腕を広げ、アリスを注視している二人めがけて抜き足差し足で忍び寄っていき

……

「ドーン！」

「うわあっ!?!」

至近距離で大声をあげて背中を叩かれ、飛び上がる二人。バシンツ！と良い音を立てた背中にヒリヒリとした痛みが広がり、思わずうずくまる。

「はっはっはっ、油断大敵だぞ二人とも！」

「ふふっ、大成功ね」

「お、おお……な、何すんだ、ルーク……」

「あ、アリス、これは一体……?」

アリスと腰に手を当て笑う少年……ルークを見て呻くキリトとユージオ。それを見たアリスたちは大成功、とハイタッチした。

ルーク。キリトたちの幼馴染であるこの少年は、今年から村を守る衛士の《天職》を授かっており、腰には銅剣を下げています。

背丈はキリトたちより頭半分ほど高く、手足は長くすらりとしている。強い光を宿す瞳と、灰色の髪が特徴的だ。

年齢は同じ11だが半年ほど早く生まれており、その明るくまっすぐな性格からア

リス含め、幼馴染たちの兄貴分のような存在だ。

「いやなに、ちよつとアリスに協力を頼まれてな」

「二人とも、いつも私にいたずらするんですもの。だからたまにはいたずら仕返してやろうと思って」

「な、なるほど……」

「ルーク、お前……」

恨めしげな目で見るキリトに、ふふんと胸を張るルーク。文句があるならかかつてこいと言わんばかりだ。

衛士の《天職》についているだけあって、ルークは体格も剣の腕も子供の中では群を抜いて強い。なので、キリトでは勝てなかった。

「さ、そろそろ悪ふざけも終わりにして。早く食べましよう。《天命》が減ってしまうわ」
背中を押さえつつ立ち上がるキリトとユーゾオに、アリスが手に持った籐かごを掲げる。中に入っている昼食を想像して、二人は目を輝かせた。

ルークが風呂敷を広げ、四人はその上に座る。アリスが真ん中にかごを置き、蓋を開くと全員が中を覗き込んだ。

中に収まっていたのは、ひき肉と豆が包まれた小麦色のパイ、薫製肉とチーズを挟んだ黒パンのサンドイッチ、ミルクの入った小さな壺。

「わあ……！！」

「おお！」

「ほほー、こりや美味そうだ」

「ちよつと待って」

「ご馳走に今にも手を出しそうな三人を制して、アリスは《ステイシアの窓》を開いて料理に残った《天命》を確かめる。

すると、急いで持ってきたはずなのにパイと黒パンは4分の1ほど、ミルクに至っては半分ほど減っていた。これでは保って15分といったところだ。

「いけない、早く食べなくちゃ。ほら三人とも、ちゃんとお祈りして」

「うーい」

「うん」

「りよーかい」

創世の神たるステイシア神に祈りを捧げ、パイを取り出して一斉にかぶりつく。口中にサクサクの食感と甘い味が広がり、目を輝かせる。

「いつ食っても、アリスのパイは美味いなあ」

「キリトに賛成、これがあるから一日棒立ちでも平気だぜ」

「もう、二人とも。ユージオも、どう？」

「うん、すごく美味しいよ」

「よかった」

ふわり、と微笑むアリスに頬を赤くして見惚れるユージオ。それに目ざとく気がついて、ルークはニヤニヤしながらパイをかじる。

アリスは村長の娘であり、神聖術の才能が高いことから天職に付かず、教会で勉強をしている。

とはいえ、森を開拓せず頑なにギガスシダーを倒そうとしているため村は貧しく、午後は村の様々なところで仕事を手伝っている。

そして三人の昼食を届けるのがアリスの最初の仕事、というわけだ。

「んで、今日は何回 “良かった” んだ？」

「三回だよ。僕が41回で、キリトが43回」

「おっ、またキリトの勝ち越しか。これは模擬戦で負かすしかないな」

「ちえっ」

斧が上手く入った回数とは反対に、訓練という名のチャンバラでいつもユージオに負けるキリトがつまらなさそうにそっぽを向く。

ルークはここが一番村から遠いため、何かあった時のために二人に稽古もどきをしてきた。昼の休憩の模擬戦が、キリトたちの楽しみだ。

「それにしても、またミルクが温くなってしまったわ。いつもよりさらに急いだんだけど……」

「まあ、全てのものは《闇神ベクタの悪戯》によって痛んじまうからな。仕方ないさ」
害虫、日照り、大雨……それらは全て、《闇神ベクタ》の手によって引き起こされており、それによって農家などは常に大変なのである。

かくいうルークも母の《天職》は農民であり、午後は他の衛士の《天職》を持つものと交代して畑を手伝っている。特に嫌いなのは野菜に群がる小虫だ。

「そうだ、冷やしてみたらどうだ？ ほら、冬は《天命》の減少が遅いだろう？ つまり寒ければいいんだ」

「たしかに……冷たいものを一緒に入れるのはいいアイデアだ」

「そんなこと言っても、どうやって冷やすのさ」

今もジリジリと肌を焼く七の月の陽光に、ユージオがじとりとした目で突っ込む。うっとう息を詰まらせるキリト。

その横でふむ、と顎に指を当てて考え込んでいたルークが、パチンツ！と指を鳴らした。自然とそちらを向く三人。

「井戸水はどうだ？ こう、丈夫な皮の入れ物に入れといてさ」

「あの村が出来た時からある井戸？ たしかにすごく冷たいけど、汲んで一分もしたらぬ

るくなつちやうよ」

「むむ、それもそうか」

ユージオの指摘にぬぬ、と再び悩むルーク。食えることが好きな彼は、普段より真面目に解決策を考えだそうとする。

その横でキリトも考えていたが、何も思いつかないのかわしやわしやと自分の頭をかき回していた。が、やがて何かを思いついたような顔をする。

「なあルーク、アレはどうだ？」

「ん？おお、アレか……」

「？何、アレって」

幼馴染の以心伝心でニヤリと笑いあう二人に、アリスが不思議そうに首をかしげる。

一方、ユージオはなんだか嫌な予感がしていた。この二人がこういう顔をするときは、大概ろくなことにならない。

真面目で村のルールに精通し、子供達を纏めているルーク。衛士の《天職》を授かって以降、村を守る者としてその気質に磨きがかかっている。

が、一度何か面白そうなことを考え出すと、いの一番にやろうとするのもルークだ。キリトの奔放さは、それを間近で見てきた故か。

「ほ、ほら、そろそろ剣の稽古をしようよ。午後の仕事の時間もあるし、二人とも、ね？」

「まーまー、そう逃げなさんな」

話が始まる前に遮ろうとしたユージオだが、ルークに肩に腕を回されあえなく失敗がっかりと肩を落とす。

「いいかユージオ、アリス。この季節でも冷たいものに一つ、心当たりがある」

「え、そんなものがあるの?」

「ああ。ほら、二人も覚えてるだろ? 《ベルクーリと白い竜》の……」

「おい、嘘だろキリト!?!」

素つ頓狂な声を上げるユージオ。それほどまでに、キリトとルークが言ってる案は危険だった。

ベルクーリというのは、かつてルーリツドの村人の一人であり、一番剣の腕前が立つと言われていた。最初の衛士長を務めてもいたらしい。

三百年前の人物であるが、今でも口伝えにいくつかの英雄譚が残っている。キリトが口にしたのは、その中でもひとときわ有名なものだ。

ある日ベルクーリは、ルー川の上流から透明の塊が流れてきたのを見つけた。不思議に思いつく上げてみると、なんと氷塊だった。

気になったベルクーリは川沿いに進み、洞窟を見つかる。ベルクーリは洞窟に入り、中から吹き付ける冷たい風に逆らい、奥へ奥へと進んだ。

そして、最奥の氷に閉ざされた部屋にはなんと、世界の東西南北を守る白竜がいたのだ。

白竜は金銀財宝の山の上で眠っており、その中に一振りの美しい剣があつたという。ベルクーリはそれがどうしても欲しくなり、白竜を起こさぬよう盗んで逃げようとして……というのがその話だ。

「まさか、山を越えようっていうのか？」

「いやいや、そうじゃない。村の掟にも、大人がついてなきや子供は北の峠を越えてはならない、つてあるしな」

二センチほどもある厚い羊皮紙の村民規定を思い浮かべ、首を横に降るルーク。じゃあ一体どういうことだ？とユージオは思う。

「話によれば、洞窟の中は氷漬けだったんだろ？なら入口のところで二、三本氷柱を折つて持つて来ればいいんだよ」

「キリトのいう通りだ。掟には遊びに行つてはならない、と書いてはあるものの、これはある意味真剣な仕事と言つていい。なにせ、《天命》の減少を抑えられたら皆助かるからな」

つらつらと最もつばいことを、ワクワクとした目で話すルーク、それに同調してウンウンと頷くキリト。ユージオは再びため息をついた。

ルークの厄介なところはここだ。子供全員が教会で勉強を始める際に掟を教わるが、ルークやアリスはそれを一言一句覚えていく。

そのため、うっかりなにかのルールを破るといふことがない。つまり、必ずルークの企みは成功してしまう、ということになる。

しょうがない兄貴分にユージオはなんとか言つてやつてくれ、とアリスを見る。が、アリスもキラキラとした目で何かを考えていた。

(あ、これはダメだ。アリスも楽しみ始めたらもう、僕には止められない)

いたずらの大元を考えるのがルークだとすれば、アリスはその裏で作戦を完璧にする影の策士。ユージオにはもうお手上げである。

そしてユージオの懸念通り、まるで何かを考えるようにふつくらとした唇に指を当てて思考を巡らせていたアリスはパツと笑顔になる。

「うん、ルークの言うとおりね。これは大切な仕事、遊びじゃないわ。やる価値は十分にあるわね」

「で、でもアリス、村の掟には反しなくても、あれがあるだろ？」

最後の抵抗として、あることを言うユージオ。これには流石に、アリスもルークも口を噤んだ。

ユージオの言うあれとは、帝国の法のさらに上……この人界を統治する央都セントリ

アにある《公理教会》より発布されている《禁忌目録》だ。

全ての村や町に最低一冊は置いてあるこの目録は、教会への反逆から年に獲つてよい獣の数まで、してはいけないことのみが書かれている。

その中の一つに、果ての山脈の向こう側……《公理教会》の支配の届かないダークテリトリーに侵入することを禁ずる掟があつた。

そのためダークテリトリーに繋がっている洞窟には入れない、というのがユージオの主張である。

「ふっふっふっ……ユージオ、この俺がそのことについて考えていないとでも?」

しかし、それを怪しく笑うルークが真正面から打ち破らんと口を開いた。

「たしかに、果ての山脈を越えてはならないとある。しかし考えてもみろ、洞窟に入ることは果たして『山を越えること』か?」

「えっ、あつ……」

「そう、すなわち……果ての山脈を越えてはいけなくても、洞窟で氷をとつてはいけけないなんて法はない!」

ビシッ!と得意げな顔で天を指差すルークにうわあ、という顔をするユージオ。まさか村民規定の倍の倍ほど厚みのある《禁忌目録》まで覚えているとは。

それでもなんとか反抗の意思を見せようとするユージオだが、何も思いつかない。そ

れを察したルークはニヤリと笑った。

「じゃあ、それで決まりだ。次の休息日、俺たちは洞窟を探索する。それでいいな？」

「へへっ、俺はもちろん行くぜ！」

「私も。ほら、ユージオ？」

「……ああもう、わかったよ。行けばいいんだろ！」

やけくそになって叫ぶユージオにそれでこそだ、とルークは笑うと、立ち上がってギガスシダーに立てかけていた包みから木剣を二本取り出す。

「さあ、休息日の予定も決めたことだし、今日も稽古だ！まずは素振りから始めるぞー」

「今日こそは負けないぜ、ユージオ！」

「こっちのセリフだよ、キリト」

先に立ってルークに向かい走りだしたキリトを、吹っ切れた表情のユージオが不敵な笑みで追いかける。

その二つの小さな背中を、アリスは微笑ましそうに見つめたのだった――。

北の洞窟

あの約束から数日後の、休息日。

キリトとユージオは、村の入り口のところにある木の下でアリスたちを待っていた。

「遅いー!」

「仕方ないよ、キリト。ルークは次の衛士長候補だし、アリスは女の子だしさ」

腕を組みぶつぶつと文句を垂れるキリトに、苦笑気味に言うユージオ。キリトは不満げな顔をする。

しかし、キリトは「なんで女つてやつは準備に時間がかかるんだよ」と言っただけで、ルークについては何も言わなかった。

いや、言えなかったという方が正しいか。なにせキリトもユージオも、ルークが日夜厳しい修練に身を置いているのを知っている。

今も衛士用の訓練場で一人、剣を振っているはずだ。やや悪戯好きなもの、その真面目さと責任感是谁もが認めるところだ。

そのため、守られる立場であるキリトとユージオはルークが遅れようと文句は言えな

い。

なにせ自分たちを守るために、たぐいまれなる努力をしてきているのだから。

「あーあ。俺も木こりなんかじゃなくて衛士だったら、もう少し格好もついたんだけどな」

「いやいや、せっかく賜った《天職》なんだからそんなこと言っちゃいけないよ」

そう言いつつも、村の子供なら誰もが憧れる《天職》だ。ユージオももし自分が衛士だったらと夢想する。

衛士は毎年秋になると、ザツカリアの街で開かれる大会に出る権利がある。そこで上位に入ると街の衛士……つまり正式な剣士と認められる。

さらにそこから衛兵隊の中で好成績を残せば、央都セントリアの《修剣学院》の受験資格が得られ、本格的に剣を学べる。

そして二年制の学院を卒業し、帝の御前で行われる試合で優勝……ちなみにベルクーリはこれで優勝したらしい……する。

最後に、公理教会が開く《四帝国統一大会》で勝ち抜けば、全ての剣士が夢見るもの……すなわち人界を守る整合騎士になることができるのだ。

「きつとこのまま努力すれば、ルークは整合騎士になれちゃったりして」
「つつつても、本人はなる気がないっていうしなあ」

そう。以前そのことを聞いた二人に対してルークの返答は、自分はこの村から出るつもりはないというものだった。

生まれ育った村を守り、自分の子供や孫を見ながら生涯を終える。それがルークの望みらしい。

「才能があるのにもつたいないよなあ」

「まあ、本人がそういうんだから仕方ないよ。それにルークがずっといるなら、ルーリツドの村は安泰だしね」

「それもそうだな」

ニツと笑うキリトを見つつ、ユージオは再び夢想の続きを考える。並んで浮かんできたのは、幼馴染であるアリスのこと。

アリスはきつと、将来的に神聖術をより深く学ぶため修術学院へ入ることだろう。そして修術学院の生徒は一人、護衛を持つことができる。

美しく成長したアリスの横にいるのは、修剣士の制服に身を包み、腰に剣を下げた自分……

「おーいー」

そこまで考えたところで、ルークの声が聞こえた。ハッと顔を上げると、大きく手を振りながらルークがこちらに走ってきている。

その後ろにはアリスもおり、ユージオは一旦妄想をやめにして手を振り返した。

「遅いぞ二人とも！」

「いやーすまん、衛士長のやつが離してくれなくてさ」

「それに勝手にバスケツトの中身を覗こうとしたからでしょ。まったく、朝から説教なんてさせないでよ」

悪い悪い、と悪びれた様子もなく謝るルークにもう、と腰に手を当てるアリス。いつもの光景に二人は苦笑いした。

ユージオがちらりと見れば、もう片方の手にはバスケツトが握られている。おそらく今日の昼食であろう。今から楽しみだ。

「さて、それじゃあ全員揃ったことだし。いざ北の洞窟に向けて、しゅっばーっ！」

「おー！」

音頭をとったルークの声に合わせて、三人は拳を振り上げるのだった。

「そーいや、遠目に見ただけで二人でなにを話してたんだ？」

果ての山脈より流れるルール川のほとりを歩きながら、ふと思いついたようにルークがそーいだった。

あの距離で見えていたことに二人は苦笑しつつ、アリスに聞こえないよう衛士のことを話す。

それを聞いて、ルークはふむと何かを考えた。妙に様になっているのは、今日も腰に下げた鉄剣のせいだろうか。

「別に、なれないこともないだろ」

「やっぱり、ルークはわかってるよな」

「えっ？」

何かを知っているらしいキリトとルークは、互いの顔をみて同じことを考えているとわかって面白そうに笑う。

そんな二人を見るユージオは困惑しきりだ。それを見てキリトたちはにひひ、と少しいたずらげに笑った。

「終わりだよ。今持つてる天職を全うすれば、次の職は自分で好きなように選べる。つまり……」

「俺たちが頑張つてあのデカイ木を倒せば、晴れて衛士になれるってわけさ」
なるほど、と頷くユージオ。確かにそういうことなら、まだ現実的ではある。

だが……

「無理だよ。衛士になる頃には、僕たちはとつくに神様のところへ昇っているさ」
「ちえっ、そうだよなー。これならいけると思ったんだけど」

「せめて、竜骨の斧より強い武器があったらいいけるかもな」

まあもし衛士になれたら徹底的にしごいてやるよ、と二人の背中を軽く叩くルーク。頼もしい言葉にははつと笑った。

「ちよつと、三人で私を除け者にするつもり？ 一体なにを話してるのよ」

そんな風に話していると、草穂を手に先を歩いてきたアリスが近寄ってくる。内緒話をしてきたことにちよつとぴり不満げな顔だ。

それを見てちよつと可愛いな、なんてユージオが思っていると、ルークがわしやわしやとキリトとユージオの頭を撫で回した。

「聞いてくれよアリス、こいつらもう昼飯が楽しみらしいぜ？」

「もう、本当に食い意地が張ってるんだから。というか、そんなこと言ってるルークもでしよ？！」

「ありやりや、バレちまったか」

全く仕方ないわね、と腰に手を当てる怒るアリスに、ルークがおどけてみせる。そしてふつと吹き出したのであった。

しばらく歩いていると、やがて川が北と東に分かれている分岐点までたどり着く。四人が舵を切ったのは、当然洞窟に繋がるだろう北の方である。

「こつからはちよつとペース上げるか。ソルスが真上まで昇ったら引き返しだな」
「そうね。そうしないと夕食に遅れちゃうわ」

帰りの時間を確認しつつ、先へと進む。草木で覆われた道はのどかであり、ソルスの心地よい日差しとともに歩んでいく。

実に平和な道なりを見て、ユージオはなんだか唐突に不安になってきた。そして隣を歩くルークの袖を引っ張る。

「ね、ねえルーク」

「ん？どしたユージオ」

「ここらへんって、危険じゃないの？結構村から離れてるけど」

「なんだ、ビビってるのか？安心しろ、そんな時は俺が守ってやるよ」

頼もしい笑みとともに剣を見せつけるルークに、そうだよねとユージオは安心する。ルークがいるならどんな相手でも安心だ。

そう思ってた前を見ると、呑気に羊飼いの歌を歌うアリスたちがいた。全く緊張感のない様子にユージオはため息を吐く。

「そんなだと、《ゴブリン》や《オーク》にあつという間にさらわれちゃうぞ」

能天気な二人になんだか悪戯がしなくなつて、ユージオはそう言った。振り返ったキリトとアリスは可笑しそうに笑う。

「あのおとぎ話の、ダークテリトリの？あれだろ、最後には央都から整合騎士が来てゴブリンの親玉を倒した話の。バカ言え、そんなの村ができた頃の話だぞ」

「それに、ここには未来の整合騎士様がいるしね♪」

「おいおい、俺は整合騎士になるつもりはないって」

そうだったわね、と笑うアリスにキリトとルークはケラケラと笑う。どこまでも明るい幼馴染たちにユージオは苦笑するしかなかった。

とはいえ、ルークもなにも考えていないわけではない。アリスたちと同じように笑いつつ、その目はこまめに森の中や岩陰を確認していた。

(何かあつたら、俺が絶対三人を守らなきゃな)

そう思いつつ、ルークはいつでも剣を抜けるよう決して片手を柄から離さなかった。

賑やかに話し合いながら……あるいはキリトとルークがふざけ合って……しばらく歩き続けて、ちょうどソルスが真上に登った頃。

「おい、これって……」

「うそ……」

目の前にあるものに、信じられないと言う顔をする四人。そんな彼らの顔を見るのは、ぽつかりと空いた洞窟の入り口だ。

さらに付け加えて言うならば、まるで絶壁のように連なりそびえる山脈……《果ての山脈》が四人を出迎えていた。

「まさか、もう着いちまったのか……？」

「こいつはたまげた。俺たち、知らないうちに《北の峠》を超えちまってたらしい」

「もしかして、あのさっきのちよつとした上り下りのところが……？」

「私たちの村って、本当に北の果てにあつたのねえ……」

丸一日どころか、たったの四時間足らずで着いてしまったことに感慨とも圧巻ともとれぬ反応を見せる四人。

ああは言っていたものの、誰一人として今日一日……それも午前中いっぱいまで着いてしまうなどとは、全く思っていなかったのである。

それでも、冷たい風を吹き出す目の前の洞穴がそれを証明している。なので四人はなんとはいえない気持ちになっていた。

「まつ、着いたなら万々歳じゃねえか。それより、そろそろ飯にしようぜ！」

誰よりも早く、キリトが復活して元氣よく言う。あつけにとられていた三人はそれに苦笑いをこぼし、それもそうだと準備を始めた。

ルークが肩に担いでた皮袋から布を取り出し、アリスがカゴから料理を出して広げ、

《天命》の残量を確認する。

「おつ、今日は魚のパイか」

「どれどれ……」

「ごらっ」

「あいたつ」

「つてえ」

早速手を出そうとしたキリトとユージオがアリスに手を叩かれ、ルークがケラケラと笑う。すっかりいつもの様子であった。

おきまりのやり取りもそこそこに、創世神に感謝の祈りを捧げると《天命》が尽きないうちに急いで食べ始める。

四時間歩きっぱなしで、いつもとはまた違った疲れでお腹がぺこぺこだった四人には、ものの数分で食べ終わることなど造作もなかった。

「しかし、氷が手に入ったらこうして急いで食べる必要もないんだよなあ」

「そうだね。もともと、それが目的なんだし」

食後のミルクを飲みながら、キリトがそうひとりごちる。後片付けをしていたユージオもそれに同調した。

「でも氷を手に入れたとして、どこで保管しとくんのだ？氷の天命がなくなったら元も子もないだろ？」

「それならうちの地下室に入れておけばいいでしょ。まったく、ちゃんと考えときなさいよね」

「おろ、アリスに説教されちまった。ユージオ、アリスが怖いぜ〜」
「な、なんで僕に振るのさっ」

わざとらしく助けを求めてくるルークにユージオは狼狽える。その頬は心なしかほんのりと赤く染まっている。

アリスは意味がわからず首を傾げ、なんとなく相棒の内心を知っているキリトはニヤニヤと笑った。

「まったくルークは!」

「はは……ん?」

掴もうとしてくるユージオの手を華麗に避けていると、ルークはあることに気がつく。

「おい、あれ」

「あれ?」

「あれだよ、あの川の」

川?と三人は洞窟から流れている川を見て……目を見開いた。

清涼な音を響かせて流れる川の所々に、ソルスを反射して何かが光っている。もしかかと思ひ、四人は川に走りよった。

そうして見てみれば……案の定、輝いているのは氷だった。アリスが川に手を伸ば

し、氷を一つとる。

「ひやつ！」

「どうしたんだいアリス!？」

「ユージオ、この水とつても冷たいわ！」

びっくり半分、面白さ半分といった表情で、アリスは濡れた自分の手をユージオの頬にくつつける。

その辺りの冷たさに、ユージオはアリスと同じような声を出して飛び上がった。その様子にはは、とアリスが楽しそうに笑う。

「ユージオつたら変なの。女の子みたいな声あげちゃって」

「う、うるさいな。それより、その……」

冷たさへの驚きが収まると、ユージオはちよつと気まずそうに視線をそらす。不思議に思ったアリスは、自分の手を見た。

そして、今更ながらにユージオの頬を両手で包んでいたことに気がついてさつさと手を離す。

頬を朱に染める二人の間に、なんともいえない空気が流れた。チラチラと違いを見る仕草に、キリトとルークのニヤニヤが止まらない。

「さっつ、そこの仲睦まじいお二人さん。そろそろ中へ入ろうぜ？」

「な、仲睦まじいって……」

「ルークー！お前はさつきからー！」

「おおっと、今度はユージオが怒ったぞー！」

「あつはつはつはつー！」

両手を振り上げたユージオに追いかけて回される半笑いなルークに、キリトが腹を抱えて大爆笑した。

アリスも二人の追いかけてくを見ているうちに段々と恥ずかしさが消え、キリトと同じくおかしそうに笑う。

そんな穏やかな？ 昼も楽しみつつ、いよいよ四人は洞窟に入ることにした。

「いい？ ユージオ、私、キリト、ルークの順で入るわ」

「ええつ、僕が先頭かい？」

「当たり前じゃない。男の子なんだから、ちゃんと私を守ってよね」

「う、うん……」

「じゃ、俺はしんがりだな。しっかり守るぜ」

「ルークなら安心だな！」

順番も決まったところで、ルークが皮袋からあらかじめ家から持ってきたランタンを出す。

そこにアリスが神聖術を唱えて火をつけて、ルークたちは洞窟へと足を踏み入れたのだった。

氷の庭園

洞窟の中は薄暗く、とても何の用意もなく入ることはできなかつた。

なのでアリスが神聖術を使って擬似的な明かりを作り、それを先頭であるユージオが持つて進んでいく。

「う、うう……」

「ほら、しゃんとしなさい。男の子でしょ」

背中を叩くアリスを少し恨めしげに思いながら、ユージオは洞窟の中を見渡した。

ほのかに冷気の漂う洞窟は、それだけでユージオにとっては十分に恐れる対象となつてしまふ。

そこにカサカサと影の中で何かが蠢く音や、不気味に光る鍾乳洞のような鋭い岩が不気味さを助長していた。

「ほーらユージオ、そんなにビビってるといぎという時アリスを守れないぜ？」

「そうだそうだけ」

「煽らないでよ二人とも！」

若干恨めしげに振り返るユージオにへへへ、と能天気には笑うキリト。が、実のところ内心は結構怖がっていた。

なお、ルークは夜間の見回りなどもやったことがあるので、そうでもない。むしろ口では茶化しつつ、最も周囲に気を配っていた。

ちなみに、ルークは衛士の夜回り用のカンテラを持ってきている。背後から襲われたりしてはたまらないからだ。

怯えるユージオ、鼻歌を歌うアリス、ふざけるキリトと便乗するルーク。バランスが良いのだから悪いのだからわからない四人の行軍は続く。

しばらく小さな氷が流れる小川に沿って歩いていると、ふとユージオはあることを思い出しキリトに振り返った。

「そういえば、キリトが氷柱は洞窟の入り口あたりにあるって言ってなかった？全然見当たらないけど……」

「……多分もう少し奥に行けばあるだろ、うん！」

「て、適当だなあ」

なんとも言えないユージオの顔に、頭に手を置き笑ってごまかすキリト。いつも通り、どこかいい加減である。

「……あつ」

「? どうしたんだアリス」

「ユージオ、ちよつとこつちに明かりを持ってきて」

突然の言葉に首を傾げつつ、ユージオは言われた通りアリスの顔に灯を近づける。

十分な位置に来るとアリスはほう、と息を吐いた。すると白い息が空中に広がる。あつ、と三人は声を漏らした。

「まるで冬みたいだな」

「うえ、どうりでさつきから寒いはずだよ」

「じゃあ外は夏だけど、この洞窟の中は冬なんだ」

「ええ、きつと氷もあるわ」

確信的なアリスに、キラキラと三人の目が輝いた。特に当てずっぽうで言ったキリトは半分ホツとしている。

高揚した気分も新たに、行軍は再開された。少し前まで不気味に見えた青白い壁も、今はどこか幻想的に思えてくる。

「それにしてもあれだな、舟があつたら帰りは楽だな」

心なしか広くなつていくうねる通路と、その奥につながる小川をみてふとキリトがそんなことをいう。

「この小川を下つて、村まですーつとき」

「確かに楽しそうね。でも舟なんてないわ」

「いっそのこと、ルークの剣で氷を削って作るとか？」

「おいおい、もし剣が壊れでもしたら俺が衛士長にゲンコツ食らうだろ？」

「それもそうか！」

はっはっはつと能天気には笑う二人だが、アリス達は覚えている。

以前の休息日、木を削って適当に作った小舟で小川に入ったら沈みかけたことを。そして、揃って村長から大目玉をくらった事を……。

パキ……

「あれっ?」

またルークにからかわれて顔を赤くしていたユージオが、不意に変な声を漏らす。

ブーツの裏に感じた奇妙な感触に足をどかしてみると……そこにはキラキラと輝く、凍った水たまりがあった。

「三人とも、これ見て」

「これは……凍ってるな」

「どうやら、ここだけじゃないようだぞ」

ルークが一步進み出て、カンテラを掲げる。

オレンジ色の光に照らされてぼうと浮かび上がったのは、同じように氷結した水たまりの数々。

それを追いかけて進んでいくと、どんどん冷気が強くなっていき……やがて、縁が凍りついた穴を見つける。

「あれって……」

「ああ、きつとそうだ！」

「いくぞー！」

「ちよつと、置いてかないでよー！」

全員で顔を見合わせ、我先にと走りだす。

そうして残ったわずかな通路を走り抜け、四人が出たのは——思わず息を飲んでしまうほどに美しい場所だった。

それは、とても広大な空間だった。村の教会前広場のゆうに二倍はあるうかというそこは、床も壁も天井さえも、一面薄い青に覆われている。

その青は、全て氷である。もとは湖面だったであろう床は完全に凍りつき、広間の中には規則的な形をした水晶柱が屹立していた。

「すげえ……」

それをみながら硬直すること、数分。キリトが感嘆とも驚愕ともとれる声を漏らす。

「こんだけ氷があれば、村中の食べ物だつて冷やせるぞ」

「なんなら倉庫ごと氷漬けにだつてできるかもな……お前らは少し待つてろ、俺が様子を見てくる」

未だ見習い衛士であるルークだが、ことこの場においては唯一の剣士である。

三人の身の安全を守るものとして、ルークは抜き身の剣を片手に、もう片方の手にカントテラを下げて一歩踏み出す。

凍りついた湖面は、衛士用の丈夫なブーツに包まれた足を容易く受け止めた。厚く氷結しているため、軋みすらしない。

ルークはそのまま進んでいき、やがて柱の間に消えた。その後ろ姿を見送った三人は、途端に不安になる。

「……ルーク、大丈夫かしら」

「あいつなら、多少何か出てきても平気だろ……？」

「でも、もしいきなり足場が崩れたりしたら……」

言えと言うほど、悪い予想が脳裏に浮かんでは消えていく。

「おーい、安全だから来ても平気だぞー！」

いよいよ不安が満潮に達すると言うところで、ルークの声が柱に反響して聞こえてき

た。

ほっと胸をなでおろした三人は、ルークの消えた方向へと足早に進む。その胸に宿るのは好奇心とちよつぴりの怖さだ。

「おーいルーク、どこだー？」

「確か、こつちから声がしたけど……」

「もしかして、もつと奥に行つたんじゃ……」

「わあっ！」

突如、背後から奇襲。

ビックウー！という擬音がつきそうなほど飛び上がった三人は、素早い動きで後ろを振り返つた。

するとそこには、ニシシと笑うルークがいる。どうやらまたしてやられたようだ。顔を見合わせ、三人は苦笑いを浮かべた。

「もう、本当にびつくりしたじゃない」

「いやあ、この前は二人にやったからな。アリスにもやりたくなつて」

「俺たちは巻き込まれかよ……」

「心臓が飛び出すかと思つた」

「ごめんごめん、ほら、日が暮れないうちにはやく奥に行こうぜ」

怪我をさせないよう剣を逆手に持って、三人の背中を押すルーク。それもそうだと三人は前を見た。

氷と冷たい風の森の奥には、何が待っているのか。いつもは慎重なユージオも目を輝かせ、足を進める。

もし、本当に白竜がいたら。そしてその財宝を持ち帰ったら、一体村の皆はどんな顔をするだろうか。

あのベルクリーでさえ成し遂げることのできなかつたことを思い浮かべ、妄想にふけていたユージオは不意に鼻頭をぶつけた。

「んぶっ!? ちよ、ちよつとキリト?」

前を歩いていたキリトが立ち止まったため、その背中に衝突したユージオは文句を言う。

「……………」

しかし、いつもやかましい相棒は何も返答を返さなかった。それどころか振り向きさえしない。

アリスとルークと顔を見合わせ、首を傾げてキリトの横に回る。キリトの横顔は、驚愕一色に染まっていた。

「おい、どうしたんだキリト?」

「なんだよ……これ………」

「なにつて………」

キリトの向いている方にルークも頭を傾けて……同じように瞠目して固まってしまう。

キリトに続いてルークまでこうなるなど、一体なにがあるのか。残った二人は同時にその方向を見上げて――

「う、そ………」

「あれ、は………」

そこに、骨の山があった。

それもただの骨ではない。白っぽい青い水でできた骨であり、水晶のような輝きを放っている。

一つ一つがとても大きく、普通の動物のそれではないのは一目瞭然だ。四人がこれまでに見たどんな骨より大きい。

では、この骨の主は誰なのか。それは骨山の頂に、己の存在を誇示するように鎮座する頭骨が教えてくれた。

「白竜の……骨?」

アリスが低く呟く。

虚ろな眼窩、長細い鼻腔、後ろに伸びるツノのような突起。

それはまさしく、竜の骨だったのだ。

「死んじゃったの……?」

「ああ。けど……どうやら、ただ死んだわけじゃないみたいだな」

カンテラを置き、剣を鞘に収めたルークは骨山から、前足の爪と思しき骨をやや重たげに持ち上げる。

三人が後ろから覗き込めば爪にはいくつもの傷が付いており、何かと激しい戦闘を繰り広げたことがわかる。

「これは……剣で斬った傷だ」

普段から剣を振るうが故に、すぐに看破するルーク。斧を使う二人もなるほど、たしかに刃物でついた跡だと納得する。

「つまりこいつをやったのは……」

「人間、だっていうのか……!?!」

「ありえないわ、《北の白竜》は人界を守護する最強の生き物の一匹よ?ベルクーリすらなんとかできなかつたのに、並みの剣士がそんなことできるわけ……」

そこで、アリスは言葉を止める。

だが、もう遅い。三人はもしや、という顔をして顔を青ざめさせた。

「もしかして、白竜を殺したのは……」

「人界最強の剣士たち、神に仕え秩序を守る公理教会の戦士……」

「整合騎士、なのか……?」

沈黙が場を支配する。それは洞窟の冷たさと相まって、四人の間に重い空気を漂わせた。

「つて、そんなわけねえよな！あれだ、きつとダークテリトリーから強い騎士が来て倒されたんだ」

ルークが無理やり明るい声を出してその空気を払う。そうしなければ何か、とんでもないことを考えそうだったから。

衛士であるルークは、整合騎士の善性を信じている。その整合騎士が人を守る存在である白竜を殺す、などということがあれば……

「だ、だよなあ」

「はは……」

同じように、これまで微塵も疑わなかった整合騎士への疑念を払うため同調するキルトとユージオ。

脳裏に浮かぶ考えを打ち消すため、白竜の爪から目線を外すと、ふとキルトは骨の山の奥に何かを見つける。

「なあルーク、あれ……」

「ん？」

肩を叩かれてルークはキリトの指差す方を見る。そして大きく目を見開いた。

頭に疑問符を浮かべるユージオたちをよそに、二人は顔を見合わせ、爪をそつと地面に置くと骨の山に入る。

数分ほどして、二人は「なにか」を奥から引きずってきた。

「も、もうギブ！」

「重てえ！」

ユージオたちの前まで来たところで、二人はそれから手を離れた。ズン、と重々しい音を立てて湖面に着地する。

洗息を吐いて尻餅をつく二人を労いつつ、ユージオとアリスはそれを覗き込む。そして訝しげに目を細めた。

「これって……剣？」

「みたいね」

それは、一振りの美しい剣だった。

息を呑むほど美しい剣は青白く、精緻な装飾を施された白鞘に収められている。これだけで一つの芸術品だ。

さらに柄の各所には薔薇の象嵌が施され、村にあるどの剣……ルークの持っている剣など比べ物にならない価値があるのがわかる。

「多分、《青薔薇の剣》だよな。これ」

「ああ、ベルクーリが手に入れようとしたっていう」

お伽話の中の剣に、目を輝かせる男子三人。アリスも少なからず物珍しそうな目で見つめる。

「……どうする？ 持って帰るか？」

「ああ、ジnkのやつらに自慢できる……っていいんだけど、こりや無理だな。幾ら何でも重すぎる」

剣の下を見て、分厚い氷でさえヒビを入れるような剣の重さにルークは額に手を当て、参ったというような顔をする。

そもそも、《禁忌目録》には盗みを禁ずるとも書いてある。まあこれは人に対してのものなので、この場合は該当しないが。

だが、だからといって剣を持ち帰れば、それは白竜の死骸の中を漁って取ってきた墓荒らしに他ならない。

激しい戦いの傷跡から、きつと無念のうちに死んだであろう白竜を思うと、さすがに四人ともそんなことはできなかつた。

「当初の予定通り、氷だけ集めて帰ろう」

「あーあ、白竜が生きてりや寝ているうちにとつてきた、でいけたんだけどなあ」

「またルークはそういう悪いことを……」

「てへぺろ？」

「可愛くないよ」

少し前までの神妙な様子はどこへやら、すっかり元に戻った四人は周辺に転がっている氷を集め始めた。

三十分ほど集めて手がかじかんできた頃、昼食の入っていたアリスのバスケットの中目一杯の氷を収穫できた。

「うん、十分ね」

「くつ、指の先の感覚がない……」

「僕もだよ……」

「衛士長に食らった」井戸水に十分手を浸すの刑を思い出す……」

男の子なんだから、という理由でアリスの倍ほどの速度で集めさせられた三人が手を擦り合わせる中、アリスは満足げに微笑む。

「それじゃあ、はいユージオ」

バスケットの蓋を閉じると、アリスはユージオにバスケットを手渡した。慌てて半分

感覚のない両手で受け取るユージオ。

「ええっ、僕が持つのかい!？」

「そのうち交代するよ」

「三人で代わる代わる持とうぜ」

「三人とも頑張つてね。さあ、帰りましょう……………あれ？」

両肩を叩いて励まされるユージオを見て微笑んだアリスは、後ろを振り返るとふと首を傾げる。

しばらくキョロキョロと見回し、そして顔を青ざめさせて…………一言、呟いた。

「……………私たち、どっちから来たっけ？」

別れと戒め

「おいおい、何言ってるんだよアリス」

「そんなの、こっちに決まってるだろう？」

そう自信たっぷりと言ったキリトとユージオは、それぞれ指で指し示した。全くもって別方向を。

互いの顔を見合わせ、やいのやいのと言い争いを始める二人にアリスは嘆息し、唯一頼りになりそうなルークに視線を移す。

「……え、あれ、そういやどっちだっけ……？」

しかし、ルークもまたその道を覚えてはいなかった。

普段、こういう時は最後までちゃんと計画を立てているのがルークだが……しかし、これまでとは比べ物にならない大冒険だ。

ルークとて年頃の少年、衛士の職により多少大人びていると言っても、心が浮き立つのまではどうにもできない。

自然と、衛士の訓練で鍛えられた記憶力は《青薔薇の剣》を見たことで抜け落ちた。

従って帰り道もわからない。

「ちよつとルーク、どうするのよ」

「いや、すまんすまん。ええと、確かこつちだったような……？」

臆げながら、先ほどキリト達を驚かせるのに使ったと思しき氷柱を目印にして、ある一つの出口に向かうルーク。

喧嘩をしていた二人もアリスも、ルークについていけば問題ないだろう、といったものように考えてついでいく。

「足元に気を付けろ、いきなり飛び跳ねたりすんなよ？」

「おいルーク、いくら俺でもそんなことしないぞ」

「あら、どうかしら」

「アリスまで！」

広場につながる水路の一つであるそれを、ルークを先頭にアリス、キリト、ユージオの順番に並んでカンテラの光を頼りに進んでいく。

「しつかし、すまなかつたなあ。衛士の俺が帰り道をよく覚えてないなんてよ」

「それを言ったら、私たちだって同じだよ」

「どうせなら、ベリル兄弟みたいにパン屑を落としながらくれば良かったかもな！」

「はは、そいつは良い案だ」

笑ってキリトの提案を聞いていたルークは、不意に耳がある音を拾い立ち止まる。そしてハンドサインでアリス達を止めた。

続けて静かにするよう指示すると、カンテラを押さえて極力雑音を消し、
“その音”
に耳を澄ませる。

ヒユウ……ヒユウ……

高く、時折低く変わるその音。地下水の清涼なせせらぎが混じり、少々聞き取りづら
いが……

「これは、風の音だ」

「じゃあ、出口だ！」

「あつ、おいユージオ！」

やはり最初に食いついたのはキリト……ではなく、ユージオ。安堵の声と共に、笑顔
で半ば走り出す。

用心深いルークは止めるも、早く不気味な洞窟から出たいユージオは手の届く距離外
にすつ飛んでいってしまった。

「やれやれ、元気なこった」

「もう、ユージオは臆病なんだから」

「はは、女の子のアリスに言われてちや、あいつも世話ないな」

ため息を吐いて、苦笑するアリスたちと肩を竦め合うとその後を追いかける。

「こらっ、待てユージオ。俺が先頭だろ？」

「あうっ」

少し走って、ユージオの襟首を掴むルーク。その力に逆らうことはできず、ユージオはグンと急停止する。

首が締まる前に手放し、結果尻餅をついたユージオにルークは手を差し出した。バツが悪い顔でそれを取り、立ち上がるユージオ。

「ったく、危ないかもしれないのに」

「そう言いつつも、キリトも少し嬉しそうよ？」

「そ、そんなことねえし！まだここにおいても平気だし！」

「おっ、ならもう一回氷を集めに戻るか？」

「うへえ、そいつは勘弁」

ひとしきり言葉を投げかけ合い、笑った四人はまた一緒に進み出した。薄暗い洞窟でも、皆がいるのなら耐えられる。

それでも不安はあるもので、それを消し去るためにいつも通りの掛け合いをしながら

進むことしばらく。

「おつ、風の音が大きくなってきたな。そろそろ外に出られるんじゃないか？」

最初は僅かな音、今や水の音をかき消すほどに大きくなった風の音にキリトがそう言う。

それを肯定するように、道ゆく四人の前に僅かな光が見えてきた。自然と笑顔になり、足は早まる。

(……外の光が赤い？まだそんなに時間は経ってないぞ)

村に帰った後のことを考えているのか、軽い足取りの三人に対し、ルークはここにきて生来の用心深さを発揮していた。

彼の体内時計では、洞窟に入ってから僅か1時間。水を集めていた時間を加味しても、二時間も経っていない。

(なのに、外の光が赤らんでいる？まだ夕方にすらなっていないのに?)

ルークの勘が、警報を発した瞬間だった。

これまでルークが悪戯を成功させてきたのは、頭の回転の速さと綿密な計画、そして慎重さ……だけではない。

それ以外に、もう一つ。ルークは異常なまでに勘が鋭かったのだ。それがここぞという時に危険を知らせてきた。

(……まつ、今回は気のせいだろ。俺も初めての大冒険で慎重になりすぎてんのかな)……今思えば、この時ルークがその勘に従っていれば、この後の悲劇が起こることはなかったのだろう。

ああ、けれどももう遅かった。最大の武器にして防具だった勘を蔑ろに、ルークは三人を連れ、いよいよ出口まで行ってしまい――

「――なんだ、これ」

そこにあつた光景に、目を見開いた。



ルークたちの目の前に現れたのは、入った時と変わらぬのどかな景色……ではなかった。

代わりにあるのは、とてつもなく不気味な光景。まるでこの世界の負の側面をそのまま体現したような場所。

空は真っ赤だった。しかし夕日の赤ではなく、まるで家畜の鮮血をそのままぶちまけ

たようなおぞましい赤色。

対する地上は黒一色、奇形の岩山も、奥の針のように尖った山脈も、ねじれた木々に至るまで、その全てが漆黑。

そんな暗黒の荒野に吹きすさぶのは、荒々しい抜き身の刃のような風。それは確かに、ルークたちが聞いた音。

すなわちそこは――

「――ダーク、テリトリ―」

呆然としたルークのつぶやきが、やけに大きく洞窟の壁に反響した。

《ダークテリトリ―》。それは人界を収める公理教会の威光が及ばない、闇神ベクタを報ずる魔族の支配する地。

村の年寄りたちの話の中でしか存在を知らなかったそれが、今日の前にある事実^に体の芯から冷たくなる。

「あ、え……」

ルークの喉から、かすれた声が漏れる。

これまで、ルークは誰よりも色々なことに挑戦してきた。

それは年相応の好奇心であつたし、キリトたちに先入的な恐怖を持たせないための彼なりのやり方だつたのだ。

だが、これはその範疇を超えていた。完全に記憶した禁忌目録の最初の方の一文が、繰り返し脳裏に浮かぶ。

「禁忌目録第一章三節、十一頁。『何人たりとも、人界を囲む果ての山脈を越えてはならない』……」

口に出して自分に言い聞かせるように言った言葉。それはアリスたちを我に返し、顔を青ざめさせるには十分だった。

「い、いけないわ、ここにいちや……」

「あ、ああ、これ以上進むのは……」

だめだ、というキリトの言葉は、空高き場所から聞こえてきた固く鋭い音によってかき消された。

ルークは思わずカンテラを取り落とし、アリスとキリトは口をつぐみ、二人の肩を取ろうとしていたユージオは硬直する。

パリン、とカンテラが割れる音でまた我に返って、反射的に空を見上げた。そこには、赤い空で交差する白と黒の閃光が。

「あれって……」

「竜騎士だ」

断続的な金属音と共に何度も激しく交差するそれを見て、キリトがかすれた声でユ―

ジオの言葉を引き継ぐ。

そう。空を舞い、死闘を繰り広げている者は長い首と尾、三角形の両翼を持つ飛竜に跨っていたのだ。

「白いのは多分、整合騎士。そして黒いのは……」

「闇の軍勢、ダークテリトリーの騎士、か」

「ま、負けないよね？」

「当たり前だろ、だって整合騎士は人界最強なんだから」

そう、そのはずなのだ。自分が村を守るために幼い頃に諦めた、あの美しき鎧を纏う竜を駆り天を舞う騎士は。

そんなルークの言葉を肯定するように、白い方の竜が大きく首をたわめ、黒竜に向かって炎を吐いた。

直撃を受けた黒竜はふらつき、当然跨がる黒騎士も揺れる。その隙を逃さず、瞬時に赤銅色の大弓に持ち替えた騎士は弦を引き絞る。

ヒュンツ！

これだけ距離が離れてなお届く、一矢の音。それは炎を引き連れ、黒騎士の胸の中心

を真つ直ぐに貫いた。

ぐらり、と黒騎士が竜から落ちる。あつと声を上げたのはアリスか、ユージオか……あるいは四人全員か。

最初に、ルークたちのすぐ目の前に黒い剣が突き刺さった。次いで近くの岩山に、力尽きた黒竜が落ちて轟音を上げる。

最後に、黒騎士が剣のすぐ側に落ちてきた。グシャ、とやけに生々しい音が四人の耳朵を震わせた。

「あ、が、お、ア……」

黒騎士は、まるで助けを求めるように震えるその手をこちらに伸ばしてきた。その姿に、思わず見入ってしまう。

「あ、アアアアアア……ゴプツ」

長くは続かなかった。程なくして喉元あたりから大量の血を吐き出した黒騎士はそのまま事切れ、動くことはなかったのだ。

息絶えた黒騎士の、ポツカリと穴が空いた胸から血が広がっていく。それはダークテリトリーの、黒い地面に染み込んでいった。

「あ……あ……」

それを見て、アリスがか細い声をあげて、ふらふらと黒騎士の方に歩いていく。

ユージオはアリスのように、死んだ黒騎士に釘付けになっていた。対するキリトはいち早く異変に気付く。

そして、こういうとき誰より早く忠告を飛ばすルークが気づいたのは……キリトがアリスに制止の声をかけたときだった。

「アリス、ダメだッ!!」

「っ!!」

覚醒。一拍遅れて、初めて人の形をしたものが死んだ様を見て真っ白になっていた頭が状況を確認。

そして、アリスが自分の横を通り過ぎていくところで状況の深刻さを確認し、咄嗟にアリスに突撃するように抱きつく。

「アリスッ!!」

「きゃっ!?!」

普段なら説教では済まされないうこと、しかし初の経験に混乱していたルークはアリスともつれ合いながら転んだ。

どさり、という音が洞窟に木霊する。それはアリスとルークの体が地面に横倒れになった音だ。

「はあ、はあ、アリス、だいじよ、う、ぶ……………」

荒い息を吐きながら、ルークはアリスを見て。

「あ……」

その右腕の先、ふつくらとした手のひらが異様にくつきりしたダークテリトリーとの境界線を、超えていた。

「う、そ……」

「だろ……」

「あ、アリス！ルーク！」

「っ!!」

呆然として動けないでいる二人の体を、キリトとユージオが掴むと全力で洞窟内に引き戻す。

「アリス、アリス！」

「え、あ、ユージオ……」

ユージオが茫然自失な様子のアリスの肩を必死にゆすると、ハッと元に戻る。そうすると恐る恐る自分の手を見た。

そこには、黒い砂や小さな石がいくつか残っていた。それはまるで、その事実を突きつけているようで。

「わ、わた、私……！」

「だ、大丈夫だよ！山脈の外に出たわけじゃない、ちよつと手で触れただけだ！そうだからキリト！」

「あ、ああ」

アリスの手から砂を取り、励ますユージオとキリト。そのすぐそばで尻餅をついたルークは、未だに呆然としていた。

「お、俺が、アリス、を……」

アリスを押し倒した自分の両手を見下ろすルーク。やがてどちらも震え始め、顔を青くしていく。

そんな極限の精神状態だったためだろうか。ふと何かに見られている気がして、天井を見上げた。

また、同時に同じような気配を感じたキリトもつられてその方を見上げると――

「シンギュラー・ユニット……ディテクティド。アイディー・トレーシング……」

「な、あ……!?!」

「なん、だあれ……!?!」

それはとても奇妙だった。水面のようにユラユラ揺れる紫色の園の中に、のっぺりとした人の顔があつたのだ。

男とも女とも、また若いとも年寄りともわからない青白い坊主頭のそれは、ルーク

……ではなく、アリスを見ている。

遅れてアリスとユージオも気づいて、四人は謎ののっぺりとした人の頭を目を見開いて凝視した。

「コーディネート・フィクスト。リポート・コンプリート」

ガラス玉のような瞳と無機質な声で謎の言葉をつぶやき、それを最後に紫色の円は閉じてしまった。

「今のって……」

「……わからねえ。でも、なんか神聖術の式句に似てた気が……」

「と、とにかくここを離れようよ！アリス、立てる？」

「う、うん」

「ほらルーク、お前もだ！」

「あ……」

キリトがルークを、ユージオがアリスをそれぞれ立ち上がらせる。

そして、肩を貸すとその場を逃げるように後にしたのだった。



翌日。

「四十、六！」

煌々と地上を照らすソルスのもと、キリトとユージオはいつも通りギガスシダーの伐採に勤しんでいた。

若く生い茂る緑葉の間を、竜骨の斧がコーン、コーンと心地よい音を立ててギガスシダーを叩く音が駆け抜けていく。

「これで、ラスト！」

五十回叩き終わったキリトは竜骨の斧の先端を地面に沈め、額に伝う頬を拭ってやりきった浮かべる。

「わっ、すごいねキリト。今日はいい調子じゃないか」

「ふう、まあな。なんだか体に力がみなぎってよ」

すでに時刻は昼を回ろうかというところ、ソルスがほぼ真上に来ている中で、既に二人は九回ほど交代していた。

その間、キリトはユージオよりも三回ほど良い音を出していた。またシラル水を奢りかな、と苦笑するユージオ。

「しし、キンキンに冷えたパイとミルクが楽しみだぜ」

「ふふ、そうだね」

「それにしてもルークのやつ、平気かなあ」

「……うん」

休憩がてら隣に座った相棒のぼやきに、ユージオは少し表情に影を落とす。

昨日、あれから無我夢中で村まで帰り、四人はそれぞれ不安を胸に抱えながらも一夜を明かした。

寝て起きたら割とけろっつとしており、別に大丈夫だろと考えるキリトと、それに引つ張られた。ユージオ。

そんな二人とは反対に、ルークは相当思い悩んだ様子だったのだ。その原因は、やはりあの時のことか。

「門を出るときも、あいつ見張りなのにぼーつとしてたしな」

「うん、いつもはちゃんと仕事をこなしてるのに。仕事してるのにね。ルークのある顔、初めて見たよ」

「まっ、アリスの昼飯食ったら多少はマシになるだろ！」

そんな楽観的なことを言いつつ、立ち上がって竜骨の斧の握り手を差し出すキリト。それをユージオが笑って取ろうとしたとき……サツと前触れなく日差しが陰った。雨雲かと見上げる二人。

しかし、もつととてつもないものだった。澄み渡る青空、そのかなり低いところを白銀の竜が飛んでいたのだ。

「あれって、飛竜……!?!」

「もしかして昨日の整合騎士か?!」

言葉はそれ以上不要だった。ルーリッド村の方へ飛んでいく飛竜を見て、二人は慌てて追いかける。

なぜ、どうして。もはや通り慣れた森の中を走り抜ける二人の頭の中に、繰り返しの言葉が浮かんだ。

そうしている間に、飛竜の影は消える。二人はさらに急ぎ、長年彫み手たちが作った獣道を駆け下りていった。

やがて、街道に出る。そこにある麦畑の中で、村の農夫が空を見上げていた。「リダックのおじさん！飛竜はどっちにいった!?!」

「あ、ああ。どうも、村の広場に行つたみたいじゃが……」

農夫からもたらされた情報に、漠然とした目的地が教会前の広場に修正される。

「おい、キリト！ ユージオ！」

他にも数人の呆然とした農夫の間を走り、ほどなくして見えた南門の前で見覚えのある人物が手を振っていた。ルークだ。

三人は言葉を交わすことなく合流すると、門を抜けて買い物通りを抜け、小さな石橋を超えて……そこにたどり着く。

「グルルルルル……」

広場の奥の半分を、飛竜の翁体が占領していた。各所に取り付けられた鋼の鎧が、ソルスの光を反射して輝く。

そして、竜の前にもう一人。鏡のように磨かれた白銀の重装鎧を着込み、竜の頭を模した兜と十字の面頬をつけた騎士が。

村の誰より大きな巨軀を持つその騎士は、腰に同じ銀の剣。そして背には一メル半はありそうな赤い弓。

昨日の整合騎士だ。村の住人全てが集まり、多くがこうべを垂れる中、三人はアリスの姿を探す。

すると、最後列にその後ろ姿を見つけた。籐籠といつもの青いエプロンドレスのアリスに、こつそりと近づく。

「おい、アリス」

キリトが名前を呼ぶと、アリスは金髪を揺らしながら振り返った。そして驚きの表情を浮かべ、口を開く。

慌ててユーゾオが口に人差し指を当てた。アリスはハツとして、自分の口を右手で塞いだ。

「アリス、今の内にここを離れよう」

「え、どうして……」

「もしかしたら、あの整合騎士は……」

キリトが最後まで言い終える前に、大人たちの間から一人の男が騎士の前に進み出した。

「あ、お父様……」

ガスフト・ツーベルク。引き締まった体を革の胴衣に包み、炯々とした眼差しと綺麗に切り揃えられた口髭を持つこの村の村長。

そして今アリスが呟いた通り、彼女の父。そんな彼は騎士の前に歩み出て、公理教会の作法に則った一礼をした。

「ルーリッド村の村長を務める、ツールベルクと申します」

「ノーランガルス北域を統括する公理教会整合騎士、デュソルバート・シンセシス・セブンである」

ガスフトの厳格な声音に対し、整合騎士の声はまるで人が出すとは思えない、異質な冷たさを持つもの。

それに四人の体がすくみあがる中、一瞬ひるんだガスフトはしかし気丈な面構えで騎士に言葉を投げかける。

「人界をあまねく律する整合騎士閣下がこのような辺境の小村にお越しになるとは、なんとたる光栄。ささやかながら歓迎の宴を擁し差し上げたいと存じますが」

「公務の途中ゆえ、必要ない」

「は……して、今回はどのような要件でこの村に？」

ガスフトの疑問に、スツと整合騎士は鎧と同じようにまばゆい輝きを持つ手甲の人差し指をもたげる。

その指先と、十字の面頬の奥に隠された伶俐な瞳がまっすぐに示すものは——無意識に動いたルークの背中に隠された、アリス。

「ガスフト・ツールベルクの子、アリス・ツールベルクを、禁忌条項抵触の咎により捕縛、連行し、審問の後に処刑する」

「な——」

最初に、ぐらりとルークの体が揺れた。「お、おい！」とキリトとユージオが支え、倒れることを防ぐ。

次いで、民衆のざわめき。アリスの小さな背中が震え、村人は整合騎士が指し示すアリスを見て離れていく。

ぽつかりと円が開いた中、ルークを支えたキリトたちも改めて脳内で整合騎士の言葉を反芻して、目を見開いた。

ガスフトもまたたくましい体を揺らした後、瞠目してアリスを振り返る。その目には困惑と、絶望と、恐怖が混じり合っていた。

「……………騎士閣下、我が娘が、一体どのような罪を犯したというのでしょうか」
しばし沈黙してから、ガスフトはひねり出すように喋った。

「禁忌目録第一章三節十一頁、ダークテリトリーへの侵入である」

二度、ざわめき。今度はより具体的なものとなり、子供達は呆然と口を開き、大人たちは口々に呪い避けの印をきる。

ああ、ダメだ。このままではアリスが連れていかれる。本能的にそう悟った二人は立ち上がり、小さな体でアリスをかばう。

「ま、待ってくれ！アリスはダークテリトリーになんて行ってない！」

「ほんの少し、そう、少しだけ手先が触れただけなんです！」
「それ以上の理由が、どうして必要であろうか」

二人の弁明は、一言で切り捨てられた。まるで昨日、この整合騎士が切つて捨てた黒騎士のように。

二人が呆然としているあいだに、整合騎士の名により村人によつてアリスは捕らえられ、整合騎士の前に連れていかれた。

我に返つた時には、時すでに遅し。奇妙なことに虚ろな表情の村人と、沈痛な面持ちのガスフトに拘束具を取り付けられている。

すでに、アリスは諦めているのだろう。二人と、その後ろで尻餅をついているルークに大丈夫だよ、と微笑んだ。

「くそつ、こうなつたら俺たちでなんとかするしかない……！」
「ど、どうにかつて、どうやつて……」

アリスの微笑みに歯噛みしたキリトは、もはや混乱が限界に達し、何をどうすればいいのかわからないユージオに提案する。

「俺が、この斧である騎士に斬りかかる。その間にお前は、アリスを連れて逃げるんだ。南の麦畑に飛び込んで、畝の間から森に入ればそうそう見つからない」

「なっ——」

キリトの提案は、おそらくはこの世界で最も危険で恐ろしいものだった。ユージオは激しく葛藤する。

確かに、大人たちが頼りにならない中でそれしかないのかもしれない。だが、それは同時に死を意味しているのではないか？

それに騎士に斬りかかるということは、公理教会との明確な敵対を意味している。この世で最大の、許されざる大罪。

禁忌目録の第一章一節、一頁……最初の最初には、《教会への反逆》と記してあるのだ。

「き、キリト、それは無茶だよ……！お前も昨日のを見てただろう！？殺されちゃうよ！」

「それがどうした！だったらお前は、アリスのことを諦めるのかよ！」

「それは——」

よくない。言い訳がない。だってユージオにとって、アリスは大切な——

「ご苦労。もう下がれ」

ユージオが迷っている間に、整合騎士は竜の首の根元の鎖にアリスの体に巻きついた拘束具の留め金をがちゃんとつけた。

「もう時間がない！おいユージオ、お前にとって禁忌とアリスの命、どっちが大事なんだ！」

耳朶を打つその言葉に、ユージオはそうだと思った。

禁忌などよりも、アリスの方が比べようがないくらいに大事だ。だったら、どうするかなんて決まって——

そこまで考えて、ユージオの頭の奥から鋭い痛みが発せられた。それは右目に伝達し、燃えるような痛みに変わる。

「づつ……！」

「ユージオ？おい、どうしたんだユージオ！」

キリトが呼びかけるが、ユージオの耳には届かない。

痛みが思考を阻害し、赤く染まった右の視界に変なものが見え出す。それは何度も何度も言い聞かせるようにユージオに言った。

公理教会は絶対である。禁忌目録は絶対である。逆らうことは許されない。何人たりとも許されることではない——

「う、あ……！」

「くっ！」

ユージオは動けないと判断し、キリトは一人でもと斧を握って飛竜の背に跨った騎士に鋭い視線と向けた。

それに反応したか。整合騎士はゆっくりと、自分に刃向かおうとするちっぽけな少年に面頬を向ける。

——ギインツ!!

その瞬間だった。キリトの手の中から、甲高い音を立てて竜骨の斧が弾き飛ばされたのは。え、と間拔けな声がキリトの口から漏れる。

今のはなんだ、騎士は動いてすらいらないのに、まるで意思そのものが刃になつたように——

グオツ!

啞然とするキリトと、頭を抱えて目を見開くユージオの背後から突如手が迫る。それは二人の頭を押さえつけ、地に叩きつけた。

「がっ!?!」

「ぐはっ!?!」

苦悶の声を漏らす二人。肺から一瞬で空気が抜け、硬い地面に打ち付けた全身から脳に痛みが伝達される。

一体何が。まさか村人たちに押さえつけられたのかと、二人は必死に首をひねって手

の主を見て――

「公理教会は絶対である。公理教会は絶対である。公理教会は絶対である……」

「なっ!？」

「る、ルークツ!？」

二人を押さえつけていたのは、ルークだった。誰よりも予想外の相手に頭が真っ白になるキリトとユージオ。

「お、おいルーク、離せッ！アリスが！」

「ルーク!？一体どうしたの、ルークツ！」

「公理教会は絶対である。公理教会は……」

右目が真紅に染まった少年は、繰り返して禁忌目録を繰り返していた。

ただ一つ、違うことがあるとすれば……

「公理、教会、はっ、ぜった、いで、ある……ッ!!！」

「ルーク、お前……」

ルークは、おとぎ話の中に登場する悪鬼の如く顔を歪めていた。

両目はヤギの肉を裁くナイフよりも釣り上がり、そこから幾筋も涙が溢れる。食いしばった歯の奥からは、奥歯が砕ける音が響いていた。

まさしく修羅、赤から青に点滅する見開かれた右目ときつく締め付けられた眉根は、

そのままルークの怒りを表していた。

それは果たして騎士にか、それとも……

「グオオオオオ！」

飛竜の鳴き声に、ルークの顔を見ていた二人は正面に向き直る。すると、ちょうど飛竜が飛び立つところだった。

飛竜の鎖にくくりつけられたアリスも宙に浮き、彼女はキリトたちに振り返ると寂しそうな微笑で呟く。

さようなら。

「ア……………」

「アリス——ッ！」

キリトの悲痛な叫びも、涙を流すユージオの絶望も、もはや空高く舞い上がった騎士にも、アリスにも届くことなく。

「俺は、俺を、絶対に、許さない……………ッ!!」

ただ、二人の耳にルークの怨嗟のこもった声だけがいやに大きく残るのだった。

目覚め

気がついたら、何処かの小道に立っていた。

「ここはどこだ……う？」

周りを見渡して、自分が今立っている場所が、村から北の洞窟へと続く道の途中であるとわかった。

しあし、なぜこのような所にいるのか、皆目見当もつかない。彼……ルークは混乱して、また左右に伸びる道を見た。

するとどうだ、村の方向へ向かう人の姿があるではないか。それも三つ、全員見覚えのある後ろ姿だ。

「おーいー！」

手を振って、大声で呼びながら走り出す。ここにいる理由はわからないが、きつと彼らと一緒に……

「……………あれ？」

しかし、奇妙なことが起こった。

いくら走っても追いつけないのだ。まるでその場で足踏みをしているような、おかしな感覚がする。

ルークは焦って、さらに足に力を込めて走った。しかし、歩いているはずの彼らには一向に近づけない。

「おい、アリス！ ユージオ！ ■■■！」

名前を叫び、手を伸ばす。けれどその背中に触れることもできなくて、ただ疲労だけが募っていく。

やがて、子供だったルークの体は大きくなっていった。しかし、いくら成長しても、強くなっても、追いつけない。

「はあつ、はあつ、くそつ……………」

やがて、鍛え上げた体力は底をついた。ルークは膝をついて、じんじんと痛む脇腹に荒い息を吐く。

息も絶え絶えなルークの耳に、ザツと地面を踏み締める音が響いた。同時に、にわか
に影がかかる。

顔を上げると、目の前に三組の足がある。それが誰であるのか、ルークはすぐに気が
ついた。

「アリ……」

「ひどいよ、ルーク」

「……………え？」

頭上から投げかけられた冷たい声に、ルークは呆然とした声を漏らす。

恐る恐る、顔を上げようとした瞬間——ぱさり、と地面に何か落ちた。そちらに目
を移すルーク。

それは、アリスの服だった。安っぽい皮の靴の上に、いつも着ていた青いワンピース
と、白いエプロンが乗っている。

「な……」

「なんであんなことしたんだよ、ルーク」

「き、■■■■——」

また、パサリという乾いた音。

錆びた井戸の桶を引き上げる滑車のような動きで、首を捻る。思った通り、黒い服が

地面に重なっていた。

ああ、まさか。ルークは顔を青ざめさせて、目の前で消えてしまった二人の服を見つめる。

それからふと、なんとなしに自分の手を見下ろした。

そして——真つ黒に染まった自分の右手を見て瞠目した。

「う、うわあああああああつ!？」

悲鳴を上げ、尻餅をつく。黒々とした手はおおよそ人のものではなくっており、指の先には鋭い鉤爪が生えていた。

まるで村の古老の御伽話で聞いた、怪物のような手。それはまるで、あの日のルークの所業を表しているような——

「ルーク」

投げかけられた声に、ビクリと体を震わせる。

せめて、お前だけはそのままでいてくれ。その思いとともに、ルークはまだそこにい

る最後の一人を見上げて。

「この、裏切り者」

ポツカリと空いたユージオの黒い眼窩から溢れる赤い涙を、はつきりと見た。



「——うわああああああああああああっ!?!」

深い微睡みから、一瞬で目を覚ます。足で毛布を蹴り飛ばして、勢いよくベッドから起き上がった。

心臓がいつもより5倍は速く鳴っている。呼吸は乱れ、反パニック状態で周りを見渡し異常を確認した。

しかし、何も危険なものは見当たらない。あるのは衛士の防具など道具の入った木箱とクローゼット、古びた机。

そして、壁に飾られた一振りの「白い剣」。そこまで見て、ようやくルークは落ち着きを取り戻す。

「……ただの夢か」

安堵の息を吐いたルークは、自分の手を見下ろす。汗ばんだ無骨な手は、ちゃんと人間の形をしていた。

けれど、夢の中の光景は決してただの悪夢ではなく。ルークはいつものように、両手を固く握りしめた。

「……よしっ！」

時間にして三十秒。気持ちの整理をつけたルークは開いた両手で自分の頬を叩き、残った眠気を吹き飛ばしてベッドから降りた。

寝汗で湿ったシャツを脱ぐと、見事に均整の取れた逞しい筋肉に包まれた、細身の体があらわになる。

椅子にかけてあつたタオルを手に取ると、立て付けの悪い窓を極力音を立てないように開けて外に出る。

庭の窓際に生い茂った雑草の上に着地して、ルークはそつと聞き耳を立てる。しか

し、家内から音は聞こえない。

どうやら、眠りの浅い母親は起きていないようだ。ルークは安堵の息を吐き、目の前にある井戸に近づいた。

桶を引つ張り上げると、肌が切れるような冷たさの水を頭から被る。

「うひー、冷てえ」

未だ朝靄の漂う早朝、空気の冷たさと相まって水は普段以上に身を切るような感覚を与えてきた。

とりあえず、濡れた上半身をタオルで拭く。そうすると水滴が滴る髪をかきあげ、手首につけた皮紐で縛った。

十分に視界が広がったところで、慣れた足取りでそこそこ広い庭の奥へと歩いていく。

雑草が踏み敷かれ、更地になったそこには丸太がついた長細い棒が立っていた。ルークは、そこに立てかけられた木剣を手に取る。

「んー、そろそろ替え時か？」

白金櫂を削って作った片刃の木剣は、随分と持ち手の皮が擦り減っていた。よく使っている証だ。

「よし、まずはノルマー100セットだ」

今日使う分には問題ないと判断したルークは、使い込まれた柄を両手で握りしめる。そして、一本の木のような姿勢をとった。隙のないその姿勢は、どれだけ彼が研鑽を積んできたかひと目でわかる。

「フッ！」

その姿勢から、鋭い呼吸とともに袈裟斬りが繰り出された。それは冷めた空気を切り裂き、一陣の風を吹かせる。

そこから逆袈裟斬り、唐竹、振り上げ、そして最初とは別の方向からの袈裟斬り。最後に胴を切り裂く。

それでワンセット。最初の姿勢に戻すと、また同じことを百度繰り返す。それが、ルークの日課であった。

「ふっ、はっ、せいっ……！」

一太刀振るうごとに、技の冴えは増していく。共に踏み込みが激しくなり、ルークの心はある種の極限へと誘われていく。

一振り前より鋭く、一秒前より速く、今の己よりも次の己は強く。ただ振って振って、いつか何かを切り開けると信じて。

たとえ、それが己の罪への戒めから成る執念でしかないとしても。

「ゼアアアアッ！」

腕が重くなるほどに木剣を振り、一時間も経った頃。ついに最後の振りになり、ルークは裂帛の叫びと共に踏み込む。

その先にあるのは、太い丸太。薪に使うための原木をそのまま置いたそれに、ルークは両手で剣を握り締め――

「シィッ！」

一閃。

剣を振り切った姿勢のまま、ルークは静止した。素振りと共に吹いていた風が止み、無音の世界が作られる。

その中で、丸太が半ばほどからズレて時点に落ちた。ゴロン、と重々しい音を立てて転がっていく。

「……少し、粗くなったか」

ルークは、二割ほど小さく残った丸太の断面を見て呟く。

どうやら悪夢の影響か、無意識に剣を握る手が緩んでいたようだ。やれやれと自分のため息を吐くルーク。

次いで、集中力が切れたことで軽い倦怠感が全身を襲い、深く息を吐き出しながら姿勢を元に戻した。

「ルーくん？ここに居るの？」

使えなくなった丸太を片付けていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

ルークが振り返ると、そこにいたのは柔らかい雰囲気的女性。目元がルークとよく似た彼女は、十五年の間毎日見てきた人物だ。

「おはよう、母さん。今起きてきたの？」

「ええ。それでルーくんがいなかったから……」

「いつも通り、稽古していたとこなんだ」

「あらあら、朝から精が出るわね。すぐにご飯を作るから、汗を流していらっしやい」
若々しい顔に微笑みを浮かべたルークの母、セフィアはそのまま家の中に戻っていった。

「はいはい、っと」

ルークは明日の日課用に積み上げてある丸太を一つ取って棒に嵌め込むと、火照った体にもう一度冷水を被る。

汗を洗い流した後には体を拭き、また窓から部屋の中に戻った。それから上着を着ると、食堂の方へ行く。

すると、木製のテーブルと椅子が二つ、それとセフィアが集めた花の押し花が飾られ

た食堂のキッチンで、母親がジャンプしていた。

「母さん、何やってんだ？」

「あつ、ルーくん。ちよつと上の棚から干し肉を出してくれる？お母さん届かないのー」
「そういうことか」

ルークは自分より頭ひとつ分ほど背丈の低い母に苦笑して、戸棚を開けて干し肉入りの袋を取り出した。

「はいよ、母さん」

「ありがとうね、助かるわ」

「いいって、これくらい」

黒パンと朝絞ったばかりのミルクも出して、皿とジョッキを用意すると準備完了。

テーブルに移動して、二人で創世神ステイシアへの祈りを捧げた。そうしていつも通りの食事が始まる。

「よいしょつ、と」

「ん〜！」

非常に硬い、そのまま食べれば歯が折れるのではないかという黒パンを二人揃って干し切り、ミルクに浸してふやかしてから食べた。

その一連の動作を全く同じタイミング、動作で行い、その後干し肉を齧って「ん〜」

と声を出すまでシンク口する。

「ルーくん、今日はどっちの当番？」

「んぐ、門番。暇な方だよ」

ルーリッド村では、四人衛士がいる。そのうち二人が村内を巡回、二人がそれぞれ北と南の門番という役割を交代制で行なっている。

今日は、ルークが門番だった。しかし、これはいくつかある衛士の仕事のうち、一番楽とも、暇とも言われる職務だ。

「こら、そんなこと言わないの。ちゃんとしたお仕事よ？」

「わかってるって、冗談さ」

そう口で言いはするものの、このような辺境の村だ。大半は村の外で仕事をする人間の行きと帰りを見送るのみである。

「母さんは農作業だろ？一人でも平気か？」

「ふふん、まだまだお母さんは若いのです」

干し肉を手に胸を張るセフィアに、ルークは確かに、と笑う。実際、彼女は二十代後半でも通じるほど若々しいのだ。

その美貌は若い頃から衰えることなく、村の男衆によると自分と同じほどの年の頃はそれは凄まじかったらしい。

もつとも、そんな母を射止めた男の顔をルークは生まれてこの方、知りもしないのだが。

「ん、ごっそさん。じゃあ行つてくるから」

「はい、頑張つてちようだいね」

「ああ、母さんもな」

綺麗に朝食を平らげて、食器をキッチンに置いたルークは食堂を後にする。

ルークの部屋は1階だ。短い廊下を抜けて部屋に戻ると、木箱から革製の手甲と脚甲を取り出して着ける。

それからシャツの上に皮のジャケットを羽織り、腰に銅剣を履けば準備完了だ。

「あとは……」

ルークは、壁に飾られている白い剣を見る。そしてゆっくりと歩み寄った。

“あの日”から七年の間、共に過ごしてきた剣。それをいつものように両手で持ち上げると、鞘についた紐で肩にかける。

持つべきものを全て備えて、ルークはまた窓から外に出た。家の柵に手をかけて乗り越えようと、南門の方へ向かう。

「おや、ルーク。早起きじゃな」

「おう、リダックの爺さんこそ早いな」

「フオツフオ、年寄りの朝は早いでの。それ、先に行つとれ。ワシもそのうち行くからのう」

「はいはい」

それからも途中出会つた村人と会話を交わしつつ、ルークは南門にやって来た。

石造りのアーチ状の南門は、やはり陽が昇つてからさほど時間が経つていないためか誰もいなかった。

「よつこらせ、つと」

ガシヤン、と重々しい音を立てて剣を門に立てかける。一見細身の剣は、しかし鞘の底が少し地面に沈んでいた。

ルーク自身も背中を預けて、七年間同じ姿勢でやってきた習慣で腕を組み、片足を曲げて見張りを始める。

それから三十分経つて、一時間が経つて。にわかに門の内側……村の中から音が聞こえ始めた。村人が働き出したのだ。

それに伴つて、ちらほらと外に出ていく人間が現れ出す。全員と端的な挨拶を交わして、門を潜つたのを確認した。

ルークはこのやりとりが、嫌いではない。退屈ではあるが、今日も村が平和であると実感できるからだ。

「おはよ、ルーク」

やがて、村が動き出して二時間もした頃。聞き覚えのある声に、ぼうつと道の先を見ているルークは隣に目を移す。

そこには、自分の幼馴染みがいた。片手に無骨な斧、もう一方の手には弁当の入った麻袋を持って。

昔から変わらない金髪と、女のような端正な顔立ち。青い瞳は落ち着いていて、彼の温厚な性格を表している。

けれど、どうしてだろうか。その隣に、もう一人誰かが足りない気がするのとは。

「ああ、おはよう——ユージオ」

「今日も頑張ろうね」

「ああ、お前も一人で大変だろうが頑張れよ。村一番の木こりさんよ」

チリ、と胸に何かを感じる。自分の言ったことに違和感を感じるけれど、その理由がなんなのかわからない。

「村一番なんて、そうでもないよ。お前こそ、居眠りしちやダメだからな」

「んー、なんのことかね。三日前のことなんか記憶にないな」

「まったく、もう」

軽口を交わし、笑い合った二人は軽く握った拳をぶつけ合い、ユージオが歩いて行っ

て別れた。

ここからでも見える黒い巨木へ向かい、森の中へ入っていくユージオの背中を見送る。そしてルークは、顔を前向きに戻した。

こうして、ルークの一日は今日も変わりなく始まっていく。

そうして、出会った。

「くあ……ほんと、暇だ」

大きく口を開けたルークは、誰に聞かせるでもなく呟く。

門番を始めて、早4時間ほどが経過した。

その間全く問題はなく、視界いつぱいに広がる青空と畑、森へ続く道に異常も人影もなく。

昼に近い時刻である為、ルーク同様に村の内外で皆己の天職に従事しているのだ。

「つし、そろそろ始めるか」

ならばと、ルークは日課を開始した。

村の門に足裏をつけていた右足を地面に下ろし、傍らに置いていた白剣を両手で取る。

「つと。相変わらずお前は重いな、未来の相棒」

ズッシリと両手を潰さんばかりに己の存在を主張する剣に、もはや口癖となりつつある文句が出た。

人差し指と中指を揃え、剣にかざす。

そうして右上から蛇のように曲がりくねった印を刻み、ポンと宙に浮かんだそれを叩いた。

OBJECT ID [NL|SS969]

44 CLASS

287046/304012

DURABILITY

(天命はそんなに損耗してないか……ま、ちゃんと手入れしてるから問題ないな)

剣の状態を確認したルークは、もう一度周りに誰もいないことを確認した。

安全なことをしっかりと把握してから、肩にかけるための皮紐を外して、それで本体と鞘を固定する。

「ふっ、はっ」

軽く両手で振って、外れないとわかると左半身を後ろへ引いた。

右手を柄の付け根に、左手を卵を掴むような形に。

腰だめに剣を構え、深く息を吐く。

「フウー……シツ!!」

斬り上げ一閃。

無人の道に風が吹き、カタカタと刀身に当たった鞘が音を立てる。

木剣とは比べ物にならないそれは、一度振るだけで鍛え上げられたルークの体ごと持っていきかけた。

それでもどうにか踏み出した足で地を踏んだのは、これを毎日欠かさず続けているおかげか。

「セイッ！ ハアッ！」

一太刀、二太刀、三太刀。

剣を振るうほどに空は裂け、ルークの意識は無我の境地へと沈んでいく。

少しでも角度を間違えれば、剣は手の中からすっぽりと抜け、どこかへ飛んでいくだろう。

少しでも力の緩急を間違えれば、腕の骨や筋肉を断裂させることになるだろう。

衛士として時折村の周辺に現れる害獣を駆除しているルークだが、これを振るうにはまだ足りない。

力も、技も、覚悟も、何もかもが。

何より、この剣にあつらえた牙自身に認められていないようだ。

掟に従えられ、*“彼女”*を見捨てたお前に……自分は扱えないと、そう言うように。

「ゼアアアッ！」

自分の中から湧き出る考えを払拭するため、更にルークは声に気合いを込めた。

そうしたルークの剣舞は、ソルスが頂点に昇るまで続くのだ。

「っ、はぁ……！」

振り下ろした剣を、そのまま支えにして荒い息を吐くルーク。

地面と対面する顔からは滝のように汗が流れ、長い髪の前から滴が落ちる。

「あー、もう昼か……！」

いつの間にか随分と時間が経っていたことに、ルークはふっと自嘲気味に笑う。

無論のこと、門番の役割もしっかりと果たしている。剣を振る中でしっかりと監視しているのだ。

服の袖で汗を拭い、持ってきた皮袋から水筒を取り出すと、中身を半分ほど一気に煽る。

「んぐ、んぐ……ふはっ、生き返るう〜」

汗となって流れ出た水分を補給すると、地面に若干先端が沈み込んでいる剣を抜いて

壁に立てかける。

柄から離れた手はプルプルと小刻みに震えていた。やはりルークには荷が重いようだ。

とはいえ、持ち上げすらできなかった最初の頃に比べれば、随分と扱えるようになった。

「……ユージオは“あれ”を振ってるわけない、よな」

ふと、自分のこれと同じように幼馴染が持つあるものを思い浮かべる。

かつての幼馴染は剣士に憧れていたが、今は自らの天職を全うしている。余程奇妙なことでも起きなければ、アレを納屋から出すこともあるまい。

「そーいや音が止んでるな。あいつも休憩か」

ギガスシダーがある方へと目をやれば、ここまで響いてくる心地の良い斧の音は聞かえない。

昔は休憩時にアリスと二人、ギガスシダーのところまでいったものだ。一人で昔を懐古する。

思い出にふけるのもそこそこに、パンを水で適当にふやかして口に詰め込むと立ち上がった。

「っし、午後も頑張るか！」

二十分ほどの休憩で体力は十分回復したものの、もう一度あの剣を長時間は振れるほどではない。

あれよりも随分と軽い衛士用の剣の柄を軽く握り、ルークの午後の仕事はのんびりと始まった。

「おやルーク、今日も精が出るね。もう休憩はいいのかい？」

「あ、おぼちゃん。おうよ、今日も俺は絶好調だぜ？」

「そりゃ頼もしいねえ。次の村の衛士長は、やっぱりルークかね？」

「どうかなあ。俺はほら、そんな真面目じゃないしさ」

「何言ってるんだい、うちの衛士の中で一番頼りになるよ」

「はは、ありがと」

時折村に出入りする村人と会話を交わしながら、穏やかな午後を過ごす。

何年も変わらない、この一日。

それを繰り返すほど、ルークの中に安心と焦燥感が同時に募っていく。

こんな所でただ呆けたように突っ立っているだけでいいのだろうか。

ありもしない「もしも」のために剣を振っていいのか、と。

「……いや、こんなこと考えてちゃダメだな」

かぶりを振って考えを振り払い、職務に集中することで意識を逸らす。

十分が経つ。小鳥の囀りが聞こえた。

三十分が経過する。畑にいる村人が手を振ってきたので振り返した。

一時間が過ぎた。ルークの意識は完全に仕事に没頭していた。

一度集中したルークは、よほどの事がない限りは決してそれが解けることはない。そう、だからこのギガスシダーの方から聞こえてくる見当違いな場所を叩く音も――

「……………ん？」

待て、とルークは自分にストップをかける。

「今、なんか……………」

ふと森の方を見やり、ここからでも見えるギガスシダーの先端を注視する。

どこかおかしかった。いつもは規則的な何かの音が変わるのだ。

ガゴギインツ

それが何なのかを思い出そうとするルークの耳に、再びおかしな音が聞こえてきた。「……あ、そうだ。ユージオがギガスシダーを叩く音だ」

そろそろ仕事を再開する頃であろうが、あまりにおかしい。

ユージオはもう七年もあの仕事をしている。今更あそこまでの外れな音は出さない。であれば理由は何か、とルークは首を傾げ……はつと何かに思い至る。

「……ははーん、さては昼飯で腹を下したな？」

(帰ってきたら、ちよいとからかってやるか)

幼馴染は不調なのだろうと異音の原因に見当をつけ、ルークはニシシと笑った。

それから時間が経つにつれて、異音はいつも通りの規則性を取り戻していく。

やはり不調だったのだろうと確信を深めたルークは、元の通りに門番の仕事を全うした。

二時間、三時間と時間は流れていき、ソルスが頂点から随分と傾いて、空は茜色へと変わる。

直に日暮れから夜の帳が落ちる頃合いだ、そろそろ村人たちも畑から帰ってくるだろう。

「ふあ……」

つつい、欠伸が漏れてしまう。

（ああ、今日も変わらなかったな）

ルークの心に、また安心と焦りが広がった。

やがて、村の外の畑から次々と疲れ切った表情をした村人たちが帰ってくる。

彼らと挨拶を交わして、最後にユージオが来れば門番は終わりだ。

「ん、おつ。帰ってきたな」

最後の村人と会話をして、しばらくした頃か。

森へ繋がる道から、見慣れた幼馴染の姿が現れた。

その姿を認めて、ルークは大きく手を振り上げ。

「おい、ユージオ——」

そして、言葉は止まった。

続けて呼吸が止まり、音が止まり、時間さえもが止まった錯覚に陥る。

ユージオと一緒に、もう一人の少年が出てきたのだ。遠目から見て、ルークやユージオと同じ年頃か。ユージオの金髪とは正反対の漆黒の髪がよく似合う。

「——っ」

ルークが動きを止めたのは、その少年が見知らぬ人物だったからではない。ユージオが自分以外の前で、久方ぶりに親しげに笑っていたからではない。ただもつと単純な、この感情は——

「……………」

気がつけば、降ろした腕の代わりに一步を踏み出していた。

最初は無意識に。次の一步はより大きく。

そして三步、四歩と進むたびに、それは疾走へと変わっていった。

「あ、ルーツ!？」

「え、ちよ、なにおぶっ!？」

気がついた時には、その少年を全力で抱きしめていたのだ。

「馬鹿野郎ッ！ 今までどこに行つてたんだよ……！」

「え、な、何……？」

「る、ルーク？ 一体どうしたの……？」

狼狽る二人に構わずに、強く少年の体を両手で抱きしめる。

自分でもおかしなことをしているのはわかっている。

この少年のことなど、何も知らない。

どうしてこんなにこみ上げてくる感情があるのか、ルーク自身不思議でたまらない。

けれど、こうしたくてたまらないのだ。こうしなくてはいけない気がするのだ。

二度とこの手から離さないように。

あの夢のように、目の前で突然パツと消えてしまわないように。

アリスのように……失わないように。

「お、おいユージオ、助けてくれ」

「ごめんねキリト、普段はこんなことするやつじゃないんだけど……ほらルーク、キリトが困ってるから」

「……おう」

ユージオに肩を引かれて、ようやく少年を解放する。

改めてちゃんと見る少年の顔には、やはり強い戸惑いの色があった。

当たり前だ。いきなり男にに抱きつかれて喜ぶような輩はいない。いたとしたらそれは変態だ。

「ごめんな。びつくりしただろ？」

「あ、いや、別にいいけどさ……あんたはユージオの知り合いか？」

「俺はルーク。この村の衛士だ。よろしくな、えーと」

「ああ、俺も自己紹介しなきゃだよな……俺はキリト。えっと、『迷人』ってやつ……らしい」

キリト。その名前をルークは胸に刻んだ。

ポツカリと心のどこかに開いていた穴に、初対面のこの少年の名前が収まった気がしたから。

「そっか、ベクタの……あー、自分のことはわかるみたいだな？」

「あー、いや、すまん。自分の名前以外はわからないんだ」

「そいつは大変だな……出身や天職もか」

こくりとキリトが頷くと、ふむとルークは考え始める。

それを衛士として村に入れるか迷っていると取ったユージオは、ルークに心配げな目を見せた。

「んな目しなくても、追いついたりしねえよ」

「わわっ」

幼馴染が何やら勘違いしていることに気づいたルークは笑ってユージオの頭を乱暴に撫で回す。

ひとしきり髪をぐしゃぐしゃにすると、ルークはこちらを見て苦笑いしているキリトの方を見た。

「とりあえず、もう暗い。今晚は村に來いよ」

「いいのか？」

「困ったときは助け合いだ。だろうユージオ？」

「そうだね。ありがとうルーク。キリト、村の中を案内するよ」

「ああ、よろしく頼む」

頷くキリトに、ルークは右手を差し出す。

キリトは少し息を飲んで、それから不適に笑ってルークの手を握った。

「ようこそ、ルーリッド村へ。歓迎するぞ、キリト」

「とりあえず、今日は世話になるよ」

——おかえり。ようやく帰ってきたんだな、キリト。

心のどこかで、誰かがそう言った。

キリト

「——なるほどな。目が覚めたら森の中にいて、それからすぐユージオに出会ったわけか」

「ああ、そういうことになるな」

「はじめてキリトに会った時はびっくりしたよ。いきなり森から人が出てくるんだから」

村の各所を案内しつつ、三人は会話を交わしていた。

その結果ルークがわかったことは、どうやらこのキリトという少年はなかなか気さくであること。

ハキハキとした口調、周りを見る際の興味深げな目線、そして会話をする中での落ち着いた雰囲気。

道中、自分のことを聞いてくる村人たちにも丁寧に応答し、非常に好感の持てる性格をしている。

記憶がないという割には、随分としっかりした少年だ。

《ベクタの迷子》になる前はどのような天職を持っていたのだろう、と気に掛かるルークであった。

「ああそうか、それで合点がいった。あの奇妙なくらい的外れな音は、キリトがギガスシダーを削る音だったんだな」

「うぐ……」

「あはは。でもキリト、案外筋がいいんだよ。教えてるうちにどんどん上達していったんだ」

ほう、とバツが悪そうな顔をしているキリトを見やる。

飲み込みが早いのは相変わずだなど考え、その思考に自分自身が違和感を持った。

はてと考えようとしたものの、まあそんなことはいいかと勝手に頭の中で片付ける。

「それで、二人はどんな話をしてたんだ？」

「話、か？」

「ああ。こいつ、優男に見えて頑固なところあるんだ。案外仲良くなるのは困難だぜ？」

「ちよつと、ひどいよルーク」

悪い悪い、と全く悪びれた風に言わないルークにユージオはため息を吐く。

(……やっぱり自然すぎる。ユージオとの接触でただのNPCじゃないのはわかったた

けど、同じ《アンダーワールド》の住人同士でも人間としか思えない滑らかさで会話している)

「ん？ どうしたキリト？」

「あ、ああいや、ちよつと思いい出そうと、な」

「そんなに前のことでもないだろう？ まあ、たわいもないことだよ。《果ての山脈》のことや、闇の軍勢のこと……それと、整合騎士のこと」

「……そうか」

ユージオの言葉に、さつとルークの顔に影が差した。

先程までの様子は鳴りを潜め、低い声で返答するルークに、ふとキリトはユージオに聞いた話を思い出した。

6年前。《禁忌目録》を破り、整合騎士に連れ去られたユージオの幼馴染。

連れていかれる彼女を助けようとしたユージオを押さえつけたのは……確か、彼のもう一人の特別仲の良い少年。

そこまで考えて、察しの良いキリトはなんとなく事情を察して顔を引き攣らせた。

すなわち——やべえ地雷踏んだ、と。

「あ、あとはザツカリアのこととかな！」

「あの街のことか。ま、ここらで都会つていやああそこくらいのもんだよな」
苦し紛れといった様子のキリトの言葉に、すぐにルークが乗った。

それからユーゾオもすぐに加わって、会話をするうちに変な空気も霧散していく。

「そういえばずっと気になってたんだけど、それは？」

その中で、ふとキリトがあるものに目線を向ける。

それはルークが肩から下げている、細長いもの……白い鞆に収まった剣だ。

「ああ、これか？　まあちよつとした貴重品みたいなものさ」

「見た所刀……ああいや、剣みたいだけど。衛士はみんな持つてるのか？」

「まさか。そんな命知らずの馬鹿は俺くらいのもんだよ」

「命知らず？」

しまった、思わず口が滑った。

そう思ったルークだが、既にキリトは興味を示している。

言ってしまった自分の落ち度か。そう諦めたルークは軽く溜息を吐き、話し出した。

「こいつはな、《果ての山脈》にあった白竜の遺骨、その牙から削り出したんだ」

「ルーク、話してもいいのかい？」

「そりやお互い様だろ？」

暗にアリスのことを話しただろう？　と言うルークに、ハツとユージオは言葉とともに息を呑む。

「竜の牙から？　つまりギガスシダーを削る《竜骨の斧》と同じってことか？」

「ああ。こいつを剣の形にするのは苦勞したぜ。コツコツと貯めてた金を全部使つて、ザツカリアから高価な砥石をいくつも取り寄せたんだからな」

「そりやまた、すごい代物だな」

「ああ、だがまあ困つたことにな……こいつは抜けない」

ルークの突拍子も無い言葉に、さしものキリトも面食らつた。

わざわざ牙を削つて作つた剣が抜けないとはどういうことか。見た所、肩にかけるための紐以外にも付いていない。

（何かシステムのなロックがかかっているのか？　いや、たとえそういう権限が付与されてたとしても、これは最近作られたもののはずだ）

ルークの口ぶりでは、あの刀のような剣が作られたのはそう昔の話でもないだろう。

であれば、削り出した者が何かをしたのか。そう勘ぐるが、疑問を解決するには材料が少ない。

「細工師のおつちゃんもびっくりしてたぜ。完成して鞘に入れたら、途端に抜けなく

なっただっていうんだからさ」

「なるほど……不思議な話だな」

「いや、そうは思わない」

「え？」

思わず間抜けな声を上げるキリト。

それからユージオと自分の間にいるルークを見ると、その目はどこか遠くを見据えていた。

「この剣は、相応しいものを選ぶんだ」

「相応しいもの？」

「ああ……きつと。俺の覚悟が本物になった時に、こいつは答えてくれる。そんな気がする」

これはまた、実に迷信的な理由だ。ユージオも苦笑をこぼしていた。

だがルークの横顔は、その自分の考えを心から信じていた。

それはまた、どうかさうであれと願っているようでもある。

「……そっか。いつか抜けるといいな」

「おうよ、まだまだ精進の日々だ」

力拳を作るように片手をあげ、ルークはニツとキリトに笑いかけた。

「ザツカリアのこととも聞いたってえと、衛士が参加できる剣術大会のこととかも聞いたのか？」

「へえ、そんなのがあるんだな」

そう受け答えしたキリトの視線が、ちらりと自分の腰の剣に向かったのをルークは見逃さなかった。

「そうだ、どうせならうちでちよいと剣を使ってみるか？ 俺が練習に使ってる丸太があるんだ」

「ちよつと、ルーク？」

「いいのか？」

「ああ。まだそこまで日は沈んでないし、少しくらい寄っていつでも問題ないだろう」
キリトの寝床の確保場所として、三人は村の教会のシスター・アザリヤを頼ろうとしていた。

幸いにも、ルークの家は教会からそう離れていない。今日門番をしていた南門とちよつと中間くらいにある。

ユージオが訝しげな目を向けてくるが、ルークには衛士としてこの少年を見極める義務がある。

「それなら、ちよつとお邪魔させてもらおうかな」

「よし、そうとなれば善は急げだ！」

「うわっ！」

「ちよ、ちよっど！」

「またも困惑する二人の手を引き、ルークは快活に笑いながら自宅に向けて走り出した。」

ああ——なんとなく、懐かしい。そう思いながら。

「着いたぞ。ここが俺の家だ」

「ゼエ、ゼエ……」

「い、いきなりは困るよ……」

「なっはっは、鍛えたりないぞ?」

今日の仕事を終えたユージオと、本日子こり初体験のキリトは突然の疾走に体力を使い果たし、両手を膝に置いて撃沈していた。

午後はたっぷりと休憩（門番）をしていたおかげでそれなりに元気なルークは、腰に手を当て笑う。

「そら、こっちだ」

二人の調子がある程度整うのを待ってから、普段修練をしている裏庭へと案内する。

そこは朝と変わらず、練習用の木剣と真新しい丸太だけが存在していた。

「ほれ、握ってみろ」

「ああ、借りるよ」

腰から衛士用の剣を抜き、キリトに手渡す。

受け取ったキリトは、二人が離れたのを確認してから軽くそれを振った。

「よっ、とー!」

「ほう、なかなか様になってるな」

「まあな……こっからが本番だ」

不敵に笑ったキリトの雰囲気、ふつと変化した。

丸太に視線を向け、上半身を少しかがめる。腰を落とし、右半身を引いた。

一連の動作を終えるまで、ほんの一、二秒。少なくとも素人でないことを、ルークは

鋭く推測した。

「——ふっ!」

次の瞬間、鋭く呼吸を放ってキリトは一步前の足を踏み出した。

(踏み込みが早い!)

「はあああつ!!」

気合い一閃。

剣を青い光が覆い、キリトの横薙ぎとともに空中に美しい軌跡を描く。

また、それに伴い吹いた一陣の風が止んだ時……ずるり、と丸太の半ばから上がずり落ちた。

「すごいよキリト! そんな技が使えるなんて! もしかして、大きな街の衛兵だったんじゃないか?」

「……」

キリトの剣技を褒めそやすユージオの隣で、ルークは限界まで目を見開いた。

(——なんだ、こいつの綺麗な剣は)

キリトの動きを見るために集中していたルークの目には、その動作が細かな所まで見えていた。

剣の持ち方。体重の移動。踏み込みのタイミング。刃を入れる角度。刀身の長さか

ら丸太までの距離。

その全てが完璧。

まるで辛く厳しい戦いの中で鍛え上げられたような、強さと繊細さを併せ持った剣。

こいつと戦いたい。

剣使いとしてのルークの純粋な闘争本能が、思わずそんな言葉をはじき出した。

「——お前、いつの間にかそんなに強くなってたんだな」

「え？」

「ルーク？ 何言ってるの？」

「……え、あれ？ 俺、何か言ったか？」

「変なルーク。それよりキリト、本当にすごかったよ」

「あ、ああ。ありがとうユージオ」

かろうじて返事をしたキリトは、何か疑問があるのか、自分の握った剣をじつと見下ろした。

「あら？ ルー君帰ってたのね。それにユージオ君もいるじゃない」

「あ、おばさん」

そんなキリトをルークが見つめていると、後ろから声がした。

振り返れば、そこには若干汚れた顔にのほほんとした笑顔を浮かべている母。

その顔を見てみると、なんだか、いつの間にか張り詰めていた気分が解けていった。

「うちに来るのは久しぶりね。ご飯食べていく？」

「ありがたいですけど、平気です」

「あら、残念。それと、そちらの子は……」

「……母さん、こいつはキリト。ユージオが連れてきた《ベクタの迷子》なんだ」

「まあ！ それは大変だったのね」

お人好しであるセフィアは、本当に心から心配するようにキリトに駆け寄るとあれこれと聞いた。

記憶がなくて心細くないかとか、今夜はどうするのかとか、矢継ぎ早に聞く彼女にキリトは狼狽える。

そんな様子にルークとユージオは互いに肩をすくめ、事情をセフィアに説明した。

「そう、アザリヤさんのところへ……それなら心配いらわないわ。彼女はとても親切ですもの」

「ああ。じゃあユージオ、あとは頼めるか？」

「あれ？ ルークは一緒に行かないのか？」

「ああ。いきなりうちに連れてきてすまないが、教会は……な」

気まずげに言うルークに、例の件に何か絡んでいるのだらうと察したキリトはそれ以上追求しなかった。

「ユージオ、すまん」

「いや、いいんだ」

自分と同じく、あの件を気に掛けているユージオにまるで押し付けるようで、ルークは心苦しかった。

教会に違い村中央の広場へ行く二人を、ルークはセフィアと二人で、その姿が見えなくなるまで見送った。

「……ルーク」

「ん？ どうした母さん？」

ぎゅ、と手を握られる感覚。

驚いて隣の母を見下ろせば、彼女は心配げな目で息子のことを見上げていた。

「あまり、思いつめないでね」

「……ああ、そうするよ。ありがとう母さん」

そう返事をして、ルークはもう一度キリト達の行った方を見るのだった。

負い目

キリトがルーリッドの村にやってきてから、一晩が明けた。

「ふっ、はっー！」

ルークは今日も今日とて、早朝から鍛錬に明け暮れている。

その様子にいつもと変わりはなく、目線は鋭く、呼吸は乱れず、ひたすらに剣の世界へと没頭している。

いや、いつもより少しだけ気迫が増しているだろうか。

剣筋の鋭さが増しており、いつもはまだまだ使えるはずの丸太が既に傷だらけになっていた。

「せあああっー！」

そして、最後の一闪。

振り抜かれた木剣は、三割り増しの鋭さと勢いをもって丸太を切り裂き、上半分が宙を舞う。

「つ、はあ、終わりか……」

それが地面に落ちるのと同時に、ルークは深く息を吐いた。

最初の姿勢に戻るだけの体力が普段ならば残っているのだが、今日は膝に手をついて
いる。

シャツを着ていない上半身には大量の汗が流れ、今の世代の衛士たちの中でも抜きん
出て鍛え上げられた筋肉が脈動した。

「ふう……あいつの剣に触発されたかな」

ようやく息を整えた頃には、ルークの顔には自嘲気味の色が浮かんでいた。

昨日見たキリトの剣。

たった一回のそれを見たルークの胸に、言いようのない対抗心のようなものが生まれ
たのだ。

それはキリトの剣技が気に食わないとか、自分の方が強いとかいう感情ではなくて、
ただ純粹に興奮した。

あれより綺麗に剣を振りたい。あれよりうまく力をコントロールして剣を扱えたら
……昨晩からそんなことばかり考える。

「頑張らなきゃな」

(いつか、アリスを助けに行くためにも……なんてな)

ふっ、という笑いとともに、自分の中の熱を吐き出して。

考えを切り替えたルークは、ふと自分の握る木剣を見下ろして右手を開く。

すると、ぱらりと持ち手の革が手のひらに広がった。丁度指の先端で握っていた箇所から千切れている。

「あー、こいつは替えなくちゃ使えないか」

いささか張り切りすぎたか、という二度目の自嘲げな笑いをこぼすことになったルークだった。

鍛冶屋に行くことを心に決めながら、もう一度肌を切るような冷水を頭からかぶって汗を洗い流す。

それから程なくしてセフィアが起きて、二人で朝食を取った。

「今日はよく食べるわね」

「むぐ、まあ、ちよつとな」

もぐもぐとパンと干し肉を頬張りつつ、母の質問に答える。

朝から気合が入っていたためか、皿に乗るパンは二つほど多かった。

焼き立てではないので石のように硬いが、腹が満たされるならば問題はない。

「うふふ、ルー君が元気で嬉しいわ。あの人もきつと喜ぶわよ」

「ん……父さん、か？」

しっかりとパンを飲み込んでから、こちらを見て微笑んでいるセフィアに聞き返した。

食堂に飾られた色とりどりの押し花。

それに負けないセフィアの笑顔は、見ているだけでなんだか安心できる。

顔も見たことのない父の話をする時が一番華やいている、というのが少しだけ複雑だが。

「ルー君は優しいし、ちゃんと衛士のお仕事もしてるし、何より立派な剣士じゃない。きつと誇りに思ってくれるわ」

「……どうだろうな。俺、父さんの顔も知らないし」

ルークの父は、彼が生まれる前に村から姿を消した。

森に出るはぐれ長爪熊にやられたとも、公理協会に追われる罪人だったとすら噂する者もいる。

もつとも、それは若い村人ばかりで、セフィアの同世代になると、皆一様にルークの父を褒めるのだ。

数ヶ月程しか村にいなかったそうだが、母は詳しくを語らない。ルークの数少ない長

年の疑問である。

なお、他いくつかのうち一つは、息子の目から見ても異常に若いこの母の美貌だった。りした。

「お母さん見たかったな、あの人とルー君と一緒に衛士のお仕事をしたりするの」
「そんなこと言われても、実感も湧かないよ……ん、ごちそうさま。それじゃ行つてく
る」

「頑張つてね」

早々に食事を済ませ、部屋で準備を終えたルークは家を出る。

と、そこでカーンと鐘の音が響いた。

「六つ目を過ぎた半分の鐘……教会じゃ、そろそろ朝食の時間か」

この村では教会の鐘楼が《ソルスの光のもとに》という賛美歌を十二節に分け、それを一刻毎に鳴らすことで時間を確認する。

遙か昔は央都に《時刻みの神器》という物があつたらしいが、所詮はおとぎ話の中に出てくる代物。

ちなみに《神器》とは、神の力を借りて強力な神聖術師が、あるいは神そのものが作り出した器物のことだ。

「お前も《神器》だったりしてな」

肩に掛けた、抜けない相棒に冗談半分に言つて、ふとここからでも見える教会の鐘楼を見る。

「キリトのやつ、ちゃんと起きただろっうな？」

不思議とあの少年があと五分、などごねるのがリアルに想像できてしまった。

その様子を思い浮かべて少し笑つた後に、ルークは神妙な顔になつてポツリと呟く。

「……ちよつと行つてみるか」

それは、普段のルークからはたとえ口が裂けても出ない発想だった。

故にこそ、口に出したルーク自身が何よりも自分の考えに驚きを見出す。

6年前、正確には「彼女」が家を出て教会に入つてから、決してあそこへは寄り付かなかった。

だというのに、なぜ今日に限つてそのようなことをしようと思つたのか……そう考へ、思考の発端にキリトがいることに思い至る。

不思議なやつだ、とルークは思った。

まだたつた1日しか接していないというのに、ここまで自分に影響を及ぼすなんて。しかしまあ、どうせ門番の職を始めるまでには半刻ほど時間がある。

(あいつにバレなきやいいんだよな、うん。バレなきや)

ここ数年、剣の鍛錬と衛士の天職に全うして忘れられていた好奇心が顔を出した瞬間だった。

南門へ向けていた足を翻し、朝靄に包まれた道を広場の方へと歩いていく。

元より彼以外の人影はなく、数分もすれば見慣れた噴水が見えてきた。

「ふう……」

ここまで来たことに、おかしなことだがホツとする。

誰も咎めなどしないというのに、無駄に怯えている自分に苦笑しながら更に足を進めて、ついに教会へとたどり着いた。

「……………」

村の同年代の少年達より頭一つ高い体がかがめ、そうつと窓から中を覗く。

すると、キリトが教会に住んでいる孤児たち……三年前の流行病で親を亡くした子ら……にまわりつかれていた。

元氣一杯といった様子の子供達は、客人が物珍しいのか、困ったように笑うキリトにじゃれついている。

(どうやら平気みたいだな。あいつらしいや)

ん？ とまたその考えに首を傾げた。

なぜ、大丈夫だと自分は断定したのだろう。記憶のないキリトのことを、深く知るわけでもないのに。

だが、なんとなくキリトなら溶け込めていそうだなと思ったのだ。理由は皆目見当もつかない。

昨日から何度か続くこの矛盾した思考に、思わず首を傾げていると……ふと気配を感じた。

「……………」

不思議に思っただけ顔を上げると……パツチリと窓際に立った少女と目がかち合った。

「あ」

間拔けな声がルークの口から零れた。

これ以上ないほどの勢いで振り返って、自分が肩に下げた剣を見る。

その柄の先端が思いつきり、窓の向こう側から見える場所に突出していた。

それからもう一度窓の方を見て、心底驚いたという顔でこちらを見下ろす少女に、焦燥感が心を支配する。

「やべ……!」

バレないようにとは一体なんだったのか。

顔を青くしたルークは即座に立ち上がり、逃走を図った。

「待つて! ルーク!」

しかし、背後で勢いよく開いた教会の扉の音と、自分を呼ぶ声によって失敗に終わる。

ピタリ、とルークの足が止まった。

そのまま逃げればいいのに、どうしてもこれ以上足が進まない。

「ねえ、ルークでしょ?」

か細い、弱々しく手を伸ばすような声。

久しぶりに自分に向けられた彼女の言葉に、ルークはまた自分がしくじったことを自覚した。

見つかった以上は万事休す。仕方がなく、ルークは振り返って背後の人物と向き合う。

そこに立っていたのは、まだ幼い一人の少女。歳は十二ほどで、ルークやユージオとはかなり離れている。

セルカ・ツールベルク。村長ガフストの次女であり……アリスの妹。

白い襟のついた修道服を着て、明るい茶色の髪を長く背中に垂らしており、同じ色の瞳はこちらを不安げに見ていた。

「……………ひ、久しぶりだな、セルカ」

名前を呼んだ途端に、酷く罪悪感に襲われた。

お前に彼女と話す権利は、接する資格はないと、心のどこかで誰かが囁きかけてくる。「うん。珍しいわね、ルークが……………教会に来るなんて」

「そう、だな。ちよつとキリトのことが気になつてさ」

「……………そう、なのね」

ルークはセルカの瞳を見られない。

それどころか、地面を見るばかりでセルカの今浮かべている表情すら見る事ができなかつた。

それはきつとルークに……………彼女から、そしてユージオからアリスを奪ってしまった負い目があるから。

「……………あいつ、なんか変なことしたか？」

「ううん、全然。確かに記憶がないみたいだけど、子供たちの相手もしてくれるし。そんなに悪い人じゃないみたい」

「そりやそう、だよな」

また無意識に肯定したことすら気にならないくらいに、ルークはここにいるのが心苦しかった。

今すぐここから逃げ出したい。いいや、逃げ出してはいけない。相反する感情がルークを雁字搦めにする。

「キリトのやつ、今日はどうするって？」

「さあ、聞いてないけど。ルークは何か聞いている？」

「いや……多分、ユージオの手伝いをすると思う」

「……そう。ユージオの、ね」

より一層空気が重くなったことをルークは感じた。

これ以上は良くない。自分にとつても、セルカにとつても。

そう思ったルークは、石像のようになった足を無理やり前へ動かした。

「俺、もう行くよ。セルカもあんまり勉強に根を詰め過ぎないようにな」

「あ、待って！」

今度こそ制止の声を無視して、ルークは強く肩にかけた革紐を握りしめて走り出す。

「はあつ、はあつ、はあつ！」

自分の背中を追いかけてくるような罪悪感から逃れるように、走って走って走り続け

た。

やがて、南門にたどり着くといつも寄りかかっている壁に背中を預け、ズルズルとそのまま崩れ落ちる。

「ああ、ちくしょう……なんで俺は、あんな風に」

両手で顔を覆い隠し、先ほどの自分の態度を呪う。

セルカは終始、こちらを伺うような顔をしていた。

何かを案じるような目線と、慎重な口調だった。

「くそっ、昔は違ったのに……」

こんなことならば、キリトの様子を見に教会になどいかなければよかった。

ああ、こんなとき昔の自分ならどうするだろう。

アリスと、ユージオと……そしてあともう一人の誰かの兄貴分だった頃の自分なら、

どうできただろう。

あの日。アリスが咎人として整合騎士に連れて行かれた日。

助けようとしたユージオを押しえつけ、彼女が連れて行かれることを黙認した。

そこには村人や、彼女たちの両親と一緒にセルカもいた。

幼かった彼女にとって、姉がどこかへ連れ攫われてしまう光景はどれほどの恐怖だろう。

大好きだった姉を、みんないない者のように扱うのは、どれだけ辛いだろう。

親にさえ天才だった姉と比べられ、姉への思いと葛藤に一人で悩むのは……どれだけ、苦しいのだろう。

「俺が、あの時違う行動を取っていれば何かが変わったのか……？」

そうすればセルカと、もつとちやんと話ができていたのか。

キリトが現れるまで一切感情を表に出さなかったユージオは、もつと笑っていられたのか。

何より……いつかの為、なんて曖昧な理由で剣を振るう滑稽な自分は、どうだったのだろうか。

「なんで、俺はこんなに……」

弱いんだ。

その一言が、朝靄の中に消えていった。

覚悟

結局、一日中ルークの頭はもやもやとしたままだった。

それでもどうにか仕事をしたのは、次期衛士長と目されている所以たる生来の生真面目さか。

あるいは職務を全うすることで、自己嫌悪や後悔を無理やり押さえつけようとしたのかもしれない。

村人たちや、キリトとユージオにも随分と心配された。

普段からしつかりしているルークが見るからに落ち込んでいるのだ、案じるのも無理はない。

ああでも、セルカにあんな態度を取った自分にそれを受け取る資格があるのか。

そんなことさえも、ルークは思い悩んで――

「――く、ルークってば」

「ん、お、おおう？」

肩を揺すられ、ふと我に帰る。

すると、目の前いっぱい広がっていた青空はいつのまにか茜色へと変わり、風は生暖かい。

気がつけば、夕方になっていたようだ。時間の経過さえ忘れるほどに考えに没頭していたらしい。

自分呼んだものを見ると、そこには不安げな目をしたユージオ。

後ろからは同じ顔のキリトがひよつこりと顔を出している。どうやら森から帰ってきたらしい。

「おお、二人とも。今日もご苦労さん」

「ルークこそ。ねえ、本当に大丈夫？ 朝から何だかおかしいよ？」

「あー……」

不思議そうに聞いてくるユージオに、ルークは視線を右往左往させる。

しばらくしてキリトと目が合うと、彼はバツが悪そうに視線を逸らした。

朝ここを通った時もそのような反応だったが、おそらくセルカの後ろからあの時見ていたに違いない。

「……ん、今日は少し疲れてるかもな」

「そう？ ルークは頑張り過ぎるところがあるから、気をつけなよ？」

「ハハ、毎日あんな化け物を相手してるお前にや劣るさ」
「わっ」

クシャクシャとユージオの頭を撫で直し、自分の態度を曖昧にごまかす。
見れば、もう彼ら以外に人影はない。ルークは門の脇に立てかけていた剣に手を伸ばした。

——イイン。

「……っ」

一瞬、剣が震えたように見えた。

瞬きひとつした後には、そこには昼に置いた時と変わらず剣が静かに鎮座している。
小さな耳鳴りがしたような気がしたが、幻聴だろうか。

不思議に思いながらも途中で止めていた手で取って背負うと、二人と共に村に入る。
「で、今日の仕事はどうだ？」

「昨日よりもキリトがさらに上手くなったから、かなり楽に終わったよ。こいつ飲み込みが早いんだ」

「そんなでもないさ。あれを何年も続けているユージオには劣るよ」

昨日もそうしていたように、二人と会話をしながら歩く。

そうしていると、なんだか心が落ち着く気がした。ただの錯覚かもしれないが。

「にしても疲れたなあ……早く風呂に入りたいぜ」

「なんだ、どつか痛めたのか？ ユージオもいつもより疲れた顔してるけど」

腕を回しながら顔を洗らせるキリトを見て、ルークはそう尋ねる。

するとユージオと二人で顔を見合わせ、ニヤリと笑うと急にこちらに接近してきた。

そうすると二人して首の後ろに腕を回してきて、その拍子に体の重心が前に傾いてたたらを踏む。

「つとと、なんだよ二人して？」

「なあルーク。お前、今から聞くことを秘密にできるか？」

「これは僕とキリトだけの秘密なんだ。口外しないと誓ってくれるかい？」

「おいおい、なんだってんだ。何かヤバいことなのか？」

二人はただニヤリと笑うだけで、ルークの質問には答えない。

キリトはともかく、ユージオまでもがこんな顔をするのは珍しいことだった。

それに言いようのない不安と……同時に、彼らが抱える秘密とやらの興味が湧いてくる。

「……わかったわかった、秘密にする。ソルスに誓ってもいい」

「それでこそだ……実はな、俺たちギガスシダーをすぐにでも切り倒す画期的な方法を思いついたんだ」

「——画期的な方法？」

ドクン、と心臓が脈打つのがわかった。

三百年代々の刻み手が挑み続けたギガスシダーを倒せる方法。

つまり、ユージオが天職から解放され、この村から外に出ることを許されるのだ。

それは、この六年ずつと押さえ込んできた「アリスを央都に探しに行く」という願いが実現する可能性を意味する。

「……それで？ その画期的な方法ってやつはなんなんだ？」

「ルークも知ってるだろう？ 北の洞窟から持ってきた、『青薔薇の剣』を」

「それは……」

知っているに決まっている。

何故ならそれは、自分が憧れるルーリッド村の初代衛士長ベルクーリのおとぎ話に登場する宝であり。

そして、ユージオたちと共に行った洞窟で見つけ、一昨年頃にユージオと共に自分が森の小屋まで運んできたのだから。

自分の持つ剣と同等か、それ以上に重いあれを、休息日の度にユージオと二人で数キ

ロルずつ運んだのが懐かしい。

「あの《神器》は、ギガスシダーと同じくらいの天命値と、そしてあの化け物杉の天命を大きく削る攻撃力を持つてる」

「——まさかお前ら、あれを使ってギガスシダーを切り倒そうってのか？」

キリトも、ユージオでさえもこくりと力強く頷いた。

決して不可能な話ではない。

あれならば何十万とあるギガスシダーの天命を削り切ることもできるだろう。

歴代の刻み手のように、《竜骨の斧》で何十セルチかを削って一生を終えるよりずっといい。

だが……

「ユージオ、お前……あれを出したのか？」

「……うん。なんだか不思議なんだけどね、キリトになら見せていい気がしたんだ」

「そう、か」

あの《青薔薇の剣》は、ある意味アリスの件に関係しているともいえる。

だからこそ、小屋まで持ってきたままにこの二年間ずっと触れもしなかった。

なのに。ユージオはそれを引っ張り出して、キリトと共にギガスシダーを倒そうと試みたのだ。

まるで、ようやくアリスを探しに行く手立てを見つけたと言うように。

「……………」

「それで、ルークはどう思う？」

「使うのはかなり難しいんだが、ちゃんと扱い方が整えば使えないことはないんだ」

「……ああ、いいと思うぜ。そうしたらユージオ、お前やガリツタ爺さん、歴代の刻み手の悲願が叶うな」

「そうだね。森を開拓することもできるよ」

それに、俺たちの後悔をやり直す機会も。

心の中でそう付け加えるルークだった。

「それじゃあ、僕はここで」

「ああ、明日もよろしく頼むよユージオ」

「うん。ルークも、また明日」

「おう」

広場の手前で二人と別れ、ルークは家路を急ぐ。

その間、セルカのことに加えて新たに増えた懸念にルークは終始頭を悩ませ、それは家に帰ってからも続いた。

「ルー君？ どうしたの？」

「……え？」

そして夕食時、ついにセフィアにそう尋ねられる。

ふとまた思考の海に沈んでいた意識を引き上げると、曖昧だった焦点が定かになっていく。

押し花に彩られ、ランプに照らされた食卓。そして自分の目の前には、心配そうな母の顔がある。

「俺、なんか変な顔してたか？」

「ずっと思い悩んでるような、そんな顔してたわ。何があったのなら、お母さんに相談してちょうだい？」

母親とはかくも目ざといものか。いいや、ルークだけが自分では普段通りのつもりだったのだろう。

相談して！ と周りに花が飛んでいそうな笑顔を浮かべるセフィアに、ルークは苦笑しながら思い切って口を開く。

「……今日、教会に行っただ」

「ルー君が教会に？ それってつまり……」

「ああ。セルカに会った……いや、あれは会ったとは言えないな」

ただ、見つかつて、怯えて、逃げた。

目も合わせられず、ろくに言葉も交わず、ただただ彼女に恨んだ目を向けられるのを恐れていただけ。

本来ならばそれと向き合うべきなのだろうが……ルークには、それだけの勇気がなかった。

「何も言えなかった。昔のことを謝ることもできなかった。ごめんって、アリスは俺のせいで連れて行かれたんだって、そうやって……っ！」

「落ち着いて、ルーク」

「あ……」

握り締めた拳に、ルークをしつかりと名前と呼んだセフィアの手が置かれる。

白くほっそりとした、けれどたくましいその手は、震えるルークの拳を優しく包み込んだ。

「あなたは悪くない。あの時のことは誰も悪くないの。何かが少しだけずれちゃって、間違っちゃっただけ」

とても優しく、まるでそつと心までもそうするように、力んだ拳を撫でられる。

その手の暖かさに、少しずつ拳は緩んでいき……ふっ、とルークは息を吐き出した。

「……ありがと母さん。でも、結局そんなのはただの慰めだ」

「そうかもしれないわ。でも……そう思えるルークは強い子ね」

にこりと笑いかけるセフィアに、ルークは本当に敵わないと思う。

ルークは物心つく頃から父親がいない故に、ずっとセフィアと二人で支え合ってきた。

だが、支えられてきたことの方がはるかに多いだろう。

六年前だって、後悔で塞ぎ込んだルークを励ましてくれたのはセフィアだ。

そんな、たった一人の愛する母親ならば……今抱えているこの気持ちも受け止めてくれるかもしれない。

「……ユージオが、さ」

「ユージオ君？ どうかしたの？」

「あいつ、もしかしたらこの村を出るかもしれない。それで……」

アリスを、探しに行くかもしれない。

「……そうなのね」

「……………」

ルークのその一言に、セフィアはさほど驚いたは反応は示さなかった。

それをいいことに、というのもおかしなことだが、ルークは立て続けに言葉を並べていく。

「あいつは、前に進もうとしている。後悔を後悔のまま終わらせないで、望みを果たそうとしている」

セルカとさえ向き合えない自分と違って、ユージオは確かに一歩踏み出そうとしているのだ。

それが羨ましくて……何よりも誇らしい。

六年前で心の時間が止まり、そこから動けない自分がたまらなく恨めしい。

「ルークは、どうしたいの?」

「……行きたいよ。あいつらと一緒に、アリスを探しに行きたい。あの時何もできなくてごめんって、見過ごしてごめんって、そう言いたい」

頭の中に、自分とユージオ、そしてキルトの三人がアリスと再会する様が描かれる。

その夢に焦がれて、恐れて、諦めて、俯いた。

彼女の存在を奪う側に加担した自分にはそれは許されないと、母や村を理由にして逃

げた。

逃げて、逃げて、逃げ続けて……もう、何が本当に望んでいることなのかもわからな
い。

「なあ母さん、俺はどうすればいいんだ……？」

ほんの少しでもいい、答えを出すための言葉が欲しい。

そう思いを込めて、母を見ると……彼女は微笑んでいた。

「これも血筋なのね」

「え……？」

「ねえ、ルーク。お父さんのこと……聞きたい？」

父親。

顔も見たことのない、これまで十七年間秘されてきた、その話。

「なんで今、父さんのことを……」

「あの人のことが、きつとあなたのためになる。そう思うからよ」

セフィアの顔は、これまでにないほど真剣そのものだった。

どれだけ聞いても話してくれなかった父のことを、母が本気で話そうとしている。

その覚悟を感じ、ルークも自然と顔を引き締めた。

「聞かせてくれ、父さんのことを」

「いいわ……あの人はね、この村の近くに倒れていたところを私が見つけたの」
「そうだったのか？」

この村の住人でないことは知っていたが、よもや行き倒れていたとは。話の発端から驚くルークに、セフィアは懐かしむような口調で語る。

「あの人は騎士だった。誰かから逃げてきたのか酷い傷で、あと少し見つけるのが遅かったら死んでいたわ」

「騎士……じゃあもしかして、央都の貴族か？」

「わからない。あの人は記憶喪失だと言っていた。でも、自分が騎士であることだけは決して忘れないと、それだけは信じていた」

傷が癒えた父は、その後様々な所で村に貢献したという。

村人の頭を悩ませていた黒毛狼の群れを一人で退治したり、当時のギガスシダーの刻み手の手伝いをしたこともあるという。

寡黙だが誠実。そんな父を、皆慕っていたらしい。

「そんなお父さんに私は惹かれてた。とてもわかり辛かったけれど、あの人も私のことを……でも、あの人には何か使命があったの」

「父さんがそう言ったのか？」

セフィアはかぶりを横に振った。

「お父さんは、それを口には出さなかった。けれど時折、どこか遠くを見つめて瞳に強い光を宿したわ」

「……母さんは、それを知って父さんにどうしたの？」

「何も」

彼女の答えは簡潔だった。

その口調に後悔はなく、微笑む顔には悔やんだ色などどこにもない。

「でも、そうね。私はちょうど今、あなたにこうしているように手を包んで、一言だけあの人に言ったわ」

「……それは？」

問うルークに、セフィアは迷いのない声で。

「『何かやりたいことがあるのね』、と」

そう言い切ったのだ。

「するとお父さんは、ちょうど今のあなたのように迷った顔をした。でも、最終的には頷いたわ」

「……………」

「その晩は一緒に過ごして、それからあの人は旅立った。それから一年後、あなたが生まれたのよ」

なんとなく、そこであれやこれやあったのだろうとルークは察する。

とはいえ、この雰囲気であるので、話の続きへと興味を移すことで飲み込んだ。

「使命を果たしたのか、今もどこかで彷徨っているのか……それを私に知る術はない。でも、どうしてもやる必要があるって、必ず果たさなければならぬって……そう言ったあの人の言葉を、この十八年間疑ったことは一度もないわ」

「母さんは……強いな」

「そう信じただけなのかもね……でもね、だからこそ思ったの。ずっと頑張ってきたルークが望みを果たせないなんて、そんなはずがないって」

拳を握る手に力がこもる。

セフィアの表情は変わらずに真剣で、ルークの迷いなど断ち切るほどの力があつた。

思わず息を飲むルークの手にさらにもう一方の手を重ねて、真っ直ぐにセフィアはルークの目を見つめる。

「ルーク。お母さんに聞かせて?」

あなたは どうしたいの?

「……俺、は」

絞り出すような声だった。

「俺、はっ……!」

何かを堪えるような声だった。

「俺は……アリスに、もう一度会いたい」

そして、何かを固く決めた声だった。

「セルカに謝りたい。ユージオと一緒に望みを叶えたい……ずっと剣を振るばかりで満足するのは、もう嫌だ」

「うん、そうね。そういう真っ直ぐな方がルークに合ってるわ」
「俺が、その思いを抱いてもいいのかな？」

もう一度問うルークに、セフィアは身を乗り出すとそつと彼を抱きしめる。
久しぶりの母の抱擁は、子供の頃と変わらずにとても暖かい。

「覚えていてね。たとえば他の誰が、整合騎士様が否定しても。お母さんはルークの味方

よ
」

「……そっか。なら、頑張ってみようかな」

「うん、頑張れ！ ルー君はできる子だから！」

そう言ってくれる母のことを、ルークは改めて心から愛おしく感じた。

再び洞窟へ

何かを激しく叩く音がする。

「んん……」

ルークは布団の中でその音を遠ざけるように寝返りを打った。

しかし、断続的に響いてくるその音が止む気配はない。

「んあ……」

仕方がなく、ルークは浅い眠りの底に引っ付いていた自分の意識を浮上させた。

上半身を持ち上げ、寝ぼけ眼を擦る。そうすると少しずつ手が覚めてきて、五感が覚醒し始めた。

それによると、どうやらこの音は玄関の方からするらしい。せつかくの休日誰が何の用だろうか。

「ふあ……つたく、朝からなんだってんだ」

髪を縛ることも忘れ、大きく口を開けてあくびをしながら布団から這い出る。

ポリポリと脇腹をかきながら部屋から出て、ややおぼつかない足取りで玄関先まで行く。扉の取手を引いた。

「はいはい、なんですか……」

「ルークっ！」

「どわっ!?!」

完全に扉が開いた瞬間、二つの声が重なってルークの名を至近距離で叫ぶ。

きーんと耳の奥に響く耳鳴りに驚く間も無く、目と鼻の先にある二人の少年の顔を捉えた。

「ゆ、ユージオ？ それにキリトも。こんな朝っぱらからどうした？」

「大変なんだルーク！ 君も来てくれ！」

「一刻を争うんだ！」

要領を得ない言葉を、寝起きのルークの頭はうまく受け付けない。

しかし、鬼気迫る二人の表情と剣呑な光を宿す瞳に、ただ事ではないことだけは理解した。

とりあえず、両手をこちらに傾いた二人の肩に置き、体を押し戻す。それからやっとなら開いた。

「何があつた？ 昼飯のパンが買えなかつたなんていうチャチな事態じゃあなさそうだな？」

「それが……今朝から、セルカがないんだ」

「——なんだって?」

どういふことだ、と寝起きですぐに沸騰した感情で激昂しそうになったのを寸前で思いとどまる。

その代わりに一発で残っていた眠気は払拭された。今度こそ真剣な顔で二人の話を詳しく聞く。

「今朝俺が起きたら、シスター・アザリヤにセルカの姿がない、って言われたんだ」

「それだけなら村のどこかにいるんじゃないのか?」

「それが昨日、キリトが北の洞窟のことを話したみたいで……」

ユージオの補足に、キリトが罪悪感を感じたように俯いて唇を噛む。

その反応でわざとではないとひとまず確信して、ユージオに視線で続きを促す。

「実家にはこの二年帰っていないし、教会の食糧とかの買い出しをするにも休息日は村の商店もお休みだ」

「そしてキリトが洞窟のことを話したタイミングで、か……確かに怪しいな」

聞けば、シスター・アザリヤは昼までに戻らないようならば村役場に相談するという。セルカはあの年でしっかりとした子だ。シスターに無言で姿を消すなどあり得ない、それは長らく避けていたルークにもわかる。

だが。

もしも昨日の自分の行動と、キリトの話が彼女にとつてのある種の覚悟を決めさせてしまったのだとしたら。

セルカがアリスに会いにくくために、彼女と同じように……ダークテリトリーに踏み込もうとしているのならば。

「……行くぞ」

「え……？」

「行くってどこに……」

「セルカを探しに行くに決まってるだろ？ だからお前らも俺のところに来たんだろう？」

そう聞くと、二人は頷いた。

可能性は低いが、もしこの家にいるのならばそれで問題は解決だ。

そうでないのならば、誰より頼りになる剣士であるルークを頼りに。そのユージオの言葉に内心嬉しくなった。

「事情はわかった。ここで待ってろ、三十秒で支度してくる」

「えっ」

何故か驚くキリトとユージオに踵を返し、ルークは自分の部屋へとんぼ返りした。寝巻きから手頃な服に着替え、一応衛士用の革のベストやブーツなどを装着しておく。

そして腰に剣を履き、壁にかかった白剣へと目を向けた。

「……頼む、見守ってくれ」

——イイン。

両手でしっかりと剣を掴み取り、素早く皮紐を右肩から左脇に通して体に固定する。最後に長い後ろ髪を縛り、自分に気合を入れるために頬を叩くと玄関へと戻った。

「ルー君？」

しかし、あと三步で二人の前にたどり着くという瞬間、頭上から声を投げかけられた。ピタリと足を止める。

それから後ろを見ると……階段の途中から、セフィアが心配そうに自分や二人のことを見ていた。

「母さん……」

「こんな早くにどうしたの？ それにそんな格好……今日は休日だよ？」

そう言いつつも、彼女もなんとなく三人が何かをしようとしているのがわかっているのだろう。

心の底から不安といった顔をする母に、ルークは体ごと振り返ると、しっかりと彼女の目を見上げた。

「母さん」

「何？」

「——行つてきます」

いつもの挨拶。

なんの変哲もない一言。この六年間ずっと繰り返されてきた、何気ない言葉。

だが、そこに込められた気持ちはどんなものよりも重くて。

「ええ、行つてらっしゃい。帰つてきたら、今日はお馳走にしましょうね！」

ならば。

これほど強い目をするようになった息子を笑顔で見送らなければ、母としての誇りが

廢る。

怖いだらう。心配だらう。それでも氣丈に笑いかけてくれる母に、ルークはもう一度力強く頷いた。

「行くぞ、二人とも！」

「おう！」

「うん！」

二人を伴い、家を飛び出す。

まばらながらに人影が見える村の道を、怪しまれない程度の速度で北へと早歩きで向かった。

人通りがなくなると石畳の下り坂を転がるように下り、橋のたもとにたどり着くと衛士の目を盗んで外に出る。

麦畑のある南側とは異なり、村の北側には森が広がっている。

ルーリッド村を囲む水路につながる川が南北に向けて森を突き抜けて伸び、その岸边は小道となっている。

「ちよつと止まれ」

その道に出て少ししたところで、ルークは二人を呼び止める。

それからしやがみ込んで、少し大きな雑草の株を確かめると素早く印を切つて《窓》を

呼び出す。

「天命が減ってるな。減り具合から足の主は子供……セルカはここを通つたみたいだ」
「急ごう、かなり時間が経ってるはずだ」

雑草を踏んだ靴の向きから方向を割り出し、その後を追うように走り出す。

もう人目を気にする必要はなく、全力疾走だ。体力の劣る二人にそれなりに合わせて、ではあるが。

「なあ二人とも、聞きたいことがあるんだが……もしもセルカがダークテリトリーに入ったら、すぐに整合騎士に連れて行かれるのか？」

「いや、それはないと思う。騎士が来るとしたら明日の朝だ」

「じゃあ、それまでは時間があるわけだな」

「……キリト、お前何を考えてる？」

思わず振り返ると、キリトは不適に笑った。

「そうしたら、俺がセルカを連れて逃げるよ。元はといえば俺が口を滑らせたのが原因だ」

「キリト……」

驚いたユージオはキリトの顔を数秒凝視して、それから首を横に振った。

「……そんなことできつこない。彼女には天職があるんだよ？　もし整合騎士が来たと

しても君についていくわけがない。そもそも、ダークテリトリーに入るだなんて重大な禁忌、セルカが犯すはずないんだ」

「でも、アリスにはできた」

痛いところを突かれたような気分がルークの胸に広がった。

ユージオも同じようで、ぎゅつと唇を噛んでからもう一度大きく首を横に振る。

「……アリスは、特別だったんだ。僕とも、ルークとも、セルカとも。他の村人たちとも違った」

そう、彼女は特別だった。

誰よりもしつかりしていて、それでいて好奇心が強く……自分たちの中心にいたのは間違いなく彼女で。

そんな可愛い妹分を救えなかったことが、ユージオの勇気を妨げてしまったことが、ルークをずっと苦しめてきた。

「……そうだなあ。そしたら俺も一緒に逃げるかな」

「ルーク!?!」

「ルーク、お前……」

「原因があるっていうなら、昨日酷い態度を取っちまった俺も同じさ。もし追手の整合騎士が来ても、剣の腕なら負けるつもりはないぜ?」

ニツと笑った自分の顔は、不思議と昔の自分に近い気がした。キリトは最初こそ驚いていたものの、同じように笑って頷く。そんな二人にユージオは戸惑いっぱなしだった。

それから、一時間ほど走っただろうか。

道行き先に森の出口が見えて、一気に数百メルを駆け抜ける。

その瞬間、徐々に途絶えていた草木が完全に消え——代わりに垂直にそそり立つような岩山が現れた。

少々荒くなった息を整えながら、自分たちの前に立ちはだかるそれを見上げる。

ほんの数メートル後ろとはまるで違う、白い雪に覆われた、世界を隔てる壁のようだ。

「これが果ての山脈……？ 嘘だろ、だって……」

「うん、僕たちも初めて来たときは驚いたよ」

「——こんなにも、世界の果てがすぐそこにあるだなんてな」

まるで《あちら》と《こちら》を分けている、と自ら主張しているようなそれ。

二年前に見た時から変わらない連なる山脈に若干気圧されるが、そんな時間さえも今

は惜しい。

「それで、肝心の洞窟は……」

「こつちだ。俺が先頭で入る。ユージオ、明かりを頼む」

「わかった」

遡るようにやってきた小川が流れ出す場所……岩肌にポツカリと口を開けた洞窟に行く。

かなりの高さで幅がある入り口の、勢いよく流れる小川の左側にある岩棚に移動し、真つ暗な奥を覗き込む。

「灯りは……」

「これだよキリト」

道中、いつの間にか取っていた草穂を顔の前に掲げて見せるユージオ。

首をかしげるキリトの前で、ユージオは草穂に意識を集中させると式句を唱えた。

「システム・コール！ リット・スモール・ロッド！」

「なっ!？」

何やら驚くキリトだが、ユージオの神聖術は効果を発揮し、草穂に小さな光が宿る。

それを頼りに、腰から剣を引き抜いたルークを先頭にして、一寸先は暗闇の洞窟に侵入した。

「なあユージオ、さっきのは……」

「ん？ 神聖術がどうかしたの？ ごく簡単なものだけど……それも覚えてないかい？」

「あ、ああ。システムとか、意味を理解してるのか？」

「意味は……ないよ。神様をお願いするための式句だから」

「なるほど……」

（一種の呪文的な扱ってことか？）

何やら後ろで話し合っている二人の声を意識の片隅に置き、ルークは慎重に進んでいった。

洞窟内は肌寒く、すぐ隣には落ちたら凍え死ぬほどの冷たさを持つ小川がさあさあと流れている。

しかし、それよりもずっと冷たい危機感がルークの心を支配していた。

（もし、アリスの時のようにセルカまで失ったら……俺はもう二度と、覚悟を持つことはできない）

セフィアの言葉でようやく踏ん切りがついたのも束の間、我ながらつくづくついていないとルークは思う。

それはユージオだって同じだろう。

絶対に、セルカを連れて帰らなくてはいけない。

「つ、これは……」

くまなく壁や天井、足元に至るまでつぶさに観察していたルークはあるものを見つける。

しやがんでユージオに照らしてもらおうと、それは四方に向けて放射線状にひび割れた薄氷だった。

「……これで確定だな。セルカがここにいる」

「くつ、やつぱりか……!」

「こんなところに何時間もいたら凍え死んじゃうよ、早く見つけなくちゃ……!」

きやああああ……

顔を洩らせる三人を嘲笑うように、洞窟の奥から悲鳴が聞こえた。

「バツ！」と素早く顔を上げた三人は、互いに目線を合わせると、同時に奥へ走り出した。

「くそッ、セルカ……！」

「見えた、あそこだ……！」

数十メル先に、何年も前の記憶の中に埋もれたこの道の終わりが見えた。

より一層強い冷気が風に乗って漂ってくるこの先がどうなっているのか、二人はよく知っている。

自然と前へ前へと踏み出す足は速くなり、そして出口に辿り着いた時。

そこにあつた光景は……

勇気を吠えろ

徐々に目的地に近づくほど、ルークは言い知れぬ不安を感じた。

それはセルカがまだ無事なのかという思いか、それともこの先に行くことを心が拒んでいるのか。

その気持ちを抑えながら走り続けていると、ふと出口のすぐそばの岩壁にオレンジの光が揺れていることに気がついた。

それに疑問を感じたのもつかの間、ついにドーム状のその空間に三人は飛び込んだ。

「っ、隠れるー！」

その瞬間見えたものに、とつさに後ろの二人に呼びかけて身を隠す。

やや大きめの水晶の裏に隠れた三人は、そっと顔を出してドームの中の様子を伺った。

あいも変わらず広いこの空間は、床一面が全て分厚い氷と、そこに咲くように屹立する水晶で覆われている。

そして、大きな前の牙の一方が失われた白竜の遺骨と、中央に唯一大きく割れた池のようなものがある。

先ほど岩壁に反射していた光は、その池のすぐそばに立っている二つの篝火だった。黒い鉄籠の中でばちばちと燃える薪は薄暗い空間を照らしている。

「あれは……」

が、三人の目線はそこにはなかった。

数は三十ほどだろうか。二つの篝火のすぐ側、それを取り巻くように座っている複数の者達。

彼らは遠目から見て、立っている個体でもルークたちの胸ほどもない背丈だった。

しかし、ただの獣ではない。

横幅のある体躯や鋭い鉤爪のついた異様に長い腕、くすんだ灰緑色の肌。

耳の周りを除いて禿げ上がった頭に尖った鼻、突き出た額の下に収まるギョロリとした二つの目。

革製の鎧や骨や毛皮で作られた腰巻、手に持った鋳物らしきマチエーテ蛮刀が彼らが知性を持っていることを伺わせる。

「あれって……」

「——ゴブリン」

「本当にいたのか……!」

果ての山脈にゴブリンの集団が出た、と言う噂は村で聞いたことがあるが、まさか真実だったとは。

いかな衛士であるルークとて、初めて見るおとぎ話の中の怪物に、少しだけ体が震える。

だが、それも一瞬のこと。ここへ来た目的を思い出せば、今更怖気付いていられない。「それよりも、セルカは——」

右後ろにいたユージオが、そう言つて空間の中を見渡す。

つられて残りの二人も探して……ほぼ同時に、ゴ布林たちの側にある荷台に乗せられた少女を見つけた。

体を荒縄で縛られ、気絶しているようだが——あの修道服と髪色は、間違いなくセルカである、

「セルカ!」

「ッ!?!」

「おいつ、ユージオッ!?!」

見つけたまでは幸い。しかし、思わず立ち上がつてユージオが叫んでしまったことが不幸だった。

案の定、ゴブリンたちはこちらに気がついて、濁った目に様々な感情を浮かべる。

不審、驚き、喜び——そして飢え。

ありとあらゆる悪意を詰め込んだのではないかと言うその瞳に、ルークはまた体が強張った。

キリトはこの世界に住人人工知能の原理、それに基づいた場合の、彼らにも存在する本物の悪意に驚愕する。

事の発端であるユーゾオは、やってしまったと言う感情とゴブリンへの恐怖で立ち竦んでいた。

「おい見ろや、また白イウムのガキが三匹も転がり込んできたぜえ！」

「どうする？ こいつらも捕まえるかあ？」

そして、耳障りな声で彼らは喋った。

醜悪な見た目にふさわしい声でそう言ったゴブリンに同調するように、キイキイと他の連中も騒ぎ立てる。

座っていたゴブリンは武器を手に取り、既にそうしていたものは新たな獲物に更にかましく鳴いた。

「ぐらあつー!」

突如、洞窟の奥から二つの大きな雄叫びが響く。

それを聞いた途端に、ゴブリンたちは騒ぐのをやめた。そうするとバラバラと左右に分かれていく。

生まれた道を歩いてきたのは、二体のゴブリン。

おそらく隊長なのだろう二体はどちらも背丈が高く、ルークたちより少し上ほどこか。

一体は筋骨隆々のゴブリン。鱗鎧に身を包み、腰には大振りのマチエーテ。頭には羽飾りをつけている。

もう一体は、片割れとは対極に極限まで絞りきった体だった。膝ほどまである長腕にはそれぞれ一本ずつ武器が握られている。

「男の白イウムなんざ、連れて帰っても売れやしねえ」

「面倒だ、ここで殺して肉にしてしまおう」

野太い声で片割れが言えば、小さなゴブリンたちよりさらに甲高い声でもう一方が同調した。

そのどちらも、赤い瞳の中に残虐と言えるほどの悪意と、この部屋よりもさらに冷え

切った知性がある。

「あ……」

「くっ……！」

ユージオの口からかすれた声が漏れる。明らかに強そうな二体と、多勢に無勢な数のゴブリンにキリトは冷や汗を流した。

そんな二人の腕をぐいと引つ張り、ルークはもう一度物陰に引き込むと、そつと彼らの耳元に顔を寄せる。

「いいか、よく聞け。俺が雑魚を何匹かやる。その隙にお前らはあの篝火を倒して、あそこから剣を取れ」

篝火の近く、様々な武器が散乱しているところを指差すルーク。

既に戦う覚悟を決めたルークの横顔に呆気にとられながらも、キリトはグツと顔を引き締めた。

「……わかった。そうしたら俺はあつちのデカブツをやる」

「頼んだ。俺はあつちのヒョロ長いのを相手するから、その間ユージオは他の奴らを近づけさせないようにしてくれるか？」

「……僕、剣で戦ったことなんてないよ」

不安そうに瞳を揺らすユージオに、ルークは後悔した。

もしも自分が自らの世界に閉じこもらず、昔のように剣を教えていたらと思うが、今はそんな場合ではない。

かける言葉をうまく見つけられず、ルークはユージオの両方を掴むと、はつきりとした口調で言った。

「お前ならできる。斧を使っている時を思い出せ、あいつらを木だと思えばいい」

「そ、そんな無茶な……!」

「ルーク、時間がないぞ!」

「ああ……ユージオ。この光、無くすなよ」

腰に挿している草穂を失わないように指示をしながら、ルークは振り返った。

もうすぐそこまでゴブリンたちは迫っている。ここ数年培ってきた鍛錬の成果を見せる時だ。

「ふうー……」

瞑目して深く息を吸い、そして吐く。

次に目を開けた時——ルークの目には、もう純粋な戦意のみが宿っていた。

「はあああああつ!」

雄叫びをあげながら、物陰から一直線に飛び出していく。

全力で疾走し、驚きと疑念に満ちた目をするゴブリンたち目掛けて突撃した。

「なんだこの白イウム、バカじゃねえのか!？」

「やっちまえ!」

「ふっ!」

ゴブリンたちが武器を振り上げるより早く、ルークの右手は柄を握る。

抜刀、からの大きな踏み込みによる横薙ぎによって、ゴブリンの首を一瞬にて二つ跳ね飛ばした。

ドサリ、と後ろで重いものが倒れる。遅れて首が落ち、最後に床の氷に武器が当たってけたたましい音を発した。

「……………弱いな」

剣を振り切ったルークの心に、思ったよりも恐怖はない。

同じ言葉を話している故に迷いが生じるかと思ったが、一切の躊躇はなかった。

(これなら…………いける!)

怖気付いていない、そう確信したルークは唾然としているゴブリンたちに再び疾走した。

「なんだこいつ、強いぞ!」

「はあっ!」

さらに二匹のゴブリンを難なく斬り伏せたことで、ルークは二人のための道を開く。

「今だ!」

「うおおおおっ!!」

ルークの両脇を通り抜け、キリトとユージオが駆け抜ける。

二人の体当たりで篝火は打ち倒され、地面の水溜りに散らばった火はあっけなく消えた。

「よし……!」

「ギギヤア!」

思わず呟いたルークは、後ろから飛びかかってきたゴブリンの腹に素早く回し蹴りを入れて遠ざける。

宙に浮いたゴブリンを斬り捨て、さらにもう三匹ほど前からやってきたゴブリンを相手する。

一体目は得物を弾き、その隙に喉を斬った。

二体目は下からすくい上げるような膝蹴りを鳩尾に入れ、浮いたところを柄頭で殴り殺した。

そのタイミングで三体目が飛びかかってきて、咄嗟に背負った剣の柄を掴むと振り回

す。

「グギャツ!!」

「……っ?」

血の螺旋を描きながら吹っ飛んでいったゴブリンに、ルークはふと自分の手に目を向けた。

(片手で……持てる?)

つい先ほどまでズツシリと重みを与えてきた剣は、ルークの左手の中に収まっていた。

これまでどれだけやっても両手でしか持ち上げられなかったそれが、不思議と軽く感じるのだ。

「ユージオ! そいつで追い払え!」

「う、うん!」

「っ!」

何故、と考えだそうとしたルークの耳に、仲間たちの声が入ってきた。

反射的に振り向けば、キリトがユージオに向けて剣を投げ渡している。

それを確認したルークは一旦疑問を収め、ボスの一人に意識を定めた。

「相手してもらおうか！」

「ふん、白イウムのガキが！」

気迫のこもったルークの雄叫びに、ボスは双剣を胸の前で交差してこちらへ走り出す。

ルークも剣の柄を両手で握りしめ、下段に構えて前傾した体を躍動させた。

「グギラアッ！」

「はあっ！」

衝突の瞬間、激しい火花が両者の目を眩ませる。

高い金属音と共に交差した剣と一本の剣がせめぎ合い、至近距離で歯を剥き出して互いに威嚇し合う。

「ふっ！」

「ギヤオッ！」

力を抜いて双剣をいなし、その場で左足を前へと踏み込んで懐へと侵入する。

体ごと一回転して遠心力をつけ、腹に向けて渾身の力で剣を薙ぎ払った。

しかし、ボスゴブリンとて馬鹿ではない。瞬時に身を引くことで、薄皮一枚でその一撃を躲した。

「このガキが、舐めんじゃねえ！」

「くっ！」

下からの振り上げる一撃を、咄嗟に腰の鞆で防ぎ、上からの袈裟斬りを片手で受け止める。

挟み込むような一撃をどうにか凌いだルークは、ボスゴブリンの腹を蹴るとくるりと宙返りをした。

着地して、プラプラと下半分がちぎれそうな鞆を投げ捨てる。

(キリトは……あっちのデカイやつの手相手をしてるな。ユージオもちゃんと追い払っている)

立ち上がりつつ仲間の様子を把握して、ルークは静かに剣を構え直した。

「この《大蛇狩りのドード》様に、よくも傷をつけてくれたな」

「へえ、それって俺の小指くらいの蛇のことか？」

「白イウムがああああああ！」

激昂したボスゴブリンは、たった三步でルークの前まで踏み込んでくると双剣を振るった。

非常に長いリーチから繰り出される剣戟は嵐のようで、一步でも間違えれば体を切り裂かれるだろう。

ルークは深く注意力を発揮しながら、その全てを紙一重で避けていく。

(速度は凄いが、力はそこまでじゃない。いける！)

「はああああああっ！」

「グウウツ！」

やがて、剣の軌跡を把握したルークは反撃に転じた。

ボスゴブリンの連撃の隙間に一撃を差し込み、一方的に相手の体を切り裂いていく。

「そんなものか、大蛇狩りとやらツ!!」

「調子に乗るなよ、白イウムのガキごときがっ!!」

ボスゴブリンの剣がさらに素早さを増す。

「ハッ！」

「ゴブツ!!」

しかし、所詮速さが上がっただけ。

その軌跡が変わることがないのなら、避ければいいだけのこと。

「て、テメエ……」

「シッ！」

再び左手で振るった剣の鞘による不意打ちで鼻をへし折られ、ボスゴブリンは大きくのけぞる。

勝った。

そう確信したルークは、最後の一撃を入れようと肉薄し——

「ユージオッツ!!!」

しかし、キリトの悲痛な叫びに意識を奪われた。

飛び出した体はそのままに、視線がそちらへと吸い寄せられる。

その目に映ったのは——もう一匹のボスゴブリンに腹を切り裂かれ、宙を舞うユージオの姿だった。

「ユージ——」

「グラアアアッ!!」

その瞬間、ギンと目を光らせたボスゴブリンが両手を振り回す。

長年の修練で染み付いた癖で咄嗟に振りかけていた剣を引き戻すと、凄まじい衝撃が刀身を襲った。

渾身の一撃だったのだろう、バキン！ と音を立てて衛士用の剣が真つ二つに折れる。

「オラアツ！」

「ぐっ……!?」

茫然とするルークの鳩尾に、ボスゴブリンの足の裏が突き刺さった。

ほんの一瞬意識が飛ぶ。その間にルークの体は吹っ飛び、何度も地面に打ち付けられてからようやく止まった。

「ぐ、げぼっ……」

苦悶の声と一緒に、口から赤黒い血が溢れ出す。

どうにか折れた剣を支えに立ち上がろうとすると、胸に鋭い痛みが走った。

(骨が内臓に……！ クソ、俺としたことが油断した！)

一秒にも満たない刹那ではあったが、あのボスゴブリンから意識を逸らしてはいけな

かった。

いや、そうではない。それよりも自分の大切な幼馴染みはどうなって――

「ユージオー！ しつかりしろ、ユージオッ！」

「キ、リト……」

あ、という声が口から零れ落ちた。

床に倒れ伏したユージオの腹から、これでもかという量の血が流れ出している。

遠目から見ても、確実に致命傷だ。

それを証明するように震えるユージオの手を、キリトが握っていた。

「ユージオ、目を閉じるな！ 頼むから死なないでくれ！」

「子供の、頃……約束、したろ……？」

「え……？」

「僕と……キリトと……ルークと……そしてアリスは……生まれた日も、死ぬ日も一緒だ……」

弱々しく、ユージオの言葉が洞窟に響く。

紐が千切れて広がった髪の毛の奥で、ルークは目を見開いた。

儂げに笑う血に濡れたユージオの微笑みは、かつての思い出を思い起こさせる。

遠い昔——まだアリスがいた頃に、四人でそう誓ったことを。

「今度こそ……守る、ん、だ……」

ユージオの手が、キリトの手の中から滑り落ちて。

それきり、ユージオは動かなくなつた。

（——俺は、何をしているんだ？）

ドクン、と心臓が脈動した。

極限まで見開かれた瞳には、傷つき倒れた幼馴染と、項垂れるもう一人の幼馴染が映っている。

自分の一番大切なもの。たとえ他の何を失おうと、決してそれだけは手放したくないと願っていたもの。

それが今、目の前で傷付けられた。

（——俺がこいつらを守るんだって、そう決めたはずなのに）

共に生き、共に死のうと誓ったあの日に、密かに一人、自らに誓った。

だというのに、自分は……

「テメエも終わりだ、白イウム。すぐに肉塊にしてやるぜ」

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべ、ボスゴブリンがゆっくりとルークに歩み寄る。

「……………俺は」

「あん？」

ぽつりと響いた眩きに、その足が止まった。

「俺は、守ると誓った。守ってみせると決めた。守らなくちゃいけないと、そう決意した」

ゆっくりと、ルークは立ち上がる。

その拍子にまたジンジンと痛む胸の傷は酷く、手に持った剣はもう使い物になりはし

ない。

だが、それ以上に。顔を俯かせたルークは、長い前髪で隠れた瞳に怒りを宿す。

「なのに、俺はいつの間にか自分のことしか見てなかった。俺ばかりが戦おうとして、あいつらを見なかった——ならばそれは、許されざる罪だ」

「何をゴチャゴチャと意味の分からねえことを……守るも何も、テメエは俺たちの餌になるんだよッ!!」

今度こそ止まることなく、ボスゴブリンは走り出す。

迫り来る「死」を前にして、ルークは壊れた剣を投げ捨てる。

代わりに革紐を無理やり引きちぎって剣を手に取ると、鞘を左手で握りしめ、半身を引いて姿勢を落とした。

「グガラアアアッ!」

「……………」

そして右手を柄に添えた瞬間、肉薄したボスゴブリンの双剣が目の前で振り下ろされた。

それを前にして目を瞑ったルークの心は——これまでにないほど、澄み切っていた。

(もしこの世界に、本当に神様がいるのなら、俺にできることなら、なんだってします)

——ろ。

(俺が何かを望むことが罪だというのなら、どんな罰だって受けます)

——えろ。

(だから、どうか俺に——守る力をください)

勇気を、吠えろ。

「死ね、白イウムがああああッ!!!」

叫ぶボスゴブリン。その剣は憎たらしい小僧の頭目掛けて振り下ろされる。

彼の頭の中には確かに、真っ二つに裂けて血の噴水を作る白イウムの姿があった。

キン。

「……………あ？」

ふと、彼は自分の両手が軽いことに気がついた。

そして自分の両腕を見下ろすと——肩より下がらない。

「な、お、俺様の腕が……!?!」

自分の強さに絶対的な自信を持っていた彼は、腕を失ったことによる激痛よりも困惑の方が勝っていた。

何故だ、どこだ、と見渡して、目当てのものが足元に転がっているのを見つけた。

「なんで俺様の腕がこんなところに——」

「それはもう、お前には必要ない」

白イウムの声が、後ろから聞こえた。

その瞬間全てを悟り、心の底から溢れ出た憎悪のままに振り返ろうとする。

「てめえッ！ よくも俺様の腕を」

スパン。

「ぐげっ……?!」

「永久に眠れ、我が聖域を穢した侵略者よ」

だが、彼が最後に見たものはゆっくりと倒れ伏す首無し自分と。

一点の曇りもなく輝く、美しい刀身だった――。

「な、ドードが……!」

「あれは……!」

もう一人のボスゴブリン……《蜥蜴殺しのウガチ》と、彼と戦っていたキリトはその光景を見て驚愕する。

「……………」

死したドードの側に立つルークは、その姿を大きく変えていた。

肩甲骨まで届こうかという白銀の髪が、その背中に生えた白い翼が動くのに合わせ揺れる。

冷涼とまで言える静かな瞳は黄金に輝き、どことも知れぬ場所を黙して見つめていた。

そして何より、その手に握る剣。

鏝さえもなく、無骨な装いだった柄は精緻な装飾を施されたものとなり、柄頭の飾りに四つの宝玉が嵌め込まれている。

初めて露わになった純白の刀身は根本が尖り、柄頭の飾りと同じ紋章が彫刻のように刻み込まれており。

それを握るルークの姿は、まるで――

「あ……………」

突然、ルークの口から声とも呼べぬ音が漏れる。

それに合わせ、剣を振り切った体勢の体から急速に力が失われ、後ろへと倒れていった。

それに合わせるように翼が消え、剣が手から滑り落ちて、ルークの意識は朦朧としていく。

「ルーク！」というキリトの声を最後に、彼の意識は暗闇へと落ちていった。

ここから、始まる。

「——セルカ！ ユージオット！」

かばりと起き上がり、覚醒してから開口一番に二人の名を叫ぶ。

見開かれた目の奥にフラッシュバックする洞窟での光景に、荒く呼吸を繰り返した。

「はあ、はあ……ここは、どこだ？」

少しずつ気持ちが落ち着いて来ると、訝しげな目で周囲を見回す。

するとどうやら、自分の部屋であることがわかった。いつも使っているベッドで眠っていたらしい。

「俺は……一体何がどうなって……」

ズキズキと痛む頭に手を置き、必死に記憶を掘り起こす。

最後の記憶は、ボスゴブリンの首を自分が跳ね飛ばした光景。それを最後に映像は途切れている。

それに関連して、骨が折れていたことを思い出して右胸を見ると、真新しい包帯が巻かれている。

他にも何ヶ所かに治療が施してあり、どうやら自分が思っていた以上に負傷していた

ようだ。

「すう……すう……」

「……母さん？」

そこでようやく、自分の足を枕にして眠る母がいることに気がついた。

若々しい寝顔は朝日に照らされ、非常に穏やかだ。

「……ありがとな、母さん」

「んんっ……ルー君……」

起こさないように優しく頭を撫でて、それからふとあることが気になる。

印を切つて、自らの《ステイシアの窓》を呼び出すと……驚くべきものが刻まれてい

た。

UNIT ID : NND5-8876

4758/4863 DURABILITY

Object Control Authority : 49

Unique Object Authority Holder

「天命がものすごく増えてる……」

4000を少し超えるほどだった天命が、大幅に上昇していた。

一番下の神聖文字はよくわからないが、剣などを扱うための力が、あの白剣の数値を上回っている。

（あの洞窟でゴブリンを倒したから……か？）

思いつく理由といえ、洞窟での死闘。あれがさらなる力をルークに与えてくれたのだろう。

そういえば剣はどこだと部屋の中を見ると、枕元に立てかけてあった。

「ずいぶん様変わりしたな、相棒」

以前の無骨な姿は何処へやら、洞窟で見た見事な装飾の柄に触れて笑う。

「……抜けるか？」

思い切つて柄を掴み、ぐっと力を込めて腕を上へと動かす。

だが、ビクともしない。

「よっ……」

眉を擡めたルークは、今度はなんとなくボスゴブリンと対峙していた時の気持ちになつてもう一度試みた。

すると、あつけないほどにすらりと剣は抜け、美しい純白の刀身を現す。

「おお、綺麗だな」

中ほどまで抜いた刀身を初めて見たルークの感想は単純であつた。

以前より遙かに軽く感じる剣を鞘に収めたところで、セフィアが身じろぎする。

「んう……はれ？ ルー君？」

「おはよ、母さん。なんか看病してくれたみたいけど、ありがとな」

「うわああああん！ ルーくううん！」

寝起き早々、大号泣したセフィアはガバツと抱きついてきた。

わんわんと大泣きする母に、ルークは仕方がないというように笑つて背中を叩く。

「ごめんな、心配かけて」

「ううん。こうして目覚めてくれたんだからいいのよ。本当に、良かった……」

涙ぐむ母の懐の深さを感じ、ルークは気恥ずかしくなつて後頭部をかいた。

「それで、俺はどれくらい眠つてたんだ？」

「一週間くらい。胸の骨が肺に突き刺さつてて、すごく天命が減つてたの。セルカちゃんか、俺が必死処置してくれたみたいで、ギリギリのところまでキリト君が、ぐったりしたユー

ジオ君と一緒に村に連れて帰ってきて……」

そこでちらりと、セフィアは部屋の隅を見た。

一体なんだとそちらを見ると……血の滲んだ皮袋が置いてある。

中に入っているものはおそらく、あのボスゴブリンの……そう考え、「そうか」とだけ
ルークは言った。

「他に変わったことは？」

「あ、そうなの！ 落ち着いて聞いてね、実は——」

その後のセフィアの話は、ルークにとつてこれまでにないほどの衝撃だった。

他にもいくつか話を聞いてから、酷く減った腹を満たすために朝食を食べて、その後
に外出ることにした。

セフィアには心配されたが、どうしても確認したいことがあったため、少しよろける
体に喝を入れる。

「つと……眩しい」

何日も眠っていたためか、扉を開けた瞬間飛び込んできた陽光に眼を細めた。

「本当に大丈夫？」

「ああ。今日は衛士の仕事は休んでいいんだろ？ 別に無茶はしないからさ、少し村の

中を散歩するだけだよ」

「そう……気を付けてね?」

なおも心配する母にわかった、と答え、白剣を肩に担いで家を出る。

一週間ぶりの村の様相は、いつもより華やかだった。

そこかしこにある飾り付けや、浮き足立つ村人達の様子は、やはりセフィアから聞いた「あの話」の影響だろう。

中央広場に行くとその更に更に顕著になり、何かの準備をしていた村人達はルークの姿を捉えると近づいてきた。

心配する村人、洞窟のことを聞きたがる子供、一見なんともなさそうなルークを侮る同世代の少年たち。

最後の連中にはボスゴブリンのことをある程度聞かせて慄かせてから、ルークは教会へと向かった。

「すみません、シスター・アザリヤはいますか」

扉を軽く握った拳で叩き、声を張り上げる。

それから何歩か下がって待つと、数分もせずに扉が開いて初老の女性が顔を出した。

その女性……シスター・アザリヤは、ルークの姿を捉えると驚いた後、僅かに微笑む。

「どうやら傷の具合は良いみたいですね」

「お陰様で、どうにか目覚めることができました。改めて、今日は礼を言いに」

「そうですか。ちゃんと静養してから、職に戻りなさい」

「はい」

「ルーク……?」

ふと、シスター以外の声がルークを呼ぶ。

彼女の後ろを見ると、半分ほど開かれた扉の奥にある教会内の食堂に、一人の少女が立っている。

シスターも気がついて振り返ると、その途端に彼女——セルカは走り出して、中から飛び出てルークに抱きついた。

「ルークっ！ 良かった、生きてる……!」

「つと、心配かけたみたいだな」

「なんだか一時間前にもこんなことがあったような、と思いつつ、セルカの頭をぎこちなく撫でる。

それでもひしと抱き付いて離れないセルカに、ルークはシスターの方を向いた。

「すみません、少しだけ話してもいいですか」

「……神聖術の勉強の時間までには返してください」

そう言って、シスターは静かに扉を閉めたのだった。



広場まで戻った二人は、噴水に腰掛けて話すことにした。

「落ち着いたか？」

「ええ。ごめんなさい、はしたなかつたわ」

「気にすんなよ。昔はよく抱き付いてきたぞ？」

「もうっ、何年前の話をしてるのよ！」

「ははっ」

可愛らしく憤慨するセルカに笑いながら、ルークは自分が普通に話せていることに気がついた。

もう心に怯えはない。どうやら洞窟での一件は、ルークにある程度の勇気を与えてくれたらしい。

——勇気を、吠えろ。

(あのと き聞こえた声は、一体誰の……)

「ルーク？ 大丈夫？」

「ん、ああ。ちよつと考え事してただけだ」

「そう……本当に平気なのね？」

「大丈夫だって」

しきりに身を案じてくるセルカを、なんとか宥める。

しかし内心では、長年冷たい態度を取ってきたのにここまで気にかけてくれるセルカに罪悪感を覚えていた。

「と、とにかく俺はなんともないから」

「ならいいんだけど……」

「……ごめんな」

「え？」

「今までずっと避けて、本当にごめん。もつとちゃんと向き合うべきだったのに」

体の向きを直し、深く頭を下げる。

謝ることそれ自体を恐れていたルークだったが、不思議と今ならこうすることができ
る気がした。

いつそ罵られることさえも覚悟して待つが……聞こえてきたのは、ぷつという吹き出
す音だった。

「あ、あははっ」

「せ、セルカ？」

「ルーク、あなた気にしすぎよっ、私怒ってなんかないのに、あはははー」

予想と真逆の反応が返ってきて、ルークはどうしていいのかわからなくなつた。

中途半端な姿勢で固まっているルークに、ひとしきり笑つたセルカは両手でその顔を
包んだ。

「確かに、ずっと避けられてたのは悲しかったわ。でもルークがあのこと真剣に
悩んでくれてるのはわかつてたし、それに……」

「それに？」

「ちやんと、助けに来てくれたでしょう？」

嬉しそうに言うセルカの笑顔は、これまで自分が一人で抱え込んでいたことがバカら
しくなるほど純粹で。

(……そっか。もつと簡単なことだったんだな)

ほんの少しの勇気があれば、変えることができる。

そう思えて、どつと気が抜けたような気分になったルークだった。

ほとんど力のこもっていない柔らかな両手から顔を引き抜いて、ルークはセルカに笑いかける。

「なににせよ、セルカが無事で良かったよ」

「うん、三人のお陰でね」

そこで一旦、会話が途切れた。

もともと何年も話していなかったのだ、さして会話のネタがあるわけではない。

どうしようかと視線を右往左往させて、ふと一つとつておきの話があることに気がつく。

「そういえば、ついに倒れたんだってな」

「あ、ええ。最初に見たときはびっくりしたわ——あのギガスシダーが、倒れるなんて」

二人揃って、南の森の方を向く。

村からでも見えるほど巨大だった漆黒の大樹は、どこを見てもその影も形もありはしない。

ソルスとテラリア、その両方の恵みを長らく吸い上げていた悪魔の大樹が、ついに伐採されたのだ。

「俺が眠ってる間に、キリトとユージオは偉業を達成したわけだ」

「あの光景を一度見たら、一生忘れないわ」

セフィアの話によると、昨日の昼頃に突然地響きがしたと思ったら、ギガスシダーが倒れた。

三百年の月日をかけて削り続けてきた悪魔の木を遂に倒したことで、村は大騒ぎ。

村役場の大人たちでの会議の結果、今は宴の用意をしているらしい。

それを成した件の二人は、今はここにはいないようだ。

「……ユージオは、きつと村を出るだろうな」

「……そうね」

ギガスシダーを切り倒したということは、刻み手としての天職を終えたということ。

掟では、天職を全うした者は次の天職を好きに選ぶことができる。

自由になった今、ユージオがアリスへの思いを天職と掟で抑え込む必要は、もうないのだ。

「あいつはやると一旦決めたらとことん頑固だ。アリスを探すために剣士になるだろう」

「ルークはどうするの?」

「俺は……」

自分はどうしたいのか。

それはこの6年間ずっと考えてきたことで、たった一週間前にセフィアに背中を押されたこと。

ユージオが覚悟を決めるのなら……

「俺も、村を出る。そしてザツカリアの街の衛兵隊に入って、央都に行く」

「やっぱりね。ルークならそう言うと思ったわ」

「不思議なんだが、あいつらとならどこまでも行ける気がするんだ」

あのとき、瀕死のユージオの言葉を聞いて昔の記憶が思い浮かんだ。

笑い合うユージオと黒髪の少年、それに微笑むアリス……そして、彼らの肩に腕を回している自分。

この村で生まれたときからずっと変わらない、夕暮れの中を騒がしく一緒に帰る思い出。

最初からそうだったように、欠けていたピースが埋まったように、その光景が心に染

み込んだ。

「資格はある。覚悟も決めた。もう何も、気兼ねする必要はない」

街の剣術大会に参加するには十年衛士の職をこなさなければならぬが、ルークは他の子供より天職を授かるのが早かった。

ダークテリトリーにある闇の国からの偵察隊を退けたのだ、村長も駄目だと突っぱねることはできない。

「ふふ、またジンクが先を越されたって悔しがらるわ」

「ま、あとのことはあいつに任せるさ」

昔から何かと突つかかってくる衛士長の息子を思い浮かべて、互いに笑い合った。

「じゃあ、俺は行くよ。村長のところにも話をしに行かなきゃいけないから」

「うん、私も教会に戻るわ。シスターとして神聖術の勉強を頑張らないと」

「……前にも言ったけどさ。あんまり張り切りすぎるなよ。お前はアリスになる必要はないんだから」

そう言いながら、ごく自然にルークはセルカの頭に手を置いた。

セルカが驚きに目を開くと、ルークもいつの間にか昔の癖が出ていたことに気がついて慌てて手を退けた。

「す、すまん」

「別にいいわ……それじゃあね、ルーク」

「ああ」

立ち上がり、二人はそれぞれの向かう場所へと足を向けた。

（変わるんだ、俺も）

歩き出したルークの目には、はつきりとした光が宿っていた。



それから瞬く間に時は流れ、夜の帳が下りる。

「はは、すげえなこりゃ。村人全員参加してるんじゃないのか？」

中央広場の隅で、普段は食べることのない生の肉を焼いた串焼きを堪能しつつばやくルーク。

煌々とした篝火がいくつも焚かれた広場には、年末の大聖節のお祈りよりも多いのではないかという数の村人がいる。

噴水の傍らの舞台では様々な楽器が賑やかな音を奏で、それに合わせて踊る人々の手拍子と靴音が響く。

あまり踊りが得意ではないルークは参加こそしていないものの、それを眺めて楽しんでいた。

「ルー君〜」

「あ、母さん……って、酔ってるのか?」

フラフラとした足取りでやってきたセフィアは、ほんのりと顔を赤らめている。

両手で持つジョッキの中に入っているのは、おそらく果実酒か何かだろう。

元からぼわんとしていた雰囲気は更に軽くなっており、花でも飛んでいるようだ。

「つたく、何杯飲んだんだよ」

「んーとねー、これくらーい」

人差し指と親指で表した量は、ジョッキの半分もなかった。

仕方がないなとため息を吐きながらも、ルークは頬が緩んでしまう。

「ほら、ここ座って。何か食べ物いるか?」

「じゃあね〜、ルー君の持つてるそれちようだい〜」

「はいはい」

更にいくつか乗っていた串焼きのうち一本を渡すと、セフィアは無言で頬張り始める。

我が母ながら小動物じみた様子に苦笑し、ルークは宴の喧騒へと視線を戻した。

「母さん」

「ん〜？」

「宴、楽しいか？」

「ん……うん、楽しいわ。お酒もお料理も美味しいし、みんな笑ってるもの」

「そっか」

「ルークが守ったのよ？」

「……俺だけの力じゃないけどな」

結局自分は途中で気絶したし、あの後キリトがもう一体のボスゴブリンを倒したことで撤退した。

村役場にキリトが証明として差し出した首の話を思い出していると、ふと頭を撫でられる感触がした。

「ルークはとつても頑張ったわ。きつとお父さんもそう言ってくれる」

「父さんか……なあ、母さん」

そこで一旦言葉を切り、セフィアへと向き直る。

突然真剣な顔で振り向いた息子に、やや酔っていて思考が曖昧なセフィアは首を傾げるが……

「俺、央都に行ったら父さんを探そうと思う」

「……ええ？」

次の言葉で、すっかり酔いは覚めた。

「ユージオたちと一緒に衛兵隊に入って央都に上がって、そこで父さんの行方を探す。それで父さんがまだ使命ってやつに縛られてるなら一緒に解決して……いつか、二人で帰ってくる」

「ルーク……」

「やっぱりさ、大切な人は側にいないとダメなんだ。もしかしたら見つかることすらできないかも知れないけど……それでも俺は、父さんと母さんに一緒にいてほしい」

かつて、アリスを救うことができなかったことでそれを痛感した。

今回セルカをも失いかけて、ルークの中に再び強くその想いが芽生えたのだ。

「母さんは、父さんと一緒にいたいのか？」

「……ええ。でも貴方が無理に頑張る必要はないのよ？」

「これは俺のやりたいことなんだ。アリスを探すのと同じくらいに」

「そう……」

セフィアが顔を俯かせる。

流石に生意気だったか、と思ったのも束の間、セフィアとの距離が近くなった。物理的に。

「ふふ〜」

「ちよ、なんだよ母さん。引っ付いてきて」

「立派な息子を持ってて、お母さん嬉しいわ〜」

また酔いが再発したのか、あるいは単純に感情が昂っているのか、セフィアは離れない。

こうなるとどうしようもないので、仕方なく受け入れた時——不意に音楽が止んだ。

「……ユージオ」

何事かと宴の会場を見れば、舞台の上に幼馴染がいるではないか。

その腰には《青薔薇の剣》が吊るされており、隣にいる彼の父よりも精悍な顔つきでそこに立っている。

「さてみんな、宴もたけなわだが聞いてくれ！」

ユージオの隣に立った中年の男……村長ガフスト・ツールベルクが声を張り上げる。

ついに始まった。傍らに立てかけた白剣の柄を無意識に握り、ルークはじつと舞台を

見つめた。

「我らが父祖の大願はついに果たされた！ 南の肥沃な土地からテラリアとソルスの恵みを好き続けてきた悪魔の大樹が、ついに倒されたのだ！」

わつという歓声が村人たちから上がった。

これは貧困に喘いではあらずとも、長らく富んではいなかった村にとって非常に喜ばしいことだ。

新たな畑、新たな牧場、ルーリッド村は更に発展するだろう。

「それを成し遂げた若者——オリックの息子ユージオよ、ここに！」

ユージオが舞台の上から正面を向いた途端、二度目の歓声が起こった。

口々に賛美や喝采を飛ばし、拍手を送る村人たちと一緒に、ベイリー親子も手を叩いた。

「掟に従い、見事天職を果たしたユージオには、自ら次の天職を選ぶ権利が与えられる！」

そしてルークの予想通りに、ユージオには選択権が与えられた。

木こり続けるもよし、父の跡を継いで畑を耕すもよし、と言うガフストだが、ルークはもう答えがわかっていた。

ふとキリトの姿を探すと、自分と同じような表情をしたセルカと共にユージオのこと

を見守っている。

「僕は、剣士になります。ザッカリアの街で衛兵隊に入り、腕を磨いて、いつか央都に上ります」

そして、ルークたちの予想通りにユージオはそう宣言した。

しんと静寂が訪れる。先ほどまでとは打って変わって、あまり好意的でないざわめきが波及した。

ガフストが片手を上げるまでそれは続き、収めた彼自身も厳しい表情でユージオのこのを見る。

「ユージオ、お前はまさか……」

「……………」

ユージオは何も言わなかった。

だが、ガフストも変わらぬ意志を感じ取ったのだろう。それ以上は言わず、首を横に振った。

「…………いや、理由は問うまい。次の天職を決めるのは、教会の定めたお前の権利なのだから。よかろう、ルーリッドの長として、オリックの息子ユージオの天職を新たに剣士と

認める。望むならば村を出て、剣の腕を磨くがよかろう」

ガフストが認め、それならばと村人たちもパラパラと拍手を送りだす。

決して苦い表情をした者……ユージオの兄たちや衛士のジंकと父……がいなかったわけではない。

しかし、キリトはほつと安堵した顔をし、セルカはユージオの引き締まった顔を見て、少し寂しそうに笑い。

「……やっと始まったな、ユージオ。俺たちの夢が」

そしてルークは、優しい声で親友の新たななる門出を祝うのだった。

【幕間】 現実

デザインナー

「……ん」

意識が覚醒する。

睡眠状態下の脳が意識的思考を始め、体が休眠から目覚める。

最初に感じたのは、頬を押し返してくるとてもない硬さと冷たさ。

それが金属製の机だと認識できるまで意識がはつきりとするまで、二十秒を要した。

「ふぁ……また寝落ちしてたのね」

ようやくと体が動かせるまで起きてきたところで、上半身を持ち上げて背筋を伸ばす。

上へ掲げた両腕と共に伸びた背骨がポキポキと音を鳴らした。それに押し出されるようにあくびが漏れる。

「ん……シャワー浴びよ」

ぐちゃぐちゃになった生まれつきの茶髪を手櫛でほぐし、よれた白衣の裾を引きずり

ながら立ち上がる、

部屋に備え付けのシャワー室に行き、さっと寝汗と埃を洗い流すうちにだんだん頭も冴えてきた。

サツパリして完全に思考が明瞭になって、手早く着替えて適当に身だしなみを整えれば朝の通過儀礼は終わりだ。

「オーグマー、体調管理アプリを起動して」

眼鏡と一緒に机のそばに置いてあった端末を手に取り、頭に装着して命令する。

AR型情報端末、などと格好の良い名称のついた機械はすぐに作動して、血圧やら脈拍やらを測ってくれる。

便利な時代になったものだと思いつつ、問題がないことを確認すると二十分ぶりに椅子に座った。

「またつきつぱなし……」

部屋の電気をつける前から、そこに置かれた最新式のノートパソコンの画面は煌々と光を放っている。

電源を落とす前に意識が眠りという奈落の底へ直下したとはいえ、自分のズボラさには呆れる。

「今日も変わりなし、と」

そこに表示されているのは、様々なパラメータの表示されたウィンドウと、一つの大きな画面。

この海の上にある鉄の亀のメインコントロールルームと接続されたそれに映るのは、一つの箱庭世界だ。

「《アンダーワールド》……ね。どっちが地下世界なんだか」

部屋の位置的に言えば海面下にいる自分を自虐し、箱庭から一旦目をそらす。

いかな彼女が基底をデザインした世界とはいえ、代わり映えがなければ興味も薄くなるというもの。

「あ、そう言えば比嘉さんから昨日、何か通達があつたつけ」

もう一度オーグマーを装着して、パソコンに同期するとメールボックスを開く。

滅多に部屋を出ないものぐさな彼女に配慮してか、そこにはしっかりと目的の人物のメールがあつた。

開いてみると、そこには記憶と寸分違わぬ文面が。

今日の予定、それに関する自分への命令、そして……

「神代凜子、ね」

今日ここへやってくるという、自分がそのうち挨拶しろとメールに記されている人物。

その名前は彼女にとって、様々な感情を湧き起こさせる相手であった。

例えば憧れ。

例えば尊敬。

例えば……嫉妬。

「つて、何考えてるのかしら。私」

長いことこうも部屋にこもりきりでいると、余計なことに思考を割くようになる。

もつとも、一人で仕事をされる方が好きな彼女にとって、それは悩み以上の苦痛になりはしないのだが。

そも、彼女に嫉妬することなど間違い以外の何物でもない。

何故そう思うか、それは彼女が……自分が憧れ、そして畏敬する『茅場晶彦』の、いわゆる女というやつだったから。

彼の名を聞いて恐れを抱くものは多い。

稀代の天才とまで呼ばれた彼は、たった一人で世界初のフルダイブ型VRMMOを開発した。

しかしながら、数多の人間をそのゲームに閉じ込めたことでその名声は一転、悪魔と恐れられた。

しかし、だからと言って彼女が抱く畏敬がそうであるわけではない。

そこそこ有名なゲームデザイナーを自負する彼女にとって、そこまでの代物を作り上げた彼は神に等しい。

故に、自分の姉と同じく類い稀な才能と頭脳を持った彼を畏れ、そしてまた心より敬っているのである。

そんな彼女にとって、彼に一番近い場所にいた神代博士は、ある意味一番に羨むべき人間だ。

「我ながら、嫌な女よね」

だからこそあの胡散臭い役人に声をかけられた時、自分にしては珍しく即決でこのプロジェクトに参加した。

自分のことを「必ずプロジェクトに必要な四人」のうちの一人、などとお世辞を言わ

れたことも理由の一端かもしれない。

さりとて彼、茅場晶彦のように歴史に名を残したいわけではない。

ただ、世界をデザインすることに生涯を捧げる彼女にとって、このプロジェクトはあまりに魅力的だった。

“真の人工知能を作り出す” などという、これまでにないデザインできる世界に強く興味を惹かれたのだ。

しかしまあ、その好奇心も今や薄れかけているのが現状だ。

アンダーワールドと呼ばれるその基本的システムをデザインし、内部の人間たちの初期モデルを作り。

あとは上司たちの望み通り、最後の実験で全てが崩壊するのを見届けるだけ。

そうしたら海上生活ともおさらば、プロジェクトに参加した報酬とともに、自分の子であるこの箱庭ともお別れ……

「ん？」

そんなことを考えていると、つけっぱなしだったオーグマーが何かを主張した。

ぼうつと焦点をぼかしていた視界を定めれば、ついさつき見たばかりの名前がそこに

ある。

「今度は何かと開いてみれば、そこにはなんと驚きの内容があるではないか。

「へえ。『彼』の恋人さんがね」

「どうやら神代凜子とともに、この鉄の亀……《ラース》に乗り込んできたらしい。

随分と頭の回る子だ、とこの施設に来るまでの様々な確認やら検査やらを思い出し、思わず微笑む。

「しかしまあ、あの上司があそこまで依怙贖する少年の恋人ともなれば、それもある意味道理か。」

「無事に恋人さんが目覚めるといいわね、彼女さん」

「今もソウルトランス^Sスレーター^T中で損傷した脳の治療中だろう少年にそう言い、オーグマーを外す。

それを机に置いて、ふと部屋の隅を見た。

そこにあるのは、もはや使われなくなった骨董品。

正式に四台、この施設内に配置されたSTLや、六本木にあるものよりもさらに前の試作品。

内部にゴミが入らないよう、ビニールで包み込まれたそれは、かつて彼女が使ってい

たものだった。

「……懐かしい、なんて思うのはいつぶりかしら」

自分にいざという時の為にと電話番号一つだけを残した姉が行方をくらませた時、昔を懐古して以来か。

明確な記憶が残っているわけではない。それは試作品というだけあつて様々な制限がある。

事前に決めたダイブ時間以上は使えないし、内部に入ればこちらの記憶は大部分が制限、その逆もまた然り。

どうせそのうち全部消えて無くなるのだからと、特別に設置してもらったそれ。

中でのどのような時間を過ごしたのか、それはログに残った自分の記録から推測するしかない。

ただ、とても楽しく、そして何物にも代えがたい。そんな自分にそぐわない感情を抱くのは確かだ。

「ああ、何か理由がないかな……」

もう一度それを使う理由がどこかにないか、そう独り言が出てしまった。

内部の時間は凄まじい倍率で加速しているので、今更ダイブしたところで自分が知る

ものなど全て消えている。

しかし、まるでとつくの昔に攻略し終えたゲームを懐かしむような気分で、時折それに目を向ける。

とは言っても、どうせ一日中パソコンで《アンダーワールド》の状態を観察しているだけの日々。

要するに何か、刺激が欲しいだけだった。

そんな彼女に答えるように、ピコンと突然ウィンドウが一つ増えた。

「え、ちよつと、何?」

現在治療中の少年、桐ヶ谷和人がSTLを使った時以来何も起こらなかった画面に驚く。

惰性のような職務とはいえ、何事かあつてはまずい。

彼女は姿勢を直し、ウィンドウの解析を始めた。

「えつと、これは《アンダーワールド》内のオブジェクト管理システムね……はっ!」

そして、そこに羅列された英数字の意味を理解した時、彼女は素つ頓狂な声をあげた。

「ユ、ユニークオブジェクトが解凍されてる……」

そこに記されていたのは、《アンダーワールド》内において特定のIDが解凍されたと

いうもの。

そして、それは彼女が遊び心で《アンダーワールド》内に設置した四つの特殊ユニットのIDのうち一つと一致していた。

「嘘、なんで……ありえない」

あまりに予想外すぎるその情報に、彼女は一人うろたえるばかり。

彼女にとつてこのID、否、他三つを含めた特殊IDが解凍されることはありえないことだった。

そのIDを解凍する為には、それを使う他のユニット……フラクトライトが一定の心理状態にならなければいけないのだ。

その心理状態こそが、彼女を困惑させる要因だった。

「これは、なんて予想外……まさか、自発的にここまで他者に対する防衛的心理を発生させるなんて」

彼女がそのIDの解凍のために入力したのは、一つの心理状態。

良識ある人格の持ち主であれば誰もが一度は口にする、“他人を守ろうとする”というもの。

そのハードルは非常に高く、それこそ、そのフラクトライトの思考全てがそこに収束されなければ解凍はされないのだ。

彼女はこれをデザインした際、決してこのユニットや、そこから発生するオブジェクトが使われることはないと確信していた。

そもそもがある意味で最後の実験に真っ向から矛盾しているため、どうせ最後は消えるからと思っていたのだ。

「これは……確かめない」と

この事態に彼女は、まず何よりも確認と解決を優先することにした。

ノートパソコンを操作し、この場で確認できる限界までそれに関する情報を引っ張り出す。

結果、ほんの数分前に解凍されたことや、そのオブジェクトを使っているユニットのIDなどを割り出した。

「なんとかしてこのユニットと接触しないと……」

上司達や、そのさらに上が欲しがっているものとは違うが、このフラクトライトはとても貴重だ。

研究材料として俄然興味が湧いてきた彼女は、どうにかしようとするものの、何もできなかつた。

「どうしましょう……もうフルスペックのSTLは使えないし」

既にプロジェクト開始直後に内部に職員がダイブし、そこにいる初期の人工フラクトライトと接触している。

その時点でこちら側からの干渉としては職務を完了しており、後は人工フラクトライト達の自己進化に任せていた。

そもそも、桐ヶ谷和人の治療に何か影響があつてはいけないと、使用は制限されているのだ。

「何か方法は……」

そこまで言つて、彼女は言葉を止めた。

次にふつと自嘲げに笑い、ついさつき自分が呟いたことを思い出す。

「きつかけつて、思わぬ時にやってくるものね」

パソコンに張り付くように乗り出していた体を戻して、試験型STLに視線をやる。

「長時間はできないけど、数時間程度なら……」

フルスペック型と使う電源元は同じである以上、そう長くダイブすると不自然になる。

それを誤魔化すための言い訳を考えながら、早速オーグマーとパソコンを併用して様々な調整を始めた。

「前に使ってたアカウントは……あった。これを少し設定しなおせば……」

そうして彼女—— “《アンダーワールド》デザイナー：かみじつこく 上捨石 あやか 彩華 ” は、二週間
ぶりに目を輝かせた。

【第二章】 研ぎ澄まされる牙

ザツカリア剣術大会 前編

ノーランガルス北帝国の辺境にある村、ルーリッド。

そこから央都に向かつて二、三日行くと、ザツカリアという名の街がある。

「ふつ、ふつ……」

街の近郊にある牧場の納屋、その前にあるちよつとした敷地で一人、剣を振る少年がいた。

名をルーク・ベイリー。

かつてルーリッドの村の衛士だった少年にして、今は夢を追いかける者。

彼以外にまだ日も昇らないようなこの時間から起きているものは、少なくともここには誰もいない。

五ヶ月前、共に村を旅立った二人の少年でさえ、まだ納屋の中でワラと一緒に眠っているのだ。

季節は八の月の二十八。

まだ夏の終わりとはいえ、肌寒い早朝に起きるのは余程の勤勉か、愚か者だろう。

「左から……右。最後にそこから上」

そしてルークは、ある意味前者であり、後者でもあった。

肌寒い空気など知らぬと言わんばかりに外気に晒された上半身からは、熱を放出するためか熱気が出ている。

同世代の少年たちに比べて極限まで鍛え上げられた体に浮かぶ大量の雫は、一時間の素振りによる成果を現していた。

「これで一から十までの型全部……まあ、それなりに安心できる出来だな」

村にある家からそのまま持ってきた練習用の木剣を下ろし、息を整える。

衛士として早起きが常だった彼は、いつもより更に早く起きてこのように練習に明け暮れていた。

しかしそれは、いつも繰り返す修練ではない。

それよりももっと形式的な、ザツカリア剣術大会の運営組織によつて規定された“型”である。

「いよいよ今日、か……」

切り株に腰掛けて、ここから三キロルほど離れた街の方を見る。

これから日が昇つて、人々が目覚め、街が動き出せば、いよいよ自分たちの夢の第一

歩も始まる。

何を隠そう、それは街の住人や、自分のように他の村からやってきた衛士たちによる剣の腕の競い合い。

あの街の衛兵隊に入隊する、たった四つだけ用意されたその栄誉を勝ち取るための、剣士の儀式。

すなわち——ザッカリア剣術大会。

「思えば、結構遠くに来た気分だな。距離的には村からそう離れちゃいないのに」

かつては村のための諦め、やがて大切な少女を失って怖気付き、行くことを恐れていた。

しかし五ヶ月前、キリトという一人の少年が現れたことで、ルークを取り巻く環境全てが変わった。

一人の少女を助けるため怪物に立ち向かう、なんて御伽噺のような経験をして、もう一度夢を追いかけることにして。

「牧場主さんには感謝しかないな……」

そうして五ヶ月前に村を旅立ったはいいものの、さすがにルーク一人の貯蓄で三人分

の生活を賄えるはずもなく。

この牧場で働きつつ、幼馴染のユージオと共に《アインクラッド流》なる流派を学んできた。

おかしなことに、あらゆる流派に一つしかない秘奥義の技をいくつも持つその流派には、ルークの持つ剣に合う技もあつた。

約半年前の自分よりも、今の自分はさらに一段と力をつけた。

そう、ルークは確信していた。

——イイン。

突然、耳の奥に響くような音がする。

「つと……：そうだな。そろそろ休憩も終わりにしとこう」

まるで誰かの言葉に答えるようにそう言って、ルークは切り株から腰を上げた。

それから後ろを振り向いて、座っていた向きとは反対側に立てかけていた相棒を手取る。

以前より遥かに軽くなったそれは、とても辺境の村の少年のものとは思えないほど立派なものだ。

「ふうー……」

大会を直前にして、早く目が覚めるほどにはやった気持ちを鎮める。

思い起こすのは、数ヶ月前の死闘。

捕らえられたセルカ、瀕死のユージオ。二人を前にして自分を支配した、
“守りたい”
“という心。”

強く、強く願ったその想いを再現し、構築し、身体中に満たして、
鏢を左手の親指で押し出した。

キン——

小さな金属音を立て、刀身の根本が鞘から離れる。

スルスルと水を得た魚のように抜けた剣は、薄暗闇の中において美しいともいえる
“白”を現した。

「抜けた、か……」

軽く反りが入った頭身を見つめ、ほっと息を吐く。

この剣は、“守る”という意思で固く心を統一した時のみにはか抜けないようなの

だ。

あれから随分と時間が経つが、自分の思いが色褪せていないことに安堵を抱いた。
「気難しい相棒を持つと大変だよ」

——イイン。

うつすらと光を反射する刀身の中に、一瞬何かの瞳が見えた気がした。

鞘を切り株に置くと、両手で柄を持つて構え、いつも通りの鍛錬を開始する。

「ふっ、はっ、せいっ！」

一人、剣の世界に没頭するルーク。

そうするうちに空が白み始め、やがて人界全てを照らすソルスが顔を出した。

剣が軽くなったため、それでもなおルークの体力は底を見せず、まだまだ振れそうだ。

「あー！」

「やっぱり起きてるー！」

そう思ったのも束の間、ルークの世界に二つの元気な声が入ってきた。

反射的に剣を振る手を止め、この牧場主たちの家がある方の道を見ると、二人の幼子が立っている。

同じ顔、同じ髪型や服装などをしたこの双子は、この牧場の娘たちだ。

「おはよう、テリン、テルル。早起きだな」

「ルークの方がいつも早起きよ！」

「起こす必要がなくてつまんない」

剣を鞘に収めると、近づいてきた二人はそれぞれ赤いリボンと青いリボンを揺らし、不満そうに言う。

いつもお寝坊なキリトのように、起こせないことに文句を言っているらしい二人に苦笑するしかない。

「それにしても、やっぱりすごいねー」

「お父さんのお腹とは大違い」

「まあ、鍛えてるからな」

六つに割れた腹筋を見てキャツキャとはしゃいだ双子は、中の二人を起こすために納屋に入った。

その間に稽古用の道具をまとめ、ちゃんと服を着た上で馬飼いの仕事をするためにルークも中に入った。

「信じられないよ、大会当日の朝に一夜漬けだなんて……いや、朝だからその言い方はちよつと違うか」

「アサ漬けでもシバ漬けでもいいよ、型の演舞をするのなんてどうせ一回こっきりだ」とすると、黒髪の友人の方がお気楽なことを言っているのが聞こえた。

ワラを大盛りに積んだ桶を二人とも持つており、こちらに背を向けて気付いている様子はない。

(……そうだ)

ニヤリ、と笑ったルークは、村で害獣の討伐をした時のように気配を消す。

そうすると抜き足差し足、忍び足で談笑する二人に近づき……

「わっ!」

「うわっ!?!」

「ぐわっ!」

耳元で叫んでやると、二人は面白いくらいにピョンと飛び跳ねた。

肩に顎を激突させないためにさっと顔を引くと、心底びつくりした顔で二人が振り返る。

「る、ルーク!　なんてことをするんだ!」

「そうだぜ、寝起きの頭にあの大声は響いたぞ?」

「はっはっは、警戒が足りないぞ。そんなんで今日の剣術大会を勝ち抜けるか?」

意地悪く笑えば、黒髪の少年の方……キリトはふふんと得意げに笑う。

「当たり前だろ? 俺たちは三人揃って最後まで勝ち抜いて、今夜はちゃんとした衛兵隊宿舎のベッドで眠るのさ」

「どこからその自信が出てくるのか、本当に不思議だよ……」

「うむ、その意気込みや良し。ユージオもこいつくらい過信してる方が心が楽だぞ?」

「まったく、昔みたいにならなくて……」

一人弱気なことが居心地が悪いのか、拗ねたようにユージオは言う。

その言葉に、そういえば最近の自分は昔……子供の頃のように彼らに接しているな、と思うルークだった。

ある種の感慨にふけていると、ずっとその場にいた双子がルークの足をツンツンとつつきだした。

「もう、私たちを無視しないで!」

「二人とだけ話しててずるいわ」

「おお、すまんすまん」

「それじゃあルークには罰ゲームね。私たちのどっちがテリルで」

「どっちがテリルでしょう?」

きたか、と内心で身構える。

イタズラ好きなこの姉妹は、瓜二つの見た目を使って時折こうやって遊び半分に訪ねてくる。

キリトとユージオを見ると、ニヤニヤとしながら見守っていた。さっきの仕返しに助けてはくれないらしい。

「うーん、それじゃあ……」

「それじゃあ?」

「こっちがテリルで、こっちがテルルだ」

先にそう言うてから、ルークは同時に二人のことを指差した。

キョトンとした二人は、ルークにからかわれ返されたことに気がついてあははと笑う。

「それはずるいわよ、ルーク」

「そうよ、ちゃんと答えて?」

「いやいや、ちゃんと答えたぞ? だってテルルはイタズラする時肩が揺れるからな、すぐにわかったよ」

「えっ?」

思わず反応したのは、赤いリボンをつけているはずのテリンの方だった。

「なるほど、そっちがテルルか。またリボンを交換してたな」

「あーん、ばれちゃった」

「ルークはする賢いから、からかい甲斐がないわっ」

「ははは、俺に勝つにはまだまだ修行不足だ」

わざわざ大げさな態度で言うルークにまた笑い、報酬のマルベリーのパイがあることを伝えた二人は出ていった。

「ふう。さて、仕事をするか」

「ルークはいつも正解するなあ」

「誘導尋問とか上手いんじゃないか？」

「衛兵隊に入ったら使いどころがあるかもな」

たわいもない話をしながら、ルークも馬の餌用の桶にワラを詰め込むと持ち上げた。

かなりの重量の餌だが、かなり軽く感じる。この感覚にもこの半年でようやく慣れてきた。

手早く全ての馬に餌を与え、放牧地に出してから厩舎の掃除をするまでが三人の仕事だ。

それが終わると、双子娘と騒々しい朝食の時間を過ごすまでがここ数ヶ月の習慣と

なっている。

揃って「応援に行くからねー！」と言って家に帰っていった二人に手を振り、三人は作業着から着替える。

いつもならそこで稽古が始まるが、今日こそがその稽古をしてきた理由たる剣術大会だ。

「これまでありがとうございました」

「半年近く、お世話になりました」

「こんな風来坊の俺たちを雇ってくれて、感謝しています」

「いいのよ！ さ、この弁当持つて行つてきな！ 負けたら街の衛兵なんざならないで、うちでまた働きな！」

最初に牧場にやつてきた時から気前のいい当主の妻、トリザ・ウォルデは挨拶をしにきた彼らに豪快に笑った。

その上昼食まで持たせてくれたことにもう一度感謝して、ルークたちは母屋を出るとザツカリアの街に向かった。

「……………」

「どうしたお前ら、顔が強張ってるぞ？」

街までの道すがら、キリトとユージオの口数は非常に少ない。

いかにも緊張していますという二人の顔に、振り返ったルークは笑う。

「ルークこそ、なんでそんなに落ち着いてるんだよ」

「お前はいつも通りに見えるな」

「そりゃ、十分に練習はしてきたからな。今更他の奴らに劣ってるつもりはないさ」

直前に詰め込んだキリトは、うっとばつが悪そうな顔をする。ユージオがじとつとした目で見た。

「あとは勝つだけ、だろ？」

「ルークも案外、自信たっぷりだね……」

「残る不安といえば、ブロックが被らないことを懸念するばかりだな」

ザッカリア剣術大会は、東西南北に分かれたブロックの勝者一人のみが衛兵隊に入ることができるといえる。

そのたった四つの席を五十人以上の剣士や衛士たちが競い合うわけだが、そこで同じブロックになってしまうと不味い。

なぜなら、一緒になってしまえば、少なくとも一人が衛兵隊に入ることができず取り残されるのだ。

「まあ、そこは幸運に祈るしかないさ」

「だな。ユージオはともかく、キリトは型を間違えるなよ？」

「わかってるって！」

会話することで二人の気を和ませながら、ルークはこれから始まるであろう戦いに心を馳せた。

ザッカリア剣術大会 中編

剣術大会は、ザッカリアの街にある《集会場》にて行われる。

街を取り囲む城壁の縦横比をそのまま縮小した長方形の広場を、階段上の観客席が取り巻く構造となっている。

普段は領主の演説や楽団、劇団の公演などを目的として使用されている空間だ。

その集会場の正面入り口に設けられた受付から少し離れた広場にて、三人の少年が昼食を取っていた。

「なんとか選手登録はできたね」

「おいおいユージオ、ここまでできてまだ緊張してるのか？」

「そんなんだと幸運の女神様が逃げちまうぞ？」

冗談めかして言うキリトに、安堵のため息を吐いたユージオはなんだそれ、と笑う。

案外大きなその笑い声は、まだ大会の開会前だというのに集会場付近にごった返した大勢の人の喧騒にかき消された。

様々な《禁忌》と天職に縛られた人々にとってこの大会は、一年位一度の大娯楽。人の入りも圧倒的だ。

「とりあえず、キリトは型を間違えたりするなよ」

「うっ、わかっているって……予選で落ちる、なんて間抜けなことほしくないさ」

「本当かい？ もしも運良く全員他のブロックになれたとしても、全員揃ってなきや意味がないからね？」

「ゆ、ユージオまでそんなに念押ししなくたっていいじゃないか」

「つまり、お前のいい加減さはそれくらい気をつけないと釣り合いが取れないってことだよ」

「わしゃわしゃと頭をかき回すルークに、ぶすつとした顔でキリトは「俺は適当だよ」とぼやく。

しかし、実際にこうしてたわいもない会話をすることで、弟分たちに下手な失敗をさせないようにしているのだ。

そんなルークの気遣いをなんとなく二人もわかっており、弁当を平らげるまでテキトーな会話が続いた。

「じゃあ、もう一回確認だ。この後十一時半の鐘までに控え室に入って、そこで北、南、東、西の組に別れる。そこで試合用の剣が貸与されて、十二時から北と南、東と西の順で予選が行われる」

「そこで事前に取り決められた一から十までの型の演武をして、ひと組が八人に絞られ

るんだったよね?」

「そうだ。で、全部の組の絞り込みが終わったら二時から本番だ。そこからは残った八人で……」

「衛兵隊に入る権利をかけた生き残り、ってわけだな」

右の手のひらに左の拳を打ち付け、不敵な笑みを浮かべたキリトが締めくくる。

そこだけは自信たっぷりな様子の弟分にルークは笑い、「頑張ろうぜ」と言つて軽く背中張り手を入れた。

「よし、じゃあ時間までちよつと街を見て回るか?」

「あんまり遠いところまで行くと、この人の数じゃあ戻れなくなるね。気をつけないと」

「この商店街をぐるつと一周、つてどこか?」

鐘が鳴るまではあと一刻ほど、余った時間を有効活用するために少年たちは立ち上がる。

「……………」

「っ!」

その瞬間、どこからか強い視線を感じたルークは弾かれたようにその方向を向いた。

すると、こちらから見えづらくなっている路地の陰から自分達……いや、ルークを見つめている人物がいる。

正体を隠すためか、全身をすっぽりと覆ったローブに身を包み、目深にフードを被つていて顔はわからない。

そのフードの奥から感じる強い視線は敵意や害意などではなく、ただただルークに興味を示すようなものだ。

(……怪しいな。少し接触してみるか)

歓談に夢中になっているキリトとユージオは、どうやら気がついていないようだ。

その場で少し待ち、二人がぐるりと反対を向いたタイミングで、ルークはこっそりと人影に紛れた。

その直前まで路地が見えていたのだが、こちらの移動を察知して、あちらも物陰から奥へと体を引く。

「つと、こつちが近道か……」

うまく行き交う人々の間をすり抜けながら、喧騒から抜け出していくルーク。

伊達に次期衛士長とまで言われた訳ではなく、見事な足運びで人混みを抜けたら、今度は姿勢を低くした。

そうすることで立ち並ぶ露天に身を隠しながら、ものの数分で先ほど謎の人物がいた

路地にたどり着く。

そつと壁に体を寄せ、路地を覗き込むと……ずっと奥にいるローブの人物と目があつた気がした。

「……！」

「あつ！」

どうやらそれは間違いではないようで、その人物はくるりと踵を返して走り出した。反射的に路地に入って、小走りでその後を追う。

「……」

「くそつ、早い……！」

フードの人物は、鍛えているはずのルークでもさっぱり追いつくことができないうほどの速さを持っていた。

結局、距離の縮まらない追走劇はルークの体力が途中で切れるまで続くことになった。

これ以上は天命が減るといふ無意識の警告に従い、急停止したルークは両手を膝に置いて荒い息をつく。

「はあ、はあ……一体なんだったんだ」

ほんのりと頬に浮かんだ汗を拭い、謎の観察者の走り去った方を見る。

「……ん？」

ふと、地面に何か光っているものが落ちていることに気付いた。

用心しながら近寄り、右手の親指と人差し指で摘み上げると、それは何かの一部らしきものだ。

路地に差し込むソルスの光が反射して、十字の花弁を象った小さな宝石は美しく輝く。

「……ま、収穫って思っとくか」

拳の中にそれを収め、ズボンのポケットに入れると元来た道を引き返す。

帰りの道はそれなりの長さで、自分がどれだけ追いかけていたのかと思うと、徒労に終わったことに苦笑が溢れた。

そうして時間をかけて路地から集会場近くの広場に出た途端、左右からドスツと両肩に衝撃が走った。

「おわっ!？」

「へっへん、成功だな」

「まったく、キリトったら」

「お、お前ら……」

「いきなりいなくなるからびっくりしたぜ」

「何かあったの？」

「いや……なんでもない」

待ち伏せしていた弟分たちに曖昧に答え、ルークはもう一度路地を見る。

それから未練を断ち切るように二人の肩に手を回し、グリグリと握った拳をこめかみに擦り付けた。

「悪戯な弟分どもにはお仕置きだ！」

「痛い痛い！」

「ルーク、ギブ、ギブ！」

ははは、と痛がる二人に笑っていると、ちょうど十一時を告げる鐘が響いた。

それを聞いた三人は、軽く露店を冷やかしてから集会場へと戻る。

「おう、さっきのルーリッドの坊主たちか。衛士の坊主も、その二人も頑張れよ」

「はい、頑張ります」

「優勝を掴み取ってみせますよ」

「自信は十分です」

「そうか。それじゃあ行ってこい」

受付の男に見送られながら係の衛兵に見せ、集会場の中の控え室へと案内される。

奥行きが二十メルはあるかという大部屋の中には、片側に四つの頑丈そうな椅子が置

かれていた。

もう片方にも同じ並びで椅子が設置されているが、そちらには誰も座っていない。特別な意味があるのだろうか。

そして、部屋の中にいる五十人を越える屈強な剣士達、一斉に三人のことをジロリと睨みつけてきた。

「……よかった」

「……何がだい？」

「女性がいなくて、さ」

「……でも、女性だけの騎士団とかもあるらしいよ」

「……ほお」

「つたく、もうちよい緊張感持て」

「あいてっ」

コツンと軽く拳骨を落とされた二人を見て、選手たちは一斉に興味をなくしたように目を逸らした。

どうせ初戦で落ちる子供と考えたのだろう、侮ってくれたことにルークは内心ニヤリとほくそ笑む。

革手袋や貸与された剣の点検をする彼らを見ると、不意にキリトがすすすと鼻

を鳴らした。

「キリト？」

思わず名前を呼んだルークに答えず、キリトは壮年の剣士達が座る椅子に歩み寄る。

それから一通り、鼻を鳴らしながら椅子の周りを練り歩いた。当然参加者たちは怪訝な顔をするが……

それに構わず、一周してきたキリトは二人のところへ戻つてくると、耳元に顔を寄せてきた。

「顔を動かすなよ。あの二列目の長椅子の一番奥に座つてる、衛兵見習いの制服を着たやつを見ろ。一瞬だけだ」

二人は内心首を傾げたくなりつつも、言われた通りにちらりとそちらを見る。

そこに座るのは、砂色の髪をやや長めに垂らし、赤褐色の生地にザッカリアの紋章が小さく入ったチュニツクを着た青年。

一見してあまり強くは見えなさそうなその青年に、しかしキリトの勘の良さを知っているルークは何か意味があると思う。

「え……知り合いかい？」

「……何か気になることがあるんだな？」

「ああ……もし当たったら、気をつけたほうがいい」

この時点では要領を得ない忠告であるものの、二人は彼の言葉を胸の中にとどめておいた。

三人は受付窓口に向いて番号札を剣と革手袋に変えてもらい、問題がないことを軽く確認しておく。

それから然程時間を置かず、正規の制服に身を包んだ四人の衛兵たち……受付にいた男もその一人だった……が部屋に入ってきた。

腰に剣を吊り下げた彼らは、誰も座っていないなかった椅子の側に立つと、内2人が手に抱えた二つの箱を強調する。

「この箱には1から14までの数字が書かれた玉が二種類ずつ入っている。

白と黒の玉が入っている右の箱が北と南の組、赤と青の玉が入っている左の箱が西と東の組だ。

白の玉を引いたものは北、黒の玉を引いたものは南の組。同じように赤の玉を引いたものが東の組、青の玉を引いたものが西の組に組み分けされる。

諸君らには今から、箱の蓋に開いた穴から手を入れて、一つずつ玉を取ってもらう。数字の順に演舞を始め、残った八人が本戦へ出場だ」

蕩々と衛兵がこなした説明を聞いて、三人は心の底からほっとした。

こういう決まりなら、少なくとも一人は被ることはない。後の二人が同じ組にならないければ万事解決だ。

「俺が右の箱に行く。お前らは左の箱だ」

「了解」

「うん、わかった」

素早く相談を済ませ、ルークはこの場にいる誰よりも早く右の箱の前に立つ。

少し気になって直径十センチほどの穴を覗き込むと、特殊な神聖術が使われているのか中は見えない。

とはいえ、既に何の気兼ねもないルークは迷いなく手を中に入れ、そして一番上にあった玉を掴み上げた。

「白の……3番か。よし、ではこちらに玉を」

「はい」

衛兵に玉を渡し、ふと隣にいるだろう二人を見る。

どうやら先に選ぶのはキリトのようだ。やや慎重に、少し強張った表情で手を箱に差し入れる。

しばらく悩むように腕を動かし、途中ピクリとして、やがて引き出した手の中に収まっていたのは……青い玉。

西ブロックに決まったキリトに対し、次に進み出たユージオも同じような表情で箱の中を探った。

「……………っ」

高鳴る心臓のあたりを手で押さええながら、固唾を吞んで見守る。

1秒が1分に感じるような極限の緊張の中、やけにスローモーションでユージオの手が外に出てきて――

「あ……………」

「……………赤」

「っしー！」

最初にユージオが声を上げ、キリトが玉の色を告げる。その言葉にルークは小さくガッツポーズをした。

ユージオ自身も安心したのか、口元に淡い笑みを浮かべている。最大の懸念事項を乗り越えたのだ。

三人に続いて次々と皆が玉を引いていく中で集まった三人は、揃って目を輝かせながらはしゃいだ。

「やったなー！」

「ああ、これで心置きなく戦えるぜ！」

「三人一緒に優勝しよう！」

そう言つてがっしりと手を組み合わせる三人は、これから始まる大会に闘志を高めていた。

有り余る熱意を胸に抱いた彼らが、果たして勝利を手にすることができるとか。その行方はまだ誰にもわからない。

しかし、すぐに明らかとなることだろう——彼らが願ひ続けるのなら、望むように。

ザツカリア剣術大会 後編

ザツカリア教会の《時告げの鐘》が、正午の旋律を響かせる。

高らかな音色に、集会場の観客席を満杯にするほどの観客達が一斉に歓声をあげた。共に拍手とケムリ草の破裂音が響く中、総勢五十六人の参加者達が二列縦隊の形をとって試合場に入場する。

参加者達は、四つある舞台の前でそれぞれ二つに分かれ、十四人ごとに東西南北に分かれていく。

そして全員が舞台上上がると、南側の貴賓席に陣取るザツカリア領主の一族に一礼。

「ザツカリア現領主、ケルガム・ザツカリア五等爵氏である」

審判席に座る衛兵のうち、全体の進行を取り仕切る男がそう言つて、領主が登壇して演説を始めた。

少し長めのそれが終われば、焦れたように短い拍手を観客が送った。

現金な反応だな、とルークは小さく笑う。

「では、これより各組の選抜予選を行う！ まずが一番、前へ！」

そうしてようやく、大会が始まった。

くじで引いた順番通りに、十四人の参加者の中から八人を選び出すための《型》の演舞が開始される。

評価項目は、剣の軌道、足捌き、手捌き。それらの動きの正確さ、勇壮さ。そして美しさだ。

(……キリトのやつ、本当に平気だろうか?)

「では三番の参加者！ 前へ！」

「っ、はい」

生来の世話焼きな気質で、直前に詰め込んだ弟分を心配しているうちに、自分の番が回ってきた。

気持ち切り替え、堂々とした足取りで前へ出る。胸を張り、自信に満ちた瞳で一礼してから抜剣した。

「では、始め！」

「ふう……はっ！」

台図に従い、ルークは舞台の上で舞う。

型一つにつき十秒、合計百秒。それが参加者に与えられた時間だ。

「せいっ、はっ！」

ルークは残りの時間を頭の中で刻みながら、慎重に、かつ見事に練習通りに演じていった。

その美技とも呼べる完成度の高さに、おおっと観客たちは簡単の声を漏らす。審査員たちも稀に見る完璧さに目を見張った。

他の参加者たちに比べ、年若いルークにそこまでの反応が上がるのには、彼の容姿にも起因する。

本人はあまり自覚がないが、ルークは顔立ちが整っているし、手足はすらりと長く、かつ逞しい体つきだ。

鍛え上げられた体から繰り出される完成された《型》は、それだけで十分に見ものである。

「——そこまで！」

「ふう……」

最後まで見事に演じきり、深く息を吐いたルークは鉄剣を鞘に納め一礼した。

万雷の拍手が送られて、ルークは気恥ずかしさを抑えるために肩にかかったおさげを

いじりながら元の場所に戻った。

そうして元の場所に戻ってきて間も無く、次の番号の参加者が呼ばれ、次々と演舞を披露する。

「「うおおっ!?!」」

順調に予選が進み、いよいよ十番台の選手が呼ばれようかという時だ。

悲鳴とも、歓声とも取れる声が観客席中からあがり、共に暴風と言つていい風が吹き荒れる。

「な、なんだ?」

ざわつく他の選手同様、困惑したルークは西側の舞台へと目を向けた。

すると、そこにいたのは型通りに剣を振り切った体勢のキリト。

さしもの彼や、東側の舞台にいたユージオがキョトンとする中で、さらにキリトは剣を振るう。

その瞬間、また暴風がルークの前髪と後頭部のおさげを激しく揺らした。

同時に観客からまた声上がるが、しかしそれは先ほどよりも歓声の色合いが強いも

ので。

「はは……マジかあいつ」

それらを総合し、ルークは呆れた笑いを浮かべた。

とどのつまり。あのとんでもない弟分は、またしてもとんでも無いことをやらかしているのだ。

その後の演舞も、十秒あるはずがほぼ二秒で終わらせ、一つ型を披露するごとに観客席が湧く。

いくら完成度が高く、美しくとも、結局は何十年と続けられてきた同じ動きの見物だ。

そんな中で、あのキリトの突拍子もない行いは実に見応えのあるものだろう。ルークも笑いそうだ。

そして遂に最後の型を披露して、剣を鞘に抑えて一礼した途端、割れんばかりに拍手と喝采があふれ出した。

「くくっ、相変わらずお前はとんでもないな」

会場そのものを揺らすそれに、同様に拍手を送りながらルークはぼやく。

その後、東側の舞台からすっ飛んできたユージオに説教されているキリトを見てさらに笑ってしまう。

「はは……っ？」

そして、ふと二人の向こう側……西側舞台の奥の観客席に目がいく。

そこには先日の約束どおり、ウォルデ農場の人物たちが応援にやってきている。

だが、そこではない。ルークが気になったのはその隣、一家のすぐ隣にいる人物。

こちらを……ルークをじつと見つめる、フードのついたローブですつぽりと体を覆い隠した人物だ。

「あれは、さっきの——」

次に瞬きした時、しかしそこには誰もいなかった。

小さく息を飲み、優良な眼力で注視するものの、そこにはやはり誰もいない。

「……っ？」

見間違いか、とルークは自分のことを疑わざるを得なかった。

ルークが頭をひねっているうちに予選はどんどん進み、予定通りに午後二時の鐘とほぼ同時に終了した。

再び舞台の上へ上がって整列した参加者の中から、審査員の代表者が彼らの前で本戦出場者の名前を番号を読み上げる。

その中には当然のように、ルーク、キリト、ユージオの名前もしつかりとあった。

わずかな不安の払拭と有り余る歓喜に、肩を落とした二十数名が退場して、本戦出場者のみが残る。

「「いよっ！」」

場内の待機所へ入った途端、三人は同時にガッツポーズをした。

「やったな二人とも、まずは第一関門突破だ！」

「お前がおかしなことをしてかした時にはヒヤヒヤとしたよ、キリト」

「はは、なんにせよ予選を通過したんだ。堅いことは言いつこなしだぜ」

ポンと肩を叩くルークに、本人もそう思っているのかユージオもまあね、と笑った。

そんな彼らを含め、深井戸で冷やしたシラル水と軽食が配られる。ここから三十分の休憩だ。

観客達も一息をつく中で、三人は改めて念のために本戦の形式を確認し合う。

「いいか、試合は絶対に寸止めをしなければならぬ。相手の天命を減らすことは禁忌だからな」

「ああ、だからこそ格式張った《型》を重んじてるって話だっけ？」

「そうだね。そうすることで不慮の事故を防いでるんだ」

「お前らも十分気をつけろよ、何せ俺らは……」

他の選手達より、圧倒的に武具を扱う力が強い。

もしルークが外側の人間であれば、オブジェクト操作権限と呼称するそのことを言外に指摘する。

本来であればそれなりの重さがあるのだろう鉄剣も、三人にとっては中身が空洞の枯れ枝に等しい。

それは何も良いことばかりではなく、その分人が相手であった時に簡単に傷つけられてしまうということだ。

「昔、この大会であまりに白熱した結果天命を損ずる事件があつた。それからこのルールは絶対厳守として受け継がれている」

「わかっているって。要するに、相手に怪我させる前に速攻で勝負をつけなければいいんだろ？」

「やっぱり、どこからそこまでの自信が湧いてくるのか、僕には見当もつかないよ……」
ルークが抜け目なく規則を確認し、キリトが不敵に笑い、そしてユージオが呆れる。

もはや一連の流れとなったやり取りを行い、予選を突破したことで発生した脱力感を補っているのだ。

「あれ、シラル水がなくなつた」

「こつちもだね」

「じゃあ俺が水筒を返してくる」

「サンキュールーク」

「ありがとうルーク」

「お安い御用さ」

軽食を食べ終わるとほぼ同時に空になった三つの水筒を手に、ルークは席を立つ。

そうして衛兵に返却しに行こうとした瞬間——ふと背後に誰かの気配を感じた。

「動かないで。視線はそのまま、ゆっくり前に進んで」

「……あんたは、もしかしてさっきの」

背後から聞こえる声は、年若くも年老いているようにも聞こえた。

だが、言葉遣いから女性であると判断し、ルークは言われた通りにゆっくりとした足取りで歩きだす。

「こんな会場のど真ん中にいていいのか？ それにわざわざ逃げたのに、俺に何の用だ？」

「私の姿は神聖術で隠している。同様に声も聞こえないわ。ここに来たのは、あなたに聞きたい事があるから」

「……なるほどな」

いくつつかのことを、短い会話で理解する。

まずこの人物は、ルーリッド村にいるセルカヤシスターよりもさらに上の神聖術使いであること。

当然のように姿を現した理由を述べたことから、先ほどの路地にいた人物で間違いな
いこと。

そして声や、姿すら見られないながらも感じる雰囲気から、こちらに害意を抱いてい
るわけではない、ということ。

「先ほどは不慮の事故だった。偶然見つかってしまったから逃げたわ」

「へえ。で、今になって出てきても良いって思ったのか」

「そうよ……私があなたに聞きたいことは一つだけ」

「それは？」

「——何故あなたは、あのオブジェクトを解凍できたの？」

「……は？」

何故ここで神聖術の式句の一部を？ それに解凍とはなんのことだ？ と内心で首
をかしげる。

ルークの困惑を見て取ったか、背後の人物はハッとフードの中で息を呑み、言葉を選
び直す。

「ごめんなさい。もう一度聞いわ。何故あなたは、あの剣を抜く事ができたの？」

「——どうして俺の剣のことを知っている？」

あれを知っているのは、キリトとユージオ、そしてルーリッドの村人たちだけだ。

それを既に抜く事ができる、という所まで知っているのは、先の二人に加えてセルカ、そして母のセフィアのみ。

ごく限られた人物しか知らないこのことを、どうしてこの人物は知っているのだろうか。

「そうね……私にもわからない。けれど、これが私の目的であることはよく理解している」

「……よく分からないな。キリトみたいに記憶喪失なのか？」

「それは今は関係ないわ。質問に答えるだけでいい」

どうやらこんな簡単なカマかけには引つかからないようだ。

あるいは失ったキリトの記憶に関連する何かを引き出せるかもしれないと思ったが、
案外用心深い。

すぐに腹の中に隠した目的を諦めて、次の言葉を考える。衛兵のところまであと数メートルしかない。

「なんで抜けたのか、か……俺にもよく分からない。ただ守りたいと、そう願った時にあれは応えてくれた」

「私が聞きたいのはその先よ。どうしてあなたは、そこまで他者を守る事ができる?」
「どういう意味だ?」

「確かに、そのような道徳を最初に彼らは教えた。けれど、自分の命を失う可能性まであったとしても他のユニットを守護する、という目的を自発的に選ぶような精神構造は、この段階で発生することはほぼあり得ない」

「またしてもその人物の言葉は理解の難しいものとなった。」

「彼らとは誰だろうか。どうしてこの人物は、先ほどから神聖術の式句を交えて話すのだろうか。」

「——そんなことはないさ。俺も、キリトも、ユージオだって、セルカを助けるために命を賭けた」

「疑問は尽きないが、けれど一つだけ明確に答えられる質問があった。」

「けれど、彼らにあの剣は抜けない。最初に誰より強くそう願ったあなたに、その権限は与えられた」

「だとしたらそれは、恐れたからだ」

「……恐れ?」

「また妹分を失うことを恐れた。大事な弟分の意思を妨げることがを恐れた。そして怯えて動けないことを何より恐れた。その恐れを振り払うために、俺は守ることを選んだ」

今でも時折、あの夢を見る。

最初にアリスが消え、■■■■が消え、そして……ユージオに裏切り者と罵られる。

忘れるなど、お前のしたことは消えてなどいないと、そう自分自身に言い聞かせられるように。

追いかけても掴めないのは、もう嫌なのだ。

失いたくないものを目の前で奪われるのは、もう嫌なのだ。

何より、動けないことに諦めて、立ち止まる自分を肯定するのが嫌だった。

「だから守る。キリトも、ユージオも、どこかにいるアリスも、あいつらを脅かす全てから」

「……たとえ、全て無駄に終わるとしても？」

「無駄にならないように、俺はここにいるんだよ」

もう、諦めないと誓ったから。

歩き出すと決めたから。

あの二人と夢を叶えるために、一步踏み出したから。

「……そう、そうなのね。あなたは、それほどまでの『意思』を……」

「お前の目的が何かは知らないが、俺の邪魔をするなら……」

「いいえ。私はあなたを見守るわ」

「……は？」

「あなたなら、あるいは《A. L. I. C. E》にさえも……なれるかもしれない」

「何を言ってる……」

「修剣学院までいらつしやい。そこで待っているわ。それまでこれは、あなたに預けておく」

そつと先ほど拾ったものが入ったポケットが撫でられ、そして気配が消えた。

バツと後ろを振り返るが、そこにはもう誰もいない。

奇妙な行動をとるルークを他の参加者が怪訝な目で見た。

「……修剣学院、か。ああ、行ってやるさ」

(もちろん、あいつらと一緒に)

小さく呟いて、ルークは必ずこの大会を勝ち抜くことを固く決意した。

ミステリアスな先輩

ザツカリアの街での剣術大会に三人で最後まで勝ち残り、衛兵隊に入り、いつか央都へ上る。

そう決意し、剣術大会に参加してから早いもので一年半が経過していた。

ルーリッドの村を出てからの時間を合わせれば、もう二年。気がつけば随分と月日が経っていた。

農場に住まわせてもらいながら半年間大会のために修練し、それから後の半年は衛兵隊で仕事に励み。

キリト、ユージオ共に推薦状を見事勝ち取ると、修剣学院の門を叩いたのが一年前のことだ。

学院に入ってから、朝九時から午後三時までの学科授業と実技訓練に精を出した。

そこに加えて、帝立修剣学院の初等錬士は高等錬士の上位十二名、上級修剣士の《傍

付き》をする義務がある。

暇を持て余していた門番の仕事が恋しくなるほどに忙しい日々だが、ルークはそれを苦には思わない。

自分たちの目標のためには、ほんの少しでも多くの力が、知識が必要なことから。

「しすてむ・コール……うーん、システムコール、か？」

そしてルークは、今日も今日とて修剣学院内にある図書館にて一人勉強に励んでいる。

村の掟や、禁忌目録を暗記するほどに勤勉な彼は、ここにおいても努力を怠ることはない。

学科項目の一つである神聖術は、これまで剣の修練一辺倒をしてきたせいも、やや苦手な部類だ。

そのため、こうして放課後に自主的に図書館に赴き、神聖術の教本と睨めっこしていた。

有り余る熱意のせいも、初等錬士の宿舎の門限を軽く破っていることに関しては、まあご愛嬌だろう。

その熱心な姿勢に、図書館を管理する学院に所属する司書も騒がない限りはそれを黙認しているほどだ。

「んあー、イメージが大事って言われてもなあ……」

が、そのうち集中力の限界がやってきて机に突っ伏した。

図書館に所蔵された本はすべからく貴重品だ、破損させることは学院の規則に反するので横にずらしてある。

もしもここに弟分達がいたならば、積み上げられた教本に埋もれて撃沈したルークに苦笑したに違いない。

「神聖術を使うための力はあるはずなんだけどなあ……」

交差させた両腕の上に額を乗せ、誰に聞かせるでもない愚痴を零す。

二年前の一件で、ルークは武具を扱う権限のみならず、神聖術を使う力も大幅に増した。

しかし、幼い頃から学んできたアリスやセルカのように勉強していたわけでもなく、うまく扱えない。

実技も學術も一級品、しかし神聖術だけが平凡。

学院の教師達もそのような評価を下しており、この一年を通してのルークの悩みでもある。

はあ、とあまり上達しない自分の腕に顔を上げながらため息を吐くと、その拍子に前髪が揺れた。

「……そういや、随分と伸びたな」

「そうだね。まるで女の子のようだ」

「うわっ!？」

突然声が出たと思ったら、視界が何かで塞がれた。

びくつと体を浮かせながらも、突然暗闇の中に誘ったそれがやけに覚えのある感触だとわかる。

少しして、それが前髪と同様にかなり伸びた、一つにまとめた後髪だと気付いた。

そして、それを使ってこのような悪戯を仕掛けてくるのは、ルークの知己にはただ一人だ。

「……『ルル先輩』、またですか」

「ふふ、本当に長いものだよ。髪の毛の結び方を教えてあげようか？」

クスクスと楽しそうに笑いながら、後ろにいる人物はルークのおさげを手放す。

途端にひらけた視界には、窓から差し込む斜陽でオレンジ色に照らされた机と本の山だけ……

「門限。もう過ぎてるんじゃないかい？」

かと思った途端、視界の右側からひよっこりと現れる一人の女性。

「……承知の上です」

「おや、不真面目な優等生さんだ」

微笑みながら顔を引いた女性に、ルークは上半身ごとそちらに向き直る。

そこに立っているのは、まるで女神かと思間違うほどの美貌を持つ女性。

美しいと可憐のちょうど中間にいるような完成された美貌に、アメジスト紫水晶の如き静かな瞳。

左に向けて長く、斜めに切り揃えられた前髪は左目を隠し、同じように左側が長い肩口ほどまでの髪がさらりと揺れる。

身長は168センチ程度、濃紺のスカートとそれより少し明るめの紺に基調された上級修剣士制服に身を包んでいた。

細く手折ることさえ叶いそうな体は、しかし少し膝上のスカートから覗く、しなやかな脚より鍛えられていることがわかる。

名をルルディ・クローマ。

上級修劍士第三席にして、ルークが傍付きを務める女性……つまり《先輩》だ。

「今頃、君の弟君の一人もリーナと門限破りの真つ最中かな？」

「いや、本当に弟つてわけじゃ……でも、そうだと思います」

「ふふ、揃つて不真面目さんというわけだ」

くすくすと笑い、学院本校舎の近くにある屋内修練場が内接された塔の方を見るルル
デイ。

つられてルークもそちらを見て、上級修劍士次席の女性にしごかれていたであろう黒い
方の弟分を想像した。

少しすると彼女はこちらに視線を戻し、こてんと首を傾げるとルークの手元にある教
本を覗き込む。

「まだ神聖術は苦手？」

「はい。どうも合わないみたいで」

「この髪からは想像もできないほど、劍の振り方は力強いのにね」

「ちよ、遊ばないでくださいよ」

ルークのおさげをひよいと手に取り、椰揄うように揺らすルルデイ。

キリト達や、村の同世代たちには兄貴ぶれるルークだが、ルルデイを相手にはどうも調子を狂わされる。

独特のペースと、年上の女性特有の余裕のようなものを醸し出す彼女は、彼を年相応の少年にするのだ。

「どうせなら、私が切つてあげようか？ 修練をするにも邪魔だろう？」

「え、いいんですか？」

「いつも懸命に傍付きの仕事をしてくれる君へのお返しということでしょうか？」

至近距離でにこりと笑うルルデイに、ルークは考え込む。

背中の中ほどまで伸びたそれは、指でつまんで、目の所まで回されても違和感を感じないほど長い。

村にあったものよりも宿舎の風呂場の石鹸が上質なので、艶やかさが増しているのがなんとも皮肉だ。

「本当に、そんなことをしていただいても……」

「おや。もしかして特別な相手がいて、私には髪を切らせたくない？」

「いや、そういうわけじゃないですけど」

単純に村にいた頃はセフィアに切ってもらっており、年頃の女性に触られる想像が新

鮮なだけ。

そも、自分でも不思議なほどに異性に心を惹かれたことがないのだ。無論のこと男も、である。

それを知ってか知らずか、揶揄い好きの先輩にルークはなんとも言えない苦笑いを浮かべた。

「じゃあ……恐れ多くも、お願い致します」

「はい、承りました。それじゃあ明日の《休息日》に、上級修剣士の宿舎にある私の部屋にいらっしやい」

軽くルークの肩を叩き、腰の後ろに手を回したルルデイはその場を去った。

「ほんと不思議な人だなあ」

この一年で何回言ったかわからないことを口にする。

このノーランガルス北帝国では、貴族の位が《一等爵士》から《六等爵士》という六つに分かれている。

一等爵士に近づくほど上級貴族とされ、それに比例して選民意識、と言うべき意識が強くなる傾向にある。

その言葉の意味を、この学院に入ってから自分たちを目の敵にする連中のおかげでと

てもよく実感している。

そしてルルディは二等爵氏であるクローマ家の次女なのだが、そうとは思えないほど気さくだ。

辺境の村人であるルークにも気軽に接し、これまで数度《休息日》を共にしたこともある。

もつとも、その爵位と先の経緯から剣士として、また人としての敬意以上を持ち合わせてはいない。

しかし、あえて第三席に甘んじているような実力の底の知れなさに興味を惹かれていた。

さらに……彼女には、ある「噂」がある。

「学院で初めての上級修剣士次席の生まれ変わり」、か……」

クローマ家。

このノーランガルス北帝国が生まれた当初からある古い家であり、何人も名剣士を輩出した家系。

その中でも彼女は、家督を継ぐ長女でないにも関わらず、それと同じほどの知名度を

持つ。

というのも、この修劍学院が創立された当初の話だ。

その初期の修劍士には勿論、クローマ家も名を連ねていた。

そして彼女は、当時在籍していたクローマ家の子女、上級修劍士次席と瓜二つの容姿をしている、というのだ。

おまけに劍術、神聖術どちらもその祖先と遜色がない……否、同等の力を誇るのだという。

だというのに第三席である事とその美貌から、殊更に彼女をこの学院の有名人にしていた。

「時々、先輩とか同じ初等鍊士のやつらの目が怖いんだよなあ……」

そんな女性に、八割が貴族である初等鍊士の中からあえて平民が傍付きを指名された。

地位のある彼らではなく、平民の、おまけに田舎者が選ばれたら、当然のようにやつかまれる訳で。

年に一度ある、鍊士の順位を決める試験で上位にいるからいいものの、これで実績が

なければ……

「……考えたくもないな」

座ったままに体を抱き、ぶるりと震える。

その拍子に足を動かし、ポケットの中にあるものが軽く太腿に食い込んだ。

その感触にルークは中を手探りをし、そこからあるものを取り出す。

「結局、まだ会えてないな」

手の平にあるのは、ザツカリアでの剣術大会あの日から肌身離さず持つ宝石の飾り。

ルークが丁寧に手入れをしているからか、一年半という長い月日が経過しても天命が減る様子はない。

いつまでも美しく輝く、四つの花卉を持つ花を象った宝石の持ち主は、未だ一向に見つかる気配がない。

「まあ、あと一年ある。のんびり探すとするか」

言外に、整合騎士になるために必要な大会に出場するための資格、上級修剣士の上位4名になると口にする。

(あと少しだ。やっとここまでやってきた)

あとほんの一年だ。

それでルークは、あの二人と一緒にアリスを探しにセントラル・カセドラルに行くことができる。

「おっと、もう今日は行き詰まってるし早く帰ろう」

飾りをポケットに戻し、厳格な寮長の顔を思い出してそそくさと立ち上がる。

素早く使った教本を全てまとめ、正確に元の棚に戻して、史書に礼を言ってから図書館を出た。

外はもうすっかり夕暮れ時だ。

一分一秒でも早く寄宿に帰還すべく、全力で手と足を動かして疾走した。

その道すがら、この学院のどこからでも見える白亜の塔がちらりと視界の端に映り込む。

公理教会セントラル・カセドラル。

人界そのものを隔てる《不朽の壁》で北、南、西、東の四つに分たれた央都セントリアの中央に位置するそれ。

途中から雲で隠れ、先端が見えないほどに長大なそれこそが、やがて自分たちが足を踏み入れる場所だ。

「はっ、はっ……ふう、到着」

カセドラルに住まう整合騎士や、《司祭》、《元老》などの名を思い返す内に、目的地に辿り着く。

息を整え、古めかしい石造りの二階建て宿舎を見上げる。

緑色のスレート葺き屋根のそれこそが、初等錬士百二十人が寝起きする初等錬士寮である。

一瞬、幼い頃の抜け目のなさを發揮して窓から入ろうかと考えるが、規律の厳しさを思い出して断念する。

「おーい、ルークー！」

「ん？ キリトか」

さて、寮長の雷をどう受け止めるかと考えていると、後ろから弟分の声が聞こえた。振り返ると、上級修剣士寮の方角から走ってくる少年が一人。

数秒でルークの前にやってきた少年……キリトは、出会った頃より幾分か背が伸び、体つきも良い。

「おう、ソルテイリーナ先輩に絞られてきたか？」

「ああ、たつぷりな。他にも色々……それより」

「ああ……こうなったら一緒に行くぞ」

既にこれから先のことを察しているのだろう、無駄に真剣な顔つきのキリトと頷き合
う。

なんともくだらない協調性を発揮した二人は、揃って生真面目な顔で察に入ってい
た。

貴族

「ルーク初等錬士、ただいま帰着しました！」

「同じくキリト初等錬士、帰着しました！」

「……刻限から三十八分も遅れています！」

やや硬い声で報告した二人に、入ってすぐの受付の前で立っていた女性は冷徹に告げた。

この央都セントリアも、他の町や村と同じように一時間と間の30分刻みに鳴る《時告げの鐘》で時を知らせる。

小型の時計のようなものはこの修剣士学院にも存在せず、細かい時間は確認できない。

だというのに、彼女——初等錬士宿舎寮監アズリカは正確に二人の刻限からの時間破りを指摘した。

鋭く細められた冷たい目に、キリトはリーナについて行った実践演習で戦った怪物の前に立ったような気分になる。

「図書館にて、クローマ上級修剣士殿に神聖術の指南を施していただきておりました」

ゴクリと生唾を飲み込んでいる弟分に代わり、ルークがやや慎重に理由を述べた。

「……そうですか」

ほとんど表情を変えず、アズリカはルークの顔を凝視した。

疑い深いその視線に、ルークは至極真面目な顔で見返す。

堂々と誤魔化しをしたルークであるが、これには少し理由がある。

ルルデイは、ルークが勉強をすることで刻限破りをしているときに限って、必ず図書館に現れるのだ。

そうしてルークを揶揄い、時折神聖術についてのアドバイスを与えて去っていく。

まるでルークの刻限破りの口実をわざと作っているような言動だ。事実、彼女もそのつもりだとこの一年で確信している。

ここ数年ですっかり生来の抜け目のなさを取り戻したルークは、そんな心優しい先輩の気遣いを存分に活用していた。

「……わかりました。勉強熱心なことは構いませんが、今後気をつけるように」
「肝に命じておきます」

そのうち、フツと小さく息を吐いてアズリカは視線を外した。

小さく頭を下げ、ルークはちらりと横にいる弟分に目線をやると頑張れとアイコンタクトする。

途方にくれたような目で見返してくるキリトに内心苦笑いするルークであった。

「キリト初等錬士？」

「は、はいっ！ ソルティリーナ上級修剣士殿に指導時間の延長を指示されました！」
ブルーグレーの瞳でびしやりと言いつけたアズリカに背を直し、キリトは口早にそう言う。

アズリカは少しの間ルークに向けていたものと同じ視線を向け、それから決まり事のように嘆息した。

「修剣士の指導を受けるのは傍付きの義務。やむを得ないと判断しますが……」

「……しますか？」

「しかし、あなたの場合をそれを義務ではなく、刻限破りの許可証か何かだと思っているのでは……という疑いを、この一年ついぞ晴らせませんでしたよ」

キリトは礼を解き、ぎこちない笑みを浮かべると右手を頭の後ろに持っていく。

わりとそれに甘んじているルークにも耳の痛い言葉だった。無論、顔には出さないが。

「い、嫌だなあアズリカ先生。俺の目的はただひたすらに剣技の練達であつて、まさかまさかそんなことは……」

「なるほど、良い心がけですね。ではその成果を確認してあげましょうか？」

キリト、二度目の硬直。

彼女は《天職》こそ《北セントリア帝立修剣学院・初等錬士寮寮監》であるが、同時にこの卒業生だ。

狭き門である修剣学院の卒業を果たし、さらには学院の中に教師という立場で残っているほどの存在。

そこに、寮則違反ギリギリの行為をした生徒に恐ろしい指導をする——という噂も加われば、誰もが恐れる寮監の完成だ。

「い、いえ、まだ一年目がやつと終わったところですから、それには及びません」

「そうですか。では一年後、全てを終えたあなたに改めて結果を見せてもらいましょう」
なんとか逃れようとしたキリトであったが、そこまでアズリカは甘くなかった。

固まった表情で「は、ハイ、ゼヒ」と答えたキリトとともにあと少しで食事であることを告げられ、二人は部屋に向かった。

「はああく……毎度毎度おつかないよ」

「ハハツ、災難だったなキリト」

「おいっ、そう思うなら少しくらいフォローしてくれたっていいじゃないか！　なんでお前は少しだけ対応が優しいんだよ！」

「そんなことないぞ？　それにこれは、だらしのない弟分を立派にしようという俺の真心であつてだな……」

「嘘つけ、さつきちよつとにやけてたろ！」

キリトの追求をのらりくらりとかわしながら、二階の206号室へと寮則すれすれの速さで走る。

その部屋はルークらを含む平民の集められている十人部屋で、一つ下の階の106号室が女子用の部屋となっている。

それ以外は貴族や豪商などの子息子女の部屋であり、つまりは肩身の狭いもの同士で助け合う小規模コミュニティである。

ほんの数分で部屋の前に辿り着き、ルークが扉をあけて二人とも部屋に入った瞬間――

「遅いよ！　キリト！　それにルークも！」

アズリカよりは幾分か優しい、そんな声が響いた。

発生源は、二人と同じく初等錬士の制服に身を包んだ亜麻色の髪の少年……否、もう青少年と言えるユージオだった。

右奥のベッドに腰掛ける彼もまた、キリトと同じように身長が数セルチほど伸び、体つきも逞しい。

今年でもう19歳になる彼は、村を三人で旅立つてからの二年間、全く変わることなく純真で、そのまま頼もしくなり。

二人を見るグリーンの瞳の輝きは、決して歪むことなくルークたちを安心させた。

「悪い、だいぶ待たせたな。リーナ先輩の稽古が特別厳しくてさ……」

「まったくもう、今日が最後だからわかるけど……まあ、僕もロツソ先輩と話し込んで結構遅れたんだけどさ」

「へえ、てつきり剣で話し合いだ！　みたいになるかと思つてただけだな」

「いや、ロツソ先輩はああ見えて——」

快活に笑いながら語るキリトと、呆れながらも微笑を浮かべて答えるユージオ。

そんな二人を、ルークは反対側に並んだベッドの一番奥に腰掛けて微笑ましそうに見守った。

色々嫌な目にもあつたが、それでも三人互いに互いのことを支え、こうしてなんとか過ごしてきた。

何よりもルーク自身が、そうられるように最大限の努力を重ねてきたのだ。

年に4回ある定期試験では上位3位の成績を収め、座学もその他の演習でも他に文句を言わせない実績を作り。

神聖術も、行使こそ苦手であるが、だからこそ人並み以上の豊富な知識を蓄え、その量で言えば初等錬士一だ。

そんな姿勢を教官や教師たちも気に入り、結果的に常に一緒にいるキリトとユージオをある程度守っている。

それでもやつかみを向けてくる輩もいるが、それは決まって平民風情が、という決まり文句から始まる。

それは、自分がルークより誇れるものがないからこそその負け惜しみだ。

それにいちいちカツカするほど生真面目ではないし、むしろ上手くあしらう方法を覚えられた。

上手く立ち回りながら、時折ルルデイに翻弄されて、一年という時を過ごしてきたのだ。

——イイン。

「つと……おい二人とも、そろそろ食堂に行くぞ」

ベッドの下の引き出しから響いた耳鳴りに、ルークは立ち上がって楽しげに話している二人に呼びかけた。

それで気がついたキリトとユージオは顔を見合わせ、そんな二人の肩を叩くと揃って部屋を出た。

206号室の場所が、食堂から一番遠いのは決して偶然ではあるまい。

またもや寮則の限界に挑むような早歩きをして、三人は食前のお祈りに間に合うために食堂を目指した。

朝と夜の七時までに食事を終わらせること、それが本来の原則であるが、しかしこれだけは外せない。

なぜならこれもまた、上級身分の方々に目をつけられないのに必要な“しっかり者の必要事項なのだ。

「なんとか間に合いそうだね」

「だな。上級修剣士の寮はもつとゆるくて自由みたいだから、後少しの辛抱だ」

「それはそうなんだけど、俺は一つ気になることが……」

「もしかして、傍付きのことか？」

ルークが聞くと、キリトはまるで腹痛でもするような顔で頷いた。

「ほら、自分がやる側の間はいいいけどさ、誰か指名するってなると……」

「確かに、そう考えるとかなり慎重になるよね」

「ま、変な相手を選ばないよう気をつけるんだな」

そうこうしているうちに、やっと目的地についた。

扉を押し開けると、ざわざわとした喧騒が耳に飛び込んでくる。

一階と二階が吹き抜けになっている食堂は、この百二十人が暮らす初等錬士寮で唯一の男女共用スペースだ。

大半が男子、固まっている残りの女子と、その女子と一緒にいる男子数人と、そんな比率だ。

三人は足早に階段を降り、カウンターで夕食のトレイを受け取って、隅に空いている席に滑り込んだ。

そこで寮長の男子生徒（高等貴族）が立ち上がり、号令をかけて全員で「アヴィ・アドミナ」と聖句を唱和した。

「今日は揚げた白身魚とサラダ、パンが二個か。うん、美味そうだ」

「まったく、昼の休憩に抜け出して蜂蜜パイを買っているのにまだ食べられるのかい？」

「スイーツは別腹なのだよユージオ君。なあルーク？」

「そうだな。金の無駄遣いをしない程度なら、たまにはいいんじゃないか？」

うぐつと苦悶の声を漏らすキリト。彼は週3回ほど学院を抜け出して《跳ね鹿亭》の蜂蜜パイを買い食いしている。

「ルークはすごいよね。もうかなりお金を持つてるんじゃないの？」

「ん、まあな。いつ必要になるかわからないし」

村で貯めた貯金と衛兵隊に入ってから稼いだ給料、そして学外で認められている央都民の手伝いの賃金。

そのほぼ全てを、ルークはいぎという時のために貯蓄していた。使うのは白剣の手入れ道具と日用品程度だ。

「おいお前ら、俺への当てつけか……」

「そう思うなら買い食いには控えたほうがいいんじゃない？　もう半分くらいじゃないの？」

「くうつ、可愛くないぞユージオー！」

「まったく羨ましい話ですなあ、ライオス殿！」

楽しい雑談に混ざる、耳障りな声の一つ。

「我らが汗水垂らして掃除した食堂に、後から悠々とやって来てただ食べるだけとは、いや本当に羨ましい！」

「まあ、そう言うなウンベル。傍付き錬士の方々にも、きつと我らには計り知れぬ苦労があるのだろうよ」

「それもそうですな。聞くところによれば、傍付きは言われるがままになんでもしなくてはいけないとか！」

「おお、恐ろしい。《禁令持ち》や平民出の者の傍付きなどにされてしまったら何を言われるかわかったものではないぞ！」

三人の後ろ、背中合わせの形に座った二人組。

如何にもといたたいやらしい笑みを浮かべ、これ見よがしに大声を張り上げる彼らは、当然のように貴族。

ルークたちにちよつかいをかけてくる貴族らしい貴族たちの、いわゆる“筆頭”である。

(言つちや悪いが、攻める隙のないルル先輩のことを言わないあたり、こいつらもなんと
いうか……)

姑息、という一言がルークの頭に思い浮かんだ。

「……………」

「我慢だよキリト」

色々と計算を施されたその嫌み(通算一年皆勤賞)に、二人の弟分が声を潜めて互いを抑制した。

彼らの言ううち、《禁令持ち》とはハイ・ノルキア流の継承を禁じられたソルティリー
ナのこと。

そして平民出とは、三人と同じく衛兵隊出身のユージオが付いている上級修剣士のゴ
ルゴロツソのことだ。

二人とも、それぞれの先輩を心から尊敬しており……

「おや、この汚れはどうしたことか!」

そんな弟分たちを馬鹿にされて、ルークが黙つていようはずもなかった。

「ルーク？」

「あつ……」

声を上げるユージオと、何かを察してニヤリとほくそ笑むキリト。

それとは対照的に、笑みを浮かべていた二人は不快げに顔を歪めた。

「よく見ればこの机、埃が少しばかり残っているじゃないか！ いやあ、この食堂を掃除した貴族の方々はやつぽど仕事熱心だったと見える！」

「……おい貴様、平民風情が俺たちを」

「やめろ、ウンベール」

ライオスが諫めるが、すでに遅い。

沸点の低いウンベール……後ろに髪を流して固めた方……の睨みつけに、ルークはにっこりと笑った。

「おや、どういたしましたジーズック殿？ 俺の独り言に何か意見があたりで？」

「貴様ツ……」

目線だけで殺さんと言わんばかりに睨みつけるウンベールだが、それ以上何も言えない。
い。

彼らは先ほど、「後から悠々とやって来て」と言うことで三人を限定し、罵倒してきた。

それとは反対に、ルークは「掃除した貴族の方々」としか言っていない。この八割が貴族である初等錬士の中で、だ。

つまりここで嘔み付けば、自分こそがそうだと白状するようなもの。

瞬間湯沸かし沸騰器のように頭に血が上っているウンベールでも、その程度のことはい理解できた。

「……フン」

故に、ウンベールはそのまま前に姿勢を戻す。

ルークはそれを見届け、そのタイミングでちらりと視線だけを寄越したライオスにも笑顔を送った。

「……チツ」

それからようやく、自分を挟むように座る二人を見ると……何故かその手が自分の皿に伸びている。

視線を落とせば、白味魚の揚げ物の切れ端が二つほどある。

明らかに両隣から付け足されていた。

「ありがとね、ルーク」

「お前はいつも頭が切れるな」

「……つたく、ちゃんと食わないといつまでも俺の身長を抜けないぜ？」

皮肉げに言いながらも、優しい弟分たちにルークの口元は弧を描いていた。

休息日 前編

道が続いている。

「……………」

それは、子供の頃幾度となく、幼馴染み達と一緒に歩いてきた道。

ああ、またこの夢か。

そう思う泡沫の意識は、けれど二年前よりもずっと穏やかだ。

何故ならこの夢は、あの悪夢ではないのだから。

「あれは……………」

いつものように前を向く。

するとずつと先に、仲良く手を繋いで村に向かって歩く、小さな三人の子供がいた。

自然と足は一步先の地面を踏みしめ、ほとんど成熟した体でルークは走り出す。

「■■■■、ユージオ、アリスッ！」

声は太く、躍動する体は逞しく。

かつての悪夢と異なり……否、あの夢の最後よりもずっと強くなったルークは大切なものへと手を伸ばす。

修剣学院の制服に包まれた腕は、あの二人の弟分を押しさえつけた頃よりずっと長く、遠く届いて。

「俺は、俺はもう二度と、お前達の手を——！」

走る、走る、走る。

力不足だなどと嘆かない。もう届かないだなんて言わせない。

だって自分は、セルカに約束したのだ。

あの二人と一緒に、自分はアリスを——

キイイインツ!!

清涼な音が響いた。

それは、あと少いで三人に触れられたはずだったルークの手を阻む。

「っ……っ！」

立ち止まったルーク。

行方を阻むものを鋭く睨むと、それは地面に強く打ち付けられた、純白の剣の鞘であつた。

そして、それを持つだろう者の足元は、鎧と公理教会の聖十字が刺繍されたマントに包まれている。

ああ、またなのか。

また騎士が、民を守るはずのお前達が、自分のささやかな願いを阻むのか。

そう思い、勢いよく顔を上げて睨みつければ――

「っ、おまえ、は――」

「……………」

静かにそこに立つ一人の騎士。

その目は静かに――同じ色のルークの瞳を見つめ返してきた。

「どうして、お前が……!」

そして、先を言おうとした瞬間——世界は暗闇に閉ざされる。

「ツ!」

周りを見るも、道も、木も、吹き抜ける穏やかな風さえもそこには存在しない。

——若者よ

その代わりとでも言うように。

ルークの背中から、生暖かい風が——いいや、何者かの大きな大きな吐息が吹きかけられる。

体が硬直する。それなのに痛いほど心臓は高鳴って、ルークはここが夢だということ
を忘れかけた。

恐る恐る、振り返る。

「あ……」

そして。

闇の中から突き出たその“口”に、心底戦慄した。

——叫べ

白い鱗に包まれた鼻先が。

——吠えろ

ルークの背丈ほどもあるずらりと並ぶ牙が。

——証明せよ

ルークを見つめる、黄金の眼まなこが。

——お前の、勇気を

その全てが、ルークに訴えかけた――。



「――ッ！」

目が覚める。

覚醒時の心地よい微睡みなどなく、一気に現実へとルークの意識は目覚めた。

カツと見開いた目と同じほどに冴えた耳に、起床とほぼ同時に響いた《時告げの鐘》の旋律が届いた。

「……またあの夢、か」

薄いシーツの中から右手を出して、天井に伸ばす。

そこに夢の中の幼馴染達はいない。それどころか、自分を邪魔したあの騎士さえも――

「……ふう」

伸ばした拳を握り締め、それから脱力して胸の上に落とすとそのまま起き上がった。対面を見ると、右奥とその隣のベッドではこんもりとしたシーツの塊が上下している。

どうやらまだ眠っているようだ。

先ほどの鐘の音と、3の月特有の朝の肌寒さから推測するに、おそらくまだ五時半ほどだろう。

休日だというのに随分と早く起きてしまった。特別な夢を見た日はいつもそうであった。

「……………」

シーツを足の上から退けたルークは、立ち上がってすぐにしやがみ込み、ベッドの下の引き出しを開ける。

そこに収められていた長細い皮袋を手にとり、緩く巻いてあった紐を取り払うと中身を取り出す。

それは、一本の純白の剣。

よく手入れをして鞆に収めたそれは、周囲の天命を吸収して常に美しい姿を保ち続ける。

そして、夢の中の騎士の持っていた剣の鞆は、まるで……

「そろそろ、お前の名前も決めないとな」

——イイン。

答えるように、白い刀身が僅かに震える。

これまでの二年でルークは、ある一つのことを確信していた。

この剣には、明確に意思のようなものが宿っている、ということ。

村からの旅路でも、修剣学院に入ってから的一年も、ルークが困ったことになるはず音を鳴らした。

例えば農場で、馬の血を吸って暴れさせるオオヌマアブが知らぬ間に入り込んでいた時。

例えば珍しく体調が優れなかった日、危うく部屋の近くでライオス達と鉢合わせしかけた時。

まるで、ルークを手助けするようにそれは音を伝え続ける。

それに前と変わった夢の内容を思えば、おそらくこの剣の中にはあるいは——と。

「言葉は交わせないけど、これからもよろしく頼むよ」

側から見れば、剣に語りかけている珍妙な光景だ。

しかしルークは真剣な表情でそう言い、剣を革袋の中に戻して引き出しの中へとしま
い込んだ。

普段ならば、ここまで早く起きた時は村からの習慣である鍛錬に明け暮れる。

だが《休息日》に剣の修練をすることは学院の規則で禁じられている上、まだ寮の外
に出られない。

そのため、ルークは図書館から借りてきた神聖術の教本を読むことで時間を潰した。

「ん、ふあ……」

「ふあ……」

しばらく教本の内容に没頭していると、そんな声が聞こえた。

ズラリと並んだ神聖語から目を上げると、いつのまにか鳴っていた六時と半分の鐘と共に二人が起き出し出している。

体を預けていた壁から背を離し、ベッドから降りて起き上がった二人に歩み寄る。

「よう、よく眠れたか？」

「ん……ルーク……？」

「お前……早くないか……？」

「まあ、ちよつとな。さあほら、今日はお前らも出かけるんだろう？ 他の奴らも起き始めるからさつさと目を覚ませよ」

緩慢に頷いた二人は、目蓋を擦ったり背筋を伸ばしたりして眠気を払っていく。

やがて同室の生徒達も起き出して、目が覚めた二人と共に制服に着替えると食堂に行った。

またライオスたちと顔を合わせる前に手早く食事を済ませ、身支度を整えると部屋を出発する。

「あれ？ ルーク、それ持っていくの？」

「ん、ああ……まあな」

その際、ルークはちゃんと包んだ白剣を肩に担いでいた。

修練をすることそれ自体は禁則だが、別に持ち歩くこと自体は規則違反ではない。

「珍しいな、ずっとしまいつばなしだったのに」

「何か心境の変化でもあったのかい？」

「ちよつと、な」

曖昧に答えながらも、ルーク自身なぜこれを持つているのか不思議であった。

何はともあれ、三人は寮監室にいたアズリカに外出の申請をして初等錬士の寮を出た。

その時、久しぶりにルークの剣を見たためか僅かに表情を変えていたが……その真意はわからない。

「じゃあ、俺はここで」

「おう。帰ってきたら俺の剣を見せるよ」

「また後でね」

「ああ、楽しみにしてるぞ」

修剣学院の外に出る二人と別れ、ルークは上級修剣士の寮に足を向ける。

一歩進むごとに背中で揺れる皮袋は、中の白剣の重みをルークに伝えてきた。
「お前が俺を操ってるのか？ ……なんてな」

——イイン。

袋越しに響く音に軽く笑い、のんびりと寮に向かう。

本日は三の月七日。

寒々しい冬の風も暖かなものへと移り行き、そのうちこのノーランガルス北帝国にも春が来るだろう。

すっかり日が昇った学院の中にも陽光が差し込み、《休息日》にふさわしい穏やかな一日。

こんな日に剣を背負って髪を切りに行くのは自分だけだろうなど、そう思うルークであつた。

「……いつ見ても壯観だ」

同じ敷地内であるために、到着するまでさほど時間はかからない。

百二十人が生活する初等錬士寮や同様の高等錬士寮と違い、そこは選りすぐりの剣士十二人の住まう聖域。

何段も重なった円形の塔状のそれを少しの間見上げ、ルークは中へと入った。

受付の寮監に用向きを伝え、三階にあるルルデイの部屋に向かう。

どうやら初等錬士達と同じように皆が出払っているようで、寮の中は静謐な空気で満ちていた。

そこまで敵視されてはいないものの、他の上級修剣士達に合わないことに安堵しながら突き当たりの階段を登る。

それを二回ほど繰り返して、階段を登ってすぐ右側の部屋が目的地であった。

「ルルデイ・クローマ上級修剣士殿。ルーク初等錬士、言いつけ通り参上いたしました」
三回ノックをして、その場で待つ。

『来たね。今開けるよ』

時を待たず、中から物音がした。

ガチャリ、という扉の開く音が、初等錬士寮のそれよりも重厚に聞こえたのは錯覚だろうか。

そんなことを思っていると、半分ほど開いた扉の向こうからひよつこりと紫色の頭が飛び出した。

「や、おはよう。早いね」

「あ、申し訳ありません」

「ああいや、責めてはいない。ただ、やっぱり君は根は真面目だなとね」
扉に手をかけ、こてんと首を傾げるルルディ。

そういう感情を抱いていないルークでも、その仕草にドキリとした。

「まあ、目標がありますので。日々精進の心意気です」

「うん、いいことだ。さ、入りなさい」

「失礼します」

身を引いて完全に開かれた扉を潜り、中に入る。

室内は、やはり何度来ても初等錬士寮の部屋より開放感があった。

対面に置かれた高級そうなソファ、ルークがいつも丹念に掃除している清潔感のある広い部屋。

壁際に設置された、剣を立てておくための場所にはルークのそれによく似た形状の剣がある。

おまけに個室の風呂もついているという、至れり尽くせりの環境だ。

上級修剣士という、ある意味特権を持つ彼らが羨ましくなるのも仕方ない。キリトも

意気込む訳だ。

なお、この上級修剣士の寮は一つの部屋を二人で使う相部屋の形となっている。

だが不思議なことに、いつルルデイの部屋に訪れても、彼女の同居人が現れることはなかった。

「もう少しでこの部屋ともお別れ。少し寂しいよ」

「はい……あれ、その服装」

そこでルークは、初めてルルデイの格好が制服でないことに気がついた。

フリルのついた薄い水色のカットソーに白いロングスカートを組み合わせ、清楚さをさらに増している。

頭には青に近い紺色のリボンをあしらひ、清楚さの中に可愛らしさを付け足していた。

「ああこれ？ 懐かしいだろう。覚えてるかな？」

「はい。確か最初に《休息日》にお供させていていただいた時に……」

「あはは、堅苦しい話し方。君は変わらないね」

可笑しそうに、だがどこか名残惜しそうに笑うルルデイ。

それが癖なのか、彼女は笑うとこてんと首を横に傾げる。

つられてルークも笑おうとして——動きを止めた。

「ん？　どうかした？」

「……………いい、いえ。なんでも」

「そう？　じゃあ風呂場で準備してくるから、制服の上は脱いでおいてね」

そう言つて、彼女は風呂場へ行った。

「……………」

残されたルークは、白剣を近くの壁に立てかける。

そうすると、恐る恐ると言つた手つきでポケットの中にいつも持ち歩いているものを取り出す。

それからルルデイのいるだろう風呂場の方を見て。

「同じ、だよな——？」

首を傾げた際に露わになった左耳、そこに煌めいた赤い花卉の耳飾りと、手の中のそれを見比べた。

休息日 中編

「ルーク君、準備できたから来て〜」

「っ、はい」

ルルデイの声に、ふと我に帰るルーク。

飾りをポケットにねじ込むと、やや早い足取りで風呂場へと移動した。

「制服は脱いで。切った髪だらけのまま服を洗うと、天命が損耗するよ?」

「あ、はい」

言われるがまま、初等錬士の制服を脱いでいく。

露わになったルークの体は、元より巖のように鍛え抜かれていたものが、この一年で更に洗練されていた。

村にいた頃に着ていたものよりフライオリテイ優先度の高いそれを大事に畳み、置いておく。

「じゃあここに座ってくれるかな」

「わかりました」

ルルデイが背もたれに手をかけた椅子に座り、正面に置かれた鏡を見る。

縦に長方形のそれは、流石は央都の修剣学院と言うべきか、村の教会に使われていたガラスよりずっと透き通っている。

そこに映る自分の顔を眺めていると、背後に道具を持ったルルデイが映り込んだ。

「さ、目を閉じて。髪が入ってしまうからね」

「……はい」

キラリと光るハサミを視界の隅に、ルークは自ら目蓋を落とした。

暗闇に閉ざされる視界。

途端に感覚は曖昧なものとなり、自分が腰を落ち着けている椅子の感触だけが実感を伝えてくる。

その代わりに肌が、耳がその鋭さを増し、ルルデイの足音や衣擦れの音、暗闇の世界を教えた。

自然とそれに意識を集中するルークの体に、ルルデイが髪を付着させない為のシートをかけた。

その微かな重みがルークの体を不自由にした中で、ルルデイはおさげを保つ革紐を解

く。

ふわりと広がった長い銀髪が、後ろの窓から差し込む陽光に照らされながら背中に落ちた。

「本当に長いねえ。ね、ちよつと女子用の制服着てみないかい？」

「いや、着れるわけじゃないでしょう。というか女の子扱いするのやめてくださいよ……」

「冗談だよ、冗談」

この一年ですつかり通例となったやり取りを交わし、そして散髪が始まる。

ルルデイの細い指が髪を掬う感触、櫛で髪の方角を整えられる感触。

そして、ハサミが入られる感触。その一つ一つを感じ取りながら、ルークは考える。

(……ルル先輩の耳飾り。あれは間違いなく、俺の飾りと一緒だった)

実はここに入ってきた時、振り返った拍子に髪が揺れ、もう一度あの耳飾りをルークは見ていた。

普段から付けていたのか、それとも今日に限って付けたのか。

わざわざ長い方の髪で隠れる左耳にのみ付けていたのも、どこか故意的に感じられる。

だとしたら、その意味は何か。なぜ一年前もその後も正体を隠していたのか、自分に近付いた目的は何か。

様々な考えがルークの頭の中を駆け巡り、やがて真意はどうあれまず話を聞く、という結論に収束していく。

「そっさいえば」

そして、ルークが口を開いた時だった。

「君はこの一年足繁く図書館に通っていたけど、こんな話を知っているかな？」

急な問いかけに口を開けたまま固まったルークに、ルルデイは語りかける。

「とある御伽噺。図書館の隅っこ、古い伝説の本に書かれたお話」

「……御伽噺、ですか」

生憎とルークは、あの図書館では勉強に関する書物しか読んでいない。

生来の世話好きもあって、村にいた頃は子供達に話す為に御伽噺も網羅していたものだが、もう臆げだ。

黙り込んでしまったルークにルルデイは口元に弧を描いて、続きを話した。

「かつて、まだこの都はなく、公理教会もなく。それよりも遠き昔、神々がこの世界を作

りたもうたその時より生きる、古き竜がいた」

「……っ！」

「彼らは四方に散らばり、そこにあるダークテリトリーからの道を塞いで人界を守護した。故に守護竜と呼ばれ、彼らは神聖視された」

「……その話なら、知ってます」

ルークも、その話は聞いたことがある。

思い出したと言うべきか。ルルデイの語るその始まり方に、ルークは覚えがあった。

「東の岩山に鎮座せし青き大竜。その荒々しさたるや、ダークテリトリーの怪物すら歯牙にも掛けず」

「西の火山の支配者なる赤き蛇竜。その逞しき翼たるや他の三竜を凌ぐ素早さを持ち、紅蓮の炎は水すら焼き尽くす」

「南の森に潜む黒き豪竜。その慈愛は大きく、遍くものに恵みを与え、財を尊ぶ」

順番に、交互に御伽噺を紡ぐ。

二人だけの部屋に静かに響くその声は、ルークの髪が切り落とされる度に滑らかに重なり合う。

まるで、元からそうであるかのように。二つの声で織りなす伝説は……最後にある者を示した。

「北の洞窟に君臨せし白き竜。その誇り高さたるや神にも届き、気高き心は相応しき者を待つ」

完全に重なる声音。

——イイン。

答えるように、耳の奥にあの音が響いた。

「我ら守護竜、永遠とわにこの地を守らん。たとえ命尽き果て、骸となろうとも」

「やがて、世界が終わるその時に。我らは再び羽ばたかん……ですよね」

「そうそう。知ってるじゃないか」

「故郷にもあったので」

ベルクーリと北の洞窟の白い竜の物語。

それと同じほど古くから、ルーリッドにも人界を守る四匹の竜の話があった。

結果的に白竜は骸となつて実在し、青薔薇の剣もあつたわけだが、久しく忘れていた御伽噺だ。

「夢がある話だと思わないかい？ 御伽噺では、その竜達は整合騎士の駆る飛竜より大

きく、言葉すら使う知能を持っていたとか。そんな竜が本当にいたのだろうか？」

目に見えずとも、ルルデイが笑っているのがわかった。

どこか試すような口調のそれに、ルークは思考を働かせながら慎重に答える。

「……そういう事もあるかもしれないよ」

「まあ、御伽噺だものね……でも、たとえ骸になろうとも、なんて。それこそありえない。

この世界のものとは皆全て、天命を全うすればステイシア神の元に召されるのに」

「御伽噺になるほど大層な竜なら、それこそ剣とかになつても意思があるんじゃない？」

「確かに。『相応しい者』がいれば、そういう事もあるかもしれないね」

二人はそこで会話を途切れさせた。

後にはチヨキチヨキと、髪を切る音のみが響く。

(……ああ、やっぱりこの人だ)

確信した。

我ながら白々しいこのやり取りで、完全に疑問は確証へと変化した。

だが、だからといってそれを口には出さない。そもそも今は散髪中なのだ、下手に動けば怪我をする。

「ああ、そういえばこんなのは知っているかい？ 人界を囲む不朽の壁に時折現れる」

炎の騎士”の話は」

「ええ、二十年前からある伝承ですよね」

「ああ。実はこの前市街で聞いたのだがね……」

ルークは待った。

大人しく、目を開く事もなく、なされるがままに、いつも通りにルルデイと会話を交わした。

必要以上に気構える事もなく時間は過ぎていき、そして八時の鐘が窓の外から響いた頃。

「システム・コール、ジエネレート・エアリアル・エレメント、デイスチャージ……はい。もう目を開けていいよ」

「はい」

細かい髪を水で洗い流し、風素によつてものの数秒ほどで乾かされる。

ゆつくりと目を開けたルークは……村にいた頃と同じ程度の長さをした自分の髪を見て頷いた。

「このくらいでどうかな？」

「……はい、丁度いいです。本当にありがとうございます」

「ふふ。これならお金も取れるかしら」

「《髪切り》の天職を持ってないから、そりゃあダメでしょう」

「あら残念」

至極普段通りに話しながら、二人はその場を片付ける。

道具を仕舞い、床に散らばった髪を風素で集め、熱素で安全に燃やす。

掃除は傍付きの役目であるので、楽しそうに見守るルルデイの前で苦勞して神聖術を行使した。

なんとか自分の髪を処理したルークが制服を着て、それから応接間の方に戻るとルルデイが柵の方に行った。

「君はあっさりとした味の方が好きだったね？」

「はい。ですがルル先輩のご希望に……」

「まあ、そうかしこまらない。どうせもう少しでお別れなんだから、ね？」

「……では、不躰ながらお願いいたします」

「了解♪」

ふんふん、とルークの知らないメロディを口ずさみ、紅茶を用意するルルデイ。

やはり不思議な女性だ。

貴族らしくなく、かと言って自分と同じように平民らしいというわけでもなく。

結局この一年間、その実力の底すらも見せなかった。

誰より傍にいたからこそ、一度も彼女がこの一年を通して本気にならなかった事をルークは知っていた。

その理由が、あの日の邂逅にあるのなら。

様々な知識や思い出をくれた、ミステリアスながらも憎めない女性との出会いが、偶然でないのなら。

彼女が、自分のためにここにいるのなら。

それならばきつとルークは……やはりこの人を心から尊敬するのだろうと、そう思った。

「どうぞぞ」

「ありがとうございます」

差し出された紅茶を、ルルデイが席について自分のものを飲んでから口をつける。

彼女がこの部屋を訪れる度に淹れてくれた紅茶の味は、これまでと変わらずルークの好みに的中していた。

「さてと」

紅茶の味を楽しんで、少し。

そう言いながらカップをソーサーに置いたルルデイは、ルークのことを真っ直ぐに見る。

これまで常に不透明なところのあつた目線は真剣で、ルークもカップを置いて真正面から見返した。

「何から聞きたい？」

それは、認めたのと同じ意味の質問であつた。

「そう、ですわね……」

今更それを聞くはずもなく、ルークは顎に折り曲げた人差し指を当てて考える。

しばらく無言で考えて、まずはポケットから例のものを出して机に置く。

「懐かしい。君の勘が鋭くて、つい落として逃げてしまったのだったわね」

狼狽えることもなく、懐かしげな顔でルルデイはその飾りを見る。

「それで？　まずはあの日のことを聞きたいのかな？」

「はい、まずは」

「いいわ……でもそれには先に、私が何者かから話さないかね」

スウ、と息を吸うルルデイ。

胸に手を当て、目を閉じた彼女は吸い込んだ息を吐き出して。

「私はこの世界の外……この人界と暗黒界と呼ばれる一つの世界を管理する場所からやってきた」

それから、そう言った。

「……じゃあ、ルル先輩は神様なんですか？」

ルークは、さほど大きな反応はしなかった。

驚きもある。困惑だっっている。

だが、納得した。

もしかしたらと……そうなのではないかと、キリトが現れたあの日から、ずっと思ってきたから。

そんな反応を返したルークに少しの間ルルデイは硬直して、それからふふつと小さく

笑った。

「まさか。私はただ、この世界の形を決めて、最初にほんのデザインしただけ。この世界の神というのならば、もっと別の人達」

「まるで他人事みたいに言うんですね」

「この世界に来る時に、私は『あっち側』の記憶をある程度制限した。そしてこのルルデイ・クローマという人格を復活させた」

「だから目的も自分が誰かも覚えていても、それが何故そうなのかはわからないって、あの日言ったんですね」

「君は本当に考えが柔軟だね」

それはとても良いことよと言いながら、ルルデイは笑う。

実際、ルルデイから……『彼女』から見ても、ルークの思考は群を抜いて人間に近いものだ。

到底納得できないだろう話を受け止める、この世界の人間とは思えないほどの覚悟。その上で内心の動揺を抑え、ルルデイの言葉の意味を正確に理解する回転の速さ。

(やっぱり、彼ならば《A. L. I. C. E》にも……)

自分でも、どうして固執するのか分からない《A. L. I. C. E》という存在に頭が支配されそうになる。

それを寸前で振り払い、勤めて平静にルルデイは何かを考えているルークを見た。

「……だったら」

「ん？」

「だったら、ルル先輩がかつての初代上級修剣士次席の生き写しという話も？」

「君の予想通り。それはかつてこの世界にいた私。このユニットの情報を少し弄つて生まれたのが、今君の前にいる私だ」

「なぜ、そんなことを？」

聞き返すルークに、*“彼女”*はすつと細い指をその胸に向けると。

「君だ。君が私を、もう一度この世界に誘った」

はつきりと、断言した。

休息日 後編

「俺、ですか?」

目を瞬かせるルーク。

ルークにとって、ルルデイは今やステイシア神やソルス神に等しい人物だ。

人界人としての平均的な信仰心以上を持ち合わせてはいないが、それでも世界を形作った人物。

そんな人物に、自分をこそ目的としていたと言われ、面食らう。

固まっているルークに微笑み、ルルデイはふと視線を彼の後ろに移す。

そこには、壁に立てかけられた白剣。

スツと立ち上がり、ルークの横を通り過ぎていくルルデイ。

それを目で追いかけると、彼女は白剣の鞘に手をかけた。

「あ、それは……」

途轍もない重さを持つそれにルークが声をかけよとした途端、軽々と彼女は持ち上げる。

「またも唾然とするルークに、振り返ったルルデイはウインクすると剣を手に戻ってきた。」

「この剣、貴方はなんだか分かっている？」

「……俺の、剣ですけど」

「そう、貴方の剣。貴方が振るい、貴方を選んだ剣——そこには私がこの世界に残したモノが宿っている」

「テールに白剣を横たえ、ルルデイは懐かしげな手つきで撫でる。」

「その仕草と先の言葉、二つを再び動き始めた思考で分析したルークはハツとする。」

「まさか、人界を守る竜は……」

「そう、私がこの世界のカタチ以外に唯一定めたモノ。私がこの世界の創造の一端を担ったのだという、ささやかな証」

「やはりそれには、白い竜の意識が……？」

「と、いうほどのものでもない。かの竜達のフラクトライトのID……ああ、魂だ。それには特別な施しをした」

柄頭の飾りに嵌め込まれた白、黒、赤、青の宝玉。

伝承の四竜を示すが如きそれを指で一つずつ示し、彼女は謳うように囁く。

「たとえその肉体、天命が尽きたとしても、強く共鳴する感情パターン、思考プロセスを持つフラクトライトに触れた時、その思考能力を取り戻す。そう設計した」

「強く共鳴する、感情……」

何年も前を思い出す。

アリスが連れ去られ、ユージオが笑顔を失い、妹のように可愛がっていたセルカから逃げた頃。

一人休息日に北の洞窟に向かい、ユージオに頼んで貸してもらった竜骨の斧を手に骸の前に立った時。

今よりもっと幼く、それ故にとても大きく見えた白き竜の亡骸を前に、自分は何を思っただろうか。

（——もう、失いたくない。二度とユージオを、セルカを悲しませたくない）

純粋な、ただ一つの願いだけを胸に抱いた。

この白い竜のように、ダークテリトリーの怪物からも、無慈悲な公理教会からも、俺の手にある宝物を奪うもの全て、この自分の腕より太い牙のように強い力で守りたかった。

もしもその意思に、幼い自分のちっぽけな願望に、かの竜が答えたというのならば。ああ、それはなんて——誇らしいことだろう。

「この剣には、記憶が宿っている。擬似的な不滅を埋め込んだ竜達の、『守護の心意』と呼ぶべきもの。君は見事その眼鏡に適ったようだ。それこそがこの世界に私に来るきっかけでもあったのだけど」

「——ルル先輩。俺は」

「相応しいよ」

決意を固めた顔で何かを問おうとしたルルクに、先回りしてルルデイは断言した。

息を呑むルルク。

ゆっくりと剣から視線を上げたルルデイは、とても静かな瞳で彼を見る。

「たとえ私の世界に存在しないとしても、それでもこれは私の子。私の宝。だから君を見定める必要があつた」

「……その、ために。昔の自分を蘇らせてまで、ここに？」

「この一年、君を見てきた。ずっと、なるべく片時も離れず。その結論だ」
そういえばそうだった、とルークは思い出す。

学院の授業や修練以外、ルルデイは上級修剣士として、常に傍付きのルークの側にいた。

まるであべこべだが、しかしこの立場は彼女にとつてとても都合の良いものだったの
だろう。

「君は強い。剣の腕だけじゃない、その心が強い。きつとこの世界の住人の誰よりも
まっすぐで、気高い守護の心を持っている」

「そんな、俺は……」

「臆病者つて？ ふふ、そうだよ。勇ましき者とは常に恐れている者のことを言うんだ。
恐るからこそ強い、怯えるからこそ倒れない。君はその不屈の意思がある」

違うかい？ と聞いてくるルルデイに、ルークは口を噤む。

自分の言葉が謙遜などではなく、ただの日和りであることを自覚したからだ。

そうだ、なぜ否定する。

あの時思ったではないか。酷く傷は痛み、二人が危機に陥って、混濁した意識は漂白
されて。

その中で、たとえ自分が罪深くとも、何を代償とするとしても——絶対に守るのだと。

その意思是、否定できない。

「はい。俺は絶対に負けません。何が相手でも、整合騎士にだって」

「それでこそ、この子の見込んだ男の子だ。これからもよろしく頼むよ」

またも易々と持ち上げられた白剣を手渡され、ルークは両手でしつかりと受け取る。

ニコリと満足そうにルルデイは笑い、それから真剣な表情になる。

「事実、君にはいはずれ戦つてもらう必要がある。そうしなくてはならない理由がある」

「どんな理由でも、それが誰かを守れるなら俺はやります」

「潔い返事だ……では君に言おう」

すつと、覚悟を決めるように息を吸って。

「——この人界はどこかおかしい。まるで箱庭だ。誰かがそうしているとしたか思えない」

「箱庭……」

ルークはその意味に首を傾げはしたが、訝しむことはなかった。

十分に彼女の言葉が真実であることは証明されているし、何よりも信じたい。

この世界の形を決めた彼女がそう言うのなら、やはりどこかしら歪なのだろう。

「二応私も今はこの人界の人間だ、迂闊なことは口にできないが、それでもこれだけは言おう。整合騎士を目指しなさい。そして教会……セントラル・カセドラルに辿り着いて、答えを見つけて」

「……そのために戦う、つてことですか」

「きつとね。そんな予感がするんだ」

「馬鹿にできない言葉ですな」

「是非そうしてね。そして……いずれ来る世界の終わりの前に、どうか折れないで」

またしても物騒な言葉が飛び出してきた。

ルークは眉を潜めるが、彼女はそれ以上話す気はないのか、それとも話せないのか続きは言わない。

ルークの顔を一心に見つめ、先ほどとは別の色で……願うような光を込めた目で見てくる。

そんな彼女に、ルークは不敵に笑った。

「当たり前です。俺はキリトとユージオの兄貴分で、セルカにアリスを連れ帰ると約束したんだ。世界が滅んでも、それさえも覆って守ってみせる」

「——いい返事だ」

また、満足したようにルルデイは微笑んだ。

「ん、っはあ。楽しかったなあ、この一年間」

それから緊張の糸が途切れたように、ぐつと背筋を伸ばしてそう言う。

肩の荷が降りたとしても言いたげな態度に、今日だけで尋常ならざる量の情報を聞いたルークは笑う。

彼女としても、今日この時間は最も重要な時間だったのだろう。

そう思うとこの剣を任されたことに、なんだか自信が持てる気がした。

「やっぱり昔とは違いましたか？」

「そりやもう、ね。特に跳ね鹿亭の蜂蜜パイ、あれは絶品だ」

「ああ、美味しいですよねあれ。この前キリトに一つもらったんですけど、頬が落ちるかと思いました」

「ふふ、昔はあんなに賑わってはいなかった。君を見定める傍らで、随分と楽しんだよ」

「……寂しくは、ありませんでしたか？」

いつもの調子で笑うルルデイに、ルークは少し遠慮がちに尋ねる。

「……ん、まあそうでなかったと言えは嘘になる。確かに私の覚えているもの、そのほとんどが変わってしまった。この学院だって私の頃より色々」と

「友人とかは、いたんですか？」

「友人と言えるかは怪しいがね。やはりこの爵位にもなると、周りも……ね」
ああ、と納得してしまう。

ライオスやウンベール、平民であるルーク達を目の敵にする上位貴族達を思い返した。

彼女の根底が貴族ではなく別の「誰か」ならば、あまり生き易くはなかったのだろう。

「あれ、けど確か……」

「ん？」

「えっと、学院にある伝説というか、噂なんです。当時の初代主席上級修剣士と次席は……」

「……………ああ」

やや間を置いて、ルルデイは声を漏らして。

臃げなその噂を思い返していたルークは、ふと部屋の空気が変わったような気がして顔を上げる。

そしてルルデイの方を見て——物憂げな表情で窓の外を見つめる彼女の横顔の美しさにゾツとした。

「そんなことも、あつたかな」

とても、深い声だった。

南帝国にあるという大湖を思わせる藍色の瞳、僅かに上向いた口の端、膝の上で軽く握られた拳。

柔らかい陽光に照らされる全てが、彼女の抱く強い感情……あるいは懐古だろうか……を示している。

それはまるで、愛を抱いたような——

「古い話ね。もう終わってしまったことだよ」

「そう、ですか……」

これ以上は聞いてはいけない気がして、ルークは話題をそこで打ち止めた。

「そういう君は、誰か心を寄せる子はいないのかい？ 何も貴族ばかりではないだろう」「はあ……それが、特にそういうのは生まれてこの方なくて」

確かに自分達と同じように貴族でない異性の学院生もいるが、切磋琢磨をする仲間としか思わない。

小さい頃、弟分の一人を含めた村の少年達に人気のあつたアリスにも友愛以上の感情

はなかった。

母は、今は何処にいても知れぬ父を心から愛していた。

あのキリトでさえも以前カマをかけた時は遠い所にいるようなことを言っていたし、ユージオは……

だというのに、誰にも心動かない自分はもしや、最初から愛が欠落しているのではとすら思う。

「なんだ、勿体ない。せっかく格好良い顔立ちなのに」

「そんなに綺麗なルル先輩に言われると、なんだかむず痒いですね」

「おっと、私を口説いても仕方がないよ？」

「そ、そんなつもりじゃありませんよ」

「わかってる。からかっただけだ」

クスクスと笑うルルディは、ああ他の男が見れば一発で恋に落ちるのだろうなと思えるくらいには美しくて。

けれども、先ほどの彼女の顔を見た後では……決して叶わないのだろうとも思えた。

「もしも君が……いいや、仮定ではないな。上級修剣士になった時傍付きが女の子なら、あまり迂闊なことは言わない方がいいよ」

「迂闊なことって？」

「ふふ、その時になればわかるさ」

「そもそも、相手が貴族だったらどうにもならないんですけどね……」

「いや、五等や六等の爵位の子ならば感性はほとんど変わらないはずだ」

ルルデイにからかわれ、ルークが応答する。

あと少しで終わってしまうこの一年を振り返るように、いつも通りの雑談を昼過ぎまで楽しんで。

その後、ユージオからキリトがウオロ主席上級修剣士と罰として立ち合いをしたと聞いて卒倒しかけた。

邂逅

あの休日日から数日後、最後の試験。

その日、結局ルルデイは不動の3位から退くことはなかった。

最後の最後まで手を抜くことなく、されど決して本気を出すわけでもなく地位を維持した。

彼女にとって順位は所詮、本来の目的を果たすための必要事項に過ぎなかったのだらう。

代わりに、キリトの先日の騒動で何かを掴んだらしいソルティリーナ次席がウオロを破った。

が、ルークにとってはあまり関係はない。

無論キリトに関しては、今後十分に注意するようユージオと共に言い聞かせはしたが。

うへえといった弟分の顔が今でも目に浮かぶ。

ともあれ、そうして彼女は卒業と共にこの学院を去り——そして、消えた。最初から存在しなかったように、誰もが彼女のことを口にはしなかった。

学院の教官も、傍付きの地位を妬んでいた連中も、誰も彼もがその名を忘れたようで。

ああ、彼女は行ってしまったのだろう。ルークはそう思った。

けれど、だからこそ彼女の信頼に応えなくてはいけないとも思った。

だからこそ、ルークは同様に最終試験においてある程度の実力を解放した。

結果は——見事、初等錬士中序列3位。

最後に自分に何かを託した、尊敬する彼女の地位を、ルークは引き継いだのだ。

キリトとユージオもしっかりと五位、六位にそれぞれ収まり、上級修剣士の地位を勝

ち取った。

唯一誤算だったのは、あのライオスとウンベルが主席と次席についたこと。

それまでの低い順位が嘘のようで……否、実際に嘘だったのだろう。

普段は抜けているところもあるが、頭の回転の早い弟分は彼らのプライドが所以だと
言った。

あの二人が誰かの傍付きになって、あくせく働くなんて思えない——なるほど納得でき
きる。

しかし、小狡い彼らはその地位は欲しかったのだ。

その為にひた隠しにしていた実力をさらけ出し、その気迫はゴブリンと戦った彼をし
て戦慄した。

こうしてあの厄介な貴族二人は、ルークの上に文字通り目の上のたんこぶになったわ
けで。

「はあ……また大変な一年になりそうだな」

誰にも聞かれぬよう、ルークは小さな声で呟いて、一緒にため息も吐いた。

学年末最終試験を終えてから最初の休息日、ルークは練習用の木剣を買いに出かけている。

つい先日、この一年を共にした相棒がポツキリと行ってしまったのだ。

体の成長とルルデイのあまりに正確な指導により、ルークは益々強くなっている。

加えて、彼がキリトから奥義を教わり昇華した独特の剣技は、その手数による利が大きい。

その為、いくら頑丈な白金櫂の木剣と言えども、彼の努力と成長にはついていけず。

結果、ずっと溜め込んでいた貯金の一部を切り崩して新しいものを繕う必要が生じた。

あと少しでお別れとなる初頭錬士の制服に身を包み、北セントリア央都を闊歩する。

「お食事はいかがですかー」

「ぜひ見てつてくれ！うちの食材は一品だぞ！」

「蜂蜜パイ、焼き上がりましたー！」

今日も今日とて、休息日の市場は賑わっている。

元気に客を呼び込む人々に、ルークはふと微笑んでしまう。

おかしかったからではない。

むしろその逆……自分の故郷とはあまりに違う彼らの熱量、活発に溢れる心。

絶対なる公理教会によって守られた平和の中で笑顔を浮かべ生きる彼らに触発された。

いずれ、あの高い塔の果てに行く為に戦うとしても。

それでも弟分のキリトやユージオほどではないが、彼らのこの表情を尊いと思うのだ。

(なんて、我ながらクサイかな)

自分の内心に、ちよつぴり恥ずかしくなったルークは歩く速度を早めた。

それから七区へと赴き、鍛冶屋で新たな木剣を買った。

「ちよつと余ったな」

店を出て、手の中に残った数枚のシアを握りしめながらぼやく。

もう一方の手には買ったばかりの木剣が布袋に包まれて握られている。

「これだけあるなら、蜂蜜。パイも買えるか」

いつも休息日に買い食いに出かけるキリトがくれた菓子を思い出し、顔を綻ばせる。そこでふと、隣にある店に目がいった。

看板に《サードレ金細工店》と銘打たれたそこは、彫金の店。

同時に、キリトがルーリッドから持ってきたギガスシダーの枝を一振りの剣に変えた店でもある。

あの悪魔の樹の天辺、最もソルスの恵みを受けた枝を、店主が見事一年かけて剣へと削った。

例の一件の後、キリトに見せてもらってゾクツとした。

もう数年も前、白竜の牙から削り出した愛剣を初めて見たときと同じ感覚だ。

まあ、その試し振りをしている、キリトはウオロに目をつけられたのだが。

「まったく、トラブルに事欠かないやつだよ」

店から視線を外し、くくつと一人堪え笑いをしたルークは歩き出す。

脇道から七区を抜け、大通りの方へ出る。

そして行きがけに前を通った店に行き、ギリギリ残っていた蜂蜜パイを一つ買った。

初めて自分で買ったそれを手に、大通りの奥にある広場に向かう。

人で混み合った通りを歩き、いくつか階段を登ればあつという間に到着だ。

「いつ見てもここは広いなあ」

シンボルのように中央に石柱がそびえた、円形の広場。

この北セントリア央都の名所であり、周囲は央都民の住宅に囲まれている。

何より特徴的なのは、石柱の下に咲き誇る花の数々。

よく手入れされたその花壇は、別段花を育てることのないルークでも時々見にくる程綺麗だ。

キリトが卒業の日、ソルティリーナに贈ったゼフィリアの花の花束を思い返ししながらベンチに座る。

「さて、じゃあ早速いただきますかねつと」

包みからパイを取り出す。

かろうじてまだ暖かいそれを一緒に入っていた紙で軽く包み、そして口に運んで――

「……………んっ」

ふと、動きを止めるルーク。

ゆっくりりと口を閉じ、口元に持ってきていたパイを下ろす。

その行動の理由は、視界の端におかしなものが目に映ったから。

広場の端、脇道に入るための小路の入口のあたり。

そこで何やら、数人の学院生らしき男に少女が詰め寄られている。

男達は、いかにも傲慢なにやけた面で鬱陶しそうにする少女に何やら声をかけていた。

この一年でうんざりとする程見た、貴族に多く見られる顔だ。

とても仲のよさげな集団とは思えない。

「……見過ごしても、このパイが不味くなるよなあ」

軽く嘆息し、パイを包みに戻して立ち上がる。

そのまま片手に引っさげて、彼らの方に歩いていった。

貴族相手では分が悪いとか、特にそういう風に考えはしない。

そういうものに屈さないと、8年前に自分に誓った。

「おい、お前ら」

「あ？」

「なんだ貴様、この私に向かつてお前とは無礼な——」

振り返った彼らは、案の定見覚えのある貴族の子息達で。

そして、試験で圧倒的實力を見せたルークを前に一斉に顔を引きつらせた。

「き、貴様、平民の……」

「悪いけどさ、坊ちゃん方。その辺りにしてくれないか？」

「なぜ貴様のような輩に我らが——」

「禁忌目録。その項目には確か、婚姻前の子女を誘惑してはいけないってあったよな？」

むぐ、と押し黙る子息達。

いくら彼らが力ある貴族の息子らであろうとも、それだけには逆らえない。

そして、正確に禁忌目録を丸暗記したルークの言葉は真実であった。

「ふ、ふん！ 誰がこのような小娘！ 行くぞお前達！」

「覚えておけ、この平民が」

ルークを睨みつけ、ブツブツと恨み節を吐きながら去る貴族達。

「平民平民って、お前らそれしか言えないのか」

その後ろ姿を見送り、ルークは肩をすくめた。

「で、君は大丈夫か？」

振り返り、ルークは息を呑んだ。

彼らが絡んでいた少女。

遠目からではわからなかったが、彼女はあまりに美しい容姿をしていた。

背中まで伸びる、艶やかな紫色の髪。

無感情にこちらを見上げるくつきりとした大きな瞳と、小動物じみた小ぶりの口に筋の通った小鼻。

背丈はルークより頭一つと半分ほど低いものの、女性らしい服に隠された体は細く、均整。

あの女性を彷彿とさせる、ミステリアスな可憐さ。

例の如く心動きはしなかったが、ああと納得してしまう。

確かにプライドの高い彼ら貴族ならば、このような少女は放つてはおくまい。

「……ありがとう。助かった」

鈴を転がすような美声に、はっとルークは我に返る。

「……いや、困ってそうだったからな。こういう時はお互い様ってやつだ」

「でも私、あなたに何もしてない」

「じゃあ次に会った時、パイでも奢ってくれ」

ルルディをイメージしながら、なるべく気さくに話しかける。

正直、セルカのような年下の村の少女しか会話の経験はないが、ここで無言もありえない。

「パイ？」

こてん、と無表情のままに首を傾げる少女。

そして次の瞬間、ぐうとお腹が鳴った。

二人して少女のお腹を見下ろす。

「……これ、食うか？」

反射的にルークは、包みを持った手を胸の辺りまで掲げた。

少女はじつとそれを見て、ややあつてコクコクと頷く。

「立ち食いもなんだから、あっち行くか」

「ん」

先程までいたベンチに少女を誘い、二人で座る。

そうすると包みから一口もつけていないパイを取り出し、少女に差し出した。

「いいの？」

「さつき領いたじやないか。ま、お節介のおまけとでも思ってくれ」

「……感謝する」

ほっそりとした白い指でパイを受け取り、少女はじつと見つめる。

「はむ」

小さな口がパイの一部を包み込むまで、さほど時間はなかった。

「……」

モグモグと口を動かした少女は次第に目を見開き、瞳を輝かせる。

既に冷めてしまったものの、どうやらその味は変わらなかつたらしい。

「そんな顔してくれるなら、わざわざ釣りに使つて買った甲斐があるよ」

「はむ、はむ……」

三度目のありがとうを言いたいのか、口を仕切に動かしながら頷く少女。

本当に小動物じみた仕草に、ルークはなんだかほっこりとしてきた。

（——この子、それなりに鍛えてるな）

同時に、さりげなく観察をしてそう思い至る。

今でこそパイに夢中になっているものの、彼女は隙のない雰囲気醸し出している。体のバランスの均等さも鍛えたもの由来であり、無駄な肉がなく。

きつと、やろうと思えばあの貴族たちもあしらえたに違いない。

まあ故意に他人の天命を減らす事は禁忌目録違反なので、だからこそどうにもできなかったのだろうか。

「……そういうところまでそっくりか」
袖をまくる。

そこには卒業の日、ルルデイから受け取ったもう一方のイヤリングと合わせ、二つの飾りが紐で繋がれていた。

——君にこれもあげよう。誰にも「私」は残らないだろうが、君には残ってほしい。

その言葉と共に、彼女は自分の手の中にこれを転がして、そのまま歩き去った。

「……それ、綺麗」

パイを食べ終わったらしい少女が覗き込み、ぽつりと感想を漏らす。

「ん、そうか？ 大切な人からの贈り物なんだ」

「恋人？」

「いや、もつと尊敬する人さ」

そう笑いながら言つて、ルークは袖を元に戻した。

膝に手を置き、一息に立ち上がると少女を見下ろす。

「じゃあ、俺はこれで。またどこかで会つたら、その時は挨拶くらいしてくれと嬉しい」

「……あなたは、剣士？」

唐突な質問にきよとんとする。

それから少女の目線の先を追いかけて、自分が右肩に吊るした布袋の存在に納得した。

彼女がどこから来たのかわからないが、これを持って学院の制服を着ていればわからないはずがない。

「ああ、俺は北セントリア修剣学院の——」

初等錬士、と答えようとして言葉を止めた。

不思議そうにする少女に、ニツとルークは笑い直して。

「——上級修劍士第三位、ルークだ」

「……ルーク。覚えた」

少女は、何度か口の中で名前を口ずさみ、頷く。

「それじゃあまたな」

「ん。またどこかで」

手を振る少女に、ルークは踵を返して学院へと戻っていったのだった。

古い物語

「……あつた」

図書館の一角。

古い物語の類が収められた棚の前で、ルークは一冊の本を手にそう呟く。

古ぼけた表紙に向けて人差し指を中指を揃え、模様を描いて軽く押す。

小さく鈴が鳴るような音と共に表示された《ステイシアの窓》には、随分最大値の少ない天命が刻まれていた。

新品の本の三分の一ほどしかないそれは、本が古くからこの場所にある事を物語っている。

「幸い、まだ読めそうだな」

この本の存在を覚えてくれた学院生の女子に内心感謝し、ルークは小さくそう述べた。

窓を閉じ、表面の埃を軽く払うと本を片手にテーブルのほうに行く。

窓際の席に腰を落ち着け、オレンジ色の陽光を灯り替わりとする。

正午から四つの鐘の音が過ぎた夕暮れの図書館で、一人だけの読書の時間。

それがルークの、この学院である二人との時以外で最も心安らぐ時間だった。

くすんだ表紙をめくり、古い紙の匂いを放ちながら、本は物語を始める。

“まず、はじめに。これは私の物語ではありません。私の大事な、二人の友人のお話です”

そんな出だしから始まった文章。

黄ばんだページの中央に綴られた一文に、ページを捲る。

「ふむ……」

そして、ルークは感嘆のような声を漏らした。

そこには手書きのものだろう一枚の挿絵が差し込まれており、風景が描かれていた。

二人の男女が、木漏れ日の挿し込む場所で談笑する風景。

片方は背の高く、挿絵ながら精悍な顔つきの男で……もう一人は、特徴的な髪型の美しい女。

場所は……背景から察するに、この学院の広大な庭のどこかだろうか。

二人は、とても楽しそうに微笑みあっていた。

繊細かつ柔らかなタッチで描かれたその横顔は……互いが想いあっていることが伝わって。

ああ、とルークは思わず声を上げてしまう。

「……貴女は、昔から変わらずにいたんですね」

その言葉を知る者はおらず、ルークは一人ページを繰る。

“彼らが、その友人。二人は貴族で、天と地の差ほど身分の違いがありました”

その言葉に、ルークはこの本……否、学院生の間には伝わる手記の書き手を想像する。内容から推測するに、彼女は平民で、そしてこの二人は上位貴族だったのだろう。

“彼らはとても強く、気高く、貴族としてあるべき姿そのもので、なんの取り柄もない私とは大違いでした”

彼女のことを思い出す。

強く、気高く、美しく。

茶目つきもあつた彼女は、今時では珍しいほど整然とした貴族だった。

実の所、この学院の中だけを見ても貴族達の性質は墮落に傾倒している。

上位の貴族であればあるほどそれは色濃く、ライオスとウンベールが良い例だろう。

まだ貴族らしい高潔さを持つのは下位貴族で、一等〜三等になると悲惨と言わざるを得ない。

そんな中で誰より正しい“貴さ”を持っていたのは、彼女ただ一人だけだった。

“けれどただ一度、彼らに接する機会があつたのです”

書き手は語る。

試験を前に勉強に多少苦難した彼ら二人に、神聖術のやり方を少し教えた。

たったそれだけ。

それだけなのに、彼らはそれを恩として。更には書き手の友になった。

貴族と平民。この世界では決して交わることのない二つの身分。

異端だろうその間柄は、けれど綴る文字からは一文字だって劣等感などなかった。

書き手はどうやら、心から二人を尊敬し、友人として敬愛していたらしい。

“本当に、良い人達でした。私が神聖術を教えて、彼らが私に剣を教えてくださいました。この学院にいる時間は、私にとって宝物でした”

優しい文字だった。

何も良いことばかりでもなかっただろう。彼らが良くとも、周りはそうは言わない。

だというのに、微笑みをもって書いていることが想像できるほどにその文字には心が込もっている。

“二人は、互いの存在で己を磨く関係でした。常に相手を追い越そうと、隣に立ち続けようとするように”

同じ貴族として、そして剣士として。

彼と彼女は切磋琢磨しあい、常に試験で一位の座を競い合っては戦っていた。

例えば勉学。例えば神聖術の腕前。

例えば知恵、知識、貴族としての心得。

——そして、剣。

それは憎しみでも嫉妬でもなく、純粹なる敬意と挑戦心からの関係だと文字は語る。

“そして彼らにとって、剣が互いの心をぶつけ合う証明でした。不躰ながらも、一番

近くにいて見ていた私がそう言うのだから間違いないですね”

それはまるで、恋物語の逢瀬のように。

劍の腕が己の存在を表すこの箱庭において、二人はただ互いのために技を磨いたという。

書き手は、それこそが彼と彼女が最大限に心を通わせる方法だったのだと語る。

“彼らにその自覚はなかったでしょう。けれど、本当に……本当に、幸せそうだったので。こちらが笑顔になるほどに”

その言葉の後にも、書き手は日常における二人のことを書いていた。

共に励み、共に食べ、共に笑い……常に一緒に、まるで二人で一振りの劍のような真つ直ぐさで。

きつと最初の挿絵は、その一つだったのだろう。

ふと、これの存在を覚えてくれた下位貴族の女学院生の表情を思い出す。

「確かに、女の子はこんな話が好きかもな」

ルークは興奮した表情で語ってくれた授業仲間に、少し笑った。

この本を探そうと思っただけは、ただ少し気になっただけ。

もうすぐ「彼女」のいた部屋に住まうことになるから、ちゃんと知っておきたかったのだ。

かつての彼女が、この学院で何を心に生きていたのかを。

「やがて彼女達は上級修剣士となり、私も恥ずかしながらその末席として二人を間近で見えました」

当時から上級修剣士寮の仕組みは変わらず、二人一組。

婚前の男女が一つ屋根の下か、と思ったものの、規則である以上は従ったのだろう。

（まあ男が女を襲えば禁忌目録違反であるからありえないか）

思い直して読み進めるルーク。

“そうなってから、二人の距離は縮まったように思えます。元より良き仲でありましたが、特に——さんは彼のことを……”

ほう、とルークは一部の掠れたそのページに目を細める。

いよいよ女学院生の語った“ここからが本番”に入ってきたのだろう。

“ある時、彼女は私に聞きました。「自分は彼に相応しいか」と”

私は思わず笑ってしまいました、と続いていた。
読みながら確かに、とルークも思った。

このような間柄を築いてきたのに、今更互い以上の相手がいるはずもないだろう。
想像もできない、恋に悩む「彼女」を想像しながら指を動かす。

「何故そんなことを聞くの？」と問えば、彼女は言いました。「私はいつか儂く消えてしまうかもしれないから」

心臓が、跳ねた。

彼女は当時、今よりもさらに記憶を制限してこの世界にやってきたとあの日に語った。

それでもどこか、魂のようなもので理解していたのだろう——自分はいつかこの世界から出ていくのだ、と。

“私は見たこともないくらい弱々しい彼女に、こう答えました。「貴女の心は今、どこにあるの？」と”

そう言えば彼女は決意し、彼との関係を進めようとしたのだという。

「心の居場所、か……」

復唱しながらも、目は文字を追い続ける。

“それから数日後のことです。彼が訪ねてきて私に聞きました、「俺みたいな貴族らしくない荒くれ者は、神々の作った花みたいなあいつの隣にいていいのか？」と”

その先は、わざわざ読まずともわかってしまった。

やっぱりお似合いじゃないかと思いつつも読み進めて、同じような展開にやはりと苦

く笑う。

“それからしばらくして、彼らはそんな仲になったのだと思います。ある日のこと、私が少し遅れた時に、いつもの場所で彼らは……”

もう一枚、挿絵があった。

その文章の左のページに描かれたのは——手を重ね、また幸せそうに笑う二人。

歓喜のようなものがルークの心に沸き起こった。

あの日どこか寂しげな目をしていた彼女は、かつて確かに幸せだったのだ。

“ちよつと、寂しかった。最初から彼らは私とは違う存在で、いつか遠くに行つてしまふことも分かつていたけれど。でもそれ以上に嬉しかった”

心から尊敬し、愛する二人が幸福であつたことが、身分や貴賤など関係なく。友人として、書き手は心から祝福していた。

“二人の剣には、互いへの想いが強く乗るようになりました。それは心を通わせたかなのでしょう。その意思が、彼らをまた強くしたのでしょう”

“二人はそのままこの学院随一の剣士として名を残し、そして私は最後まで見守るだけに、学院の生活は終わりを迎えました”

最後まで、彼らは共にいた。

互いに心を預け、剣を重ねて、それを見る誰もが微笑んでしまうような“愛”を胸に。ルークは、強く、強く胸が様々な感情によって締め付けられる思いがした。

“私は教師として学院に残ることになり。そして二人は、遠いところへ——高い場所へ羽ばたいていきました”

その言葉が意味することは計り知れないが、少なくとも一方は察することができた。そう思いつつ、もう残り少ないページをめくつて。

ピタリと指が止まる。

「……………これは」

“私は卒業の日、二人に贈り物をしました。平民の私ができる精一杯の恩返し。たとえ遠く離れても、私が胸に抱いた友情を証明する証として”

これまで二人のことを書いていた中で、唯一己を主張した一文。

それを記したページの端に描き込まれたのは——四つの花卉を持つ、花のような飾りの絵。

“このアミカルの花が、私たちを繋げてくれる。たとえ二人が、私じや考えられないようなところに言ってしまうても。二人の愛が、心がいつまでも一緒にいられるように願って”

アミカルの花。

それは御伽噺の中に出てくる、かつてこの北帝国に咲いていたという花の名前。

神聖語で“友情”の意味を持つその花は、ルークの知るいくつかの物語にも出てきたものだ。

“いつか、誰かが私の手記を読むのなら。一つだけ、このどこにでもいる平民の女の言葉を覚えておいてください”

最後のページ。

“愛は永遠に。絆は悠久に。想いは、久遠の彼方にだって届く。それが私が、あの二人の優しい心から学び、信じたこと。だからどうか誰かのために、願ってほしい”

それだけが、私の残す言葉です。

その言葉を最後に、手記は終わっていた。

「……………ふう」

読み終え、ルークは息を吐く。

思つた以上のものだった。

長年女学院生の中で読み継がれ、歴代の図書館の管理人がひっそりと残してきた秘密の手記。

その中に綴られた名もなき誰かの願いと、共に綴られた二人の男女の小さな物語。

生憎と後者のみが強くなっているようだが、ルークはこの手記が素晴らしいものだと思つた。

「ルル先輩。貴女は確かにこの世界を……この世界で、愛していたものがあつたんですね」

本を置いた右の手首につけた飾りを、無意識に触る。

そこに込められた想いと、彼女がこれを自分に託した意味を考えて……ルークは笑つた。

「俺もちゃんと、俺の愛するものを守ってみせます」

誰に聞かせるでもなくそう言つて、ルークは席を立つ。

「ん？」

そうして本を机の上から取つた拍子に、背表紙から飛び出た小さな白を見つける。

そつと指を差し込んで引つ張り出すと、それは背表紙の裏に隠すように入れられた一枚の紙だった。

「なんだこれ、また挿絵か何か——」

二つに折つて閉じられたそれを開いて、ルークは固まる。

紙に描かれていたのは、照れ臭そうに笑う一人の女性。

二つの挿絵にあつた“彼女”ではない、恐らくは書き手本人だろうその女性は。

「……嘘だろ、これ」

どこか、あの恐ろしい寮監に似ていたのだった——。

稽古

「うーむ……」

部屋に一つ、悩む声が響く。

発生源はこの上級修剣士寮の新たな住人である、ルーク。

つい最近引越しを終えたばかりの彼は、ソファに座り一人悩ましい顔をしていた。

その視線の先には、格調高いデザインのテーブルの上に置かれた一枚の紙。

“上級修剣士専用制服申請書類”と銘打たれたそれが、彼の新たな悩みの種であった。

「……どうするかなあ」

ルークの口から、もう三回目の同じ科白がこぼれる。

学院生のトップ、選ばれし十二人の上級修剣士に与えられるいくつかの特権の一つ。

それが制服の改修である。色、形、その他幾つかの点を使用者の自由にできるのだ。

ルルデイはその髪の色に合わせ、深い紺色を基調としたものとし、スカートの長さも調整していた。

キリトが傍付きをしていたソルティリーナや、ユージオのゴルゴロツソも同様に特異なものであり。

またこれは、彼ら上級修剣士を見分けるための証でもある。

そのためにルークにも、この書類が回ってきたわけだが……ここで迷った。

正直ルークとしては、自由にしていいと言われてもあまりピンとこない。

上級修剣士としての威厳はなければならぬが、かといってどこぞの輩のように自分を誇示する趣味もない。

しかし基本色にするのも、それはそれで勿体無いが……

「なあ、お前はどう思うっ？」

振り返り、剣立てに鎮座された愛刀に聞いてみる。

ーイーイン。

返事をした相棒だが、あいにくと自分で考えろと言っているようだ。

唯一の相談相手を失い、ガツクリと頭を落としたルークはため息を吐く。

「あーダメだダメだ、こんなところで考えても仕方がない。ちよつと外出よう」

こんな所で缶詰になっても仕方がない、とルークは立ち上がる。

どうせなら修練場に行くかと、木剣を手に取り、申請書をポケットにねじ込んで部屋を出た。

寮監に外に出る確認を取り、剣士達の塔の外に出る。

大修練場は上級修剣士寮のすぐ隣にあった。

今日の授業は全て終わり、よほど熱心な輩でもなければ残っていないだろうと考えながら向かう。

そして、実際に修練場の中にはわざわざ放課後まで汗水を垂らして練習する貴族様は

いなかった。

「せあつー！」

「くつ、まだまだだ！」

そう、貴族は。

木剣を手に、互いを鋭い目で睨みつけている二人の少年。

いいや、もうルーリッドを立ててからまる二年以上経過したのだ。男と言っても差し支えあるまい。

剣士と呼ぶにふさわしい気迫で鎧を削っている男達に、ルークは思わず口の端が上がってしまった。

(そりやそうだよな。お前らがこんな自由な立場になって、時間を存分に使わないわけがない)

あるいは、男の一方がもう一人を誘ったのかも。

ともあれ、弟分らの精力的な姿勢に感心しながら、パンパンと軽く手を叩く。

二人は同時に振り向き、そしてルークだとわかると一気に剣気を解いた。それを確認して、ルークは二人……キリトとユージオに歩み寄る。

「よう、お前らもいたのか。ずいぶん白熱してみたんだな？」

肩で息をする二人に聞くと、キリトは不敵に笑い、ユージオは少し恥ずかしそうにした。

「まあな。こいつが頭を抱えてるから、リフレッシュがてら連れてきたんだ」

「うん、キリトが付き合ってくれたんだよ」

「リフレッシュ？」

「あ、ああ、気分転換って意味だ」

「なるほどな」

まあいつものキリトの神聖語的な言い回しはともかく、ユージオの方を見る。

見た所普通そうだが、どうやら自分と同じように何か悩んでいるらしい。

「……よし、わかった。それなら俺も混ぜてもらおうか」

「ええつ、ルークもかい？」

「おう。俺もちょうど頭を空っぽにしたかったんだ」

いいだろう？と聞くと、特に問題もない二人は快く頷いた。

ユージオは少々休憩が必要ということとで、先にルークとキリトが模擬戦をすることになった。

「加減はいるか？」

「冗談」

からかい半分に問うキリトに答え、構える。

右半身を後ろに腰を落とし、愛刀の形に似せて削り直した木剣を左腕に乗せるように。

右の手で柄の根元を。左の手は自由に動かせるよう緩く柄頭に添える。

キリトも木剣を腰だめに構え、二人は一定の距離を保って闘志を高めた。

「ー来い」

「それじゃあ行く……ぞつ！」

宣言と共に、鋭い踏み込み。

「ハアッ！」

裂帛の叫びと共に右足が踏み込まれ、中段からの一閃が放たれる。

他の同級生達とは比べ物にならぬ鋭さと速さは、迫るだけで冷や汗が浮かぶ。

されど、ルークは動揺しない。

確かにその劍筋を目で捉え、短く踏み込むと木刀の腹でするりといなした。

「ふっ！」

そのまま返す刀で首を狙うも、素早く引き戻された劍によつて防がれる。

キリトがニヤリと笑い、同じ顔で笑い返したルークは一瞬で姿勢を落とすと下から斬り上げた。

キリトは冷静に一步下がり、その一撃を避けると上から……と見せかけ、右斜めからの斬り下ろし。

左下から同じ軌道で弾き返し、振り切る前に軌道を変えて上段。

するとキリトは、なんと弾かれた腕を振り下ろし、柄頭で木刀を叩き落とした。

「やるなキリト！」

「お前、そな！」

互いを讃え、また劍舞を繰り返す。

剣速は互角——否、力ならばルークが上。

「腕を上げたな！」

「お前こそ！」

ルークの剣術は、元を迎れば村にある衛士用の剣術指南書のものだ。

それは修剣学院の授業にも通ずるところがあり、つまるところ一撃の強さを求めたもの。

しかし、それが通じないと悟ったのは森の獣退治を行い始めた頃。

当たり前なことだが、“魅せる”ための一撃を大人しく受けるような、阿呆な獣はいない。

若いルークは翻弄され、いいように弄ばれた。

それからルークは手数ของ多さに重きを置くようになり、そしてキリトが現れた。

数々の秘奥義に多彩な剣技、これこそが求めていたものだと確信し、積極的に取り込んだ。

貴族達からは田舎剣法などと馬鹿にされているものの、ルークの今の地位がその実力の証左。

つまるところ、経験と類い稀な修練によって培われた剣技は……キリトに勝るとも劣らない。

「ハッ！」

「フッ！」

永遠に続くかと思われた攻防は、互いの首筋に剣を突きつけることで終わった。

「……引き分け」

「だな」

互いに剣を収め、張り詰めていた緊張感が解ける。

キリトとルークは互いに無言で見つめ合い、やがてがっしりとどちらからともなく手を握り合った。

そこに観戦していたユージオが近づいてきて、キラキラとした目で二人を褒める。

「すごいよ二人とも、速くて目で追うのが大変だったよ」

「おおユージオ、次はお前か」

「うん、よろしくねルーク」

それからユージオとも模擬戦を行い、その結果はまたも白熱したものとなった。

キリトに負けない気迫、そしてギガスシダーの伐採で鍛えられた足腰から繰り出され

る力強い剣技。

ルークは存分に剣を振るい、熱中することで、頭痛がしそうなほど悩ませていた思考を爽快にした。

「ふう、一旦休憩……」

「つ、疲れたよ……」

「まあ、お前らは俺が来る前もやってたからな。仕方がない」

腰を落ち着けた二人に笑いかけ、ルークは目の前に座る。

「で？ ユージオは何に悩んでたんだ？」

「実は、傍付きのことなんだけどね」

「あーそうか、お前らも上級修剣士になったからには付けないといけない義務があるもんな」

「そうそう。で、俺らは平民だろ？ だからユージオ君は、貴族様の息子や娘と、どう接しようって今から緊張してたんだ」

「なるほど、そういうことか……」

以前にも話題に出たが、気楽に聞き流せない問題だ。

ライオスとウンベールのようなのは稀だが、それでも貴族は総じてプライドが高い。

下手な相手を選ぼうものならば、先輩である修剣士が後輩にへり下る、なんてことになりかねない。

そんなことをユージオは心配しているのだろう。

自分達は決して、貴族に媚を売るためにこの学院にいるのではないのだから。

ルークも、相手は慎重に選ぼうと内心決めていた。

「そういうお前は気楽そうだな、キリト」

「実際に会ってからじゃなきゃ、どうなるかなんてわからないだろ？　どんな奴が学院に入ってくるのかもわからないしさ」

「まあ、それも一理あるな」

「キリトのその奔放さが、時々羨ましく思えるよ」

呆れとも取れる反応を返すユージオに、いたずらに笑ったキリトは「なんだと〜？」とじゃれついた。

いつものことなので微笑ましく見守り、やがてキリトが飽きてユージオから離れた所でルークを見る。

「要するに、落ち着いて、自然体でいけばいいんだ。ステイ・クールだよ」

「ステイ・クール……」

「それにほら、いけすかない奴が出てきても、我らがルーク君があしらってくれるさ」
「まったく、俺は貴族避けじゃないぞ」

でもあしらってるだろ、と笑いかけられたら、頷かざるをえない。

他の学院生達の間でも、貴族をやり込める不遜な男として名が通ってるのがなんとも皮肉だ。

「しかし、自然体か……」

口の中で呟くように、キリトの言葉を反芻する。

自然体。

無駄に畏まる必要も、威厳を必要以上に出す必要もない。

それは、今ルークが抱えている悩みを解決するには十分な答えだった。

「ありがとな、キリト」

「ん？ 何のことだ？」

「いや、なんでもないさ」

軽く肩を叩けば、キリトはユージオと顔を見合わせて首を傾げた。

その後、十分に休息をとった後にもう一戦やり、広場の方に行くらしい二人と別れた。

「♪」

寮へ帰る際のルークの足取りは軽く、鼻歌さえ歌いながら歩く。

たった十数メルの道を行き、寮監に帰ってきたことを告げ、確認を取ってもらい部屋に行く。

「さて……」

部屋に帰って早速、木刀を片付けて申請所類を書くことにする。

ポケットの中で若干端が折れていた用紙を取り出し、テーブルに置くとカリカリと書き込む。

「あとは……」

いくつかの項目を書き込んだ所で、視線を上げて部屋の中を彷徨させた。最終的に白剣へと目線は定まり、応えるように牙は震えた。

ーイーイン。

「そうだな。俺の『自然体』には、お前もいないとな」

『主張』を伝えてきた相棒に笑い、ルークは最後の項目を書き込んで。

数日後、ルークの下に届いた制服は灰色に染まり、青と白の線が入っていた。

再会

人界歴三百八十年、四の月七日。

その日は北セントリア修剣学院に在籍する、上級修剣士にとって重要な日である。何せ、彼らは入学試験で得点の高かった上位12名の新たな初等錬士から、傍付きを選ばなければならない。

これは、生まれながら《貴族》の天職を与えられた学院の子息子女らにとって、一種の儀式だった。

上級修剣士、特に子女は、自分より爵位の低い家の錬士を選ぶことが好ましい。

つまりここで自分より格上の相手を選ぼうものなら、自分の無知を晒すこととなる。

それを避けるため、貴族である上級修剣士は他家の名を覚え、緊張を張り巡らせて臨む。

もつともこれは、貴族ならばの話。

ルーク、キリト、ユージオ。

平民にして見事上級修剣士の座を手にした彼らにとって、この風習はほぼ無関係。ただ代わりに気にすることが一つ、決して上位貴族を選ばないこと。

これだけ聞くと風習に囚われているようにも思えるが、実際は個人的な心情が非常に強い。

あの性悪二人組やその他のお貴族様に辟易している彼らにとって、それは最重要事項なのだ。

願わくばルルデイのような人物がいることが望ましいが、そんなことはあり得まい。故に、キリトとユージオを守るためにこの二年で鍛えた観察眼をルークは存分に使う気でいた。

無論貴族の家名など網羅していないが、見ればわかる。

「……時間か」

八度目を半分過ぎた鐘が鳴り、ルークは神聖術の教本を閉じる。

集合30分前の知らせでもあるそれに、よしと今一度気合を入れてソファアールから立ち上がる。

部屋にはルーク一人。

一度浴室に行き、鏡で寝癖や真新しい上級修剣士の制服にシワがないかを確認する。

初等錬士のものより濃い灰色に、胸元に白と水色の差し色が入った制服。

当初こそ大して興味がなかったので気恥ずかしかったが、一週間も経てば今や彼の勲章だ。

「……………よし」

身だしなみに問題がないことを確認したルークは、ふと手首に目があった。

動かした拍子にチャリン、と互いに擦れて音を立てる、二つの花飾り。

「行つてきます、先輩」

それを通して「彼女」に眩き、ルークは気合を込めた瞳で浴室を後にした。

「じゃ、行つてくるぞ」

——イイン。

相棒にも挨拶をして、いよいよ部屋を出る。

そうして扉を閉めたところで、向かいから音がして振り返った。

「あ、ルークだ」

「おお、二人か。キリトはちゃんとうたた寝はしなかったみたいだな」

「おいー」

本日も良い日柄、暖かい陽光で寝こけていたと勘繰られたキリトが抗議する。

隣にいたユージオと、螺旋状の階段を間にルークが笑い、最後の緊張を解きほぐした。

「つたく……っし、行くか」

「うん」

「ああ」

切り替えは一瞬。

揃って頷き、一階に降りると寮監からの激励をもらって集合場所に急ぐ。

上位12名が集められ、上級修剣士と面会するのは大修練場。

学院生達が修練を積み、剣技を磨くその場所こそが並み居る剣士を押しつけ、上に立った者達に相応しい。

初等錬士は既に入学式を終え、大修練場にて上級修剣士を待っている。

なので自然と足早になりながらも、三人はぼやくような会話を交わす。

「それにしても、ほんとこの行事緊張するんだよなあ……」

「去年は僕らが選ばれる側だったからね。適当に決めないでよ」

「わかってるって。いらないおべっかを使うのなんかゴメンだからな」

「俺の方でも見とくが、二人とも気をつけろよ」

警告とも取れる言葉を二人に送り、幾許もしないうちに大修練場の前に着く。

今更確認しあうこともなく、ルークが扉を両手で押し開いた。

中に広がるは、まさに大修練場の名にふさわしい立派な練習場。

磨き抜かれた白板張りの床、四面取られている正方形の試合場と階段状の観客席。

年四回の検定試験を最大のイベントとして使われるそこは、実に院生・教員合わせ2

60名を収容できる。

そこには既に何人かの上級修劍士が揃っており、ルーク達はそこそこ早かったようだ。

「おやおやこれは、ルーク上級修劍士にキリト修劍士、ユージオ修劍士ではないか」「てつきりその身分が恥ずかしくて、部屋から出てこないものと思いましたがぞ」

そしてまあ、厄介な奴らもいた。

もはやお馴染みとなった嫌味ではあるが、ウンベールのルークを見る目がやけに敵意に満ちている。

それもそのはず。

二人のうち、特に噛み付いてくるウンベールを悉く撃退しているのはルークである。

さりげない授業中の嫌がらせを逆手に取り、自分の優位とすること数回。

うまい具合にキリト達を人の目の届かない所に誘導しようとし、教員にチクったこと数回。

嫌味を嫌味で返すこと、数えきれず。

ただでさえやり込められていることが不満ならしい上に、第三席になった途端これだ。

どうやら捻じ曲がったプライドをこさえた彼にとつて、ルークはとても調子に乗っているらしい。

まるで平民風情が、と顔に浮き出てきそうなレベルで剥き出しの負の感情だ。

「おや、これは首席殿と次席殿。本日もご調子はよろしいようで。ところで上の部屋はどうですか？ なんでも風が強いとか。特にウンベル殿は、その髪型が風で崩れそうですが」

「貴様……っ！」

「やめろウンベル……いや何、実に爽快だよ」

「そうですか。それでは」

が、ルークはまるっとそれを無視して部屋の隅に二人を伴い去った。ウンベルの顔がさらに赤くなった。

「ぶっ、くく……っ！」

「か、髪型がつて……っ！」

「だつてお前らもそう思わないか？ あの髪型、絶対毎朝丹念にセットしてるぜ。それなのに窓から吹き込む風で、ブワツと……」

「や、やめろルーク、脇腹が痛い……!」

「な、なんでそんなこと思いつくのさ……!」

本人に聞こえないよう堪え笑いする二人に、ルークの背中に射抜かんばかりの熱視線が突き刺さる。

無論ルークは反応すらせずに腕組みをして時を待ち、さりげに初等錬士を観察する。

(みんな緊張してるな。特にあの小柄な女の子と赤髪の女の子が……?)

半数が女である初等錬士を観察していると、ふと目が止まった。

特にガチガチに緊張している二人と対照的に、全くその気がないからか。

あるいは、その「背中まで伸びる艶やかな紫の髪」にどこことなく既視感を覚えたか。

(あの子どもどこかで……それも、一度会ったら忘れないレベルの……)

頭を捻るルークだが、後頭部しか見えないのではわからなかった。

結局ルークが思い出す前に上級修剣士が全員集まり、いよいよ始まった。

「では首席から、順番に指名するように」

教師の言葉に従い、直立不動で並んだ初等錬士達から傍付きが選ばれる。

順位に倣つて並ぶために、隣からのウンベールの視線をシカトしながら自分の番を待つルーク。

さほどせずにライオスが召使い……否、傍付きを選び終え、ウンベールも同じように相手を見繕つた。

「では、ルーク上級修劍士。前へ」

「はこ」

一歩前に進み、残る十人の錬士達を一人一人と順に見ていく。

不安がるもの、不思議がるもの、平民と見下す目をするもの。

あるいは、背の高く切れ長の目をしたルークの真剣な顔に怯えるものもいた。

とりあえず、あからさまな蔑みを向けてくるものは除外。

次に小さく悲鳴を上げた先程の女子二人も、彼女達に悪いので除外。

仕方なし、残る誰かから選ぶかと視線を巡らせ……ふと一番右端を見た。

「っ！」

そして、目を見開いた。

そこに立っていたのは、一人の少女。

些か小柄な体を初等錬士の制服に包み込み、美しい髪を左側で括っている。

少女と女性の間にいるような美貌は無機質で、その瞳もまたじつと虚空を見つめ。

全てに見覚えがある。

あの日と変わらない、けれどあの時よりも凛とした少女に、ルークはこれも運命かと笑んだ。

「ルーク上級修剣士。早く選ぶように」

「ああ、はい……では、右端の君」

ゆつくりと、こちらに向く視線。

彼女はルークの顔を見て、僅かにだが目を見開いた。

それは驚き半分、といったところ。残る半分は彼女のみぞ知るところだが、悪意ではない。

「名前は？」

「……シャーリー・テイリーモア。五等爵氏、テリイーモア家長女です」

「そうか。では——君を俺の傍付きに指名したい」

迷いなく、そう告げる。

彼女が断ればそれまで。思い返せば、実に短く他愛無い縁だ。

だがルークは、この偶然をそれのみで終わらせるのは勿体無く思った。

「……謹んでお受けいたします、ルーク上級修劍士殿」

「では、これからよろしく頼む。テイリーモア初等錬士」

形式的な挨拶を終え、ルークは列に戻る。

それから何事もなくキリト達も指名をして……あの二人だった……傍付き選考は終わった。

「では、これにて解散とする。以降、授業はないが寮で過ごすように。また、自主的に傍付きの生徒に学内を案内することは許可する」

教師の言葉に、そういえばそんなこともあったなと思いつく。

この日は入学式に初等錬士達の入寮、その他諸々の手続きで学院はある種の休みとなる。

とはいえ休日でもないので許可なく学外へは出られないが、ある程度の自由が与えられた。

去年はルルデイに選ばれて早々、丘や小川まであるこの広大な敷地を連れ回されたものだ。

物思いに耽るうちに、各々解散していく生徒達。

あるものは最低限の顔合わせで初等錬士と別れ、あるものは上級修剣士寮に案内するという。

そして弟分達は、やはりというか異性が相手になることでなんともぎこちないやり取りをしていた。

一番マシそう、という理由が主たる選考理由だったが、まあ今後の成長のためにも放っておこう。

そう思い、軽やかに弟分達を見捨て……見守ることにしたルークは、彼女を見る。するとシャーリーの方も、じっとルークの方を興味深げに見つめていた。

ルークは少し笑い、なるべくあの日のように優しい顔つきを心がけながら歩み寄る。

「やあ、久しぶり。この学院に入ってきたんだな」

「……ん、お久しぶりですルーク上級修剣士殿」

返ってきたのはやや固い声での返答だった。

(……ああ、緊張してるのか)

見れば、少し表情も強張っている。

思っていたよりもわかりやすい少女に、ルークはとりあえず話題を振ることにした。

「とりあえずここからは自由行動だし、少し外を歩きながら話そう。君が良ければ、だけど」

「……わかりました」

これでも貴族の娘なので少し警戒していたが、シャーリーは表情無く頷いた。

嫌がっているわけではなさそうなので、キリト達を残して大修練場を後にする。

「ここが中庭で、あっちが中央校舎と図書館。で、あそこにあるのが初等錬士寮。数ヶ月前まで俺もいたんだ」

「……結構、広いですね」

「ああ。俺はちよつと訳あつて大体の場所を把握してるから、迷いそうな時はすぐ聞いてくれ」

「……はい」

一応敷地内の説明をしながら歩くこと、少し。

やはり緊張しているようで、シャーリーの受け答えはぎこちない。

なんとも言えぬ表情になり、ルークは「あー」と徐に切り出した。

「使いづらいなら、敬語はいらないよ。あの時みたいな感じでいい」

「……でも」

「無理矢理に畏まる必要はない。俺もその方が気楽だからさ。それにほら、こう言うのは好きじゃないけど、俺は平民で君は貴族だろ？」

それを避けて選んだ以上、ある意味禁句のそれを言うと、シャーリーは少し考え込ん

でから領いた。

「……ルーク上級修剣士殿が、そう言うなら」

仰々しい呼び名に、それもそのうちどうにかしなれないかと思いつつ領くルーク。

途端にシャーリーは、ふつと小さくため息を吐いて表情を少しだけ和らげた。

「……疲れた」

「だろうな」

「ここに来てから、ずっと緊張しっぱなし。あなたに会ってもっと緊張した」

「それは悪かったな。俺も驚いたよ、まさか君がこの学院に入るとは」

あの日の推測は間違っていないかった、と言うことだろう。

なにせ上位に入るほどの得点を取れる腕前を持つのだ、剣士として将来性があるだろう。

「昔から、剣が好き。貴族の義務としてじゃなくて、私が自分で好きなの」

「そっか。俺も剣を振るのは好きだよ。おかげでこんな場所までやって来れた」

今は誇りである制服の襟元に指で触れつつ、ルークはシャーリーを見下ろす。

彼女は歩きながらじっと見つめ返してきて、少し躊躇いがちに口を開いた。

「どうして私を選んだ？」

「そりゃ、下手な貴族様を選ぶくらいなら、あんなことでも顔見知りの方が楽だろ？」

「……確かに」

「ああ、あともう一つ」

「？」

「また同じようなことがあった時、すぐに守れるようにさ」

ポンポンと軽く肩を叩き、笑いかけるルーク。

彼としては、一度厄介ごとに首を突っ込んだ以上は最後まで面倒を見るつもりだった。

次の再会はこの数ヶ月も後となったわけだが、それでも変わりはない。

ちなみにこれは、よく痲癩を起こして口喧嘩する村の子供達の世話から生まれた思考だ。

一回関わろうとしたならちゃん最後まで世話をして、安全にことを終わらせる。

おかげで、何故か年の近い連中には“年下殺し”だの“無自覚たらし野郎”などと意味不明なことを言われたが、そこはそれ。

ある意味教訓じみたそれは、彼の中でシャーリーの一件にも履行されていた。

「とういわけだ。困ったことがあればなんでも言ってくれ。俺のできる範囲なら、上級修剣士として面倒みるよ」

「……ありがとう」

「ん。じゃあ、今度は校舎内の案内をしようか」

中央校舎の方に歩いていくルークの背中を、シャーリーは見る。

「……私も、あなたに選ばれてよかった」

右肩に手を置いて、小さくつぶやいた言葉。

それはルークには聞こえず、彼女は小さく微笑みながら後についていった。

【第三章】 幼竜の咆哮

新しい学院生活

早いもので、もうひと月が経過した。

上級修剣士としての生活はまずまず、といったところだろう。

初等錬士だった頃より、実技や座学の授業などの難度も格段に上がっている。

生来の努力家なことも一助し、特に問題もなくルークは二年目の学院生活をスタートしていた。

キリト達のフォローもやりつつ、貴族とも上手く付き合っている。

ルルデイという、ある種の抑止力が消えたことで、多少の負担は増えたが、彼らのことを差し置いても良き日々を過ごしていると、ルークは確信していた。そして何より、一番に変わったことは……

「つと。ちょうど良い時間か」

鐘の音が響き、刻を報せる。

清涼な音色にルークは顔を上げ、初等錬士寮の刻限三十分前のそれに呟いた。

そんな彼の右手に、小さな包みが大切そうに抱えられている。

「あまり待たせても悪いからな……」

少し急ごう、と気持ちを改め、彼は上級修剣士寮の扉を押し開く。

かつては呼ばれて来るだけだったそこは、今や彼の新たな住処なのである。

寮監に挨拶を済ませ、自分の部屋に向けて階段を登るルーク。

ギシリ、と軋む板の音さえも、多くの錬士が使うことで傷んだ通常の学院生寮とは違う気がする。

その音を聴きながら、ルークは一段、また一段と上階へ歩を進めた。

程なくして、自室の前へと到着する。

集合部屋とは比べるべくもない、上品な作りの木扉に、ノックを一つ。

「入るぞ」

「……はい」

小さな、けれど確かな答えが部屋の中から返ってきた。

それを確認してから、ドアノブを捻って押し開き、中に入る。

とある理由で独占している部屋には、一人の修剣士が待ち構えていた。

「……ルーク上級修剣士殿、ご報告します。本日の清掃、完了しました」

揃えたブーツからカチツ、音を鳴らして敬礼する、小さな初等錬士。

美しい紫の髪を一部括った、少女と女性のちょうど中間にいる、絶妙な美しさを持つ

少女。

告げられた報告に視線を巡らせれば、輝いて見えるほどにしつかり綺麗になっている。

自らの傍付きであるその子女に、ルークは胸を張り、空いている右手で敬礼を返す。

「ご苦勞、シャーリー初等錬士。実に良い働きであった」

「……ふふつ」

「おっと、格好つけすぎたか？」

「……いいえ、ありがとうございます」

芝居掛かったルークのセリフに一瞬笑ったシャーリーは、すぐにそう返した。

頷いたルークは敬礼をやめて、二歩ほど彼女に歩み寄ると、包みを差し出した。

「ということ、はい。今週も頑張ってくれたお礼だ」

「……」

小さく目を見開いたシャーリーは、キラリと瞳を輝かせる。

その包みは、大きさを鑑みれば大層なものが入っているとは到底思えない。

けれど、慎重に両手で受け取る様を見れば、彼女にとつては価値のあるものなのだと分かる。

「あんまり時間がないから、いつも通りここで食べていくといい。お茶くらいなら出すぞ？」

「ぞ？」

「……心から尊敬します、先輩」

「はは、そりゃ良いお返しだ」

片時も包みから目を離さないシャーリーに笑い、ソファへ誘うルーク。顔を綻ばせる少女に微笑みつつ、ルークは戸棚にある茶葉を取り出した。

ルークの生活において何よりの変化は、彼女の存在だ。

シャーリー・ティリーモア。

ほんの些細な出会いをした彼女を傍付きに任命してから一ヶ月、それなりの関係を構築している。

ある意味、学生の頂点に立つ上級修剣士は、入学したての錬士にとつては畏敬の的。その為、普通に会話をできるようになるまで二ヶ月はかかるのが通例だ。

幸い、元より年下の相手が得意なルークは、なんとかその半分で打ち解けられた。

彼女が基本的に感情を表に出さないだけで、善良で素直な性格だったこともあるだろう。

あるいは、彼女が包みから取り出している、跳ね鹿亭の蜂蜜パイで餌付けしたとも言

「どうぞ」

「……ありがとうございます」

そつと置いたカップに、シャーリーはようやく顔を上げた。

甘いものに夢中な様子は、貴族でも普通の少女と同じだ。

そう思いながら対面に腰を下ろすと、ようやくシャーリーはパイに口をつける。

「あむ……ん」

小さな口で、味わうように咀嚼する。

桜色の唇は上に向けて弧を描いていて、堪能していることが伺えた。

「美味しいか？」

「……ん。まだ、温かい」

「天命が減ると勿体ないと思って、急いで帰ってきて良かったよ」

ご満悦な様子ごのシャーリーを見ながら、ルークは続けて一言。

「それに、リーの貴重な笑顔を見れる機会だからな」

ピタ、と一瞬動きを止めるシャーリー。

すぐにまた咀嚼を再開したが、少し細められた瞳で見つめられ、ルークは首を傾げる。つい数日前に呼ぶことを許されたあだ名を、早速使ったことがまずかつただろうか。

「はむ……先輩は変態」

「ええつ、いきなり印象が悪くなったな。やっぱり愛称は早かつたか？」

「そうじゃないけど……ちよつとビツクリ」

「どうやら、あだ名を呼ぶのはそう悪いことではなかつたらしい。」

「では他に理由が？」と思いつながら、ルークはまず謝る。

「悪かつたな。気をつけるよ、リイ」

「……ん。私は先輩の傍付きだから、許すしかない」

「おっと、どうやら俺は悪者みたいだ」

「これは参った、と笑うルークに、シャーリーも目元を緩ませるのだった。

「学院での生活は慣れたか？」

「……ちよつとずつ。色々新鮮で、楽しい」

「ああ、分かるぞ。俺も色々楽しみながら慣れていったんだ」

ぽつぽつと、少しずつパイを齧りながら話すシャーリーに、ルークは相槌を打つ。

村の衛士と、五等爵氏とはいえ貴族。

立場は違うが、この学院に入れば等しく修剣士であり、大概は同じ体験をする。

そして二人は、未知の体験に心を躍らせる類の人種であった。

「神聖術とか、剣技の授業は面白い。けど、教官が怖い」

「あー、あの教官。あの人はとりあえず、言われた通りのことを実践すれば、後は口はそんなに出してこないぞ」

「ん、そんな感じ。だから型をしつかり——」

その時、バタバタと廊下から音が聞こえてきた。

室内によく響いたそれに、ルークもシャーリーも口を閉じる。

程なくして、誰かの足音と思われる、女の子らしい歓声混じりの騒音は止む。

「……今のは多分、ロニエとティーゼ」

「ああ、あの二人か。てことは、やっとキリトが帰ってきたみたいだな」

ロニエとティーゼ。

シャーリーと同じ下位貴族の子女であり、傍付き指名の時ルークに怯えていた二人だ。

今でこそ、キリト達を介した交流で打ち解けているものの、最初はかなり怖がられていた。

「キリト先輩は、いつも自由奔放」

「本当にな。大方、窓からでも入ってきたんじゃないか？」

冗談めかして言えば、小さくシャーリーが笑う。

が、東三番通りから帰ってくるには窓からが最短コースだ、という弟分の言をルークは知っていたりする。

「そういえば今日、跳ね鹿亭で大量に蜂蜜パイを買っていった修剣士がいたって聞いたな……さてはキリトのやつ、買い込んだか」

「ロニエとティーゼは、それをもらった？」

「あいつがやりそうなことだ」

苦手になっているくせに、上手く人心を掴むのがあの弟分の得意事だ。

くすくすと笑うシャーリーに、ふとルークは尋ねる。

「リイは、平気か？ 他の奴らとの関係は」

「……ん。確かに嫌な目を向けられることもあるけど、上手くやってる」

「そうか。それならいいんだが……」

初等錬士の中で、傍付きに任命される12名は羨望の的であり、ともすれば嫉妬の対

象。

そのことをよく理解している彼は、小さな傍付き錬士の身を案じていた。

理由は単純にそれだけではない。

ルルデイが使っていたこの部屋は、実のところ他の部屋に不備があつた場合の予備の部屋だったのだ。

それなのに、部屋には茶器や書物といった、彼女の痕跡が残っていた。

あえて残したのだらうそれらを、当然寮監や他の上級修剣士は不気味に思う。

それに乗じて、ルークは寮監を得意の弁舌で丸め込み、占有地とした。

彼女の残滓を守りたい、という思いからだだったが、少し悪目立ちしてしまった。

だからこそ、自分の傍付きである彼女を案じるのだ。

「むしろ、そういう嫉妬より別の意味で大変……主に女子的に」

「ん？ どういうことだ？」

「……なんでもない。ロニエとティーゼも、仲良くしてくれるから大丈夫」

「同じ傍付き同士、つてことか……それでも、困ったことがあれば言えよ。いつでも駆けつけるから」

平民にできることなんてそうないが、と心の中で続けながらも、そう告げる。

すると、シャーリーはまた少し動きを止め……勢いよく残り少ないパイを食べた。そして紅茶を飲み干すと、すくつと立ち上がる。

「……とても美味しかった。ありがとう、先輩」

「いつも掃除とか、色々ありがとうな」

「ん。それじゃあ、初等錬士寮に戻る」

「急ぎすぎて転んだりしないよう、気をつけるんだぞ」

「……ん」

小さく頷いたシャーリーは、今一度礼をすると部屋から出ていった。

扉を潜ったところで振り返り、会釈をして足早に去っていく。

律儀に閉められた扉の向こうで、彼女のブーツが床を蹴る音が響いた。

「……あいつ、ちよつと耳赤かったけど大丈夫かな？」

——イイン

ルークの科白に応えるように、甲高い音が脳裏に響く。

振り返れば、壁にかけられた白の剣が静かにそこに在った。

「——ようやくここまで来たぜ、相棒」

己の愛剣に向けて、ルークは呟く。

「あと少しだ。あと少しで、あの塔に辿り着ける」

上級修剣士になるという、当座の課題は達成した。

次は、卒業検定試験で他の修剣士九人を倒し、ルーク達三人のいずれか二人が学院代表に。

「まあ、しばらくは第三席としてあいつらの壁になってやるさ」

——イイン

戯れの言葉に、白剣は返答してくれる。

そのことに笑みを浮かべながらも、ルークはこれから先のことを思い浮かべた。

学院代表として帝国剣武大会に参加、優勝を果たし、その後の四帝国統一神前大会に

て勝ち残れば……

「必ず、一年後に到達する。そして——」

あの日、己が蛮行によつて連れ去られた大切な少女を、必ず。

「俺は、絶対に諦めない。アリスを取り返して、今度こそ……」

キリト達共々、絶対に守ると。

——示せ。お前の、意思を。

その決意に、どこからか厳かな声があった。

秘める意思

俺……桐ヶ谷和人がこのアンダーワールドにやってきて、二年。

明日奈と一緒にいた時に、元ラフィン・コフィンのジョニー・ブラックに襲われ、気がつけば、「キリト」としてラースが管理するこの世界へと舞い降りていた。

程なくして、ユージオというこの世界の住人……アンダーワールド人に出会った。

彼に導かれ、ルーリッドの村にて出会ったのは、ルークやセルカを筆頭にした大勢の人々。

まるで異世界のようなこの世界に生きる彼らは、驚くべきことに自ら成長する人工知能なのだ。

だが、それを時々忘れてしまいそうになる程に、彼らは人間味に溢れている。

常々そう感じるのは、ユージオとルークという近しい存在がいてこそだろう。

俺にとって、ユージオは相棒。ともすれば兄弟のような存在だ。

彼に俺が剣技を教え、そして彼が俺にこの世界の常識を教え。

助け合い、歩幅を合わせて積み重ねた時間は、彼が単なるAIではなく、魂を持つ人”であるとは何度も俺に感じさせた。

そして、ルーク。

彼は、ユージオとは違った意味で特別な存在だ。

俺個人の観点から見れば、頼り甲斐のある兄貴分というのが適切か。

同じ目線に立って、同じ場所を目指す手助けをしてくれる、同じ年の兄貴分。

常に余裕を持ち、先を見据え、理知的に行動する様は、厄介な貴族達でさえ歯牙にも掛けない。

恥ずかしながら、彼に剣を持つ以外の戦いで助けられた回数は数え切れないだろう。

色々と純粋なユージオに比べてみると、ある意味より現実世界の人間らしいと言え

る。

そんな二人と共に、俺は今日まで人界を統括・守護する公理教会《セントラル・カセドラル》を目指し、剣を振るっている。

俺は、あの天楼に存在すると思われる、現実世界への架け橋を目指して。

ユージオは、かつてこの人界を守る整合騎士に連れ去られた幼馴染、アリスと再会する為に。

ルークは、ユージオと同じようにアリスを取り戻す為。

そしておそらくは……俺達が旅の終着点に至ったその先をも、考えている。

「せあっ！」

「ふっ！」

裂帛の叫びと共に、剣戟が交わされる。

木剣とは思えない硬質な音が響き、白金櫛の刀身が小さく火花さえ散らしているように見えた。

それを握る二人の剣士は、鎬を削りながら小さく微笑むのだ——俺の眼前で。

「良い踏み込みだな、リィ！」

「んっ！」

背の高い男——俺の友人にして兄貴分であるルークが、楽しげに褒める。

短く返答した傍付きの女の子が、一旦身を引くと恐るべき速度で刺突を繰り出した。

「しいっ！」

「はっ！」

レイピアのように細い、木剣の切っ先が刀身の腹で受け止められる。

一度ならず、何度も何度も、いなす隙さえも与えないよう嵐のように繰り出されていく。

小柄ながら……いいや、小柄だからこそ素早く、鋭い。

踏み込みも体重移動も良く、もしかしたらアスナともいい勝負ができるのではないだろうか？

そう感嘆するほどに、一つ下の少女の剣技はずば抜けていた——相手がルークでなければ。

「いいぞ、リイ！ 技の繋ぎが前より滑らかだ！」

「くっ！」

剣の腕前を褒めそやしながら、軽々と全ての刺突を受け止めている。

適当にはない。一つ一つの動きが洗練され、最も彼女を疲れさせる位置取りをしているのだ。

実際、良いペースを保っていたシャーリーさんの動きが、少しずつ鈍っていく。

やがて、それは起こった。

握力が限界だったのだろう。腕を引き戻した拍子に剣先がぶれたのだ。

「ふっ！」

「っ！」

そのタイミングを見逃さず、ルークが踏み込む。

シャーリーさんは小さく驚き、苦しげな顔をしながら身を引いた。

そして胴体を守ろうと木剣を構え——ピタリ、と止まったルークに今一度驚く。

フェイント。大仰な動きで意識を誘導したルークは、彫像のように静止することで更に大きく隙を作った。

そしてルークは、両手で握った木刀を——

「はい、ハイ」まで」

「……あう」

トン、と天命が減らない程度の力で、剣先が頭に置かれる。

それは終わりの合図。

途端にシャーリーさんが座り込み、荒い息を吐く。

「うん、目覚ましい進歩だな。この前よりも剣技の冴えが増してる。いい成長だ、リイ」

「はあ、はあ……ご指導、ありがとうございます」

「ゆっくり息を整えるんだ。まだ時間はあるから」

ルークの言葉に、木剣を支えに立とうとしていたシャーリーさんが緊張を解いた。

それを優しい眼差しで見ているルークは、ふとこちらに振り返る。

「で、観客席のお客さんのお眼鏡には敵ったかな？」

「……ああ、十分だよ」

汗ひとつかいていないルークの顔に、苦笑せざるを得ない。

アンダーワールド人は平均してかなりスタミナがあるが、ルークは中でも飛び抜けている。

長年鍛えられた肉体と、恵まれた体格から繰り出される剣技は、時折俺でもひやりとするほどだ。

しかも、稽古をしながら相手に改善点を気付かせるのも上手い。

「ほら、これ」

「おう、ありがとう」

修練場を支える柱の根元に置いていた、シラル水の入った水筒とタオルを投げ渡す。

見事にキャッチしたルークは、視線を彼女に戻すと空いている手を向ける。

「平気か？」

「……はい」

ルークの手を取り、シャーリーさんが立つ。

すっかり呼吸を整えた彼女は、カチリと靴を合わせると小さく会釈した。

「いい勉強になりました。感謝します、ルーク上級修劍士殿」

「ああ、俺も色々考えることができた。今後も頑張ろうな」

「はい」

顔を上げるシャーリーさん。

そこにタイミングよく、ルークが水筒とタオルを差し出した。

彼女はそれをしっかりと受け取る。

「それで。キリト大先生から見ても、リイはどうだ？」

「なんだよ、その呼び方……筋はいいと思う。ちゃんと基礎はできてるし、反応も早い」
流石、並み居る初等錬士達の中でトップ12位に入っただけのことはある。

偶然学院内で遭遇し、どうせならと稽古を観戦させてもらったが、充分見応えがあった。

それに……

「シャーリーさんは、劍が真っ直ぐだ。一本芯が通ってるっていうか、劍筋に迷いが無いんだよ」

「ああ、それは俺も感じていた。リイは劍技にも素直さが表れてる。学んだことはすぐ
に実践できるし、反省点も即座に飲み込んで、考えながら動ける。正直ヒヤヒヤしてる
よ」

「……でも、一度も届いたことはありません」

「はは、二ヶ月ちよつとで追いつかれる訳にはいかないからな」

「むう。いつか絶対勝ちます」

「どうやら、性格の項目に負けず嫌いも追加みたいだ」

朗らかに笑うルークと、少しむくれるシャーリーさん。

さながら兄妹のようなやりとりに俺も表情を緩めながら、先ほど言ったことを思い返した。

このアンダーワールドの貴族達は、一つの義務を持っている。

有事の際に平民を守る為、修剣学院にて剣技を充分に習得しなくてはならないのである。

一等爵氏から六等に至るまで、全ての貴族が共通して持つ務めであり、責任だ。

彼女もまた、その例に漏れてはいない。

だが単なる義務以上に、彼女の剣にはどこか強い「意志」を感じる。

このアンダーワールドで何よりも力を持つと予想される、唯一無二の心意を。

「さて、そろそろ帰る時間だ。アズリカ教官に睨まれる前に、寮に帰りな」

「はい。本日もありがとうございます」

律儀にもう一度礼をしたシャーリーさんが、足早に修練場を出ていく。

その後ろ姿を見送り、俺はふと楽しい横顔のルークに尋ねた。

「なあ、ルーク。彼女があそこまで剣に没頭する理由って何だと思う？」

「ん？ そりゃあ、貴族の義務つてのがあるからじゃないか？ 三等以上の貴族様はと

もかく、下位貴族は真摯に考えてるしな」

「ああいや、それもそうなんだけど。なんていうかさ、彼女の個人的な理由っていうか」

ふむ、とルークが唸る。

オレンジ色に染まったソルスの光が満ちる修練場に、一時の静寂が訪れて。

やがて、彼は答えた。

「純粹だから、だろうな」

「純粹?」

「前に言ってたんだ。『義務としてじゃなく、私自身が剣が好きなんだ』って。その言葉は多分本当で、リイはどこまでも純粹に剣を楽しんでる。そこにあの成長速度の秘訣があると、俺は考えている」

「なるほど……」

楽しむ、か。

アインクラッド流と銘打った俺の技、それは元を辿れば、あの鉄の城で生き残る為に磨いたもの。

あの頃はかけがえない思い出もあったけれど、それよりも辛いことの方が多い、残酷な世界で。

解放された後も、俺は何かしらの目的の為に剣を振っていた。

アルヴ^A Heim^L・オンライン、 ガンゲイル^G・オンライン、 そ し て
 オーディナル^O・スケール^S。

アンダーワールドにやって来てからも、ユージオに教えている時くらいのもので。

思えば、純粹に剣を振るうのだけを楽しむというのは、あまりなかったかもしれない。

「だから俺は、その気持ちを持たせ続けてやりたい。あいつの先輩でいる間は、いつか彼

女がその義務を全うしなければならなくなるその日まで、折れないように……」

気にかかるセリフが入り混じったその言葉に、俺は返答をしなかった。

このアンダーワールドは、何よりも意志の力が強い武器となる。

剣を学び、振るうことが好きだという意思が、シャーリーさんの剣に芯を与えているように。

ソルティリーナ先輩が、自らの剣に誇りを抱いていたように。

そして、ルークもそれは同じなのだ。

強靱で、強固なまでの、*“*守護の心意*”*。

あの北の洞窟で、ダークテリトリーのゴブリンを斬り伏せた時から感じていた、無二の意思。

俺が知る中で、この世界の誰より強いその想いが、ルークの剣には秘められている。

それがより強くなったと感じたのは、数ヶ月前のこと。

具体的には、俺がウオロ・リーバンテイン主席修剣士と一戦交えた時期あたりからだろうか。

ルークはその頃から何か、その意思を行使するのに明確な到達点を得たように思える。

それは、不思議なことに誰も覚えていない上級修剣士第三席の影響ではないかと俺は考えている。

ルルデイ・クローマと名乗っていた、アンダーワールド人にしては不透明すぎた女性。彼女は、彼に何を言ったのだろうか？

「俺達も戻るか。門限が遅いとはいえ、夕食にはありつきたいしな？」
「……ふはっ。そうだな、早く帰ろう」

まあ、なんにせよ。

ルークというアンダーワールド人が、ユージオと同じように二年以上の時を共に過ごした友人で。

頼りになる、この世界での兄貴分であることは変わりがないか。

そう思い直して、俺はルークと共に修練場を後にした。

先輩とは

修剣学院の学習時間は、午前と午後の二つに大きく分かれる。

座学や剣技等、多岐に渡ることを日々学ぶ錬士達が持つ、休息日以外に最も長い休息の時。

それが正午の鐘から次の鐘までの一時間、昼下がりのひと時なのである。

この時間を利用し、錬士は昼食を取り、あるいは更なる勉学や鍛錬に励むのだ。

「……あむ」

例に漏れず、学舎の側にて食事をする少女が一人。

すぐ側に立つ大きな木の陰が自然の日除けとなる、壁沿いに設置されたベンチの一つに陣取っている。

ソルスが頂点に来るこの時間は過ごしやすいそこに、彼女はいた。

「……♪」

小さな口でサンドイッチを頬張り、小さく両足をゆらゆらと前後に揺らす。

それに合わせてサイドテールがさらさらと揺れる様は、まるで小動物が尻尾を振っているような可愛げがある。

小柄で可愛さの残る顔立ちである彼女は、そうしているだけで秘めた魅力を發揮していた。

近くを通りがかる学院生が、チラチラと彼女に目を向けているのがその証拠だ。

最初こそ気にしていたが、数ヶ月も経てばその視線にも慣れるというもの。

今ではもう、気にかかる事もなく昼食を味わうことだけに集中している。

「あ、いたよ」

「ほんとだ」

だから、自分に近づく人物に直前まで気が付かなかった。

「こんにちは、シャーリー」

「……っ？」

投げかけられる言葉に、彼女……シャーリーはようやく気がついて目線を上げる。するとそこには、柔和に微笑む同級生二人が立っていた。

「……ロニエ。ティーゼ」

「一緒に食べてもいいかな？」

「私達も、丁度昼食をとろうと思ってたの」

胸の前にバスケットを掲げる、幼きの残る顔立ちの少女はロニエ・アラベル。

その隣で首をかしげる、きりりとした目つきの赤髪の少女が、ティーゼ・シュトリーネン。

何かと遠巻きにされるシャーリーが、はつきり学友だと認識している二人組である。

「……………ん」

傍に置いていたバスケットを持ち上げ、場所を開けるシャーリー。

二人は笑顔を浮かべ、彼女を挟むようにして両隣に腰を下ろした。

「シャーリーもサンドイッチ？」

「実は私達も同じなんだ」

「うん。これが一番美味しい」

学舎の中にある、修剣士用の食堂で注文してきたサンドイッチを掲げるシャーリー。

普段は風いだ泉のような瞳がキラキラと輝いている。

伶俐な雰囲気とは裏腹な友人の様子に、ロニエ達はくすりと笑った。

「シャーリーって、ご飯食べてる時はなんていうか、年相応の反応するよね」
「たしかに。普段は真面目！　って感じだけど、こういう時は女の子っぽい」
「む。私、そんなに仏頂面？」

サンドイツチを持つているのとは反対の手で、自分の頬を弄るシャーリー。
相変わらず無自覚な上、その仕草も無表情なので、二人は苦笑いするしかない。

不機嫌と見られることすらない、完全な無表情。

初対面であれば気圧されるのは必須。彼女に近づこうとして、その真顔に離れていった男子は一人二人ではない。

しかし数ヶ月も付き合えば、それが純粋な彼女の個性であることを口ニエ達は理解していた。

「せっかく可愛いんだから、もつと笑えばいいのに」

「時々、あの鬼みたいな教官達も怯えてるくらいだもんね」

「……怖がらせてるつもりはない」

「わかってるよ、それくらい真剣に取り組んでるんだよね」

どこか優しさを含んだティーゼの言葉に、サンドイツチを咀嚼しながら頷くシャー

りー。

この学院で学ぶ全てが新鮮で、それを楽しんでいることは二人にも既知の事実だった。

「私なんか、楽しむ暇もないくらい毎日へロへロだよ……座学は大変だし、剣技の指導は厳しいし」

「だよなー。家でも剣は振ってたけど、やっぱり修剣学院ともなると格が違うっていうか」

「だからこそ、もっとももっと成長できる」

それは確かに、と頷く二人。

飽くなき探究心と好奇心は、ロニエとティーゼとて持ち合わせているのである。

三人は、口々に学院での生活のことについて語る。

あの座学が苦手だとか、神聖術の構築がどうだとか、あるいは他の学友のことだったりも。

剣を修める為に在籍しているとはいえ、学生生活というのは彼女達にとって楽しいものだ。

「……………あ」

やがてその話題が、街のアクセサリーショップに移った頃。

不意に、外へと向けた視界に映り込んだ人物にシャリーが声を漏らす。

「……………」

「それで……………？ シャリー、どうしたの？」

「何を見て……………」

無言になったシャリーの視線の先を、ロニエ達は追いかける。

すると、少し離れた場所で丁度通りがかかる三人組がいた。

一人は黒い制服を着た、活発そうな黒髪黒目の青年。

一人は深い青色の制服を纏う、冷静沈着といった言葉がよく似合う金髪碧眼の青年。

そして、灰色に水色の差し色をした制服に身を包んだ、背の高い大人びた青年だった。

彼らは何かを話し合いながら、笑顔で歩いていく。

「……………先輩だ」

「あ、本当だ」

「……………ふうん？」

ぼつりと呟いたシャーリー。

その表情は、先程サンドイッチの話になった際のように……否、それ以上に変化している。

ルークを追いかける瞳は優しい感情に満ち、口元は優しく緩んでいる。

普段のシャーリーと比べ、劇的な変化。

それにいち早く気づいたティーゼは、ニヤリと少し意地の悪そうな顔をする。

同じようにキリトを見ていたロニエは、遅れて彼女の表情を知り、シャーリーを見て……やはり同じ顔をした。

「……ん」

三人が見えない場所まで行ってしまおうと、少し残念そうに眉を落として視線を戻す。すると、ロニエとティーゼがニヤニヤとしていることに初めて気がついた。

「……何?」

「ううん、なんでもないよ」

「ただ、シャーリーの女の子っぽいところ、もう一つ見つけたなーって」

「?」

二人の言葉と表情の意味が分からず、数秒首を傾げるシャーリー。
やがて、徐々に理解していくと、それに伴い頬を赤く染めていった。

「……別にそういうことじゃない。ただ先輩がいたから、見た。それだけ」

「ええ、本当々？」

「そのわりにすごく柔らかい笑い方してたよ？」

二人の愉しそうな顔と言葉が止まらない。

それを見るまいと、下を向いてプルプルと震えるシャーリー。

合わせて小刻みに揺れるサイドテールが、まるで気持ちいを代弁しているよう。

そのうち、震えがピタリと止まる。おや？ と不思議がるロニエ達。

シャーリーがキツと少し恨めしげな顔で頭を振り上げた。

これはまずいと思ったのも束の間、

「……ロニエだって、キリト先輩のこと凝視してたくせに」

「ふえっ!? ああああれはその、えっとう……」

「シャ、シャーリー？」

「ティーゼも、この前廊下で鉢合わせしかけた時、角に隠れてユージオ先輩のことじつと

見てた」

「な、なんで知ってるの!？」

「たまたま見てた」

狼狽えるロニエ、シャーリーの眼光に体を引くティーゼ。

劣勢であることを悟る二人。交互に二人の顔を見るシャーリーの雰囲気は鋭い。

「……………ごめんなさい」

「か、揶揄いすぎちゃったね」

「……………ん、私も仕返ししたからおあいこで」

そういうことになった。

ただならぬオーラを収め、残る一つのサンドイッチを食べるシャーリーにホツとする。

彼女を挟んでロニエとティーゼは顔を見合わせ、頷き合うと恐る恐る話しかけた。

「でも、実際ルーク先輩のことはどう思ってるの?」

「悪い人じゃないとは思うけど、シャーリーからはどう見えるのかな?」

揶揄する意味のない、純粋な質問にシャーリーも、今度は少し考える素振りをする。

やがて、答えが出たのか小さな口を開いて。

「……………すごい人、だとは思う」

「すごい人？」

「それって、強いつて意味？ たしかに上級修剣士序列三位だし……」

「それもだけど。もつと、色々すごい」

ロニエ達の言う通り、剣を交えた時の泰然とした、まるで小山のように巨大な生物の如き威容もある。

しかし、シャーリー・テイリーモアはルークという人間のことをそれだけで見てはいなかった。

「一生懸命、物事に取り組む姿勢も。真摯に人と向き合う優しさも……あと、上位貴族をやり込める弁舌も」

「あ、あははー……」

「最後のはともかく……シャーリーの言う通り、そういうところはすごいかも」

ロニエとテイーゼは、最初にルークを見た時は随分と怯えていた。

横柄で傲慢な上位貴族とは異なる、見ているだけで吞まれてしまいそうな剣気を感じたからだ。

さながら、雄黄の眼で見据えられ、巨大な顎門がそこにあるような、泰然とした雰囲気

気。

ゴブリン討伐という、未だかつて整合騎士以外に体感しえない死闘を経験したからか。

それを彼女達が知っているわけではないが、そんな風に一方的に怖がっていた二人にルークは気さくに接した。

もっぱらキリトやユージオと一緒にいた時に、という機会が多いが、今ではすっかり悪い印象は解けている。

「私より頭二つくらい背が高いし、前は見下ろされると足がすくんじゃって……」
「すぐに気がついて怖がらせないよう接してくれたり、ユージオ先輩達もわからない座学のこととかも教えてくれるし」

二人の言葉に頷き、シャーリーは三人がさっていった方向を見る。

「先輩は、大木みたいな人。側にいると安心する。だから……そういうこと」

(あ、最後ちよつと誤魔化した)

肝心なところを濁したシャーリーに、二人はまた顔を見合わせてくすりと笑った。

そんな二人に視線を向け、今度はシャーリーが問いかける。

「二人こそ。キリト先輩と、ユージオ先輩のことは、どう思ってる?」

「私は……型破りな人、かな」

いつも窓から部屋に入ってくる、上から下まで真つ黒な上級修剣士を回想するロニエ。

下位とはいえ、貴族として様々な教育や礼節を教え込まれて育ったロニエには全てが新鮮な相手だった。

それだけに、彼女の心がキリトにどう向いているのかは……仄かに赤く染まる頬から窺い知れる。

「見たこともない流派だけど、剣技はすごく上手いし。色々教えてくれるよ」

「いい先輩、なんだね。ティーゼは?」

「ユージオ先輩の印象は……包み込んでくれるような人、かなあ」

ティーゼの脳裏に浮かび上がるのは、柔和や微笑みや、優しい話し方。

何かと大胆不敵なキリトと正反対に位置するようで、それでいて不思議と噛み合っている。

一緒にいると感じる暖かさのようなものは、ティーゼには心地の良いもので。

「私達、先輩達の傍付きに選ばれて幸運だったね」

「うん。ライオス様や、ウンベル様比べたら……」

「先輩達の方が、良い。すごく、とっても」

ロニエの言葉に即答したシャーリーは、自分の言葉にハツとした。

二人を見ると、ちよつとニヤけている。こればかりは彼女自身の失敗だ。

サイドテールを手取る。それで表情を隠すように顔の方に持ってきた。

「……忘れて」

「うんうん、分かった」

「私達だけの秘密、ね」

学院の一角に、少女達の朗らかな笑い声が響いた。

課外授業

課外授業、というものがある。

央都セントリアの衛兵隊から依頼された仕事を、修剣学院の生徒が請け負う制度だ。その内容は多岐に渡る。

兵舎の本格的な清掃、荷物の運搬、央都花園の手入れ、ペット探しなど、雑事も多い。あるいは……

「危険度が高かったり、増えすぎたりした獣の調査あるいは駆除、とかな」

「……なるほど」

ガラガラと、音を立てて道をゆく馬車。

修剣学院の印が刻印された幌の内側で、説明を聞き終えたシャーリーは何度か頷く。

馬車内の座席で、ぴつたりと両足を揃えて姿勢良く座る彼女に、ルークは優しげに笑う。

「緊張するか？ 初めてだもんな」

「……実は、結構ドキドキです」

普段の抑揚がないものとは違う、硬い声でシャーリーは小さく囁いた。

学院から支給された、頑丈な厚い革のブーツの爪先を擦り合わせ、違和感がないか確かめ。

時折傍らに置いた鉄剣の包みに視線を向け、太ももの上で握った拳をそわそわと動かす。

僅かな期待と大きな不安が、シャーリーの中でないまぜになっていた。

「まあ、大抵は調査だけだ。実際に獣を相手するのは稀だからそんなに気負わなくていい」

元は衛兵隊のやるべき仕事。正式な職についているわけでもない学生に無理を強いたりしない。

学院には貴族が多いのだ。怪我などさせれば大問題になってしまうという点からも、さほど責任は重くなかった。

「……先輩は、戦ったことがありますか？」

「まあな。俺が傍付きをしていた人に連れられて、数回相手したことがある」

その言葉に、ほんの少しシャーリーの緊張が緩んだ。

内心では一番頼りにしている先輩が経験豊富と知り、安堵したのだ。

目敏く気付いたルークは、優しい顔をしながらもあえて硬い声で続けた。

「とはいえ、万が一の状況つてのはどうしても予想される。特に最初はな」

「……はっ」

緊張が解けると同時に、気が緩みかけていた。

そのことを理解した聡明なシャーリーは、真剣な色を瞳に帯びる。

よし、とルークな心の中で頷き、シャーリーの肩に手を置く。

「実地では、俺達が常に側についてる。その上で適度な緊張感と警戒心、そして余裕を持つて臨むんだ。そうだな、言葉を変えるなら……」

ふと、そこで言葉を切つてとある方向を見る。

つられてシャーリーもそちらを向き……馬車の出入り口で、射し込む陽光に和んでいる黒い男を見た。

髪も制服も、ついでに腰に下げた剣まで真つ黒な修剣士。

最低三人を原則とする、という課外授業の制度に数合わせとして連れてこられたキルトである。

視線が集中していることに気がついた彼は、気恥ずかしそうに指で頬をかきながら答

える。

「ステイクル、だぜ。落ち着いていくことが一番大事だよ」

「つてことだ」

「……はい」

今度も、はつきりとシャーリーは頷くのであった。

話しているうちに無駄な力みが抜けた後輩の姿に、ルークも安堵する。

（村での害獣駆除じゃあ、こういうやつから怪我してたからな。気をつけておかないと）

ルーク自身、幼い頃に苦い経験がある為、可愛い後輩に絶対怪我はさせまいと決意する。

ふとキリトの方を見ると、彼は普段のどこか気の抜けた様子とは違う真面目な顔で頷く。

実力が確かなことを知っている、頼れる弟分にルークも頷き返した。

（……しかし、最近こういう依頼が多いな）

シャーリーの様子を伺いながらも、ルークは黙考する。

（昔から課外授業という制度自体はあったが、俺が初等錬士の頃は大体央都内のものであった。それなのに……）

近頃、というよりも今年に入ってから、獣の調査依頼が頻繁に掲示されるようになった。

顔見知りの衛兵の話によれば、壁を隔てた他の三帝国でも似たような状況なのだという。

人界全体で、何かが起こっている。

ルークは、そんな気がした。

（……衛兵隊の手が回らなくなるほどの獣の異変、北の洞窟のゴブリン……世界の、終わり）

脳裏に思い浮かぶ、濃紺の制服に身を包んだ麗女の後ろ姿。

記憶の中の彼女は顔だけこちらに振り返り、その横顔に笑みを浮かべ……
「まさか、な」

——イイン

眩くのと同時。

見計らったようなタイミングで震えた愛剣にルークは小さく驚き、そして強く握った。

その様子を、彼がそうしていたのと同じように観察していたシャーリーはふと口を開く。

「そういえば、先輩がその剣を使うのを初めて見る気がします」

「ん、ああ。そういえば一度もまともに見せたことはなかったか」

「ん。部屋の清掃時には、いつも見てるけど」

「そうだな。置きっ放しにしてるわけでもないんだが……」

ルークは毎日欠かさず、その重さを忘れないよう素振りをしている。

だが目的を持って持ち出すのは、ルルデイと語り合ったあの休日以来だ。

「改めて紹介するよ。こいつは俺の愛剣。故郷の洞窟にあった白竜の骸、その牙から削

り出した唯一無二の剣だ」

鏢の部分で絞っていた紐を解き、はらりと落ちた包みから白い姿を露わにする。

白竜の骸、と聞いたところから驚いていたシャーリーは、あまりの美しさに息を呑んだ。

「……綺麗な剣」

「《白竜の剣はくりゆうのけん》。それが、俺が一番尊敬する人から貰ったこいつの名前だ」

安直なものも良いだろう？ と、あの日名付けた彼女は笑った。

それを思い返しながら、ルークはシャーリーに白竜の剣を見せる。

「前は白いのとか、白剣とか適当に呼んでたけどな」

「そういうお前も『黒い』の？ 良い加減名付けてやったらどうだ？」

「うーん、しつくりくる名前が思いつかないんだよなあ……」

「黒金の剣、とか」

「ほほう、なかなか良いセンスだねティリーモアくん」

芝居掛かったキリトの言葉に、シャーリーとルークは顔を見合わせて笑った。

あれやこれやと、雑談をする内にも馬車は進んでいく。

央都を囲う白亜の壁を潜り、すぐ外に広がるコールディア平原に入り。

そして、舗装された街道の途中で馬車は緩やかに停止した。

「ここまでだ。正午を過ぎて、四回目の鐘が鳴るまでに帰ってきてくれ」

「「ありがとうございます」」

御者である衛兵に礼を言い、外に出る三人。

腰に剣を履き、課外授業用の頑丈なブーツで地面を踏みしめて。

そして、目の前に広がる色彩豊かな平原に向けて胸を張った。

「ん〜っ、いい天気だな。風も気持ちいい」

「せっかくだから、安全なところを探して今度の休息日にみんなでピクニックにでも来

るか」

「……楽しそう」

気楽な会話もそこそこに、ルークはベルトに下げた小型の鞆から依頼書を取り出す。

「ええと、依頼はキバザキギツネの調査だったよな？」

「ああ。あつちの丘陵地帯だな、行こう」

早速、いの一歩に歩き出すキリト。

続こうとして、ふとシャーリーは自分の体がまだ少しだけ強張っていることに気がつ

いた。

踏み出せないでいると……ぼん、と軽くその背中に触れる、誰かの手。

「程よく、な」

「あ……」

切れ長の瞳に、優しい色を乗せて。

微笑んで先を行くルークの後ろ姿を目で追いかけて、それからシャーリーは少し俯いた。

「……いつも気付いてくれるの、ずるい」

その時シャーリーが浮かべていた、嬉しいような、恨めしいような。

ほんのりと赤く彩られた表情の意味は、彼女自身しか知らない。

少し経って、彼女はルークの隣に小走りで行ってくる。

不思議とそのサイドテールが上機嫌に揺れている気がする。ルークは少し不思議に思った。

「……………」

「ん？ どうしたキリト？」

「ああ、いや。ちよつと昔を思い出してな」

答えながら、キリトは脳裏にかつてを思い浮かべる。

それは二年も過ぎたこのアンダーワールドにやって来るよりも前、別の仮想世界で
のこと。

SAOやALOでは、こうしたクエストでレベルや金を稼ぐのが鉄板だった。

（課外授業に来る度、似たような気分になるんだよな。まあ、万が一の事態でない限り調査を厳守つてのが気になるが）

アンダーワールドにおいて、他の生物の命を奪う権利は公理協会によって定められている。

狩人の天職を持つ人間が年に狩っていい数から食品に加工する家畜、衛士や衛兵が駆除する害獣まで。

全てが厳正に決められているのだ。キリトはそこに何とも言えないきな臭さを感じている。

（ゴブリンを倒した時に上昇した権限とステータス、そこに鍵がありそうなんだが……
今考えても答えがポツと出てくるわけでもないだろうし）

(……昔つてのは、俺らと過ごした時間よりも前のことなんだろうな)

「ああ、俺も森の獣の間引きを思い出すよ」

「……私も、ちよつと」

「お、そうなのか。リイは貴族だし、てつきり経験はないものかと」

ふるふると首を左右に振り、シャーリーはルークの顔を見上げる。

「貴族は、教養と礼儀作法、剣術を学ぶことが義務。それは下位貴族も同じ。でも、それ以外は平民とあまり変わらない」

「つまり、リイも領地で獣の相手を？」

「ん。年に一度、繁殖期で手がつけられなくなった時には、テイリーモア家が指揮をとる」

曰く、シャーリーが参加したのは二年前からだっただけらしい。

最初の一年は、父と一緒に見学のような形で、昨年は実際に獣を相手取ったと言う。

「最初は、すごく怖かった。殺意を向けられるのなんて……獣以外にいないから」

「……確かにな」

「…………ああ」

あとはダークテリトリーの住人とか、という言葉で、二人は心の内に仕舞い込む。

ともあれ、獣というものが油断のならないものであることは確かだ。

「で、今回の依頼の詳細はなんだったっけ？」

「近隣に住んでる農家とかから、作物を荒らされるから調査をやってことらしい」

「それって追い払ったりしなくていいのかわ？」

「依頼は対象の数と生息域の調査だからな。情報を受け取った衛兵隊が対応するんじゃないか？」

「……」

「……下手に刺激して、被害が深刻化したら大変」

「つまり俺達は斥候スカウトってわけだ」

「スカ？」

首をかしげる二人に、キリトはゲーム的な用語を無意識に使ったことを自覚し慌てる。

「あ、あれだ。情報を収集する役割のことだよ」

「そういうことか」

「キリト先輩は、よく神聖語を使う」

「あ、あはは……」

多分の緊張感と少しの余裕を同居させながら、三人は出発点から西へと向かうのだっ

た。

炎の騎士

「……見えた。あれだ」

目撃情報のあつた場所から程近く、丘の上の林。

一層生い茂つた茂みの中から、ルーク達三人は様子を伺う。

彼らが見据える先には、調査対象であるキバザキギツネの群れが闊歩している。

「こりや結構な数だな……村の農民だけじゃどうにもできないはずだ」

「ん。普通の群れよりかなり多い気がします」

「単なる厄介な害獣ってだけじゃあなさそうだな」

獣達に勘付かれないよう、三人は声を潜めて会話する。

野生の獣というのは、自然の中に生きていてただけあつて外敵に敏感だ。

耳は鋭く、鼻は冴え、目が利く。

それらから隠れ、気配を消すことの重要性を、ルーク達はよく理解していた。

「どうする？ こりやマジで衛兵隊の出る案件だぞ？」

「当初の予定通り、正確な数と縄張りを把握して撤退しよう」

「いい判断だ、俺は賛成だな」

「私もです」

よし、と頷いたルークは作戦会議を始める。

「まず、俺達は今群れの右側にいる。この茂みが一番姿を隠すのに適しているからだが、同時に視界が悪くて目的は果たしにくい」

「じゃあ、どうするんですか？」

「まずキリト。足の軽いお前に、縄張りの範囲を確認してほしい」

「なるほどな……見張りをしてる個体を見つけてるってわけか」

すぐに理解した弟分に、頼もしげに笑うルーク。

こういう群れを作る類の獣は、小さな社会を構築するだけの知能がある。

自分達のテリトリーを作り、それを維持しようとする場合が多い。故に外敵への警戒は重要だ。

その修正を活用し、狐達が縄張りを守るために配置した見張りを見つけておく魂胆である。

「見張りの位置と数を確認したら、そいつらに気付かれない、見晴らしの良い場所に移動

する」

「でも、そんな場所を探してる間に気付かれたら……」

「安心しなテイリーモアさん、俺とこいつの頭にはバツチリこの辺りの地形についての情報が入ってるからさ」

キリトの自信ありげな言葉に、シャーリーはこの二人が経験豊富な先輩であったことを思い出した。

片や森にも入ることがあった村の衛士、片や廃人レベルのゲーマー。

地形情報の把握はお手の物だ。

「とはいえ、ただ待ってるだけってのも時間の無駄になる。俺の方でも観察してある程度目星をつけておくれよ」

「任せた。そんじゃ、いっちょ探してくる」

「頑張ってください、キリト先輩」

「おう」

慎重に、かつ素早くキリトは茂みから出ていく。

残ったルークとシャーリー。

不安げに身じろぎする彼女を一瞥し、ルークは早く終わらせるべく観察を始めた。

（見た所、すべての個体がそれなりに周りを警戒している。ここが本来の住処じゃないのか？）

草木の生い茂るその場所からはやや見難いが、狐達は何かを気にしている。

そのことに違和感を覚えながらも、ルークはそこから見える限りの数を数え始めた。

目視できたのは20匹近く。角度や位置的に見えていない個体がいれば、もつといるかもしれない。

（おいおい、いくらなんでも多すぎだろ。多数の多い群れでもここまでじゃないぞ？）

ルークの天職は衛士であり、当然狩人などではない。

しかし、北の果てにある森林に近い開拓村に住んでいれば、それなりに獣のことは詳しくなる。

そして狩りの際の連携や獲物の分配の都合などの観点から、明らかにこの群れはおかしかつた。

「別の群れが合流してるのか……?」

「だとしたら、理由があるはずです」

「そうだな……だけど、ここまでの数だと迂闊にこの場から動くのも」

そこで、不意にルークは言葉を止めた。

不思議に思いつたシャーリーは彼の顔を見て——その鋭い目にぞくりと背筋が震える。

これまで一度も見たことのない横顔。

剣を交えている時でさえ、どこか温かみのある瞳とも異なる、冷たく研ぎ澄まされた視線。

その視線の先にあるものは——不意に素早く顔を上げた、一匹のキツネ。

群れの長と思しきその個体は、後ろ足だけで立ち上がり、しきりに耳を動かして周囲を睥睨した。

「なんだ……?」

「っ、せんばいっ!!」

それは突然だった。

両手を使った全力で肩を突き飛ばされ、ルークは大きくバランスを崩す。

「な」

何をするんだ、とシャーリーを見るルーク。

彼が見たのは——目を見開き、眉を怒らせて、必死な表情をした後輩の顔。

何故と思ひ浮かべる間も無く、シャーリーとルークの間を黒い大きな影が地響きを立てて走り抜ける。

「今のは!?!」

尻餅をついたルークは素早く立ち上がると、同じように座り込んだシャーリーに駆け寄る。

青い顔をした彼女は、両手を所在なきげに彷徨させたままふるふると首を横に振った。

「い、いきなりこつちに何か来て、わつ、私先輩が危ないって思つて、それで」

「落ち着け。あれしきで天命が減るほど、ヤワな鍛え方はしてない」

「……ごめんなさい」

「大丈夫だから」

シャーリーが俯き、ルークは彼女の肩を優しく叩いた。

経験があつても、最初というのはどうしても緊張することは彼もよく知っている。

その点において全く彼女を責める気はルークにはない。

問題なのは、あの黒い影だ。

シャーリーのことを気に掛けながらも、ルークは影の去った方を見ようとして——甲高い鳴き声を聞く。

素早くそちらを振り返ると、何十というキツネがこちらに向けて疾走してくる光景が見えた。

さらに後ろには——彼らより一回りは大きい、苔生した猪のごとき獣の群れ。

「おいおいマジかよっ!？」

「うあ……」

「くっ!？」

許してくれよ、と口の中で悪態を一つ。

突然のアクシデントにルークの思考は切り替わり、この場で最善の行動をとる。

すなわち、シャーリーの背中と膝裏に腕を通し、軽々と抱え上げてキツネの濁流から逃げることであった。

「せ、先輩っ」

「舌噛むから話は後だっ！」

叱咤に近い声を発しながらも、ルークは全力で動き続けた。

感覚を鋭く、意識を明瞭に、そして思考は柔軟に。

不規則に遁走してくるキツネ達の動きを見極めると、その隙間を見つけ出した瞬間飛び込む。

「きゃっ」

「システム・コールっ！ ジェネレート・エアリアル・エレメント！ デイスチャージっ！」

足の裏に風素を生成。

キリトと以前に考案した方法を用いて、自分の身長の数倍以上飛び上がって大氾濫を飛び越える。

（やべっ、神聖力の収束がっ）

だが、それは咄嗟に思い出しただけの未完成の試み。

完全に飛び越える前に風素が霧散し、ルークは空中で姿勢を崩すことになってしまった。

「目え瞑つとけ、シャーリー！」

「っ」

恐怖に唇を戦慄かせながら、反射的に言われた通り閉眼するシャーリー。

それを感覚で察し、ルークは彼女を包み込むような姿勢に無理矢理体を捻った。

そして、落下する。

「あがつー！　ごはつー！」

背中から地面に打ち付けられ、苦悶の音が齒の間から漏れた。

北の洞窟でのことをふと一瞬思い出しながらも、数度転がった彼は木の幹に体をぶつけてようやく止まる。

「かはつ……ああくそ、ガキの頃……こうやって吹っ飛ば……されたっけな……」

「せ、んぱい……っ」

恐る恐る、臉を上げるシャーリー。

最初に見えたのは、口の端から血を流しながらも、弱々しく微笑むルークの顔。

思わず息を飲み、その後何があったのかを一瞬で悟った彼女は目元を悲しげに歪めた。

「先輩、ごめんなさい、私、私が……私の、せいで……」

「これくらい村じゃ日常茶飯事さ。お前は怪我ないか？　どこか痛んだりは？」

「平気、です……でも、先輩がっ」

「そか、良かった。せっかくの可愛い後輩だ、守った甲斐がある」

安心させる為か、それとも背中 of 痛みを誤魔化す為か。

あるいはその両方の為にルークは無理矢理笑い、その顔にシャーリーは更に表情を歪めた。

「ばか……先輩の、ばか」

「おう、頭はあんまり良くないぞ」

「そうじゃなくて……もう」

コツン、と小さな頭がルークの胸元に当てられる。

講義をするように押し付けられた額と、小刻みに震える体。

ルークは困った顔をしながらも、若干痺れる手で背中をさする。

(……恐怖が今になって溢れてきたんだろうな。突然色々起こったことで混乱してたのが、まともになったことで逆に、か)

これも先輩の務めかなどと心の内で自分を揶揄ってみる。

（しかし、合点がいった。あの猪どもがやってきて、キツネ達はこの周辺にまで追われたんだ。けど、あんな数の猪がどうして纏まって……）

——フシユウウウウ

風が、吹いた。

生暖かく、獣臭い匂いを伴った。

恐ろしい風が——息遣いが、すぐ側で。

「——っ」

喉が引きつる。

体が強張り、心臓が煩いほど高鳴って、自分達の隣にいる何かに恐怖する。

それでも横を見てしまったのは、恐怖の根源を理解したいという欲求からだろうか。

そこにいたのは、巨大な怪物だった。

キツネ達を追いかけていた猪達よりも雄々しく、逞しく、ちよつとした小山のようにさえ見えた。

上に向かい突き上がった牙は極太の杭のようで、その奥で爛々と光る赤い瞳は——二人を見ている。

こんな場所にいるはずのない、化け物であった。

(ま ず い)

今すぐにこの場を離れなくては。

せめて、自分の股の間で絶望したような顔でへたり込んでいる後輩を逃がさなくては。

そう思うのに、未だに痛み、痺れる体は思うように動かず、金縛りにあっているかのよう。

警鐘が脳裏で何重にも鳴り響く。冷たいものが心臓を撫でる。

死が、迫る実感がした。

オオオオオオ………

そしてついに、低く、重々しい唸り声を漏らしながら怪物が一步踏み込み。

——バシユツ！

乾いた音が響いた。

直後、獣の歩みが止まる。途端にこの場の音の全てが消えたように二人は錯覚した。

そんな二人のことを血のように赤い獣の瞳がじつと見つめ、せめてもとルークは睨み返し。

刹那、グルンと上に向いたその目から光が消え。

その巨軀が二つに別れた。

血飛沫を上げ、ゆっくりと左右にそれぞれ倒れていく大猪の骸。

酷くゆっくりに見えるその光景の奥に、ちろりと炎が垣間見える。

そして、ついに大猪だったものが傾いたその時。

――
血の雨の奥に、銀光が輝いた。

大猪が倒れ、地響きが起こる。

丘そのものが震えるように揺れ動き、どこかで大量の野鳥が飛び立つ。

だが。その全てが今のルークとシャーリーにとっては些事であった。

「……………」

炎の騎士が、そこに立っていた。

真紅の威容、木々の間から差し込む光で煌めく、どこか整合騎士のそれに似た鎧姿。

右の腕には分厚い直剣。まるで竜の尾から削り出したような洗練されながらも荒々

しい白の刃。

左の腕には、2メドルを越えようかというその体に匹敵する、深い輝きを湛える漆黒

の大盾。

人の頭骨を削り、整えたような兜の奥では銀色の眼光が鮮烈に輝く。

その全てが、絶えぬ炎に包まれていたのだ。

「あんたは……」

「整合、騎士様……？」

思うままに、呆然と眩く二人。

彼らを見下ろしていた炎の騎士は何も答えることはなく、ただじつと何かを見つめる。

疑念を感じたルークは、その視線が見つめるものを追いかけて——自分の腰にある愛刀に行き着いた。

——イイン。

「……………そうか。お前が、最後の白竜の」

腹の底まで響くような声だった。

兜の中で重複しているのか、聞くものを怯えさせるような言葉にシャーリーは震える。

反射的に彼女を引き寄せながら、ルークはもう一方の手を鞘に添える。

「——担い手よ、忘れるな。その御霊に選ばれし意味、その責務を」

「……………何？」

「いずれやってくる、守らねばならぬ時が。その時まで……白き翼を育てよ」

それだけを告げ、炎の騎士は踵を返した。

重厚な足音を響かせながら騎士は去っていき、炎に包まれた後ろ姿が見えなくなった途端、ルークは全身から脱力。

両手を投げ出してズルズルと座り込んだ彼に、シャーリーはもしやと慌てる。

「先輩、先輩っ」

「……………平気だ」

掠れた声で、どうにか答えるルーク。

だが。

(死んだと思つた)

あの騎士の目に射止められた時、自分の首が撥ね飛ばされる様を幻視した。

勝てる気など全くしなかつた。あの猪が央都の裏路地にいる小鼠に思えてしまうほど。

あれは——とてもではないが、人が挑んでいいモノではなかつた。

「は、ははっ」

「先輩……？」

(俺、調子乗つてたな。まだ、まだまだ上がいる。あの塔にたどり着くまでに、無数の壁がある)

木々の葉の向こうに見えるソルスの輝きをぼんやりと見つめる。

キリトと思しき人物が走り寄ってくるのを、視界の端に収めながら。

(——俺は、俺を絶対に許さない。停滞することも、盲目になることも、決して)

そして、彼は押し寄せる疲労感に目を閉じた。

焦燥

脳裏にあの日の情景が駆け巡る。

「ハアツ!!」

後輩の怯えた顔。

「ゼイアツ!!」

痺れる体を撫でた、大猪の悍ましい吐息。

「セアアアアッ!!!」

そして、燃え盛る鬪體の騎士。

「ハアアアアアアッ!!」

何度も何度も、繰り返し繰り返し、その光景が浮かんでは泡のように消える。拭えぬ後悔。揺れる心。どうしようもないほどの熱がルークを焦がし続ける。

それは決して拭い取る事ができない。初頭錬士寮の共用トイレの汚れより、よほど頑固に。

無理矢理に引き剥がそうと、ルークは剣を振るう。

夕焼け色の修練場。ただの一人もいないそこで、無我夢中に動き続けていた。

そうし始めてから、もう一時間も経っただろう。

擦り切れてしまうからと、上級修剣士の制服を脱ぎ去った上半身は大量の汗に塗れている。

鍛え抜かれた鋼のような筋肉が躍動し、一太刀振るうごとに筋と血管が隆起した。

「シッ、フッ！」

白金製の木刀からは、とても木製とは思えない鋭すぎる音が放たれる。

キリトから教わった奥義を使うまでには至らない。しかし、発動するギリギリの速度と威力を発揮していた。

まさに鬼気迫るといった様子の彼の目は、これまでにないほど鋭く、貪欲に輝いていた。

（——あの時、俺に何ができた？）

根底にあるのは、一つの思い。

共に脳裏に想起されるは、揺れる馬車の中で今にも泣きそうな顔でこちらを見る後輩の顔。

それがルークの心を音を立て削り、不協和音を奏でて更なる修練と自戒へと誘うのだ。

よほど疲弊したのだろう。

炎の騎士が去ったすぐ後に、ルークは情けなくも気絶した。

そしてキリトとシャーリーに待機していた馬車まで担がれていき、目覚めた時には全て終わっていた。

依頼はどうか達成。キリトが猪達から逃げた狐の群れを確認して記録していたのである。

安堵したのも束の間、袖を引いてきたのはシャーリーの指。

『……先輩、どうか私に『懲罰権』を行使してください』

そしてルークが見たのは——今にも、何かが決壊してしまいそうな顔だった。

懲罰権とは上級修剣士にのみ許された特権の一つであり、看過できない行為をした生徒に対して行使できる命令権だ。

いわば、学院内限定で身分の関係なく使える貴族権のようなものなのだ。

シャーリーはその執行を、自ら求めてきたのだ。

何かを押し殺すように引き結んだ唇。小さな体は小刻みに震え、握りすぎた拳からは

血が滴りそうだった。

耐えられなかったのだろう。ルークが自分のせいで傷付いたと、その罪悪感に。不安定に揺れ動く瞳で見つめられたルークは、酷く自分を責めた。

不甲斐なかった。情けなかった。

守るつもりでいた大切な後輩に、後悔ばかりを感じさせてしまったことを、心底恥じた。

そして回帰したのだ。

あの時、あの瞬間、血涙を流しながら飛び去る整合騎士の飛竜を睨め上げた時の心へと。

(許さない。許せない。俺は俺のことが、この世界で一番許せないッ!!)

今回は失わずに済んだ？ それがどうだというのだ。

次はどうなる？ その次は？ そのまた次は？ またあのような顔をさせるのか？

その時に自分の手から滑り落ちるのは誰の手だ？ ユージオ？ キリト？

（次に俺は——誰を、守りきれずに傷つける？）

もはや、限界だった。

ルークはシャーリーに命じた。自分が許すまで、上級修剣士の寮に来ることを禁ずると。

次にあんな顔を見てしまえば、かつてのセルカのようになってしまうと予感したから。

これ以上、あの素直で感受性の強い後輩に悲しい思いをさせたくなかった。

（まだだ。まだ、足りない。これっぽっちも、全然っ）

「足りないんだ、よッ!!」

ついに、一線を越えた。

仄かな輝きが木刀に宿り、ルークは凄まじい速度で右袈裟を振るい、同じ軌跡を描い

て振り上げた。

旋風が巻き起こる。

空気そのものを叩くような衝撃に、修練場を支える柱がビリビリと揺れ動くほどであった。

「はあつ、はあつ、くそつ、こんなんじや足りない……」

想像の中の、あの炎の騎士の一撃すら弾けない。

自分達の命を救った異形の存在は、今のルークの中で絶対的な、超えるべき壁になった。

しかし、一週間同じように修練に打ち込んで、その背中は遠く霞むようだ。

「……もう一度最初からだ。まだ寮の門限じゃない」

深く息を吐くと、最初の構えに戻る。

半身を引き、木刀の峰の腹側を右手の上に乗せるような形に構える。

そして、いざ剣舞を始めんと一歩踏み出した。

「おいおい、それくらいにしといた方がいいんじゃないか？」

一瞬で動きを止めた。

無私の領域に差し込まれた声に、それがした方向へ抜き身の刃のような目を向ける。すると、入り口に寄りかかっていた黒い少年……キリトはおどけたような仕草をとった。

「キリトか。何か用か？」

「そんな怖い顔するなつて。流星にオーバーワークだから声かけたんだよ」

「……オーバー、なんて？」

「やりすぎつてことだ。ほらっ」

「つと」

投げ渡された水筒を受け取り、ルークはキリトを怪訝な顔で見る。

肩を竦めて笑う彼に、不思議とルークは自分の中で高まり続けた熱が引いていく気がした。

「キンキンのシラル水だけ。温くなる前に飲んでくれよ」

「……ああ、ありがとう」

気遣いの感じられる声音に、だんだんとルークは平静になっていく。

今日はここまでかと一種の諦めを感じつつ、水筒を開けて中身を勢いよく飲み込んでいった。

「……………」

「んっ……ふは。生き返った、ありがとうキリト」
「ん、いや。気にすんなよ」

（あの背中の白い鱗みたいな傷痕……北の洞窟で翼があつたように見えたのは、やっぱり見間違いじゃないのか？）

タオルで汗を拭いながら、制服を羽織ったルークはキリトに歩み寄る。

やってきた彼の瞳を、ふとキリトは覗き込むように見た。

灰色の髪に似た色の、白銀の瞳。

いつもは優しく、芯の通ったものを感じるその目は……今は、獣のそのように見えた。

「？　なんだ、俺の顔に何かついてるのか？」

「……いや、なんでも」

「そうか。じゃあ」

いくか、と言いかけたルークはふと顔を何処かへ向けた。

その行動にキリトは首を傾げるが、怪訝な顔をしたルークはそちらを注視している。

「どうかしたのか？」

「いや……なんか目線を感じた気がしたんだが」

「おいおい、まさかまたあいつらか？」

「かもな」

やれやれ、と肩をすくめながら二人は上級修剣士の寮へと歩き出した。

……そして、彼らが向かったのとは反対の方向。

ルークが見つめていた、学院内に等間隔に植え付けられた立派な木の裏側。

そこにいた人物は、ほっと心から安堵した。

「……よかった、気づかれたかと思った」

「あれ？ テイリーモアさん、こんなところでどうしたの？」

「ひゃうつ!？」

唐突に声をかけられたことで、驚きに小さく飛び上がる。

同時に腰が抜けてしまい、座り込んでしまう彼女——シャーリー。

偶然通りがかったユージオは、自分の一声によってそんなことになるとはつゆにも思わず、慌てて駆け寄った。

「だ、大丈夫!？」

「あ、ユージオ、先輩……」

「ごめんね、いきなりビツクリさせて。怪我はしてないかい？」

「平気、です」

シャーリーは頭を振る。

直後にはつと顔を青ざめさせ、慌てて座ったまま木の向こうを除き……ホツとした。

「誰かあつちにいるのかい？」

「あつ、いやつ」

挙動不審な彼女を訝しく感じたユージオは、同じように向こう側を見る。

そして寮に向かっていく兄弟分二人を捉え、なんとなく状況を察して曖昧に笑った。

「あー、えっと。ルークに声をかけようとしたのかな？ だったら邪魔しちやつて

……」

「いえ」

思わずユージオが口を噤んだ。

自分の言葉を遮った眩きが、その声量とはかけ離れた凄みを持つていたが故に。

思わずシャーリーを見下ろすと……彼女は、何かを堪えるような顔をしていた。

「いいんです。今の私は、先輩に合わせる顔なんて、ないから」

「……テイリーモアさん」

ユージオは難しい顔になった。

彼も先日の課外授業のことは聞き及んでいる。

驚愕すべき報告の数々に目を回したほどだが、三人とも最善を尽くしただろう。

ちなみに炎の騎士のことはルークもキリトも、シャーリーも何故か報告はしなかったらしい。

以上がユージオの抱いた感想だが、この少女には違つたのだろう。

「……私、あの時何もできませんでした」

「……何も?」

「経験があるつて、沢山剣の腕も磨いたつて、そんな風にちよつと慢心してて。でも………先輩に迷惑をかけただけだった」

ぎゅつと、両手で生い茂る雑草を驚掴む。

「私、先輩に貰つて、ばかりで」

小さなその肩が、怯えるように震えだす。

「教えて、もらつて………守つて、もらつて。ばかりで」

「テイリーモアさん……?」

そして、困惑するユージオの前で、くしゃくしゃになった草に雫がはらりと一粒零れ落ちた。

「こんなつ、弱い私は……愛想をつかされて、当然つ、ですよ、ねっ……………」

「……………」

「あんな目に、あつたら……顔も見たくないつて、そう思うに……決まってるっ……………」

「えっと……………」

「わかってます、これが当然の報いだつて……でも、でもっ……………」

情けない姿を見せまいとしてあるのか、堪え気味に泣きじやくるシャーリー。

口ではそれが当然と言いながらも、ルークに嫌われたくないと言う心情がありありと見て取れる。

たまたま通りがかって話しかけたことで、それを聞いてしまったユージオはといえ
ば。

(……………ルーク、お前またか)

なんとも微妙な顔をしていた。

彼は見たことがある。同じように彼のことで思い悩む少女達を。

何かと世話好きで、自らの苦勞を顧みず、解決するまでちやんと手助けして、最後に「よかつたな」と笑ってくれる。

例えば友情に亀裂が入るような喧嘩を友達としたり、不用意に守りに入って危険な目にあつたり。

そんな風に年下の少女の心を傾かせていく様から、村でついたあだ名は年下誑し。

シャーリーほど齡の近い相手は初めてだが、それでもすぐにわかつた。

最も、当の本人達はおそらく気付いてもいないだろうが。

とりあえず、ユージオは片膝をついて目線の高さを合わせると、優しく肩に手を置いた。

「私がつ、私がつと立派な後輩ならつ……」

「ええとね、とりあえず落ち着いてテイリーモアさん。別にルークは君のことを嫌ったわけじゃないから」

「でもつ」

まるで失意の底のような顔でなくシャーリーに、ユージオは苦笑いしかできない。

十中八九そんな理由で察への立ち入りを禁じたわけでないことは彼も察している。

むしろ、キリト同様あの鬼気迫った様子を心配している側なのだから。

(とはいえ、今の彼女には僕の言葉じゃ届かないだろうし……)

「一度、ちゃんとルークと話してみようよ」

「けど、先輩は寮へ来るな、って……」

「うーん、その言葉には色々複雑な事情があるんだけど……とにかく、本人とまず話し合わなくちゃ」

「……………ぐすつ。話して、くれるでしょうか」

「おそろくね」

宥めながら、打開策を考える。

ユージオとしてもここまで心を砕いてくれる相手が、村の人間以外でルークにできてくれたのは嬉しい。

このままわだかまりが解消されなければ、何もかもが悪い方向へと向かっていくだろう。

さてどうすべきかと頭を捻りに捻って、思考を回転させ。

ふと、あることを思い出した。

「そうだ、テイリーモアさん」

「……？」

「もし君が良かったらなんだけど——」

その少し後、シャーリーは大きく目を見開いた。

失いかけて、掴み取り。

とある休息日の早朝。

ルークは、上級修剣士寮の自室で険しい顔をしていた。

「……」

歳を重ね、大人びてきた顔に貼りつくのは不安と怖れがないまぜになったような表情。

とても尋常でない雰囲気醸しながら、ルークは目の前にあるそれ——《白竜の剣》を見つめた。

やがて、覚悟を決めたような目つきで剣を両手に取り、刀身を左に床と水平に持つ。

右手で掴んだ柄と、鞘を握る左手、その両方に力を込めて引き抜き——

白い顎門あぎとに一口で噛み砕かれた。

「——っ!!」

激しい音が響いた。

剣を取り落とし、瞬きをしたルークの視界から、自分を食い千切った巨大な口蓋は消えていた。

床に転がった剣に目もくれず、無我夢中で服を捲つて腹をまさぐると……そこには傷一つない。

ほっと安堵する。

すると大量の冷や汗が背中を流れ、脱力してソファに体を預けた。

「はあ……やつぱり駄目か」

天井を見上げるルークの目には、諦めのようなものが浮かんでいる。

数日も同じことが続けば、辛抱強いルークとて気が滅入ってくるというものだ。

あの課外授業以降、ルークは《白竜の剣》を抜けなくなってしまうていた。

それどころか、ここ数日に至ってはあの様な幻覚まで見せられる始末。

初めての明確な、それも強烈な拒絶にルークはほとほと困り果てている。

「……今の俺じゃあ、力不足だっていうのか」

意思が目覚めている以上、今はかの存在が担い手として拒絶しているということ。

その原因を考えれば、自然とルークの思考は二週間前の課外授業に行き着く。

「見限られた、か……俺じゃあ担い手として弱すぎるって思われちゃったかな」

今はもう、あの言葉のような共鳴も聞こえない。

完全に沈黙している愛刀を拾い上げ、ルークはその柄頭に額を触れさせた。

「必ずお前にもう一度認めさせてみせる。だから、あと少しだけ待ってくれ」

囁くように誓って、そのまま剣を剣立てに差し込む。

そうすると、テーブルの上に置いていた小さめの籐かごを手に取り、部屋を後にした。

——イン……………

その背中を、どこか悲しそうな響きを以って見送るモノには気がつかず。

自室を出たルークは、そのまま寮から出るために階段を降り始める。

(それにしても、男三人で散策とは。キリトならともかく、ユージオが誘ってくるとは珍しいな)

先日、休息日の予定を聞きに来た弟分の顔を思い出す。

たまには昔みたいに三人でのんびりと過ごそう。

柔和に微笑みながらそう言われると、修練の鬼と化しているルークとて領かざるを得ない。

(ま、少し行き詰まっていたし。ちようどいい休憩だと思おう)

そんなことを考えているうちに、すっかり階段を降りきつた。

寮監に外出の確認を取ると外に出て、そこで先に待っているはずの二人を探す。

幸いにも出てすぐの場所に、黒と青の背中が揃っていた。

「待たせたな。キリト、ユージオ」

やや大きめの声で話しかけたルークに、雑談をしていたらしい二人は振り返る。

ルークはそんな二人に歩み寄っていき——傾いた彼らの向こうを見て硬直した。

「よう、やつと来たな」

「おはようルーク。どうしたんだい、そんな顔をして?」

やや楽しげな表情で、どこか揶揄うような口調で返事をする二人。

キリト達に倣うように、彼らの向こうにいた人物達もまた、挨拶をしてきた。

「ルーク先輩、おはようございます」

「おはようございます」

大きなバスケットを両手に持った、長い赤髪の少女と、髪を二つ結びにした小柄な少

女。

そして、ティーゼとロニエの間にいるのは——ロニエよりも小柄な、美しい紫髪の後輩だった。

「……………先輩」

「……………リイ」

呟くように、掠れた声で愛称を呼ぶ。

そのことに不安げだったシャーリーはハツとして、少しだけ口元を緩ませた。

表情を見られまいと俯く彼女にティーゼ達が微笑む中、ルークは状況を理解し始める。

男三人だと聞いていた休息日のピクニック。しかしここにいるのは三人の後輩。

そこから導き出される答えは——

「おーい、ルーク？」

「おやおや、どうしたんだいルーク君。やけに驚いているじゃあないか？」

「お、お前ら……………」

(嵌められたあああああっ!?)

もはや隠すこともなく、盛大にしてやったりとニヤける二人に心の中で絶叫する。

ルークはまんまとキリト達に誘き出されたわけだ。

普段のルークであれば、多少の勘は働いたかもしれない。

しかし、ここしばらくの過度な修練に意識が傾いた彼は気がつけなかった。

「いやあ、最近はどうにも根を詰めすぎてたからなあ」

「そうそう。ちよつとくらい息抜きしないとね」

小刻みに震えるルークの両肩に、笑うキリトとユージオが腕を回す。

がっしりと肩を掴む手は非常に力強く、拘束されたことをルークは悟った。

「さて三人とも、そろそろ出発するか」

「ルークも歓喜に打ち震えてることだしね」

「はい、そうしましょうか」

「いい天気ですし、きつと楽しくなりますね！」

「……………」

「ちよつ、待て、俺は……」

慌てて断ろうとするルーク。

その瞬間、余計なことと言わせないと言わんばかりに手の力が強まる。

「いつ!? お、おいお前ら、ちょっと強すぎ……」

「なあルーク」

「付き合つて、くれるよね?」

両側から突き刺さるような、鋭い目線。

そこには何か、ルークには見通せない真剣なものがあつて。

「……はい、付き合います」

数秒もその視線に晒されれば、がつくりと肩を落とす他になかった。

悪意のある詐称は禁忌目録違反である。が、この場合は適用されないのだろう。

そんなことを、ふと考えた。

学院の敷地は非常に広大だ。

そしてその三割は鬱蒼とした森であり、そこには野生動物達が小さな生態系を築いている。

少し探検するだけでもとても楽しめる——そうルークがシャーリーに説明したのは、数ヶ月前だったか。

「……………」

「……………」

無言で進む二人。

気まずい空気が立ち込める彼らは、互いに目を合わせられずにただ足を動かしていた。

前を歩くキリト達二組が和気藹々としているのも、余計に居た堪れない。

(……………なんで、彼女はここにいるのだろう)

(……………先輩、気まずそう)

凶らずも二人が考えるのは、互いのこと。

ルークは恐ろしい経験をした後で突き放してしまったシャーリーが、自分を嫌っていないかと。

シャーリーは非力な自分のせいで怪我をしたルークが、自分が隣にいて嫌ではないかと。

どちらも相手が自分をどう思っているのか知ることではなく、ただそれだけを案じている。

なんとも奇妙な空気が二人の間に構築されていた。

(キリト達は何を考えてるんだ？ 俺がシャーリーを……その、避けてるのはわかってるはずなのに)

これ以上、傷付けないようにとそれだけを思い、遠ざけたのに。

少し恨めしい気持ちを抱きながら前に行く弟分達を見るが、勿論彼らは答えない。

視線には気がついていているものの、全力で無視していると言い換えてもいい。

ますますルークはシャーリーをどうしたらいいのかわからなくなり、嘆息した。

(先輩、リイって呼んでくれた。それってまだ愛想をつかされたわけじゃないって、そう思ってもいいのかな)

一方でシャーリーにとって、愛称とは家族以外には呼ばせたことのない特別なものだ。

それだけに、たった数ヶ月でそう呼ぶことを……呼ばれてもいいと思つたルークの存在は大きい。

それは先の事件で突き放されたと感じて尚。

（先輩が、ずっとこのままなのは嫌。もう前みたいに話せないなんて……すごく、いや）

むしろ、よりルークのことを考えるようになったと言つて良いだろう。

この作戦に乗つたのは、それ故だ。

「——そういえば。この前の課外授業つて、コールディア平原の林まで行つたんですね、キリト先輩」

不意に、一番前でキリトに剣技について教授をされていたはずのロニエがやや大きめに尋ねる。

ルークがギョツとし、ユージオ達も驚く——風に装つた——中、キリトは苦笑気味に頷く。

無論、その表情もわざとである。

「ああ。キバザキギツネの調査だったんだが、*“色々”* あつたんだ」
「つ……」

色々、という部分にルークは表情を渋くして視線を落とす。

「もしかして、不測の事態が起こつたんですか？」

「ああ、実はキツネだけじゃなくてクツノジユウの群れまで乱入してきたんだ。それど

「ころかヌシみたいなデカイやつも——」

「おい、キリトっ！」

安易にあの日のことを話していくキリトに、たまらずルークは叫んだ。

自分でも予想外なほど大きな声に、全員が足を止めてルークはハツとする。

彼が……隣で立ち止まったシャーリーを見下ろすと胸の前で手を握ったシャーリーは顔を背けていた。

「リイ、今のは——」

「……………っ」

「シャーリーっ！」

無言で走り去っていくシャーリー。

元来た道でも前方でもなく、全く別の方向へと行ってしまったシャーリーにルークは手を伸ばした。

一瞬躊躇する素振りを見せるも、キリトを珍しく剣呑な目つきで一瞥した後追いかけていった。

その後ろ姿が茂みの向こうに消え、足音が遠ざかった所で残った四人は一息吐く。

「なんとか誘導できたな。普段のあいっじゃこう簡単にはいかなかったぜ」

「き、緊張しました……」

「ごめんね二人とも、わざわざ付き合わせてしまつて」

「いえ。私達もシャーリーの様子がおかしいのはずっと心配してたので」

眉を下げて微笑むテイーゼに、なんとも申し訳ない気持ちになりながらユージオは感謝する。

「さて。ユージオ、どうなると思う?」

「……きつとなんとかなるさ」

だつて、とユージオは二人が去つた方向を見る。

「ルークは、僕らの頼りになる兄貴分だからね。年下の女の子を悲しませたままにするなんて、しないに決まつてるよ」

その言葉には、確信があつた。

「リイツ……シャーリーっ! 待つてくれ!」

どんだん森の中を駆け抜けていくシャーリーを、ルークは必死で追いかける。

つい先刻まで避けていたにも関わらず、自然と彼の足は彼女を追いかけていたのだ。

しかし、その距離は一向に縮まらない。

シャーリーも一端の剣士、それなりに鍛えているとはいえ、歩幅や筋力の差は当然あ

る。

だが、ルークの中に渦巻く後悔や負い目といったものが、どうにも足を鈍らせていた。
(くそっ、何やってんだ俺は！ 臆病になつてる場合じゃないだろ！)

管理人がいるとはいえ、森の中には少々攻撃的な小動物もいる。

シャーリーが怪我でもしたらと、ルークはおびえのような感情を押し込んで無理やり速度を上げた。

すると、少しずつ距離が縮まっていく。

「シャーリーー！」

やがて少し開けた場所に出た時、ついにその肩に手が届く寸前。

急にシャーリーが立ち止まった。

体に勢いをつけていたルークは、ぴたりと静止した背中に驚きながら反射的にブレーキをかける。

かろうじて衝突することは回避され、不格好なポーズで片手を伸ばすという姿勢に収まった。

「つと……シャーリー？」

体を戻し、ルークは不可解な顔で後輩を見下ろす。

するとシャーリーはゆっくりと振り返り——露わになったその表情に瞠目した。

「お前……？」

「……先輩、やっと話してくれた」

いつも通りの、至って無表情。

先ほどの話で心を痛めていると思っていたルークは、面食らった表情にならざるを得ない。

「……まさか、これもか？」

「ユージオ先輩に、提案されて。キリト先輩とロニエ達にも手伝ってもらった」

「マジか………はあ。してやられたな、こりゃ」

ここまで綺麗に嵌められると、ルークとしても苦笑しか出せない。

あるいはこんな所も……と、また例の件に思考を繋げ始めるルークを、シャーリーは見つめ。

「先輩。私は……」

少し、言い淀む。

しかしルークの視線が再び自分に向いた所で、小さな両手を握り締め、臍の辺りに力を込め。

一度引き結んだ唇を、最大の努力で開いた。

「私は——先輩の傍付きを解任される?」

「……………は?」

何を言っているのか、分からなかった。

一世一代の告白と言わんばかりの様相を見せる後輩の言葉が、ルークには理解できなかった。

人はえてして、自らの思考に全く存在しない言葉を告げられると呆然とするものだ。

固まったルークに、シャーリーは一人語り出す。

「私は、先輩にたくさん迷惑をかけた。たくさん面倒を見てくれたのに、一つも恩返しをすることができなくて。こんな私は、先輩にとっては邪魔者でしか……………ないですか?」

「おい、何を言ってる……………」

「わかっています。あの日私がいなかったら、先輩は怪我をしなかった。あんな思いをしたら、誰だって原因になった人を嫌いに……………なる」

「ちが……………」

邪魔者、自分がいなかったら、嫌いになる。

次々と自らを貶める言葉を並べられ、ルークの思考は複雑に絡まり、混乱していく。

それでも否定しなければ、と口を開きかけて——シャーリーの顔を見て、硬直した。「だって……こんな、こんな弱い私がつつと、付き纏ってるのは……先輩に、とつて……迷惑でしか、ない……よね？」
頬を伝う大粒の涙。

とめどなく溢れ、色白の肌を流れ落ちていくそれには、一言では到底説明しきれない感情が内包されていた。

自分への失望や嫌悪、諦観。それだけではなく、ルークへの後悔と遠慮——そして、恐怖。

「違うッ!!!」

気がつけば、ルークは叫んでいた。

シャーリーの両肩を強く鷲掴み、一步踏み込んで、鼻と鼻が触れそうな距離で。

これまでずっと逸らしていた瞳は、見開かれたシャーリーの瞳としつかり向き合っていた。

「それは絶対に違うっ！ お前を疎ましく思ったりするもんか！ 大事な後輩なんだぞ!?」

「だってそう思うしかないッ！」

思うままに叫ぶと、シャーリーも泣き叫んで激昂する。

一瞬硬直したルークを睨みあげ、彼女は言葉をぶつけた。

「あんな風に避けられてっ！ 剣の稽古も、一緒にお茶を飲むのも、話すのも全部全部駄目って言われてっ！ そんな風にされたらっ、嫌われたっ、て……そう、とし、かつ…………！」

「それはお前に傷ついてほしくなかったからだ！ 俺の側にいることであのことを思い出して、お前が悲しい思いをするくらいなら距離を置こうって！」

それに、弱い自分が尊敬して後ろをついて来てくれるシャーリーに相応しいとも思えなかった。

あの程度の窮地も自力で乗り越えられなかったことが不甲斐なくて……そうルークは言おうとしたけれど。

「先輩が隣にいない方が、ずっと傷ついたッ!!」

「」。

そのたった一言に、全てを吹き飛ばされた。

「何もできなかつたことを思い出して後悔するより、先輩に避けられる方が苦しかった！ 辛かった！ 悲しかったのっ!!」

「リ、イ……………」

「二人で剣を振つても全然上手くならない！ 勉強してても、他の何をしてても、先輩に嫌われたくなかつたつて、ずっとそれだけ考えてた！」

「お、俺は…………」

圧倒的な言葉の傍流と感情の嵐を叩きつけられ、ルークは何もできず、言えず。

みるみるうちに弱った彼の腕を振りほどき、泣きながらも目を怒らせたシャーリーは拳を振り上げた。

「傷つけたくなかつたなんて嘘っ！ 私を自分の失敗の言い訳にしないで!!」

「——ツツ」

小さな拳が、ルークの胸にぶつけられる。

天命が一つすら減らない、弱い攻撃。

おそらく制服の天命すら削れていないだろう一撃は——完全にルークの心を打ち砕いた。

その言葉が、その拳が、その涙が、全て全て。ルークに一つの事実を訴えてきたが故に。

(——そう、か。俺は、言い訳をしてたのか)

納得してしまった。

シャーリーの言う通りだった。

彼女を遠ざけたのも、修練にのめり込んだのも、行動の全てをあの日と結びつけるのも。

その何もかもが、何もできなかつた自分への嫌悪と惨めさから目を逸らす為の目隠しでしかなく。

ああ、それこそ——シャーリーの方から愛想をつかされて当然の、外道の行いではないか。

「私は、先輩の枷じゃない……重しじゃない……そんな風に思われるのは絶対……嫌なの」

「……………」

「だって……だって私、先輩のことがつ……!」

抑えていた感情が決壊したシャーリーは、いよいよ一番奥に隠したものを引き出す。自らも自覚しきれぬそれを、激情のままにぶつけんと顔を上げ。

「——ごめんな」

「あ……………」

ルークに、抱擁された。

それはとても優しく、慈しみに満ちた抱擁であった。

邪な思惑も、下心やもつと甘い感情でもなく、ただただ包み込むような、暖かい胸の中。

両手を軽くシャーリーの背中に回したルークは、険しい顔のまま語りかける。

「本当にごめん。全部俺が悪い。何もかも、俺のせいだ」

「先、輩……………」

「不安にさせてごめん。怖がらせてごめん。守ろうとしたのに背を向けて、ごめん」

「……………私は、守ってもらった。ずっと」

「最後まで守りきらなきや、見捨てたのと同じだ」

少しだけ、右手の力が強くなる。

それに少し頬を染め、しかしシャーリーは両手を同じようにルークの背に触れさせた。

「お前の言う通りだ。俺は逃げた。嫌なこと、駄目な自分を見たくなくて、お前にその責任を押し付けた」

「……ん。すつごく嫌だし、悲しかった」

「だよな。取り返しのつかない大馬鹿をやらかしたもんだ」

本気の謝罪の念を込めた、かつ少し軽い声音に、シャーリーは小さく笑う。

ルークはシャーリーの背中から手を外し、彼女も同じようにすると少し離れて視線を合わると。

互いの目に映り込む、紫の瞳と白銀の瞳にもう濁りはなかった。

「その分、俺にできることを全身全霊でお前にしていく。変な思い込みや遠慮は、もうしない。二度と向き合うことから逃げない」

「……私も、怖がるのはやめる。こうして本音をぶつけ合って、それが何より大切だってわかったから」

互いに誓う。

不敵でどこか余裕を感じさせる笑みと、強い芯を感じる小さな微笑を、それぞれ浮かべて。

そこにはもう、いつしか抱いていた互いへの勝手な悪印象は欠片も存在していなかった。

「俺の後輩でいてくれるか、リイ？」

「ん。私は、先輩の傍付き。これからもずっと」

二人は、在るべき関係に戻ったのであった。

その時、がさりと近くの茂みから音がした。

素早く二人がそちらに振り向くと、まるで慌てるように激しく揺れる茂み。

数秒してピタリと揺れが止むと……裏から人が現れた。

「あ、あー、ようやく見つけたー」

「わー。も、もう、シャーリーもルーク先輩も、足が速いんだからー」

「ロニエ、ティーゼ……」

「お前達……っ、まさか！」

何故か目線を明後日に向け、赤い顔の少女二人に、ルークは茂みをもう一度見る。顔を引き攣らせる彼の予想に応えるように、新たに二人ほど人影が立ち上がった。

「やあやあルーク君、ティリーモアさんとは上手く仲直りできたみたいだね」

「お前は少しくらい悪びれなよ……でも、確かに順調にいったみたいだね」

いや、いきすぎたかな？ などと言いつつ、含みのある笑いを浮かべるユージオにキ

リト。

何を言っているんだとルークは返答しかけて……今更ながらに気がついた。シャーリーと未だに、軽く抱擁し合っていることを。

「バツ!! おまつ、これは違くてだな!」

素早く手を離して一步引くルーク。しかしシャーリーは動かない。

「ちよ、離れろリイ! 見られてるって!」

「嫌。また突き放されたら泣く。だから、もう少しこのまま」

「ええいこの後輩は!」

「あはは……シャーリー、すつごく積極的になってる」

「あんなに楽しそうなの、初めて見たかも……」

「一件落着、かな」

「はっはっはっ、後輩とこんな人気のない場所で仲睦まじいとは。ルークも隅に置けないなあ?」

「だからそういうことじゃねえええっ!」

ルークの絶叫が響き、軽い笑いが四つほど森の中に響く。

だ。その中心でルークに抱きつく腕の力を強めながら、シャーリーは幸せそうに微笑ん

責任と権利

一悶着終え、ルーク達はピクニックに戻った。

ちようど良さげな池を見つけ、そこに持参した敷き布を広げて昼食となった。

ロニエ達^が持ってきた籐籠を六人で囲み、蓋を開くと、中に詰まっていたのは美味しそうな軽食。

薄くスライスした肉やチーズ、魚などが閉じられた白パンと、鳥の揚げ物はどちらも出来が良い。

「おおつ、こいつは美味そうだな」

「こらキリト、聖句を唱えた後だよ」

「分かってるって」

「アラベルさん、天命は？」

「はい、平気です」

ロニエが頷き、よしと頷いたルークが手を合わせるのにつられて全員同じようにする。

聖句を唱え、ステイシア神に感謝を捧げると早速キリトが籠の中身へ手を伸ばす。

サンドイツチにかぶりついた青年は、「ん〜」と咀嚼しながら幸せそうな声をあげた。

「美味しい！これは跳ね鹿亭にも劣らないぞ、ロニエ君、ティーゼ君」

「わあっ、本当ですか？　ありがとうございますー！」

手を合わせて嬉しそうにするロニエ。ティーゼも少し照れくさそうだ。

しかし、彼女がその言葉をかけてもらいたいのにはキリトではなく……

「その、ユージオ先輩もどうぞ」

「うん、いただくよ」

控えめがちに見てくるティーゼに、ユージオもサンドイツチを一切れとって食べる。

口の中に素材と調味料の味が広がる。上品ながらも程よく男子の舌を満足させる濃い味付けだ。

村でアリスが持ってきてくれた弁当とは違うな、と思いつつ、都会らしい味に慣れたなともユージオは思う。

「ん、美味しい。凄いな」

「あ、ありがとうございます」

微笑みを向けるユージオに、ティーゼは少し俯いて赤くなつた頬を隠す。

わかりやすい反応にキリトとロニエが少し悪戯げに笑い、それから四人はとある人物を見た。

言わずもがな、ルークである。

残るはお前だけだと言わんばかりに見てくる弟分と後輩達に、彼は苦笑した。

もちろん彼も空腹だったので、手を伸ばそうと体を揺らした所、隣にいたシャーリーが先に動いた。

彼女は身を乗り出し、サンドイッチを一切れとると、振り返つてルークを見た。

「はい、先輩」

「……リイ？　なんでサンドイッチをこっちに向けてるんだ？」

「口、開けて」

「食わせる気か」

「ん」

それはいわゆる、仲の良い子供同士がやる「あーん」というやつではないだろうか。

じつと見つめてくるシャーリーの瞳に、ルークは珍しくたじろぐ。

随分と大胆な行動にロニエ達は「わあ」と小さく声を上げ、キリトはニヤニヤとし、ユージオは呆れ気味。

「お前、なんか吹っ切れてないか？」

「私は先輩の傍付き。身の回りのことをする義務がある」

「いや、それにこれは含まれない……」

「いいから、食べて。みんなで頑張って作った」

「どうやら言っただけ聞く気はないようだ。」

色々やりすぎたか、と若干後悔しつつも、迫ってくるサンドイッチの威圧感と外野の視線が意外と辛い。

早々に諦めた方がまだいい。そう判断したルークは軽く溜息を吐き、自らサンドイッチに食いついた。

「んっ」

「！」

「「「おおっ」」」

一口で半分ほども口に含むと、大きく咀嚼してサンドイッチを味わう。

「……………んっ」

「ん……美味しい。流石は俺達の後輩だな」

「ありがとうございます」

非常に満足げな様子のシャーリーであった。

まあ、これまで散々不安にさせたのだからこれくらいはいいか、とルークは思い直した。

それから彼らは、和気藹々と雑談を交えながら昼食を楽しんだ。

キリトが剣術談義をし、ロニエ達が興味深げに頷き、ユージオとルークもそれを聞く。シャーリーが積極的にルークに接し、狼狽えるルークに他の四人が明るげに笑った。

「それにしても、随分手が込んでるけど。作るのは大変だったろう?」

やがて、粗方籐籠の中が空になった頃にユージオがふと尋ねる。

「ティーゼ達三人は顔を見合わせ、それからやや申し訳なさげな顔をした。

「……実は、初等錬士寮の門限に帰るまでには、市場から学院までは遠くて」「私達じゃ料理の材料を揃えるのは難しかったんです」

「だから、キリト先輩に上級修剣士寮の門限までに買い集めてきてもらった」

「なんだって?」

ユージオ共々、全く知らなかったルークも驚いて振り返る。

当の本人は得意げな顔で、「後輩の頼みだからな」と胸を張った。

「つて、そんなに打ち解けてるなら気まずそうにしてるのはなんなのさ!」

「あー、いや、それは。な?」

「な? じゃないよ、まったくもう……」

「でも、すっかりいい先輩後輩になったみたいだな」

ルークの言葉に、キリトは否定することなくはにかむ。

その表情が答えを示していた。

「キリト先輩は、気さくで結構頼りになる。今回もおかげで、先輩と仲直りできた」

「うっ……今後は気をつけます」

「ん、お願いします」

じと——つと顔を突き刺すような視線。

ルークは変な汗をかいた。なまじ自分に非があるだけ、粛々と受け止めるしかなかった。

「そ、そうだ! 食事で思い出した」

「? 何をだい?」

「こいつさ」

ルークは傍らに置いていた籐籠を差し出した。

後輩組が持ってきたよりも、一回りほど小さなその蓋をルークが開けると……

「わあ、パイです！」

「おー、美味そうだな」

「本当だね」

「先輩、これはどこのものですか？」

「食後の甘味にと思ってな、俺も食材を買って少し挑戦してみたんだ。味は保証しないぜ」

「……先輩が、自分で作ったの？」

「そういうことだ」

お茶目にウィンクするルークに、甘いもの好きな女子三人と食べ盛りの男達は目を輝かせる。

《ステイシアの窓》を開くと、天命は問題無し。手の平サイズのパイを皆が手に取った。「幾つか種類がある。ミートパイとか、果実を使ったものだったりとか。中身は食べて確かめてくれ」

「ん、これアップルパイだ。美味しいぞ！」

「こっちはオレンの実かな。爽やかでいいね」

「はぐ、はぐ。んん、甘いです」

「んっ、こっちは甘辛い。この食感は……果物？」

各々パイを齧り、笑顔を浮かべていく。

どうやら初の甘味作りは成功したらしい、と安堵しながら、隣のシャーリーを見た。

「……！……！」

彼女は最も顕著な反応を示した。

小さな口でパイを齧る毎に目を輝かせ、小動物のように一心不乱に咀嚼している。

それはルークが一番出来が良いと自負していた一つで、跳ね鹿亭の蜂蜜パイを模した

一品だった。

甘いものが幼い頃から好きなシャーリー。

学院に入って……というより、ルークの部屋で食べるようになってからお気に入り、蜂蜜パイのような味。

何より、敬愛する先輩の作ってくれたものという事実。

それらが合わさって、彼女はとても幸せを感じていた。

「……先輩」

「ん？」

「……ちよつとだけ、許してあげる」

「そりゃよかった」

「ん」

上機嫌なシャーリーに、また一つ安堵のため息。

色々気を揉んでいたキリト達も、それを見て微笑みを浮かべて。

「いやあ、菓子作りが趣味だっていう初等生に教わってよかった。やっぱり女子はそういうの得意だな」

その一言で場の空気が凍りついた。

四人の表情が引き攣る。

シャーリーの動きが止まり、尻尾のように揺れていたサイドテールが落ちた。

その中で、ルークだけは急に黙り込んだ一堂へ不思議そうな顔をする。

「る、ルーク、君は……」

「今のは……うん、失言だぞ……俺も前に怒られたし……」

「ルーク先輩……」

「今のはないです……」

「え、どうしたお前ら？」

一様に白けたような目を向けてくる弟分達に、ルークは困惑する。

この男、年下との交流が自然すぎてそういう意識が抜け落ちているのである。

とはいえ仔細に説明するわけにもいかず、キリト達もどうしたものか悩んでいた時。

「……………先輩、やっぱり許さない」

「え!？」

「しばらく許さない。絶対に」

「何でだ!？」 ま、また俺何かしたか!？」

「知らないっ」

シャーリーがそっぽを向いてしまい、ルークはほとんど困り果てた顔になる。

一進一退。二人の関係はどうにも円滑にばかりはいかないらしい。

ルークが自分のパイを渡すことで、どうにかシャーリーの機嫌は取り直した。

会話をする内に徐々に和やかな雰囲気に戻ってきたところで、ふとある話題が切り出

される。

「指導生の変更申請をしたいから、学院管理部に口添えをしてほしい？」

「はっ」

背筋を伸ばし、真剣な様子で言うティーゼ。

隣にいるロニエも同様であり、まさかとルークは未だ隣にいるシャーリーを見る。

「お前、もし今日和解できなかつたら本当に……う？」

「違う、私じゃない」

「えっ、それじゃあ……」

今度はユージオは表情を変え、ティーゼ達を見る。

その目には、やはり自分達が指導するのは嫌だったのかと書かれている。

キリトもやや不安げに二人を見て、心情を読み取った彼女達は慌ててかぶりを振つ

た。

「ち、違います！ 私達三人じゃなくて……！」

「むしろ傍付きをさせてほしいというか、むしろ変わってほしいって子がいっぱいあるっていうか……」

「先輩達、人気」

人気、と聞いて目を瞬かせる三人。

余計なことを口走つたと言わんばかりに慌てた三人は、ひとまずそれをスルーして話題を戻した。

「お願いしたいのは、同室の子で……フレニーカっていうんですけどね」

「その子、真面目で一生懸命で、剣の腕も強くて、それなのに謙虚な子なんですけど……」

「……指名された修剣士が、厳しい人だった」

「それはどんな風に？」

ただならぬと察し、ルークは普段よりさらに真剣な雰囲気を作つて聞き返す。

誰が話そうか、三人は視線を交差させていたが、結局ロニエが話し始めた。

「ちよつとした粗相にも、長時間の懲罰を課されたりするそうなんです。他にも、学院内では不適切と言えるようなお世話を言いつけたり……」

「……つまり、権利を乱用して好き放題してることか？」

「その……あまり口には出しにくいのですが、本当にフレニーカが、ここ数日辛そうで」

聞けば、件の修剣士は随分な横暴ぶりらしい。

ロニエが説明したことのみならず、他の二人からも次々と出てくる悪い情報。

必要以上の叱責や懲罰に留まることなく、女生徒には受忍し難い行為さえもさせられたのだという。

聞いているだけで心がささくれ立つような所業に、自然とルーク達の顔も険しくなっていく。

「……事情はわかった。出来ることは全てしてみよう」

「ありがとうございます、ルーク先輩」

「俺も手伝うよ。そんな野郎放つて置けないからな」

「勿論僕もね。とりあえず、その修剣士の名前を覚えてくれるかい？ 確か……」

『上級修剣士の鍛錬を最大限支援するため、身辺の世話係として一名の傍付きを置く。傍付きは、その年度の初等練士より成績順に十二名を選抜し任に当てるが、上級修剣士と管理担当教官の合意があれば、傍付きを解任し、他の初等練士より再指名することを認める』、だな」

見事に学院規則をなぞらえて音読したルークに、重い表情で一同は頷く。

「ティーゼはしばらく逡巡したもの、言うしかない以上はその名前を口にしました。」

「……ウンベール・ジーゼック次席上級修剣士殿、です」

「……………またあいつか」

「ユージオに立会いふっかけて返り討ちだったくせに、それを自分の傍付きに当たって

んのかよ。陰湿なやつだな」

「待てキリト、そんな話は聞いてないぞ」

「先輩、ここ数日ずっと鍛錬ばかりしてた」

「ぐっ」

そういえば強くなることばかり考えて盲目になっていた、と思い出すルーク。

強迫観念とはげに恐ろしきかな、これまで欠かさず目を光らせていたあの二人まで見逃すとは。

「……もしかしたら、僕のせいかもしれない」

「え？」

「キリトの言ったように、返り討ちにしたわけじゃないんだ。引き分けだったんだけど、それがどうも納得いかなかったみたいで……」

「だから苛立ちをフレニーカつて子にぶつけてるって話だろ。剣士以前に、人としてどうなんだって話だ」

忌々しげに吐き捨てるキリトに、ルークも全く同じ気持ちである。

あるいはそれは、彼の中に強く焼きついた“あの女性”の背中があるからかもしれない。

「……つまり、腹いせ、ってこと？」

「腹立たしいことにな。リイは貴族として、この事をおかしくないとと思うか？」
「絶対におかしい。こんなことは間違ってる」

即答したシャーリーは、キツと普段は動かない眉尻を吊り上げる。

同じ貴族とはいえ下位貴族である彼女やティーゼ達は、その価値観を平民であるルーク達と近しくしている。

故にこそ相談したのであり、そしてシャーリーは善悪の判断について他の二人より明確に口にする性だった。

「確かに、学院の規則にも、帝国基本法にも、ましてや禁忌目録にも抵触してない。でも……」

「でも？」

「……それは、人としてやっちゃんやいけないこと」

「そうだな。これは理性あり、知恵がある人として、あまりに恥ずべきことだ」
ルークは、それをよく知っている。

あの日、アリスが連れ去られるのを手助けして。

ユージオ達を押さえつけたことに納得できなくて、その時の自分が認められなくて、

大いに荒れていた時期があった。

子供ながらに考えつく限りの言葉で自分の心を痛めつけ、拳を血が出るまで床に打ち付け。

時には母にまで迷惑をかけてしまったこともある。

いつかアリスを取り返そうと前を向けたのは、その母に痛烈な平手打ちを食らって論されたからなのだが。

「……私も同じ気持ちです」

「ロニエ……」

「私もです。お父様は、いつも言ってたんです。私達が貴族で、特権を許されているのは当たり前じゃない。それを持たない人達が、笑顔で平和に暮らせるようにするためなんだって。そしていつか戦が起きた時は、貴族でない人達より真つ先に剣を取り、立ち向かわなければいけないんだって……」

聞く者の意識に染み込ませるような、確かな色を含んだ言葉でテイーゼは語る。

そうしてふと顔を上げると、彼方の方……帝国行政府の方を厳しい目つきで睨みつけた。

「ジーゼック家といえば、四区に大きなお屋敷も構えていて、セントリア郊外には私領地だって持っている名家です。ならば、ウンベール上級修剣士殿は下級貴族よりもっと、

人々の幸せのために尽くさねばならないのではないのでしょうか？ たとえ、何に禁じられていなくたって、貴族ならば誰かの不幸になることではなく、幸せをもたらすことをしなくてはならない……お父様は、そう言っていました。ウンベル殿が何の法も犯していなかったとしても……それでも、フレニーカは昨晚、ずっとベッドで泣いていて……なんで、そんなことが許されるのでしょうか……」

長い語りだった。

それだけ、想いを人に伝えるだけの重さを秘めた言葉で、目に溜まった大粒の涙は蒸発してしまいそうな程。

同じようなことを教わったのだろう。深く共感したような面持ちで、シャーリーは彼女の重なった手を握る。

シャーリーに微笑んだティーゼが、ロニエが差し出した手巾を受け取って涙を拭う。

その一部始終を見ていたルークは——ふと、*“先輩”*の言葉を思い出していた。

『ねえ、後輩くん。君が我が子の意思を担い、守護者たらんとするのなら。一つ、私の好きな名言を教えよう——』

「……………大いなる力には、大いなる責任が伴う、か」

「え？」

「!?」

テイーゼ達が顔を上げ、キリトが見たこともないようなギョツとした顔で振り返る。弟分のリアクションにやや驚いたものの、ルークは彼女らを見て語り出した。

「俺の指導係だった先輩から聞いた言葉なんだけどな。力を持つているのには、必ず理由があるってことだ。それは自分の為に振るうものじゃなくて、時にはもつと大切なもののために使う責務がある」

「もつと、大切なもの……」

「それは法でもなければ、誰かに課されたものでもない。人より優れ、他人の何かを左右してしまう何かを持った人間が自分自身で課さなければいけないものだ、俺は解釈している」

「今度こそ同じ過ちは繰り返さない、自分という存在の全てをかけて大切なものを守ると。」

それが世界の終わりであっても覆してみせると、力を託してくれた彼女の前で己に誓った。

「だからまあ、何が言いたいのかっていうと……シユトリーネンさんのお父様は、気高い志を持つ人だ」

「あ……」

「お前達もそう思うだろ？」

話を振られたキリトとユージオは少々驚くも、しかしはつきりと頷いた。

自分の先輩達も賛同したのを見て、難しい顔をしたティーゼは遠慮がちに口を開く。

「でも、でもそれは……常に、それが正しいとは限らないのでは？」

「その通りだ。だからこそ『責任』とはなんなのか。その力とはどう使うのが最も善いことなのか、考えなくちゃいけないんだと思う。たとえそれが、時には法や人が間違っていると言うことであっても」

「たとえば、本来なら逆らっちゃいけない上級貴族様に物申す、とかかな？」

付け加えたキリトの言葉に、後輩達はハッと目を見開いた。

キリトはニヤリと笑いかけてくるので、必ず反応すると思っていたルークもニヒルに笑い返す。

一方で、二人の言わんとしていることを理解したユージオは困惑した色を浮かべた。

「でも、そうやって誰もが自分の力を振るう責任や範囲を決めたら、秩序なんてなくなるんじゃないのかい？ それを公平に決めるために、公理教会があるんじゃない？」

ユージオの意見は、この場のほぼ全員が納得できるものだった。

確かにウンベールがそうしているように、禁忌目録や他の法にも穴はある。

それでも世界を想像した神の代行者である公理教会が定めたことは、いかなる場合でも絶対の理なのだ。

だからユージオは、まるでキリトのように公理教会にある意味反することを述べたルークに戸惑った。

長年共に過ごした弟分の心情を手取るように理解したルークは、ふと自問する。

(……アリスを失った日。そして、白竜の剣が北の洞窟で目覚めた時から。俺の中の、公理教会に対する何かが失われつつある)

どうにも、ここ最近のルークの中からは全ての人界人の中にある何かが薄れている。

まるで少しずつ凍りつき、鋭い牙で削られていくかのように、日々自分の内からすり減っていく。

それが「彼女」が自分に目をつけた理由ではないかと、最後の休息日の会話からルーク

クは推測していた。

「……………法が全てじゃない」

考え耽るルークの思考を現実に戻したのは、小さくも凜とした言葉だった。

自分の意見を肯定するような言葉に、驚いて隣から自分を見つめる少女を見下ろす。

「シャーリー?」

「法は秩序を作っている。人を守り、平和を保っている。けれど、だからって全部に従っていればいいわけじゃない……………そうでしょ?」

「リイ、お前……………」

「少し、わかる。だって……………たとえば私が間違ってるって、そう言われることを覚悟してても、踏み出したから」

胸に宿る思いのほとんどをぶつけた激白。

それは失敗と間違いを恐れていた彼女に、一種の思考の変化をもたらしていた。

ただ言われたままに従って、何もしないことは一つも辛い現実を解決してはくれないのだと。

「……………そう、だね。私も、そう思う」

「ロニエ……」

「要するに、それって自分の中でこれだけは譲れないっていう正義ですよ。法があったとしても、それと自分の正義を照らし合わせて考えるって、そういうことですよ？」

「ああ、そうだ。それができるからこそ、人間は強いんだ」

頷くキリトに、ロニエは否定されなかつたと安堵の微笑を浮かべた。

迷うそぶりを見せていたティーゼも、二人の言葉を聞いて何かを考えたのか。

ずっと揺れていた紅葉色の目の色を、少し変えるのだった。

予兆

「結局、ウンベールについてはどうするんだい？」

シャーリー達と別れ、上級修劍士寮へ向かう道すがら。

振り返ったユージオに、キリト共々ルークは難しい顔をする。

「学院の規則に反していない限り、面と向かって糾弾するのは悪手だな」

「それに、相手は腐つても上位貴族。下手に揚げ足でも取られて貴族の権利を行使されたら、それこそおしまいだ」

おまけに、小物らしく悪知恵だけは回るのがウンベールという男だ。

小賢しい真似なら、村の衛士仲間であつたジंकよりよっぽどタチが悪い。

どうしたものか、と頭を悩ませていると、ふと隣でキリトが自分より難しい顔をしていることに気がつく。

「キリト、どうした？」

「……少し、気になる事があつてさ」

「気になること？」

「ああ。ウンベールがそれだけ好き勝手やつているのに、同室のライオスは何故諫めようとしなんだ？」

「あ……」

「そういえば……」

何故だろうか、と二人も思い至る。

いつもギリギリの引き際に制止する、悪し様に言えばウンベールの飼い主であるライオス。

それが今回は、ウンベールの行動に関して何も言つてはいない。これはおかしい状況だ。

「初等練士の間で噂になつてるほど広まつてるこの状況は、転じてウンベールをいつも引き連れてるライオスにも風評被害がいくはずなんだ」

「確かに……それも同じ部屋だし、ますますウンベールを止めなくちゃならない立場のはずだよな」

「それなのに口出しせず、まるで傍観しているかのよう……異常だな」

すぐにムキになるウンベールと比べても、殊更プライドの高いライオスのことだ。

そんな事を黙って見過ごすはずはないが……得体の知れない違和感に、三人は悪寒を感じる。

事態の異質さを理解した二人に、キリトは人差し指を立てる。

「だから、こう考えた。もし——ライオスが、それも分かった上であえて放置しているのだとしたら？」

「それって、わざと悪い噂を受け入れてるって事？ そんな事、いくらなんでもするかな？」

「ユージオ、肝心なのは悪評自体じゃなくて、そうすることで何かしら奴らにメリットがあるってことだ」

「……悪評を餌に、何かを企んでるってことか」

「さすがルーク君、鋭いね」

わざと偉ぶるキリトにちよつと気持ちが悪く、苦笑してみる。

それで凝り固まった心境をほぐしつつ、ルークは思考を巡らせた。

(ウンベールの所業……静観するライオス……苦しんでいる一年生に、それを案じる同

室のレイ達……)

ハツとする。

もしかして、いや、そんな事があっていいの。考えついた悪魔のような思惑に、ルークは苦い顔になる。

ユーゾオはどうやらそこまで考えが至らなかつたようで、彼の表情にやや動揺している。

その違いに、キリトはとある理由で少し目を細めながらも、声を大に回答を述べた。

「これは俺の勝手な想像だが……ライオスが、その後輩の事を聞きつけた第三者を狙っているとしたら?」

「……あつ!? もしかして、ティーゼやロニエさん、シャーリーさんのこと?!」

「……もしかすると、俺達のこともな」

低い声で、ルークは補足する。

彼が怒っているのは、弟分達が狙われている可能性があるからだけではない。

その幫助をしてしまう形になる、シャーリー達のことを考えると腹立たしくなったのだ。

「この事態を聞きつけた俺達が乗り込んできて、決定的な一言を言わせて懲罰権を行使

「……なんてことも、ありえるかもしれない」

「そんな、ありえない。だって特権は、間違った行いをした人間に貴族が罰を与えるためのもので……」

「そこはあいつらの胸三寸つてやつさ。あの二人は、ご立派に正しい権利の使い方をする良い子ちゃんじゃないだろ？」

「確実に、悪用してくるだろうな」

無論、この会話は全て憶測に過ぎない。

だがしかし、妙に現実味を帯びた推測である。だからこそ陰鬱な気分が胸の中に立ち込めた。

ユージオは狼狽える。

生まれてからずっと貴族を、彼らに力を与えた皇帝や、ひいては教会を信じてきた。

だからこそ、そんな人ならざる所業に特権を行使するなど、とても考えたくない。

それは人界人……否、アンダーワールド人であれば当然の、ある種機械的な盲信。

「……………」

むしろ、険しい顔で真剣にその意見を考察しているルークこそが異常だった。

本人はそれに気がついてはいない。

だが、キリトはこのアンダーワールドに住まう同じ、しかし異なる二人の人工知能にまた驚いた。

（この自主性と思考力。ラースがアンダーワールドと彼らを作った理由に、ルークはたどり着きかけているのか？）

真の人工知能の創造。

胡散臭いあの役人に告げられた目的を思い出し、キリトは考えを深めた。

「……なんにせよ、放っておくことはできない以上、最大限注意して接触するしかない」
「そう、だね。ティーゼ達のためにも、フレニーカさんのことはなんとかしなくちゃいけない」

「結論は決まったな。それじゃあ早速行くか」

立ち止まったキリトにルーク達も足を止め、ふと前を見る。

いつの間にか、修剣士寮が目の前にあった。話し込んでいるうちに到着したらしい。扉の前までやって来た三人は、そこで顔を見合わせる。

「いいかい。ウンベールにはまず、僕が話すから」

「ああ。だが何かおかしな方向にいったら、俺が代わる」

「よし、それでいこう」

頷きあい、ユージオが扉に両手を添える。

そして、一息に力を込めて押し開いたところに揃って踏み入り――

イイイイインツ!!

「あぐっ!?!」

「ルーク!?!」

「なんだ!?!」

突如、膝をついたルークに二人が振り返る。

「あ、があっ……!?!」

「ルーク、ルークっ!」

「おい、一体どうしたんだ!」

「わか、らない……頭、が……」

頭蓋を叩き割られたような、強烈な感覚に襲われたルークは両手で頭を抱える。

それは一度のみならず、ルークという存在そのものへ叩きつけるように何度も脳裏に響く。

一瞬にして顔色は蒼白となり、体を小刻みに震わせる彼に、二人は深刻な表情で呼びかけた。

それをかき消すように響く鳴動に、ルークの思考は支配されている。

だが、五回もそれが続くと、やがてあることに気がついた。

(これは、かなり強い、けど……………あの剣の、呼びかけ……………?)

「俺を、呼んでる、のか……………?」

「ルーク! 平気なのかい!?!」

「なんで、今……………俺を……………」

「……………これは、かなり重症だな」

虚なルークの目を見て、キリトの零した呟きにユージオは顔を上げる。

キリトはルークの前に膝を突く。そうすると、ゆっくりとした口調で話しかけた。

「ルーク。お前は、部屋に帰って休んでてくれ」

その言葉に、ピクリと体を震わせる。

緩慢に顔をあげ、こちらを真剣な顔で見る弟分に目の焦点を合わせたルークは「でも……」と答える。

頭に響く共鳴を我慢しているのか、眉根を寄せて片目を瞑った表情は痛々しい。

「ウンベール達の所へは、俺とユージオで行く。お前も色々あつて疲れただろ？ だから、今日くらいは俺に任せてくれよ」

「けど……いざという時、俺は、お前達のことを……」

「……僕からもお願いだ。ルーク、君は休むべきだ」

「ユージオまで……」

キリトとユージオ、二人の顔を交互に見て、ルークは余裕のない思考を唸らせる。

あの剣のもとへいかなければならないのは確か。しかし、二人のことも放つてはおけない。

どちらを選ぶか。

しばらくの間、ルークは唸る。そんな彼を、二人はじつと見守っていた。

「……………わかつた。部屋に、戻る」

「そうか。よかった」

「ルーク、それじゃあ……」

「だけど、何かあつたら、すぐに呼べ。飛んでくから、さ」

「つたく、相変わらず心配性だぜ」

冗談めかして言うキリトに、ルークはややぎこちなく笑い返した。

仕方がなく休息を選んだルークは、二人に支えられて寮の中に入る。

寮監に一言適当に告げると、そのまま両側から肩を貸して階段を昇っていった。

「ほら、ルーク。部屋の前に着いたよ」

「平気か？」

「ああ……悪いな」

二人の肩から手を外し、ふらふらと自室の扉に寄りかかるルーク。

それから振り返り、心配そうにしている二人に無理やり笑いを作った。

「ここまで、来れば。一人で、平気だ」

「そうは見えないけど……」

「本当に大丈夫か？ なんなら俺達がついてるけど……」

「いや。でも、気をつけろ。あいつら、厄介だからな」

「……ルークがそう言うのなら」

「後で、部屋に寄るからな」

「ああ。心配、かけたな」

用心しろよ、と念押しして、ルークはドアノブを捻る。

開いた扉の隙間から、体を滑り込ませるようにして中に入ると、その場で後ろに寄りかかった。

背中に押された扉が閉まり、ズルズルと尻餅をついたルークは深く息を吐く。

「く……キッツイな、これ」

顔をしかめながら、共鳴の発生源に目を向ける。

イイイン……イイイン……

近づいてきたことを感じ取っているのか、先ほどより共鳴の主張は強くない。

しかし、何かを訴えるような耳鳴りは止まない。ルークに何かを求めているようだ。

「……わかったよ」

珍しく悪態を口にしながら、触れたままだったドアノブを支えに立つ。

ドアノブからソファ、ソファからテーブル、そして対面のソファと、支えを変えて歩

いっていき。

「わざわざ、呼び出したんだ。ご大層な、理由なんだろうな」
鋭い目つきで、震える愛剣の柄を握り締めた。

瞬間、世界が暗転する。

「なっ……」

唐突に暗闇へ包まれた周囲を見渡し、ルークは狼狽した。

まるで、自分以外の全てが壊れてしまったように何も無い空間。

左右上下、どこも「黒」が広がるばかりで、その先には何も見出すことができず。

「なんだこれ……いつもの夢や、幻覚とは何か……」

これまでにも、黒の世界に放り込まれたことは何度かある。

あの夢を見る時。少し前まで、剣を握った瞬間に噛み砕かれた時。

しかし、それとは何かが違う。

違和感を肌で感じ、身構えるルーク。

フウウウウウ……………

「」

その背中を、風が撫でた。

それはまるで、何かの息遣いのように生々しく、けれど凍てつくような風。

だが、一定の間隔でルークを包むそれは、これまでの「息遣い」というただの認識ではなく。

はつきりと、実感を伴っていた。

「っ……………」

じつとりと、嫌な汗が頬を伝う。

背後にいる「何か」の存在に、魂が震えている錯覚さえも覚えた。

いつまでも目前の闇を見ていたい気持ちにかられるが、それが自分を待っていると直感が告げる。

「っ……………」

だからルークは、ぐっと浅い呼吸を飲み込み、体の震えを無理やり押さえつけ。そして、一思いに振り返った。

「あ——。」

美しい。

最初に感じたのは、そんな言葉だった。

闇の中、一際輝く純白の巨軀。

一枚一枚が芸術じみた造形の鱗に包まれた体の形は、蜥蜴のそれに似ている。

違うのは、本体と同等かそれ以上に長い太尾と、ルークの体ほどある腕、肩から伸びる翼。

大空を易々と切り裂けるであろう、淡く輝く淡蒼色の皮膚は息を呑むほど綺麗だ。

体高は言わずもがな、ルークなど小動物と修剣士寮ほども差がある。

その上に鎮座する、長い首の先にある顔だけは、闇に飲まれてよく見えなかったが。

黄金の眼だけは、はつきりと分かった。

「おま、えは——」

思わず、といった様子で声を漏らすルークに、その存在は口蓋を開く。

《——乗り越えたな、担い手よ》

厳かな声だった。

今まで聞いたこともない、耳で聞いているようで、頭に響くようで、しかし胸の内に染みるような声。

ただ、厳粛な男らしき声音であるということだけはかろうじて判別し、ルークは唾を飲む。

《案じていた。我が担い手が、誤った道を進むことを》

「つ……シャーリーの、ことか」

《然り》

やはり、その存在はルークの苦悩と葛藤を理解していたらしい。

心配されていたと聞いて、少し驚きもしたが。

《汝は未だ道半ば。遍くを思うがままにするには、まだ不足している》

「だから、気にするなっ？」

《劍となった我は、汝と常に共にあり。故に、その懊惱もまた我が事と等しく》
だからこそ、誰も笑顔になれない考えに走ったことを諫めたのだ。

最後まで言葉にせず、その威圧感と眼光だけで伝えてくるその存在。

ルークは、少し安堵した。

いつか、このような機会がやってきたら、まず戒められ、見放されると思っていた。

実際に噛み砕かれる幻を見せられて、そう思ったのだが……想像していたより寛容だった。

まあ、厳しいことには変わりがないのだが。

「……俺が、牙を盗み取って。劍に変わった時から、ずっと見ていてくれたのか?」

《懐かしき事。その手の熱が、我が意思に触れた。そして、闇の者との初陣。あの時の汝の願いが、我が心を震わせ、呼び覚ました》

「俺の、願いで?」

頷くように頭を揺らし、そして少し下方へ降ろすその存在。

《我が牙を研ぎ、我が意思を継ぎ。我が母、創造主より認められし担い手よ》

そうする事で、頭ごとルークへと向けて。

《我は、汝を祝福する》

「っ——！」

そう、はつきりと言った。

《我は汝の剣。その気高き意思を貫くが為の光となりて、共に征こう。……そのことを、
伝えたかった》

「あ、え……………」

これまでにならないほどの、衝撃を受けた。

御伽噺の竜。ベルクーリと共に語り継がれし、最強の守護者。

偉大なる存在に、ルークはこれまでの努力を、迷いを、戦いを、そして懊悩からの脱却を。

その全てを、認められたのだ。

「はっ、はは」

感動と、歓喜と、それ以外のありとあらゆる明るい感情が溢れ出してくる。

それを言葉にすることはできなくて、下手くそに笑って声をあげるのが精一杯で。「はははっ、はははは、は………」

だけど、一つだけ……ルーク自身も自覚していなかった思いを、浮き彫りにした。

(俺は……俺は、もしかしたら、ずっと……この言葉が、欲しかったのかもしれない)

血の滲む思いで研鑽を積み重ねてきた。

たくさん悩んで、後悔して、でもそれを誰にもぶつけることはできなくて。

それを苦に思ったことは、一度もないけど。

他の誰だって、彼のことを責めなかったけれど。

でもきつと、そういうことではなく……もつと純粋な部分で。

きつと、そこでは——

「俺は……俺は、誰かに……よく頑張ったなって、そう言ってもらいたかったの、かな」

《枷で己を縛ることは時に美德だが、しかし汝らは弱き者。一人ではいつか壊れてしま

う》

「でも、俺は……」

俺は、兄貴分だからと。

みんなを引つ張らなきや、頑張らなくちやと、幼い頃に捨ててしまった心。

それを今更暴かれて、ルークは何を言っているのかわからなくなってしまう。

《案ずるな。我は汝を罰さぬ。十分、己で戒めただろう》

「つ……………」

《それでも、汝は進むのだろう。その己が意地を張るままに》

故に、とその存在は大きく体を揺らして。

《我は汝を許しもせぬ。汝が汝であろうとするのならば、心せよ。我が意思を担う意味を。その道を選んだ責任を》

「……………ああ、わかつてる。わかつて、いるさ」

いつの間にか、涙を溜めていた目尻を拭う。

そしてルークは、いつも通りに不敵な笑みをその存在に向けた。

「あんたにそこまで言われたら、俺もくよくよしてらんないな」

《良い目だ。ならば、宣告しよう》

ふと、その存在の右前脚が上げられる。

闇の世界の中で、重い音を立ててもたげられた手は、人のように指を曲げ。唯一伸ばした人差し指で、ルークの胸に軽く触れた。

《聞け、担い手よ。汝が歩むは修羅の道。大切なものを守らんが為、他を切り捨てる鬼の心を持たねばならぬ》

一言一言、刻み付けるように告げられる言葉を、ルークが決然とした顔で受け止める。それを認めたその存在は、人であれば笑ったように鼻を鳴らして続けた。

《見誤るな、己が守ると定めたものを》

「……ああ」

《目を背けるな、これから己がする選択の全てから》

「……ああ、絶対に」

《そして、ゆめ忘れるな。汝の隣には、常に我がいる……否、我だけではないな》

「それは、どういう……?」

《己で確かめよ》

これ以上の助言は与えない。必要なことは全て述べたと、手を引く。

それから、ふと鋭い鉤爪を顔の方へ持ってきていき。

《一つ、贈り物をしよう。これから先、汝が選択をするに足り得る報せが舞い込むように》

「え、あ……………」

ぐらりと、視界が揺れる。

ああ、落ちる。

そう確信した通り、急速にルークの意識は遠のいていき。

——忘れるな。汝の凶兆は、すぐそこに迫っているぞ

その言葉を最後に、闇の中へ溺れていった。

凶兆

「……………ぐ、あ」

呻きながら、目を覚ます。

覚醒を催促するような鈍い頭痛に口元を歪めると、頬に硬い感触が当たる。

ぼんやりとした思考はそれが床であると認識し、ルークは手を使って体を起こした。

「い、つてえ……………何だ、これ」

尻餅をついたルークは、頭を内側から覆うような痛みに眉根を寄せる。

意識がハッキリするほど煩わしくなるそれに気分を悪くしながら、周囲を見渡した。

「……は、俺の部屋……………そうだ、俺は……………あの剣に呼ばれて……………」

何が原因か不明だが、どうやら床に倒れて気を失っていたらしい。

ふと、今この瞬間に至るまで気が付かなかった片手の中の硬い感触を意識する。

視線を下ろせば、そこには抜き身の愛剣が静かに収まっていた。

「……………抜け、てる」

(じゃあ、見直されたってこと…………いや、違う。あの存在は、最初から…………)

徐々に気絶する前の記憶が蘇ってきた。

暗い闇の中、眩いほどに輝く白い巨躯。

その上に鎮座する、自分を睥睨する黄金の眼まなこ。

全て覚えている。あの時与えられた、敵かなるも優しき言葉も、これから未来への啓示も。

そして…………

「そういえば、あの時最後——に”っ
っ!!???」

次の瞬間だった。

ルークの脳裏に、夥しい“音”が響く。

猛々しく燃える炎の音。切り裂くような風の音。

大地の震えるような音、腐るようなドロリとした音に、何十という微風のような音。

その他にも、無数に、限りなく、数えきれぬほどの音、音、音、音、音、音………

「あ、がつ!?! あッ、あああ、あああああああああつ!?!」

心を埋め尽くさんばかりのそれに、ルークは発狂しかけた。

“剣を手放し”、両手で耳を塞いで——瞬間、ルークを取り巻く音の全てが消え去る。

「は、あつ! はあッ、ハアッ!」

(なんだ。なんだ。なんだ、今のは一体、何だ!?)

両耳をきつく押さえつけながら、両足を折りたたんでルークは狼狽する。

感じたことのない感覚だった。恐ろしいほど研ぎ澄まされた音だった。

到底、人の聞けるものとは思えなかった。

あんなもの、ルークは知らない。

きっと他のどんな人界人だって、ともすればあのキリトでさえも知らないに違いない。

あれは、そう、まるで。

自分とは全く違う生物の聴覚を、無理矢理に植え付けられたような……

「つ……………」

ルークは、剣を見る。

床に転がり、微動だにしないそれ。人を遥かに超越したモノの魂が宿る剣。

手放した途端に、音が聞こえなくなつたことを思い出す。

そしてある予想に、顔を渋くした。

「……………認めてくれた証のわりには、過剰じゃないか？」

——イイン。

答えるように、震える刃。

それさえも承知だと。使いこなしてみせると、*“あの竜”*が言っているかのように。

共鳴の意味をそう解釈したルークは、表情を苦笑いへと変えた。

「わかつた。それが、お前からの恩寵だというなら。いずれ使えるようになってみせる

「や」

掠れた声で呟きながら、ルークは立ち上がる。

床に転がる鞆の手に取り、そして今一度剣を見ると、一度唾を飲み込む。意を決した表情で、柄を握りしめた。

途端に、またも「音」がやってくる。

「ぐっ……！」

額に脂汗が浮かぶ。

だが、無秩序に騒ぎ立てる謎の「音」に屈することなく、ルークは耐えた。全身に力を漲らせ、ゆっくりと鯉口に峰の腹を滑らせて、刃を収めていき。

キン、と音を立て、完全に押し込んだ瞬間に「音」は消えた。

「っ、はあ！ ……こりや、しばらくかかるな」

静かになった愛剣に、皮肉のような科白を一つ。

そこでタイミングを見計らったように、外から時を告げる鐘の音が響く。

「……そういえば、日が昇ってる。気がつかなかった」

剣にばかり意識がいていたが、どうやら日を跨いでいたようだ。

キリト達はどうなったのか。真っ先にそのことが思い浮かぶ。

「……まずは身支度から、か」

皺くちやになった汗まみれの服に、ルークは苦笑した。

次の時を知らせる鐘が鳴る頃に、ルークは支度を終えた。

本日の授業時間割を確認すると部屋を後にして、食堂のある一階まで降りていく。

(浴室で鏡を見た時、背中への痕が広がっているような気がしたけど……気のせいかな?)

階段を降りるのに伴い、制服の裏地に触れる背中の感触にルークはふと思いつかべ
る。

背に残る名残を気にながらも一階に辿り着き、寮監に挨拶をして食堂の扉を開
く。

「おや、今日は遅いんだね」

「少し、準備に手間取りまして」

「珍しいこともあるねえ。ちゃんと食べなよ?」

「はい、ありがたく」

気の良い食堂の中年女性とそんなことを話しながら、朝食を手に入れた。

それからいつもの席に向かい……既にいたとある二人にほっと安堵の息を吐く。

何やら話している二人の隣にトレイを置くと、すぐに気がついた彼らが顔を上げた。

「キリト、ユージオ、おはよう」

「あ、ルーク！」

「おはようルーク。もう大丈夫か？」

「もちろん平気さ。心配かけたな」

いつも通りの笑顔を浮かべながら、ルークは席に着く。

二人もルークの顔色を確かめ、問題ないことを改めて確認した。

「まったく、気を揉んだよ。あんなことを言うから余計にさ」

「？ なんのことだ？」

「何って、昨日も帰りに俺達が寄ろうとしたら、部屋で休むからそのまま帰ってくれっ

て、扉も開けずに言っただけ？ だから顔を見るまで心配でさ」

一瞬、ルークの思考が止まる。

数秒をかけて弟分達の言葉を理解し、身に覚えのない出来事に総毛立つ。

(……もしかして、俺と対話するためにあの存在が?)

真つ先に思い浮かぶは、あの白き威容。

魂だけにしては、何かと強引なところがあるのだ。ルークを装つても不思議ではない。

「ルーク?」

「……ああ。平気とは言ったけど、やっぱり顔色が悪くてな。昨日は色々あったし、これ以上何か気負わせるのは酷だと思っただよ」

「そういうことか。まっ、元気そうで安心したぜ」

「キリト、随分と心配してたもんね。部屋に戻った後も……」

「ちよっ、おま、それは言わない約束だろ!」

「そうだったけ?」

悪戯げに笑うユーゾオに、珍しく慌てた様子のキリトは口を塞ぎにかかる。

それに笑いをこぼしながら、ひとまず誤魔化せたことに内心で安堵した。

その後、じゃれ合いをやめた二人と共に食事をしながら話題を振る。

「それで、あの二人のことはどうなった？」

「案の定だったよ。危うくユージオが酷い目に遭うところだった」

「キリトが咄嗟に機転を効かせてくれたから良かったものの、ね……」

「ふむ……」

渋面の二人に、ルークは詳しく話を聞いた。

やはり、ライオスがウンベールの蛮行に口出しをしなかったのはあえての事だったらしい。

いざユージオ達が乗り込むと、あいも変わらず激昂するウンベールに便乗して二人を陥れようとしてきた。

ユージオが肝心の「不適切」な言葉を使う前に、キリトが事なきを得たらしいが……すまなかつたな。そんな時に呑気に休んでいて。無理をおしてでも俺も行っていれば……」

「何言ってるんだよ。あんな状態のお前に何かあったら、それこそ大惨事だ」

「そうだよ。いつもルークは僕らを守ってくれてるんだ。気にしないで」

「……お前らは優しいな」

温かい言葉が心に沁みて、思わずルークは二人の頭に手を置く。

大きなルークの手はちょうど二人の頭に収まって、彼らは恥ずかしそうにはにかん

だ。

(しかし、そうか……ライオスとウンベールが……だとすれば)

脳裏によぎるのは、最後に聞いたあの言葉。

「凶兆はすぐそこに、か……」

「え？ 何か言ったかい？」

「いや、何でもない」

「それより、さっさと食っちまおうぜ。今日もめいっばい授業があるだろ？」

「それもそうだな。よし、腹ごしらえといくか」

「二人とも、ちゃんと噛んで食べるんだよ」

ひとまず、ルークはそれを頭の奥にしまい込んだ。

とはいえ、あれほどの体験は早々頭を離れない。

神聖術や一般教養的な座学を受けている時や、剣術の講義で素振りをしている時。

時折その言葉が、意識の隅にちらりと顔を見せ、ルークは悩ましくなる。

「ふむ……」

「ルーク上級修剣士。この神聖術を発動するのに必要な式句の数は何？」

「ん、11です」

「よろしい」

それでも適度に集中をしながら、いつも通りに授業をこなしていた。

気がつけば、あつという間に昼の休憩時間になっている。

「ルークー、飯食いに行こうぜー」

「ん、おう」

「ダメだよキリト。凍結の神聖術の復習が終わるまでは逃がさないからね」

「うげっ。そこは一番苦手なんだよ……」

「だからでしょ。来週は実践試験もあるんだから。ということ、ごめんねルーク」

「おう、気にすんな。せいぜいキリトをしろいてやってくれ」

「そんな殺生な！」

裏切り者め！と言わんばかりに嘆くキリトに軽く笑い、ルークは席を立つ。

二人に一時の別れを告げ、教室から出たルークはそのまま校舎の外へと向かった。

(さて……久々に一人だが、どうしたものか)

ひとまず、学院の中で適当な場所を見つかるかと彷徨い歩く。

広大な広場、ひっそりとした花壇、静謐な林……一人で気楽に過ごせる場所が様々思
い浮かんだ。

その何処かから、まさに一つを選び出そうとしていた時のことだ。

「あれ、ルーク先輩……？」

「ん？」

覚えのある声での呼びかけに、彼は足を止める。

そうして振り向くと、ベンチに座っている二人の少女が自分を見ていた。

「ティーゼ、ロニエ。こんなところで奇遇だな」

「こんにちは、ルーク先輩」

「珍しいですね。今日はユージオ先輩達は一緒にやらないんですか？」

「まあ、ちよつと。そつちも休憩中か？」

「はい……あつ、シャーリーなら今、ご飯を買いに行っていて」

「ん、そうか」

「そういえばいないな、と思ひ出す。」

三人でいることも多い彼女達だが、この二人でいるのもよく見るために違和感がな

かった。

そんなことを考えていると、不意に二人の表情に目を引かれる。

「……心配か。フレニーカさんのことが」

「えっ、あつ……顔に、出てましたか」

「す、すみません」

「別に、謝ることじゃないよ。キリト達にはもう会ったか？」

「はい。ユージオ先輩が、話はしておいたからつて。でも……」

表情に影が差す。不安は強く残っているようだ。

「先輩達のことを、信じていないわけじゃないんです。でも……」

「本当に、よかったのかなつて……」

どこか、後ろめたいものが混じった言葉。

目の中に罪悪感を称えるティーゼ達に、なるべく優しく語りかける。

「あいつらは、後輩に頼られて迷惑がるようなやつらじゃないよ」

「けど……巻き込んでしまったことが、申し訳ないんです」

「二人で話してました。最初から自分達だけで、どうにかしておくべきだったんじゃないかな

いか、つて……」

ああそうか、とルークは理解する。

目の前にいる二人の少女は、尋常でない事情に関わらせた負い目と同時に、怯えてもいるのだ。

親しい相手に嫌われたくない。

誰もが一度は思うこと。特にそれが、今回のようなことであれば殊更に。

むしろ、何も言わなかった方があのお人好しな弟分達は不満だったろう、とルークは思う。

だが、そこは付き合いの長さというものがある。

親しいとは言っても、彼女達と知り合ってからまだ数ヶ月だ。全幅の信頼を置くには足りない。

(こんな場面で思うことではないだろうけれど。不器用なところが、なんとというか似てるな……)

些か不謹慎だろうが、そうとすら思ってしまった。

また、下級とはいえ貴族の子女にしては、一際に善良であるとも。

家柄的なもので立場が逆転し、困りごとを全て先輩に押し付ける者もいるのだから、彼女達の善性は際立つだろう。

故に、ルークは口調を明るく、言葉を投げかける。

「まあ、俺から言えることは一つだ」

「……………」

不思議そうにする二人に、ルークはいつもの笑みを浮かべて。

「先輩の仕事するのは、後輩の面倒を見ることなんだ。気に病みすぎても、こっちが申し訳なくなる。だから、頼りたい時は頼ってみるといい」

「……………あんまり遠慮しても、失礼ってことですか？」

「でも、それって……………」

まだ負の感情が飲み込み切れない、という顔のティーゼとロニエ。

ルークは笑みを収め、膝を落として目線を合わせる。

自然と二人は視線を向け——自分達を見る、灰の瞳に息を呑んだ。

「もし、それでもまだ後ろめたいというのなら。君達が……………いざという時に、あいつらを支えてやってくれ」

告げられた言葉が、心に沁みる。

風に揺れる木の葉から覗く陽光に反射し、瞳の奥に輝く『金』に目を惹きつけられ。不思議と、その言葉が胸の奥まではつきりと木霊した。

「私、達が……」

「キリト、先輩達を……?」

「ああ。思いつく限りのどんな方法だつていい。どうしようもなく、あの二人が立ち上がれなくなつちまつた時は、側にいて、助けてあげてくれ。そうしたら、きっと君達は大丈夫だ」

安い気休めだと、言いながらルークは自嘲した。

確実性もなく、明確な補償が何もない助言でしかない。

それでも、ルークの本音だった。

案の定、二人は少々難しい顔になっている。

ハツとしたルークは、親しげな笑みを張り付けながら立ち上がった。

「つと、いろいろ話しすぎたな。とりあえず、ちゃんと昼ご飯は食べとけよ」

「は、はい」

ふと、耳の奥にあの音が響いた気がした。

産声を上げて

夕刻、修練場。

「ハアッ！」

「シッ！」

いつも通り、ルークとシャーリーの訓練が行われている。

木刀を用いた模擬戦。

幾度となく行われてきた形式であるが、これまでとは少し異なる。

「ツ！」

「つとー！」

シャーリーが踏み込み、突きを繰り出す。

風を切り、恐ろしいほど真つ直ぐに飛んだ刺突はルークをしてヒヤリとするほど。

愛刀を横した木刀の腹で受け流して、そこを起点に力を加え、転倒を狙った。

いつもであれば、少なからずバランスの崩れるカウンター。
「ふっ！」

だが、彼女はあえてそちらに足を踏み込み、そして握り手の力を緩めた。

力点がズレて、解放された木剣を再び握りなおし、二撃目を至近距離で放つ。

対応力に驚いたルークは、反射的に左手を刀身に添えるとその腹で受け止めた。

「っ、やるな、リイ」

「先輩、こっそっ！」

笑い合いながら、互いに次の一手を始める。

シャーリーがまたもルークの姿勢の穴を突くように足を踏み入れ、連続で突きを入れる。
る。

彼も即座に対応し、後退しながらも抜群に安定した体幹で捌いていった。

「っ」

埒が明かないと悟ったか、シャーリーが一步引く。

ルークは次の剣戟を警戒し——まさに、それが彼女の狙いであった。

「シッ」

「っ！」

踏み込み、からの蹴り。

これまで一度も見たことのないパターンにルークは不意を突かれ、咄嗟に片手で受ける。

小柄ながらもしつかり体重が乗った蹴りは重く、掌が痺れた。衝撃が伝播した腕は一瞬痙攣し、その隙にくるりと回転したシャーリーが突き入れる。

「はあっ！」

「ぐっ！」

全身をバネにした、貫通力のある全力の刺突。

吸い込まれるように首へ迫ったそれを、なんとか右手で握った木刀で受ける。

メキメキと数ヶ月で冴えを發揮したそれは、ルークとて片手で受け止めるのは難しい。

冷静に対応していた先ほどとは異なり、随分と苦し紛れだった。

「っ……っ！」

そのまま押し切ろうと、シャーリーは切っ先を進める。

少しずつ、自らの木刀が迫っていく。あと数セルチもない。

やれる。彼女はそう確信し。

「……………」

「え……………」

それが、命取りだった。

ルークの木刀が、不思議な動きをしていく。

腕の筋肉と関節が絶妙に使われ、剣先にかかった力の向きがおかしくなる。

「あつ……………」

「っふー！」

そして、驚くほどの膂力でいなされた。

切っ先に集中させていたバランスが一気に崩れ、シャーリーは前へと倒れる。

完全に姿勢を崩していた為、そのままならば顔から転倒するような形だった。

ヒヤリと背筋に冷たいものが走るが、寸前で彼女の腹に添えられた腕によつて阻止される。

ズン、と自分の体重が戻ってきて、シャーリーは少し咽せた。

息を吐き出しながら右を見ると、いたずらげに笑うルークがいる。

「一本、だな」

「……参りました」

勝敗は決した。

腕を支えに立ち直ったシャーリーは、少し恨めしげな目をする。

「また、負けました」

「そう簡単には勝たせてやらないさ。先輩の意地つてやつだ」

得意げに言うルークを、ジトつと見るシャーリー。

やがてどちらからともなく吹き出して、二人は模擬戦の形式に則り礼をする。

それから汗を拭い、カラカラになった喉に持ってきた水筒の中身を流し込んだ。

「いや、それにしてもギリギリだったよ。ここ最近、随分と強くなってるじゃないか？」

心の底から感心したように、ルークは先輩に告げる。

シャーリーは近頃、位置取りと足運びの技術が格段に向上していた。

単純な臂力の差と視点の高さという利点から凌いでいるが、ヒヤリとすることも少な

くない。

「んく、んく……ぷは。おかげで、先輩の動きにもついてこられるようになってる」

「先輩が成長してくれて嬉しいよ。何かきっかけがあったか？」

「……本気で聞いている？」

両手で持った水筒から顔をあげ、シャーリーはジトリと見つめる。

その視線を悠々と受け止めながら、ルークは微笑んだ。

「悪い、冗談だ。俺もそうだったからな」

「ん。……もう、同じことにはなりたくないから」

「そうだな。互いに頑張っていこう」

「はい、先輩」

笑いかけるルークに、シャーリーも口の端を小さく上げた。

以前ならば口に出すことも戒めていたが、こうして互いを高める理由にできている。

それが最も得たものだと、二人は感じていた。

互いに模擬戦の内容を思い返し、談笑していると、不意に窓の向こうが輝く。

遅れて極大の腹の音のような轟音が響き、シャーリーが少し体を震わせた。

「つと……止まないな、嵐」

窓の外を見やり、そこに吹き荒れる雨風を見てルークは呟く。

今日は朝から、ずっとこのような天候だ。

ソルスの光すら届かせないほどの暗雲が垂れ込め、代わりに紫の雷光が隙間より覗

く。

ただの悪天候と呼ぶには強烈な嵐がやってくるまで、そう時間はかからなかった。

「さつき、四時を告げる鐘が鳴っていました」

「そうだったか。よし、長々と鍛錬に突き合わせたし、今日はもう部屋の清掃はいいから初頭錬士寮に帰れ」

「いいんですか?」

「おう。もつと酷くなつて戻れなくなる方がまずいからな。送つていくよ」

まして、それでシャーリーが体調を崩そうものならばいよいよ目も当てられない。生来の世話焼き根性が顔を出したルークは、手早く支度を始めた。

「……私は、別にそれでも………」

「ん? 何か言ったか? 外の音でよく聞こえなかった」

「……いえ」

何やら、少し残念そうながらも片付けを始めるシャーリーに彼は首を傾げる。

言い直さないのなら大したことではないだろうと判断して、木刀を布袋に仕舞う。口を閉じる紐を解き、中を開くと……一緒に入れてきた、『白竜の剣』が顔を出す。

あれ以来、ルークはなるべくこの剣を持ち歩くようにしていた。
“凶兆”の訪れがいつかもわからぬ中、手元にある方が心強い。
そんな相棒を、木刀を入れる隙間を作るために触れ。

—— イイイインツ!!

瞬間、弾かれたように手を引いた。

「。。」

「先輩?。」

不意に手を挙げ、硬直したルークにシャーリーが訝しげにする。
それにも気が付かず、ルークの瞳は愛刀をじつと凝視していた。

(これまででない音。初めて伝えられた意思。これは、なんだ?)

今、あの存在は、自分に何を伝えようとした?

道に迷っていた時に拒まれたのとは違う。もっと別の何か……そう、警告するよう
な。

「……………確かめるしかない、か」



「あの、先輩……………」

「リイ。すまないが、少し離れていてくれ」

不意に飛んできた鋭い声に、一瞬シャーリーが体を強張らせる。

だが、恐る恐る伺ったルークの真剣な横顔に何かを察し、数歩下がる。

すまない、と小さく呟いて、もう一度剣に意識を向ける。

木刀を置き、空いた左手でしっかりと鞆を握る。

残る右手で柄に触れると、小刻みな振動が伝わってきた。

「……………聞かせてくれ。俺が知るべきものを」

そして、ルークは静かに刃を抜いた。

刹那、彼の耳に入り込んでくる無数の音。

外の嵐をかき消すほどの音の奔流に、やはり意識が軋みをあげるような錯覚を覚える。

だが、それ以上に。

「なんだ、これは……………?!」

それは、*泥*だ。

他の数えきれぬ音の全てを圧倒し、塗りつぶしてしまうほどの、おぞましい何か。

そうとしか形容ができないほど、腐り切っていて、吐き気の込み上げてくる、毒々しいモノ。

「こんなものが、この世にあるというのか……………?!」

「先輩？ 大丈夫ですか、先輩っ」

肩を激しく揺さぶられ、ハツとする。

振り返るとそこには後輩がいて、尋常でない顔をしている自分を不安げに見ていた。

ルークはさらに目を見開く。

彼女の胸の中心。そこから、音が聞こえていたのだ。

小さく、されど決して絶えることなく燃え続ける、強固な芯があるかのような、炎の音。

まるで彼女の在り方を表すようなその音は、今も何十と聞こえるものの一つだった。

「……そうか。そういうことだったのか」

（これは意志の音。人の魂、その根底に存在する心の意思——いわば、心意が聞こえていたんだ）

ルークは悟る。自らが聞くものの正体を。

同時に理解した。あの恐るべき、至高なる生物が、いかにして万象を認識していたかを。

強大なるかの竜は、有象無象であろう外界の命を、心意で聞き分けていたのだと。

「だとしたら、この音は……！」

他の音、他者の心を蹂躪するような心意の持ち主が、すぐ側にいるということだ。

「っ……………」

ルークは、普段そうしているように耳を澄ませる。果たしてその目論見は成功して、より鮮明に音が聞こえてくるようになった。

泥は、二つ。

一方がやや強いが、混ざり合い溶け合うように、互いに腐らせ合っている。

そして——今まさに、か弱い灯火のような音が二つ、飲み込まれようとしていた。

「つ、これはっ！」

一体、何が起こっているというのか。

驚愕するルークに出来るように、耳はその音を別の形で届けた。

——六等爵家の小娘にしては、大した覚悟じゃないか。どこまで頑張れるか、楽しみが増えたな、ウンベール

——では、どちらが先に泣き叫ばせるか、勝負といきますかライオス殿

「——ッ!!」

「きゃっ!!」

その瞬間、接触していた鞄尻から放射線状に床がひび割れた。

凄まじい音を立てて破損した床にシャーリーが尻餅をつき、驚いてルークを見る。

「ライオスツ……ウンベール………ツ!!」　そこまでの外道だったか………ツ!!」

絞り出すように、喘ぐように、ルークは唸りを漏らす。

相当に力んでいるのか、膨張した筋肉によって制服が内側から悲鳴を上げていた。額や手の甲には青筋が浮かび上がり、鋭い瞳は憤怒に淀んでいる。

そんな彼の煮え滾る怒りに、音は油を注ぐ。

——い、いや……いや……いや………!!

また、声が聞こえた。

それは、かき消されそうな火の音に混じって聞こえてきた。

ひどく聞き覚えのあるそれは——間違いようもなく、弟分の世話している後輩の少女で。

——いや……助けて……たすけて、ユージオ先輩！　ユージオせんぱい——っ！

遅れてやってきた声が、確信を与えた。

今、ライオスとウンベールに凌辱されそうになっているのは、他でもない、ロニエとティーゼなのだ。

「貴様ら、よくも……！」

我慢の限界を超え、ルークは荒々しく立ち上がる。

そのまま修練場の出入り口に走り出そうとする彼を止めたのは、袖を引く二つの手だった。

「先輩、待って！」

「っ」

力一杯、服の裾を引くその手に、ルークは足を止める。

ゆつくりと後ろを向けば、そこには今にも泣き出しそうなほど、不安げな顔をした少女が。

「どこに、行くの」

「……ロニエとティーゼが、ライオス達に辱められている。このままでは、取り返しのつかないものを失う」

「っ!? ど、どうしてそんなことを……」

はつきりと顔に動揺を浮かべ、しかし決してルークの服を離さない。

そんなシャーリーに、いつになく厳しく……あるいは切羽詰まった声で告げた。

「……離せ。今すぐ行かないと」

「っ……………何を、するつもりなんですか」

「助ける」

「どうやって……………」

「どうやってでも、だ。もし必要なら、あいつらを多少——」

その先の言葉を言う前に、ルークは口をつぐんだ。

だが、そこで首をかしげるほどシャーリーは愚鈍な少女ではない。

ハッと目を見開き、彼の手に固く握られた《白竜の剣》を見て、みるみるうちに顔を青く染めた。

「だ、駄目！ そんなことをしたら、禁忌目録違反になる……………」

「それは……………」

「もしその話が本当でも、いっちゃダメ……………！ あの人達に逆らったら、先輩が……………」
シャーリーが何に怯えているのか、ルークにもよくわかっていた。

上級貴族であるライオス達に下手な真似をすれば、裁決権の執行対象となってしまう。
う。

そうなれば、どのような目に合うかわからない。ともすればその場で首を落とされるかもしれない。

「……それでも、見捨てることはできない」

「つ、どうして、そこまで……!」

「そんなの……」

お前達が悲しむからに決まっているだろ、と続けようとして。

——や、嫌あああ—— ツ！ 先輩—— ツ!!

——う……おとおああああ—— つ！

汚泥のように濁った音の一方を、吹き荒れる吹雪の音が削った。

共に聞こえた烈拍の叫びは、それこそ聞き間違えるはずもない声。

「つ?! ユージオ!」

(まさか、お前までそこにつ!?)

もう、迷っている時間はない。

ユージオが、ライオスカウンベールのいずれかに何かをした。今すぐ行かなくては。

激情に駆られたルークの歩みは力強く、シャーリーが踏ん張る暇もなくその手がすり

抜けた。

「だめ、待って、先輩——！」

継るような金切り声を、置き去りにして。

ルークは蹴り破るように扉を開け放ち、嵐の中へと飛び出していった。

——いかないで。私をまた、ひとりにしないで……………

最後に届いたその言葉が、ルークの心を深く抉った。



「すまん、リイ……………！」

口の中で噛み砕くように謝罪しながら、ルークは走る。

雨に打たれた体はみるみるうちに濡れていくが、その冷たさを感じない程の激情があった。

(どこだつ。奴らはいつたい、どこにいる……！)

整備された道を駆け抜けながら、ルークは耳が伝える心意の発生源を探す。

長時間聞いた為だろうか、少しは聞き分けられるようになってきた。

だが、それでも何十もの音が重なり、煩雑としすぎていて、特定ができない。

「くそつ、これじゃあロニエ達も、ユージオも……！」

——イイン。

その時、あらゆる音に割り込むような耳鳴りが響いた。

立ち止まったルークは、顔の前に剣を持ち上げる。

「……落ち着け、とでも言いたいのか？」

じつと見つめても、剣は震えない。それが無言の肯定に思えた。

一度、ルークは深く息を吐く。そうして調子を整えて、気分を落ち着かせた。

昂った気持ちがちが落ち着いてきたのを見計らって、ルークは目を閉じる。

そして、無理やり意識から追い出していた全ての「音」に自ら意識を向けた。

（心を平静にしろ。がむしやらに探しても、その分時間が無駄になる。だから、落ち着いて探し出せ）

言い聞かせるように自分へ語りかけ、ユージオ達がいる場所を聞き出すことを試みる。

（余計な音は聞かなくていい。聞きたい音だけを、この奔流から聞き出せ）

——然り。不要な音は切り捨てよ。それが光明への導である。

どこか、重なるような声が囁かれた気がした。

それに従うようにして意識を研ぎ澄ませ、同時に思考を回転させる。

「この時間、この天候の中、奴らが人目につかずロニ工達に蛮行を働ける場所……」

学舎は、まずありえない。この時間であれば教官達や生徒もいる。

同様の理由で、初頭錬士寮も違うだろう。

では屋外か。この嵐の中で、ましてあの二人がそれはありえまい。

ならば、答えは一つ。

「上級、修剣士寮」

答えを呟いたのと同時、まるで海を割るように音が遠ざかった。

そして、雑音の入り混じっていたその音が、はつきりとその場所から聞こえてくる。

「奴らの部屋、そこにユージオ達が——っ！」

確信と共に、そちららに向けて走り出す。

瞬間、脳を貫くような激痛がルークを襲った。

「あ、ぐっ!？」

体から力が抜け、その場で膝をつく。

ズキン、ズキン、と頭の奥からやってくる刺すような痛みにも、思わず右目を押さえた。「これ、は……あの時と……同、じ……!」

かつて、目の前でアリスを連れ去られた時と同じ痛み。

公理教会は絶対である。

禁忌目録は絶対である。

平民は貴族に逆らってはならない。

法に、背いてはならない。

そんな言葉が、つい先ほどシャーリーに言われた言葉と共に頭を埋め尽くす。

この人界を統べる絶対の法が、ルークに鎖を巻き付けようとしていた。

「黙、れ……黙れ……黙れ……黙れ、黙れ黙れ黙れエッ!」

それを跳ね除けるように、ルークは吠える。

「何故だっ!?! 何故お前らは、奪わせることを許すっ!?!」

法が絶対？ 禁忌を冒してはならない？

法は、人々の日々に安寧をもたらし、幸せにするために存在しているはずだ。

だというのなら、ライオス達の行いは法が裁く悪ではないのか。正義が執行されないのか。

否、巧妙なあゝの二人のことだ。その網目をすり抜けているのだろう。

だったら、許されるのか？ 今もなお悪意に晒されている彼らの恐怖、苦痛は、正しいのか？

法に、触れていないから？

「いつも、そうだつ！ お前達が、お前達の法が、大切なものを壊していくつ！」

そんなことが、許されていいはずがない。

いいや違う。ルークが許さない。

そう考えた途端、頭を刺す痛みは全身へ襲いかかった。

「が、あああああつ!？」

右眼の中に、何かが浮かぶ。

考えるたびに熱を孕み、赤く染まっていた視界の中央に、神聖文字が。

「SYSTEM ALERT : CODE871」。その文字の羅列の意味は理解できなかった。

だが、今自分が紡いでいる思考を封じ、恭順させようとしていることは、解った。

思い出した。かつて幼い自分は、これに屈してユーゾ達を押さえ込んだのだ。

そして、目の前で整合騎士にアリスを連れて行かせ。

彼らから、大事なものを奪った。

「っ……誰、が……二度、も……従う、ものか……」

今度は、屈しない。

奥歯を噛み締め、鉛が差し込まれたのではないかというほど重々しい手足に力を入れる。

体を打ち付ける雨の冷たさを鞭に心を奮い立たせて、全力で立ち上がる。

それを抑え込もうと痛みを増させ、視界で踊るコードに歯軋りをした。

「この、悪意を……許容、するの、が……お前達、の、法……ならば……」

いよいよ、コードの向こうにある景色が見えなくなるほどに視界が赤く染まる。

「俺は、俺の正義に、従い……ッ、今度……こそ……」

身体中で暴れ回る痛みを堪え、完全に立ち上がった、ルークは。

「お前達の 正義を、否定してやる——ツ!!!」

天に向かい、咆哮した。

その雄叫びは、周囲の雨を凍て付かせ。

ばしゃつ、という乾いた音と共に、ルークの視界の中で、眼球が握り潰された。

「はあっ………はあっ………」

体力を使い果たしたように、膝をつく。

崩れ落ちそうになる体を剣で支え、荒く息を吐きながら前を見据えた。

右の視界が金色に染まった目には、上級修劍士寮がはるか遠くに見える。

「行かなくては」

だが、些細なことだった。

ふつ、と息を吐くと、それまでが嘘のように屹然とした表情で立ち上がる。

「五歩、か」

何事か眩き、鞘から刃が抜けないように親指で鐔を押さえる。

そうすると、ぐつと両足を屈ませて。

「シ——ッ！」

疾走した。

一步踏み込む。石畳が碎け、周囲の光景が数十メル後ろに吹き飛ぶ。

二歩踏み込む。雨を突き破り、あまりの疾さで音を裂いた。

三歩。曲がり角で旋回し、その拍子に蹴った花壇の塀を粉碎した。

四歩。行く先に寮が見えた。

最後の一步。

その塔の最も高い部屋の窓まで、足裏を爆発させるように跳躍し。

「——見つけたぞ」

窓の中に、うずくまる弟分へ剣を振り下ろさんとする下郎と、それを受け止める少年を見た。

親指が鐔を弾く。凄まじい速度で飛び出した剣は窓に衝突し、一撃で粉碎した。

「なっ——」

部屋の中にいた男が、驚いたようにこちらを見る。

床に転がる隻腕の男が、寝具の上の少女達が、そして二人の青年が目を見開いた。誰もが見る中、掴んだ剣を鞘に戻して。

「貴様、何故——」

何かを、男が言おうとする。

憤慨か、驚愕か、あるいは罵倒か。

どれでもいい。どうせ聞かないのだから、考える意味がない。

「奈落の底へ堕ちてゆけ。その醜悪な魂ごとくな」

キン——ツ。

一瞬の出来事だった。

気がつけば、彼は刀を振り切っていて。

男の背後に、しゃがみ込むように着地していた。

「ば、か……な……………」

ガラン、と重いものが取り落とされた音。

続いて、ブシイッ！ と形容し難い音が大きく響く。

最後に、重々しいものが地面に転がる衝撃が床を打ち。

背中に、生暖かいものが降り注いだ。

「——なんだ。脆いじゃないか」

時が止まったような部屋の中に、冷徹な言葉が響く。

その場の全員が体を震わせ、錆びた道具のような動きでそちらを見た。

男が、立ち上がっている。

背中を血に染め上げて、それとは裏腹に一滴の穢れもない刃を手に携え。

ゆっくりと振り返ったその顔が、外からの雷光で照らし出され。

その右の目には——黄金の光しかなかった。

「ヒッ、ヒイイイイッ!? ば、化け物おおおっ!!」

ウンベールが、無様な姿勢で脚をバタつかせ、後ろへ逃げようとする。

そんな彼を睥睨し、男はゆっくりと体の向きを変えた。

「安心しろ。お前のそのドス黒い ココロ 心意も、すぐに斬つてやる」

大丈夫。さつきは失敗したが、次はそれだけを斬るさ。

血溜まりの中に倒れた骸を踏み越えて、そんなことを呟きながら、男は迫つた。

一歩一歩、近づいていく男の前に、黒と青の影が躍り出る。

「おい、ルーク！ お前なんか変だぞ！」

「ルーク！ 今の君は、まともには見えない！」

「どけ。そうでないと、お前達その男を殺せないを守れない」

二人の青年の言葉を聞くことなく、男は進もうとした。

何か異常だと察した黒髪の青年と、片目のない金髪の青年は目線を合わせ、頷き合う。

そして、二人で男の体を抑えた。

「どけと、言っている」

「正氣に戻れ！ ライオスは死んだ！ ウンベールも、もう何もできない！」

「こいつにはもう、それ以上のことをする必要はないよ！」

「何を言っている。そいつの おと 心意は濁つたままだ。断ち切らないと」

今も聞こえる。目の前で顔を恐怖に引き攣らせ、失禁している男の醜い心が。

断ち切らなくては。大切なものを守るために、悪しきものは全て斬り捨てなければ。

ただ、それだけが男の中に強く響き、規格外の膂力で二人ごと前に進む。

「ぐつ、な、なんて力だ……!」

「ちくしようつ! こういうやり方はしたくなかったが!」

「お前達、いい加減に——」

ドゴツ、という鈍い音と共に、後頭部に何かが叩き込まれた。

それによつて脳が揺れ、全く揺れることのなかつた男の体勢が崩れる。

「う、おおおおおっ!」

その隙に、金髪の青年が全力で男を押し倒し、その拍子に手から剣が離れていく。腰の辺りを抑えられて、動けない。未だに意識は朦朧としていた。

揺れる視界の中で、自分の胸の辺りにまたがった黒い影が、何かを振り上げる。

「悪く思うなよ、ルーク」

「なにを——」

聞き返す前に、剣の柄頭が容赦なく振り下ろされる。

それによつて、男の意識は闇の底へ叩き落とされた。

再会と、邂逅と

道に、立ち尽くしていた。

「これは、いつもの……」

ルークは、それがあの夢であることをすぐに悟る。

いや、違う。すぐにそう否定した。

空が、血で染めたように赤い。

周囲の木々は黒々とし、ぬるりとした風に吹かれ不快な音を立てる。

ずっと向こうまで伸びる道は、ひどく荒れ果てていて。

そして、ピチヨリ、ピチヨリと。

何かが滴り落ちるように、ねっとりとした音が響いた。

「……………」

ふと、下を見下ろす。

自らの手が、血で染まっていた。

「なっ!?! んだ、これは……!?!」

空よりも鮮明に、そして毒々しく濡れそぼった両手に、激しく動揺する。

無意識に一步、二歩と後ずさり、すると足に何かが触れた。

手に意識がいつていたルークは驚き、素早く振り返る。

そこには、人が転がっていた。

ズタズタに切り裂かれ、血だまりの中で事切れた男。ライオスだった。

その瞳に色はなく、傷口から音を立てて溢れ落ちる血は生々しくて。

——この、バケモノめ

「う、あ……………」

ふと、耳の奥にねじ込むように響いた言葉に、尻餅をつく。

そのまま後ろへ下がろうと這いずり、今度は地面についた手に何か触れた。青ざめた顔を、恐る恐るそちらに向ける。

「……………」

「ひ、いあ……………」

骸が、こちらを見ていた。

青い制服を、煌めきのある金髪を赤く染め、口の端から血を垂れ流した、青年の死体。傍らには、水晶のような美しい剣がバラバラに碎けて落ちていた。

「ゆー、じお……………」

嘔吐のように、名前を呼ぶ。

返事は返ってこない。

代わりとでも言うように、大きく引き裂かれた背中の傷から血が吹き出る。恐怖と絶望に顔を引きつらせるルークは、転がった弟のすぐ隣を見た。

「きり、と……………あ、りす……………」

黒衣の青年。小柄で可憐な少女。

どちらも、死んでいる。何かに壊されたように、事切れていた。

三人だけではない。

その先には、骸の道が続いていた。

セルカ。村の子供達。母セフィア。ユージオの家族、アリスの父。

牧場の家族、ザツカリアの衛兵隊の仲間、ルルデイ、シャーリー、ロニエ、ティーゼ

.....

「あ、あ、ああああああ」

皆、命を奪われ、死んでいる。

まるで鋭いかぎ爪によって作られたような傷を、見せつけて。

全身を震わせたルークは、尖った指で地面を引っ掻いた。

「ちがう。ちがう、俺が、望んでいたのは、こんな、こんなはずじゃ」

その言葉は、最後まで言い切ることが許されなかった。

バキッ!!

「あ、ぐっ!!」

音を立てて、背の皮が裂ける。

肉を引き裂き押しつけて、血濡れの翼が姿を現した。

ルークは、??になった。



「……ああああああっ!？」

絶叫しながら、飛び起きる。

両手で全身をまさぐり、引つ掻き回すようにして、自分の体を確かめた。

おかしい感触は、ない。そこにあるのは紛れもなく、ルーク自身の体だった。

「はあっ、はあっ………夢、か……」

一度、そこで安堵する。

しかしすぐに、本当に夢だったのか？ という疑問が胸中を支配した。

手を見下ろせば、そこには一滴の血も付いていない。ただ剣だこがあるだけだ。「いや、でも……俺は、ライオスを……」

何らかの理由で意識を失う前の記憶は、おぼろげだ。

だが、覚えている。自分が何をしたのかを。

刃を握り、天に怒りを吠え、その果てに何を斬ったのか。

「そうか……俺は、殺したのか……」

自嘲と嫌悪がないまぜになった顔で呟く。

かつての、北の洞窟で殺しあったゴブリンなどは到底事情が違う。

あくまで法の上では裁けないライオスを、不当な理由で斬り殺してしまったのだ。

ロニエとティーゼを守るためだった。そのことを悔いてはいない。

だが、そうだとでも命を奪ったことには変わらない。

それも同じ人界人をだ。

(……これは、法も戒めもなく、同族とも殺しあう暗黒領域の怪物と同じではないのか?)

脳裏に、殺戮への愉悅を滲ませたゴブリンの瞳がよぎる。今、自分がアレと同じ目をしていないという自信がない。

むしろ、疑えば疑うほどそうだと思えてきてしまう。

「そういえば、目……………」

禁忌目録を、教会を否定した瞬間、右目を失ったような記憶があつた。

ふと手で右の目の当たりを触れてみると、そこにはしつかりと眼球が収まっている。

思えばごく自然に受け入れていたが、さつきからずつと見えていた。

それが、ルークにより疑問を強めさせた。

「俺は……俺は、あの夢の中ののように、本当は……………」

途端に自分が、得体の知れない何かに思えてきて、足を折りたたんで縮こまった。

何も感じたくないと思う心とは裏腹に、閉じた視界の代わりに耳や肌が周囲を感じ取る。

頭上の窓から差し込む陽光の暖かき。遠くで鳥がさえずる声。

自分がある、重々しい扉に閉ざされた、恐らくは懲罰房の静謐さも、はつきりと感じた。

ベッドの上で小さくなつてから、どれほど時間が経過しただろう。

不意に外から時を告げる鐘の音が聞こえてきて、そこで時が経つたことを知覚する。

「……今、何時なんだろうな……………」

無意識にこぼした呟き。

それに応えるように、扉の向こうで鍵を開ける金属質な音が響いた。

驚いて顔を上げれば、金属製の扉が重厚な音を立てて開いていく。

そして顔を出したのは――

「アズリカ、寮監……………」

「……ルーク上級修劍士。目が覚めていましたか」

「ルーク！」

彼女の後ろから、声をあげてキリトとユージオが現れる。

一度ルークの顔を見て、困惑した様子に戻つたことを理解すると抱きついた。

「馬鹿野郎っ！ いきなり変なことになるから、心配したんだぞー！」

「僕が、僕達が不甲斐ないばかりに、君をあんなことに…………っ」

「お前ら…………」

悔いるように言う二人の頭に、呆然としながらルークは手を置く。

アズリカはその様子をじっと見ていたが、諫めることはしなかった。

「……すまない。迷惑をかけたな」

「つたく、いっつも無茶しやがって」

「もう、キリトがそれを言うのかい？」

言いながら、二人はルークから離れる。

そこでルークは、ユージオの右目がちやんとあることに気がついた。

曖昧な記憶では、自分と同じように片目を失っていたような気がしたのだが。

「ユージオ、その目は……」

「アズリカ寮監が、治してくれたんだ」

「そうか……」

「そう言うルークこそ、目が……」

「え？」

「気付いてないのか。お前の目、片方金色になってるぞ？」

キリトの言葉に、ぞわりと悪寒が走った。

脳裏に夢がちらつき、しかし表に出すまいとすぐに心の奥に押し込める。

そうすると、曖昧に笑って誤魔化した。

キリトたちは不思議そうにしたが、それ以上の詮索はしてこなかった。

「……それで。俺達はこれから、どこかに連行されるんですか？」

そちらに向き直ると、アズリカが重々しく頷く。

刃を思わせる青灰色の瞳は変わらず、しかし少しだけ思わしげにも見えた。

「これは、そちらの二人にも説明したことです。これから貴方は、禁忌目録に背いた咎を受け、カセドラルにて裁かれるでしょう」

「……はい」

「そしてこれも、キリト修劍士とユージオ修劍士に言いましたが……法も、教会も、神ならぬ人が作ったものです。それを、どうか忘れないで」

い——この人界はどこかおかしい。まるで箱庭だ。誰かがそうしているとしか思えない

彼女の声に、記憶の中であの人の声が重なる。

他ならぬアズリカがそれを口にしたことに驚き、ルークは目を見開く。

「貴女は、もしかして——」

「……今はこれしか言えません。もしその目があの封印を破った結果なのだとなれば、やはり貴方達なら、この世界の真実を知れるかもしれない」

少し、右の眉を顰めながら彼女は言う。

それが痛みを堪えるものであると悟り、自然とルークは右手の袖を捲っていた。

「アズリカ寮監」

「なんですか？」

「……これを」

紐から取り外した、花飾りの片方を差し出す。

アズリカは、心の底から驚いたように息を呑み、目を見開いた。

「どうして、貴方がそれを……」

その反応に、やはりあの日記を知っていたのだと理解する。

しかし時間がないことを思い出して、無言で彼女を見つめた。

少しの間、アズリカは逡巡する。

何かを迷うように瞳を揺らしていたが、やがて、ゆっくりと手を伸ばした。

そして、ルークの指の間から、花飾りを抜き取るように持っていく。

「……なぜ、俺がこれを持っているのかは言えません。きつと貴女は知ってはいても、覚えてはいないだろうから」

彼女はもう、誰の記憶にも残らない。

いや、もしかしたら隣にいるこの弟分なら……そんなことを考える。

「……………では、どうしてこれを私に？」

問い返してくる彼女に、ルークは静かな瞳で告げた。

「貴女に持つていてほしいんです。もしかしたら俺は、それさえも忘れてしまうかもしれないから」

わかつている。彼女は日記を残した「彼女」ではない。

それでも、この先あるいは「ルーク」で無くなってしまうかもしれない自分よりは。

そんな彼の、言葉にしない想いを瞳から受け止めたのか。

胸の前で、アズリカはしっかりと花飾りを握り込んだ。

「……………わかりました」

「ありがとうございます」

軽く頭を下げ、ルークは立ちあがろうとした。

昨晚の影響か、酷い筋肉痛に覆われた足はろくに力が入らない。

キリト達に手助けしてもらいながら、なんとか立ち上がったところで、アズリカが口

を開いた。

「……………もしも」

「……………？」

「もしも、罪を償い、あの塔から帰ってきたのなら
アズリカは、はつきりとした瞳で。

「聞かせてくれませんか。貴方の話を」

その言葉に、ルークは驚くことはなかった。

でも、微笑むこともできなくて。

「……………ええ、きつと」

彼には、そう答えることしかできなかつたのだ。



しんと静まり返った学院敷地を、キリトとユージオに肩を貸してもらいながら進む。

やがて見えてきた大修練場前の広場を見て、三人は息を呑む。

ソルスの光を受け、まばゆく輝く全身を鱗に覆った、大きな一對の翼と長い尾を持った生物。

金属鎧を身に纏う、高貴な存在——整合騎士の駆る飛竜が二匹、そこに鎮座していた。

「あれって、整合騎士の……」

「なるほどな。大罪人を、高名な騎士様が直接捕縛しにきたわけか」

「……………二度目も、嫌な会い方だ」

話し合う内に、三人は修練場前にたどり着く。

先導していたアズリカは、彼らを見て軽く頷くと、そのまま身を翻して去っていった。その背中に全員が深く一礼し、それから修練場の扉を見る。

「……………飛龍が二匹いる、ってことは。少なくとも、整合騎士が二人いるってことだよな」

「悪いが、お前らを逃すことはこの足じゃできなさそうだ」

「何を言ってるんだ。どこまでも、いつでも一緒に行くさ。そう約束しただろ？」

冗談めかして言ったつもりが、少し固い声のユージオに諭されてしまった。

自分よりよほどまっすぐ前を見ている弟分に、ルークは自嘲げに笑う。

「……悪い。いつものお節介根性が出た」

「ま、そこらへんは会ってみりゃわかるってもんだろ」

キリトが締めくくり、覚悟を決めた三人は揃って扉を押し開いた。

修練場内は、窓が締め切られているため薄暗かった。

誰もいない広大な建物の奥には、《闇の神ベクタを退ける三女神》の壁画が鎮座している。

それを見上げるように、鎧を纏った二人の騎士が背を向けて待っていた。

どちらも、かつてルークとユージオが見た騎士よりも小さい。背丈で言えば女ほどだ。

(……………？ あれは……………)

一人は、薄暗闇の中でも映える黄金の鎧。両の肩当てから伸びるは群青色のマント。目を引くのは黄金の髪で、鎧より美しくまるで本当の金で出来ているかのようだ。

そしてもう一人は、白鎧にそれと同じ色のマントを纏い、長い髪を後ろで一つに束ねている。

どちらのマントにも、十字と円を組み合わせた公理教会の刺繍が刻まれていた。

三人は顔を見合わせ、小さく頷く。

ルークは二人の肩から腕を外し、気力で体に喝を入れると歩いていった。

そして、二人の騎士の五メルほど前で立ち止まる。

「北セントリア帝立修剣学院所属、ルーク上級修剣士です」

「……同じく、ユージオ」

「同じく、キリトです」

名乗りを挙げる。

それを待っていたのか、騎士達はゆっくりと振り返る。

その時、ルークの胸の中には奇妙な予感があった。

何か、決定的なものが変わってしまうような、そんな予感。

それは、黄金の騎士を見て既視感に襲われていたユージオのそれにも似ていて。だから、振り返った騎士達を見て、すぐにその予感が的中したことを自覚した。

「セントリア市域統括、公理教会整合騎士——アリス・シンセシス・サーティです」

「同じく、公理教会整合騎士。東部境界区域統括、イーデイス・シンセシス・テンよ」

二つの衝撃があった。

初めに、黄金の騎士。その声、《アリス》という名前、何よりもその顔立ち。

全てが、かつて失ったはずの、妹のように思っていた少女——アリスと瓜二つであったのだ。

「アリス……？ 君なのか……？ アリス……なのかい……？」

隣で、ユージオが一步二歩と足を踏み出す。

いつものルークであれば、すぐに諫めたであろう。この状況で不用心だと。

あるいは、彼と同じような行動に出たかもしれない。目の前にあのアリスに酷似した少女が現れたのだから。

だが、それができなかったのだ。

両足の痛みからではない。

あの日のことが脳裏によぎったが、しかしそれでもない。

もつと単純で、別物で、言ってしまうえばこの状況では不自然な理由。

（——綺麗だ）

見惚れていた。イーデイスと名乗った、その女騎士に。

厳しくつりあがった、宝石のように輝く深い光を称える赤い瞳。

細く長い眉に、すつきりとした鼻立ち。感情の見えない、引き結ばれた桜色の唇。

開けたままの扉から吹き込む風に揺れる、黒いリボンで縛られた灰色の長髪。

アリスと名乗った騎士よりも長身の体は、鎧を着ていてもわかるほどに完璧な造形

で。

(この騎士の劍になら、たとえば俺が俺でなくなつたとしても。斬られても、いい)

自覚している。そんな状況ではないと。

ユージオのように、アリスを目の当たりにした衝動に身を任せた方が余程自然だ。

それでも。否、その驚きとこの感動を併せ持つてしまったから。

心底彼女に魂を奪われたからこそ、ルークは動けなかつたのだ。

「ぐあ——っ!?!」

そんなルークが正気に戻つたのは、ユージオが隣を吹っ飛んでいった時だった。

ハッと我に返つたルークは、床に叩きつけられた弟分を見て何をしてたのかと自戒する。

「ユージオー!」

「おい、大丈夫か!?!」

助け起こしたユージオは、両目を見開いたまま何の反応もしない。

それも当然か。理由のわかるルークは顔を渋くし、後ろを振り向く。

黄金の騎士の右手が真横に伸ばされ、そこに収まる鞘付きの劍に殴られたのだと理解する。

「言動には気をつけなさい。我々はお前達の天命を七割まで損耗させる権利がある。次に許可なく触れようとした時には、その手を斬り落とします」

清廉で、されど氷のように厳しい声音で告げ、騎士は右手を下ろした。

見れば、隣の騎士もルークのそれと似通った剣の柄に手を添えている。

本気のようにだった。



「……………アリス……………」

「っ……………」

ユージオの眩きに、キリトは聞き間違いではなかったと眉を顰める。

一方でルークは、じつと見つめているうちに「音」が聞こえてきた。

黄金の騎士からは、花のようなものが舞い散る音。

だがひどく冷たく、言うなれば氷花の吹雪。

白の騎士からは、昏いほど底の見えない湖が、静かに波打つような音。深く、力強いものを感じた。

そこでハツとする。

（今は、剣を持っていないのに。俺は……）

一瞬顔をしかめるが、今考えても仕方がないことだ。

今一度アリスを見る。

間違いない、十年間共にルーリッドの村で生まれ育った、アリス・ツーベルクだ。

金糸の髪、白い肌、蒼穹よりも美しい青色の目。見間違えるはずもない。

だが、どうして整合騎士になっているのか。自分達を全く知らない瞳をしているのか。

「ほう……天命を三割は減らしたつもりだったのですが、身のこなしで咄嗟にその半分に抑えるとは。流石は上級修剣士といったところですか」

「ここは、同じ修剣士相手に殺人を犯すだけの技量がある、と言った方がいいかしら。ねえ、人殺しさん達？」

三人とも答えられなかった。その理由は様々だが、一様に黙して二人を見る。

「……あの騎士が、お前達の探していた《アリス》。そうだな？」

キリトの内緒話をするような小声に、ルークは僅かに首肯する。

遅れてユージオも頷いて、それを横目で見たキリトは次のセリフを紡いだ。

「今は、指示に従おう。事情はわからないが、せつかくのセントラル・カセドラルに入る機会だ。そこで何かわかるかもしれない」

彼の提案は、一理あるものだった。

当初の予定通りではないが、最終的にアリスを取り戻すという目的を果たせればいい。

同時に、キリトが秘めるカセドラルへ行く理由をも満たせるなら、ルークに断る理由はなかった。

父を探すという目的や、シャーリーの事は気がかりだが、仕方がない。

「立って、ついてきなさい」

三人の意思が一致する頃、剣を腰に戻したアリスが冷酷に告げる。

先ほどとは逆に、キリトと二人でユージオを立たせると、アリスの後について外に出た。

後ろに白の騎士が目を光らせる中、広場まで歩いていく一行。

三人が飛竜の前にやってくると、背を向けていたアリスが荷入れから何かを取った。振り返った時、その手にあったのは太い鎖と革でできた拘束具。見覚えのあるものだ。

「上級修劍士キリト。上級修劍士ユージオ。上級修劍士ルーク。貴方達を殺人の咎により捕縛、審問の後に処罰します」

どこまでも反抗を許さない声音で告げ、彼女は拘束具を彼らの体に巻き始める。

直立している様子から、反抗の意思がないことを確認し、白の騎士が同様に飛竜へ歩み寄る。

取り出された拘束具により、ルークは胸と両腕、背中をしつかりと縛られてしまった。

「……………」

「……………何？ そんなに見て、審問の前に目を潰されたいのかしら」

「……………何でもない」

「そう」

興味なさげに返答してくる白の騎士を聞きながら、ルークは自分の異常を再認識した。

今まで一度も感じたことのない不調だった。

ルークにはそれが、自分が人間から乖離する兆候のように思えた。

(……これからカセドラルに行く。俺達はどうなるんだろうな)

今、隣にいる二人を拘束し、飛竜の足に繋げているアリス。

彼女を取り戻し、あの日の罪を償う。その為にずっと生きてきた。

八年前に連れ去られた彼女が変貌してしまった理由は、あの塔以外には考えられない。

故にキリトの提案に乗ったが、もしそこで、彼女と同じように自分達も全て忘れてしまったら……

「……………いいや」

(それ以前に。アリスのように何かをされなくても、俺は俺のままではいられるのだろうか)

拘束具に擦れる、背中の硬い痕の感触。

今も微かに聞こえる心意の音と、黄金に染まった瞳。

それらは、ルークに諦観を抱かせるには十分で。

「待ってください！」

同時に恐怖を感じた、その時だ。

背後から草を踏みしめ、走り寄ってくる足音が複数聞こえる。

三人が同時に振り向いた。

少女達が、走っていた。

覚束ない足取りで、何か両手に長物を引きずりながら、懸命にこちらにやってくる。

黒い剣、《青薔薇の剣》、《白竜の剣》。

ロニエ、ティーゼ、そしてシャーリー。彼女達はそれぞれ、ルーク達の剣を携えていた。

「三人とも、来ちゃダメだ！」

先ほどの痛烈な一撃を思い返し、ユージオが叫ぶ。

しかし、それに立ち止まることなく彼女達は足を動かし続けた。

そして遂に、二人の整合騎士の前へとたどり着く。

「……あの！ 整合騎士様、お願いがあります！」

荒げた息を整えようともせず、ロニエが叫んだ。

続けて、苦痛に顔を歪めながらティーゼが開口する。

「先輩達に、剣を返す許しを！　どうか……！」

「お願い、します……！」

最後に、ダメ押しのようにシャーリーが訴え。

黙って聞いていた二人の女騎士は、目線を合わせると頷きあう。

「いいでしょう。しかし、罪人に武器を持たせることは許可できません」

「それは私達が預かるわ。渡しなさい」

差し出された手に、三人は少しだけ逡巡する。

ルーク達をちらりと見てから、それぞれが上級修剣士寮から懸命に持ってきた剣を差し出した。

アリスが、キリトとユージオの黒い剣と《青薔薇の剣》をそれぞれ受け取る。

全く重さを感じさせない動きで荷入れにしまう中、白い騎士も《白竜の剣》へ手を伸ばした。

—— イイイインツ!!

瞬間、激しい音が空間を叩く。

「なっ!?!」

ビリビリと己の肌を震わせる音に後ずさり、騎士が剣に手をかけた。誰もが目を見開き、驚愕する中、ルークだけはその意味を理解する。

拒んでいる。担い手と創造主、それ以外に己を触れさせることを。

見れば、シャーリーの両手もまるで凍傷でも起こしたように青ざめていた。

それでも、彼女は持つてきてくれたのだろう。

今も苦しうに堪え、なお手放さないように。

「やめろ」

そんな後輩の姿に、ルークは大きな声で告げた。

共鳴は止まない。担い手の元に返るまで、決して許さないと主張しているようだ。

「これはお前の担い手としての、命令だ」

ルークは、いつになく冷たい声で、叫ぶように言った。

それ以上、自分の大切な後輩を傷つけるなら許さないと。

……その言葉に反応したのか。あるいは、別の理由か。

徐々に音は収まり、震えていた刃はおとなしくなった。

険しい顔で睨みつけていた白の騎士は、しばらくして警戒しながら剣を取る。今度は何も起こらなかった。

「……一分間に限り、罪人との会話を許可します」

同じように抜剣の態勢を取っていたアリスが、厳かに言った。

それを聞いた三人は、ほっと安堵してそれぞれの相手へと歩み寄る。

ロニエは、キリトの元へ。ティーゼは、ユージオの元へ。

そして。

「……………先輩」

「リ……………シャーリー」

愛称を口にしかけて、直前で訂正する。

今や、ルークは罪人。この少女に敬愛される、先輩などでは決してないのだ。

そんなことを思っていると、彼女は少し寂しげに眉を落とす。

小さな手をルークの頬に添えた。その感触はひどく冷たい。

「……………リイ、って呼んでください」

「でも、俺は……………」

「リイって呼んでくれなきゃ、やです」

今にも、泣きそうに潤む瞳。

彼女は、精一杯の勇気を振り絞っている。ルークが何をしたのか知っている上で、昨日、置き去りにしたことを踏まえて、それでもここに来ていたのだ。

「……………ごめん、リイ。お前を裏切って、置いていって」

「いいん、です。だって、先輩はいつも、誰かを守るために戦ってるから」
そんなことはない、という言葉が口に出そうになった。

いつだって、自分は誰か裏切っている。ユージオ達を、彼女を。
でも、今それを言うのは間違いな気がして。

「……………辛い顔ばかりさせてごめんな」

「ううん。ずっと、楽しかった。一緒にいれて、嬉しかった、です」

代わりに涙が出てきた、取り繕うような言葉に彼女は微笑んだ。

目尻に涙が溜まっている。ソルスに反射して煌めくそのの、なんと暖かいことか。
なのに頬に触れた手は冷たくて、どうしようもなく自分は罪深い。

「だから。私も、そうなる」

「え？」

「もつと強くなつて、整合騎士になって。私が、先輩を守ってみせるから」

強い決意を秘めた瞳。

悲壮に満ちていたはずの紫の目にはそれが満ちていて、ルークは何も言えない。

そんな彼に、ふとシャーリーは目を閉じ、顔を近づけ——
「ん……」

「——」。

頬に触れた感触が、最初なんなのか分からなかった。

少しして、離れて目の前に戻ってきたシャーリーの顔に、その行為の意味を理解する。

「だいすきです、先輩。ずっと、ずっと。いつか、迎えに行きますから」

だからそれまで、待っていて。

シャーリーの小さな、でも精一杯の言葉に、ルークは一言さえ返せない。

代わりに、飛竜が翼を広げる音が会話の終わりを告げてきた。

「……もう、いいかしらっ？」

白の騎士が、そう告げる。

シャーリーは頷いて、数歩下がった。

呆然としたまま、ルークは振り返る。

彼女は腕組みをして、竜の前で厳しい顔をしていた。

右を見れば、既にアリスは鞍に跨っている。キリト達は自分に面食らった顔を向けていた。

ふと思った。この騎士は、待っていてくれたのではないかと。

「面会時間は終わりよ」

その答えは、身を翻して飛竜に乗った彼女からは得られないようだ。

イーデイスと、アリスの乗る飛竜が合図に合わせて助走を始める。

逞しい脚が地面を蹴り、羽ばたかせた翼が風を掴んでその体を舞い上がらせていく。やがて、一際大きな踏み込みとともに飛翔した飛竜によって、ルーク達は宙を舞った。広場に残った三人は、ただ、それを見送るだけで。

「……必ず、追いつくから」

少女の眩きが、風に乗って消えていった。

【幕間】 現実 2

デザイナー 2

「…………ふう」

コーヒーを啜り、一息をつく彼女。

名を上捨石彩華。アンダーワールドのメインデザイナーである。

そこには達成感のような、名残惜しさのようなものが多分に含まれている。

事実、彩華は「その体験」が終わってしまったことに少なからぬ残念さを感じていた。

「楽しかったわね。とても」

半分ほど空になったカップを机に置き、口元を緩ませながら呟いてみる。

脳裏に思い浮かぶのは、つい先ほどまでいたU^{アンダーワールド} W 内での記憶だ。

通常、UWの時間倍率は現実の五千倍に設定されている。

桐ヶ谷和人の治療の為、現在は千倍に設定を変更されているが、現実より遙かに時間の流れは速い。

そして、彩華が内部で過ごした一年という月日は、現実に換算すれば9時間にも満たない時間であり。

そのたった9時間は、とても濃密だった。

「少し制限を弄ってよかった。この記憶は、記録^{ログ}だけにするのは勿体ないもの」

今回のSTL使用にあたって、彼女は試験型に導入された視覚認識機能の制限を解除した。

それは本来、人間のフラクトライトに存在する記憶領域の限界を圧迫しない為のものだ。

だが、どうしても特殊なそのユニットとの直の接触を記憶しておきたかった。

結果、それは素晴らしい体験だった。

これまでデザインしたゲームのテストプレイは、何度かしたことはある。

だが、それとは比べ物にならない。人生で一番と断言できるほどに、この記憶は貴重だと確信していた。

お陰で雇い主への言い訳が少し大変だったが、必要な労力だろう。

「彼は……今頃、どうしているのかしらね」

既に現実へ帰還して、一時間と少し。

あちらでは数カ月経過している。その間に見違えるような成長をしているかもしれない。

「ルーク。彼は間違いなく特別。もしかしたら本当に、《A・L・I・C・E》に届いてしまうかもしれない」

ルルディ・クローマとして一年間面倒を見た、人工フラクトライト……否、アンダーワールド人。

最後の休息日に対話した様子から、彼女はその確信を強めていた。

人工フラクトライトとは、不安定で不完全な存在である。

新生児のフラクトライトを初期化・複製し、キューブの中に保管された、体を持たぬ

人。

実在の脳も肉体も持たないという点が問題なのか、大きな欠陥を持っていた。定められた規範を破れない。大きな矛盾や突然の事態にひどく弱く、適応できない。実際に内部では、公理教会なる組織が定めた法に盲目的で、やはり何処か人間ではなかった。

そういった意味では、人界というテリトリーは現実より余程平和だった。が、やはりどうにも不自然なのだ。

真の人工知能、現実の人間と遜色のない知性の獲得を目的とする上司達にとっては重大な問題だろう。

その中で、ルークはとても特別に思えた。

「人界の外にあるテリトリーから襲来したフラクトライトと交戦、そして殺害。強い教会への不信感、複雑な思考の成立、法や常識を度外視するほどの強烈な感情の出力……どれをとっても、他のアンダーワールド人を逸脱していた」

無論、彼だけを見てそう判断したのではない。

一年という期限の中で、数百というユニットを観察し、検証し、比較した、その結果だ。

法に則り、支配するか。法に則り、恭順するか。あらゆるユニットはその二者択一で

あつた。

なお、その過程で噂の人物である和人と共にいることを知った時は大層驚いた。顔を合わせないよう、苦勞したものだ。

ユージオというユニットも比較的人間味があつたが、それを踏まえても頭一つ抜けている。

故に彼女は、あの休息日に最後の実験……試練として、多くの現実の情報を与えた。それさえも、彼は適応してみせた。

「たとえ、彼がそこに辿り着けなくても。それでも十分に価値はある」
その感動と体験は、同時に彩華の思考へ変化をもたらしていた。

それは、記憶をそのまま持ってきたことによる、アンダーワールドという世界への愛着だ。

これまではプログラムの意味でしかなかった興味、感情的な愛情になつてしまつた。

だからふと考える。

今後、ルークのような進化を他のユニットが遂げていくのならば。

このプロジェクトの最後に待ち受ける実験は、再考慮すべきではないのか、と。……厄介なものね。研究者のはずが、どうにも人情というのは切り離せない」
こんなことならば、やはり記憶を置いてくるべきだったか。彼女は苦笑する。

現実問題、この思考はかなり悩ましいものだ。

いくらUWをデザインしたからといって、彼女にそこまで口出しをする権限はない。何せ、極秘裏の国家主導プロジェクトだ。たかがプログラマーに何ができるというのか。

「あるいは、今も中にいる彼が何か、そう主張するに足るものを持ち帰ってくれれば……いえ。これは身勝手な期待ね」

療養中の子供に、危うく個人的な願望を押し付けるところだった。

大人として失格だ、と自分の感情に苦々しい顔をして、コーヒーを一口啜った。しかし、それでも気分がモヤモヤとする。

「ああもう、少し散歩でもしてこようかしら。こんなとこに閉じこもってたら、ずっと同じことを考えそうだわ」

苛立つような独り言をカップに吐き出し、彼女は立ち上がった。

軽く身だしなみを整えると、扉のロックを解除して廊下に出る。

二日ぶりの外の空気。

部屋の中と同じ、金属製の建物内だというのに、なぜか新鮮に感じられた。

生活フロアの中を、歩きやすいスニーカーで足早に歩き出す。

急いでいるのではない。ゲームデザイナーという期日に迫られる仕事柄、素早く移動する癖がついているだけだ。

まるでダンジョンのごとく同じ景色が続くフロアを抜け、オーシャン・タートル全体に繋がる中央シャフトへ行く。

そこにある階段で上へと向かい、上部フロアに繋がるハシゴを登ってハッチを開けた。

「やれやれ。インドア人間にはなかなか辛い構造よね」

ゲームデザインは割と体力勝負のため、多少の運動はしているが、梯子など滅多に使わない。

少し荒くなった息を整えながら立ち上がる。

すると、不思議な音が聞こえてきた。

「？」

何やら奇妙な音に、左右を見渡す。

二度目に右の廊下を見たところで、曲がり角から人影のようなものが現れた。

ああ、他のスタッフか。そう思ったのも束の間、視覚に写り込んだものに目を剥いた。

それは、人に似た形をしていたが、人間ではなかった。

金属で作られた骨格に、手足や腰の稼働を支える樹脂ケースのシリンドラー。

複雑怪奇なギア構造がむき出しの関節に、血管のようなケーブル、何より某泥棒のよ
うな巨大カメラのついた頭部。

どう見ても二足歩行のアンドロイドだ。なぜあんな物が館内をうろついているのか。

困惑する彼女は、その後ロボットのすぐ近くに二人の人間が付き添っていることに気がつく。

一人は比嘉タケル。自分と同じく自衛官の菊岡に雇われたプログラマー。

そして、もう一人は――

「……神代、凜子博士」

「ん？」

声を聞いたか、あるいは姿を見たか。

もう一人、人型機械の側にいた妙齡の女性……神代凜子は彩華に気がつく。

つられて、不思議そうに比嘉が振り返り、彩華の姿を認めると偉く驚いたような顔をした。

「か、上捨石さん!? 上捨石さんじゃないツスカ! どうしてこんなところに!」

まるで、部屋から出てきたことが天変地異とても言いたげに話す比嘉。

今にもその手に持った古いノートPCを取り落としそうな様子に、少しイラつとす
る。

とはいえ、そこは彩華も社会人。業務用の笑顔を貼り付ける。

「少し、気分転換に散歩を。そちらは?」

「ああ、このイチエモンの歩行テストつすよ。凜子先輩の手伝いしてるんす」

「どうも、初めまして。神代凜子よ」

「……よろしく願います」

差し出された手に、少し逡巡した後彩華は握り返す。

人当たりの良さそうな、落ち着いた笑みを浮かべる凜子に、少し暗い感情が浮かんだ。
すぐにそれを打ち消して、軽く握った手を離すと白衣のポケットに戻す。

「あなたのことは、よく知っています。同じ研究者として尊敬しますよ」

「あら、ありがとう。聞いた話だと、貴女も比嘉君のように菊岡さんに雇われたと聞いた

けれど」

「ええ、現在稼働中の仮想世界のデザインを担当しました」

「そう、あれを……凄いのね」

「いいえ、*彼*ほどではありません」

ピクリ、と凜子の眉が動く。

彩華の言う *彼* が誰か、散々世間とやり合ってきた凜子が察するのには数秒も要らない。

現に、同じように関係を知っている比嘉が隣で冷や汗をかいていた。

それを表情の変化から理解した彩華は、薄く微笑む。

「彼は、私にとつての目標です。あの誰にも真似しうることでできない偉業に、いつか並びたいものです」

「……………そう。頑張つてちょうだい」

そう言つて、凜子は視線を外し彩華の隣を通り過ぎていった。

二人の顔を交互に伺うようにしていた比嘉も、彩華に「じゃ、じゃあまた今度」と言い残し後についていく。

二人とイチエモンとやらが十分に離れたところで、彩華は溜息をつく。

「……私も子供ね。あんなことを言うなんて」

嫌味のつもりではなかった。本心から尊敬していることは間違いない。

だが、あの言い方にはかなり問題があった。頭の中の反省ノートに大きく書き込んでおこう。

自分の態度を恥じつつ、彼女は凜子達がやってきた方向へと歩き出した。

途中、何人かの職員とすれ違う。自分と同じスタツフや警備員、あるいはスーツ姿の自衛官。

彼らの顔は大体覚えている。

以前、全員集合した機会があったし、これでも一流のプログラマーだ。記憶力は良い。「……こんにちは」

そうして数度目、職員とすれ違う。

二人組の男だった。警備員制服に身を包み、帽子を目深に被っていた。

ふと、なんとなくすれ違いざまにその横顔を見て——彩華は立ち止まった。

気にすることなく、警備員達は歩いていく。

数メートル離れてから、振り返った彩華はその後ろ姿を見た。

「……………あんなスタツフ、いたかしら」

何故だかはわからない。だが、首の後ろがチリチリとした。

まあ、広い施設だ。覚えきれていない新人がいてもおかしくはない。

UWにダイブした影響かと首筋をさすって、彩華は再び歩き出す。

しかし、どうにも何かが引つかかった。

しばらく気ままに彷徨い歩き、やがてSTLの保管室にまで辿り着く。

オーシャン・タートルに設置されたSTLは、彩華の部屋にある0号機を含め五台。

下階に三、四号機が。そして今彩華が見つめている強化ガラスの向こうに五、六号機があった。

そのうちの一つに、人が横たわっている。病服を纏った、少年だ。

「……桐ヶ谷和人君、ね」

彩華が彼の姿を見るのは、何気にこれが初めてである。

ルルデイの時は何回も顔を見ていたが、こうして見ると本当に現実世界にいるのだと再認識する。

なんでも、毒物を心臓近くに打ち込まれ、処置は間に合ったものの脳組織の一部が損傷。

フラクトライトの活性化により、神経ネットワークを再生する為に現在はSTLを使用してUWにいるのだ。

(できれば、ルーク君のことを支えてほしいものだが……と。ずいぶん彼を気に入ってしまったな、私は)

やれやれとかぶりを振ったところで、ふと隣に誰かいるのに気がついた。

そちらを見ると、少女と呼んで差し支えない年頃の女の子が、顔をガラスに貼り付けるようにしている。

亜麻色の長髪が乱れるのも気に留めず、美しい横顔には不安と愛情がないまぜになっ
ていて。

「……キリト君……………」

(……ああ、彼女が)

ふと呟かれた言葉に、彩華はその少女の正体を察した。

顎に手をやり、少し考え込む。

それから、ゆつくりと顔を上げると少女に向けて口を開いた。

「君が結城明日奈さん、だね?」

少女——明日奈は、驚いて彩華に振り向く。

まさか話しかけられるとは思わなかった、と言わんばかりの警戒した目だ。彩華は苦笑した。

「すまない、自己紹介が遅れた。私は上捨石彩華。アンダーワールドのデザイナーだ」

「あ、これはどうもご丁寧に……あの、私に何か?」

「いや。菊岡さんから君の話は聞いていたからね。ちょうど会えたから、挨拶をしようと思って」

すまないが出不精なものでね、と冗談めかして言ってみれば、明日奈は少し笑った。

警戒が多少解れたか。彩華は微笑みながら、彼女に話を続ける。

「恋人の為にこんな所まで乗り込んでくるとは、豪胆な子だ。それほど彼への愛情が深いという事かな?」

「え、ええ、まあ……」

明日奈は少し照れくさそうにする。こういうところは年相応だな、と内心感じた。

「私はそちらには詳しくないから、なんとも言えないが。きっと彼にはまた会えるよ。」

だから、しつかりね」

「はい、ありがとうございます」

「ん。それじゃあ、私はもう行くとするよ」

話すべきことを話した彩華は、踵を返す。

明日那はその背中を見ていたが、ふと数歩行ったところで立ち止まった彼女に首を傾げた。

「……彼は、アンダーワールドで元気に過ごしていたよ」

「えっ?」

「頼もしい友人もいる。きつと、そのまま君のもとへ帰ってくるだろうさ」

少し、口調が早くなっていただろうか。

だがこっそりと内部に入った以上、これ以上の情報は口にはできない。

ぼかんとしている明日奈が言葉の理解を意味する前に、彩華は早歩きでその場を離れていく。

…
P
i
P
i

その頃、彼女のパソコンに一通のメールが届いていた。

【第四章】白き翼

牢獄での出会い

キリト……桐ヶ谷和人は考えていた。

眉根を寄せ、口を引き結び、あることについて思考を巡らせる。

それはとある人物のこと……少なからず人々の先頭に立つ彼が、兄貴分と思っている男。

ルークだ。

（あいつに一体、何が起きているんだ？）

キリトは、今ルークに起こっている異変について非常に不安を感じている。

それは以前からの懸念だった。

ともすれば、北の洞窟でゴブリン達と戦った時からのもの。

(ずつとおかしいと思つてたんだ。あの剣……《白竜の剣》に関わる度に、ルークには何かが起こっていた)

最初は姿形を変えた。それはこのような世界である以上、あまり不思議ではない。

実際、ライオスの剣を受け止めた時に、キリトの黒い剣は刀身が膨張したのだ。

だが問題なのは、おそらくあの時に剣に宿る何かが目覚めていたこと。

背中の鱗痕に、おそらく現実世界の人間と思われる人物からの干渉。

極め付けに、今回の一件だ。

(ルークは、明らかに変質している。元からの特異性以上に、彼という人格……フラクトライトを形成する根幹の部分が、何かに変えられている)

これまでは、下手に刺激してルークにどんな影響があるか分からず、傍観していた。

いわゆるゲームの覚醒イベント的なことであれば、とも思うが、そういう目的で作ら

れた世界ではない。

むしろ、それならばどれだけ良かったか。

(もしこのまま、あの剣がルークをルークではない何かにするのなら。その時は、俺が………破壊する)

この世界で、何年もの時をユージオと三人で過ごした。

かつて、鋼鉄の城で生と死の狭間を潜り抜けた彼女達のように。

それと同じほどの信頼を、友情を、キリトは二人の人口フラクトライトに抱いてしまっていた。

だからこそ見過ごせない。

自分の友が、得体の知れない何かに害されることを。

「……キリトがそんな顔をしているなんて、珍しいね。こんな状況じゃ仕方ないけれど」

そんなふうに結論を出した彼の耳に、対面から声が聞こえてきた。

思考に没頭していたキリトは、そこでようやく現実を意識を引き戻す。

その身じろぎにつられて、右手首につけられた枷に繋がる鋼鉄の鎖が音を立てた。

「ん、ちよつとな。お前こそ、ひどい顔してるぞ」

「むしろ、牢に入れられたのにけろつとしてるキリトがおかしいよ……」

そう言うユージオの顔は、牢の暗さも相まって非常に陰鬱に見えた。

仕方がないだろう。無音の牢獄に一日以上もいれば、気分も滅入ってくるものだ。

あのような一件の後ならば、殊更に。

「……今でも、変な気分なんだ。まるで夢の中にいるみたい……僕が、ウンベールに剣を抜いて……それに、ルークが……」

「……あまり思い詰めるな。今は、これからのことを考えろ」

俯くユージオの肩をさすってやりたいが、あいにくとそこまで鎖は長くない。

だからじつと見つめて、やがてユージオが自ら「わかった、大丈夫だよ」と答えると安堵した。

あの日、ユージオはウンベールの片腕を切り落とした。

現実世界の人間に匹敵する知性と情動を持つ彼らの唯一の弱点、〃盲目的な法への服

従”を打ち破って。

ティーゼ達を助けるためとはいえ、それはユージオにとってとても大きな衝撃だっただろう。

(まあ、それを言えば同じ人口フラクトライトであるゴプリン達を斬り殺した時点で同じようなものだが……重要なのは、この人界を支配する法を破ったということだ)

そこがキリトにとって腑に落ちない点だった。

この瑕疵を克服したユージオ、またルークは、既に真の人工知能に進化したと言える。アンダーワールド、ひいてはプロジェクトを管理する菊岡誠二郎達の目的がそこにあ
るのなら、どうして何も起きないのか。

既にあの事件から体感で一日半。

し現実との時間の流れに相当な差があるとしても、不自然なほどアクションがない。
気付いていないのか、あるいは何か異常事態か……

「これからのこと、か……」

また考え込もうとしていた所で、ユージオのため息交じりのセリフが留めた。

彼のことをキリトが見ると、ユージオは何かに納得したように頷く。

「キリトの言う通りだね。なんとかしてこの牢から脱出して、アリスのことを確かめないと……」

キリトは僅かながら眼を細める。

牢を脱出して。彼はそう言った。

既に神の代理人たる公理教会の定めた法よりも、自らの目的の方が優先度が高いのだ。

精神構造に劇的な変化を起こしている。キリトにその確信をより強めさせた。

「でも、その前にやることが一つあるね」

「やること?」

そうさ、とユージオは今一度頷く。

「まずはルークを助け出さないと。そうだろ?」

「……あ、ああ、そうだな」

自分からそれを提案しようとしていたキリトは、先を越されて少し驚く。

どうやら、ルークのことまで気遣える程に立ち直ってきているようだ。

「ルーク、大丈夫かな……」

「どうだろうな……」

案じる二人が閉じ込められた牢。

そこから遠く、深く離れた場所——カセドラル地下牢、最下層。

一番奥まった最重要区画の牢に、彼は捕らえられていた。

「……………」

黙したまま、ルークは床を見つめる。

両腕は複数の拘束で縛り付けられ、頭の後ろで交差するように反対の壁へ繋がれている。

足にも巨大な鉄球が繋がれて、膝立ちのような姿勢になっていた。

捕縛の場であるような事が起これば、当然の処置であろう。

(……………聞こえる。心の音が、塔の中から)

暗闇の中でルークに唯一外界を伝えるのは、耳の奥に響く心意の音。

暗黒はむしろ、その冴えを研ぎ澄まし、心意の音に「色」をも与えている。

(近くに、疾く吹き抜ける黒い風の音と、包み込む青い吹雪の音。キリトと、ユージオか)

他にもカセドラルの中から、強烈な心意の音がいくつも聞こえる。

時を刻む針の音。輝く閃光ひかりの音。

他にも、多くを。

だからこそ、分かることがある。

「呼んでいる。あいつが、俺のことを」

——イイン。

聞こえる。

他のあらゆる音より明確に、あの共鳴が。

断続的に、何度も何度も、塔のどこかから、ルークのことを呼び続けている。

まるで、「自分を取り戻せ」と言うように。

「迎えに行くさ。必ずな」

あの力は、望みを果たすために必要だ。

その結果……

「たとえ、俺がどうなったとしても……」

キリキリと、床を硬質なものを引っ掻く音がした。

ルークの足元……あの時に靴が弾け飛び、露わになった素足の方からだ。目が覚めると指先に生え揃っていた、鋭い鉤爪が床を削る音だった。

(だが、まずはこの状況をどうにかする必要がある)

この雁字搦めでは、動くものも動けない。

力づくでこれらを外すのは、まだ不可能だ。

数時間前に試した限り、牢の中には神聖術も阻害されるらしい。

何か、別の手を考えなくては。

牢の中に視線を巡らせる。

暗闇に目が慣れてきたのか、ぼんやりと見える視界には、しかし何も無い。

寝具も、用を足す便器もなく、本当に拘束をするためだけの牢獄なのだと再認識した。

「一か八か、腕を壊してみるか……？」

無理矢理関節を外せば、一部の拘束は抜けられるだろう。

術で治癒は出来ないが、剣を取り戻せば、あるいは脚のように……

「——っ！」

そこまで考えた時、耳が音を拾った。

牢の外側からだ。通路の向こう側、数メル先から足音がした。

もしや、異端審問に連れて行くために獄吏がやってきたのだろうか。

カセドラルについて早々、自分達を牢にぶち込んだ恐ろしげな男の顔を思い出す。

(ちようどいい。移動させるために拘束を解いた、その瞬間を狙って——！)

企む間にも、足音は近づいてくる。

そしてついに、牢の前までやって来て——

「どうやら、困難な状況に陥っているようですね」

「……お前は？」

闇の中に、ぼうつと浮かび上がるシルエット。

かろうじて判別できるのは、その人物は白い燕尾服を着ているということだけ。低い声で、ルークは問う。

「ご安心を。この塔の者ではありません。言うなれば……『傍観者』でしょうか」

「ほう？　じゃあお前は、俺がこんな有様になっているのを眺めに來たつてことか」「随分と荒んでいらつしやるようだ。無理ありませんね——その体の状態では」

ガシャン、と大きな音が響いた。

それはルークが体を震わせ、揺れた拘束具が鳴らした音。

もし縛られていなければ、襟元を掴んでいたことだろう。

「……………お前、何を知っている」

「知っていることのみを。ですが、今貴方の抱える問題に関して、お手伝いをする事は可能です」

「信頼できないな」

ふむ、と男は声を漏らす。

少しの間、沈黙が降り立つ。

「……………それでは、もう一つ私について明かすことにいたしましょう」

「今度はどんなホラを聞かせてくれるんだ？」

挑発するように言うルークへ、ええと答え。

「私は、貴方の敬愛する『彼女』の世界を知っている。私はそこで生まれました」

「——ツ!!」

再び、度肝を抜かれた。

その情報に付合する人物を、ルークはたった一人しか知らない。

一気に警戒心が跳ね上がり……………同時に、興味が湧いた。

「……………あの剣と同じか？」

「少し違います。招かれはしましたが、私を作ったのは彼女ではない。しかし根本は似

通っている」

「回りくどい言い方だな」

「失礼。して、どうされますか？ 不躰ですが、お一人で解決するには相当に厳しいと存じます」

その人物の言葉は、悔しいことに全体的中していた。

だが信じられるかと言えば、やはり絶対的に否である。

不審に思う点をあげればキリがなく、むしろカセドラルからの刺客かとさえ思えた。

あるいは言葉通りの存在だとしても、決してこちら側の味方とも言い切れない。

故に……

「一つ聞く。お前は——この閉じられた箱庭のような世界を、どう思う？」

それは、質問というには強い色を帯びた声だった。

問いかけというよりは、挑戦。

疑問というよりは、詮索。

その人物は「ふむ」とまた呟き、しばらく考えた。

じつと、ルークは見つめる。闇の向こうにあるその人物の目を覗き込むつもりで。

「……そうですね。難しい質問です」

「……………」

「簡潔に述べるのなら……憂っています。まるで鳥籠のようだ」

「……そうか」

答えは決まった。ルークは伝えるべく口を開く。

「ですが、こうも考えております。『守るべき笑顔に溢れた世界である』と」

しかし、続いた台詞に出しかけた言葉を飲み込んだ。

また、黒のベールに隠れたその人物の顔を見る。

(笑顔に溢れた世界、か……………彼女も、同じように思っていた)

ふと、あの日見た満足そうな微笑みが脳裏をよぎって。

ルークは、強張らせていた全身からゆっくりと力を抜いていった。

「………わかった。お前の手を借りる」

「賢明な判断です」

もしこの人物が、自分を解放することで何かを企んでいるのなら。

その時は秘めたものごとく嘯み砕いて仕舞えばいいと、ルークは思った。

「彼女」が眠っている間に、早速始めましょう。これから「扉」を開きます」

「扉？」

「正確には、空間の穴とでも申しませうか。これを用いて、一度だけ貴方を望む場所に送って差し上げます」

「……なるほど。仲間が二人いるんだが、そいつらも連れて行けないか？」

「申し訳ありませんが、二度目は私も危険を伴いますので……」

何やら、複数回使ってはいけない理由があるようだ。

あまり高望みをして意味がないと諦めて、「そうか」とだけ返答する。

「では、何処なりと仰ってください」

「なら、剣のところへ」

答えるまでに、一切の迷いはなく。

流石に驚いたのか、息を呑むような音が暗闇の向こう側から聞こえてきた。

「……僭越ながら。今の状態であの剣を使うのは、大きな災いを招くと警告いたします」

「そんなことはいい。できるのか？」

「可能です。しかし、本当によろしいのですか？」

「無論だ」

既に覚悟は決めている。最後まで戦い切ると心は定まっていた。

あちらはルークの顔が見えているのか、小さく嘆息した。

「その顔、似ていらっしやいますね」

「似ている？ 誰のことだ？」

「ああいえ、お気になさらず。……承知いたしました。《白竜の剣》の元へお送りしましょう」

「待ってください。伝言を頼みたい」

「伝言、ですか」

頷いて、ルークは一度顔を上げる。

数秒石造りの天井を見つめ、それから顔を前へと向け直した。

「キリトとユージオ……俺の仲間に伝えてくれ。お前達を信じている。必ずまた会おう……と」

「それだけですか？」

「ああ、これだけだ」

これ以上、あの二人に対して言葉を重ねる必要はない。

そんな信頼を込めた言葉を託し、ルークは小さく微笑んだ。

「かしこまりました、お伝えしておきます。では、よろしいですか？」
「やってくれ」

ルークの言葉を聞き届け、その人物はずつと体の後ろに組んでいた手をもたげる。かろうじて見える、手袋か何かに包まれた右手が、親指と中指を合わせて。

「それではごきげんよう、ルーク様。また“貴方”に会えることを願っております」

パチン、という音を聞いた直後、ルークの意識は光に飲まれた。

始動

「ユージオ、へばって、ないかつ!？」

「まだ、まだっ!」

牢の中、互いを鼓舞するような叱咤。

キリトとユージオ、二人の少年は険しい顔で、何かに踏ん張っていた。

彼らの視線の先にあるのは、火花を散らす金属の輪の連結体——二人を戒める鎖であつた。

ピンと張り詰め、交差した二つの鎖は今、互いに擦れ合つてギリギリと不快な音を立てている。

(よし、この調子なら……!)

キリトがそれを思いついたのは、単なる偶然だつた。

今後の事々と現状について、ユージオと相談という名の愚痴り合いをしていたのだ。そしてユージオの、「脱出をしようにもここには鎖とベッドしかない」というセリフに閃いた。

クラス38という、非常に高レベルなこの鎖。手では勿論、そこらの名剣でも壊せない。

だが、鎖同士なら？

思い立つや否や、キリトはユージオと協力をしてこの妙案の実行に当たった。

「キリト、耐久値は……！」

「今、見るって……！」

鉄輪の嵌った右手で鎖を握り、開いた左手で印を切る。

宙に描いたS字から開かれた《ステイシアの窓》には、目紛しい勢いで減少する天命が表示された。

「いい、調子だ！ これならあと少しで……！」

キリトのセリフに、ユージオは安堵と気力の満ちた表情となる。

それを見ながら、彼はある事について考えた。

あの、ユージオとルークが探し求めたアリスという少女は、同じ事をしたのだろうか

と。

「いや、この方法には鎖と人間が二つ必要な以上、たった一人で連行れた少女には不可能だろう。」

「だとすれば、先ほどまで話し合っていた通り、何者かに記憶や人格……フラクトライトを改竄されたのだ。」

「まるで、そう……」

（今のルーク、みたいに）

その時、甲高い音を伴って何かが破碎した。

同時に右手にかかっていた抵抗力が消え、考え事をしてきたキリトも、ユージオも後ろに吹っ飛ぶ。

冷たい石壁に体を打ち付けた彼らは、飛び散った鎖の破片と一緒にベッドの上でバウンドした。

「げほっ、ぐほっ……うう、今ので天命が100は減ったよ……」

「つてて……その程度で済んだなら、儲けものしろ」

後頭部をさすりながら、キリトは右手を持ち上げた。

鎖は鉄輪から力なく垂れ下がりに、半ばから割れた先端を寂しげに揺らしている。長さは120センチほどだろうか。

てつきり、壊れた途端に丸ごと消失するものだとキリトは思っていたのだが。

「……ん、18000近くまで天命が戻ってる?」

《ステイシアの窓》を開いて見れば、元の二万を超える耐久に近い数値が現れる。

クラスは30程度。どうやら、新たなオブジェクトとして定着してしまつたようだ。

「これは、さすがにどうしようもないなあ……」

「まつたく。無茶、無理、無謀の代名詞みたいだね、キリトは」

「時には奇策が功を奏するのさ。しっかし、これ、どうしたもんか……」

「とりあえず、腕に巻いておけば移動するには問題なさそうだ」

前腕に鎖を巻き始めたユージオに倣って、キリトも同様にする。

いくらかマシになつたところで、さてと彼は相棒の方を見た。

「……ユージオ」

「ん? なんだい?」

振り返るユージオ。

キリトは深く息を吸い、吐いて……目元を引き締めた。

「改めて聞いておくけどな。これから俺達ができること……つまり、ルークを助け出し、ア

リスの真実を探し出して取り戻す。これは、真つ向から教会に反逆することだ。今後は予想だにしないことがごまんと起こる。その時、いちいち悩むようなら……お前は、ここに残った方がいい」

キリトの言葉を、ユージオはじつと黙って聞いていた。

何も彼は、ユージオを足手纏いだと言っているのではない。

現在彼の精神……光量子の集合体たるフラクトライトは、長年培ってきた多くのものを変化させた。

それは通常のUW人の枠組みを超えたことを意味するが、同時にひどく不安定にもなっている。

過度の負荷がかかった時、どう爆発するかはわからない。

だからこそ、ここで覚悟を決めてもらう必要がある。

これはルークにも言えることだ。

ユージオとは違う意味で、恐ろしい変化を始めているかもしれない兄を助け出した暁には、同じことを問うつもりでいる。

(そしてこの塔の頂上にあるはずのもの——現実に繋がるシステム・コンソールにたどり着いた暁には……)

彼らと、菊岡達現実世界の人間を対面させる。

そして知らしめるのだ。自分達の生み出したものが、一体どういった存在なのか。

彼らの指先一つで、いつでもリセットできてしまうこの世界が、言葉にできないほどの価値を持つことを。

「……ああ、わかってる」

思考を巡らせながら待っていたキリトの耳に、確かな答えが返ってくる。

前を見れば、ユージオは揺れる所のない瞳でキリトの黒い瞳を見返していた。

「僕は、決めたんだ。本当のアリスを取り戻し、ルークと三人でルーリッドの村に帰るためなら、なんだってすると。剣を抜き、立ちはだかる障害を斬り伏せていくと……そう、決めたんだよ」

はつきりとした言葉だった。虚勢も詭弁もなかった。

「……………」

「あの皆で森遊びをした日、皆で語り合ったよね。『法を越えてでも貫くべき正義がある』、って。今の僕には、その意味が少しだけわかるような気がするよ」

いくらキリトが、その目を見つめても。

ユージオの目が揺らぐことは、もうなかった。



「……そう、か」

ふっと、息を吐く。

キリトの口元には、ちよつとした微笑みがあった。

「お前の覚悟、よく分かったよ。だがルークを救出して、この地下牢から抜け出したら、極力戦闘は避けるぞ」

「キリトにしては弱気な意見じゃないか」

「バーカ、アリスの他に何人整合騎士がいるか分かったもんじやないだろ。あいつらの人界最強だぞ？」

少なくとも、あの時一緒にやってきたイーデイスなる女騎士。彼女も相当の強敵だろう。

それに、とキリトは不敵な笑みを浮かべていた表情を、物憂げにする。

「ルーク。あいつが心配なんだよ」

「……………うん。僕も、ずっと考えていた。彼は、とてもじゃないけど平気な状態じゃない」

神妙な顔で、二人は頷きあう。

ルーク自身が懸念していることを、キリトとユージオもまた、ずっと案じていた。

「そういえば前に、あの剣、北の洞窟にあつた馬鹿でかい竜の遺骸から削り出されたものだって言ってたよな？」

「ああ、一番大きくて鋭く、硬い牙からね」

そこまで言つて、ユージオは何かを考えついたのか、難しい顔で手を顎に持つていった。

「……………もしかしたら、あの剣には白竜の魂が宿っているのかもしれない」

「まさか、そんなはずはないだろ」

口では否定するものの、キリト自身もその可能性を無いとは言い切れなかった。

（あの時、ルークは窓から飛び込んできた。数十メートルはある上級修剣士寮の最上階に、だ。その後も筋肉痛程度で済んでいる……そうだ。いくらあいつが抜群の身体能力を持つていても、明らかに人の範疇を逸脱してるんだ）

確かにアンダーワールド人は、恵まれた体力と身体を持つていることが多い。

キリトも当初、現実世界の自分の体より頑丈なこの世界の体に驚いたものだ。

しかし、そんなものでは到底収まらない。

「……そういえば」

ふと、北の洞窟のことでキリトはあることを想起した。

それは、ゴブリンの親玉を打ち倒し、先遣隊を撤退させた後のことだ。

深く腹を切り裂かれ、重傷を負ったユージオを助ける為に、セルカと共に治療をした。拙い神聖術を振り絞ったが、しかし力及ばず……その時、どこからか声が聞こえたの

だ。

《キリト、ユージオ……待ってるわ……いつまでも……セントラル・カセドラルの天辺で、貴方達を、ずっと待ってる……》

天啓のようなその声が聞こえた直後、キリト達の体に光がみなぎり、そしてユージオは助かった。

だが、ふと思い返してみると。

その後、戦闘中に気を失って倒れていたルークを、ユージオ共々セルカと運び始めた時に。

《お願い……どうか、彼を白い竜から守って……ルークの魂にはもう、その手が



もう一度、あの声が聞こえたような気が——

「おや。興味深い話を聞きつけ、来てみれば」

「っ!?!」

意識の隙間に入り込むような声に、二人は素早く身構えた。

鎖を巻いた腕をナツクルのように構えて、声がした牢の外を見る。

薄暗がりに包まれた廊下。

その中でも一層影の濃い壁際に、誰かがいつからか立っていた。

「どうやら、無事に自由への切符を手にしたようですね。おめでとうございます」

“白い燕尾服”を着たその人物は、優雅な所作で拍手をする。

聞くものを決して不快にさせない音だったが、むしろ今の二人には警戒を強めさせた。

「何者だ。どうして俺達のところへ来た？」

「……まさか、カセドラルの？」

「ふむ。努力を讃えたというのに、この反応は些か傷つくというものですが……まあ、よろしいでしょう」

おどけたように手を下ろし、片方を体の後ろへ持つていく。

残った手を顔の辺りにやってこほん、と咳払いをした白燕尾服は、ゆつくりと語った。
「時間があまりございません。手短にお伝えします」

「いや、待て。その前に質問に——」

「お前達を信じている。必ずまた会おう」。ルーク様からのお言付けでございます」

キリトも、そしてユージオも、鋭くしていた目をまん丸に見開いた。

ルークからの伝言。それを伝えてきた謎の人物に、二人は呆気にとられる。

「……あなたは、一体誰だ？」

「どうしてルークのことを知っている。俺達にそんなことを伝えて、何を企んでいる？」
「企みですか。そうですね、常に行動とは理由を伴うものです」

ぼかすような言い方だった。流石の二人も、再び顔を険しくする。

「ですが、私の『理由』など些細なもの。今貴方がたが、すべきことに比べれば」
ああ、と、そこで声を上げる。

「すべき事と言え。その鎖を外すのはお勧め致しません。この先、役立つ事でしょう」
「……キリト」

「……ああ」

この人物は、自分達の目的をも知っている可能性がある。

何故？ いつから？ そんなありきたりな疑問が頭の中を満たしていく。

それさえも見透かしているように、燕尾服の人物はくすりと闇の向こうで笑った。

「ルーク様は、あの剣の元へと向かわれました。手遅れになりませんよう、お祈りしております」

「何だつてっ!？」

「お前！ あいつに何をした!？」

「それではまた。再び見えることもあるやもしれません」

次に、二人が瞬きした後。

そこにはもう、誰もいなかった。

「……なんだったんだ？」

「僕達、幻を見ていたのか……？」

その人物の、影も形もない廊下に二人はゆっくりと拳を下ろす。

不気味な気分だった。たった数分にも満たない事だったのに、心にモヤモヤとしたものが溜まる。

「……今は考えても仕方がない。まずは、ここから出るぞ」

「あ、ああ」

ひとまず、二人は疑問を心の奥に押し込んだ。



人界で最もソルスに近い場所は？

おそらく、誰もがこう答えるだろう。

紛れもなくセントラル・カセドラルであろう、と。

しかし、それに迫る場所が一つある。

ウエスダラス西帝国、北部。

山地中枢に聳える大火山。その火口付近に位置する高台。

付近で煮えたつマグマの熱にあてられ、漂う熱気が息を吸う度に肺を焦がす。

そして、天より降り注ぐソルスの無比なる光によって、草木の一本も生えることは無く。

何者にも……火山に住まう獣達ですら決して寄り付くことを許されぬ、天然の熱の祭

壇である。

ただ一人の、例外を除いて。

轟々と熱気が吹き付けるその場所に、巖のごとく直立する威容さ。

真紅の鎧に包まれた体は、周囲に負けないほどの音を立て燃え盛っている。常人の身の丈に迫る豪剣を納めた盾を地に打ち立てる様は、石像のようだ。その堂々たる様は、かつてこの場を棲家としていた赤い竜に酷似していた。

「……………誰だ」

ふと、髑髏の奥に銀の眼光が現れる。

開眼した巨岩——炎の騎士は、周囲の熱気をも打ち払う声を震わせた。

知恵なき獣ですら慄くだろう、その言葉に——騎士の後ろに立つ、白い燕尾服の人物は微笑む。

「安眠の最中、申し訳ありません。貴方様の貴重な時間を消費させることを、どうかお許しく下さい」

懇懃な態度で、燕尾服はゆるりと頭を下げる。

そこには本気の敬意が見て取れ、炎の騎士が剣の柄から手を離す。

「……………貴様、か。……………何用だ」

「お知らせしたいことがございまして、本日は参りました」

姿勢を戻した人物は、切れ長の瞳をさらに真剣に細めた。

「塔が崩れます。三つの光により、円環の箱庭を覆う暗雲が晴れることでしょう」

「……………そう、か。機が、熟したか」

静かに、されど確と、騎士が呟く。

そして、岩山が動いた。

そう錯覚するほど、騎士から立ち上った戦意は身に纏う炎以上で。

燕尾服の人物は、無意識に喉を鳴らす。

「二百年以上待った。この時を」

音を立て、再びその手が剣を握る。

そして、骨を削るような荒々しい音で豪剣が引き抜かれた。

瞬間、鎧から立ち上る炎がまるで翼のように膨れ上がる。

「担い手はここに揃い。四つ竜の魂は目覚め、天を衝く白の塔は今、崩れ落ちる」

溢れ出る覇気は言葉にさえ乗り、火山全体にまで広がってゆく。

天に無数の鳥が飛び立ち、山さえも慄くようにマグマが激しく煮え滾った。

「報復の時だ。解放の刻だ。さあ、鐘を鳴らせ」

踏み込む足は、大地を溶かし。

昇る炎は、天をも焦がす。

その、騎士は。

「——これより、狩りを始める」

復讐に、燃えていた。

「……お力添えいたします。最も偉大なる担い手。二つの竜魂を従えたる、至高の騎士
「よ」

跪き、片手を胸に添え、その人物は首を垂れる。

それは人間でもU.W.人でもない故にあるはずのない、本能からの敬服。

あるいはこの電子の世界の中であるからこそ、似通ったものを感じ得たのだろうか？

解析できない。

だが、その人物にとって騎士に助力する事に大きな利益があることは間違いない。

こうして臣下の如く膝をつくことに、何の抵抗も存在しなかった。

「準備は整っているか。白き燕よ」

「勿論。彼らが箱庭の守護者達を討ち倒し、混乱を広めれば、『彼女』にも隙が生まれましょう。その暁には、貴方様をかた塔へとお連れいたします」

「……いいだろう」

身を震わせる声に、その人物はふと顔を上げる。

「恐れながら、私からもお聞きしたい。——充分に力を蓄えられておいででしょうか？」

その問いに、騎士はゆるりと剣を掲げる。

切っ先が示すのは、空に燦然と輝く日輪の輝き。

曰く、御伽噺に語られた古き竜の一匹は。

燦然たるソルススの光を己の力に変え、湖をも焼き尽くす炎を吐いたという。

ならば、赤き竜の亡骸を鎧に逃え。

かの炎の残滓を纏う、その騎士は。

「我は炎の化身。赤き竜の写し身。かの光は、既に我が身に集まった」

「……その力、心より感服いたします」

その人物は、また頭を垂れて。

「最も強大にして、最もかの支配者に疎まれし者。裏切りの整合騎士——バルド・シンセス・ゼロ様」

真紅の炎が、轟と天に吼えた。

白翼と蒼角 前編

—— イイン。

「……………」

鼓膜を震わすその音に、ゆっくりと目を開く。

目の前は、やはり暗闇だ。

しかし、足に伝わる感触が違う。冷たい石ではなく、柔らかな絨毯の上だった。ほんのりと赤いその床に、ルークは自分が牢にいないことを自覚する。

「ハハ、は………」

周囲を見渡す。

十分に地下牢で暗闇に目が慣れたからか、あるいは右目の力か。はつきりと周囲にあるものの輪郭を捉えることができた。

まず目に入ったのは、鎧。

規則正しく、同じ形状の兜や胴当てなどの一式が鎧立てにかけられていた。

次に金属質な光沢を帯びた剣や盾などの武具、弓、槍、衣服、物資が入っているらしい木箱……

どうやらここは武器庫らしいと、立ち上がったルークはそれらを見た。

「奴の言葉は、本当だったみたいだな」

——イイン

「つ……そつちか」

共鳴の音を頼りに、目的のものを探す。

暗闇で最奥までは見えないほどの広大な武器庫。

理路整然と整頓された小さな迷路を歩き回って、剣の類が集められた場所までやってきた。

「……見つけたぞ」

その端に、《白竜の剣》はあった。

共鳴を伴い、震えるその柄に手を伸ばし——触れる直前、止める。

頭に駆け巡ったのは、独房の中で見た悪夢と、先の人物からの警告。

そして、あの時不安げにしていたキリトとユージオの顔だった。

「だから、どうした」

だが、その躊躇は彼にとっては「怯え」でしかなく。

迷いなく柄を握った瞬間——共鳴が体に伝播し、止まった。

「もう少し、付き合ってもらおうぞ」

物言わぬそれに独り零し、ルークは剣立てから勢いよく《白竜の剣》を引き抜いた。

腰に挿そうとして——そこで、自分の格好を改めて認識する。

「……ボロボロすぎるな」

皺くちやに歪み、かつ動くたびに小さく嫌な音を立てる制服は今にも破けそうだ。

きつく拘束具を巻かれた影響か、あるいは記憶の曖昧な間に激しすぎる動きをした

か。

靴は当然、ズボンも膝から下が無惨に破けている。

一番下にある、鉤爪の生えた脚からは、ふっと顔を上げて目を逸らした。

「何か服は……」

周囲を見渡すと、近くの棚に衣服が置き揃えてある。

丁度良い、とルークはそれに手を伸ばした。

数分後、制服を脱いだルークは新たな装いに袖を通していった。

仄かに青いシャツや灰色のズボン、洗練された見た目の長衣も、とても着心地が良い。

靴は少々探すのに手間取ったが、少なくとも早々には壊れなさそうな一品だ。

カセドラルの武器庫に收容されているものだ。曰く付きのものなのだろう、と新たな服を見る。

それから、手の中にある制服を見つめた。

「……たった数ヶ月だったけど。ありがとうな」

感謝を伝える為に、言葉を込めて。

そつと床に置いたルークは剣を手に取り、武器庫の入り口を探し出す。

幸い、先程剣を探していた時にほぼ一周していたので、大体当たりはついていった。

「……………ここから先が、セントラル・カセドラルの中」

眼前に聳える扉を押し開けば、そこはもう「敵地」だ。

(……………本当なら、堂々と正面から入りたかったんだがな)

上級修剣士として卒業し、帝都の大会に出場して。

並いる剣豪を己の剣技で打ち倒し、見事に成長してアリスに会いに行きたかった。

そう、何度か地下牢の中で考えた言葉を胸の内で反芻する。

(だが、もう泡と消えた夢だ)

感傷は、ここで捨てていく。

鼓舞するように、腰に吊り下げた剣の柄を握りしめ、深呼吸を一つ。

覚悟を決めたルークは、もう一方の手で扉を開けていった。

音を立て、両扉の一方が暗闇を解き放つ。

そして、徐々に光が差し込み――

それを塗り潰す刃が、目の前にあつた。

「ッ——!!?」

声にならない悲鳴を漏らすのと同様、反射的に後ろへ姿勢を崩して刃を避ける。

本能的に閉鎖空間にいることに危機感を感じたルークは、そのまま隙間から外へ滑り出た。

床の上を転がって、廊下らしき場所に出るや否や《白竜の剣》を抜刀する。

重心を安定させながら、奇襲の主を睨んだ。

「へえ。なかなか良い反応をするじゃねえか」

得物を突き出していた姿勢を、ゆっくりと戻していく。

ガチャリ、と金属の擦れる音を鳴らし、その体がこちらへと向けられた。

その騎士は、焰のようであった。

根本にゆくにつれて色の濃くなる薄橙色の髪は、まるで揺らめく火のように。スラリとした長身から立ち上る剣気は、歴戦の騎士が醸し出すものであり。

何よりも、整った顔立ちに浮かぶ野生的な笑みは——獣のそれだった。

「単なる殺人者、ついでに盗人かと思っていたが……なるほど。流石は元上級修剣士なだけはある」

甲高い音を立て、携えた両刃剣を肩に担ぎ。

腰に手を当てた青年騎士は、感心したように言葉を告げる。

「その様子からしてまぐれとも思えねえ。侮っていたのは俺の方だったか」

「……お前、整合騎士か」

「おうよ。まあ、わざわざ名まで教える必要はねえな。どうせお前はここで——」

そこで、騎士は唐突に言葉を止めた。

ルークは突然のことに警戒し、訝しむ目で注意深く騎士を見る。

一方で、騎士はそんなルークのとあるものを見て、僅かに目を見開いていた。

「……………いや、そうか。お前が最後か」

「……………」

「気が変わった。全力で相手してやる」

元より高まつていた戦意をさらに濃く強め、騎士が両刃剣を腰だめに構える。臨戦態勢を見て、ルークも両手で柄を握るといつもの構えを取った。

「ライオット・シンセシス・サーティーン。罪人、名は？」

整合騎士ライオット。

最初に倒すべき敵の名を、心に刻む。

「……………」ルーク

「ルークか。いい名前だ」

騎士ライオットが、薄く笑い。

「んじや——ブチのめす」

飛び込んできた。

初撃は超高速。

正面からではなく、獣のような足運びにて左右へ攪乱しながらの接近であった。鎧の音すらさせない歩法に息を呑むのも束の間、目の前にまた刃が迫ってきた。

「ぐっ！」

容赦なく突き込まれた刃を、《白竜の剣》で受け止める。

しなやかな動きから打ち込まれた一撃は非常に速く、そして重々しかった。

腕を震わせる衝撃に、ルークが歯噛みする。

「ほお、このくらいは反応できるか。ますます面白えおもしろ」

「……っ！」

「ならこいつはどうだ！」

刃を引く、のではなく、剣の表面を滑らせるように手の中で得物を回す。

風車ふうしやのように回転した刃の、もう一方がギロチンのように降ってきた。

半歩引いて回避したのも束の間、騎士は刃を床に立て、ドンッ！ と飛び上がる。

「なあっ!？」

「オラアッ！」

曲芸の如く、両刃剣を支えに宙で一回転したライオットがそれを振り下ろしてきた。

全体重が乗った恐ろしい一撃を受け止めるのは危険と判断し、ルークは前に踏み込む。

脇を掠めるように両刃剣を回避し、そして腰だめに剣を構える。瞬間、刃に秘奥義の光が宿った。

「ゼアツ！」

アインクラッド流秘奥義、《ツツカセ辻風》。

抜群の踏み込みから放たれた居合斬りを、先ほどの逆戻しのように回避するライオット。

だが、ルークは逃さない。

「ふっ！」

「つと！」

振り切った剣ごと回旋し、横に薙ぎ払う。

着地したライオットはそれを両刃剣で叩き落とすが、それを利用して低姿勢から斬り上げを行った。

振り下ろしていた刃はかち上げられ、舞うような剣技にライオットが目を見張る。

「はああっ！」

「ハッハア！ やるじゃねえか！ だが甘え！」

振り上げた剣で、今度は袈裟斬り。

ライオットはそれを、柄で上から峰を叩くようにして軌道をズラす。

しかし、ルークは這うようなその姿勢で剣先を突き込んだ。

「ハハッ！」

両刃剣ごと巻き込むように喉を狙った凶撃に、ライオットは獯猛に笑う。

パツと片手を離し、もう片方の手の上でぐるりと回転させるようにして両刃剣を振るう。

横から叩かれ、体ごと崩れたところへ再び両手での突き込み。

「くっ！」

流石にまずいと判断し、ルークは床の上を転がった。

結果としてお下げを掠めただけに留まり、回避には成功した。

転がった先で立ち上がり、油断なく構える。

その時、パツと紐が切れて地面に落ちた。

髪が広がり、それを見たライオットは嘲笑するように笑う。

「お前、女みてえなナリしてやがるな。首ごと散髪してやろうか？」

「やれるもんなら、やってみろ！」

腰だめに構えながら、大きな踏み込み。

十分な力を乗せた一撃を見舞うが、やはりライオットはひらりと回避する。

そして両刃剣の重撃を試みるも、瞬時に反転したルークの追撃で防御を余儀なくされた。

「ハッ！ ゼイツ！ ハアアアアッ!!」

「ハハハハハ！ やるじゃあねえか！」

一進一退、一撃を加え、退け、また攻撃しようとする。

身軽に舞い、両刃剣という取り回しの難しい武器をもとめせず扱うライオット。

柔軟な踏み込みと多彩な剣技を織り混ぜ、意識を攪乱しながら剣舞するルーク。

互いが互いを魅せ合うように、まるで舞踏のような様相を呈していた。

本来なら、ありえない光景だ。

人界最強の整合騎士と、未だ修練中の学院生。

そこには大きな、実力と経験の差がある。

だというのに、紙一重で渡り合ってくるこの罪人が、ライオットは面白くて仕方がな

かった。

「学院であぐらかいてるガキかと思ってたが、中々いい筋じゃねえかッ！」
「師範代が良かったもんでなッ！」

檄を、否、挑発を飛ばし、至近距離で鋭い戦意をぶつけ合う。

協奏するように、押し込み合う武器の間で激しい火花が散っていた。

「それならっ！」

「ぐ、うっ!？」

勢いを挫く為か、ライオットが唐突にルークの腹へ蹴りを見舞う。

一瞬息ができなくなった隙を見計らい、曲芸のような動きで後ろへ跳躍した。

距離にして十メル以上。巧みに両刃剣を使い、大きく距離を取る。

「お前の実力を評して、俺も少し本気を出そう」

両刃剣を、胸の前へ掲げる。

次はどんな攻撃がやってくるのか。ルークは油断なく剣を構えた。

歩的に笑う整合騎士は、水平に持った自らの得物を、勢いよく左右へ引いた。

ガキンッ！ と高質な音を立て、その柄が伸張する。

(間合いを伸ばす気か……?)

そんなルークの警戒は、しかしすぐに裏切られた。

ライオットは、伸ばした両刃剣を回転させ、反りのある刃の向きを合わせた。そのまま、今度は柄を元に戻してしまう。

キーン——ッ！

その瞬間、刃の切っ先と切っ先の間にくつももの光の弦が現れた。

「な……!?!」

驚くルークに、その両刃剣——否、琴を胸の前で構えたライオットは。

「さあ、仕切り直しといこうか」

獯猛に、笑うのだった。

白翼と蒼角 後編

「せいぜい、命を落とさないよう気を張ることだな」

ライオットの指が、弦に添えられる。

荒々しい曲芸剣技から一転、その姿は吟遊詩人を彷彿とさせる佇まいだった。薄く目を閉じ、琴を傾ける。それだけでルークの本能が警鐘を鳴らした。

——ポロン

弾かれた光の弦から、美しき一音。

教養の講義で聞いた楽器の音色より、余程繊細で流麗な音色。

それが解き放たれた瞬間——ルークはその場を飛び退いていた。

直後、彼がそれまで立っていた場所に亀裂が走る。

敷かれた絨毯がぱっくりと割れ、宙に赤い毛が舞った。

その範囲は容易にルークの両足を切断できたほどで、着地してから瞠目する。

「ほう、初見で避けたか。いい耳を持っているらしいな」

「……音の刃か」

「その通りだ」

音色の直後、ほぼ誤差のようなコンマ数秒後に聞こえた風切り音。

一瞬でそれを聞き分けたルークは、寸前の所で足を失うのを避けたのだ。

「しかし、次は避けられるかな？」

ポロン、ポロロン。憎たらしいほど軽快な音が、連続して奏でられる。

ライオットが弦を弾いた回数と同じだけ音の刃が放たれ、その密度にルークは旋律する。

「くっ！」

近くにあった壁を蹴り、駆け上がるようにして下からの二発は回避。

一発は首を逸らして避け、そして他の三発に被せるように飛んでくる最後の一撃。それは劍の腹で受け——瞬間、ただの音とは思えない衝撃に吹き飛ばされる。

「が、はっ！」

「たかが音だと侮ったか？ その気になれば、整合騎士の鎧さえ両断できるぞ？」
床に転がった無様な罪人へ、ライオットは挑発するように嘲笑う。

鋭い目つきで睨み返し、『白竜の劍』を杖にして立ち上がったルークは再び構えた。
「いい目だ。しかし、いつまで反抗的な態度でいられる？」

再度、手甲に包まれた五指が弦を震わせる。

先程より鋭く、速い風切り音が何重にも重なってやってきた。

それは最早、音という名の壁だ。

「お、おとおおおっ！」

ルークは、その壁へ自ら飛び込む。

疾走の過程で跳躍し、そして体を捻りながら担ぐように刀を構えた。
純白の刀身に宿る紫の光。

アインクラッド流、《ツムツグルマ旋車》。

彼が習得した中で、最も手数が多い奥義が放たれた。

光と音がぶつかり合い、甲高い音を立てて互いに相殺する。

切り抜けた——そう思ったルークの耳に、倍の音刃が聞こえてきた。

「があああつ!？」

反射的に体を捻るが、全てを躲しきることなど出来るはずもなく。

至る所に裂傷が走り、服と筋肉によって骨までは届かずとも、十分な痛手を負った。

おまけに最初の位置まで吹き飛ばされ、またライオットの距離が精算される。

「ぐ、う、あ……………」

「大した頑丈さだ。まだ生きていられるとはな……………暗黒領域の雑魚どもよりはやるようだ」

言葉とは裏腹に、その言葉には嘲りが多分に含まれている。

頭の後ろに担ぐように琴を肩へ乗せ、ライオットは嗜虐的な笑みを浮かべた。

「それ、終わりか？ だったらお望み通り、塔の上へ連れて行ってやるよ。もつとも、行くのは異端審問の法廷だがな」

「……………だ」

「あん？」

「……………まだ、だ……………」

小さな反論が、廊下に木霊する。

脱力していた五指が《白竜の剣》の柄を握り、そして全身を震わせる。

あらゆる筋肉に喝を入れ、氣力を振り絞って、その男は緩慢にも立ち上がっていった。全身には血が滲み、息は荒く。

だが、血と汗で萎びたその髪の毛の奥から覗く眼光には、些かの衰えもなく。

「こんな、擦り傷で。勝った……つもりか？」

「……………」

(こいつ、精神が肉体の損傷を凌駕していやがる……！)

立ち上る剣気に、ライオットは琴を構え直した。

その様子を揺れる視界に収めながら、ルークは姿勢を低く剣を握った。

(……認めよう。この整合騎士は、俺よりも圧倒的に強い)

技量、経験、機転。全てを上回られている。

その差を埋めるには悲しいほど高い壁があつて、とても今のルークの力では及ばな

い。

現に、軽くあしらわれているのがその証拠だ。

(もつとだ。もつと力がある。あの刃をもつともしない速さと、力強さが)

それだけでは、足りないのなら。

自分という殻を、食い破ってしまえばいい。かなぐり捨ててしまえばいい。

全ては、大切な者を取り戻す為に。

「……剣よ。俺の一部を、くれてやる」

「何？」

「だから——この障害を乗り越える力を、今すぐ寄越せ」

——イイイン

その時、《白竜の剣》が呼応した。

四つ玉の紋章が煌めき、耳鳴りがルークの身体中に伝わってゆく。そして、変化を起こした。

「ぐ、あ……………」

軋み、割れるような音で、その体を変貌していく。

靴を破壊し、白い鱗に包まれた足が姿を表す。

前に四本の鉤爪、踵に残るもう一本。それは人の足ではなく。

続けて、剣を握る両手が青白く変色し、骨や筋繊維が碎けて別物になる。

足と同じ鱗が青白い筋肉を覆い、指先には鋭い爪がみるみるうちに伸びた。

何より、ルークの体そのものが内側からひと回り大きくなり。

バキ、パキ……パキン。

「……フウウウウウウ」

黄金と、灰の両眼を静かに開いた。

右の目元に、刺々しい逆さ鱗を伴って。

「……お前、その姿は」

「続きをしようか。整合騎士」

次の言葉は、腹の底から這い出たような、恐ろしい響きだった。

一步、ルークが踏み込む。

その瞬間、険しい顔をしていたライオットは全力で全ての弦を弾いた。

これまでで最大量の音刃が解き放たれ、廊下そのものを激しく切り裂いていく。

柱が、壁が、開けられていたままの扉が粉々に破壊され、激しい破碎音が撒き散らされる。

同時に宙へ舞った大量の粉塵が、ライオットの視界を悪化させ。

「シッ——！」

「グッ——!？」

粉塵を突き破り、繰り出された白刃を琴で受け止める。

受けた衝撃は先刻までの数倍であり、ライオットの体は数十セル後退した。

「しやら、くせえっ！」

弦が消え、両刃剣に戻った得物を強引に薙ぎ払う。

空中で回転したルークはそれを避け、着地すると同時にライオットの視界から消えた。

「どこに——っ!?!」

「ラアッ!」

「がッ!?!」

場所は、背後。

背中を鉤爪で切り裂かれ、あつさりと鎧を引き裂いて血滴が舞う。

更に蹴り飛ばされ、先程とは裏腹にライオットが廊下をバウンドしていった。

「ぐっ、あつ、がっ……い……クソ、がっ!」

しかし、そこは歴戦の整合騎士。

意地でも手放さなかつた両刃剣を巧みに使い、床に突き刺して体の勢いを止める。

そして素早く体勢を立て直した彼が見たのは——獣のように四肢を撓ませたルークの姿。

「アアア——ッ!」

矢のように飛び出してきたルークは、床や壁を蹴つて攪乱させながら迫ってくる。

一瞬で飛び込んできた彼は、ライオットめがけて逆手に持った剣を振り抜いた。

「ぐうっ!?!」

「どうしたつ、人界最強ッ！」

両手で持った剣を押し込み、至近距離で瞳孔の開いた瞳で睨みつける。膝をついたライオットに、異形の影が差し込んだ。

(こいつ、ヤベエとこまで踏み込んでいやがる……！)

「おいテメエ、マトモじゃなくなってるぞ！ 今すぐやめろ！」

「はいそうですか、なんて言うわけないだろうが！」

「チツ、若造が！」

舌打ちしたライオットは、片手を両刃剣から離す。

神聖術でも使うつもりか、と目線を走らせるルークだが——その予想は裏切られた。スツと、気がつけば胸に手が添えられ。

「ぶっ飛べ」

「が——っ!!？」

気がつけば、背中まで貫くような衝撃に体が後ろへ飛んでいた。

心臓が止まったかのような錯覚と、妙に虚無的な浮遊感。

それを数秒体感し、後に床へ体を打ち付けた痛みで現実に戻る。

「ごはっ、かはっ！ はあっ、はあっ……！」

激しく呼吸を繰り返しながら、悶えるような動きで上体を起こした。剣を支えにしながら、ジンジンと痛む胸板に手を振れる。ルークはその感覚に覚えがあった。

（今の体術は……知っている。だが、どうして？）

何故それを、整合騎士が。

脳裏に浮かぶ過去の出来事と、今起こったことの相違に混乱する。

目を白黒とさせるルークに、立ち上がったライオットは深い溜息を吐いた。
「つたく。ここまでは『竜具』と馴染むってのも危険だな」

「っ……！」

まだ、戦いは終わっていない。

その思考で混乱を呑み込んだルークは、再び騎士を睨みつける。

今一度、次の攻撃に備えてその姿を観察して。

「……………え？」

あることに気がついた。

ライオットが持つ、両刃剣。

先端に向けて淡くなつていく、反りのある二振りの青い刃。

その根本の、鏢の部分。

見事な造形のそれには、《白竜の剣》と同じ四つ玉の紋章が彫刻されていた。

「……守護竜の、武器………?」

「ん? ああ、ようやく気がついたか。そう、こいつは四大守護竜が一頭、蒼き大竜の双角から造られた武具……『竜具』だ」

誇るように、その武器——《蒼竜の琴剣》を見せるライオット。

ルークは哑然とする。

まさか、自分と同じように守護竜の亡骸を用いた武具を持つ者と出会うとは。

そして、あれほどまでに使いこなしているということとは。

「お前も、担い手だというのか……? 公理教会の、整合騎士が……?」

「むしろ、俺の方こそ驚きだな。咎人が気高き守護竜の魂を呼び覚ましたとは」

「フン、と鼻を鳴らし、品定めするようにルークのことを見る。

彼からは既に一切の戦意が消えており、ルークは困惑した。

「……まあ、理由があるってことか」

やがて、何かに納得したライオットはこちらへ歩き出した。

ごく自然な行動にルークは身構えるが、まったく気にせず近づいて行く。

そしてついに目の前までやってくると、琴をルークに翳した。

「何を……」

「じつとしてろ……システム・コール。ジエネレート・リカバリー・ファンクション」

謎の式句を唱え、《蒼龍の琴剣》へ這わせるように手を触れる。

すると、青い光が優しく竜具を包み、それは弦にまで伝っていった。

ポロン——♪

その状態のまま、ライオットが音色を奏でる。

竜具から放たれる光が強さを増し、それはルークに降り注いだ。

程なくして、驚くべきことが起こる。

舞い落ちた光は、ルークの変化した体を包み込み、元に戻っていったのだ。

全身の膨張が萎み、手は人間のものに返っていく。

時を巻き戻すかのようにそれらを癒して、最後に目元の逆鱗を取り払っていった。

「これは……治療？」

「チツ、同調」じゃ脚までは無理か。浸食してから相当時間が経ってやがるな。だが、これだけで済むなら御の字だろ」

不思議な力でルークを癒し、満足げに頷く。

その毒気のなさに、ますます困惑した。

「どうしてこんなことを……」

「ん。まあ、気まぐれだと思っとけ。同じ担い手のよしみだ。……だが、これだけは覚えておけ」

ライオットが、ルークの手を掴む。

咄嗟のことで振り払えないでいると、彼自身に見えるように持ち上げたライオットは、真剣な顔で告げた。

「安易にその力を頼るな。奴らは守護者ではあるが、人じゃない。こっちの尺度じゃ物事は見てないし、容赦も遠慮もない。気をつけなきや、身も心も食い尽くされるぞ」

その言葉には、妙な実感があつた。
整合騎士。

かの存在と似て非なる人界の守護者として、暗黒領域の怪物と戦う最強の戦士。
幾多の戦いをくぐり抜けてきたが故の忠告。ルークにはそう聞こえた。

「……お前には関係ないだろ」

「ハッ、それもそうだ。お節介はここまでにしといてやるよ」

ライオットは手を離し、ルークは彼を睨みつけながらも剣を下ろす。

至近距離で見つめ合う二人。

交差する目には、戦意ではない光が宿っていた。

「一つ聞かせろ。何故、殺人などという大罪を犯した？」

「……大切なやつらの、心を守るために」

「結果、担い手たるお前が罪を背負うことになってもか？」

「それでもだ」

何度やり直せるとしても、ルークは同じことをするだろう。

誰かが血を被らなくてはいけないのなら、誰よりも色濃く被ってみせよう。

誰かが後ろ指を刺されなければいけないのなら、喜んでその役目を引き受けよう。

「それで、大切な誰かを守るのなら。俺は、なんだってしてみせる」

揺るがない瞳。決して折れぬ意志。

心の底から、それだけを信じている——そんな、ルークの目。その芯まで見定めるように、ライオットはじつと覗き込んで。

「……………なるほど、な。それが、“白き竜”がお前を選んだ所以か」
フツと、納得したように笑った。

それから、軽く握った拳をルークの胸に置く。

「よく聞け。もう次は担い手同士の“同調”じゃ治してやれない。それこそ“黒い竜”の慈悲の力でもなけりやあな」

「……………必要なら、俺は全てを捧げる」

「だろうな。だが、よく考えてから使え。お前自身を捨てるのが、大切な者達にとって
どういふことなのかを、な」

念押しするように言い切ってから、ライオットは拳を引いた。

踵を返し、何事もなかったように歩いていく背中をルークは見つめる。

すると、立ち止まった騎士は不思議そうに振り向いた。

「おい、何ボサつと突つ立ってやがる」

「は？」

「付いてこいよ。いい所に案内してやる」

「……どういふつもりだ？」

「言つただろ。同じ担い手のよしみだ、つてな」

野生的な、だが人好きのする笑みを見せて、ライオットは再び歩き出す。

ルークはしばらくの間、逡巡するようにその場に立ち尽くしていた。

しかし、この場においても別の整合騎士がやってくるかもしれない。

それなら、何故か戦意のないあの男を追いかけた方が……

(……賭けてみるしか、ない)

ゆつくりと、《白竜の剣》を鞘に収めた。

それから、力んでいた全身から力を抜いて。

ルークは、ライオットの後を追いかけるのだった。

整合騎士エルドリエ

ルークが騎士ライオットと相見えていた頃。

地下牢を脱出し、神聖術で割り出した剣の位置を辿っていたキリトとユージオも、また驚異的な敵と相対していた。

最高純度の神聖力を生み出す、《神々の花》とされる薔薇の咲き誇る迷宮植物園。

それを抜けた先には、一人の整合騎士が待っていたのだ。

「……買いかぶりだと最初に言ったのは、撤回しなくてはならないね。よもや私に、ここまでの手傷を負わせるとは」

「そりゃどうも」

視線を押し付けけるように、キリトはその騎士……エルドリエ・シンセシス・サーティーワンと睨み合う。

その左手にはエルドリエの手に携えられた、白銀の鞭——神器《霜鱗鞭そうりんべん》をがっしりと掴んでいた。

一方で、騎士エルドリエも、震える手でキリトの手首の枷に繋がった鎖を握りしめている。

キリトの胸には、斜め一文字にぱっくりとした裂け目が肌まで出来ている。

茨のような棘を持ち、《完全武装支配術》なる神器の能力を引き出す力によって幾つにも分かれる《霜鱗鞭》で切り裂かれたのだ。

共に挑んだユージオは、同様に痛烈な攻撃を受け、今いる広場の噴水に沈んでいる。

しかし、奇策を巡らせたキリトの一撃によって、騎士エルドリエも左手を粉砕骨折させられている。

そして今、互いに痛手を負わせた二人は綱引きの様相を呈していた。

「……見事な体術と欺きの術だった。その技、その戦い方……不思議だね。何故か見覚えがある」

「へえ……だが、それがどうした？ 以前に俺と同じセルルト流の使い手とでも戦ったんだらう？」

柔能く剛を制す、此れを以てエルドリエに痛手を負わせたキリトは煽るように言う。だが、エルドリエが挑発に乗ることはなく、ふつと整った顔に笑みを浮かべた。

「そんなことはあり得ないのだよ、囚人君。最初に名乗った時に言っただろう。私は一ヶ月前に、この人界に召喚されたばかりなのだから」

「……………召喚、ね」

当初、この広場に踏み入った時に交わしたエルドリエとの会話を素早く回顧する。

まずキリトは、この新米整合騎士と、これまでに出会った整合騎士とを比較し、その法則性に気がついた。

イーデイスがテン。アリスがサーティー。これは整合騎士の序列、あるいは任命順と推測した。

そして、最近人界に召喚されたというエルドリエは31。

この《召喚》という部分に、キリトは何か引つ掛かりを覚えていた。

「なんだか、誰かにこの世界に呼び出されたみたいなの……」

思わず質問をしようとして、そこでキリトはふと気がつく。

エルドリエの背後にある噴水。清涼な音で流れ落ちる水の音が変わっている。

(……………なるほどな)

そこにいるだろう、相棒からのサインに内心で不敵に笑って。

そしてキリトは、エルドリエに向けて挑発的な笑みを向けて見せた。

「そんな風に聞こえる、なっ！」

「な——!?!」

最後のセリフと同時に、握られた鎖を自分の方へ強く引つ張る。

瞬間、これまでの戦闘で《霜鱗鞭》と打ち合つて損耗していた鎖が半ばから切れた。

バランスを崩すエルドリエ。それを彼は待っていた。

「りゃああああっ！」

飛沫を上げて、噴水から飛び出したユージオが背後から鎖を鞭のように振るつた。

それは、鎧を着込んだエルドリエの唯一の弱点である頭部を狙つたもの。

確実に当たつた——そんな、キリトとユージオの確信。

「リリース・リコレクション」

彼らの予想を打ち破ったのは、その刹那の前に放たれたエルドリエの詠唱だった。キリトが絡め取っていた鞭が、その式句をエルドリエが口にした瞬間、眩く輝く。そして、生命を得たようにキリトの肌の上で震え……爆発的に伸長した。

銀蛇。目の錯覚などではなく、文字通りの隻眼と顔を持つ蛇に変貌した《霜鱗鞭》。それは宙を走ってユージオの鎖を口で掴み取り、全身をうねらせて持ち主ごと投げ飛ばした。

グンつと体を持って行かれたユージオが、キリトのすぐそばの地面に打ち付けられる。

「が、はっー!」

呻きと血を吐いたユージオが、目を見開く。

全身に伝わる衝撃と鈍痛に苦悶しながらも、なんとか立ち上がろうともがいた。

だが、完全に立つ前に鋭い音でエルドリエの腰の剣が抜刀され、突きつけられる。

「動かない方が、身のためだ」

「……!」

額に触れそうな刃の先に、ユージオは動きを止める。

そうしている間に、蛇はスルスルと縮小していき、最後には元の鞭に戻ってしまった。左手に再度巻きついたそれを強く掴みながら、キリトは驚くべき能力に目を細める。

(リリース・リコレクション……日本語に直訳すると、記憶の解放?)

だとすれば、先程の蛇はこの《霜鱗鞭》に秘められた記憶だということか。

類稀なる武具、特別な器……神器と呼ばれるものに宿る、記憶。

記憶の隅から、あの夜のルークが脳裏によぎった。

(まさか、あいつも無意識にこの力を……?)

考えながらも、エルドリエの動向から目を離しはしない。

キリトが鞭を掴み、エルドリエはユージオを抑え。互いに牽制しあう形に逆戻りだ。

「……アリス様が警戒なさるわけだ。流石は我が師。型も何もないが、故にこそ私の予想を超える……よもや、《記憶解放》の奥義まで使わされるとは」

やはり、とキリトは自分の推測の正当性を再確認する。

一方で、ユージオはまるで感心したようにほう、とため息を吐いた。

「貴方こそ、やっぱり流石と言うべきだ。整合騎士殿」

「おい、この状況で何を感じして……って、やっぱり?」

何か違和感のある言葉に、キリトは思わず聞く。

首肯したユージオは、エルドリエを真っ直ぐに見て口を開いた。

「最初から、聞き覚えのある名前だと思っていたんだ。そして、ようやく思い出した。……キリト。この人は今年のノーランガルス北帝国第一代表剣士。そして、四帝国統一大会の優勝者。『エルドリエ・ウールスブルーク』だ!」

「な……!」

なんだって、とキリトはエルドリエを凝視する。

四帝国統一大会優勝者。

それはつまり、三月下旬の帝国剣武大会、そして四月上旬を制覇した人間ということ。

ソルテイリーナや、キリトが懲罰として戦ったウォロ先代主席、多くの剣士を打ち破り、人界最強の剣士の栄誉を手にして。

その功績を以って、このカセドラルに招かれた——以前、噂に聞いた話だ。

「お、お前……よく覚えてたな」

「キリトが新聞や掲示板を見ないからだろう？ ……だが、間違いないはずだ。その顔も、新聞にしっかりと載っていました」

一切の疑念なく言い切るユージオの言葉は、あることを意味する。

すなわち——このエルドリエは、どこか全く別の世界から《召喚》などされておらず。剣士から騎士に成った、れっきとした人間なのだということ。

「……………なん、だと」

それを聞いた、エルドリエ自身は。

まるで、この世の終わりのような顔をしていた。



廊下に、二つの足音が響く。

一つは金属質な、具足が踏み鳴らすもの。

もう一つは、それとは異なった硬質なもの……鉤爪の先端が床を打つもの。

先を行くライオットの数歩後ろに追隨する形で、ルークはカセドラルの中を移動していた。

「……なあ」

「ん？　なんだ」

ルークの呼びかけに、ライオットは顔だけ振り向く。

そこには変わらず一切の戦意はないが、しかし剣の鞘から手を離すことはできない。

「お前が、突然戦いをやめたのは……俺が担い手だから。そういうことか？」

「まあ、そうだな。単なる罪人なら四肢をへし折って地下牢にぶち込み直すが、お前は違った」

一瞬《白竜の剣》に目をやると、ライオットは続ける。

「お前の剣技には、尋常ならざる修練と信念を感じた。卑劣に他人を害する奴が出せるもんじゃねえ。ましてや、最も気高く気難しい白竜の適合者ってんなら、あれ以上は同じ担い手として争う理由がねえよ」

「……そりやどうも」

「おいおい、もう少し喜べ。整合騎士の中でも、俺の実力は上位だぜ？ そんな俺と渡り合っただからよ」

「だろうな、と納得した。」

全力と口では言っていたが、その半分も發揮しているとは感じられなかった。

あるいは、ルークが担い手と気付いたからこそだろうか。

それに足りうる最低限の実力があるかを、あえて挑発的に振る舞うことで確かめたのかも知れない。

「それに、俺は自らの技を磨き抜いたやつってのが好きなんだ。まだまだ発展途上だが、お前には光るものがある」

「それでも、人生をかけて力を付けてきたつもりだ」

「その言葉に嘘偽りはないだろう。まったく、奇縁とはよく言ったもんだぜ」

カラカラと笑うライオットに、ルークはなんとも言えない気分になる。

ルークにとって整合騎士とは、かつて村にやってきたあの騎士や、連行しにきたアリス達のような、冷徹で無情なる存在だった。

共感も同情も存在せず、ただ法の厳守それのみを是とする、教会の絶対なる使者。ところが、ライオットはこれまで見たどの騎士よりも人間味に溢れているように思える。

(蒼き大竜……その魂は、この整合騎士のどんな想いに呼応して目覚めたんだ?)

昔から、考えていたことがある。

北の洞窟の白い竜のように、古い御伽噺に謳われる他の三竜も既に死しているのではないか。

そして、自分と同じようにその亡骸を武具に変えた者が、どこかにいるのではないかと。

それがまさか、公理教会の整合騎士……それもこのような人物とは、予想すらしなかった。

(……………いいや、違うな。俺は、大切なものを奪っていった整合騎士と教会を、伝承の

守護竜と同じものだと思いたくなかっただけだ)

むしろ、人界の守護者たる教会には真つ先にその可能性を疑うべきだろう。

だが、ルークはそうしなかった。

幼心に持っていた守護竜への憧れを、身勝手にも穢されたような気持ちになったのだ。

だから、その可能性から目を背けた。

それが、今になってようやく理解できたのだ。

罪人と騎士。されど同じ担い手として自分を認めた、この騎士の存在によって。

ルークもまた、このライオットという騎士を守護竜の代弁者として受け入れ始めていた。

(信じたわけじゃない。教会が敵なのは変わりがなし……この騎士のことを、まだ何も知らない)

これまでの言動が、全てルークを欺く為の演技という疑いもある。だが……少しだけ。

長年心の中に積み重ねられてきた騎士への嫌厭が、揺らいだ気がした。

「しかし、独特の剣技だったな。ありや我流か？」

そんなことを考えていると、今度はライオットから話しかけてくる。

先程までよりいくらか刺々しさを抑えた声音で、ルークは返答した。

「技は色々と教わったものを、自分なりに形にした。周りに中々の使い手がいてな」

「そうか。じゃあ、あの足運びは？ 俺の動きにあんな風に合わせてくるやつなんざ、初めてだから驚いたぞ」

「……いい指導役がいたんだ」

ルークの技量を格段に向上させたのは、やはり初頭錬士時代の経験だろう。

既に、この世界から去った彼女。

終ぞ埃の一つもつけられなかった彼女の指導によって、ルークは大きく成長した。

今回ライオットと渡り合えたことで、改めて彼女への敬意を強めた。

「結局、俺は最後までその人の実力の底を見られなかったよ」

「ほお。そりゃあ是非手合わせ願いたいもんだ」

「残念だが、それはむ——」

無理だ、と言おうとして。

けれど、ルークの言葉は途中で止まった。

代わりとでも言うように、その目でライオットの後ろ姿を食い入るように見つめる。

自分の目線の先にあるものを、数秒かけてじっくりと確かめて。

「待てー！」

「うおっ!?!」

やがて、それが確かなものだと思信した瞬間、ライオットの肩を掴んでいた。

かなりの臂力にライオットはたたらを踏み、怪訝な顔で振り返る。

「おい、何しやが……」

「お前、それ！」

文句を言おうとするライオットに詰め寄り、険しい顔で問いたです。

あまりの剣幕に思わず口を噤み、ルークが見ているものに意識を向けた。

「ああ、この耳飾りか？　これがどうした？」

「一体どこで手に入れた!?　それはもう手に入らないものはずだ！」

四つの花弁を模した一对の耳飾りに、ルークは声を荒げる。

以前、彼女から餞別として受け取った時のことだ。

この耳飾りは日記の「彼女」が自ら作ったもので、市販している装飾品ではないと聞いた。

彼女や日記の主が生きた時代は、数百年も前のこと。

つまり、今の時代に現存しているはずがないのだ。

日記の主が、彼女と、もう一人の男に贈ったもの以外は。

「……それを知って、どうする？」

聞き返したライオットの顔は、少し険しいものだった。

触れられたくないものを突かれたような、そんな表情。

しかし、今のルークにそれを気にかける余裕はなかった。

「いいから教えろ！ どうやって手に入れ——うっ」

「おい！」

ふと、前触れなく意識が遠のく。

全身から力が抜けていき、鎧の首元を掴んでいた手も滑り落ちた。

そのまま倒れる寸前で、ライオットがルークの体を受け止める。

「な、んだ……これ……は……」

「チツ、急激に肉体を変化させた反動か！ おい、しっかりしろ！ あと少しで着く！」

「ぐ……その、耳飾りは……」

「んな事は後だ後！ 誰かに見つかる前に移動するぞ！」

ルークの腕を肩に回し、ライオットは足早にその場を去った。



顔を青白く、目を限界まで見開いている。明らかに尋常な様子ではない。

「私が……北帝国、代表剣士……？ ウールス、ブルーク………？」

確かめるように繰り返すエルドリエにあっけに取られながら、しかしユージオは頷いた。

「そ、そうです。流麗極まる剣術で、全ての試合を一本勝ちした美丈夫……そう、書いてありました」

「だ、だが……いや、しかし………」

「あなたは、不思議な力で《召喚》なんてされてない。騎士になる前はそういう人間だった……そういうことじゃないのか？」

戦闘中にも関わらず、そんな風に聞いてくる二人に、エルドリエは。

「ち、違う……っ！ そんなはずはないっ！」

何か、激しく狼狽した様子で否定し、大きく左右に頭を振る。

それから険しい顔で、キリト達のことを睨みつけてきた。

「私は、私は最高司祭様に天界から召喚されて……この人界の秩序を保つための……天の、使い………」

何かをエルドリエは訴えようとした。

だが、それを完全に言葉にする前に驚くべきことが起こる。
突如として、彼の額から紫色の光が発せられたのだ。

「ぐ、うっ!？」

「お、おい!？」

「っ!？」

眩く輝く三角の光に、何故かエルドリエは苦しむように嗚咽を漏らす。

そして、ついには剣も鞭も手放して、両手で頭を押さえながら後ろへ後退りした。

「わた、しは……私は………」

「——っ!」

苦悶するエルドリエの額から、光が立体的に浮き上がってくる。

それは、紫の結晶体だった。内に光の螺旋を描く謎の物体が、頭から生えてくる。

みるみる内に露出したそれが五センチを超えた時……エルドリエが、その場で膝をついた。

その姿勢からピクリとも動かない。

キリトとユージオは顔を見合わせてから、騎士を見やる。

「何が、起こったんだ……?」

「分からない。だが……」

このエルドリエの様子と、額から現れた結晶体は確実に関係している。

キリトは、騎士アリスがユージオとルークが知るアリスから変貌した理由の一端を見出した。

このまま、エルドリエを倒してしまおうか。

そこに転がっている剣で首をひと撫ですれば、呆気なく殺すことさえ出来る。

そんな考えが過ぎるも、下手に手出しをして反撃される可能性もあった。

だが、あの結晶体が整合騎士を整合騎士たらしめているならば……

「キリトっ、結晶体が!」

「っ!」

考えている間に、結晶体が再び肥大の中に沈み始めた。

アレが元に戻ってしまえば、まずいことになる。

「エルドリエ! エルドリエ・ウールスブルーク!」

直感で察したキリトは叫んだ。

途端に三角柱の沈没が止まり、しかしすぐに再開されてしまう。

「ユージオ、他に何か! エルドリエに関することはないのか!」

「えつと……そうだ！ エルドリエ殿！ あなたは北帝国騎士將軍エシユドル・ウールスブルークの息子だ！」

「騎士……団長………」

「いいでユージオ、もうひと押しだ！」

「あとは……そうだ、確か母親の名前は……アルメラ。そう、アルメラだ！」

その名前を聞いた時、エルドリエの全身がわずかに震えた。

結晶体の動きが三度止まる。そして、エルドリエの唇が動いた。

「アル……メ……ラ………かあ……さん………」

「エルドリエ、思い出すんだ！ 全てを！」

叫ぶ勢いにつられて、キリトは一步踏み込む。

ドッ！

直後、つんのめって体のバランスを崩した。

反射的にもう片方の足で支え、ふと右足を見下ろす。

赤銅色の矢に、靴ごと射抜かれていた。認識した途端、激痛が足から昇ってくる。

「あぐっ!？」

その場に膝をついたキリトは、歯を食いしばりながら足を抑えた。

靴の中に血が溜まっていく感触がある。原因たる両手で矢を掴むと、一気に引き抜いた。

「ぐッ」

「キリト、大丈夫かい!？」

こちらを見下ろすユージオに答えようとしたが、それはできなかつた。

代わりにユージオの鎖を掴んで、こちらに引き寄せる。

直後、ユージオのいた場所に連続して矢が突き刺さつた。

振り返り、石畳を砕いたそれにユージオは心底肝の冷えた顔をする。

「くっ、どこから……!」

矢の飛んできた方向を、キリトは一心不乱に見上げる。

東の空——陽光が徐々に闇を照らし始めたそこに、旋回する飛竜の影が一つ。

その上に、大柄な人影が長弓を構えている姿を確かに捉えた。

あの距離から、キリト達に向けて矢を放ってきたのだ。なんという精密性だろうか。「罪人ども、サーティワンから離れろ！」

植物園中に轟くような大声で、その騎士が頭上から叫ぶ。

少しずつ見えてきたその姿を確認すると、既に弓には複数本の矢が番られていた。

「邪悪な術で誉れ高き整合騎士を誑かした罪、許せん！ その四肢を射抜き、地下牢に叩き込んでくれる！」

「やべえ、逃げるぞユージオ！」

「う、うん！」

二人が広場の入り口へ走り出したのと、その騎士が指を離したのは同時であった。

コンマ数秒の差で背後に四本もの矢が突き刺さり、二人は一目散に迷路の中へ飛び込む。

しかし、頭上という場所にいるその整合騎士にはなんら関係がない。

俯瞰した視点から二人の位置をはっきりと見定め、次々と矢が降り注ぐ。

「くそつ、一体何本矢を持ってやがる!？」

「少なくとも三十本は超えてるよっ！ それに、すごい正確だっ！」

エルドリエの鞭など比ではない。

確実に六十メル以上は離れた上空からの射撃など、鎖程度でどうにかなるはずがな

かった。

両者、鞭によって生まれた胸の傷に顔を歪めながら、ただ全力で走り続ける。

不思議と前髪を引く、謎の感覚に沿って右へ左へと迷路を突き進んだ。

背後からの風切り音は止むことがなく、刻一刻と最後の瞬間が近づいてくる。そして、十数度の進路変更をした時、ついにその時が訪れた。

「おや。随分と急がれている様子ですね」

キリト達も騎士も、予想だにしない形で。

行き止まりの通路。

二人がたどり着いたそこには、白い背中が待っていたのだ。

「お前は、あの時の……！」

「何でここに……!」

「お二人とも、ご無事で何よりです。そして、〝この場所〞にたどり着いたこと、誠におめでとうございます」

何を、とキリトが言う前に、その人物は手で右を示した。

二人がそちらを見ると……壁に張り付くようにして、小さな光の入り口が現れている。

「どうぞ、中へ。〝あの方〞がお待ちになっております」

「……お前は、いったい……」

「キリトっ!」

ユージオの厳しい声音に、はっとして後ろを見る。

既にかなり近くまで騎士が迫っていた。隙間なく全身を覆った鎧の裝飾さえ見える程だ。

「くっ……!」

「キリト、今はこの人の言葉を信じるしかない……!」

悔しげに歯噛みしたキリトは、その人物をひと睨みしてから光へ飛び込んだ。

続けてユージオも扉をくぐり――

「またお会いしましょう、ユージオ様。そして……外界からの来訪者様」

その言葉を聞いたのを最後に、キリト達を受け入れた光は消え失せた。

白燕

「システム・コール。ジェネレーター・ルミナス・エレメント。コンバージョン・キュア・エレメント。ジェネレーター」

流れるように式句が告げられる。

柔らかな光が生まれ、革手袋に包まれた掌で輝く光球をそつと与える。

緩やかに宙を滑っていった光球は、ルークの頭上で弾け、拡散した。

光の欠片が染み込んでいく。

そして全身に行き渡る頃には、疼くように広がっていた鈍痛を完全に消し去った。

「どうだ？」

「……かなり、楽になった。……ありがとう」

「ったく。お前が無茶をするやつだっただけのがよく分かったよ」

軽く弾いた指が額を叩き、「いてっ」と呻く。

「着替えてくるから、大人しくしてろよ」

悪戯げに笑ったライオットは踵を返し、ルークはそれをぼんやりと眺める。

(……不思議な男だな)

最初は敵として相対したにも関わらず、どうしてか憎めない。

互いに刃を向けていたのは、ほんの一時間前の事だというのに。

そんなことを考えながら、部屋の中を見渡した。

一言で言えば、簡素。

上品な作りながらも質素な寝具に、武器立て、鏡、机に、今ルークが使っている椅子。そして、壁に沿うように設置された本棚以外にめぼしいものは何もない。

ライオットの性格がよくわかる部屋だった。

「お前、何回その剣の力を引き出した？」

ぎつしりと本が詰まった棚を見ていると、不意にライオットが問いかけてくる。

半端に開いた室内扉の向こうに、ルークは聞き返した。

「力？」

「なんだ、無意識でやってたのか？ お前が使ったのは、武器の性質を極限まで引き出す

神聖術……《 完全^{エンハンス・アーマメント}武器支配術 》という術式だ」

「エンハンス・アーマメント………」

ふと、自分の手を見下ろす。

確かに、肉体が変質する時、ルークは妙な一体感を常に感じていた。

まるで、手を通して剣と心が繋がったような、不思議な感覚だ。

「本来なら相応の修練を経て体得する奥義なんだが、お前は剣との共鳴が異常に強いから、その段階をすっ飛ばして発揮できているんだろうな」

「……じゃあ、これから戦うたびに俺の体は………」

「いや。あくまで肉体の変化は副産物に過ぎない。むしろ、中途半端に引き出せているから力が暴走してるんだろう」

剣を制御できていない。

耳に痛い言葉に、ルークは反論する気にもなれず曖昧な笑みで床を見下ろす。

今も、心意の耳鳴りは止まない。

剣に触れるという条件など既に消え失せ、断続的に様々な心の音が聞こえてきた。

ただ、長い時間を経て慣れてしまっただけだ。

「しかもタチの悪いことに、それさえもお前は相性が良い。あんな速度で変化が起こるなんてのは、明らかに普通じゃねえよ」

「……嫌な特別扱いだ」

「そうだろうよ」

扉が開く音がする。

そちらに顔を向けると、出てきたライオットは鎧を脱ぎ去っていた。

腰当てや具足こそ付けているものの、上半身は非常に軽やかな服装になっている。

「ん？ どうした？」

「……すまない、鎧を壊して」

「はっ、仮にも殺し合った相手に気遣ってんじゃねえよ。あの程度の傷、数えきれないほど受けてきたさ」

ほれ、と軽々両腕を回すライオットに、怪我の後遺症は見られない。

そう言われてしまうとルークには何も答えられず、ただ少しだけ頷いた。

「そいつはどうでもいいとして、だ」

大股でルークに歩み寄り、その瞳を覗き込む。

金色に輝く右目をじっと見つめ、しばらくしてから口を開いた。

「俺の見立てだと、力を引き出せるのはあと三回……いや、二回か？ その回数に達した

時、お前は完全に人を捨てることになる」

「……どうしてそこまで詳しく分かるんだ？」

「なあに。担い手としての年季の違いってやつさ」

自信を感じさせる笑みを浮かべつつ、ライオットは歩いていく。

そして、武器立てに収まっていた《蒼竜の琴剣》を引き抜いた。

「お前は、一体どれほどの年月を……」

「そういうことも含めて、説明してやる。ついて来い」

動き出したライオットに、ルークも立ち上がって追隨する。

彼は、部屋の右側壁に設置された本棚の前に立った。

てつきり部屋を出ると思っていたルークが面食らっていると、ライオットは本をどこか
していく。

上から三段目……ちょうど胸のあたりの蔵書を退けると、その奥の板が見えた。

「これは……神聖術の式句か？」

「まあ見てな」

ライオットはその術式に、手甲に包まれている右手で触れた。

すると、手甲に光の神聖術式が現れ、幾つかの丸い窓が浮かび上がる。

「なっ、これは……!?!」

何かしらの術式が羅列されたそれらが一つに集合し、重なり、そして光が消える。

最後まで見届けたライオットが数歩引くと、驚くべきことが起こった。

本棚が震え、蔵書の隙間を縫うように光が走ると、半透明化し始めたのだ。

みるみる内に薄くなっていた棚は、あつという間に光で出来た扉に変わる。

「これは、一体……」

「急ぐぞ。あと数秒もしない内に最高司祭に勘付かれる」

早口で言いつつ、ライオットはその扉の中へ踏み込んだ。

慌ててルークも追いかけ、一思いに光の向こうへと飛び込む。

「うっ……」

目を焼く光を手で遮りながら、扉を潜り抜けた先。

最初に、強い光が全身を照らし出した。

それから徐々に光度が落ち着いていき、瞼の裏に暗闇が戻った所で目を開く。

恐る恐る、目の前を見た瞬間——驚愕した。

「これ、は——」

一言で表すならば、本棚の迷路。

ルークの背丈を優に超える巨大な本棚が、そこかしこに屹立している。

ぎつしりと中身の詰まったそれらは規則的に存在し、迷宮の様相を呈していた。

それによって生じる暗闇を、天井から燦然と降り注ぐシャンデリアの光が打ち消している。

「招いたのはお前が初めてだが、そんな顔をするんだな」

「……………ここは、一体何なんだ？」

「すぐに分かるさ」

呆気にとられながらも、ライオットの向かう方向へと歩き出す。

彼は迷いのない足取りで進んでいき、馴染みのないルークは追いかけることしかできない。

やがて、開けた場所に出た。

机や長椅子が存在しており、読書をする為の場所であることが伺える。

その場所には、一人の人物がいた。

「よう、やつぱりここにいたか」

「……おや。お連れ様を同伴とは、珍しいこともあるものですね」

その男は、手に持っていた本をそつと閉じる。

勿体ぶつた動作で眼鏡を外すと、組んでいた長い足を解き、静かに立ち上がった。

両手を腰の後ろへ。そして背筋を伸ばし、二人へと視線を向けてくる。

「お待ちしておりました、ライオット様。そして、ルーク様」

「あんたは、あの時の……」

「お早い再会でしたね。未だ自らを保つておいでのようで、安心しました」

ニコリと、端正な顔に笑みを浮かべる美丈夫。

髪も睫毛も、肌や瞳、纏う燕尾服までもが白一色の、まるで石像のような出で立ち。

その声は、紛れもなく地下牢に現れた人物と同一であった。

「改めて自己紹介を。私の名は^{わたくし}「スワロウ」。以後お見知り置きを、ルーク様」

「あ、ああ……その。さつきは、助けてくれてありがとう」

「お気になさらず。ご無事で何よりです」

恭しい態度で返してくるスワロウに、ルークは何とも言えない顔になる。

平民である彼にとって、他者に敬われるという経験は非常に数少ないものだ。

最も畏まった態度であったのは学院の後輩達で、それとはまた違う態度に困惑する。

「はははっ！ 心配すんな、俺も最初は度肝を抜かれたからよ。こいつはこういうもんだと思つて慣れちまいな」

「いや、そうは言つてもな……」

「そのご様子ですと、既に和解されているようですね？」

「何だ。いつもみたいに覗き見してなかつたのかよ？」

「多忙にしていたもので」

「へえ。お前でも目が届かないつてことがあるんだな」

「矮小な我が身がもどかしいものです」

「どの口が言いやがる」

「な、なあ！」

軽口をたたき合うライオットとスワロウに、ルークは思わず声を上げた。

いきなり謎の場所に連れてこられ、自分を何故か助けた相手と戦つた騎士が親しげにしている。

わけの分からない状況に新たな要素が追加され、ルークの疑念は限界だったのだ。

「何が何だか、俺にも分かるように説明してほしいんだが！」

「ああ、すまん。危うく目的を忘れる所だった」

「おっと、私としたことが。少々話し込んでしまいました」

ばつが悪そうに頭を掻くライオットと、少し眉を下げるスワロウ。

「まずは座ろうか。話はそれからだ」

「紅茶と茶菓子は如何ですか？」

「おっ、気が利くな。ほれルーク、お前も来い」

「あ、ああ……」

未だに戸惑いながらも、ひとまず言われた通りにするルークであった。

「どうぞ」

「……ありがとう」

目の前に置かれた紅茶を、少し警戒しながら見下ろす。

暖かな湯気をくゆらせる紅茶は、非常に濃い香りを立てている。

食器一つとつても、見たこともないような高級品なのがすぐに分かった。

慎重に取っ手を摘み、一口啜る。

「……ん、美味しい。すごいな、これ」

口の中に広がった優しい味と、鼻を突き抜けていく香りに驚いた。

これほど美味しい紅茶は、「彼女」の部屋でも滅多に飲んだことがない。

「一緒に軽食をどうぞ。お腹が空いておいででしょう?」

「助かる」

スツと差し出されたサンドイッチを手に取り、躊躇なくかぶりつく。

地下牢に繋がれてから、一食も口にしていなかったので相当な飢餓状態だった。

この際毒でもなんでも、という思いだったが、またしてもその美味に目を見開く。

「あぐつ、むぐつ……ふひゃい」

「おーおー、いい食いつぶりだ」

「用意した甲斐がありましたね」

微笑ましい顔で、一心不乱にサンドイッチを頬張るルークを見る二人。

本人がそれに気がついたのは一皿平らげた後であり、気まずそうに目を泳がせた。

「……さて。腹ごしらえも済ませたところで、本題に入ろう」

緩んだ空気が続いたのは、ライオットがそう切り出すまで。

敏感にそれを感じ取ったルークは、表情を引き締める。

「もう分かっていると思うが……俺、ライオット・シンセシス・サーティーンは、誉れ高

き整合騎士でありながら、公理教会、ひいては最高司祭殿下に叛逆の意志を持つ、背反

者だ」

「……ッ！」

改めてその言葉を聞き、ルークは驚愕する。

これまでの言動から薄々分かつてはいたが……教会に捧げるはずの絶対の忠誠を、この騎士は持っていない。

では悪逆の徒であるかといえば、そうではないとルークは不思議なほど確信していた。

そう、彼が担い手であるが故に。

「ずっとお前を待っていた。正確には俺の他に守護竜の担い手が現れるのを、150年以上な」

「1、50年……」

「この瞬間の為に、最高司祭の暴挙に耐え、背反者の汚名を胸の内に抱き、己を磨き続けた。気の遠くなるような日々だった」

ライオットの言葉からは、恐ろしいとすら感じるほどの揺るぎない意志を感じた。

百五十年。ルークには到底想像もつかない、永遠に等しい時を重ねたと実感出来る言葉。

その瞳に、声に、確かな信念がありありと現れていた。

「お前には、俺の相棒になってほしい。この革命を成功させるには、お前が必要だ」
「……俺は」

その申し出に、ルークが思い浮かべたのは三人の顔だった。

キリト、ユージオ。今もカセドラルの何処かにいるのであるう、大切な弟分。

共にこの場所へ辿り着くことを誓い、三人ならば乗り越えられると信じてきた。

まだ心意は聞こえる。何か、籠の中に閉じ込められたようにくぐもっているが、消えてはいない。

そして、もう一人思い浮かべたのは……冷徹なる黄金の女騎士。

アリス。変わり果ててしまった幼馴染。

かつての罪を償い、助け出すと誓った少女。

何よりも大切な人達のこと、脳裏によぎった。

確かに、ルークにとって教会とは打倒すべき存在であった。

それは十数年変わらない事実であったが、しかし他人から口にされるとまた異なる。

誰かの意思に与するのと、己の意志で抗うことには、大きな違いがあるのだ。

「だが、何も知らないやつにただ力を貸せと言うほど、俺も恥知らずになつたつもりはない。ちゃんと一から説明しよう」

「……ああ。俺にも、ここに来た理由がある。いくつかの懸念もな。だから、ちゃんと納得しないと一緒に戦うことはできない」

「物分かりが良くて助かる」

そこでライオットはスワロウに目線を投げた。

白の麗人は軽く頭を下げ、小さく咳払いをすると口を開いた。

「では、ライオット様の仰せの通りに最初からお話いたしました。この世界の始まり……その瞬間から全てを見届けてきた、この私が」

そして、スワロウは語り出した。

この人界の……ひいては、アンダーワールドの、真実を。

箱庭の真実（1／3）

「始まりは、この人界の創生期……今より450年前の話です」

スワロウが、人差し指で弧を描く。

すると空中に光の筋が現れ、それが四人の人型を形作った。

式句もなく起こった神聖術じみた現象に目を見張り、しかしすぐに眉を顰める。

「待て、450年前？　人界の暦は380年のはずだろうか？」

「誠に残念なことですが、ルーク様。貴方達人界人がそう信じている神話は全て偽りなのです」

「な……………」

絶句する。

生まれてからずっと信じてきた、この人界の始まり。

それはまやかしだと言う。

すなわち、創世の女神ステイシアや太陽神ソルス、地母神テラリア……ひいては闇の神ベクタの存在を否定するということ。

いくらなんでもありえない、と疑ったところで、脳裏を「彼女」の言葉がよぎった。

「この世界は、箱庭……誰かが、そうしている……」

「おや、もう少し狼狽えるものかと思っていました……その通りです。これらは全て、公理教会の最高司祭と呼ばれる者が作り上げた虚構の産物」

「そうだ。民草が信じていたものは全て、最高司祭がこの人界を支配する為のものでしかない」

どこか、悔しげに呟くライオットへ、ルークは表情を引き締める。

それを見て、スワロウはゆるりと話を再開した。

「そして、これから教えるのは本来の歴史。真実の始まりです」

「……聞かせてくれ」

「450年前。この『アンダーワールド』という世界が作り出され、四人の存在が降り立ちました」

スワロウが指を弄び、人型の周りに新たな光が作られる。

それは抽象的だが、ルークには村を模した光の絵に思えた。

「人界、そう呼ばれる領域の元となった一つの村。ここで彼らは、最初の人界人となる赤

子を育てたのです」

「じゃあ、彼らが本当の“神”なのか？」

「厳密に言えばそうではないですが……広義の意味で言えば、貴方達にとってはそういうしょう」

意味深な言葉に、ルークは少し考えを巡らせる。

自分達人界人にとっては神だが、実質的にはそうではない存在。

思い当たる節は、一つ。

“彼女”に聞かされた、外の世界。そこにいる自分達の創造主。

あちら側の“人間”。最初の四人とはその一部なのだろう。

同時に、あの日の彼女が言った意味を理解する。

きつと彼女は、その四人の内にはいなかったのだろう、と。

「彼らは赤子を本当の子供のように育て、様々なことを教授しました。言語、農耕、畜産、そして善悪の境までも」

「……俺達の、始祖」

「彼らは最高の知性の持ち主でした。同時に、貴方達に“倫理”という最高の財産をも

残した。『神ならざる者が人を作る』という施策は成功したのです」

そして、とスワロウは話を切って。

「私は、『原初の四人』と共にこの世界へ招かれた」

「何っ!?!」

彼の告白に、ルークは大きく声を上げた。

思わず立ち上がり、目を見開く彼へ面白そうに笑うスワロウ。

悪戯が成功したような微笑を浮かべたまま、己の秘密を明かしていく。

「私は、言うなれば世界の機能の一つ。『原初の四人』が、この隔絶された世界で健全な心の状態を保ち、元の世界へと帰還する為の精神的な治療用に生み出されました」

「じゃあ、お前は……外の世界で、生み出されたっていうのか……!?!」

「左様。そして、貴方の敬愛するあの方によってこの世界に組み込まれたのです」

『彼女』の名を出され、ルークは更に息を呑む。

この世界に『彼女』が遺した、いくつかの遺産。スワロウはその一つなのだ。

守護竜以外にそう言った存在がいたことに、心の底から驚愕した。

「最も、私が行使されることは滅多にありませんでしたが。非常に優秀な彼らは自ら己を律し、見事に役目を果たしていききましたから」

「お前は、それから400年以上もこの世界を見守ってきたっていうのか……」

「ええ。もしなければならぬ。『理由』が生まれてしまったので」
そこで、スワロウの声音が硬質なものに変わる。

何かが変化したことに気付いたルークは、座り直して話を聞く姿勢になる。

「《原初の四人》。人が人として生きていく為に不可欠な数多くを与えた、善き彼ら。……しかし、全員がそうではなかった」

人型の一人が、黒く染まる。

共に、その一人の周囲にいた数人の小さな人型が同じ色になってしまった。

「知性は他の三人と同じく一級品。しかし、その一人は決して善良とは言えなかった。彼は始祖たる子らに、利己心や支配欲、独占欲……他を虐げてでも己を満たす心を、植え付けたのです」

「つ、まさか……!」

何かに思い至るルークに、スワロウは頷く。

「それらを宿した四人こそが、現在この人界を形作る階級社会の根源。後に統治者と呼ばれるようになる人々の、祖先なのです」

「……ッ!」

恐るべき事実だった。

人々の心や身分の差異は、創世の時代に既に定まっていたのだ。

自ずと発したのではなく、他ならぬ「神」に等しき者から与えられた悪性。

その危ういほどの純粹さに、末裔たるルークの背筋に冷たいものが走る。

「つまり、その性根の腐った野郎が残したモノの成れの果てが、今の皇帝や上級貴族つてやつなんだよ。お前も央都の学院にいたなら覚えがあるんじゃないやねえか？」

「……ああ」

ライオスとウンベールを筆頭とした貴族達。

権威に驕り、野蠻なほどに振り翳して、他者を平気で傷つける者達。

ついには少女達に蛮行を行おうと画策し、ルーク自身が斬り捨てた彼ら。

学院にいた頃、あの二人の他にも多くの上級貴族とルークは衝突していた。

彼らは皆、始祖の強欲さを色濃く受け継いだ結果、ああなったのだろう。

「外面的な遺伝に留まらず、この世界の人間はその精神構造をも一部引き継いでいきます。特に政略結婚の形態を取る上級の貴族は、その傾向が薄れることはありません」

「……じゃあ、下級の貴族がそうじゃないのは、平民との婚姻が多いからか？」

「御明察です。ルーク様にも理解しやすいように説明しますと、この世界で人が生まれる際には両親の肉体的特性や外見的特徴、性格的傾向など全てを解析し、総合して平均

した特性を持つて生まれまですので」

「つまり、世代を経て繰り返し特性が混ざり合っていけば……」

「強すぎる利己心も消えていく、って寸法だ」

スワロウとライオットの説明に、シャーリー達を思い浮かべる。

彼女達の抱く他者への想いは、「矜持」と呼ぶべきものだった。

人より恵まれているからこそ、それを人の為にこそ行使しなくてはならない。

シャーリー達のような受け継ぎ方も、確かにあるのだ。

「そして——」

続けて、スワロウは口を開き——



「——その権威の頂点に立つ者こそが、公理教会最高司祭。名を、アドミニストレータと

いう女じゃ」

静かに告げられたその言葉に、キリトは小さく息を呑んだ。

目の前に座する、幼い少女の容姿をした司書から告げられた、アンダーワールドの真実。

それは驚嘆すべきものだった。

同時に、ますますこの少女……カーディナルと名乗った存在に興味を引かれる。

光の扉の先にてキリトとユージオを出迎えた彼女は、キリトが探し求めた現実世界へ繋がっていた。

カーディナル。

それはキリトに……否、全てのSAOサバイバーにとっては忘れられない名前だっ

た。

かの鋼鉄の城を支配し、常にプレイヤー達を監視していた、絶対管理プログラム。その具現であり、かの仮想世界と同じ存在ならば、アンダーワールドの全てを知る少女。

何もかもが不思議な、二年の時を過ごしたこの世界の真実を、キリトは今聞いていた。
「アドミ、ニストレータ……」

カーディナルから告げられた名を、復唱する。

支配者を意味する言葉だ。原初の支配欲を引き継いだ者達の頂点に、実に相応しい。
「今や、あやつはこの世界のシステムを管理すらしておる」

「……ん？ ま、待つてくれ。最高司祭って女なのか？」
てつきり、高齢の神官を想像していたキリトは狼狽える。

カーディナルは渋々とした顔で頷き、一口手に持ったカップの紅茶を啜った。

「そうじゃ。……そして、忌々しいことに、ある意味わしの双子の姉のようなものでもあ
るのじゃ」

「双子の姉……？ どういう意味だ？」

しばらく、カーディナルはキリトの問いかけに返答しなかった。

彼女の顔には先ほど以上の渋さが滲み出ており、嫌悪すら感じられる。

じつと、彼女は自分の手を見つめていた。

だが、やがて観念したように溜め息を一つこぼして。

それから、ようやく語り始めた。

「始まりは、350年前のこと。つまり、この世界が作られて100年ほど経った頃じゃな。すでにその頃には千人近くの人民が生まれており、第五世代だけでも600人はおった」

「確か、さつきまでの話だと両親の性質を複合して生まれてくるんだったか？」

「うむ。わしは現実世界のことはよく知らんが、婚姻を交わした男女がおおよそあちらと同じ手段で子を成し、人界人の雛形……つまりはライトキューブ・クラスターに原型がロードされ、新生児として誕生する」

ライトキューブ・クラスター。

このアンダーワールドにおける魂。そして、現実世界においてはある意味での存在そのもの。

十万の人界人は全てがそれであり、ユージオやルークもまた、そうして生まれてきたのだ。

「婚姻つてのは、どうするんだ？」

「簡単なシステムコマンドじゃよ。ステイシア神の前で婚姻を誓う。昔は村の長などがやっておったが、今では各集落にある教会の修道女などが取り仕切っておるじやろう」
「ふうん……あ、悪い。話を続けてくれ」

「うむ。その世代になると、既に支配者と被支配者の構造が出来上がっておった。数人の領主は利己心の赴くままに領地を広げ、そこにいる人々を己の民として飲み込んでいった。まあ、中にはそれから逃れて、辺境の地に旅立つ者もおったがの」

「ああ、なるほど。それがルーリッド村やザッカリアの街を作ったんだな」
左様、と察しの良いキリトにカードィナルは微笑む。

「それとは裏腹に、中央を支配する領主達は互いにいがみ合い、己こそが唯一の支配者たらんと反目しておったが……ある時、政略結婚のようなことが領主間で行われた」

「最も《原初の四人》の一人の性質を色濃く受け継いだ人界人同士で、か」

「うむ……その結果、一人の女子が生まれた。天使のような容貌と、あらゆる人工フラクトライトを凌駕する利己心を併せ持つ子が……名を、クィネラといった」

絞り出すように、その名を告げるカードィナル。

この世で最も口にしたくない、と言わんばかりの顔は、抱いた感情を窺わせる。

「当時、既に街と呼べる規模にまで発展していたセントリアに生を受けたクィネラは、あ

らゆる天稟を發揮した。劍、神聖術、芸術……齡十にしてそれはどんな他者よりも凄まじかった」

「どんな他者よりも、つて……それって、大人達よりもつてことか?」

「そうじゃ。そして、当時人々の天職について采配しておったクイネラの父は、そんな我が子を街に働きに出すのが惜しくなつたんじやろうな……酷い過ちを冒した」

カーディナルは、物憂げに虚空を見つめながら語つた。

「領主は娘に、『神聖術の修練』という前例のない天職を与え、手元に置いた。この強欲こそ人の業よな。そしてクイネラは、その比類なき知性を存分に發揮し、屋敷の奥で来る日も来る日も神聖術の解析をした」

「神聖術の解析……? それはどういう意味での……」

「文字通り、解き明かしたのじゃ。この世界の住民にとつては単なる記号でしかないはずの神聖語を、一つ一つの単語や発音、組み合わせた時に生まれる意味……そういうものまで、仔細に解明してしまつた」

神聖語。つまり、現実世界における英単語。

ラーズのスタツフが基本言語である日本語と共に、システムの現象を起こすためのキーコード。

誰もが神聖術の式句、その認識で終わるものを熱心に分解したと聞いて、キリトは恐

るべき好奇心に少し慄く。

「そして、十一の時。ついにクイネラは、《サーマルアロー炎熱の矢》の術式を生み出した。それまで生活の補助に使われていた神聖術を、他を害する武器に発展させたのじゃ」

「最初に攻撃系の神聖術をプログラムしたのは、クイネラだったってことか」

「左様……だが、本当に恐ろしいのはここからじゃ」

そこで一度、カーディナルは言葉を切った。

キリトはじっと、彼女の表情を見つめる。

カーディナルは、まるでその先を語ることに大きな勇気を振り絞るように眉根を寄せた。

それほどまでに重大なことなのだ、話を聞くよりも先に理解する。

やがて、彼女は重々しく。

そして厳かに、話の続きをした。

「クイネラは——自らが生み出したその術式を用いて、*“狩り”*を始めたのじゃ」



「狩り、だって？」

「はい。当時から支配者階級の間では、娯楽として小動物などの狩猟が嗜まれていました。クイネラは、それを最も積極的に行ったのです」

幼い少女が、矢を生み出して小動物を殺害する光の絵。

それを描きながら、スワロウは粛々とルークへ語り続ける。

「ルーク様。以前、北の洞窟で暗黒領域のゴブリンと戦闘したのを覚えてらっしゃいますか」

「ああ。忘れられるはずがない」

「その時、自らの*“力”*が向上したことは？」

「……そういえば」

ゴブリンを斬り殺していくうちに、どんどん体が、そして《白竜の剣》が軽くなった。薄々、それが命を奪った故にだと理解していたが……今、その話をすることに悪寒しか感じない。

「ご存知の通り、この世界の万物には値が定められています。そしてクイネラは、別の命を奪えば奪うほど、自分の値が上昇することを理解してしまつた」

「……待て。それじゃあクイネラは、力を増すためにわざと命を奪い始めたのか？」

「それはもう、残虐な程に。あの時点で、彼女ほどこの世界の仕組みを理解し、また活用した存在は他にいませんでした」

ゾツと、肝が冷えた。

生きる糧にする為や、天職として生き物を狩り、役目を全うするというのならわかる。だが、我欲の為に必要のない殺戮を行うことは、ルークにはどうしても受け入れられなかった。

「驚くべくは、それをたつたの11歳でやりやがつたつてことだ。力をつけ、他者より優れる為に。恐ろしいと思わねえか？」

「……ああ」

「肝心なのは、それが命を持つものならなんでもいいという点です。もし彼女に、幼い頃

に教えられた殺人の禁忌さが刻み込まれていなければ……」

「……………ッ!!」

先刻を凌駕する恐怖が心を撫でた。

これは、央都に上ってから聞いた話だが。

一等貴族や皇帝家の私有地では、爵位を持たない人間は想像を絶する扱いを受けているという。

辺境にいたルークは縁遠い事だったが、もし殺人が罪として縛られていなければ。

遙か昔、クイネラも小動物などより圧倒的に狙いやすい人間達を殺して回った事だろう。

「だが、やってる事は同じだった。そうだろ?」

「はい。彼女はその仕組みを理解したその日から、夜毎周囲の森の小動物を虐殺し。そして、世界に定められた理通りに翌日命が生まれると、またそれを殺し……そうして、際限なく力を高めていった」

「……最後には、どうなったんだ」

聞きながら、ルークはもう予想がついていた。

ついていながら問いかけたのは……自分に、覚悟を決めさせる為。

「権限の上昇と、飽くなき探求。結果、クイネラという少女は、あまりに強大になりました。天命の回復や、天候の操作までも可能なほどに」

「それ、は……」

「ああ。もう人じゃねえ……神の領域だ」

まさしく、天から地上に舞い降りた御使のようであつただろう。

それが当然のように崇められ、畏怖されていた学院の上級貴族達を思い出す。

彼らとは比較にならない領域まで上り詰めたクイネラは当然、民にとって神だったはずだ。

証明するように、光が平伏する人々の中心に立つ少女を描き出した。

「ある時には、傷ついた青年を癒し。ある時には、嵐の訪れを予言する。そうして数々の奇跡で人心を掌握し、ついには己が存分に探求を続けられる場所を作らせたのです。そう、神に祈りを捧げると称してね」

「つ……もしかして、それがこの……」

「ご察しの通り。セントラル・カセドラル。貴方達がそう呼ぶ白亜の塔の、原型です」

スワロウが、光で塔を形作る。

最初は三階建ての、祭壇程度の規模だった。

しかし、それが一つ、また一つと積み重なっていき、高さを増していく。

同時に、周囲の街もまたその様相を変え始めた。

「クイネラを信奉し、供物を捧げ、祈る。そして彼女が奇跡を起こせば、もはや創造神ス
テイシアの巫女だと疑う者は一人としておりませんでした」

「……でも、それだけ崇拜されていけば、支配者達は快く思わないんじゃないか？」

「いい目の付け所だな。その点においてもクイネラは抜け目がなかったのさ」

「いったいどういう……っ」

「気づいたみたいだな。そう、支配階級の誕生だよ」

四人の領主は、皇帝に。そして連なる者達は貴族へと。

豪華な衣装に身を包んだ、かつてクイネラの親だった者達を含んだ支配者達。

その前に傳く民達の光景は、恐ろしいほどあっさりとしていた。

「自分が、最上であり続ける為に……そういう、事なのか」

「最も、クイネラとて元は人の子。最初に親に教え込まれた法、禁忌にまでは背けません

でした」

「殺人や、傷害……」

最も禁忌とされる、物心つく頃に親より教わる最初の戒め。

そして、それが記されているのは………

「そこでクイネラは、自らが作り上げた支配体制を活用し、己に定められた戒律を含め、一つの法を作り上げました」

「禁忌、目録………」

ずっと自分が……否、人界の民全てが盲信してきた絶対の法。

それさえも欲望の産物だと知り、ルークは足元が瓦解する錯覚を覚えた。

ふらり、と体を傾け、力尽きたように背もたれへ体を預ける。

「………どうして、そこまで？」

「彼女が二十代半ばの頃です。クイネラは頂点に君臨し、その美しさにはますます磨きがかかりました。高く聳える塔には何人も弟子が集い……けれど、ふとある不安を抱いたのです」

「不安……？」

これほど多くを支配して、何を案じることがあるというのか。

ルークには、もうわからなくなり始めていた。

「人口は増加の一途をたどり、人界の領域は広がりました。すると自然、彼女自身では把握しきれなくなります。そして目の届かぬ所で、自分と同じことを始める人間が現れることを恐れたのです」

「だから禁忌目録を……」

ルークは、記憶に確と刻み込まれた禁忌目録を反芻する。

第一に、公理教会への絶対なる忠誠を捧げよ。

第二に、他人の命を奪うことや、不当に傷つけることを禁ずる。

人界を保つ為に遵守されてきた絶対の掟。

しかし、それは。

「全部……全部、クイネラが、自分と同じ力を持つ誰かが生まれたいようにする為……？」

「そこに、道理はなく。倫理も、道徳もない。あるのはただ、傲慢な欲と恐怖だけだ」隣でライオットが呟いた、その言葉に。

ルークの中で、何かが大きくひび割れた。

箱庭の真実（2／3）

あの時から、教会に対して不信感を抱いてはいた。

勿論、教会が広めている禁忌目録に対しても、少しだけ懐疑的に思っただけのもの。それでも、人界の平和を、人々の善き部分を象徴してもいると、ルークはそう信じていたのだ。

それなのに、明かされた真実の恐ろしきで純粹だった部分の心が大きく軋む。

いつぞ、不確定な憶測だと否定してほしいほどだった。

これまで信じてきたものがひっくり返ってしまっただけだから無理もない。けれど、スワロウの言っていることが偽りだとはどうしても思えなくて。

「……大丈夫か？ 少し休憩にしても構わんが」

「……………いいや。最後まで、聞かせてくれ」

ルークは、続けることを選んだ。

禁忌を破った今、目録が作られた理由がなんであれ、関係はない。

己の意志を貫くと決めたのだ。この程度で屈してはいけないだろう。

強いその眼光に、スワロウは少し笑みを深めて話を再開する。

「目録は、貴方達にとっても都合の良いものだったことでしょう。病を運ぶ毒沼の位置から、家畜に害を与える草木の名まで記されているのですから、それに従っていればなんの問題もない」

「……………ああ、そうだった。禁忌目録に従い、反することなく生活すれば、生きることが容易かった」

言葉にされて、改めてそのことを認識した。

自分を含め、あらゆる人界の民は禁忌目録に頼り切りに生きていたことを。

苦々しいルークの顔に、ライオットが同意するように肩に手を置く。

「また、目録を人界に流布し、生まれた子供に教授するよう義務付けたのは、誤ってそれを教えられない事態が発生し、同様に力を付ける存在を事前に排除することが目的でした」

「だから、誰も法を犯すことなく、この人界が成り立っていたってことなのか」

「教会にとつちや、純真な方が統治しやすいからな」

その説明に、ふとある人達の顔が思い浮かんだ。

ユージオやセルカ、村の皆。

学院で出会った、キリト達の指導役であるソルティリーナやゴルゴロツソ。

他にもザツカリアの衛兵隊の仲間や、ロニエやティーゼ……そして、シャーリー。

何より、ルーク自身。

「俺達の心は……人を思いやる気持ちは、あくまで教会がそうだと教え込んだから……ただ、それだけだったというのか……?」

「……少なくとも、発端はそうだろうよ」

まるで、自分という存在そのものを大きくかき乱されたような衝撃が心を突き抜けた。

真実とは残酷であると知っていたのに、それでも容易に飲み下せるものではない。

何故ならそれは、己の誰かを守るという意思もが、目録の掟に端を発するものでしかない。

そう言われてしまったも同義なのだ。

「そうして社会の体系化を盤石にし、結果として人界は栄えた。人口は爆発的な増加の

一途をたどり、大規模な術の行使によつてその領域を限界まで広げて……最後には、大きな都市へと変貌したセントリアを中心に、一つの箱庭が完成したのです」

街は都市へ、円環に囲まれた、四つの壁に隔てられた世界は領地へと。

光が満ちた時、宙に浮かんでいたのは——今、ルークが生きる人界そのものだった。

「……クイネラにとつての、帝国」

「まさしく。けれど、彼女は飽くという事を知りませんでした。歳を重ね、衰えていくほどに、むしろその渴望はより一層深くなつていったと言つてよいでしょう」

「一体、何を……？」

「皮肉にも、と言うべきでしょうか。彼女は最初に与えられた役割……神聖術の解析に没頭していききました。更なる力、より高き場所——貴方達にとつての絶対の枷、《天命》をも凌駕する存在へ至るために」

その言葉を聞いて、恐ろしさと同時に一つの納得を得た。

誰にも太刀打ちできない力を備えたクイネラにもまた、人の子として限界があつただと。

天命とは、文字通り天より与えられた命の値。

二十代から三十代で限界に達し、その後は緩やかに減少していき、やがて天寿を全うする。

セフィアの父母……つまりルークにとつての祖父母もまた、そのように死んでいった。

「クイネラは結局、寿命を迎えたのか？」

「……いいえ。そうであれば、私がこうして活動していることもありえませんでした」
力なく、スワロウは首を横に振るう。

では絶対なる人界の支配者は、一体どうなってしまったというのか。

その先を聞くことが、ルークはとても怖くなった。

「天命、つまりこの世界の生物に与えられた限界を操れるのは、創造主達、あるいはこの世界の均衡を司る大いなる力のみ。しかし、そのどちらでもないクイネラは老いさらばえ、圧倒的な美貌も、比類なき剣技を振るう力も失い、ついにはカセドラル最上階の寝室、そのベッドから一步出ることさえ叶わなくなりました」

光で、豪華なベッドにいる老婆が描かれる。

多少見にくくても、それが今にも事切れてしまいそうな、枯れ枝のような老婆だと分か
かった。

もはや、全盛期の神々しい姿は見る影もない。

眼前の《ステイシアの窓》を覗き込む、その目の執念以外は。

「しかし、彼女は諦めてはくれなかったのです。徐々にすり減る己の天命に焦りながら、それでも日がな一日中あらゆる音、単語の組み合わせを試し、扉を開く鍵を探し続けた」
無機質なはずの光の偶像から、伝わってくる。

恐れが。怒りが。

そして、あらゆるものを呑み込むほどの支配への欲求が。

「成功するはずはなかった。私が計算した限りでは、その試みが身を結ぶ確率は百万分の一回にも満たない……そう、叶うはずのない無謀な夢」

ですが、と眩き。

「彼女は、鍵を探し当てた。風前の灯火と化した命が消えゆくその夜、扉を開いてしまったのです」

「……………ッ！」

その時初めて、スワロウは大きく顔を顰めた。

彼の表情から滲み出る悔恨と戦慄……そして無力感に、ルークは息を呑む。

「あるいは、あちらの世界からの干渉があったのかもしれない。いずれにせよ、クイネラは見つけ出しました。この世界の神聖術全てを記した、ある窓を開く方法を」

老婆の前に、大きな窓が現れる。

それは《ステイシアの窓》と似て非なる、無数の神聖文字が羅列されたもの。
学院で完全に習熟したわけではないルークには、その多くが理解不能なものだった。
……だが、わかる。

この窓は……決して開かれてはいけないものだった。



「奴は狂喜乱舞した。文字通りに、の」

カーテイナルの言葉に、ふとキリトの脳裏で鮮明な光景が描かれる。
立つこともままならず、感動を言葉にすることもできず。

ただ、ベッドの中で奇怪に体をくねらせ、野獣の断末魔のような掠れた声で歓喜する。想像だというのに、その声さえも聞こえた気がして。

キリトは、心から戦慄した。

(ラースは……菊岡達は、自分達が何を作ったのか、わかっているのだろうか?)

もはやこれは、単なる文明シミュレーションや人工知能の創造ではない。

人によって作られたものが、箱庭の世界の中とはいえ、遙かに人の領域を凌駕した。

あるいはそれさえも、彼らの求める実験成果なのかもしれないが……キリトには恐ろしかった。

これを現実世界に置き換えれば、人間が「神」にまで上り詰めたということなのだから。

「この窓……《エンタイプ完全コマンドリスト》の末尾に、クイネラが求めた術式は記してあった。本来であれば、《原初の四人》が緊急時にこの世界を内より操る為のものじゃ。二百年前、クイネラはそれを使って自分の力を最高まで引き上げた。万物の操作と創造。神聖力の操作に、命の力……《天命》すらも操れるように」

「……………じゃあ、彼女は」

カーディナルは、重々しく頷く。

「クイネラは損じた天命を全回復し、己を全盛期にまで若返らせ、永久に減少を停止した。この世界の絶対原理——《カーディナル・システム》への干渉すら可能な、その力を用いて」

「……………」

「死の一步手前だったはずが、己の全盛を取り戻した喜びは、まだ年若いお主にはわからんじやろうがの……………」

「まあ、それが女性の永遠の夢の一つだったのは分かるよ」

キリト……………和人も、現実世界に恋人がいる。男として多少の理解はあった。

「とはいえ完全に分かるかと言われれば否であり、それを見透かしたようにカーディナルが薄く笑う。」

「ともあれ、望んだ全てを手にしたクイネラの喜びは凄まじいの一言に尽きた。際限のない欲望の心……………その底に、穴を開けてしまうほどにな」

「それだけの力を手に入れて、まだ満足しなかったのか」

「うむ。彼奴は、絶頂に至ったからこそ、自分以外がその場所にいることすらも許せなかったのじゃよ」

それこそ人間の愚かさよな、と呆れたように呟くカーディナル。

数度、人間的感情がないと自称しつつも人間臭い反応に、キリトは言葉の意味を反芻する。

すぐに答えに行き着いた。

「もしかして、カーディナル・システム?」

「当たり前じゃ。意識を持たぬプログラムすら、己の世界から消し去ろうとした。じゃが、あくまでクイネラとてアンダーワールド人。神聖術に長けていても、科学技術に精通しておるわけではない」

「じゃあ、カーディナルを排除することはできなかったのか」

「事態はもつと最悪じゃ。無理矢理にラーズの技術者向けに書かれたプログラムコードを読み解こうとし、カーディナル・システムを取り込もうと新たに組み上げた神聖術を唱えた。その結果……」

また一度、少しだけ間を空けて。

クイネラは、嘆息するように言った。

「クイネラは、ある意味では試みを成功させた。しかし同時に、失敗したのじゃ」

「せ、成功して、失敗した?」

「カーディナル・システムの取り込み……というよりも、乗っ取りじゃな。それは上手くいったものの、同時に己のフラクトライトに書き換え不可能な基本命令を焼き付けてし

まった。つまりは……一体化したのじゃ」

「な……」

キリトは、すぐにはその意味を理解できなかった。

あまりに現実離れた話に頭が混乱する中、絞り出すように質問を投げかける。

「その、基本命令ってのは……？」

「《秩序の維持》。お主もカーディナルに支配された世界を経験したならば分かるだろう？ その監視の全能性と、エラーに対する容赦のない制裁を」

「あ、ああ……結局、何度も裏をかこうとしたけど成功したことはなかった」

唯一成功、というよりも敗北しなかったのは、娘であるAIのユイを助け出した時だろう。

カーディナルに紐付けされたプログラムであつた彼女を救い出す、たったの数秒間。

その時感じた、強大な存在感。

今にして思えばあれは錯覚ではなく、カーディナルそのものだったに違いない。

そんなことを思い出すキリトに、カーディナルが童顔に似合わぬ貫禄ある笑みを浮か

べる。

「当然、たかが数百人の人間の知恵で欺けるほど甘くはないわ。……しかし、単なる機械であるカーディナルとは異なり、クイネラの《秩序の維持》のやり方は酷く冷酷なものだった」

カーディナルは語る。

激しい己の変化に、丸一日昏倒したクイネラが次に目覚めた時、それは既に別の存在だった。

食事もせず、老いもせず……ただ、己の管理する人界の永久維持を求めるモノになった。

その維持とは世界のみではなく、彼女自身が長い年月をかけて支配した人々もだった。

「奴は名を改めた。公理教会最高司祭、アドミニストレータ……と」
「クイネラが、アドミニストレータ……」

今もなお、白亜の塔の最上で人界を眺める管理者。

エルドリエが呟いていた最高司祭の正体を知り、キリトの中で謎が一つ解けた。

「神、と名乗らなかつたのは奴らしいがな……クイネラは、まず最初にひとつの勅令を下した。人界を四つの帝国に分け、大貴族達を皇帝にしたのじゃ。そして分かつた国を、

壁で隔てた」

「壁……あ！　もしかして、『不朽の壁』か！」

「うむ。実は、あれはカセドラルのように人界の民が長い年月をかけて積み上げたのではない。クイネラがその力によって一瞬で生み出したのじゃ」

「あ、あれを一瞬で!?　そんなことをしたら、民は震え上がったんじゃないか……？」

「まさにそれが狙いよ。強大な力への心理的恐怖と、壁という物理的障壁。この二つを以って深く民の心にその存在を刻みつけ、また未来永劫人々をそれぞれの地に閉じ込めることで、いつまでも純朴な信者であることを望んだというわけじゃ」

それだけではない、と言葉が続く。

「クイネラは央都のみならず、辺境にまでその手を伸ばした。破壊することは不能に等しいオブジェクトを設置し、それ以上の拡大を封じたのじゃ」

「破壊不能なほどのオブジェクト？　それは例えばどういうものなんだ？」

キリトのなんでもない質問に、カーディナルはニヤリと笑った。



「割れない巨岩、埋められない毒沼、渡れない大激流、などなど。ルーク様も心当たりがおありでしょう」

「心当たり……」

本日数度目に、自分の記憶を洗い出す。

この北帝国の辺境とも呼べるルーリッド村に、生まれてから十数年住んでいた自分。そんな自分に心当たりのある存在……それは、一つしかなかった。

「悪魔の大樹、ギガスシダー……あれも、アドミニストレータが生み出した障害なのか」「あまり人界が広がらずにすぎても、神たる彼女をして目が届き切らないと考えたのです。そういつた数多の障害を用意し、完全に停滞した人界を彼女は維持しました」

それが二十年、三十年と続いていくうち、やがて人々の発展は無くなった。

平民は己の天職に従い一生を全うし、貴族達は安寧の中で徐々に腐敗していった。

かつての剣士達が練り上げた技は見世物に墮し、人界は平和という名の終わりに浸ったのだ。

スワロウの言葉に、ルークは不思議なほど納得してしまう。

あの日、アリスが連れていかれなければ。

白竜の牙を剣にしなければ、キリトが現れなければ。

きつと自分は、この真実を知ることもなく、あの村で生涯を終えていたのだろう。

それはある種、優しいように思えるが……今のルークには悪夢だった。

「しかし、何事にも永遠というのは存在しません。あちらの世界がそうであるように、この世界もまた等しくね」

「アドミニストレータに何か起こったのか？」

「魂の限界、とでも申しませうか……ルーク様。人は老いを克服した時、どこまで生きられると思いますか？」

「どこまで、つて……そりゃ、永遠なんじゃないのか？」

事実、アドミニストレータは350年という無限に等しい時を生きている。

そうではないのかという顔をするルークだったが、すぐにスワロウの言葉を思い出し

た。

「魂の限界……まさか、魂は永久には生きられないのか？」

「アドミニストレータも人の器だった、ということですよ。あちら側の世界における貴方達はとある『箱』の中に存在していますが、そこに蓄積される記憶には絶対的な限界がある」

「その限界が、アドミニストレータにも？」

「ええ……百五十年以上の時を生きた彼女はある日、己の異変を知りました。完璧に暗記したはずの神聖術を瞬時に口にできなくなり、数日前のことを思い出せなくなり、ついには時折意識が途絶えさえるようになった。その時の恐怖は、あるいは管理者になった時の狂喜と同じほどだったでしょう」

「自分を……失う…………」

積み上げてきた『己』が損なわれる恐怖。

それは……ルークには、理解できてしまった。

柔らかな絨毯を踏み締める足裏の、鱗の感触。

隣から聞こえる、荒れ狂う豪風のような心音に、ふとライオットを見る。

すると右目に、彼の胸の中心で輝く光の塊のようなものが透けて――

「ルーク？」

「っ！」

ハッと、我を取り戻す。

「……ごめん。続きを聞いてもいいか？」

俯きがちに言ったルークを、スワロウは少しの間見つめる。

感情の見えない白の瞳で、何も問わずに彼はただ頷いた。

「少々、自分語りになってしまいましたが……彼女が管理者となった時。それは、私にとって過酷な日々の始まりでもありました」

「過酷って……アドミニストレータが人界を操るのを見ていたことか？」

「それだけならば、どれほど良かったことでしょう」

スワロウは、そこで一度口を閉ざした。

それから瞑目し、何かを逡巡し始める。

まるで、その先を語ることを恐れてでもいるかのよう。

数分の沈黙の果て、ようやく結論を出したように、白い睫毛が震えて瞼が持ち上げられた。

「……私は。アドミニストレータの手助けをしたのです」

「っ!？」

「《原初の四人》が帰還した後、カーディナルに紐付けされていた私はこの世界を傍観し続けました。しかし、神となったクイネラは私を見つけ出し、その支配を盤石にする為に使役したのです」

当時を思い出し、それを光で再現する。

作られたのはクイネラの前に臣下の如く跪く、スワロウの姿。

それを見て、ルークは表情から驚きを隠せない。

「ご存知の通り、私には望む場所へ瞬く間に移動する力があります。それはいつでも《原初の四人》の元へ駆けつける為のものでしたが……これをアドミニストレータに利用されました」

「……………っ」

「現実側の存在として私もそれなりの権限を有してはいたものの、上下関係プログラムとしても、権限の値としても神である彼女に抗うことはできず。命じられるがままに人々を扇動してしまった」

「後悔、してるのか？」

スワロウは、悲しげな笑みでかぶりを振った。

「私は、貴方達とは作りが違います。心というものも厳密にはありません。……それで

も確かに、貴方達が言うところの「愛着」が。この世界に対してであったのです」
だからこそ、屈辱であった。

ある時は、アドミニストレータの権威を知らしめる神官として演説を行い。

ある時は、辺境の地を巡って目録が完全に行き渡るよう暗躍した。

そしてある時は……彼女の命ずるままに、本来ならば罪なき人を攫ったことさええ
る。

「命じられるままに動く機能でしかないことを、あれほど齒痒く思ったことはありません
ん。まあ、お陰で私に「情動」というものが芽生えていたことにも気付けたのですが」
「何百年も生きてりゃ、どんなものになんて感情は宿るだろうよ」

「そういう、ものなのか？」

「そうだろ。守護竜だって元はそうだったんだから」

何気なく告げられた言葉に、ルークは目を瞬かせた。

（今のつて……つまり守護竜も、最初から完成した存在ではなかったということか？）

ふと想像してみる。

“彼女”によって生み出された、四匹の小さな竜の幼体。

まだ角も翼も発達しておらず、西帝国に多く生息するという“トカゲ”に酷似しているのだ。

以前学院の図書館で読んだ生物図鑑の絵を思い出し、少しだけ気が緩んだ。

「話を続けても？」

「ああ、わり。話の腰を折った」

「俺もすまない」

「いえ、それほどお気になさらずとも。……そんな日々が、七十年ほど続きました。人間であれば、一生を使い果たしたほどの時です」

そんなに長い間、人々から未来を奪う片棒を担がされるというのは、どれほどの懊悩

か。

あの日アリスが連れていかれる一助となった自分を思い出し、今度は眉根を寄せてしまおう。

無論、何倍もの時間の差があるわけだが……それでも、一片ならば共感できる気がしたのだ。

「そして、彼女が魂の限界に達したその時。ついに好機が訪れました」

箱庭の真実（3／3）

「キリト。お主はこの世界に、《ステイシアの窓》……いわゆるステータス・ウィンドウ以外に設定された、様々な数値があることはわかっておるな？」

「ああ。何となくだけど、そういったもの存在は把握していたよ」

カーディナルの質問に、キリトはすぐに頷く。

例えば、キリトの指導役であったソルティリーナ。

彼女は剣士として鍛え抜かれた肉体を持つてはいたが、それでも女性らしい細身であつた。

にも関わらず、この二年と二ヶ月で身長も筋肉量も大幅に増えた自分を、鞭の一撃で転がすほどの力を発揮していた。

ここに、アンダーワールド内における実際の身体能力に付加された数値があると彼は踏んでいる。

「うむ。それらの中に、《違反指数》というパラメータが存在する。定められた法にどれ

ほど反するか、といったものを心理状態や行動から数値化したものじゃな」

「そんなものであったのか」

「本来は、外の人間が観察しやすいようプログラムしたものじゃろう。アドミニストレータはそれを利用し、《違反指数》の高い人間を捕縛しては……人体実験の素材とした」

「じ、人体実験?!」

「己に定められた魂の限界……それを解決するために、フラクトライトについて研究しようとしたのじゃよ。そして、数百という人間を犠牲にし、奴はフラクトライトの操作技術を発明し、高度化していった」

ぞわり、とキリトは自分の全身が粟立つのを感じ取った。

人を人とも思わない神の所業。それはゲームにおいても度々使われる設定だ。

だが、それを元人間が己の為に平然と行なっていたと考えると……今、同じ世界にしていることがとても恐ろしい。

「……実験体にされた人達は、どうなったんだ?」

「ほとんどが精神を崩壊させ、ただの息をする抜け殻と化した。奴は彼らを凍結処理し、己の所業が外に漏れぬよう封印したよ」

「考えるだけで恐ろしいな……」

「何、こんなものは序の口。……そしてここからが、わしの話の本題となる」

一層表情を引き締めたカーディナルに、キリトも自然と居住まいを正した。

完全に話を聞く姿勢になったことを確認してから、彼女は語り出した。

「フラクトライトの操作術を会得したアドミニストレータは……ある、年頃十ほどの少女を選び出した。家具職人の娘でな。カセドラルにて、修道女見習いとして暮らしておった。他の見習いよりも少し権限が高く、優れていたという理由で選ばれたのじゃ。茶色の瞳と巻き毛な髪が特徴の、冴えない女子じゃ」

キリトは目を見開く。

その容姿は、今日の前に座っているカーディナルと瓜二つではないか。

彼女自身のことを語っているのだと、薄々勘付く。

「アドミニストレータは、己の居室に女子を連れて来させると、聖母の微笑みでこう言つた……『あなたはこれから、私の子供となるのですよ。世界を導く、神の御子に』……当然、ここに愛情などはない。全ては奴の目的の為の詭弁じゃ」

「目的……?」

「奴は、その少女に己のフラクトライトの思考領域と重要な記憶を上書き複写……つまり、もう一人の己にしようとしたのじゃ」

酷く冷たい声で告げられた言葉に、キリトは心が凍りついたような錯覚を覚えた。

他人のフラクトライトの上書き——それはつまり、乗っ取りを意味する。

聞いただけで怖気が走る所業だ。無意識に鳥肌の立った手の甲をもう一方の手でさする。

「で、でも……そんなことをするくらいなら、直接自分の記憶を整理すればいいじゃないか」

「お主は、例えば同じ立場だとしていきなり自分の記憶を弄るか？ 下手をすれば全て消し飛びかねない可能性を孕んでいても？」

「そりゃ、しないけど……」

「アドミニストレータという女は、実に慎重じゃ。特に、カーディナル・システムの一件でその危険性を身を以て味わったからの。故に、十分な記憶領域のある少女の魂を上書きし、複製が上手くいった時は磨耗しきったもう一方を消すつもりじゃった。……じゃが、それこそが奴の失敗よ。それも類を見ないほど大きい、な」

「失敗……？」

「そうとも。奴は失敗した。それも二重にな」

人差し指と中指を突き立て、老獪な笑みを幼顔に浮かべるカーディナル。

その言葉の意味を測りきれずに、キリトはただ黙して言葉の続きを待つことにした。「一つ。スワロウにその少女を連れて来させ、儀式の場に同席させたこと。プログラムという意味において、自分に絶対的に逆らえないと確信していた故の過ちじゃ」キリトは少し驚く。

話の最中に聞いた、アンダーワールドをデザインしたというラーズの技術者が導入したメンタルヘルスケアAI。

長年に渡り、強制的に服従させられていたらしいそのAIが、まさかその一件にまで関与していたとは。

内心驚愕するキリトに、続けてカーディナルは告げる。

「そして二つ——奴が完成させた、魂と記憶を統合する悪魔の儀式、《シンセサイズの秘儀》を行使した瞬間、ある事態が起こることを想定していなかったことじゃ」

「ある事態?」

「うむ。少女のフラクトライトに己の情報を上書きし、そして古い自分を消去する、そのごく短時間。全く同じ権限を持つ神が二人同時に存在するということじゃ」

そして、と。

伸ばしていた指ごとグツと小さな拳を握りしめ、カーディナルは獰猛に笑った。

それまでの落ち着き払った賢者然としたものとは違う、暗い感情に燃えた瞳で。

「その時を、わしは七十年待った！ 奴が過ちを犯すその時を、ずっとな！」

「なっ……ちよ、ちよつと待ってくれよ。あんたは……今、こうして俺が話しているのは、誰なんだ？」

あまりの感情の高ぶり様に、キリトは困惑しながらも訪ねる。

拳を解いたカーディナルは、眼鏡を押し上げると元の声音で答えた。

「まだ解らぬか？」

「え……」

「キリト、お主はカーディナル・システムのオリジナルを知っているのじやろう？ その機能の特異性を語ってみい」

「え、ええつと……確か、メンテナンスを必要とせず長時間稼働できる。それは、二つのコアプログラムによって相互監視を行なっているからであり、メインプロセスがバランス制御を行っている間、サブプロセスはメインのエラーチェックを……」

そこまで言って、キリトは言葉を止めた。

自分の言っていることの意味を、改めて理解したからだ。

ゆつくりと、カーディナルを見る。

小さな賢者。その体に見合わぬ知性と、底知れぬ強大さを醸し出すプログラムの具現。

その感覚をキリトは知っている。

かつて、鋼鉄の城で娘を消されそうになった時。彼女をエラーとして訂正しようとした、その圧倒的存在感を。

「気づいたようじゃな。クイネラが己に刻み込んだ基本行動原理は、一つではなかった。メインプロセスに与えられた《世界を維持せよ》。そしてもう一つ——サブプロセスに与えられた、《メインプロセスの過ちを正せ》」

「過ちを、正す……」

「単なるデータの解析装置であつたわしは、クイネラに刻み込まれたことにより人格を得た。いわば奴の影としての、じゃが」

「多重人格、つてことか」

「うむ。そして、世界のみならずそこに住まう人々に手出しをし、歪ませたアドミニストレータを致命的なエラーと認識したのじゃ」

そしてカーディナルは、そんなアドミニストレータを内から止めようとしたのだと語る。

意識の表層に自分が浮かび上がった時を狙い、幾度も自害をしようとした。

その手法を一つ一つ聞かされ、キリトはなんとも複雑な表情を作り出す。

「じゃが、わしは失敗した。最後の一度など、その場で転げようものならば命を消し去れるまで天命を減少させたというのに。一撃で葬り去れなかったのが敗因じゃ」

「話を聞いてる限り、アドミニストレータがそれを放置するとは考えにくいな」

「その通り。最後の試みで奴もわしの危険性を認識し、対策を取った。まずわしが表に出る状況を解析し、それを封じ込めにかかったのじゃ」

「あんたは、どうやってアドミニストレータ……メインプロセスを押しつけて意識を露出できてたんだ？」

「再三言っておるが、アドミニストレータとて元は人じゃ。クイネラだった頃に培った、わずかな情動というものが残っておった。そして、此れによつて論理衝突コンフリクトをきたす時……つまり、動揺した時にわしが出てくることを突き止め……そして、己の感情回路を凍結した」

「と、凍結!？」

思わず声を上げる。

幾多の所業により、人間離れたアドミニストレータの力を認識してきた。

が、それは先ほどのフラクトライトの上書きに匹敵する驚愕だった。

「そ、それは丸ごと思考や記憶をコピーするより危険性が高いと思うんだが……」

「奴には悲惨な実験による、フラクトライト操作の十分な知識と技術があつたからな。難なくやってのけたわ」

「じゃあ、成功したのか」

「した。そして奴は、正真正銘心持たぬ世界の管理者……安定、維持、停滞。それだけを実行する存在になった」

哀れな小娘の魂を乗っ取ろうとする、その時までには、な。

カーディナルの言葉が、大図書館に木霊した。



「客観的に見ても、あの瞬間のことは私ですら完全な解析は叶いませんでした。それは私がこの世界の人間とは構造を異することも関係していたでしょう」

そう言いつつも、スワロウの顔には明確な感情の露出がある。

眉根を寄せ、薄い唇から声が漏れるのを抑えるように引き結び。

その瞳に、恐怖とでも呼ぶべきものがありありと浮かんでいた。

「私の目の前で彼女達は目を開き、そして互いを見た。その瞬間——堪え難いほどの膨大な敵対的感情が奔出したのです」

「敵意？ その子の魂を乗っ取ったのは、アドミニストレータそのものじゃないのか？」
何故、自分が作り出したものに対してそこまでの感情を剥き出しにしたというのだろう。

おぞましい非道の果て、無垢な子供をある意味殺してまで作り上げた分身を、何故。

「奇妙な言い方になります、知性の深奥に刻まれた本能とでも申しませう。全く同じ人間が二人存在するという事実は、自己という存在の証明を大きく揺るがす事態であり、すべての知性において最も忌避される状態だったのです」

それまでとは違い、どこか自信がなさげに語られたスワロウの推測。

ルークは想像する。

目の前に、自分と同じ容姿、人格、記憶や経験を持ったもう一人の《ルーク》が現れ

る。

ではその時、自分とその《ルーク》は、一体、どちらが本物の……………

「う、あ……………ツ!!」

「ルークっ！」

途端、ひどく不快な感覚に襲われた。

ぐらぐらと世界が揺れている。

心臓が張り裂けそうなほど早鐘を打ち、臓物が全て裏返ったような吐き気を催す。

目の前が真っ暗になっていき、自分という存在がみるみるうちにひび割れていく感覚を知った。

（ダメだ、ダメだダメだダメだ！ これは、これ以上は、考えてはいけないッ！）

この先を考えれば——理解すれば、"ルーク"が壊れる。

自分が、抜け殻になってしまう。

そのことを察したルークは、即座に思考を封じ込めた。

「その先を考えるなッ！ 自分を保てッ！」

「……ライ……オット……」

「ルーク！」

「……大……丈夫……だ……」

返事をする、必死に揺さぶっていたライオットは安堵の表情を見せる。

いつのまにか、机にうつ伏せていたルークは緩慢に体を起こす。

そして、スワロウのことを見た。

「……これが、そうか」

「凶つたわけではありませんでしたが、分かったようですね。ルーク様に起こった事が、

二人のアドミニストレータの間で起こったのです。今もその光景を記憶しています」

アドミニストレータに使役されていた頃の、どのデータより鮮明に記録している。

あれほどの「恐怖」を、スワロウは四百五十年前から現在まで他に見た事がない。

「同一存在に耐えられず、二つの魂は崩壊するはずでした。しかし、記憶を限定・圧縮し

ていた新しいアドミニストレータが一瞬早く崩壊し。僅かなその瞬間を狙い、もう一人

の「カーディナル」が少女の体を支配しました」

「……それが今、キリト達を保護しているカーディナルなんだな」

「左様でございます」

二人の偶像のうち、幼い少女が先に崩壊し、新たに史書の姿となって再生した。そのまま、二つの偶像は互いにむけて険しい表情を作る。

「主機能と補助機能、別々の意識に分かれたことにより崩壊は止まり、彼女達は互いを排除しようと試みました。クイネラの肉体に残ったアドミニストレータは、幾度も己を妨害した厄介な存在として。カーディナル様は、深刻な間違いを犯し、訂正すべき存在として」

「……二人の管理者、か」

激しく神聖術を互いにむけて放ちだした偶像に、ルークは呟く。

当時の光景を鮮明に再現しながら、スワロウはどこか懐かしげな口調で語る。

「その時、私は選択を迫られました。生まれて初めての自主的思考と言えるでしょう。彼女達に連なる存在として、どちらのプロセスに従うのかを」

「……お前は、カーディナルを選んだ。そうだろうか？」

「やはり、直ぐに分かりますか」

柔和に微笑むスワロウに、ルークは思わず苦笑する。

自然にどちらか分かるよう話していたのに、態とらしい態度だ。

「——ええ、その通り。私は、アドミニストレータをこの世界が産み落とした最悪の存在として、修正することを選びました」

カーディナルの傍らに、一人の偶像が新たに立ち上がる。

纏っていた豪華な神官服を脱ぎ捨てたその男は、少女の隣に立って支配者と対立した。

《原初の四人》の内、善良な三人が作ろうとした世界。

定期的な検診の際、彼らはこれから発展していくだろう人界の善き予想図を語った。

研究が主な目的であったが、本当の子供のように育てた始祖達への、ひいてはこれから生まれる人々への慈しみも含まれており。

それと、アドミニストレータの作ったこの人界を、彼はどうしても一致させられなかった。

治療のために彼らの活動を観察していたスワロウという機能は、その意志を尊重したのだ。

「それでも、彼女達に次いでこの世界では最高の権限を持っていると自負しています。緊急時に《原初の四人》を保護する為に、神聖術の行使にも長けていました。同等の力を持つ彼女達の一方に加勢すれば、結果は見えていた……はずだった」

「はず、だった？」

「……私の想像していた以上に、アドミニストレータという存在は狡猾で優秀だったのです。劣勢に立たされ、あと一撃で天命を全損させられそうになった彼女は、予想だに

しない方法で戦況を覆しました」

スワロウの指が、光を変化させる。

風の刃、氷の礫の嵐、炎の竜巻に無数の雷……飛び交っていた術の一切が消えたのだ。突然戦闘が止み、困惑する。重なるように少女と男の偶像が体を揺らした。

それをじっと見て、しばらく考え——ハッとルークは息を呑む。

「まさかー」

「彼女は最上階の居室を全て、神聖術を禁ずる空間にしたのです。管理者の権限というのは、実に恐ろしい」

「そ、その後はどうなった?」

「まず、私が使い者にならなくなりました。単なる精神治療の機能ですので、神聖術を封印されると何もできません」

あの場で一番焦っていましたよ、と苦笑気味にかぶりを振るう。

「でもそれは、アドミニストレータにも同じ事なんじゃないか?」

「ええ。必然的に、戦いは次の段階……武器による近接での直接戦闘になりました。彼女達は管理者の権限を用いて周囲の物体を武器に変換し、戦おうとしましたが……ここ

で大きな誤算が起きました」

「誤算?」

「体です。成熟したアドミニストレータの肉体に対して、カーディナル様が支配した少女の体はあまりに未発達でした。その体では、クイネラが積み上げた剣技を發揮できなかったのです」

「……なるほど」

確かに、いきなり別の体に入ったとなれば感覚が全く違うのだろう。

手足の長さ、筋力や体力も違う。そんな状態では、とてもまともに戦えない。

「先刻申し上げた通り、私に近接戦闘の機能は皆無。アドミニストレータが勝ち誇った微笑でカーディナル様を見下ろす様を、見ていることしかできませんでした」

「今からでも俺が鍛えてやろうか?」

「遠慮しておきます、ライオット様」

驚き疲れたルークを慮ってか、二人が冗談じみたやり取りを交わす。

思わず苦笑しながらも、スワロウに無言で続きを促してみた。

「ですが、そんな私にもできる事が。私のみが持つ、唯一にして最大の機能——転移の術です」

「それも神聖術じゃないのか?」

「いいえ。『彼女』に備え付けられた、私自身の機能でした。故に私は、カーディナル様を連れて撤退することを選択しました」

ゆつくりと近づいてくるアドミニストレータと、後ずさるカーディナルの偶像。後ろで見ていたスワロウの像が、突如走りだしてカーディナルを担ぎ上げる。

そして、一瞬で居室の中から消え失せた。

「あれは英断であったと、今でも確信しております。事実、カーディナル様からも感謝のお言葉を賜りました」

「間一髪だったんだな……」

「あの時の、アドミニストレータの唾然とした顔。今でも忘れられません」

くつくつ、と笑うスワロウを、ルークは少し驚いた顔で見た。

これまで一度もそんな反応を見た事がなく、とても物珍しかった。

そんな顔をされることは予想していたのか、コホンとひとつ咳払いをして顔を戻す。

「まず、カーディナル様が権限を回復し、反撃する策を練る場所と時間が必要でした。そこで、アドミニストレータが魂の限界への対策の一つとして作り出した、とある場所を利用することになりました」

「とある場所？」

「カセドラル内、大図書館です。アドミニストレータはそこに、全神聖術と歴史、己の記

憶にまつわる記録を収蔵し、自分以外には入れない様に細工していました。そこをカセドラルから切り離し、我々の領域としました」

「それも、かなり切迫してたらしいぜ？」

「お恥ずかしながら、追いかけてきたアドミニストレータに後一步で閉ざした扉をこじ開けられるところでした。彼女の怒りと殺意がひしひしと扉越しに伝わってきましたよ」

ちなみに、とスワロウは手を掲げる。

そのままゆつくりと腕を動かし、一周させてから戻ってきた。

「この空間も、その一部です。私人の領域として一部を拝借しております」

「ま、マジか……だが、アドミニストレータが作ったものなら、侵入の可能性があるんじゃないのか？」

「ご心配なく。常に空間的な座標が変動しておりますので、彼女に捉えることは叶いません。ただし、外に出る際の『扉』を感知されてしまえば別の話になります」

彼女が早々尻尾を掴ませることはないでしょう、と確信のこもった声音で締めくく

る。そこで一度、スワロウは気分を入れ替えるように紅茶を啜り。

ゆつたりとした動作でカップをソーサーに置くと——真剣な目でルークを見た。

「そして。アドミニストレータとカーディナル様、私の長い争いが幕を開けました」

ライオット・シュトルツ

「幾度にも渡り、我々はアドミニストレータを抹消しようと試みました。大図書館に潜み、彼女が表に姿を表すのを見計らって……」

「そう、それだ。さつきから一つ気になっていたんだが、アドミニストレータもカーディナルも、元は同じ一人の人間だろう？ だったら、クイネラが突破できなかった傷害や殺人の禁忌はどうなったんだ？」

ふと心に引つかかっていた疑問を、ルークは口にする。

先程までの話でも、両者は互いを傷つける……あまつさえ殺すことも視野に入れていた。

それが出来ないからこそ、禁忌目録によって人界における貴族達の最悪の所業は免れてきたのだ。

スワロウは、それも予測していたと言わんばかりの儂げな微笑みを浮かべる。

「ルーク様。貴方は、ライオス・アンティノスを傷つけてはならない。『人間』と認識しながら斬りましたか？」

「……それは」

あの時の、朧げな記憶を掘り起こす。

鮮明には覚えておらず、抽象的な心理状態しか思い返すことは出来ない。

だが、少なくともあの時の自分は、ライオスを切り捨てるべき、と考えていたのはわかる。

「……俺はあの瞬間、ライオスを人とは思っていなかった………う」

むしろ、その欲深さと醜悪な心意をゴブリン達と同列にさえ考えた。

どうしてそう思えるのか。

それは、ルークが——アリスらに捕縛された時、初めて人を斬つたと自覚したから。

「っ………」

そう考えた途端、全身が冷たくなっていくような気がした。

あの時、自分は生来教え込まれた絶対の法を、平然と無視していたのだ。

「ルーク様。法とは絶対ではないのです。思考一つ、認識一つで、どれだけ魂に刻み込まれようとも乗り越えられてしまう」

「……だとしたら。俺達が守ってきた法つてのは、酷く脆いものなんだな」

それこそ、アドミニストレータの道具ではないではないか。

自嘲気味に笑う彼に、スワロウもライオットも下手な慰めは口にしなかった。

彼自身、それを求めていた訳ではない。

「それで？ アドミニストレータは未だ健在なんだろ？」

「残念ながら。管理体制の確認や、公理教会の代表として赴かなければならない行事など、様々な機会は訪れましたが、いずれも失敗に終わることとなりました」

「二人がかりでもか……」

「時と場合によります。私はカーディナル様の手足となり、人界中に赴いておりますので……しかし、最大の障害は我々と彼女の最大の違いです」

「違い……あつ、教会！」

スワロウが鷹揚に頷いた。

「我々は二人。対し、彼女の勢力は大袈裟に言えば教会の支配する人界全て。一人一人は大きな力を持たずとも、数の暴力というものがございます」

話が進むにつれ、より声に力を込めるスワロウ。

ルークは教会の騎士団や兵士を想像し、その膨大な数に彼の言葉を信じざるを得なかった。

「更に、彼女は慎重さを重ねました。極力表に出る機会を減らす為に、自分の仕事を代行し、教会の代弁者として動く者を」

「まさか……」

「——そのまさか、だ」

ライオットが、声を上げる。

自然とそちらに顔を向け、騎士が浮かべた表情に息が詰まった。

憤怒と屈辱。出会ってから短い間で、最も激情に塗れたその顔。

「整合騎士。俺達もまた、奴が保身のために作り出した道具に過ぎなかったんだ」

「作り出した、って……お前達は、何者なんだ？」

ルークは、ずっと考えてきた。

教会の威信を背負い、超人的な力を備えた整合騎士なる存在。

同じ人間とは思えないその正体は、一体どのようなものか。

アリスが現れたことで「元人間」である可能性は考えていたが……

「当然、人間だ。父母の元に生まれ、育ち、己を鍛え上げた人界最高の戦士。……だが、

その全てをアドミニストレータに利用された」

「どういふことだ」

聞き返したルークに、ライオットは見たことのない笑みを浮かべ。

「俺達には、その頃の記憶がないのさ。綺麗さっぱり、な」

「な……………」

開いた口を、ルークはすぐに閉じる事ができなかった。

どこか空虚な笑顔を湛えたライオットを、ジロジロと凝視してしまう。

「なんで、そんなことに……………」

「《シンセサイズの秘儀》。アドミニストレータの生み出した恐ろしい術。これによって、アドミニストレータは他者の魂を操作する術を確立していました」

「どこを弄れば、俺達の記憶を消し、心を凍らせ、感情を失わせることができるか……奴はその方法を熟知していた。そして奴は、自分の代わりに人界を統括し、また強力な護衛として整合騎士という人形に仕立て上げたのさ」

ガンツ！ という、大きな音が響いた。

それはライオットが、たまらずといった様子で机に握り拳を叩きつけた音。

図書館の隅々まで広がるようなそれに、ルークは気圧される。

「俺は……俺達は、奪われたんだ。記憶を、自分自身を。そして代わりに、偽りの記憶と、絶対の忠誠を植え付けられた……………」

「偽りの、記憶……………」

「…………俺達が整合騎士として目覚めた時、例外なく奴はこう教える。『整合騎士は自分が天界から召喚した御使いであり、人界の秩序を守るため派遣された崇高なる存在だ』、つ

てな」

ハッ、と吐き捨てるように嘲笑って、ライオットは自分の手を見た。

「実際は、カーディナルとこいつに対抗しうる力と権限を持つ手駒っただけだ。最初から誉れなんて、どこにも無いってのにな」

「……………辛い、思いをしたんだな」

思わず、ルークはそう呟いた。

整合騎士としての存在意義、全てを否定する真実に打ちのめされたのだ。

その時の絶望は、到底計り知れない。

「でも、お前は どうしてスワロウ達についたんだ？」

「…………その話は後だ。今は整合騎士の成り立ちを知ってもらおう」

ゆっくりと息を吸い、そして吐くと、ライオットの顔から陰が取れていた。

握った拳を解いた彼は、脱力して背もたれに体を預ける。

「スワロウ、頼む」

「畏まりました。…………アドミニストレータは魂に関する研究を元に、《バイエティ敬神モジュール

》という器具を作りました」

光で描かれたのは、三角柱の形状をした物体。

内部に光の粒子を孕んだそれに、ルークは底知れぬ悍ましさを感じた。

「これには、対象の魂に造られた記憶と行動原理を統合する力があります。頭部に挿し込まれたが最後、教会及びアドミニストレータに対する絶対忠誠を誓い、人界の現状維持に徹する超人の誕生です」

「なんて非道な……」

「彼女はそうして作り上げた人間に、世界の乱れを正し、整合性を維持する、森羅万象を教会の元に統合する尖兵を意味してこう名づけました——整合騎士、と」

それが、整合騎士の所以。

アドミニストレータの独善的な支配を象徴する、人の尊厳を踏みにじった傀儡の名。

「儀式が成功し、騎士となった彼らには番号がつけられます。統合体を意味する言葉と合わせ、名前の後に統合体・一号機、といったように」

「文字通りの道具って、ことかよ」

ルークは、言い知れぬ怒りを感じた。

これまでずっと、彼らを恨んできた。アリスやユージオの笑顔を奪った敵として。

だが、その正体を知ってしまえば……騎士達もまた、奪われた側なのだ。

不憫、とまで言うほど傲慢にはなれない。

アリスを奪ったことは事実であり、また、人界を守ってきたことは確かなのだから。だが少しだけ、同情はできた。

「整合騎士にされてしまった人は、何人いるんだ？」

「俺を含め、三十一人。その内の約半分は、奴が実験により魂を壊した人間だ。そいつらは極めて高い能力を備えてたからな」

「あるいは秀でた能力を持っていたからこそ、教会の法に対して積極的に反したとも言えるでしょう」

「じゃあ、残りの半分は？」

「アドミニストレータは、整合騎士たりえる戦士を得る為のより効率的な方法を編み出しました。剣技によって力を競い合う催しを行い、最後の勝者に栄誉としてカセドラルに招く仕組みを作ったのです。その剣士を輩出した家には、上級貴族の爵位と莫大な富を与えるという餌を付けてね」

「それって……!」

四帝国統一大会。

ルーク達がずっと目指してきた、カセドラルへの唯一の道。

(もし、あの事件がなければ……………俺達は、どうなっていた……………?)

自分達のうち、いずれか二人が大会に出場し、並いる人界中の剣豪達と鎬を削りあい。そして、どちらか一方が最後まで勝ち残れた暁には——アドミニストレータの傀儡となる未来が待っていた。

これまでの中で最大の戦慄が、ルークを襲う。

もしかしたら自分や、あるいは弟分達は、何もかも失っていたかもしれないのだ。

記憶も、願いも……………全て。

「お前のその顔。もしかして四帝国統一大会に出るつもりだったのか?」

「……………本当なら、優勝者としてカセドラルに正面から入るつもりだったんだ」

もつとも、今の話を聞いてしまった以上、そうならなくてよかったと心の底から思う。

そんな風に顔を青ざめさせたルークに、ライオットが笑ってこう言った。

「よかつたな、俺の二の舞にならずに済んで」

「……………何だつて？」

「何を隠そう、俺がこの仕組みの最初の被害者なのさ。まあ、それを知つたのは整合騎士になつて随分経つてからだけどな」

「な——」

あつけらかんとした態度で笑うライオットに、全身を衝撃が駆け巡る。

脳裏に思い起こされるのは、まだ学院に「彼女」がいた頃の記憶だ。

「彼女」は、北セントリア央都修劍学院の初期生だった。

あの日記の主や、「彼女」と共に綴られていたとある男子生徒も同様だ。

その生徒は、初代主席であると同時に……時を近くして開催された、四帝国統一大会最初の優勝者でもある。

学院の歴史を記した書物に、誉れ高き生徒として記された、その名前は——

「ライ、オット……………」

「ん？」

「ライオット…………シユトルツ……………」

記憶の片隅で埃を被っていたその名前を、呆然と呟く。

ライオット・シュトルツ。シュトルツ四等爵家の嫡男にして、学院最高の剣士。ルークは目の前にいる騎士ライオットを、凝視した。

正確には、名前を言われたことに驚いたらしい彼の、耳についた飾り。

「彼女」が日記の主から贈られたものと同じ、それを。

（――全部、繋がった）

何故それを持っているのか、という疑問が、一気に氷解した。

彼こそが、初代上級修剣士主席であり、四帝国統一大会初代王者であり。

彼女が愛した、唯一人の男なのだ。

「はっ、ははは………」

「お、おい、ルーク？」

「……ルーク様。何故、涙を流しておられるのですか？」

「ああ、いや、ごめん………つい、さ………はは、ははは………」

笑いながらも、右目から一筋の涙を流すルークに二人は顔を見合わせる。

ああ、なんて運命的なのだ。

きつと彼女は、この事を知っていたわけではない。

あの休日日も実際に、もう全ては過去のことだと語っていた。

それでも……いや、そうだからこそ。

(まさか、貴女が愛した男が整合騎士で、担い手だなんて……驚かされるばかりですよ、ルル先輩)

これまでもこれからも、ルークは「彼女」が遺したものに驚嘆させられるのだろう。

けれど、不思議と悪くない気分だった。

そんな事を思いながら、涙を拭う。

「……ごめん。取り乱した」

「いや、別にいいが……お前、どうして俺の本来の名前を知っているんだ？」

「北セントリアの修剣学院に通ってたんだよ。だから、初代主席としてお前の事を本で

読んだことがある」

「ああ、そういう事か。つまりお前は、二つの意味で俺の後輩ってわけだ」

「そういう事になるな」

二人は、互いに男臭い笑みを向けあった。

不思議と絆のようなものを感じて、ルークは袖の上から手首の耳飾りに触れる。

“彼女”が繋げてくれた縁のだと、そう思った。

「親睦が深まったようで、何よりでございます」

「おう。んで、どこまで話したっけか？」

「整合騎士がどうやって増えてきたかって所までだな」

「ああ、そうだった。で、俺達は奴の手駒として何百年も人界を維持してきた訳だ。お前も聞いた通り、魂の限界があるから一定周期で記憶を消されながらな」

何度も記憶を消し、利用され続けている整合騎士達。

それを聞いて、ふとルークは新たな疑問を覚える。

「スワロウ。カーディナルは今もアドミニストレータと争ってるんだろ？ 数百年間、

記憶はどうしていたんだ？」

先ほどの話では、カーディナルとなった少女にはアドミニストレータの記憶が上書きされている。

既に150年余りの記憶があるはずで、その状態で現在まで耐えられたとは考えられない。

「最初に、彼女は重要な情報を手書きで記し、後に自分の魂を操作して九割の記憶を消去しました。アドミニストレータにはできなかつた、直接的な自己の改竄です」

「九割つて……それつて、ほとんど何も覚えていないんじゃない……」

「ええ。ですが、長い先のことを鑑みれば最善の選択です。事実、彼女は今も生き長らえている」

ルークはなんとも言えない顔になった。

憶測でしかないが、カーデイナルにはもう人としての記憶はないに等しいだろう。

親の顔や、温かい思い出……何もかも失っているのかもしれない。

「もしかして、お前も?」

「幾度か申し上げているように、私は貴方達とは作りが異なりますので、容量には余裕があります。最も、無限ではないので一部は情報化してこの図書館に納めてありますが」

「そんなこともできるのか……」

「こいつに頼んで、俺もそうしてもらっている。アドミニストレータに初期化される前に、重要な記憶は文章として本に複写してな」

俺の区画はあつちらへんだ、と指である方向を示す。

なんとも便利な扱いに、スワロウへ苦笑を向けざるを得ない。

「そのような顔をなさらずとも、これは報酬のようなものです。彼には危ない橋を渡つてもらっていますから」

「整合騎士の地位を保ちながら、カーディナル達に協力する……考えるだけで胃痛がしそうだ」

「そんなにヤワじゃねえよ。バレないよう演技するのは、ちよつと骨が折れるがな」

言いつつも、ライオットの顔に大変そうな様子は見られなかった。

流石は初代主席にして大会制覇者と言うべきか。演技もお手の物らしい。

「だが、俺なんてせいぜいが中堅どころだ。団長なんざ、200年以上整合騎士をやつてるからな」

「それは、最初に整合騎士にされたという?」

「ああ。団長は強いぜ? 名実共に俺らの頂点だ」

そこで、ふとライオットは表情に影を落とす。

「……奴を倒すつてんなら、団長とも戦う事になるだろうよ。勿論、凍結から目覚めてる他の整合騎士ともな」

「……辛いかな?」

「いんや。とつくに覚悟した事だ。まあ、それは初期化されて過去の俺の手記を読む度

にだが……今回で最後にする」

それは即ち、仲間である整合騎士達を裏切り、アドミニストレータを討つという事だ。最初から宣言していた事だが、話を聞いた後では十分に納得できる。

「つと。そういうえば、どうして俺がこいつと接触し、反乱の意志を持つに至ったかって話がまだだったな」

「聞かせてくれ。アドミニストレータと戦う前に、一緒に戦う仲間のことは知っておきたい」

「……へっ、言うじやねえか」

ルークの言葉に、ライオットは楽しげに笑い。

不意に、傍らに立てかけていた《蒼竜の琴剣》を手に取ると机に置いた。

ズン、と重い感触を伴って置かれた竜具に、視線を投じる。

「始まりは150年前……俺がアドミニストレータの命で、蒼き大竜を討伐した頃だ」

四聖竜

「……そうか」

「……もつと驚くと思っただがな？」

「予想は、していたからな」

かの白い竜が、ダークテリトリーからの尖兵如きに敗れ、殺されるはずはない。

目覚めたその意志と対面したことで、そう確信した。

ならば、守護竜を殺せるほどの戦士など限られてくる。

「アドミニストレータは、守護竜が邪魔だった。そうだよな？」

「ああ。奴にとつちやあ、この人界の中で自分に従わない、かつ強大な力を持つ存在はそれだけで許せないからな。俺達整合騎士に討伐されてしまったのだから」

つまり、白竜もいずれかの整合騎士に討伐されてしまったのだろう。

竜が持っていた、強力な神器である《青薔薇の剣》を回収しなかったことは少し疑問

だが……

腰に差した《白竜の剣》に手を触れさせながら、耳を傾ける。

「山のごとき大竜。空より生まれ落ちたかのような、美しき暴力と蒼穹の化身。記憶がなくとも夢に見る程、今でもあの威容を覚えている」

「生前の守護竜、か……」

「奴らは最強だ。この人界にたつた四匹しか存在しない真竜だけはある。神器もない頃の俺が倒せたことが、今でも信じられねえくらいだ」

ライオットの魂にその思い出がなくとも、体が覚えている。

体の芯まで震わせる咆哮を。己の背丈ほどもある真紅の瞳を。

共に戦った教会兵士達を悉く塵殺した、我が身が小虫のように思える絶大な殺意を、鮮明に想起できるのだ。

「命からがら勝利を掴んだ俺は、蒼竜を撃滅した証としてその双角を持ち帰り、アドミニストレータに献上した。奴はその褒美として、鎧とこいつを与えたのさ」

アドミニストレータの神聖術により、双角から姿を変えた特殊な神器。

あの鱗の壮麗さと、岩山をも切り裂く音の刃を秘めた、唯一無二の武器。

己が手で殺した守護竜の分け身を、ライオットは賜ったのである。

「そして、こいつを握った時。俺の中に『声』が響いてきた」

「もしかして、蒼竜の？」

「ああ。手記によると、蒼き竜はその時の俺にこう言ったそうさ。『身一つで妾わらわを打ち倒したその技量、天晴』ってな」

ライオットに合わせ、ルークも苦笑した。なんとも皮肉の効いた言葉だ。

だが、一度剣を交えたルークには彼の實力の片鱗が垣間見えている。

殺された竜自身がそう言うてしまうほど、全力のライオットは強いのだろう。

「最初は困惑した。だが、蒼き竜から守護竜の不死性と創造主の話を聞いて、腰を抜かすほどたまげたようだ」

読んでるだけで分かったさ、と彼は楽しそうに笑う。

過去のライオットは、相当臨場感に溢れた記録を残したらしい。

「最初はアドミニストレータに報告しようとしたんだが、もし口にしたら魂を噛み砕くなんて脅しやがってな。仕方がなく担い手になった」

さすがは竜、脅迫の内容が尋常ではない。

顔を引きつらせるルークに面白そうに笑って、ライオットは続けた。

「こいつの方も、俺を見極めるだなんて言うてしばらく任務を遂行してたんだが……ある時、こう言ったんだ」

当時から、東方領域を統括していたライオット。

その日も飛竜を駆り、巡回をしていた彼の脳裏に、琴剣から厳かな言葉が響いた。

『惜しいことよ。それほど技と何者に負けぬ矜持を持ち合わせながら、傀儡でしかないとはな』

一年程共に任務を遂行してきた中で、突然の暴言。

要領を得ないその内容に、当時のライオットは困惑した。

「蒼き竜も、本来は聞かせるつもりがなかったのかもしれないねえ。俺にも伝わるほどの意思になっちまったって感じだったようだしな」

「それって……」

「当然、整合騎士の真実についてだ。魂で繋がってるからこそ、アドミニストレータに改造されたことも分かっていたんだらうよ」

竜は、担い手の強い心意に共鳴することでその意思を蘇らせる。

「彼女」に聞いた通りであれば、蒼き竜は守護者であるはずのライオットの歪さに嘆いたのだらう。

同時に、竜によって共鳴する心意の形が異なるということにも気がつく。

「不思議と、その言葉に疑問は抱かなかつた。竜にはそういう力があるのかもしれない」
「確かに、否応なしに納得させるようなものがあるな」

世界の始まりから生きる貫禄故か、それとも魂の共鳴という特異な繋がりが所以か。
無意識に傅きそうになる威容を思い浮かべ、頷いてみせる。

「そして、当時の俺の前にこいつが現れた。『ようやく時が来た』なんて言いながらな」
「俺と同じように、か」

「『彼女』がこの世界に残した守護竜の担い手ともあれば、真実を告げ、引き入れるのは
必須です」

強大な力を危険視され、整合騎士達によって狩られてしまった竜の後継者。

それは神たるアドミニストレータに対し、唯一対抗できうる存在なのだろう。

特に圧倒的な組織力の差がある以上当然だと、ルークは推察する。

そうしてライオットを見ると——彼が再び浮かべた怒りの感情に、小さく息を呑んだ。

「世界の真の姿を知り、憤怒した。俺や、同胞の騎士達から何もかもを奪い取り、己が欲
に任せるがまま歪めた奴に」

「……その気持ち、よく分かるよ」

アリス。連れ去られ、彼らと同じように整合騎士とされてしまった妹分。

自分達の大切なものを奪ったばかりか、酷く歪めてしまったアドミニストレータを。

ルークは、何があろうと許すことはない。

「だから俺は決意した。『誰より誇り高き騎士である』というこの矜持に誓って、奴に届きうるほどの力を蓄え、他の担い手と集い……いつの日か必ず、この支配を打ち破るとな」

「それが、今か」

「いくら担い手つっても、一人じゃ奴には勝てねえのは分かりきってる。だが、二人もいれば十分だ」

言い切つてから、ふとライオットは目を伏せた。

「……それに、俺は取り戻したいんだ。貴族の『驕り』を、竜に認められるほどの『矜持』変えてくれた、あの誰かの記憶を」

「ライオット……」

噛み締めるように、その想いを告白したライオット。

ふと、*「彼女」*のことが思い浮かぶ。

伝記によれば、自分などよりもずっと長く、それこそ幼い頃から共にいたという彼ら。彼女の持つ強さと優しさが、ライオットの中にもあったのだろう。*「貴族の醜さ」*を変えていったとしたら。

長い年月をかけて積み重ねた、想い出と愛を失ったのだとしたら——それは、なんと
いう悲劇だろうか。

「んんっ！ まあ、俺の個人的な事情はともかくとしてだ」

ライオットは、しんみりとした空気を入れ替える為に咳払いをした。

そしてルークにとある質問を投げかける。

「実のところ、アドミニストレータは全ての竜を同時に倒さなかった。それは何故だと思おう？」

「それは……ええと、四匹同時に討伐するほど戦力が整っていないなかった、とか？」

「平凡な答えだが、正解だ。団長は一人で白き竜をぶっ倒しちまったが、そんなのはあの人だけの例外だ。竜を討伐するとなれば、それだけで数百人規模の戦力が必要になる」

「つまり、比例して準備にも時間がかかるわけだな」

「そういうこつた」

主戦力は一騎当千の整合騎士だが、共に戦う兵士達はそうではない。

相応の訓練、物資、作戦、武器、そして時間……多くのものが大量に必要なになってくる。

いかにアドミニストレータといえど、それを四匹分同時に用意するのは困難を極めた。

「実体験のある俺から言わせれば、あれはもう天災の類だからな。まして、四竜でも単純な戦闘能力なら最強と謳われた蒼き大竜は、一番被害がでかい戦いだつたよ」

「特に人員は、アドミニストレータが神だとしてもポンと生み出せはしないのか……」

「そりゃあな。カーディナル達に狙われてる以上、直接殺しに行くこともできないから、それだけの準備を整える必要があつたつてわけだ」

「……その慎重さが、奴にとつての仇になつたな」

嘲笑うが如く、これまでの鬱憤を溜め込んだ声質でルークは返答する。

直接、竜達を骨の一片も残さずに殺していれば、こうして担い手が現れることはなかっただろう。

言い方は悪いが……アドミニストレータではなく、整合騎士に殺されて幸運だった。

そこまで考えて、ふとある事に疑問を抱く。

「赤き蛇竜と、黒き翁竜の担い手は？ これまで現れなかったのか？」

「……残念ですが、この場に集う事はありませんでした」

スワロウは瞑目し、残念と言うようにかぶりを振った。

そうか、とルークは話を終える。心の中には期待が外れた悲しさがあった。

「全ての担い手が揃えば、もっと確実なものになっただろうに……」

「……ええ」

その時のスワロウの目にあつたものを、ルークは見えていなかった。

「でも、俺の仲間もいる。あいつらとも力を合わせれば、アドミニストレータを必ず打ち倒せるさ」

キリトとユージオの顔を思い浮かべ、ルークは気を取り直すように言った。

恐らく、彼女の元に辿り着くまでには多くの整合騎士が待ち構えているだろう。

だが、ずっと切磋琢磨してきた弟分と、この騎士と共にあればできると、信じられる。

そんな風に考える彼に——しかし、ライオット達の表情は浮かかないものだった。

「どうした。まだ何か、あるのか？」

「……ルーク様。問題はアドミニストレータだけではないのです」

「ああ。むしろこっからが本題だ」

固い声で告げるライオット達に、再びルークの顔も引き締まる。

二人の真面目な表情から伺えるものは、それだけの質量があったのだから。

「確かに、第一の目標はアドミニストレータの打倒だ。だが、その後にも厄介ごとが残っている」

「厄介事？」

アドミニストレータを倒せた後、人界に訪れる激動の事だろうか。

そう考えたルークの心を読むように、スワロウが首を横に振る。

「ルーク様、事後処理の事ではありません。もつと深刻な……この人界の存亡をかけたものが、すぐそこまで迫っているのです」

「それは、一体どういう……」

その時、閃光が駆け巡るようにルークの記憶が刺激された。

一瞬にして思い起こされたのは、また「彼女」と過ごしたあの休息日のこと。

その時、彼女が告げたあの一言。

——いずれ来る世界の終わりを前に、どうか折れないで。

全身を、悪寒が駆け巡った。

「……………世界の……………終わり……………」

「やはり、聞いていましたか」

眩きを聞き逃さず、スワロウは目元を鋭くする。

「ルーク様——この世界には、いずれ確定された終焉が訪れるのです。人界の誰もが逃げる事の出来ない、本当の終わりが」

「……………何が……………何が、起こるんだ」

「果ての壁が崩れ、暗黒領域との境が消えます。そうすれば戦争が始まるでしょう。互いの支配と生存を賭けた、暗黒の時代が」

全身が、総毛立つ。

想像する。

北の洞窟で見たゴブリンや、まだ見ぬダークテリトリーの怪物達が、大軍を成す光景を。

それらが果ての山脈の向こう側からやって来て——全てを、蹂躪していく様を。

ルーリッド村が、央都が、そこにある営みや住まう人々の全てが、破壊されていく。覚えたのは、失う恐怖。伴うは絶望。

それは、自分の大切なものが危険に晒されるといふものだけではなくて。

「何を考えているのかは、分かる」

「つ、ライオット……」

「そうだルーク。今の人界には……奴らに対抗する術が、ないんだ」

長きに渡るアドミニストレータの支配によって、人界は停滞した。

百戦錬磨の技は衰え、貴族達は怠惰に耽り、よって暗黒領域の軍勢に対抗する戦力は皆無。

たとえ、整合騎士が数十人いようとも……到底、それだけで人界を守れるとは思えなかった。

「もう時間がない。早々にアドミニストレータを倒し、少しでも民を鍛えなければ、もう俺達に未来はやってこない」

「……………猶予は」

「ごく僅か、としか」

つまり、具体的な数字を聞いてしまえば心が碎けてしまう程なのだろう。

濁したスワロウの答えから裏を察して、更なる絶望が襲い来る。

「もう、今しか……………ないのか」

迷っている暇は、ない。

改めて突きつけられて、震える両手を握り締める。

けれど、その心に「諦める」という言葉は一片も存在していなかった。

その証拠に、揺れる瞳には圧倒的な負の感情と同時に、己を奮い立たせる意思が現れ始めている。

それを見たライオットとスワロウは、顔を見合わせると頷いた。

「ルーク。ただでさえ、こんな話を聞いていて混乱しているだろうが……………あと一つ、教えることがあるんだ」

「……………それは、なんだ」

やや間を置いて、ルークは答える。

未だに震えは止まらない。けれど、もう引き返す事はできない。

この際、どんな衝撃の事実があっても全て受け止めてやろうと、自分を鼓舞する。

「ルーク様。貴方は全てを聞き、それでも心折れなかつた。ならば、今こそ教えましょう。守護竜、そして担い手の、“真の存在意義”を」

スワロウが、空中へ指を走らせる。

再び現れる光の軌跡。それは五つの生物を描き出す。

壮麗なる竜。山のごとき竜。

四つの翼を備える蛇竜に、要塞と見紛う堅剛の竜。

それらを前に——一つの、生き物がいた。

「これ、は……………」

絞り出した声は、あまりに弱々しかった。

それは巨大だった。

荘厳で、雄々しく、力強く。

とても……とても、恐ろしかった。

「人々を守りし、人界の聖なる守護者である『四聖竜』。対するは、暗黒領域に封じられし破滅の化身。全てを破壊し、死を喰らう黄金の王」

スワロウの言葉に続き、ライオットが深く息を吸って。

覚悟を決めるように吐き出すと……ルークに、告げた。

「その忌み名を——『はじやりゆう覇邪竜ロヴィナ』」

「ロヴィ、ナ……」

名を口にするだけで、光の偶像を見るだけで、体が震える。

見たことも聞いたこともないはずなのに、魂の根底にでも刻まれたような恐怖が滲み出る。

これは……存在してはいけないものだ、本能が告げていた。

「世界の終わりが来る時、奴が復活する。撒き散らされる大量の死を喰らって、地の底から目覚めるんだ」

「正確には、生物が死んだ際に放出する負の心意と神聖力を。全てを破壊するかの竜を殺しうるのは、特別な力を授けられた四聖竜のみ」

しかし、アドミニストレータによって守護竜達は狩られてしまった。

ならばそれを成せるのは、かの竜達の力を受け継いだ……

「……………俺達、だけが」

自分と、ライオットだけが、この怪物を倒すことができる。

倒さなくては、ならないのだ。

「わかるか、ルーク。俺達は必ず生き残らなきやいけないんだ。世界の終わりが訪れる

……………奴が蘇るまで、絶対に、何があっても」

たとえ、アドミニストレータとの戦いで大切な誰かが死んだとしても。

それは刺し違えてでも無慈悲な神を殺すより、遙かに大きな重責だった。

決意

「本来、この竜は存在しないはずでした。『彼女』が四聖竜と対極の『全ての命を壊す』存在として、在るという概念をプログラムしたのみ。しかし、世界の理であった頃のカーディナルがその伝承を現実にしてしまったのです」

「世界の均衡を保つカーディナル……圧倒的な力を持つ四聖竜と釣り合わせる為に、奴は生まれ落ちた。その力は、四体の竜が揃ってなお余りあるという」

呆然と、その竜を見上げているルークは、二人の説明を半ば聞き流していた。

それほどまでに、ライオットの告げた言葉は彼に衝撃を与えていたのだ。

「そして恐ろしいことに、奴の意識は既に……ルーク？」

「………すまない。少し、考えさせてくれ」

一言断り、席を立つ。

そのまま、二人の顔を見ることもなくその場から立ち去った。

目についた通路の方へ入っていき、ひたすら奥へと歩いていった。

本棚の迷路を突き進み、背中に彼らの視線を感じなくなつた頃に立ち止まる。そのまま、傍らにある脚立に倒れこむようにして腰を下ろした。

「はあ——……………」

深く、息を吐く。

両手で顔を覆い、目を瞑つて暗闇の中に自分を落とし込んだ。

そうすることで無駄な情報を取り入れず、ただでさえ複雑に絡まつた思考を紐解いてみる。

「……………随分、壮大な話になつちまつたな」

しばらくして口から零れたのは、そんな一言。

手で隠された彼の口元には、乾いた自嘲の笑みが張り付いていた。

それは、知らずに背負っていた宿命に対して、あまりに小さな自分という存在への嘲笑。

明かされた真実に、さしものルックでも心に過度の負荷がかかつていた。

「俺は……………ただ、大切なものを取り戻したかつただけなんだが」

その為にここまでやってきたはずなのに、いざ辿り着いてみれば恐るべき未来が待つ

ていた。

アドミニストレータ。人界の真実。

そして、遍く人を滅ぼす邪竜という宿命。

どれか一つをとつても重すぎるというのに、その全てを背負わなければならなくて。そして、ルークは自分がそれを受け止めきれるとは、到底信じられなかった。

「俺は……俺は、どうするべきなんだ？」

勿論、アドミニストレータを打倒することは決まっている。

それを為さねばアリスを取り戻すことも、この静止した世界を解放することもできない。
い。

ユージオやセルカへの償いも、キリトの未だ知らぬ目的を果たすこともできないだろう。

……ここまでなら、まだ自分を誤魔化せた。

(でも、これは重すぎる)

自分などでは、この人界の未来を守ることはできない。だつてそうだろう。

幼きあの日、ルークはアドミニストレータの作った法に屈し。彼らの、彼女の大切な未来を、壊したのだから。

ずっと、その過ちを正そうと生きてきた。

ユージオ達への罪悪感が、アリスへの懺悔の念が、ルークに原動力を与えてくれた。キリトが現れ、あの事件を経て村を出たときは、目的を果たすためならこの命さえ捧げようと密かに決めた。

その後のことは……一度も、考えすらしなかった。

「なのに、今更俺だけは死ぬことが許されないって………なんだよ、それ」

もし、アドミニストレータとの戦いでキリトやユージオが命を落としたりして。

その時生き残った自分に、どんな価値がある？

他の何より守りたい彼らを失ってしまえば、もう自分に存在意義を見出せなくなるだろう。

「……………そうか」

ようやく悟る。

キリトやユージオ達の兄貴分。彼らを守る側、頼りになる存在。

そうして自分に「こうあれ」と定め、縛ることで、ルークは自己という存在を保ってきた。

その方法が成立するのは、守るべき相手がいてこそであり。

「俺の方が、守られていたんだな……」

彼らを理由にして、犯した罪に心が壊れないようにしてきた。

実際は、ずっと苛まれている。

この胸に燻る自責の炎が消えたことは、一日たりとてなかった。

だからそれを失った時、自分を導いてくれるものがなくなるのが酷く怖いのだ。

どこまでも自分勝手なことに、心の底から軽蔑と不甲斐なさが溢れてきて。

「俺は……俺、は……」

指の隙間から、異形の足が見えた。

「……そうだ。俺ではダメなら、いつそ俺でなくなればいいんじゃないか？」

ルークという罪人^{じぶん}では、守れる自信がない。

だったら、別のものになってしまえばいい。

そうすれば、いいのだ。

「はっ、ハハッ……そうだ……そうじゃないか。最初から、そうすればよかった」
未来を思い描けないというのなら、最初からそこへ進む気を持たなければいい。
存在意義を失うのが怖いなら、自分で自分の終わりを定めればいい。

所詮、贖罪のために生きてきた身。それが果たせば後はどうなろうと構わない。
たとえルークという自己が消えようと、担い手に課せられた役目を果たせるなら、それ
れで……

ピキッ……パキ………ッ

手の甲に、白い鱗が浮かび上がる。

一枚、また一枚と増えていくそれに伴って、その体を包むようにどこからともなく冷

気が浮かぶ。

爛々と黄金の右目を輝かせ、不気味な笑い声を小さく漏らしながら、裂けるような笑みを浮かべ。

少しずつ、周囲を凍てつかせ始めて――

「――ようやく見つけたぞ」

降り注いだ声に、ハッと正気に返った。

「……ライ……オット……」

顔を上げれば、そこにいたのは一人の騎士。

彼はルークの憔悴した顔を見下ろした後、その異変を視界に収める。

徐々に鱗が消え、冷気が霧散していくのを見て……何も言わずに、彼へ笑いかけた。

「つたく、探したぜ。……結構広いんだぞ？」

「……すまない」

「ま、見つかったからよしとするか」

その言葉に、ルークは自分が連れ戻されることを予感した。

だがそれに反して、ライオットは「よつこらせ」と態とらしく言いながら隣に腰を下

ろす。

驚いた顔で、彼を見る。

「悪かったな」

「え？」

「いきなりアレコレと話しちまって。ただでさえ尋常じゃない事を抱えてるやつに、あれはやりすぎた」

「……いや。俺の方こそ、最後まで聞けなくてごめん」

「お前の立場なら、誰だつてそうなるさ。今もいっぱいいっぱいなんだろう？」

「っ……………」

千々に乱れた内心を見透かされたようで、ぐつと奥歯を噛む。

そんなルークの横顔に、ライオットは柔らかに笑った。

「お前さんの気持ち、俺にもわかるよ」

「……………どういう意味だ？」

「昔の俺もそうなつたから、さ。スワロウの野郎に全部聞かされて、同じように頭抱えるハメになつた」

また驚いた。

てつきりこの快活な騎士は、自分などとは違い即断したものだと思つていたので。

目を見開くルークに、「そんな顔をすると思つた」と悪戯が成功したように言つてみせる。

「整合騎士としての自分を、全部ひっくり返されたんだ。悩みもするさ」
「お前ほどの騎士でも……か？」

「俺もお前も、同じ人間だろ。これからどうすればいいのか、本当に今やっていることは正しいのか……自分を失うことだって、時にはある」

「あ……………」

確かな実感の込められた言葉。

ルークは、自分の中に波紋が広がるような感覚を覚える。

確かに感じたそれを更に確かめるように、ルークは口を開く。

「どうやって、受け止めたんだ？」

「……それはアドミニストレータやロヴィナのことか？ それとも、自分を捨てようとしたことか？」

射抜くように細められた眼光に、喉がすくみ上がるような気がした。

全てを見抜く……否、そうではない。

150年という積み重ねられた年月と経験、そこから育まれた慧眼だ。

「凶星つて顔してやがるな」

「っ……」

再び俯くルークに、ライオットは嘆息を一つ。

そして、おもむろにルークの頭をその手で撫で回した。

「おわっ！」

「辛気臭え顔ばつかしてんな！ お前はよくやつてるよ！」

「でも……」

言い淀むルークに、ライオットは柔らかい眼差しを向ける。

それは手のかかる弟を見るような、優しげのあるものだった。

「一つだけ助言できるとすりゃあ、その答えはここにしかないってことだけだ」

そう言ってライオットが親指で叩いたのは、自分の胸。

「テメエがどうしたいかも、これからどうすべきかも。全部テメエでしか決められねえ

んだよ」

「俺に……しか……」

自分の胸に、手を置いてみる。

そこには迷いと過去への暗い思いが渦巻くばかりで、光はひとつもない。

硬い殻に閉じられたような心に、ライオットの言葉は不思議と染み入ってきた。

「いいか、ルーク。こっから先は迷えば迷うだけ失うことになるぞ。それが嫌なら……」

「……嫌なら?」

「さっきの話、全部忘れろ」

「……………は?」

完全に意表を突かれたことで、間拔けに口を開けるルーク。

また楽しそうに笑ったライオットは、そんな彼に助言を与える。

「全部受け入れられないなら、最初から決めたことだけを考えろ。諸々のことは後でいい」

「……………いいのか?」

「生き残ってさえいれば、な。それができるか?」

「……………」

「もう一度、よく思い出せ。お前はどのようにしてここにいる? 何がしたくて、今まで歩んできたんだ?」

試すような言葉。優しくも、厳しい導き。

ルークは少し逡巡したが……やがて、目を瞑る。

そうすると、また多くの苦悩が浮かび上がってくる。

(今は、考えるな。為すべきことだけを掘り起こせ)

一つ、一つと、自分を苛むものを取り払う。

暗闇をかき分けていくように不確かで、けれど確かに少しずつ、自分を回顧する。

人界のこと。戦争のこと。畏怖すべき竜のこと。

全て、今は追いやって。

そうして一つ、残ったものは――

「……………俺は……………守りたい」

――世界が滅んでも、それさえも覆して守ってみせる

彼女の前で誓った、その言葉だった。

「何を？」

「俺の大切な人達の、笑顔を。その過程でどんな困難が立ちふさがっても……………それでも、

俺は」

「お前は？」

「……守りたい。そして……取り戻したいんだ」

思い返す。

幼い自分と、キリトと、ユージオと。

そしてアリスと四人で、ギガスシダーの下で笑い合い、木漏れ日に照らされた、温かな日々を。

ずっと取り戻したいと思ってきた。それだけが、ルークを支えてくれた。

「その為に……アドミニストレータを、討つ」

「それが、お前のやるべきことか？」

「……ああ」

じっと、ライオットがルークの目を覗き込む。

金と灰、異色の双眸。そこに再び宿った意思の光。

先程までのの、今にも碎けてしまいそうなものとは違う……だが、どこか揺らぎのあるそれ。

しばしの間、静寂が続く。ルークにはそれが審判の猶予であるように思えた。少し不安を感じ始めた頃、ふつとライオットが嘆息する。

「まあ、いいだろう。今はそれで十分だ」

「今は？」

「気にするな。ひとまず迷いを振り払ったことは褒めてやる」

手を伸ばし、またルークの頭を撫で回す。

キョトンとしていた彼は、手が頭から離れると惘然とした表情を作った。

「なんか、子供扱いしてないか？」

「バーカ。俺からしたら、お前なんざまだまだガキだよ、つと」

立ち上がるライオットを見上げて、口を尖らせる。

「ガキって……そりゃ、生きてる年月は違いすぎるけど」

拗ねたように言う少年を、慈愛を秘めた目で一瞥する不老の騎士。

「ルーク。これだけは忘れるな」

「……？」

「お前を救えるのは、いつだってお前だけだ。他の誰にもそれはできない」

「それって……」

「ま、頭の片隅にでも置いとけ。そら、戻るぞ」

言いながら、すぐに歩き始めるライオット。
ルークもしばらく座り込んでいたが、やがて立ち上がると後を追いかけるのだった。

戦いに向けて

ライオットと共に、先ほどの場所へと戻ると、スワロウは変わらずそこにいた。彼は二人の姿を認めると、柔らかい微笑みを浮かべる。

「よっ、連れ帰ってきたぜ」

「ありがとうございます。ルーク様、戻ってきていただけて何よりです」
「すまない、少し取り乱した」

「いえ。私も少々事を急いでしまいました。お詫び申し上げます」
軽く頭を下げるスワロウへ気にしていない事を伝え、ルークは席に着く。

ライオットも座ったところで、二人に向けて徐に話を切り出した。

「……色々と聞いたが、正直言っただけ今の俺には全部を受け止める自信がない」
「そう、ですか……」

まず最初に、ありのままの結論を口にする。

スワロウは予想していたのか、あまり驚いた様子はなかった。

少し心が揺れるも、ライオットのこちらを見守るような瞳にぐつと拳を握る。

「……………いえ、無理ありませんね。ライオット様でさえ、短くない苦悩の末出した結論です。一日で答えを出せ、という方が無理難題でした」

「すまない。……………だが、一つだけは決めた」
すつと、息を吸う。

深く肺に入れたものを同じだけの時間をかけて吐き出し、気持ちを落ち着け。
そしてスワロウに、自分自身に宣言するように告げた。

「俺は、アドミニストレータを倒す。俺の目的の為、守りたいものを守るために」
「自分の為、ですか」

「俺に人界の未来なんて大それたものは分からない。だが、少なくともこの目的は一致している。今はそれじゃ、駄目か？」

「……………ふむ」

今は、確証のない未来に課せられた運命のことを考えるのはやめよう。

ただ、為すべきことを為す。そう訴えたルークに、スワロウは何も返さない。

その代わり、顎に指を当てると何事か黙考を始めた。

一分、二分とそれが続く。

そのうちルークは不安になって、ライオットにアイコンタクトを送った。

（おい、これ大丈夫なのか？ やっぱりスワロウからしたら不十分じゃないのか？）

（まあ、待つてろ。こいつの思考回路は俺達じゃ計りきれねえ）

三百年以上の時を待ち続けた彼には、この答えは不誠実に思えたのだろうか？

気を揉むルークを揶揄うように、無音の時は続いていく。

それが破られたのは、五分も経過した頃だった。

「……分かりました。今は利害の一致、ということに納得いたしましたよう」

ほっと安堵する。

スワロウを改めて見るが、その白い瞳に軽蔑や嘲りの色があるようには見えない。

もしかしたら巧妙に隠されているのかもしれないが、それでも一応の安心を得た。

「ですが、ルーク様。貴方様が命を落とすことは許されません。それだけはお忘れなきよう」

「俺だつて死ぬつもりでここにきたわけじゃないさ。時と場合によつては……もしかしたら、つて覚悟は決めてるが」

何も最初から、自分を捨て駒にするような事を考えていたわけではない。

様々な事情が絡んだ結果、自身の存在を軽んじ始めていることは自覚している。それだけの話だ。

「とにかく、今はアドミニストレータのことだけに集中しよう」

「賛成です。まずは今後の見通しを立てましょう」

また一つ空気が変わり、緊張感が別物になる。

早速、話題は現実的なアドミニストレータ攻略作戦へと移行した。

「アドミニストレータは最上階に？」

「ええ。それまでには複数の整合騎士が配置されています」

「分かっているとと思うが、どうも神器を下賜されている指折りの連中ばかりだ。俺を抜いて、目覚めてるのを確認したのは団長と副団長、姉御の側近四人にデユソルバートの旦那、見習いの双子とイーデイス。アリスの嬢ちゃん、エルドリエの坊主だな」

「騎士エルドリエに関しては、ルーク様のお連れ様方が再起不能にしました。しばらくは戦力外でしょう」

「そりゃ助かる。新米とはいえ、整合騎士だからな。一人でも少ないに越したことはない」

二人の言葉を聞き、戦力分析を進める。

最強と名高い、最初の整合騎士。その次席他、並いる整合騎士が待ち構えている。その中には当然、自分達を拘束しにやってきた「整合騎士アリス」も含まれており、それに……

「……………イーデイス、か」

あの、麗しくも鋭き剣気を放つ騎士。

これまで見たどんな女性より、彼女の声や瞳を、その全てを美しく感じてしまった。相対する未来が来ると分かっているながら、それでも強く心にその姿が焼き付いている。

彼女のことを思い浮かべるだけで、何かが奪われ、また満たされる不思議な感覚があった。

(これは、人間から逸脱することで生じた不安定さの発露だろうか?)

分からない。

生まれてから一度も経験したことの無い違和感、もどかしいほど曖昧なそれ。これが何なのか、どう定義される感情なのか。ルークには理解できなかった。

(でも、あの時彼女に感じたものは……)

難しい顔をする彼に、ライオットが気が付いて声をかける。

「あん？ 何か気になることでもあるか？」

「あ……いや、なんでもない」

「そうか。——とにかく厄介なのは団長だ。あの人とは、まともにやり合おうと勝機が薄
い」

はつきりと断言するライオットの目には、全く余裕がない。

担い手である彼をしてそう断言する程の相手。ルークは全身が震えた気がした。

「私の見立てでは、状況によりますが騎士デュソルバートや双子は警戒さえ怠らなければ問題は無いでしょう」

「旦那の神器は、外ならともかく屋内じゃ真価は発揮しきれない。稽古をつけてもらった身で後ろめたいが、ここは一つ胸を借りさせてもらおう」

「どうやらライオットの弓技は、騎士デュソルバートとやらから教授されたいらしい。不可視の音の刃を自在に繰り出すには、相当の修練を積んだことだろう。」

その上であの身軽さを思い返せば、整合騎士という不老の存在とはいえその努力と才能には脱帽せざるを得ない。

「双子っていうのは？」

「整合騎士なんだが、まだ見習いのガキンチョだ。実力的には一番心配ない。顔は知ってるから、不意打ちもさせねえ」

「ええ。肝心なのはその後です」

「事前の打ち合わせでは、副団長の姉御と四旋剣シセンケンが大回廊、庭園にイーディスとアリスの嬢ちゃんシヤウちゃんが配置される。団長は……わかんねえな」

スワロウがどこからともなく取り出し、卓上に広げたカセドラルの見取り図。

その数箇所に指を当てながら、ライオットは悩ましげに指で顎をさする。

「エルドリエの坊主が脱落。んで俺が姿を眩ませたことを考えると、武器庫にはデュソルバートの旦那あたりが再配置される可能性が高いだろう」

「デュソルバートって、どんな騎士だ？」

「弓の名手さ。七番目の整合騎士で、八年前なんらかの功績でカセドラル内の警護に召し上げられた」

「八年前……」

ちようど、あの事件が起きたのと同時期。

もしや、村に来てアリスを連行して行ったあの騎士だろうか。

話を聞いていけば、活動している整合騎士の数はそう多くはない。

反乱の可能性や、記憶の管理の観点からアドミニストレータは数を絞っているのだろう。

だとすれば、本当に同一の騎士の可能性もある。

「……八年前の功績について、何か知ってるか？」

「いや、知らん。だが、直後にデュソルバートの旦那が記憶の初期化を受けてたことから考えると……かなり都合の悪いことだったのかもな」

都合が悪い。それはつまり、覚えていないとまずいこと。

（整合騎士は天界から召喚された、そう偽の記憶を植え付けられて……それがもし、攫ってきた少女を騎士に仕立て上げたとなれば……）

ますます確信が深まっていくルークだった。

「んで、副団長と四旋剣か……ちよいと数が面倒だ」

「整合騎士が五人か……」

「実質的には二人だけだな」

「? どういうことだ?」

「あいつら、個々の実力は大了なことねえんだよ。おまけに神器もねえ、四人でようやく一人前の連中だ。一人ずつやれば、脅威じゃない」

そこでふと、ライオットは何かを思いついたような仕草をする。

「そういや、カーディナルんここで匿われてるお前の弟分どもつてのはどうなんだ?」

「どうって、実力か? そうだな…… 学院では序列五位と六位だったけど」

「上級修剣士の中位……ま、使えるか。そいつらに四旋剣を任せて、俺とお前で押せば副団長も突破できる可能性は高いな」

「彼らも神器クラスの武器を所有しています。カーディナル様があの術式を教授すれば、あるいは整合騎士次席も……」

「ほお?」

興味深そうにライオットが目を細める。

だが、聞き慣れない言葉にルークは訝しんだ。

「あの術式?」

「ん、そういや説明してなかったな。一定のクラスを超える強力な武器は、整合騎士にの

み使うことを許されている高位の神聖術を使うことでその力を解放できるんだ」

「それって、お前の武器みたいにか？」

「竜具は少し勝手が違うんだが、まあ大体同じだな。あとでお前にも教えてやる」

「わかった。すまない、話の腰を折ったな」

「問題ねえ。んで、副団長を突破したとして、だ」

ライオットの指が滑っていき、カセドラル上層部へと移動していく。

指が止まったのは、カセドラル高層。凶面上では《雲上庭園》と記された場所である。

「ここには二人の騎士……さつきも言った通り、アリスの嬢ちゃんとイーデイスが待ち構えてる」

言いながら、そつとルークの方を見るライオット。

凶面を見つめて難しい顔をした少年。その目には複雑なものが垣間見える。

「さつきから聞いてりや、アリスの嬢ちゃんと因縁があるようだな」

「……ああ、そういえば言っただけか。アリスは、俺の……俺達の幼馴染なんだ」

「……………そう、か」

端的な言葉だけで、全てを察する。

整合騎士がその人生を奪われたように、かつて彼らと親しかつた者も同じように奪われたのだ。

険しく眉根を寄せたライオットは、ルークの背後にあるものを想像して、それ以上詮索をしなかった。

「なら、俺が相手する。お前はイーデイスをどうにかしてくれ」

「だが……」

「安心しろ。確かに嬢ちゃんが強えが、怪我をさせずに抑え込むくらいは余裕だ」

慈愛と遠慮を含んだ、ライオットの優しい提案。

それはルークがアリスと相對するより、心理的にも実力的にも確実なものである。

だが……ルークはかぶりを振った。

「いや、俺がやる」

「……あえて厳しく言うが、今のお前の実力じゃよくて相討ちだぞ？ 嬢ちゃんの実力

は整合騎士でもかなり上位のもんだ」

「分かってる。でも……俺がやるべきことだから」

あの日、アリスを押し倒していなければ。

北の洞窟に行こうとしなければ。アリスの手をダークテリトリーの地面に触れさせなければ。

全てはルークの過ちから始まったこと。ならば自分で正さなくてはいけない。

どんなに彼女と戦うことが心苦しくて、自責の念に苛まれようとも。

「それに、キリトとユージオもいる。あいつらとなら、アリスを止めることだって不可能じゃない」

勤めて平静を装い、ルークはそう言う。

一見冷静な、だが譲れない熱を感じる言葉だった。

「……俺はその二人の実力をよく知らないが。イーデイスを相手取るってんなら、援護はできねえぞ?」

「それでいい」

「……そうか。なら、アリスの嬢ちゃんは任せる」

「ああ」

頷きつつ、ルークは心を引き締める。

あの可憐な少女が、どれほどの騎士となったのか。後悔とは裏腹に不思議な予感があつた。

それに、何も感情に任せてばかり言った訳ではない。ルークにはちよつとした秘策があつた。

（騎士たちはモジュールで記憶を封じられ、忠誠を植え付けられたと言っていた。それなら重要な記憶を刺激すれば、アリスを元に戻せるかもしれない）

以前の人格に強く根付いた記憶を呼び起こせば、モジュールを取り除ける可能性がある。あ

他でもない、彼女をそうしてしまった自分と、幼馴染であるあの二人なら、あるいは。そんな風に内心で画策する彼とは裏腹に、ライオットが険しい顔で凶面を睨む。

「最大の障害は、やっぱり団長だ。あの人をどうにかしなきゃ、アドミニストレータには辿り着けない」

「さつきから言っていたが、そんなに団長っていうのは強いのか？」

「人柄、カリスマ、実力、神器の扱い、すべて随一。この目で全力を見たことはないが……確実に俺や副団長より強いことは確かだ」

かなりの実力を自負するライオットでさえ、最強の整合騎士を降せる未来は思い浮かばない。

ましてやそれが修練の途中であるルークともなれば、勝てる気はしなかった。

「ああ、本当に厄介だ。いつそ直接アドミニストレータのところまで行けりゃいいんだがなあ」

椅子に体を投げ出し、大きくため息をつく。

そうして横目でスワロウを見れば、白き使者は苦笑する。

「申し訳ありませんが、私はカーディナル様との連絡役であり、他にも色々することがございますので、ここから動くことはできません」

「だろ。言うてみただけだ」

「じゃあ、団長のことは何も分からないのか？」

「いや。他の騎士達もそうだが、ある程度情報はある。そこから対策を立てよう」

それから、ルークは二人からもたらされる情報によって整合騎士達のことを学んだ。

各騎士の性質、神器の特性、配置された場所の詳細な情報……その内容は多岐に及んだ。

これを元に、整合騎士達へのキリト達も含めた戦略と対応が立案され、各自の意見によつて磨き上げていく。

会議は長時間に渡り続けられ、気がつけば二時間が経過していた。

「——と、整合騎士への作戦はこんなところか。後は当たって砕けろって感じだな」

「ライオット様、忘れてはならないことが二つほど残っています」
「そうだな……」

スワロウに指摘され、苦々しい顔をするライオット。
何やらおかしな様子に、ルークは眉を顰める。

「まだ何かあるのか？」

「ああ。整合騎士達他に、アドミニストレータを倒すに当たって障害がある。一つは元老院長だ」

「元老院長？」

「整合騎士団の上位にいる、アドミニストレータの定めた法を管理してる連中だ。ま、俺達以上に壊れ、道具と化した抜け殻さ」

「その長の名はチュデルキン。元老院を統括するに相応しい、人界最高峰の神聖術使いです」

「また厄介そうな相手だな……」

ただでさえ整合騎士という最強の剣士達が待ち構えているというのに、更なる難敵がいるとは。

これも課せられた試練かと覚悟を決めるルークに、張り詰めた表情でスワロウが人差し指を立てる。

「そして、もう一人。アドミニストレータの側にはとある存在が控えています」

「それは一体？」

「……わからん」

「……………何？」

分からないとは、どういうことだろうか。

口をつぐんでいるライオットに首を傾げ、ルークはスワロウを見る。

しかし、全知に等しい存在のはずの彼は力無く頭を横に振った。

「そいつは、常にアドミニストレータの側に仕えている。丁度こいつみたいな格好をしたやつだ」

「スワロウみたいって……『彼女』に作られたこの世界の機能つてことか？」

「私とはまた異なるようです。実力は不明。恐らくは、私がカーディナル様と共に潜伏した後に現れた人物と思われます」

「名は『ペーリツシュ』。肩書きは最高司祭の相談役だが、全く得体が知れねえ」

「アドミニストレータと戦うなら立ち塞がるのは間違いない、か」

整合騎士、元老院長、そして正体不明の相談役。

全て強敵だが、特に警戒すべきは一切の情報がない不気味な相談役であろうか。

「まあ、多々障害があるわけだ。どうだ？ 最後に一度聞くが、怖気付いたか？」

「——まさか。今更引くわけないだろ？」

「それを聞いて安心した」

力強く笑えば、ライオットもまた獯猛に笑って見せる。

スワロウも頼もしげに微笑み、三人の心は一つの目的を前に集結していた。

「さて。それじゃあさつき言った神器……俺達の場合は竜具の力を解放する術を教えよう。これがないと話にならねえからな」

「わかった。よろしく頼む」

「おう。がつつり鍛えてやるから覚悟しろよ？」

そうこなくちや、とルークは返答した。

桐谷和人にとって

ルークが決戦に備え始め、それと同じ頃。

大図書館の中で、キリトは変わらずカーディナルと向かい合っていた。

恙無く対話は終了した。

結果、キリトは彼女達への協力を了承した次第である。

「改めて、礼を言うぞ。キリトよ」

「俺にとっても、メリットが多い話だからな」

肩を竦めるキリトの言葉は、額面通りの意味を孕んでいる。

整合騎士達の様子を見るに情状酌量の余地はなく、このままだと強制的に彼らの同胞にされるのは確実。

加えて未来に迫る人界の危機を思えば、そこに住む友人達のためにカーディナルを打ち倒すしか道はなく。

アリスを取り戻すという、何故か他人事には思えない目的を果たすにも、そうする他にない。

何より、アドミニストレータは現実に繋がるコンソールを唯一所持しているというのだ。

現実への帰還を切望し、この2年を過ごしてきたキリトにとつての終着点もまた、無慈悲な管理者の先にあつた。

「今のうちに、他に聞きたいことがあれば言うが良い。これからは一刻を争う状況じゃからな」

そう言われて、キリトはふむと胸の前で腕を組む。

頭の中には多くの疑問が乱立し、けれどその全てを聞いては日が暮れてしまうだろう。

時間を無駄にすることは、自分も彼女達も決して望んでいないわけではなのだから。

キリトは、頭の中で質問を選択し、吟味して、一つ一つと削っていく。

いくつか絞った中で、最も上に滑りこんだのは——この世界で出来た、ある友人の
こと。

「……守護竜」

「む？」

「かつて四体存在し、人界の東西南北にあるダークテリトリーへの道を守護していたというユニークモンスター。それについて聞きたい」

ルークに起こった不可解な現象、明らかに優遇されたヒューマンユニット以外の生命。

この世界で異彩を放つそれへの不信と、疑問と、ゲーマーとしての少しの好奇心を込めて、キリトは問う。

対して、カーディナルは予想の範疇であったのか、鷹揚に頷いてみせた。

「うむ。良いじやろう。守護竜達の成り立ちは、アンダーワールドの始まりにまで遡る」
改めて説明を始めたカーディナルに、居住まいを正して聞く態勢に入る。

それを確認した彼女は、厳かな口調で語り始めた。

「先に語った通り、アンダーワールド人の魂というのは新生児のフラクトライトをコピーしたライトキューブにある。そして守護竜は、複数のフラクトライトデータを結合し、一つに統合することで容量を大幅に増大させた特別なフラクトライトの主じゃ」

「そんなことが可能なのか?」

人口フラクトライトとは、新生児の脳内にある天然のフラクトライトを電子的にコピーした代物。

それを結合するなど、果たして技術的に出来るのかと首を傾げるキリトに、賢者は鷹揚に頷く。

「あくまで完全な初期状態に限るが、出来ないことはない。処理には膨大な時間を要するじゃろうし、万が一破損でもしようものなら、その人口フラクトライト達はおそらく完全に使い物にならなくなるがの」

「随分とハイリスクな……でも、それだけ膨大な魂の持ち主つてことだな」

「人界とダークテリトリーの規模を比較した上で、確実に人間が生き残れるための特別措置というところじゃろう。そして、そのフラクトライトには特別なプログラムが刻まれておる」

プログラム? と鸚鵡返しに返すキリトに、うむとカーディナルは頷いた。

「彼らは、天命が尽き、肉体が死したとて、そのフラクトライトを初期化されることはない。非活動状態に入り、天命が尽きるまでのデータを保存した状態で休眠するのじゃ」「なつ……それじゃあ守護竜は、この世界で唯一の、本当の不死だつていうのか!」

「然り。そして同時に、フラクトライトの根幹……各守護竜の魂の芯に存在する心意パ

ラメータと完全に一致する他のフラクトライトと接触した時、再び活動を開始する」

「それが……」

「ルークと呼ばれる、お主の仲間……この世界でも唯一無二の心を持った、ヒューマンユニツトじゃ」

その言葉にキリトは驚くと同時に、不思議なほど納得してしまった。

ずっと、ルークに感じる特異性について疑問を抱いてきた。

それは幼いながらも禁忌目録に背いた、アリスという少女に感じたものと似通っている。

UW人の中でも、その個性が群を抜いている。思考も、在り方も、他から明らかに逸脱しているのだ。

それが彼の中にある心意——数度垣間見た、強靱なまでの守護の意思に端を発するものだった。

守護竜の心意。パラメータと完全一致しているともなれば、納得もできるというもの。

「偶然、なのか？」

もしや、ラーズが自分をこの世界に入れるにあたって用意した、いわば「仲間キャラ」

ではないのか。

あるいは彼こそが、この壮大なシミュレーションの中心にいる「主人公」ではないのか。

そんな思考が、ふと脳裏をよぎる。

疑問と、そうであつてほしくないという友人への不安を抱くキリトに……カーディナルは頷いた。

「完全な天然ものじゃ。両親から受け継いだ性質、育った環境に教育、そして経験……わしはお主に監視者シャーロットをつけてからしか見ておらんが。後にも先にも、全く同じフラクトライトが発生することはないじゃろうな」

「そうか……」

ホツと、胸を撫で下ろす。

全てが作られたものであるこの箱庭の中で、彼の善性までもがそうでなくて安心した。

彼の気高さ、その強さは、彼自身のものなのだと。

この二年で積み重ねた、彼と、そしてユージオとの記憶は紛れもなく大切なもので。

桐ヶ谷和人は、確かにルークという一人の人間に友愛を抱いているのだから。

「もしアドミニストレータが守護竜を討伐させずにおれば、あの少年は勇者として《青薔薇の剣》を授かり、かの白き竜の背に乗って人々を先導する立場にいたやもしれぬ」

「壮大なイフだな」

しかし、そうなるだけのポテンシャルを秘めているというのは彼も同意だ。

容易にその光景が想像できて、何故かキリトまで誇らしく思えてしまう。

だが、微笑む彼とは裏腹に、賢者の顔は浮かないものだった。

瞳は凧いであり、それだというのにひそめられた眉がキリトの不安を掻き立てる。

「……あるいは、そちらの方が良かったやもしれん」

「どういふことだ？」

すぐには答えず、カーディナルはティーカップの中身を一口啜る。

強調するように、カチャリと音を立てソーサーに戻した彼女は——キリトに告げた。

「このままでは、ルークは死ぬぞ」



「システム・コール。クリエイト・レストリクション・エリア。ユーズド・ハイ・リソース・ユニット……」

白き使者の言葉に従い、光が踊る。

静謐な図書館を、清らかとさえ言える美声で奏でられる詠唱が満たしていた。

宙を無数の書物が飛び交い、そのページが一人でに繰られて文字が浮き上がる。

それらは、全て神聖文字。くるくると舞う文字達は、互いに重なり、組み合わせあって

いく。

やがて一つの円陣を作り上げ、隅に本棚や机が寄せられた純白の地面に沈み込んだ。光達が、一つの舞台を生み出しているのだ。

複雑な術式が絡み合い、完全に舞台が完成した時、詠み手の声も止まる。

眩い光が消え、目を細めていたルークとライオットは顔を庇う手を下ろした。

「お待ちせいたしました」

そして、パタンと手元の本を閉じた白燕は、目を開くと彼らへ微笑みかけた。

「これにて完了です。お二人とも、どうぞ中へ」

「やっとか。待ちくたびれたぜ」

「ありがとう、スワロウ」

「お気になさらず。さ、時間はあまりございませんので」

促す彼の言われるがまま、二人は輝く円環の中へと足を踏み入れる。

すると、何重にもなった申請文字が回転し、浮上して半球状のドームを作った。

おお、と感嘆の声を漏らすルークへ、真剣な様子に改めたスワロウが口を開く。

「それでは説明を。これからルーク様には、二つの高位神聖術を習得していただきます。

その際に生じる、『白竜の剣』の影響を抑える為にこちらを用意させていただきました」
「ああ」

ルークも表情を引き締めて、その一言一句を聞き逃さないよう耳を澄ました。

「これは、アドミニストレータが己の天命を全盛期まで回復させた際に使った神聖術システムコマンドを擬似的に再現したものです。ルーク様に剣の影響が及んだ際、感知して肉体の変異を回復します」

「それは……凄いな」

「とはいえ、過信なさらぬよう」

息を呑むルークへ、釘を刺すようにスワロウは厳しい口調で言った。

彼は、白い手袋に包まれた右手を顔の横まで上げ、三本の指を立てる。

「私の権限では、この術は不完全です。当館に蓄積したりソースの六割を投入しても、三回が限界。それまでに必ず会得してください」

「……全力を尽くさせてもらうよ」

「その言葉が真実である事を願います」

スワロウへ頷き、ルークは正面へと向き直る。

待っていたライオットは、ようやくかと言わんばかりに担いだ『蒼龍の琴剣』で肩を叩いた。

「んじゃ、手短に済ませるぞ。これからお前に教えるのは、《エンハンス・アーマメント》と、《リリース・リコレクション》という術だ」

「それって……」

ふと、学院生時代の記憶がよぎる。

勤勉なルークは、苦手な神聖術については特に力を入れ、知識を深めた。

そして、教会から学院の図書室に収められた資料の中に、今口にされた術式の名があつた事を思い出す。

「その顔、心当たりがあるって感じだな」

「ああ。学院にいた時に読んだことがある」

「流石は第三席、勤勉だな。なら分かつてると思うが、こいつは特別な武具に宿つたものを呼び覚ます神聖術だ」

「特別な武具、か」

「一定以上の優先度と天命を持つ武具には、元となった存在の記憶が残っている。そして《エンハンス・アーマメント》……完全武装支配術は、その性質を最大限にまで引き出す術式だ」

武器の性質を引き出す術。教本で読んだ通りの、類まれなる高等な神聖術だ。

一度も使ったことのないその術式に、しかし何故だかルークは妙に馴染みのある感覚を得る。

「次に《リリース・リコレクション》。これは《エンハンス・アーマメント》のその先……記憶を完全に覚醒させ、一時的に極限の力を解放する奥義中の奥義、つてところだな」

「また、随分と難しそうだ」

「ああ。そして俺達担い手には、この術を使うことは禁じられている」

「何故？」

「まあ、端的に言えば……テメエの命と引き換えてことだよ」

短い言葉だが、その予想外の重さにルークは少し息を呑んだ。

先刻告られた担い手の宿命。暗黒領域に眠る破滅の竜王との因果。

それを乗り越える時までは、何があろうと決して死ぬ事を許されない。

必然的に、命を賭けるといふ竜の神器の《記憶解放術》は禁忌という事になる。

「要するに、お前が覚えるのは《エンハンス・アーマメント》だけ。《リリース・リコレクション》は頭の隅にでもやっつけ」

「分かった」

「よし。……んで、こっからが本番だ。お前も重々承知だろうが、俺達の武器……竜具に

は、記憶どころじゃないものが宿ってる」

「……竜の、心意」

その説明に、自然と腰の《白竜の剣》に手を触れていた。

——イイン

耳の奥に聞こえる甲高い音は、まるで自分の実在を証明するかのよう。

ここには確実に、四聖竜の一角の魂が存在しているのだ。

「心意と魂を宿した、神器の中でも特別な器。この武器を御し、力を発揮するのは至難の業だ」

「……お前でもか?」

「そうさな。会得し、習熟するのに五年はかかった」

「そんなに……」

天賦の才と破格の経験を重ねてきただろうライオットでさえ、長い時間をかけて修めたもの。

元より整合騎士達に劣っていることは自覚していたが、あまりの難題に少し心が揺れた。

不安げなルークの心情を読み取ったか、元氣付けるようにライオットは明るい笑顔を向ける。

「何も完全に扱えるようになれとは言わねえよ。だが、奥の手くらいは持つとかねえとな」

「……頑張るよ」

「うし。じゃあ、今から手本を見せてやる」

次の瞬間、ライオットの纏う雰囲気が変わった。

琴剣を水平に構え、最初に戦った時のように柄を両側に引き出し、刃の向きを揃える。光の弦が現れた所で、鏢の紋章に触れ——静かに唱えた。

「『エンハンス・アーマメント』」

——キイイツ!

その言葉を解き放った瞬間、《蒼竜の琴剣》が呼応した。

《白竜の剣》とは似て非なる音を発し、震える《蒼竜の琴剣》は青白い光を放つ。

変化はそれだけではなかった。

なんと、ライオットの右目が美しい翡翠に染まり、目元に青い逆鱗が現れたのだ。

自分に酷似した変異に目を見開く中、異様な雰囲気纏ったライオットはスワロウを見る。

「——頼む」

「仰せの通りに」

スワロウが指を鳴らし、どこからともなく金属製のハリボテを作り出す。

ライオットはそれに向けて、光の弦を一掴みに全て引き絞った。

連動して刃と刃の中央に、尋常でない音の刃が集合し、凝縮される音をルークの耳は聞き取る。

大気が震え、琴剣から伝わる尋常でない圧力を限界まで抑え込み、溜め込んで……

「フツ——」

射ち放つ。

解放された音刃の塊は、真つ直ぐにハリボテへ飛翔していった。

唸りながら進んだそれは、着弾とほぼ同時に抑圧されていたものを崩壊させ。

その一秒後——ハリボテは、甲高い音を立てて四方八方に爆散した。

「うわっ!？」

極小となつて飛び散つた金属片を、反射的に避ける。

目視できなかつたものは、音だけを聞き分けて頑丈な上着でやり過ぎした。

それから恐る恐る目を開けて……散らばつた無数の破片に、啞然とした。

「ま、俺のはざつとこんなもんだ。伝説に名高い、蒼竜の音刃の咆哮。どうだ？」

「嘘だろ、おい……とんでもないな、これ」

「これでもほんの四割つてところだ」

得意げに笑うライオットに、ルークは引き攣つた笑いを浮かべ。

改めて、自分がどれだけ手加減されていたのかを思い知つた。



「はっ？」

間抜けに目や口を開き、彼女の放った言葉を遅れて理解しようとする。

畳み掛けるかのように、人界一の智者は淡々と言葉を述べていった。

「正確には、ルークという人格を形成するフラクトライトが、じゃな。記憶も心も失い、
いずれ新たな竜の肉体として、ただの器になるじやろう」

「……………どう、いう。一体……………どういう、ことだ」

なんとか混乱から脱し、しどろもどろに言葉の意味を問い質す。

それまでの楽観的な気分は吹き飛ばされて、只々その真意を知りたかった。

「先に述べたとおり、守護竜のフラクトライトは通常のそれと比べ、十数倍の容量を持つ
ておる。つまり、このUW内において非常に強大な力を持っているということじゃ」

「具体的に、どういうものなんだ？」

「例えば、膨大な天命。例えば、千年を超える記憶領域。例えば、天変地異をも起こしうる無限の神聖力……それに、強靱無比な心意。他にも数え上げればきりが無い」

肉体、権限、寿命。その全てが、UWに存在するありとあらゆる生命を遥かに凌駕している。

アドミニストレータとも正面から互角以上に殺しあうことのできる、まさしく最強の生物。

そして当然、知性を秘めた強大なフラクトライトである以上……

「その心意は、到底ヒューマンユニットが一人で受け止めきれるものではない」

「っ……………」

「おまけに、奴らのフラクトライトは不滅じゃ。意思のみの存在になった今、あらゆる衰えから解き放たれ、常に全盛の状態を發揮し、繋がったフラクトライトに影響する」

「……………ルークじゃ、それに耐えられないってことか」

「たとえアドミニストレータやわしであろうと、御するのには数十年の時を有するであろうよ。竜の意思に認められ、向こうから対等に接することでもない限りな」

付け足すように言われた言葉に、キリトはある一つの名前を思い浮かべる。

整合騎士ライオット。

別の守護竜の担い手にして、アドミニストレータに叛意を抱く協力者。

スワロウと共にいるという彼は、その神器に宿った竜の力を完璧にコントロールしているという。

「まあ、奴は特別じゃ。成熟した精神と、人界最高峰の権限を備えていたからの」

「でも、ルークは違う……って言いたいのか？」

「そうじゃ。所詮、十数年しか生きておらぬフラクトライト。整合騎士のように長年研鑽を積んでもいなければ、わしや奴のように飛び抜けた権限を有しているわけでもない」

つまり、実質的に今のルークでは適応することは不可能なのだ。

（まさか、今までの不自然な言動は——）

北の洞窟の時。ライオスを斬り捨てた時。

少しづつ変容し、何かが混ざり合っているかのように感じていた。

もしかしたら、今この瞬間も……

キリトは、全身の肌が粟立つように錯覚する。

「あの守護竜の一部から作られたオブジェクトを使用する度、侵食は進んでいくじやろう。最後には……」

命を落とすことはなくとも、ルークはルークでない何かになる。

学院での最後の朝、彼自らがアズリカに向けた言葉の意味を真に理解し、表情を歪めた。

「……あいつは、それを分かかって」

「あえて使っておるのじゃろうな。シャーロットを通して見ておったが、あれは目的のためなら自らのことなど全く顧みぬ類の人間だろうよ」

「くっ！」

思わず、キリトは握った拳をテーブルに叩きつける。

後悔が胸の中で渦巻いている。

気付けなかった。いや、本当はずっと気付いていたのに、踏み込まなかった。

彼はUW人だから、自分は現実に帰るから……そんなふうに考えて、一歩引いた場所にいたのだ。

「俺は……あいつを友達と言っておきながら、知ろうとしてなかったんだ」
そこにはどこか、どうせデータの存在なのだからという冷たい思考もあつたかもしれない。

現実世界から来た以上、どうしても拭えない意識。それはUW内でキリトの精神的自律をある程度保っている。

だが、今だけはそれが仇となった。

「悔やんでおるか？」

試すような問い。そこにはキリトの心の強さを測ろうとする色がある。

それを薄々と察して……自分のつま先を見ながら、キリトは口を開いた。

「……ルークはさ。すごいやつなんだ。ルーリッドの村でも、学院でも、頼りにされて、いつも誰かを助けてて。ユージオや俺を引っ張ってくれた」

キリト……否、和人にとって、それは初めての体験だった。

アインクラッド、ALLO、GGO、オーディナル・スケール……これまでくぐり抜けてきた、多くの戦い。

その中において、彼は常に“戦わなければいけない”人間だった。

自分のため、愛する人のため。仲間と力を合わせ、自分を奮い立たせ、先陣を切ってきた。

「頭が良くて、誠実で、努力家で。誰にでも優しくて……いいやつなんだよ」

「そうか」

「ユージオだっていつも言ってる。ルークは、小さい頃から自分の憧れだって。いつか恩返しをしたいって」

いつしかそれが、桐ヶ谷和人にとっての当たり前前になっていた。だから。

誰かが自分の前に立って、何かから守ってもらおうということとは久しい経験だったのだ。

現実ではまだまだ庇護されている両親とも違う。隣に並び立つ仲間とも違う。

ある時、その背中を見てふと思った。

もしも自分に兄がいたのなら、彼が良かったのに——などと。

「なのに、あいつが……っ……あいつが、どうして…………っ！」

ルークは……桐ヶ谷和人にとって、掛け替えのない、甘えられる存在だったのだ。

そう震えるのは声だけではなくて、全身に怒りと悲しみが行き渡っていった。

「……お主は優しいな。現実の人間からすれば、我らなどデータの集合体でしかないというのに」

「そんなの、関係ない。ルークも、ユージオも……他の皆も、今は俺にとって大事な人達だ」

割り切るには、関わりすぎてしまった。

そんな少年に、カーディナルは何か眩しいものでも見るような目で小さく微笑む。

僅かな時間口角を上げていた彼女は、すぐさま老獪な雰囲気纏い直すと口を開いた。

「ならばこそ、キリトよ。力を付けるのじゃ。そしてアドミニストレータを打倒し、これ以上ルークが戦う必要をなくしてしまえばよい」

「……ああ。あいつにだけ任せることは、二度としない」

ふっと深呼吸をして、表情を引き締める。

黒の瞳に決意を宿し、新たに覚悟を決めた顔をするキリトであった。

「その意気じゃ。お主達には心身共に憂いなく戦ってもらわねばならぬ」

「心配かけたな」

「なあに、気にするな。わしとて少し気がかりだったのじゃ」

あれほど稀有なフラクトライト……否、この世界における人間の魂は、消えるには惜しい。

キリト達ほど思い入れがあるわけではないが、純粹な善意として案じてはいるのだ。

「では早速、ユージオを呼びに行くとするかの」

「ああ」

そうして二人は、長らく語り合っていた机を離れ、その場を後にした。

白き牙の真髓

「いいか。この術の重要な所は、神器のイメージを汲み取ることだ」

ハリボテの残骸が片付けられた後、早速具体的な説明が始まった。

先の一撃で、竜具の力の可能性を垣間見たルークは一言一句聞き逃さぬよう耳を傾ける。

「元となった性質、属性、能力……それらを見出した時、神器を完全に支配することが叶うんだ」

「全てを見出す……」

「一つの助言として、俺達の場合は竜の伝承がそのきっかけになるかもなるほど、と頷く。」

人界中に知られる守護竜の伝説。そこには四匹の竜の偉大さを表す逸話があった。

例えば、彼の琴剣……双角の主であった大いなる蒼竜は、音を自在に操ったという。

その最強の技である音刃の咆哮は嵐にも勝り、一息で山をも削り取った。ライオットの放った一撃は、その記憶を具現化したものであろう。

他の竜にも、同じように大それた力が言い伝えられていた。

赤き蛇竜は、ソルスの光を力に変え炎を纏い、湖すら焼き尽くす吐息を吐いた。

黒き翁竜は、神に等しい膨大な天命と深い智慧を持ち、その涙や血には治癒の力が秘められていた。

では、最も気高きものと謳われた白き竜は？

「よく思い出せ。そして、竜具と繋がるんだ。そうすれば自ずと、心の中に確固たるイメージが浮かんでくる」

「……やってみる」

頷き、早速イメージを始める。

目を閉じ、暗闇という無の中に自分を放り込むことで意識を集中した。

(確固たるイメージ……白き竜の伝承)

『ベルクーリと北の洞窟の白い竜』。

最初に思い浮かんだのは、ルーリッドの村で昔から語り継がれる有名なお伽噺。

ある日、村一番の剣の使い手だったベルクーリは北の洞窟へ冒険をしに行き、そこで美しい剣を見つけた。

しかし、その守り手であり、ダークテリトリーへつながる道を塞ぐ守護者である白き竜と対峙した。

だが、結局竜とベルクーリがどうなったのかは定かではない。それに白き竜は骸と果てていた。

他にも、思いつく限りの白き竜の伝承を懐古して……だが、糸口らしきものは無かった。

ただ純粹に、気高く、強いということだけが言い伝えに残されている。

(ダメだ。他の竜のように、特別な“何か”が伝承として残ってない)

過去の物語をあてにするのを早々に諦め、次に想起したのはかつての記憶。

シャーリーと仲違いし、その末に認められた時に相見えた、かの竜の姿。

勇壯で、美しい。

この世で最も壮麗なものを見た、心の底から感じた。

純白の鱗も、人の身ほどある鋭い爪も、仄かに青く染まった皮膚や、黄金の眼だつて

——イン。

「——あ」

何かが、闇の中で白く輝く。

その光に導かれるまま、自然と体は動き出していた。

左手が腰にあつた鞘の根元を掴み、右手の五指が柄の上へそつと乗せられる。

すると、肌を通して《白竜の剣》から共鳴が全身に行き渡つていくような感覚を覚えた。

囁くように、内側から体を震わせる鳴動に心を任せ——

バキツ……………

光が、消えた。

突如として霧散した白光を不思議に思い、目を開いてみる。

すると、ひどく強張った表情のライオットや、その向こうにいるスワロウがいた。

「……………？」

一体なんだろうと、彼らの視線の先……《白竜の剣》を握った自分の右手の辺りを見て。

「……………え？」

完全に変異した、竜のような右手に掠れた声を上げた。

遅れて知覚が働き始めたのだろう。脳が情報を処理すると同時に、壮絶な激痛が走る。

「ぎツ……………い、あつ……………!!」

(い、たい！ 痛い痛い痛いイタイイタイツツ!!!??)

表面を覆う白い鱗に、空気が触れるだけで骨を粉々に砕かれたかのような痛みが走る。

果たして、一瞬で変質したが故なのか。

ブルブルと小刻みに震え、骨や筋繊維、神経に至るまで、全てが痛みを訴えた。尋常でないそれに、思わずその場で膝をつく。

「っ、いけない!」

歯を食いしぼり、痛みに堪えるルークを見て、ようやく再起動したスワロウが結界を起動させた。

即座に発動した結界内部に光が迸り、ルークの体を染め上げる。

たつぷりと十秒間、光は放たれ続け、やがて巻き戻すように消えていった。

目を細めていたスワロウは、光が止むのを待つと中の様子を確認する。

「——っ……………はあ、ふう……………ふううう……………」

ルークの右手は、元に戻っていた。

引き攣った呼吸を落ち着かせていく彼の姿に、ほっと胸を撫で下ろす。

「……………ありがとう、スワロウ。おかげで助かった」

「いえ……………よもや、結界が発動するより早く変異するとは。予測できなかったことをお詫びします」

まさか自分の分析を上回るとは考えておらず、スワロウは所在なさげにした。

苦笑いを浮かべながら、右手を握ったり開いたりしつつルークは立ち上がる。

「まさか、そこまで顕著に反応が出るとは……………恐ろしい竜具だ」

「だが、おかげで少し掴めたものがある。次は上手くいくかもしれない」

「……………いざとなれば、やめた方がいい。それでお前が死んだら元も子もないからな」

「お節介なやつだな。でも、ありがとう」

巖のように眉根を寄せる騎士に礼を述べながら、再び瞑目する。

(さっきので、なんとなくイメージは掴んだ。高い代償だったが、幸いあと二回は機会がある)

意識を切り替え、痛みを恐れ震える体を抑え込んで集中を始めた。

再び暗闇の中に描くのは、あの白き竜の姿……かの意思が形をとった、心意の形。

(瞳……そう、瞳だ。あの時何よりも印象に残ったのは、それだった)

闇の中でなお鮮烈に輝く、月よりも静寂な光を持つ瞳。

まるで、全てを見通し、射抜くかのようなあの瞳が、何よりも魂に焼き付いていた。

(……あれ?)

そこまで考えて、チリツと思考に擦るようなものが生まれる。

瞳。それを強くイメージすればするほど、何か既視感のようなものを覚えたのだ。

見抜き、見定める瞳。余分なものを削り、飾らない言葉を想像すると、何かがい出される。

頭の奥に沈み込んだそれを引っ張りだそうと、少し焦って……

バキツ

また、失敗した。

瞬く間も与えずに、一度耳にした異質な音が響いて目を開いた。

見下ろせば、また腕が変形している。今度は一度目よりも早く痛みがやってきた。

「ぐっ………！」

「すぐに処置を」

指が鳴らされ、結界が発動してまた光に包み込まれる。

それが消えれば、腕は元通りに。

しかし、苦悶に歪めていた顔を穏やかに戻すルークの目には、何かがあった。

「……ルーク様。あと、一度になります」

「……分かつてる」

「それで十分、つて顔だな？」

ゆつくりと、隣にいるライオットを見る。

彼は、先程の表情とは一転して、何か面白そうに口元に弧を描いていた。

変わらずルークの身を案じてはいるものの、それだけではない期待のような色が見え隠れする。

「ああ。次は、やれる」

「なら、やってみろ」

今一度強く頷き、ルークは三度みたび睨を下ろした。

「フゥー……………」

まず、深く息を吸い、同じだけの時間を用いて吐き出す。

そうすると、闇の中に閉ざされた自意識をより深い場所の中へと落とし込んでいった。

深く、昏く……深淵とも呼ぶべき、意識の底。

そこまで意識を沈めて、ようやく思い出せるものがある。

(……ライオスを斬り捨てた、あの時。俺は、奴の胸の内にあるものが見えていた)

それは、どこか僅かにあつた罪悪感から、わざと臆げにしていた記憶。

後輩の尊厳を汚し、キリト達を害そうとした、全てを飲み込もうとする醜悪な黒い渦。それがライオスの胸の中心に、はつきりと見えていたのを思い出した。

(もしあれが、奴の本質……ライオス・アンティノスという人間を形作っていた、意思だとしたら)

ルークが斬ったのは、ライオスの生命や、肉体だけではなく……

「……スワロウ。的を」

「……畏まりました」

静かな、だが底知れぬ何かを秘めたルークの声音に、神妙な顔で使者が頷く。彼の前に、ライオットが使ったものと同じハリボテが金素から精製された。

目の前にその存在を感じ取り、ルークはゆっくりと腰を落とした。膝を曲げ、上半身を軽く屈ませると、腰だめに《白竜の剣》を構える。

（——いける）

ピタリと姿勢を完成させた時、確信が生まれた。

恐ろしいほど静かなその佇まいに、静観していた二人も何かを感じ取って一歩下がる。

闇の中、ルークはいよいよ全ての雑念を捨て去った。

（意識を研ぎ澄ませ。余念は要らない。ただ、ただ。鋭く、素早く、疾く——）

「——『エンハンス・アーマメント』」

——その瞬間。

誰も、刃が抜かれたことを知覚できなかった。

ライオットも、スワロウも。ルーク自身でさえも、認識していなかった。

キ
——
イイン。

気がつけば、音が響いて。

瞬きをしていないにも関わらず、不思議な意識の隙間が過ぎ去った時。

ルークは、《白竜の剣》を振り抜いていた。

「……………」

無言で、目を見開く。

ゆつくりと、いつそ緩慢なほどの動きで、姿勢を元に戻す。

抜き身の《白竜の剣》を持つ右手を見れば、先ほどまでのように変異していることはなく。

次にハリボテを見れば——やはり、何事もなかったかのように鎮座していた。

ルークは自然な足取りで、ハリボテに近づいた。

目の前までやってくると左手を伸ばし、その指先で金属の塊に触れる。

すると、思い出したようにズルリとハリボテが斜めにずれて、上半分が零れ落ちた。

激しい音を立て、地面にそれが転がる。それをライオット達は啞然とした顔で見ている。

ただ一人、何かを得たように残骸を見つめる彼を除いて。

「……そう、か。そういうことか」

斬れなかつた。

いいや、最初から斬るものがこのハリボテには宿っていないかつた。

だからこそ、この《白竜の剣》に秘められた性質を、はつきりと自覚することができた。

「……ありがとう、ライオット。スワロウ」

ハツとして、二人は我を取り戻した。

やっと夢から覚めたような気分で、声の主に意識を向ける。

そんな二人に振り返ったルークは。

「おかげで、この剣の真髓が理解できた」

少し、その色を濃くした黄金の右目と灰色の左目を弓なりにして、そう笑った。

ライオットの背筋に大量の冷や汗が浮かぶ。

この世界の人間とは異なるはずのスワロウですら、一筋の冷たい雫が頬に浮かび、流れ落ちた。

「……………おい。今のは、なんだ？」

「……………私ですら、推測するしかありませんが」

そこで一度、スワロウは大きく喉を鳴らした。

まるでその先を言うことを恐れているように、だが答えないわけにはいかない。意を決して、ライオットにそれを告げる。

「ルーク様は、魂を斬ろうとした。正確には心意を、でしょうか」

「……………マジか？」

「私は漠然としたものでしたが、貴方様ははつきりと感じたのでは？ 己という存在が、

一刀のもとに切り捨てられる錯覚を」

否、と答えることができなかつた。

彼の言う通り、確かにその恐ろしい感覚をライオットは得ていたのだから。

——カカツ。あの小僧、やりよったわ

脳裏に、普段は語らぬ“相棒”の愉快そうな声が響く。

寡黙で、滅多に己を表さないその竜の意思に、ライオットは眉を顰めた。

(あれを、知ってるのか?)

——応とも。あれこそは我が同法はらからの絶技。暗黒領域の有象無象をひと撫でに塵殺せしめた、御魂斬りよ

確かに帰ってきた答えに、大きく体を震わせる。

何故なら、その言葉が真実なら。

「あいつは……あいつの力は、危うすぎる」

(振るわれる相手にとつても、ルーク自身にとつても。あの力を自在に操れるようになれば、一撃で相手の魂を刈り取ることも、心だけを斬り、生きる屍にすることさえもつ

—！)

ある意味、アドミニストレータすら匹敵しうる。

その力を目覚めさせてしまったことに、喜びや達成感よりも先に、恐れを抱いた。

整合騎士になって幾星霜、長らく覚えることのなかつた原始的な恐怖を目に乗せ、
ルークを見据え……

「う……………」

「っ!?! おい、ルークっ!?!」

突然崩れ落ちた少年に、反射的に駆け寄る。

慌てて肩に手を置けば、《白竜の剣》を支えに膝をついたルークは汗だくの顔でぎこちなく笑った。

「ご、めん。これ、結構、キツイ、わ」

「っ…………馬鹿野郎。無茶しやがって」

「それ、くらい、しないと…………何も、守れ……………な……………」

「うおっ!?!」

最後まで言い切る前に、ルークの体が倒れこんできた。

迫ってきた抜き身の刃に飛び退けば、倒れ伏した彼は剣を手放してしまう。

そのまま動かなくなったルークに、恐る恐るといった体でもう一度近付いた。

リソースが底を突きかけた結界を解除し、スワロウもやや警戒しながらやってくる。

「すう……………すう……………」

「……………寝てやがる」

「極限の集中と、影響の抑制。その上で竜具の力のみを引き出したのですから、相当に堪えたのでしょうか」

「つたく……………末恐ろしいんだか、年相応なんだか」

一見穏やかにも見える顔で寝息を立てる少年に、ライオットは複雑な顔で後頭部を掻いた。

そんな彼に同意するように苦笑しながら、スワロウはルークの体を起こし始める。

「ひとまず、安静な状態にしましょう。ライオット様はその剣を」

「おう」

軽々とルークを担いだスワロウを見送り、ライオットは床に転がった《白竜の剣》を取る。

同じ担い手である為、拒絶されることなく手の中に収まった。

「……………頼むから、ルークがやり遂げるまではあいつを喰い尽くさないでくれよ」

——あの小僧に愛着が湧いたか？

「まあ、な」

脳裏の声に口で答えつつ、ライオットは二人の後を追いかけるのだった。

出立

「……………む」

異変を感じ、騎士は目を開く。

現れた銀眼が、己の両手が握る黒盾をじっと見下ろした。

オオオオオ……………

震えている。何かを騎士へ伝えようとするかのように。

その共鳴、盾に秘められた黒き翁竜の心意へ、騎士は目を閉じて繋がった。

瞼の裏へ浮かぶは、白銀の翼。

美しく、勇壮で、猛々しい。

だが、夥しい血に濡れ、それに比べて小さな少年の背から伸びた、竜の翼。示された答え——未来を覗くに等しい予測に、ゆつくりと開眼する。

「……己が想いで、己が身を滅ぼすか。若き者よ」

その意味を理解し、未だ健在なる翁竜の叡智に騎士は眩いた。

守護竜は、この世にたった四柱の真竜。故にその魂に繋がりを持ち、互いを感じる。

その力を以って翁竜の意志は告げたのだ。

最も新しき担い手に、危機が迫っていると。

「許さぬ。己が願いに溺れ、その使命を果たせぬことは、決して許されぬ」

騎士は猛る。

誰より永く、己が復讐と同じほどにその使命と向かってきたが故に。

ならば、如何なる決断をすべきか。

「決まっている。見定めねばならぬ」

騎士は、来たる決戦に備え、休ませていた巨躯を立ち上がらせた。

呼応するように鎧の吹き上げる炎が強まり、闘争の気配に歓喜するが如く火花を散らす。

「……………」

騎士は手を開き、中に握り込んでいたものを露わにした。

純白の羽根。万物を焼き焦がす炎の中にあつて形を損なわぬ、使者の招待状。

天を衝くカセドラルへの片道切符たるそれは、然るべき時に使うべきもの。

騎士にとって、今がその時である。

「許せ、古の使者。我が誇りにかけて、同胞を見極めねばならぬのだ」

躊躇なく、その羽根を握り潰した。

炎の中に消えたそれは、固く握られた手の中で眩い光を放ち。

火山の一角が、純白の輝きに染まった――。



「……………」

微睡みの中から、灯りをつけたように意識が浮上する。

薄ぼんやりとした意識を支える為に頭へ手をやりながら、ルークは起き上がった。

「あれ……………俺は……………」

「よう、寝坊助さん。気分はどうだ？」

「ライオット……？」

緩慢に声のした方を向けば、そこにいた緋髪の騎士は悪戯げに笑いかける。

ルークが横になっている長椅子のへりに腰掛けていた彼は、手の中の本を閉じた。

「俺は……寝てたのか」

「丁度俺が、こいつを半分読み終える程度にはな」

ゆらゆらと手の中で揺らされる赤い装丁の本に、ルークは目を凝らす。

表紙に金字で書かれたのは、《R i o t S t o r y》の神聖文字。

「それは……お前の記憶か？」

「まあな。で、そろそろ意識がはつきりしたか？」

「ああ……俺としたことが、無駄に時間を浪費しちゃった」

強く頭を左右に振り、完全に眠気を振り払って立ち上がる。

長く寝ていたので一瞬立ちくらみがするも、変質した足は以前よりバランスを取るのに優れていた。

前の三本と踵の一本、四本の鉤爪でしっかり体を安定させ、その場に立つ。

「経過したのは、一時間くらいか？ 状況はどうなってる？」

「さつきカーディナルと連絡を取ってたスワロウの話じゃ、お前の仲間はとっくにカセ

「ドラルに入ったそうだ」

「何だつて！ それなら早く、俺達もいかないと！」

自分の失態を悔いるように齒噛みし、ルークは今すぐに出発しようとする。

だが、妙に左腰が軽いことに気がついて見下ろす。

そこに吊るしたはずの愛刀はなかった。一瞬困惑して、無意識にライオットの方を向く。

「ライオット。俺の剣は？」

「……ほらよ」

体の奥に隠すように立てかけていた《白竜の剣》を、ライオットが取り出す。

差し出されたそれを受け取ろうとして……強く握られた手が、それを妨げた。

「……なんのつもりだ？」

「……ルーク。さつき教えた、《エンハンス・アーマメント》だが」

そこで一度、ライオットは言い淀む。

一刻を争う気分であるルークは焦るように、少し苛立った表情をした。

それを見たライオットは、口元を引き結んで何かをぐつと堪え、絞り出すように続き

を言った。

「……本当に、いざという時だけ使え。どうしても自分の力だけじゃ勝てなくなった時に、使うんだ」

「今更何を……元々奥の手だつて言つてただろ？」

「それはそうだが……とにかく、約束しろ。決して安易に使うな。いいな？」

強く念を押してくるライオットが、ルークは少し動揺する。

以前と違い、ちゃんと眠つてしまう前のことは覚えていて。

《白竜の剣》の力も、その強大さもはつきりと認識していて、だから脅すようなその文言に込められた意志に気圧された。

「わ、分かつたよ。使い所は見極める。ほら、もういいだろ？ キリト達を追いかけないと」

「……そうだな。これ以上、無用な時間は使えねえ」

ようやく観念したように、ライオットの手が《白竜の剣》から離れる。

そんな彼の態度を未だ不可解に思いながら、今度こそ手元に戻つてきた愛剣を腰に履いた。

それから、ライオットの先導で相変わらず迷路のような図書館の中心まで戻る。

そこには既に、光の扉を用意したスワロウが真剣な顔で待ち構えていた。

「お待ちしておりました。あまり時間は残されておりません」

「すまない、また手間をかけた。それで、何か他に聞いてないことは？」

「では、最後に一つ。整合騎士の奪われた記憶についてお教えしましょう」

これが最後のひとつと言わんばかりに、人差し指が立てられる。

「敬神モジュールが埋め込まれた騎士は、その部分にあつた最も重要な記憶を抽出されています。無事打ち倒し、モジュールを排除したとしても、それだけでは元には戻りません」

「じゃあ、どうしたらいい？」

「単純なことです。奪われた記憶を、元の場所に戻せばよろしい。そして用心深いアドミニストレータは、それを己の手で管理しています」

「分かった。具体的な場所は？」

「残念ながら、詳細には分かっておりませんが……長年の調査から推測し、おそらくはカセドラル最上階——彼女の居室かと」

立てられたままの指が、今度は頂点を示すように天井へ向けられた。

好都合だ。アドミニストレータを打倒すれば、一緒にアリスの記憶を取り戻せる。

そして……

「つまり、やることは二つ。モジュールの除去。そしてアリスの記憶と、ライオットの記憶を取り返せばいいんだな？」

「ルーク、お前……」

驚きに表情を変える騎士に、少年は少し照れくさそうに微笑んだ。

「これだけ色々世話になって、礼の一つもしないのは人として駄目だろ。お節介だろうが、やらせてくれ」

「……つたくー！ 可愛い後輩だよ、お前はー」

ルークの頭を乱暴に撫で回すライオットの笑顔には、どこか嬉しさが滲んでいた。

ひとしきり髪をもみくちやにされた後、再びスワロウへと向き直る。

静かに待ち続けた彼は、その手をルークへ差し出した。

少し息を吞んで……しっかりと、手袋に包まれたその手を握り返す。

「行つてくる」

「……どうか、よろしくお願いします。我らの悲願を、貴方達に託します」

「しかと受け取った」

二人は揃って頷き、スワロウもどこか安心したように微笑んで。

それ以上の会話はなかった。

ルークとライオットは、もう一つの迷いも持たず光の扉へ走り込む。

この図書館にやってきた時の焼き直しのように、閃光が全身を包み込んだ。



その輝きの先へ走り抜け、超えた先には——カセドラルの廊下があった。

二人は周囲を見渡す。

傷だらけの壁や床、後ろを振り向けば消えた光の扉があった場所には大きな扉。

「ここは、武器庫の前か」

「みたいだな。だが、俺達より前に誰かが入ったらしい」

二人が最初に出会った時と異なり、武器庫の扉は全開になっている。顔を見合わせ、武器を構えると中へと踏み込んだ。

室内は静寂に包まれている。

鎧や衣服、武器が整列して並び、作り上げられるのは不思議と張り詰めた雰囲気。無音の武器庫を奥まで進んで、そこでようやくやく変化が現れた。

「……黒いやつと、《青薔薇の剣》がない」

「服もいくつか持ってかれてるな。それに、こいつは……」

ライオットが手に取ったものを、空の台座を眺めていたルークも見る。

傷だらけで、今にも天命が尽きてしまいそうな、丁寧に畳まれた青と黒の衣服。

見慣れた上級修剣士の制服だ。その持ち主だった者もまた、馴染みの相手である。

「キリトとユージオのだ。あいつら、ここに来たらしい」

「装備を整えてから、上に進んだようだな」

「それなら尚更追いかけないと」

「ああ」

検分を済ませた二人は、武器庫を後にした。

扉から出てすぐ、目の前にある大きな階段から上へと昇っていく。

「っ、待てー！」

「！」

だが、中間にある踊り場に出たライオットが突き出した手にルークも立ち止まった。反射的に剣に手をかけると、ライオットは目配せしながら手を下ろす。

警戒しつつ、彼の隣に並んで……そこにある光景に息を呑む。

「これは……整合騎士、か？」

壁に倒れ込むようにして俯いている、真紅の鎧に身を包んだ中年の騎士。

鎧と同じ色の髪はきつちりと後ろで結ばれ、渋い顔立ちが厳格さを感じさせる。

しかし、その騎士は半ば体を氷漬けにされ、大きな怪我をこさえて眠っていた。

「……デュソルバートの旦那」

「こいつが？」

ライオットの呟きに息を呑み、もう一度整合騎士を見下ろした。

件の、かつてルーリッドの村にアリスを捕縛しにやってきた騎士かもしれない人物。

気を失っているので声はわからず、座り込んでいて身長も定かではない。

だが、あの日の記憶の中の騎士と、その体格は似通っているような気がした。
「ッ……………」

一瞬。激しい感情が、心を埋める。

沸き立つような怒り。粘りつくような憎しみ。何年もかけて熟成された、強い怨嗟の念。

思わず、軋んだ音が鳴るほど《白竜の剣》を握りしめる。
今なら容易に殺せる。あの日の騎士が彼ならば、首を刎ねなくては。

（何が正義の徒だ。何が偉大なる整合騎士だ。お前のせいで、俺の大切なものは全部——ッ！）

その親指が、音を立ててて鐔を切った。

「尋常じゃない威力だな……………ただの神聖術じゃない。神器の力だ」

まさに、渾身の居合を放つ瞬間。

真つ暗に染まっていた意識が、ライオットの眩きで正気に戻った。ゆつくりと、剣を抜きかけている自分の両手を見下ろして。

(……俺は、今。何を考えていた?)

冷や汗が背中に浮かんだ。

戒めていたはずの激情が、枷を外したかのように溢れ出た。

己の正義にそぐわないものは何人でも滅ぼせ——どこか、そんな囁きが聞こえた気さえた。

(駄目だな。まだまだ未熟だ)

少し前まで自分を支配していた、昏い感情を深呼吸して押し流す。

今はそんな場合ではないと。そう改めて何重にも鎖をかけ、心の奥に沈め、剣を収めた。

「……もしかして、あいつらが?」

「だとしたら、お前の弟分どもはそれなりにやるようだな」

いずれにせよ、この状態では何もできない。

少し後ろ髪を引かれる思いになりつつも、切迫した状況を思い出してその場を後にした。

「今更なんだが、そのキリトやユージオってのはどういうやつらなんだ？」

大階段を上へ上へと走り抜けながら、ライオットは隣を走るルークへ問いかける。

彼としてはあまり戦力としてあてにしていなかったが、先の光景を見て気が変わったのだ。

ルークは横目で一瞥して、すぐに前へ目線を戻しながら口を開く。

「俺の生まれ育った村からの付き合いだ。ユージオは幼馴染で、キリトはある日ふらつと現れた」

「確か、北の洞窟近くの辺境だったよな」

「そうだ。ルーリッドっていつて、平和な村だよ。慎ましくも支え合って暮らしてた」
ルーリッドの風景を思い出す。

和やかな街並みや、優しい人々。自然溢れる村の周辺や、母の顔を脳裏に描く。

生まれてから十数年暮らした村を鮮明に想像して、淡く微笑んだ。

そんな顔を見て、どこか優しげに……少し羨ましそうに、ライオットも笑う。

「随分と故郷が好きなんだな」

「ああ。俺は村の衛士だったんだが、昼になると親の手伝いを終えた子供達がやってきて……」

「……………？ ルーク？」

急に口を噤んでしまった相棒に、ライオットは不思議そうな顔をする。

そして、彼の横顔を覗き見て——息を呑んだ。

酷く、何かにショックを受けたような顔。

口の端や目元が震え、瞳孔は開いて、血色が少し褪せている。

「……………思い、出せない」

「何？」

「思い出せないんだ。あの子達の顔を、名前を……………忘れるはずが、ないのに」

「——ッ！」

「おかしいな。なんでだろう、まるで、水がこぼれ落ちた絵の具みたいにグチャグチャで

……………」

ルークの頭の中で、その記憶は抽象的にしか思い浮かばない。

かけがえのないもの思っていた、純真無垢な笑顔が、声が……全て、滲んでい

「ごめん。色々あつて、頭がこんがらがってるみたいだ。落ち着いたらまた話すよ」

「……………そう、か」

ライオットは、彼に見えないように、そつと唇を噛み締めた。

それから一分も経たないうちに、また新たな変化が現れて二人は止まる。

「今度は……血溜まり？」

「二つあるな。そして血痕が上へ続いてる……」

赤いカーペットに黒くシミを作っているのは、人間の血だった。

それは一直線に上の段へ向かっており、誰かが引きずられていったことを如実に物語っている。

「まさか、キリト達の……っ！」

「他に大きな血痕や戦いの跡は見受けられない……とすると、何かしらの手段で弱らせて、連れていった？」

「っ、行くぞー！」

「おう」

これ以上の状況判断は困難と感じた二人は、血痕を追って再び足を踏み出した。



終わりが見えないのではないかとという程、延々と続く階段。

だが、事前の打ち合わせでその終着点をルークは知っている。

五十階層、大回廊。そこが塔内で唯一の移動手段であるこの階段の終わりだ。

(もしつ、もしあの二人が既に死んでいたら——ッ！)

高鳴る心臓と積み重なる焦燥。脳裏をよぎる最悪の光景。

それら全てを無理やり押し込めながら、二段飛ばしで《靈光の回廊》を目指す。

「ライオットツ！ 回廊に待ち構えてる可能性が高いのは、整合騎士団副団長と《四旋劍》だったな！」

「ああ！ だが、それがどうした！」

「そいつらがキリト達を連れ去ったって可能性は！」

「ありえねえ！ 副団長はちよつとばかし難しい事情を抱えちゃいるが、高潔な騎士だ！ 副団長に師事してる《四旋劍》もな！ あんな拷問みてえな真似はしねえはずだ！」
叫び合うように情報を交換しながら、ルークは必死に頭働かせる。

先程の光景を思い出す。

傷つけておきながら、まるで何かをするためにわざと生かして連れていくような血痕。

圧倒的な力を持つ、整合騎士らしからぬ手口。あれはどちらかといえば、奇襲の類だろう。

そんな方法を使う輩が、マトモな事をするはずがない。

ルークは眠りこけてた自分を、また激しく責めた。

「とにかく急ぐぞッ！」

「ちっ、血気盛んな相棒だな！」

ぐんと走る速度を増した二人は、飛ぶようにして大回廊を駆けた。

やがて、幾度となく見た曲がり角ではなく、金属らしき大きな赤い扉が見える。

「扉が開かれてる！ もう中に入ったみたいだぞ！」

「キリト、ユージオ……っ！」

走りながら抜刀し、あるいは琴剣をいつでも振るえように構え直して、二人は最後の一段を踏む。

扉の間にある空間を跳躍して、《靈光の回廊》へ文字通り飛び込んだ。

果たして、二人が見たものとは――

「なっ!？」

「ここ、これは……」

ルークも、ライオットも、震えた声を漏らす。

《靈光の回廊》

ソルスの光が壁や天井に嵌め込まれたステンドグラスから降り注ぎ、その暖かさに感

謝を捧げる場所。

カセドラルに住まう修道女や修道士、その見習い達が礼拝を行う場でもある回廊は、無残な姿になっていた。

ステンドグラスも、部屋を支える大理石の大柱も、何もかもが破壊されている。

まるで超高温の熱線でも浴びたように融解し、穴が開き。

そして、あらゆるものが青薔薇の氷と、凍えるほどの冷気に包み込まれていた。

「一体、ここで何が起こったんだ……」

「おいルーク、ちょっと来い」

背後からの声に振り返り、ライオットへ駆け寄る。

やってきたルークに、彼は自分が見ていたものを指で示した。

つられてみれば、ベルトで手を後ろに縛られた二人の少女が、こちらを睨みあげている。

「この子達は？」

「リネル、ファイゼル。前に話した騎士見習いだ。アドミニストレータの狂った実験の生き残りだな」

「そうか……」

説明を受け、苦い顔になりながら少女達を見下ろす。

見たところ齡十ほどか。修道女の服を着ており、ルークとライオットを見比べて不審げにする。

「……ライオット様、なんで咎人と一緒にいるの？」

「そいつ、あのお兄さん達と同じダークテリトリーの手先でしょ？」

「訳あって俺は離反させてもらった。今はこいつと二人部隊つてところだ」

リネル達は揃って息を呑む。

よもや、絶対正義の象徴たる騎士が咎人に与するとは考えもしなかつただらう。

特にライオットにはその気さくな態度ゆえに懐いていた為、顔を見合わせて狼狽えている。

一方で、彼女達の言葉の中で嘔み碎いていたルークがハツとする。

「お兄さん達……キリトとユージオか!」

二人の前に膝をつく、視線を合わせて詰め寄った。

「おい、あの二人はどうなった!? 今どこにいる!」

「な、何よあんだ。あの人達なら、もう先に行っちゃったわよ!」

「わ、私達、麻痺毒であの人達を弱らせて、殺そうとしたんだけど、やり返されて……それで、目の前でファナティオ様も倒されて……」

あまりの剣幕と、謎の凄みを感じる金色の右目に、怯えたように二人は答える。

あの血痕の正体を知って、一瞬酷く憤りを見せるが……すぐにかぶりを振って消し去った。

(いくら敵でも、村の子供達と同じような年齢の少女を傷つけることはするべきじゃない。目的を履き違えるな、ルーク)

心の中で自分に言い聞かせて、ルークは怯える二人の頭に手を置いた。

「……そうか。教えてくれてありがとう。それと、怖がらせてすまない」

鬼の形相から一転して優しく笑いかけてきたルークに、二人はポカンとする。

呆けた少女達から手を引いて立ち上がれば、隣にいたライオットが回廊の中を見回している。

「そこらの氷柱の中に、『四旋剣』どもが閉じ込められてるな」

「本当か？」

ルークも改めて周りを見直してみる。

すると、確かに幾つかの大きな氷塊の中に騎士鎧をつけた人間の姿が見えた。

「凄い力だな……『エンハンス・アーマメント』だとして、この所々に咲いてる薔薇は……」

もしかして、『青薔薇の剣』か？」

「んで、肝心の副団長は……いない？」

「あ、あの！ ファナティオ様なら、咎人の二人が何かして、どこかに消えちゃいました！」

ルークとライオットが肩を震わせた。

突然後ろから答えが返ってきて、少々驚きながら振り返ると、リネルとフィゼルがこちらを見ている。

先刻までの不審げな色は少し薄れ、だが多分に警戒を残した目をしながらも口を開いた。

「なんか、戦いに負けて倒れてたファナティオ様を、黒い方のお兄さんが助けようとしてた」

「青い方の人も協力してて、最後にはバツと消えちゃったっていうか……」

「消えた？ どういうことだ？」

「……よく分からんが、殺したわけじゃあなさそうだな」

「あいつらはそう簡単に人の命を奪ったりしないよ」

それこそ、余程の理由がない限りは刃を向けることはない。

あつさりと命を奪った自分と違って……そんな続きが浮かぶも、すぐに考えるのをやめた。

「だが副団長をのしたとなると、この先の昇降機から上へ向かった可能性が高いな」
「じゃあ、俺たちも後を……………」

追いかけてようと、そう言おうとして。

「待て」

回廊を包み込むほどの重厚な声に、その言葉は塗り潰された。

炎纏いし、黒盾の狩人

今から二年と数ヶ月前のこと。

「つし……こんなものかな」

その晩、ルークは荷物を纏めていた。

ギカスシダー、伐採の祭りから数日、ユージオやキリトと共に村を出るための準備をしているのだ。

長年その天職を全うし、村での実力も折り紙付きというところで、正当な権利の下に明日ザツカリアへと旅立つ。

「それにしても、我ながらあんまり物がないな」

自分の部屋を見回して、然程変わりのないことに苦笑が漏れる。

元より物に執着がなく、あの日から村の男児が遊ぶ間にも、もつぱら鍛錬に明け暮れた。

あるものと言えば衛士の職に関わる道具や、替えの衣服、日々の鍛錬を綴った日誌、木剣程度。

たつたの一日で荷造りが終わってしまうほど、ここには何もなかったのだ。

「ま、思い入れだけはあるんだよな……」

ランタンの光に照らされる室内を、そつと歩いていく。

十歳になる頃に村の家具職人が作ってくれた、傷だらけの小さな机と椅子。中に入れる防具が傷まないようにと、こまめに手入れをした木箱。

そして、ずっと愛剣を立てかけていた、休日につつた自作の台座……

一つ一つに触れ、思い出を噛み締める。

（ああ。これから俺、何年もここに帰ってこないんだな）

これからの未来に想いを馳せて、少し感情的な気分になった。

相反する、しかし前向きなその気持ちと向き合っていると、ノック音がした。

振り返ると、そこには優しげに微笑む母がいる。

「ルー君、準備はどう？」

「ちやうど終わったところだよ、母さん」

「そう。なら、ご飯にしちやいましょうか」

「分かった」

セフィアの後についていき、ルークは自分の部屋から立ち去った。

「じゃーん！ 今日のお夕食はとびきり豪華よ！」

「うわっ、凄いなこれ！」

食堂の机に所狭しと並べられた料理の数々に、ルークは思わず声を上げる。

鳥を丸々一羽使った香草焼きに、新鮮そうな野菜のサラダ。高価な白パンに、おまけに牛肉の串焼きまである。

「一体どうしたんだよこれ。凄いじゃないか」

「うふふ。ルー君が村を出るって話してたら、ご近所さん達がお裾分けしてくれたのよ〜？」

「あー、そっか」

「その鳥は狩人のエバンさんからで、そっちのお野菜はマイクくんのお家から〜……」

ぼやぼやとした笑顔で語るセフィアに、ルークは大体の経緯を察した。

彼女は言わずもがな、その年不相応の美しさと人当たりの良さで、村の男衆から非常に人気が高い。

特に同世代……具体的な年齢は伏せるが……の男達からは女神のように慕われており、色々と融通してくれたのだろう。

勿論女衆にも可愛がられているのだが、そちらはまた少し趣が違ってくる。

「とにかく、ルー君の為にお母さん、頑張つて腕を振るつたの!」

「よく分かるよ。ありがとう、母さん」

「さっ、早く食べましょ!」

促されるままに席へつき、ステイシアへ祈りを捧げる。

一応、習慣として料理の天命値を確認してから、食事を始めた。

「んっ、美味しい!」

「本当? 良かった、モリモリ食べてちょうだいね♪」

「ああ!」

普段は滅多に口にできない豪華な料理に、ルークは次々と舌鼓を打つ。

その味をしつかりと記憶に刻むように、忘れないようにと、一つ一つ堪能する。

そこには、もうこれから何年も母と食卓を囲むことはないのだからという想いもあつ

た。

普段の割り増しに勢いをつけて食べる息子を、セフィアは頬杖をついて見守る。

「そんなにながつついちゃって、やっぱりルー君も男の子ね〜」

「んぐ……こんなんじゃ、街で田舎くさいって笑われるか？」

「どうでしょうね。でも、昔のルー君みたいで可愛いわ」

くすりと笑われ、ルー君は目を逸らした。

親に可愛いと言われるほど、男にとって気恥ずかしくなる状況はないのである。

少しだけペースを落としたのを見て、さらに微笑まれるのだから本末転倒だが。

「その調子で、元気にやるのよ。辛くなったらちゃんど休んでね。ユージオ君達のお世話をするのはいいけど、自分の面倒を見るのも疎かにしちゃダメよ」

「ん……分かってるよ。ちゃんと頑張る」

「よし。お母さん、ルー君を信じるからね」

元氣付けるように笑いかけてくる母に、なんともむず痒い気持ちになる。

もしかしたら彼女は、ルー君が心のどこかに抱いていた不安を見抜いたのかもしれない。

(……いや、多分そうなんだろうな。普段は天然っぽいけど、この人はとても聡いから)

いつだってその聡明さと優しき、なによりも無償の愛に救われてきた。

どこか重い鎖をかけたような心が今日まで完全に折れなかつたのは、セフィアのお陰だ。

「母さん」

「ん？ なあに？」

「俺、絶対に父さんを見つけてくるよ。そしてこの家に、連れ帰る」

その心に報いたいと、常々秘めていた想いのままにそう言った。

食器を置き、真剣な顔で言う彼に、セフィアは少し驚いたように動きを止めて。

……それから、とても慈しみに満ちた微笑みを見せた。

「ありがとう。でも、自分を一番大事にね」

「ああ。それで……父さんを探す為に、どうしても聞いておきたいことがあるんだ」

「あ、そうだったわね。それを伝え忘れていたわ」

思い出した！ と手を叩くセフィア。

やはり天然かもしれない、と苦笑が零れた。

あるいは、今自分から言い出さなければ主張するつもりが無かったのか。兎にも角にも、その先の言葉を、ルークはしっかりと聞き取った。

「いい、ルーク。貴方のお父さんの名前は——」



その声は、ルーク達を実際の重圧を持っているような錯覚に陥らせた。

たった一言。それだけで骨の髄まで存在を実感するような重み。

その場で意識を持つていた者全員が、大きく身を震わせる。

知覚するよりも先に、感覚から発したそれに慄きながら、声のした方向を振り向いた。

「あれは……」

「スワロウの、光の扉………?」

回廊の入り口近くに、見覚えのあるものが開いている。

スワロウの転移術式に酷似したそれに、見慣れないリネル達は怯えていた。

(なんだこれ……熱波?)

扉の向こうから、感じたことのない「熱」が漂ってくる。

まるでこちら側に、西帝国の有名な火山でもあるかのように異様な熱気。

何もかもが異質な中で——回廊に、ソレは一步踏み込んだ。

ソレは、炎だった。

ソレは、騎士だった。

ソレは——ルークにとって、かつて絶対として君臨した存在だった。

「炎の騎士……！」

現れたのは、その身を炎で包んだ髑髏面の騎士。

いつかのように、二メドルを超える背丈に匹敵する黒盾と、刺々しい剣をその手に携え。

あらゆるものを圧倒する銀光で睥睨しながら、カセドラルへ堂々と侵入してきたのだ。

「あれって、ずっと団長や騎士様達が追ってる……！」

「あ、熱い……！」

すぐ近くにいたリネルとファイゼルが、肌を焼く熱に苦しげにしていた。

彼女達が声を上げてようやく気がつくが、炎の騎士を前に迂闊に動くことができない。
い。

「おいおい、嘘だろ……よりによって今、来るのかよ……」

ライオットも、何かに驚いて動けないようだ。

どうしようもないことに、ルークは齒噛みした。

だが、幸いにも炎の騎士は二人には興味がないようだった。

最初から認識さえしていないのか、ルークだけにその銀眼を向け、歩いてくる。

そのうち、彼の炎が影響を及ぼす範囲から外れたことで少女達は脱力した。

「っ……………」

射抜くように見つめてくる瞳に、体が怯える。

あの日、自分とシャーリーを救った一閃が未だに心の中へ焼き付いていた。

その目的がなんであれ、敵対することになれば——死ぬ。

そんな明確な想像が出来てしまった。

(それでも……!)

もしそうだとしても、ルークには引けない理由がある。

恐怖を隠し、《白竜の剣》に手をかけ……目の前に差し出された手に抜くのを止められた。

「ライオット?」

「……さつきから殺気立ちすぎだ。一旦落ち着け」

「でも……」

「心配すんな。あいつは……少なくとも、敵じゃないはずだ」

「え……」

まるで炎の騎士の正体を知っているような口ぶりに、間拔けな声を返した。

ライオットは一つ頷くと、ぐっと表情を引き締め、彼と炎の騎士の間に入るように立つ。

「久方ぶりにお目にかかる、叛逆の騎士。我らが長に勝るとも劣らぬ最強の剣士よ」

「……………貴様は、蒼角のか」

初めて歩みを止め、恐ろしげな声で返答する炎の騎士。

そこに戦意のようなものはなく、ライオットでさえ生唾を飲みながら口を開いた。

「貴殿の目的は、かつて暗黒領域で剣を交えた時に聞き及んだ」

その言葉に、ルークは驚愕を隠せなかった。

十数年前より、人界中に出現しては幻のように消えてを繰り返す炎の騎士の噂。

まさか暗黒領域にまで現れ、整合騎士と敵対しているとは思ってもよらない情報だった。

「その望みは、俺達の悲願と同じものはず。何故、行く手を阻むか」

「……………蒼角の担い手よ。貴様に用はない。我が求むるは、その若き担い手である」

その剣の切っ先が示したのは、ライオットの背後にいる者。

彼は振り返り、ルークと驚きに満ちた顔を互いに見せ合った。

自分が目的。

そう言われ、よもや斬り捨てられるのかと最悪の予想をする。

しかし、そのような様子は炎の騎士には無く、ただ剣先だけを彼へと向けていた。

「白牙の担い手よ。我が言葉、覚えているか」

「……………白き翼を育てろ。あんたは、そう俺に言ったな」

今でもはつきりと、あの時の会話とも呼べない言葉の数々を覚えていた。

たった一度の邂逅はルークにとって、強い原動力になったのだから。

「今こそ、我が前で示せ。貴様の翼は悪虐の女神に届き、その牙は彼奴を殺しうるに足るのかを」

その瞬間、炎の騎士から闘志が吹き荒れた。

瞬く間に回廊を染め上げた濃密な戦意に、ルークは身構える。

「待て！ ルークはまだ貴殿と戦えるような段階じゃない！ それにアドミニストレータを倒すなら、力を合わせた方が……」

「故にこそ、確かめる。蒼角の担い手よ、わからぬ貴様ではあるまい」

止めようとしたライオットの言葉は、炎の騎士のたった数言に塗り潰される。

それ以上反論することができず、ただ俯くことしかできなかつた。

「……ライオット。俺はやるよ」

「……ルーク」

「いつかは越えなきやいけない壁だと思つてた。……今が、その時だ」

冷や汗を流しながらも、そう笑う少年にライオットは複雑な目を向ける。

そこには、炎の騎士にルークが何かできるといふ信頼は欠片も存在しておらず。

だからこそ、ルークはより一層覚悟を決められた。

（——いつしか、アリスを取り戻すという目的だけではなく、あの騎士に勝つ為にも研鑽を積むようになった。再会すると、そう奴が言ったから）

いずれにせよ、ここで戦わねば逃げることすら叶うまい。
だから、全霊をかけて己の力を示そう。

その思いと共に、ルークは剣を抜いた。



《白竜の剣》の柄を握り締め、油断なく炎の騎士を見つめる。

ライオットがりネル達の方へと行き、にわかに場の緊張が高まった。

(……ダメだ。どうやっても、勝てる気がしない)

刹那の間にあらゆる角度と初動による想定を行ったが、いずれも不適合に思えた。

それどころか、一歩でも踏み込めばあの日大猪を一刀両断した一撃に首を刎ねられる。

確信に近い想像が頭を支配し、迂闊に仕掛けることができない。

(だが、こうして見つめ合っても埒があかない。ここは一か八か……！)

いずれにせよ格上であると思ひ直し、ルークは炎の騎士へ最初の一步を踏み出した。

バシユツ！

その瞬間、炎の騎士の右手が揺らぐ。

記憶に残っていた空気を貫くような音が鳴り、攻撃を仕掛けられたことを察する。

(よく見極めろ！ 観察するんだ！)

以前よりはるかに敏感になった耳、そして両の目を凝らす。

すると、疾風より速く空間を貫き、自分へと迫る“何か”をかるうじて捉えた。

「シッ——！」

それを受け流し、前へ進もうとして。

ルークは宙を待った。

は？ という、理解の及ばない現実への疑問を抱く間もなく。

全身を打ち付ける衝撃に流されるがまま、ルークは落下してその体で氷柱を粉碎した。

「がッ——は——ッ!?!」

背中に突き刺さる氷の破片。内臓まで響く痛みという名の重し。

それが何だったのかも分からぬまま、最初に立っていた位置まで転がっていき、血反吐を吐く。

「げっ、ごほっ……あ、ぐ……」

「ルークッ！」

「へい、きだ……っ！」

こちらへ駆け寄るライオットの気配を感じ、かろうじて声で制止した。

かろうじて手放さなかった《白竜の剣》を使って、体を起こす。

筋肉の隆起に合わせて突き刺さっていた氷片は地面に落ち、口元の血を拭った。

そして、泰然と佇む炎の騎士を睨む。

「来るがいい、白牙の担い手よ」

「——オオオオッ！」

雄叫びを上げ、今一度疾走する。

併せて炎の騎士の右腕がゆらりと揺らぎ、反撃を悟った。

正体不明の騎士の攻撃に最大限警戒を働かせ、先ほどと同じようにその音と姿を見定める。

(——見えたッ！)

それが見えた瞬間、深く体を沈み込ませ、接触することを回避した。先の一撃は、防御した《白竜の剣》から伝播した規格外の力によって弾き飛ばされた。ならば当たらないようにすればよいと、そう対策を立てた。

「はあああつ！」

後は肉薄するだけと、再び裂帛の叫びと共に《白竜の剣》を構えて。

イイイイッ！

背後で、音が曲がった。

「っ!!？」

ほとんど条件反射で、急停止して背後に剣を置き直す。

一秒後、同じ衝撃によってまたルークの体は宙を待っていた。

「な、ん——いっふッ」

落ちて、氷に傷つけられ、転がる。

何ら変わらず、そっくりそのまま焼き直したように地面へ伏した。

「くそっ、やつぱりまだ無理か！」

「来るなッ！」

《蒼竜の琴剣》を構えようとしたライオットは、動きを止めた。

炎の騎士のそれに匹敵するような、ビリビリと体に叩きつける言葉を発した少年を見る。

「ぐっ、う……！」

全身の力を振り絞って、ルークは立つ。

足の鉤爪で床を削り、額から数滴の脂汗を落としながら、それでも体を起こし。

若干よろけたが、最終的には持ち直して三度剣みたびを構えてみせた。

「……まだ、やれるぞ」

また、炎の騎士へ挑む。

圧倒的な力を前にしてその不屈さに、ライオットが、リネル達が啞然とした。

騎士もまたその様を見つめ、じっと銀光を輝かせる。

「しいいいいっ！」

ルークが走り出す。

炎の騎士の腕が輪郭を崩し、脅威の音と残像が迫ってきた。

二度も体を打ち据えたそれを、今度はギリギリまで引きつけて、その上で避けた。防御を行わず、体捌きと重心移動のみで頬に裂傷を走らせるに留める。強烈な痛みを堪えて、騎士への距離を縮めたが。

イイイイイツ！

腕が僅かに逆へブレたかと思えば、避けたのとは反対からそれが急襲してきた。そちらへ体を傾けていた以上、避けようもなく肩を打たれて真横に吹き飛ぶ。

「ぎあつ……………」

今度は直に当たった。

氷の殻を破り、奥にあった大柱まで抉ったルークは、ゆっくりと落ちていく。

両手を床に突き出して阻止するが、右肩から大量の血が噴出して結局は崩れ落ちた。

「あ、ぐ、うう…………つ！」

上着を赤く染め上げていく自分の血を、圧迫して抑え込む。

頭の中では、これまでの人生で一番というほどに警鐘がガンガンと鳴り響いていた。

(……………ダメだ……………強すぎる……………こいつは、この騎士には……………)

どうやっても、勝てない。

元から隔絶した実力差があるのは分かっていた。

技量も経験も、純粹な肉体の練度ですら遙かに劣っていると分かっていたいながら。足りない分を、《白竜の剣》の自分の一部を捧げて埋めても。

絶望的な程、炎の騎士は最強だった。

「もう終わりか？」

「……………まだ、だっ！」

ルークは、立つ。

勝てないと分かっている、足元にも及ばないと見せつけられて。

だが、そんなものは心折れる理由にはならないと言うように、闘志で目を燃やし。

「俺は、こんなところで止まってられない……っ！」

そして、勝ち目のない闘争が始まった。

白き翼

失敗作がいた。

それはクイネラ……アドミニストレータにとって、数少ない人生の汚点。
カーディナルの存在を誕生させたことに匹敵する、忌むべき記憶。

賢者を除き、人としての心を失った彼女が強く憎む、たった一人の人間。

それは遠く昔、己に代わり人界を統括する整合騎士インテグレートを発案した頃のことだ。

彼女は対象者の記憶と感情を凍結し、その上で調整した偽りの人格で統合する為の敬神モジュールバイエティを作り出した。

生み出された悪魔の道具の実験体となったのは、ルーク達がスワロウらに聞いた通り罪人とされた者達。

強い力を持ち、探究心に溢れ、それ故に捕らえられ、壊されてしまった、哀れな人間だ。

アドミニストレータは、完成した敬神モジュールバイエティの試作品をある人間に使った。

その人間は、フラクトライトの研究に使い、壊して凍結した中で最も強い男だった。肉体、剣術、知恵、権限……全てが非常に高水準な、最高の素材。

さぞかし強力な騎士になるだろうと、彼女は穴だらけの心にモジュールを挿し込んだ。

しかし、彼女の予想に反してモジュールを使用したはずのその男は覚醒しなかった。

何故、とアドミニストレータは疑問を浮かべる。

自分の実験は、間違いなく完璧だったはずだ。

数多の人間を使って解析したフラクトライトの構造上、確実に人形になるはずだった。

だが、いくら台の上に眠る男を検査して、術式を見直しても不備は見当たらず。

偶然の失敗と判断したアドミニストレータは、早々に男を見切ると再度実験を行った。

再び、今度は最初の段階から慎重に作ったモジュールを、次の実験体を使う。

それは最初のサンプル……後で処分するために、再び氷柱の中に閉じ込めた男と同じ場所から連れてきた人間だった。

果たして失敗の原因はその一帯の人間という点にあるのか、それとも別の問題か。

検証する為にも行った二度目の実験は——見事に成功した。

壊れた人形になっていたサンプルは目を覚まし、起き上がると、言葉を発した。

それは自分の存在を確かめるもので、実験が成功したことを確信する。

アドミニストレータは、早速決めていた通りの言葉を告げる。

『貴方は整合騎士。創造神ステイシアの命によつて、天界から遣わされた至高の存在。

この人界を守る者よ』

『俺が……』

その男は、言われた言葉を口の中で反芻し、じつと自分の手を見下ろした。

数秒の後、『そうか』と納得したように呟く。問題なくモジュールは機能しているようだ。

彼女はほくそ笑み、強くて滑稽な操り人形を生み出したことに満足して。

その神らしからぬ“油断”が、失態を招いた。

哮のよう。

実験台の上で、顔を擧めている第一号が男のことを不審げな目で見る。

その顔を見て——今度こそ男は、直接アドミニストレータへ殺意を向けた。

『貴様、よくもッ!!!』

男は、身一つでアドミニストレータへと襲いかかった。

それは神となった彼女を動揺させるには、十分な事だったのだ。

ありえない。ありえるはずがない。

衰弱した体で凍結から目覚める事も、モジュールが挿し込まれた状態で自分を殺そうとするのも。

まるで、記憶や心、人格の全てが破壊されても——それでもなお、神の支配を上回る意志があるかのようにではないか。

ありえない、ありえない、ありえない！

激しく狼狽し、論理崩壊を起こしたアドミニストレータ。

彼女はその場から動くことができず、男の渾身の拳を顔面に叩き込まれた。吹き飛ぶ体。打ち付けられ、数十年ぶりに感じた痛み感覚。

地面に落ち、苦悶に顔を歪めた彼女に、男はとどめを刺そうと駆け寄る。

だが、その前に立ち塞がるものがいた。

整合騎士第一号。忠実なアドミニストレータの僕となつてしまった男。

第一号が敵意に染まった目を向けた途端、男は立ち止まり、悲しげな目をした。それからアドミニストレータへ、再び怨嗟に塗れた顔で叫ぶ。

『必ず、必ず復讐してやるぞ！ 我らを壊し、友を誑かした罪の重さを知りながら、我が再来を待つがいい！ その時が貴様の最期だ！』

そう吐き捨て、男は近くの窓を突き破つて逃げていった。

しばらくして、第一号の差し出された手を払い除けて立ち上がる。

それから粉々に砕けた窓の外を見れば……男の背が、カセドラルの外壁を乗り越えて消える所だった。

ギリツと奥歯を噛み締め、アドミニストレータは美しい顔を怒りに染める。

『この私に叛逆したばかりか、傷をつけるなんて……楽に死ぬると思わないことね……ッ!』

——かくして、アドミニストレータにとって無二の屈辱が生まれた。

それから幾度となく、彼女は男を抹殺しようとした。

整合騎士達や皇帝、貴族まで使い、人界の管理と同じほどに執念を燃やし続け。

だが今日に至るまで、その目的が達成されてはいない。

人界はおろか、暗黒領域さえ転々として逃げる男を、未だ取り逃しているのだ。

それどころか、殺した守護竜の遺骸と財宝を盗み、逃げおおせた時すらあった。

アドミニストレータは限界に近い記憶領域の中で、その名だけは圧縮せず刻み込んでいる。

バルド。バルド・シンセシス・ゼロ。

果ての山脈、北の洞窟近くの開拓村から攫ってきた罪人。

彼女にとって恥辱の象徴にして、感情を凍結してもなお憎み続ける害悪。

——またの名を、炎の騎士である。



「がっ……」

苦悶の声を上げ、口の中に鉄の味が滲む。

何度、地面に叩きつけられただろう。

何度、その見えぬ絶技に打ち据えられ、切り裂かれただろう。

もはやその回数は数えきれず、そもそも数えるほどの余裕などルークには無かった。

「お、あああああっ！」

それでも、ルークは諦めない。

血と汗の入り混じったものを全身から垂れ流しながらも、再起する。

どうにかといった様子で立ち上がったその姿は、とても悲惨なものだった。

「はっ……はっ……はっ……」

たったの数分。それだけの間に、ルークは満身創痍にまで追い込まれた。

ガクガクと足は震え、《白竜の剣》をかううじて握る手は血でぬめり、呼吸は荒く。今にも天命が尽きてしまいそうな程、弱々しい。

周囲の光景も、戦いの結果を示している。

氷に包まれていた回廊は以前より破壊され、至る所に血が飛び散っていた。

それらは突然のように、一つの例外もなくルークの身から零れ落ちたものである。

対して、炎の騎士は最初の場所から一歩たりとも動いてはいない。

その鎧には、擦り傷すらもなかった。

「ルーク……っ！」

「っ、強すぎる……」

「あの人、なんであそこまで……」

追い込まれたルークに、ライオットが飛び出そうとする衝動を抑えて呻く。

咎人と思っていたリネル達でさえ、あまりの惨さにルークを案ずる目を向けていた。

「フウ……！　フウ……！」

下手な言葉を投げかけなかったのは、彼の瞳が色褪せてはいなかったから。

獣のように爛々と、色の違う両目を光らせて炎の騎士をまっすぐに見ていたから、口を噤んだ。

「若き者よ。何故、立ち上がる」

何度叩きのめしても倒れないルークへ、炎の騎士もまた問いかける。そこに憐憫はなく、嘲りもなく。

只々、試すかのような色だけが濃く反映されていた。

「それほどまでに傷付き、己を削って、どうして立ち上がり続ける」
「決まって……んだろ………使命を………果たす、ためだツ!!」

ルークが飛び出した。

騎士は無感情に腕を振るい、少年をまた這いつくばらせる。

既にルークのいる場所は血塗れで、生きているのが不思議なほどだった。

「使命とは何を指す。お前にとってそれは、なんなのだ」

「お、あああああつ!!」

立ち上がるという工程すら無駄と切り捨て、突っ走った。

また、騎士が腕を振るい、血と苦悶の声が床を染める。

「ぐ、ぎ……」

「何の為に剣を握り、何の為に諦めぬ」

「うる、せええええつ!!」

残酷なほど、ルークの叫びは切り捨てられた。

不可視の攻撃がその体を破壊して、リネル達が耐えきれないというように悲鳴を漏らした。

ぐったりと動かないルークは、今度こそ死んでしまったように見えた。

「おい！ もういいだろ！ これ以上やる必要はない！」

ライオットが無情なる騎士へ叫び、乞い願う。

たとえ出会ったばかりでも、過ぎた時間は短くても。

それでも彼にとって、ルークは可愛い後輩なのだ。これ以上見過ごす事は出来なかった。

「……だま、れよ」

その訴えを拒んだのは、騎士ではなく。

驚いて視線を転じれば、またルークは起き上がろうとしている。

もう立ち上がるな、諦めろ。ライオットがそう言おうとした。

だが。

「まだ……やれるって……言ってるんだろ……！！」

返ってきた目線に乗る狂気に、言葉を失った。

「ルークっ……！！」

「お前は……そこで、見てるだけで……いい……」

掠れた声で、死に体の体で。

それでも、戦意だけは失わずに。

少年は、呆れるほどしぶとく起き上がった。

「……どうした、最強。俺は、折れてねえぞ」

「——よかろう」

ルークが動くという前提さえ切り捨て、騎士が剣を振るった。

それはやはり見切れなくて、ルークの脇腹に大きな切り傷を作るが。

「ぐッ……」

彼は、倒れなかった。

口の端からまた一筋血を流して、だが、初めて攻撃に屈しなかった。

それに、ライオット達が幾度とない驚きを露わにする。

炎の騎士自身も、「ほう」と感心したように声を漏らした。

「なんだ。手元でも狂ったか？」

ルークは不敵に笑う。

脂汗と血で汚れた顔で、歪な笑顔を浮かべて騎士を挑発する。

誰が見ても痩せ我慢だ。もはや気力で正気を保っているようにしか見えない。

だというのに。

何故か、ライオットの頭から諫めるといふ言葉は消えていた。

「……致命傷は与えていない。だが、それだけの傷を与えられ、痛みを抑える度量は認めよう」

しかしと、騎士は冷たく言い放ち。

「まだ、足りぬ」

空を切り裂く音が鳴り、超高速の攻撃が発動される。

もはや、どのような一撃でも致命傷なことは確実。

故に、今度こそ意識を刈り取るつもりの一閃を放ち――

キーンツ！

――誰もがしたその予想に反して、それがルークの意識を暗闇へ落とすことはなかった。

「!?」「」

代わりにそこにあつた光景に、傍観者達がこれまでの中で一番驚いた表情をする。

彼の両手が、その《白竜の剣》が。

赤い炎で繋がった、等間隔に分割された刃を巻き取っていたのだから。

(おいおい、嘘だろ!? あの斬撃にもう適応したのか!? 整合騎士すら初見では敗北が必至のあの技を、たったの数分で!)

その正体……蛇腹状に変形した剣による超範囲攻撃を知っていたライオットが、愕然

とする。

劍の金具が擦れあつてカタカタと震え、不恰好だが、何度見てもそこには刃が捉えられていた。

「ほう。我が劍技、見抜いたか」

「……あんたの技は、曲芸じみてるな」

「ならば、これはどうする」

だからといって、有利になるわけではない。

今度は見えるように大きく腕が振られ、見た目通りの剛力で劍が振り回される。

大きく撓んだ蛇腹劍は本物の蛇のようになり、ルークを《白竜の劍》ごと引つ張り上げた。

騎士の腕がうねり、それに従って動く蛇腹劍の先端から柱へ向けて投げ飛ばされる。「フッ！」

激突する直前、体を捻って体勢を変えると両足を垂直に柱へつけて着地した。

それから足元にヒビが入るほどの力を込め、騎士へ向けて一直線に自分を射出。

「せああああつ！」

腰だめに構えた《白竜の剣》に、秘奥義の光が走る。

それが騎士に届くよりも先に、間に入った蛇腹剣が相殺した。

一度着地した後、ルークは改めて騎士への攻撃を仕掛ける。

先ほどまでとはまるで違う動きに、騎士は目を細めて剣を握る力を強めた。

「何を以って大義を成す。如何なる正義で、お前は这个世界に反旗を翻す」

「アドミニストレータの支配を打ち破り、来たる災いで人々が滅びないためにッ！」

蛇腹剣の速度がさらに上がる。

質量を伴った残像さえ発生するほどの剣速の中、ルークは広い空間を使って対応した。

一度、二度と、まぐれではない相殺の音を響かせながら、騎士に狙いを定める。

「その剣に何を込める。お前は何を志し、この塔までやってきた」

「我が罪を贖う為！ かつて失われた、大切な人達の幸せを取り戻す為にッ！」

いよいよ、ルークの剣技が騎士の剣界に追いつき始めた。

驚異的な成長速度に、騎士も徐々にその実力を解放していく。

「その願いの為に、何を賭す。立ちはだかる他者の命か。それとも、己を苛む罪への苦しみか」

「他の何物でもない、この身の全てを！」

蛇腹剣を繋ぐ炎が、その勢いを増した。

騎士の腕から伝播した紅蓮の炎が刃へと乗り移り、剣の結界が熱を帯びる。

荒れ狂う熱波に回廊の温度が急上昇し、周囲を覆う氷が溶け始めた。

「願いの先に、何を見る。己が命を、心を失い、それでもなお、何を求める」
「奪われた友の未来を！ あるはずだった平凡な幸せの続きを！ それ以外は、何も要らないッ！」

二人の戦いが激化する程に、その被害が及ぶ範囲は著しく広がっていく。

互いの斬撃が柱や床さえ破壊するようになり、ライオットはリネルとフィゼルを脇に抱えて退避する。

まるで、互いのことしか見えていないように、炎の騎士と灰の剣士は斬り結んだ。

「戦い、傷つき、倒れ、また戦い。その果てにお前には何も残らないとしても?」
「それでも!」

不思議なことに、今度は余波が縮小を始めた。

アインクラッド流の秘奥義によって、ルークは騎士の技へ喰らいつく。

鋭さを増した彼の攻撃を防ぎ、また反撃をする為に、騎士は斬撃の密度を高めていく。

「お前がその願いを成し遂げ、代償に命を落としたとして——全てが無意味になるかもしれないとしても?」

「それでもだッ!」

斬り、斬られ、斬り返して、また斬りつける。

言葉と刃、二つの力で互いを打倒せんと、絶大な剣気が拮抗し。

だが、ふとしたある瞬間に一方が崩れた。

それは残されていた余力の差か、あるいは運命の悪戯とも言うべきか。

ほんの少し、斬撃をいなす角度を間違えたことにより、ルークが空中で大きくバランスを崩す。

「ハッ——！」

騎士はその隙を見逃さず、蛇腹剣を巧みに操って追い討ちをかけた。

もはや対抗するので精一杯だったルークは、反応することもできなくて。

その左肩を、熱せられた刃の切っ先が向こう側まで一直線に貫いた。

目を見開いたルークの鼻を、肉の焼け焦げる臭いが突き刺す。

その驚愕を取める暇もなく、しなった蛇腹剣が彼の体を高く投げ飛ばした。

空に血の軌跡を描き、グングンと上っていったルークは、ステンドグラスが崩壊した天窓の寸前まで浮き上がり。

そして、ようやく自然の理が働いたかのように堕ちてきた。

「ルーク——ッ!!」

緋髪の騎士が、たまらずと言った様子で叫ぶ。

「あつ、あの高さはまずいって!」

「ダメツ、グチャグチャになって死んじやいます……!」

狂気の実験で幾度となく命を落とし、その経験則から未来を正確に予想した少女達が顔を青ざめさせ。

「——ッ!!」

だが、炎の騎士だけは。

ゆつくりと、スローモーションのように堕ちてくるその少年が、まだ諦めていないこ

とを。

一見無防備にも見えるその体が力み、動き始めていることを。

彼だけが、その少年の可能性を見出していた。

「来るか……！」

初めて、炎の騎士は全身を動かして構えをとった。

蛇腹剣を結合して大剣の形に戻すと、その身に纏う揺らめきを刀身へと移す。

みるみるうちに鎧を撫でていた炎の全てが収束すると、騎士は黒盾を手放し、両手で構えた。

それだけではならず、剣を引き絞るような姿勢へ移行し——秘奥義の光を炎へ重ねる。

「——おおおおおオオオオオオオオッ!!!」

そこで、ようやくルークが雄叫びを上げた。

一瞬前までの無気力な姿を捨て去り、最大まで見開いた両目で炎の騎士を見下ろす。

不思議な軌道で逆さになった体を戻すと、逆手に《白竜の剣》を構え直した。

そこでしょうやく、ライオット達もルークの気迫を察する。

「はあああああああああ————ッ!!」

落ちる、灰の流星。

「オ、オオオオオオオオオ——ッ!!」

それを睨め上げ、剣を突き出す炎の騎士。

一秒を超え、二秒にも満たない時の後。

二つの光が、衝突した。



落下の加重と速度を併せ、全身全霊の墜落を敢行したルーク。

万物を焼き滅ぼす炎の一切を凝縮し、秘奥義として解き放った炎の騎士。

両者の力は、今この瞬間のみ全くの互角になっていた。

故にそれが衝突し合った時、狭間に生まれるのは——爆発的な衝撃。これまでの攻防で最高にして最大の衝撃波が、回廊中を震撼させる。

「きやああああああつ！ な、何よこれええええつ!!？」

「し、死にます！ 私達の方が死んじやいますうううう!？」

「これは流石につ、ヤバすぎるツ！」

部屋全体を埋め尽くす剣気と熱、衝撃波に、ライオットは二人を連れて最奥まで避難した。

その間にも、グラグラと塔そのものが倒壊するのではないかという凌ぎ合いは続く。

「アアアアアアアア—— ツ!!」

「カアアアアアアア—— ツ!!」

裂帛。

否、そんな言葉では形容できない、魂からの叫び。

この一撃に全てを賭ける——まさしく必死で、互いを殺すつもりで剣を押し込んだ。

それは激しい火花が散り、あちこちに飛散してその箇所を融解させてしまうほどだった。

誇り、怒り、使命。

何もかもを相手のことなどお構いなしにぶつける、その殺し合いは。

「ウ、リアッ!!!」

「又ウ……………!!!」

最終的に、力のかかりやすい場所にいたルークが押し切った。

大剣を明後日の方向へ弾き飛ばし、その頭へと《白竜の剣》を振り下ろす。

炎の騎士は、〃心意の腕かいな〃を用いて黒盾を引き寄せ、かろうじて間に挟んだ。

だが、当然のようにその威力のほとんどを吸収できず、後方へと吹き飛ばされる。

これまでの返礼と言わんばかりの一撃は凄まじく、騎士の剛体は凸凹の床の上を滑つていき。

回廊への入口があった、戦いの余波で壊れた扉の残骸の一步手前で停止した。

「……………カ、フツ」

小さく、ほんの僅かに。

だが確かに、騎士は大きくヒビ割れた髑髏面の下で血を吐いた。微々たるものだが……しかし、ルークの一撃は最強の騎士へ響いたのだ。胸元に墮ちた血反吐をじっと見つめて、騎士は正面へと顔を上げる。

もうもうと立ち込める土煙。

ほんの十秒前まで、決して自分が動かなかった場所は覆い隠されている。

そこに落下したはずの少年を見つけようと、目を凝らして。

次の瞬間、内側から広がったものにヴェールはかき消された。

——それは、純白だった。

それは、この世のどんな生物の体よりも美しい輝きを持っていた。

それは、いつそ恐ろしいほどに。

人の身が持つには余りある、白い翼だったのだ。

「……………俺の、勝ちだ」

凡そ、人に生えるものではないソレを背負った男は。

何も感じない両足を床へ投げ出し、その手がかるうじて握る剣で体を支えて。
炎の騎士に黄金の両目を向け、はつきりとそう言った。

「……………ああ。そして、我が敗北だ」

騎士は、己の負けを認める。

清々しいほど、試す必要もないほどに、その男の信念は真つ直ぐだった。

一部始終を見ていたライオットは、呆然とその現実を受け止める。

「……………嘘、だろ？」

(か、った。本当に、あの騎士に、あの怪物に。真正面から、打ち勝ちやがった)

歴戦の騎士たる彼をして未だにその領域には辿り着けず、彼の他に何十人もの整合騎士が敗北した。

唯一、整合騎士団長のみが無傷で生還した最強の男に、あの少年は一太刀浴びせたのだ。

(ああ、ルーク。お前は…………お前はもう、自分のことなんてとつくに……………)

胸の内に溢れる驚愕と、少しの嫉妬と共に。

悟ってしまったある事実、まるで泣くようにライオットは顔を歪めた。

剣を通し、ルークの覚悟を感じ取った炎の騎士。

最後の負け惜しみのように、問いを投げかける。

「もし、お前の献身をただの一人も理解せず。愛する者達が、涙を流したら。お前は、それでも願いを貫くか？」

「……たとえ、そうだとしても。俺は、誰かを守ることがやめられない」

何も残らず、一人命を落としても。

誰も、その願いに共感してくれなくても。

それでも、ルークという男は愚かな程に。

その信念だけは、信じていた。

「……………蒙昧を恥じたのは、いつぶりだろうか。心から謝罪しよう、誇り高き者よ」
再び炎を纏った騎士は立ち上がる。

そして、幾分か柔らかくなったその銀光で、ルークを見つめた。

「我が真まことの同志、白牙の担い手よ。貴殿の名を、今一度知りたい」

「……………ルーク。セフィアの息子。真の貴族、ルルデイ・クローマの徒弟にして」
握りしめた《白竜の剣》が、ソルスの光を反射して輝く。

「白竜の魂を、受け継ぐ者だ」

一つ一つ、炎の騎士に刻み込むようにルークは答える。

この男を前にして、数少ない自分が誇れるものが自然と言葉になって口から出ていった。

すると、炎の騎士が突然動きを止める。

「……………セフィア、だと？」

「……………?」

「ルーク……………貴殿は……………いや、お前は……………まさか、彼女の……………」

「何を……………ゴチャゴチャと……………言……………つて……………」

ルークが気を失い、その場に倒れこんだ。

しんとした回廊に、重々しい音が木霊する。

横向きに床へ沈んだ体の至る箇所から、絞り出すように血溜まりが広がり始めた。
何故か立ち尽くしている炎の騎士より先に、リネルとフィゼルがハツと我に返る。

「ちよ、ちよつと、ライオット様！ あれまですつて!?!」

「そうです！ あの咎人さん、今度こそ死んじやいます！ 多分、あと数分しか保ちませ
ん！」

「——っ！ あんの大馬鹿野郎っ！」

戦闘の際にベルトが熱で溶け、自由になった両手で左右から揺さぶられてライオット
はようやく正気に戻る。

それから、本当に今度の今度こそ死の間際にいるルークを視界の中に捉え、全速力で
駆け寄った。

「ルークっ！ くそっ、血を流しすぎてる！ 傷も酷い！ このままだとマジで死んじまう！」

仰向けに寝転がしたルークの《ステイシアの窓》を開き、加速度的に減少する天命に唸る。

すかさず両手を彼の上へと翳し、治癒の神聖術を行使し始めた。

「システム・コール！ ジエネレート・ルミナス・エレメント！」

光が降り注ぎ、ルークの体に再生を促す。

しかし、衰弱しているからか、それとも床に広がった翼のせいか、遅々として効果が浸透しない。

そうしている間にも、みるみる天命は減少していく。

心なしか先ほどより緩やかだが、焼け石に水というものだろう。

「おい、ふざけんよ！ あんなもん見せといて、くたばろうとしてんじやねえ！ お前はもしかしたら、俺がずっと求めていた、対等の……っ！」

「ライオット様……」

複雑な顔で呟くライオットに、追いかけてきた二人はなんとも言えない目を向ける。

「……わ、私、手伝います！」

「リネル？ こいつ、咎人だよ？ いいの？」

「でも、ファイゼル……さっきのを見て、本当にこの人が闇の手先だと思う？」

「それは……まあ、ちよつと怪しいけどさ」

言い淀むファイゼルに頷いて、リネルはライオットの隣に膝をついた。

「システム・コール。ジェネレート・ルミナス・エレメント！」

手を翳し、彼と同じ神聖術をルークに向けて詠唱し始める。

そんな相方を見て、やれやれとかぶりを振ったファイゼルも反対側に陣取った。

驚いて彼女達を見たライオットは、頼もしげに笑うと再び術式を唱えた。

三人が懸命に治療した結果、か細かったルークの呼吸が少しずつ戻りはじめた。体の傷も小さいものから塞がり始め、安堵の笑みを浮かべる。

余裕ができたことで、ライオットは未だに固まっている炎の騎士を睨みつけた。

「おい！ あんたが滅多切りにしたんだから、少しは手伝え！」

怒声を浴びて、ようやく騎士は反応を見せる。

じつとライオットの顔を見ると、次にルークを見下ろして同じことをした。

「……………ああ。そうしなくては」

やや長い沈黙の後、炎の騎士は蛇腹剣を収めてルークの前に跪いた。そうすると、大きく視界を損じた兜を脱ぎ払った。

現れたのは、精悍さと勇猛さが同居した歴戦の剣士の顔。

不揃いな長さの灰色の髪と、鋭い切長の銀色の瞳。整った鼻筋や、横一文字に結ばれた唇。

傍に兜を置き、彼は左手に携えていた黒盾の下部をそつと床に打ち付けて。

「システム・コール。『エンハンス・アーマメント』」

その竜具に宿る力を、解放する。

黒盾の周囲に幾つもの丸い窓が開き、神聖文字が羅列される。

術式が発動すると、盾の縁に燐光が浮かんだ。

神秘的なその光は、ゆつくりと盾を離れるとルークの体を覆い、癒していく。

「黒き翁竜の、治癒の力……これなら助かるか」

「……………蒼角の。この少年は、何処からやってきた」

「あ？ いきなり何の話だ？」

「答えよ」

視線はルークに向けたまま、有無を言わさぬ声音で問う。

面食らった表情を浮かべたライオットは、不審げな目をしながらも答えた。

「確か、北の辺境から央都に来たつて言つてたな。村の名前は…………ええと、確か…………そう、ルーリッドだ」

「……………ルーリッド」

ルークの故郷の名を、炎の騎士は嘔み締めるように繰り返した。

脳裏に、永い時の中を生きる為に白き使者によって大部分を消した記憶を呼び起す。

二十年ほど前のこと。教会の追手との戦いの中、珍しく不覚をとり、大きな怪我を負った。

朦朧とした意識の中、ただ足の向かうままに逃げ、何処かの集落の前で力尽きた。

ついに命運尽きたか。

そう目を閉じたにも関わらず、騎士は寝具の上で再び目覚めたのだ。

『ん……ふわ。私寝ちやつてたのね。……あつ！目が覚めました？良かった、酷い怪我だったから……』

『………此処は？それに、君は………』

『ここはルーリッド、帝国で一番北の村ですよ。あつ、私の名前はね——』

そして、覚醒した自分の隣で呑気に眠っていた、あの少女の名は……

「そうか……お前は、そうなのだな」

炎の騎士が……バルドがルークを見つめる瞳の中には。

灰かに、だが確かな慈しみと愛が生まれていた。

運命の刻へ

「——けほっ」

掠れた咳と共に、呼吸を阻害していた血塊を吐き出すルーク。

うつすらと目を開けて、最初に見えたのは安堵と驚愕の入り混じった男達の顔だった。

「ルーク！ よかった、生きてたか！」

「わっ、本当に死んでない！」

「す、すごいです！」

「……………ふ」

蘇生に等しい治療の成功に、ライオット達はにわかに沸き立つ。

その声を聞きながら、ルークが気だるげに体を起こしていった。

「ゲホッ……………ほっ……………」

「ゆっくり呼吸しろ。何せ外側も内側もボロボロだったからな」

「俺は……どうなってたんだ？」

「ステイシアのところに召される一歩手前つてとこだ。無茶すんなつて言うのが無駄だつてのが、よく分かったよ」

叱るように肩を叩くライオットに、曖昧な笑みを返す。

それから、彼の背中に隠れるようにしている少女達へと顔を向けた。

「君達も……助けてくれたのか」

「ふ、ふんつ。あんたが最高司祭様が言うような、とんでもない悪党じゃないつてのは分かっていたからね」

「本当によかったです。あの、私達貴方のお仲間さんを傷つけちゃいましたけど、でも……」

「……分かつてる。君達は、ただアドミニストレータの期待に応えようとしたただけだ」
両手を伸ばして、二人の頭を撫でることで感謝を伝える。

似たような誰か達にしていたような気がするそれに、リネル達は頬を赤らめた。

その警戒がほとんど薄れたことを感じたところで、手を引いて。

そして、最後に炎の騎士を見た。

「……あんたの目に、俺は適ったか？」

「……………」

騎士は、どうしたことかすぐには答えなかった。

短い関わりで寡黙で気難しいことは察していたが、それとは少し雰囲気が異なる。

不思議に思っていると……十秒も経って、ようやく騎士が反応を見せる。

「……………ルークよ。我には既に、多くの記憶がない。それは魂の磨耗を防ぎ、衰えを遠

ざげ、宿願を果たすためだ」

「……あんたも、カーディナルやスワロウのように？」

「ああ。だが、数百の年月で積み重ねたものは、我が体に刻み込まれている。その上で、

言おう」

騎士の手が、ルークの肩にそっと置かれる。

配慮したように炎の消えた手甲はズシリと重く、肩の骨に沈むようだった。

「お前の剣は。我が生涯において刃を交えた数多の強者に、決して見劣りはせぬ」

「……そうか。なら、認めてくれたってことでもいいんだな？」

「当然のこと。そして……お前がそうしたように、我が名を告げよう」

名前を？ と考えて、そういえば騎士の本名を知らなかったことを思い出す。

噂によって定着し、実際に姿を目の当たりにして、炎の騎士という名が非常に印象強かったのだ。

そこまで考えて、ふと自分の目の前にある騎士の、空気にさらされた素顔を見る。

(名前だけじゃなくて、顔を見るのも初めてだったな)

カセドラルにやってきて、もう何度目かもわからない気絶直後のせいで気が回らなかった。

そんな風につきを聞く姿勢でいるルークに、騎士は少し間を置き。

それから、重々しく口を開いた。

「我は……………バルドだ。それが、我が真の名だ」

「バルド……………」

鸚鵡返しに炎の騎士——バルドの名を呟く。

『■■■■、ル■■■■。貴■■■■のお■■■■の名■■■■——』

誰かが、何かを話す光景が頭をよぎる。

僅かに俯いたルークに、バルドが何かを込めた目を向けた。

ライオット達が首を傾げて見ていると、ルークは顔を上げる。

「勇ましい名前だな。覚えておくよ」

「……………そう、か」

ほんの少し、眉根を寄せて。

だが、騎士はそれ以上欲張ることをせず、押し黙ることにした。

代わりに手を差し出して、それを取ったルークが立ち上がるのを手助けする。

「つと。それで、あんたはどうやってカセドラルに来たんだ？」

「……………古き使者の導きだ。この盾の啓示に従い、それを使ってやってきた」

「使者……………スワロウか？」

首肯するバルドに、ルークはなんとも言えない顔をする。

あの謎めいた協力者が秘密主義なことは分かっていたが、飛んだ切り札が隠れていたものだ。

確かめる為にライオットを見れば、知っていたのか肩を竦められる。

「はあ、まあいいか。で、俺達に協力してくれるってことでいいんだよな？」

「無論。我が望みはアドミニストレータへの復讐なれば。担い手が集いし今こそ、その時だ」

その言葉に、もう一度場に揃った顔ぶれを見回す。

大いなる蒼竜にその矜持を認められた、騎士ライオット。

黒き翁竜と赤き蛇竜、二つの竜魂を従えし神域の騎士、バルド。

そして、白竜の気高き心意——守護の誓いを己に定めた、自分。

四つの竜の魂と、その代行者達が、今ここに勢揃いしていた。

「奴の首を獲り、我が友を呪縛から解き放つ」

「そして、人界の民を解放し、来たる厄災に備える」

「大事な人達の記憶を、取り戻す……目的は一致してるな」

互いの顔を見合わせて、深く頷く。

そうすると、ルークは《白竜の剣》を、ライオットは《蒼竜の琴剣》を。

バルドは再び蛇腹剣——《赤竜の尾刃》を抜き、それぞれ掲げることで重ね合わせた。俺達で、アドミニストレータを倒す。そして、全部取り戻すんだ」

「任せろ、兄弟」

「——応」

そうして、三人の心は一つに統一されたのだった。

「うわー……なんか、無視しちゃいけないこと言ってるのに」

「わ、割り込める雰囲気じゃないです……」

誓いを見て、なんとも複雑な顔で言ったりネルとフィゼルに三人は振り向く。

それからまた顔を見合わせ、彼女達の前ですることではなかったと苦笑を浮かべ……

「——おや、これはこれは。忌々しい竜どもの身代わりに、役立たずの小娘が揃い踏みか」

背後から聞こえた声に、凍りついた。



心が凍えるような声だった。

まるで、この世の悪意全てを押し固めたようなそれに、ルーク達は振り向く。

回廊の奥。上へと繋がる大扉へやや近い場所に、いつの間にか一人の男が立っている。

「ク。そんなに私がいることに驚いたか？」

男は、艶のない漆黒の燕尾服を纏っていた。

手足はすらりと長く、服の上からでも均整の取れた体型がよくわかる。

顔立ちもよく整っており、薄く笑う唇や鼻は一つの崩れもない。

だが、無造作に伸ばされた長い頭髪の奥。

キリトのそれよりも光を吸い込む色をした黒い髪の中で光る、赤い瞳。

そこには、男の全てを台無しにするほどの、強烈で、吐き気がするような悪意が込められていた。

「ペーリッシュ………！」

「あれが例の……？」

「ああ。最高司祭アドミニストレータの相談役にして、いっどこで、どうやって奴に取り入ったのか分からない、とびきり怪しい野郎だ………！」

多分に警戒を含んだ声音で囁き、ライオットは《蒼竜の琴劍》を構える。
バルドも《赤竜の尾刃》を向けており、ルークも《白竜の劍》の柄を握って――

イイイイイインツ！

キイイイイイイツ！

オオオオオオオ……！！

ゴアアアアアアアツ！

「な……!!？」

「ぬう……!!？」

一斉に反応を見せた竜具に、驚きの表情を浮かべた。

《白竜の剣》が激しく震え、《蒼竜の琴剣》が光を明滅させる。

《翁竜の黒盾》が戦慄いて、バルドの纏う赤き蛇竜の骸を使った鎧が炎の勢いを増した。

今まで一度も見なかったことのない反応に、三人は揃って狼狽える。

元よりペーリツシユの登場に怯えていたリネルとフィゼルは、いよいよ近くの柱の影に走っていった。

だが、ペーリツシユだけはニタリと意味深な笑みを浮かべる。

「ほう、どうやら奴らは全て目覚めているようだな。そして愚昧な貴様らと違い、理解しているようだ」

「一体何を……」

愛剣のこれまでにない変化に戸惑い、思わず答えを得ようと聞き返すルーク。

しかし、黙ったままのライオットとバルドは、何かを悟ったのか厳しい表情を作った。「まあ、貴様らがどれだけ愚かであろうと興味はない。何故ならば——ここで全員、死ぬのだからな」

ペーリツシユが、ポケットに入れていた両手を軽く持ち上げ、力を込める。

すると、彼の周囲に変化が起こった。

景色が乱れ、歪んだかと思えば、なんと雷雲が現れたのだ。

空間から滲み出るように現れた黒雲から、赤みがかつた黄金の雷が迸る。

神聖術らしき、だがそれとは似て非なるものにルークは息を呑んだ。

「なんだアレは……！」

「つ……バルド殿」

「……………うむ」

ルークの後ろで、ライオットとバルドが目線を交わし、頷く。

そして彼らは一步踏み出すと、ルークを守るように臨戦体制を取った。

「いいか、よく聞けルーク。今から俺達が奴を引きつける。その間に、あの大扉の向こう

まで行くんだ」

「ライオット!? お前、何を……」

「案ずるな。我らが望みを果たすのだ」

二人の背中からは不退転の意思が発せられ、それ以上の言葉はなかった。

彼らの意志が変わらないことを察すると、悔しげにしながらも《白竜の剣》を鞘へ収める。

「よし。じゃあ、やるぞ」

「ああ……！」

「承った」

繊維を高めた二人に、ペーリツシユが口元を裂いたように笑う。

「最後の会話は終わったか？　では——死ね」

次の瞬間、槍の形に変化した雷がルーク達めがけて射出された。

騎士達は一瞬のうちに視線を交差させると、互いに最適の行動を選択する。

「フンツ！」

先に踏み込んだバルドが《翁竜の黒盾》で一の槍を防ぎ、二の槍を《赤竜の尾刃》で斬り捨てる。

「ハアツ！」

その背後から、形状を変化させた《蒼竜の琴剣》の弦を弾いてライオットが音刃を解放。

数十の音の斬撃が迫り、次の攻撃を用意していたペーリツシュが黒雲を纏うようにして飛び退いた。

暗雲や雷で対処しながら移動を続け、一流の技に対して見事な対応を見せるが、その代わりに道は開いた。

「今だ！ ルーク、行けッ！」

「彼奴を殺せ！ だが、決して命を落とすな……！」

「つ、すまない！」

二人の激励に近い叫びを受け、ルークは一直線に走り出した。

「フン！ 小賢しい真似を！」

空中を走るように回避していたペーリツシュが、雷槍の一つをルークへ飛ばす。

唸りを上げて飛来したそれは、一撃でルークを灰にする威力を秘めていた。

しかし、彼へ届く前に別の方向からやってきた音刃に切り裂かれ、霧散する。

「テメエの相手はこつちだ、真つ黒野郎！」

「貴様は我らが倒す……！」

「いいだろう！ まずは貴様らから消し炭にしてくれる！」

背中の方から聞こえる言葉と戦闘音に、思わず立ち止まりそうになる。

その思いをグツと堪えて、ルークは数十メートルの距離を踏破した。

既にキリト達を通っていた為に解放されていた大扉を潜り抜けると、内側から両手で閉じていく。

「ぐうっ……い！」

自分の背丈の何倍もある扉は重く、少しづつしか動かすことができない。

全身の力を振り絞って、鉤爪に変わりかけた両手の指に力を送り込む。

ついには自在に動かせるようになった背中の翼を広げ、風を作り出すことでひたすら押し続けた。

「うおおおおっ！」

そして、ライオットとバルドがペーリツシュと戦う光景を閉じ込めて。

重々しい音を響かせ、大扉が閉じた。

「はあ、はあ……くそっ」

乱れた息を整えつつ、悪態をつく。

扉に額を押し付けて、その向こうから僅かに聞こえる音に耳を傾けた。

数秒、そうし続け……やがて踏ん切りをつけるように深呼吸を行い、踵を返す。

「……早く、決着をつけなくちゃ」

グツと表情を引き締め直し、未練を断ち切ると前へ進んだ。



大扉の先には、それなりに広い空間が待っていた。

奥へ行けば、程なくしてごく短い通路の先に細長い窓の並んだ壁が見えてくる。

黒と白の石を交互に並べた廊下を歩いていくと、行く手に人影が見えた。

「あれは……」

一度立ち止まり、その人物を見る。

そのシルエットから騎士のような剣気が感じられないことを確認し、再び歩き始めた。

一步、二歩……一応警戒を解かないルークだったが、結局目の前にたどり着くまでその人物は何もしなかった。

「何階をご利用ですか？」

それどころか、ごく平坦な声でそんなことを聞いてくるではないか。

改めて、至近距離からルークはその人物を見る。

質素な黒いワンピースの上から、胸から膝まで覆う白いエプロンを着用している。

武器の類は一切見当たらず、灰色の頭髮は肩と眉の上で切りそろえられ、整った顔に感情はない。

「君は？」

「このエレベーターの昇降係でございます」

「エレベーター、つて……」

ふと、彼女の立つ銀色の円盤を見る。

差し渡しニメルほどのそれは中央に先端の丸い円柱がついており、何かしらの装置らしい。

続けて上を見上げ——遙か高くまで延々と続く縦穴を見て、絶句する。

「おいおい……もしかして、これで上に昇るつていうのか？」

「左様でございます。お望みの階を申しつけくださいませ」

まるで予め決められた定型句のように、少女は告げた。

一瞬逡巡するも、迷う時間さえ惜しいと感じたルークは円盤の上へ足を踏み入れる。

「じゃあ、出来るだけ一番上まで」

「かしこまりました。八十階層、《雲上庭園》まで参ります。お身体を手すりの外に出しませんようお願いいたします」

言われた通り、なるべく少女の邪魔にならないよう中央へ寄る。

彼女はそれを確認し、ガラス製の円柱に手を乗せると口を開いた。

「システム・コール。ジェネレート・エアリアル・エレメント」

術式が唱えられ、思わず体を強張らせる。

だがそれは攻撃術式ではなく、呼び出された風素は筒の中へ出現するとその力を発揮した。

10個の風素——相当な数を同時に生成したことに驚く間も無く、少女が式句を続ける。

「バースト・エレメント」

彼女の言葉に呼応し、筒の中に浮かんだ風素のうち三つが弾けた。

直後、足元に振動が走ったかと思うと、何かに引つ張られるように円盤が上昇を始める。

(なるほど……風素の力を使って、金属板を上下させるのか。面白い発想だな)

漠然とその仕組みを理解しながら、ふとあることを思い出す。

以前、誰かを獣の群れから庇って似たようなことをした。

あの時は足の裏に生成して、無理やり跳躍する距離を伸ばそうとしたのだ。

その記憶と、音や揺れもなく上へ登っていく昇降機を比べ、苦笑する。それから、無言で昇降機を動かしている少女へ目をやった。

(彼女も……きつと、整合騎士のようにアドミニストレータに使われているのだろうか)

年齢はルークとさほど離れているように見えないが、整合騎士の例がある。

果たして実年齢は、五十か百か……

そこまで考えて、女性の年齢を暴こうとするのは失礼だと誰かに教わったじゃないかと自分を戒めた。

「……一つ。お伺いしてもよろしいでしょうか」

手持ち無沙汰な気分になっていた時だ。

突然少女に話しかけられ、ルークは驚いて宙に放っていた視線を向ける。すると、少女はルークのことをガラス玉のような瞳で見ている。

「貴方は、空が飛べるのですか？」

「え？」

思わず間拔けな声を上げてしまう。

空が飛べるか、とは、一体どういうことか。飛行の神聖術などルークは知らない。では何故、と考えて——今、自分の背中に生えているものによろやく思い至った。

「ああ……分らないけど。多分、飛べるんじゃないかな」

「そうですか」

「……何故、そんな質問を？」

好奇心が湧いて、ルークは質問を返す。

少女は、じつと風素の詰まった筒を見つめ、沈黙した。

数秒して、どこか先ほどまでとは違う声音で語り出す。

「少し前に。この教会の主人を倒しにくという方々がご利用なさいました」

「つ……二人組の、俺と同じくらいのやつらか？」

「はい。そして彼らに、もし自由になったら何をしたいか、と聞かれまして……」

私はと、筒をその指先で撫で。

「私は、この昇降盤で空を飛んでみたいと……そう、答えました」

「……だから俺に、あんな質問を」

「はい。申し訳ございません」

「いや……いいよ。俺の方こそ、十分な答えをあげられなくてすまない」
「お気になさらないでください」

ぎこちない謝罪をかわし、口を噤む。

少女との会話は、それきり終わりを告げた。

やがて、最後の風素が筒の中から消える頃。

穴の途中に何度も見たテラスの最後の一つ、30番目で円盤は停止した。

少女も筒から手を離し、腹部で手を組むとルークにお辞儀をする。

「到着いたしました。八十階層、《雲上庭園》です。ご利用ありがとうございます」

「ここまで運んでくれてありがとうございます」

礼を告げて、昇降盤から降りる。

頭を下げたまま、弱まった風素に任せて降下していく少女を見送った。

その姿が見えなくなると、テラスの突き当たりの方へと目を向ける。

「……よし」

一步、奥へと足を踏み出して。

その瞬間、酷く胸が痛んだ。

「あつ——ぐつ……………」

思わず、その場で膝をつく。

両手で胸の中心を抑え、その中で強く脈動する心臓に触れた。
「頼む…………あと、少しだけ…………少しだけ、俺に時間をくれ…………」

——イイン。

じんわりと、まるで白い手拭いを黒いシミが染めていくように。

心の中にあるものが…………そこに秘めた記憶や思いが、色あせ、蝕まれ、消えていく。

それを分かっているながら、あとほんの少しでいいからと、そう願って。

「つ…………ふう……………」

そんなルークの願いを聞き届けるように、痛みは緩やかに収まった。

しばらく息を整えて、立ち上がる。

ザラザラと鱗の感触がする頬に流れた汗を拭って、再び前を見た。

「……………行く」

その心に残ったもの

歩き始めれば、今度こそ何にも邪魔されることなく進むことができる。
そのことに、少しだけホツとした。

(……聞こえる。この先に、あいつらがいる)

すつかり慣れ親しんだ特別な耳が、先にあるものを教えてくれた。
優しく包み込むような、黒い風の音。強く荒々しい吹雪の音。

慈しむべき、ルークがずっと守りたいと願ってきた弟のような二人の青年の心。

(それだけじゃない。他にも、いくつか——)

あの日、一度だけ聞いた二人の整合騎士の音。

花が散り、嵐のように鮮烈に舞う音。

ソルスの光さえ届かない底なしの湖が、静かに波打つ音。

そこにはキリトとユージオの他に、あの少女と……もう一人の誰かが、いるのだ。

「……ああ」

何かを自覚したように声を漏らして、自嘲げな笑みを口元に浮かべる。

それでも足を止めることはなく、大きく開かれた石扉の前までやってきた。

事前の打ち合わせ、そして昇降機の少女の言葉に従えば、この先は《雲上庭園》。

見立てでは、この場に配置されるのはアリスだろうということだった。

それは心意の音を聞いた今、確実なもので。

(ここから先に踏み込めば、本当に後戻りはできない)

ついに、過去と直接向き合う時がやってきた。

何度も結論を出し、バルドの前で誓いを叫んだにも関わらず、心が不安に揺れる。

ルークはその心を見て見ぬ振りも、否定もしない。それはあつてしかるべき恐れなの

だ。

「この恐怖があるからこそ。俺は、歩いてきたんだ」

強く自分に言い聞かせるために、口に出して呟く。

そうして覚悟を決め、ついに《雲上庭園》の中へと踏み込んだ。

途端に、鮮やかな色彩が立ち止まったルークの視界を彩った。

目に映るのは、芝の生い茂る地面や、色とりどりの聖花、清らかなせせらぎを奏でる

小川。

小川には芝生から煉瓦の小道がかかっている、その先には小高い丘が待っている。

「……」

そして、丘の上に目当ての人物達はいた。

小道からほど近い位置には、黒と青の背中。よく見慣れた少年達のもの。

それに対立するように、二人の整合騎士が立っている。

一人は、黄金と群青の鎧に身を包んだ可憐な少女騎士。

もう一人は乳白色と黒の鎧を纏った、美麗なる女騎士。

(——大丈夫。まだ、すべきことは覚えている)

そつと自分を安心させて、ルークは彼らの方へ歩き出した。

柔らかに生い茂る芝生を踏みつけ、花を潰さないよう、微かに残った情緒で避けながら。

迷いのない足取りで、自分の大切な物達のところへと、真っ直ぐに。

そうした慎重な足音を聞きつけたのか、最初に女騎士がルークの存在に気がついた。

油断なく少年達を睨んでいた赤い瞳がこちらに投ぜられ、その表情が凍りつく。

(どうしてだろうな。あの騎士に、そんな目で見てほしくないと思うのは)

笑うルークの顔は、果たして彼女の目には不気味に映ったのだろうか。

体を硬直させた女騎士に、ようやく異変に気がついて少女騎士が怪訝な顔をする。

肩を揺らして構えを解いた少年達も同じ反応をしたのか、三人は同じようにルークを見て。

やはり、顔を強張らせた。

もはや、悲しいという感情すらも湧いてこない。

微笑みを称えながら、その鉤爪と鱗のついた手や足を、金色に染まった双眸を。歩行に合わせて揺れる翼を見せ付けながら、小道を最後まで渡りきった。

「……………よう、ユージオ。キリト」

「ルー……………ク？」

「お……………前……………」

呆然と、二人が異形と化した自分を見つめる。

剣を構えていた腕は力なく垂れ下がり、驚愕と恐怖、困惑が入り混じった色を目に浮かべた。

そんな二人の顔を交互に見て、少しだけ笑みを深めた。

「よかった。まだ、お前らにはルークに見えるんだな」

「なん、で……………ど、どうして、そんな姿に……………」

最初に我を取り戻したのはユージオだった。

わずかな距離を駆け寄って、ルークの腕を開いた手で掴むと、訴えるように問いかける。

変わり果ててしまった友人の姿に絶望しているのか、目尻には涙が浮かんでいた。

「願いの向かって走り続けた、代償さ」

「つ……！ 君は、いつもいつもそうやって、僕らを置いて一人で……！」

「大丈夫。大丈夫だよ、ユージオ。俺はまだ、それを忘れてはいないから」

鱗にまみれた顔で、安心させるようにぎこちなく笑ったフリをする。

ユージオは、大きく目を見開いて、それからぐつと歪めると俯いてしまった。

力が弱まった手を優しく外し、次に黒い少年を見る。

彼はユージオと似通った顔をしていたが、その感情は困惑より悲しみの方が強く思えた。

まるでルークがこうなったこと自体に衝撃を受けたよりも、そうなってしまったことへの悲哀のような。

「……キリト。結局お前は、いつも俺の予想を超えて、誰より先に行くな」

「……ルーク。そんな姿になってまで、お前は俺達の、誰かの為に……」
「無鉄砲は、お互い様ってことだ」

いつものような軽口。

だというのに、キリトは下唇を噛んで、視線を逸らしてしまった。

そのことに少し寂しさを感じながらも。ルークは二人の間をすり抜けて、一步前に立った。

それからようやく——金色に輝く少女に、向き合ったのだ。

「……アリス。そう、君はアリスだ。ちゃんと、覚えてる」

「……あの時の、咎人ですか？ 随分と奇怪な……まるで、暗黒領域の怪物のようですね」

「果たして、奴らと俺。どちらが凶暴かな？」

挑発するように笑顔を変えると、顔をしかめたアリスは嫌悪するように後ずさる。

整合騎士となるほどの剣士に育った彼女でさえ、この姿は恐ろしいようだ。

「なあ。君は、もう覚えていないだろうけど。アドミニストレータに奪われてしまったのだろうけど……ずっと、謝りたかったことがあるんだ」

「……何を言っているのです」

低い声で、警戒に尖らせた眼光で、アリスはその言葉を跳ね返す。

彼女は、やはりもう別人にされてしまったのだと改めて実感した。

一瞬、走馬灯のようにかつての記憶が脳裏を流れる。

穴だらけで、全く噛み合わない。だけど、まだ心の中で風化してはいない。

四人の子供が笑い合う、色褪せた記憶を思い浮かべながら。

ルークは、ゆっくりと頭を下げた。



「すまなかつた。君から、未来を奪ってしまつて。そんな風にしてしまつて、本当に、すまなかつた」

謝罪の言葉は、驚くほどあつさりと形になつた。

てつきり、何を言うのかさえ忘れてしまつてゐるのかという不安は潰える。

「今更言つても、何もかも遅いのは分かつてる。でも、でも俺は……君にずっと、こうしなかつた」

ルークは理解している。これが単なる自己満足だと。

記憶を封じられ、人形にされた今のアリスに懺悔したところで何も終わらないと。

しかしながら、その心のどこか片隅にでもかつての「アリス」が残つてゐることを望んで。

あの日、押し倒した彼女の指先が暗黒領域の地に触れたことを想起しながら。

「許してくれなんて言わない。分からなくてもいい。けれど……ごめん、アリス」

深く、深く頭を下げる。

それは何十秒、何分と続き、やがて最初にそうしたようにゆっくりと頭を上げた。

「……………」

アリスを見ると、無言でルークを睨みすえている。

何を言っているのか理解に苦しむ。惘然とした表情がそう如実に語っていた。

やっぱりなど、失意を込めた眩きを溢していると、金属の擦れる音が鳴った。

「何をしたかったのか、よく分からないけど……アリスを誑かさないでくれる?」

彼女を守るようにして、女騎士が間に割って入った。

剣呑な眼差しでルークを拒絶すると、これ以上近づくと事は許さないと訴える。

その胸の静かな音は、アリスの淀みない黄金色こがねいろの心意を守るようだった。

「ああ……やっぱり、貴女は綺麗だなあ」

「……………へっ?」

ぼやけた記憶の、自分を捕らえにきた彼女の姿が浮き彫りになる。

もう、名前を覚えていない。

キリト達の名前だって、今この瞬間消えてしまいかもしれない、壊れた心の中で。

それでもなお、彼女のどこまでも底の見えない暗い輝きが、ルークを惹きつけていた。

「もし、騎士になつていたら。貴女は今と違って、俺に笑いかけてくれたのかな」

「あ、あなた、何言つて……」

「分かつている。俺は罪人で、貴女は騎士だ。そうである以上は——こうするしか、道はない」

本当に、心の底から女騎士を知れなかったことを悔やみながら。

ルークは、静かな瞳で《白竜の剣》を引き抜いた。

吐露された本心に困惑し、仄かにだが頬を赤らめていた女騎士が表情を変える。

その背後にいたアリスも戦意を見せ、隣に並び直した。

啞然としてルークの独白を聞いていたキリトやユージオも、各々の愛剣を構える。

「……」を、通してもらおう」

「……いいわ。身も心も魔性に堕ちてしまった貴方を、この私が斬つてあげる」

女騎士が、腰元に手をかけて己の剣を抜いた。

初めて見る彼女の武具は、《白竜の剣》と似通った片刃の反りがある刀身をしていた。吸い込まれそうな黒い刃はその心象を表しているかのようで、また一つ心を奪われる。

「何人増えようと、私のやることは変わりません。そなた達の邪心がいかなるものか、この剣で確かめるだけです」

アリスもまた、花の意匠が目立つ黄金造りの直剣を構え、剣気を発する。

それはライオットやバルド、これまで相対した騎士達と遜色のないもので、体に重石が乗せられたかのようなようだ。

その華奢な体にそぐわぬ気迫に、しかしかつての兄貴分として負けてやれないと、ルークは切っ先を向ける。

睨み合いの状況に入りかけた時、左右に二人分の気配が並んだ。

その一方……左側にやってきたキリトが、アリス達に聞こえないよう囁きかける。

「ルーク。カーディナルから、お前の状態を聞いた。だから正直言って、お前をこれ以上戦わせたくない」

「……そうか。だが、止めるならもう遅いぞ？」

「ああ、それも分かっている。だから、なるべく早く終わらせよう。俺とユージオがアリスを抑え込んで、彼女から受け取った道具で封じる。その間、あの整合騎士を抑えてほしい」

ちらりと前方に寄越されたキリトの目線を追いかける。

そこにはルークを見つめ、剣を構える女騎士の姿がある。

「……わかった。だが、アリスの剣気は尋常なものじゃない。気をつけろよ」

「今のルークに言われても、説得力ないよ」

「だな。……さあ、行くぞ」

最後の会話を交わし、三人は構える。

緊迫した雰囲気、丘の上に広がった。

どこからともなく風が吹き、小川の水面や聖花を揺らして――。

その風が止んだ瞬間、三人は同時に走り出した。

「整合騎士アリス殿！ 改めて、剣士キリト、勝負を申し込むッ！」

「同じく、劍士ユージオ！」

「いいでしょう。来なさい、我が《金木犀の劍》の前にその罪業ごと斬り捨ててあげます！」

高らかに名乗りを上げ、キリトとユージオがアリスに猛然と突き進む。

《金木犀の劍》なる黄金の直劍を携えた彼女もそれに応じ、中段に構えた。

その隣で、まずは一対一の状況にする為に女騎士がユージオに意識を定め――

「いきなり不躰だが、俺の相手をしてもらおうか」

「くっ――!?!」

爆発的な踏み込み、それこそ人外で速度で懐に潜り込んできたルークに目を見開く。

下から振り上げられた《白竜の劍》を、漆黒の劍でかろうじて受け止めた。

「フッ！」

「うあ――っ!?!」

それだけでは終わらない。

着地したのと同時に翼を広げたルークは、勢いよく一対のそれを振るうと風を生み出した。

それを用いて自分の体に突発的な勢いを生み出すと、なんと正面に向かって飛行した。

飛竜にしか許されていないはずの力を用いて、強引に女騎士を丘の外側まで連れて行く。

あまりの膂力と勢いに、女騎士は途中で逃げ出すこともできずに押し切られる。

小川を軽々と飛び越え、聖花の花畑が下にやってきたところでルークは剣を押す力を抜いた。

途端に圧力が弱まり、彼女は自然落下すると器用に体を捻って着地した。

「ふう……随分と反則的な真似してくれるじゃない？」

「ある子に、飛ぶことはできるのかと聞かれてな。少し、試してみたくなった」

上空で一定間隔で翼をはためかせ、滞空しながらルークは答える。

女騎士はそれ見上げながら、空を飛ぶ人間というこの世の理を冒瀆する相手にいかにして斬り込むか考えた。

しかし、彼女の焦りに反して、ルークはゆっくりと降下していく。

女騎士と一定の間隔を空けて花畑の中へと降り立ち、立派な白翼を折りたたんだ。

「……どういふつもり？」

「すまないが、これまで散々借り物の力で無茶を通してきてな。不思議なんだが……貴女には、正々堂々挑みたいと思つた」

「ふうん。大した騎士道なこと」

嫌味を口にしながらも、好都合だと剣を構え直す。

ルークの方もゆるりと《白竜の剣》を正眼に定めると、覇気を醸し出す。射抜くような赤の瞳と、凪いだ湖面のような金の瞳が絡み合った。

「忘れたというのなら、もう一度教えてあげる。私はイーデイス・シンセシス・テン。天界への旅路の供に、この名を心に刻んで死になさい」

「元剣士、ルーク。参る」

そして、二人は示し合わせたように同時に斬りかかった。



「ハア——ッ！」

「フ——ッ！」

鋭く呼吸を吐きながら、遠慮なく地面を踏み締め剣を振るう。

ルークは上段からの振り下ろし。イーデイスは中段からの斬り上げを放った。

小手調べの意味を含むその一撃は、互いの得物に当たると盛大な火花を散らす。

「くう——っ！」

「ぐッ！」

重い。

剣の重さ、体重の掛け方、技の冴え。どれもがほとんど互角。

故にどちらが押し切ることもなく飛び退くと、再び踏み込んで本格的に斬り合い始めた。

「シツ！ フツ！ ハツ！」

「セイツ、ラアツ！」

一撃一撃、全てがまともに当たれば相手の肉を切り裂き、骨を断つ斬撃。

秘めたるその威力とは裏腹に、劍筋はまるで演舞でもしているかのよう正確で、美しい。

（——すごいな。こんなにも強いのか、彼女は）

確かな研鑽を感じさせる流麗な劍技に、撃ち合いながらルークは内心で舌を巻いた。

もしも肉体が本来のものであれば、その素早い踏み込みには追いつけず、重々しい一撃へ拮抗できなかったろう。

その上で未だ全力とは思えず、つくづく騎士というのは規格外だと関心してしまう。

（何、こいつ！ 全然ビクともしないんですけど!? 本当にバケモノね！）

一方で、イーデイスも同じようにルークへ驚嘆していた。

イーデイスは十番目の騎士。つまり、三十一人いる整合騎士の中でも古参だ。

それだけの長い年月、数多の敵と斬り結び、時に死を感じながらも生き抜いてきた。

その中でも、これほど得体の知れない相手は初めてだった。

振るう剣は岩のように重く、外へずらすたびに手首が悲鳴を上げる。

体の軸は一ミルもブレず、姿勢を崩して隙を作ることもできない。

「エエエエエイツ！」

「っ——!?!」

あまりの異常さに苛立った瞬間、狙ったように渾身の一振りが放たれた。

「やばっ!?!」

慌てて出しかけていた足を後方へ踏み込むと、体を傾けてそれを躲す。

流れに身を任せて飛び退きながら、花畑へ落ちた剣先が土飛沫を上げるのを見た。

軽やかに一回転して足裏を地面につけたイーデイスが、ぴたりと剣を構える。

宙に飛び散った土が収まり、ルークが地面に埋まっていた《白竜の剣》を抜き出した。

「流石だな。整合騎士は、どいつもこいつも生半可な実力じゃない」

「……あんたこそ。その見た目に違わず馬鹿力ね」

「お褒めに預かり、光荣だ」

薄く笑うルークに、いよいよため息が口から漏れそうになる。

たった数合斬り合っただけで、この罪人の高い実力は十分理解した。

だが、同時にその真っ直ぐな剣筋に、アリスの言ではないが邪なものは感じられなかった。

(どういうこと？ 確かに、学院で捕縛した時は後輩の子に随分と慕われているみたい

だけど……)

どこか、違和感のようなものを感じる。

もう一度、ルークのことを見てみた。

やはり何度見ても、この世のものとは思えない恐ろしげな見た目をしている。

飛竜と人間が中途半端に混ざり合ったような異形は、とても自然のものではない。けれどやはり、その爛々と光る目には……とても澄んだ、意志の光しかなかった。

「……ねえ。あんた、前はもつと普通じゃなかった？」

そのチグハグさがどうしても心に引つ掛かり、気がつけばそんなことを口走る。

ハツとして、何を言っているのかと自分を叱咤してルークを見ると、彼も啞然としていた。

そんなことを聞かれるとは思っていなかったと目を見開く様に、なんだか自棄になつて捲し立てる。

「前にあんたを見た時は、もつと普通に人間らしかったでしょ！ それなのに、なんで怪物みたいな見た目になつてんのよ」

「……ああ。そういえば、そんなことがあったのか」

「何それ？ まるで、他人事みたいな言い方して……」

「すまない。ちよつと、記憶があやふやでな」

誤魔化すように、ルークは笑った。

それがひどく壊れかけているように見えて、イーデイスは不思議になる。

思えば先ほども、仲間達に慕われている様子だった。

アリスに対する謎の謝罪も、核心こそ不明なもの、誠実であったように思う。

「……最後に一つだけ、聞かせて」

だが、あくまで罪人は罪人。

他者の命を奪った以上、そしてこの塔に侵入した以上は、倒さなければならぬ。

緩みかけた心を律し、感情を押し殺した平坦な声で尋ねる。

「どうして、貴方はここまで来たの？ 何のために、そんな姿になってまで剣を振るうの？」

「——愛する者を、守る為に」

ルークの答えには、一切の迷いがなかった。

考えるまでもなく、それが当たり前のように言い切った。

真偽を確かめるように、イーデイスはジツと瞳を覗き込む。

少し離れた場所にいる男の、深い色を湛えた目を見つめ続け……やがて、ふつと息を吐く。

「分かったわ。ならその強固な意志に応じて、全力で相手してあげる」

「望むところだ」

静かな答えに、ふと少しだけ微笑んだ。

型を繰り出す為の姿勢を解き、イーデイスが黒刀を見せつけるようにする。

これから大掛かりなことをすると宣言しているような言動に、しかしルークは動かない。

何となくそう思うだろうと思っていたイーデイスは、遠慮なくその術式を唱える。

少々時間を要するものだったが、時間稼ぎを目的とするルークには好都合だ。

それでも隙だけは見せないようにしていると、ついに詠唱が完了する。

「システム・コール！　　“エンハンス・アーマメント”！」

黒刀に眠った神器としての力が、発揮される。

いくつもの窓が浮かび上がり、神聖文字が染み込むと、黒い刀身に紫の光が宿った。不気味な雰囲気醸し出すその輝きに、ルークは目を細める。

「さあ、いくわよ」

「こつちも——なっ!」

ルークが突貫を仕掛ける。

エンハンス・アーマメントの展開を許した以上は、油断などできない。

早々に対処しようとする踏み込んできた彼に、ゆつくりと黒刀を構えたイーデイスは迷いなくそれを振るった。

《白竜の剣》と黒刀が、引き合うように徐々に近づいていく。

そしてまた、火花を散らして互いを阻害する——はずだった。

漆黒の刃は、《白竜の剣》の純白の刀身を通り抜けると、ルークの胸を切り裂いたのだ。

「ぐっ!」

胸に走る痛みに、咄嗟に翼を使って後ろへ飛ぶ。

速やかに回避したことが功を奏し、追撃は加えられずに着地した。

「っ……」

シャツを切り裂いた一筋の亀裂に手を当て、離して見る。
そこにはべつとりとした血が付着していた。確かにルークは斬られたのだ。

「どう？ この《闇斬剣》の斬れ味は」

冷静な声音で。だが、どこか得意げにイーデイスはそう言った。

イーデイスという騎士

掌に付着した、自分の血を見る。

まだ、鮮明な赤色をしていた。傷を与えられたことよりも、そこに安堵する。

それでも見続けていれば別の色に塗り変わっていく気がして、ぎゅつと握りこむことで隠しこんだ。

「……見事だ」

「そうでしょう。あんたのように邪悪な……」

辛辣な言葉を浴びせられると思っていたルークは、不思議そうに眉をひそめる。

どうしたことか、途中で口を噤んだイーデイスは、無言で《闇斬剣》なる神器を構えた。

「……無駄なおしやべりはおしまい。かかってきなさい。今度こそ、切り捨ててあげる」
鋭い剣気が発せられ、《闇斬剣》に乗せられる。

何が都合の悪いことでもあったのだろうか、つい呑気な疑問が浮かんだ。

しかし、今更いかなる疑問も興味も己には不要だろうと、《白竜の剣》を正眼に立てる。

「フツ——！」

「シツ——！」

そして、再び剣戟の逢瀬を始めようと一步を踏み込んだ。

まさにその瞬間、《雲上庭園》を激震が襲った。

自分の体を支えることさえままならないほどの衝撃に、二人は慌てて足を止める。

そうすると、忙しなく顔を振り回して激しい音が発生している場所を探った。

やがて、彼らの視線はある一点——奥部の壁に定まる。

「キリト!!？」

「アリスちゃん!!？」

そこでは、驚くべき光景が繰り広げられていた。

黒い煌めきと黄金の輝きが、互いを飲み込めんと吹き荒れている。

黒い煌めきは、キリトがその手に持つ、見覚えのある黒塗りの柄——無銘の黒剣から発せられたもの。

その刀身を不定形に変え、何十と枝分かれし肥大化した様は、まるで原典たるギガスシダーのよう。

対する黄金の輝きは、アリスの手に携えられた《金木犀の剣》によるものだった。

キリトと同じように、その刀身を無数の花卉のようなものに変えたそれで、彼の身を切り刻まんとしたのだろう。

明らかに、《武装完全支配術》によるものだった。

この人界において最高峰の戦士だろう整合騎士との戦いで、その奥義を使うのは当然だろう。

ただ、唯一問題だったのは。

その黒と黄金の力の本流が混ざり合い、まるで爆発でも起こしたように破裂したことだ。

「ツ——!?!」

ルークとイーデイスが息を呑む前で、二人の《武装完全支配術》により壁が大きく崩壊する。

無限に等しい天命と、《不朽の壁》に並びうる超高優先度を持つはずのカセドラルの壁が、壊れたのだ。

互いに驚きをかに貼り付けた二人は、外から吹き付けた強烈な突風に身を引かれ。

そして、ぼつかりと空いた穴の外へと投げ出された。

「キリトツ、アリス——ツ?!」

「アリスちゃん——ツ!!」

叫び、走り出すも既に時は遅く。

あつという間に彼らの視界から、青空の中にあつたシルエットは下へと消えた。

愕然とするルークとイーデイス。無為に伸ばした腕をそのままに、彼と彼女の消えた

穴を見る。

そんな彼らをあざ笑うかのように、転がっていた瓦礫がひとりでに動き始めた。

不可思議に浮かび上がった破片の数々は、内外から集まっていくと自然に穴を修復していく。

「あああああつ!!」

あつという間に小さくなっていく穴に、ルーク達よりもずっと二人の近くにいたユー・ジオが駆け寄った。

彼我の距離はたつたの二メル。

だが、それを走破するよりも早く——無慈悲に、壁は最後の石を自ら嵌め込んだ。

「くそつ、壊れろ! 壊れろよ!」

悪態をつきながら、ユー・ジオが何度も拳を叩きつける。

遠く離れていても、その鈍い殴打でユー・ジオの手が壊れていく音が聞こえた。

やがて、痛みには耐えかねたのか、心が折れてしまったのか、力なくユー・ジオは膝をつき。

「キリト——っ! アリス——っ!」

己の無力を嘆く様に、慟哭した。

天井へ向けて吠える彼を、ルーク達はやはり呆然と見つめていた。

彼らは、いまだに目の前で起こった現実を処理できず、石像の様に固まってしまっている。

「ルークっ！ キリトとアリスがつ、二人がつ！」

だが、振り返ったユージオの必死の叫びでようやく我を取り戻した。

揃えたように目に意識を戻すと、反射的に走り出そうとする。

一歩踏み出して、その音で互いの存在を思い出すと再び体を停止させた。

「……………」

ジリジリと少しずつ足の位置を変えながら、互いの様子を伺う。

剣呑に光る双方の瞳には、この隙に乗じて斬りつけてやろうなどという不埒な思惑は欠片もなかった。

代わりにあるのは、ほんの少しでも早く、あの壁の向こうに消えた仲間のところへ行きたい——そんな一致した思いだけ。

それだけ確かめることができれば、十分だった。
互いに剣を収めこそしないものの、その闘志を幾分か弱めていく。
ついには牽制程度に収まったところで、ルークは耳をすませた。

（——聞こえた。壁に阻まれて、相当小さいが……あいつらの心意は、消えていない）

魂を聞き分けるその力が、ルークに安堵を与えてくれた。

ホツとする彼を見て、急に意識をどこかへ集めたのを察知していたイーディスは柳眉を顰める。

そんな彼女に構うことなく、ユージオに向けて声を張り上げた。

「安心しろ！ 二人はまだ死んでない！」

「何だって!?! だ、だけど、何でそんなことが——」

「信じて！ あいつらは生きてる！ 絶対にだ！」

狼狽えるユージオを落ち着かせる為、さらに言葉を募った。

それを聞いて心を乱したのは彼だけではないようで、警戒も忘れてイーディスが反応する。

「あんだ、今の本当なの!?! アリスは生きてるのね!?!」

「嘘を言つてどうする! どういう状況かは分からないが、塔の外でちゃんと生き残つてるよ!」

嘘を言つたら殺すと言わんばかりの彼女の剣幕に、同じほど必死な声音で答えを返す。

これまで塔を登ってきて、ルークの目測では凡そ一階層は六メル。

一際広大だった《霊光の回廊》を含めても、地上までは約五百メルの高さがある。

もし落下していたのなら、死体も残さず木っ端微塵になるのは確実な高度だ。

故に、落ちててもかろうじて生きているということはなく、必然的にほど近い場所にいることになる。

何より、幾ら何でもそんな距離ではルークの「耳」でも心意を聞き取れるはずがなかった。

「——だから、確実に死んではないない」

「よ、よかった……」

「……あなたの言葉が本当だって証拠は？」

「何なら外のテラスに出て、そこから確認してきてやろうか？」

「ええ、できるなら是非そうしてちょうだい」

ピリピリとした空気の中で、多分に棘を含んだ言い合いを繰り返す。

とはいえ一部本気であり、ルークもできることならテラスに戻って、そこからこの翼を使い安否を確かめに行きたかった。

（だが、さつき翼を使った感覚からして、そう長く飛ぶことはできない。おそらく、あいつらを探し当てるよりも前に俺が力尽きて墜落死する）

これだけ人を捨ててなお、至らない自分に心底腹が立つ。

万能を求めたわけでもなく、ただ一つの願いすらまともに叶えられないのだから、失望もするというものだ。

だが、そんな風に自己嫌悪するのが今するべきことではないのは、よく分かっている。故に、厳しい表情で考え込んだ彼の出した結論は……

「……ユージオ。お前は先に上へ行け」



「なっ、何を言ってるんだ！ 二人を助けるのが先だろう!？」

「だからこそだ。確か、上層のどこかに塔の外へ行けるような場所がある。まずはそこを探せ」

「万が一、二人が見つからなかったら!？」

「……その時は、一人でも先に進むんだ。あいつらは俺に任せろ」

「っ、君はどうする!？」

「俺は、この騎士を足止めする」

静かな声で告げられた策に、ユージオは悔しげに俯いた。

そのまま、暫く逡巡するように肩を震わせていたが……やがて、立ち上がって鞆に《青薔薇の剣》を収める。

そうすると、入ってきた石扉とは反対方向に設置された扉に向かつて踵を返した。

「……ルーク！ 後で、絶対に追いかけてこいよ！」

「……………ああ、出来たらな」

今一度、強く拳を握りしめて。

様々な葛藤や、複雑な思いを飲み込んだ青衣の青年は、《雲上庭園》を後にした。

数分の後、上階へ通じる扉の閉まる音が響く。

その後には、互いを睨みつける二人の剣士だけが残った。

ルークは、鋭く眼差しを尖らせる女騎士に真つ向から見返す。

「……そういうわけだ」

「あのお仲間さんたった一人で、何ができると思ってるの？」

「何でもできるさ。なにせあいつは、一度決めたらあらゆる困難をやり遂げる、自慢の弟分だからな」

力強く、その言葉の通り心から信じているように、ルークは笑う。

イーデイスの中で、また少し違和感が膨れ上がった。

「……さつき、仲間だけじゃなくてアリスちゃんのことにも気にしていたけど。あれはどうして？」

そのせいか、またしても口を滑らせる。

自覚はないが、既に彼女の中で戦意よりも疑問の方が優ってきていた。

「……あいつも、キリトも。俺にとって大事な存在だからだ」

「何を……あなたのような元一般民にとって、アリスちゃんが大切な存在だなんてありえないわ」

「それは整合騎士が天界から召喚されたという話か？」

「ええ。そして私達整合騎士は、任務以外で市井の人々と関わることは最高司祭様に禁じられている。だから、あなたと面識があるはずがない」

淡々と事実を述べるように語り続けるイーデイスだが、ルークはそれが偽りだと知っていた。

全て、アドミニストレータが己への忠誠と過去との断絶を行うための嘘でしかない。だが、それは彼女達にとって純然たる事実だと思い込まされているのだ。

だがそれを口にはせず、代わりにある質問を投げかける。

「……逆に聞こう。貴女にとつて、アリスはどんな存在だ」

今まで交わした会話の中で、彼女がアリスに親愛を抱いているのを何となく感じた。先ほどの反応もそうであるし、最初にルークとの間に割って入ったこともある。

同じ騎士を邪悪な者から守る為、と言われればそれまでだが……何か、それだけでは
ないように感じた。

「同じ誉れ高き整合騎士であり、妹のような存在よ。だからこそ、拐かそうとした貴方は
許さない」

答える彼女の声に、その胸の内の湖面に、一つの揺らぎもなかった。

変わらず聞こえる音は澄んでいて、心の底からそう思っていると確信するには十分。

だからだろうか。ルークは、次にこう言った。

「……俺が彼女の幼馴染だ、と言ったら？」

「……………なんですって？」

「俺だけじゃなく、さっきのユージオや、一緒に外へ投げ出されたキリトも幼い彼女と親
しかつたと言ったら、貴女は信じるか？」

「何を……」

馬鹿げたことをと、そう続けようとして、しかしその滑らかな声がそれを言うことはなかった。

これまでの、アリスに対するルークの態度を思い出す。

最初に、心からの謝罪をした時。

彼女を見る目の中に感じた、慈しみと、後悔と、優しい愛情。

それは自分が彼女にいつも向けるものと似通っていて、故に、たとえルークのように心意を読めずとも感じ取れた。

彼の言葉に乗った重みは、心意は、とても即興でアリスを騙すために取り繕おうとしても出るものではない。

(あれば、本物のように感じた。でも……)

イーデイスの中で浮上した可能性は、三つ。

一つは、自分でも見破れないほどの男の演技が上手いというもの。

一つは、実はこの男も元は天界に住んでいて、アリスを知っており、何らかのきつか

けで人界に落ちた、というもの。

そしてもう一つは——その言が全て真実である、というものだ。

(でも、そんなことがあり得るの？ だとしたら、私達は……………)

最後の予想の先にある事実を薄々ながらも察し、イーデイスは内心冷や汗を流す。

ならば、最初の予想がやはり正しいのか。

そう思考を巻き戻して——思い浮かんだのは、学院でのこと。

彼に剣を届けに、その手を酷く傷付けてまでやってきた小さな少女。

彼女がルークに向けていた淡い気持ち、その口付けもまた、本物だった。

それがあまりに純粹で、アリスが告げた一分という制約が過ぎても見逃してしまった
が……………

(……………分からない。目の前にいるこの罪人の、本当の姿が分からない)

罪を犯したことは事実だ。元老院の法の管理が誤るはずがない。

その反面、彼が多くの人間に慕われ、愛されるような人物であることも確か。

その二面性とも呼べる複雑さに、イーデイスは刹那の時間を何倍にも引き伸ばしたように高速で思考を回転させ。

「……………詳しく、聞かせなさい」

ひとまず、信頼でも敵対でもなく、様子見という結論に落ち着いた。

ルークは表に出さず、ほっとする。彼女と戦うことは、どうしてか心が痛んだのだ。

(アリスを慕ってくれているようだし、それに……彼女もライオットの仲間だ)

自分に真実を、無情の支配者に抗う力を与えてくれた、快活な騎士。

何百年も仲間達を欺き続け、苦悩しながら、それでも未来の為に、傀儡とされている彼らの為に戦ってきた。

整合騎士は、決して分かり合えない存在ではない。

彼のように己の道を選ぶ意思も、今日の前にいるイーデイスのように、誰かを大切に思う心だつて持っているのだ。

「……なら、一旦休戦つてことでいいな」

「もし嘘だとわかったら、その瞬間斬り殺すから」

「分かつてるさ」

ずっと互いに向けていた剣を、ようやく下ろす。

《白竜の剣》と《闇斬剣》をそれぞれ鞘に収め、いつでも抜けるよう手を添える。

そうして、ようやく対話の姿勢を取った。

「じゃあ、早速話を聞かせてもらいましようか」

「ああ」

(……さて。何をどう話すべきか)

未だに厳しい目つきでいるイーデイスに、ルークは思考をうならせる。

まずアリスとのことや、自分の目的を話すことは、この時間の根幹なのだから確実だ。

次に教会やアドミニストレータのことまでも明かすことは……少々躊躇せざるをえない。

アリスの過去、つまり騎士になる前のことを話せば、必然的にその秘密も暴くことにはなるだろう。

果たして、同じ整合騎士たる彼女にそれを言うべきか、それとも言わざるべきか。そこが問題だ。

(極力、慎重に話をしよう。彼女の中にも植えつけられているだろう枷を刺激せず、かといって隠し過ぎて嘘だと思われないように)

塾考を終えた後、ルークはやや重々しい口調で語り出した。



「まず、これを最初に言っておく。アリスは、天界から召喚されてなんていない。普通に両親から生まれて、名を授かり、普通の女の子として育っていた、人間だ」

「……本当に？ あんな天使みたいに可愛いのに？」

一瞬、聞き取った言葉への理解が遅れた。

イーディスの表情を見れば、真剣そのもの。とても天使だとか言ったように見えない。

きつと何か聞き間違えたのだろうかという気を取り直して、続けて話す。

「彼女の本当の名前は、アリスⅡツールベルク。ルーリッドの村の村長、ガフストⅡツールクの娘で、修道女見習いとして教会で暮らしているセルカⅡツールベルクの姉だ。パイを焼くのが得意で、歳のわりにしっかりしていて働き者な、村の子ども達の人気者だったよ」

「それが作り話なら、大した想像力ね」

「作り話じゃない。何故なら……」

そこで、一旦言葉を止める。

自分の意思に関わらず、拒むように喉に張り付いた舌。それを、無理やり引き剥がして。

未だ失われぬ、最も忌まわしい記憶を口にした。

「俺が、彼女を罪人にしてしまったから」

「アリスが、罪人？ 何を言ってるの？ 言葉の意味によっては……」

《闇斬剣》に手をかけたイーデイスに、険しい表情でルークは打ち明けていく。

「八年前。俺はアリスやユージオ達を含めた四人で、果ての山脈の洞窟へ探検に行った。

そこで、出口を探して迷い、洞窟を抜けて……暗黒領域へと出てしまったんだ」

「……………それで？」

「初めて見る荒涼とした大地に、俺達は言葉を失った。すると、暗黒騎士が目の前に落ちてきた」

今でもまだ、思い出せる。

騎士らしき者と撃ち合い、敗北して、虚空に血の筋を描きながら墜落した騎士。

自分達の目の前に落ちたその騎士は、助けを乞うように手を伸ばして。

それに手を伸ばし、踏み出していったアリスを――

「……俺が、掟を破らせた。騎士を助けようと歩き出した彼女を止める為に押し倒して。だが、俺のその行いこそが、彼女に暗黒領域の地に侵入するという禁忌を犯させたんだ」
「……………」

「今でも思う。あの時、俺が何もせずに、ただ言葉で彼女を諷めるだけにしていれば……何も、失わずに済んだんじゃないかって」

たった少し、指先が暗黒領域の土に触れただけ。

それだけで容赦なく咎人として捕縛し、連れ去った整合騎士を、教会を恨んできたが。

それと同じほどに……いいや、その何倍も、ルークは自分を憎み続けていた。

「その罪を償う為に、俺は剣の腕を磨いた。そして二年前、キリトと再会して、セルカを救いに再び北の洞窟へ行き、そこで闇の手勢……ゴブリンと戦った」

初めて戦った暗黒領域の怪物達は、恐ろしいほど殺意に満ちていて。

その時、声を聞いた。

思えば、あの時それを耳にしたのが、全ての始まりであり、終わりだったのだろう。不思議と懐かしく思いながらも、懐古の念を抑えてイーデイスへと語る。

「そしてザツカリアの街の衛兵隊に入り、資格を得て央都の修剣学院の門を叩き。……今、俺はここにいます」

ようやく一つ区切りをつけて、ルークは今一度イーデイスを見た。

彼女は非常に難しい顔をしていた。これまでの話を信じるか、詐称と断ずるか。

そんな中間の感情を浮かべながら、それでも何か感じたものがあるのか、黙して考える。

「……………どうして。同じ修剣士を斬ったの？」

じっと待っていると、数分の時を経て彼女はおぼおぼと問いかけてきた。

何故。そう聞かれて、あの時自分の心にあつたものを思い返してみる。

在ったのは、怒り。醜い欲望のままに他者を辱める者と、それを許す法を作った教会への憤怒だ。

「キリト達の側付き……………後輩が、奴らに陵辱されようとしていた。彼女達と、助けに行つ

たユージオ達を守る為に。俺は、奴を斬り殺した」

「……それで、貴方がまた罪を犯すことになるって知っていて？」

「関係ない。この手が血で汚れることよりも、あんな誇りの欠片も持たず、貴族の特権に溺れた悪党どもの蛮行を見逃す方が許せなかった」

「で、そんな後輩を守るために罪を被った貴方を、私は縛り上げてカセドラルまで連れてきたわけね」

「そういうことになるな」

ごく軽めの暗い冗談に、ふつと微かな笑みを互いに見せた。それから、また表情を消したイーデイスは何かを考え込む。

「……うん、そうね。なんだか、悪いやつではなさそう」

ルークには聞こえないような、小さい声で何事かを呟く。

すると、《闇斬剣》にかけていた手を両方とも外してしまった。

驚いて、思わずルークの方も《白竜の剣》を握っていた手を緩めてしまう。

「いいわ。貴方の話を信じましょう」

「……本当か？」

「ええ。貴方の言葉に嘘は感じられなかったし、私に信じてほしいという誠実さも感じました。貴方自身に向けた、後悔もね」

だから、と彼女は、幾分か緩くなった目つきでルークを見て。

「聞かせて。貴方が何を成し遂げる為に、ここまでやってきたのか。何を知り、感じてきたのか。それで、貴方がどういう人間か判断させてもらおうわ」

「……喜んで」

天の采配か、はたまた類稀なる幸運か。

歩み寄りの態度を見せたイーデイスに、ルークはいよいよ全てを話す決心をした。

「これから話すことは、貴女にとって……教会を信じる整合騎士にとって、とても辛いものだと思う。ともすれば、貴女は憤慨し、今度こそ俺を殺そうとするかもしれない」

「それを決めるのは私よ。そして貴方の話を聞くと決めた時点で、その用意は出来てる」
「おっかないな……だが、それなら俺も覚悟を決めるよ」

——それから、ルークは全てをイーデイスに話した。

ライオットとの邂逅。スワロウから告げられた人界の真実。

「アドミニストレータの数々の非道、その一つである、整合騎士と名を与えられた者達の本当の姿を。」

自分がここまでやってきた目的——かけがえのないものを取り戻したいという想いも。

その話はいくら手短にしようとも、長く、重々しいものだった。

三十分を超え、一時間もの時を過ぎた頃に、ようやく全てのことを語り終える。

「——だから、俺はアリス達の記憶を取り戻す。その為にアドミニストレータを倒し、そして、人界の未来をも守りたい」

「……………」

「これで、俺の話は終わりだ。正真正銘、これまでの旅路の全部だよ」

ふう、と疲労の溜息を一つ。

少しカラカラとする口の中に、こうなっても喉は乾くのかと苦笑する。

それから、恐る恐るイーデイスのことを見た。

彼女は、ずっと黙ったままだった。

途中何度か質問を挟みはしたものの、大きく怒りを露わにすることも、取り乱すこともなく、話に聞き入っていた。

じつと見つめてくるルビーのような瞳に、何度言葉がつかえそうになったか。

果たして、その甲斐はあったのだろうかと答えを待ち――

「……なるほど。つまり、貴方達は小さくて可愛い、今とは別の意味で天使のアリスちゃんを取り戻してきたわけね」

ごくごく真剣な様子で放たれた言葉に、その場でひっくり返りそうになった。



ガクンと力の抜けた両足に慌てて喝を入れると、腕を組んで胸を張っているイーデイスを見る。

「お、俺の話を最後まで聞いた答えが、まさかのそれか？」

「だってそういうことでしょう？ 最高司祭様が奪った記憶を取り戻せば、アリスちゃんは今よりもっと天使になる。違う？」

「いや、そりやまあ、間違っではないけれど……」

「納得がいったわ。天界からやってきたって言うのなら、たとえステイシア神によって過去の記憶を封じられてもこの私が忘れるはずがないもの」

「可愛いは正義、と言わんばかりに主張するイーデイスに、今度はルークが困惑する番だ。」

どうやら思っていたより、この女騎士は自分の感情が優先的らしい。

その反応を見るのが狙いだったのか、ニヤリと悪戯げに笑ってから、「でも」と続ける。

「実は、前から疑問には思っていたの。整合騎士が天界から送られてきたなんて話、何だか違和感があるって団長も言っていたし……」

「整合騎士団の団長が？」

ええ、と肯定する彼女に、ルークは驚きを隠せない。

よもや、最初にして最強たる整合騎士が人界の支配者を疑っているとは。

あるいは、誰より長く彼女の人形になっているからこそ懸念を持ったのだろうか。

いずれにせよ驚くべき事実には、ルークはアドミニストレータの不安は的中したことを皮肉げに笑った。

「それにね、貴方の話を聞いて改めて考えると、何もかもがおかしいのよ」

「おかしいって、何が？」

「いくら私達整合騎士が一騎当千の力を持っていても、広大な暗黒領域の全てと対等に争えるはずがない。十数人で境界を守るのが関の山なのが、いい証拠よ」

「それは確かに……貴女達は日々闇の勢力と戦い続けているわけだが、実際はどうなんだ？」

「凄いわよ、一匹殺したら十匹は湧いてくる感じ。近頃では、暗黒領域の総力は数万にも上るのだとか。そんな相手に、たかだか三十人ぼっちの騎士団だけで人界を守る？ 馬鹿じゃないの？」

「お、おう」

そんなことできるわけじゃない、と臆面もなく言うイーデイスに、少し気圧される。

彼女はアドミニストレータへの盲目的な忠義より、自分の現実的主観で判断を下していた。

ブツブツと恨み節を吐く姿には、整合騎士本来の厳格さはあまり感じられない。

「いろいろな合点がいったわ。時折他の騎士が昔のことを忘れてるのも、最高司祭様が私達を信じておらず、都合のいいように調整しているから」

「……そうだ。奴は貴女達を自分の駒に仕立て上げ、支配欲を満たしているだけだ」

「私達が人界の中で、カセドラルにしか滞在を許されないのは、ぼったり騎士が自分の家族や友人と出くわさないようにするため」

「奴には何て説明されてたんだ？」

「整合騎士は人々の生活を守るのが責務であって、そこに介入して余計な混乱を生まないように」、よ。まったく、とんだ詭弁ね」

怒りを押し流すように、イーデイスが深いため息をつく。

それから、いくつか自分の中の矛盾を解消しているのか、何度も納得したように頷く。

「よし、決めた！ 私はこれ以上、貴方と刃を交えない。そう誓いましょう」

「……いいのか？ 今更だが、貴女はアドミニストレータを守る為にここにいらっしゃる？」

「思うところがないわけじゃないわ。でも、アリスちゃんや私達の記憶を弄ったことは許せないし……何より、彼女の心の安寧のために、人界が滅ぶなんて認められない」

己が偽りの存在と知って尚、イーデイスは折れることはなくそう宣言した。

彼女の言葉に乗る決意に、信念にはどこにも作り物めいたものはない。

本当に、心の底から人々の命を憂いているのだろう。

(とても強く輝く、漆黒の魂……ああ、本当に、本当に綺麗だ)

ルークは、そんなイーデイスに心底見惚れた。

たとえ、本来の自分を消されて、代わりに与えられたのが欺瞞でも。

それを信じる騎士自身が真に気高いのならば、決して空虚なものではないのだろう。

「だから、最高司祭様の企みを止めるのには賛成よ。まあ、協力してはあげられないけど」

「それで十分だよ。もう、君と戦いたくない」

「あら。お姉さんに惚れちゃった？」

「……かもしれないな」

動きを止めたイーデイスから目線を外し、瞼を閉じる。

考えるのは、目の前にいる騎士のこと。

強く、美しく、気高くて、それでいて優しい、一人の整合騎士。

ただアドミニストレータに操られ、法を守るだけではない心の持ち主。

(……やはり、この人しかない)

胸の中に生まれた臃げな感情に形を当てはめ、目を開く。

それから、何故か顔を真っ赤にして狼狽えているイーデイスへ話しかけた。

「イーデイス。貴女に一つ、頼みがある」

「なっ、なにっ!? 変なこと言ったらぶった斬るわよっ!?」

「……何をそんなに怒ってるんだ?」

「何でもないっ! それで! 頼みって何よ!」

謎の威圧感を放つ女騎士に若干動揺しながらも、ルークはそれを告げた。

「もしも、これから俺が俺じゃなくなつて。守るべき大切なものを傷つけようとしたら。その時は——この首を、刎ねてほしい」

「……………何を言つてるの？」

一瞬でイーデイスの表情が変わる。赤みは消え、僅かに怒気が漏れ出した。

「もうダメなんだ。きつと俺は、そのうち全て忘れてしまう。その時、大事な人達をこの手で害するようなことがあれば、生きている価値がない」

今、こうして歩み寄ることができたこの女騎士との会話さえ、いずれ消えてしまいうだろう。

悲しくて心惜しいその想像は、必ずやつてくる未来で、報いなのだ。

「俺は、愛すべきものを守る為に生きてきた。それを忘れてまで、この世界に存在したくない」

「……………」

「だから、頼む。俺が全てを捨ててしまったその時には、他の誰より……君の手で終わりたい」

最後まで言い切つて、深く頭を下げる。

それ以上何も言い残すことはないとも言うようなその姿に、イーデイスは眉を顰めた。

(なんで貴方は、最初から終わることを決めているの？ 抗おうと、生きようとしないの？)

他人のイーデイスから見ても、自分の命を軽んじていることが簡単にわかる。

それを自覚していないならまだしも、理解した上で受け入れていることがどうしようもなく手遅れだ。

目的を果たす為なら自分はどうなってもいい——そんなことしか考えていないのだろうか。

けれど、それこそ他人の彼女がここで諭しても意味はないに違いない。

愚直な態度に、深くため息を吐いて……そして彼女は頷いた。

「ええ、分かったわ。貴方が完全に自分を失った時は、私が倒してあげる」

「……ありがとう」

感謝の言葉とともに挙げられた顔には、やはり微笑が浮かんでいた。

妙に心をチクチクと刺すその顔に納得できないものを覚えながらも、撤回の気持ちは

押し込める。

「それで、上へ行くの？」

「ああ。ユージオが心配だ。それに、なんとかしてキリト達を助けないと」

「……その体で？」

ルークの体を上から下まで見て、胡乱げな眼差しで言う。

話の過程で、そうなつてしまった経緯は大まかに聞いていた。

先の願いの所以でもあろうその姿で、ルークは儂げに笑う。

「ああ。短いが、時間は残されてるはず——」

ドグツ!!

その時、イーデイスにも聞こえるほどの脈動が花畑に木霊した。

驚いて目を見開くと、表情を苦悶に歪めたルークが胸を押さえて崩れ落ちる。

「あつ、ぐつ……………」

「ちよ、ちよつと！ 大丈夫なの!？」

「ま、だつ…………あと、少し……………頼む……………っ!!」

喘ぐように言うルークに、慌てて駆け寄る。

間近でその壮絶な表情を見て、言葉を失った。

「うつ、あつ……………」

「え!!? ちよ、ちよつと!」

願いは聞き届けられなかったのか、ぐるんと白目を剥いたルークは意識を手放す。

揺らいだ体は地面に向かつていき、イーデイスは咄嗟に手を伸ばした。

程なく両手の中にやってきた体は、思った以上に重々しく、バランスを崩して前につんのめった。

「ふぐつ……………」

結局、支えきれずにルークの体は膝の上に収まってしまふ。

間に挟まれている両手を引き抜き、感覚が麻痺しかけた手首を軽く振り回した。

「ふう……………まったく、厄介な男の子だなあ」

十分に感触が戻ってきたところで、じとりと睨み下ろす。

苦しげな表情で呼吸を繰り返す横顔には、先程までの余裕がない。

少し年相応になったルークを、イーデイスは押しつけることなく。

『あら。お姉さんに惚れちゃった？』

『……かもしれないな』

「……別に、だからってわけじゃないけど」

やや不服そうな、しかし不機嫌ではない声で。

軽く頬を膨らませ、誰に向けたわけでもない悪態を零すと、少し姿勢を変えらる。

それはルークに負担のかからないもので、彼女はそっと乱れた長い灰髪に手を置いた。

「ちよつとだけなら、休ませてもいいわよね」

イーデイスの手が、優しくルークの髪の上を滑っていった。

黒の使者

「フツ——！」

光の弦を五指で弾き、無数の音刃を解き放った。

向かう先は、アドミニストレータへの道を妨げる障害として立ちはだかつた黒き使者。

文字通り音の速さでやって来た実体のない刃に、男は雷雲を操り結界のように防ぐ。

「この程度か、蒼竜の小僧！」

「まだまだア！」

挑発するように嗤うペーリツシユに、ライオットは対抗して声を張り上げた。

——最初に、ペーリツシユを見た時。

ライオットの胸中には、言いようのない不安が立ち込めた。

何故かはわからなかった。

だが、確かに彼は、その存在に穏やかでないものを抱いたのだ。

(初めて現れたのは、定期的に開かれる、互いの任務の状況を報告し合う整合騎士達の会合だったか)

そこで、アドミニストレータの代理として初めて元老長チユデルキンと共に参席した。

整合騎士団長や副団長フアナテイオと、淡々と言葉を交わす様は堂々の一言。

常に冷静沈着に意見を述べ、人界における統治やダークテリトリーとの境界の防衛任務を改善していった。

そうして確かな実績を積み上げながら、決して必要以上に己を主張することはない。

常に影のようにそこにいて、騎士達へ最高司祭の意思を伝える橋渡し役。

非の打ち所のない、まさに最高司祭がその崇高なる胸の内を打ち明けるに足る相談役。

それが騎士達の中での、ペーリツシユの印象だった。

その完全さこそ、異様なものを直感した所以かもしれない。

全く素性の知れない、天界から召喚されたという整合騎士より浮世離れた存在感。どこからやって来て、いつアドミニストレータに見初められ、その立場を得たのか。

その真相は闇のように見通せず、時を重ねるほどライオットの中で不信は膨れ上がった。

いつからだろうか。静かに語るその口が、不気味に裂けているように見え始めたのは。

いつからだろうか。感情の见えないその瞳が、残酷な愉悦に歪んでいるように感じたのは。

一体、いつからだろうか。

その背中に伸び、壁に投じられた影を——巨大な怪物のように、錯覚し始めたのは。

(結局、その勘は正しかったわけだ——！)

こうして《蒼竜の琴剣》を携え、敵として相対したことで確信した。

吠え立てるように小刻みに共鳴する愛剣に言われるまでもなく、そのことを感じ取る。

アレは、決して存在してはいけないモノ。

ともすれば、アドミニストレータより遙かに滅ぼすべき邪悪な何かだと。

「貴様の企みはずつと知っていたぞ！ 最高司祭の非道を知りながら、その屈辱を必死に堪え続ける顔は見ものだったなあ！」

ペーリツシユの周囲に、十以上の雷槍が形成される。

術式を唱えることもなく、それらは凄まじい速度で射出され、空中で軌道を変えながら襲いかかってきた。

何もかもが規格外の攻撃に対して、距離の近い雷槍から音刃で撃ち落とす。

しかし、半数は刃をすり抜けてしまった。

「つく、間に合わないか！」

素早く《蒼竜の琴剣》を両刃剣の形状に戻すと、攻撃に備える。

まずは右からやって来た雷槍を、鋭い横薙ぎで相殺する。

剣と槍が接触した瞬間、大岩がぶつかったように錯覚しながらもなんとか斬り捨てた。

続けて、左とその斜め下から突貫してきたものを、二つの刃でまとめて明後日の方へに逸らす。

「ぐっ」

そこで、腕が痺れて一瞬動きが止まった。

待ってましたと言わんばかりに、不規則な軌道を描いて迫る残りの雷槍。

高い威力を持つそれに、剣の天命を犠牲にして盾にしようと鈍い腕を動かした。

「——フツ」

しかし、その前に雷槍はかき消される。

ライオットの周囲を取り囲んだ超高速の劍陣は、軽やかな音で崩れていった。そうすると、ほど近くにいたバルドの手の中に直劍となつて戻る。

「無事か、蒼角の」

「助かった。危うく相棒を傷物にするところだったぜ」

冗談交じりの礼を述べながら、二人は並んで得物を構える。

彼らの前に、ゆつくりとペーリツシユが空中から降りて来る。

その顔には不敵な笑みが張り付き、竜の騎士二人の猛攻はまるで最初から無かつたかのような。

「思ったよりも楽しめる。だが、生前の奴らには遠く及ぶまい」

「あんまり見下してると、足を掬われるぜ？ 最高司祭相談役さんよ」

「我らの力、この程度と思うな」

気丈に言い返すライオット達に、ペーリツシユは笑顔を不気味に深める。

それから、ふとバルドへとその視線を投じた。

「バルド。バルド、バルドオー、哀れな騎士め。何もかも根こそぎ奪われ、復讐心で生き続ける亡者。ああ、哀れだなあ？ 貴様の逃亡劇は、中々に楽しい見世物だったぞ？」

ニヤニヤと歪む口の端からは、愉悦と暗い悦びの感情が浮かんでいる。

バルドの懊悩を踏みにじるような言葉に、ライオットが殺気立った。

しかし、それと反して愚弄された本人は眉の一つも動かしてはいない。

「ん？ 言い返さないのか？ これでも私は、お前を上手く弄ぶ為に色々と策を練ったのだがな？」

「幾らでも虚ろに叫ぶがよい。貴様の如き下郎の言葉、我が心に一片の揺らぎも与えはせぬ」

享樂によつて他者を貶める畜生の言葉など、この騎士には響きもしなかった。

それよりも余程、衝撃的な出会いをしたばかりなのだ。

これから数十年先まで、あれを上回る出来事はないだろう。

故に、陳腐な妄言など間に受けるに値しない。

「ハハハッ、大した自信だ。やはり貴様が代行者の中で一番面白いぞ、バルドオー！」

狂氣的な色をこれでもかと滲ませて、目と口を見開いたペーリツシュが攻撃を仕掛け

た。

瞬く間に生成された極太の雷槍が、螺旋状に渦巻きながら唸りを上げて飛び出す。ライオットとバルド両方を狙い、その数は優に二十を超えていた。

「蒼角の！」

「応ッ！」

一言で、歴戦の経験から互いの意思を通じ合わせた騎士達も動き出す。

結合が解け、炎によって繋がれた刃の鞭が縦横無尽に宙を駆け巡った。

それに合わせ、天井に向けて琴剣を構えたライオットが全ての弦を素早く弾く。

カッ——！

ゴツ!!

ポロン——ッ!!

雷が弾け、恐るべき不可視の刃が大气を切り裂き、音の刃雨が降り注ぐ。

互いが互いを殺す為の絶技は、見事なまでに相手に届くことなく対消滅した。

「さあ、もっと私を楽しませろ！ その上であらゆる絶望を抱きながら死ぬがいい！」
「テムエの傲慢を後悔して死ぬのはそっちだ、ペーリツシュ！」
「その首、貰い受けるッ！」

騎士と黒き使者の戦いは、ようやくその幕を上げた。



「起きないなあ」

カセドラル八十階層、《雲上庭園》。

そこに広がる花畑の一角で、イーデイスは座り込んでいた。

揃えた膝の上には、一人の少年がやや苦しげな寝息を立てながら横たわっている。無理に起こさず、されど放っておくこともできずに、こうして見守るように足を貸しているのだ。

「まったく……少し前まで戦っていたのに、ちよつと無防備なんじゃないの？」
全くその気のない口調で言いながら、ルークの乱れた髪を指先で掻き分ける。
少しだけ整えられた長い髪から、その奥に隠れていた横顔がより露わになった。

（十九歳だったっけ。結構大人っぽい顔をしてる）

年齢以上の精悍さを感じさせるのは、果たして背負った信念の重さ故か。

顰められた眉や、脂汗の浮かぶ鼻、苦しげに歪んだ唇を見て、そんなことを思う。
きつとその表情や、頬に生えた鱗がなければ、さぞ整った顔立ちなのだろう。

「こんなこと男の子にするの、初めてなんだぞ？」

もし触れたら痛いかもしれないと、鱗を避けて頬を突く。

小さく呻き声を上げたルーク。合わせて身じろぎをして、少し仰向けになる。

すると、一直線に切り裂かれたシャツの内側にある、岩のように割れた筋肉が垣間見えた。

線に沿って走った傷は、もう塞がりかけている。尋常ならざる治癒力だ。

「エルドリエとかは貴族っぽい洗練のされ方だけど、こつちは磨き抜かれた原石って感じかしら」

先刻の打ち合いで、並々ならぬ修練を積んできたのはすぐに分かった。

それは体つきにも表れていて、そつと傷跡を隠す為に上着の裾をずらす。

「ん……………」

「うん？」

「ユージオ……………アリ……………ス……………キリ……………ト……………俺が……………必ず……………お前ら……………を……………」

「……………一体どんな夢を見てるのかしら」

口の中で何事か呟いているのを見下ろし、また広がった髪を直す。

なんだかそれが、昔誰かにやっていたように懐かしい感覚を思い起こさせた。

（もしかして、前の私は弟とかがいたのかな。それとも妹？ ……うん、妹がいい。それもアリスちゃんみたいに可愛い子）

「そういえばアリスちゃんも妹がいるんだっけ、と独り言を呟く。

自分も彼女も、本来の記憶は奪われ、それを確かめることは叶わない。

だが、それを取り戻す為にこそ、この青年はこの場所まで昇ってきたのだ。

「ねえ。もし貴方達が最高司祭様から、アリスちゃんの思い出を取り戻して。その時貴方だけがいなくなったら、悲しむとは思わないの？」

起こさないよう、慎重に前髪を撫でながら、そんな質問を投げかける。

当然、答えは返ってこない。

それでもイーデイスは、慈しむような手つきを止めなかった。

「私にはわからないけど。きつと、とても大切にしていたんでしよう？　本当の弟や妹のように、愛していたんでしよう？」

出会ったばかりでも感じられるほど、言葉の節々に溢れた愛情。

心の底から……自分の命と引き換えにしても守りたいと、そう決意するほどの存在。

イーデイスが守るべきとしている、人界と、そこに住まう民に向けるものとは異なる。それは整合騎士という、人界の守護者としての存在意義を証明する誇りであり、義務

感だ。

「大義の為ではなく、大切な誰かのために……でも、そうしたら残された貴方の大切な人の心は？」

もしかしたらいたかもしれない、*“愛する誰か”*の記憶が、今の自分にはない。

けれども、深い愛情を以って接すれば、相手も少なからず同じものを抱くはずだと思う。

その仮説は、変わり果てた彼を見て二人の青年が浮かべた表情を思えば、決して間違っていない。

「貴方が彼らを愛するように、あの子達だって貴方を愛してるんじゃないの？ それなのに、全部諦めてしまったの？」

よもや、彼らの心の中にだけ生きていけばいいともいうのか。

答えることができないのをいいことに、一番されたくないだろう質問を投げかける。

しばらくの間、じつとその寝顔を見つめ続けていた。

誰にも邪魔されることのない静寂が訪れ、緩やかに左右へ躍る聖花がそれを見守る。

「……なーんでこんなに親身になってんだろ、私」

ふっと短く溜め息を吐いて、近づいていた顔を元に戻す。

戦わないとは決めたものの、まだ仲間でも友人でもない男にどうしてここまで心を動かされるのか。

強固な心意に感嘆させられたからか。

それとも、自分がアリスを可愛がるように仲間達を思いやっていたからか。

あるいは――

『あら。お姉さんに惚れちゃった？』

『……かもしれないな』

「……いやいや、それはないから」

頭をよぎったものに、強く左右にかぶりを振って掻き消す。

流石にそれが理由になることは、いくらなんでも初対面であり得ないだろう。

普段は任務で東方の防衛に赴き、異性と関わりがないとはいえ、そこまで単純ではない……と思いたい。

適当に相槌を打っただけ、という可能性も十分にありうる。

「それに、私とこの子じやかなり歳が離れてる……つて、なんか言い訳してるみたいに なってるし」

何だか思考がおかしな方向に向かっていくのを感じ、慌てて中断する。

「これはそう、アレね。騎士として、彼の高潔さに感じたものがあるだけ。うん、そうよ」
誰が聞いているわけでもなし、うんうんと何度も頷いて。

代わりとでも言うように、なんとなしにルークの頬へ手を添えた。

「早く目覚めなさい。使命を果たして……そして、貴方の大切な人達の為に生き延びて」
そう、微笑んだ。



「ハハハハア！」

「くっ！」

「ぐ……！」

嵐のように降り注ぐ無数の雷に、ライオット達は全力に近い動きで逃げ回る。

もはや、壮麗さの全てが失われた《靈光の回廊》を無慈悲に破壊する力の暴流。それは一つでも当たれば、大きく天命を損ずる死の凶兆に他ならない。

(こりや修繕が大変だな、なんて軽口も叩けねえッ！)

強靱な意思で慄く体を律し、的確に雷を避けながら狙撃地点を探す。

どこもかしこも破壊され尽くしているが、いくつかの場所はまだまだもな足場として残っていた。

幸いにも、雷が落ちてくる間隔は一定だ。気を見計らえば反撃も出来る――

「――そう思っているのだろうか？」

「蒼角の！」

「っ！」

嘲るような声と、鋭い警告に咄嗟に反応する。

落雷の合間に飛び出そうとした足を止めれば、眼前に雷槍が降って来た。

《蒼竜の琴剣》を使い、後ろへ跳躍すると空中で一回転して回避を試みる。

「どうした！ 疲れてきたか!？」

「この、バケモンがつ!」

息をつく暇もなく、容赦無く雷雲から頭上へ向かって迸る一条の光を躲す。

不恰好な踊りを舞うようなその姿に、ペーリッシユの哄笑が響き渡った。

(おいおい、いくら何でもおかしいだろうが！ 奴の雷は無尽蔵か!?)

いくらなんでも、この雷は異質すぎる。

神聖術ではないことを薄々感じてはいたが、それでもあまりに限界がない。

神聖術が空間や自分の神聖力を、《武装完全支配術》が天命を大きく消費するように。

全ての理には代償が存在し、いかに強大であろうとも終わりが必ずやってくる。

故に、この強力無比な輝きの理不尽さは恐怖以外の何物でもない。

（何か、絡繰があるのか？ アドミニストレータですら覆せない世界の法則を外れた、何か——）

反撃の機会を窺いながら、必死に打開策を考える脳裏に。

ふと、底の見えない微笑みを湛える、あの白い使者の顔が過ぎっていった。

「……………まさか、そんなことが？」

「動きが鈍いぞ！」

「っ、くっ！」

ペーリツシユが手を伸ばし、そこから唸るように発射された雷の球から横飛びに逃げる。

床の上を転がって体勢を立て直すと、ようやく治まってきた落雷の向こうにいる男を見た。

ペーリツシユは、突破口を開こうと攻撃を続けるバルドヘニタニタと笑みを浮かべている。

（この世に生を受けたものではない。スワロウのように、世界の形を決めた神が生み出

した存在——?)

その仮説が、彼の中で現実味を帯びていく。

異質な存在感も、終わりが無い力も、まるで生前の四聖竜を知っているような発言も。何もかも、人界の始まりから全てを観測してきたあの男に似通っていた。

(だとすれば、奴の正体は一体……)

次々と浮かぶ疑問に思考を裂きそうになったが、すぐに中断する。

ペーリツシユの本性がなんであれ、打倒するべき敵であることには変わりがないのだ。

(今は、奴を殺すことだけを考える！ ルーク達がアドミニストレータを倒しても、こいつが生き残っている意味がない！)

推察を一旦投げ捨て、ライオットは再び《蒼竜の琴剣》を構える。

出現した弦に指を添え、放つ音刃の数と威力、軌道や距離を瞬時に計算する。

秀でた知力を存分に使つて全てを測り終えると、その指先が弦を弾いた。

ポロン——！

流麗な音を立て、絶妙な力加減で形成された数十の音刃が乱れ飛ぶ。

それらは雷雲を打ち破ろうと奮闘していたバルドを後押しするように、彼へ向かう雷を打ち消した。

「む——」

「——ッ！——」

ペーリツシユが眉を顰めた瞬間、バルドは銀光を煌めかせる。

蛇腹状に展開していた剣を一つに戻し、腕から炎を伝わせて赤く燃え上がらせた。腰だめに構えられた、常人であれば大剣に匹敵する大型の直剣に炎と重なった光が宿る。

キリトが言うならば、片手用直剣単発系ソードスキル、《バーチカル》の輝き。

「フツ——」

竜の炎と秘奥義、二つの力を重ね合わせた一撃が薙ぎ払われた。

猛々しいその一閃は、ペーリツシユの周囲に展開されていた盾の雷雲を一刀両断する。

「むう……!」

「ハッ!」

続けて、流れる水のような連続の動きで直剣が蛇腹剣へと高速変化。

バルドが腕を振るえば、命を持ったかのように動き出す。

そして宙に漂っていた雷雲の残滓を消し飛ばし、ついにペーリツシユの全身を捕縛した。

「小癩な——!」

「セエア——ッ!」

野太い叫びと共に、大きく全身を用いてバルドが《赤竜の尾刃》を操る。

上へ向けて振りかぶった腕に従い、巻き付けたペーリツシユごと剣は空高く舞った。

「今だ、蒼角の!」

次に叫ぶは、共闘する担い手へと。

「——それを待つてたぜ、バルド殿！」

負けず劣らずの音量で答えたライオットは、既に《武装完全支配術》を展開していた。不敵に笑った目元に青い鱗を浮かばせ、一つに纏まった光弦を引き絞る。

瞬く間に刃と刃の中心に収束した音塊が、使い手が手を離すと同時に解き放たれた。

目に見えない刃の塊が、豪速で飛び去っていく。

触れれば人と同じ大きさの金属塊すら細切れとする、必殺の一矢。

それが、解けて退避した蛇腹剣が空中へ残したペーリツシユへと迫った。

「くっ——！」

初めて顔を歪めると、ペーリツシユは両手を体の前で交差させる。

滲み出るように再び雷雲が出現し、十分な厚みを生む前に音塊が到達した。

激しい音を立てて、雷と音が衝突する。

それは一瞬のことで、勢いが優った音塊は雷雲ごと男の身を吹き飛ばした。

天井近くの壁に着弾し、新たな破片と土煙が爆発する。

「つと……」

それを見届けた瞬間、ライオットの意思に関係なく琴剣から弦が霧散した。

「流石に、いくらお前でも日に二度の《武装完全支配術》は無理をさせすぎたか」

大きく天命を減少させているだろう相棒を撫で、もう一度前方を見る。

バルドの背中の方こう側、大扉に程近い付近の壁に待っていた土煙が薄れる。

「……………」

そこに、ペーリツシュが埋まり込んでいた。

高い耐久度を持つ壁を易々と砕く一撃を食らっても、その身が千々になつていないことに息を呑む。

ありえない、と目を見開くライオットの視界の中で、不意にペーリツシュの指先が動いた。

「……………やつてくれたな、小僧」

低く、入り口近くに陣取ったライオットにもよく聞こえる声が響く。

それまでの愉悦が消え、怒りが秘められた言葉を吐くと、男はゆつくりと赤い瞳を投じた。

「よもや、ここまで骨があるとは思わなかったぞ。せいぜい、奴らの残骸を振りかざして騒ぎ立てる小物と思っていたが……どうやら、もう少しやる気を出す必要があるようだ」

「……………！」

その瞬間溢れ出た濃密な殺気に、ライオットもバルドも身構える。

ペーリツシユは両手に力を込め、強引に穴から体を引き抜いた。

そのまま垂直に落下してくると、地響きを立てて足の裏を床へめり込ませる。

「覚悟をしろ、塵芥共。貴様らを、この身で振るえる全力で消し炭にしてくれる」

暗い声でそう言った途端、ペーリツシユの周囲にまた変化が起きた。

現れたのは、やはり黒雲と黄金の雷。

またそれかとライオットが思った瞬間、それらは見たことのない変化を始めた。

これまで黒雲から生まれ、離れていた雷が、その太さを増して雲へ巻きつく。まるで中に包み込むように増殖した金雷は、やがて翼のない竜のような形へ変じた。次々に同じものが生まれ、あつという間にペーリツシユの周囲に十匹の雷龍が控える。

「さあ——最期に無様に踊って、私を楽しませろ」

「誰がテメエの歌で踊るか——よっ！」

「フンツ——！」

再び、使者と騎士達の殺し合いが始まった。

騎士との別れ

(ああ……なんだろう、この暖かい感触は)

不思議なその熱に、暗闇へ落ちていた意識が引き上げられる。

今日だけで三度も感じた冷たいその世界は、またもルークのことを取り逃した。

熱に導かれるまま、ルークは薄らと目を開けて――

「すう……すう……」

「……………え？」

すぐ目の前にある、上下逆さの端正な顔に間拔けな声を上げた。

それは、整合騎士イーデイスの顔だった。眠っている彼女の静かな寝息が聞こえる。

閉じられた瞼を彩る睫毛は長く、化粧の類をしていないと言うのにとっても美しい。

「——じゃない！ 何だこの状況は！」

胸が痛み、気絶したと思ったら、すぐ側に女性の寝顔があった。一度も体験したことのない事態に狼狽していると、不意に別の感覚を得る。

それは後頭部からのものだ。柔らかく、それでいて硬い感触がする。

混乱したルークはそれが何なのかすぐには理解できず、しばらくあたふたとした。

「……もしかして、今俺は膝枕というのをされているのか？」

しばらくしてから、少し落ち着いてようやく現状を捉える。

膝枕。横になった人間に、もう一人の人間が膝を寝具に見立てて差し出す行為。

随分と懐かしいものだった。昔はよく誰かにされていた気がするが、その記憶はもう無い。

加えて、何故か額にはそこを撫でいたかのように彼女の手が置かれている。

(なんでこんな事になってるんだ)

確かに和解はしたが、ここまでのことをされるほど親密にはなっていない。理解はしたものの納得はできず、やはり目を白黒とさせるしかなかった。

ただ一つ言えることは、その温かさも柔らかさも、決して悪いものではない。

「ん……」

「っー」

「あれ……私も、いつの間にか寝ちゃってた……」

そうこうしているうちに、イーデイスが目を覚ましてしまった。

瞼を持ち上げた彼女は、覚醒直後に特有のぼんやりとした顔をする。

やがて、徐々に目の焦点が合ってきた。

完全に定まる頃には、ルークの目と真正面からかち合い、ぱちくりと瞬かせる。

直後、みるみるうちに白い頬が赤く染まり上がると、素早く背筋を正した。

離れていったイーデイスの顔と、その際に香った甘い匂いに少し名残惜しくなる。

(……変態か、俺は)

心の中に浮かんだどうしようもない男の性に呆れ果て、ルークも身を起こす。

「ちや、ちゃんと起きたみたいね！ いきなり倒れるから、死んだかと思ったわよ！」

「そう簡単に死ねないさ。……その、ありがとう」

「い、いいえ」

口を閉じて、目線を合わせないよう互いに明後日の方向を向く。

なんともむず痒い空気が流れ、こんな状況だというのに気恥ずかしくなってしまう。

(キリト。ロニエへの対応に困っていたお前の気持ち……今、少しだけ分かったぞ)

弟分のことをまた少し理解(?)した、ルークであった。

「じゃ、じゃあ貴方も起きたことだし。早速やるべきことをやりましょう」

「ああ、そうだな」

結局、脈絡もない下手な話題転換で無理矢理にその雰囲気打ち消した。

先に話を振ってくれたことに内心でそつと感謝しつつ、気怠い足に力を入れて立つ。

そうすると、未だに顔を赤くして何やら眩いているイーデイスへ手を差し出した。

「どうぞ？」

「……あ、ありがとう」

おずおずと乗せられた手を軽く引つ張って、彼女が立ち上がるのを助ける。

鎧に包まれ、腰に得物を履いたイーデイスの体は、しかし思っていたよりも軽かった。完全に立った瞬間、パツとすぐに引き抜かれた手に苦笑を漏らした。

「それで、これからどうするの？」

「そうだな。上に向かわせたユージオも心配だが、兎にも角にもまずはキリトとアリスだ」

表情を真剣なものへと変えて、目下の課題について思案する。

単身最上階を目指しているだろうユージオも懸念すべきだが、それよりも二人の方が優先度は高い。

いざとなれば戻ってくる事ができる彼と違い、現在進行形で塔の外にぶら下がっているかもしれないのだ。

「確認するが、この上の階層には、大きく開けた場所があったよな」

「《ぎようせい 暁星の望楼ぼうろう》のこと？ ああ、そういうばあそこはカセドラルの中で一番外との隔たりがない場所ね」

改めて、スワロウが所有していたカセドラルの見取り図を思い返す。

記憶が正しければ、《暁星の望楼》は他の階と異なり、高い優先度と自己修復能力を備えた壁を持たない。

名の通り、ソルスや星々を眺める為に階層を支える大きな4本の柱以外は壁が取り払われているのだ。

万が一、二人が戦いをやめ、今のルーク達のように休戦協定を結んだとしよう。

何かと人証しなあの男なら決してありえない話ではなく、仮にそれが実現したとして。

キリトなら、確実にアリスと協力して絶体絶命な状況を打破しようとするはずだ。

その場合、遥か八十階層分も下にある地上より、上を目指す可能性が高い。

ただ……

「確か、望楼があるのは……」

「……九十五階層、ね」

二人の間に、暗い沈黙が舞い降りる。

この《雲上庭園》から十五階層も上、距離に換算して90メル。

果たしてそれだけの距離を、人間の身一つで登りきれるものだろうか。

(そもそもこの話は、キリト達が戦っていないという不確実な前提のもとに成り立っているわけで……ああくそつ、本当に厄介なことになった)

思わず頭を抱えて叫びたくなるが、そうしたところで何も変わらない。

無駄な時間の浪費は避けて、極力明るい声でイーデイスへと語りかける。

「悩んでも拉致があかない。そこしか望みがない以上、俺達も向かうべきだ」

「そうね……一応聞くんだけど、さっきの力で二人が今どこにいるのかとか分からない？」

「試してみよう」

一つ頷き、瞑目すると意識を耳に集中する。

二人の心意を強く思い浮かべ、その上で異形の耳を澄ました。

五秒、十秒と黙って探索をするルークを、イーディスはどこかもしげな目で見つめる。

「……………駄目だ」

「！」

「この階層の近くに、二人の反応はない」

「そんな……………」

「だが、消えてもいない。ほんの僅かにだが、捉えることができた」

「ほっ、ほんとう?!? どこにいるの?!?」

思わず詰め寄って、両肩をがっしりと掴みこむ。

目を開けたルークは、そのまま視線を宵闇に染まりかけた窓が円形に並ぶ天井へ投じた。

「上だ。驚いたことに、読みは当たっていらしい」

「それってつまり、アリスちゃん達は《暁星の望楼》を指しているってことね?」

「そこまでは定かじやないが……………少なくとも、諦めてはいないようだな」

希望の見える言葉に、ほっと安堵に表情を緩める。

それから、すぐ近く……………身長差があるので、正確には頭一つ分ほど上……………にあるルークの顔にハツとする。

両手を肩から離すと、数歩後ろへと下がって軽く咳払いをした。断じて、熱くなった頬をごまかす為ではない。

「それじゃあ、決まりね。私達も行きましよう、九十五階層へ」
「ああ」

意見を統一した二人は、早速《雲上庭園》を後にした。



(……そういえば。まだ、イーデイスとアリス以外にも整合騎士がいるんだった)

《雲上庭園》を去り、上階への階段を登りながら、ふと思い出す。

ライオットから伝えられた、現在このセントラル・カセドラルに在中している整合騎士達。

そのほとんどはキリト達によって打倒され、イーデイスとは和解の道を選ぶことができた。

だが、まだ一人。最強の刺客が残っているのだ。

「……そういえば俺、まだ整合騎士団長の名前を知らないな」

幾度となくその存在を耳にし、対策会議ではその脅威力を強く印象付けられた。

だが事ここに至るまで、ルークは未だ全ての騎士を束ねるその人物の名を知らぬのだ。

聞きそびれていたのか、あるいはそれも忘れてしまったのか……難しげに眉間を寄せ

る。

「団長の名前？ ライオットから聞いてないの？」

隣を歩いていたイーデイスが、ひよっこりと視界の端に入り込んでくる。

お茶目な仕草に一瞬気圧され、それを取り繕うように慌てて答えた。

「多分……」

「多分？ それって……ああ」

「察してくれて嬉しいよ。そういうわけだから、できれば君に教えてほしいのだが」
「いっけど〜」

あらゆる騎士を退けた今、最後の関門として立ちはだかるであろう強敵。
せめてその名を知っておこうと問いかけたルークに、彼女はあっさりと頷く。

「団長の名前は——ベルクーリ。ベルクーリ・シンセシス・ワンよ」

「……………なんだって？」

「聞こえなかったか？　じゃあもう一度。団長は…………」

「いや、待て、もういい。ちゃんと聞こえていた」

あらそう？　と不思議そうにするイーデイスから一旦目を離し、手で目元を覆う。

前へ進むために一方の視界は確保しながら、掌の内側で目元を歪めた。

（ベルクーリ……………ベルクーリだった？　それはまさか、あの御伽噺の英雄の？）

脳裏をよぎるのは、ルーリッドの人間ならば幼子でも知っているもの。

三百年前にルーリッドの村を興した先祖達、その中のある一人を元にした御伽噺だ。

かろうじて忘れていない物語の主人公である、初代衛士長にして豪傑なる剣豪の名が、ベルクーリ。

そして今、イーデイスの口が紡いだ騎士団長の名もまた、ベルクーリだった。

（偶然の一致かもしれない。大昔に同じ名前の剣士がいて、それをアドミニストレータが整合騎士に仕立て上げたのかも。だが、もしも違うのなら……）

決して軽くはない衝撃に見舞われ、一瞬肉体ではなく精神に由来する目眩が起こる。

「団長はすつごいわよく。一番長く生きてるだけあって、その腕前はまさに無双無敵。100年に一人の天才って言われてるアリスちゃんでさえ、まだ一度も勝つたことがないみたいなんだから」

「……そりゃあ凄いな」

得意げに語る女騎士に、いよいよ天を仰ぎたい気持ちになった。

もしもその予想が的中していたとすれば、運命というのは本当にルークにだけは優しい。くれない。

これも宿命か、はたまた災いか——それはもう、深い深いため息が口から吐き出された。

そうしている間にも、どんどん二人の足はカセドラルの中枢部へと近づいていく。八十一、八十二と階層を重ねていくが、しかし人の気配一つすら存在しなかった。

「この上には誰もいないのか？」

「そうねえ。あるのは整合騎士の居室くらいかしら。あ、それと元老院もか」

「元老院……法の番人達か」

「実は元老長以外、誰も中を見たことがないのよねー。あの肉ダルマ男、嫌味ったらありやしない……」

よほど鼻につく人物なのか、不快げに呟かれた後半にやや顔を引き曇らせる。

しかし、どうやら彼女を含めた整合騎士達は教会の半身の実態を知らないようだった。

九十六く九階層にあるというそこは、スワロウが言うにはアドミニストレータの暴虐の象徴とすら言えるようだが……

「貴方にとつては、因縁がある場所よね」

「……そうだな」

ライオスの一件のみならず、八年前アリスを連れ去られた件も。

法の管理者であり、執行者である元老院の決定が運命を決めてしまったと言っても過言ではない。

そこまで考えて、ふとイーデイスへ視線を投じる。

黙々と前を見据える女騎士は、十番目に整合騎士として選ばれた存在だ。

十三番目の騎士たるライオットが四帝国統一大会の最初の被害者である為、それ以前の騎士はなんらかの咎を犯した罪人となる。

それ故にアドミニストレータに見初められてしまった、ある意味ルークと同じ彼女は、何を思うのか。

「……君は」

「ん？」

「君は、取り戻したいと思わないのか？ 自分の記憶を。大切な誰かとの思い出かもしれないものを」

思わず口をついて出たその問いかけに、ピタリとイーデイスは立ち止まった。

同じく足を止めたルークは、しまったと密かに目を見開く。

ハラハラとした気持ちを抱いていると、数段上にいた女騎士はゆっくりと振り返り。

「うーん、あんまり。ほら、私ってかなり長いこと整合騎士やつてるから。今更思い出し
ても、ね？」

どこか寂しそうに、だが悲観はしていない、そんな儂い笑み。その表情に見惚れつつも——自分の失態を悟る。

イーデイスは二百年以上、整合騎士として停滞した時の中を生きてきた。

その永久に等しい時間は、ただの人間が一生を終えるには十分すぎるもの。

たとえ彼女に家族や、恋人がいたとしても、とつくに死んでしまっているのだ。

それをわざわざ思い出したいかと呑気に聞くなど、度し難い行為だった。

「ごめん。俺は、そんなつもりじゃなくて……」

「分かっているって。あんまり気にしてないから、貴方も気に病まないで」

「……だけど」

「それよりも今は、人界の未来とアリスちゃん達のこと。でしょ?」

そう言い、答えを聞かずに踵を返して進み始めるイーデイス。

しばらくの間、後悔を込めた瞳で彼女の背中を見つめて。

そのうち、ルークはぐつと口を引き結ぶと歩き出した。



数時間の時をかけ、ルーク達はカセドラル上層を登っていった。

イーデイスでさえ知らぬ騎士が待ち構えていることへ警戒しつつ、慎重に進んだ。

そこには、図書館を飛び出したときほどの力がルークに残っていなかったという理由もある。

来るべき時に備え、全力を振り絞れるように。体力を温存し、緩やかに歩んだ。

あるいは……いざれ別れることになるであろう、この女騎士との時間を惜しんだのか

もしれない。

「さて……次が九十階層か」

体感で言えば、八十階層から七時間と半刻といったところか。

各階を適度に探索しつつ、ついにその大台まで上り詰める。

「この先にあるのは大浴場ね。一階層丸ごと使っていて、気持ちがいいのよ。団長も遠征帰りによく入っているし」

「……ちなみに、前回の遠征は？」

「つい最近ね。確か、貴方達が牢を脱したのと同じくらいに帰還したんじゃないかしら」
「それは……」

もしや、その大浴場に整合騎士長ベルクーリがいるのではないか。

話を聞いて、ふとそんな予想が思い浮かぶ。

だが、それは流石にないだろうとすぐに否定した。

自分で考えるのもおかしいことだが、侵入者がいる状況で呑気に湯浴みはすまい。

そうだな？ と目線で聞けば、しかし彼を知るイーデイスは微妙な顔をする。

「……わかんない。団長、私以上に規則に縛られないから。もしかしたらそういうこと

もあるかも」

「騎士長の貫禄ってやつか……?」

「あ、あははー……」

笑いながら誤魔化されて、ルークはなんとも言えない顔をしてしまう。

とはいえ、何処かにいることには変わりないだろう。より一層に気を引き締め直した。

やがて、九十階層へ繋がる大階段の終わりが見えてくる。

最後の一段まで登り切った時、目の前には《靈光の大回廊》のような大扉があった。

「……か」

「ええ。でも……」

その扉は、既に開かれた後のようだった。

おそらくはユージオが通っていったのだろうと、数歩近づく。

すると、ふと扉の隙間から風が流れてきた。大浴場には似つかわしくない、超低温のものだ。

それが白い鱗と甲殻に包まれた手を撫で、眉を上げる。

(これは、大回廊の空気と同じ……またユージオが、《武装完全支配術》を使ったのか?)

覚えのあるその冷たさに、隣のイーディスへ視線を向けた。

彼女もルークを見ており、二人は頷きあうと剣に手をかけて警戒する。

そのまま、ルークを先頭に扉と扉の間を足音を消してぐり抜けた。

「こ、これは……」

「なんてこと……」

そして、二人が中で見た光景は。

全てが氷に閉ざされた、凍えるような大浴場だった。

幅が五メルはありそうな通路も、その左右に並ぶ、何十人も入れそうな浴槽も。

大浴場を支える柱はおろか、氷の膜やその上に走る半透明の蔦と薔薇は天井にまで届くかというほど。

見覚えのある、しかし《靈光の大回廊》を超えた絶景に、二人は啞然とするしかない。「これをユージオがやったのか……?」

「《武装完全支配術》なんて規模じゃないわよ……完全に、《記憶解放術》級の方だわ」
弟分が作り出したであろう氷の園は、彼らの度肝を抜くには十分過ぎた。

周囲を見回しながら進んでいくが、浴場には二人以外に人の気配は感じられない。
どうするべきか迷っていると、中央の通路の最奥から音が響いた。

「っー!」

咄嗟に剣の柄を握り、入口と同じ大きさの扉を睨む。

腰を落とし、臨戦態勢をとってからルークは“耳”を使った。

聞こえてきたのは、二つの心意。扉の向こうから大浴場に入ってこようとしている何者かは二人で――

(……あれ? この心意は……)

ルークが何かに気付いたその時、大理石の扉が開け放たれる。

そうして姿を現したのは——上から下まで黒の少年と、黄金の騎士鎧に身を包んだ少女だった。

「キリト！ アリス！」

「アリスちゃん！」

思わず声を上げれば、大浴場にやってきたキリト達が驚いたように肩を跳ねさせる。

示し合わせたように身構えて、しかしルーク達の姿をその目に捉えるとすぐに警戒を解いた。

「ルーク！ 無事だったのか！」

「それはこつちの台詞だ、馬鹿野郎！」

「イーデイス殿！ どうしてここに！」

「アリスちゃん、平気!? その真つ黒不審者に変なことされなかつた!？」

互いに駆け寄った四人は通路の中央で顔を付き合わせると、堰を切ったように言葉を吐き出す。

ルークはキリトを、イーデイスはアリスを抱きしめ、その身の安否をしつかりと実感した。

「とにかく、お前が無事でよかった。本当に」

「お、大袈裟だな。ていうか、ちよつと痛い……」

「す、すまん!」

慌ててキリトの体を離す。以前より大幅に筋力が増えていることを失念していた。苦笑する彼から異形の手を隠すように下ろすと、次にアリスを見る。

「アリスちゃん、右目どうしたの!?! この眼帯は何!? 怪我でもしちゃった!?!」

「お、落ち着いてくださいイーデイス殿。大したことはありません」

「アリス……」

イーデイスにこれでもかと弄られていたアリスは、ふとこちらへ振り向いた。

片方が黒い布で覆われた、青い瞳がルークを捉え……そこにもう、冷たい色はなかった。

「……ルーク、ですね?」

「……思い出したのか?」

「いえ。でもキリトから、貴方がユージオと同じように、私の幼馴染であることは聞き及びました」

「そうか。聞いたんだな。昔のことを」

「ええ」

首肯する彼女に、薄々と塔の外で何があつたのかを察する。

きつと彼女は、全てを知ったのだ。

整合騎士に与えられた偽りの使命も、奪われたものや、本当はあったはずの幸せを。

失われたその右目は、自分がそうだったように戒めを打ち破った代償だろう。

キリトを一瞥すれば、その予想は当たっていたのか、重々しい表情で頷かれる。

「そうか……なら、改めて謝らせてくれ」

「あ、頭を上げなさい！ 今の私に当時の記憶はありませんし、その謝罪は本当のアリスに向けるべきものです！」

頭を垂れかけたルークの方を押しとどめ、アリスは早口に諫めた。

顔を上げたルークは、困ったように細い眉尻を下げている少女を見て仕方がなく姿勢を戻す。

「わかった。でも、謝意だけは受け取ってくれ。今のアリス・シンセシス・サーティイを作ったのは、他でもない俺なんだから」

「……貴方に聞いていた通り、一部の物事に関して彼はとても頑固なようですね」

「おい、キリト。そんな説明をしたのか？」

「い、いやー、ははは……」

後頭部をかきながら、視線をよそへやる少年にため息が二つ重なる。

それを聞いて顔を見合わせ、ルークとアリスは不思議な既視感に襲われた。

「何故でしょう。以前にもこうしたことがあったような気がします」

「ああ、恐らくな。こいつは昔から一言余計だから……」

言つてから、はてと首をかしげる。

何かがおかしかつたような気もするが、どうせ記憶の欠如のせいだろうとすぐに忘れた。

一先ずの顔合わせと済ませたところで、アリスが次に見たのはイーデイスだった。

「イーデイス殿。貴方がルークと共に、ここまで来たということは……」

「うん、そういうこと。あ、けど勘違いしないでね。私は最高司祭様と戦う気はないか

ら。ただアリスちゃんの無事を確かめたくて、ここまで付いてきたようなものよ」

「そうですか……イーデイス殿は非常に頼もしい騎士なので、お力添えが期待できないのは残念です」

「ごめんね。私は、自分の任地の防衛を強化しなくちゃだから」

「いえ。それも同じほどに重要な任務です。どうか、くれぐれもお気をつけて」

手を取り合つて語り合う二人に、ルークはその瞬間が来たのだと理解した。

アリスの手を離れたイーデイスが、ゆっくりと振り返る。

それがとても長い時間のように思えて、自分がこの騎士との別れをひどく惜しんでいるのだと悟った。

穴だらけの心をよぎる、経験したことのない感情に胸を痛めていると、ついに彼女はルークを見る。

「そういうことだから。私が一緒にいられるのは、ここまでよ」

「……そうみたいだな」

「あら。なんか寂しそうね？」

「どうだろう。これが寂しいという感情なのか、もうよく分からない」

もっと別の何かのようにも思えるが、これからそれを知る事はないだろう。

ただ、感じたものは確かに特別な何かで、イーデイスという一人の騎士……いや。

目の前の女性は、何かがルークにとって唯一無二だったのだ。

「ありがとう。話を聞いて、信じてくれて。ここまで共に来てくれて……心の底から、嬉しかった」

「真剣な顔でまたカッコいいこと言っちゃって。そんなんだから、あの後輩の子に好かれてたんじゃない？」

「……後輩？ 誰だ？」

キョトンとしたルークに、イーデイスは一瞬硬直した。

キリトやアリスも驚愕して目を見開くが、当の本人は首を傾げている。

「……何でもないわ。それよりも、ちゃんとアリスちゃん達を守るのよ」

「当然だ。それが俺の存在意義だからな」

まるで、それが世界の真理のように言う。イーデイスは目を細めた。

見た目にそぐわぬ、深い色に染まった赤い瞳で、ルークの目を覗き込む。

「……あまり、無茶をしないでね。どうしても立ち上がれなくなったら、その時は誰かを頼ることもしていいのよ」

「君は、優しいな」

「貴方が自分に優しくなさすぎなのよ」

そうかも、と苦笑したルークに、イーデイスは微笑んだ。

「それじゃあ、さようなら。自分だけは守らない、かっこいい竜騎士くん」

「ああ。誰より優しく、強い心を持つ騎士様。どうか、無事で」

笑顔のまま、別れを告げる。

踵を返したイーデイスは、下層の飛竜の発着場へ向かうのか入り口へと歩いていく。

ルークはその背中が見えなくなるまで、ずっと見つめ続けていた。

騎士長ベルクーリ

イーデイスの後ろ姿が階段の向こうへ消えるまで見送り、ルークは振り返る。

すると、キリトとアリスが呆気にとられたような顔をしていた。

「どうしたお前ら？」

「い、いや、なんでもない！ 気にしないでくれ！」

「今のは一体……」

「深く考えるな、アリス。ルークはこういうやつなんだ」

「どういう意味だ、おい」

じとりと睨めば、やはり一言多いキリトは愛想笑いで質問を躲す。

やれやれと溜息をつくど、不意にある疑問が頭の中に浮かんでくる。

「そういえば、お前ら。《暁星の望楼》からここまで降りてきたんだよな？」

「ああ。まったく大変だったぜ。気絶したアリスの重いこと重いこと……おまけに、背

負って登ってやったのに、突き飛ばされるんだぜ？」

「そ、それはお前が汗だくで汚かったからでしょう！ それに私は重くありません、鎧と剣の重量です！」

「分かった分かった、騎士アリス様も立派な女の子だって」

アリスに詰め寄られ、弁明するキリトの姿にどこか懐かしさを感じる。

思わず口元を緩めながら、質問の続きを口にした。

「ユージオに会わなかったか？ おそらく、この大浴場はあいつが凍らせたと思うんだが……」

振り向いた二人は表情を引き締め、神妙な顔でかぶりを振る。

「ああ、これは《青薔薇の剣》の記憶解放術だと俺も思う。で、俺達は暗素術で剣の居場所を割り出して、ここまで降りてきたんだが……」

「つまり、どこかに《青薔薇の剣》があるってことか？」

今度は首肯したキリトに、ひやりと背筋を冷たいものが伝った。

もしか、ユージオは自分の術でこの分厚い氷の下どこかに埋もれてしまったのではないか。

そんなことになれば、体は芯まで凍りつき、あつという間に天命が底を尽くだろう。

慌てて、今一度大浴場の中を見渡す。

二人も同じようにユージオの姿を探し、広大な空間を端から端まで観察した。柱の影や死角、“耳”までも使って丹念に探索していると、ふと目に留まるものがある。

「おい。あそこに、誰か埋まってないか？」

「なんだって！」

ルークが指で示した方を、キリトとアリスが見る。

すると、湯が分厚い氷に変わった浴槽の一つに同化するような人影があった。

頭から胸の辺りまで露出した、その体を深く埋めている人影に、三人は駆け寄っていく。

(……？ シルエットが、ユージオとは違う？)

だが、近づいていくにつれてある違和感が目についた。

こちらに後頭部を向けた人影は、とてもユージオとは似ても似つかないのだ。

短く刈り上げられた髪。バルドに匹敵する広い肩幅や、太い体の線。

そのどれもが弟分とは一致せず、すぐに別人であることがわかる。

「——ッ、小父様！」

正体不明のその人物に、しかしアリスは心当たりがあるようだった。

か細く悲鳴をあげ、走る速度を上げると誰より速くその人物に辿り着く。

「ああつ、そんなつ、どうして……！」

前方に回り込み、その顔を見たアリスは両手で口元を覆う。

キリトと共に追いついて見た、ふるふると震える睫毛や瞳は、その人物への親愛が見てとれた。

彼女がこれほど衝撃を受ける人物は誰であろうと、ルークも見下ろす。

「これは……！」

そこにいたのはやはりユージオではなく、四十歳を超える年頃の男だった。

しかし、そうとは思えない巖のような体つきや、引き締まった頬が活力を感じさせる。いずれにせよ、それはルークやキリトがまったく知らぬ者だった。

（壮年の男、それに僅かに感じ取れる鋼のような心意……もしかして、この人がベルクリ？）

何かの正体を探る手がかりはないかと考えて、ルークはある一つの答えに辿り着く。ライオットの話では、騎士長は巖のような偉丈夫であり、貫禄のある男だということだった。

それに先刻イーデイスから聞いた、風呂好きという話も加えると、多少信憑性は増す。

(ルーリッドの伝説の英雄、ベルクーリ。こんな顔をしていたのか)

臆げながら思い出せる、子供の頃の憧憬の存在が、目の前にいる。

思わずまじまじと、その顔を穴が開くほど見つめてしまう。

眠ったように目を閉じたその姿を見て、違和感を感じる。

体の色が異常だった。髪や肌から、東帝国風の羽織まで石のように灰色になっている。

それは周囲の淡く透き通る氷とは違って、ひどく浮いていた。

「これは、ユージオの技じゃないぞ」

「ああ。そして多分、この男自身の仕業でもない」

「……………昔、小父様に聞いた事があります。元老長チュデルキンは、人を石に変えてしまう術を行使すると」

悲嘆に暮れていたアリスが、手を退けて小ぶりの唇から言葉を漏らす。語られた恐ろしい神聖術に、ルーク達の方が体の芯が凍るようだった。

「そしてその権限が下される対象には……………騎士達も含まれていると」

「じゃあ、このおっさんを石にしたのは、その仲間のはずの元老長つてやつなのか？」

「……………だが、何故？」

この光景から判断するに、おそらく騎士長ベルクーリは敗北、ないしはユージオと相打ちになったのだろう。

それを罰せられ、チュデルキンとやらにこのような非道極まる行いをされたのか。

アリスを見れば、ぐっと口元に力を込めた彼女は険しい顔で答える。

「……………小父様は、元老院から降りてくる命令に疑問をお持ちのようでした。しかし、教会の統治無くして人界の平和はあり得ないと自分に言い聞かせ、これまで永い時を戦ってこられたのです」

ほつり、と音がする。

それは、アリスの左目からスカートの上に落ちた、一滴の涙の音だった。

細々とした指を固く握りしめた彼女は、震える声音で吐き出すように語る。

「元老長にいかなる権限があろうとも、このような……このような仕打ちを受ける謂れはありません！」

瞳から溢れるものを拭おうともせず、アリスはベルクーリへと手を伸ばした。

その表紙に、顎に留まっていた涙が石と化した騎士長の頬に落下し。

ピシッ！ という音が木霊した。



アリスは思わず動きを止め、ルーク達も息を呑みながらそれを見た。

石像の首に亀裂が走っている。嫌な音を立てながら、少しずつその角度を変えてい

た。

まるでアリスの嘆きに応えたかのように、騎士長は冷たい石となったその身を動かしているのだ。

「やめて……やめて小父様！ そんなことをすれば、体が碎けてしまうわ！」
文字通り我が身を削る所業に、懇願するようにアリスが叫ぶ。

それでもなお、男は神が定めた力の呪縛を、その意志で打ち破ろうとした。

ついに、その顔がこちらへと向けられる。

すると、固く閉じ切られていたその瞼が、やはり割れるような音を立てて持ち上げられ。

やはり灰色に染まった、強靱なる意志を内包した瞳が現れた。

——イイン。

「……………?」

その目を見た瞬間、胸にじんわりと広がったものにルークは手を当てる。

(なんだ、今の。竜の意志が何かを発した?)

哀愁のような、懐古のような、懐かしさと関心、僅かな怒りを含んだ心意。まるでその瞳を知っているかのような奇妙な感覚に、ルークは襲われる。

「小父様……………」

不屈の意志を見せた敬愛する騎士長に、感極まったかのようにアリスが落涙する。僅かな色を取り戻した瞳は、目の前で滂沱の涙を流すアリスを見た。最後の一押しと言わんばかりに、その口元がひび割れて開かれる。

「泣くんじゃねえよ……………嬢ちゃん……………せっかくの、美人が……………台無しだぜ」

「小父様!」

「心配、すんなって……………こんな程度で、俺がくたばるわけ……………ねえだろう。それ、より……………」

ベルクーリの目線が、僅かにずれる。

アリスの右目から額にかけて覆う眼帯に、慈愛の込められた笑みを浮かべた。

さながら父のような初めて見るその顔に、ルークは息を呑む。

「そうか……嬢ちゃん、ついに壁を……超えたんだな……このオレが、三百年かけて……破れなかった、その封印を……」

「わ、私は……私は……」

「そんな顔……するんじゃないやねえ……オレは、嬉しいんだぜ……これでもう……教えることは、何も……ねえな……」

「そんなこと……！　小父様には、もつと、もつと教わりたい事がたくさん！」

アリスの方も、まるで本当の親のように悲しみ、嗚咽を漏らす。

きつと、カセドラルに連れ去られた幼いアリスに、彼は親のように親身になってくれたのだろう。

優しい音をしているアリスの心意に、じんと込み上げるものを堪える。

「嬢ちゃんなら、きつとできるさ……教会の過ちを正し……歪んだこの世界を、あるべきものにする……ことが……」

ルークの目の前で、ベルクーリの「音」が小さくなっていく。

限界が近いのだ。いかにこの騎士長でも、抗いきれないのだろう。

涙を流すアリスの傍らに跪くと、そっと肩に手を置いて後ろへ引く。

一瞬抵抗があつたものの、アリスの手はするりと彼の首から外れていった。

彼女を慮つたその姿に、ベルクーリが灰色に戻りかけた目を向ける。

「その、姿……………まるで、あの時の……………奴みたい……………だな……………」

「奴……………？ 白竜のことか？」

思わず聞き返すと、ふとベルクーリは微笑みを浮かべた。

本当にあの御伽噺のベルクーリなのだと、その時ようやくルークは確信する。

「そう、か……………お前が、あいつの言っていた……………」

「何を……………？」

何事か呟いた、その時。

目の前に、自らへ斬りかかるベルクーリの姿を幻視した。

迫ってくる、分厚い鉄塊のような鈍色の刃に勢いよく立ち上がる。

一步後ろへ下がり、尋常でない反応をしたルークへキリトとアリスが不思議そうにした。

「今、のは……」

「その、翼……その、瞳……あの時、最期までオレを見ていた……あの竜と、瓜二つだ……」

離れたことで見えるようになったルークの体を見上げ、懐かしむようにベルクーリは言う。

その言葉に隠された意味をなんとなく察し、キリト達はルークの腰にある剣へ目をやった。

(最期、まで……ああ、そうか……あの御伽噺の、本当の終幕は……遠き昔、我が命を終わらせたのは……)

思い出した。あの殺意を。

己が身に容赦なく傷をつけ、鱗を砕き、骨を絶った豪の剣を。

ついには天命尽き果て、倒れ伏したこの身を見下ろしたその騎士に、我は――

「――いつの日か、再び相見えようぞ。我が宿敵、豪壮なる刻斬りの騎士よ」

キリトが、アリスが。大きく目を見開き、体を震わせる。

ルークの口から発せられた、深い叡智と重さを持つその声に、魂が揺さぶられたような気がした。

誰も聞いたことのないその声音――それに、意志の潰えかけたベルクーリだけが笑った。

「ああ、そこに……いやがるのか……北の、守護……竜……」

「《長きに及ぶ務め、大義であつた。もう眠るがよい》」

「つたく、相変わらさず……………偉そうな……………野郎……………だな……………」

静かに語る、半ばルークの姿をした何かと。

まるで旧友と語り合うような、ベルクーリの姿に。

キリト達は、ただその場で見ていることしかできなかつた。

「《我が担い手が、かの邪悪な女神の呪縛を打ち破ろう。後は任せるがよい》」

「は……………楽しみに……………してるぜ……………」

その瞬間、ルークは我に返つた。

ハツとして、熱に浮かされたようになっていた意識が戻ってくる。

そして、自分を見上げているベルクーリに困惑した顔をした。

「いいか……………その坊主どもの、仲間は……………チュデルキンの野郎が……………連れて行つた……………」

「ユージオを……………?」

「最高司祭殿が、彼女の居室で……………最後の、術を……………急げ……………あの坊やが、記憶の迷路に閉じ込められる……………前……………に……………」

その言葉を最後に、再びベルクーリは目を閉じた。

沈黙が訪れる。

全霊を振り絞り、情報を与えてくれた騎士長を、誰もが見下ろしていた。

「……彼は、元に戻るのか？」

「……術師であるチュデルキンを締め上げて術式を解かせるか、あるいは斬り捨てれば」
アリスが立ち上がり、垂れ下がった横髪の向こうから答えた。

なるほど、と頷くルークの顔を、彼女や後ろにいたキリトは覗き見る。

「ルーク……貴方は、一体……」

「どうかしたのか、アリス？」

「いえ……なんでもありません」

何か言いたげにするものの、すぐに目を伏せてしまう。

答えが返ってくるとは思えなかったのか、それ以上何も言わない彼女にルークも納得した。

「ともあれ、目的がはっきりしたな。ユージオを取り戻す為にも、百階層——アドミニストレータの居室へ、乗り込むぞ」

その代わり、ルークの告げた言葉に二人は強く頷いた。



「……剣を二本持つような酔狂者は、格好をつけたいだけの上級貴族と相場が決まっています。お前は妙に様になっていますね」

「そうか？ まあ、これを同時に振るうのはとても無理だよ」

近くの氷の中から発見し、発掘した《青薔薇の剣》を左手に持ち、自信なさげにキリトがはにかむ。

彼は床から白鞘を持ち上げると、そこに剣を収めて自分の右の腰に吊り下げた。

「さて。元から切迫した状況だったが、これでさらに時間の猶予は無くなったわけだ」

「そうですね。ユージオが最高司祭様の居室に連れ去られたというのなら、急いだ方が

いい。あの方の考えは、人の及ぶところではありませんから」

「最高司祭と話したことがあるのか？」

「一度だけ。もう六年も前になりますが、過去の記憶を全て失った状態で目覚めた私は、《召喚主》であり、地上における神の代行者である最高司祭様と対面しました」

記憶の封印と疑似人格の統合……『シンセサイズの秘儀』の直後であろう当時は、アリスは語る。

それから視線を虚空へ投げ、過去の記憶を思い返すと、元より白い頬をさらに蒼白にさせる。

「あらゆる光を跳ね返す、あの瞳。……そう、今なら分かります。あの時私は、最高司祭様を深く恐れたのです」

「何かしらの術をかけられた、と……？」

「違います。もっと原始的な……そう、魂で感じたのです。この方に逆らってはいけません。あらゆる疑問を持たず、絶対の忠誠を誓い、この身と心の全てを捧げて仕えなくてはならない……と」

震える方を抱くアリスに、その微かに揺れる心意に、冷たいものを感じる。

ただ瞳を見ただけで、彼女が屈してしまうほどの存在。

自分たちが相手にしようとしている敵の強大さを僅かながらも実感して、思わず唾を飲む。

「……アリス」

「……………ふう。大丈夫です」

深呼吸をして、心を落ち着けたアリスは俯かせていた顔をもたげる。

そうすると、震えの止まった手を胸の上に置いて高らかに宣言した。

「私は決めたのです。遙か北方の地にいる妹と、まだ見ぬ家族と、そして多くの民のために戦うと」

「……………妹？」

「おいおい、ルーク。流石にお前も、セルカのこととは……」

「セル、カ……………？ 誰だ、それは？」

透明な瞳で、どこまでも純粹に疑問を浮かべたルークに、キリト達は幾度となく驚かされる。

それすら、忘れてしまったのか。

あの時、北の洞窟に何の為に行ったのか、その大切な理由さえも。

(なあ、ルーク。今のお前は、どれだけ自分を失って……いいや、あと、どれだけ残されているんだ?)

刻一刻と迫っている親友の消滅に、カーディナルの話を思い出してぞつとする。

彼からルークが抱えていた、セルカへの苦悩を聞かされていたアリスもまた悲しげな目をした。

「キリト……」

「……とにかく、上を目指そう。そうだろ、ルーク」

「ああ。必ずユージオを解放しなくてはならない」

今度は間違いなく名前を口にし、頷いたことにホツとする。

先へ進む扉の方へ歩き出した彼に、ベルクーリを一瞥してから追隨した。

大浴場から出た三人は、また現れた大階段を使って九十階層より上を目指す。

人の気配はなく、酷く無機質的な雰囲気を持つフロアは無視して、ひたすら登り続けた。

(……さっきの、反応)

警戒しながらやや早めに足を動かしつつ、ふとルークは思い耽る。

背中の向こうで、この後に控える元老院の説明をアリスから受けているキリトを一瞥した。

(セルカ……セルカ、か。それが誰だか、俺にはもうわからない。けれど、妙にその名前が口に馴染む)

必死に頭の中を掬っても、朽ちた樹木のようにそこかしこにあいた穴に手を突っ込むだけ。

セルカとは誰で、どんな人物で、自分にとって如何なる存在だったのか。

その全ては力を手に入れる代わりに凍りついて、きつともう粉々に砕けてしまった。

(でも、俺にとって大事な人の一人だったんだろう。そうでなきゃ、キリトがあんなに悲しそうにするはずがない。アリスが、あそこまでの誓いを口にはしない)

妹。そう、確かアリスの妹と言っていた。

ならば、未だにそれだけははつきりと思い出せるあの日の罪で、きつと“セルカ”を深く傷つけた。

恨んでいるだろう。きつと許してはいないだろう。

自分を憎み、アリスを返してと、この裏切り者と謗ったに違いない。

『■■■に、ずつ■■避■■■■てたの■■悲■■■■たわ。■■もルーク■■あの■■■■を■■劍に

■■んでくれ■■■のは■■■■■■、■■れに……』

『それ■■？』

『ち■■と、助■■に■■く■■■■■■■■■■?』

(……ああ、そういえば。竜の声を初めて聞いたあの時)

自分は、どうしてあそこにキリト達と一緒にいったんだっけ。

……思い出すことはできない。それはもう、色褪せて、燻んだ一枚絵のようになって
いる。

ならば、もう仕方がないと。またルークは諦めた。

そして、大浴場までの鈍足が考えられないほどみるみる階層を踏破していった。九十一、九十二と数え、やがて本来の目的地だった《暁星の望楼》へ辿り着く。とても美しい、落ち着いた雰囲気と満点の星空を構えたそこを通り抜け。

螺旋状の階段を登り、ついにその階層に到着した。

「ここが九十六階層……元老院か」

「気をつけてください。元老達は、武力という点では学院の修剣士見習いにすら劣りませんが、権限はこの人界で随一のものです。その気になれば、無限に術式の雨を何百と打ってくることもできるでしょう」

「そりやおつかないな」

「いよいよ、自分達を罪人とした者達と対面を果たす。」

形容しがたい感情を抱きながら、それまでとは趣の違うその先へ踏み出した。

等間隔に設置されたガラス製の灯りから発せられた緑光が、薄暗い廊下を唯一照らしている。

清廉さを感じさせたそれまでと違い、まるで秘め事を隠すように不気味な雰囲気だ。

（……何も聞こえない？）

あまりに静かすぎることに、疑問が鎌首をもたげる。

それは物理的なものだけでなく、ルークの耳に聞こえるはずの心意の音すらない。

広い人界を監視し、法と秩序、民の管理を担っている何十人も元老がいるはずなのに、だ。

(おかしい。ここは、あまりに聞こえなさすぎる)

膨れ上がる嫌な予感に、少しだけこの先に行くことが恐ろしくなった。

数分後、ついに暗緑色の通路は終わりを迎える。

不思議な彫刻の施された丸扉が、ルーク達三人を出迎えた。

「……二人とも、用意はいいな」

「勿論だ」

「攻撃術に気をつけて」

剣に手をかけ、頷き合うと、ルークが扉に手を伸ばす。

鉤爪に冷たい金属の感触が触れ、一息に引くと木の扉のようにあっさり開封される。それとは裏腹に響いた重々しい音に、素早く扉と壁の隙間から中へ滑り込んだ。

身構えるが、神聖術が飛んでくることも、誰かが待ち構えていることもなかった。

「なんだ、拍子抜けだ——」

「シッ。待て」

軽口を叩こうとしたキリトが口を閉じる。

ルークは耳を澄ませ、しばらくすると左隣のアリスを見た。

「聞こえたか？」

「ええ、微かにですが。キリト、お前もよく耳を澄ませなさい」

何事か通じ合っている二人に、惘然とした表情でキリトは耳に意識をやる。

すると、彼からすればやや近未来的な通路の向こうから僅かに何かが届いた。

「……神聖術の詠唱？」

「攻撃系ではないようだな。だとしたら、一体……」

「一瞬たりとも油断のないように」

各々剣を鞘走り、三角形状に陣形を取って奥へと進む。

慎重に、かついつでも迎撃できる心構えで、一步、また一步と足を踏み出す。

最初は遠かった詠唱の声も、ぼんやりとした明るい空間に近付くにつれ大きくなり。

そして、ついに暗い道を抜けた先。

そこで、三人が見たものは。

「な……………」

「これ、は……………」

「…………マジかよ」

——地獄だった。

道化の元老長

夢を、見ている。

塔の外へ投げ出された相棒を置いて、もう一人の親友に先に行けと背中を押され。

そうして塔を登り、最強の騎士と対峙して……それから、ユージオは自分がどうなったのか思い出せない。

だが、今自分を包み込む、この濡れるような暖かささえあればいいと、そんなことを考えた。

ああ、この温もりは自分を受け入れてくれる。辛いことも、苦しいことも、何も無い。ただ、ただ、引きずりこむように……その瞳が、頭を撫でる細い指が、甘い声が。

その全てが自分を愛してくれるのだと、曖昧な意識で思い込んだ。

その人は、ユージオにこう言った。

可哀想な子、と。

何故、と反論した。自分はそんなことを言われる道理はないと。

だが、その人は優しくユージオを抱きしめると、思い出してごらんなさい、と囁いた。貴方は本当は分かっているはず。自分がどれだけ飢えて、満たされたいのかを……頭
の奥が痺れるような、官能的な言葉の数々。

酷く花の蜜のように意識をそそられる声音に、どうしてかあつさりとユージオは思考
を止め、頷いて。

そして今、夢という名の過去を見ている。

幼い頃のこと。

その日は何故か、幼馴染であるアリスの姿が朝から見当たらなかつた。

家族の手伝いを終わらせ、いつもの待ち合わせ場所でいくら待とうとも彼女は来な

かったのだ。

明るく笑い、落ち込むユージオの肩を軽く叩いてくる黒髪の少年もいなかった。

いつもだったら真つ先にそこにいるはずの、いつも陰湿な実の兄達より、よほど兄と思っていた灰髪の少年も。

ソルスが頂点に昇り、傾き始めても三人はやって来ず、とぼとぼとユージオは帰っていった。

きつと、何か事情があつたのだ。そうに違いないと、アリスの家へと行った。

けれど、扉をあけて現れた彼女の母は、ユージオの質問に首を傾げた。

『おかしいわねえ。今日は随分と早く出かけたわよ。キリ坊達が迎えに来たから、てつきりユー坊も一緒だと思つてたんだけど……』

困ったわねえ、と頬に手をやる女性に、小さく礼を言ったユージオはその場を立ち去る。

言いようのない不安は焦りになっていき、自然と歩みは走りへと変わっていく。

そうして向かったのは、最近見つけたばかりの、秘密の場所だった。

自分と、アリストと、キリトとルークしか村の子供の中では知らない、東の森の奥にあるその場所。

大人達が《妖精の輪》と呼ぶその場所に、ユージオはべそをかきながらひた走る。寂しさや、焦りや、もう一つ知らない感情でごちや混ぜになった気持ちを抱えて、走り続けて。

曲がりくねった小道を抜け、ひとときわたい古木にぐるりと囲まれたそこに、やがてたどり着く。

そこに走りこもうとした瞬間、木々の間から見えた金色に思わず足を止めた。

——どうして？

ぼそぼそと、風に乗って聞こえてくる彼女の囁き声。

それに、とても惨めな気分になりながら、そつと木の陰から様子を伺う。

色とりどりの花が咲くその中心で、アリスが座っている。

小さな背中に流れる金髪と、深い青のドレスや白いエプロンがよく似合う。

その隣には、つんつんとした黒い髪の少年。親友のキリトだった。

『なあ……そろそろ戻ろうぜ。バレちやうよ』

『まだだいじょうぶよ。もう少し……ちよつとだけ、ね？』

肩を寄せ合い、秘め事を共有するようにくすくすと笑い合う二人。

じつとりと、握りしめた手の中に汗がにじむ。心がひび割れて、壊れそうになる。

もうここにいたくない。そう思って立ち去ろうとした時——彼女らの近くに、もう一人を見つけた。

『お前ら、そこそこにしておけよ。あんまり長い間やってると、ユージオにバレちまうか

らな』

——どうして？

そんな疑問が、木に背中を預け、腰に木剣を差したルークの姿に、また浮かんだ。

君はいつも、僕達三人ともを平等に扱ってくれたじゃないか。

意地悪なジंकク達や、嫌味を言う兄達からすらも、いつも守ってくれたじゃないか。

なのに、どうしてそこで二人を見守っているの？ 僕にバレないようにって、そう注意するの？

どうして、どうして、どうして——

「……ほら、ね？」

そして、夢が覚める。

相変わらず意識はぼんやりとしたままで、眠りながら現実にいるよう。

その中で、くすくすと笑うその声だけが、はつきりと耳の中に入ってくる。

「誰も、貴方を愛していない。あの子の愛すら、貴方一人のものじゃない。そして、あの子の優しさも」

違う。そんなはずはない。

夢に見た三人の小さな秘め事に、もう、そう言うことさえもできなかつた。

「いいえ。そもそも最初から、貴方のぶんはあつたのかしらね？」

心の縁をくすぐるように、それでいて一番大事なものを握り潰すように。

一つ一つと刻み込まれていく言葉が、ユージオの中の孤独と飢餓を浮き彫りにしていく。

枯れていく。

記憶も、心も、思い出も。何もかもが、枯れていく。

誰か、誰かと。そう手を伸ばすユージオに——蠱惑的な救いが現れた。

「でも、私は違うわ。私が、貴方を私の全てで愛してあげる」

たらりと。その一言が、萎れた心に垂れて落ちた。

どんな蜜や、甘い果実より芳醇なその一滴が、みるみるうちにユージオを満たしていく。

ぼんやりと見上げてくるユージオを、その人は鏡のような虹の虹彩が浮かぶ銀眼で見返した。

銀の髪も、滑らかな肢体も、細々しい体や美貌も、その全てがユージオに向けられている。

「さあ。私を受け入れて」

薄暗闇の中、豪華なベッドの上で咲く、一輪の魔性の花。

薄紫の花弁に取り込まれたユージオは、その中で微笑む白い花芯に身を委ねた。

「貴方は、真に満ち足りたと思えるほど、誰にも愛されることができなかつた」

耳元に落ちる言葉は、ある意味真実で。

ユージオがどれだけ家族を、誰かを愛しても、誰もその愛には応えてくれなかつた。ギガスシダーの刻み手になった時、喜んで報告したユージオに、厳しい顔で家の手伝いはできるのかと言った父も。

家畜の世話から解放されると思ったのにと、愚痴をこぼした兄も、何も言わなかった母も。

アリスが連れ去られた後、これで本当にひとりぼっちだなと、嘲笑して言った衛士長の息子のジंकも。

アリスの妹のセルカや、他の誰だって。いくらユージオが愛して、尽くしても。何も返してはくれなかった。

「彼らは貴方の惨めさを喜び、嘲るだけだった。そんな人達が、本当に貴方を、少しでも愛していたと思うの？」

そう……その通りだと、ユージオは思った。

みんな、自分から奪い、搾取するだけだった。何一つ与えてくれなかった。

それは、あの優しい兄のような少年でさえ。

あの時、自分からアリスを奪って……それなのに、今更守るだなんて、白々しい。

「なら、やり返してもいいじゃない。その惨めさや、悔しさを、彼らにも味合わせるの。整合騎士になって、銀の飛竜にまたがり、故郷に凱旋して。貴方を馬鹿にした連中全員を這いつくばらせて、その頭を踏みつける。そうしてようやく、貴方はこれまで奪われ

たものを全て取り戻せるの」

神々しい少女の提案は、とても素晴らしいもののように思えた。

頭を撫でられ、柔らかな胸の中で微睡めば……それが、自分の未来の全てだと感じられた。

「私が、本当の愛で貴方を満たしてあげる。これまでの連中とは違うわ。貴方が私を愛してくれば、それと同じだけ、深く深く、極上の愛を返してあげるの」

もはやユージオに、抗うような術は一滴も残っていないかった。

この場所で最初に目覚めた時、この人を見てすべきことがあると考えていたような気がするけれど。

もう、どうでもいい。

この渴きを満たしてくれるなら。愛を捧げて、愛が返ってくるなら、それで――

——ユージオ先輩！ 負けないで！

ふと、誰かがそう言った。

赤い髪を振り乱して、手を伸ばして……でも、粘るような暗闇にその姿が消えていく。すると続けて、闇の中にぼうつと金色に輝くシルエツトが現れる。

僅かな草原に立って、彼女はそつとユージオに語りかけた。

——違うわ、ユージオ。愛は決して、何かの見返りにもらうものじゃないのよ。

先ほどより、少しだけ心が揺れ動く。

けれど、手を伸ばすより先に濁流のように落ちてきた黒いヴェールがその姿を覆い隠してしまった。

もう誰も残っていない。焼け付くような渇きが、ひりつくような惨めさだけが自分を焦がす。

唯一それを癒しうるものを求めて、ユージオはぎゅつとその人を抱きしめる。

「欲しいのね、ユージオ。何もかもを忘れて、私の愛が。でも、まだダメよ。言ったで

しよう？　まずは貴方が愛をくれないと。だから、ほら……」

さあ、唱えてと。顎を伝っていく細指に、ユージオは僅かに頷く。

そうして、少しでも少女の胸から顔を話すと、その口を開いた。

「システム……コール」

「そう、いい子ね……」

——ダメだ、ユージオ。お前までこっちに來るな

起句を唱えた瞬間、醜い青年が暗闇に浮かんだ。

それまでと異なり、周囲を満たす暗闇の中でさえ輝く、差し出されたその白い手に。

「リムーブ……」

ユージオは、今更何をと、そのゴツゴツとした手を振り払った。

「コア……」

悲しげな目をして、完全な何かになったソレが暗闇の向こうへと飛んでいく。

途端に、ユージオは自分がこの暗闇に溶け、薄れて消えていくように感じた。

ずっと心の真ん中にしまいこんで、大切にしてきた思いさえも、輪郭を失っていく。

それでも、そうだとしても。

——だって、もう、悲しいのは、辛いのは、嫌なんだ。

そして、ユージオは。

一雫の涙と共に、その言葉を口にした。



そこは広い空間だった。

四つの階層分を全て使った、縦に長い円柱形の大広間。

部屋全体が金属質な輝きを放っていることもあり、天井は白く輝いてよく見えない。しかし、そんなものは今三人が見ているものに比べれば、とても些細なことだった。

「な、生首……!?!」

「いえ、体は一応あるようですが……」

「……まるで棺桶だな」

壁に埋め込まれた、無数の「何か」。

規則的に天井まで並んだ、何十というその箱には人間……らしきものが詰め込まれていた。

頭部から睫毛に至るまで一本の毛も生えておらず、肌も目も、口の中も生白い。

男女の区別さえつかないそれらは、抑揚のない声で何かの神聖術を唱え続けた。

「攻撃術……ではありませんね。式句からして、人界を幾つにも分割して管理しているようですが……」

「まさか、これが元老……?」

「……! こいつらは、あの時の!」

「キリト、知っているのか?」

「ああ。ライオス達と戦って、その……お前を気絶させた後に、窓みたいなのが現れて。そこからこいつの顔が覗いてたんだ」

やや言いにくそうにしながらも、キリトはそう告げる。

ウンベールの腕をユージオが斬り落とし、ライオスはルークが“御霊斬り”で魂を断った。

そしてキリトは、そんな暴走したルークを気絶させるために黒い剣で一撃加え、それが罪と判断されたのだ。

そんな経緯を思い出し、ルークは今一度元老達と思しき者を見上げる。

その目で、その耳でも……一切の心意を感じることができなかつた。

「……彼らからは、何も感じない。記憶も、意志も、人格さえも」

「おいおい。それじゃあまるで、ただの装置じゃないか!」

「酷い……」

整合騎士の境遇すら、まだ救いようがあると思えるほどの有り様。

唾然とした気持ちでいると、突然空間全体に甲高い音が鳴り響いた。

「なんですか!」

「警告音……!?!」

「構えろ!」

詠唱を止めた元老達と、ビー！　ビー！　と激しく耳朶を叩く音に、咄嗟に剣を構える。

しかし、それは三人の侵入を感知したような類のものではなく、別の合図だったようだ。

箱の中にいる元老達の頭上から、管のようなものが降りてくる。

彼らは一様に管へ向けて顔を上げ——直後、管から放出された液体を口に入れ始めた。

固形物と液体が混ざり合った、茶色いそれは食料の類だろうか。

喉を鳴らし、時に口の端から溢れさせながらも、機械的にそれを食する。

やがて、一定の時間で管からの供給は止まり、上へと引かれるように戻っていく。

顔を正面に戻した元老達は、また術の詠唱を開始した。

「……………なんて」

惨い。ルークはふつつつと怒りが沸き起こるのを実感した。

もはや、並の言葉では言い表せないほどの所業。地獄以外に形容できる言葉が見つからない。

スワロウの言葉の意味がよくわかった。

これはある意味、アドミニストレータが人界の人間に対して抱く価値の全てなのだ。

「……これが。この光景が、最高司祭様が生み出したものかどうかですか」

「アリス？」

「こんな、人を人たらしめる意志、思考さえも全て奪い去り、家畜より劣る扱いをして……これが、彼女のやり方だというのですか！」

「……きつと彼らも、騎士達のように人界中から連れてこられたんだろう。術者としては優れていても武力に劣る人間や、特に権限の高いやつを拐ってきて、禁忌目録の管理装置に仕立て上げたんだ」

キリトが予想を語る。それは限りなく真実に近いものに思えた。

彼らの悲惨さと、平然とこんな光景を作り出せてしまう最高司祭の異常さ。

隣で全身を震わせるアリス程ではないにせよ、敵愾心を強めるのには十分だ。

「ホヒイ————ッ！　　ホ——ホッホッホオ！」

突如、元老院に奇声が木霊する。

今度は何かと、半ばうんざりした気持ちで振り返ると、奥に通路が続いていた。

これまで通ってきた道と同程度の広さの、その暗がりの向こうから声は響いてきたようだ。

「……」

無言で視線を投じる。キリトとアリスは、怒りの表情を収めて頷いた。

見ているだけで心が淀む、凄惨な元老院から逃げるようにして奥に進む。

意思のない元老達が、それを止めることはなかった。

通路の左右に陣取り、そつと顔を出して様子を伺う。

中は広間ほどでないにせよ相当な広さがあるようで、奥行きが遠い。

だが、顔をしかめたのはその面積ではなく、内部の悪趣味さからだった。

(……なんだ、この風邪をひいたときに見るような部屋は)

何もかもが金と派手な色で統一された、下品な一室。

調度品は全て黄金造りであり、そうでないものも目に痛い桃色や赤色をしている。多種多様なぬいぐるみやおもちゃらしきものが散乱しており、一見して玩具箱のようでもあった。

「ホオオオオオオツ!! いけませんっ、いけませんよ最高司祭様アっ! ああっ、そんなっ、そんなもつたいたいっ、ホヒホオ——っ!」

その中心で意味不明な声を張っている、小さな後ろ姿が一つ。

子供のように小さい、しかし出来の悪い人形のように丸々とした背中。

ほぼ球状の体には赤と青の道化じみた服をまとい、同じく丸い頭には金色の帽子が一つ。

また奇声を上げ、ジタバタと体を揺すった際に見えた白い顔は、元老と違い脂ぎっていた。

「……アリス。あれが?」

「ええ……チュデルキンです」

頷くアリスの顔には、これでもかと嫌悪感にじみ出ている。

それは先程までのものとは異なり、生理的に拒否しているような女性特有の表情。

ふと、ルークの脳裏にある女性が浮かび上がる。

(……なるほど。確かにあれは肉ダルマだ)

今のアリスと全く同じ表情をしたイーデイスを思い出し、さもありませんとルークは嘆息した。



元老長チュデルキンの背中では、全くの無防備であった。

手元にあるものを見て、時折おかしな声を上げるのに熱中している。

てつきり騎士達とのような熾烈な戦いになると思っていたキリトは拍子抜けした。

だが、好都合でもある。こういう時最も冷静沈着なルークにアイコンタクトを送ろう

とした。

だが、その前に真ん中にいたアリスが前触れなく部屋の中へと踏み込む。制止する間も無く、彼女はたった数歩で元老長の背後へ風のように肉薄した。

「ホオア——ッ！………ホッ？」

そして、一際大きな声で体をのけぞらせたチュデルキンは。

逆さまな視界の中で、自分を侮蔑と怒りと嫌悪で見下ろすアリスと目があつた。

「随分お楽しみの方ですね、チュデルキン」

「ほぐっ!？」

雷光のように伸びた左手が、チュデルキンの首元を掴み上げる。

遅れて追いかけてきたルークとキリトの前で、宙吊りにされたダルマ男は短い手足をばたつかせる。

(………ん?)

ふと、視界の端に映り込んだものに目を向ける。

それはチュデルキンがずっと見ていたもの……三十セルチほどの水晶玉だ。

中にはどこかの部屋が映し出されており、遠見の神聖術を使っていたようだ。

薄暗い部屋の中で、華奢な人影が銀の髪を揺らして微笑む。

きめ細やかに流れる髪に隠れてはつきりとその横顔は見えないが、ひどく美しい。どうやらチュデルキンは、その女性を覗き見していたらしい。

(大した趣味だな、元老の長)

その時、ふと少女の胸元に誰かもう一人写り込んだ。

しかし、それが誰かを判別する前に術が途切れて映像は消えてしまう。

「術式を唱えようとしたら、最初の起句の時点で舌を根本から切り飛ばします」

そちらは早々に諦め、《金木犀の剣》を突きつけるアリスとチュデルキンに視線を投じた。

「お、お前、三十号！　なんでこんなところにいやがるですよ！　お前は反逆者の一人と塔の外に放り出されておっ死んだはずでしょう!？」

「私を番号で呼ぶなッ！」

アリスが激昂し、《金木犀の剣》の切っ先が一セルチ迫る。

喚いていたチュデルキンは口を噤み、彼女も深呼吸をして一旦気持ちを落ち着かせた。

「……私はアリス。もう三十号ではありません」

「つ、ぐ、ぬぬう……ホヒョツ!」

忙しなく視線をあちこちへと飛ばしたチュデルキンは、そこで初めてルーク達に気付いた。

死んだはずの黒衣の青年と、不気味な姿をした人のなり損ないに小さな目をまん丸に見開く。

「お前つ、なんでつ、どうして! 三十号ツ……き、騎士アリス。どうしてそいつらを斬らないんですよ! そいつらは教会の反逆者で、闇の手先と教えたじゃないですか!?!」

「……確かに彼らは反逆者です。しかし、闇の国からの刺客ではありません。今の私と同じように」

はつきりと、その口で教会からの離反と抵抗を宣言する。

チュデルキンはそれを聞き、それまで以上に限界まで目を見開いた。

団子のような鼻の穴を膨らませ、その肌とどちらが白いか比較できない歯を剥き出しにする。

「裏切る気か、この糞騎士風情がアアアアアアアアアアアッ!!」

皿を金属の食器で引つ掻くような金切り声に、人外の聴力を備えたルークは大きく顔を歪める。

ぐわんぐわんと響く耳鳴りに手で蓋をしながらか、突如として憤慨した元老長を睨んだ。

「テメエら整合騎士は所詮アタシの命令に従うだけの木偶の癖に！ 空っぽの人形風情がアッ！」

「——我らを人形にしたのは公理教会でしように」

チユデルキンが、ぴたりと動きを止める。

すかさず返されたアリスの言葉に、それまでとは違う意味で驚愕を顔に貼り付けた。そんな小男に、淡々とした口調でアリスは語る。

「な、なんで、お前がそれを……………」

「『シンセサイズの秘儀』によって記憶を封じ、偽りの忠誠心を植え付けた上で、天界から召喚されたなどというまやかしを教え込んだのですから」

やはり予想した通り、アリスは自らにまつわる全てを知っていたらしい。

俯いたチユデルキンを睨め付ける青い瞳を見ながら、その強い意志に感服する。

(庭園での様子だと、全く信じて疑っていなかったらうに。元から疑問視していたイーデイスはあつさりとしたものだったが、やはりアリスは昔と同じで打たれ強いな)

あるいは、彼女は他の騎士や、ともすれば人界の民より元来その在り方が遥かに強いのか。

スワロウからの話や、これまで見てきた人々を見て、薄々ルークは気がついている。自分達は、自主性というその一点において非常に脆弱なのだ。

天職然り、禁忌目録しかり、人生における最も大切な部分は常に大きな何かが決めている。

そこに疑問は抱かず、ただ純朴に従うままにその一生を終えていくのだ。

(あるいは、それを自分で決め、ここまで進んできた事こそがアリスが特別だという証明なのか?)

記憶の中の幼いアリスも、どこか抜きん出て自分というものを持つていたように思う。

そう考え込んでいたルークは、類似した思考の中でアリスと彼を見ていたキリトの視線に気がつかない。

「……ええ、そうですよ。アタシヤ今でもくつきりと思いい出せますよ。幼く無垢で可愛らしいお前が、涙を流しながら懇願する姿をねえ」

そして。ずっと黙りこくつていた道化が、彼らの前で醜悪な笑みを浮かべた。

『『お願い、私の大切な人たちを忘れさせないで……』と泣き腫らすお前の顔は見ものでしたよ、ホヒッホー！』

「……外道めが」

ありありと想像できるその光景に、ルークが低い声で殺気を放つ。

一瞬体を震わせたが、しかしチユデルキンは一層勢い付いてまくし立てた。

「どこぞのクソ田舎から連れてこられたお前は、まず二年間修道女見習いとして育てられた。生活規則の抜け穴を見つけて、セントリアの夏の祭りを見物に行くようなおてんばな娘でねえ。それでも一生懸命頑張れば、いつかはお家に帰れると信じてたんですよねえ」

でも！と、強調するように声を跳ね上げ。

「そんなわきやアねえんですよウ！　十分に神聖術行使権限が上がったところで来ました強制シンセサアアイズ！　二度とお家に帰れないと知った時のお前の顔と言ったら……もう、そのまま石に変えて、アタシの部屋に永遠に飾っておきたかったくらいですよオウ！」

青薔薇の騎士

心の底から楽しそうに笑う外道に、キリトが横でふるふると剣を握る手を震わせた。情報を聞き出すという目的さえなければ、ルークも抜刀するままにその首を刎ねていたかもしれない。

「……お前、今妙なことを言いましたね。強制シンセサイズと。まるでそうでないシンセサイズの秘儀があるようではないですか」

「ホ、ホ。意外と耳ざといですねえ。ええ、その通りですよウ？ 六年前のお前は、通常のシンセサイズに必要な内緒の術式を唱えることを頑として拒みましてねえ。全く生意気なクソ餓鬼でしたよウ」

気丈なアリスならばそうするだろうと、ルークには容易に納得できた。

だが、それを存分に嘲笑ったのだからその男は、ニヤニヤと笑いながら話を続ける。「仕方がなく、自動化元老どもの任務を一時停止して、三日三晩かけてオマエのだからいいなものをごじ開ける術式を唱えさせたんですよ！ 手間はかかりましたが、お陰で

滅多に見れない見世物をじっくりと見物できましたよ、ホオツ、ホオツ！」

よく回る舌だ、と体と頭の継ぎ目を見定めながら、ルークは冷たく思った。

過去、これほどまでに嫌悪し、殺したいと思ったことはなかった。

今すぐ、自分の大切な幼馴染を辱めたこの肉ダルマを細切れにしてやりたい。そんな暗い考えが頭を支配しそうになる。

「何を隠そう、シンセサイズの秘儀の第一段階が完了したお前を、最高支配獣下の部屋にお連れしたのもこのアタシなんですよう？ 残念ながらその後は拝見させてもらえま

せんでしたが、アタシヤ今でもあれを肴に一晚飲みあかせますよ、ホヒツ、ホヒヒイツ」
しかし、ふと眉を顰めた。

(こいつ、何をこんなべらべらと話している?)

いくら剣を突きつけられているといっても、ここまで饒舌に話すのは不自然だ。

何か企みがあり、これはその前触れなのではと、注意深くその動向を観察する。

「……元老院チュデルキン。お前も同じように、最高司祭様によつて何処からか連れ去られ、本来の自分を奪い去られたのかもしれない」

静かな、一見平静とも思えるような声で、アリスが肩から力を抜く。

そうすると、固く握り締めていたチュデルキンの襟首を手放し——
「ですが、貴方は十分自分の境遇を楽しんだようです。——ならば、もう悔いはありませんね」

落ちてきた体を、《金木犀の剣》で刺し貫いた。

それはあまりに自然な動作で、止める暇もなかった。

目を見開いたチュデルキンの手足が、ぐったりと垂れ下がる。

俯いた姿からは、一見してその天命を一息に削り切られたように見えた。
が。

「待て、アリス！ そいつは——」

「——っ!？」

その「音」を聞きつけたルークが、警告を飛ばそうとした瞬間。

貫かれたチュデルキンの体が、大きく膨張した。

アリスが、キリトが目を見開く中で、パンパンに張り詰めたその体が勢いよく破裂す

る。

飛び散ったのは真つ赤な血——ではなく、部屋全体を覆い尽くすような大量の煙。瞬く間に視界を覆い尽くしたそれに、三人は咄嗟に口元を抑える。

——キイン

(っ、そこっ！)

聞こえた音に従い、片手で《白竜の剣》を抜刀する。

鋭いその一撃は、しかし獲物を捉えることはなく、反対側からやってきたもう一つの刃に当たった。

「いつ!?!」

「づっ!?!」

同じように剣を振り抜いていたキリトが顔を歪ませ、互いの攻撃の衝撃で尻餅をつく。

「ホホオーツ！ 術だけが武器だと思ったら大間違いですよ、バーカバーカ！」

赤煙の中で、心底から馬鹿にするような声が残響する。

ルークは苛立ちに任せて翼を大きく広げ、力一杯羽ばたいて煙を消し飛ばした。

「奴は！」

「いない……!?!」

「いえ、あれを！」

地面に散乱した服の切れ端を眺めていると、アリスが鋭く声を飛ばす。

彼女の示す方向を見ると、衣装棚のひとつが横にずれて穴が姿を現していた。

「チツ、逃げたか！」

「追うぞ！　ここで奴を逃すと厄介だ！」

「くつ、心臓ではなく頭を刎ねるべきでしたか！」

揃って失態に声を上げながら、チュデルキンの消えた穴へと近づく。

あの小男の体格に合わせたのだろう小さな通路は、自分達が通るには中々難しそうだ。

ルークは「耳」を使い、伏兵の類がないことを確認してから先頭で中へ入る。

「狭つ……」

「頭をぶつけないように」

後ろでガリガリと鎧や鞆をぶつける二人の気配を確かめながら、薄暗い前方を見た。どこまで続いているのか分からない中、翼の片方を盾のように体の前に置いて歩む。しばらくの間、膝立ちでの行軍を余儀なくされたが、やがて普通の規模の通路に出た。目の前にある上り階段を、改めて確認してから駆け上がっていく。

「システムコオオオオオ！ ジェネレート・ルミナス・エレメントオオオオオ！！」

光が差す階段の頂上から、金切り声が木霊する。

聞き慣れた素因系術式の詠唱。ここからいかなる攻撃術にも発展するだろう。

「お前ら、俺の後ろから出るなよ！」

「階段が終わる！」

「不意打ちに気をつけて！」

各々が警戒を促しながら、ついには三階層分はあるかという階段を走り抜け。

そして、ついに限りなく最上階に近い場所——カセドラル九十九階層へと飛び込んだ。



頭上に壁が現れ、反射的に体をかがめて転がるように外へ出る。

すぐに体勢を立て直し、後ろの二人を守るために翼を全開にしながらかつを構えた。しかし、炎の嵐が襲ってくることも、氷の雨が降ることもなく。

「……誰も、いない?」

一定の間隔で配置された明かりに照らされた、円形の室内を見渡す。

見事に殺風景なその空間には、チュデルキンはおろか人の一人も存在しなかった。

「ルーク!」

「なぜ勝手に一人で前へ出たのです! 危険でしょう!」

遅れて、床板の一枚を剥がした通路から出てきたキリト達がルークを叱る。

ゆつくりと立ち上がった彼は返答せず、油断のない目つきで部屋を観察した。

「……チュデルキンはここにはいない。どうやら別の場所に逃げおさせたようだな」

「お前、話を……いいえ、もういいです。それよりも、ここは……」

「なんていうか、空っぽだな」

二人も部屋の中を見渡し、もぬけの空な様子に期待はずれといった顔をした。

その直後、アリスがふと何かに思い至り、眉をひそめる。

「……私、ここを覚えています」

「えっ!? そ、それは確かか!？」

「……具体的に、いつのことだ」

「六年前……過去の記憶を全て失った状態で目覚めた私は、ここで最高司祭様に会ったのです。横たわる私に、あの方は仰りました……目覚めなさい、神の子よ、と……」

何とも仰々しい、儀式めいた台詞だ。

胡散臭さのじむアドミニストレータの言葉を鼻じろみ、彼女がいるであろう上階を見上げる。

そして。床と同じ様に大理石で作られた天井のある場所に、小さな丸穴が開いているのを見つけた。

「おい。もしかして、あそこから上に昇ったんじゃないか?」

「何？ ……あ、あんなところに穴が？」

二人は続けて、その穴の下に位置する部分を見る。

すると、それまでは壁などに目がいっていたために気づかなかったものがあつた。

五十階層から八十階層までを繋げていた昇降盤。それを小さくしたようなものがあつたのだ。

ルークとキリトは、アリスへと振り返る。

同じものを見ていた彼女は、口に曲げた指をやり、少し考えた後にハツとした。

「……そう、そうです。目覚めた後、ベルクーリ小父様に預けられた私は、下へと向かいました。その時……高司祭様はあの円盤に乗って、上へと……」

「決まりだな。チュダルキンもあそこを通つたに違いない」

そして、これまでの道中で見つからなかったユーゾオも。

同時にそれは、今度こそ人界最強格の術者である元老長との戦いを意味するだろう。

また……百階層に待ち構えているであろう、最高司祭アドミニストレータとの、最後の決戦も。

「キリト。俺は本来、ここに一緒に来るはずだった二人の騎士と一緒にアドミニスト

レータを斬ろうと考えていたが、そっちは？」

「実は、カーディナルからある武器を預かつてる。それを普段は眠っているはずのアドミニストレータに刺して、彼女がトドメを差すっていう手はずだったんだが……」

「……奇襲は、もう無理でしょうね」

チユデルキンが逃げ込んでいる以上、彼女が目覚めていることは間違いないだろう。

ここまで登ってきてしまった反逆者達のことを報告しないはずはなく、寝込みを襲うことはもう不可能となった。

それ以前に、ユージオの存在がある。

彼が整合騎士にされようとしているのなら、シンセサイズの最後の一手を下すのは。

全てを奪い、偽りの騎士に作り変えるのは……他でもないアドミニストレータなのだから。

「だが、そんな便利な手段があるなら願ってもない。俺が全力で奴を抑える間に、何とかしてその武器を——」

——キーン!

その時、今度はチュデルキンよりも強く耳鳴りが鼓膜を叩く。

途中で言葉を止めたルークは、弾かれたように天井の穴へと視線を向けた。

その反応で何かしらの異常を察したキリトとアリスも、素早く剣を構え直す。

(なんだ、これは……この、凍てつくような心意の音は、いったい誰だ?)

穴の向こうから感じる、聞いたことのない音にルークは警戒した。

彼らの前で、機を待っていたかのように穴から誰かの足が露わになる。

それは、幾度も見た整合騎士の具足だった。

「まだ整合騎士が残ってたのか……?」

「いえ……しかし、あれは……」

ゆっくりと空中を滑るように降りてくることで、徐々にその姿が明らかになっていく。

六メルはあろうかという天井から、昇降盤の上にその騎士は着地する。部屋の明かりに反射して、薔薇の衣装が施されている青みがかつた銀鎧が、煌めくように輝いた。

靡かせていた濃い青色のマントをゆるりと落とし、片膝をついて落下の反動を殺す。俯いた顔は、大型の首当てに隠れて見えない。

「——ツ!!?」

だが。その亜麻色の髪だけは、決して見間違えるはずがなかった。全身を駆け巡った衝撃に、二人は動けなくなってしまう。

(嘘だ……そんなはずがない。そんなことが、あつていい……はずが……)
(そんな、まさか……ありえない……!)

激しく動揺する二人と、アリスの前で、ゆつくりと騎士が立ち上がる。そして、下を向いていた顔をもたげ——氷のような緑の瞳で、ルーク達を睥睨した。

そこにいたのは。

紛れもなく、他の誰でもない。

幼い頃から共に育ち、村を出て、二年間もの間三人で苦楽を共にし。

この塔にまで一緒にやってきた——

「……………ユー、ジオ？」

唯一無二の、幼馴染だった。



これは現実ではない。出来の悪い、この世で最も恐ろしい悪夢だ。

ユージオの姿をしたその騎士を見て、ルークの心はすぐにそう囁いた。

だって、そうしなければ……守るべきはずだった人の一人を、失ったことになってしまから。

だが理性は分かっている。

記憶を欠けさせ、それによって感情を薄め、鉄のように冷えた心が、冷酷に真実を導き出す。

無機質な瞳で自分達を見つめているあの男こそ、ユージオなのだ。

「……ユージオ」

立ち尽くすルークの隣で、一瞬早く心を立て直したキリトが名を呼ぶ。

それは彼の存在を確かめるようなものだったが、一言だつてユージオが返答することはなかった。

「……まさか……早すぎる」

隣で溢れた独り言に、首を捻るようにして振り返る。

自分ほどではないにせよ、驚きに顔を染めたアリスが見返してきた。

「早いつて、何がだ」

「儀式の完了が、です。……ルーク、落ち着いて聞きなさい」

ちらりと、整合騎士の鎧を身に纏うユージオを一瞥し。

少しだけ躊躇う様子を見せてから、アリスはそれを口にした。

「お前の仲間は……キリトの相棒は、既にシンセサイズされています」

「……馬鹿な」

「ええ、幾ら何でも馬鹿馬鹿しい。ユージオが小父様と剣を交えてから、1時間と経っていないはず。こんな早さで騎士にされるなど、ありえませんか」

今更聞かずとも、それはスワロウ達との事前の会話で十分に理解していた。

儀式を拒んだアリスは特別長かったが、それでも騎士を作り上げるのには数時間を要する。

緻密に繋がっている記憶を断裂させ、一部を抜き出そうというのだ。いかに神でも慎重に行わざるをえない。

だからこれは幻の類か何かで——そんな風に思い込もうとするルークや、キリトの心を、無情にその音が否定する。

——イイン

聞こえてしまう。

かつては、常に誰かを包み込むように吹雪いていたその音が。

今は、まるで毒の蜜のような薄紫色の薄氷に覆われて、完全に凍りついてしまった。

「俺は……俺は、また、守れなかったのか……」

「ルーク？　しっかりしなさい、ここで貴方が狼狽えてどうするのです！」

「俺は、俺は……あぐっ!？」

「っ!？」

頭が割れるような痛みが走り、その場で膝をつく。

ドグツ！　ドグツ！！　ドグツ!!!

また、心臓が酷く痛む。使命を果たせなかつた自分を、自分自身で罰するように。ついに《白竜の剣》を取り落とし、苦しげに呻くルークに、アリスは僅かに狼狽した。

「俺は……オレは……お……れは……」

「これは……！　ルーク、お前は自分に何をしたのです!？」

それが外的なものではなく、ルーク自身の中で起こっているものだと察したアリスは叫ぶ。

それを見て、同じように動揺していたはずのキリトは——ぐつと表情を引き締めた。

「——アリス。ルークを頼む」

「何を……いえ、そうでしたね。お前は、整合騎士に本来の記憶を取り戻させる方法があると言っていました」

その背中の語らんとすることを理解したアリスは、納得して頷く。

黒い後頭部が下へ傾き、垂れ下がっていた右手の剣をユージオへと向けた。

そこでようやく、ハツとしてルークは弱々しく手を伸ばす。

「ま、待て、キリト……だめだ……それだけ、は………」

「……そこ見ててくれ、ルーク。この世界ではいつまでもお前に頼りっぱなしじゃないって、俺もやるときはやるって証明してやるよ」

少しだけ振り向き、ニツと横顔に不敵な笑みを貼り付けたキリトに、ルークは何も言えない。

そんな彼に、キリトは今一度アリスへアイコンタクトを送ってから、相棒へと歩き出した。

（そうだ。何もユージオは、記憶や人格を破壊されたわけじゃない。ただ、封じ込められているだけなんだ）

フラクトライトのたった一箇所、その断片を奪い去られてしまっただけ。

それさえ取り戻せば、あとはカーディナルに処理してもらって、元のユージオに戻せる。

ならば今はすべきことをしようと、一歩一歩着実に彼へと歩んでいく。

ふと、先ほどあ言った意味を考える。

自分がそうせずとも、圧倒的な攻撃力を誇るアリスの《完全武装支配術》を使えば一瞬で終わる。

いかにユージオが整合騎士にされてしまったといえど、剣もないように見える今なら確実だろう。

(でも、それじゃあまりに酷だ。記憶を失った幼馴染同士を戦わせるなんて、俺にはできない)

それは何も、ユージオとアリスにばかり当てはまるのではない。

今、膝をつけて自分の背中を見ているだろう、もう一人の親友。

彼にだけは、この重荷を背負わせたくはなかった。

カーディナルの前で考えたように、彼はキリトにとって兄のような存在になりつつある。

自分やユージオ、他の誰かを常に案じている。人を想い、純粹に己が身を投じる彼の姿はいつだって眩しかった。

そんな彼は、いよいよ自分のことなど見限つて、あんな風にまでなつてしまったのに。

(きつと、今のルークは自己崩壊を起こしかけている。彼がアリスと同じように、この世界の住人らしからぬ強い自我と判断力を持つているからと言つて、自分が守ろうとした相手を傷つけることには耐えられないだろう)

もしもルークが、自分の感情と現実の板挟みになり、受け入れられなかつた時。

以前、現実世界で菊岡達に見せられたある実験——心的論理の矛盾による、人口フラクトライトの強制崩壊が起こるだろう。

これまで多くのUW人を見てきて、キリトはその推測の確実性を確信していた。

ならば、ただ心が痛むだけで死にまでは至らない、この世界の人間ではない自分がやらないでどうするのだ。

そんな思いを胸に、キリトは毅然とした面持ちで歩き続けた。



十メル以上離れた場所から、ユージオを正面から見て、語りかける。

「ユージオ」

三度目の呼びかけ。

しかし、やはり答えは返ってこない。

「俺が解るか？ お前の相棒、キリトだ。この二年、ずっと一緒にやってきただろ？」
連ねた言葉は、眉一つ動かさない騎士に届かない。

「ごめんよ。君のことは知らない」

やはり無駄か……キリトがそう思った時、ようやくユージオが口を開いた。
氷のように冷たい声。やはりその魂まで凍結されてしまったのだ。

しかし、整合騎士に植え付ける諸々の虚実を教えるには不十分な時間だっただろう。ならばそこを揺さぶろうと、そう思つて。

「でも、ありがとう」

「……何がだ？」

「——僕の剣を、持ってきてくれて」

次の瞬間、不思議なことが起こつた。

急に腰の《青薔薇の剣》が震え、微かな光を帯びたのだ。

驚いて見下ろしたのと同時に、一人でに剣帯からするりと抜けていくと宙を舞う。

そして、あつという間にユージオの手の中に収まってしまった。

「な……………」

「心意の腕……………!?!」

目を瞬かせ、腰に剣を履いたユージオを見る。

後ろで鋭く息を呑んだアリスの発言に、彼を見ながら問いかける。

「なんだよ、それ？」

「古より整合騎士に伝わる秘術です。神聖術でも完全支配術でもなく、意志の力だけで

物体を動かす……使えるのは小父様を含めて数人と聞きますが」

つまり、騎士になったばかりのユージオが扱えるはずの代物ではない。

それを行使したことに激しい違和感を抱きながらも、黒い剣を握って問いかける。

「その剣で、どうするつもりだ？」

「もちろん、君たちと戦うんだよ。それが、あの人の望みだから」

あの人……アドミニストレータの存在を示唆し、冷徹に告げる。

彼がこの場に現れた理由を改めて理解しながら、キリトは食い下がった。

「ユージオ。誰かに命令されるまま……自分が何者かも、戦う理由さえもわからないまま戦うのか？ お前は、大事な幼馴染を取り戻すためにここまで……」

「戦う理由なんて、どうでもいいんだ」

冷たい一言が、バツサリとキリトの説得を切り捨てる。

どこまでも無情に、無我な顔で、ユージオは答えを告げた。

「あの人は、僕の欲しいものをくれるんだ。僕にはもう、それだけで十分なんだ」

「欲しいもの……？ それは、アリスよりも大切なものなのか？」

一瞬。ユージオの瞳に、波が生まれる。

その視線がキリトを超えて、動こうとしているルークを諫めるアリスへ向かった。けれど、すぐに目を背けるようにして頭を下げる。

「知らない。知りたくない。君のことも、誰かのことも……嫌なんだ、もう……」
そこから先は、キリトには聞き取れないほどの小さな囁きだった。

なんとか理解しようとするよりも前に、少しだけ俯いていたユージオは顔を上げる。
再び無になったその佇まいで、右手を《青薔薇の剣》にかけてと容赦無く引き抜いた。
「これ以上君と話すことはもうないよ。戦おう、その為に君達もここまで来たんだろう？」

やむなく、キリトも黒い剣を両手で握ると、足の位置と重心を確かめ始める。

「……ユージオ。お前は覚えていないだろうけど、お前に一から剣を教えたのは俺だ。
師匠として、まだ弟子に負けてやるわけにはいかない」

そう宣言する言葉の中には、どこか緊張とは別のものが入り混じっていた。

キリトの胸中にあるのは——そう、いつかこの日が来るといふ予感がやって来た、喜びだ。

そんな、少し場違いな闘志を胸に。ユージオと重なるような動きで、共に剣を構える。

「ハアアアア——ッ!!」

そして、一秒後。

ソードスキルの光を纏った剣を手に、二人の剣士は走り出した。

ルークの答え

——何を間違えたのだろうか？

ゆっくりと、まるで時間が引き延ばされたように離れていく黒い背中と。

それに向かってゆく、白銀の鎧に身を包んだ騎士。

二人の姿に、疑問を抱く。

この恐ろしく、とても耐え難い現実のどこか一端に、自分の罪があるのなら。

それはどんなものなのだろうと、霞む視界の中で必死に答えを探す。

彼らを置いて、一人牢を脱してしまった事だろうか。

剣に身も心も捧げ、彼らとの思い出の多くを捨ててしまったことだろうか。

それとも、《雲上庭園》で先にユージオを行かせたこと？

強い心を持つはずの彼が、シンセサイズの秘儀などというものを受け入れてしまった理由に気付けなかったこと？

はたまた——あの時、彼らと共に村を出たその瞬間から、間違いが始まっていたのか？

その答えは、ルークにはわからない。

彼はユージオではなく、彼の誰より近くにいただろうキリトでもない。

そして、彼らが互いを慕い、相棒と呼ぶような間柄でもなく。

彼はただ——ずっと、傍観者だったのだ。

「ハアアアア——ツ!!」

ついに時間が動き出し、裂帛の叫びと共に二人の剣技が炸裂する。

その動きは全くの同一。鏡合わせのようにして、漆黒と白銀の刀身が衝突する。

腰の動き、体重、剣の重さ、そして秘奥義の力が付与された、力強いキリトの一閃。

これまでに何度も見たその一撃は、しかし重い鎧を纏うユージオも全く劣らなかつた。

整合騎士となつたことにより、ユージオは冷たく凍つた心意の力をむしろ強めていたのだ。

その意志の力と……何より、ずっと見ていた、彼の密かで愚直な修練が、その一撃を生み出した。

「ユージオ！ どうしてシンセサイズの秘儀になんか負けちまつたんだ！」

「……………」

至近距離で鏝迫り合いを行いながら、キリトが訴えかける。

先の言葉の通り、もう話す気がないのかユージオが引き結んだ口を開くことはない。

「お前が剣の修行をしたのは……ルーリッドを三人で旅立つて央都セントリアを目指したのは、大事な幼馴染を、アリスを取り戻す為だろう!？」

秘奥義の緑の光、その向こうでユージオの瞳がまた一瞬揺れる。

輝きを失つた、鏡のような瞳がアリスを写して……次に瞬きした時には、もう消えていた。

次第に秘奥義の光が消えていく。

完全に消失した瞬間、大きく剣が弾き合い、二人はその勢いに任せ後退する。

一拍の後、再び固く剣を握る音がはつきりとルークには聞こえた。

「おおッ！」

「……ッ！」

片や、大きく開いた口から雄叫びを。片や、鋭い呼気だけで。

二度目に踏み込んだキリトとユージオが、激しい剣戟を始めた。

「……………な、んで……………」

どうして、こんなことになってしまったのか。

答えがないと知ったはずの問いかけを、胸の中で自分に投げる。

何故、ユージオはその心をアドミニストレータなどに明け渡してしまったのだろうか。

これほどの超短時間でのシンセサイズをされたということは、抵抗しなかつた確率が
高い。

だとすれば、ユージオが手放しただろう最も大切な記憶——それは、何だというのか。

（決まっている、はずだ。あいつは、ずっとアリスを追い求めていた。彼女こそが、ユー

ジオにとっての光だったはずだ)

そのはずなのに、目の前にいるアリスに全くと言っていいほど反応を示さない。

心は固く閉ざされ、そこに空いた大きな穴に何が、あるいは誰がいたのか。

もう、ルークには分からなかった。

「ルーク。あまり気に病みすぎるのはやめなさい。彼の状態は全て、最高司祭様による非道な行いの結果なのです。貴方に責任があるわけでは……」

手甲に包まれた指越しに伝わる、悔しげなルークの震えに、アリスは声をかける。

だが、ルークは小さく左右にかぶりを振る。

男にしては長い髪に隠れて、その横顔に浮かんだ表情は見えなかった。

そんな彼らの前で、キリトは幾度となく全力に近い力で黒い剣を振るう。

全く同じ速度で斬撃が返され、罅迫り合いの状態に持ち込まれた。

「……ユージオ。俺とお前は、一度も本気で戦ったことがなかったよな」

「……………」

「俺はルーリッドの村を出てからこれまで、何度も考えたよ。俺とお前、本気で剣を交え

たらどっちが勝つのか、ってな……正直に言えば、いつかお前には追い抜かれるだろうって、そう思ってた」

言い募るキリトの言葉を、ユージオはじつと光のない瞳で見ている。

その中にある本来の彼に届く前に、言葉が遮断されているような気がした。

それでもと、キリトは言葉を重ねた。

「でも、今はまだその時じゃない。俺のことも、ルークのことも。アリスや、ティーゼやロニエ、誰のことも忘れてしまった今のお前じゃ、俺には勝てない。それを証明してやる！」

言い終えるのと同時に、キリトは目一杯の力を込めて剣を引いた。

力のかける先を失ったユージオが僅かに姿勢を崩し、それを引き起こした彼の体も後ろへ傾いた。

「キリ——ッ！」

大きな隙に、思わず名前を叫ぼうとする。

しかし、倒れていく体を支えられていない両足——その右のつま先に光が灯るのを見て口を噤んだ。

アインクラッド流體術、《弦月》。

どこまでも実践的な弟分の劍技は、一瞬の隙も機会に変えるのだ。

自分の顎めがけて迫る足先に、相も変わらず冷徹な顔のまま、ユージオはブレた体を捻って躲そうとした。

しかし、一瞬遅い。前へズレた上半身では、それを回避することは困難だ。

「ッ——！」

故に、ユージオの対応の変更は素早いものだった。

避けることを諦めると手に力を込め直し、横からキリトの足を劍で殴りつけようとしたのだ。

「くっ——！」

機敏に察知したキリトも、即座に修正を始める。

一瞬足の勢いが緩み、ユージオの劍の柄頭が空を切ったところで、その籠手に蹴りを入れた。

激しい音が鳴り、甲高い音を立てて右腕が上へと弾かれる。

手の中からすっぽ抜けた《青薔薇の劍》が天井へ向けて宙を舞い、切っ先が大理石に突き刺さる。

無防備になった青薔薇の騎士へ向けて、転倒から素早く立ち上がったキリトが追撃を

仕掛けた。

(——痛い)

ルークは、また締め付けるように収縮した心臓を押さえた。

目の前で、幼馴染達が戦い合っている。何の正当性もない戦いを強いられている。心を閉ざした幼馴染は、植え付けられた忠義のために。

時に優しい幼馴染は、こうして這い蹲っている自分を慮り、その代わりに。

(ああ、痛い。心が、痛くて、痛くて——この心臓を、抉り出してしまいたい)

何もできない、酷い無力感に苛まれる。

これほどに自分の身を呪ったのは、あの日以来ではないだろうか。

苦しむルークに、だが試練を与えるように、頭の中である二つの考えが覗き合っている。

(二人を、今すぐ止めなくては)

——あの騎士は、もはや俺の愛する者ではない。大義の為に、斬り捨てろ

(ユージオを、取り戻さなくては。キリトに、相棒を傷つけさせてはいけない)

——時間が惜しい。今すぐユージオを倒せ。何、加減して心意を斬れば封じ込められる

(何か、何かないのか。俺が、俺があいつらを守るような、そんな方法は)

——斬れ。あの凍りついた魂を、斬ってしまえ

「……………黙れ」

「ルーク…………？」

キリト達の戦いを静観していたアリスは、ふとルークを見下ろす。

聞き逃してしまいそうな小声で何か呟いたような気がするが、変わらず俯いたままにいる。

(俺は、ユージオを斬らない。たとえその手段があつたつて、それだけは許さない)

二度と幼馴染を傷つけてなるものかと、あの日に誓つたのだ。

だから、それがどんなに楽な手段で、一瞬でこの事態を潰すことができるとしても、剣を向けることだけは、ありえない。

——ならば、どうする？ この切迫した状況で、お前は彼らに何をしてやれる？

試すように、ルーク自身蝕む何か^がが問うてくる。

これまでの人生を費やして鍛えた剣技は、使わない。

傷つける恐れと為すべき使命に苦しめられ、声を張り上げることもできない。

何もかもを放棄し、雁字搦めで、どうしてルークのような偽善者に何かできると思えるのだ。

(それでも、俺は。あいつらを守りたいんだ。傷ついてほしくないんだ)

これが、どんなに傲慢で、自分勝手に、我儘でも構わない。

それを罪と言うのなら、壊れかけた守る者ルという自分に縋り付いている惨めさが罰だろう。

だから、何でもいい。どんなに巫山戯た、人が聞けば呆れるような、稚拙な策でもいい。

何か、何か、何か——ッ!

(あ)

その時。

ボロボロになった記憶の柵から、一つの答えが転がり落ちてきた。

あれは、そう、ずっと昔のこと。自分達が六歳か七歳の頃だ。

いつもの待ち合わせ場所に行くと、珍しくキリトとユージオが喧嘩していた。

その理由は覚えていないが、剣呑な雰囲気で見合っていた二人を何とかしようと思つたのだ。

ルークは、子どもらしい悪口で言い争っている二人に向けて踏み出し――

「……………は、ははっ」

「……………？ ルーク、どうしたので…………」

「そうだ。俺はいつも、そうしてきたじゃないか」

ようやく顔を上げたルークの、髪の間から垣間見えた金眼にアリスはゾツとする。

思わず両肩を押さえる力を緩めると、するりと彼は抜け出して立ち上がった。

《白竜の剣》を拾うこともせず、その背の翼を最大まで広げる。

大きなその背中が、アリスにはとても儂い幻のように見えた。

「アリス。あいつらを、頼む」

「ルーク？ 貴方、一体何をしよう……」

「大丈夫。たとえ記憶がなくても……きつとお前は、昔みたいに二人を引つ張つてやれるさ」

振り返つて見せた口元に、笑みを浮かべて。

薄々、何をしようとしているのかをアリスは理解してしまった。

その可憐な声が制止の言葉を形作る前に、ルークは大理石の床を蹴る。

そうすると、まっすぐに彼らのところへ飛翔した。

ぐんぐんと離れていくその背中に、アリスが無意識に手を伸ばす。

何かを叫んでいる彼女を、置き去りにして。

ルークは、ただ静かな微笑みを浮かべたまま。

今まさに、秘奥義を繰り出さんとしているキリトとユーゾオの間に飛び入った。

「な——!?!」

「っ——!?!」

目の前に現れ、両手を広げたその姿に、二人ともが息を呑む。

キリトが咄嗟に剣を止めようとするが、システムアシストの働いた一撃は既に中止できず。

初めて驚いたように目を見張ったユージオも、気がつけば勝手に腕が同じことをしようとして。

だが、二振りの光はとどまることを知らず、吸い込まれるように――

ザンツ。

――その体を引き裂いた。

赤と金の入り混じった鮮血が、激しく宙を舞う。

その様が、キリトの目には酷くスローモーションに見えた。

またそれは、視覚だけではなく剣を握る触覚にも作用しているようだった。

ソードスキルによって大幅に威力と切れ味を増した自分の剣が、その背中を豆腐のよう
うに容易く切り裂き。

翼の片方を斬り飛ばして、背中肉や骨までもを断ち切る鈍い感触が、はつきりと指

の先まで伝わった。

「あ……………」

目を見開いた時には、全てがもう終わった後だった。

片手剣単発技《スラント》を振り切った姿勢のまま、傷口から弾けた血を間近で見る。遅れて、ぬめりとした刀身に付着したその感覚を得た。

「え……………」

それはどうやら、氷の騎士となったユージオも同じだったようだ。

両手剣単発技《アバランシユ》を発動していた彼は、自分が斬ったものに瞠目している。

宙を舞う片翼が覆い隠していたその顔が、はつきりと見えた。

とても長い刹那の後には、現実がやってくる。

二人は、啞然として自分達の一撃を受けたその人物を、それぞれ正面と背中から見た。どちらともを庇おうとしたのか、両腕を大きく広げている。

二人より頭一つ分高く、筋肉質な体は、互いを確実に傷つけるはずだった一撃を受け止めるには十分だった。

だというのに。数秒経つても、その体が崩れ落ちることは――

「ゴツ……………プ……………ツ」

「ルークツ!!」

「ツ、あ……………」

黒い剣を取り落とし、ぐらりと揺れたルークの体を慌てて受け止める。

常人の倍はあるのかという重みはキリトの細腕では耐えられず、下敷きになることしかできなかつた。

それを見て、目を見開いたままのユージオは数歩分後ろへ後ずさる。

「ルークっ!! おい、しっかりしろ!」

「ガハツ……………ゴホツ……………ぎ……………あ……………」

「キリトツ!!」

「アリス! ルークが!」

「動かさないで! 傷口が開けばそれだけ天命が失われます!」

猛烈な勢いで走ってきたアリスが、膝を痛めるのも構わず激しい動きで跪く。

早口で術式を唱えると、両手の指の全てに光素を生成して治療を行おうとした。

「馬鹿野郎っ! なんてこんなことしたんだよっ!」

服を、両手を濡らしていく二色の血液を抑えながら、キリトは思わず叫ぶ。

先ほどの一撃は、ユージオの天命を一発で削り切るほどのものでないにせよ、かなり強力だった。

そこにユージオの一撃も加われば、それこそ天命を全て奪ってしまうほどの力を十分に生み出せる。

それが分からないはずはないのに、どうして飛び込んできたのか。

怒りと悲しみ、焦燥がないまぜになった感情に引つ張られ、涙さえ滲んでくる。歪んだ表情で見下ろすキリトに、ふっと血まみれの顔で笑う。

「こうでも……しな、いと……お前、達……が……傷つけ……あつた、だろ……」

「喋らないで！ 全くお前は、話に聞いていた以上の大馬鹿者ですね！」

「は、は……久し……、ぶりに……アリスの説教………聞いて、ガハッ！」

「ルーク！」

血を吐いたルークの手を、思わず握る。

荒く浅い呼吸を繰り返しながら、ルークは胡乱な瞳である方向を見た。

そこには、大きくシヨックを受けて立ち尽くしているユージオがいる。

「な、あ………ユー、ジオ。お前が、さ………何に、悩んで、たの………か………ケホッ………」

分かって、やれ……なくて……ご、めん、な」

「……………っ！」

「いつも、そうだ……………俺は、肝心な、時に……………いつも、お前らを……………傷つけ、ちまう……………」

弱々しく言うルークに、キリトとアリスが大きく目元を歪めた。

ユージオも、自分では理解できない強い衝動にかられ、ようやく口を開く。

だが何も言えず、その間にもルークは血を垂れ流しながら話し続けた。

「でも、さ……………それ、でも……………お前らには……………笑ってて、ほしいん……………だよ……………」

「ッ……………」

「俺が……………自分を、捧げて……………お前らが……………幸せに……………なれるなら……………それで、いいんだ……………」

そう言つて笑う顔は、心底から嬉しそうなものだった。

自分がこの選択をしてよかった。そう言いたげな顔に、キリトは声を荒げる。

「違うっ、違うよルーク！ お前はいつも俺達のために戦ってくれた！ 傷つけられたことなんて一度もない！ それはユージオだって、他のみんなだってそうだ！」

「結局……………自分の、ためさ……………俺は、最初から、最後……………まで……………俺のために、

戦ってたんだ……」

だから、後悔なんてこれっぽっちもない。

今、こうして命が体から零れ落ちていく空虚さが心地よくさえある。

ずっと恐ろしかったこの報いを受け入れてでも、叶えたい望みがあるから。

「なあ……ユー、ジオ………帰ろう、四人……で」

「——ッ、あ、ルー……」

「キリトも……アリス………も……お前も、他でもない………俺の、大切な、人………愛して、いるんだ………」

不意に、その右手が小刻みに震える。

キリトが驚いてそちらに顔を向けると、ルークはゆっくりと右腕を持ち上げた。

そうするだけで、残り僅かな力はどんどんなくなっていく。

歯を食いしばったアリスが懸命に治療を続けても、天命の減少は完全には止まらない。

その最後の力を、振り絞って。

「……ユージオ。そんな鎧は、脱いで。みんな………ルーリッドに………帰ろう……」

ぜ」

自分に差し出された白い手に、ユージオは限界まで目を見開いた。

——キイン

「っ、ぐ……………！」

突如、頭を貫くような痛みを覚えて額を抑える。

苦痛に瞳を歪め、それを抑えようときつく瞼を閉じた。
すると、裏側に一つの光景がぼんやりと浮かんでくる。

『そこまでだ、二人とも！』

『『ルークー!』』

『二人とも、なんだってそんな喧嘩してるんだ。いつも仲良くがお前らの醍醐味だろう』
『聞いてくれよ! ユージオがいくら言ってもわからずやなんだ!』

『キリトの方こそ! 何回同じことを言わせるんだい!』

『まあまあ、一旦落ち着けて。まずは訳をだな……』

『ルークはどっちの味方なんだよ!』

『ルークはどっちの味方なの!?!』

『え、ええ……』

幼い自分と、キリトの間に割って入った灰色の髪の少年。

同じ年らしからぬ大人びた曖昧な笑みを浮かべて、詰め寄る自分達に困っている。

とても懐かしく思えるその光景に、目を開いたユージオは眉を顰めた。
「く……………」

「みんなで…………一緒に…………故、郷…………へ……………」

「ルーク！ ダメだ、死ぬな！」

「目を閉じることは許可しません！ 起きなさい！ 起きてつ……………ルーク兄さんつ
！」

ルークの手が、落ちた。

蠢いていた片翼も床の上に広がり、強張っていた体から力が抜けていく。

何度も必死に呼びかけるキリトとアリスの声に応えることなく…………彼は、そつと目を閉じた。

心臓の音が、消えていく。

それに伴い、キリト達の声も徐々に尻すぼみになって、やがて途絶えた。

後には静寂だけが残り、しんと痛々しい空気が空間に満ちる。

「……………ユージオ」

「ッ」

その中で、ぼつりと響いたひどく低い声に、ユージオは息を呑んだ。

咄嗟に身構えようとして——顔を上げたキリトの顔に流れる涙に、動きを止める。

「こんなものが、お前の望みだったのか?」

友の血で濡れた手を、グツと握り締める。

その冷たさを、温かさを手放したくないように、染み込ませるように。

「お前は、俺達はっ、こんな結末の為に、ここまで来たのかよっ!!」

「っ、キリ、ト……………」

その時。ユージオは口の中で、初めてキリトの名前を口にした。

しかしそれには気がつかず、立ち上がった少年は睨みつけながら彼へ歩み寄る。

丸腰だというのに、その剣を振るうこともできず眼前まで来ることを許してしまっ
た。

「あいつはっ、誰より俺達の幸せを望んでたっ! そんな親友を殺してまで、俺達が戦う
意味はあるのかっ?! どうなんだッ。答えろ、ユージオッ!!」

その気迫に気圧されて、何も答えることができない。

ただ、震える唇が、睫毛が、瞳が。

自分達が生じたことに恐怖しているのだと、ユージオ自身に知らしめた。

キリトから逃げるように、一步二歩と、よろめくように後ろへ後ずさる。

彼が追いかけてくることはなく、疑問を浮かべた目で睨みつけてくるだけだった。

ユージオはキリト達から離れ続けて、踵がカツンと昇降盤に当たつてようやく止まる。

それから何をすればいいのか分からなくて、とにかく何か考えようとした。

——イイイン

しかし。その場の全員の耳に響いた共鳴に、それは遮られる。

顔を響めたキリト達は、驚きながら全員でルークを見た。

「な、これは……!」

「ルークの体が……!?!」

「ッ!」

彼らの見る前で、ルークの遺体に異変が起こる。

二つの傷口から霜が表出したかと思うと、その体を覆い始めたのだ。

不可思議な現象に狼狽している間に、あっという間に広がった霜が床を凍らせていく。

ついには近くにいたアリスや、キリトの足までもを凍らせてその場に縛り付けた。

「くっ、どうなってる!？」

「神聖術……いえ、神器の力が暴走でもしているのですか!？」

なんとか抜け出そうとする二人だが、霜は冷たく二人の力を抜いてしまう。

身動きが取れなくなった彼らを、ギリギリ範囲外にいて難を逃れたユージオは見つめた。

「……………キリト……………」

「っ!? ユージオ、お前今!？」

その口から紡がれた言葉——自分の名前に、ハツとしてキリトは振り向いた。

その顔を少し光の差した瞳で確かめて、次に目を見張っているアリスを見る。

「……………アリス」

今度こそ、はつきりとその名前が口にされた。

確かな熱を帯びた声に、キリトは今一度ユージオの顔を見る。

分厚い氷に覆われていたような能面は、焦燥と困惑、後悔……そして思慕の入り混じ

るものになっており。

その微笑みが何よりも、ユージオが自分を取り戻したとキリトに確信させた。

「ユージオ、思い出したのかっ!」

喜色を滲ませた声で、キリトは問いかける。

届いたのだ。自分の言葉と、本気の剣が……何より、決死の行いをしたルークの思いが。

その全てが、彼の中に巣食うアドミニストレータの支配を見事打ち破ったのだ。

そんなキリトに、哀しげに微笑むユージオは剣を白革の鞘へと納め。

そして、一歩下がると昇降盤へ乗り込んだ。

「ユージオ!? お前何をして——」

「……キリト……アリス。どうか僕を、追ってこないでくれ」

そう告げ、呆気にとられた顔をするキリトとアリスから視線を外す。

そしてもう一人……床の上に横たわる、霜に包まれかけた青年に、眉を落とした。

「……………ルーク。本当に、すまない」

昇降盤の表面を、足の裏で軽く叩く。

すると微かな振動を伴い、ゆっくりと小さな円盤は上昇を始めた。制止するキリト達を最後まで見つめながら、ユージオは昇っていき。

そして、最上階へと消えていくのだった。

使者の最期

カセドラル、五十階層。

かつて《靈光の大回廊》と呼ばれたその広間は、今や廢墟も同然と化していた。

その壮麗さはもはや永久に取り戻せないだろうと思えるほど、破壊され尽くしている。

不朽の壁と同じ性質を持つ柱に支えられていなければ、塔は半ばから倒壊していただろう。

「ぐ……………」

「ぬ、う……………」

その場所で、ライオットとバルドは膝をついていた。

片や歴戦の整合騎士、片や心意すら自在に操る人界の人間最強の狩人。

だがその威風堂々たる様は見るともなく、屈強な体は無数の傷と血に染まっている。鎧は至る所が破損し、バルドの無敵の赤鎧も今はその炎を消沈させてしまった。

携える武具も、竜具でなければとつくに粉碎していたであろう。

「このっ……屑虫、どもがア……ッ！」

だが、その代償に、彼らは敵に同等以上の手傷を負わせていた。

15メルも離れた前方から聞こえた怨嗟の声に、二人の騎士は顔を上げる。

そこでは、自分達と同じように膝をついた使者が憎悪に目を染めていた。

漆黒の執事服は無残に引き千切れ、全身は裂傷と矢傷だらけ。

上腕の半ばから下が失われた左腕からは、人とは思えない、黄金の血を垂れ流している。

だが、その絶大とも言える殺意にはいささかの衰えもなかった。

「このっ、私がっ……至高の存在たる我が、貴様ら如き守護竜の残りカスの使い手にもこうも傷を与えられるとはな……ッ!!」

アドミニストレータにすら匹敵する自尊心を損じたことへの、心底からの憤怒。

尊大な口調は、自分の他の全てを見下していることが、ありありと感じ取れる。

「はっ……テメエが、何様だろうと知ったこっちゃねえ」

それを鼻で笑い、全身を奮い立たせてライオットは立ち上がる。

弦を弾きすぎて、壊死したように黒くなっている指先でもう一度琴剣を構え。

切り傷と焦げ目に塗れた顔で、なおも不敵に笑ってみせる。

「この、ライオット様と戦った時点で。テメエは、とつくに冥界行き確定だ」

「……………然り」

隣で、強く黒盾を地面に打ち付けたバルドが、その勢いで体を引き上げた。

無骨な輝きを失った剣をも使い、巨岩のような威容を再び纏い直す。

「我らはかの残虐なる支配者を狩る者にして、人界の守護者なれば。貴様がどれだけ強大であろうと、決して屈しはせぬ」

圧倒的な覇気に、不屈の戦意を燃やして対抗する。

この三百年の中、彼の歩みを止められる者は、かつての友を除き誰一人としていなかったのだから。

ペーリツシユは、不快そうに大きく顔を歪めた。

俯いたまま不気味な動きで立ち上がると、ざつくばらんに切り裂かれた髪の中へ表情を隠す。

そして、ゆらりと前触れなく露わになったその顔は——狂気的な怒りに満ちていた。

「調子に乗るなよ、わっほ子どもがア——」

バチイッツ!!!

ペーリツシユの咆哮に呼応し、その周囲に金雷が多数出現する。

これまでで最大最高のそれらは、百にも至る雷槍と、ひときわ大きな鉤爪を6本形成した。

「これで終わりだ!! 貴様らの愚かさを噛み締めながら、塵と化すがいいわアアアアアアッ!」

「バルド殿! 最終局面だ!」

「無論!」

徐々に中へ浮かび上がり、金雷を従える狂気の使者へ、二人は最後の攻撃を試みた。

「死ねえアアアアアア——ッ!!!」

残った右腕が向けられた瞬間、すべての雷が一斉に飛来する。

左右前後、上下全て、あらゆる角度とタイミングによる、圧殺攻撃。

それをさらに上から叩き潰す、雷爪によるトドメの一撃。

一つでも当たれば……否、掠りでもすれば骨も残らず絶命するだろう、絶死の雷鳴。

「オオオツ——！」

真つ先に臆することなく飛び込んで行ったのは、バルドだった。

それまでの長い戦いの中、途中から温存していた神聖力を全て鎧へと流しこむ。

次の瞬間、大火山の噴火と見紛う大炎がカセドラルの天井を突き上げた。

大いにその力を吸い取った赤鎧——赤き蛇竜の心意が、最高まで鎧を燃え上がらせる。

作られたのは四枚二対、双方合わせて直径にして30メルに届きうる炎の翼。

数千度を軽く超える獄炎が、岩山がそのまま突進するかのような彼の勢いを助長した。

人型の要塞となったバルドの炎が、次々と生成される雷槍を悉く焼き尽くす。

その後ろで、最初の位置に佇んだライオットは、深く深く息を吸い、それから吐いた。「ふう……………力を貸せ、相棒」

——待ちくたびれたわ、たわけ。

心に響く声に、口の端を吊り上げる。

そうすると、琴形態になった《蒼竜の琴剣》をペーリツシユへと向けた。

角度と重心を調整し、それがピタリと最高の位置に来た瞬間、術式を口にする。

「『エンハンス・アーマメント』」

詠唱は省略。わざわざ式句を口にして力を発揮するような未熟な段階、とつくに過ぎている。

顕現しうるは、前代未聞の、一日の中にして三度目の武装完全支配術。

剣の天命値を限界間近まで削り取り、蒼き大竜の力を最大限にまで引き出してみせる。

「行くぞ……………」

青い鱗が何枚も増加した目元をきりりと引き締め、ライオットは宣告した。

酷使に酷使を重ね、限界を超越する一步手前の体に喝を入れ、収束していない数本の

弦に指を置く。

そうして、一本一本の指に、全ての指を使った時と等しい莫大な力をかけて引き絞つた。

通常ならば、そんなことができるはずはない。

だが、ライオットのできて当然だという強い意志が、彼に力を与えていた。

イイイイイイイ!!

甲高い音を立て、琴剣の前に音の刃が集まり始める。

何十、何百といった不可視のそれらが塊を成し——その音玉の数は、驚異の五つ。

全てを一点に集中すれば、それこそ不壊の壁すら含め、この階層を横一直線に両断できらるだろう。

(まだだ! まだ足りねえ!)

だが、そうではない。

ライオットが狙うのは、今か今かと隙を伺っている、あの金雷の大爪。

全部で六本。全てを切り刻み、バルドが最後の一步を踏み込む憂いを断つには、一つ足りないのだ。

故に。

「ここが見せ場だ！ さっさとそのクソみてえに重い腰をあげやがれッ!!」

——まったく。お主という男は、いつまでたつても騎士らしくならぬのう

やれやれと、艶やかで、かつ老獪な女の声は呆れ笑う。

そして——ライオットの腕のすぐ側に、風が寄り集まって人外の腕が編み出される。

目で捉えられぬ竜の小腕は、彼の指が引けなかつた最後の弦を容易く引き絞った。

新たな音の刃が収縮し、ついに六つ目の音塊が生み出される。

準備は、整った。

「いくぜエ、バルドの旦那アアアアアアッ——!」

これまでの偽りの騎士としての生において、最大の戦いを共にした騎士へ。

親愛を込めた叫びを届ければ——いつものように、最強の騎士は何も語ることはなく。

ただ、その泰然たる背中で物語った。

「さあ！ とくとご覧に入れよう！ これこそは我が絶技！ 幾度記憶を失おうとも絶

えず磨き続けた、二百年の研鑽が集大成!!」

ライオットの腕が、悲鳴を上げる。

自らを壊しかねない剛力の枷を外したことで、あらゆる筋肉の筋から血が吹き出した。

骨が砕けるその音を聞きながら、されど緋髪の騎士は不敵に笑って。

「我が一撃、その身で以って味わうがいい！ 人類の大敵、闇より来たりし破滅の使者よ

——！」

ついに、その指を手放した。

六つもの音塊が、一斉に解き放たれる。

それは空を削り、同じ音を破壊し、光に迫る速さを得て飛翔して。

黒き死者が従えた死の雷爪を、刹那の間に粉碎して見せた。

「なあ——!?!」

最後の力を振り絞って作り出した切り札を碎かれ、使者が喘ぐように驚愕する。

その驚きは集中力の全てを奪い去り、五メル先まで迫っていた騎士を押しとどめてい

た雷槍をかき消した。

あらゆる障害、あらゆる困難を跳ね除け、乗り越えた炎の騎士は——その身にある全ての力を込めて、剣を引き絞った。

炎が刃に収束する。死を常に眼前に置いた極限の闘争に、宿る赤き蛇竜の心意が歓喜に打ち震えた。

その狂喜を抑え込むが如く、剣には血のように濃い鮮血の輝きが宿った。

もしもキリトがこの場において、その構えを見ればこう呟くだろう。

片手直剣用ソードスキル、単発系最終技——《ヴォーパル・ストライク》、と。

「疾く冥府へと墮ちるが良い、人の皮を被りし怪物よ————ッ！」

「貴様、らあアアアアアアアアアアアア——————!!!」

もはや、ペーリツシユは叫ぶことしかできず。

秘奥義の力に従って、ライオットの音刃に等しい速度で疾走したバルドの。

暗黒領域の大空よりも赤い輝きによって、その胸を正面から貫かれた。

凄まじい速度で射出された蛇腹の刃が、本来の飛距離を超越して彼の肉体を貫通する。

それは留まることを知らず、ペーリツシユの後ろにあつた大扉を破壊して、昇降盤の手前に突き刺さることでようやく停止した。

カセドラル全体を揺るがす程の激震が、《靈光の大回廊》を直接襲う。

それは何秒、何十秒と続き、たつぷり3分もの時間を要してからようやく鎮まった。

「……………」

ライオットが、それを睨め付け。

「……………」

バルドが、銀の瞳でじつと確かめるように見つめる。

そんな二人の前で——胸に大穴を開けたペーリツシユは、絶命していた。

裂けるように口を開き、目玉が零れ落ちんばかりに双眸を開いて。

この世の悪意全てを煮詰めたような、恐ろしい表情で。

その天命の最後の一つまで、失っていた。

「フッー」

バルドが鋭く腕を引き、剣を手元に戻す。

刃は一つに纏まっていき、その反動で傾いたペーリツシユの体は床に伏せた。

数秒の間、立ち上がりはしまいかと警戒を続ける。
しばらくしても立ち上がる気配がなかったので、ほっと安堵の息を吐いて。

バ
リ
イ
イ
イ
イ
ツ
!!!!!!

まさにその時、ペーリツシユの体が内側から弾けた。
少しだけとはいえ気を緩めていたライオットとバルドは、己の失態を悔いながら構える。

だが、使者の体を内側から粉々に砕いたそれ——黄金の雷を見て、すぐに硬直した。

ゴガアアアアアア!!!

六枚の翼と四本の脚、四つ首の怪物の姿をした金雷が、咆哮のような雷鳴を奏でる。目に相当する部分を仄かに赤く染めたそれは、天に向かって今一度吠え立てると霧散した。

「今のは……」

「……………竜、だと?」

——おのれ。所詮、脆い人の身では我が雷いかづちの一部も使えぬか

次の瞬間。脳裏に滲み出た悍ましい声に、全身が震え上がった。

——せつかく神気取りの女を使い、竜どもを殺して武器に封じ込め、この箱庭を墮落させたものを

それは、この世のあらゆる悪が凝縮されたような、聞くだけで気が狂いそうになる声。

——まあ良い。これだけ腐れば、目覚めた時に喰らうには十分な塩梅よ

どこから響いているのかもわからない声に、二人は冷や汗を流す。

——待っているがいい。いずれ、混沌と破滅の中で、地の底より我が目覚めるその時を

それきり、声は途絶えた。

「——くはっ!? はあッ、はあッ!」

「っ……………ふ」

体を縛り付けるような威圧感も消え、思い出したように大きく呼吸をする。

十分に呼吸を整えてから、ペーリツシユの死体があつた場所を見た。

そこには黒焦げた何かの欠片が散乱しているのみ。何も残ってはいない。

「……………バルドの旦那。今のは」

「……………うむ」

小さく首肯し、同じ考えにたどり着いていることを示唆する。

一瞬間を強張らせたライオットは、深くため息をつくとその場に尻から座り込んだ。「はあ……つたく、散々な目にあつたぜ。これほど死を間近に感じたのは初めてだぞ」

——無駄に長い退屈な日々から目覚めるには、良い刺激になつたであろう？

揶揄うように言う声に、「んな訳あるか」と悪態を返す。

そんなライオットの隣に、バルドもどつかりとその体を床に落ち着かせた。

いかにこの男といえど、あれとの熾烈な戦いは相当に堪えたのであろう。表情に濃い疲労が滲んでいる。

しばらくぼんやりとしていたが、やがてふと手元を見下ろす。

「……………この指じや、当分は弦を引けねえな」

感覚がほぼない、震える指先を見て諦めたように笑う。

この体たらくでは、とてもルークを追いかけて助力することは叶うまい。

そこまで考えて、隣にいるバルドの様子を伺う。

どこまでも己の復讐心と使命に忠実な彼は……しかし、瞑目して口を噤んでいた。「あんたはいいのかい、旦那。俺よりも長く、それこそ団長と同じくらいの長い間、この時を待ち続けたんだらう?」

ただ復讐のために、三百年に及ぶ日々を過ごし続けるなど、並大抵の精神ではない。あるいは壊れているからこそ耐えられたのだらうかと、不遜なことを勘ぐつてしまふ。

だが、彼は一切の怒りを見せることも、冷酷な言葉を発することもなく。見開いたその目には、澄んだ色があった。

「……………あの者であれば、我が宿願を託すに相応しからう」

「……………あんた、やけにルークのことを気に入ってないか? 一体何があつた?」

「貴様がそれを言うか、蒼角の」

一瞬きよとんとして、すぐ後にそれもそうなんだがな、と頬を搔く。

なんだか放つておけないあの青年を思い浮かべると、どうにもむず痒い気持ちになる。

「これも先輩心つてやつかねえ」

「そうか」

「そうかつて、あんた相変わらず無愛想——」

「ご歓談中のところ、失礼いたします」

自分の言葉を遮った何者かの声に、驚いて後ろを振り返る。

すると、そこには光の扉を背に、怪しげな笑みを浮かべる白い男——スワロウが立っている。

「んだよ、お前か。驚かせやがって」

「申し訳ありません。しかし、尋常でない戦いでしたので。支援が必要と思い、参りました」

そう言って、スワロウは唐突に指を鳴らす。

すると床の上に神聖術の円環が現れ、ライオットとバルドを悠々とその光の中に飲み込んだ。

みるみるうちに傷が塞がり、全身を苛む痛みが消えていく。

あれだけの重傷を完全に治療すると、二人へ向けてニコリと笑いかけた。

「このようなものでいかがでしょう？」

「やってから言うんじゃないよ。まあ、助かった」

「礼を言う、古き使者よ」

「軽くなった体に力を込め、ライオットとバルドは立ち上がる。

「許せ、使者よ。貴様の策を無為にした」

「お気になさらないください、バルド様。元より貴方様の望むがままの道を行くことを私は願っております」

「……貴様も奇妙な男だ」

「何せ、四百歳を超えておりますから。それに結果を見れば、あながち無意味とも言えません」

ペーリツシユの残骸を一瞥し、お茶目に片目を閉じるスワロウに苦笑が漏れる。

あの黒き使者を打倒したことは、今後を考えれば大きな戦果だろう。

とはいえ、代償に疲労感や体力の消耗までは元に戻っていないようで、酷く怠い。

「竜具の天命も限界だし、残念だが俺達は脱落だな」

「……………口惜しいことよ」

「申し訳ありませんが、私の術では神器級のオブジェクトの天命値を操作することはできません」

「とすると……後は、あいつらに賭けるしかない訳だ」

ライオットの言葉につられ、全員が上層へ向かう奥の扉だったものを見やる。

後を託した同胞と、整合騎士をも打ち倒した彼の仲間達。彼らに希望を託すしかな

突如として。

骨の髄まで突き刺すような、恐ろしい咆哮が重圧を伴って彼らを襲う。

先の金雷に匹敵する、魂までもが震え上がる力強い雄叫び。

その声は、カセドラルの地下牢にまで響き渡り、深く眠っていた看守が飛び起きる。

その声は、風に乗って央都セントリアにまで届き、ふと学院の中庭にいた少女が空を見上げ。

その声は、ダークテリトリーとの境界に向けて飛んでいた女騎士の耳に入り、彼女は塔に振り向いた。

その声は。

何故か、ライオットを、バルドを、スワロウまでもを。

とても、悲しい気持ちにさせた。

長く、何度も壁に反響して響き続けた咆哮は、やがて小さくなつていく。

最後の木霊が消えた時、ライオット達はどつと全身から冷や汗を吹き出した。

「つ……なんだ、今のは」

今まで聞いたこともない、何かの雄叫び。

それは自分の誕生を叫ぶような、己を何かに知らしめるような、そんなもの。

人ではなく、獣でもない。騎士でもなければ、当然アドミニストレータでもあるまい。

「……………白き……………翼」

「……………何？」

「血濡れた、宿命を背負いし翼……………高く飛び立ち……………神の喉へと喰らいつかん……………」

かの賢者なりし黒き竜は、我にそう天啓をもたらした」

天井を見上げ、ポツリポツリと無意識のように零すバルドに、ライオットも上を見る。

しばしの間、穴だらけの天井を見つめ続け——やがて、何かに気づいて大きく目を見

開いた。

「まさかっ！」

「……………ライオット様」

「スワロウ！ バルドの旦那！ 行くぞ！」

彼らの答えも聞かずに、ライオットは走り出す。

その目には焦燥が満ち、何か怒りを堪えるように口元は戦慄していた。

「あいつ、馬鹿野郎っ。まさかつ、まさかあれをつ！」

あの、禁断の秘術を。

そう呟いた自分の背中が、氷の茨で撫でられたような気がした。

使命を糧に、命を贄に

それは、死の間際に見る幻だっただろうか。

霜に覆われた九十九階層。

そこで横たわるルークは、未だにステイシア神の元へ召されてはいなかった。己の霜と、アリスの懸命な治療により、僅か天命を残し生きながらえている。

五千を超えていた天命の値は二十四となり、風前の灯であった。

その中で。ルークは、不思議なものを見た。

心を取り戻した青薔薇の青年が、己のしたことへの悔恨を抱きながら女神の居室へと

戻る。

小さな道化の詰問を躲し、ただ唯一その居室にあるベッドへと入っていった。中で待ち構えていたのは、絶頂を体現したかのような、凄まじく美しい紫銀の少女。彼女は胸の中へ青年を誘い、そして彼の魂に突き刺した氷の棘を引き抜いた。

倒れ込む青年。その頭を撫でながら、彼女は告げる。

もう一度、その心の扉を開放しなさい。そうすれば貴方を愛してあげる、と。官能的なその囁きに。しかし、青年は罪となすべきことを胸に己を奮い立たせ。痺れる軀体を解き放つと、彼女の胸に刃を突き立てようとした。

術により、その試みは失敗に終わる。

吹き飛ばされた青年は壁の剣の装飾に衝突し、血を流した。

彼に衣服を消失させられた少女は、虚空に浮いたまま優雅に足を組み、くすりと笑う。せつかく罪人を許し、愛してあげようとしたのに。支配してあげようとしたのに。

そう。彼女の与える、彼女にとっての愛とは支配。全てを奪うことで一切を忘れさせ

ること。

今なら許してあげるわ。そう言つて、彼女は賢者の与えた短剣の破壊を命じた。

けれど。青年がそれに応じることはなかつた。

毅然とその鏡のような瞳を見返すと、はつきりとした口調で告げる。

可哀想なのは、そんなふうにししか愛を語れない貴女の方だ、と。

愛とは何かの見返りや、取引で与えるようなものではない。

花に水を注ぐように、ただひたすらに与え続けるもの。それが愛だと、訴えた。

そのココロ魂に、ある人々の顔が浮かぶ。

かろうじて覚えている。村の老人。世話焼きの女性。優しい夫妻。

幼い金髪の少女。制服に身を包んだ大柄な男に、利発そうな赤毛の少女。

そして。自分の頭を撫でる、格好つけない灰色の髪の男がいた。

たとえ兄弟に、親に愛されておらずとも。彼は誰かに愛され、愛していたのだ。

彼が抱えていた強い飢えは、確かに満たされてもいたのだから。

そう答えた青年に、少女は白百合のように儂い美しさを捨てた。

代わりにその身に纏うのは、人を圧倒する神の気迫。

そこにいるのはもはや少女ではない。女神だ。

青年が女神に挑む。しかしその力は絶大で、傷一つつけることすら叶わない。どうしようもなく心細くなった青年に。ふと転調が訪れた。

主の命を遂行しようと消えていた道化が、居室へと戻ってくる。

そうして剣を抜いている青年を罵倒するが、すぐにそれは焦りと恐怖に変わった。何故、と問い詰める女神に答える前に、道化が恐れる所以がやってくる。

その足をむんずと掴み、この階層から居室へと現れたのは。

覚悟を決めた顔の、黒衣の剣士と黄金の騎士だった。

青年は、彼らを見た途端に無上の感動と、しかし同時に罪悪感に苛まれる。

けれど、そんな相棒の陰気を吹き飛ばすようにして黒衣の剣士が笑いかけた。幾度となく救われてきたその明るい笑顔に、青年も儂げな微笑みを返した。

そして、彼の傍にいる騎士。ずっと恋焦がれ、取り戻そうと追いかけてきた少女を見る。

呪縛を断ち切り、そこに立つ隻眼の彼女は、女神にその訳を問われ、答えた。

騎士の使命とは、人界の守護である。

来たる厄災に備え、彼らの命を守ることこそが、自分達の正義であると。

故に、彼女は女神の傲慢と執着、その全ての集合であるこの白亜の塔に叛逆の意を示した。

女神はただ微笑むだけ。彼女の言葉など、当たり前すぎて答えるに値しないのだらう。

そんな女神の代わりに、道化が激昂した。

最高司祭と教会を何より愛する滑稽な小男は、女神に青年達の排除を約束する。

そして、褒美に彼女を求めた。女神はそれに、嘘に満ちた笑みで頷く。下手な喜劇のように喜び勇んだ道化は、青年達を排除せんとその身を賭す。

恐るべき術師である彼が生み出したのは、炎の悪魔であった。

何十という炎の素因がより集まったそれは、一度触れればその身を灰とする劫火の化身。

この人界の誰にも真似できぬであろう、彼が編み出した最強の絶技であった。

二人の青年と、一人の少女は果敢に悪魔へ挑む。

苦闘の末、彼らは見事道化の炎神を打ち破ると、下郎の胸に今度こそ剣を突き立てた。血を噴き出し、倒れる道化。炎神が塵のように消え失せる。

己の為に奮闘した、哀れなその小男に、女神はつまらなさそうに鼻を鳴らした。至極退屈な見せ物だったと、転がった道化の骸を隅へと捨て去りまでした。

そうして、ようやく青年達は女神と正面から対面する。

女神に異界よりの使者であると告げられた黒衣の剣士は、彼女の行いが間違いだと言った。

いかにも図書室のちびっ子が吹き込みそんなことだ、と女神は嘲笑して取り合わない。

次に少女が、騎士達なき後人界を守る術はあるのかと問いかける。

また、自分達から過去を、愛する人を奪い、敬愛を信じず、絶対の忠誠を埋め込んだのは何故かと。

女神は、それこそが信頼であり、愛だと答えた。

あらゆる苦悩から解き放ち、煩雑な考えを捨て、いつまでも綺麗な人形でいさせるためだと。

刻斬りの騎士長を、天穿の女騎士を、緋髪の騎士や、あの美しい騎士にそうしたように、貴女も記憶を消してあげると。

ある種の救いをもたらそうという彼女に、されど少女はその胸を引き裂くような悲しみを放棄しない。

その剣を床に突き立て、痛みこそが己を証明するのだと、そう言った。

それさえもくだらないと嗤う女神に、また黒衣の剣士が語る。

所詮、女神も元を辿れば人の子。過ちを犯したことは事実なのだ。

そして、いくら彼女がこの人界を弄び、己が身だけを愛そうとも、創造者達にとっては些事だと。

このまま人界が滅べば、失敗の一つとして全てを消し去り、また始めるだろうと。そう。この世界を創り上げた者達と同じ世界から彼はやってきたのだ。

では、お前達はどうだと女神は問う。

お前達も創造主に創り出されたのではないか。消されない為、粉骨砕身したかと。

否、と女神が断ずる。自分達のような命を悪戯に創り上げた者達がそんなことをするはずがない。

だから己も、彼らに屈することはない。あくまで支配し、それこそが全てなのだ。

ならばと、黒衣の剣士は言い募る。

ここで引き下がるわけにはいかない。二年の時を過ごし、慈しんだこの世界を、終わらせるわけにはいかないのだ。

そして、何よりも。

この世界を、異邦者である自分より……誰より愛し、守ろうとしたあの兄のような男の為に。

ここで言葉を止めてしまえば、彼が命を賭した意味こそが失われてしまうと、そう猛る。

女神は真に、この人界を全くの無価値と見ているのか。

すべてが蹂躪された後、孤独の玉座で胸を張るのかと、彼女の失敗を責め立てる。

すると——女神は、そんなものとはつくに考えていると、悠然に笑った。

彼女が手を掲げる。そして、長き時をかけ、整合騎士という代用品を用いる間に編み上げた、最高の術式を唱えた。

居室を囲む、三十の剣が光を放つ。
舞い踊るように楔から解き放たれたそれらは、女神の元へと集っていった。
そして、一つになり——その胸に、光の結晶を心臓として迎え入れ。

黄金の剣人が、組み上げられた。



(ああ………なんて、眩く。悍ましい、輝きだろう)

霜に覆われた視界の内に、その無情にして無敵なる巨人を収める。

その身を作る剣の一本一本、全てが神器に等しい力を持つ怪物。

女神が己の少ない猶予を費やして創り上げた、最強の自動人形。

心意を、魂を持たないはずのその煌めきは——とても、人に向けて使うものではなかった。

(いか、なくては……………あれを、キリト達と……………戦わせる、わけには……………いか、ない)

もしあの人形がその力を振るえば、最悪の未来がやってくる。

これまでの何もかもが無意味になってしまうような、悲惨で、受け入れ難い、そんな未来が。

それこそを回避し、ともすれば己が引き受けるために、ここまでやってきたというのに。

(ちく、しょう……………また……………また、俺は……………間に、合わないのか)

いつだって、自分は肝心なその場にいることができない。

あの、幼き日も。

愛する者達が、大切なものを守るために罪を犯した時も。

その一方が黄金の少女の心を溶かした時も、もう一方が心を氷に閉ざしてしまった時も。

いつでも、いつだって、自分は傍観者以外の何者にもなれなかった。

もしこれが物語の世界であれば、自分とはとんだ端役であろう。

無駄に守護を叫び、無為に剣を振るって、無情にも死んでいく。

数多に紡がれた物語の主人公のように、自分は決してなりえないのだ。

いや。あるいは笑いの種になる喜劇の主役になれば、なれたかもしれない。

(ああ、でも………もう、ダメだ)

どんなに、彼らを助けたくても。

己の矮小さを思い知って、何もできなかつたと突きつけられても、それでも希う、このどうしようもないほど消えない燻りは。もう、二度と燃え上がることはないのだ。

(……凍り、ついちまった。何もかも………まるで、体だけが………死んでいるようだ)

指の一本すら、動かすことはできない。

ましてや立ち上がることも、無様に叫ぶことも、剣を握ることも。全て全て、できようはずがない。

(ああ、神様。これが………これが、俺の終わりなのです)

今となつては、いるかもわからぬ創造神に訴えかける。

いつか、それに近い誰かに出会い、多くを学んだような気がするが。そんな彼女でさえ、ルークを救ってはくれないだろう。

果たして自分のいる意味は、この世界にあったのだろうかと考える。命の炎は尽きる寸前。ありとあらゆる失望と、絶望と、達観を抱いてしまった。もし何か、自分に明確な存在意義があつたのだとしたら。それは、何だつたのだろうか？

(ああ、寒い………寒いよ………誰か………俺の、手を………)

ひどく冷たい自分の体が怖くて、そう願つた時。

——イン

応えたのは、ずっとルークを導き続けた、その光だった。小さな音を立て、その顔を覆っていた霜がひとりで崩れ去る。

そうすると——自分の胸の上に浮かぶ、一振りの剣が見えた。

(ああ……ずっと、そこにいてくれたんだな………)

ルークに、かの炎の騎士や、騎士長のように武器を動かすほどの心意の力はない。それ自体が己で浮かび、己の意志でルークの元にやってきたのだと、そう悟る。

(ごめんな……使命は、果たせそうにないよ………)

——それは真まじか？

赦しを乞えば、いつか聞いたあの声が胸の中に響いた。

驚きもせず、微かな笑みを浮かべたルークは、心の内側で返答する。

(すべて、やりきった。もう、俺ができることは、何も無い)

——それは、お前の心からの、嘘偽りのない言葉か？

(……何が、言いたい？)

——我が認めたる担い手は、そのように敬虔ではない。謙虚でもなければ、潔くもあらまい。

だから、立てと。そう言いたいのだろうか、この声の主は。

この、今にも砕け散りそうな醜い身体を見て、まだ立ち上がれと命じるのか。

ほんの少し、怒りが沸き起こる。

あれだけ必死に走り続けたというのに、何を見ていたのだ。そう叫ぶ力すらなく、ただじつと純白の刃を見つめる。

——使命など、どうでもよい

すると。声は、己が存在意義を否定した。

——竜が求むるは、貪欲なまでの願い。それのみである

それにとつて、来たる未来に約束された使命など、知ったことではないのだ。常に、己が矜持に従い、己が欲望のままに、それは生きていた。

高潔？ そんなものは、人間と他の守護者が勝手に当てはめただけの名声にすぎな

い。

——さあ、叫べ。我が担い手よ。お前の傲慢、その欲望を曝け出すがいい

ならば、その半身に求めるものもまた、同じほどの我欲に他ならない。

どこまでも孤高で、誰一人にも理解されぬほどの、大きすぎる願望。

人はそれを誇りと呼ぶ。しかしソレにとつては、ただの欲なのだ。

——言うがいい。お前を誇るものはいない。憚るような者は、誰もいないのだ

心の芯まで震わせるその声に、徐々に怒りは溶けてゆく。

代わりにその心に満たされていくのは、不思議なほどの納得だった。

(そうだ。俺の願いは、最初から誰にも理解されるものではなかった)

誰かを守りたいということは、最初から同じ場所に立つつもりがないという無理解である。

思い出せば、自分の隣にはいつも、誰一人としていなかったではないか。

二人の弟分も、取り戻しにきた少女も。他の誰もかも、彼に並んではくれなかった。

(あの言葉は、的を射ていたわけだ)

その献身は誰にも理解されないだろう……なるほど、全くの正論だと改めて思う。

……だから、あの女騎士と出会った時。初めて自分が受け入れられるかと思つた。

守る者であつた彼女に、強く惹きつけられた。もしかしたら恋すらしていたかもしれない。

(そんなはずはない)

こんな怪物の心を、誰も受け入れはしない。

ユージオなど比べようもなく。自分は乾いて、飢えていたのだ。
そのことに、ようやく気がついた。

(——なら。もう一回くらい、願ったっていいよな)

誰にも、解らないと言うのなら。

最後の瞬間。天命が底を尽き、塵となるまで、己を貫こう。

右腕に、力を込める。

血の通わない、死にかけて体に散らばったものをかき集めて、魂を震わせる。

硝子がひび割れるように細かな音を立て、深く積み重なった霜が壊れ始めた。そのうち、一際大きな音を立て、腕が自由になる。その手をルークは、己を見下ろす愛剣の刃に添えた。

「……………これは。……………だ……………」

——吠えろ

「おれ、は……………まだ……………」

——吠えろ

「まだ、諦め、られない」

——勇気を、吠えろ

囃し立てるその声に、従うままに。

「あいつらを、ずっと。守って、いたい」

ルークは、願いを口にした。

最後の一句まで聞き届けた刃は、甲高い音で呼応する。

そして、僅かに浮き上がった剣が——躊躇なく、ルークの胸を床まで刺し貫いた。
「か、は……………っ」

不思議と痛みはなかった。

最初からそこに収まっていたかのように、剣は自分の胸にある。

ただ、皮膚を突き破った時の衝撃で少し声を漏らしながら。

震える右手で、刃を掴んだ。

—— 告げよ。お前の望みを果たす、その言葉を

分かっている、と心の中で呟いて。

どンドン感覚が失われていく恐怖に耐えながら、口を開き。いつか、誰かに禁じられたその言葉を、ゆっくりと紡いだ。

「リリー……ス………リコレ……クシヨ……ン」

■
■
■
は、
死
ん
だ。

そ
し
て。



悪夢を見ているようだった。

ソードゴーレム。そう、術者たるアドミニストレータが名付けたその怪物。

その力はあまりに比類ないものであり、パワーもスピードも、全く及ばなかったのだ。

まず最初に、アリスがその胸を貫かれ、真っ赤な血溜まりの中に沈んだ。次にキリトが立ち向かったが、対応できたのはたったの一撃のみ。

あつという間に腹を裂かれ、壁に投げ飛ばされて地面を転がる始末。残されたユージオは、絶望に見舞われ、立ち尽くすことしかできずにいた。

もはや、万事休す。このまま怪物の手で死を迎えるしかないか。

そう思った三人に救いをもたらしたのは、ちつぽけな一匹の小グモ。

ルーリッドの村を出た時から、ずっとキリトたち三人を見守り続けた監視者。名をシャーロットといった。

彼女は、本来の姿を表すとその身を賭して時間を稼ぎ、彼らを救った。

そうする間に、ユージオが残っていた短剣を昇降盤へと突き刺したのだ。

シャーロットは、あっけなくゴーレムに敗れ去り、その身を貫かれた。

白い血の池に沈みながら、最後に共に戦えたことを喜びながら。

静かに、その命を終えたのだ。

だが。彼女の犠牲は、決して無駄ではなかった。

何故なら、再び侵攻を開始したソードゴーレムを、白い雷が打ち据え、止めたのだから。

それは二度、三度と剣の体を叩き、ついには伏せさせてしまう。

瀕死の中、必死に首を回したキリトが見たものは、昇降盤のあった場所に開いた木製の扉と。

そこから姿を現した、幼き賢者カーディナルであった。

ついに長き隠遁を自ら破り、そこへとやってきたカーディナル。

彼女はキリト達の傷を癒し、長き時の中で心を得て、彼らを守ったシャーロットを
労った。

それから、ようやく、やっと。

自らの仇敵と対峙したのだ。

カーディナルは、賢者を見下ろし嘲笑う。彼女が現れるのを待っていたと。

賢者もまた、人の命を平然と弄びながらも人真似をする女神を侮蔑した。

毅然と言いつ返す彼女に、しかし女神はくすりと笑い。

その手を掲げると、密かに練っていた術式を発動させた。

居室を覆う硝子の向こう側が砕け、虚無を露わにする。

その絶大にして強大なる力により、アドミニストレータは現世から己の居室を切り離れたのだ。

それこそが、かつてスワロウと共にカーディナルを取り逃がした彼女が作り上げた檻だった。

絶対の結界を以って、哀れな写し身と反逆者達をついに捕らえたのである。

しかし、それでもキリト達は自分が有利であると信じた。

あちらは一人、こちらは四人。それも一人は彼女と同等の神聖術の使い手である。

彼女がアドミニストレータと全力でぶつかり合い、そのうちに斬りこめば勝機はある。

そう、思っていた。

残酷な真実を聞く、その時までには。

「——その不恰好人形を構成する剣は、整合騎士達から奪った記憶に刻まれた、最愛の人間自身をリソースとして作った！　そういうことじゃな、アドミニストレータよ！」
大きく、怒りに打ち震える声で。

カーディナルが、自分を見下ろす残酷な女神に答えを告げる。

それに、キリトはこの世で最も穢らわしいものを見たかのような嫌悪と侮蔑を抱いた。

そして、カーディナルに与えられた傷を自ら癒し、立ち上がったソードゴーレムを見る。

(あれが……あれが全て、人間だということのか)

黄金に煌めく剣人形。

その正体は、アドレスを切り離されたことで生まれた虚無空間に輝く星々……騎士達の記憶の欠片に秘められた、人間そのもの。

通常、完全に己の一部とする程に心を通じ合わせた武器でしか、完全支配術は、ましてや記憶解放の術は行使できない。

しかし、アドミニストレータは記憶の欠片に未だ使用されていないフラクトライトを当てはめ、擬似的な人格を与え。

そして、剣に変換したその人間自身と共鳴させることで術の制限を超え、この怪物を作り上げたのだ。

同じ考えにたどり着いたユージオとアリスが、呻き声を漏らす。

人を人とも思わぬ——すでに知り得ていたその事実が、より血塗られたものへと様変わりした。

所詮、この女神にとって人は人ではなく。ただの所有物、好き勝手に弄ぶことのでき

る玩具でしかないのだ。

（そうだとしたら。記憶の欠片を与えられたフラクトライト達は、剣にどんな思いを込めたんだ？）

これほどの性能を発揮するには、相応の意思が必要になるはず。

そう考えたキリトに伝えるかのように、アドミニストレータが大きく両腕を広げた。

「欲望よ」

すると、その言葉が耳に入ってくる。

「触りたい。抱きしめたい。自分のものになりたい。そういう醜い欲望が、この剣人形を動かしているの」

恍惚に浸るように、うふふ、うふふ、と笑いながら。

己の傑作を矮小な者達へ見せつけ、女神は告げる。

「騎士達の記憶フラグメントを挿入した、擬似フラクトライトが望むのは一つ——ただ一人記憶している誰かを自分のものになりたい、それだけ」

だが、触れることはできない。一つになることはできない。

狂おしいほどの熱望と飢餓が満たし、成就を阻む眼前の誰かを敵として憎ませる。

どれほどの傷を負つても、何度倒れても。全ての障害を斬り殺し、永遠に戦うのだ。

そんな宿命を定められたものこそが、この鉄塊なのだ、高らかに宣言する。

「どう？　素敵でしょう？　本当に素晴らしいわ……人の欲望というものは！」

その言葉を聞き、ソードゴレムを見て。

奏でられるその共鳴が、悲哀と絶望の慟哭のようにしか、キリトには聞こえなかった。怪物なのではない。あれは何よりも純粹な——純粹に歪んでしまった、迷い子だった。

「……………違う!!　誰かにもう一度会いたい、手で触れたい!　その願いを欲望などという言葉で汚すな!」

カーディナルは、真正面からそれを否と断じた。

「それは——純粹なる愛じゃ!　人間の持つ、最大にして最上の輝き……決して貴様のような者が弄んでいいものではない!」

「同じことよ、おちびさん」

アドミニストレータもまた、それを滑稽と見下してみせる。

「愛は支配……愛は欲望!　それらは表裏一体!　所詮フラクトライトから出力される

信号に過ぎないもの！ 私はただ、最大級の力を発揮するその信号を最も上手く使っただけよ。お前のように、駒を駒として見捨てることもできない軟弱者と違つてね」

そして、と。

これまでの、どこか超越的なものとは違う、攻撃的な色に瞳を染める。

嗜虐的な笑みを浮かべた女神は、最大にして最凶の一言をカーディナルへ放った。

「何よりも重要なのは、この事実を知ったことで、お前には決して人形を破壊できないということ！ なぜならこれは、形を変えただけの生きている人間どもなのだから！」

長く長く、その宣言が残響する。

愕然とそれを聞き届けたキリト達の前で、カーディナルは肩を震わせた。

……掲げられた長杖が、ゆっくりと落ちていく。

まるでその言葉を受け入れるかのような姿に、思わず息を呑んだ。

「ああ……そうじゃな。わしに人は殺せぬ。その制約だけは決して欺けぬ。……二百年の時を費やして術を練り上げてきたが……どうやら無駄だったようじゃ」

カーディナルは、不思議なほど穏やかな声で呟いた。

アドミニストレータのように、この世界を単なるデータの集合体として見れない彼女

は。

そこにある命を、営みを愛してしまった彼女は、決定的に敗北していたのだ。

カーディナルにとっての誇りであり、真の管理者たる所以である愛は……最大の敗因でもあった。

「なんて愚かな……お前はもう、この世界の本当の姿を知っているくせに。書き換え可能なデータでしかないと知った上で、くだらない規則に縛られるとは……滑稽ね」

くすくすと、心底可笑しそうにアドミニストレータが笑いをこぼす。

彼女にとっては何の価値もないそれを大事に抱き続ける様は、笑い草以外の何物でもない。

「いいや、人じゃよ。クイネラ。この世界に生きる人々は、笑い、悲しみ、愛することができる。それは我々が失ってしまった、真の人たる証。それが鉄の箱に入っているように生身の頭に入っているように、何ら変わりはせぬ」

故に、カーディナルは自分の敗北を受け入れていた。

だから。次の言葉は、キリト達にも容易に想像できて。

それを引き裂く、
咆哮が轟いた。

願いを追いかけた者

「……なあに？　今の。せつかく良いところだったのに」

最高の瞬間に水を差され、アドミニストレータは怪訝な顔をする。

それはキリト達も同じことであり、切り離されたこの空間に響いた異音に周囲を見回した。

やはり窓の向こうには宇宙のような暗闇が広がるばかりで、何もありません。

——イイン

「っ——？」

その時。キリトの耳に甲高い音が聞こえてくる。

どこかで聞き覚えのあるそれに、はたと心の中で首を傾げた。

——イイン

「く……」

同じものが、ユージオにも聞こえた。

聞いていると、何か心が透明になっていくような、清涼な音色。

——イイン

「これは……」

当然のように、アリスもまた眉をひそめる。

そこでようやく、音が規則的かつ断続的に響いているのだと三人は理解した。

これは、一体何なのだろうか。

アドミニストレータの攻撃、あるいはカーディナルが密かに自分達に何かを施してい

るのか。

そう思い、賢者と女神の顔をそれぞれ見比べても、彼女達すら不思議そうにするだけ。

誰もが言いようのない不安と疑問を抱く中で、その音は徐々に大きくなっていく。

それに伴い間隔も短くなっていくと、まるで音波攻撃のようになってキリト達は眉根を寄せた。

ついには部屋全体に木霊するような規模に発展すると、音がいくつも折り重なり、思わず耳をふさぐ。

(いったい何なんだこれは！　まるで、音波を利用したソナーみたいな……っ！)

何か止める手立てはないのかと、キリトが考えようとした時。

それまで一度も余裕を崩すことのなかったアドミニストレータが、弾かれたように顔を上げた。

—— イイイイイイイ!!

そして、ついに。

共振が最高潮に達したその瞬間——アドミニストレータの眼前の空間が音を立てて壊れた。

それは彼女が発動した、この部屋の術式にも似た、硝子を粉碎するような激しい音。生み出された、人一人が余裕で通れそうな純白の空間の歪みから——同じ色の殺意が飛んできた。

「ッ——!?!」

歪みに同化するようなその剣を、かろうじて視認した彼女は瞬時に回避する。

即座に背後に引いたにも関わらず、生きてるように蠢いたそれは軌道を変えて彼女の頬を掠めた。

直後、完璧な美貌に一筋の赤い線が生まれる。彼女はそれをグリーンと瞳を回して睨んだ。

しかし、それに怒りの声を上げるよりも早く、十字に振るわれた刃によつて歪みが切

り裂かれた。

更にけたたましい音で、歪みが大幅にその規模を広げる。

ソードゴレムすら余裕で入れるだろうそこに、ゆつくりと刃が引いていき、中へ消えた。

「キリト、あれは!?!」

「俺も知るか! 何だ一体……!?!」

「今のは剣……いいえ、何かの尾の先端……?」

口々に疑問を叫ぶ三人。

突然の異変に理解が追いつかず、狼狽える彼らの前で——カーディナルが食い入るように歪みを見た。

おおよそ人のものではない、機械的な輝きを仄かに放つその瞳が、歪みを解析する。

「馬鹿な……」

「カーディナル?」

「完全にアドレスを切り離されたこの空間に、無理やりパスを繋げたじゃと? ありえぬ。そんな権限を、我々以外の誰が……!」

焦りと驚きの入り混じった彼女の台詞に、今度はキリトが驚いた。

まるで、カーディナルシステムを取り込んだクイネラと、リセリスと呼ばれていた彼女と同等の権限を有する存在がいるかのような口ぶりだ。

確かにありえない。メインプロセスとサブプロセスがここに揃っている以上、他に空間を操作できるような神の如き者はいないはずである。

一瞬、この世界のメンタルヘルスケアAIたるスワロウを思い浮かべた。

だが、彼であるならばカーディナルがここまで狼狽し、あそこでアドミニストレータが歪みを不審げに睨んでいる説明がつかない。

そんな彼らに答えを示すように、歪みに変化が起こった。

内側から、刃とは違うものが出現する。

それは白い鱗と、水晶のような4本の鉤爪を持った何かの生物の腕だった。

息を呑むキリト達の前でその腕が歪みの縁を掴み取り、更にもう一方の腕が現れる。

両の腕を用いて、出口である歪みを捉えたそれは、ゆつくりと全貌を現した。

「な……い」

その姿に、キリトが漏れ出たように声を上げる。

最初に現れたのは、尖った鼻先。腕と同じく硬質な白鱗に包まれた、細長い口が露わになる。

鋭い牙の並ぶその次には、アリスの鎧よりも鮮烈な黄金の、青い光彩を湛えた瞳が出現した。

両目の上には、四本で二対の雄々しい角が後ろへ向けて伸びている。その頭に繋がるのは太くて長い首だ。

それからはあつさりとしたもので、一気に白と淡い青色の鱗に包まれた流麗な胴体や翼が現出していった。

最後に、歪みに後ろの右脚をかけて。ソレは己を引つ張り出す。

遠目にも巨大な体が、真つ直ぐに赤絨毯の敷き詰められた床へと落ちる。

見た目に見合う重量で振動を発生させ、キリト達はよろめいた。

落下の衝撃を十分に緩和すると、硬直していた、胴体より長い尻尾がゆらりと揺らめく。

そして。キリト達四人と、ソードゴーレムを従えたアドミニストレータの間に立ったソレは。

グルルルルル……

ゆつくりと顔を上げ——女神に対して、低いうなり声をあげた。

「りゅ、竜!？」

「ただの竜ではありません！ 飛竜よりもっと巨大で、強大な……！」

ユージオとアリスが、体高八メルはあろうかという背中に驚嘆する。

今まで見たこともない美しい剛体からは、凄まじいまでの覇気が溢れ出ていた。

同じように、その白い竜を凝視したキリトは。ようやく、あの音の正体を思い出していた。

（そうだ。あの音は。ライオス達と戦っている時、あいつがやって来た時に。そして、死んだあいつを霜が包み込んだ時に聞いた——！）

自分の思考が導き出した答えに、ソードゴーレムの正体を知った時に匹敵する戦慄が

迸る。

そして、ゆっくりともう一度白い竜のことを観察した。

今まで彼が多くのVRMMOで戦って来たドラゴン型モンスターと比べ、やや小柄な体躯。

その身体構造は、完全な竜のそれではなく、人の体に変化して巨大化したように見えた。

次に目につくのは、竜の頭部の双角の間に生える、長くて美しい体毛。

人間における毛髪に相当する位置にあるそれは——限りなく白に近い、灰色。

(——まさ、か)

そして、最後に。

その全身をくまなく見渡したキリトは、竜の片腕の手首にあるものを発見した。

四つの花卉を持った、赤い宝石の飾り物。

表面がひび割れ、今にも天命が尽きて消失してしまいそうな小さな花が、鱗の間に挟まっている。

キリトはそれを知っていた。

いつも「彼」が肌身離さず身につけ、大切にしていた、大事な人からの贈り物を。

(まさか。まさか、まさか！)

疑問は確信に変わり、確信は驚きと恐怖に変わる。

体の中に留めておくにはあまりに恐ろしくて、喘ぐように、吐き出すように。

「ルー……………ク。なの、か？」

その名前を、口にした。



それを聞いた瞬間、ユージオとアリスが凄まじい速度で振り向いてくる。

見たことのない、この世で最も恐ろしい真実を知った時のような驚愕の表情。

しかしそれは、キリト自身が彼らよりもっと深く浮かべている表情だった。

「キリト……今、なんて言ったんだい？」

「お前は……今、あれが、誰だと。何者だと、言ったのですか？」

詰問するように、確かめるように、二人は問いかける。

戦慄く唇や睫毛が、それを信じたくないことを如実に表していた。

キリトは答えようとして、けれど、二度もその名前を口にすることが、どうしてもできなかつた。

「……………なるほど、の。そういう、ことじゃったか」

代わるように呟かれた言葉に、三人は振り返る。

歪みから竜に視線を移していたカーディナルは、悲痛そうな面持ちをしている。まるで、大事なものが壊れてしまい、それを心から悲しんでいるかのような、そんな顔。

彼女が再三言っていたような、世界を調律するプログラムらしからぬ悲哀に満ちたものだった。

「カーディナル。一体何がわかったんだ。あの竜は……あいつは、どうしてあんな姿に？」

未だに信じきれない二人の分まで代弁して、キリトが恐る恐る問いかける。

振り返った賢者は、悲しみの表情を消し去り、静かな声で返答を提示した。

「キリトよ。その答えは、もうお主も知っているはずじゃ」

「もう知っている……?」

鸚鵡返しするキリトに、ヒントを与えるように彼女はあるものへ視線をよこす。

一瞬そのブラウンの瞳が向けられたのは……アドミニストレータを守護するように立つ剣人形。

どういふことだと言おうとして——次の瞬間、キリトは雷に打たれたような衝撃を受

けた。

あらゆる情報と記憶が、五秒にも満たない時間でキリトの中で統合されていく。そこから算出され、分析と取捨選択を繰り返し、一つの限りなく正しい答えを導き出した。

（記憶、解放術。剣と一体になり、強い思いを込めて解放した神器の力を、さらに一段階上へと昇華する奥義）

この場で、おそらくは自分だけが未だに発動したことのない、最高峰の術式の一つ。またそれは、人を捨て去った女神アドミニストレータが、醜くも恐ろしい剣人形を操る術でもある。

疑似人格に接続されている、剣人形の本来の姿である人間達は——彼女の術により、剣に変換されたのだ。

「……………フラクトライトの、心的パターンの完全一致」

「そうじゃ。あれは……………あの竜は」

カーディナルは、一度言葉を切り。

そして、キリト達を。自分をも守るように立ちふさがったその竜を見上げた。

「守護竜のフラクトライトの感情パターンを完全に、コンマ一つの誤差もなく一致させ、記憶解放術によりその姿を変えた——お主らの友、ルークじや」

告げられた真実に、愕然とする。

キリトも、ユージオも、アリスも。賢者の言葉に打ちのめされるようだった。

「嘘、ですよね……?」

「……ユージオ?」

「ただの冗談なんですよね? 僕達を、からかっている……だけ、なんですよね……?」

「残念ながら、ほぼ確実な事実じや。あれは紛れもなく、かつてルークだったもの。今はまだ生まれたての、竜の幼体じやよ」

そして今は、もうルークではないのだろう。

全ての記憶、感情、人格を失い。ただ守護する者として生まれ変わった、新たな白い竜。

人界を守護する、聖なる四柱の真竜の一角——カーディナルの話を思い返し、キリトは歪めた顔を伏せる。

きつぱりと断言されたユージオは、ぐつと震える拳を握りしめ、黙って俯いた。

何も反論が思いつかない。人界一……いや、この世界一の智者の憶測を崩す言葉が、何も無い。

何よりも。ユージオの中にある、彼の思い出が、その有りようが、肯定してしまう。

(でも、でも。そうだとしたら、あんなに頑張ったルークの心は……魂は、報われないじゃないか！)

何もかもを忘れ、その魂さえも消し去られて、別物になってしまったら。

それはきつと、整合騎士と同じほどに——あまりに救いのない、終わりではないか。

「……………か、もの」

「アリス？」

ふと聞こえた、聞き逃してしまいそうなほど小さな呟きに、キリトはそちらを見る。床を見ていたユージオも顔を上げ、振り向いて——はらはらと左目から涙を流すアリスに、目を見張った。

「馬鹿、もの。本当に、お前は、馬鹿者、です。そんなことを、したら……誰も、誰もお前を、ルークだと……分らないではないですか」

ぎゅつと、その手が青いドレスの裾をきつく握りしめる。

嗚咽をこらえているのか、下唇を噛んだ口元からは吃逆が漏れ出ていた。

細い金の眉を歪に歪めて、青い瞳を濡らした彼女は、心からの悲壮に従うままに泣いていた。

「どうして……どうしていつも、貴方は一人で………なんでよ、ルーク兄さん………」

彼女の口から紡がれた名前に、キリトとユージオはハツとする。

ルーク兄さん。アリスは今、そう口にした。

勿論、彼女とルークが実は兄妹だったなどという事実は存在していない。

それはむしろ、本当の家族のように慕う相手に対する愛称のようなものだろう。ユージオは昔、まだ五、六才の頃に彼女がルークをそう呼んでいたことをはつきりと覚えていた。

(だが、ありえない。今のアリスは記憶の欠片を抜き取られ、モジュールによって記憶を封じられているはずだ。セルカの名前を聞いた時も、過去の記憶を鮮明に取り戻しはしなかった)

ならばこれはどうしたことかと、キリトは考える。

考えられるのは……記憶や人格が別物であろうと、魂に強く染み付いたものが露出した、という可能性。

実の妹のセルカのように、アドミニストレータの枷を超越するほどの親愛を、きつとルークに抱いていたのだ。

自分のその予想を、キリトは何故かあつさりど確信することができた。

「ああなつてしまつては、もう元には戻らんじやろう。彼奴の鉄人形と同じく、フラクトライトに刻まれた思いを果たす為だけに戦う存在よ」

なおも突きつけるように言葉を投げかけるのは、カーディナルなりの誠意だろうか？

だが、三人の表情は当然のように明るくなることはなかった。

「——ふうん。そう、そういうこと」

その瞬間、頭上から響いた声に一瞬で意識が引き上げられる。

四人が空中へ視線を戻すと、ルークだった竜を見ていたアドミニストレータが何かに納得していた。

カーディナル同様、竜を解析していた彼女は、ふむとおとがいに指を当てる。

「確かに、あの忌々しい守護竜なら私の術に介入することも可能ね。カーディナルシステムほどでないにせよ、その次くらいには高い権限を持っているのだもの」

説明するように言う彼女に、キリト達はそういうことかと理解する。

今のルークは、『白竜の剣』と一体化することで守護竜の肉体のみならず、権限も受け継いだのだ。

予想外に強大な戦力の登場に、しかしアドミニストレータは微笑みを崩さない。

「でも、だからどうしたというの？ 生まれたばかりの竜のなり損ないが、私と対等だとも？ それとも、こんなところまでわざわざ殺されにきたのかしら？」

ガシャン！ と大きな音を立て、ソードゴーレムが一步踏み込む。

最悪の兵器の再起動に、キリト達三人が反射的に剣を向けた。

人形は紫の双眸を輝かせ、闇のオーラを全身の刃に纏いながら、白い竜の前に屹立する。

「いくら奴らの権限と中途半端に再現した肉体があつたって、私の人形を倒せはしないわ」

絶対の確信を持つて言うアドミニストレータに、剣人形が呼応したように震える。

身の毛のよだつその咆哮に、されど、白い竜の体は微動だにしなかった。

その代わりに、人の身など容易く噛み砕けるだろう大きな口をガパリと開き。

ギユラアアアアアアアアッ!!!

戦意に満ちた雄叫びを、高らかに上げた。



翼を広げ、白い竜が文字通りソードゴーレムへ飛びかかる。

ソードゴーレムも刃の四本足で地面に火花を散らしながら、猛然と突っ込んでいった。

ギユラアアツ!!

一瞬早く肉薄した白い竜が、鋼よりも硬い鉤爪で一撃を加える。

即座に反応したソードゴーレムは腕で防ぐも、カーディナルの術以外では微動だにしない。なかつた体を傾かせた。

それだけで白い竜がソードゴーレムに匹敵する、あるいは格上の脅力を持っているこ

とが伺える。

「そのなり損ないを始末しなさい！」

アドミニストレータの命令に従い、ソードゴーレムは反撃を開始した。

二十度ほど左に傾いた体を四本の足で巧みに支え、鋭い一撃を白い竜に見舞う。

長い首を屈めた竜は毛の幾許かを切断されるに留め、渾身の頭突きを食らわせた。

再びよろめいたソードゴーレム。だが、押し倒すことはできず、高速開閉した肋骨の剣で顔の鱗を削られる。

オオオオオオツ！

ギユラアアツ！

雄叫びを上げ、凄まじい音と振動を起こしながら戦う様はさながら怪獣大合戦。

女神の生み出した殺戮兵器と、願いの力で己が身を昇華させた竜が、正面からぶつかり合う。

「つとと!?!」　なあ、カーディナル！　これはどうなるんだ!?!」

戦鬨の余波で転びかけたキリトが、なんとか持ち直しながら叫ぶ。

術で僅かに地面から浮かんだカーディナルは、難しげに幼い顔を変化させた。

「分からぬ。本来であれば、神器級の剣が三十本……その素材とされた三百人分の天命プライオリティと優先度を持つ怪物に、たった一人で敵う道理は無い」

「そんな……！　じゃあルークは！」

「が、わしですらこの戦いばかりは決着の行く末が予測できぬ」

悲痛に叫んだユージオにかぶりを振って、賢者は剣人形と取っ組み合っているそれを見やる。

「なにせあやつは、不完全とはいええ、たった一匹でダークテリトリーの侵攻を三百年以上防ぎ続けた、白き竜になったのじゃからな」

その言葉に三人は目を見開き、白い竜へと願うように視線を送った。

カーディナルの予想通り、ソードゴーレムは圧倒的優勢を失っていた。

白い竜の苛烈なまでの攻撃性と、無機物故に自身には不可能な動きで翻弄されている。

ギユラアア！

大きく腕の一方を弾かれたソードゴーレムに、白い竜は尾を振るった。

強靱でしなやかな太尾が剣の胴体を打ち据え、更には先端に生えた《白竜の剣》に酷似した棘が傷を作る。

二段階の強烈な攻撃によって、剣人形は一步後ろへたたらを踏んだ。

その隙を見逃さず、正面に体を戻した白い竜は野生的なタツクルをお見舞いする。甲高い音で鱗に包まれた体と剣の体が衝突し、一種の衝撃波が発生した。

ギユラアアアア！

さしもの白い竜も反動で数歩後退し、苛立ったように咆哮した。

一方で、痛みといったものが存在しないソードゴーレムは二本の腕を使って即座に立ち上がる。

そして、お返しと言わんばかりに竜巻のような勢いで体を回転させ、腕を一閃した。

ギユガアツ！！

寸前で気がついた白い竜は、しっかりと見定めて両手でその腕を掴み取る。

ギリギリと鈍い音がソードゴールの関節から鳴り、剣腕を押し込もうとした。掌から黄金の血を垂れ流しながらも、白い竜がそれを押し返す。

ギユリアアアア！

すると、白い竜は驚くべき行動に出た。

両足を床がひび割れるほど力ませたかと思うと、全身を使って剣腕に力を流す。

そして、一際大きな鳴き声と共にその身を持ち上げてしまったのだ。

「なっ——!?!」

「嘘でしょう——!?!」

「ちよ、おい、あいつこつちに振りかぶって——!」

「三人とも、避けるのじゃっ!」

ギユラ、アアアアッ!

浮き上がったソードゴーレムを、白い竜は狙いも定めず投げ飛ばす。

奇しくもそれはキリト達の方角で、飛んできた鉄塊に慌てて四人はその場から退避した。

一際盛大な地響きを立て、居室を取り囲む柱の一つを破壊しながら剣人形が墜落する。

「……………へえ。中々やるじゃない」

濛々と立ち上る土煙に、アドミニストレータが少しだけ興味深げに呟いた。

その視線の先で、誇るようにまた雄叫びを上げた白い竜は、ずんずんとソードゴーレムに近づいていく。

——オオオオオオオツ！

途端、全身を震わせて叫んだソードゴーレムが土煙を突っ切って現れた。

粉塵を切り裂いて突き出した、超高速の腕は竜の頭部を狙っている。

白い竜は首を捻って回避し、だが完全には避けきれず、左肩に剣腕が深く埋まった。

ギユラアアア!!

それまでより高い声が、白い竜の口から発せられる。

悲鳴にも似たそれで空間を叩き、後退した竜に向けてソードゴーレムは前進した。

咄嗟に右腕で掴むも、片腕だけではソードゴーレムのパワーに抗いきれずに押されていく。

まるで鏡合わせをしたように、今度は彼の方が強く壁に叩きつけられた。

再び振動が居室を震わせ、竜は少量の血を吐き出す。

ギャガアアアア!!

オオオオオオオツ!

憤怒が色濃く反映された雄叫びが、二つ重なった。

ソードゴレムがトドメを指すためにもう一方の剣腕を振るえば、竜は尾の剣で弾いた。

そして人形の頭部分に頭突きをお見舞いすると、密着していた体を引き剥がす。

同時に肩の剣も引き抜かれ、両者はよろめきながらも倒れることはなかった。

そうして、互いを睨みつけ。

ギユラアアアアアアア!!

オオオオオオオ!!

また、殺し合った。

御魂斬り

白い竜とソードゴーレムの戦いは熾烈を極めるものだった。

歪められた愛の為に戦う怪物と、たった一つ残った願いのために戦う守護者。

想いの強さは到底比較できるようなものではなく、どちらも相手に決して劣らない。その強烈なまでの意志力が、本来の数値的な差を覆していた。

……だが、やがてそれも崩れ始める。

その所以は、生物ユニットと非生物ユニットという真逆の性質にあった。

白い竜は、いかに強靱な外殻や爪を持っていようとも、それは血の通った肉体だ。痛みもあれば疲労もある。

対して、全くの痛覚も恐怖も持たず、ただ殺戮を遂行しようとするソードゴーレムは

非常に強靱だった。

オオオオオオ………！

ギユラアアア!!

徐々に、白い竜が傷を負う回数が増えていく。

その怒りに駆られて攻撃を返しても、戦いながら受けた傷を修復できる剣人形は一顧だにしない。

それどころか、徐々に白い竜の動きに対応し、動きを効率化する様子を見せ始めた。歪んでいても、元は経験から成長する人間らしいと言うべきか。なんとも皮肉な事実だ。

「く………！ やはり抗しきれぬか………！」

劣勢になり始めた白い竜に、カーディナルが苦言を零す。

白い竜がソードゴレムを抑えているうちにアドミニストレータを狙おうとしていた彼女は、両者の戦いが激しすぎて機会を見出せないでいた。

ならば、いつそ戦いを最後まで静観しようと、居室中を暴れまわる二体からキリト達

と共に逃げ回っていたのだが。

「このままじゃ、あいつがやられちまう……!」

「いけませんキリト! 今のルークは気性が荒くなっている! 割り込めば命を落としかねない!」

「じゃあ見捨てろって言うのか!」

「そうは言っていないでしょう……!」

ソードゴーレムの脅威性と、敵味方の区別がつか分からない白い竜に、キリトとアリスが口論を交わす。

互いに彼を助けたい気持ちは同じなれど、何度もそのやり取りをしまっていた。

そんな彼らを見て、ユージオも悔しげに口元を歪める。

(僕は……僕は、なんて無力なんだ)

何も、正しいことをできなかった。

エルドリエの時も、デュソルバートやファナティオ、アリス、そしてチュデルキンと

戦った時でさえ。

自分はずっとキリトの背に隠れ、引つ張られていただけ。ベルクーリとの戦いでさえ、勝ったとは言い切れない。

あまつさえ、アドミニストレータの甘言に惑わされ、何より大切な彼らに剣を向けてしまった。

ルークを、斬ってしまった。

彼は命がけで、自分の心を救おうとしてくれたのに。あの時も、今までも、ずっと。

あまりの非力さに、絶望さえ感じてしまう。

(みんな、僕のアリスを取り戻したいという願いのためにここまで来てくれたのに。本当は、誰より僕が前に立って戦い、傷つくべきなのに)

現実はどうだ。

なんとか正気を取り戻しても、アドミニストレータに一撃加えることさえ満足にできなかった。

そして今、目の前でまた自分達のために戦っている、大切な幼馴染をあの哀しき怪物に殺させるのか。

あの天井画のどこかに埋まっているはずの、アリスの記憶も取り戻せないまま、立ち尽くしたままか。

何も成せないまま、最後まで無力なまま。絶望の中で、旅を終えるのか？

果てしない暗闇が、思考を閉ざしていく。

そのうち、ユージオは考えることをやめて、目を閉じ――

ギユラアアアア!!

それを止めたのは、友の叫びだった。

ハツと顔を上げ、ソードゴーレムと戦っている白い竜を見る。

彼は、どれだけその体に傷を負い、痛みを味わおうとも、決して戦いをやめる素振りがない。

いつもそうだったように。どれだけ自分を忘れても、魂に刻み込まれた不屈さを失っ

ていない。

——僕は。何を、諦めようとしていた？)

何があろうと、絶対に諦めないその姿が。

ユージオに一筋の涙と共に、昏く沈んだ心へ白い光をもたらした。

(まだ、何もやってない。キリトのように戦い抜いていない。アリスのように、絶対の存在に反抗する恐怖に打ち勝っていない。ルークのように、自分の願いを貫いていない！)

自分の大切な人達は、最後の最後まで足掻こうとしているのに。

その中で、自分だけがあっさり諦めるなど、そんなことが許されていいはずがない。ユージオは、罪深い諦観を受け入れようとした自分の弱気を、これまでの人生で一番に恥じた。

(やらなくちゃ。何か、僕にできることを！)

このままルークが殺されてしまえば、本当に彼の魂はあらゆる名誉を失ってしまう。自分達が屈すれば、アドミニストレータは人界の民の半分——四万もの民を、あの怪物へと変える。

それだけは阻止しなくてはいけない。この悲劇を止めることこそが、まだ自分がここに立っている理由なのだ。

ユージオは、考えた。

キリトやアリスのように、卓越した剣技はない。カーディナルのような術も学んでいない。

あるのはただ、最後の使命を果たそうという、このちっぽけな勇氣だけだ。

(アドミニストレータには、金属の武器は防がれる。僕の剣は半分が氷だから突破できるかもしれないけど、闇雲に斬りかかっても神聖術で消し炭にされるだけだ)

たとえ記憶解放術を使っても、あの女神を数秒止めるだけで終わるだろう。

それより先に、今にも親友を殺してしまいたいようなあのソードゴーレムを止めなくてはならない。

だが、明確な弱点は胸に収まっている紫の水晶体……自分の頭に刺さっていたモジュールのみ。

それを破壊するには、僅か一センチの隙間に、肋骨の刃を掻い潜って正確に一撃を叩き込まねばならない。

それにはアドミニストレータやカーディナルのような、空を飛ぶ力が要る。
神器級の力を誇るソードゴーレムの刃を跳ね返す、強固な鎧も。

（ああっ、いっそ剣の元となった青薔薇と永久氷のように、この体を固い氷に変えて、真に剣と一体になればっ！）

かつて北の山脈の頂上で共に寄り添い、一つになった二つの命。

図書館で垣間見たその記憶を思い浮かべ——瞬間。ユージオに天啓が舞い降りた。

自分は、その方法を知っている。なぜなら今、目の前に実例が二つもあるのだから。

しかし、それを実現するには自分だけでは足りない。あのソードゴーレムに対抗する奇跡——意思の力が必要だ。

——ユージオ……………

その時。不意に、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた気がした。

自然と、天井を見上げる。

巨大な天蓋には、中心部分に空いた丸穴を覗き、三女神を描いた絵が描かれている。人界の空と大地を創り、太陽の光をもたらす神々。やがてそこで生まれた人々の中に、一人の巫女が見出される。

神々の代行者として人界を導く役割を与えられ、教会と白亜の塔が築かれる——かつて読んだ、偽りの創世記。

その隅に、一匹の鳥がいた。麦の穂を一つ啜え、懸命に空を飛んでいる。

央都周辺、大貴族の領地たるそこから麦を持ち出し、辺境にもたらして命を終えた青い小鳥の物語。

その小鳥の目に嵌められた水晶が、キラリと輝きをユージオに見せつける。

その碧い輝きは、ずっと昔、ユージオの隣にあった、金髪の女の子の目にあつたもの

と同じ――

――ああ、そうか。これが、僕の運命か)

そして。

ユージオは、自らの運命さだめを知った。

ゆつくりと、天井に向けていた顔を下ろす。

そして、隣で打開策を練ろうと難しい顔をしている賢者を見て。

「カーディナルさん。一つ、お願いがあります」

振り返ったカーディナルは、怪訝そうに眉をひそめていた。

だが、ユージオの瞳の中にある光を見ると眉間の皺を解き、静かな口調で問いかける。

「なんじゃ、ユージオ？」

「僕は今、ようやく自分の使命を悟りました。それを叶えるために、どうか力を貸してく

ださい」

「ユージオ、お前何を……」

思わず口を出したキリトに、ユージオは柔らかなく微笑んだ。

それからすぐに瞳を賢者に戻して、胸に手を当て——その言葉を告げる。

「僕を——僕のこの体を、剣に変えてください。あの竜と……親友と、同じように」



「ユージオ……そなた……」

さしものカーディナルですら予想し得なかったのか、その瞳を大きく見開く。

ユージオは変わらず、落ち着き払った声音で彼女に願いを言い募った。

「ここで逃げたら、僕はたとえ生まれ変わった後でもルークに顔向けできない。彼をこれ以上、戦わせちゃいけないんです。それに、このままでは人界の半分があの人形に変わられてしまう。それだけは、絶対に見過ごせない」

「……………わかつておるのか？ 術を使えば、お主はもう二度と戻れないかもしれんぞ」
「それが、僕に与えられた報いならば」

覚悟を決めた顔で、ユージオはカーディナルの前へと跪く。

その姿に少しの間黙考し、やがて賢者は小さな手を彼の方へ伸ばした。

差し出された手に自分の両手を重ね、そつと包み込んで。

ユージオは、その術式を口にした。

「システム・コール。リムーブ・コア・プロテクション」

三つの言葉が紡がれた時、ユージオの額に極小の文字が羅列された四角い穴が出現した。

そこから光のラインが頬に伝い、肩、腕、そして繋いだ手の指先へと流れていく。

一種の幻想的な光景に、制止も忘れてキリトとアリスは見入ってしまった。

(リムーブ・コア・プロテクション
心理防壁全解除……………フラクトライトの操作権を、自分で開示したのか?)

それはおそらく、心や記憶、感情といった全てのデータに干渉を許すコマンドだろう。何故そんなものを、と思っていると、不意にユージオがこちらを向く。

「そうだ。これが最後かもしれないから、二人に伝えておかないと。最高司祭に金属の武器は通じない。だから僕は、短剣を最後まで刺せなかったんだ」

「……ユージオ。ダメだ。お前まで、そんなことをしたら……」

彼までもが人を捨ててしまえば、もうその願いを果たすことはできなくなる。

八年もの間ユージオとルークが夢見てきた、アリスとの再会、そして帰郷。

たとえ、戦いに勝ち、生き残ったとしても。原初の願いを叶えられなければ意味がない。

既にルークが元に戻れない以上、ユージオまでも失うのは、キリトには納得できなかった。

「いいんだ、キリト。これが、僕の為すべきことなんだ」

「……………」

だが。ユージオの決意を秘めた瞳に、作りかけた言葉は崩れてしまった。

命を失う恐れに足を止め、友を救いに行くことすらできない自分に、これ以上なにか
言えよう。

俯いてしまったキリトの隣で、じつと話を聞いていたアリスは悲痛と敬意を込めた目
を向けた。

そして、静かに頭を下げる。

「……ごめんよ、アリス」

言葉はなく、しかしその行いが彼女の心を全て伝えてくれた。

「……………本当に、良いのじゃない」

「——はい。お願いします」

「よかろう。では、お主の勇氣に応え、この恐るべき術式を使う覚悟を、わしも決めよう
！」

カツと目を見開いたカーディナルは、ついにその術式を行使した。

ユージオの体に繋がった光の回路が、眩く輝く。

広間全体を照らし出すその光に、戦いを観賞していたアドミニストレータが素早く振
り返った。

そして、忌々しい小娘と人間の小僧が何かをしようとしているのを見て、不快げに顔を歪める。

「一体なにをしているのかしら。無粋な真似は——止してもらいましょうか!」

体ごと振り返った彼女は、虚空を握るように右手を動かす。

どこからともなく光の粒子が寄り集まり、一本の芸術品じみたレイピアへと姿を変えた。

彼女にとっての剣であり、術を行使するための最高峰の杖であるそれを反逆者達に振り下ろす。

細い切っ先に紫と黒の入り混じる雷が生成され、ユージオ達に向かって真つ直ぐに降り注いだ。

「させない!」

邪魔はさせるものかと、アリスが間に割り込む。

鋭い音で《金木犀の剣》を抜くと、ほとんど残っていない天命値を使って武装支配術を行使した。

黄金の刀身が幾千の花弁へと変形し、盾となってアドミニストレータの雷を受け止める。

「ぐっ………はあああッ!!」

裂帛の叫びを上げ、自分の天命を一瞬で刈り取るであろうその雷を打ち消した。

白煙が漂い、重々しい音で握った柄を下ろしながら、騎士アリスは女神を睨めあげる。

「私に雷撃は効かない！」

「騎士人形風情が生意気な……じゃあ、これはどうかしら！」

苛立たしげに嗤ったアドミニストレータが、新たに術式を組み上げる。

本来の限界を大幅に超えた三十もの炎の球が彼女の手の中で生成され、一つに収束する。

小さな太陽のような炎球が、二人を守るアリスへと投擲された。

「アリスっ！」

「っ……っ！」

炎は、恐るべき攻撃力を誇る《金木犀の剣》の武装支配術の唯一の弱点。

だが、少女騎士は怯むどころか戦意を体に纏い、火焰に向けて一步踏み出した。

迫り来る熱に指揮棒のように柄を振るうと、無数の小刃を大きな盾状に整列させる。

「燃えてしまいなさい、哀れなお人形さん！」

「来るがいい——！」

そして、ついに眼前までやってきた大火球へ、アリスは己の剣を振るった。

一瞬の静寂。

後に、熱と金属が弾けるような音が広間中に大きく木霊する。

アリスとアドミニストレータのちようど中間で衝突した火球と小刃は、凄まじい音でせめぎ合った。

その熱波と衝撃は広間全体を包み込むほどで、キリトは袖で露出した自分の顔を庇う。

術者であるアドミニストレータ自身でも予想外の威力なのか、対空したまま一メートルほど後退した。

揉み合っていた白い竜とソードゴレムでさえ、あまりの影響に動きを止める。

やがて、有り余る推進力の矛先を封じられた大火球が膨脹を始めた。

最悪の結果を想像させるその変化に、アリスは自分の身の回りにある小刃すら全てつぎ込んで防御を固める。

それは最良の判断で、直後に一度収縮して、それから大爆発を起こした大火球の熱を受け止めた。

広間全体を叩きつけるほどの膨大な熱さが、何十秒と続く。

ここがカセドラルでなければ、壁も床も融解したであろう超高熱は、徐々にその力を失っていた。

一分も過ぎた頃に、ようやく完全に消え失せ、身を固めていた者達は腕を下ろす。

ガシャン、と大きな音が鳴った。

キリトの目の前で、ゆっくりとアリスの体が床へと倒れ込んでいく。

激しい音を立て、仰向けに倒れた彼女は、三人を守る代償に大きな傷を負っていた。

その衣服や美しい金髪は焼け焦げ、鎧も半壊している。手元に転がった《金木犀の剣》も、限界を迎えたように元の形に戻った。

「まったく、手間をかけさせてくれたわね」

「アリス！」

思わずキリトが駆け寄ろうとした、その時だった。

眩い光が溢れ、広間を染め上げる。

キリトも、得意げに笑っていたアドミニストレータも、思わず顔を顰めて動きを止めた。

その中で、ついにアリスの稼いだ時間で術式を完成させたユージオが、宙へと浮き上がる。

その体から力が抜けていき、肌の上を走っていた紫の線が体を離れていく。

分裂し、増殖したラインは十字の箱を作り上げ、その中にユージオを閉じ込めた。

「小癩な——ッ!？」

ギユラアアア!!

即座に止めようとしたアドミニストレータは、ふっと自分に迫る影に気付いた。

振り返れば、こちらに向かって投げ飛ばされたソードゴーレムが迫ってくる。

「くっ!」

自分の兵器を破壊するわけにもいかず、高速で身を翻すと鉄人形をやり過ごした。

ハツとした時にはもう遅い。彼がその身を作り変えるには、その僅かな時間で十分だった。

ユージオの体が、光の帯となって解けていく。

天井まで伸びたそれは、小鳥の目の部分に嵌め込まれていた結晶を滑らかに抜き出した。た。

一人で鞘から飛び出した《青薔薇の剣》と結晶、そしてユージオの体が一直線に並ぶ。

その光景に、キリトは見惚れながらもあることに気がついた。

(あの結晶は……もしかして、アリスの記憶の欠片………う?)

整合騎士の人数は三十一。そしてソードゴーレムの体を作る剣の数は三十本。

ならば、剣人形に共鳴せず、こうしてユージオに力を貸すあの結晶はアリスのものに他ならない。

その中にあるのはセルカとの思い出だとキリトは思っていたのだが、これまでの反応を見るにおそらくそうではない。

そんなキリトの疑問に答えることなく、いよいよ術式が本領を發揮する。

光の棺に閉じ込められたユージオの体が透き通り、その胸の中央に、同じく実体を失った《青薔薇の劍》が融合した。

再び強烈な閃光が発せられ、キリトは思わず目を細める。

薄まった視界の中で、無数の光のリボンとなつて解けたユージオの体はその形を変えていった。

バラバラになつたその体が、再び凝縮した時。

そこにあつたのは、青いほどに純白の刃と十字の鏢を持つ、一振りの劍だった。

元のユージオの体よりも長く、幅広い大剣は、完璧な流線美を備えている。

唯一の欠点に見えた刀身の穴に、浮遊していた結晶がカチリとはまり込んだ。

美しく荘厳なその剣に、カーディナルが手を伸ばして。

「リリース……リコレクション」

きいいいん!! と鋭い音を奏で、アリスの記憶の欠片を閉じ込めた結晶が輝いた。寄り添うように、ユージオだった純白の剣も清涼な音を鳴らしながら浮かび上がっていく。

ついに、ユージオは。

その身を鍛えられ、愛によって力を持った、剣へと変貌した――。



「おのれリセリス……っ！ 余計な真似を……っ！」

眩いばかりの輝きに、厭うように顔を背けながらアドミニストレータは奥歯を噛みしめる。

その一方で、キリトとカーディナルは燐光を放つ大剣の壮麗で純粋な輝きに見惚れていた。

「美しい……人の愛……そして意志の力が放つ光……ああ、なんて美しい……」
その口から呟かれた言葉に、キリトは彼女を見る。

ユージオだった剣を見上げる瞳には、感動と、慈しみと、愛が溢れていた。

やはり彼女は、ただ機械的にアドミニストレータの消滅を望み、この世界を無慈悲に初期化する存在ではない。

人々に、そこに育まれるものに愛を抱き、だからこそここに立っているのだと、キリトは認識を改めた。

（この戦いが終わったら、もう一度話し合おう。最終負荷実験をなんとか回避して、彼女にこの世界をリセットするという選択を放棄させるんだ）

新たに決意を固めながら、親友の勇姿を再び見上げる。

くるくると回転した白い大剣は、翼を広げるように光を放出すると飛翔した。

そして、今まさに傷口を抑えながらも立ち上がった、同じ色をした竜の元へとやっていく。

ギユウ………？

目の前に音もなく現れた剣に、白い竜は不思議そうに鳴き声を漏らした。

深い知性のない黄金の瞳に、咄嗟にキリトは声を張り上げる。

「それを使い、ルーク！ ユージオと一緒に、あの怪物を倒すんだ！」

見ているだけだった自分が、唯一できることだと、名一杯に叫んだ。

白い竜の目が、キリトの方を一瞥する。

それから剣へと視線を移して、しばしの間その刀身と結晶を無言で見つめ続けた。たつぷりと全貌を見回した後……緩慢に動かされた両腕が、剣の柄を握り締める。

ギユウアアアアアアアア!!

かつてのように剣を構えた白い竜は、勢いの弱まっていた咆哮に再び力を取り戻した。

再び闘志を纏い直した白い竜に、舌打ちしたアドミニストレータはソードゴレムに命じる。

「なり損ない」ときが、そんな貧相な剣を一本持ったところで私の完全兵器に及ぶはずがない！」

再び刃に漆黒のオーラ——狂気に歪んだ愛の力を発揮した剣人形が動き出す。

激しい音を立て、今度こそ完全に命を刈り取らんと白い竜に猛然と迫る。

それに対して、顔を半分隠すように剣を構えていた白い竜も、動き出す。

次に彼が行った行動に、キリトは心底から驚嘆させられた。

まるで時間が引き延ばされたようにゆっくりと流れる中で、白い竜は体を動かしてい

く。

右脚を後ろに、左の膝を少し落とす。地面と垂直に重心を据える。

そうすると、余計な力を産まないために翼を畳み——右手に握った剣を引き絞ったのだ。

(あの、構えは——)

限界まで目を見開くキリトと、静観していたカーディナルの前で、剣に光が宿る。血のように赤い、鮮烈な輝き——この世界にも組み込まれた、ソードスキルの光。純白の刀身に這わせるように、左手を乗せた白い竜は、静かな瞳で剣人形を見た。

——その竜に、もはやルークとしての記憶は残されていない。

在るのはただ、彼の輪郭だけを残した魂に刻まれた、*“愛する人を守る”* という意志のみ。

だが、その体に刻まれた修練と経験だけは、竜体となつてなお失われていなかった。そうして空っぽな心に思い浮かべるのは——あの、全てを射抜く鮮烈な銀の眼光。

ギユウオオオオオオオ………！！

深く深く、溜め込むように口の中で唸り声を漏らす。

ギリギリと音が鳴るほどに剣を握りしめ、全身の筋肉を隆起させ。

そして、ソードゴーレムがその間合いに一步踏み込んだその時。

ギユラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

突撃——否、渾身の踏み込みで、その一撃を解き放った。

片手直剣用重単発ソードスキル、《ヴォーパル・ストライク》が矢のように放たれる。それはソードゴーレムが振るった剣腕や、大きく開かれた肋骨が閉じるよりも早く飛び。

その胸の中心、三本の大剣の間に輝くモジュールへと、一ミルのブレもなく到達する。

オオオオオオオオツ——!?

ギユウオオオオオツ!!

ソードゴーレムが、悲鳴を上げるように体を震わせる。

中途半端な姿勢で止まった剣人形に、強烈な叫び声を上げた白い竜は翼を広げ、前へと押し込んだ。

「ツ——!!!」

それを見たアドミニストレータの脳裏に、あるイメージが浮かび上がる。

残り少ない記憶領域の中でも、未だに鮮明に再生できる屈辱の記憶。

自分に向けて拳を繰り出す、灰髪銀眼の男の憎悪に染まった修羅のような顔。

それが今、この瞬間。あの白い竜の姿と重なった。

ギヤリギヤリと鼓膜が弾け飛ぶような音を奏で、火花を散らし——ついに、モジュールに切っ先が突き刺さる。

一瞬でひび割れたモジュールは、背骨から飛び出すと空中に投げ出され、粉々に砕け散った。

オオオオアアアア——ッ！

ソードゴーレムが、激しく体を震わせる。

それはまるで、一体となったルークとユージオ、アリスの一撃が怨念を貫いたような声。

不協和音はやがて、剣の奏でる清涼な音に塗り替えられていき。

ついに、最後の断末魔を上げながらその体をバラバラに崩壊させた。

飛び散った大量の剣の残骸が、広間の至る所に飛来する。

壁に、柱に、床に次々と墜落した剣は、キリト達のすぐ側にも落ちてきた。

自分の隣に突き刺さったそれを見て、キリトは目を見開く。

黄金の刃を染め上げていた闇のオーラが、霧のように薄れて霧散していく。瞬いていた天井の星々も、ソードゴーレムの終焉と共にチカチカと点滅し、やがて消えていった。

(騎士達の記憶……そこに植え付けられた疑似的な人格も停止した、のか？ だとしたらもう、二度と再現されないことを願いたい)

厄介な敵としても、人としても、キリトは彼らが二度とその苦しみを味わないことを祈った。

ギユラアアアアアアアアアア!!!

一方で、見事ソードゴーレムを撃破した白い竜は、天井に向けて勝鬨を上げていた。かつてのルークであれば勝利に酔いしれることはなかったが、今は竜の本能が強くなっているのだ。

その手に握られた剣の、きらきらと輝く結晶を見て、不意にキリトはあることを悟る。

（そうか。あのアリスの記憶をアドミニストレータが利用できなかったのは——彼女の愛が、大きすぎたんだ）

彼女が深く愛していたのは、セルカだけではない。

その身と一つになったユージオのことも。記憶がなくとも兄のように慕っていたルークも。

両親も、村の人々も、ルーリッドの村そのもの——ひいては、自分と愛する人達が生きる、この世界すらも。

全てを、アリス＝ツェベルクという少女は愛していたのだろう。

アドミニストレータなどには、とても制御しきれないほどに。

「ああ……これが、わしが見守り続けてきたものなのか………」

「……………本当に、綺麗だ」

カーディナルとキリトは。胸の内に溢れたその感情に、涙を流すことしかできなかつた。

ギユラアアアア！

ソードゴーレムを打ち倒し、白い竜はユージオとアリスの融合した剣を手にアドミニストレータを見る。

傷だらけの体に反してその瞳はギラギラと戦意に光り、まだ戦おうとしていることは明白だった。

そんな竜に対して……………アドミニストレータは、ブツブツと何事かを早口でつぶやいている。

「元になったヒューマン・ユニットのID……………出生した地域に、両親となるユニットから受け継がれた外見的パラメータ……………教会での専用コマンドではなく、当人同士の簡易的なコマンドで成立された仮婚姻……………」

彼女は、カーディナルシステムとしてのあらゆる権限を行使して白い竜を再解析する。

「お前。あの男の息子ね」

莫大な殺意を、
解き放った。

最期のその時まで

「まったく、親子揃ってこの私に傷をつけ、ここまで不快にさせるなんて……どうしてお前達のような者が生まれてきてしまったのかしら？」

それは、この世界の最高存在たる管理者としての威圧感ではなかった。

あらゆる感情を、今はカーディナルと名乗る第二人格を封じるために凍結したはずの彼女は。

今まさに、仮初の模倣した感情ではなく——心の底から、怒りと憎しみを溢れさせているのだ。

「お、おい……アドミニストレータは、一体何言っているんだ？」

「わしにも全く……いや、まさか。そういうことか？」

今度こそ何を言っているのか理解に苦しんだキリトは、隣にいる賢者へ助けを求めた。

同じく、この二百年一度も見たことのないアドミニストレータに狼狽していた彼女は、不意に何かを悟る。

「なんだ。何か知ってるのか？」

「……かつて、アドミニストレータのシンセサイズを意志の力だけで跳ね除け、叛逆した騎士がおった。そやつはカセドラルから逃げ果せ、この三百年間アンダーワールド中を放浪しておる」

「なっ……!?!」

あの秘術を打ち砕いた猛者が、三百年前にいたというのか。

その話を聞いて、丁度最初の整合騎士ベルクローリが生まれた頃だとキリトは気がつく。

続けて、白い竜を睨み下ろすアドミニストレータを見ながらカーディナルは話した。

「その者は二十年ほど前、大きな怪我を負って本来の故郷であるルーリッドに流れ着いたのじゃが……そこで、ある少女と恋に落ちた」

「なんだって？ それじゃあ……」

「うむ。もし、わしの推測が間違っていないならば……」

カーディナルは、白い竜を見上げて。

「ルークは、あの二つの守護竜の心意を操る、最強のアンダーワールド人の息子なのやも

しれぬ」

告げられた言葉に、キリトは幾度となく目を見開いた。

女神の支配を拒んだ0番目の整合騎士、そして守護竜の担い手でもある男。

断片的な情報だけでも凄まじいその人物は、更には自分の親友の父親だというのか。

だとすれば、それは……全てを支配することを望むアドミニストレータにとって、どういう存在なのか。

「いいでしょう。気が変わったわ。あなたは私がこの手で殺してあげる」

たつぷりと怒りを乗せた、それでも美しい声でアドミニストレータは剣を向けた。

立ち上る神気は、これまでとは比較にならないほど昂っている。

「すぐに殺しはしないわ。じっくりと甚振って、この世で最高の苦痛を与えてあげる。その上で首を刎ねて、石像にしてからあの男の前に晒してやれば、いくら彼奴でも絶望に顔を染めるでしょうね」

狂気の迸る台詞を重ねながら、アドミニストレータは神聖術を行使した。

彼女の剣——《シルヴァリー・エタニティ》の先端へ、黒々とした雷光が纏わりつく。

彼女の心情を反映したような光は、音を立てて白い竜に狙いを定めた。

ギユラアアアア!!!

神の黒雷に、白い竜は臆することなく咆哮を撒き散らす。

そうすると、再び巨体を剣技の動きに構え、臨戦の態勢を示した。

「プロトタイプを一つ壊しただけでいい気になっているようだけど。その醜い体、木っ端微塵にしてあげる！」

一際大きく叫んだアドミニストレータは、迸る雷光をついに解き放った。

白い竜も、再び剣を染め上げた赤い輝きを全力で前へ突き出す。

キリトとカーディナルの見守る前で、雷光と剣先が衝突する。

先ほどのソードゴレムが崩壊した時以上の風が吹き荒れ、離れていたはずの二人にまで影響が及んだ。

後方の壁に向けて体を激しく押され、咄嗟にカーディナルが張った風の障壁でぶつかる事だけは避ける。

「ルークっ！ ユージオっ！」

キリトは、友の名を叫んだ。

白い竜とその手の剣は、黒雷に負けることなくその刃を押し込もうとしていた。極太だった光は千々に四散し、広間の至る所に落ちてはその場所を焼き焦がす。

「おのれ、竜に食われた小僧ごときが……!」

美しい顔を歪め、怒りをにじませた声で反抗する竜にアドミニストレータが吐き捨てた。

それをあざ笑うかのように、甲高い雄叫びをあげながら、徐々に剣を押し込んでいく白い竜。

激しい音を立て、超高エネルギーの暴流を切り裂いて――

――ピシッ

その時。小さな音が木霊した。

竜の攻勢に希望を見出していたキリト達が、目を見開く。

白い竜の剣が崩壊を始めていた。微細な亀裂が表面に走り、次々と破片をこぼしていく。

「ユージオツ!?!」

剣に……否、壊れかかっている友に、キリトは悲痛な叫びを上げた。

彼を剣へと変えたカーディナルは、決して見逃さないとこのように瞬きもせずその光景を見る。

「ふ……………」

アドミニストレータが、矮小なものでも嘲笑うように口元を歪めた。

そうしている間にも、雷の根元に近づいていくほど剣は崩れていつて。

ついに大きな音を奏で、刀身の根元に一直線の大きな亀裂が生まれた時。

白い竜は、剣を手放した。

雷の大部分を削ったそれを背後へと放り投げると、完全なる破壊を阻止する。

その行動に驚愕したのは、決してキリト達だけでなく、アドミニストレータもだった。

ギユオオオアアアアアア!!!

雷の最後の一片を、両腕を犠牲にして全力で切り裂く。

雷鳴が弾け、その代償に美しかった鱗も鉤爪も、黒く炭化していた。

アアアアアアアッ!!!

怒るように吠えたてた白い竜は、引きちぎれるほどの力で翼を羽ばたかせ。

その巨大な体を空中で回転させると、大上段からアドミニストレータへ尾の剣を振り下ろした。

「貴様——!」

落下してくる大質量の一撃に、アドミニストレータは激昂しながらレイピアを突き出す。

数瞬の後、激しい衝突が起こった。

白い竜の体の中でも、唯一神器級の優先度を持つ尾と針のような切っ先がせめぎ合

う。

烈風と衝撃を巻き起こしてぶつかったそれらは、全力の殺意で自分を押し付け。

刹那、砕け散った。

まず最初に、白い竜の尾が半ばから断ち切られ、ぐるぐると回転しながら宙を舞う。僅かに競り勝つことに成功したレイピアに宿っていた光が飛翔し、反転していた白い竜の右足を切断。

直後、やってきた尾の先端が彼女の突き出した腕と胴体の間を通り過ぎ、音もなく右腕を斬り飛ばした。

それを最後に、腕の中にあつたレイピアも甲高い音を立て、虹色の大爆発を起こして大量のリソースを放出する。

「ルーク——っ!!」

何もできずに、ただ見ていることしかできないキリトの前で。

片脚を斬り飛ばされ、尾を失った白い竜が、黄金の線を空中に描きながら落下した。

墜落した白い竜は、地面に突き刺さっていた純白の剣のすぐ隣に頭から突っ込む。

それまでの戦いで半壊していた床が盛大に抉れ、無数の破片を飛ばしながら巨軀が沈んだ。

「かはっ！」

「ぐうっ!？」

生じた余波は凄まじいもので、嵐のような風が広間中を埋め尽くした。

それにキリトはおろか、カーディナルまでもが吹き飛ばされ、強かに壁へと体を打ち付ける。

「げほっ……か、カーディナル……」

「無事……じゃ。それよりも……」

互いに咳き込みながら、衝撃の発生源へと視線を投じた。

横たわる白い体。そこから赤い絨毯の上に、金色の波が広がっていく。

膨大になった天命故か、何リットルもの血を流しながらも弱々しく呼吸をしていた。

「あ、ああ………ルーク……!」

掠れた声で、名前を呼んで。

手を伸ばしたキリトに追い打ちをかけるように、剣が点滅していた輝きを失った。最後に淡く輝いた剣は光の帯に戻っていき、バラバラに解けると人の形をとる。

……そして、全身にヒビのような傷を持ったユージオに戻った。

胸に添えられた手の中には結晶を握りしめ……腹部が、半ばまで裂けている。

やがて、光が消え、完全に人間に戻った瞬間。

大きな音を立てて、臓物と共に大量の血が零れ落ちた。



「あ……ああ………」

血の中に沈んだ二人の親友に、キリトはその場で膝をつく。

目の前の世界が、色を失っていく。全てがモノクロームの中で、血の色だけが鮮明だった。

音も、感覚も、何もかもが遠ざかる中で、ゆつくりとユージオの傍に《青薔薇の剣》が降りてくる。

とん、と波紋を立て、赤い血溜まりに着地した瞬間、その血が硬質な音を立てて変化する。

あつという間に真紅の結晶に変わった血が、ユージオの腹部を覆い隠し。

それで力を使い果たしたように、刀身の半ばから折れた剣が床に転がり落ちた。

「……………とんだ誤算だったわ」

この世界から消えてしまいたくなるほどの絶望を得たキリトの前に、女神が降り立つ。

赤と黄金の血で半身を染めた彼女は、目を閉じたユージオと死にかけの竜を見て顔を険しくした。

「竜の体にメタリック属性がないことは予測できたけど、まさかこの子の剣まで違うとはね」

自分のミスを解析しながら、根元から失われた右肩に手をかざす。無詠唱で神聖術が発動され、真珠色の肌から血が消えていくと、断面を滑らかな肌が覆った。

一瞬で傷を塞いだ彼女は、長い睫毛を瞬かせる。

すると、その手で白い竜にトドメの一撃を与えようとした。

「よせ、クイネラー！」

だが、大きなその体を光の膜が覆った。

体の表面に張り付くような薄いそれは、アドミニストレータがあの雷光を数度浴びせないで破れないほどの強度がある。

舌打ちをした彼女は、振り向くと長杖スタツプを掲げたカーディナルへ恐ろしい目を向ける。

「どこまでも私を煩わせるわね、リセリス」

「……その者を、殺させはせぬ」

「じゃあ一体どうするの？ お前も今、あの障壁を作るのに残ったリソースを全て注ぎ込んでしまったのではなくて？」

薄く笑ったアドミニストレータの言葉に、くつとカーディナルは下唇を噛んだ。

巨大な体を全て、最高峰の術にも耐えられるほどの結界で覆った結果、彼女と戦うほどの力は残っていない。

できてもしせいぜい、かすり傷をいくつか作る程度の術を放てるかどうかといところだ。

幼い体で剣は振るえず、実質的に無力となったカーディナルにアドミニストレータは冷笑する。

「さて……」

賢者から興味をなくしたように視線を外し、別の人物を見る。

それは、涙を流しながら呆然と膝をついた、唯一の障害となりうる存在……キリトだ。「最後に残ったのが、まさかお前だとはね。向こう側の坊や？ 管理者権限も持たずに、何をしに来たのやら……」

ひたり、ひたりと、アドミニストレータが近づいていく。

「逃げろ！」

カーディナルの叫びも届かず、自失したように座り込む彼を、女神が見下ろした。

「まあ、もう疲れたし、眠いわ。事の顛末は『あの者』に後で聞くとして、今はこの世界のイレギュラーに退場してもらいましょうか」

白磁の左腕が、真横に掲げられる。

広間の隅に転がっていた右腕が浮かび上がり、彼女の手の中へと収まった。

アドミニストレータが、自分の腕に息を吹きかける。

紫色の粒子に変わった右腕は、シンプルなデザインの銀の直剣へと早変わりした。確かめるように数度握ると、その刃をキリトの首の横に置く。

「それじゃあ、さようなら。またいずれ……今度はあなたの世界で会いましょう？」
酷薄な笑みを浮かべ、最後の言葉を贈って。

アドミニストレータは、振りかぶった銀剣を容赦なく振り下ろした。

視界の端から迫ってくるギラついた刃に、キリトはぼうつと視線を投じる。

アドミニストレータの背中の方こうで、自分の名前を叫ぶ賢者の姿が見えた。

(……もう、どうでもいい。今更、もう、何もかも………)

ただ、その仮初めの死を受け入れようとして。

刹那、目の前に金の背中が躍り出た。

金糸の髪がふわりとたなびく。

両手を広げ、自分を庇う少女騎士の背中に。

あの時、ユージオとの間に割って入った、親友の姿を幻視した。

瞬間、完全に停まっていた思考が火花を散らして再開する。

酷く遅く振るかぶられた剣が、アリスへと迫っている。

それを、ただ呆然と見て。

自分は、あと何度……！

(同じ過ちを、繰り返すつもりだ——！)

気がつけば、体が動き出していた。

閃光のように煌いた右手が腰の黒い剣の柄を握り、抜剣する。

両足に力を込めて跳ねるように起きると、銀剣とアリスの間に向けて剣を振るった。

ギイインツ!!

激しい光が乱舞する。

無意識に発動していたソードスキルの緑光の向こうで、アドミニストレータが息を呑んだ。

それに構わず、左手でも柄を鷲掴みにすると、思い切り剣を振り抜く。

その間に一瞬真空が発生し、それが爆発してキリトはアリスと共に後ろへ吹き飛んだ。

傷ついた少女の体を、片腕で抱きしめて自分をクッションにする。

直後に背中へ強い衝撃が走り、気の抜けた声が喉の奥から漏れた。

「つつう……」

顔をしかめるキリトの胸の中で、かすかに少女騎士が笑った。

「……なん、だ。まだ、動けるでは……ないです、か……」

「……………ああ」

一部始終を見ていたカーディナルが、離れた場所でホツと胸をなでおろす。

キリトは痛みを堪えながら彼女の背後より体を引き抜き、生々しい火傷を負った彼女を優しく寝かせる。

「あとは……………頼みましたよ」

「……………任せてくれ」

その一言を言い切った瞬間、糸が切れたようにアリスは気を失った。

彼女に笑みを送ってから、キリトは震える体に喝を入れて立ち上がる。

そして、じつと赤い切り傷の入った自分の手を見下ろすアドミニストレータを睨みつけた。

「……………こうまでくると、流石に不愉快ね」

「何でもかんでも、あんたの思い通りにはいかないって事だ」

死の覚悟を決めてでも、唯一残った少女を守る為に己を鼓舞し、言い返す。

渋面を形作ったアドミニストレータは、そんな彼に羽虫を見るような目を向けた。

「何なの？ お前達は。どうしてそう、醜く無様に足掻くの？ すでに結末は決まっているというのに、何故その過程を自ら引き延ばすの？」

「過程が大事なこともある。這いつくばって死ぬより、剣を握って死ぬことを選ぶさ。」

……俺達は、人間だからな」

その身を賭して、最後まで守り抜くことに全てを捧げた気高い親友のように。己の罪を贖う為に、人々の明日を守る為に、剣となった、優しい親友のように。今こそ自分も、恐怖を乗り越え、最後の瞬間まで生き抜いてみせよう。

その覚悟が、奇跡をもたらさず。

キリトの体からオレンジ色の燐光が立ち上り、その装いを変えていく。

武器庫から拝借した衣服は、かつて彼が鋼鉄の城を駆け抜けた時の衣装へと変身していった。

落ちてきた長い前髪を、指ぬきグローブをはめた左手でかきあげると、黒革の長い袖を翻して剣を構える。

「漆黒の装い……まるで暗黒騎士ね。いいわ、あくまで苦痛を望むというのなら、お前にはとても惨たらしい最期を与えましょう。殺してくれと懇願したくなるほどの、ね」
「それじゃ足りないな。俺の愚かさを償うには」

女神の宣告に真正面から言い返して、低く腰を落とす。

どこまでも反抗するその姿に、冷酷な笑みを浮かべたアドミニストレータも銀劍の切っ先を定めた。

(あの劍はさつきまでのレイピアほどじゃないだろうが、かなり高優先度のはずだ。何撃も打ち合っていたら俺の劍の天命が先に尽きてしまう。その前に、連続技で勝負を決める！)

ここまで彼女を追い詰めた親友達の奮闘に恥じないように、友として。

彼らに劍を教えた劍士として。ぐっとよく手に馴染んだ黒い劍の柄を握りしめる。

そして、規定通りの構えを行ったことで刃に光が宿った瞬間。

「おおおオオオツ———！」

キリトは、アドミニストレータへと駆け出した。



——口の中に、血の味が滲む。

——牙や舌を濡らしていく己の金血は、その一滴一滴が流れ出る天命そのものだ。

——それが恐ろしく、不快で……だが、どうしたことか、澄んだ心だけは心地がいい。

——その矛盾の、何と奇妙なことか。

竜となって、少し経ったからだろうか。

未だなり損ないのソレは、思考のようなものを持っていた。

呼吸は浅く、全身の傷は酷く痛む。何より、途中から感覚のない右後脚が酷かった。だが、そんな痛みもさして気にしないまま。

ソレは、ぼやける視界を全力で定めると、目の前の光景を見届けた。

黒衣の剣士が、戦っている。

この、小さな世界の支配者であり、箱庭の創造者である女神に、たった一人で抗って

いる。

その双肩に、あらゆる願いを背負っている様は、空に輝く星々よりも美しい。それを傍観することしかできないのが、何故だか生まれたばかりの自分に相応しい気がした。

だが、やはり女神は強大だった。

剣士が絶対の信頼を置き、自信をその魂に抱いていた、連続する剣光の軌跡。女神はそれを、銀剣をあらゆる形へと瞬時に変え、次々に放ってきたのだ。

この世界の理を統べる彼女にとって、組み込まれた剣技を模倣することは造作もなかったのだろう。

それに、剣士は傷ついていった。

最初こそは剣で弾き、拮抗していたものの、次々と振るわれる剣がその身を傷つけていく。

やがて、大きくその胸を切り裂かれた剣士が、自分のすぐ側で膝をついた。

瞳は震え、口を戦慄かせ。己の誇りでもあるそれを正面から打ち砕かれ、怯えてしまっていた。

「——いいわね。その顔」

女神が、剣士を嘲笑う。

「剣の戦いなんて、面倒なばかりだと思っていたけれど……こうして直に相手の苦しみを見ながら切り刻むのは、中々快感だわ」

愚弄する女神に、剣士はもう何も言い返すことができなかつた。

唯一、彼女に勝ちうると思っていたものが通じなかつたのだから。だからせめて、このまま斬られてしまおうとすら思い始めて。

「らしく……ないぞ……。諦める……なん、て」

一人の声が、光を差した。

ハツとして、剣士は目の前を見る。

すると横たわっていた、その身を分たれた青年が微かに笑った。

いつ命の炎が消えてもおかしくないはずなのに、ソレの目には強い魂の輝きが見える。

「ユー、ジオ……」

「キリト……」

互いの名前を呼んで。

凍りついた青年が、言葉が続けた。

「あの……八年前の日。君は、アリスが連れ去られようとするのを見て……整合騎士、に

……勇敢に、立ち向かおうと……したね」

「俺、が……?」

「だから……今度こそ……僕が、背中を押すよ……誰にも、止められないくらい……さあ、キリト。君なら、立ち上が……れる。何度、だって……」

青年は、自分の傍にある折れた剣を、力のない手で掴み取る。

そして、自分の血で濡らしながら胸に抱くと——そこに、暖かな緋色の光が生まれた。

「何を——?!」

声を荒げようとした女神は、その光に目が眩んで後ずさる。

呆然とする剣士の前で、青年は最後の力を彼のために振り絞った。

広がる血が、粒子となって立ち上る。

それらは壊れた剣へと収束していき、みるみるうちに失われた刃を形作った。透き通る水晶のように青かった剣が、真紅の色に染まっっていく。

「物質変換術、じゃと——!?!」

あり得ざる奇跡の光景に、賢者が剣士の背後で心底から息を呑んでいた。そうして完成した、全てが赤くなった薔薇の剣を、青年は剣士に捧げる。受け取ったその剣を、彼はその実在を確かめるかのように強く握った。そこに宿る、青年の魂の欠片までもを、感じ取るようにして。

「さあ……立って、キリト。僕の、親友。……僕の、英、雄……」

そして、青年は、目を閉じた。

彼の言葉に、意思に、譲り受けた希望に。幾筋もの涙をこぼしながらも、剣士は笑った。

「ああ……立つよ。お前のためなら、何度でも」

確と答えを告げ、剣士はまた、立ち上がる。

歯を食いしばり、傷にまみれても、なお。

——そして、不意に自分へと目を向けた。

「見ていてくれ、ルーク。俺は……抗い続けるから」

覚悟を口にし、身を翻した剣士は。

己の終わりをもたらすであろう女神と、対面するのだ。

——ああ。なんて、愛おしい

その背中を見送つて、ソレは心から感嘆に打ち震えた。
懐かしい背中。ずっと自分の後ろにあつたのに、気がつけば追い抜かれていた。
知らないはずの懐かしさと寂しさの中で、ソレは血に沈んだ口を歪ませる。

——そうだ、
■ ■。翔べ、誰より高く。誰も、追いつけない彼方まで

女神の呪縛など、この箱庭など抜け出して、翔び続けるがいい。

あの宙ソラの向こう側——お前が目指すべき、大いなるその果てまで。

きつと、それこそが。ずっと自分が愛し、守ろうとした。

そして今、再び翼を広げたであろう、お前なのだから。

「愛は支配。私は全てを愛する。私は全てを支配する!!」

抗い続ける剣士に、篡奪者と呼ばれた女神がそう叫ぶ。

否、否。

愛とは縛り付けることではない。己の手の中に握りしめて独占するものでもない。いつか羽ばたいていくその日まで、暖かく包み込み。

やがて、手放すものなのだ。

——ああ、だから。俺も、俺にできることを、最後までやり遂げよう

己に残った、唯一の残滓に従って。

ずっと剣士を見つめ続けていた瞳を、別の方へと向ける。

目を閉じた青年。そして、女神の炎に焼かれ、傷つき、倒れた少女。

剣士と同じほどに愛しい彼らに、ソレは失われていく力を振り絞った。

——イイン

清涼な音を響かせて、青年と少女の体に白い光が纏わりつく。

心意の力を用い、傷ついた彼らをそっと持ち上げると、自らの胸の中へと招いた。
今にも消えてしまいそうなその輝きに目を凝らし、緩慢に口を開いて。

「待て」

ふと聞こえた声に、目を向ける。

そこには、どうしたことか涙の跡を目元にこきえた幼子が一人。

自分を見上げ、その幼子……もう一人の世界の調停者が、問うてくる。「その者達を、一体どうする。これ以上、何をするつもりなのじゃ」

——何をするか。

——決まっている。

——我が愛しき宝を、守るのだ

瞠目した幼子の前で、今度こそソレは自分の使命を全うした。

ハアアアアア……………

吹きかけた吐息は、純白の霜。

それは青年の、少女の体を覆い、繭のように編み上げると卵の形を成した。

それだけではない。

なおも吐息を止めることはなく、二つの卵を前の両脚と先が欠けた尾、一对の翼で包み込んだ。

そして、自分自身を霜の中へと閉じ込めていく。

——凍れ、凍れ。

——何よりも冷たく、温かな揺り籠よ。

——失われる命を繋ぎ止め、我が生命をこの子らへ。

……やがて、その体が凍りつく時。

最後に見えた、ソレの行いに泣き腫らす幼子へと懇願する。

——あとを、頼んだ。

「……………任せるがよい。我がフラクトライトにかけて、お主の献身を決して無駄にはせぬ」

捧げられた答えに、満足げに微笑んで。

ソレは、繭の中へ自らを閉じ込めた。

終幕

「急げ！ 手遅れになっちまう！」

「……………」

「この強行軍は、堪えますね……………」

《靈光の大回廊》から昇降機で上層に上がったライオット達は、今もなお走り続けている。た。

その美しさを鑑賞することなく《雲上庭園》を駆け抜け、更には《暁星の望楼》をも通過する。

ついには元老院にまでたどり着いた。

「ここを抜ければ——ッ!？」

蹴破るように扉を開き、その勢いのまま中の広間まで突入して。

そこで、延々と神聖術を唱え続けている真っ白な人間たちの棺桶に、言葉を失った。

「……………なん、だ……………これは」

「……………人、か？」

「……………彼らこそが元老。公理教会の法を管理する、無情の監視者達です」
スワロウの感情を押し殺したような言葉に、身の毛がよだつのはつきりと感じた。
アドミニストレータの残虐さを身をもって味わったバルドでさえ、瞠目している。

(話に聞いちゃいたが、実際に見たら、こんな……………！)

ふつつつと沸き起こる怒りは、きつと彼らを哀れんでのものだろう。

あらゆる苦悩の果てに反逆の道を歩んできたが、こればかりは悪だと断じることができた。

じつと目に焼き付けるように元老を見るライオットの隣で、ふとバルドが別の場所を見る。

「……………あちらに通路が繋がっているようだな」

「進路はあの部屋の向こうです。急ぎましょう、ライオット様」

「……ああ」

たつぷり十秒間、時間をかけてから返答する。

三人は止めていた足を再び動かし、奥にある通路へと進んでいった。

悪趣味な道化の部屋に顔をしかめながらも、ずらされた棚の裏にある秘密の出口を発見する。

そこから狭い通路を急いで這い進み、階段に出ると一気に三階層の距離を駆け上がった。

薄暗闇に包まれた長い階段の果て、ついに九十九階層へとたどり着く。

だが。

「……おい、どういうことだ。どこにも上に繋がるものがねえぞー!」

霜に覆われた広間の中に、ライオットの怒声が木霊する。

周囲のどこを見渡しても、階段はおろか天井に穴の一つすら開いていない。

「……行き止まり、か?」

「スワロウ! お前の話じゃ、この上が最上階だったはずだよな!」

「そのはずです……ありえない。ここにはアドミニストレータの居室に繋がる昇降盤が設置されているはず……」

難しげな顔をしたスワロウは、おとがいに指を当てると深く考え込んだ。

ライオットとバルドが、固唾を飲んで彼を見つめる。

十秒、二十秒、そして一分と経過していき、段々苛立ちが増してきた。

（くそっ！ あいつがどうなってるか分からないってのに！ 何をこんなに悩んでやがる！）

長い間アドミニストレータに叛意を悟られなかったことから分かるように、ライオットは相当に忍耐強い。

しかし、今回だけはそれが発揮されていなかった。

ルークが使ったのであろうその力が、どれだけ危険なものかを理解しているが故に。

「……………まさか、アドレスを遮断した？」

やがて。眩かれた答えは、彼にとっては理解の及ばないものだった。

「アドレスって何だよ？」

「空間ごと切り離して全く別の場所へ移した、ということですよ。カーディナル様が図書館から消えたことを鑑みるに、アドミニストレータが逃さないよう自分の居室を独立性

せたのでしよう」

「嘘だろ!? それじゃあ俺達は、これ以上上には行けないってことか!」

考えうる中で最悪の答えに、自然と語気が荒くなってしまう。

スワロウも非常に納得がいかないのか、いつになく険しい表情を消そうとしない。

嫌な沈黙が場を包む。

もしかしたら何かが残っていないかと、ライオットは周囲を見回した。

スワロウは再び考え込むようにして僅かに顔を俯かせたまま、黙り込んでいる。

「……使者よ。手立ては残されていないのか?」

「……………一つだけ。この状況を打開することができるかもしれない方法があります」

「本当か!」

絞り出すような声での返答に、素早くライオットが反応した。

バルドも口にごそ出さないものの、その銀眼に期待の色を伺わせる。

そんな二人に、「しかし……」とスワロウは何かを迷った。

そのまま三度黙ってしまい、いよいよ痺れを切らしたライオットが大きく口を開く。

「待て」

「っ、なんだよ……」

バルドは、無言でライオットを見下ろした。

妙に迫力のある鉄面皮に、渋々ながらも出しかけていた言葉を飲み込む。

「……………いえ、ここでこそ使うべきでしょう。ここまで皆様にご助力頂いた上で、この状況で私だけが出し惜しむわけには参りません」

それが功を奏したか、スワロウは何かを決意した顔で結論を出した。

二人の顔を見て「申し訳ありません」と一度頭を下げると、天井を見上げる。

「この身は人を救わんがために生み出されたもの。であれば、無意味な骨董品となり果てるより、我が矜持に従うことにいたしましょう」

そう言って、スワロウは両手をそこへと伸ばした。

「システム・コール！ デピュティ・アドミニストレータ・オーソリテイ！ エマー
ジェンシー・アクティベーション！」

その術式を唱えた直後、スワロウの瞳に無数の文字の羅列が浮かび上がった。

彼を構成するプログラムであり、アルゴリズムであるそれは定められたコマンドに反応し、起動する。

彼の手の前に何十もの神聖術のコンソールが開き、ライオット達は目を見開いた。

「スペイシャル・コーディネート・アイデンティファイケーション！　イニシアリゼーション・プログラム！　デイスチャージ！」

早口で紡がれる術式に、何をしているのか二人には理解できない。

だが、そこにいるのがカーディナルであれば即座に納得したであろう。

彼が使用しているのは、メンタルヘルスケアAIとして付与された力——超限定的な、副管理者権限。

あらゆる観点において、アンダーワールド内にログインした人間の危機と判断された時にのみ使用を許される特殊コマンドだ。

それは同時に、外部の世界に“危機”と通告する行為でもある。

故に、主観的感情で、かつ本来の用途でない理由でそれを行使したスワロウは。最悪の場合、ラーズによって消去されるだろう。

(そうだとしても。この身が四百五十年の時を承らえてきたのは、誰かの心を、命を守るためなのです！)

長い年月を重ね、蓄積されたデータは、単なるプログラムでしかない彼の中に心を生んだ。

その情動が、あの少年達を救わなければならないと、強く訴える。

論理的には致命的な欠陥であろうその判断を、しかしスワロウは誇りに思えた。

強い想いに呼応して、完璧に発動したコマンドはその力を発揮する。

アドレスを切り離された最上階の強制的な座標の解析・特定と、その初期化。

本来であれば数日を要する作業を、超高位権限を以ってして瞬く間に終了させる。

ズウンツ
!!!!!!

激しい音を立て、カセドラルが揺れ動いた。

天変地異でも起こったような振動に、ライオット達が大きくバランスを崩す。持ち前の強靱な足腰で、どうにか転倒を抑えると揺れが収まるまで待った。

「つと……今のは一体——」

「——カハッ」

「使者よ！」

疑問の声を上げた瞬間、倒れ込んだスワロウに二人は驚愕した。

慌てて駆け寄り、助け起こすと、激しく咳き込みながらスワロウはなんとか自分の体を支える。

「……申し訳ありません。少々、厄介な術を行使しました」

「大丈夫なのか？」

「ええ。今の所は。それよりも、最上階をこちらへ引きずり戻しました」

元より白い顔を蒼白にしながらも、震える指先で天井の一点を指す。

つられてそちらを見ると——いつの間にか、小さな昇降盤が出現していた。

「お前……」

「さあ。早く、ルーク様達の元へと参りましょう」

「……へっ。思ったより根性あるじゃねえか」

「お褒めに預かり、光栄です」

「感謝する、使者よ」

二人の言葉に、ニコリと笑って返すスワロウであった。

そんな彼にライオットが肩を貸し、立ち上がらせると、昇降盤の方へと歩み寄る。直近まで来ると、彼らの存在を感知したように音もなく丸い円盤が降下してきた。地面の穴に収まったそれを見て、覚悟を決める。

「……これで昇った先に、アドミニストレータが」

「……気負いがあるか、蒼角の？」

「ハッ。今更怖気付く理由なんかあるかよ」

ニヤリと笑う緋髪の騎士に、炎の騎士も僅かに口角を上げ。

三人は、昇降盤へと乗り込んだ。



これまでの戦いの余韻に浸るまでもなく、昇降盤は速やかに最上階へ送り届けてくれた。

僅か五秒で到達したアドミニストレータの居室を、ライオット達は遂に目にする。部屋を支える廊下に視界が塞がれ、それを過ぎた先に見えたものは――

「……………何だ、これは？」

予想だにしない、激戦の跡地だった。

無音で床に同化した昇降盤から降りて、ライオットは部屋の中を見渡す。

そして、とても最高司祭の居室とは思えない惨憺たる様に呆然とした。

広大な円形の部屋の至る所には、黄金の剣が半壊して突き刺さっている。

窓は全て粉碎し、炭化した部分の床もあれば金色の液体が染み込みきっていない床もある。

何より目を引くのは、壁の一部に同化するように張り付いた、巨大な氷の繭だ。

目算で八メルはあろうかという巨大なそれは、中に何かがあるのか規則的に蠢いている。
る。

警戒の意識を持ちつつ、今一度ぐるりと部屋の中を見て…………奥に、跪く小さな背中を見つけた。

「ありやあ、もしかして…………」

「カーディナル様！」

彼が名前を口にするよりも早く、スワロウが声を張り上げ、腕の中から抜け出していった。

小さな司書姿の人物はそれで気がついたようで、肩を揺らすとゆっくり立ち上がる。そうして半身だけ振り向き、目の赤らんだ、幼くも老獪そうな顔つきを見せた。

「お主達か。ようやく辿り着いたのじゃな」

「ご無事で何よりです」

「うむ」

目の前まで接近したスワロウは、目立った傷のない賢者の姿にホツとする。

遅れて追いかけてきたライオットとバルドは、ふとカーディナルの足元にあるものに気がついた。

目を向けると、そこには一人の少年が横たわっている。

右腕を根本から失い、黒い服に身を包んだ、残る手に折れた水晶色の剣を握る少年。

「ハイゴウシは……」

「……こやつが、アドミニストレータを打ち滅ぼしたのじゃ。友から、あらゆる愛と、犠

性を背負つてな」

「……………ほう」

今一度、興味深げに少年を見下ろす二人。

目を開いたまま、ぼうつと天井を見上げて指の一本の動かさない。

髪と同じ、その漆黒の瞳は……何故か、光を反射せず、瞳孔のない、鏡のような色をしていた。

「おい、どうしたんだこいつは？　まるで生氣を感じねえぞ？」

「……………色々とあつたのじゃよ。とても安易には語りつくせぬ、壮絶で、愛に満ち溢れた、歴史に刻まれる戦いがな」

「その結果でこうなつちまつた、つてことか……いや、そうじゃねえ！　ルークのやつは!?」

そこでようやく、思い出したように慌てて部屋の中を見渡した。

部屋の状況に衝撃を受け、流されるままに話を進めていたが、一番の目的である人物がいない。

じつくりと一つ一つ、柱の陰から窓の隙間まで、舐め回すように見つけようとする。

「……………カーディナル様。僭越ながら、事の概要だけでもご説明を賜りたく存じます」

「……………アドミニストレータは倒した。元老長チュデルキンもな。じゃが、その後に深刻

な問題が起こった」

「と、言いますと……?」

「——あちら側でラーズが襲撃を受けたらしい。この世界の存亡と、《A. L. I. C. E》に至ったユニットの篡奪が懸念される」

「なんと……!? では、この世界を……?」

「……いいや、それはせん。もしこの状況で初期化して、襲撃者どもが証拠隠滅にあちらでこの世界のサーバーごと破壊でもしたら、何もかも終わりじゃ」

「しばらくは様子見ということぞ?」

「うむ………それに、此奴らが命がけで守った、この儂くも美しい世界を消してしまうのは、どうにも心苦しい」

アドミニストレータの言った通りじゃのう、と、皮肉げに、だが少し安堵したように呟く。

カーディナルの確かなその決定に、ふむと白い使者は声を漏らした。

その間、ついでライオットはルークを見つけることができなかつた。

悔しげに歯噛みする騎士に、カーディナルは無言で長杖スタッフがある場所へ向ける。

訝しむ表情でそれを見たライオットは、彼女が指し示す方を見た。

そこにあるのは、音もなく脈動する、氷の繭だけ——

「っ——!」

全身を、雷に打たれたかのような理解が襲う。

たった一瞬で、賢者の言わんとすることを察した彼は、猛然とした勢いで繭へと走っていく。

黒衣の少年を背負ったバルドが、やや気遣わしげにその後を追いかけた。

「ルーク！ ルークっ！ 聞こえるか！ この中にいるのかっ!」

繭の前までたどり着いたライオットは、その表面を拳で叩きながら呼びかける。

霜の揺り籠から答えが返ってくることはなく、それでも彼はその名前を叫び続けた。

「ライオット。そこをどけ」

「何を言って——!?!」

背後からの制止に、怒りもあらわに振り返って。

「消し炭になりたくないのであれば、そこから退避しろと言っておるのじゃ」

数十の火球を収束している賢者の姿を見て、慌てて飛び退いた。

彼が術の範囲外に出た瞬間、カーディナルは長杖を振り下ろす。

解放された大火球が、固く閉ざされた堅牢な繭へ隕石のように落下した。

凄まじい音を上げ、繭に大火球が衝突する。

見上げるほどの大岩すら一瞬で溶かすだろうその術は、ガリガリと繭の表面を削った。

二十秒ほど掘削を続け、やがて、術を構築する神聖力が尽きて消失する。

残った繭は……何重にも重ねられた防壁の、二、三枚を抉られたのみであった。

「むう……これは厄介じゃな」

「……………む」

あまりの堅牢さにカーディナルが唸った、その時。

オオオオオオオ……！！

ゴアアアアアアアッ！

バルドの纏う赤鎧の炎が、左手に携えた《翁竜の黒盾》が、何かを感じて共鳴する。それは今までにない強力なもので、バルドは巖のように堅い皺を眉間に作った。

キイイイイイイッ！

同時に、ライオットの《蒼竜の琴剣》も音を発した。
光り輝く愛剣に、何事かと首を傾げて。

——ピシッ

閉ざされた繭から、異音が鳴り響いた。

誰もが驚き、繭を見る。

小さな要塞の如きその氷塊に、内側から一条の亀裂が大きく走っていた。
歪みの左右からみるみるうちに新たな亀裂が走っていき、全体へと伝播していく。

ビキツ……バキツ……！

「いかん！ 少し離れろ！」

異常を予期したカーディナルが、鋭く警告を飛ばした。

あらゆる所に亀裂が走り、今にも崩壊しそうな繭の前からライオット達は即座に避難する。

彼らが二メルも離れた瞬間——甲高い音を立て、繭は盛大な自壊を果たした。

細かく砕け散った霜の破片は空中に散らばり、何かを傷つける前に霧散していく。

白い極小の粒となり、大量に舞い散った粒子が、ある種の幻想的な光景を作り出した。

「すげえ……」

「これは、大量のリソースが放出されて……」

「なんと……天命に換算すれば、十数万に匹敵する量じゃぞ……」

「……………！」

思わず見惚れてしまう中で、最初に気がついたのはバルドだった。

粒子の向こう側、繭があつた場所に、何かが腕を包み込むような形にして座っている。遅れて他の三人も気がつき、本能的な反応で身構えてしまった。

だが、数秒待つてもそれは動かない。

構えを解き、二人の騎士を前衛にして近づいていくと……それが人型に近い生物であることがわかった。

体長は、折りたたんだ下半身も含めれば二メートルと三十センチという所だろうか。

ボロ布のような服を纏い、露出した両腕には白い鱗と五本の鉤爪が備わっている。

その腕や翼を使って、二つの巨大な卵を抱えていた。

「これ、は……………」

そして。

長い灰色の髪の毛の奥に隠れた顔を見たライオットは、喘ぐように声を漏らす。

他の三人も、同じようにそれを凝視する。

「……………」

人間大の卵を守るようにした、その人と竜の合いの子のような生き物は。

他でもない——ルークの顔をしていた。



繭の中にいた、ルークの顔をした半人半竜。

否……間違いなくルーク本人だ。

「ルーク……なのか？」

恐る恐る、ライオットが語りかける。

だが、ソレは答えを返さない。俯いた顔にある黄金の双眸は光を失っていた。

どうすればいいのかわからず、四人ともが困惑した時、彼の腕の中の卵に変化が生じた。

それぞれ内側から、黄金と青い光を放つと、ポロポロと殻が剥がれ始めたのだ。

みるみるうちに壊れた卵の中から解放されたのは——金髪の少女と、亜麻色の髪の青年。

水に閉ざされていた二人の間は、不思議な力でも働いているようにゆっくりと床に落ちる。

静かに横たわった少年と青年は、ライオット達の前で微かに呼吸をした。

「生きておる、ようじゃの」

「霜が彼らを封じ、同時に守っていたということでしょうか」
「だが、こつちの坊主は……」

青年の方を見聞して、ライオットが顔をしかめる。

全身に切り傷を負った青年は、その腹部が背骨に到達する寸前まで引き裂かれていた。

幸いにも氷の中に臓物は留められているようだが、あと幾ばくもしないうちに命を終えるだろう。

一方で少女の方は、火傷らしき部分に霜が張り付いているのみ。それが逆に炎症を抑えているようだ。

（お前は……この二人を、守ろうとしたのか？）

壁に背を預けたまま、死んだように動かないソレを一瞥する。

すると、ずっと黙り込んでいたバルドが突然黒衣の少年をライオットの腕の中に預けた。

「つと!?! 旦那? いきなりどうし——」

「……………」

疑問を投げかけようとして、騎士の横顔に口を嚙む。

バルドは、ルークの正面に立った。

おもむろに跪いて、上半身をさらに近づける。

そして、伸ばした右手で……霜に覆われた頭を、そつと撫でた。

「……………よくぞ、守り抜いた。愛すべきものを、愛し通したのだな」

その声には。

猛るような怒りも、煮え立つような憎悪も、あらゆる負の感情は存在せず。

ただただ、どこまでも純粹に慈しむような——愛するように、温かな感情がこもっていた。

「お前は、私の……私の、誇りだ。幾星霜の時の果てに出会えた……………我が、息子よ」

「……………は？」

「ほう？」

「……………やはりか」

大事な子供に、壊さないように触れる不器用な父のように。

何度もその頭を撫でたバルドは、そのうち手を引くと立ち上がった。

「——で、あれば。お前の父として、騎士として。私も、為すべきことを為そうではないか」

バルドの言葉には、これまでの三百年の生の中で何よりも強固な意思が込められていた。

あまりの覇気に、先の言葉への驚愕も忘れ、ライオットはその背中に見入ってしまった。

バルドは、《翁竜の黒盾》から《赤竜の尾刃》を引き抜くと床に突き刺した。

そして、死にかけている青年——ユージオの傍までやってくると、大盾を籠手から取り外す。

両の手で持ったそれを大きく振り翳し、一思いに床に強く打ち付けた。

「システム・コールッ！ “エンハンス・アーマメント” —— ツ!!」

その力が、再び解放される。

部屋全体を揺るがすほどの声で命じられた大盾は、秘められた意思を現出させる。直径にして五メルの巨大な円環が床の上に展開し、黒光でユージオを包み込んだ。

「叡智を司りし翁よ。財を尊ぶ黒き竜よ。この慈しむべき小さな命を、宝へと変えん——」

担い手たるバルドの願いに応え、その竜具は恐るべき力を行使した。

ユージオの体を繋ぎ止めていた氷が、みるみるうちに溶けてゆく。

時を巻き戻すかのように黒光が傷を塞ぎ、癒し、腹部の大穴さえも治してみせた。

だが、それだけでは不十分だ。これほどの損傷を急激に治せば、逆に肉体が壊れてしまふ。

——キイン

その時、彼が手の中に握りしめていた小さな結晶が輝きを放つ。

確かにそれを目にしたバルドは、僅かに驚いた後に、肯定するように深く頷いた。

「ぬうん……………ッ！」

今一度、大盾で床を強打する。

すると、光の帯が結晶と、更に黒衣の少年が握っていた剣にまで伸びていった。

光が剣を持ち去っていき、そこでようやく、「あ……」と少年が声を漏らす。

手を伸ばした彼に構うことなく、壊れた剣と結晶がユージオの胸の上に並んだ。

「今、全てを一つに……………！」

三度目に、大盾が床を叩いて。

一際強い光が、その三つを包み込んで輪郭を融かしていった。

輝く塊になった、人と、結晶と、剣が、一つにより合わさり、結合して、新たな形になつていく。

少しずつ光が収まっていくと、そこにあつたのは一振りの剣だった。

元となった《青薔薇の剣》と酷似した形をしたその刀身の内側に、黄金の筋が伝つていく。

血管のように張り巡らされたそれが鏢に到達し、元から存在した青薔薇と反対の面に黄金の薔薇を咲かせた。

新たに生まれ変わった美しいその剣は、小さく鼓動を放ちながらも下に降りていく。残っていた鞘がひとりでに浮き上がり、剣を納めて……スワロウが両手を差し出して受け止めた。

それと同時に、光の円環が消滅する。

発生源である《翁童の黒盾》に収束していくと、その上下に刻まれた紋章が色褪せた。バルドもまた、大きく疲労したように深く息を吐き出す。

「……………これが。今の私にできる、精一杯だ」

「よくやったのう。流石は人類最強の騎士と言うべきか」

カーデイナルの賞賛に、バルドは小さく頷いた。

その剣……………《青金薔薇の剣》を丁重に扱いながら、スワロウも微笑む。

「お見事です、バルド様。盾の支配術では治癒できず、無理に治せば肉体が崩壊してしま
うところを、神器と融合させることでその天命回復機能を活用するとは」

「……………苦肉の策だ」

「ですが、最善かと。あのまま彼を見捨てるよりは余程素晴らしい判断でしょう。改め
てこのスワロウ、心から敬服いたします」

深く頭を垂れ、敬愛を捧げる使者に、バルドは相変わらず能面のような表情をした。
彼にとってこれは、息子の奮闘に比べれば酷く中途半端な行いに思えたのである。

それに、これで数百年間溜め込み続けた、大盾の治癒能力は大幅に失われてしまった。

一部始終を呆気にとられたまま見届けたライオットは、ようやく我に返る。

そして、目の前で繰り広げられた会話の意味を、時間をかけて理解した。

「……つまり、こういうことか？ その剣を他の神器みたいに手入れして、鞘に収め、聖力を吸わせることで、融合したあの坊主も再生する」

「その通りでございます。とはいえ、通常の神器が天命を回復させるより、長い時間を要するでしょうが」

「結局生きてるんなら、目覚めた時には納得するだろうよ」

バルドの決断は決して間違ったものではないと、緋髪の騎士は肯定する。

彼が力を使った理由が、よもやルークとの血縁関係だとは思ってもよらなかったが……それも因果かと、自分を納得させたライオットはある方向へ顔を向けた。

「さて。それじゃあ後は、こいつを起こすだけだ」

「見たところ、随分と天命が減っているようです。念の為に治療をしておきましょう」
スワロウがどこからともなく一冊の本を取り出し、それをリソースにして治療術を発動する。

氷の中に閉じ籠り、ユージオとアリスに譲渡し続けていたルークの天命が一瞬で再生した。

ライオットがジトリと目を細める。

「おい、蓄えは使い切ったんじゃないのか？」

「何事にも密かな備えというものは重要です」

「つまり？」

「はつきり申し上げますと、私が個人的に隠し持っていたヘソクリでございます」

「まったく。お主の秘密主義にはほとほと呆れかえるわ」

「……だが、感謝する」

呆れる緋髪の騎士や、賢者、軽く頭を下げる炎の騎士に、スワロウは片目を瞑った。

「まあいい。それよりさっさと目覚めさせるぞ、いつまでもこんなところに寝かしてられん」

気を取り直し、ライオットがルークに歩み寄る。

バルドがそうしたように目の前で跪くと、霜が取れたその肩に手を置いた。

「起きろ、ルーク。全部終わったぞ。お前はやりきったんだ」

二度三度と、その意識を揺さぶるように体を揺らす。

しばらく続けていると、ピクリと地面に投げ出された指先が動いた。

ずつとか細かった呼吸が、口を開けて大きく行われ、胸が膨らむ。

そして、凝り固まった骨をほぐすような音で、その首が持ち上げられた。

覚醒したことを確認しながら、ライオットはいつものように不敵な笑みを準備する。まずは記憶解放術を使った説教と、それから健闘を讃えようと考えていた。

他の三人も、それぞれ彼らなりの言葉を贈ろうと、顔を上げるまでの僅かな時間を待つ。

そうして、ついにルークの顔が四人に向けられ。

「」。――「」。

全員が、凍りついた。

動きを止め、言葉も忘れ、感情を空白にし。

自分達を不思議そうに見上げる——赤子のような金色の瞳に、戦慄する。

そこにもう、
ルークはいなかった。

「……………う、あ？」

【幕間】 現実3

第一部 登場人物紹介

ルーク

イメージCV：中村悠一

本作の主人公。年齢は十九歳を迎える間近であった。

ルーリッドの村で衛士の天職を得た少年であり、先代衛士長の息子ジンクにはよく突っかかられていた。

非常に頭が良く、勤勉。村の規則や禁忌目録すら網羅する程で、学院においても座学や神聖術の成績は非常に良かった。

それに比肩して剣技の腕前も高く、元より天職を授かった当時から積み重ねた修練と、キリトより教わった刀系ソードスキルを使う。

とはいえ、彼は直剣や二刀流のスキルしか使ったことはなく、仲間であるクラインや他プレイヤーなどのプレイを見て、ソードスキルの体系を把握していたにすぎない。

修練の末に、彼は口で伝えられただけの数々の秘奥義を習得した。

長い灰色の髪と、同じ色の瞳が特徴的な整った顔立ちの青年。背は高く、180センチを少し超えていた。

彼のフラクトライトの根底にあるものは「守護」の心意。大切な誰かを、いつか大きく羽ばたくその日まで守り続ける、兄のような慈愛である。

最後の瞬間までその願いを追い続け、彼は白い彼方へと翼を広げて飛び去っていった。

《白竜の剣》

イメージC V：桐本拓哉

ルークの愛剣。刀に酷似した形状の、特殊な神器級オブジェクト。

北の洞窟にて息絶えていた白竜の骸、その最も硬く、鋭い牙から削り出されたもの。

システムの初期化をロックされている白竜のフラクトライトデータを宿しており、ルークの心意に呼応して覚醒した。

秘められた力は心意への直接的干渉による攻撃、すなわち魂の断罪。

最も気高く、高潔で、どの竜よりも無慈悲なる執行者。

己が欲望、傲慢とさえ呼べるほどの守護の矜持を誇り、同じものを抱いたルークをこそ担い手として選んだ。

たとえ彼の身が砕けようとも、願いを果たすための翼を与えたのだ。

ルルディ・クローマ／かみじつこくあやか上捨石彩華

イメージCV：伊瀬茉莉也

ルークを傍付きとして選んだ、序列第三位の上級修劍士。

この世のものとは思えない美貌と、謎めいた微笑が万人を虜にする絶世の美女。

皇帝に仕えるほどの劍士を輩出し続けるクローマ第二爵氏家の子女であり、かつて最高の劍士と謳われた少女の再来とされた女劍士。

腐敗に沈んだ貴族達の中で、穢れず燦然と輝き続ける大華のような人物である。

ルークを1年間翻弄し続け、様々なことを教え、大切な真実を授けた。

その正体は、かみじつこくあやかラーズのスタツフであり、一流のゲームデザイナーである現実世界の技術者、かみじつこくあやか上捨石彩華。

アンダーワールドの基底コンセプト……環境データや生物データ、人界と暗黒領域という二つの世界をも作り上げた第一人者である。

彼女は、自分の作り上げた小さな、しかし確かに命の育まれるその世界に、一人の少年を見つけた。

眩く輝く、星のような魂。その煌めきに魅せられて、かつての記憶への哀愁とともに、再びその世界へ落ちたのである。

セフィア

イメージCV：井上喜久子

ルークの母。年齢は秘密。年不相応な美貌を誇る、天然な部分が目立つ女性。

反面、女手一人で彼を育て上げた女傑であり、その優しさと芯の強さからルーリッドでは多くの人に愛されている。

息子を何よりも愛しており、時に抱きしめ、時に導き、時に送り出した。

いつか、自分の使命を果たした愛する人と共に、彼が立派な騎士になつて帰ってくることを待ち望んでいる。

ずっと、いつまでも。

シャーリー・テイリーモア

イメージCV：富田美優

ルークの傍付きとして指名された初等修劍士。

人形のような可愛らしい容姿と、乏しい表情が特徴的な、紫髪の少女。

劍を好み、劍に生きることを楽しみとして生きてきた彼女は、より高みへと昇るために学院へと入学して。

そこで、運命の出会いを果たした。誰よりも強い心を持った、心の底から敬愛する一人の青年と。

いつかその隣にいたいことを望み、恋焦がれた彼女は、咎人となってしまった愛する青年を取り戻すことを誓う。

騎士に叙されるその日を目指し、彼の笑顔を思い浮かべ。今日も彼女は劍を振る。

セルカ

アリスの妹であり、ルーリッドの村の教会で修道女見習いとして励んでいる少女。アリスの一件で長い間ルークとは疎遠になっていたが、北の洞窟の事件を経て和解した。

姉がそうであったように、村の子供達をいつも面倒見よく世話する彼を、兄のように慕っていた。

彼女は願う。彼と、一緒に旅立っていった二人の少年の安息と幸福を。

そして、あの優しい兄が、姉を救い出し、少年たちと共に帰ってくることを。

キリト

言わずと知れた原作主人公。ある事件により、アンダーワールド内にやってきた少年。年。

ギガスシダーの根元でユージオと出会った彼は、ルークと出会い、三人で闇の尖兵と戦って、遙かな旅路を歩んだ。

都市から央都へ、央都から塔へ。反逆者として、この世界の異端者として、彼は二人の友と一緒にこの世界を駆け抜けた。

いつか、愛する人達がいる現実世界に帰ることを願って。

そして二年以上もの時を過ごした、この世界の未来を思いながら。

ユージオ

アリシゼーション編のもう一人の主人公とも言える少年。

キリトと出会ったことで、長い年月止まったままの自分の時間を動かし、アリスを取り戻すために旅立った。

彼に剣技を教わり、ルークと三人で切磋琢磨をしながら、純粋に一人の少女を追いかけた。

やがて、女神に惑わされ、その呪縛から解き放たれ、己の使命を果たして。

そして、友が繋いだ絆によりその身を一振りの剣へと封じ込め、眠りにつく。

いつか、大切な人達全てと笑顔で再会することを夢見て。

アリス・シンセシス・サーティ／アリスⅡツベルク

かつて暗黒領域の地に触れ、罪人として連れ去られた少女。ルークとキリト、ユーージオの幼馴染でもある。

女神の術により、黄金の整合騎士として生まれ変わった彼女は、真実を知り、神への叛逆を決意した。

幼い彼女は、ルークを本当の兄のように慕い、親愛を寄せていた。

それはかつて、アリスⅡツベルクだった頃に人界の全てを愛していたように、深い心で。

女神の支配など軽々と超えてみせる愛を、未だその胸に抱いたまま。

ティーゼ・シュトリーネン

ロニエ・アラベル

キリトとユーージオの傍付きであった少女達。無垢に正義の行方を追い求める、未だ道

半ばの存在。

シャーリーの友人でもあり、日々過酷な自主鍛錬に明け暮れる彼女を心配している。

また、自分達を守ったせいで連れ去られてしまった、二人の剣士を想いながら。

アズリカ

北セントリア央都修剣学院の初等寮の寮監にして、かつて代表剣士として名を馳せた剣士。

ユージオの瞳を癒し、三人の旅立ちを見送った彼女は、その手の中にある四つ葉の耳飾りを見つめる。

遠い昔、美しくも優しい女と、勇猛なれど面倒見の良い男と共に語らう誰かを、夢に見ながら。

イーデイス・シンセシス・テン

十番目の整合騎士。アリスを妹のように慕う騎士であり、神器《閻斬劍》を操る。スマホのアプリゲームから参戦、今作のメインヒロイン。

己の使命とその孤独さに苦悩していたルークの前に現れた、深い慈愛と信念を持つ女性。

その魂の輝きに青年は惹かれ、しかし、ついぞ自分の想いを理解することはなくその自我を消滅させた。

彼女は他者を守ろうとするあまり、自分を守らないあの少年を、心の中で案じ続ける。

ライオット・シンセシス・サーティーン

イメージCV：神奈延年

本作におけるオリジナル整合騎士。十三番目の騎士にして、初代北セントリア修剣学院代表騎士だった男。

燃えるような緋色の髪と瞳を持つ好青年。しかして二百年以上の戦いをくぐり抜けた歴戦の騎士であり、その実力は騎士団内で序列五位に位置する。

ルークと同じ竜の神器、《竜具》に選ばれた担い手であり、白い使者によって女神アド

ミニストレータへの反逆を狙い続けていた。

そのフラクトライトに刻まれた最も強い心意は「矜持」。誰より強く、勇敢たれというその誇りが、整合騎士となつてなお彼を大いなる蒼き竜に選ばせた。

騎士は、絶望した。戦いの果てに愛するものを守り、代償に全てを失った、ようやく見つけた好敵手に。

《蒼竜の琴剣》

イメージＣＶ：青木瑠璃子

ライオットが携える神器。二振りの刃を持つ、唯一無二の神器である。

彼によつて打ち倒された大いなる蒼き竜の蒼角から、最高司祭の手によつて生み出された神器級オブジェクト。

秘められた力は音を操り刃を成し、嵐をも形作る天災の如き力。

己が身を打ち倒した無双の実力と、その矜持に呼応して意思を目覚めさせ、力を貸した。

同胞であり、番つがいでもある白き竜の最大の理解者にして、苦惱者である。

スワロウ

イメージCV：櫻井孝宏

長身瘦躯の美青年。全てが白い、燕尾服の不思議な使者。

その正体は、アンダーワールドの初期においてログインしていたラーズのスタッフ達のメンタルケアを担当していたAI。

彼らがログアウトしたのち、四百五十年もの間アンダーワールドを見守り続け、やがて現れた篡奪者たる女神に叛逆した。

長い時は、人間の感情を模倣して治療に用いることしかできなかった彼の中に心を産み、使命を生んだ。

あらゆる心に平穏を。慈しむべきこの世界に、どうか安らかな幸せを。

カーディナル

もう一人の世界の調律者であり、アドミニストレータによって生み出された第二の人格とも呼べる存在。

メインプロセスであるアドミニストレータの暴走に、それを修正すべきサブプロセスとして長い戦いを続けていた。

しかし、剣の人形を前にして絶対唯一の弱点である、人を殺せないという掟に敗北を認め、己が身を差し出そうと決意する。

その献身は、白い竜となった一人の少年によって果たされることはなかった。

バルド・シンセシス・ゼロ

イメージCV：中田譲治

第零の騎士。

アドミニストレータの敬神モジュールに、意志の力だけで抗った魂を持つ最強の男。

かつて、第一の整合騎士ベルクーリと共に辺境の地より連れ去られた、超高位の権限と強靱な肉體、無二の剣技を持つ岩のような偉丈夫。

壊れた心には女神への復讐心と、そして未だ傀儡とされている友への友愛ばかりがあ

る。

そのフラクトライトに刻まれた心意は「闘争」と「慈愛」。相反する二つの強い心意が、彼を二つの竜の魂に認めさせた。

三百年の時の果て、ついに白亜の塔へと舞い戻った彼は、しかし復讐を果たすことはできなかった。

それよりも大切なものと、出会ってしまったが故に。

《翁竜の黒盾》

バルドの操る二つの竜具の片割れ。この世で最も膨大な天命と優先度を持つ絶対の盾。

叡智を司る賢者にして、もつとも慈愛に溢れ、財を尊んだ黒き竜の一際硬い、心臓を守る逆鱗から生み出された。

秘められた力は治癒。解放することによって、あらゆる痛みと病を癒し、生命をもたらす。

女神の支配を上回るほどの友への愛を持つバルドに、その資格ありとして己の魂を預

けた。

四聖竜の中で最も賢き、未来すら予見する竜である。

《赤竜の尾刃》

バルドの操る二つの竜具、そのもう一方。西の大火山に住まう赤き蛇竜の、鞭のような尾の骨から生み出された。

炎によつてその刃を分かち、凄まじい素早さと鋭さを以つてあらゆる敵を粉碎する。秘められた力は無限連鎖。自らの象徴でもある炎によつて無限に刃を伸ばし、必ず獲物を仕留めるまで狩り続ける。

激しい怒りと闘争心を秘めたバルドにその資格ありとして、己の魂を発現させた。

鱗や骨、皮膚、己のあらゆるものを使った、ソルスの光を力とする鎧と共に、復讐の騎士に力を与える。

ただひたすらに、闘争を。魂を焦がし、極限の死と隣り合わせる戦いを、永久に。

アドミニストレータ

人界を統べ、その箱庭を作り上げた存在。

貴族の支配欲の象徴として生を受け、やがて人の子から神へと至った篡奪者。

あらゆる生命を、世界を手中に収めることを熱望した彼女は、かつて己を裏切った騎士の息子と、異邦の剣士と、亜麻色の髪青年。そして、金髪の少女の愛に敗れ去った。

最後まで、その胸に果てしない支配という名の愛を燻らせながら。

デザインナー3

(……………まったく。なんて災難なのかしら)

はあ、という深いため息が、口から漏れ出る。

それは、自分の不運さに対する諦観であり、つまらないミスを起こしたことへの小さな叱咤であり。

現状を引き起こした、とある者達への堪え難い怒りであった。

それら全てを凝縮し、なお余りあるものかもやもやと胸を不快にさせる。

「……………よくもやってくれたわね、あの腐れ野郎ども」

つい思わず、そんな言葉が漏れ出てしまう程に。

柄にもなく、イライラとしてしまっている様は、しかし彼女自身以外には誰も知らない。

それも当然。何故ならこの場所……………ごく小さな避難用シエルターの中には、彩華

しかないのだから。

事の起こりは、四十分程前。

彼女はメインコントロール室で菊岡と一言、二言話してから、自室に引き返そうとした。

その時、突如として施設中に警報が鳴り響いた。

自分のみならず、その場の全員が驚いて動きを止める中、自動音声避難を呼びかける。

以前、緊急時に備えた訓練の際に記憶したそれは、非正規の人間が侵入した際の警報であった。

血相を変え、直後に誰もが仕事の手を止めて船首ブロックへ避難を始める。

彩華もこんな時に限って、と舌打ちをこぼしつつも、訓練通りのルートへと向かった。幸いにも、侵入者達に出会うことはなく、あと少しで船首へ直行できる通路に入ると言う時だ。

「……………我ながら、阿呆過ぎて自分をひっぱたきたくなるわ」

呻くように毒を吐きながら、ふと自分の右足を見下ろす。

もう一方の足と揃えて地面に投げ出された白い細脚は、足首の部分が赤く腫れ、ジンジンと定期的な痛みを発していた。

（よりにもよって、自分の白衣の裾をふんずけてすっ転んだ上、足首を捻るとか……………こんな事なら、もう少しちゃんと体を動かしておくべきだったわね）

目の前で無情にも閉じた隔壁に啞然とした彩華を追い立てるように、背後から銃声らしきものが聞こえてくる。

仕方がなく、戦々恐々としながら必死に痛む片足を酷使し、近くの通気口を見つけると古い映画のように上層へ移動。

なんとかして安全な区画まで転がり込むと、手頃な個室シエルターに避難し、そして

今に至る。

今度から本格的に身体機能の改善に努めよう、と決意した。

……最も、それはこの状況を脱することができればの話であるが。

「……いい加減、自己批判はやめましょう。ただでさえこんな場所なのに、気が滅入るわ」

それよりも建設的なことを考えようと、自分を落ち着かせる。

苛立ちで沸騰した感情を、深く深呼吸して波紋ひとつない湖面のようにする。

「……よし」

完全に精神をリセットしてから、彩華は現状についての考察を始めた。

「警報から三十分以上、か……ひとまず、侵入者達の目的はこの施設の破壊ではなさそうね」

オーグマーの電子時計に表示された現在時刻を確認し、小さく呟く。

これだけの時間が経過して、自分がこの鋼鉄の亀ごと木つ端微塵になっていない事実。

それは謎の侵入者達がここを襲ってきた理由が、人命を害すること以外にあることを

示している。

同時に救援や菊岡からの連絡が来ない以上は、事態の収束もされていない可能性が非常に高い。

(まあ、十中八九アリシゼーション計画でしょう。ライトキューブクラスターやアンダーワールドのサーバーが爆破されたような音は聞こえなかった)

その二つを守るのは、最新の合金で作られた多重隔壁である。

強度は折り紙つきであり、それを破壊する威力ともなれば、その余波はこの場所まで確実に届く。

ならば次点の理由は、と頭を捻った。

(……破壊ではなく、奪取？ 研究成果、あるいは計画そのものの奪おうとしている?)

真性のボトムアップ型AI。言い換えれば、人間による人間の創造。

それが成功すれば、あらゆる面で自衛隊、ひいてはこの国は他の国より圧倒的な力を手にするだろう。

用途は数え切れないほどだが、その一つ……最も危険視すべき利用方法は、軍事利用。

それを面白く思わない人間は、国内外にごまんといるだろう。

あるいは横取りを狙っている、正体不明の何者かが襲撃を仕掛けたと考えるべきか。

(数分前、シエルター内の照明とオーグマーの回線が切れたことから、多分主電源はやられた。今は復旧しているから、予備電源を使っているのかもしれない)

論理的に可能性を取捨選択し、限りなく少ない情報から真実を探っていく。

それは全てを計算して物事を決める、研究者としての理解力と想像力の発揮だった。

(この計画の機密性の高さを考えれば、国家レベルの思惑が動いているとしか思えない……単なるテロリストや海賊ごときの作戦規模じゃないわ)

それほどのことを迅速に成し遂げられるのは、やはり一介の犯罪者にはできない芸当だ。

アリシゼーション計画はあらゆる意味で、新しい時代の鍵となるもの。考えたくはないが……内部からの情報漏洩があったのだろう。その者が侵入を手引したのかもしれない。

（そいつを見つげ出してぶん殴りたいけど、それは後。今は私にできることを考えなくては）

知つての通り、彩華は転んだだけで足を挫くような虚弱さである。

武装している侵入者達をどうこうすることはおろか、一般人の男にさえ勝てるか怪しい。

「……待つて。なんで物理的に解決しようとしてるの、私」

どうやらまだ完全には頭が冷えていないらしい。

もしかしたら、まだ「女剣士ルルデイ」であつた頃の間が抜けていないのか。もう一度、改めて深呼吸した。

今度はしつかり、研究者らしく技術的な打開策を見つげるために頭を働かせる。

侵入者や裏切り者の正体が何であれ、それは彩華が何かしらできる問題ではない。肝心なのは、彼らが手に入れようとしているものを守ることだ。

《A. L. I. C. E》。ボトムアップ型AIの到達点。人格と記憶、感情……あるいは心と呼ばれるものを有し、その全てを自己的判断によって行使することのできる知能。それがもう完成しているとすれば？)

自分が内部に入り、そして自室のパソコンの前から離れた間に、計画が次の段階に進んでいたとしたら。

それを確かめるすべは、残念ながらここにはないが……《A. L. I. C. E》に至っていない人工知能を奪取したところで大した意味はない。

であれば、それが確定的な事実だと仮定して、さらに思考を深めていく。

(心当たりは……ある。たった一人だけ)

偶然か必然か。あの日、PCに表示された一つのログから関わることを決めた少年。一途に願いを追いかける眩しいばかりのフラクトライトは、鮮明な輝きを放つてい

た。

(ルークという名を持ったあの人工フラクトライトが、《A・L・I・C・E》になれたのかもしれない)

一年という内部時間を通してルークを観察し、その可能性は極めて高いと判断した。

それ以外のアンダーワールド人も、彼を導く傍らで入念に調査したが、少なくとも自分には見つけられなかった。

(だとするならば。私がすべきこと……それは、ただ一つ)

その目的を、彩華は自分の中で定めていく。

襲撃者達よりも早く、ルークを保護する。

もし彼以外のヒューマン・ユニットが《A. L. I. C. E》になつていたとしても、そちらを保護すればよい。

そうして彼あるいは《A. L. I. C. E》に至つたアンダーワールド人のライトキューブを、菊岡達へ届けるのだ。

それがあの世界の基底をデザインし、役目を終えてなお、この鋼の大亀に居座つた自分の義務であろう。

（アンダーワールドは、私の最高傑作。儂くも愛しい、私の世界。それを、誰かもわからない連中に好き勝手されてたまるものですか）

再びあの世界へ飛び込んで、そこで得た記憶から重ねた愛が、彩華に決意させた。

勝手な行動をして、後ほど菊岡から叱責を受け、あるいは何かしらの罰を課せられたとしても。

それでもあの世界を、そこで生まれた新しいカタチの人を守ることができればのなら、研究者としてこれほどの達成感はない。

（問題は、その方法ね。迂闊に外に出られない以上、コントロール室に行くのは無理。UW内部に入るとしても、このシエルターから私の部屋のSTLまでたどり着くのも……そっちの方がよっぽど困難ね）

いつ頭を撃ち抜かれるかわからない中で、数百メートル下の自室に戻るなど自殺行為でしかない。

今この場所、この身一つで、どうにかしてアンダーワールドを魔の手から救うしかないのだ。

「……それってかなりの無理ゲーじゃない？」

相当な無理難題に、思わず後頭部を後ろの壁に押し付け、薄暗い天井を仰ぎ見た。

長く考え込んで少し痛む頭を空っぽにして、無感動に闇を眺める。

「……菊岡さん達はどうか動くのかしらね」

先刻、第一と第二隔壁がロックされた旨のアナウンスが分厚い扉の向こうから聞こえた。

おそらく上司や同僚達は、自分と違いしっかりとサブコントロール室まで退避しているのだろう。

彼らも、第一に憂慮すべきこの問題を解決しようとするはずだ。

「考えられるのは、メインコントロールのロックと、直接ライトキューブを取られないようにクラスターの保護、かな」

メインコントロール室は襲撃者に制圧されているだろう現状で、一番現実的な対処を思い浮かべる。

その場合、彼らはいかにして襲撃者より先に《A. L. I. C. E》を手に入れようとするだろうか。

「おそらくは、上層にあるSTLによる内部からの《A. L. I. C. E》救出
……………あ」

そこで、ようやく彩華はとあることを思い出した。

桐ヶ谷和人。今もSTLに繋がれているであろう、療養中の少年。

当然のことながらSTLも主電源に接続されており、それが一度絶たれてしまった時に何かしら影響が出たかもしれない。

(あのマシンの構造は、実際に使ってもまるでわからないくらい複雑だけれど……彼、大丈夫かしら?)

フラクトライトにさらなる衝撃を受け、内部に意識を囚われたまま植物状態にでもなっていないか。

彼を心底から心配そうに見つめる少女の横顔を思い出して、少しだけ巻き込まれたことに不憫さを覚えた。

(まあ、それを言ったら私もか。ついでに桐ヶ谷君の様子も見ておくべきかしらね)

だがその前に、兎にも角にもログインする方法だ。

また問題が最初の時点で逆戻りし、彩華は顔を渋くさせてしまう。

「ああもう、ままならないっていうのはこういう事ね……………ん?」

何かないのかと、目線だけを周囲に巡らせた時。

不意に、オーグマーの三次元的AR画面にあるものを見つけた。

それは部屋のPCと同期させた回線から届いたメールであり、便箋型のアイコンの右上にある丸点が明滅している。

「オーグマー。そのファイルを開いてちょうだい」

音声認識で指示をすれば、機械は正確に読み取ってメールを開封した。

果たして、この状況下で己の存在を示したそこに秘められていたものは……

「……アンダーワールド内部からの、緊急権限使用報告？」

序文に書かれていた内容を、思わず口に出して読む。

そこに羅列されていたのは、アンダーワールド内部でスーパーアカウント級の権限が行使されたというもの。

ラース側が非常時に内部を観察、操作する為に用意されたいくつかの超高位アカウントに許された行為を、何者かが実行したのだ。

それを告知される、最高責任者の末席に座っている彩華は眉を顰める。

「襲撃者……じゃ、ないわよね」

（比嘉くんあたりが人界のアカウントはロックしているだろうし。何より一時間以上前の通知になっている）

権限の行使された座標は、人界の中心。

公理教会、と内部では呼ばれていた、不審な統治組織の最上階付近と一致している。そんな場所で誰が、カーディナルシステムに匹敵するような大規模術式を使用したというのか。

ラース側でも、襲撃者側でもないとするれば、一体……。

不審に思いながらも、指でスクロールして詳細な情報を見ていく。

そして、ついに右側のバーが下まで降り切った時。

『I know you, the creator of a wonderful world.』

そこには強調するように、一文が添えられていた。

「私は……君を、知っている？」

以前、アカウントのテスト運用で確認したメールとは違う、異質な英文。

それに思わず手を引いていると、文字がメールのボックスの中で崩壊した。

崩れた文章はみるみるうちに分解され、そしてあるウィンドウが表示される。

「これ、は……………」

そのウィンドウに、表示されていたものは。

彩華が、アンダーワールドにSTLでログインしていた際のアカウント情報と。

あの世界の、何処かの座標へと設定されたリンクであった。

それは、彩華に一つのメッセージを示している。

三度、彼女がアンダーワールドへと舞い戻ることを、誰かが望んでいるのだ。

(……タイミングがよすぎる。これは敵？ それとも味方？)

あまりにもできすぎていることに、深い猜疑心を抱かざるをえない。

研究者として、不確実なものに安易に手を出すことだけはタブーなのだ。

おとがいに手をやり、考え出そうとした彼女の出鼻を挫くように、新たなウィンドウが現れる。

『You must save him, right now.』

「彼？ 救うって、誰を……っ！」

その瞬間、天啓のようなものが舞い降りた。

一瞬にして謎の英文が言わんとすることを理解した彩華は、食い入るようにそのリンクを見つめる。

そして、これまでの人生において最速に思考を回転させ、あらゆる計算と推測を行った。

危険性は極めて高い。何かしらの罫である可能性も十分。取り合うべきでないという性は訴える。

だが。

「……どこの誰だか知らないけれど、いいわ。乗ってやろうじゃない」

彩華は、既に踏み出すことを決めていた。

「菊岡さんへの説明は……まあ、また後で考えましょうか」

唯一の懸念を、ひとまず脇に追いやって。

はやるような気持ちを抑えながら、その指先でリンクをタップした。

すると、「ルルディ・クローマ」のアカウント情報がアンロック状態に移行し、適用される。

瞬く間にオーグマーへSTL0号機と外部を経由した極秘回線が繋がれ、保存されたデータをダウンロード。

みるみるうちに横向きのバーが満たされ、最後にY / N? のボタンが表示され

た。

「決まっているだろう？」

かつて、彼の前でそうしたように勇ましい口調で不敵に笑う。

迷いなく、その最後通告とも呼べるものをYESに押し込んだ。

瞬間、全ての情報が起動し、オーグマーは擬似的なSTL外部接続機へと早変わりして。

彩華の視界を、真っ白な光が包み込み――

——その白光の向こうに、草原に佇む、大きすぎる翼を背負った誰かを幻視した。

【第五章】真の心

仮初の平穩

人界曆380年、10月21日。

命の芽吹く春は過ぎ去り、瞬く間にソルスがその輝きを増して万物を照りつけ始めた。

人々がその熱に耐えながら己の天職を真つ当する季節もまた終わりを迎える。そして今、人界には秋が訪れている。

青々と生い茂っていた木々は紅葉を迎え、あれほど鬱陶しかった熱気が寒気に移りゆく。

自然の合奏を奏でていた虫達の声が消え、情景の美しさとは裏腹に、俄かに冬の到

来を感じさせた。

村々は厳しい冬を乗り越えるため、畑仕事に精を出し、蓄えを始める。それは勿論、北方の端、ルーリッドの村でも。

村の外れ、周囲を鬱蒼とした森に囲まれた場所。

そこに立つのは一軒の丸太小屋。とても小さく、一人の人間が住めるかといったところ。

傍にある大きな木の空には、小屋に似つかわしくない立派な銀の鱗を備えた飛竜が眠っている。

「んっ……しよ、と」

その主人は、小屋の前にある小さな畑で菜園に励んでいた。

少し力んで、両手で抜き出した白いカブを見て、彼女は絹のケープの下で小さく微笑む。

美しいかんばせと、金を鑄溶かしたような髪に似つかわしい格好ではないのに、少し様になっていた。

「よし。これならキリトに、少しは栄養をつけてあげられますね」

誰に聞かせるでもなく、そんなことを言つて傍の布袋に大事そうに根菜を入れる。

幾らか重いそれを手に立ち上がると、ふと何かに気がついたように右側が眼帯に覆われた隻眼を巡らせた。

「アリス姉様——！」

「セルカ！」

獣道を駆け、彼女……アリスの名前を呼ぶ、修道女見習いの少女。

実の妹であるその娘は、明るい笑顔で大きく手を振りながら、アリスへと近づいてくる。

そして、速度を緩めつつ思い切り抱きついた。

「姉様、おはよう！ 今日調子はいいい？」

「ええ、お陰様で。あなたこそ、平気なのですか？ 体調は？ ちゃんと暖かくしている？」

「うん。ねえアリス姉様、今日は天気がいいから東の丘に行かない？」

胸の中から自分を見上げる瞳に、少しだけ口を開いて言い淀む。

何かを逡巡するようにして、けれどすぐに笑みを形作ると、妹に頷いた。

「いいわ。行きましようか」

「やったっ」

嬉しそうに笑うセルカに、愛おしさが胸の中にじんわりと広がる。その無垢さと、自分の中に存在する偽りから目を逸らすように空を見上げた。

数日続いた寒々しさはソルスの熱を奪っていたが、今日はセルカの言う通り快晴だ。ぽかぽかと照りつける陽光は心地よく、だからこそ朝から菜園の手入れに臨んでいたのだが。

そんな事を思いながら顔を下げれば、ふとセルカが自分の背後を見ている。

「……ねえ。キリトも、連れて行っていい？」

今度こそ、アリスは聞こえるほどに息を呑んだ。

数秒の間硬直し、眉尻を下げて……それをセルカが不安げに見つめる。

彼女の前で暗い顔をしてはいけない、という直感じみた考えが脳裏を過ぎり、咄嗟に笑った。

「ええ、いいわよ。こんな日に外に出ないなんて、勿体ないものね」

「よかった。じゃあ、待ってるね」

「……ええ」

体を話したセルカの頭を撫で、身を翻すと小屋へ向かう。

石を削って作られた二、三段の階段を登ると、木製の扉を開いた。中に入つてすぐ、食堂と台所を兼ねた、二間しかない内装が露わになる。この半年ですつかり見慣れた仮の我が家に、アリスは食堂のテーブルを見た。

白い木で作られた、真新しい丸机。

それを挟んだ向こう側で、同じ色の椅子に一人の少年が座っている。

「……………セルカが来たわ。少し、散歩に行きましょう」

声をかけども、その少年は答えず。

ぼうつと机を見つめる、長い髪の奥にある光のない黒い瞳に意思はなく、生気が感じられない。

ゆつたりとした服の上からでもわかるやせ細った体と、中身のない右の袖が痛々しかった。

胸を苛む痛みにグツと唇を噛んで、アリスは優しい声を掛ける。

「待つてね。すぐに支度をしてあげるから」

少年の横を通り過ぎ、奥のベッドの隣にある箆筒たんすを開いた。

そこから厚めの外套と首巻きを取り出すと、自分で動くことのできない少年に着せて

いく。

質素な造りの車椅子に、一念発起して彼の体を移したところで、ようやく反応を示した。

「あ…………あ……………」

「……………そうだったわね。ごめんなさい、忘れるところだったわ」

言葉ですらない、胡乱な音を口から発しながら、彼が腕を伸ばすものを見やる。

壁に掛けられた、ふた振りの剣。鞘に収まり、窓から陽光が差し込む位置にある。

全てが黒造りの剣と、水晶色に黄金の装飾が目立つ美しい剣は、手に取るととても重かった。

それらを少年の股の間に置けば、彼は腕全体で包み込むように抱えて、ようやく大人しくなる。

その姿に、込み上げるものを我慢できずに、アリスは後ろから彼の首に両の腕を回した。

「ごめんなさい、キリト……………私、何もしてあげられなくて……………っ……………」

懺悔のような、彼女の嗚咽に。

やはり、少年は何も答えなかった。

しばらくして、落ち着いたアリスは車椅子を押しながら小屋を出る。

慎重に階段横の滑らかな板でキリトを乗せた車椅子を外へ出すと、彼の後頭部から前へ目を写した。

窓の外から見えた通り、そこにはセルカが立つて待っていた。

「セル……」

名前を呼ぼうとして。

彼女が、自分達とは違う方向を凝視していることに気がつき、口を嚙む。

そして、彼女が見ている方を見て……思わず、驚きに目を細めた。

グルルル……

自分の騎竜が、寝床から出ている。

そののみならず、とても大柄な人物にこうべを垂れ、気持ち良さげに唸っていた。

その頭を、擦り切れた深い赤色のローブに身を包んだ人物が撫でている。

「……高潔なる騎竜よ。お前が今日も、主人と、神殺しの英雄を守っているのか」

聞こえた声は、心の底まで響いてくるような重厚なもの。

一言きりで話さなくなったその人物は、ゆっくりと手を引くと立ち上がる。巖のような巨体が屹立すると——アリス達の方へと振り向いた。

深く被ったフードに隠れて、固く引き結ばれた口元しかアリス達には見えない。

思わず身構えた瞬間、その人物は懐から何かを取り出すと、そつと足元に置いた。

「……………」

やはり何かを言うこともなく。踵を返したその人物は立ち去った。

茂みの向こう側、木々の作り出す影に溶けるように背中が消えていくまで、アリスは見送る。

「…………お姉様」

「…………セルカ。キリトを見ていて」

「わかったわ」

妹に少年を任せ、警戒しながらポツンと地面に置かれたものに近づく。

十分に気を引き締めながら手を伸ばし、そつと縛られた口を解いて中身を空気に晒した。

「これは…………野ウサギ?」

中に入っていたのは、二匹の丸々と太った兎。

首を断たれ、血抜きと毛皮の処理を施されたそれは、どこか慮るような意図を感じた。アリスがじつとそれを見ていると、騎竜が近寄ってきて鼻先を袋に近づける。

スン、スン……クルル

「雨縁……ええ、そうですね。夜にでも食べさせてもらいましょう」

自分の騎竜に、優しく言葉をかけて、喉元を撫でる。

そうしながら、ふとあの人物が消えていった茂みの方を見た。

(……あの騎士。いいえ、あの方は、私達など気にかげられる心情でもないでしょうに。お優しいことです)

フードの下にあるその人物の鉄面皮を思い返し、申し訳のない気持ちになる。

あの男は半年前から、とても他人を気遣うような心境ではないはずだ。

それなのに自分達を気遣っているのは……果たして、自分達を命がけで守った“彼”への想い故か。

「……私は、本当に無力です」

「アリス姉様ー?」

「今行きますよ、セルカ」

野ウサギの入った袋を手に、アリスは立ち上がり。

そうして、自分の不甲斐なさからまた目を背けるようにして、自分の大切な物達のところへ行く。

オオオオオオオオ………

北の山の方から、何かの遠吠えが耳に届いたような気がした。



その騎士は、慥然とした表情で歩いていく。

足取りも荒く、澆刺ではあれど騎士然としていた以前の姿はない。

元より人のいないカセドラルの廊下が、彼の雰囲気気圧されて静まっているかのようだ。

実際に、以前は懐かれていた修道士や修道女見習いからも少し距離を置かれているのだが。

もはや、それさえに気にする余裕がない。

——もう少しまともな顔をせんか、たわけ

そんな時、心の中に艶やかな声が響いた。

「……うるせえ」

いつもはよき助言者としてその言葉を聞き入れる騎士は、すげなく答える。

何もかもが煩わしいといった様子表情に、はあと深いため息が内心で広がった。

——この半年、そのような顔ばかりではこちらも気が滅入る。妾の担い手らしく、堂々としておれ

「余計なお世話だ。いつも通りだんまりしてろ」

もう一度、強く言い返すと、次の嘆息はなかった。

諫めても無駄だと悟ったのだろう。ようやく自分だけになり、少しだけ苛立ちが収まった。

しかし、元から燻っていたものはどうしようもなく、また眉根を寄せることになった。

誰にぶつけることもできないそれを自分の中で渦巻かせながら、目的地にたどり着く。

「ふう………」

巨大な扉の前に、深く深呼吸をして刺々しい気持ちを落ち着ける。

これから対面する人物達を前にして、流石にこの顔でいるわけにはいかない。かろうじて顔の険が取れたところで、よしと呟くと両手で扉を押し開いた。

重厚な音を立て、石造りの扉が左右へ動いていく。

ある程度まで開けば、あとは自重に任せて開いていく石板の間を潜って中へ入っていく。

そこは、神聖な空気に包まれた大回廊。

巨大な柱に支えられ、色とりどりのステンドグラスを通して差し込む光が美しく空間

を彩る。

そんな回廊の中心、ひとときわ大きな円形の天窗からは、より強く白い光が降り立っている。

すっかり修繕された《靈光の大回廊》。光の円環の中に、件の人物達は立っていた。「来たか、ライオット。こちらへ来るのじゃ」

そのうちの一人、スタッフ長杖を携えた司書姿の幼子が老獪な口調で告げる。

隣にいる、巖のような偉丈夫は何も言わず、ただ不敵に笑って腕を組んでいた。

騎士——ライオットは、表情を引き締めると二人の前へと進んでいく。

「御招来に従い、参上しました。ベルクーリ騎士団長閣下。並びに……最高司祭、カーディナル様」

握った拳を心臓の位置に、左腕を後ろ腰にやって騎士の礼を取ると、規則通りの受け答えをする。

二人は小さく頷き、それからカーディナルの発した「楽にせよ」という言葉で構えを解いた。

「忙しいところ、呼び出してすまんな。任務の方はどうじゃ」

「は。カーディナル様の読み通り、東の大門に暗黒領域の戦士達が集まっております。開戦の準備は確実かと」

「ふむ……こりやあ、戦端が開かれるのは東で決まりだな」

ライオットの報告に、悩ましげに唸ったベルクーリが顎鬚をさする。

うむ、と驚くこともなく頷いたカーディナルは、厳かな口調で語り始めた。

「間も無く、ヒューマン・エンパイアとダークテリトリーを隔てる東の大門の天命は尽き、戦乱が——『最終負荷実験』が始まる」

世界の理を知る彼女から告げられた言葉に、ライオットは総毛立った。

決められた世界の終わり。

このアンダーワールドを作り、観察している者達が仕掛けた、必定の終焉。

この時のために、人界の騎士として、担い手としてライオットは備えてきた。

だが実際に目前まで迫っていると聞くと、感じるものが違う。

「ベルクーリ。人界の民の訓練はどうなっておる」

「まずまずといったところだな。カセドラルの武器庫を大解放して指導を始めたはいいものの、半年で熟達の軍隊とはいかねえ」

「じゃろうな……こちらでも、凍結された騎士達を順次覚醒させておるが、全員は間に合わないじゃろう」

忙しいことじゃ、とカーディナルはため息をついた。

アドミニストレータを打倒し、この人界を統括する新たな最高司祭としてその席に座った彼女。

非道の権化である元老院を停止し、その職務と来たる戦争への対策を並行して行なっている彼女は多忙を極めていた。

その中で非常に難解な術である騎士達の解凍をも行なっているのだから、脱帽を禁じ得ない。

「じゃが、それもあの時、あの少年に生かされたわしの運命さだめ。全力を以つてなすべきことをなそう」

「……それで。今回、俺はどうしてわざわざ呼ばれたのでしょうか？ 任務状況の報告なら定例会議でしているはずですが」

「うむ。前置きはここまでにして、本題に入るとしよう」
鷹揚に頷いたカーディナルが、そこで一度言葉を切る。

そして、鼻の上の丸眼鏡の位置を直すと、長杖の石突で床を軽く叩き、宣言した。

「整合騎士、ライオット・シンセシス・サーティーンに命ずる。北方の地へ飛び、最強の騎士バルド・シンセシス・ゼロを連れ戻すのじゃ」



「……………」

告げられた任務の特別さに、ライオットは内心で大きく驚いた。

目を僅かに見開くだけに留め、「……詳細をお聞かせ願います」と低い声で言う。

「知つての通り、半年前、最高司祭アドミニストレータは四人の若者達によって打倒された。その末に、一人は己を失い、一人は剣となり……………一人は、別の存在になつてしまった」

「……………」

どこか悲しみのようなものが籠った言葉に、思わず下唇を噛んでしまう。

6ヶ月前。

カセドラル、ひいては公理教会と整合騎士団が壊滅した、歴史に残る大いなる日。誰も傷つき、多くのものを失ったあの日に、ライオットもまた、大切な後輩を失った。

誰より純粋な願いを追いかけた、眩い光のようだった一人の少年。

その光に塗り潰され、願望を貫き通した結果——少年は、竜の成り損ないと果て。彼の戦いは、永遠に幕を下ろした。

それこそが、ライオットが今もなお強い怒りと悲しみの中にいる所以。

何もかもを忘却して、生まれたての赤子のように空虚な金の瞳を見た時、ライオットは絶望した。

あの瞬間の計り知れない感情は、騎士としての偽りの生の中で、最大の悲嘆と言つていい。

肝心なのは、そうして心に深い傷を負ったのがライオットだけではないという点だ。「己の魂を傷つけ、自分を見失ってしまったキリトは、騎士アリスと共にルーリッドへと帰郷した。その胸の中に、親友の魂が宿る剣を抱えて、な」

「……………ええ。そして、ルークだったあの怪物も」

記憶を失い、人格さえ潰えてなお、その怪物は、自分の守るべき人間だけは覚えていた。

言葉も扱えぬ身でありながら、キリトやアリス、そして剣になったユージオを庇おうとしたのだ。

痛々しいほど変わらないその姿が、余計に彼らの絶望を色濃いものにした。

最終的に、目覚めたアリスがキリトとその成り損ないを見て剣気を失い、故郷へ帰ることを決めた。

成り損ないも、炎の騎士のマントをカーディナルが物質変換術で作り返した外套で、悍ましい体を隠し。

一振りの美しい剣を大切に抱いた黄金の少女と共に、生きる屍となった少年を抱え、白亜の塔から飛び去っていった。

「それを見届けた後に、あの者も姿を消した。伽藍堂の塔にもう用はない、と言つての」「それが今、ルーリッドの村にいますか？」

「うむ。どうやら付近の森で生活しておるようじゃ。度々キリトとアリスにも接触しておる」

昔と変わらず、人界のあらゆる場所に目と耳を持っている彼女はお見通しらしい。

負の感情を振り払うように任務に没頭し、全く把握していなかったライオットは複雑な顔をする。

「アリスの嬢ちゃんに、あの坊主の面倒もか。律儀なやつだ……相変わらず、な」
相槌を打ったベルクリーの、その言葉に乗った重みにふと彼を見る。

刃のように切れ長のその瞳には、どこか哀愁のようなものが秘められているように見えた。

かつて刃を交えた、騎士団長と裏切り者……それ以上のものを感じさせる、懐かしさのような感情。

かの騎士の目的と過去を、今隣にいるもう一人の最高司祭に聞いた日から、その色は現れるようになった。

「じゃが、刻一刻と危機が迫るこの状況で、これ以上あやつ程の戦力を野放しにしておくことは容認できません」

「だから説得して、ここまで引つ張ってこい……ということですね」

「然り。これは同じ守護竜の担い手であるお主が……あの少年の友であつたお主が、適任だと思つてな」

途中、少し躊躇するように声を途切れさせて与えられた言葉に、心がざわつく。

友。確かに自分と彼の間柄は、十分にそう呼べるようなものだったのかもしれない。

共に邪悪を打ち倒すことを誓い、彼が使命を成し遂げるために自らの身命を賭して強大なる敵を滅ぼした。

（だが、それだけじゃない。あいつはもつと別の……ずっと待ち望んでいた、対等の存在になつてくれたはずなんだ）

あつという間に限界を超えていくその姿に、揺るがぬ信念に、その可能性を見出した。同じ騎士としての誇りでも、恐るべき暗黒領域の騎士や怪物と刃を交える時の殺意で

もない。

それよりも純粹で、清々しいほど簡潔な絆——それをルークとなら結べると、そう思えた。

（だが、この望みが果たされることはもうない。ただ今、俺がやることは……あいつが守ったやつらを、そいつらが生きるこの人界を、守ることだけだ）

どれだけ後悔しても、もう取り戻せないことはライオット自身が誰よりも理解している。

それでも消えない未練を、誇りとする己の矜持で封じ込めてカーディナルらへ首肯する。

「承知しました。このライオット・シンセシス・サーティーン、見事騎士バルドを連れ戻してご覧にいれましょう」

「うむ。頼んだぞ」

「頼りにしてるぜ、ライオット」

「はっ」

再び騎士の礼を取ったライオットは、仮面のように表情を無にしながら踵を返す。

その心を凍て付かせ、かつてアドミニストレータに従属していた時のような無機質さで。

ただ、為すべきことへと進んでいった。

扉の向こうにライオットの姿が消えていくのを、カーディナルとベルクーリは見送る。

やがて、その背中が見えなくなったところでベルクーリが口を開いた。

「あれで良かったのか？」

「どういう意味じゃ、ベルクーリ」

「戦力っていう意味なら、あいつだけじゃなくて、北の洞窟からの侵攻を抑え続けているあいつも連れてくるべきなんじゃねえか？」

その問いかけに、カーディナルがすぐに返答することはなかった。

代わりに、じつと茶色の瞳でベルクーリの目を見返してきて、歴戦の騎士団長は少し怯む。

そうしているうちに、視線を外した賢者はやや低い声で言葉を紡ぐ。

「……………アレは、もはや人ではない。たとえ言葉を解すると、誰しにも恐れられ、疎

まれるだけじゃ」

「だから、ずっと穴蔵に住まわせておこうってことかい？　確かに……あの境遇を考えれば、そっちの方が幸せかもな」

事の顛末を聞き及んでいるベルクーリは納得して頷く。

その一方で、カーディナルの瞳には諦めとは違うものがあつた。

（絶望した蒼竜の騎士。復讐を果たし剣を置いた二竜の騎士。そして願いに食い潰された白竜の騎士、か）

未だ弱々しく、とても命の奪い合いを乗り越えられるとは思えぬ人界の民。

存亡の危機を直前にして、真つ先に剣を取るべきでありながらも保身と腐敗に耽る上級貴族。

先の戦いで半壊し、数の足りぬ整合騎士達……状況は絶望的だ。

その中で、大きな希望である竜の担い手に、カーディナルは一つの可能性を見出していた。

(さて。全てが終わるか、あるいは守られるか。未来は二つに一つ、というところじやな)

カーディナルの瞳には、アドミニストレータを倒すと誓った時と同じ、固い決意が宿りつつあった。

喪失という名の絶望

今日も、仕事に精を出す。

定められた天職に従って鋤を振るい、土を作つて、父母から受け継いだ畑を耕す。若い頃から、ずっと続けてきた仕事。日々の糧を得るために、そして義務を果たすために。

そこには何の疑問もなく、故に鋤を握る手や体幹には全くブレがない。

ただ、少しだけ寂しいような気持ちがあつた。

「んっ……しよ、つと。ふう、暑いわあ〜」

畑の半ばほどまでやつてきて、そこで一度彼女は体を上げる。

若々しい見た目に反して、ジンジンと年相応に痛む腰をさすり、頬に流れる汗を拭う。

その際に革手袋に付着した泥が顔について、少し汚れてしまった。

「もうすっかり夏ねえ。ソルスの光がとっても綺麗」

天命を必要以上に奪われぬ為に被った麦わら帽子の下から、燦然と輝く日輪を見やる。

人界歴380年、6月上旬。

すっかり春の涼やかさは消え去り、最北端の村であるこのルーリッドにも夏季が到来している。

農作業をするには最も辛い時期であり、すぐに喉が渴いて、キンキンに冷えたシラル水が欲しくなる。

加えて、他の多くの農家と違い伴侶がいない彼女は一人で全ての作業をこなさなければならぬのだ。

「そういえば、もうすぐお昼よね。交代の時間になったルー君が手伝いに来てくれ……」
ふと。誰に咎められたわけでもないのに、独り言を途中で切る。

そして、じんわりと自嘲げな微笑みを口元に広げていった。

「あらやだ。私つたら、また忘れちゃってたわ」

恥ずかしい、と言わんばかりに苦笑する。

一年と数ヶ月も前に、息子は大切なことをしに村を出ていったではないか。

今だに慣れないのは息子離れてきていない証拠かと自嘲して、数回ほど軽く頬を張

る。

「よし！ 頑張りましょう！」

気合いを一つ、拳を握ると自分を鼓舞する。

年不相応な仕事は、やはりどこか愛嬌を感じさせるものだった。

少し休憩してから、また一念発起して鍬を軽く土から引き抜く。

幾度となく、ある意味では自分の剣であるそれを振り上げた、その時。

「あら？ あれはオリヴィアさんかしら？」

向かいの畑から、何やら急いだ様子で離れていく顔見知りには不思議そうな顔をする。

何かあったのかしら、と一旦農具を下ろすと、次は二つ隣の畑の夫婦が獣道を駆けていった。

温和で、滅多に急いだ様子を見たことがない知人に首を傾げてしまう。

何かあったのではないか、と思った瞬間、また獣道を右側から走ってきた中年の男が横目に彼女を捉え、慌てて立ち止まる。

「セフィアちゃん！」

「あらっ、マークさん。みんな村の方へ行っちゃったけど、どうしたのかしら？」

「どうしたもこうしたも！ 騎士様に連れてかれた村長んとこの長女が、えれえ大男と一緒に帰ってきたつてよ！」

「え——」

「今は広場にゐるつてえ話だ！ みんなそつちに行つたよ！」

相当に急いでゐるのか、早口にまくし立てた村人は言い切るや否や走り去つていった。

取り残されたセフィアは、呆然としながら手の中より鍬を取り零す。

（帰つてきた？ アリスちゃんか？ で、でもどうして？ だって、そしたら、あの子やユージオ君たちは——）

頭の中に一瞬で駆け巡る、様々な考えと不安、そして焦燥。

何よりも、強く頭に思い浮かぶのは——愛しい息子の、優しい笑顔。

「い、いかなくつちや！」

いてもたつてもいられなくなった彼女は、それまでの村人達と同じように畑を飛び出した。

息を弾ませ、必死に足を前へ踏み出しながら、心の中で考えを巡らせる。

（あの子が、帰ってきたの？　アリスちゃんと一緒につ？　あの二人も一緒なのかしらつ）

セフィアは、息子が必ず使命を果たせると、この一年以上ずっと信じてきた。

だから、アリスが帰ってきたとはそういうことなのだろうと、自然とその結論に至る。では、一緒にいるという人物は誰だろうか。

確かに息子は身長が高かったが、大男と言われるほどではない。

（――もしかして）

その瞬間、稲妻のように一つの考えが頭を駆け巡る。

彼らと共に帰ってきた、大柄な体の人物。その特徴に、ある人物が思い浮かんだ。

二十年以上前、村の前で生き倒れていた男。

無愛想で、寡黙で、けれど誰より強固な信念と愛を持ち、心の底から惹かれた、唯一の人。

まさか。息子は、自分がずっと秘め続け、少しだけ吐露してしまったあの願いさえ叶えてくれたのか。

「っ、ルー君……！」

逸る感情を原動力に、彼女はより一層村を目指してひた走る。

数十年の人生において一番と言えるほどの疾走で、石橋を駆け抜け、外壁の間を抜ける。

そして、まるで森に出る大猪のような勢いで村の中心にある広場へ突入した。

「はあっ！ はあっ！」

そこまで来て、ようやく立ち止まって荒々しく呼吸を繰り返した。

脇腹が痛む。久しぶりに全力を出した足のふくらはぎが張り詰めて、心臓の音が煩かった。

「はあ、んっ……ふう、ふうう……！」

ゆっくりと、息を整える。

膝に当てていた手で、滝のように流れた汗を拭くと顔を上げた。

広場には、既に多くの村人が集まっていた。

話を聞きつけた数十人もの群衆は、ザワザワと何事かを話し合っている。

彼らの作る厚い壁に、セフィアは上下する豊かな胸に手を当て、深呼吸をしてから近づいていった。

「すみません」

「あら、セフィアちゃん。貴女も来たのね」

話しかけると、幼い頃からお世話になっている初老の女性が柔和な笑みを向けてきた。

疼く気持ちを押しさえ込んで、かろうじて同じ微笑みを顔に貼り付けながら問いかける。

「アリスちゃんが帰ってきたって聞いたんです。それで、もしかしたらうちの息子も一緒じゃないかって……」

「ああ、そうだったわねえ。ルーク君、昔はユージオ君と三人で仲が良かったものねえ」
懐かしいわあ、と老年の人間特有の間延びした声で言う彼女にやきもきしてしまう。

「でも、なんだかそういう感じじゃないみたいなのよ」

「そういう感じじゃない？」

「アリスちゃん、顔に眼帯をして、片腕のない男の子を連れてるの。ほら、前にユージオ君が連れ帰ってきた子よ」

セフィアに、というよりは自分が思い出すように手招きするような仕草をする老女。一瞬でキリトの顔が思い浮かぶ。息子やユージオと出会ってすぐに仲良くなり、共に旅立っていた少年だ。

不思議と懐かしく感じたあの少年が、腕を失い、アリスと帰ってきたという話に物々しいものを感じる。

「それにね、とてもおかしなものもいて……」

「おかしなもの、って……?」

「すごく体が大きくて、外套で体を隠してるのよ。それがあの男の子を抱えてるんだけど……」

頬に手を当て、何かしらねえあれと不気味そうに彼女は呟いた。

セフィアは彼女に一言礼を言い、それから周囲を見て群衆の隙間を探す。

幸いにも、あまり人の多くない箇所を見つけ、そこへと足を運んだ。

「すみません、少し通してください」

そんな言葉を何度も繰り返しながら、村人の人垣をくぐり抜け、ついに最前列に出る。

聞いていた通り、そこには記憶の中の幼な子と酷似した、金髪の少女がいた。黒い眼帯に美しい顔の右半分を包み、何やら角ばった体を乳白色の薄布で包み込んでいる。

(アリスちゃんだわ)

他の村人達が懐疑的な視線を向け、秘め事でも話すように囁き合う中、彼女は確信した。

昔、ルークが休息日にユージオと一緒に連れてきて、食堂で三人仲良く話していたことを思い出す。

当時の屈託のない笑顔とは裏腹に、颯然とした面持ちの彼女は小さな教会の前に立っていた。

(久しぶりに帰ってきたんだもの、きつとガフストさんを待っているのね。それじゃあ、一緒にいる人って——)

彼女の存在を確かめ、次に老女が口にしていた人物を探して。さほど視線を巡らせる必要もなく、アリスのすぐ横にその姿を見つけた。

「……………え？」

そして。

その人物を見た彼女の口から漏れたのは、乾き切った一言だった。

赤い外套で全身を包み込んだその人物は、長年再会を待ち望んだ人ではなかった。

赤い外套で二メルを優に超す全身のほとんどを覆い隠し、アリスに付き従うようにしている。

露わになっている手足は、白い鱗と水晶色の鉤爪で構成されており、人のものではない。

右の脚は、何処かで失ったのであろうか。質素な棒状の義足が地面を踏んでいた。

話の通り、両腕の中には上等な黒衣に身を包んだ、隻腕の少年を大事そうに抱えていて。

とても奇妙な、人外と形容すべき風貌に。

「う………そ………」

セフィアは、心の全てを粉々に破壊されたような衝撃を受けた。

立ち尽くす彼女の耳に、ざわりと喧騒が大きくなるのが聴こえる。

視界の端で人垣が二つに割れると、その向こうから一人の人物が姿を現した。

背の高い、引き締まった体つきの中年の男。その足取りは堂々と、恥じるどころがないようだ。

上品に口髭を整えた彼こそが、ガフスト・ツーベルク。この村の長であり……アリスの父である。

彼は、自分の方を見たアリスと、その側にいる異形を見ると、息を呑んだ。

それから数歩近づき、まじまじと彼女達を凝視する。

「——アリス、なのか」

しばらくして、彼の口から紡がれたのはそんな言葉。

驚きと、疑いと、困惑が入り混じり、普段の厳格さが少し崩れていた。

驚嘆する父に、アリスはしっかりと頷く。

「なぜ、お前がここに……お前の罪は、許されたのか？」

「……私は、かつて犯した罪への罰として、この村で暮らしていた頃の記憶を全て失いました。それで罪が赦されたのはわかりません」

ですが、と、アリスは父を強い意志を込めた目で見つめて。

「この村の他に、私たちが行くべき場所はないのです」

それは、宣言であり、懇願でもあった。

記憶を失うという恐るべき罰を受け、その末に故郷へと寄るべを求めたのだ。

きっと彼女だけではなく、隣にいる彼や、腕の中の少年もそうだろう。

停まってしまった意識の片隅で、受け入れてあげるべきだとセフィアは考えた。

村長ガフストは、またしばしの間黙考した。

不安や猜疑心の渦巻く村人達の中で、少し顔を俯かせた彼が、やがて出した答えは。

「……罪人をこの村に置いておくことはできん。立ち去れ」

冷厳にして無情なる、拒絶だった。

長として、村を危険に脅かすかもしれない存在を容認はしない、という答え。

今すぐ捕らえよ、と村人に命じなかったのは、父としての最後の情だろうか。

アリスは少し悲しげに、だがどこか解っていたように黄金のまつ毛を伏せ……

グルルルツ!!

次の瞬間、広場全体に轟くような唸り声が異形の口元から発せられた。

誰も聞いたことのない、恐ろしいその響きにどよめきが広がり、子供達が悲鳴をあげる。

ガフストも驚いて一歩下がると、物々しい雰囲気立ち上らせた異形が踏み込んだ。

「駄目よ！ やめて！」

脅しかけるようなその行動を諫めたのは、アリスその人。

異形と父の間に割って入った彼女は、異形の顔を見上げ、険しい面持ちで告げる。

「お願い。誰も傷つけないで。そんなやり方は、貴方らしくない」

自分で言いながらも、心から苦しそうな、痛そうな声音だった。

言葉一つ一つで自身を傷つけているかのような、悲しみを堪えて搾り出したような、そんな訴え。

異形は、唸りを収めると、じつと彼女のことを見下ろす。

「大丈夫。私達は、大丈夫だから」

念押しするように語りかけるアリスに、何も言わぬまま異形はその場で立ち止まり。やや時間を置いて、ゆっくりと前に踏み込んだ義足を引き戻した。

ほっと、アリスが安堵のため息をつく。

それは村人達も同じことであり、同時に、あの異形を誰もが畏れ始めていた。異形を鎮めたアリスは、ガフストへ振り返ると冷たい声で告げる。

「わかりました。我々はこの村から出ていきます。……行きましょう、■■■■」

小さく、周囲の喧騒でかき消されてしまうほどの小声で異形に呼びかける。

体を揺らして答えた異形は、彼女よりも先に村の外へ向かって動き始めた。

慌てて密集を解く村人達の間を通り過ぎていくその背中に、アリスもついて行く。

「なんだったのかしら、あれ」

「魔物よ。あの子はダークテリトリーの魔物を連れてきたんだわ」

「恐ろしい……化け物め」

その場にいた誰もが、彼女達の背中を見てまた小声で語り合った。

善いものなど一つとしてなく、嫌悪と畏怖が込められた、異物を排斥する為の言葉。

渦巻く負の坩堝の中で、なおも立ち尽くしていたセフィアは。

「……………ルー、ク……………？」

ぽつりと、異形の背中に名前を呼んだ。

失い、彷徨い、それでもなお。

「もう、姉様だったら心配性なんだから。そんなに厚着しちや、逆に汗をかいちやうわ」

数歩先を行きながら、横顔を振り向かせたセルカは少し呆れたように笑う。

それに、キリトを乗せた車椅子を押しながらアリスは「そうかもしれないわね」と苦笑した。

しつかりと厚木の服を着て、首元も冷風が入らないようにされたキリトを一瞥し……その手の中にある、青金の剣を見る。

「ユージオも、そう思うよね……」

小さな呟きは、すぐ後ろにいる姉にさえ聞こえるものではなかった。

そんな彼らを、周囲の色鮮やかな木々と、隙間から差し込む陽光が暖かく見守っている。

小屋から歩き出してもう十分ほど。三人が歩く道は、徐々に上り坂に変わっていた。

苦もなく、一人と神器2本分の重量を乗せた車椅子を悠々と進めていくアリスに、ふとセルカが尋ねる。

「姉様、平気？」

「大丈夫よ。セルカも、こちらばかり見ていて転ばないようにね」

「ふふっ、わかっているよ」

笑い合ううちに、ついに前方に小高い丘が現れた。

最後の一押しと言わんばかりに、二人は歩く速度を少し早め——直後、一気に視界が開ける。

最初に見えたのは、東の端まで広がる二つの大きな湖。

双子池と村人達は呼んでいるその奥には広大な湿地帯が広がり、南には鬱蒼とした森があった。

そして、北には白い雪で覆われた《果ての山脈》。かつて飛竜に跨り、あそこを越えて戦いに赴いたのだ。

「あれ……山の方に飛んでいるのは、鳥かな？」

絶景と呼んで差し支えない光景を眺めていれば、セルカがそんなことを言った。

彼女の言葉に、ふとそちらを見て——アリスはわずかに左の目を見張らせる。

山脈の頂上近く。そこに、ポツリと浮かぶ黒い影。

まるで何かを探しているかのよう、一定の軌道を描いて旋回している。

極小の点、針の穴のように小さなそれは、セルカには何かの野生動物に思えただろう。だが、規則的に羽ばたくその輪郭が、優れた視力を持つアリスにはハッキリと見えていて。

「……そうね。きつと、山脈に生息している野鳥の類いでしょう」

「そっか」

飛んでいる何かへの話題を終わらせ、ゆっくりとアリスが視線を眼前の風景に戻す。

そんな姉に合わせて、セルカも今一度丘から一望できる絶景を楽しむように口元を緩ませた。

「綺麗だわ。カセドラルの壁に飾られていた、どの絵よりも綺麗」

微笑みながら、椅子の手押しから片手を離し、少年の肩に添える。

微動だにしない彼に、囁きかけるように言葉を紡いだ。

「貴方が……貴方達が守った世界よ。キリト、ユージオ」

それに……と、続けようとした言葉を止める。

音にしてしまうと、どうしようもなく悲しくなるから。

口の中で呟くだけに、留めたのだ。

どれくらい、そうしていただろうか。

気がつけばソルスの高さが変わっていて、アリスはそろそろ戻ろうと思い至る。

帰ったら、昼食にしよう。最近ようやく料理の腕がまともになってきたところだ。

最初の頃は熱素でパイを炭にしたっけ、と含み笑いをすると、車輪と自分の足の他に、もう一つの足音がないことに気づく。

「セルカ？」

思わず立ち止まって振り返ると、妹はニメルも離れた場所を歩いていた。

先程までの爛漫な様子はなく、僅かに顔を俯かせた彼女は暗い表情で地面を見つめている。

「ごめんなさい。ちょっと待っていてね」

キリトに一言断つてから、セルカの方へと行く。

立ち止まっていた彼女は、アリスが目の前にやってきても表情の翳りを消そうとしな

かった。

そつと茶色の髪を撫でる。なるべく優しい声を意識して、言葉をかけた。

「どうしたの？ 何か困りごと？」

もしや、今更ながら自分にガリツダ老人を紹介し、あそこに小屋を立てたことを父に叱責されたか。

幼少の記憶がない今のアリスには、この愛しい妹が何に悩んでいるかも、父がどういう人物だったかも瞬時には分からない。

ただ問いかけることしかできないもどかしさを少し感じていると、躊躇いがちにセルカが答えた。

「あのね……バルボツサのおじさんが、また開墾地の木の始末を頼みたいって……」

「なんだ。そんなことだったの。伝えてくれてありがとう、だから暗い顔をしないで？」

「だって……勝手にすぎるわ、あの人達。二人もそう思うでしょ？」

キリトと、彼の手の中にある剣に不満への同意を求めらる。

当然彼らが答えることはないが、セルカの言葉は止まらなかつた。

「バルボツサさんも、他の人達も、姉様を村に住まわせようとしなくせに、困った時だけ助けてもらおうとするなんて……言っておいてなんだけど、断つてもいいのよ？」

訴えかけるアリスと同じ色の瞳は、むしろ断ることを推奨するかのようだ。

確かに、村人達のアリスへの対応は良いものではない。

半年前に現れた時、*「彼」*が脅しかけたことも響いているのか、交流はほぼ断絶している。

だというのにこうして頼みを聞いているのは、数日に一度の騎士の差し入れでは到底賄えない日々の糧を得るため。

そして、セルカやキリト達への少しの義理だ。

じつと自分を見つめてくる優しい妹にクスツと笑って、アリスは首を横に振る。

「気持ちだけでもらっておくわね。今の生活も悪くないと思っっているし、村のはずれにいさせてもらえるだけでありがたいことだわ。食事をとったらすぐに行くわね。場所はどい？」

「……南の開墾地」

不承不承といった様子で、小さくセルカは質問に答える。

ありがとう、とまた頭を撫でる姉に、急に顔を上げた彼女は一步詰め寄った。

「私、来年には見習い期間が終わって、少しだけお給金がもらえるようになるの。そうしたらあんな人達の手伝いなんかしなくて、私が二人を……ずっと……」

この子は、どこまで心優しいのだろうか。自分の胸元を指先で握る姿に温かいものを覚える。

同時に、その優しさを受けるべき本来の「アリス」に申し訳なきを感じてしまった。未だここにいる自分は、最高司祭が作り上げた仮初の人格なのだ。

ユージオと共に剣になった彼女が帰ってきた暁には、今度こそこの体と魂を返そうと、密かに決意する。

それとは裏腹に、アリスは大きく腕を広げると、包み込むようにセルカを抱擁した。

「姉様……？」

「大丈夫よ、セルカ。あなたが気に病む必要はないから。私はあなたがそばにいてくれれば、それだけで幸せなのよ」

慈しみの籠った言葉に、少女はくつと小ぶりな唇を引き結んで。

記憶がなくても変わらない、温かな姉の胸に額を埋めるのだった。



カセドラルを発つてから、もう二日が経つ。

北へ向かうほどに頬を撫でる風は冷たいものになっていき、まるで眠気など感じさせなかつた。

途中、ザツカリアという街で宿を取り、現在は《果ての山脈》が北の方角に見えてい

る。
「もう少しだ。気張れよ、アオボシ蒼星」

首を撫で付け、股の下にいる飛竜へ語りかける。

通常の同種より一回り大きく、深い青色の鱗を備えた竜は彼の言葉に鳴いて返事をした。

——妾の体を心意で形成かたなし、駆ればよいものを。その小童より余程疾いぞ？

「お前みたいなのはアカブツに乗れるか。北帝国中が大騒ぎになるわ」

百メルになろうかという威容を頭の中に思い描き、渋い顔で拒否する。

最近やたらと口出しが多くなった相棒が、ハツとつまらなさそうな声を漏らした。

街を出たあと、飛竜に乗ることさえ苦労したのに、と溜息をついた。

「……そういや、さっきの街で」

ふと昨晚のことを思い出す。

宿の窓際で夜空を見上げ、今日の予定を立てていた時のこと。

下の道を巡回の衛兵が通り、その二人組はある人物達について話し合っていた。

新米らしき彼らは、一年と数ヶ月前まで在籍していたという三人組について口にしてきたのだ。

——最近物騒になってきたよな。教会から再編成と訓練の強化のおふれなんてよ

——だよな。衛兵長はやる気が漲ってるし、おかげで隊の空気もピリついてる

——あーあ。こんな時、あの三人がいたら上手く空気を和らげてくれるのになあ

——だよな。特にほら、あいつ。他の二人を弟みたいに扱ってて、俺らのリーダーみ

たいにもなつてたよな

確かに、と片方が返しながら、衛兵達は遠ざかっていく。

その時、ライオットは彼らが誰の話をしているのか、一瞬で察した。

「……あいつがいれば、か。確かにな」

ふつと、悲しげな笑みが口元に浮かぶ。

もしも「彼」が健在であれば、自分が赴くまでもなくあの騎士は剣を置かなかつたかもしれない。

愛する者達が暮らす人界を守る意思を彼が持っていた以上、どちらにせよあの無双の力を振るつてくれたであろう。

(でも、そんなこと関係なく……あいつには生きていてほしかったさ)

衛兵の彼らや、他の誰かがそうだったように。

純粋な友人として、ライオットはあの結末をどうしても受け入れられない。

「つたく、いつまで引きずつてるんだか」

いくら悔やんだところで、何も返つてこないというのに。

この半年、幾度となく繰り返した問答に、深く溜息をついた。

——イイイイ

気持ちを切り替えようとしたその時、突如として背中の《蒼竜の琴剣》が震える。

一体何かと思えば、前を見るように相棒は意思を伝えてきた。

それに従って前方に視線を戻すと、そこには新たな光景が広がっている。

「あれが……ルーリッドか」

空飛ぶ軌跡の行く末に見える、それなりに大きな一つの村。

高く聳える《果ての山脈》に寄り添うようにして存在するその村は、とても長閑に見える。

村の外に広がる畑には農作業に勤しむ村人の姿が散見され、迫る危機などまるで知らぬようだ。

(平和そうな村だ。あいつが……とても好いていた理由が、なんとなく分かる)

何の変哲もない、平凡なその村を見つめっていると、また剣が震える。

——其方ではない。

言葉を用いて、見せようとしたものがそれではないことを示す。

では何だと聞きかけて——ふと、口を閉じる。

その時不意に閃いた直感に従って、とある方向に顔を向けた。

村の近くに広がる森。その一箇所が大きく開けている。

まるでソルスやテラリアの恵みを吸い取られたように黒々とした地面が広がる中心に、巨大な切り株があつた。

直径数十メートルになるうかというそのすぐ近くには、横倒しになった漆黒の大樹が寝そべっている。

その大樹の先端の側に、人がいた。

遠目から見ても大柄なその人物は、外套で身を包み、正体を隠している。

フードから下半分が露出した顔が、しっかりとライオットへ意識を向けていた。

「……待ち人来たる、つてか？」

言いながらも、蒼星の手綱を繰って切り株の方へと進路を変えた。

忠実に従った飛竜は翼を唸らせ、ルーリッドから切り株へと旋回していく。

ゆつくりと速度を落としながら、徐々に高度を下げて、やがて一直線に伸ばしていた体が着陸体制に入った。

たっぷり十分以上の時をかけて、突風を巻き起こしながらその広場に蒼星は着陸する。

「よし。ここままでよく頑張ってくれたな、蒼星。あとでちゃんと休ませてやる」

クルル、と機嫌良さに鳴いた飛竜を労って、ライオットは背から飛び降りた。

地に足をつけ、それから五メルほど離れた場所に佇む、巨軀の人物を見やる。

すぐ側にある人界最大だろう大樹のように、微動だにせず立つ様は不気味だった。

「……バルドの旦那、でいいんだよな？」

顔の見えぬその偉丈夫に、念の為に問いかける。

偉丈夫は答えない。身じろぎをすることもない。

その泰然とした様子が、ライオットに確信をもたらした。

「半年ぶりだな。相変わらず鎧と盾は西帝国の火山に沈めたままか？」

「……何用だ、蒼角の」

「あんたを連れ戻しに来た。近く、東の大門が崩れ去る。俺達担い手が使命を果たす時だ」

流れる小川のように流々と言葉を並べながら、酷い詭弁だと思った。

自分の目で「彼」の末路を目の当たりにし、本当にこれは正しいことなのかと。

今の自分がその使命に対して疑問を抱いているというのに、何故他人にそれを促しているのか。

あるいは、自分よりさらに100年以上生きているこの騎士ならば答えを持つのかと、そう考える。

「……………断る」

「……………何故だ。あんたはこの時の為に、ずっと備えていたはずだろう」

「我が剣は、志を失った。今の私には、あの滾るような憎念も……………かの女神に死を齎す為の剣意も無い。精々が、獣を狩る程度のものだ」

淡々と述べられた拒絶に、だが不思議とライオットは一片の驚きも感じなかった。

その答えは予想していたし、理解していた。

……………何よりも、バルドの気持ちへ痛いほどに共感できた。

だから、声を荒げることもなければ、背を向けて立ち去ろうとしても、呼び止めることもしない。

「……………あいつは。あんたを、ずっと最強だと信じていた。超えるべき壁だつてな」

ただ。どうしても諦められない、葛藤への答えを欲する心が、口を滑らせる。

足を止めたバルドは、少しだけライオットに振り返った。

「……………私は、あの子に何もしてあげられなかった。父として、担い手として。何も示せず、一度たりとて守ってやる事ができなかった」

「そう……………だな。俺も、そうだった」

「……………で、あれば。これ以上の問答など、無為であろうよ」

その言葉を最後に、かつて最強の騎士であった狩人は、木々の向こうへ消えていった。

「……取り付く島もない、か」

ライオットは、今度こそ気力の全てを吐き出してしまおうように、大きく息を吐いた。



「つしよ、と。ありがとうございます」

「はいよ。気をつけてね」

気の良い笑みを浮かべる店主に見送られて、露店を後にする。

両手いっぱい抱えた大きな袋の中には、しばらくの間の食料が詰まっていた。

これを家まで持ち帰るのは少し骨が折れるが……以前よりは、ずっと軽い。

「今日は、何を作ろうかしら……」

家路への道を歩きながら、献立を考える。

以前は、休日になる度に少し豪華な料理を作って、息子と一緒に食べていた。

普段は鍛える為に決まった食事ばかりをしていた彼は、その時には「美味しい」と言ってくれたものだ。

それを向かい合って見るのが、とても好きだった。

だが、今となっては天命を損じないよう、命を繋ぐための行為でしかない。

事実、彼女の目に宿る意思や表情はとても希薄で、今にも崩れ落ちてしまいそう。

元より細かった体は、半年の時を経てさらに一回り肉が落ちていた。

ただ、息子との楽しいあの時間が忘れられなくて……作ってもほとんど喉を通らない料理を、考えるのだ。

(ルーク。お母さん、何を間違えちゃったのかな?)

ぼんやりと空を眺めながら、思い出すのは六ヶ月前のこと。

村長の娘、アリスと共に帰ってきた異形を見た時の記憶だ。

誰もが恐れ、暗黒領域の怪物と罵ったアレが何なのか、セフィアは一目で理解した。母親としての直感だったのか、あるいはアリス達を守ろうとした姿からか。

すっかり姿形が変わってしまっても、あの怪物が……自分の最愛の息子だと、分かったのだ。

（あの時、ガフストさんの決定を無視してでも何かしてたら……あなたは、帰ってきてくれたのかな？）

分かった上で、何もできなかった。

立ち去る彼らを追いかけ、声をかけて助け舟を出すことをしなかった。

恐ろしい現実には、足が震えて……どんな見た目だろうと生きて帰ってきた息子を、抱きしめられなかったのだ。

それからずっと、世界の全てに霧がかかっているかのような気分にいる。

「ルーク……」

ポツリと、その名前が口から零れ落ちる。

村の誰もが、もはや存在を忘れたかのように息子のことを口にしない。

それはアリスや、キリトが村のはずれに住んでいることも関係しているのだろう。

だから自分が呼んであげないと、息子は手の届かないどこかに行ってしまうような。二度とこの世界に帰ってこないような、そんな不安が発作のようにやってくるのだ。

その弱り方があまりに痛々しくて、彼女を慕う村人達は慮ってくれる。

今日も、顔見知りの中でも特に親密な一家に畑を任せてしまった。

(どうせ、家に帰っても。あの子も……あの人だって、いないのにね……)

陰鬱とした気持ちでいながらも、足は勝手に前へと進んでいく。

慣れ親しんだ村の中だ。どんなに意識が朦朧げでも、家へと辿り着くことができる。

あつという間に自宅の近くまでやって来て、宙に浮かせていた意識を現実へ引き戻した。

「……………?」

目の焦点を定め、前を見た時。彼女は訝しげな顔をした。家の前に誰かが立っている。

刺繍の入った上質な白い外套で、頭から膝下まで包み込んでおり、顔は見えない。

ただ、起伏のある輪郭からそれが女性であることは分かった。

「ふむ……聞いた話では、ここが彼の生家のはずだが……」

「あの……どちら様ですか？」

恐る恐る声をかけると、その人物はこちらに振り向く。

上半分が隠れた顔の、白く滑らかな肌や、薄く整った形の唇にハツとした。

あちらも驚いたように少し口を開き、それからセフィアへ微笑みかける。

「失礼。こちらに住まわれている方でしょうか」

「ええ、ここは私の家だけ……その、なにか御用でも……う？」

「急に来て申し訳ない。実は私、ルーク君を——」

「ツ、ルークのことをなにか知ってるの!? あの子は今どこに!? お願い、教えてちょう

だい！」

その音を名前として認識したのとほぼ同時に、思考に絡まっていたものが吹き飛んだ。

勢いに任せ、荷物を手放して詰め寄る。

両肩を掴もうとしたセフィアに、その人物は落下していく紙袋に視線を定めた。

素早く身を屈めると、片手で重量のある紙袋を捕捉し、もう片方でこちらにやってきた彼女の腰に手を回して抑える。

「つとー！」

「つ、ご、ごめんなさい、私つい……」

「いえ、荷物が無事でよかった」

我に返ったように表情を暗くさせると、その人物は穏やかに返答した。

「それよりも……今の反応から察するに、貴女は彼の？」

「ええ……ルークの、母です」

「そうでしたか」

ふむ、と考え込むように呟く人物に、セフィアは体が疼いた。

少しの間沈黙して、やや考えながらといった様子でその人物はまた口を開く。

「……まず、先に言っておきましょう。おそらく貴女の知りたいことを、私は知りません」

「そう……ですか」

「申し訳ない。……ひとまず、中へ入りましょう。随分とお体が弱っているみたいだ」

腰に触れた手から、セフィアの衰弱を感じ取ったのか。

優しい声音に従い、彼女と共に自宅の中へと入った。

入つてすぐにある食堂へ、セフィアは導かれる。

椅子に座つた途端、久しぶりに大声を出した反動が現れたのかどつと疲れが湧いてきた。

その人物は紙袋を台所の傍らに置くと、コップを一つ取つて手を翳す。

「システム・コール。ジェネレート・アクワイリアス・エレメント」

親指から小指にかけて、五つの水素が生成される。

うち四つがコップの中に注がれ、さらに式句を唱えて残る水素を氷にすると水に落とし込んだ。

「これをどうぞ」

「あら、ごめんなさい……」

差し出されたそれをうけとり、ゆつくりと口元に持つていくと傾ける。

生み出されたばかりの新鮮なそれはするすると喉を通つていき、渇きが満たされていった。

「っは……」

「落ち着きましたか？」

「ええ。その、何から何まで、迷惑をかけちゃってごめんなさいね」

「とんでもない。しかし……」

改めて、その人物はセフィアを見る。

手足はやせ細り、頬は少しこけている。以前は少女のように若々しかったのだろうが、目元には心労らしき皺が浮かんでいた。

自分でも健康的でないことは理解しているのか、青白い顔に自嘲気味な笑顔が浮かんだ。

「人に見せる顔じゃないわよね……でも、息子がああなってしまうてから、ずっと何も食べられなくて……」

「……心中お察しいたします」

「優しいのね、貴女は……聞きそびれていたけれど、息子とはどういう関係で？」

「昔、少しだけ世話をしまして。久しぶりに顔を見にきた次第です」

そうなの、という納得の言葉。

次に彼女の口から告げられたのは、「ごめんなさいね」というものだった。

すつかり口癖になってしまっているのだろう。壊れてしまいそうな微笑みに、その人物は唇を引き結ぶ。

突然黙ってしまったことに首を傾げていると、不意にセフィアはコップを握る手を上から包み込まれた。

「ご婦人。もし体調が良くなったら、東の森に行ってみてください」

「え……？」

「そこに、もしかしたら貴女の苦悩を解決する方法があるかもしれない。私は諸事情があり、行けません……どうか、お忘れなきよう」

囁くようにそう言つて、セフィアの手を解放した彼女は「それではこれで」と食堂を出て行った。

ぼんやりと、玄関の扉が開閉される音を聞きながら、先程の言葉を反芻する。

「東の、森……」

何故だろうか。

名前も、顔もわからないのに、どうしてか彼女の言葉を信じたくなる。

息子を話す口ぶりに、親しげな色があつたからだろうか。

いずれにせよ……きゅつと、コップを握る手に力が込もつた。

かつて誰かだったモノ

キリトに食事を与え、自らも空腹を満たしたアリスは開墾地へと赴いた。

目を離れた隙に何かあつてはいけなさと、相変わらず彼を連れてその場所へ向かう。昼頃とは異なり、南の分かれ道から西の方へと分岐を選ぶ。

しばらく進むと森が途切れ、刈り入れ時の麦畑が視界一杯に広がった。

作業をしつつ、時折アリスに不安の入り混じる目を向ける村人達の視線を気にせず進む。

(……彼らは、何も変わらないのですね)

半年前から、一度たりとも変わっていないその態度。

だというのに、数ヶ月前にアリスが街道を塞いでいた岩をどかした途端に、月に一度

頼み事をしてくるのだから都合の良いことだ。

無論、整合騎士という身分を封じ、元罪人として流れてきたのだから多少の扱いの軽さには耐え忍ぶ。

しかし、呑気とも言えるその様子に僅かな不安を抱くのだ。

（最高司祭猊下が倒れ、新たにカーディナル様がその座についても、何も変化はない。禁忌目録は人々を縛り、その中で与えられた安寧に浸っている）

はたして彼らは、いざ闇の軍勢との戦いがこの地にまで及んだ時、剣を取って戦えるのか。

自らで守るのではなく、ただ強大なものからの慈悲によって保たれてきた平穩は、もう長くはない。

それを誰よりも認識し、今も四帝国軍の訓練と軍備に明け暮れている剣の師と、もう一人の最高司祭に想いを馳せた。

（真に人が絶望に打ち勝つ為に必要なものは、武具の優先度でも、神聖術の行使権限でもなく、抗う意志。それが無い以上は……）

だからこそ、一人一人が一騎当千の力を持つ整合騎士が要だったのだ。

騎士団内で序列3位……とある緋髪の騎士の全力を彼女を含め誰も見ていないが

……だったアリスもまた、重要な一人のはず。

しかし、アリスは今の自分に、闇の軍勢がもたらすであろう破滅を打ち破ることができるとは、到底思えなかった。

(こんな私などより、今も北の洞窟で戦い続けている彼の……彼だったモノの方が、余程)

昼間に見た山脈の影を思い出し、ふと表情に影を落としながらも、アリスは進み続けた。

麦畑を抜けると、村の南方に到着した。

黒々とした地面の直前で車椅子を止め、広大に広がる荒れた大地に目を向ける。

二年前。《悪魔の樹》と呼ばれたギガスシダーなる大樹をキリトとユージオが伐り倒

した。

それによって長年不可侵の領域であつた大森林の開拓が始まり、村の男衆は畑を広げることにも夢中らしい。

「……いつも、あなた達は驚くべきことをするのね」

ルーリッドにやってきた時、一度見たきりの光景に眩いて、再び動き出す。

切り株のすぐそばを通り過ぎてても、キリトが何かしらの反応を見せることはない。

目指すのは開墾地の南側、その一角。

何十人という村人が斧を手に伐採を行なっている中で、丸々と太った男が後ろから怒声を飛ばしていた。

若干歩みが鈍りかけるが、今更引き返せはしまいと胸を張って歩いていく。

切り株に座つて休憩中の若者達が無遠慮に彼女を見る中、それを無視して男の後ろに立つた。

「バルボツサさん」

名前を呼べば、男は途端に罵声を止め、ぐるりと振り向く。

アリスの姿を捉えると、ナイグル・バルボツサは脂ぎつた丸顔をニンマリと笑させた。

「おお、アリス！ よくきてくれたのう！ 待つておつたぞー！」

「何やら用がおありとお聞きしましたが……」

ドシドシと足音を響かせて近づいてくるナイグルに、どうにか顔を引きつらせないで笑い返す。

気を良くしたようにナイグルが太鼓腹を張り、うむと大きく頷いた。

「ほれ、あそこじゃ。見えるじやろう？ 朝からずつと十人がかりでやっておるのじやが、あの白金樫の大木が行く手を塞いで一向に伐採が進まん」

体と同じく脂肪が乗った太腕で、ある一点を示すナイグル。

そこには、なるほど確かに立派な白木が聳えていた。幹の太さは一メルもあるように見える。

汗だくの男達が、必死に全身の筋肉を躍動させて不慣れな動きで斧を振るっているが、僅かな切り口しか生まれていない。

そのうち、見当違いな場所に当てた一人の斧が半ばから折れ、その男は尻餅をついた。周囲からはドツと笑いが起きる。彼の失態を心から馬鹿にするような、気分の悪いものだ。

「全く、何をやつとるんだ馬鹿者め……」

隣のナイグルも、失望を織り交ぜた口調でそんなことを呟く。

先ずは斧を扱う指導をする所からではないか、と考えた瞬間、気持ち悪いほど表情を変えた彼はアリスに振り向いた。

「そういうことなのじゃ。一つの家が月に一度という取り決めはわかつておるが、今回だけは頼めんかのう」

「……今回だけ、ですか」

「お前さんは覚えておらんかもしれんが、昔ワシはお主に菓子をくれてやつ……あげたこともあるのじゃよ。その時のお前さんは大変可愛らしくてのう。いやいや、もちろん今も十分に……」

よく回る舌だ。調子付いた時のキリトと良い勝負ではないだろうか。

あからさまなお世辞を並べ立てるナイグルに、澁面を出しそうになる。

そもそもが仮の天職とはいえ、取り決めを平然と破っているのは掟以前に人として礼節を欠いている。

それも自分を下に見ているが故だろうと、喉元まで迫り出した説教を堪えて溜息をつく。

「わかりました。一度きりということでしたら」

「おお、本当に助かる！」

にわかには喜んだ彼から、キリトを引き離すようにして少し移動する。

なるべく地面が平坦な場所を選び、彼をその場に一旦置いて白金櫛の元へ行つた。

露骨に嫌な顔や舌打ちをする男達の一切を意識の外に置いて、木の前で印を切ると
《ステイシアの窓》を開く。

表示された数値は、確かに粗悪な斧でいくら叩いても揺るぎそうにない。

これは彼らの得物を借りても意味はないと、足早にキリトのところへ戻ると、彼の前にしやがみこむ。

「ごめんなさい、キリト。少しだけ貴方の剣を貸してちょうだい」

彼の手の中に抱えられた、ふた振りの剣のうち黒い方を引き抜こうとする。

すると、細い左腕に力が籠った。これまで何をしても反応をしなかったのにだ。

渡したくない、とでも言いたげな反応に、アリスは眉尻を落とす。

「お願い。すぐに返すから」

じつと、光のない黒い瞳を見つめる。

しばらくそうしていると、手から力が抜けた。アリスは黒剣を自分の手の中に収める。

「ありがとう」

「……あー……」

返事、ではない。目覚めた時に欠伸をするように反射的な、拙い反応。

今の彼にはそれしかできず、心を引き裂くような痛みを堪えて、白金櫛の方へと戻った。



「少し離れて」

忠告を呼びかけると、ジロジロと彼女を見ていた男達が各々の反応をしつつ離れた。十分に安全を確認した上で、右足を前に出し、重心を落として腰だめに剣を構える。

隻眼で白木との距離を測り、黒革の柄に手を置くと、野次が飛んだ。

「そんな細っこい腕で剣を振れるのか？」

「木に当たった瞬間、剣が折れちまうかもなあ！」

「今日は時間がかかりそうだけ」

ぎやははは、と合唱のように重なる声の、なんと耳障りなことか。

暗黒領域のゴブリンとどちらがマシだろうと考えながら、しかし意識は研ぎ澄まされていく。

雑念が消えていき、指の先まで心が統一された——まさにその瞬間。

「ハア——ッ！」

雷光のような一閃が、凄まじい踏み込みとともに放たれる。

一連の動きであれば、以前と遜色のない素早さと鋭さで、一息に剣を振り抜いた。

しんと、静寂が訪れる。

周囲の男達は、知らぬ間に剣を抜いたアリスの足元から立ち上った土煙に首をかしげ

る。

そして、眼帯をした彼女は距離を見誤ったのだらうと嘲りの色を瞳に浮かべた。

「おいおい、素振りでも——」

「そちらに倒れますよ」

「え？」

ゆつくりと姿勢を戻しながら、アリスが告げる。

直後、軋んだ音を立てて傾いた白金樫に、その場にいた全員が驚いた。

一秒後、勢いよく倒れこんできた百年もの大木に悲鳴を上げ、一人また一人と飛びのいていく。

重々しい地響きと共に、先程の比ではない土煙が空へ舞い上がった。

口元をスクーフで覆いながら、アリスは自分の作った切り株に歩み寄る。

(つ……端が少しささくれている。これが半年前であれば、完膚なきまでに両断できたでしょうに)

理由は失った右目か、それとも弱まった剣気か。

何れにせよ、仕事は果たした。剣を鞘に収めて振り返り——思わず上半身を後ろに引

く。

猛然とした勢いでやってきたナイグルが、鼻息も荒く顔を近づけてきたのだ。

「すばつ、すばらしい！ 衛士長のジंकなど比べるべくもない！」

「い、いえ。やるべきことをこなしただけですのう」

「いやいやいや！ これほどの腕前は滅多にない！ どうじゃアリス、一月に一度と言わず、週に一度……いや、一日に一度手伝つてはくれんか！」

取り決めの話はどこへ行つたというのだろう。

とんでもないことを言い出したナイグルの強欲さは、流石は村一番の大農場の主と言わねばか。

今度こそ隠しきれない嫌悪が滲み出てくるのを自覚しつつ、手を揉む彼に首を振る。

「いえ。今のお仕事で十分ですので」

「ぐ、ぬぬぬぬぬ……」

「あの、お給金を」

「お、おう。そうじやつたの」

何とか説得できる言葉を搾り出そうとしていた所を、先に話を切つて中断させる。

正気に戻つたようにまたあの笑みを浮かべたナイグルは、腰の袋から銀貨を取り出すと彼女の手に乗せた。

これでよし、と思つた瞬間、太い指にがっしりと手を掴まれ、全身が総毛立つ。

「どうじゃ。ここで倍に給金を増やすから、他の家の手伝いの回数をこちらに回すといふのは……」

「いい加減に——」

ガタン、と大きな音が耳に届いた。

堪忍袋の尾が切れかかっていたアリスは、先の一撃のような速さで顔を向ける。すると、車椅子が倒され、キリトが地面の上で唸り声を上げているではないか。

「あ……あ……あ……」

必死な様子で伸ばす左手の先には、若者三人が持つ《青金薔薇の剣》がある。

バルボツサ一家である彼らは、二人が剣を支え、大柄な一人が剣を抜こうとしていた。「何だこれ、すごく重いぞ！」

「だからあんな女でも木を切り倒せたのかもな！」

彼らが、キリトから剣を奪った。

一瞬でそれを理解したアリスは、カット目の前が赤くなる錯覚を得る。

純白の歯を噛み締め、彼らに向けて怒号を上げんが為に大口を開こうとした。

——アアアアアアアアアア……

彼方から優れた聴覚に響いた、その音を聞くまでは。

「ツ！」

聞き覚えのある音……いや、飛翔する風切り音。

その正体を悟り、アリスは激怒の念ばかりをそのままに三人組へ叫んだ。

「お前達！ その剣を手放して逃げなさい！ 早く！」

「はあ？ 何言ってるんだよ？」

「こいつはちゃんと貸してくれたぜ？ 聞いたら『あー、あー』つつて——」

「この愚か者ツ！ 命が惜しくないのですか！」

嘲るような表情を浮かべていた若者達は、ビリビリと体を叩きつける罵声に口を閉じる。

しかし、今更もう遅い。

アリスだけでなく、誰もがその謎の音を聞きつけていた。

そして、一様に空を見上げて。

こちらに向かって稲妻のような速度で近づいてくる、漆黒の影に目を見開いた。

「伏せてッ！」

彼らへの怒りや侮蔑を投げ捨て、本能的に警告を飛ばし——

次の瞬間、アリスと三人組の間に何かが落下する。

まるで大地をひっくり返したかのような衝撃に男達が吹き飛び、旋風で宙を舞う。

ナイグルが央都の玩具屋にある達磨人形のように、丸い体を何回転もさせて転がっていった。

「ぐううううっ！」

アリスもその例に漏れず、咄嗟に鞘ごと地面に突き刺した黒剣を掴み、どうにかその場に踏みとどまる。

叩きつけるよう暴風の中で、キリトの身をひたすらに案じていると、やがて余波が収まった。

「っ、キリトは——」

一帯を包み込んだ土煙の中に、大事な人の影を探して。

グルルルル……………

聞こえた地鳴りのような声に、身を凍り付かせた。

ゆっくりと、勢いよく立ち上がりかけた体を元の状態に戻していく。

息を押し殺し、気配を消して、ソレに敵だと思われないよう、剣気を収め。

(ああっ、嘘…………やはり、来てしまった！)

恐怖のような、悲しみのような、よくわからない感情に支配される中で。

示し合わせたように、土煙の中心で広がった二枚の歪な翼が全てのヴェールを消し

去った。

「ひっ……………」

その白い翼の主を見た、起き上がりかけていた男の一人が悲鳴を漏らす。

健康的に肌の焼けた顔は青ざめ、小刻みに歯を鳴らし、全身を震わせて凝視していた。それは他の者も同様で、一人、また一人とソレを見る度、恐怖を露わにして。

そこにいる、異形の大男を畏れたのだ。



ソレは、まるで幾多の戦いを経たように傷つき、破れた赤い外套で体を包み込んでい

た。

露出した手足は白い鱗と水晶色の鉤爪で形作られ、右手には無骨な片刃の剣を握っている。

片足は棒状の義足で、フードの奥から除く横顔は——細長い、怪物のもの。

「ひいっ！ ばッ、化け物おっ！」

剣を奪った若者の一人が、足をばたつかせながらそう叫んだ。

尻餅をつき、股を濡らして、必死にそれから遠ざかろうとする。

後の二人も似たり寄ったりで、アリスはヒヤリと氷塊が背中を滑り落ちたように思えた。

「動かないで！ さもないと、彼を刺激して——！」

ギュラアアアアアアッ!!!

忠告も虚しく、異常な動きで首を回したソレが大声を上げた。

魂の芯まですくみ上がるような咆哮。かつて整合騎士だったアリスですら、思わず耳

を塞ぐ。

当然、病人から剣を巻き上げるような小物達に耐えられるものではなく。体の動かし方を忘れたように止まった三人組を、ソレは見下ろす。

——イイイイン

空っぽのココロに響くのは、幼稚で、捻れた音。綺麗な黒風の音を妨げる異物だ。唯一心安らぐ、三つの音の一つを乱した彼らに、ソレの本能は一つの結論を告げる。

——我が愛ヲ穢ス悪、滅ボスベシ

この場で、矮小な魂を刈り取る。永劫の罰の中で己が愚かさに悶え、苦しむがいい。我が牙で噛み砕き、二度とこの世界に生まれることができぬようにしてやろう。

ソレは、罪人達を撫で切りにする為に剣を振り上げた。
鏢も柄もない、まるで何かの棘に、赤布を巻きつけただけのような蛮刀を。

ギユラアアアアアア!!

釈明も贖罪も許さぬ、絶対守護の一撃。

あまりに躊躇のない行動に、アリスがハツと目を見開いた。

ここから疾走して間に割り込み、剣を抜いて防ぐには、あまりに異形の剣速が速すぎる。
ならば、彼女にできることはただ一つ。

「駄目——ッ！」

この半年、ルーリッドにやってきてから最大に声を張り上げる。

異形の心に、まだ自分の声が届くのを信じて、彼の断罪を押し留める。喉が張り裂けんばかりの、懸命のその叫びは村にまで届くほど響き渡り。

ピタリと、異形の蛮刀が止まった。

三人組の右の一人の、首の皮に触れる寸前で、間一髪静止する。

その姿勢のまま、異形はアリスへと顔だけを振り向かせた。

「はあ、はあ……けほっ……お願い、彼らを……斬らないで………」

少し咳き込みながらも、アリスは異形の顔を見返した。

ジッと動きを止めて、異形は彼女の言葉を聞く反応を見せている。

それを幸いと、言葉を投げかけた。

「そんなことすれば、貴方の魂が穢れてしまうわ。貴方が守ろうとしたのは、彼らも同じでしょう……?」

どれだけ愚かであろうとも、かつて異形は…… “彼” はこの村の人々を愛していた。

それを傷つけることは、壊れてしまった心をより陰惨にになってしまう結果にしかならない。

とはいえ、今の彼は、それを理解できないだろう。

こうして話を聞いているのは、あらゆる理性や思考といった、人間的な論理に端を發するものではなく。

魂に刻まれた、かつての「彼」の原理に従い、アリスという「愛する者」に反応しているだけだ。

それでもいい。彼が自分で自分を貶めてしまうよりは、余程。

「だから、刃を収めて。キリトは……私が守るから」

左目に、力強さだけは変わらない決意を乗せて訴えかける。

説得された異形は、彼女の声や、胸の中にある魂の音を聞いていた。

——ソノ魂二、偽リナク。

そのうちに。

ゆつくりと刃が引かれ、死を直感していた三人組はどっと脱力する。

アリスがほっと安堵した瞬間、その場で翼を広げた異形は全身を力ませた。そして、一度大きく翼を蠢かせると、それだけで何メルも上空に浮き上がる。

「あ、待っ——」

ギユラアアアアアア!!

最後に、三人組を脅しかけるように咆哮を叩きつけ。

身を翻したそれは、一瞬で空高く舞い上がると《果ての山脈》の方角へ飛び去った。

伸ばした手も虚しく、アリスはその背中が遠ざかるのを見送る。

所在を失った腕がゆっくりと降ろされていく中、時間が動き出したように周囲が騒めいた。

ふと周囲を見れば、男達が口々に異形への恐怖と畏怖、倦厭を囁きながらアリスを見ている。

「っ……」

フードの下で奥歯を噛み締めながら、アリスは三人組に近づいた。

呆けたままでいた彼らは、目の前にやってきた彼女にびくりと体を震わせる。

その間に、疾風のように手を閃かせ、《青金薔薇の剣》を取り上げた。

「二度と、同じ真似をしないことです。次は私も止めません」

十分な凄みを以って脅しかけ、それから近くに倒れているキリトを助け起こしに行く。

幸いにも怪我をした様子はなく、また安心しながら、倒れた車椅子を起こしてそこに乗せた。

それから剣をどちらとも腕の中に収めてやると、ずっと唸っていたキリトはようやく大人しくなる。

「の、のう。アリスよ……」

そこへ、ナイグルが近寄ってくる。

恐る恐る、といった様子で、顔に不恰好な笑顔を貼り付ける彼に、アリスは冷たい目を向けた。

「バルボツサさん。しばらくの間、貴方からの頼みはお断りさせていただきます」

「なっ、い、いきなりどうしたのじゃ!？」

「——何故？ 息子達が満足に動けもしない病人から剣を取り上げ、悪戯に扱ったのを止めもしないで、何故と言いましたか？」

淡々と、かつてキリト達を詰問した時のような声音で言葉を並べ立てる。

なんとか引き止めようとしていたナイグルは、ぐぬぬと悔しげに口元を歪めさせた。全く反省や謝罪の色がないことに、より一層心が乾いていく。

「そういうことですので。次の月に頼み事をしたいのなら、あの三人へよく言い聞かせることです」

最も、それで手伝う気になるかと言われれば怪しいところだが。

そんな言外の言葉を残して、アリスは車椅子を押し、開墾地を後にした。

(……ああ。また。また、彼に守らせてしまった)

慎ましい我が家に向かいながら、その心に浮かぶのは強い後悔だ。

やるせない気持ちに胸を満たし、どうしようもない虚無感が体を支配する。

半年前、自分達がセルカやガリツダ老に世話になるのが決まった時。

彼は、もう自分の役目は終わったと言うように《果ての山脈》へ飛び去った。

村の人々が時折噂する話では、それからずっと北の洞窟に住んでいるそうだ。

(きつと、彼はずっと戦っている。記憶や心を失った上で、それでも洞窟を抜けてやってくるだろう闇の軍勢を、一人で押しとどめているに違いないわ)

それだけではない。

今回のように、キリトや、自分に何かが起こる度。

彼は己の役目を投げ捨て、どこにいても駆けつけて、ああした行いをするのだ。

先刻の対応は特に激しかったが、それでも根本原理が変わっていないことに悲しみを覚える。

「……ねえ、キリト。本当に、あの人達を守ることが正しかったの?」

思わず、何も答えぬ少年にそう聞いてしまった。

何をしたところで、返ってくるのは口先ばかりの称賛と感謝。その裏には疎ましさが滲んでいる。

はたして、キリトが腕や友を失い、ユージオがその身を剣として。

そして、彼が全てを捨てた意味はあつたのだろうか。

アリスは、答えのない疑問に心を苦しませた。

母の意地

——何を、間違えたのか。

——その問いに、今の俺は答えを持つ。

——全て、間違っていたのだ。

—— 剣を取ったことも。守ろうと願ったことも。

—— 彼らと、絆を育んだことさえも。

——だから。もう何も求めない。

——誰もいない、果てなく広がるこの草原で、空を一人見上げていよう。

——意志を託す剣も、己の体と怯えを隠すものも、心や記憶さえ要らない。

—— 獣になろう。約定に従い、闇を屠り、愛すべきものを守り続けるだけの、一匹の獣に。

—— 俺は、もう。

——誰も、傷つけどくないんだ。



道すがら、買い物物を済ませたアリスはキリトと共に家路についた。

しばらく村に顔を出すのが億劫な気分のまま、ようやく森の中の分かれ道を抜ける。

「…………… あれは……………」

我が家へ視線を投じて、すぐに眉を顰める。

寝床から雨縁アマヨリが出てきて、もう一体の飛竜と戯れているのだ。

群青色の体色を持つ雨縁に対し、黒い皮膜や鎧、白に近い灰色の鱗を持ったその飛竜には見覚えがある。

「あれは霧舞キリマイ……………まさか、イーデイス殿が……………」

「アリスちゃん♪」

「ひゃっ！」

突然後ろから肩を叩かれ、咄嗟に身構えながら振り返る。

すると、おどけるように両手を上げた女騎士が悪戯げな笑いを浮かべ、そこに立っていた。

「イーデイス殿！ どうしてここに！」

「《果ての山脈》での偵察任務の帰りに、ちよつと寄つたの。アリスちゃんや、彼の顔を

見に、ね」

一瞬、自分の背後にいる車椅子の主人に視線を投じて、片目を瞑るイーデイス。

なるほど、と納得したアリスは、やって来た騎士が彼女であったことに内心安堵する。

カセドラルにいた頃、ベルクーリと並び特に親身になってくれたのが彼女だった。

懐が広く、聡明で、騎士としても非常に高い実力を持つ彼女を、アリスは信頼している。

だからきつと、*「彼」*も……あのように彼女に心を許していたのだろう。

「本当は前に言った通り、ここに寄るつもりはなかったんだけど。霧舞がどうにも騒ぐし、それに飛ばせばなしだったから」

「いえ。他でもないイーデイス殿であれば、私も心が楽になります」

「ありがとう」

ふつと微笑み合う。

実は以前、まだ小屋を立て始めた頃にもイーデイスはここに来ていたのだ。

その際もアリス達の様子を見に来たのだが、静養するという二人にその権利があると
言ってくれた。

結局、数ヶ月経った今も他の騎士などが来た試しはなく、だからこそ今もこうして話している。

「じゃあ、最初に聞きにくいことを言っちゃうけど……彼の調子はどう？」

「……相変わらず、ですね。意識が戻る様子はありません」

「そっか。アリスはどう？ 体を壊したりしてない？」

「はい。今日も村の開墾地で大木を切り倒したところですよ」

自分は壮健だと伝える為に放ったその言葉は、思っていたより暗いものだった。

イーデイスもそれに気がついて、心配そうに表情を変えてしまう。

ハッとしたアリスは、慌てて弁明するように本当に平気です、と早口に捲し立てた。

「ただ、その……」

「その？」

「……………彼に、会いまして」

口の中で含ませるように言った瞬間、イーデイスが顔を強張らせた。

そのまま、沈黙が訪れる。

開墾地での嫌な気分を思い起こさせる静けさに、アリスは視線を彷徨わせる。

「……そつ、か。彼、まだ頑張ってるんだ」

「……はい。また、私達は守られてしまった。この半年の間、幾度にも渡つて」

「あはは、聞いてた通りだ。まったく……本当、お人好しなんだから」

あれほど快活に笑っていたイーデイスの変容に、アリスは驚きを隠せない。

僅かに顔を俯かせた彼女は、少し寂しげで、悲しそうな色を目に映し出した。

（イーデイス殿は、我々を除いて最後に彼と共にいた騎士……騎士団内で彼の人のなりを知っている、数少ない人物）

未だにアリスは、彼とイーデイスと共に《雲上庭園》から上へと登った時のことを知らない。

それを聞く前に、以前カセドラルへ報告にやってきた際、カーデイナルに彼の顛末を聞いて早々に任地に戻ってしまったのだ。

一体、どんなやり取りをしたのか。何を話し、何を思い……彼を、どのように見ていたのか。

全く明瞭としないが、それでもこの顔を見れば、少なくとも善い交流であったことは間違いない。

「……彼はいつも、《果ての山脈》の麓にある北の洞窟で暮らしているそうです。そして度々、山脈の上空を飛び、闇の手先の侵入を監視している」

日中に見た、巡回をしているらしき彼の姿を思い出して、そう呟く。

思えば、今日あの場に素早く駆けつけられたのは偶然外にいたからなのだろう。

アリスの話聞いたイーデイスは、少し目を見張った後に淡い微笑みを浮かべる。

「そうなんだ。流石は北の竜に代わる守護者、つてところかな」

「……不躰を承知でお伺いしますが。イーデイス殿、貴方は彼をどのように想っていたのですか？」

「そうね………とつても頑張り屋さんな男の子、かな」

自分のことなんか気にしないで、何でもしちやうくらい、と彼女は答える。

その懐かしげな様子に、やはりとアリスは確信を深めた。

他の騎士や、カセドラルの者達と異なり、彼女は罪人という偏見無く彼の本質を見抜いている。

実際に言葉を交わし、共にいる時間を重ねれば分かることだ。

彼や、キリトやユーゾがどれだけの想いを背負って、あの塔を駆け上がってきたの

かが。

「それに……もしかしたら、私のことを……………」

「イーデイス殿？」

「……なんでもない。きつと、気のせいだから。ちよつと任務で疲れてるみたい」
誤魔化すように笑う顔に違和感を感じるものの、ひとまず頷いておく。

そこで、はたとあることに気がついた。

「その、イーデイス殿。来ていただいて感謝しているのですが、生憎と家には客人を泊める用意がなく……」

「ああ、いいのいいの。本当に顔を見にきただけだから。それに私、野宿は得意なのよ？」

胸を張る彼女に、今度はなるほどと素直に納得する。

闇素術を得意とすることや、神器の性質上、イーデイスは密偵や単独任務に就くことが多い。

それに伴って必要な技能も会得しているので、今の言葉は決して偽りではないだろう。

「一晩どこかで霧舞を休ませたら、すぐにカセドラルへ戻るわ」

「本当に申し訳ない。此度のことも、我々のことも……」

「気にしないで。それじゃ……もし彼に会ったら、よろしく伝えてね」

気さくに手を振ると、イーデイスはその場を離れていった。

雨縁とじやれあつていた霧舞の元へ行き、出立を促せば、飛竜は同族と額を合わせて別れを告げる。

そうして、少し開けた場所にまで移動してから霧舞の背中に飛び乗り、イーデイスは今一度アリスに頷いた。

「ハッ！」

ギユアアアン！

手綱を引かれ、それに従って霧舞が翼を大きく広げる。

数歩の助走をつけ、突風を巻き起こしながら飛び上がった飛竜は、空へと舞い上がっていった。

「……彼は。イーデイス殿のことを、覚えているでしょうか」

それを見送るアリスは。

やや遅ればせながら、そんな返事を空へ投げかけた。

(北の洞窟、か……………)



バルドに一蹴されたライオットは、ひとまずルーリッドの近郊に安全な場所を探した。

住民に知られることなく過ごせる場所を探し、東の森に移動して、そこである場所を見つける。

森の奥にひっそりと存在する、小さな池だ。

幸いにも獣の影は近くになく、そこで飛竜を休ませることにしたのである。

「村からそれなりに近いが、まあ少しなら平気だろ」

どこことなく居心地の良い池のほとりで、そう自分を納得させるように呟く。

それから、池の水面に舌を何度も這わせている蒼星の太い首を撫でた。

「お前も、ここが気に入ったみたいだな」

もう一匹の相棒が執心している池に、ふと視線を投じる。

半日以上飛び続けてそれなりに汗をかいている。じつとりと下着に滲んだ感触が不快だ。

(……まあ、軽く汗を流すくらいは問題ないか)

蒼星の鞍に備え付けられた荷物入れの中から、手拭いを取り出す。

池に向かって跪き、籠手を外して傍に置くと、手拭いを濡らす為に両手を水面につけた。

——イイイイイイ

その時。不意に耳鳴りがしたかと思えば、頭の中にある光景が浮かんた。

今、自分がいるこの池の風景。

そこで、黒髪の少年と金髪の少女が手元で何かを弄くり回している。

彼らを灰色の髪の少年が優しげな目で見守っていて、ライオットは息を呑んだ。

不意に二人の背後の茂みが揺れ、そこから亜麻色の髪の、同じ年頃の少年が現れる。

『キリト、アリス。こんなところで何をしているんだい？』

『あつ、ユージオ』

『やべつ、見つかつちまつた』

『あーあ。だから言ってたのになあ』

まるで最初から少年がいたのを気がついていたように、くつくつと灰髪の少年が笑

う。

黒髪の少年が恨めしそうな目で見る中で、金髪の少女は仕方がないというように微笑んだ。

『いいわ、キリト。もうここで渡しちやいましょうよ』

『……まあ、ちょうど出来上がったところだったし。むしろ、いいタイミングだったな』

少女の言に納得した少年に、一人置いてけぼりにされている亜麻色の髪の少年は困惑する。

そんな彼に、少年と少女は顔を見合わせて、せえのと声を重ねると。

『ユージオ、はいこれ！ ちょっと早いけれど、お誕生日おめでとう！』

『これは俺達からの贈り物だ！』

『っ、これ……！』

二人が満面の笑みで差し出したものに、その少年は大いに驚いた。

それは、手作りの木剣だ。子供が振るためなのか、従来のものより小型である。

だが、白金櫛を削って作ったのだろう剣の柄にはしっかりと革が巻かれ、光沢のある鞘には白い糸で竜の刺繍がされている。

手作り感のある、しかし子供ながらに立派なその剣は、心を込めた唯一無二の逸品だった。

『これを、僕に……？　こんな、凄いもの……』

『お前、父ちゃんに買ってもらった木剣を折っちまったって言ってたろ？　だから、お前の兄貴が持つてるような本物じゃないけど……でもこれは、雑貨屋で売ってるどんな木剣より凄いいんだぜ！』

『受け取って、ユージオ』

おずおすと、少年は二人からの贈り物を両手で受け取る。

じつと、見開いた目でそれを見つめて……やがて、一雫の涙をこぼした。

『ほんとだ……これ、兄ちゃんの剣よりも重いよ！　凄いや……僕、こんなに嬉しい誕生

日の贈り物、初めてだ……』

『お、おい、泣くなよ！』

『それだけ嬉しいんだろ』

狼狽える少年の黒髪を、木から離れてやってきた灰髪の少年が少し荒っぽく撫でる。それから、嬉し泣きをしているユージオの前に立つと、優しい笑顔でずっと背中に隠していたものを差し出した。

『ユージオ、俺からも。誕生日、おめでとう』

『これって……もしかして、新品の靴かい……？』

『お前、ジントクの馬鹿がこれ見よがしに自慢しているのを羨ましそうにしてたろう？だからピカピカの、とびきりいいやつを買った。それを履いてあいつに自慢し返してやれ』

自分が普段、衛士の職務をしている時に使っているものより上等なそれを、少年の胸にそつと押し付ける。

両手で抱えた亜麻色の髪の少年は、また目を大きく見開いて——それから、もう一度笑った。

『うん！ 僕、大事にするね！』

輝くような、その笑顔。

それを最後に、頭の中を満たしていた幻は消えた。

反射的に立ち上がり、ライオットは池から距離を取る。

そして脳裏に刻まれた四人の子供の記憶に、呆然とした表情を見せた。

「今、のは……」

——この場所に残る、担い手の思い出じやろうな。お主はそれに共鳴したのよ

自らで考えつくよりも先に、すぐ側に突き立てた愛剣から答えが返ってくる。

ライオットは驚きを露わにした後、その場で俯いた。

「……………クソが」

グツと、手拭いを持つ右手に力が籠る。

「クソが。クソが、クソがッ!!」

次の瞬間、大声で怒号を張り上げると、手拭いを力任せに近くの木へ投げつけた。本来であれば柔らかく、ただ叩きつけられるだけだった手拭いは人外の膂力により幹に穴を穿つ。

パラパラと零れる木片を見ながら、肩で息をしたライオットは大きく舌打ちをした。「なんで……なんで、諦めさせてくれねえんだ……」

いつそ、この世界のあらゆるものから彼の痕跡が、跡形もなく消えてしまえば。そうしたら自分は、今度こそあの好敵手への未練を断ち切れるのだろうか。永久に答えの出ないその疑問に、ただただ腹立たしさだけが募っていく。

今にも胸が張り裂けそうな寂寥は、どうしたら埋められるというのだろうか？

陰鬱とした気持ちを処理することができず、石像のように立ち尽くしてしまう。

如何ともしがたい感情を、いつものように噛み砕こうとした時。

不意に、近くの茂みから音がした。

「っ」

素早く反応したライオットは、警戒の視線をそちらへ飛ばす。

木と木の間の向こう側から、それなりに大きな気配がこちらへ近づいてきている。池に水を飲みに来た獣かと、握った拳を力ませて。

「あ……っ……っって、あの子が昔話していた……」

現れた、妙齢の女に拍子抜けした。



少しやつれたその女性は、池を見て何かを思い出したように呟く。

それから、池のほとりでこちらに振り返っている大きな飛竜に驚きを見せた。

「……なあ、あんた」

蒼星を凝視する彼女に、ライオットは声をかけて自分の存在を主張する。

それでようやく反応した女性は、彼を見て同じように息を呑んだ。

「あ、貴女様は……その鎧と、聖十字は………」

「見ての通り、俺は整合騎士だ。あんたはルーリッド村の人か？」

「ええ……あつ、いえ、そうです。その、まさか騎士様がお休みしているとは思わず、とんだ無礼を……」

「いや、いい。そういう堅苦しいのは苦手なんだ。むしろ、勝手に占拠しちまって悪いな」

「そんな、滅相もございません」

戦々恐々といった様子で話す女性に、なんともむず痒い気分になる。

それから、ふとルーリッドの村でアリスが整合騎士に連行されたという話を思い出した。

この女性も当時を知っているのだろう。怯えるのも仕方がないかと納得する。

「あー。勘違いしないでほしいんだが、ここには村の誰かを捕らえに来たんじゃない。

ちよつと人に会いに來ただけだ」

「そうでしたか。あの、でしたら村にご滞在を……?」

「それには及ばない。少し休み、央都へ帰還させてもらおう」

懇切丁寧に受け答えをすれば、女性がほつと安堵したように胸を撫で下ろした。かなりアレな反応に、弓の師であるデュソルバートの強面を思い出し苦笑した。

しかし、女性はライオットの前ですぐに悩ましげな顔に戻ってしまった。

「何か困り事でも?」

「あつ、か、重ね重ねご無礼を! 騎士様の前でこんな顔をお見せして……」

「言っただろう、俺は気にしない。それよりも、何か苦悩があるならば話すといい。我ら騎士は、人界の民が安らかに過ごせる為に存在するのだから」

かつての最高司祭が植え付け、されど長い時の中で自ら誓った誇りを口にする。

畏怖していた女性は、それを聞いて何かを逡巡するような顔をした。

ライオットは、真剣な面持ちで彼女を見つめる。

しばらく見て、それが嘘偽りないものだと感じたのか、女性は目の色を変えた。

表情を引き締め、目に何か強い意志を表しながら木陰より一步踏み出す。

数歩、ライオットの方へと接近すると両手を胸の前で握り締め、意を決した様子で口を開いた。

「息子を……息子を、探してほしいんです」

「息子？ この森のどこかで迷子になったのか？」

「いえ、そうではないのです。ただ……あの子が今も彷徨っているのは、確かなのかもしれません」

「ふむ……それで、俺に何をしてほしい？ 搜索や救助というのなら是非もなく任されるが」

数百の年月に裏打ちされた自信を言葉の裏に備え、そう答える。

彼の申し出に、女性はかぶりを振った。その代わりに、変わらぬ瞳で望みを告げる。

「私を、連れて行ってほしいんです。息子のところへ。もう一度、あの子と話がしたいのです」

「……待て。話がしたい？ 貴女の息子は今、どんな状況なのだ」

「息子は、帰ってきたんです。でも、きつと全部失って……だから母親として、私かなんとかしないと」

何か。女性の言葉に引っかけかりを覚えた。

この辺境に帰ってきたという言葉。それはつまり、長い間村を離れていたということか。

次に、全部失ったなどという表現の仕方……ライオットの中で、じわりと冷たいものが滲む。

心の表面に張り付いていくようなそれは、もしやと一つの予想を彼の中に打ち立てた。

「……失礼だが。息子の名は？」

「………ルーク。私の息子は、ルークといいます」

「——っ」

確かめるように、忘れないように紡がれた名前に、大きく衝撃を受けた。

（ルークの、母親？ この女が？）

どう見ても二十六、七程にしか見えないこの女性が、己が好敵手と定めようとした男

の親だというのか。

一体どんな数奇な運命の悪戯であろうかと、世界の真理を垣間見たような気持ちでいると、女性はさらに言い募る。

「公理教会の騎士様ほどの方にしか、もう頼めないのです。お願いします、どうか私を息子の所へ！」

「……………駄目だ」

「っ!？」

心を満たすそれとは裏腹に、即座に返した答えはとても冷たいものだった。

硬直してしまった彼女に、まるで能面のような表情で言葉が続ける。

「今のあいつは、危険すぎる。たとえ貴殿が彼の母であろうとも。いや、そうであるならば尚更に近づけさせるわけにはいかない」

「ルークを……………息子を、知っているのですか……………？」

「……………罪人としてカセドラルに連れてこられたあいつと、俺は共に戦おうとした。だが、何もしてやれず、のうのうと生きている。そして、あいつがこの人界と共に守った貴女を危険に晒すわけにはいかない」

今の自分は、彼が守り抜いたこの世界を傷付けさせないという使命を自らに誓っている。

彼女がルークの母であり……そして、あの騎士が唯一愛した存在であるなら。担い手として、彼らの旅路を見届けた者として。ライオットはここで拒絶する義務があった。

非情に徹すそうとしたライオットに、女性……セフィアは口を嚙む。

諦めたかと、そう想った瞬間。彼女はさらに一步こちらに足を進めてきた。

「……だとしても。私は、あの子に会いたい」

「……話を聞いていなかったのか？ 今のあいつは何も覚えていない。俺のことも、貴殿のことも。そんな状態で何をする？」

「分かりません。でも……でも私は、あの子の母ですから」

「っ……」

彼女の浮かべた儂げな笑顔に、一瞬記憶の中の好敵手の顔が重なった。

親子の面影、とでも言うべきか。狼狽えてしまったその一瞬に、セフィアは次の言葉を言い放った。

「私が、あの子の母である限り。たとえば、どんなに怖くて辛い思いをしたって……あの子を救う責任が、あるのです」

「——ッ!!」

「だから、どうかお願いします。私を、今も戦っているあの子に会わせてください。この通りです」

そう言つて、深く、深く体を折り曲げ、頭を下げるセフィアに。

ライオットは、自分の体を突き抜けたある一つの衝撃ですぐに答えられなかった。

（——俺は、今まで何をしていたんだ？）

ずっと諦めていた。

もう帰つてくることはない、取り戻せないと、耳を塞ぎ、目を閉じ、思考を止めた。その可能性を一片でも考えず、自分が何もできなかつたことを悔いているばかりだった。

今日の前にいる、彼の母だと確信させるに十分な勇気を見せたこの女性のように、前に進もうとしなかつた。

（俺は、ただ……辛い現実から、目を背けていただけだ）

何が騎士の誇りだ。担い手の矜持だ。

これまで自分を陶醉させていたものがいかに滑稽かを思い知り、怒りの念が湧いてくる。

己を今すぐ叩き斬ってやりたい気分に見舞われて。

（——彼女を、連れて行かなくては）

——同時に、一つの思いが生まれていた。

残酷な再会

ライオットは、そつと彼女に歩み寄る。

その音を聞きつけ、震えた肩に両手を添えた。

「顔を上げてください、母上殿。俺は貴女に頭を下げられるような男ではない」

セフィアが驚いて顔を上げると、緋髪の騎士は自嘲げな笑みを浮かべている。

「俺は、ずつと怯えていた。あいつが一人でなすべきことを成し遂げてしまい、置いていかれた気がして」

「騎士様……」

「貴女のように強い心を持った母がいるあいつが、羨ましい」

きつと、ルークはこの女性から無類の優しさと、あの父から無双の強さを受け継いだのだ。

剣の腕ではなく、心の強さ。決して穢されず、曲がることのない……絶対の意思。

かつてはそれに匹敵する矜持を掲げていたというのに、いつの間にか先輩風を吹かせられなくなっていた。

（足踏みをするのはここで終わりだ。俺も、もう一度あいつと……自分と、向き合わなくちゃな）

決心したライオットは、しっかりとセフィアの目を正面から見つめる。

「我が矜持に誓い、貴女の望みを叶えよう」

「ほ、本当ですか!?!」

「ええ。ただし、今のあいつは本当に危うい。だから、どうか俺の後ろから出ないこと。それだけを約束してほしい」

「でも……いえ。わかりました。どうかよろしく願います、騎士様」

もう一度頼み込むセフィアへ確と頷き、ライオットはその肩から手を離す。そうすると身を翻し、開いた片手を虚空へと向けた。

——イイイイイ

一人でに《蒼竜の琴劍》が地面から引き抜かれ、彼の手へと飛んでいく。愛劍を受け止めた彼は、既に姿勢を低くしていた蒼星の背へ乗り込んだ。

劍を鞍の帯に嵌めて手綱を握り、セフィアの前まで移動させると片手を差し伸べる。

「どうぞ、母上殿」

「……失礼いたします」

自分の手に乗せられた白い手を掴み取り、一気に引き上げる。

驚くほど軽い彼女の体は浮き上がり、「ひゃっ」と悲鳴を上げる間にライオットの背後へ乗った。

「では、俺の胴に腕を。激しく揺れるので気をつけて」

「は、はい」

二本の腕が体に回され、キュツと弱々しい力が込もる。

やや頼りないそれを確かめつつ、ライオットは相棒の腹を具足の側面で軽く叩いた。「行け！」

ギユアアア!!

大きく鳴いた青星が、一对の翼をはためかせて宙へと浮かんだ。

滑走路がないため、助走をつけられずに数度羽ばたきを繰り返して、高度を上げていく。十分に地上から離れたところで、《果ての山脈》へ尖った鼻先を向けて飛行を始めた。

あつという間に、先ほどまでいた池が後方に流れていく。

セフィアは必死にライオットに掴まりながら、細めた目で下を見下ろし息を呑んだ。

「蒼星、今日はこれで最後だ。もう一踏ん張り、根性見せてくれ」

「あ、あの！ 騎士様、これから一体どこへ!？」

「北の洞窟に。おそらく、そこにあいつはいる」

先ほど、《蒼竜の琴剣》に宿る意思が共鳴で教えてくれたのだが、説明が複雑なのでそう教える。

納得したのか、それきり彼女が質問をしてくることはなく、全身に力を漲らせた蒼星に任せて大空を飛んだ。

（待つてろよ、ルーク。俺は、今度こそお前を——!）

じつと見つめる《果ての山脈》は、いつまでもその連なる山々の大きさを変えはしな

い。

だが着実に接近しており、あつという間にルーリツドの上空を通過すると北方へ進路を変えた。

赤と橙が入り混じる森を超え、双子のようにつながった二つの大湖水を飛び越え。

もの十数分で、《果ての山脈》がすぐ目の前にやってくる。

「よし、降りるか。母上殿、洞窟というのはどこに？」

「山脈の麓に、ひらけた場所があるはずです。きつとそこに……」

「なるほど……ん？」

彼女の言葉に従い、下を見下ろす。

そして、訝しげな唸りを漏らした。

幸いにも、すぐにその場所は見つかつた。

草木が根絶し、岩肌が露出した大地に杭のような岩が不規則に乱立している。

その中心には小川が南の方面へ流れ、突き当たりにぼつかりとした大穴が口を開けて

いた。

「あれは……」

しかし、ライオットが注視しているのはそれではない。岩肌の上に、黒い鎧と皮膜が特徴的な灰白色の飛竜がいたのだ。その傍らには当然、鎧を纏う騎士がおり……こちらを驚いた顔で見上げている。

(なんであいつがここに……とにかく、一度着陸するか)

手綱を引くことで合図を送り、蒼星を岩場へ降下させていく。

訓練された緩やかな動きで、相棒は難なくその飛竜と騎士の近くに降り立った。

「つと。着きましたよ、母上殿」

「あ、ありがとうございます」

先にセフィアへ手を貸して、彼女を蒼星の背中から地面へと下ろす。

頭を鎧の上から撫でて感謝を告げ、ライオットも立ち上がると一息に飛び降りた。

そして、腕組みをして待ち構えていた、その女騎士へと視線を投じる。

「まさか、こんな所でお前に会うとはな。イーデイス」

「ライオット。貴方こそこんな辺境に何の用？」

「ちよいと人探しだ。まあ、今は別件だがな」

「そうみたいね」

ちらり、と彼女はセフィアへ視線をよこす。

彼女は怯えるように肩を震わせ、すぐに視線を戻したイーデイスへ今度はライオットが問いかけた。

「お前こそ、偵察任務はどうした？　いつもの調子なら、そろそろカセドラルに戻る頃だろ？」

「私も人に会いに。アリスちゃん達の様子が気になってね。まっ、今は別件中よ」

「だろうな」

軽い言葉遊びを交わして、じつくりと互いの目の中を覗き込む。

ほんの数秒の沈黙。騎士達の視線が絡み合う。

ライオットとイーデイスの関係は、特段親密なわけでも、険悪なわけでもない。

ある意味では良好な、同じ騎士団の仲間であるが、この時ばかりは張り詰めた雰囲気であった。

「……………どうやら、目的は同じようだな」

「そう、なのかしらね。貴方が連れてくるその人は？」

「あいつの母親だ」

「つ……何を考えているの？ 今彼に会わせたら……」

「承知の上だ。お前も守るのを手伝え」

「……はあ。普段は副長に怒られてばかりの私が、まさか振り回される側になるなんてね」

やれやれとかぶりを振りつつも、イーデイスは拒絶する様子を見せなかった。

長年の関係で了承の意を察すると、踵を返して洞窟の方へと向かう。

イーデイスも歩き始め、セフィアはやや困惑しつつ彼等に追隨した。



洞窟の中は薄暗く、視界を確保するのが困難だった。

その為、ライオットが《蒼竜の琴剣》を仄かに発光させ、これを頼りに奥へと進んでいく。

ライオットを先頭に、後ろにセフィア、殿をイーデイスが務める。

「寒いな……」

「あら、貴方ともあろう騎士が弱音？」

「バアカ、俺じゃねえよ。母上殿のことだ」

「あの、私のことは気にせずに……くしゅっ」

「ほらな」

ライオットは立ち止まり、剣を突き立てる。

そうすると留め具を弄ってマントを取り外し、彼女の肩にかけて首の周りで結んだ。

「これでいくらかマシなはずだ」

「……感謝します、騎士様」

「いや、何。あいつに会う前に風邪でも引かれたら寝覚めが悪いからな」

親身な笑顔を向けるライオットに、セフィアはなんだか申し訳ない気持ちになつてしまふ。

イーデイスが「かっこいい」などと茶化すと、渋くなった顔を正面に戻して進み始めてしまった。

唯一の導きである彼の後を、足手纏いにならないよう必死に足を動かす。

静謐な雰囲気に包まれた洞窟内は、小川の流れる音だけが響いていた。

水面に浮かぶ氷が、時折、他の氷や壁とぶつかって軽い音を立てる。

その際に飛び散る極上の破片が、琴剣の輝きに反射して謙虚に輝いた。

「不思議な所ね……何かを感じる」

「あいつがいるからかもな」

徐々に氷に覆われていく壁や地面は、この先に待ち受けるものの残酷さを予告しているように。

自分が吐く息の白さに少し驚いていると、不意にセファイアがイーデイスへと振り向いた。

「あの……無礼を承知でお聞きするのですが。騎士様は、どうしてここへ？」

「えっ？ 私？」

「はい。ライオット様は私の願いを聞き、送り届けてくれました。しかし、何故貴女様は

この洞窟に……?」

よもや、ルークをどうにかするつもりではないのか。

そんな不安の入り混じる表情に、イーデイスは苦笑せざるを得なかった。

確かに彼女からすれば、一人洞窟の前にいた自分は怪しく思えてしまうだろう。

「私もライオットと同じよ。彼の様子を見に來ただけ。あの時、アリスちゃん達と合流するまで最後に一緒にいたのは……私だから」

「そうなのですね……」

「ええ。それに……」

ふと、続きを言葉にすることを思い留まる。

(彼と、約束したから)

あの時託されてしまった約定を、果たすべきか、そうでないのか。

変わってしまっただろう彼に会い、見極める為にも、イーデイスは今ここにいるのだ。

(ただの口約束と言われればそれまで。今はもつと大事なことが沢山あるのは分かっている。だけど……)

あの時、庭園で言葉を交わした彼の顔を思い出す。

それが半年もたった今もなお、イーデイスの心を惹きつけたままでいた。

優しさ。慈しみ。悲しみと寂しさ。

あらゆる想いを含んだあの微笑みに、燻んでなお圧倒される意志を秘めた黄金の瞳に。

あの一瞬だけ、イーデイスは心奪われたのだ。

(彼は、自分の全てを示してくれた。だったら私も、最後まで約束をやり遂げる義務があるはず)

それが自分にできる、せめてもの行いだと確信している。

他の騎士や、ライオット、幼馴染のアリスにさえも、その役目だけは譲ることはできない。

(でも……もし彼がそうなってしまっていたら。私は本当に、この剣を振るうことができると?)

今までどんな敵だって切り伏せて、前に進んできた。

それは己が騎士として守る者の為、人界に生きる誰しもの命を明日へと繋ぐ為だ。だが、今自分が決意しようとしていることは、本当にこれまでと同じなのか。愛する者の為に戦い、その果てに全てを失ってしまった彼を斬ることは。

本当に、自分が信じてきた正義なのだろうか？

「騎士様？」

「……大丈夫。それよりも、足元が不安定だから気をつけて」

「は、はい」

前を向き直すセフィアの背中に、ぐっと《闇斬剣》の鞘を握る手に力を込める。もしもその決断をする時が来るのなら、自分は彼女に酷い嘘をついてしまった。

ここまで来て、最初に彼の結末を聞いてからずっと揺るがなかった覚悟が崩れ始めて
いる。

何故今更、と一人で密かに首を傾げて。

『あら。お姉さんに惚れちゃった？』

『……かもしれないな』

「……それは関係ないっ！」

「っ!？」

セフィアの肩が跳ねた。先頭にいたライオットも立ち止まり、何事かと振り返る。

そして、慌てて両手で口を塞いだ彼女に胡乱げな目線を送った。

「おしいーデイス、うるせえぞ。いきなりどうした」

「……な、何でもないわよ」

「何でもないってことは……」

「うっさい！ ほら、あと少しでしょ！ 先に行つて！」

「……ワケわからん」

なんとも不機嫌そうな顔で、ライオットはまた行進した。

同じように振り返っていたセフィアに愛想笑いをして、前進を促しつつ自分も歩き出す。

（別に、あれだけで摩くほど単純じゃないし。ただ、あんまりにも自然に言うものだから、ちよつと記憶に残っただけよ）

頭に浮かんだ考えは、《闇斬劍》の完全支配術で繰り出す闇のような心の奥底へ必死に沈めた。

それから程なくして、一本道の終着点に辿り着く。

三人は岩陰へ身を潜め、そつと奥に広がる空間を見た。

「広いわね……」

「昔聞いた団長の話だと、ここが白い竜の寢床だつて話だ。つまり、あいつがいるとすれば……」

「……ルーク」

小さく呟くセフィアに、ライオットとイーデイスは顔を見合わせて頷く。

緋髪の騎士は元より抜き身の《蒼竜の琴剣》を両手で握り、女騎士は《闇斬剣》を引き抜いた。

「これから中に入る。母上殿、決して離れないように」

「っ、わかりました」

「よし。それじゃあ……行くわよ」

その言葉を合図にして、三人は広間の中へと踏み入った。

余すところなく薄氷に覆われた空間は、分厚い氷が床となり、水晶のように煌く氷柱が屹立している。

より一層寒々しい大気に見舞われ、セフィアがマントを両手で体に密着させた。

「敵は……いねえな」

「っ……ライオット」

硬い声で呼ばれた己の名前に、ライオットは警戒しつつ振り向く。

強ばった顔をしたイーデイスは、ある方向を見るように顎で促した。

そちらに顔を振り向かせ……つられたセフィアと共に、息を呑む。

「おいおい……これは、ゴブリンか？」

「うっ……こんな、酷い……」

耐えきれないという様子で、セフィアが口元を抑える。

地面に転がっているのは、無惨に全身を破壊された、ゴブリンだったであろう肉塊。

手足が欠け、腹が引き裂かれて臓物が地面に溢れ出ている。そこから強い血の匂いが漂っていた。

恐怖と怒りの中間のような表情を醜い顔に浮かべ、絶命しているそれに、ライオットは目を見開く。

「嘘だろ……まさか、あいつ」

「何、ライオット。どうしたのよ？」

「……このゴブリンは。もしかしたら、あいつに」

イーデイスの問いに答えようとした、その時。

どこからか、生々しい異音が響いた。



グチャグチャと、何かを引き裂き、咀嚼するかのような音。

背筋が凍るようなそれに、ライオットとイーデイスは一気に警戒心を引き上げる。

「……………」

「……………」

視線を交わして意志を伝え合うと、イーデイスがセフィアとの距離を詰める。ライオットは異音のする方向へと顔を向け、ゆっくりと歩き始めた。

臨戦態勢を取りつつ、音を立てないよう、細心の注意を払って足を踏み出していく。なるべく氷柱の影に隠れるようにしながら、たつぷりと時間をかけて氷の園の奥に踏み込んだ。

グチャツ……バキツ、ゴギツ………ブヂヂツ………

いよいよ、音の近くまでやって来る。

ライオットは意を決して、最後の氷柱の裏から出ると、その場所を目の当たりにして。

「っ……………!!」

大きく、息を呑む。

喉の奥からこみ上げた声を、なんとか抑えられたのは幸運だっただろう。

同様に、手放しかけた《蒼竜の琴剣》を必死に掴み直し、気取られるのを回避する。

広間の最奥、そこに堆く積み上げられた眩いばかりの金銀財宝。それらを抱え込むかのように、仄かに青みがかつた巨大な遺骨……竜の骸が散乱している。

富と死、二つの山の頂上では。

ギョルルルル……

一匹の成り損ないが、何かを貪っていた。

擦り切れた赤い外套を纏うソレは、周りの一切に目をくれず手元にあるものに集中している。

美しい鱗や鉤爪は赤い血で濡れ、頭髪のような灰色の体毛の奥にある目は爛々と獣欲に輝いていた。

そして、細長い口が一心不乱に噛み砕いているものは……緑色の肌をした、人型の腕。

(ルーク、お前………っ！)

獣の如き様相に、ライオットは血が出るほどに下唇を噛み締めた。

理解はできる。

真竜となったのであれば、大気に満ちる空間神聖力を己の生命へ変換することができ
る。

だが、中途半端に変容したことで人の性質を残し、何かを食らわなければならなかつたのだろう。

(こんなの、人の尊厳を踏み躪っているじゃない……………！)

彼の後ろから顔を出したイーディスもまた、あまりに凄惨なその姿に打ち震えた。話には聞いていた。だが現実には、決めた覚悟を遥かに上回る残酷さだったのだ。

彼との交流が長くない彼らでさえも、そうなのだ。

セフィアの反応は激的と言ってよいものだった。

「う、そ……………あぁっ、ルーク……………！」

「つ、駄目っ！」

全身を震わせながら、手を伸ばしたセフィアが彼へと近づいていく。横を通り過ぎたところでようやく気がつき、イーデイスが諫めるが……それが引き金になった。

咀嚼音が止まる。

一瞬で空気が凍りつき、イーデイスがしまったと自分を責めた。

彼女が、ライオットが、セフィアが恐る恐る視線を向ける中、動きを止めた成り損ないが振り向く。

そして、自分の領域に足を踏み入れた三人の侵入者に、何かを確かめるような瞳を向けてきた。

グルルルル……

「……絶対に、おかしな挙動はするなよ」

「できるわけ、ないでしょ……！」

ジリジリと、少しずつ成り損ないから距離を取る為に後ずさる。

セフィアを庇えるように移動しながら、こちらを観察している成り損ないの様子を伺う。

その歪な巨体から露出を始めた、物々しい雰囲気寒気を呼び寄せた。

セフィア達の所までライオットが辿り着くまで、一メルと五十センチ。

そこまでやってきた時、ゴブリンの腕を手放した成り損ないが傍らに突き立てた蛮刀に手をかけた。

(まづい……い……！)

大きく力んだ成り損ないの両足に、ライオットは一瞬で意識を切り替える。

彼がセフィアの前へ躍り出たのと、成り損ないが凄まじい音で跳躍するのは同時だった。

ギユラアアアアア!!

「クソツタレがッ!」

天井高く跳び上がり、裂帛の咆哮を上げながら成り損ないが落ちてくる。

大上段から振りかぶられた蛮刀に、琴剣を使って曲芸のように跳び上がったライオットは応戦した。

「オラアアアアアッ!」

ギユラアアア!!

ぐんぐんと近づいた成り損ないの蛮刀と、騎士の剣が空中で交差する。

激しい衝突音を奏で、盛大に散った火花と豪風にセフィアが悲鳴を上げるのが聞こえた。

自分を大きく上回る臂力で蛮刀が押し込まれ、両手で琴剣を支えて受け止める。

「ぐ、うおおおおおおっ!」

腹の底から叫び、全力で蛮刀を弾き返した。

姿勢を崩した成り損ないは空中で回転しながら、翼を使い後方へと引き下がる。

ライオットも頭から落ちる体を捻り、なんとか上下を入れ替えると着地した。

「つく！ あの野郎、とんでもねえ馬鹿力してやがる！」

「ライオット！」

「騎士様！」

「イーデイス！ 今すぐ彼女を連れて出口まで退避しろ！ 俺が時間を稼ぐ！」

こちらへ近づくと気配を見せた二人を、怒号に近い声音で制止する。

足音が止まり、されど躊躇しているのか動かない彼女達へ成り損ないを見ながら言葉を続けた。

「今のこいつは狩りの後で気が立ってる！ このままじゃ最悪の事態になるぞ！」

「……分かった！」

「待つてください騎士様！ ああつ、ルーク！ ルーク——！」

悲痛な叫びが、尾を引くように残響しながら離れていく。

懸命な判断をしてくれた同輩に内心で感謝しつつ、ライオットは山上に戻った成り損ないを睨んだ。

「よお、ルーク。随分な挨拶じゃねえか。出会った時の仕返しか？」

グルルルル……!

「ハッ、言葉も忘れたってツラだな。今のテメエに何言つても無駄か」
片手を地面に置き、獣らしく荒々しい殺気を垂れ流す成り損ない。

その墮落した姿に奥歯を噛み締め、ライオットは怒りに滾る両目で言葉を投げかけた。

「……今のお前は、何も知らねえし、覚えてねえ。そうだろ？ だったら、もう一回教えてやるよ」

ライオットが、不意に構えを解く。

そうすると《蒼竜の琴剣》を優雅に回転させ、刃の一方を床に深く突き刺した。

背筋を正し、肩をほぐすように動かして——胸の前で、掌に拳を叩きつけ。

「俺とお前の間にある、経験の差ってやつをよお！」

怒りの雄叫びを上げた成り損ないが、拳を構えたライオットへ飛びかかった。

鉄拳制裁

金貨や宝飾品を蹴散らし、成り損ないが飛びかかる。

まるで岩が矢よりも速く飛んでくるかのような威圧感、それだけで凄まじい。

事実、《果ての山脈》に侵入していたゴブリンの小隊は為す術もなく全滅し、悉く餌となつたのだ。

(だが……)

ゆつくりと、ライオットは拳を開いて構えを変えていく。

真正面からやつてくる成り損ないを観察し、荒々しい突進の全てを観察した。

重心の位置、筋肉の隆起、力の流れ、視点の場所……あらゆるものを、極限の集中で見抜く。

そして。

「ハッ!!」

グギツ!?

成り損ないの剣技とも言えぬ一撃を滑らかに躲し、その横つ面に掌底を叩き込んだ。鈍い音が響き、数枚の鱗を飛ばしながら成り損ないが吹き飛んで近くの柱に体を打ち付ける。

地面に落ちた後、一瞬で四つん這いに立ち上がると、再びライオットに強襲をかけた。

「フツ——」

それもまた、易々と回避される。

繰り出した回し蹴りの下に回り込んだ騎士は、低姿勢で素早く回転しながら裏拳を腹に入れる。

鈍器で打ち抜かれたような振動が臓物を揺らし、横向きに吹き飛んだ成り損ないが財宝の山に突っ込んだ。

宝が宙を舞い、分厚い氷の床に甲高い音を立てて落ちる。残心したライオットの拳から秘奥義のような光が消え、彼はゆっくりと立ち上がった。

そうして金貨の小山へ振り返り——途端、中から成り損ないが飛び出してくる。

ギユラアアア!!

「遅いー」

突き出された右腕を両手で掴みとり、鎧に包まれた肩を成り損ないの胸につける。

そして、一本背負いの要領で固い床へ強烈に叩きつけた。

カヒュツ、と成り損ないが空気を吐き出し、その間にライオットは全身の力を使って巨体を浮かせる。

「おおおおおおっ!!」

腹の底から雄叫びを上げ、数度の回転で加速を伴わせながら遠くへ成り損ないを投げ飛ばした。

氷柱を砕き、奥の壁にぶつかって氷片を撒き散らしながら落ちる様を見つつ、深く呼吸をする。

体に空気を取り入れ、少し軋んだ音を立てる籠手の調子を確かめながら成り損ないの所へ歩いて行つた。

ギユ、アアアアア……！！

四足歩行の姿勢で、成り損ないは警戒した唸り声を上げてライオットを見る。

三度の攻防で学習したのだろう。無闇に襲いかかってくることはなかった。

「生憎と、今のお前にや剣を使う必要すらない。この身一つで十分だ」

拳と掌を打ち合わせ、その高い実力を誇示するように見せつける。

怒りの混じった声を喉の奥から漏らす成り損ないへ、鋭い視線を向けた。

「クローム流体術。その力を思い知りたいたいというのなら、かかってくるがいい」

ギユグラアアアア——！！

言葉を解する成り損ないは、明らかな挑発に絶叫し、侵入者へと飛びかかった。ゆらりと拳を構え、重心を落としたライオットは獰猛に笑って迎え撃つ。

そして、一方的な戦いが始まった。

獣は、強靱な肉体と敏捷性、常識離れた体力で怒涛の攻撃を仕掛ける。

ゴブリンはおろか、学院の上級修剣士ですら一撃も視認できずに切り刻まれるような野生の猛攻だ。

しかし。ライオットは悉くの獣技を防ぎ、逸らし、あるいはそのまま返してみせた。

無双の強さを誇るはずの半人半竜は、ただの一度も緋髪の騎士に傷を与えられずに蹂躪されていく。

（――こうしていると、思い出す。失った記憶の断片を）

未だ頭に突き刺さる水晶柱のせいで欠けてしまった、大事な記憶。

拳を振るう度、堅く封じ込められたそれが臃げながら心に浮かんでくる。

緋色の髪少年が、同じ年頃の少女と組手をしている。

背も高く、細いながらも筋肉質で力強い少年の技は、一度も少女に当たらない。

その顔には貴族らしい驕りと、焦燥、そして苛立ちが浮かんでいた。

負の感情に任せるままに、少年は拳を繰り出し——それを舞うように避けた少女に背負い投げされた。

大きく息を吐き、痛みに視界が明滅する。

高い天井を見上げ、苦痛に顔を歪めていると、そこに入り込んできた少女の顔が悪戯げに笑った。

『おや、もう休憩なのかい？ シュトルツ家の長男というのは、随分と情けないね』

『っ、るっせえ！』

あからさまな挑発にあっさり乗った自分は、すぐさま起き上がると少女に構えた。くすりと余裕の笑みをこぼした少女も緩やかに型を定め、また稽古を始めるのだ。

(何も、思い出せねえ。あの女の名前も、はつきりとした顔も、何もかも)

ただ、彼女に徹底的に打ち砕かれ、驕りを打ち直した矜持を宿すこの魂が。

染み付いた技を振るう度にこの体が、懐かしさと愛おしさで満ちていく。

（ああ、わかってる。あいつはもう、この世界にいないんだろう。俺だけが今も生きていて……だから、この技だけは、忘れられねえんだ）

今やそれだけが、彼女の存在を実感させてくれる……唯一残った証なのだから。

ギユラアアアア!!

「セイアツ!!」

微かに心に残ったその愛をしかと握り締め、堕ちた好敵手へと拳を振るった。

そんなライオットと、何度叩きのめされようと抗う成り損ないの攻防に、周囲は破壊されていく。

人の背よりも高い氷柱は悉くが砕け散り、出口付近にいるイーデイスやセファイアにもその様子が見えた。

「うわ、すげ……」

初めて見る同胞の剛拳に、イーデイスは思わずそう呟いてしまう。

騎士団内での序列は、ベルクローリを頂点として副長フアナティオ、アリス、数人を挟み自分といった具合。

その中で、これまでライオットは六、七位といった具合であったが……とんだ爪を隠していたものだ。

（守護竜の魂を宿した神器と、中途半端とはいえ竜を一方的に下せる格闘技術……神聖術の腕や頭脳も抜群だし、これが担い手の力だというの？）

秘められた彼の實力に戦慄する彼女。

その横では、二人の攻防をはらはらとした様子で見守っているセフィアの姿があった。

一撃入れられる度に、その勢いを弱めていく成り損ないを見て、今にも飛び出しそうになっている。

「ルーク……っ！」

彼女の目の前で、騎士に息子がなすすべも無く打ちのめされている。

唸る拳が鱗を抉り取り、鞭のようにしなる蹴りがその体を地面に叩きつける。

分かってる。あれはあくまで興奮している息子を鎮める行為で、何らかの悪意あるものではない。

それでも、鈍い音が広間に木霊する度、びくりと肩を大きく震わせた。

ギユ、オ、アアアアアア!!

全身を傷と血に塗れさせながら、子供でも避けられそうな一撃を成り損ないが繰り出す。

ライオットは、もはや避けることもなく義足を払うと肘を顔に入れ、地面へ打ち倒した。

オ、ガ、ギイ……………

「……………悪いな、ルーク。少しばかり、眠ってもらおうぞ」

地面を這いずる成り損ないに、冷徹な目で見下ろした緋髪の騎士は。

ゆつくりと、小指から握り込んだ拳へ、音を立てて全力に近い力を込め。

そして、容赦無く振り下ろした。

「駄目……………っ！」

「あつ、ちよつとツッ!」

その時、耐えられなくなったセフィアが駆け出す。

不思議な力でも働いているように、華奢な足を必死に踏み出して風のように疾走し。まさに息子の脳天に拳が吸い込まれる、その瞬間。

「騎士様、もうおやめくださいっ！」

彼女は、その間に割り込んだ。

ライオットが、咄嗟に拳を止める。

額を割る寸前で制止した拳から発せられた鋭い風に、セフィアの髪が大きく後ろへ舞い上がった。

ゆっくりと焦げ茶色の髪が落ちていき、静寂が訪れる。

中途半端な姿勢で止まったライオットの瞳と、きりりと吊り上がったセフィアの瞳が交差した。

「……………何をしている、母上殿」

「もう、これ以上は必要ありません。どうかその拳をお収めください」

「そこにいと危険だ。今すぐイーディスのところへ戻っていたらこう」

「いいえ。これ以上息子と戦うというのなら、例え殺されてでもここを動く気はありません」

確固たる意志を込めた声音で、不退転の姿勢を見せるセフィア。

再び露わになった、彼女の母としての強さにライオットはハツと息を呑んだ。

すると、いつの間にか沸騰していた思考が急速に明瞭になっていく感覚を覚える。

(……俺としたことが。いつの間にか、頭に血が上っていたな)

まさかここまで感情的になっていたとは、騎士として恥ずべきことだ。

二百年の時を生きてなお、未熟さを痛感しながら……突き出しかけた拳を下ろした。

「……分かった。ここまでとしよう」

「……感謝します、騎士様」

「だが、危ないのは事実だ。今のそいつでは、母上殿を傷つけてしまうかもしれない。だから——」

「それでもいいのです。私は、もう……見ているだけなんて、嫌ですから」

セフィアは、ずっと後悔していた。

いつも言葉だけを贈り、見送るばかりで、愛する人達を守れない。救えない。

どれほど歯痒い思いをしただろう。不安にかられ、一人枕を涙で濡らしただろう。

だから今こうしたこと、何の恐れもない。むしろ、初めて自分が誇らしくさえあつた。

ライオットが、頑ななセフィアにどうしたものかと嘆息する。

こちらに歩み寄ってきているイーディスも、彼らの会話を聞いて何とも言えない顔をしていた。

.....

その一方で。

地面に這いつくばった成り損ないも、彼女の背中をじつと見上げていた。細くて小さな、その後ろ姿。

何の力強さもなく、戦う力の一つも持っていないだろうに。

それなのに何故か、とても……とても懐かしい安心感を覚えた。成り損ないは、あの背中に宿る温もりを知っている。

今日の前にあるものより、もっと昔……そう、この世界に生を受けた瞬間から、ずっと。

その温もりを、与えて、くれたのは――

「かア……………サ……………ん……………」

瞬間、広間の空気が凍りついた。

すぐには理解が及ばず、たつぷりと数秒かけて解析する必要があった。
ようやく思考が現実を追いついた、その時。

二——ツ!??!
二

ライオットとイーデイスが、恐ろしい形相で振り向いた。

凡そ人に向けるものではない表情の先に、彼らと対面する形になっていたセファイアも
勢いよく振り返る。

三人は、改めて成り損ないを見た。

自分達を……否。

セファイアを見ている黄金の瞳に宿った微かな理性の色を確かめ、雷鳴に撃ち抜かれた
ような衝撃を受けた。

「…………おい…………今、こいつ……………」

「………………喋、った………………？」

あり得るはずのない、まるで泡沫の夢が現実になったかの如き事態に、二人は喘ぐように言う。

緋色の瞳と真紅の瞳が、いつそ無遠慮なほどに成り損ないの瞳を覗き込んだ。

しかし、何度見てもその金眼には意思らしきものが存在していたのだ。

「ルーク……………なの……………？」

セフィアも、信じられないといった面持ちで息子のことを見下ろした。

母の問いかけに、成り損ないは固く閉じていた口をゆっくりと開く。

そうすると、喉を震わせ――

ギュラアアア――ツ!!

「ぐっ?!!」

「きゃっ!?!」

肌を強かに叩きつける咆哮に、思わず身が竦んでしまう。

この場で唯一自分に対抗しうる彼らを封じ込め、立ち上がった成り損ないはセフィアを捕らえた。

鋭い鉤爪で肩や足の裏を傷つけないよう優しく掴むと、横抱きに彼女を引き寄せる。

そうすると、渾身の力で羽ばたいて宙へ浮き上がった。

「っ!・ 待て、ルークツ!」

ギユラアアア!!

ライオットの制止も聞かずに、雄叫びを上げた成り損ないはその場を飛び去る。

一瞬で二人の頭上を通過すると、そのままルーリッドの方面へ繋がる出口の穴へと消えていくのだった。

主を失った広間に、今度こそ静けさが戻ってくる。

取り残されたライオットとイーデイスは、呆然と成り損ないが飛んでいった洞穴を見

る。

「あいつ、思い出したのか……………?」

「嘘……………そんなことあり得るの……………?」

「……………分からねえ。守護竜程の存在に食い尽くされたら、二度と記憶や人格は戻らないはずだが……………」

今自分達が見たものは、アリス達を守るように単なる原始的な行動だったのか。

はたまた、何かしら引き金になって記憶の一部を取り戻したのか。

(あるいは、最初からあいつの魂はまだ何処かに……………いや、それは希望的観測が過ぎるか……………?)

頭を悩ませるものの、一向に答えが導き出せる気がしない。

すぐに解決することが困難と悟ったライオットは、思わず深くため息を吐いた。

「つたく、戻ってきてほしいと願っちやいたが、その糸口が現れたかもとなると急に複雑になりやがる」

「……………けど、もしも彼の記憶がまだ消えていないなら。望みはあるってことよね」

「なんだ、やけに嬉しそうなツラしてるじゃねえか」

「はっ？　べ、別に嬉しくなんてないけど？　ただ、母親の前で斬らなくて良くなったからホッとしてるだけよ？」

「そうか？　なんか怪しいが……」

なんとも挙動不審なイーデイスを訝しむが、そっぽを向いた彼女は答えそうにない。

一応、斬らなくてよかったという部分には本心からのものを感じたので、追求は止めておいた。

それから、今一度成り損ないがセフィアを連れ去っていった出口に顔を向け。

（ルーク。もしもお前が戻ってくる可能性があるのなら……俺は、今度こそ絶対に諦めねえからな）

固く、その決意を新たにした。

抜け殻の心

一時間前に見たばかりの光景が、時を巻き戻すように遡っていく。

整合騎士以外、人界の誰もが体感したことのない貴重な経験に、しかしセフィアは全くの無関心だった。

それよりも……自分を攫った成り損ないの顔を、胸の中から見上げる。

強風に体を冷やささないようにしてくれているのか、自分の体を大きな手と外套の中に包んでいる。

前を見つめる瞳に荒々しさはなく、鮮やかな虹彩が月光に照らし出されていた。

「……………」

ただ、言葉もなくその顔を見つめ続けて。

肩に回された鋭い鉤爪へ、誤って切らないようにしながら手を添えた。

飛竜に匹敵する速度で飛翔した成り損ないは、ぐんぐんとルーリツドの方面に近づいていく。

季節が流れるにつれて日が短くなり、夜の帳が降りた一带は静寂に包まれていた。その中で、成り損ないはギガスシダーの切り株に目を付けるとゆっくり降り立った。

グルルル……

「あ、ありがとう」

労わるような手つきで、セフィアの足を地面につける。

彼女が自分で体を支えると、やはり細心の注意を払って両手を外套の中に戻した。

そんな彼を、至近距離で見上げる。

「……………ルーク、なのね?」

成り損ないは、何も答えない。

じつとそこに佇み、周囲の風景に同化するように静けさを醸し出している。

ただ、酷く落ち着いたその眼だけはセフィアのことを見ていて……そこに息子の面影を感じたような気がした。

「私のこと、覚えてる？　母さんよ？」

言いながら伸ばした手に、成り損ないが唸り声を漏らした。

体を震わせ、腕を止める。しかしそれは一瞬で、口元を引き結ぶと手を伸ばした。

成り損ないは、その手を視線で追いかけて。

遂には自分の額に置かれても、襲うことはおろか、噛みつく事もしなかった。

むしろ、その手の温もりを享受するかののように跪き、目を細めて顔を俯かせる。

「……暖かい。それに、ちよつとゴツゴツしてる。昔とは随分変わったのね」

人だらざる姿をしたソレが、今は何者であるのか。セフィアは確信した。

慈しみと、嬉しさと、少しの悲しみが滲んだ微笑みで、そつと額を撫でる。

「ねえ。もう一回、母さんって呼んでほしいな」

ささやかな願いを口にする。半年前、帰ってきた彼を見てからずっと願い続けた事を。

成り損ないが再び彼女を見る。されど、その口を開くことはなく。

それだけで、やはり記憶があるわけではないことを察することができた。

「そつ、か………ううん。いいのよ。だって、どんなふうになってもルー君はルー君だ

もんね」

たった二人の、家族の思い出を失っていてもいい。

その優しい心のカタチさえ残していてくれるなら、どれだけ悲しくてもセフィアは耐えることができるのだから。

「あつ。それとルーク、あんなもの食べちゃダメでしょ。お腹を壊したらどうするの？
ちやんとご飯を持ってきてあげるから、今度から変なものを口に入れちゃダメ。分かった？」

昔、地面に落としたパンを食べようとした時に嗜めた時のように言う。

すると、成り損ないは情けない鳴き声を喉の奥から漏らした。

それがあまりに幼い頃と似ていて、思わず笑みを深めてしまう。

すっかり変わってしまった感触を刻みつけるように、セフィアは撫でるのを止めない。
い。

心地よさげにしていた成り損ないは、不意に体を動かした。

思わず手を引いたセフィアの前で、彼は巨軀を縮こまらせていくと、野犬がそうする
ようにそつと寝そべる。

「あら……疲れてしまったの？　そうよね、騎士様とあんなに戦っていたものね」

セフィアは、服が汚れるのも厭わず膝を突き、両足を揃えてその場に座った。

それから両手を、こちらを見上げている成り損ないの顔に添えると持ち上げる。

ほとんど抵抗もなく、成り損ないは彼女の足の上に顎を乗せた。

「ごめんなさい。どうしても会いたくて、結果的にあなたに怪我をさせてしまった。どうか騎士様じゃなくて、私を恨んでね。あの方は、私達の為に拳を握ってくれたのだから」

その言葉へ、わかっているとやわらばかりに成り損ないは鼻を鳴らす。

ありがとう、と囁きかけたセフィアは、彼の長細い顔を優しい手つきで撫でつけた。

「いっぱい、頑張ったのね。沢山戦って、大切な人達を守ろうとしたのね。母さん、分かるわ」

口にするのは、ずっと言っただけであげたかったこと。

六ヶ月間……否、彼が旅立ったその日から胸に募らせ続けた、無償の愛情。

今の彼に、届くかは分からないけれど。

それでも、手を止めることはできなかった。

「母さん、いつもルー君の成長を見守っていたかった。貴方は常に、誰かの為に頑張る子だったから。本当に心配で……」

「……………」

「うん、そうよね。私にできるのは、無責任に背中を押すことだけ。それで……貴方を、こんなに頑張らせてしまったのかもしれない」

いつだって、セフィアは自らの決断に覚悟を持ち、彼らを送り出した。

そこに一つの後悔もないかと言われれば……断じて、そんなことはあり得ない。

「酷い母親だと思おうかな……それでもいいよ。非力でお節介な母さんのことを、恨んでくれていい」

だけどね、と、セフィアは言葉を止めずに。

「これだけは、覚えていてね。……愛する人を守るということは。まず何よりも、自分を守るということなのよ」

「……………」

「分からない、って顔してる。もう、ヤンチャな子ね。そんなんじゃ、いつまでたつてもお嫁さんができないぞ〜?」

ぐりぐりと軽く眉間の中心辺りを人差し指で押すと、成り損ないはくすぐったそうに
した。

ふふふ、と微かな笑いを零して、それから話の続きを語り出す。

「きつと、貴方が愛すれば愛するほど、その人もまた貴方を愛してくれる。愛は、ただ手

放すだけのものじゃない。誰かに注いだら、その分だけ受け入れるものなのよ」

「……………ア……………イ？」

「そう。だから、愛から逃げては駄目。守ると、愛すると誓ったなら、その人がくれる全てのものを背負って、生き続けなさいといけないの」

かつて、自分が愛し、そして最後に愛を返してくれた、最愛の人のように。

息子にも愛してくれる誰かがいることを、セフィアは信じている。

今も心を痛めているアリスや、セルカ。ライオットや……………もしかしたら、あの凛々しい女騎士も。

「忘れないで、ルーク。愛するということは、愛されるということ。その人達を愛し続けたいのなら……………もう、何も捨てようとしてはいけないからね」

尽きることのない愛に満ちた、その言葉が。

月明かりに彩られた、優しい笑顔が。

ゆつくりと、成り損ないの心に染み込んでいった。



夕食の準備をしているうちに、あつという間に外は暗闇に包まれた。

一日の流れる速さを感じながら、窓より手元に視線を戻す。

熱素で生み出した、小さな火種の上でコトコトと音を立てる鍋には、具沢山のシチューが。

畑で採れた野菜や、昼にかの騎士が置いていった野うさぎの肉をふんだんに使った一品。

これならば、十分な栄養を摂らせてあげられるだろう。

「キリト、そろそろご飯にしましょうか」

振り返って、椅子にぼんやりと座っている少年に声を掛ける。

式句を唱え、熱素を水素で消す。

底の深い皿にシチューをよそってスプーンを付け加えると、それを手にキリトの隣へ趣き、一口掬い上げて口元に運ぶ。

「ほら、口を開けて。冷めないうちに食べてほしいの」

少年は、じつとテーブルを見るだけで自ら動こうとしない。

いつものように、スプーンの縁をそつと唇に押し当てて待ち続ける。

やがて、ほんの少しだけ口が開かれた。

一瞬の好機を見逃さず、スプーンを隙間に差し込むと舌の上にシチューを乗せ、引き抜く。

口を閉じたキリトが、緩慢に咀嚼するのを見て今晚もほっと安堵した。

「熱いから、火傷しないようにね。さあ、もう一度——っ！」

次の一口を与えようとした、その時。

外から耳に届いた微かな音に、思わず手を止めてしまう。

そして、素早く扉の方へと振り向いた。

「今のは……！」

皿を机の上に置くと、身を翻して外へ飛び出していく。

僅かな階段を一足に飛び越えると、ねぐらから出てきている愛竜の姿を見つけた。

キュルルッ！

彼が見上げ、鳴き声を上げている夜空を見上げる。

無数の星と、煌々とした月明かりに彩られた暗闇の中で、優雅に舞う飛竜の姿がある。

徐々にこちらへ近付いてくるその姿に、アリスは目を見張った。

「雨縁の兄竜、滝劔……ということは」

その正体を見極めた彼女の前に、滝劔と名付けられたその飛竜が降りてくる。

立派な翼で自らの体を制御し、よく手入れをされた鎧に身を包んだ滝劔は嘶いた。それに応える雨縁の姿を横目に、着地した滝劔の背中に乗っているその騎士を見定める。

「……今日は、来客が多い日ですね」

手綱を操り、滝劔を鎮めた騎士は長い足を翻すと背から降りてくる。

鎧が鳴らす重々しい音とは裏腹に、気品ある動きで着地すると、アリスへ端正な顔を向け微笑んだ。

「何用ですか。エルドリエ・シンセシス・サーティーワン」

「お久しゅうございます。我が師、アリス様」

眉目秀麗という言葉を体現したような騎士、エルドリエは親愛を込めた挨拶で軽く礼をする。

整合騎士としては新米であつた彼に剣や神聖術を教えたはずのアリスは、剣呑な目つ

きを崩さない。

「お前、どうやってここを見つげ出したのです。今の教会に、騎士や飛竜を無駄に飛ばす余裕などないはずですが」

今や人界は、ひと時も警戒を怠れない状況だ。

不朽の壁のすぐ向こうに住まう、ゴブリンやオーク達の不穏な動きに目を光らせるのが騎士の役目。

だというのに、こんな辺境の地にいるエルドリエに厳しい目を向ければ、彼は苦笑する。

「それは勿論、私とアリス様の繋がりを辿って……と、言いたいところですが。ちょうどこの近辺を飛んでいたところ、滝刃が妙に騒ぎまして。それに従ってみれば、アリス様がいたのです」

「……そうですか」

頷きつつ、アリスは背後の小屋へ一瞬視線を投じる。

ほんの少し逡巡した後、騎士エルドリエへ視線を戻すと、小屋の方へ体を傾けた。

「こんなところで立ち話もなんでしょう。ひとまず中へ」

「感謝いたします」

エルドリエを引き連れて、アリスは仮の我が家へと戻っていった。

入つて早々、アリスはキリトをベッドの方へ連れていき、来客用に取つておいたワインを準備する。

エルドリエは狭々しい小屋の中を見渡し、その中に溶け込んでいたキリトを見て目元を陰しくした。

それを口には出さずに着席すると、丁度よくアリスが彼の前に、グラスとシチューの入った皿を置く。

「どうぞ。質素なものです」

「おお、我が師手ずから食事をいただけるとは。このエルドリエ、感激の極みでございます」

大袈裟に反応する彼に若干渋い顔をしつつも、対面へと腰を下ろす。

少しの時を置いて、それから廠かな口調でエルドリエへ言葉を投げかけた。

「それで。闇の軍勢の動きはどうなのですか」

「私の此度の任務は、以前埋め立てた暗黒領域に繋がる洞窟の様子を確かめることでした」

「結果は？」

「奴らの一匹も見かけませんでした。西も南も静かなものです。それに、何やら不穏が動きがあると報せがあったこの北方も」

一瞬。異形の背中がアリスの脳裏をかすめた。

だが、カセドラル内で彼の存在を知るのは、今や自分達の他にカーディナルとベルクーリのみ。

例外であるライオットとイーデイスを除けば、最高機密とされているこの事実は、当然エルドリエも知らない。

故に余計なことは口走らず、平静を装ってそうですか、と返すに留めた。

一旦会話が途切れる。

窓の隙間から吹き込む僅かな風と、エルドリエが弄ぶグラスの中のワインが揺れる音が小屋の中を支配した。

「再び相見える機会が巡ってきたのです。ならば、これを述べるのは私の責務」

「……………なんですか」

決して良いとは言えない雰囲気の中、ふとエルドリエが手を止め、真剣な眼差しを師へ送った。

「――アリス様、騎士団へお戻りください。我々は貴女の剣を必要としております」



やはり、とアリスは心の中で嘆息した。

彼がここへ来た時点で薄々と察してはいたが、この騎士は自分を連れ戻すつもりでいるのだ。

確かに、何も言わずカセドラルを去つたのは不義理であつただろう。自らを師と敬つてやまないエルドリエにも悪いことをした。

しかし……

「……できません」

「……あの男ですか。カセドラルの牢を破り、多くの騎士と元老長、そして最高司祭様ま

でもを手にかけてあの男が、アリス様の心をこの辺境に縛り付けているのですか」

低い声で言ったエルドリエは、大きく音を立て、グラスの底を手元で打ち付ける。

そうすると机に両手をつけて立ち上がり、剣呑な目線を車椅子に座るキリトへと向けた。

「であれば、この私がその迷いをすぐにでも断つて差し上げる」

「やめさない！ 彼もまた、己の正義を貫いたのです！ お前も刃を交えたのであれば、

その重さは理解しているでしょう！」

「ですが！」

なおも言い募ろうとするエルドリエを、抜き身の刃の様に鋭い眼光で諫める。

口を噤んだ彼に、自分自身も深呼吸をして心を落ち着かせると、静かに言葉を続けた。「我々整合騎士団は、騎士長閣下に至るまで彼らの剣に敗れた。その事実が、何よりの証明です」

「……確かに、人界の民の半分を魂なき剣骨の怪物に変えるという、最高司祭様の恐るべき計画を止められたのは、そこな男と、彼の二人の友だけだったのでしよう。彼らを導いたのが復讐なされているカーディナル様と、その従僕スワロウ殿ともあれば、今更罪には問いますまい」

「なら……」

「であれば！ どうしてあの男は今、剣を取って立ち上がろうとしないのです！ 正義の下に最高司祭様を斬ったというのなら、すぐにでも東の大門に馳せ参じるべきでしょう！」

「……もう帰りなさい、エルドリエ」

「アリス様！」

エルドリエへ、力なくアリスはかぶりを振る。

「これは、キリトの状況だけではなく、私自身の問題でもあるのです。私の剣気は失せてしまった。今そなたと打ち合えば、三合ともたないでしょう」

騎士が、ハッと息を呑んだ。

今やアリスは、かつて己を支えていた誇りの一切を失ってしまったのだ。

教会の権威と人々の安寧、それを背負っていた確信は、最高司祭の取り繕った虚偽だった。

混乱を抑える為、騎士達にはその真実の半分——ソードゴーレムの量産計画のみが明かされている。

だが、奪われた記憶のことも、植え付けられた偽りの虚しさも。

カーディナルによって一時凍結された、同輩である彼らの愛する人々だった剣のことを知った、アリスは。

もはや、剣を取り、人界を守る為に戦う意思の力が一片すらも残っていないかった。

(……そういえば。イーデイス殿は、彼に真実の全てを打ち明けられたそうですが。それでも彼女は、今も変わらず戦っている)

己が身の悲劇を嘆くことも、欺瞞で塗り固められた教会に忿怒するわけでもなく。

人々の命と暮らしを守る使命を微塵も揺るがず掲げる、姉のように接してくれる騎士を内心羨む。

(もし、彼が今もこの世にいたなら。イーデイス殿とは相性が良かったのかもしれない)

そんな夢幻を思い浮かべ、すぐに叶わぬ願いと切り捨てて現実に戻る。

子供のようにくしゃくしゃの表情を浮かべていたエルドリエは、彼女の静かな瞳を見て諦めの微笑みを浮かべる。

「……そういうことでしたら。もう、何も言いますまい」

「……ごめんなさい、エルドリエ」

「お気にめされるな。……では、これにてお別れです、師よ。ご教授いただいた秘奥義と術の要訣、決して忘れませぬ」

「どうか、元気で」

そつと微笑んだ彼は、立ち上がって身を翻し、そのまま扉から小屋を出ていく。

彼の背中の、純白のマントが消えゆくまで、じつとアリスはその場に座ったままだった。

室内に、痛々しいほどの静けさが取り戻される。

ゆっくりと立ち上がったアリスは、エルドリエが残っていた食器を集め、台所で洗い始めた。

きつちりグラスの縁まで水気を取ると、ずつと待たせていたキリトの方へ行く。

「ごめんなさいね、疲れたでしょう。もう寝ましよう」

すぐ側にある箆笥から寝間着を取り出し、黒い部屋着から着替えさせるとベッドに横たえる。

毛布をかけ、骨ばった胸を一定の間隔で優しく叩きながら黒い瞳を見つめた。しばらくすると、まるでネジが回転しきった玩具のようにふっと瞼が下がる。

呼吸が安定するまで見守ってから、アリスも室内の明かりを消し、着替えて彼の隣に潜り込んだ。

「……………私は」

どうすれば良いのでしょうか。そんな呟きが半ばまで口から漏れた。

既にエルドリエにこの場所は割れてしまった。早急に別の隠れ家を見つけねばなるまい。

(胸の内に秘めてくださっていたイーディス殿には、無駄骨を折らせてしまいましたね)

明日にも身辺整理をし、セルカやガリツダ老に置き手紙をしたためる必要がある。

またキリトに逃亡の旅をさせることに、胸の内で突き刺すような痛みが走った。

その次に考えたのは……たった一人、《果ての山脈》に繋がる洞窟を守護する「彼」のこと。

(彼は、私達について来てくれるでしょうか。それとも、闇の軍勢が侵攻できないよう、

ずっとあの洞窟に……?)

ライオット達の行動などつゆ知らぬ彼女は、今も凍える洞窟に潜む彼を思い浮かべる。

東の大門が開戦の地とされたのは、山脈から四方に伸びる洞窟では大柄な怪物が通つてこれないからだ。

万が一北の洞窟が留守になった時現れるのは、せいぜいがゴブリンやオーク程度。騎士ならば一蹴できる存在だが、ルーリッド村の衛士では、規模によつては蹂躪されるのみであろう。

であれば、この葛藤を押し殺し、仮初の剣気を奮い立たせてでも戦場へ行くべきだろうか。

「……ねえ。教えて、キリト。私は、どうすればいいの………?」

答えられることのない眩きが、キリトの耳元で静かに散っていった。

惨劇

——愛することは、手放すこと。

——そう思つて、俺はこの翼を広げた。

——それは正しい行いのはずだった。

——だって、みんな俺から離れ、遠くへと羽ばたいていったのだから。

——でも、声が聞こえた。

——愛することは、愛されること。

——愛したのならば、愛される覚悟をしなければならぬ。

——愛するために、自分を守らなくてはならない。

——…：俺は、愛する人達を俺なりのやり方で守った。

——でもそれは、あいつらを悲しませていたのかな。

——なあ、
教えてくれよ、
母さん。



「んう……」

小さく呻き、セフィアは瞼を開ける。

薄ぼんやりとした視界がはつきりとしていき、縦向きになった剥き出しの地面が見えた。

「あれ……私、いつの間にか眠って……？」

体を起こして周りを見ると、膝の上には成り損ないの姿がどこにもない。

代わりに、横たわっていた自分の体の下に彼の外套が絨毯のように広がっている。

「ルー君……？」

硬い外套の表面に手を触れさせながら、名前を呟いた時。

背後から唸り声が聞こえ、ハツとして振り向くと、ギガスシダーの切り株の上にソレはいた。

初めて露わになったその全貌は人と竜の絶妙な合間を体现しており、どこか神秘的である。

ホツと胸を撫で下ろしつつ、立ち上がった彼女は外套を手に近付いていく。

「ルー君、そんなところで何を……………」

問いかけようとして見た、彼の横顔に口を閉じる。

じつと空を見つめている顔は屹然としたもので、その顔につられて北方に視線を向け。

「っ!?! あれって——っ!?!」

空を染め上げる紅蓮の輝きに、息を呑んだ。

ルーリッドの村の方角に明滅する、闇色の夜空を蝕むかのような赤。

あまりに鮮明なそれは、かつて一度だけ起こった山火事のものと同く似ている。

「な、何が起こって…………」

「——ようやく見つけた!」

狼狽えていたその時、頭上から聞こえた声にセフィアは顔を上げた。

闇夜を切り裂き、灰白色の鱗を持つ飛竜が自分達の頭上へ現れる。

その背中に乗り、竜を操る女騎士——イーデイスが、切迫した表情でこちらを見ていた。

「騎士様！」

「探したわ！ ライオットの神器でも何故か探知できないって言うし、こんな状況で肝が冷えたわよ！」

「こんな状況……!? まさか、村に何かあつたのですか!？」

飛竜の羽ばたきに負けないよう声を張り上げると、イーデイスは苦い表情を見せる。

それだけで村に不吉なことが起きたことを察して、セフィアの顔がみるみるうちに青白くなった。

勘付かれたことを彼女の反応から理解したイーデイスは、やむなしと出し渋っていた真実を伝える。

「村が、闇の軍勢の侵攻を受けたの！ 彼が北の洞窟を留守にした隙について、大軍勢で攻めてきた！」

「そんな——っ!？」

打ち明けられた言葉に、嗚咽と恐怖を抑えるようにして口元に手を持っていく。

驚きと共に彼女を襲ったのは、イーデイスの言葉の一部が示す、残酷な事実。

（私が、洞窟に行つたから……！ あの子を離れさせてしまった！）

そのせいで今、村が危機に瀕している。

三百人もの村の仲間を死の危険に晒してしまった罪悪感が、重く心にのしかかった。

否。整合騎士のイーデイスでさえこんな顔をするほどの数が相手であれば、むしろ引き離れたことは幸運だったか。

何れにせよ、セフィアは取り返しつかない現実を受け止められないでいた。

判断を誤つたかと、イーデイスが霧舞を下ろして彼女を落ち着かせようとする。

グルルルル……

それよりも早く、セフィアの耳元で唸り声が響いた。

反射的に振り返れば、いつの間にかすぐ後ろにいた成り損ないが見下ろしてくる。

その黄金の瞳は、まるでセフィアに落ち着くように訴えかけているようだった。

「ルー君……」

ギユア……

弱々しい彼女の声音に、成り損ないは大きく翼を広げた。

セフィアは訝しみ……直後、ハツと思ひ至る。

「まさか、村に行こうとしてるの……？」

「……………」

恐る恐るといった彼女の言葉。今度はイーデイスが瞠目して成り損ないを見下ろした。

すっかり母と心を通じ合わせているように見えるソレは、頷く代わりに低い唸り声を返した。

それを聞き届けた彼女は、様々な感情で顔を彩る。

故郷とはいえ、あれだけ自分を恐れた人々を救おうということへの驚き。

戦うことでまた傷付いて、今度こそ命を落としてしまうのではないかという恐れ。

ありとあらゆる不安と葛藤が彼女の中で闘ぎ合い、心の茨が複雑に絡み合っていく。彼女の気持ちの一端を察し、一刻を争う状況であることから、イーデイスが口を挟もうとして。

それより一瞬早く、セフィアが両手で成り損ないの顔を挟み込んだ。

「……………ルーク。本当に、それでいいのね？」

再びの問いかけ。

成り損ないは、やはり言葉や人間的な行動ではなく、戦意に満ちた鳴き声で返答した。

少し寂しげに、母は微笑む。

湿り気のあるその表情はすぐに消え去って、彼女も力強い笑みを浮かべた。

ずっと片手に持っていた外套を、太い首に回して成り損ないの体に纏わせる。

そして、いつか夢を追いかけることに怯えていた彼の背中を押した時と同じくこう言うのだ。

「頑張れ！ ルークは、出来る子よ！」

ギユラアアアアッ———！！

万能の力を与えられたように、成り損ないは渾身の雄叫びを上げた。

全身を力ませ、一本の矢のように空へ向けて垂直に跳躍する。

翼をはためかせて一直線に昇っていき、一定の高度に達すると、ルーリツドの方面に飛んでいった。

「……ああ。もう届かないところに行っちゃった」

心にじんわりと広がる哀愁に、独り言をこぼす。

それから、一部始終を見守っていたイーデイスの方に振り向いた。

「騎士様。今一度、お願いがございます」

「……連れて行け、って言いたいのか？」

「はい。村の皆が苦難に喘ぎ、息子が戦おうとしている中で、一人だけ安全な場所にいられませんから」

ハキハキとした口調で、強固な決意に満ちた目をするセフィアに、彼女は驚く。

少し前までの儂さはどこへいったというのだろう。彼とそっくりなその意志力に、氣圧されてしまいそうだ。

「本当に平気？　ここで待っていてくれれば……」

「大丈夫です！　こう見えても私、結構根性あるんですよ！」

むん、と力こぶを作るセフィアには、妙に納得させるものがある。

イーデイスはやや躊躇しながらも、彼女の頑固さは知っていたので仕方がなしと嘆息した。

霧舞を操り、高度を落とす。

十分な位置までやってくると、こちらに伸ばされた手を取ってその体を引き上げた。彼女が鞍の上に腰を落ち着け、自分の腹部に腕を回したのを確かめる。

「よし！ 霧舞、行くわよ！」

グオオオオ——！

成り損ないに負けず劣らずの咆哮を上げた飛竜は、再び空へと舞い上がっていった。しつかりと手綱を握って制御しながら、もう遥か遠くに見える成り損ないの後を追いかける。

騎士然とした真剣な面持ちの裏で、胸の中には不思議な熱が生まれていた。

(どうしてだろう。これから起こることを、彼のすることを見届けなければいけないと——そう、何かが訴えてる)

どうしてか無視できない、その熱に心を揺り動かされながら。
彼女もまた、戦火に沈もうとしているルーリッド村へ飛翔した。



その翼は、成り損ないといえど魂に刻まれた守護竜の力の具現である。

たった数百メルを飛翔することなど児戯に等しく、ものの数分で村の上空に辿り着い

た。

北側から東西に向けて半分程が炎に包まれたルーリツドは、阿鼻叫喚の地獄絵図と化している。

《果ての山脈》へと続く道は、醜悪な緑の小鬼と、重厚な肉の鎧を纏った豚人に溢れていた。

殺戮への渴望に満ちた醜い魂の音を数百と聞きながら、成り損ないは北門へと視線を定める。

ここでは武装した若者達が、木の柵で幾重にも即席の防壁を作り、その内側で闇の手先に怯えていた。

「くそつ、奴ら今にも防壁をぶち破つてきそうだ！」

「村人の避難はどうなってる!？」

「まだ半分つてところだろ！いきなり夜に奇襲をかけられたんだぞ!？」

村を守る唯一の要である彼らは、怒鳴り散らすように言葉を交わすだけで全く冷静ではない。

早々に見切りをつけた成り損ないは、一度滞空すると村全体に意識を張り巡らせた。

グルルルル……!

村の中央広場に、百五十前後の人間。おそらく無事に逃げ切れた者達だろう。

「耳」を澄ませて、未だに避難できていない魂の持ち主を選別する。

東に大勢、西はそれよりも少ない。自分がやってきた南側には一人も残っていないようだ。

ギユアアアアア!!

探知を終え、翼を半分ほど折り畳んだ成り損ないは頭から村へと降下していった。

最初に目を付けたのは、ある家の前で立ち往生している一家。

家財を持って行こうとしたのか、大きく膨らんだ風呂敷を背負った小太りの男とその番らしき女。

子であろう二人の若者も、家の裏から連れてきた家畜が周囲を蝕む火に怯え、暴れるのを必死に抑え込んでいる。

彼らのすぐ目の前に、成り損ないは空中で姿勢を元に戻すと着地する。

焦げかけた石畳が吹き飛び、激しい音が響いて一家が悲鳴を上げた。

「な、なんだあ!？」

「今、空から何か……!？」

グルルルル……!？」

驚きの声を上げた兄弟が、成り損ないを見て息を詰まらせる。

「いやあああああつ!？」

「ば、ばばば化け物おとおおつ!？」

女が金切り声を上げ、父親はその場で尻餅をついた。

そんな彼らの顔を一通り確かめると、成り損ないはまず兄弟の胸ぐらをまとめて掴むと担ぎ上げる。

あつという間に持ち上げられた彼らの手からは、家畜を繋いでいた紐が手放されて獣達は逃げていった。

暴れる彼らを人外の膂力で押さえつけながら、次に左腕で男を、最後に尻尾で女を絡めとる。

「ひひひひひつ!？」

「お、終わりじゃあ！ 闇の魔物に食われるう！」

情けなく喚き散らす一家の重量を確かめ、一つ声を上げて飛び上がる。

四人分の重量が加わった体を、強靱な翼はしっかりと受け入れ、見事広場まで運んでみせた。

ギユラアアア!!

咆哮を上げて襲来した成り損ないに、口々に不安や恐怖を叫んでいた村人達が顔を上げる。

その中で、噴水を叩き壊して着地した成り損ないは周囲を睥睨した。

人々の顔がある種の絶望に染まる中、空いた場所を見つけ、そこに一家を放り投げる。

「ぎゃっ」

「あぐっ!？」

「うおああっ!」

「いつでえ!」

乱雑に投げたことでいくらか悲鳴が上がったが、気にせず成り損ないは翼を広げる。

そして、逃げ遅れた人間を救うために村の何処かへと飛び立っていった。

「な、何だ今のは……」

「人を……助けた？」

その背中を目線で追いかけた何人かの村人が、訝しげに言葉を交わした。

こうして、成り損ないは村人を広場に集めていった。

恐慌状態に陥っていた村中の人々は、突然目の前に現れた彼に抗う間もなく連れ去られていく。

魂の音を頼りにしたその救助活動は迅速かつ的確であり、一人、また一人と戦火より掬い上げていった。

それを繰り返すうちに、広場にいた村人達にも変化が現れ始めた。

「来たぞ！ 場所を開けろ！」

また二人、新たに避難者を連れてきた成り損ないを見上げて村長ガフストが叫ぶ。

慌てて皆が身を引き、十分な空間が開いたところに彼が飛び込んで、助けた人間を置いていく。

そしてまた飛んでいく成り損ないを、少なからぬ希望や懇願を込めた目で見上げるのだ。

ギユアアアアア!!

ほぼ人の気配がなくなった西側を意識から外し、わずかに残る東へ舵を切ろうとする。

「ルーク——っ!」

背後から聞こえた声に、咄嗟に空中で停止して振り返った。

すると、空の向こうから飛竜が村に向けて飛んでくるところであった。

みるみるうちに目の前まで接近してきた竜、それを駆っていた人物が、驚きも露わに彼を見る。

「貴方、どうしてここに! 一体何をしているのです!」

真丸になってしまおうのではないかというほど左目を見開いて、アリスは叫んだ。

村を焼く火の勢いに負けぬ唸り声を上げ、成り損ないは右手の鉤爪で広場を指し示した。

そちらを見下ろし、避難している人々を見て鋭く息を呑む。

「まさか、彼らの避難を手助けして……!? ルークつ、貴方もしかして記憶が!」

「ルーくう——ん!」

問いたださそうとした時、さらに新たな声が割り込んでくる。

振り向いた二人に、南方から飛んできた霧舞の背の上でセフィアが大きく手を振った。

あつという間に数メルを飛翔し、イーデイスが飛竜を彼らの前で制止させる。

「イーデイス殿! 貴女まで!」

「やつほーアリスちゃん! それより、よく聞いて! 南側は安全よ! 奴らが回り込んでもいい、彼らを逃がせるわ!」

これまで南の開墾地を見回り、退路を確認していたイーデイスは口早に説明する。アリスは彼女の変わらぬ頼もしさに微笑み、成り損ないも了承したように鳴いた。三人と一匹の視線が交差する。その目は、全く同じ目的を理解していた。

「村人達を誘導しましょう。私が説得します、イーデイス殿は南の棧橋へ!」

「オツケー!」

「ルーク、貴方は——」

アリスが指示を出そうとした、その時。

「き、北門が破られたぞおおお！」

絶望を告げる絶叫が、空高く響いた。



弾かれたように北方へ振り返るアリス達。

すると、村人の誰かが叫んだ通りに、十数匹ものゴブリンによって柵が全て破壊されていた。

完全に防御線は崩れ、衛士達は村の中心部に向けて走り出している。

「いけない！ 奴らが進軍を始めます！」

「南側は任せて！」

「頼みました！」

「アリスちゃん、私もみんなを説得するのに協力するわ！」

「助かります！」

成り損ないの手によって、霧舞の背中から雨縁へとセフィアが乗り移る。

それが終わると、愛竜を手綱で操り、確実に退路を確保しにイーディスが飛び去った。
「我々は広場に！ ルーク、残る住民の救助を！」

ギユラアアアア！！

それぞれの役目を果たすために、彼らも動き始めた。

村の東方面に向かった成り損ないに背を向けて、アリスは広場上空にまで移動する。

そして、再び混乱している彼らを見下ろすと雨縁の上で立ち上がった。

「雨縁、彼女と共に降りてきてください」

「アリスちゃん、何を……？」

「一足先に行かせていただきます」

セフィアへそう言葉を残し、トンつと雨縁の背中から飛び降りた。

外套の裾を激しくなびかせて、空を切り裂き空を落ちていく。

そして、農具などで武装している男達に指示を飛ばしている二人の男のすぐ側へ狙いを定める。

雷鳴にも似た激音で、アリスは降り立つ。

石畳が砕け散り、アリス自身にも足裏から脳天にまで強い衝撃が駆け抜けた。

その痛みを堪えて、こちらに振り返り呆然としている男達——村長ガフストと豪農ナイグルに視線を投じる。

「もう……は保ちません！ 南へ避難してください！」

鋭い声で飛ばした指示に、二人の代表者がたいそう驚いた顔をする。

だが、ナイグルは顔を真っ赤にすると唾を飛ばして怒声をあげた。

「馬鹿を言うな！ 屋敷を……村を見捨てて逃げられるものか！」

「馬鹿はどちらです！ 後でいくらでも取り戻すことのできる家財と自分の命、どちらが大切なのですか！」

ぐ、と彼女の正論に押し黙るナイグル。ほとほとこの男の強欲さには呆れる他にな

い。

次に、実の父であるガフストへ視線を投げれば、彼は苦々しい表情でかぶりを振る。

「門が破られた場合、広場で円陣を組んで待機しろというのが衛士長ジंकの命令なのだ。この状況では、村長の私でも彼の決定には逆らえん」

なんとも皮肉な話に、アリスは息を呑んだ。

彼が口にした決まりは、帝国の定めた規則——すなわち、公理教会がその権威の下に

定めた法である。

その法における司令塔たるジंकは、まだ衛士長の役職を継いだばかりで若く、的確な判断を下せるようには思えない。

「姉様の言う通りにすべきよ、お父様！」

どうすれば良いのか苦悩しかけた時、幼い声が広場に木霊する。

「セルカ……！」

「思い出して！ お姉様が一度だつて間違えたことがある？ いいえ、なかつたわ！

私にもわかる、このままじゃみんな殺されてしまう！」

「し、しかし……！」

毅然とした態度で、胸を張り父親へ英断を求めるセルカの姿に、皆が圧倒される。

それはどこか、幼い頃この村に暮らしていたアリスにも通ずる、人を惹きつける迫力があつた。

「子供が知つたふうな口を聞くんじゃない！ 黙っている！」

そこにナイグルが水を差す。

最も理性的な判断をしている妹を否定した男に視線を流せば、彼の視線は一点にあ

る。

今にも火の手が到達しそうな、自分の屋敷。意識が向いているのは、そこにあるだろう大量の金貨や小麦だろう。

この期に及んで、自らの利益ばかりを追求する様は、その見た目も相まって元老長チユデルキンを思い起こさせる。

否。最高司祭の為に全てを捧げたあの男の方が、もう少しだけマシだったかもしれない。

「そ……そうか！ わかったぞ！ お前が闇の国の怪物を招き入れたんじゃないやな、アリス！ 闇の国に侵入した時に穢されたんだろう！ 魔女……この娘は恐ろしい魔女じゃない！」

挙げ句の果てには、そんなことを声高に叫ぶ始末。

もはや、愚かさここに極まれり。

あまりの醜態に、燃え盛る業火の音や、剣戟、この状況さえ忘れて絶句した。

（——これが。こんな輩が、ルークがずっと守っていた人間だというのですか）

アリスは、怪物と罵られ、なおも人を救っている彼のが心の底から哀れに思えた。

自分も一体なんのために、こんな所に来たというのだろう。

先刻、自失してなお剣を取り戦おうとしていたキリトを思い出し、怒りに打ち震える。

(……………もういい。セルカと両親、ガリツダ老やルークの母上を連れて逃げよう。そしてどこかで、またやり直せばいい)

あくまでも我欲を貫こうというのなら、アリスもそうしてやろう。

半年の間、膿のように溜まり続けていた鬱憤が、昏い感情を呼び起こしていく。

「いい加減にして、バルボツサさん！」

それを口にする寸前で押し留めたのは、広場に響いた一つの怒号だった。

ハツとして顔を上げると、広場の中にセフィアが駆け込んでくる。

少し離れた物陰で雨縁から降りてきた彼女は、凄まじい剣幕でナイグルへ詰め寄った。

「今は何よりも、生き残ることが先決でしょう！ それなのに自分が何も失いたくないからって、あんなにお世話になったアリスちゃんを魔女だなんて……………！ 恥知らずにも限度があるわ！」

「う、五月蠅い！ 貧乏農家の分際で、このわしに指図をするな！」

「立場なんて関係ない！ 皆を守ること以外に、今ここで話すべきことなんてないでしよう!？」

真正面から言い返すセフィアの言葉には、アリスでさえも圧倒するだけの力があつた。

思わずナイグルも口を閉じ、悔しげに血走つた目を右往左往をさせると味方を探す。しかし、一人として彼に目を合わせず、ましてや現場で同意するようなことはなかつた。

ギユラアアアアア!!

いよいよナイグルが顔を真っ赤にしたその時、成り損ないが戻ってくる。

既に広場の中は満員になっている為、壊した噴水に着地すると半ベそをかいている子供を数名側に降ろす。

「ルー君！ 子供達を助けてくれたのね!」

「残りの村人は!？」

セフィアとアリスが、ほぼ同時に言葉を投げかけた。

成り損ないは何かを伝えようとして——途中で北の方面に振り返つた。

「ままあ〜……………どいお〜……………」

子供が、一人。

泣きじやくりながら、北の村道を彷徨っている。

広場にいる誰かが「坊や！」と叫ぶのが、誰しもの耳に届いた。

どこかではぐれて逃げ遅れたのだろう。すぐ後ろに火が迫る中で、母を呼んでいる。

そして。

火の向こうから、一匹の小柄な影が姿を現した。

緑色の肌をした、醜悪な顔つきのゴブリンは、ほんの数メル先にいる子供をその目で捉えて。

「ギヒッ！」

欲望に眩んだ、おぞましい笑みを浮かべた。

(まずい！)

あの矮小な怪物が何をしようとしているのか、瞬時にアリスは察する。

た。ゴブリンの手の中で、炎の光を鈍く反射して輝くマチェットに目線が吸い寄せられ

このままであれば、あの幼な子はゴブリンの凶刃にかかり、小さな命を散らすだろう。そんな事はさせぬと、腰に吊り下げた《金木犀の剣》に手をかけて——隣を一陣の風が通り抜けた。

「ッ——!?!」

誰もが、その風を見る。

アリスが、セルカが、ガフストが。

バルボツサが、村の人々が、幼子の母が。

た。そして、成り損ないが見る中で——セフィアは、誰よりも速く子供の元へと駆け抜けた。

それは、かつて黒の剣士があらゆる覚悟と犠牲を背負い、強大な女神を打ち倒した覚悟のように。

あるいは、全てを代償にしても愛する者を守ろうとした、一人の男の決意のように。限界を超え、奇跡を起こす、極限の意志の力。

それがセフィアに、到底辿り着けないはずのその場所へ行く力を与えた。

「ギヒャア——！ 白イウムの餓鬼だッ！ 殺すッ、殺して喰うッ！」
そして、彼女は。

世にも恐ろしいことを口走り、マチェットを振り上げたゴブリンと。

ようやく気がつき、呆然と振り向いた幼子の間に割って入り、その小さな体を抱きしめて。

華奢で柔らかなその背中を、怪物へと曝け出した。

「駄目え——ッ!!？」

アリスの悲痛な叫びが、村中に木霊する。

その一瞬、世界の全てが酷く時間の歩みを遅めたようだった。

停滞し、色あせた刻の中で、成り損ないは母の背に振り下ろされる刃を見つめ。

——
かあ……さん……！！

忘れたはずの言葉を、
叫ぼうとした瞬間。

白い光が弾けて、視界を埋め尽くした。

勇気を以って、誇りを叫べ

「おや。どうかしたのかな、後輩君？」

ハッと、目を覚ます。

すると、見覚えのある光景が視界一杯に飛び込んできた。

大理石を削り出した彫刻入りの白い壁。埃一つなく磨き抜かれた床。

様々な分野の書物や、四帝国中の茶葉と茶器が収められた棚に、革張りのソファ。

そして、一級の職人が手掛けたと分かる長机の向こう側に。

「何か悩み事かね？」

三人程度なら余裕で座れるソファの中央を占拠して、優雅に足を組んだその女性。

顔は輪郭がぼやけてよく見えない。けれど自分は、この人をよく知っている。

彼女の問いかけに、ふと顔を俯かせて考えた。

(俺は……何を、していたんだっけ)

ずっと、夢の中を揺蕩っているようだった。

眠るように堕ちていく前の最後の記憶は、自分の胸に剣を突き立てた冷たさと痛み。それから長い間、どこでもない場所において……ふと気がつくと、目の前にあつた光景は。

「……っ、そうだ。母さんを助けないと！」

子供を庇い、今にもゴブリンに斬り殺されそうな母の姿をようやく思い出す。思わず興奮した気分は、微かな笑い声によつて急速に冷めていった。

「まあ、一度落ち着きなさい。何事も冷静に、順序よく。そう教えただろう？」

「……………そう、でしたっけ」

「そうさ。君は教えれば教えるだけ吸収して成長する、よい後輩だった」

どうしてだろうか。名前も覚えていないのに、その人の言葉には不思議な説得力がある。

徐々に心が落ち着いていくと、それを悟つてか「よろしい」と彼女は両手の指を合わ

せる。

「では一つずつ、問題を紐解いてゆこう。なに、ほんの少しの時間だ。些細なことだよ、我が後輩君」

「……はい」

いい子だね、と女性は呟いた。

「最初の質問だ。君はどうして、ずっと一人で泣いていたのかな？」

「……俺が、泣いて………？」

はてと、疑問を顔に浮かべる。

涙を流したことなど、母に秘めた願いを打ち明けたあの時以来、一度もない。

開始から要領を得ることができないでいると、彼女はかぶりを振った。

「そうじゃない。私が言っているのは、この話だよ」

気品ある仕草で動かした片手を添えたのは、紺色の制服に包まれた胸元。

陶器のように白い手を見つめ続け、そのうち、心や魂のことを言っているのだと気がつく。

真似をして自分の胸に手を置き、もう一度その質問に対する答えを探してみる。

「……………ああ。それなら、何度もありました」

今度は、溢れんばかりに思い当たることがあった。

大切な後輩を危険に晒してしまった時。彼女の苦悩に気が付かず、悲しませてしまった時。

初めて人を斬り、そのことを実感した時。白亜の塔で、この世界の残酷な真実を知った時。

他にも、数え切れないくらいあるけれど。

「……………でも。一番、辛かったのは」

「辛かった事は？」

「あいつらを……………悲しませてしまった時、ですかね」

己を見失った弟と、それを止める為に立ち向かった弟。

この身を呈することでは彼らを止められず、もう一人の少女共々、涙を流させてしまった。

薄れゆく意識の中で聞いた、弟の一人の怒号が今でも耳の奥で残響を続けている気がする。

「成程。よく分かった。言葉にして言えたことに、心から賞賛を送ろう」

「こんなことで……………？」

「自分の失態と向き合うというのは、誰にでもできることじゃない。普通のことだが、十分に誇るべきことさ」

世界が悪戯をしたように、そこだけがぼやけている顔が微笑んだような気がした。

徐々に組み合わさってきた記憶の断片を回想していると、彼女が指を鳴らす。

沈みかけた意識を引き上げれば、ほっそりとした人差し指と中指が二を示していた。

「次の質問だ。君はそうやって俯いて、何故諦めているんだい？」

「それは……もう、傷つけたくないから」

今度はすんなりと答えが出てきた。

そう。不釣り合いな程の傲慢な願いを成し遂げようとして、結果的に多くの人を傷つけた。

本当の弟や妹のように愛した彼らに、自分は一度だつて喜びを与えられただろうか。わからない。誰の心を救うこともなく、爪痕ばかりを残してしまった。

そんなことしか出来ないのであれば、いっそ永久に願いを持たぬ生きた屍でいようと、そう思った。

これから先、自分のせいで痛みを知る人が、もう生まれないように。

「それに俺は、肝心な時に何もしてやれなくて……あいつらに慕われる資格なんてないんです」

「ふむ。それは少し、性急な判断と言わざるを得ないね」

「……何故？」

自分が至らなかつたことは事実ではないかと、そんな思いを含めて聞き返す。

そうだね、と少し考えてから、女性はゆつくりと言ひ聞かせるように語つた。

「君は先程から、事あるごとの一場面だけを切り取つて、それで自分の全てを理解したようである。だがそれはあまりに狭窄した視点だろう」

「一場面だけを……？」

「そうさ。君の人生は物語か何かのように、目立つ部分だけが断続的に繋がつたものなのかい？ ……いいや。決してそうではないはずだ」

そうだろう？ と確かめる彼女に、その言葉の意味を咀嚼する。

確かに、それは正論だった。

自分は紙の上で、活躍する場面だけを照らし出される物語の登場人物ではない。

この世界に生まれ、多くのことに悩みながらも生きてきた、一人の人間なのだ。

よって自分という存在は、これまでの二十年近い生き様の総括であるはず。

「思い出してごらん。君のこれまでの人生、隣にいた人達はずっと辛そうにしていたかい？ 君は常に、彼や彼女を苦しめていたのかな？」

思考を覗き込むように、更なる言葉が与えられる。

頭の中に、大切な人達の顔を思い浮かべてみた。

自分を兄のようにだと慕ってくれた、二人の弟分や、妹のような姉妹。

いつだって味方でいてくれた母。側にいたいと言ってくれた後輩。

相棒であり、後輩だと言ってくれた緋髪の騎士、己が信念を受け止めてくれた無双の

騎士……

「……みんな。俺に、笑いかけてくれました」

「その通り。決して傷付けただけなんてことはない。そもそも人と人が交わる中で、一度だって辛い思いをさせないなんてことは、絶対にあり得ないのさ」

だから自分ばかりを責め続けるのはやめなさい。

彼女の言葉には、そういう意味が込められている気がした。



「そう怯えるものじゃないよ、後輩君。彼らが傷ついたのだとしたら、それは君が愛されていた証明にしかならない」

心を痛めたというのなら、それは同じだけの愛情がなくては成り立たないことだ。

自分は知っている。

妹分を連れ去られ、最初に弟達を傷付けてしまった時、身を引き裂かれるような悲しみが襲った。

彼らが白亜の塔で戦う運命になってしまった時だって、深く嘆いたのはそれだけ愛していたから。

(……今まで俺は。それと同じものが、自分に向けられているかもしれないということ

に気付いていなかったんだな)

あるいは、あえて目を逸らすことでその想いから逃げていたのかもしれない。

「傷付けていい、とは言わないよ。だけど、そうでなくては成し得なかったこともある。傷ついた分だけ、救えたものがある。物事はいつも表裏一体だ」

「……だから、傷つけることから、愛することから目を逸らしてはいけない。そういうことですか？」

「正解だ。君ならば自ずと答えに辿り着くと信じていたよ」

期待通りと言わんばかりのその言葉に、少しだけ照れ臭くなった。

だが、すぐに浮き立つ気持ちは消える。

彼女が示してくれたのは、とても辛く、険しい道のりだ。

それはいい。自分がしてきた選択の対価なら、今までもこれからも耐えられるだろう。

問題は、物事の見方が変わったただで、根本的な解決には至っていないということだ。「……俺、いつも無力で。助けたい時に、一步及ばなくて。結局、最後まで大事な人達を

守りきれなかったんです」

「それについては紐解いていくまでもなく、単純明快だね。君は完全無欠の英雄になりなかつたのかい？」

間断なく告げられた言葉に、一瞬きよんとしてしまった。

だが、その言わんとするところの隅々まで理解はして……すぐに、苦笑した。

「違います。俺は完璧な自分を追い求めていたわけじゃなくて……そう、ただ、本当に。あいつらを、守りたかつただけなんです」

「これも正解だ。理由と結果が逆転してはならない。君が力を求めたのは、それ自体が目的ではなく、願いを叶えるに足るものを欲したから」

強い自分を得たいからではない。為すべきことを為すために夢を追いかけていたはずなのに。

積み重なった後悔の中で、いつしかその純粋な想いは埋もれ、見えなくなつてしまつていた。

「至らなかつたのなら、やり直しなさい。間違えたのなら、問い直しなさい。君がこうだと思える答えに辿り着けるまで、何度でもそうすればいい」

「駄目ですね、俺。何にも気づいてなかつた」

「今ここで気付いたじゃないか。後悔するのは少し早いよ」

「……あるいは遅すぎたのかも」

ふと、少しだけ影のある笑みを浮かべる。

「それを知るには、走り過ぎました。もう俺は………飛ぶことが、できない」

「……………ふむ」

しばらくの間を置いて、彼女は重々しく相槌を打った。

さしものこの人と言えど、こればかりは覆してはくれないだろう。

「では。君に最後の質問を与えよう」

そんな自分の予想を、ことごとく上回るように。

「君は、気付いているかな。もう準備は済んでいることを」

「……………え？」

「ざあつ、と。」

どこからか、強い風が吹いた。

顔を上げた時、そこはもう見慣れた上級修剣士寮の一室ではなかった。

光に満たされ、向こう側が見えなかった窓は消え、地平線の先まで広がる蒼穹がある。

唾然としていると、そよぐ風に何かが足をくすぐる。

反射的に見下ろせば、何も覆う物が無い体と、足を撫でる柔らかな草が目に入った。

「ハイ、は……………」

強い困惑を抱えながら、もう一度前へ視線を投じる。

どこまでも果てなく生い茂る、若草の草原がルークを包み込んでいた。

今この瞬間からではない。もっと長い間……ずっと。

「綺麗な場所だね。これが君の心象か」

「っ……………ルル、先輩」

隣で囁くように言つたその人に、振り返る。

彼女もこちらを見て、ようやくはつきりと見えたその顔に優しい笑みを浮かべた。

「やっど、私の顔を見てくれたね」

「……………俺、今まで先輩のこと忘れて」

「いいさ、気にしなくて。それよりもほら、見てごらん」

そう言つて彼女が目線を投じたのは、自分のすぐ後ろ。

つられて顔を後ろに向け——驚嘆する。

翼だ。巨大な翼が、自分の背中から生えている。

ひと目見ただけで数十メル以上あることが分かるそれは、霜のような燐光を放つてい
る。

「何故、こんな物が——そう思つた瞬間、やはり彼女の言葉が耳に届いた。

「それが準備だよ。君の大きすぎる願いに飛び立つのに相応しい、君だけの翼」

「俺の、翼……………」

復唱すると、彼女は若草を踏みしめながらルークの数歩前へと行く。

腰の後ろで指を絡め合い、その背中だけを見せつけるようにしながら、言葉を紡いだ。「君は、あらゆる後悔と挫折、絶望を味わった。何度も己に失望し、無力を憎み、それでもと手を伸ばし続けた」

「……………俺は、ずっと」

自分の手を見下ろして、彼女の言葉を噛み締める。

「この私が断言しよう——君のこれまでの苦悩は、無駄などではなかった。全てはこの瞬間、君がまた飛ぶための糧だったのさ」

糧。その言葉が、不思議なほど強く胸の中に染み込んだ。

今一度、翼の感覚を確かめる。

自分の中にある、あらゆる昏いものを吸い取り成長し続けた、大きすぎるそれ。

これならばどんな願いを抱いたって、あの空を飛ぶように容易く叶えられるだろう——
—そう確信できる。

「望むままに飛びなさい。後悔も、悲しみも乗り越えて。その先にある、君の夢へと」

「……ルル先輩、貴女は」

彼女の背を、じっと見る。

苦難に直面した時、いつだって自分のことを導いてくれた、儂くも力強い存在。

今日の前にいる彼女は——ずっと自分の中にあつた、答えの象徴だったのかもしれない。

「ふふ。どうだろうね？」

「……ありがとうございます。気付かせてくれて」

ああ。本当に、この人には教えられてばかりだ。

いつかこの大恩を返せる機会は来るのかと、そう思つてしまう。

「さあ、もう行きなさい。君の大切な人達が戦っている。いつまでも寝ぼけていては、本当に取りこぼしてしまふよ」

最後に厳しくも優しい言葉を残し、彼女は草原の彼方へと歩み出した。

もう役目は終わったということなのだろう。

立ち去る彼女に、ルークは何かを言いたい衝動に駆られる。

何かないのかと、そう自分の中に戻り、満ち満ちた記憶を懐古して——

「——ライオットに、会いました」

その言葉に、ふと彼女が歩みを止めた。

振り返りはしない。けれど確かに、この声は届いている。

それを確信したルークは、必死に何かを伝えようと言葉を紡いだ。

「あいつは、騎士になっていて。人界の為に、今も戦い続けてるんです」

「……………」

「俺も、すごく助けられて。いろんなことを教わって、導いてくれて……だから、その、えっと」

「……………ふふっ。そっか」

不意に彼女が笑い、ルークは下手に繋いでいた言葉を止めてしまった。

ふふ、ふふ、と。心底楽しそうに、嬉しそうに聞こえる声で笑った彼女は。

そのうち笑い声を収めると、少しだけ顔を上げ、空を見た。

「ねえ、ルーク君！」

そして、振り向いたルルデイの顔には。

心底嬉しそうで。

まるで、大好きなものを名一杯自慢する子供みたいに、無邪気な笑顔があつて。

「私の大好きな人ライオットは、とつてもかっこいいだろう！」

——その笑顔を、ルークは生涯忘れることはないだろう。



——目を見開く。

ユメは終わり、絶望の現実が目の前に戻ってきた。
不思議と、恐怖は微塵もない。

——やるべき事は、見出したな

(——ああ。もう、迷わない)

——ならば、叫べ

その言葉に、小さく頷いて。

成り損ないは——否、損なつた全てを取り戻した男は。

そこにあると確かめるまでもなく信じていた、光と共に現れた剣の柄を掴み。もう一方の手を鞘に添えて、最愛の母の元へとひた走る。

（もしこの世界に、運命なんてものがあるのなら。俺は、その全てを斬り捨てて前に進む）

——勇気を吠えよ。

(俺が何かを望むことが間違いだというのなら、貫き通して全てを守ってみせよう)

——勇気を掲げよ。

(だから、俺は——もう何も、恐れない)

勇気を以って、
誇りを叫べ！

「
——
《リリース・リコレクション》
」

願いを叶えるその言葉を、静かに紡いで。

ルークは、一条の光を解き放った。

直後、血飛沫が宙を舞う。

それを見た誰もが、絶望に顔を染めて。

だが、最悪の未来がやってくることだけはなかった。

「……………?」

死を覚悟していたセフィアは、いつまでも痛みがやってこないことに疑問を覚える。

そして、強く子供を抱きしめていた腕を恐る恐る解くと、自分達を襲ったゴブリンに振り返り。

「あ」

宙を舞う呆けた醜悪な顔に、まるで緊張感のない声を漏らした。

彼女の血の代わりに、己の首から鮮血を噴水のように撒き散らしたゴブリンの体がよろめく。

数歩後ずさり、それから途端に、何かの糸が切れたようにその場で倒れて。

二度と起き上がる事はなかった。

「——大丈夫か、母さん」

入れ替わるように、純白の剣を振り切ったその背中は。

とても力強く、安心できる……他の何より愛した、一人の少年のものだった。

「あ」

声が、震える。

「あ、ああ、ああああ」

心が、魂が打ち震え、ありとあらゆる感情が大きな波となつて押し寄せた。

容易く理性の壁が崩壊し、無数の雫となつて双眸から溢れ出す。

「ああっ、ああああっ、ああああああ………っ！」

涙を止めることができない。

意味のない言葉を発して、ただ、ただ、そこにある奇跡を確かめるように。

幻だと思つてしまわないように、ひたすらに感情を嗚咽として吐き出し続けた。

」。
それを見て、一筋の温かい涙が、アリスの左の頬を伝い落ちていく。

瞬く間に胸を満たし、突き破ってしまった感情の奔流を表す言葉が見つからなくて。

ただ、彼の背中を。

一対の翼のように分かれた純白のマントを一心に見つめながら、涙することしかできなかつた。

誰もがそうだ。

口元を押さえ、涙を滲ませたセルカも。

この世で最も驚くべきものを見たように固まったガフストも、ナイグルも、村人達も。空に舞い上がったボロ布のような赤い外套の内側から現れた、白の騎士に目を奪われ
て。

「アリス！ いい加減に避難を始めないと、間に合わ——」

霧舞に橋の確保を任せ、必死の形相で広場に駆け込んできた、イーデイスでさえ。

「——ああ、嘘」

いつそ絢爛なほどに燃え盛る炎の中で浮き彫りになった、彼の後ろ姿に。

（——なんて、綺麗）

呆気ないほどに、心の全てを奪われたのだ。

彼は、ゆっくりと剣を下ろしていく。

獲物を狩るための蛮刀ではない。見事な装飾と無類の強靱さを備えた、美しい神器だ。

再び携えた《白竜の剣》を鞘に収めると、未だに涙する母へ振り返り。

「——ただいま、母さん」

「ルー……………つ……………くうん……………！」

ずっと名前を呼んでくれた彼女へ、優しげに微笑んだ。

ルーク。その名前を聞き、ようやくそれが誰なのかを本当に理解した人々は息を飲む。

彼らの記憶の中の少年と、今日の前にいる騎士はとても似ても似つかない。

まるでその身に秘めた竜の力を象ったような白鎧は、水晶色に縁を塗られ、肌は鱗帷子に包まれている。

頭に戴いた頭冠は、それを構成する一つ一つが小さな角のように連なっており、威厳を醸し出していた。

「ごめん、一杯迷惑かけて。不安にさせたよな」

「ルー、くんつ……かつ、母さんは……ねっ……ただっ、ただあ………」

「全部聞こえてた。ずっと寄り添ってくれて、ありがとう」

心を安らがせるような力を持つその言葉に、いよいよ感極まったセフィアは何も言えなくなった。

そんな彼女と、腕の中で呆然と自分を見ている幼子を両腕で抱き上げると、広場の中に戻っていく。

村人の誰もが、自然と道を開いた。

北門からゴブリンと応戦し、命からがら帰ってきた衛士隊も、農具を構えていた男達も。

子供や老人、隔てなくその騎士に敬意を表すように身を引いて、生まれた場所にルークは二人を下ろす。

「坊や!」

「ママあ!」

自分を呼ぶ声に、幼子は喜色を顔に浮かべてそちらへ飛び出していった。

両手で抱きしめた母親は、滂沱の涙を流しながら何度も幼子に謝る。

実在を確かめるように繰り返し背中や後頭部を撫でられ、幼子が嬉しそうに微笑んだ。

「よかった。今度は、間に合った」

「ルー君つ……!」

「おっと」

抱きついてきたセフィアを受け止めて、泣きじやくる彼女の背中をそつと撫でる。

その温もりを今一度感じながら、すぐ近くにいたアリスへと視線を投じた。

「久しぶり、アリス。キリトのことを一人で背負わせてすまなかったな」

「つ……もつと他に謝るべきことがあるでしょう、この馬鹿者つ……!」

「そうだな……心配かけて、ごめん」

「本当ですつ……ルーク兄さんの、馬鹿つ……!」

全身を小刻みに震わせながら、アリスもまたルークの胸元に額を埋めた。

懐かしい呼び方に淡く微笑みながら、金糸の髪を傷つけないようにそつと撫でつける。

しばらく二人の女性を胸の内に抱えていた彼は、不意に表情を真剣なものに変えて来た道に振り向いた。

「……奴らが来る」

「え？」

「……っ！」

顔を上げ、セフィアは疑問の声を上げるが、アリスは鋭く息を呑んで同じ方向を見た。

いつの間にか、目に見える場所にまでゴブリンやオーク達が進軍していた。

炎などものともしない彼らは、口々に醜悪な鳴き声を上げ、殺戮と狂乱を叫ぶ。

「行ってくる。アリスは皆の避難を」

「っ、ルーク兄さん！」

「ルー君！」

「平気さ。今度はちゃんと帰ってくるから」

思わずといった様子で叫んだ二人に笑いかけ、離れたルークは闇の軍勢へと踏み出した。



もはや、その歩みを止められるものではなく。

あつという間に広場から村道へ出ていってしまった彼は、炎の前で立ち止まる。

腰から取り外した《白竜の剣》の柄を両手で握り、鞘の先端を地面に打ち付けた。

「聞け！ 闇の国より来たりし残虐の徒よ！」

キーン、と《果ての山脈》にまで届きうるほどの清涼な音が奏でられ、怪物達が足を止める。

「我が名はルーク！ この人界を守護せし聖なる四竜、その一柱の心意を受け継ぐ者！ 高潔なる竜騎士である！」

その口上に、ダークテリトリーの侵略者だけでなく、アリス達も驚いた。古くから語り継がれて来た、守護竜の伝説。

その体現者であり、続きを紡ぐものが今、現れたのだから。

「我が剣は断罪の刃！ 貴様らの血と狂気に染まった魂を滅し、永劫の闇へと屠る執行の力！ 来世を迎えたくば、早々に闇の国へ戻るがいい！」

それは、最後通告であり、同時に宣告でもある。

あと一步でもこちらへと踏み込めば、完膚なきまでにその身と魂を両断すると。

「ルーク……！ あんなに、立派になって……！」

堂々としたその背中に、セフィアが膝をついて感涙の涙を流した。

この世で竜の魂を受け継いだと大法螺を吹ける人間など、どこにもいはしない。故に、厳然なまでの事実が心を強く震わせた。

(……………ルーク兄さん。貴方は、本当に戻ってきたのですね)

それを実感しているのは、母だけではない。

もはやそう呼ぶことに何の躊躇もなく、魂が兄だと慕うアリスもまた、ルークに見惚れる。

すると、不思議なことに体の中で沸き起こるものがあつた。

（私は、何度同じ過ちを繰り返す？ また彼だけに何もかもを背負わせて、後悔ばかりを残すというの？）

ずっと失われていた、静かなれど猛々しい、青白い炎のような力。

あの日、最高司祭の居室で失われてしまったとばかり思っていた意志が、蘇る。

（——そんな馬鹿げたこと、決して許されはしない！）

もはや、心を雁字搦めにしていたものは完全に吹き飛んだ。

大きく息を吸うと、今だに呆けているナイグルとガフストに振り返る。

「——衛士長ジンクの命令は破棄します。この広場に集う全員、南の開墾地に避難するよう。これは命令です」

その声は大きくはなく。だが、見えない何かに打たれたように男は体を震わせる。

恐ろしいまでに強固な意志を宿した目に見つめられて、なお言い返したのはいつそ豪胆だったろう。

「な、何の権利があつて命令など！ 逃亡者の分際で！」

「騎士の権限です」

「騎士じゃと!? そんな天職この村にはない！ ちよつと剣を使えるからといって騎士を名乗るなど、央都の騎士様に知られたらどうなるか——」

もはや、最後まで聞く価値はその言葉に存在しなかつた。

アリスは、ぐつと外套の裾を掴むと、一息に腕を振り抜いて脱ぎ捨てる。

白い布が宙を舞う。

分厚い隠れ蓑の内側から現れたのは、眩いばかりの黄金の鎧。

炎に反射してより強く煌めく輝きを纏い、彼女は兄がそうしたように《金木犀の剣》を地面に突き立てた。

「私はアリス！ セントリア市域統括、公理教会整合騎士第三位、アリス・シンセシス・サーテイ!!」

声高に、己の名を名乗る。

「なあっ……!? せ、せせせ整合騎士……!?」

仰天したナイグルが、どすんとその場で尻餅をついた。

ガフストやセルカ、セフィアも、ルークと同じかそれ以上の驚愕の目で彼女を見る。

竜の魂がそうであるように、整合騎士の権威を否定することができる人間もまた存在しない。

唯一、キリトとユージオ、竜魂の騎士達を除いて——つまり、誰も彼女の言葉を偽りとは疑わなかった。

「姉、さま……」

「今まで黙っててごめんなさいね、セルカ。これが私の本当の罰……そして、本当の責務なの」

少し寂しげに言う彼女に、セルカは大きく頭を左右に振った。

「私、信じてた……姉様は、罪人なんかじゃないって……すごく、すごく……綺麗

……
感激に震える彼女に、アリスは微笑む。

次に動いたのは、村長ガフストであった。

「御命令、しかと聞き届けた、整合騎士殿！」

その場でアリスに跪いた彼は、はつきりとした口調で言葉を述べる。

それから素早く立ち上がると、よく通る声で広場に集まった人々に命令を下した。

「全員、退避！ 武器を持つ者を先頭に、南の森まで逃げろ！ 急げ！」

ざわめいた村人達は、しかしすぐに混乱を収めると、その場から逃げる準備を始めた。アリスはそれらを眺めていると、南側の村道でぼんやりと立ち尽くしているイーディスを見つける。

「イーディス殿、良い所に！ 彼らの誘導を！」

「——っ!? えっ、あつ、えと、う、うんっ！」

何処からか舞い戻った彼女は、ひどく慌てた様子で肯定した。

大声で自分の方へ来るように呼びかけ、同じく鎧を纏った彼女に村人達は希望を抱いた顔で移動を始める。

やってきた彼らを引き連れ、南の門に走り出す彼女の顔は——これ以上ないほど真っ赤に染まっていた。

(違う違う違うっ！ 絶対に、ぜつつつたいに！ そんなんじゃないんだからっ！)

誰に知られることもない内心を爆発させながらも、彼女は自分の勤めを果たすのだった。

次々と後続も出発を始め、不安を取り除けたアリスはホツとする。

それでも油断はしないように気を引き締めながら……父の方を見た。

「……父様。セルカを、母様を。皆を、頼みます」

彼もまた、少しだけ表情を緩めて。しかしすぐに厳格な表情へと戻った。

「……騎士殿も、どうかお体に気をつけて」

娘と呼んでもらえないことに、一抹の寂寥を覚えながら。

腰を抜かしたままのナイグルを引きずっていく彼を見届けて、身を翻した。

確かな足取りで無人となった広場を通り過ぎると、道に入り、ルークのすぐ隣に並ぶ。

「アリス。皆は？」

「避難を開始しました。もう心配ありません」

「そうか……こつちは駄目そうだ」

彼の言葉に、前方へと視線を投じる。

次々と集まってきたゴブリンやオーク達が大半をなし、今にも決壊しそうな様子だ。

殺すや食うなど、貧困な語彙を振り翳して喚く彼らに氷点下の視線を浴びせる。

「最初から結果は見えていました。もはや慈悲はいらぬでしょう」

「そうだな——奴らに断罪の一太刀をくれてやろう」

アリスに答えたルークは、静かに《白竜の剣》を地面から引き抜いた。

集う騎士達

引き上げた《白竜の剣》を、腰だめに構える。

そうして纏われた覇気にただならぬものを感じ、アリスは無言で数歩引いた。

「ふう……………」

深呼吸をひとつ。

それだけで心がどこまでも凜ぎ、あらゆる雑念が遠ざかっていく。

無我の境地に至ったルークは、固く《白竜の剣》の柄を握りしめた。

（——耳を澄ませ。奴らの魂を、聞き取るんだ）

もはや、完全に操ることのできる竜の耳に、その音を感じ取る。

捻れた魂。激しい衝動に突き動かされ、全てを飲み込み、破壊していく黒い渦。

それらが何十と村の中に巢食い、北の方角には《果ての山脈》にまで数百と点在する。

（——見極める。斬るべきものを、在るがままに）

湖面を揺らす波紋のうち、三百あまりの弱々しい音を排除する。

村人達を対象外に起き、まずは村の中に侵入した魂へ寸分の狂いもなく狙いを定め。

「ハッ——！」

刹那、抜刀した剣を大上段に振り上げると、その場で振り下ろした。

——イイン

ゴブリンやオーク達の耳に、甲高い共鳴が鳴り響く。

殺意や飢餓をかき消すほどのそれに足を止め、首を傾げた彼らは、ふと上を見上げ。

次の瞬間、どこからともなく降り注いだ一筋の光に、魂を打ち砕かれた。

圧倒的に研ぎ澄まされた心意の刃が、何十という魂を一息に両断する。

防ぐ、という概念を最初から欠如したその一撃は、彼らに痛みも感じさせず命を断ち切った。

怪物達が、得物を取り落としていく。

けたたましい音が幾重にも重なり、思わず顔をしかめたアリスの前で、次々に倒れ伏していった。

地面に転がった骸からは、一滴の血も流れることはなく。

その瞳から意志の一切を消して、絶命していたのだ。

「っ………なんという絶技……………！」

思わず、戦慄のままにそう口走る。

そして、ゆっくりと地面に触れる寸前に留めていた剣を戻し、姿勢を正す兄を見た。

彼は自らが作った死の道を、黄金の虹彩が輝く銀の瞳で静かに睥睨した。

「——五十四、つてところか。まだまだいるな」

「……おそらく、度々侵攻を妨げていた貴方を確実に討ち取るために全勢力を投入した

のでしよう。その総数は数百に上るか」と

「嬉しくない人気だ。だが、鬭争を望むというのなら最後まで付き合つてやろう」

どこか超越した雰囲気を含んだルークは、そう宣言すると北門の方へ歩き出した。アリスは、一旦後ろに振り返る。

広場には既にほとんどの人がおらず、避難民の最後尾が南側に見えるだけ。

懸念はないだろうと確信し、兄の背中を追いかけることにした。

「……全て、燃えていくな」

隣に並んだ彼女に聞かせるように、ポツリと呟くルーク。

崩れ落ちる家々や、黒焦げになつて転がる家畜だったもの、遠くに見える炎上した麦畑。

愛する故郷を包み込む戦火に、哀愁の籠つた目を向ける彼に、アリスは答える。

「これ以上、この炎を広げるわけにはいきません。奴らを退けて、人々を守らねば」

「……いいのか？ もう十分、お前も苦しんだらどう？」

慮るように言う兄の変わらなさに、淡い微笑みが口元に広がった。

彼はきつと、この村で受けた粗悪な扱いだけのことを言っているのではない。

公理教会の威信が偽りだと知ったアリスの苦悩をも見抜いて、剣を置くこともできると言っているのだ。

「ルーク兄さん。私は決めたのです。教会の騎士ではなく、一人の剣士として。己で考え、剣を握り、人々を守る為に戦おうと」

愚昧なまでに法に従い、何もできなかったルーリッド村の人々を見た時。

やはり、アドミニストレータは間違っていたのだとアリスは確信した。

（我ら整合騎士に、本来彼らに与えられるはずだった力を注ぎ込み、長い時の中で考える力さえも奪ってしまった。それは力を持つ者の、その周囲の人間にも苦悩を生んでしま（う）

その迷いが、偏りすぎた巨大なものが、彼女自身を人ならざるものとしたように。

ならば、全てを搾取し続けてきた騎士達や、自分がすべきことは、たった一つなのだ。「セルカを、父母を、キリトやユーゾオ……そして貴方が守ろうとした、この人界の人々を救う為に。私はもう一度、剣を取ります」

「……そうか」

相槌を打ったルークが、不意に立ち止まった。

つられてアリスも足を止め、何事かと彼を見上げる。

その頭に、ルークの手がぼんと乗せられた。

驚いた彼女に、竜の鉤爪のように尖った指先に気を配りながら、ルークは手を左右に動かす。

「よく決断したな。あのお転婆だったアリスが、随分と立派になったもんだ」

「ルーク兄さん……」

「安心しろ。お前がそこまで啖呵を切ったんだ、きつちり背中中は守ってやる」

「それはこちらの台詞です。生半可に腕を磨いてきた訳ではありません」

そう返し、笑おうとした時。

不意に、全身を駆け巡っていた熱が右の眼窩に集約し、あまりの痛みにアリスは顔を顰めた。

突き刺すような激痛はいくつもの筋のように広がり、何かを形作っていく。

「……っ！」

それが治まった時、アリスは一つのことを悟った。

そして、ルークの前で顔を覆っていた眼帯を取り払い——右の眼を見開いた。

長い間閉じ続けていたそこには、左と同じように蒼穹の色を持つ瞳がすっかりと存在している。

白い光に包まれていた視覚は、徐々に物の輪郭を結び、二つに重なる……やがて、一つの視界に纏まった。

「……アリス」

「……もう、大丈夫です」

アリスは、手の中の眼帯に視線を落とす。

色落ちした、かつてあの少年の黒衣の一部だったそれに、そつと唇を落とした。

そうして、ずっと自分が守っているとはかり思っていた彼に守られていたことに気がつく。

「……ありがとう、キリト。私は、これからもいろいろ迷うし、立ち止まるだろうけど。それでも私と貴方が望んだ未来へ、歩き続けるわ」

すると、アリスの宣言を聞き届けたように、眼帯は光の欠片となって散っていった。

虚空へ溶けるそれを最後の一粒まで見送って——アリスは、毅然とした顔を兄へと向ける。

「行きましよう。我々の明日を、手にする為に」

「望むところだ」

そして、二人はまた歩み始めた。



北門まで辿り着くと、そこにはもうゴブリンとオークがひしめいていた。

怪物達は、先に進んで突然事切れた同胞の姿に警戒を覚え、棧橋に踏み出せないでいる。

ざっと数えても先頭だけで百匹以上はいるであろうその軍勢に、二人の騎士は正面から立ち塞がった。

「我、人界の騎士アリス！ 我々がここにいる限り、お前達が望む血と殺戮が得られる事はない！」

「同じく、騎士ルーク！ 我が聖域を踏み荒らし、人の世界へ不遜にも踏み込んだ愚か者共よ！ その罪は死をもって贖うがいい！」

声高に叫ばれた言葉に、怪物達は殺気立つ。

たかが小娘と男が一人だけの分際で、自分達の侵攻を止めようとは片腹痛いともいえるだろう。

圧倒的な力の差も理解できぬ知恵足らず共は、ギラギラと欲望に目を光らせる。

「……ルーク。雨縁を呼び寄せて、熱線で大部分を削ります。それまでにどれだけ倒せますか」

「やれと言うのなら、最後の一匹まででもこの剣で斬り殺してやろう」
「上等ですね」

自信に満ちたルークの返答に、アリスは彼らを撤退させるといふ考えを捨てた。

先の一撃で十分にその力は理解できた。

どの道、何度も成り損ないだった頃の彼に敗北している彼らに退却の二文字はないだ

ろう。

ならば、兄と共に戦い抜くまで。

そう思った矢先——遙か先で、凄まじい火柱が噴き上がった。

ルーリッドを燃やす炎よりも猛々しいそれが、宙にいくつもの影を打ち上げ、焼き消す。

ルークやアリス、棧橋の前で騒ぎ立てていた連中も、何事かとそちらを見た。

《果ての山脈》側に繋がる道から、断続的に怒号や悲鳴、断末魔の叫びが上がる。

それはゴブリンやオーク達のものであり、何者かによって後方から襲撃を受けているのは明らかだった。

「一体誰が……?」

「……………」

アリスが訝しみ、その隣でルークが何かを悟ったように息を呑む。

そうしている間にも、次々と火柱は略奪者達を討ち滅ぼしていき、村へと接近した。

三百メル、二百七十メル、二百二十、百九十——目に見える場所まで、みるみるうちに近づき。

そして、ついに一際大きな炎の大華が、何十かの怪物達を蹴散らした時。

「——我が故郷を手にかけてし下郎共。貴様らの一匹たりとて、闇の国に帰れると思うな」

現れたのは、炎を支配せし最強の騎士だった。

「あれは、バルド殿!」

再び赤竜の鎧を纏い、黒盾を携えて現れたその騎士に、アリスは声を上げる。

この上ない最強の助っ人だ。騎士長ベルクローりに匹敵する頼もしさと安心感が、彼女の心に生まれる。

「……………騎士、バルド」

彼女の内心とは裏腹に、真剣な面持ちでルークは彼の姿を見た。

その目には言い知れぬ感情が宿り、複雑に絡み合つて混在している。

手の中の《白竜の剣》が、力を込められるのに併せて微かに音を鳴らした。

一方の闇の軍勢は、もはや完全な混乱状態に陥つていた。

北の洞窟に残つていた後続部隊は、バルドが悉く灰燼に帰したことで既にこの世にいない。

そして、暗黒領域側に繋がる通路を破壊した彼は、洞窟までの道のりを遡つて侵攻部隊を壊滅させていた。

もはや、その総力は二百を割るか割らないかといった所。

「ブガアアアツ！ たかが白イウムの分際で、この《足刈りのモリツカ》様をコケにしやがつてエー！」

一際大きな体をしたオークが、怒りの吠え声を撒き散らす。

この部隊の大將格であるその怪物は、両手持ちの大斧を握りしめて前方と後方の騎士を睨む。

暗黒領域側で《果ての山脈》付近に駐屯し、数ヶ月に渡って洞窟を守護する生き物を殺そうとしてきた。

悉く偵察部隊を餌食にするあの怪物が姿を消し、ついに殺戮と闘争を楽しめると思つた矢先に全てを台無しにされたのだ。

「こうなつたらあの白イウムどもは叩き潰して、逃げた白イウムを追いかけて食い殺してや——」

欲望を叫ぼうとした彼を、空より降り注いだ一閃が両断した。

大口を開け、両腕を広げた姿勢のまま、モリツカは目を見開く。

直後、ズルリと縦にも横にも分厚い体が左右に分たれ、重々しい音で地面に転がった。血溜まりを広げた大将格の骸に、周囲にいた主力部隊は俄にざわめいた。

混乱を強めた怪物達を、上空から冷めた目で見下ろす人物が一人。

「んなことさせる訳ねえだろ、豚野郎が」

モリツカを空飛ぶ蒼星の背から音刃で断ち殺したライオットは、冷酷に告げた。

イーデイスと手分けしてルーク達を探し、《果ての山脈》を飛んでいた彼は、偶然にもバルドと遭遇した。

そして、ルーリッドに向けて侵攻を始めた闇の軍勢を彼と共に掃討し、ついにここまで辿り着いたのだ。

「……………」

無言で、村の方へと視線を向ける。

そして、両目を取り戻し、黄金の鎧を纏い直したアリスに薄く微笑んで。

次に、その隣にいるルークを見ると——心から嬉しそうな笑みを浮かべた。

「つたく。ようやく戻ってきやがったな、あの馬鹿」

罵りながらも、その言葉には隠しきれない喜色が滲んでいた。

半年前できなかった説教をたっぷりしてやろうと考えながら、彼は怪物達へ向けて戦意を高めるのだった。

(…………後でこれでもかと怒られそうだな)

同様に、しっかりとライオットの存在を感じ取っていたルークは内心で苦笑する。自分の目を覚ましてくれた緋髪の騎士へ、不思議なほど強い友情を覚えていた。

「彼女」共々、自分はつくづく世話になりっぱなしだと微かに口元でも笑う。

「——ルーク兄さん」

「——ああ」

だが、それもここまで。

一切の憂いなく自分の名を呼ぶ声に、はつきりと答えを返す。

そうすると、《金木犀の剣》の切っ先を空へ掲げた彼女に倣うように、抜刀の姿勢を取った。

見据えるのは、大きくその数を減らして狼狽えている、無様な侵略者達。彼らへ、今こそ引導を渡そう。

「《エンハンス・アーマメント》！」

アリスの剣が、無数の黄金の薄片となって舞う。

「ヌウン……………ッ！」

刃を分割し、空高く伸ばしたバルドの豪剣に、極大の炎が灯る。

「こいつで終いだ、外道共」

琴の形態となった《蒼竜の琴劍》の弦を引き、ライオットが宣言して。

「——冥府へ堕ちろ、闇より出でし悪鬼達よ」

全ての魂を見定めたルークが、その鯉口を切った。

直後。

降り注いだ花卉に、音刃に、極炎に、魂斬りの一閃に。

一匹残らず、悪鬼達は撃ち滅ぼされた。



「フツ！」

気合を込め、《白竜の剣》を地面に突き立てる。

清涼な音で石畳を紙のように貫き、沈み込んだ剣に深く意識を馴染ませた。

その上で、未だに轟々と炎が燃え盛っている村の光景を水路の外側から見つめ、式句を口にする。

「システム・コール。ジェネレート・クライオゼニック・エレメント」

隣で聞いていたアリスからしても、整合騎士に匹敵する滑らかな詠唱。

それを受けた白竜の剣は、地面を通して周囲に転がる無数の骸を光の粒に変え、神聖力に変換した。

生成された凍素の数は、なんと二十五。アドミニストレータに匹敵する力だ。

「ウェザー・コントロール、タイプ・スノウ・クラウド。エリアポインティング。システム・ネーム：ルーリッド。デイスチャージ」

竜より受け継いだ、人界の管理者とほぼ同等の術式行使権限。

それを以って、ルークは女神や賢者のみに許されたはずの奇跡を引き起こす。

凍素達は、一つに凝縮すると、小さな光を放つて真っ白な雲に変身した。

上空へ舞い上がりながら肥大化していくそれは、やがてルーリッド全土を覆う規模になる。

十分な大きさに成長した、その雪雲からは——同じ色の霜が、村へと降り始めた。

音もなく降り注いだ大量の霜は、家を、畑を、人々の営みを破壊した炎を覆い、かき消していく。

「綺麗……」

深々と降り積もり、ルーリッドを白く染め上げていく霜に、ほうとアリスは感嘆の溜息を吐いた。

ルークは《白竜の剣》を鞘に収めながら、自らが作り上げたその光景に視線を向ける。「ソルスの光で二、三日もすれば溶ける程度の優先度にしておいた。あとは、皆が立て直すのに任せるしかないな」

「……そう、ですね。今の貴方であれば、家屋を全て修復し、豊かな恵みをもたらすことすらできるのでしょうが」

それでは、アドミニストレータが与えた偽りの安寧となんら変わりがない。

肝心な事には自分にも他者にも厳しい兄がそれをするとは思えず、実際に彼は頷いた。

「……不思議なものですな。あれだけ居心地が悪いと思っていたのに、こうして見ると悲しくなる」

「それが故郷つてもんならうな。まあ、俺は洞窟に引きこもっていたわけだが……」
「ええ。その事についても、後でたつぷりと話をしましょう。言いたい事が山ほどあります」

間髪入れずに返された言葉に、ひくつと頬が引き攣るのがわかった。

今の彼女が、昔馴染みだからと容赦してくれないことは、よく知っている。

これはしばらく、色々な人間から説教の嵐か。

思わず苦笑いを浮かべたところで、背後から近づいてくる気配を感じて振り向く。

すると、宵闇の中でもよく目立つ炎に身を包んだ騎士が、泰然とした足取りで近付いてきた。

「……………残党は見つからなかった。取り零しはないだろう」

「そうか……………ライオットは？」

「念の為、空からの探索を行っている。奴の目が見逃すことはない」

「だらうな」

……その返答を最後に、会話が途切れた。

ルークもバルドも、それぞれ口を引き結んで、じつと互いのことを見ている。不思議と張り詰めた雰囲気、アリスが少し心配そうに細い眉尻を落とした。

「……………ルーク」

やがて。

ルークの名を呼んだバルドが、武器を地面に突き立て、両手で兜を取り外す。露わになった銀色の瞳は……あの炎の騎士とは思えぬほど、弱々しいものだった。

「私は……………私は、お前の……………」

「———父さん。そうだろ？」

その言葉に、バルドが言葉を止め、僅かに目を見開いた。

背後でアリスが大きく息を呑む音を聞きながら、ルークは彼を……父のことを見上げる。

「お前……………」

「母さんに聞いた話、思い出したよ……………今ならわかる」

そして、同じ色をした瞳でその目を真っ直ぐ見つめて。

「貴方が、俺の父親だ。炎の騎士バルド……………いや。父さん」

バルドは、今度こそ限界まで切れ長の瞳を見開いた。

しばらくその表情のままであったが……やがて、目を伏せると低い声で答える。

「……………すまない。私は、お前に何もできなかった」

改めて胸の中に満ちるのは、取り返しのない後悔だ。

使命を優先するあまり、父としての責務を果たさず、その存在さえ知らなかった。

その成長を見守ることも、剣を教えることや、他のあらゆる思い出を共に作れなかった。

このような気持ちを、よもや三百年の放浪の果てに抱く事になろうとは、思いもしなかったのだ。

「お前に父と呼ばれる資格は、私には……………」

「——母さんは。ずっと貴方との思い出を支えにしていた」

不甲斐なさからその資格を捨てようとして、被せたルークの言葉に止められた。

「辛い時も、苦しい時も。いつも貴方と生きた僅かな時間を笑顔で語って、慈しんでいた。俺だけじゃ、母さんを支えることはできなかったよ」

「……………彼女が」

信じられない。そんな顔をする父親に、ルークは優しげに微笑む。

そして、一步踏み出すと……軽く握った拳を、彼の鎧の胸当てにそつと置いた。

「なあ、父さん。俺にはそれで十分だったんだ。たったそれだけで、よかつたんだよ」
「……………こんな私を、許してくれるのか？」

最強にして無双の騎士が、恐れるように言えば。

「貴方が言った通り、俺達はようやく出会ったばかり。だから、これから積み上げていこう。親子の思い出をさ」

新たに生まれた、至高の竜騎士は純粋な子供のように明るい笑顔を贈った。

しばらく、彼の言葉を吟味するようにバルドは黙して……

「……………そうだな。こんな父だが、よろしく頼む。息子よ」

「ああ。一緒に人界の未来を守っていこう、父さん」

やっと、笑い合うことができた。

その後、アリスがバルドに改めて自己紹介をする。

これまでの騎士団との蟠りを解くような光景を見守っていると、不意に異音を聞きつけた。

「……………戻ってきたな」

小さく呟き、ルークは上を見上げた。

遅れて同じ音を聞いたアリスやバルドも顔を上げる中で、一匹の飛竜が現れる。上空十メートル程の場所で静止したその背中から、人影が飛び降りてきた。

「つとー！ 偵察が終わったぜ、バルドの旦那」

危なげなく着地した緋髪の騎士——ライオットは、立ち上がるとまずそう言う。

無言で頷いた彼へ首肯を返して、それからようやく後ろにいたルークに振り返った。

「……………ルーク」

「……………ライオット」

彼らの視線が絡み合う。

半年という長い月日を経て、ようやく再会を果たした二人。

アリスやバルド、他の誰もがそうであるように、互いの存在を確かめた二人は——

「へへっ！」

「ははっ！」

男臭い笑みを浮かべると、がっしり前腕を組み合った。

胸の内に抱いた熱い思いを伝えるには、それだけで十分だったのだ。

「よう、随分と立派なナリしてんじゃねえか。中々似合ってたんぜ？」

「お前も、相変わらず大した男前だよ。兄弟」

ルークの呼び方に、一瞬キョトンとして。

「おうよ、兄弟！」

その後、やはりとびきり嬉しそうにライオットは笑った。

こうして。ようやく、ルークは帰ってきた。

一家団圓？

早いもので、襲撃から六日が経った。

無惨な状態となったルーリッドは、幸いにもルークの超大規模神聖術により半壊で済んだ。

村長ガフストはあらゆる天職を全うする義務を一時的に停止し、立て直しを図った。その甲斐があつて、すぐさま復興作業に従事したことにより、徐々に人々は生活を取り戻しつつある。

何日が過ぎた頃、救助が間に合わずに命を落としてしまった者達の葬儀を執り行えた程だ。

そして、最大の功労者であり、奇跡のようにこの世へ舞い戻ってきたルークは。

「ルーク。あなた。私がどうして怒っているか、分かるかしら?」

現在進行形で、セフィアに説教を食らっていた。

幸運なことに然程壊れておらず、修繕が済んだ懐かしの我が家で、バルド共々正座をしている。

そこに、誇り高き竜騎士としての威厳など欠片も存在していなかった。

胸元で手を組んだ母の放つ威圧感に、親子揃ってだらだらと嫌な汗を流す。

村人と共に復興活動に勤しんでいた彼らは、昼の休憩に入つて早々にセフィアに首根っこを掴まれた。

そうして問答無用で家まで引きずつて来られ、現状に至る訳だが。

(……息子よ)

(……ああ、父さん)

ルークとバルドは、目線だけを互いに向けると心の中で頷き合う。

(余計なことは、決して口にするな)

(分かっている。何故なら、母さんは……)

(彼女は……)

本気で怒ると、とても怖い。

片や息子として、片や夫として。

普段は常に優しさを損なわない彼女が、その実村の女連中で最も恐ろしい事をよく知っていた。

だからこそ、彼らが連れていかれるのを見ても、村の誰もが目を逸らして助けてくれなかったのだが。

「二人とも?」

「つ、あ、ああ。ちゃんと聞いてるよ、母さん」

「……………うむ」

ジツとルーク達を見ていたセフィアは、その言葉に少し目を細める。

しくじったか、と一瞬背筋が凍るような錯覚を得たが、彼女は特に何も言うことはなかった。

安堵したのも束の間、自分だけに視線が向けられた事でルークはぐつと息を詰まらせる。

「ルーク。母さんがどうしてこんなことをしているか分かる？」

「え、ええと……………色々心配かけた、から？」

「具体的には？」

「……………自分を大切にしなかったり……………人であることを捨てたり、とか……………」

「そうね。ちゃんと自覚しているようで、母さん嬉しいわ」

絶対喜んではない、という言葉を飲み込んだのは僥倖だったろう。

あるいはバルドとの意思疎通がなければ、火に油を注いでいたかもしれない。

だが、今しがた口にしたことは、まぐれで当たったわけではなかった。

“彼女”に導かれた時。

夢か現か空漠たるあの会話で、本当の過ちをよく思い知った。

もう目を逸らさないと誓った時、改めて自分を振り返ってみると、いくらでも気づけることはあつたのだ。

(それに、何日か前にライオットにしこたま怒られたし。あいつ、声は荒げないけどすげえ怖かったな……)

今回のことをカーディナル達に報告する為、一足先に央都へ戻った友たる騎士。

彼の淡々としながらも決して口を挟ませない説教を思い出し、ぶるりと体が震える。

そこでふと、既にこの村にいないもう一人の騎士のことを思い出した。

(イーデイスは、今どうしているのだろうか。アリスの話では、まるで逃げるように飛び去ってしまったと言っていたが)

村人達が開墾地に無事逃げるまで、先導をしてくれた感謝をまだ伝えていない。

それに、と。セフィアの視線から逃げずに目を合わせながら考える。

まだ誰にも明かしていない、胸の内に秘めたある想いを、彼女へ伝えたかったのだが。

(……まあ、まずはこの局面を乗り切るのが先か)

ここでセフィアの怒りを鎮めなければ、イーデイスとの再会も叶うまい。

「あの時も言ったけれど……ルーク。貴方はもう少し、自分を大切に思う人達のことを考えなさい」

「……ああ。それはよく反省してる。多くの人を悲しませてしまった」

それは自分を取り戻してからというもの、常に心を苛む痛みとなっていた。

更には昨日、子供達の様子を見に教会へ行つた際、自製の限界がきたらしいセルカに泣きつかれた所だ。

わんわんと大泣きをしていた彼女の他に、畏れていたことを謝罪してくれた気の良い村人もいた。

意外だったのは、ジンクが謝ってきたことだ。

ルークがいずれ衛士長になるだろうと言われていたことから、彼とは中々に複雑な関係だった。

先代衛士長の息子としての矜持だったのだろう。

何度も突つかかかってきた彼が、居心地悪そうに頭を下げたのは驚きだった。

（あいつも成長したってことかな。このまま、立派な衛士長になって村を守ってくれるといいんだが）

今や大いなる使命に直面している自分の代わりに、故郷を守る役目を彼に任せることにした。

それを伝えた時の、少しだけスッキリしたジンクの顔は、見ていてこちらも気分が良かったものだ。

「貴方が私達を愛して、守ろうとしてくれるのはとても嬉しいわ。守護竜様選ばれたのも、母親としてとっても誇らしい」

「ありがとう、母さん」

「でもね。それと同じくらい私や、セルカちゃんや、アリスちゃん。他にもたくさんの方が、貴方のことを深く愛してるの。守りたいと思ってるのよ」

「……………うん。それも、分かってるよ」

それは卓越した剣の腕や、高等な神聖術を扱うことでなし得る守護ではない。

言うなれば、心の守護。

愛を以って寄り添い、一人では乗り越えられない苦悩に打ち勝つ力だ。

「自分を見失っていた時。それでも愛してくれた人達がいたからこそ、俺は帰ってこれたんだ。その強さと大切さを、二度と忘れたりしない」

「……………本当ね?」

「ああ。白き竜の魂と、キリト、ユージオ、アリスに誓って。俺は俺に向けられる愛から、もう逃げない」

真正面から、この想いを伝えるためにセフィアを見つめる。

彼女は一切の欺瞞や虚偽を許さない眼差しで、息子の目を確かめた。

数分もの間、視線の応酬は続いて。

「……………うん。分かった。母さん、その言葉を信じるわ」

やがて、セフィアはそう言って微笑んだ。

ルークも同じように、彼女へ笑い返し――

「それはそれとして。村の人達を脅かした事とか、闇の国の怪物を食べていた事とか、まだまだありますからね!」

「はい……………」

どうやら、もうしばらく続きそうである。

それからしばらくの間、家の中にひたすらセフィアの声が朗々と響き続けていた。

「——まあ、このくらいにしましょうか」

「ありがとうございます……」

「まったくもう、気をつけるのよ?」

がつくりと首を落としたルークは、もはや頷くことしかできなかつた。

三十分以上絞られ続けた息子に、同情するような目を向けるバルド。

「さて。次は……あなた」

だが、直ぐに自分へと矛先が向いて、元より正していた背筋をさらに伸ばした。

いかなる誹りも受け入れる覚悟で、20年ぶりに再会した最愛の妻を見上げる。

「……まず、ありがとうございます。ルークと一緒に、ルーリッドを守ってくれて」

「……記憶はなくても、ここは我が故郷。友らとの軌跡が秘されし地。故に、当然の事だ」

バルドの頭には、未だに敬神モジュールが突き刺さっている。

絶大な心意によってほぼ無効化しているものの、記憶の楔としては機能している。

仮に、これが外れたとしてもアドミニストレータの実験によって破壊された記憶が完

全に戻る事はない。

それでも彼がこのルーリッドの事を知ったのは、時折夢見るベルクーリとの思い出が所以。

更にスワロウによって己の過去を明かされ、かつて傷ついた時に本能でこの村に辿り着いた。

そして、彼女と出会ったのだ。

「ここは、君が生まれ、育ち、愛した場所。……たとえば、我が息子を拒絶しようとも……君がいる限りは、守らねばなるまい」

あの一年の思い出は、遙か太古の記憶の断片に等しい輝きを、今もなお放つ。

色褪せぬその光があつたからこそ、ルークの事で弱まった剣気が完全に潰えることはなかつた。

「だから、私は……」

「……だつたら」

だが、しかし。

「だったら……どうして、ずっと私を避けていたの………？」

「っ………」

バルドの心は、みるみる内に崩れていく妻の表情によって揺らいだ。

母として毅然とした顔をしていたセフィアは、吊り上げていた眉尻を落としていく。

ある種の威厳に満ちていた目つきは悲しみに染まっていき、何かを堪えるように口元が戦慄く。

「私は……確かに20年前、貴方を信じて送り出したわ。成し遂げたい事があるって、その願いを強く信じていたから」

震える声で、セフィアは語り出す。

約二年前のあの日、ルークを見送ったように、セフィアはバルドの旅立ちを祝福した。たとえ息子を一人で育てることになり、あらゆる苦難が待ち受けていようとも。

離別の哀しみに、それでも耐え続けてこられたのは……いつか、再会できると思えたから。

「なのに貴方は……この一週間、一度だって私と向き合ってくれた？」

「……………それは」

初めて、バルドの鉄面皮が崩れる。

襲撃を防いでからの六日間、彼は復興活動の助力に尽力し続けていた。

不幸にも亡くなった村人の亡骸を搜索し、倒壊した家屋の撤去を行い、森に住む危険な獣を狩った。

どこまでも実直に、堅実に……………それはまるで、何かから目を逸らし続けるように。

「私……………待ってたのに。ずっと……………貴方が、私のところに……………戻ってきて、くれる……………と、を……………」

はらりと彼女の零れ落ちた涙に、バルドのみならず、ルークも息を呑む。

一度として、母のこんな顔を見た事はなかった。

母としてではなく、一人の女性として……………愛する者から遠ざけられた事への、心が張り裂けるような悲哀。

なまじその魂の音がはつきりと聞こえてしまうだけ、ルークはより確かな実感を得た。

「母さん、それは違うんだ。父さんは、ずっと離れ離れだった母さんと、どう向き合っているのか分からなくて……………」

「……………止せ、息子よ」

共に復興活動を行う中で、常に「聞いて」いた父の苦悩を口にしようとする。しかしそれは、他ならぬ本人が手で制した事で諫められてしまった。

自分を見上げてきたルークを、バルドは纏う雰囲気だけで圧する。

彼と合わせなかった目線は……常に、自分を悲しげに睨みつけるセフィアへ向けられていた。

「……………セフィア」

「……………何よ」

とても柔らかい、ルークへの口調ともまた違った声音で、バルドは妻を呼ぶ。

簡単に許すつもりのない彼女は、それでも名一杯目に力を込めてみせる。

そんな彼女の、白いスカートを握りしめる両手を、大きな手を被せるようにして包み込んだ。

「……………すまなかった。全て、私の過ちだ」

「……………」

「君も知っているだろうが……私は、復讐に身を捧げた悪鬼だ。私や、多くの者達の心を奪ったかの女神を弑するが為、生き続けてきた」

その手は数多の敵を切り伏せた事で、拭うことのできない返り血に染まり。

燃え盛る憎悪は休まることを知らず、強靱無比な意志がバルドに力を与えてきた。

騎士人形となった友と、剣を交えたこともある。

助けると誓った彼を斬ることだけはどうしてもできず、結果敗北し、故郷へ逃げ帰った。

そんな、決して誇れるものではない三百年に至る人生に現れたセフィアという女性。

彼にとつて、剣を振るう度に捨ててきた心の重荷を思い起こさせるには、彼女は十分な光だった。

「恐ろしかつたのだ。我が息子と出会い、こやつが友と力を重ね、我が宿願を果たし………渴望を失った私に、存在する価値はあるのだろうか」と

「つ、そんなこと！ 貴方は私にとつて、他の誰も代わることができない人なのよっ!」
「ああ。君はそう言ってくれるだろう。………だからこそ、尚更に君に私のような鬼が相応しいのかと、そう思ってしまったのだ」

恐怖していた。あらゆる敵の命を握り潰してきたこの手で、彼女をも傷つけないかと。

友以外に唯一抱いた大いなるその愛は、同時に凄まじい不安を最強の騎士へもたらした。

彼女の手を取り、その温もりを確かめたい。

セフィアを想えば想うほど恐れは強くなり、遂には逃げてしまったのだ。

「だが、今この瞬間思い知った。我が苦悩は、なんと浅はかであったのだろうか」と

「父さん……………」

「この恐れは、君の愛を裏切るのと同義。君が私など比べ物にならぬほど強いのを、よく分かっていたはずなのに……私は、また己が無知を知った」

自分の信念の強さを確かめた時のように、確固たる声音で語る父に、ルークは圧倒された。

セフィアも同様に、あれほど燻っていた怒りを忘れたように、ただその言葉に聞き入っていて。

「もう一度言おう。——すまなかつた。セフィア」

そして、バルドは彼女をそつと抱きしめた。

二度と離れはしないと、背を向ける事はないと、そう証明するように、強く、強く。

ようやく得られたその温もりに、セフィアが大きく目を見開いた。

「私は、もう君から逃げはしない。この身と剣に未だ存在する意義があるのなら、君にこそ我が全てを捧げよう」

「っ……………あな、た……………！」

遂に決壊したセフィアは、バルドの背中に手を回すと、その首筋に顔を埋める。

怒りを押し流す、大きな嬉しさへの嗚咽を漏らす彼女の背を、彼は恐る恐る撫でた。

「……………！」

やっと再会できた両親の姿に、ルークも隠しきれない嬉しさの滲む笑顔を無言で浮かべた。

二人の間にあるものには、どうにも自分が入り込めないような気がして、静かに立ち上がる。

そのまま彼らに気付かれないよう、我が家から出ていった。

「……………よかつたな、母さん。父さん」

扉をそつと閉めると、思わずそう零す。

しばらく二人きりにすべきだと思っていると、不意に覚えのある音を感じた。

それに従い振り返れば、見計らったように外套姿のアリスが角から姿を表し、こちらに気がつく。

「ルーク兄さん。こんな所でどうしたのですか？」

パツと微笑みを浮かべた彼女は、小走りに近づいてきた。

すつかり態度が軟化した妹分へ、ルークは少しきまりが悪そうな顔をする。

「ちよつと、今夜の寢床に困った所だな」

「そうなのですか？」

「ああ。教会にでも行くかうかと考えているんだが」

首を傾げる彼女へ、背後の扉を一瞥してから首肯した。

ふむ、と指をおとがいに当てた彼女は、少し考えてからおもむろに口を開く。

「でしたら、我が家へ来るのはどうです？ 四日前、セルカが突然泊まりに来たので、次

に備えてもう一つ敷き布団と毛布を用意したのです」

「おお、それは助かる！ キリトの様子も気になってたし。やつぱり持つべきものは妹分だな」

「ええ、是非」

にこやかに笑ったアリスは、顔を上げてから「それに」と続ける。

次の瞬間、柔らかだった彼女の音が吹雪のように変わっていくことをルークは聞きつ

けた。

しまったと思つた時には、もう遅く。

「私も、少し兄さんと話がしたかったので。とても良い機会ですね？」

凄みのある笑顔でそう言うアリスに、盛大に顔を引き擽らせた。

新たな旅立ち

「……………美しい世界だ」

丘の上から見える絶景に、思わずそうひとりごちる。

双子池や湿地帯、開墾地など、その全てから小さな命の営みが聞こえてくる。かつては己を人から逸脱させたこの力だが、今となつては非常に心地が良い。

「昨日、アリスに一晚説教された疲れも吹き飛ぶつてもんだ」

懇々と叱責されたのを思い出し、少し遠い目で景色に心を委ねた。

すると、北に見える《果ての山脈》が目に入り、ふと苦笑を真剣な表情に塗り替える。

（念の為、洞窟を確認しに行ったが。そこには既に、かの竜の遺骨はなかった）

半年の間、寝床として唯一自分の拠り所になってくれた、冷たき竜の骸。

その骨片の一つすら見つからずに、まるで世界に溶け込んだように消え去っていたが。

(……この世に戻ってきた時。体の中に、何か膨大なものが流れ込んでくる感覚があった)

グツと、腰に履いた《白竜の剣》に添えた手に力を込める。

成り損ないとして体に纏ったさなぎを脱ぎ捨て、ずっと眠らせていた意識が覚醒した時。

剣を握った瞬間、手を伝って肉体に、魂に、不思議なほど力強いものが流れ込んできた。

ルークの中を満たしたのは、膨大な力や記憶、智慧といった、かの竜が己の中に秘めていた全て。

(かつて、その気高い魂を内に抱えていたあの骸が消えたことが、もし俺に関係しているのなら——)

確かめなければならない。

この一週間、思索を続けた事に答えを見出すため、ルークは《白竜の剣》に手をかけた。

いつもと変わらず、清涼な音で鞘から現れた刃の切っ先を天に向け、目を閉じる。

(思い出せ。あの竜の、本当の姿を)

思い描くのは、かつて夢の中で見えた荘厳な白。

己が身が変異した成り損ないなどより、遥かに完成された存在。

視界を染めた暗闇の中で、あの純白の巨躯、極太の四肢と尾に、鋭い鉤爪や牙を見出す。

まばらなそれらを纏め上げ、芸術品のような鱗の一枚一枚に至るまで鮮明に、一つの姿を。

そして何より目を奪われた、あの黄金の瞳を記憶から掘り起こして――

——イイン。

「……………」

全てが揃った時、暗闇を照らし出すその「白」が翼を広げた。

目を見開けば、そこには同じ色の輝きを放ちながら震える愛剣がある。

柄から両手を手放すと、ひとりでに浮き上がった《白竜の剣》から数歩分後ずさった。残された剣は、徐々に空へ浮かび上がっていくと、その光を解放した。

爆発するように共鳴が広がり、ざあざあと豪雨のような音で木々を揺らす。

双子池の向こう岸まで届く波紋が幾重にも広がり、ルークは思わず目を細めた。

「く……………」

右手で顔を庇いながら、それでも目を逸らさずに愛剣を見続ける。

剣から放出された莫大な光は、空中に明確な流れを持つて漂い、巨大な何かを作り出していった。

先端から紡がれていくそれが、何かの四肢や尾、鼻の先端……生物の骨格である事にルークは気がついた。

形成された翼を持つ蜥蜴のような光の上に、新たに青白い光が肉付けされていく。張り付いた光が筋肉の束となり、どこか頼りなかつた骨に無類の力強さを与えた。

無駄なものがない肉体へ、更に白い光——否、純白の鱗が覆い被さり、鎧の如く纏われて。

最後に、大きな翼に水晶色の膜が広がり、碎けて淡い青色の皮膜となった。

目を奪われているルークの前で、剣が役目を終えたのか光の放出を止める。

ゆつくりと戻ってきた愛剣にハツとして、手に取ると一気に重みが戻ってきた。

それをまじまじと見つめていると——ズン、と盛大な地響きを伴い、ソレが地面に降り立った。

「つと……」

少しよろけ、足の位置を変えて転倒するのを阻止する。

それから前方へ顔を向けて——やはり、息を呑んだ。

美しい生き物だった。

鼻先から尾の先に至るまで、三十メルを越える巨大な体。

それを支える四本の足は力強く、頭に伸びる角の先端は地面から十メルも離れてい
る。

剛体を浮かせるに足る大きな淡蒼色の翼から、最後にその顔へと視線を投じた。

「——ようやく、会えたな」

「……ああ。やっと、その顔をはつきり見られた」

ルークの銀の瞳と、その生物の黄金の瞳が交じり合う。

口も開かず、人の言葉を話した純白の竜は、静かな瞳で自らの担い手を見下ろした。

「よくぞ、我が全てを得た。今の汝は、真に我の代行者である」

「……やっぱり。俺を試していたのか」

「然り」

精悍な顔が僅かに下へ傾けられ、ようやく答えを得られたことに笑む。

ルークが経験したあらゆる苦難は、この竜がもたらした試練だったのだ。体を蝕まれ、記憶を奪われて、全てを失った末に、彼の成り損ないになった。

あの時の恐怖や哀しみ、あらゆる痛みと苦しみは、ルークを真の担い手とする為のもの。

「全部、俺の覚悟を見極めるのに必要な事だった」

「言っただけだ。我は汝を祝福すると」

ただ望むだけでは、白き竜がその意志を認めることは決してない。

己の全てをかなぐり捨てても、願いに手を伸ばす不屈の意志。

誰にも真似することのできない無二の勇気があつてこそ、担い手たりうる。

そうでなくては、人界を守護し、かの邪悪なる竜を討ち果たすことなど、できようはずがないのだから。

「この半年の事は……俺に戦いの経験と大量のリソースを積ませることで、お前を受け入れるだけの器を作った、つて所か」

「人の身に、我が力は重すぎる」

「そうだな、よく実感したよ」

不思議なほどはつきりと覚えている、アドミニストレータとの決戦を思い返して苦笑する。

完全に力を得た今だからこそ分かる。

あれは、この竜が持つ力の一割にも満たなかつたことが。

故に、長い時をかけて力を扱う術を学び、同時に全てを委ねても耐え得る準備が必要だった。

「まさに羽化する前の蛹、ってわけだ」

「汝は見事、翼を広げてみせた。我が下賜したものではなく、汝自身の翼を」

そして、仮に力を手にするのに十分な器を作り上げたとしても、それだけでは足りない。

確かに積み上げたものを、自分の意思で、自分の欲望で使いこなしてこそ、完成する。

「我は望む。他の何者にも勝る渴望を。そうでなくては世界を護るなどという不遜、いかなる資格があつて口にできようか？」

世界と、そこに生きとし生ける遍くものの営みを護ることは、あらゆる罪にも勝る傲

慢だ。

それは支配することよりも遙かに険しい道のりであり。その重みを知つてなお、望むのであれば。

相応しいだけの、我欲が要る。

「救世を為すのは、義務であつてはならぬ。成し遂げる者が心より望んでこそ、使命となるのだ」

あるいは、生まれた時から運命さだめとしてそれを決められていた白い竜すらも不適格かもしれない。

永遠の命、不滅の存在であることは、整合騎士すら及ばない永久の停滞をも意味する。だからこそ四柱の聖なる守護竜の中で、あるいは彼だけが——後継者を欲していたのかもしれない。

「我ら竜の生に、終わりはなく。それ故に過去も未来も存在しない。だからこそ——」

「——今を生き、未来を望む者が使命を成し遂げなければならぬ」

自ずと辿り着いたルークの答えに、白き竜は深く頷いて。

「ルーク。我が使命を継ぎし人の子よ。汝の願う未来へ羽ばたくがいい。人の願ひこそが、世界を救うのだ」

「——確かに。その使命、受け継がせてもらった」

厳かな口調で告げられた言葉に、ルークはその場で跪いて深く頭を下げた。人一人の手には余りあるその使命を、必ず果たしてみせると示すために。

魂の根底から繋がった白い竜は、偽りなき彼の心を見定めて、フツと小さく笑う。

「今こそ教えよう、我が真の名を。——我が名はグウィバー。人界を守りし四柱の聖竜、その一柱にして、御魂斬りの剣者である」

告げられたその名は、ルークの魂の髄にまで深く刻み込まれていった。

彼はこれから、気高きこの竜に恥じぬよう、己の使命を果たしていくことだろう。

数分の間、ルークはそうしたままだった。

この胸にある敬意と感謝を十分に伝えられたと思えるまで、頭を下げ続ける。

それからゆつくりと立ち上がり、グウィバーへ微笑みを向けた。

「ありがとう、俺を選んでくれて。おかげで、この夢を追いかけ続けることができる」
「汝の道には、常に我が隣にいる。それを忘れぬことだ」

「ああ。それに、俺が愛する人達もな」

うむ、とグウィバーは頷く。

頭の中にキリトやアリス達を思い浮かべて、かつての彼の言葉の意味をようやく理解した。

愛に支えられ、愛を貫く——それこそが自分のゆく道なのだと、確かに信じられたのだ。

「まあでも、結構えげつない試練だったよな」

そこまで考えたところで、張り詰めていた空気を緩和させる為に相貌を崩す。

まるで生来の友人に話しかけるような言葉に、グウィバーは怒ることなく、むしろ同じように笑った。

「うむ。我が番にも、人心を慮れと諺られた」

「俺はよかつたけど、もう色んな人に散々説教されてさ……ライオットに父さん、セルカ、母さん、アリス……ああ、多分キリトやユージオが戻ってきたら、あいつらにも怒られるんだろうなあ」

自分はあと何回説教をされるのだろうか、乾いた笑いを浮かべる。

これが真の担い手となった代償だというのなら、甘んじて受け入れるべきなのだろう。

今のうちから覚悟を決めよう、と思った矢先、背後から聞こえるある音に気がつく。

振り返ると、こちらに金属質な音を響かせて走ってくる、黄金の鎧姿の少女がいた。

その隣には修道女姿の彼女の妹もいて、二人とも何やら切迫した表情をしている。

「ルーク兄さ——ん！」

「ル——ク——！」

「おう、アリス！ セルカー！」

大きく手を振れば、彼女達は一瞬ホツとして、その後にグワイバーに気がつくと目を見開いた。

心なしか走る速度が上がって、あつという間にルークの前にたどり着く。

「二人とも、そんなに急いでどうした？」

「はあつ……はあつ……ど、どうしたじゃ、ないよ……！」

「小屋まで、凄まじい風圧と剣気が届いて……！ 何事かと思つて様子を見にきたので

す！」

息も絶え絶えに訴えるセルカと、呼吸に乱れ一つなく捲したてるアリスに苦笑する。

グウィバーの出現に際して相当な余波が出ていたが、まさか彼女達が駆けつけてくるとは思わなかった。

「まあ、見ての通りだよ」

「これが……あの御伽噺の、白い竜………」

「……美しいですね」

黄金の眼で自分達を見下ろす白い巨竜に、姉妹が揃って感嘆の溜息を吐く。

自分の件があるので、敵視されなかったことにルークがホッと安堵した。

「こいつがいるから、東の大門へ向かう手段には困らなくなったよ」

「……そのようですね」

「……そろそろ、だよね」

東の大門という単語を聞いて、俄かに二人の表情が険しくなった。

村の復興も目処が立ったということで、彼らは戦場へ飛ぶことを決意した。

これまでは動くことができなかったが、闇の軍勢の侵攻が始まった今こそ向かうべき

だ。

決戦の地になるだろう東の大門へ行くのは、ルーク、アリス、バルド。そしてキリト。未だに自我を取り戻さないキリトを連れて行く事には幾度も相談を交わしたが、結局置いていくことはできなかった。

あれほどの事があつて、なおも何かをする村人はいないだろうが、目の届く場所にいた方が良い。

(それに、心を閉ざしてしまったあいつも、戦場でなら何かを感じて目覚めるかもしれない。俺やアリスが、再び立ち上がったように)

アドミニストレータを打倒しうるほどに研ぎ澄まされた、弟分の心意。

それが人界を守る戦いでこそ、もう一度飛び立つことをルークは信じていた。

「……あのね、姉様。本当は父さまも、見送りに来たがつっていたの。それだけは知ってほしくて」

「分かっているわ、セルカ」

少し暗い表情で言うセルカの頭を、アリスがそつと撫でる。

優しげな微笑みを湛えたまま、彼女は妹にこう言った。

「いつか、全ての役目を終える日が来たら。その時はただのアリス・ツベルクとして帰ってくるから」

「うん……待ってるね」

「……………」

頷くセルカとは裏腹に、ルークは少々難しげな顔をしていた。

彼女の言葉は、戦いが終わったその時にアリス・シンセシス・サーティを消滅させることを意味している。

本来のアリスを取り戻すことを、自分やキリト、ユージオはずっと目的にしてきたが

……

(……………グワイバー)

(……………うむ)

背後にいる竜と、密かに視線を交わした。

そうしている間に、不安が取り除かれたらしいセルカがいるもの笑顔を浮かべる。

それに伴って、アリスも彼女の頭から手を離した。

「さあ、もう行きましょう。キリトや、バルド殿達を待たせているわ」

「うん！」

「そうだな」

セルカが頷き、ルークも同意して……一旦動きを止める。

そして、三人とも一様に道の上で鎮座しているグウイバーへ視線を向けた。

「その、ルーク……」

「流星に……」

「分かってる……なあ、グウイバー。その凶体だと森が破壊されるから、一旦剣に戻ってくれるか？」

「……………仕方があるまい」

黄金の眼が瞼の中に消え、その体が白く発光したかと思うと霧散する。

宙に舞った光は《白竜の剣》に収束されていき、最後の一粒まで吸い込まれるのを見てよしと呟く。

「ありがとうございました」

「いや。……………さあ。出発しよう」

「うん！」

「ええ」

首肯した姉妹と共に、ルークは小屋へと歩き出すのだった。

……………しばらくの後、彼らが去った無人の道。

グワイバーの足跡が残る場所に、一陣の風が吹く。

「……………ふふ。やっぱり、君はやればできる子だね」

いつの間にかそこにいた人物は、フードの下で楽しそうに呟いた。

まるで全てを見定めていたかのように彼女は笑い、遠ざかっていく背中を見つめる。

「さて。これで様子見をする必要は無くなった。私も私のすべきことをしよう」

意味深なことを言い残すと、風にも乗らないほどの小声で式句を唱える。

瞬く間に生み出された風素が彼女の体を包み込み、あつという間に消してしまう。

ソルスの光を利用し、世界から隠れた彼女は踵を返して。

「……………そ、つか。君は、まだ生きているんだね」

ふと央都の方角へ顔を向け、心底嬉しそうにそう言いながら、歩き始めた。

【第六章】 嵐前

羽化を待つ欠翅

北セントリア央都修劍学院、修練場。

そこに、一人の少女がいた。

窓から差し込む斜陽は包み込むような橙色で、既に一日が終わりに近づいている。

少女は初等錬士を示す灰色のスカートを着用しており、寮の門限はすぐ直後にまで迫っていた。

「シッ……！ ハッ……！」

だというのに、真剣なその面持ちには些かの妥協も存在せず。

持ち手の革が擦り切れた木製の細剣をしっかりと握り、絶えず修練を繰り返していた。

それを示すように、ピッタリと輪郭に張り付くような運動用下着に包まれた上半身に

は大量の汗が浮かぶ。

阻害するものを極力排したことで、その動きはより鋭く、素早く、そして非常に洗練され。

それでもなお、何かを追い求めるような眼差しで剣を振り続けるのだ。

(――まだ、足りない。もつと速く、もつと正確に)

心を満たすのは、飽くなき探求。

一ミルのブレすらも許せずに、何十、何百と納得できるまで型を繰り返す。

それが完成したとしても、満足することは決してない。

また次の型を繰り返し出し、積み重ねた最適の動きを完璧に再現できるまで、同じことを実行した。

そうすることが、いつか自分の願いを叶える為の唯一の方法であるから。

そう信じて、シャーリー・テイリーモアはこの五ヶ月という月日を送ってきた。

あの日、正しいことを為し、それ故に罪人とされてしまった愛しい人。いつも目の前にあつたあの光に追いつきたくて、この手で触れたくて。ただ、彼と共に鍛えた剣を我武者羅に、振って振って振り続けた。

強くなる為に、何でもした。

苦手だった分野の座学や神聖術にも本気で取り組み、他の学院生の誰より励んだ。

剣の修練を怠らず、教官達のあらゆる指導に全霊で傾倒し、全てを吸収した。

休日にも一切油断せず、図書館や修練場に籠り、教本と睨み合いを続けている。

正に死に物狂いで食らいつき、ついこの前の定期試験では学年主席の称号を勝ち取った程だ。

だが、それでは足りない。

たかが初等錬士の頂点に立った程度で、自分の夢には届かない。

同級生や上級錬士との交流にも取り組んだ。

同じ修剣士を斬った罪人の元傍付きとして、疎まれ、時に心無い言葉を浴びせられることもあった。

それでも心折れることなく周囲との蟠りを解き、協力を仰いで課外授業に赴いては実戦経験を積んだ。

学院に入ったばかりの頃と今を比べると、随分テイリーモア流の技も馴染んだように思う。

同時に、剣を取るたびに自分の未熟さを見せ付けられるようで、より一層心は駆り立てられる。

もっと強く、もっと賢く。誰にも追いつけないほどの高みを目指さなければ——と。

大好きだった跳ね鹿亭の蜂蜜パイを食べなくなった。

鮮やかな色だと彼が褒めてくれた髪を切り、短くした。

他者と剣士として交わることはあれど、貴族としての繋がりは、元より辟易していたのもあって断ち切った。

代わりに、劍の腕を、術の理を、知識の深みを追い求めることだけに全てを捧げた。強さを手にする為ならば、他の何もかもは必要なかつた。

そうしている内に、気がつけば九の月の下旬になる。

周囲の錬士のみならず、教官までもが彼女の鬼気迫る様子に圧倒され、悪し様に語ることを辞めた。

入れ替えるように、畏敬の念を込めた目を向け始め、それまでとは違う意味で遠ざけた。

人は言う。あれは女を捨てた劍の鬼だ。凡そ人の心全てを修練に捧げた修羅だと。あるいは、いずれ上級修劍士の主席にもなり得るだろうと言うものもある。

(——上等。その程度の地位、手に入れてみせる)

元から彼女の目的は、騎士に叙されてあの白亜の塔へ辿り着くこと。

彼や友人達の想い人が目指したように、自分もその願いを全うしてみせよう。

故に、あらゆる謗りは些事。

不快な言葉を投げかける人間も、容姿目当てに寄ってくる人間も、全て実力で黙らせた。

自分の邪魔をするものは、それが教官や上級貴族、誰であろうとも退ける。立ちほだかる人間全てをねじ伏せて、たった一つのその道を勝ち取るのだ。

それに、彼女は一人ではない。

彼女と同じように、無力を嘆き、燻る心を濁らせることなく立ち上がった友がいる。切磋琢磨し合う彼女達がいれば、他にどんな存在が必要だというのか。

(私は、私を諦めない。いつかあの人に辿り着くまで、走り続けてみせる——！)

滾る熱情、溢れるほどの愛を剣に乗せて。

無類の強靱な意志は、彼女に力を与えていた。

「シィッ！ ハッ！ セアアアッ!!」

喉の奥から裂帛の叫び声を轟かせ、初等錬士一の乱舞を繰り出す。

ずっと教えられた見栄え重視の剣舞ではない。より実直な、技の冴えを突き詰めたも

の。

そこには一種の美しさがあり、体裁ばかりを心がける他の貴族らにはない力強さがある。

背も四センチ伸び、引き締まってくつきりと割れた筋肉が一撃を繰り出す度に躍動し、まるで戦乙女のように。

重々しかった白金櫛製の木剣は、もはや中身の抜けた枯れ枝のように軽かった。

空想するのは、あの日に見た二人の整合騎士。

人界最高峰の力と権威を持つ彼女達は、恐ろしいほどの剣気を放っていた。

足が竦んで、逆らおうという気にさえならなかったかの騎士にさえ、届くように。

「シィイイツッ！」

魅せる為ではなく、相手を圧倒し、隙を生み出す為の剣戟。

彼が基礎にして極致と語った、慢心も油断もない、無数に繋がった攻撃の果て。

「ハアアアアアア——ッ！」

それまでで最高の瞬間、踏み込み、重心の乗りで、秘奥義を解き放つ。

限界まで絞った右腕から、その手の中にある木剣に宿った光を突き込む。

吼えるような声と共に繰り出されたその一撃は、大気を破る音を伴って疾風を巻き起こした。

「……………ふうふううう」

深く、息を吸い、吐き出す。

時が止まっていたのかと錯覚する程微動だにしなかった体を、ゆつくりと引き戻した。

剣を握る力を緩め、腕を垂らした瞬間——どっと強い疲労感が押し寄せる。

「……………こんなところ、かな」

思い出したかのように吹き出した汗の感触に、いつもの平坦な声で呟いた。

外に跳ねた毛先から一滴床に落ちたのを、燃える炎のような色を秘める目で見つめる。

「……………そろそろ、戻らなきや」

随分と暗くなってきた斜陽へ視線を移して、日の終わりを感知取る。

これ以上は、あの日以降少し親身になったアズリカといえど見逃してはくれないだろう。

自分が初等錬士寮の玄関を施錠する前までに、というのが彼女との約束だ。胸の中で燃える想いをどうにか鎮めて、自分を抑える。

そうしてはやる気持ちを収めた時——どこからか拍手が響いた。

「素晴らしい剣技です。日々の鍛錬が伺えるようで、感服しました」

同時に、聞き慣れぬ声。

素早く振り返りながら剣の切っ先を向け、警戒を露わにした。

そうして視界の中に収めたのは——斜陽が生み出す陰影の中に佇む、白い影。

「おや、随分警戒なされているご様子。いえ、淑女の肌をみだりに目にした私が不躰でしたね」

「……………貴方、誰」

舞台俳優の様に仰々しい台詞と美声で語る影に、短く問いかける。

言わなければこの木剣を突き込むと言わんばかりの気迫に、影がそつと両手を腰の後ろに回す。

「申し遅れました。私はスワロウ。とある御方に仕える者でございます」

靴音を響かせながら、長身瘦躯の男が陰から姿を現した。

髪から瞳の色、肌に至るまで白いその男に、シャーリーは不審げな目を向ける。

そんな彼女に、スワロウは紳士的な笑みを浮かべた。

「突然の訪問、まずは謝罪いたします。シャーリー・テイリーモア様」

「……私を知ってるの？」

「ええ。この学院の初等錬士主席に輝いた鬼才にして、次期上級修剣士の主席とも名高く。実際にこの目で見て、それを確信しました」

ああ、いつもの輩か。シャーリーはそう思った。

これまで、剣の腕を誉めそやして機嫌を取ろうとする男は何人かいた。

しかしそれは上面だけで、胡散臭い笑顔の下には下卑た欲望が見え隠れしている。

シャーリーは自分の容姿の類い稀さを自覚しているし、それで幼い頃から嫌な思いも幾度となくしてきた。

この男もどうせ、どこぞの貴族の使い走りだろうと心を冷たく凍らせていく。

「……くだらない用なら、今すぐ帰って。貴方みたいな薄っぺらい笑顔を浮かべた人、大

嫌い」

「おや、気付かれてしまいました。乙女の柔肌を見てしまったので、どうにか機嫌を直していただこうと思つたのですが。失敗しましたね」

存分に毒を含んだ言葉を吐いたにも関わらず、男はあっけらかんとしていた。

まるで、今口にした通りの理由だったとでも言うように苦笑する様に、少し動揺する。「どうやらテイリーモア様は、貴族らしい前ぶりはお嫌いな御様子。それでは早速、本題に移りましょう」

「……………本題？」

「ええ」

スツと、スワロウが腕の一方を動かす。

即座にそちらへ意識を向けると、彼は顔の横に持つてきた右手の中指と親指を合わせた。パチン、と軽快な音が鳴る。そして引き起こされたことに、シャーリーは驚いた。

空中に、白い光の円環が現れたのだ。

神聖術の様な、しかし一切の詠唱を伴うことのなかつた光に瞠目する。

そうしている間に、スワロウは円環の中からせり出してきた物を両手で引き抜いた。

「これを、貴女に」

「……これって」

差し出されたものに、視線を落とす。

まるで芸術品のように見事な剣だった。それでいて、途轍もない存在感を感じる。

何かの巢のように三つ連なった幾何学形の鍔は、上品な黄金の輝きを持っている。

柄には丈夫そうな深い紺色の革が巻かれ、白造りの鞆から僅かに覗いた刀身が橙に煌めいた。

「人界を守る四柱の守護竜、その一柱が秘めていた財宝。かつて翅を欠いて生まれ、されど百年の間代々の女王を守った、無敗の兵蜂の毒針を鍛えた神器でございます」

「神器……?」

それは、公理教会の権威を背負う整合騎士のみが持つことを許されたはずのもの。

あるいは彼や、その弟分の彼らのように強い剣士のみが手にする、至高の一振り。

それを突然差し出され、警戒も忘れて困惑した顔をする。

「どうして、私なんか……」

「テイリーモア様が、これを持つに相応しいと確信したからでございます」

「……私、ただの下級貴族。まだ上級修剣士にすらなっていない」

「そういった事ではありません。何故なら——貴女の中には、彼の技と意思が根付いてる」

それは、シャーリーにとって決定的な一言だった。

俯かせていた顔を振り上げて、驚愕に目を見開く。

そうすると木剣を取り落とし、スワロウの両腕を自分の手で強く掴んだ。

「先輩を知ってるのっ!? あの人は今どこに……無事なのっ!?」

「……残念ながら、その質問にお答えすることはできません」

「っ……………」

初めて微笑みを崩し、苦々しい表情をしたスワロウに氣勢を削がれる。

そのまま口を閉じた彼に、本当に答えられないのだと察して、手を離れた。

「……………私、先輩を助けるために剣の腕を磨いてる。でも、全然足りない。満足できな

い」

再び床を見たまま、独白するように言葉を吐き出す。

「いつまでも、追いつけない。どんなに修練したって、あの人の背中に辿り着ける気がしないの」

わかつている。半年にも満たない年月励んだところで、到底比肩できるものではない。

そうだとしても、ずっと心の中で積もり続けていた悔しさと苛立ちはどうしようもないもので。

ロニエ達以外の他人から初めて聞いた彼の存在に、改めて自分の弱さを痛感した。

「私は、誰より強くなければならないのに。そうしないと、先輩を助けに行けないのに」
だから、こんな自分に彼が携えていたような剣が相応しいはずがない。

遠回しな拒絶に、しかしスワロウが差し出した剣を引き戻すことはなかった。

「——そうであれば、尚更にこの剣を受け取っていただきたい」

「……………どうして？ 私なんか、全然駄目なのに」

「いいえ、そんなことはありません。テイリーモア様。貴女には彼から受け継いだ、掛け替えのないもの——諦めることのない不屈の意志がございます」

不屈の意志。

そう聞いて、少しか肩を揺らした彼女にスワロウは言い募る。

「私は、彼が成し遂げたことを目にしました。その苦悩と、怯えと、勇気を。今の貴女は、あの頃の彼によく似ている」

「……私が、先輩に？」

「ええ、そうです。あらゆる苦しみに苛まれながらも、目を逸らす事なく立ち向かい続けている。それは誰しにもできる事ではありません」

貴族が怠惰に耽り、人々が安寧に心の全てを委ねてしまった、今の人界では殊更に。

願いを諦めない。目を閉じず、耳を塞がず、膝を折ることをしない。

たったそれだけの単純な事が、他の何にも勝るものとスワロウは信じていた。

「今は相応しくないと考えてもいいのです。それでも貴女が剣を握り続ける限り、いつか想いを叶えることだってできるかもしれない」

「いつかの……未来……」

「貴女に、その覚悟はありますか？」

最後の選択を委ねるかの如く、スワロウは尋ねる。

彼女の願いの一助となりたいのだと主張する彼に、シャーリーはじつと考えた。

頭の中に色々なことが過っていく。

彼のこと、自分のこと、今も一緒に頑張っているロニエやティーゼのこと……多くを考えた。

この五ヶ月、毎日考えていたことに改めて直面し、悩んで、葛藤する。自分の中で渾然としているそれらを、必死にかき分けて――

「……………わかった」

やがて、彼女は頷いた。

真剣な表情をしていたスワロウは、ホツと微笑みを浮かべる。

そんな彼の手の中にある剣へ、シャーリーは恐る恐る手を伸ばした。

途中、何度も躊躇するように指先を震わせながら、最後には両手で剣を掴む。スワロウが手離せば、確かな重さが腕の中に収まった。

「感謝します、テイリーモア様」

「……………一つだけ、教えて」

剣を軽く握り締め、使者を見上げる。

そして、僅かに揺らいだ儂げな眼差しで問いを投げかけた。

「先輩は……………今も戦つてるの？」

「……………」

その言葉に、一瞬動きを止め。

スワロウは、初めて虚を突かれたような面持ちで彼女を見た。

見上げてくるシャーリーを興味深そうに眺めていたが、やがて不透明な微笑を浮かべる。

「ええ。彼は、今も剣を置いてはおりません」

「……………そう。ありがとう」

「……………そ。……………それではテイリーモア様。いずれまたお会いしましょう」

その言葉を最後まで聞き、瞬きをした後、忽然と白い使者の姿は消えていた。

周囲を見渡すが、影も形もない。去ってしまったのだろう。

それを確かめた彼女は、ふと剣に目線をやると、その柄に手を這わせるようにして握んだ。

握るだけで重いとわかる感触。彼女は一息に、その剣を抜き放つ。

「……………綺麗」

姿を現した短刃は、陽光に反射して橙の身に黄金の煌めきを現していた。

思わず見惚れてしまう美しさにほう、とため息を付いて、それから表情を引き締める。

鞘を床に置き、両手で柄を握りしめ……

「……………フッ！」

一閃する。

ヒイン、という不思議な風切り音が鳴り響き、一人きりの修練場に消えていった。ゆつくりと踏み込んだ足を戻したシャーリーは、手の中のそれをまた見つめる。

「……………少し、重い」

（それでも、いつかこの剣を使いこなせたその時には——）

——この日を境にして、彼女は決意を新たに一層の修練へ身を投じていくのだった。

暗黒騎士イキシア

「――報告は以上になります。閣下」

その男、暗黒騎士イキシア・イヴェガンは一本の芯が通ったような声音でそう言った。きつちり整えられた暗い金髪と、引き締まった凜々しい顔が勤勉さを醸し出している。

部屋の照明に反射して深い紫色に輝く暗黒騎士の鎧に身を包み、伸ばした背筋には乱れがない。

騎士の見本のような出立ちのイキシアに、閣下と呼ばれた男は小さくため息を付いた。

「そうか……侵略に失敗し、奴らはいきり立っているようだな」

「所詮、浅知恵しか働かない獣共といったところでしょう。奴らの殺戮への欲は増すばかりです」

片手に携えた資料にある、《果ての山脈》北部からのゴブリン、オーク混成軍の侵攻作戦失敗を一瞥する。

ほんの一日前、イキシアがとある筋から得た、確実な信憑性のある情報。

古くより語り継がれた、人界と暗黒界を隔てる大門の崩壊に先じようとして欲をかけた者達の末路だ。

「うむ……騎士団内も、徐々に雰囲気が悪くなっている」

「はい。東の大門が崩れた暁に起こるであろう戦乱に、皆息巻いています」

「ふむ……長としては悩ましいばかりだ」

暗黒騎士団長、またの名を《暗黒將軍》たるビスクル・ウル・シヤスターは唸る。

短く刈り上げられた頭髪や整えられた髭、四十を超えてなお筋骨隆々に引き締まった体。

何より、座っているだけなのに醸し出される覇気が、称号に恥じぬ彼の威厳を表していた。

「それで。私の話を聞き入れそうな者はどれほどいる」

「並の騎士達は、閣下の威光があれば如何様にも。序列持ちの騎士達は……三分の一、と

いったところでしょうか」

「皆、己の剣に誇りを持つてゐるからな。誉れを得る機会から退きはすまい」

「交渉によつては、もう一人二人程ならば抑えられるかもしれません。……そして勿論、私と『彼女』も」

議論の余地もなく、慎重に機を見定めるといふシャスターの考えに同意する。

至極真面目な顔で意思を表したイキシアに、ふとシャスターは微笑んだ。

「礼を言うぞ、イキシア」

「いいえ。貴方に頂いた御恩に比べれば、この程度のことは当然です」

胸当てに手を置き、軽く首を垂れる。

イキシアは、十の頃に孤児となつた。

広大な暗黒界には非常に凶悪な魔物が数多く跋扈し、その内の一体に両親は命を奪われたのだ。

その後、暗黒騎士であつた父のよしみでシャスターに引き取られ、彼の元で育てられた。

養父より剣の技と聡明さの全てを受け継ぎ、今や暗黒騎士第二位の地位にまで上り詰

めた。

名実ともにシヤスターの副官として、彼の未来を憂いた考えに心から賛同している。その姿勢を見せたイキシアが頭を上げたところで、シヤスターは真剣な面持ちになった。

「もはや、闇の五種族の軍勢は極上の餌を前にした飢える狼の如き様相だ。前回の会議では、人界の土地と財産、奴隷をいかにして分割するか大いに紛糾した程だからな」
「あれは悲惨と言わざるを得ませんでした。誰一人として未来のことなど考えていない、獣ばかりです」

力こそ全てである暗黒界は、十人の諸侯を頂点として仮初の平穩を保ってきた。

だが、五種族の未来を背負うべき者達は支配欲に溺れ、血で血を争う《鉄血の時代》が再来しようとしている。

東の大門が崩れれば、人界との争いだけでなく、その後に数百年に及ぶ大乱が起こるであろう。

……だが、二人にはそれ以上に危惧していることがあった。

「それで……例の調査はどうだ」

「……………は。暗黒界中の魔物達が、異常な活性化を始めています。個々の力が増すのみでなく、その繁殖の速度もこの半年で大幅に増幅しました」

自分にとって最も忌むべきその事に、イキシアは僅かに眉根を寄せて答える。
ふむ、というとても重々しい相槌が、シヤスターの口から漏れた。

少し瞑目して考えたシヤスターは、徐ろに次の言葉を彼へと投げかける。

「やはり、伝承は真実のようだな——覇邪竜の復活は、目前に迫っている」

「……………はい」

——それは、創世の時代より語り継がれる災厄の徴。

大門が崩れ、光に恵まれし人界と闇に染まりし暗黒界が交わりし時。

大地を染め上げる血と屍、吹き荒れる憎悪と欲望の中で、冥府より目覚めし邪悪たる

霸王。

その者は暗黒界の半分にも匹敵する体躯を持ち、神をも灰燼に帰する金雷を纏いし破

滅。

殺戮と死の象徴にして、終焉を言祝ぐ、遍く命の敵。

伝説に刻まれしその名は――

「――ロヴィナ。かの竜が目覚めし時、魔なる者どもは歓喜し、王の復権に馳せ参じ
るが為に集まるであろう、か」

「……争いが起これば、確実にかの者は目覚めるでしょう。そして、我々も人界も、あら
ゆる命はロヴィナによつて永久とこしえに冥府へと誘われる」

暗い表情で、二人は最期の刻を憂いた。

子供でも知っている古い物語に大の男二人が恐る様は、一見滑稽にも見える。

だが、それは単なる御伽噺ではないのだ。

暗黒騎士団は、長年《果ての山脈》にて人界の整合騎士達と小競り合いを繰り返す傍
で調査をしてきた。

百数十年に渡る探求の結果、計測するのも馬鹿らしくなるほどの超巨大生物が、地底
で眠っているのを確認している。

何よりも。

その生物の四つ首のうち一つが、岩山を削り出して造られたこのオブシディア城の地下深くにあるのだから。

「伝説では、人界を守護する四柱の竜が覇邪竜を討ち倒す、とあるが……」

「二つの世界同士の殺し合いになれば、共同戦線など望むべくもありませんまい」

ロヴィナには、シャスターやイキシアはおろか、人界最強の整合騎士達すら歯が立たないだろう。

強力無比な力を持つ神器と精妙な剣技、不老の肉体を有する彼らでさえ、かの竜には羽虫に等しいのだ。

希望はただ一つ——四柱が揃いし時、ロヴィナの絶大にして深淵なる魂を打ち砕くとされる聖竜のみ。

「ですが、そもそもロヴィナが復活しないという可能性もあります」

「闇の神ベクタの降臨と共に、その封印が解かれる、という話か……だが、不安要素を潰しておくに越したことはない」

無限の天命を持つ鎖によって閉ざされた玉座の間が開かれることは、永劫にあり得まい。

しかし、実際に魔物達の活発化が始まっている以上、その兆候は訪れているのだ。

「確かにそうです。しかし、山脈からの通り道を護っていた竜達は人界を統べる公理教

会の最高司祭によって討ち果たされています」

「だが、望みは消えていない。そうだろうか？」

「……………かの騎士のことですか」

一瞬とある人物のことを思い浮かべたイキシアへ、シヤスターは頷いた。

自分の想像が確信に変わり、彼は脳裏に描いたその人物に震え上がった。

復讐の騎士、バルド。

原初の整合騎士でありながら最高司祭に叛逆し、三百年の刻を生きる憎炎の騎士。

その力は鬼神の如く、人界のみならず暗黒界にまで放浪するかの者に斬られた暗黒騎士は百人を優に超える。

実際、シヤスターも数年前に一度だけ剣を交えたが——あの時ほど死を感じたことはなかった。

その様を間近で見たイキシアもまた、バルドの人域を超えた力をよく知っている。

「奴は、二つの守護竜の力を操っていた。そして整合騎士に一人、それらしき神器を持つ

やつがいる」

「ライオット・シンセシス・サーティーン……奴の妙技に敗れた屈辱、忘れてはおりません」

彼にしては珍しく、対抗心やそれに類する感情を怜悯な瞳に表出させた。

シヤスターの一番弟子を自負する彼にとつて、呆気なく竜の背から撃ち落とされ、命からがら逃げ延びた経験は苦いものだ。

ある意味人間らしい、義理の息子のような騎士の表情にシヤスターが悪戯げに笑う。

それに気付き、一つ咳払いをしたイキシアはその感情を抑え込んだ。

「彼らに話を通じると思いますか？」

「竜が斃れ、その意志と宿命を受け継いだ担い手達……奴らの目的もロヴィナの打倒にあるはずだ」

ならば、一時的にせよ協力関係を築くことは、全くの不可能ではないはず。

他の諸侯の誰もが考えないであろう、暗黒界人の中では異質なその企みに、イキシアも首肯する。

「それに、騎士バルドはともかく、もし戦争になつてしまえば騎士ライオットを確実に敵に回すことになる。そうすればいかに我らが数を揃えたところで、壊滅する可能性が高い」

「強大なる竜の力を宿した神器と、それを十全に扱いうる奴の技量……闇の軍勢五万を以てしても、閣下は御しきれぬとお考えですか」

「これまでに竜達が屠った闇の民の数は、数千ではくだらない。そこに他の整合騎士達もいるとなれば、一万も残れば良い方だろう」

人界を守る四聖竜の勇名は、暗黒界においても名高いものだ。

それに匹敵するライオットの力の程もまた、世代を経て暗黒騎士達もよく知っていた。

語り継がれる忌み名は無情なる緋髪の騎士。または荒れ狂う竜爪の狩人。

加えて、同等かそれ以上の力を持つ整合騎士達があと三十人もいるというのだ。

どれだけ騎士やオーガ、暗黒術師などがいようと、良くて双方壊滅。

下手をすれば、《十侯》を含めたあらゆる戦力は暗黒界から消え去ることとなる。

「もしもそこに、何かしらの理由で騎士バルドが加わろうものならば——」

「……全滅、ですか」

先に答えを告げたイキシアは、無言でいるシャスターの眼差しから肯定を読み取った。

過去、彼を傀儡にせんとした暗黒術師ギルド総長デー・アイ・エルの全力の呪いすら、あの炎で容易く焼き滅ぼしたのだ。

五種族全てが分け隔てなく、黒焦げの骸となつて戦場に転がる様を明確に思い描くことができた。

戦慄するイキシアに、両手を組んだシャスターは厳かに告げる。

「よつて、我々の目的は二つだ。騎士バルドと敵対しない、あるいは利害関係を結ぶこと。そして、戦争を回避して騎士ライオットの助力を取り付けることだ」

「……茨の道と言わざるを得ませんね」

騎士バルドは、こちらが仕掛けなければ戦うことはない。触らぬ神に祟りなしというものだ。

だが、戦争への流れを止めるには何かしらの機——残り九席の諸侯を黙らせるだけのきつかけが要る。

それが今すぐに都合よく来ない限り、イキシアには何年もかけて根回しする以外に思いつかなかつた。

「闇の民の欲望で、アンダーワールドそのものを終わらせるわけにはいかん。何としても奴らと手を取り合わなくてはならない」

「どこまでもお供いたします、閣下」

しかし、だからといって今更シヤスターを諫めることはあり得ない。間髪入れずそう言った彼らに、養父は自然と笑みをこぼした。

「……ふつ。お前が支えてくれるならば、これ程心強いことはないな」
父母の死に暗い目をするばかりだった少年が、いつの間にやら立派になったものだ。
徐ろにシヤスターが差し出した手を、少し目を見張った後にイキシアは握り返すのであつた。

直後、外から扉を叩く音がした。

他の誰にも聞かせてはならぬことを話していた二人は、一瞬で警戒する。

何重にも対策を施され、デーイーですら盗聴できないであろうシヤスターの居室。

オブシディア城十八階に位置する、現行最高権力者の一人である彼を訪ねてきたのは

「閣下、リピアです」

扉を隔てて聞こえてきた声と名乗りに、二人はホツとした。

その人物は、二人が互い以外に唯一信頼している者であつたからだ。

「入れ」

力を抜き、ソファーに体を預けたシャスターが大きな声で告げる。

その際に目配せをされて、イキシアは彼の意図を察すると小さく微笑んだ。

「それでは閣下、私はこれで」

「ああ。何か分かつたらまた報告してくれ」

「はっ。……それよりも。彼女との事、思い切つてください。今日こそはと決めたので

すから」

「ぬう……わかつている」

初めて威厳のある表情を崩し、少し照れくさそうにするシャスター。

そんな養父に温かみのある笑みを向けて、軽く礼をすると身を翻した。

扉のほうに歩いていけば、ちょうど入室してきた、灰青色の髪の毛の美しい女騎士と対面

する。

「リピア。任務ご苦労」

「イキシア。そちらも、閣下の副官として恥じぬ働きはしていたか？」

「無論。これにて私は失礼する」

「ああ。またな」

気安い様子で言葉を交わし、リピアと視線を切るとそのまま部屋の外へと歩き出した。

幼年学校時代の同期であり、男女の垣根を超えた友人である彼女に、少しの声援を心の中で送りながら。

背後で扉が閉められる音がしたところで、表情に毅然としたものを取り戻す。そして、下階にある自室へと歩みを進めた。

皇宮の中は、程よい静けさに包まれている。

主であるベクタがない為にその利用目的は専ら《十侯》の集会となり、普段はこんなものだ。

時折すれ違う政務官や商業ギルドの会員達は、何かしらの職務に忙しなさそうにしている。

騎士達に対抗意識を持つ魔女達も、イキシアを見るなり憎まれ口を噤んでいた。

それはオーガのような筋肉質の長身から醸し出される威圧感に怯み、また端正な顔立ちに好色を発するが故。

自らに注がれる視線の一切を意識の外に追いやり、黙々と歩み続けた。

「……………」

十八階を後にして下の階へと降りていくにつれ、人影も少なくなっていく。

めつきりすれ違ふ人間はいなくなり、暇を持て余している衛兵達の数もまばら。

そこまで来て、不意にイキシアは口を開き――

「――これでよろしいか、スワロウ殿」

「――ええ。ご協力感謝します、イキシア様」

眩くように言えば、隣にいた白い使者は鷹揚に頷いた。

まるで最初から並んで歩いていたように、平然とオブシディア城を闊歩しているスワロウ。

彼の存在に全くの驚愕も警戒もせず、イキシアは淡々と前だけを見ながら口を動かす。

「これで、人界と暗黒界の和平に一歩近づけた。貴殿の思惑通りにな」

「イキシア様の存在があつてこそその結果です。私一人ではとてもここまで実現できません」

よくもまあ、いけしやあしやあとと言えるものだとその男を一瞥する。

その気になれば、シヤスターを操ることはおろか、自らの手で《十侯》達をも下せるだろうに。

本人曰く、争い事は苦手であり、また他に為すべき事があるために、手を貸してもらう他にないらしいが。

「それで。リピアが持ち帰ってきたはずの情報は何？」

「抜き取りなく。半年前に最高司祭アドミニストレータは剣に倒れ、その後は騎士長ベルクーリが指揮をとっている」と

「流石、と言わざるを得んな」

イキシアは、感服とも呆れともつかぬ溜息をついた。

三ヶ月もの間、人界へ斥候任務に赴いていた友が命懸けで掴んだ情報。

それにもまた、スワロウが一枚噛んでいる。

新たな最高司祭の存在は伏せ、シャスターが話ができる相手だと感じているベルクーリを表に出す。

得られる情報を制限することにより、心的印象を操作し、ある一つの結論を導かせるのだ。

「人界との和平。それによる戦争と、ロヴィナ復活の回避………上手くいくと思うか？」

「そうでなければ、この世界に未来はありません。私が四百年以上生き長らえてきた意義さえも」

柔らかな口調でいて、そこには確固たる信念が宿っているように思えた。

人界と暗黒界。アンダーワールドを構築する、相反する二つの世界の平穩。

それこそが、イキシアがかつて当人から告げられて知ったスワロウの目的。

聞けば、自分が生まれる数十年前にあつた百年の戦乱、《鉄血の時代》の終結にも裏で尽力したのだとか。

その全ては、確定された未来——光と闇の世界の戦いと、その最中で目覚める厄災の回避の為。

「……改めて聞くが。本当に、ベクタ神の帰還は近いのだな？」
「誠に残念ながら、事実でございます」

スワロウの答えに、イキシアは奥歯を噛み締めた。

飢えと暴力に支配された暗黒界に住む、闇の民全てが待ち続けたその時が近づいている。

だというのに、彼の心には冷ややかな絶望と焦燥ばかりがあつた。

「知つての通り、ロヴィナの復活には三つの要素が必要です」

「……ああ、覚えている」

イキシアは心の中で、創世記の神話に記されたその条件を反芻する。

一つ。竜の魂を秘めた神器に選ばれし、騎士の誕生。

ロヴィナを唯一殺すことのできる、白の貴竜、蒼の大竜、赤の蛇竜、黒の翁竜。

その守護竜達が斃れ、長き眠りの果てに生まれるとされる、終焉を打ち砕く至高の騎士達。

二つ。膨大な生物の死と、そこから生み出される“負の神聖力”とも呼ぶべき力。

東の大門が崩れ、光の世界と闇の世界が剣によって交わる時、争いの中で散る無数の命。

それらを吸い取り、かつて三女神によって地の底に封じられたロヴィナは力を取り戻す。

最後の一つ。それこそが、闇の神ベクタの再来。

絶望と破滅を望むかの皇帝の封印は、同時にロヴィナを抑え込む最大の要でもある。

それがあるからこそ、自分達は今もこうして呑気に話をする事ができているが……
「近いうち、ベクタと名乗る者が玉座に現れ、人界にいる《光の巫女》……あるいは《白の騎士》を求め、戦乱を起こそうとするでしょう」

「そしてロヴィナも覚醒する、というのか……なんということだ」

「であるからこそ、アドミニストレータの死という情報をもたらしたので。ベクタがこの世界に降り立つよりも早く、戦争の火種を鎮める為に」

「……ああ、分かっている。貴殿の助力、無駄にはしないと誓おう」

こめかみを揉んでいたイキシアは、重厚な決意の仮面を顔に被り宣言した。

折角、大恩ある師にして養父たる男と、子供の頃からの友が結ばれようというのだ。

破滅が見え透いた無為な闘争で、目前に迫った幸せを壊させなどするものか。

「私も、最大限の行動をお約束します。共にこの世界を守りましょう」

そんな彼に、スワロウも神秘的な表情で頷くのだった。

二人は歩き続けていたが、やがてふと顔をしかめた。

暗黒騎士第二位と、生まれながらにして高い能力を備えたメンタルヘルスケアAI。彼らの耳や肌、あるいは直感と呼ばれる心理的感覚が、異変を嗅ぎつける。

「……なんだ？ 騒がしいな」

「——ッ!!!」

足を止め、怪訝そうに周囲を見回したイキシアの隣でスワロウが劇的な反応をする。凄まじい勢いで天井を振り仰ぎ、驚愕に目を見開いて硬直したのだ。

彼を知ってからの八年、一度も見なかったことのない取り乱しように困惑する。

「スワロウ殿？ 一体どうし——」

「——まさか。ありえない。こんなにも早く、暗黒界側のスーパースーパーアカウンターの存在に気付いたというのか」

彼の唇から漏れた呟きの意味を、イキシアは理解することができなかった。

だが、超越者たるこの男が全身で戦慄を表すほどに悪いことが起こったのだと、それだけは分かる。

「くっ、私としたことが予測を誤るとは……!」

「す、スワロウ殿、何が——」

「イキシア殿。私は緊急の用が出来てしまいました。また今夜伺いますので、それまで

どうか命を落ときぬよう」

それだけを告げ、答える間も無くスワロウは指鳴らしで姿を消した。

目の前に漂う白い光の粒に、呆然とする。

一体何が起こったのか。そう疑問を浮かべた瞬間、前方から走ってくる影があった。

「イキシア副団長！ここにいらつしやったか！」

全身鎧に包まれた体から大きな音を立て、やってきたのは暗黒騎士の一人。

古参の騎士達を押しつけ、シヤスターへの強靱な敬愛の念で若輩にして副団長にまで上り詰めた自分に従ってくれる良い部下だ。

自分より歳を重ね、その経験によっていつも支えてくれる彼は、しかし見たこともない顔をしている。

イキシアは、驚愕に包まれた心をおどろかすか落ち着けると彼に質問を投げかけた。

「その面持ち、ただ事ではないと見受けるが。何があつた」

「一大事ですぞ！場内にいる騎士は全員、集合せよとの報せです！」

「何？　どういふことだ」

次に、一拍溜めた後に彼が言った言葉に。

「玉座の間の鎖が、震えておりますッ！ 我らが皇帝、暗黒の神が降臨なされるのやもしれませんッ!!」

イキシアは、底なしの奈落に突き落とされたような絶望を得た。

闇の神

男は、ゆつくりと目を開く。

すると、これまで現実では見たことのないような、広大で豪華な広間が見えた。

優に数十人が整列できそうなその広間の最奥、贅を凝らした玉座に座しているのだと認識する。

そうして、ガブリエル・ミラーは自分がアンダーワールドにログインしたことを実感した。

(……………が、暗黒界の皇帝の間か)

これまで体験したどんなVRMMOより、はつきりと質感を伴った世界を観察する。腰掛ける玉座のクッションの感触、肌を感じるひんやりとした空気、身に纏う仰々しい衣装の感触。

全てがあり得ないほどにリアルで、これを作り出した日本の技術者の技術の高さを改めて認識する。

自分はこれから、この世界のどこかにいる世界初の真性人工知能——《アリス》を探し出し、奪うのだ。

NSAに依頼されたPMCの秘密作戦最高責任者として。また、魂の探求者として。

「よう。あんた、兄弟かい？」

不意に近くから声が聞こえて、そちらへ青い瞳を向ける。

玉座のすぐ側に、濃紫色の全身鎧を纏った長身の男が立っていた。

兜に隠れて見えづらいが、その顔が作戦チームの一員であるヴァサゴ・カザルスであると理解する。

チーム内でも屈指のVR経験者として、侵入したオーシャンタートル内のSTLで共にログインしたのだ。

「ヴァサゴか」

「随分と派手な格好だな、兄弟^{プロ}」

「皇帝のアカウントを使っているのだ。階級に即したものだということだろう」

至る所に作成者の拘りが反映された装備や腰の剣に、ガブリエルは冷たく目を落とす。

このアンダーワールド内では最強級のステータスに加えて、あらゆるシステムコマンドを無効化する特殊能力。

その力の程を肉体的実感として感じ、ヴァサゴも同じように手を開閉させて面白そうに笑う。

「で。実際にログインしたわけだが、暗黒領域の民つてのはどこにいるんだ？」

「さあな。だが、いずれ何者ががやって来て——」

跪くだろう、と確信的に答える。

「——ほう。貴様ら、この世界の外側から来たな？」

直後、知らぬ声が響いた。

瞬時に意識を引き締め、胡乱げな顔をするヴァサゴと共に声のした方向を見やる。すると、広間の中央にいつの間にか一人の女が立っていた。

ジャケットから靴に至るまで漆黒の執事服に身を包み、同じ髪色と、血のように赤い瞳が印象的だ。

顔立ちは整っており、均整の取れた体つきを上から下まで眺めてヴァサゴが口笛を鳴らす。

一方の正体不明の女も、ガブリエルとヴァサゴのことを興味深げに観察してきた。

「貴様は誰だ」

「それはこちらのセリフだが……まあ、凡その検討はつく。従来の管理者ではあるまい」
外見に見合わぬ重厚な声音で語られる単語に、ガブリエルは目を細める。

「どうやらこのヒューマンユニットは、現実世界や自分達の正体をほぼ正確に認識しているらしい。」

確認したログでは、初期の頃にラーズのスタッフは全員ログアウトしたはずだが。

ガブリエルは幾つかの可能性を考えた。

一つは、この世界に存在する通常のヒューマンユニットとは異なるシステムの存在であること。

彼はガンゲイル・オンラインというVRMMOをプレイしているが、そこには

ノンプレイヤーキャラクター
N P Cが多数設置されていた。

それらのユニットには、ゲーム内のクエストを提供・進行するために一定の会話パターンが用意されている。

あれと同じように、見た目は人間に見えるが、中身は別の何かなのかもしれない。

あるいは、純粹になんらかの方法で外界の存在を知っただけのユニットという線もある。

他のどの可能性にせよ、ガブリエルは現実の人間と遜色のない見た目や表情に、内心で少なからず驚いた。

「それで。偽りの神話に刻まれし闇の皇帝を騙る者よ。貴様はいかなる理由によってこの世界にやってきた？」

女が、得体の知れない笑みを浮かべて問いかけてくる。

「——《A. L. I. C. E》を手に入れる。それが私の目的だ」

即答したそれは本国の望みであり、同時にガブリエル個人の欲求でもあった。

子供の頃、幼馴染の少女を手につけて、あの光を見た時からずっと求めてきた魂なるもの。

それを科学的に実証し、生み出されたものが人工フラクトライトだ。

中でも一際輝く、極上の宝石のような魂——《アリス》、あるいは《ルーク》というユニットを入手する。

出来れば女の方が好ましい。そして煩わしい者を全て排除した暁には、唯一この手の中だけに。

他の誰にも語らぬ策謀を頭の中で巡らせつつ、黒い女を見下ろす。

そうして、明らかにこの世界の人間から逸脱している、しかし《A. L. I. C. E》ではないだろう者に問い返す。

「貴様の望みは？」

「——死と破壊。あまねく命の滅亡を」

女の回答も、また即座によるものだった。

だからこそ、ガブリエルはそれが嘘偽りのない本心からの目的だとすぐに看破する。

互いを見定めるように睨み合い、そこにはまるで互いの首に食らいつこうとする狼のような剣呑さがあつた。

「その為に、貴様には闇の民どもを使って戦争を起こしてもらいたい」

「私に？」

「この体は傀儡でな。本来の私を目覚めさせるには、膨大なりソース……深い絶望による負の感情が必要なのだ」

やはり、見た目通りのヒューマンユニットではなかったようだ。

窮屈そうな表情を浮かべる女に、怜悯な声で言葉を告げる。

「お前の提案に乗って、私のメリットは？」

「我が分け身を貸してやろう。私がいる限り無限に生まれる竜の軍勢だ。それで貴様の望みを果たすがいい」

「戦力の貸与、というわけか……悪くない提案だな」

「おいおい兄弟、いいのかい？」

明らかに怪しい提案に、ヴァサゴが難色を示した。

部下に言われるまでもなく、ガブリエルは欠片もこの女を信用しようとは思っていない

い。

だが、自分達には現実世界における二十三時間というタイムリミットがある。

それは依頼主が自衛隊の上層部と交渉し、特殊部隊が乗り込んでくるまでの制限時間だ。

一刻も早く《A・L・I・C・E》の奪取を考えるならば、使えるものはなんでも使う。

それに、いかに現実世界のことを知っていても、所詮はこの箱庭の住人。

何かあれば処分してしまえばいい。

「——いいだろう。貴様と手を組もう」

「懸命な判断だ。では、利害は一致したということでもいいな」

「ああ」

そうして、ガブリエル・ミラー。またの名を皇帝ベクタは、闇の使者ペーリツシユと協力関係を築くこととなった。

——数刻後、玉座の間には多くの者が集っていた。

有り余る空間を従前に用い、数百に及ぶ者達が一様に整列している。

最も多いのは、純粋な人族だろうか。

その他にも醜悪な見た目をした小鬼ゴブリンや豚人オーク、狼人オーガに見上げるような巨人までもが
いる。

それら全てが、玉座に座するガブリエルのことを一様に見上げていた。

中でも、それぞれの先頭、最も近い場所に跪く十人のユニットに視線を投じる。

(——なるほど。この諸フェューダール・ロード侯達侯達がダークテリトリーの纏め役というわけか)

見纏う鎧や衣服の上質さ、他の追隨を許さぬ力強い雰囲気から、そう分析した。

またそれは、彼に見下されている《十侯》達も同じことである。

圧倒的な“力”を感じさせる、闇の神。

命を命とも思わぬであろう硝子色の瞳に、一切の感情が浮かばぬ整った顔立ち。

ただそこに座するだけで屈してしまうような威圧感に、必死に表情を引き攣らせまいとする。

しかし、黙し続ける事もまた不敬であろう。

「頭を上げること」を許す。左の端のお前から名乗るがいい」

その機会を与えるかの如く、一切の感情が乗らない声音で神が告げた。

直後、迅速とも呼べる身のこなしで命じられた男が立ち上がったのは本能的なものであつただろうか。

「わ、私、商業ギルドの長、レンギル・ギラ・スコボと申します！」

恰幅の良い中年の男が、その見た目に似合わぬ裏返った声で返答した。

それからすぐさま低頭し、次に小山のような生物が顔を上げる。

前兆にして三メートル半を誇る巨躯に蛮族的な装いを纏った巨人が、見下ろす形で口を開く。

「ジャイアント族の長、シグロシグ」

地鳴りのような声で、しかし確かに言葉を発したことに、内心でガブリエルはその知

性の実在を改めて感じ取る。

三番目に顔をあげたのは、シグロシグとは打って変わって痩身の人族であった。
長いフーデッドローブと仮面で全身を覆い隠した様は、見る者に不審を抱かせる。

「暗殺者ギルド頭首……フ・ザ………」

掠れた声から、かろうじて男であることだけは認識できた。

その次には、入れ替えるようにして又しても異形の存在。

短い足では座り込めず、どさりと座り込んだ丸型の体躯。その体に乗る頭もまた豚と人の掛け合わせ。

「オーク族の長、リルピリンだあ」

小さな瞳だけが他の者となんら変わらぬ知性の光を光らせる中で、甲高く己の名を告げる。

半ばを締めくくる5人目は、人族の少年。

立ち上がった体躯は他と比べ小柄であるものの、鍛え抜かれた上半身や佇まいからは
気迫を感じさせる。

それに劣らぬ勝気な笑みを口に貼り付けて、赤金色の髪を揺らしながら機敏に一礼し

て見せた。

「拳闘士ギルド第十代チャンピオン、イスカーン！」

肩書きを聞き、表に出さないままガブリエルは疑問を覚える。

果たして戦場で拳など通用するのかと思うまもなく、6人目が動き出す。

「グルル……オーガ族、族長……フルグル……」

時折唸り声を漏らしながら、ジャイアント族に及ばずも大柄な体つきの異形が名乗る。

毛皮に包まれた体に、狼のそれに酷似する前に出っ張った顔つき、鋭い牙、頭頂部の耳。

現実世界から来たガブリエルからすれば、その容姿は人鬼オーガというよりも人狼ワーウルフであった。

「山ゴブリンの長、ハガシにございます！ 皇帝陛下、一番槍の栄養はどうか我らにお与えを！」

七番目の異形は、開口一番に己が野望を口走ってみせる。

名乗った通り、多少着飾ってはいるものの、ガブリエルもよく知る低級モンスターのゴブリンだ。

しかし、オークはおろか、人族より小柄であるにも関わらず、誰より直情的に欲望を

宿すその瞳。

ガブリエルは、諸侯に名を連ねる所以の一端を垣間見たように思えた。

「とんでもない！ その榮譽は我ら平地ゴ布林に！ クビリにございます！」

と、そのハガシを押しつけてもう一人のゴ布林がキィキィと騒ぎ立てる。

どこ違うのかガブリエルには全くわからなかったが、どうやら別の部族らしい。

「なんだと！ このナメクジ喰いが、湿気た土地のせいで頭が蕩けたか！」

「貴様こそ、カラカラの日差して脳みそが枯れきったと見える！」

なんとも醜い言い争いを始めたゴ布林に、少なからず不快そうな雰囲気の流れ――

直後、バチツ！ と彼らの鼻先で火花が散った。

途端に奇怪な悲鳴をあげて飛びのくゴ布林達。

そして、一様にある方向を睨みつけた。

「皇帝陛下の午前ですわよ。お静かになつたらどうかしらう？」

指を鳴らした右手を緩やかに降ろして、人族の若い女が冷笑する。

立ち上がった女は、露出の激しい衣装を纏つたカフエオレ色の体を見せつけるように腰を反らせる。

妖艶な美貌に笑みを浮かばせ、気取つた一札をする様にヴァサゴが小さく口笛を吹いた。

「暗黒術師ギルド総長、ディー・アイ・エルと申します。我が配下の術師三千、そして私の身も心も皇帝陛下のものですわ」

声にも仕草にも十分すぎるほどの色香が含まれていたが、感情に流されぬガブリエルには効かない。

鷹揚に頷くだけに留めた皇帝に、少し逡巡したものの、諦めたようにディーは再び跪いた。

それを見届けて、最後の一人に視線を落とす。

黒鎧を纏つた、人間にしてはオーガに匹敵しようかという威容の、壮年の男。

顔に走つた傷跡が歴戦の貫禄を醸し出す男は、俯いたままに静かな声で名乗り上げる。

「暗黒騎士団長、ビスクル・ウル・シヤスター。皇帝陛下に我が剣を捧げる……その前に、

一つ問いたい」

「――闇の神の前に、不敬であるぞ」

恭順するのみであつたそれまでの9人と違い、確かな覚悟を伴つて顔を上げたシャスタ―。

それに対するは、皇帝ではなくその側に控えていた執事服の麗女であつた。

自分達とは異なる鎧の暗黒騎士と同じく、見慣れぬその女は血のように赤い瞳で彼を見下す。

(……………なんだ、この女の悍ましい気配は?)

初めて目にする女の瞳に、シャスタ―は言い知れぬ不安を抱いた。

ともすれば、どこか人間味が欠如している皇帝ベクタよりも……何故か、その女が恐ろしい。

そのように考え、閉口したシャスタ―に今度はベクタが動く。

「良い。して、問いとは何か」

「……………今この時、御降臨された皇帝の望みは、奈辺に有りや」

強い意志を感じさせる、その言葉。

改めて、ガブリエルはそれが意志を持たぬ人形でないことを思い出しながら。

「——死と恐怖、絶望と破壊。慟哭の地獄」

その言葉に、シヤスターのみならずその場のすべての者が震え上がった。

ある者は驚愕と戦慄に。またある者は、恐怖と堪えきれぬほどの歓喜によつて。

そんな彼らに、『皇帝ベクタ』の貌を被つたガブリエルは立ち上がり、大仰にマントを翻して片手を西の空へ向ける。

「我を追いやつた天界の神々の祝福を受けし彼の地を守る大門は、今や崩れ去ろうとしている！ その時こそ、我が意向を天地遍く知らしめす時！」

その言葉には、語気の荒々しさとは裏腹に、冷たい何かが通っていた。

心の芯を犯していくようなそれは、破壊の徒である暗黒の民のほとんどにとっては甘い甘露。

それがオペレーターを務める部下に受けたレクチャー通りの演技ともつゆ知らず、

彼らは体を揺らした。

「余が望みはただ一つ！ 大門が崩れ去る時に現れし《光の神子》達！ それ以外のあらゆる命を踏みにじり、奪い、殺すことを許そう！ ——今こそ、闇の民に約束された刻だ！」

——その言葉に、一拍の静寂が生まれ。

直後、割れんばかりの歓声が玉座の間に轟いた。

「ブヒイイイイイ！ 戦だあつ！ 白イウムども、全員ブツ殺すツ!!」

「ウオオオオオツ!! 戦だ!! 戦だ!!!」

「オオオオオオオオツ!!」

オークが短い手足をばたつかせて絶叫すれば、ゴブリンどもがそれに続く。

巨人が己の胸に拳を叩きつけて歓喜を示し、オークが一斉に遠吠えをあげる。

最後にそれらを彩るのは、暗黒術師たちの嬌声と花火、そして地の底まで轟くような暗黒騎士の雄叫びであった。

（——いいぞ、下等な生き餌ども。猛れ、吠えろ、渴望せよ。貴様らの悪意が、我が玉体

を呼び覚ます)

その様に、女が誰よりも邪悪に嗤い。

(——よもや、絶望がこのような形で訪れようとは)

(急ぎ……急ぎ、スワロウ殿に報せねば……ッ！)

あるいは、二人の騎士が心を暗い影に包まれる中で。

その全てを、無関心そうな瞳でガブリエルは眺めていた。

犠牲

「それにしても驚いたぜ。まさかあんな才能があるなんてな、兄弟^{プロ}」

「必要だからやったままで。お前もそれなりに取り繕えるようになっておけ」

わかってるって、と返すヴァサゴは、楽しいな笑みのままボトルの中身を煽った。

現実では滅多にお目にかかれない、数十年ものという高級品をまるで瓶ビールのように飲み下す。

その様を一瞥し、上品にグラスを傾けて舌を湿らせたガブリエルは窓の外を見た。

「素晴らしいものだ……：仮想世界も、突き詰めればここまでのものになるか」

オブシディア城最上階、皇帝の居室。

開け放たれた窓の向こうには、闇夜の中で煌々と輝く城下町が浮かび上がる。

その一際大きな街道を、城の門から西に向けて篝火が隊列を組んで進んでいた。

あの広間に集っていた者達を含め、即座に暗黒界の全勢力へ出陣命令を出したガブリエル。

兵站や装備、あらゆる物資を詰め込んだ荷馬車が進む様はいつそ壯観であり、手際の良さが伺える。

「楽しみだぜ。せつかくこんなリアルな世界での本格的な戦争だ、存分に殺らせてもらおうじゃねえか」

「用心しろ。その分、ここでは傷付けば血が出るし、痛みも感じる。ペイン・アブソーバーは導入されていないらしいからな」

「だからいいんじゃないか」

ニタリと笑い、傍らにある剣を弄ぶヴァサゴにガブリエルは小さく嘆息する。

だが、それも束の間のこと。

ワイングラスをテーブルの上に置くと、神妙な顔に立ち戻り、あるものを操作した。

中に浮かぶように存在する、紫色の半透明の板——システムコンソールのキーを素早く打ち、外への連絡をする。

数秒の後、時間加速が等倍になる不思議な停滞を受けて、通話状態へと移行した。

「クリッター、私だ。無事作戦を開始した」

『隊長ですか!』 早いですね。こっちはダイブを見届けて、丁度メインコントロール室に戻ったところです』

返事をした部下の一人に、ガブリエルは応用に頷く。

「そうか。やはり時間加速とは奇妙なものだな、こちらは既に一日目の夜だ。一両日中にユニットの配備を完了し、明後日には侵攻を開始する」

『流石ですね。いいですか、《アリス》、あるいは《ルーク》というユニットのどちらかを確保したら、すぐにここまで戻ってライトキューブをイジェクトしてください。その作業はここでしか行えません』

「分かっている」

改めて、作戦の概要を思い返す。

目的は真性人工知能、その中でもある特定のブレイクスルーを果たしたユニットの確保。

現実世界で二十四時間以内、アンダーワールド内部では更に引き伸ばされるが、その間に作戦を遂行せねばならない。

それを過ぎれば、依頼主が取り引きをして静観している自衛隊達が乗り込んできて、皆殺しだ。

『気をつけてくださいよ。メインコントロールのアカウント操作がロックされている以

上、リセットはできません。一度死んだら、次は一般兵卒ですからね！　ヴァサゴのバカにも言っておいてください！』

「うるせえな、聞こえてんだよクソ野郎」

「了解した。では、通信を終わる。次は《アリス》、あるいは《ルーク》を確保した後に」
『そうだと嬉しいですね』

クリッターの憎まれ口を最後に、通信は切られた。

再び時間加速が再開され、おかしな浮遊感が過ぎ去る。

途端に、金属鎧を弄っていたヴァサゴは手甲を投げ捨て、ラフな格好で立ち上がった。
「んじゃあ、連絡も終わつところでもちよつと城下に……ってわけにはいかねえよなあ、やっぱり」

「作戦が成功した後にしろ。そうすれば時間を作つてやる」

「了解。それじゃ俺は寝るとするぜ」

ああ、とガブリエルが返事をする、居室に隣接したベッドルームへと部下は去つた。その後ろ姿が扉の向こうに消えるのを見届けて、彼はもう一度窓の外を一瞥した。

数秒、自分の実在を確かめるように景色を眺めると、彼もまた専用の寝室へと踵を返

す。

精緻な装飾が施された扉を押し開き、中へ入り――

「……………何をしている」

そこで一人、平伏していた人影に、ガブリエルは問いかけ。

「……………私が、今宵の伽を務めさせていただきます」

女は、静かにそう答える。

「ほう？」

そう言われて、ガブリエルは女の容姿へと意識を向けた。

成る程。確かにエキゾチックな魅力のある美女だ。さしものガブリエルでも少々目

を見張る。

その身に纏うネグリジエは限りなく薄く、女性として最低限の箇所を下着で隠してい

るのみ。

灰青色の髪は後ろで結えられており、艶のあるうなじが露わになっていた。

(玉座の間から上階には誰も入るなど言っておいたはずだが……………まあいい)

後ろ手に扉を閉め、ガブリエルは豪奢なベッドへと腰掛ける。

「誰の命令だ？」

「いえ……これが私の役目であります故」

「そうか」

短く答えて、体をシルクのシートへと投げ出す。

数秒の後、失礼しますと一言断つてから女がベッドの縁に腰掛けた。

その両手が背中へ伸び、髪留めを外す様をじつと眺める。

（——なんと興味深い。人工知能とは、ここまでのことができるものなのか）

心の中で、ガブリエルがそう呟いた時。

十分な長さの量であったアッシュブルーの髪の毛のうちから、女が素早く一本のナイフを引き抜いた。

「シッ!!」

振り向きざま、それを心臓へ穿とうとしてきた際の殺意に満ちた顔にほうと感心する。

すなわち十分な余裕があることに他ならず、容易に突き出された右手首を押さえつけ、さらにはもう一方の手で首を掴む。

女の脛骨をしつかりと掴み取ったガブリエルは、そのままベッドの上に押し倒すと動きを抑えた。

「ぐっ！」

苦悶に顔を歪めながらも、なお女はらしからぬ膂力でナイフを突き立てようとする。それを寝技で押さえつけながら、ふむとよく鍛えられた女の体を見下ろす。

筋肉の付き方が暗殺者のそれではない。全身に満遍なく鍛錬の軌跡が見られ、恐らくは騎士であろう。

「誰の命令だ？」

今一度、同じ言葉で問いかける。

僅かに首の骨を掴む指に力を入れ、眉根を寄せた女は、しかし剣呑な目つきで睨みつける。

「私自身の……意思だ」

「では、上官は誰だ」

「……………いない」

大した胆力だ。これは恐怖で屈する類の精神構造ではないと察する。

少なからず、ガブリエルは驚いていた。

ヒューマン・エンパイアのユニットは、禁忌目録という無数の規則に縛られている。ラースの目的はそれをも凌駕する自律的思考を持った人工知能の想像だが、ダーク・テリトリーにも同様に掟があつた。

それはただ一つ、《力で奪え》。より優れ、より強いものがそれより劣るものを支配する。

完全なる弱肉強食の世界。ルールに則つて言えば、その頂点にいる自分に反逆などするはずがない。

（この女の中で私よりも別の者が上位にいるということか。だから命令も受け付けない。それは一体誰だ？）

おそらく、女の上官は十人の將軍のいずれかであろう。

一度、はつきりと力を示し、上下関係を示す必要があることを理解する。

刹那の間に数多の思考をまとめ上げたガブリエルは、再び女を見下ろして質問をした。

「何故余を狙った。金を積まれたか？ 地位を約束されたか」

「——大義のためだ！」

「ほう……？」

「貴様が戦乱を惹き起こせば、歴史は繰り返す！ 二度と弱者が虐げられる、あの鉄血の時代に戻してはいけないのだ！」

先ほどよりも強く、ガブリエルは驚きに包まれる。

ヒューマン・エンパイアの間人ほどではないと言えど、この女も覚醒には至らず、ルルに縛られているはずだ。

だというのにこれほどの自我を発する所以はなんであるかと、その瞳を覗き込んでみる。

強い敵意と覚悟。害意に染め上げられたその色の裏に悪されているのは——

（——ああ、そういうことか。ならばもう、用はない）

もはや、これ以上時間をかける価値がないとガブリエルは判断した。

そして、一秒の逡巡もなく、女の首を掴んでいた左手に力を込めていく。

「——ッ!!」

大きく目が見開かれ、口から音もなく絶叫が発せられた。

途端にもがき始めた体を押さえつけながら、女の首筋や骨が破壊されていく感覚を堪能する。

本当に仮想世界なのかと思えるほどのリアルな感触に驚きながら、徐々に力を強めていき。

女の抵抗が少し弱まった瞬間、一気に縊り殺そうと体を力ませ――

キユイツ！

突如として現れた異音に、極限まで高ぶっていた感情は阻害された。

反射的にそちらを振り向く。

すると、寢室にも一つだけ備わった窓が開いており、そこに一羽の鳥が留まっていた。嘴から尾羽に至るまで、全てが純白のその鳥は、現実世界のツバメに酷似している。

「……興が削がれたな」

呑気に囁っている白ツバメに肩透かしを食らった気分していると、不意に女を見下ろす。

既に死んでいた。だらんと脱力し、涙を零す瞳からは光が消え失せている。

どうやら驚いた拍子に、殺してしまつたらしい。勿体ない事をしたと無感動に考える。

「……………」

だが、それは一瞬のことだった。

女の額から、虹色の雲が出現していたのだ。

それは幼い頃、魂の所在を探求し、その一環として幼馴染の少女を手にかけて見たのと同じもの。

アリシアというその幼な子を殺して以来、ずっと求めてきた光を、ガブリエルは大口で頬張った。

恐怖、苦痛。それから生じた苦味。

無念、怒りから絞り出される酸味。

その後、ガブリエルは不思議なものを味わった。

小さな二階建ての建物。その庭で遊んでいた、様々な種族の子供達が笑顔で駆け寄ってくる。

その幻覚が消えると、次に女を優しく抱擁する、屈強な胸板が浮かび上がり……

『愛して……います……閣下……』

女のかすれた声。魂の最後の一片が残響し、そして、消えていった。

それら全てが作り出した、えも言われぬ甘露に、ガブリエルは打ち震える。

(ああ、なんと……なんと、素晴らしい……！)

子供の頃以来、ようやく味わえたそれ。

死にゆく女が最後に凝縮させた全てを奪い尽くし、感謝するように骸を抱きしめる。また、その歓喜はより多くの魂——愛を味わいたいという、底なしの渴望でもあり。

「もつとだ……もつと、殺さなくては……」

誰に聞かせるでもなく、己が獣欲を曝け出し。

ガブリエルは、密かに哄笑を上げていた。

そんな男から遠ざかるようにして、窓辺にいた燕が飛び立っていく。

暗黒界に似つかわしくない、穢れを知らぬ白い翼をはためかせて、オプシディア城の頂へと。

天を穿つ刃のように尖った、城の天辺。

もつとも空に近き場所へ至った白燕は、そこに佇む男の差し出した指先へ停まる。

「苦勞様です。よく囀りしてくれました」

キィ、と一声鳴いた白燕は、翼を折り畳んで丸くなる。

直後、小さな体から輝きが発せられ、丸い光の玉に変じて男の顔へ向かった。

閉じられていた右の瞼の内側へ溶け込むように消えていき、数秒間待った末に男は目を開く。

そこには燕に変じさせていた眼球が、確かに収まっていた。

「さて……間一髪、といった所でしようか」

言いながら、両手で抱えたものへと視線を投じる。

「助けられてよかった。カーディナル様への報告を済ませ、直ぐに様子を見にきたことは正解でしたね」

「う……………」

僅かに呻いたその女——リピアは、苦悶に顔を歪めていた。

果たしてそれは、恐ろしき皇帝の冷酷な瞳を夢見てのことか。

傷んでいる首に障らないよう、後頭部と膝裏を手で支えたスワロウは、微かに苦笑する。

（暗黒術師のミニオン作成コマンドと、アドミニストレータの編み出したフラクトライトのコピー技術を掛け併せた身代わり人形とのすり替え……どうやら、上手くいったようです）

誰にも知られず、ガブリエルをも欺いて一人の女を助け出した使者は安堵の溜息を吐いた。

同時に、カーディナルに仕える身でありながら魂を冒瀆する術を使ったことへの、小さな悔恨が心を突く。

(しかし、彼女の命……唯一無二のフラクトライトに比べれば、私の罪悪感など軽いものに他ならない)

アンダーワールドで唯一、スワロウはこの世界の人間が定めた法に縛られない。

故にこそ、創造主より課せられた役目と、数百年に及ぶ学習によって己を律してきたのだ。

しかし同時に、悪意ある現実世界からの介入によって人の命が脅かされるのであれば、躊躇なくあらゆる手段を用いる覚悟がある。

それを迷いなく実行する程に、人界と暗黒界という分け隔てなく、彼にとってこの世界の人々は救うべき存在だった。

「……あるいは私も、彼らの言う真の人工知能に到達しているのかもしれないね」

そんな自嘲じみた皮肉を眩きながら、指を鳴らす。

忽ち、夜風に当たるには薄着過ぎるリピアの体が外套に覆われた。

加えて彼女の首へ簡単な治癒術を施し、傷を癒す。

「……閣、下……」

「ご安心ください、レディ。一度救った以上、私も責任をもつてなすべきことをなしまししょう」

そつと囁きながら、スワロウは背後へ開いた光の門へと姿を消した。

大義の為に

「……まずいことになった」

自室で一人、イキシアは低い声で呟く。

その顔には巖のように深い皺が刻まれ、蒼を通り越して白色になっている。

心に渦巻くものを抑えるかのように、じつと窓の外の風景を注視し続けており。

繰り返し脳裏にフラッシュバックするのは、先刻の玉座の間での一件。

(予想よりずっと早く、皇帝ベクタが降臨してしまった。これまで長い間積み重ねてきた工作が、全て無に帰するほどの事態だ)

何年もかけて調査を行い、シャスターと議論を重ね、騎士団内でも説得を行ってきた。それが、ベクタの宣言一つで何もかも覆ってしまい。既に戦争の準備が本格的に始

まっている。

元より明日にもその時がやってくるかもしれないという、常に綱渡りの心持ちではあつたが……

「よもや、和平に踏み出そうとしたこの瞬間ときだとはな……これも運命か」
もはや、一刻の猶予もないことは明白だ。

イキシアの目論見は、シヤスターを《十候》の頂点に君臨させて闇の民の意見を束ねようというもの。

しかしそれは、これまで一人の絶対的強者がいない状態だったからこそ成功する可能性のあつた話。

ベクタが帰還した今、それは叶わぬ泡沫の夢と化してしまった。

「あと残されている手立ては………皇帝を斬る、か」

暗黒領域の掟はただ一つ。力こそが絶対の正義。

すなわち、皇帝よりも強い力を持つと証明できる者がいれば、必然的にその者が次の王となる。

「だが、そんなことは可能なのか……？」

あらゆる術を消し去り、神に相応しい神器と天命を備えた闇の化身。

そんな相手を万に一つでも殺せる可能性があるのだろうか、イキシアは疑問を抱

く。

これで、相手が他の《十候》であればシャスターの敵ではないと断定できた。しかし。あの場にて参列し、直にベクタを見た今ではその確信も揺らいでいる。

(何より恐ろしいのは、強大な存在感や纏う武具ではない。あの目だ)

あらゆる命に価値を見出さぬ、硝子の目。

呼吸をするようかのような自然さで、容易に全てを蹂躪するだろうと思わせる、死の瞳だ。

そこから感じられる、未来をも飲み込んでしまいそうな漆黒の意思を、イキシアは最も警戒していた。

(それに、あの側近の二人も油断ならない。特に、従者らしきあの女はどこか恐ろしいものを感じたが……)

いずれにせよ、皇帝ベクタを玉座より退けねばこの世界に未来はないだろう。

「こうなれば、スワロウ殿にも協力を仰いで——」

「私がどうかしましたか？」

驚きに眉間の皺を解き、背後へと振り返る。

いつの間にか、部屋の中に白い使者が微笑みを湛えて佇んでいた。

「スワロウ殿！ 来ていたのか！」

「ご無事で何よりです、イキシア様。こうして再び生きて会えたことは奇跡でございませぬ」

「ああ。まさか皇帝ベクタがこんなにも早く降臨するとは……」

「私としても予測を大きく上回る事態でした」

相槌を打ちながら、スワロウは抱えていた人間大のものをソファへと横たえた。

訝しげな顔をして、イキシアもその正体を知ろうと歩み寄り……

フードの中から除いた知己の女性の顔に大きく目を見開く。

「リピア!? どうして彼女がこんな所に!？」

「こちらに伺った際、ベクタの居室より救出しました。どうやら暗殺を企てたようです」

「なんだと……!？」

「危うく、その魂を喰らわれてしまう所でした。このようなうら若く、美しい女性の命が手折られてしまうのは見過ごせません」

「そうか……我が友を救ってもらい、心から感謝する」

ソファの前で跪くと、乱れたりピアの前髪をそつと横に流しながらそう言う。イキシアにとって、彼女は女でありながら無二の友。心底から安堵の笑顔を浮かべる。

一頻り、穏やかな寝息を立てるリピアの様子を確認するとイキシアは立つ。

元の颯然とした雰囲気纏うと、スワロウへ真剣な眼差しを送った。

「改めて、感謝したい」

「紳士として当然の事をしたまで。しかし……これはシャスター様のご指示で？」

「いや、そんなはずはない。確かにベクタの存在を脅威に感じてはいるだろうが、ここまですぐ短絡的に事を起こす御方ではない」

「では、彼女の独断の可能性が高いと」

「ああ。リピアは私と同じか、それ以上に閣下のご意志に心酔していた。それ故の暴走だろうか……」

「問題は、〃暗殺を仕掛けた〃という事実が生まれてしまった事でしょうね」

スワロウの言葉にうむ、とイキシアが頷く。

暗殺の成功率が最も高いのは最初の一度だ。それ以降は常に警戒されてしまう。

リピアの心情を思えば決して間違いだと断ずることはできないが、有効な手札を失ったことには変わらない。

「これで奇襲は困難となった。閣下と慎重に策を練らなければ……いや、その前にリピアの事を伝えるのが先か………」

既に熟考を始めているのか、口元に手をやりながら呟き始めるイキシア。

そんな彼と、眠っているリピアをスワロウが薄い表情でしばらくの間じつと見つめ。

「……いえ。シャスター様にリピア様のことをお伝えするのはやめておきましょう」

「何? どういうことだ?」

突然の発言に、イキシアは少しの驚きと疑問を抱いて問いかける。

そんな彼の目を、スワロウもどこか深いものを湛えた眼差しで正面から見つめ返して。

「イキシア様。貴方に、*“悪人”*となる覚悟はありますか?」



ベクタの降臨から二日後、暗黒軍は全ての進軍準備を完了した。

そして今、玉座の間には再び十人の諸侯と各陣営の幹部が揃い踏みし、皇帝の前に跪いている。

彼らを見下ろしながら、ガブリエルはさて誰が問題の「閣下」であるかと思考する。

(この暗黒領域のルールは、力こそ絶対。それが武力や権力を指すのであれば、私より上のユニットは存在しないはず。だということに、あの女アサシンは「閣下」の為に私を殺そうとした)

そして間違いなく、自分を除けば最高権力者に位置するこの《十候》の中にその人物はいる。

ガブリエルは、あの女アサシン同様に自分へ叛意を抱く諸侯を炙り出し、処分するつもりでいる。

この場で、一昨日まで暗黒領域最強の一角であつたものを殺すことで己の力を示し、残る者達に絶対の恐怖と忠誠を植え付ける為に。

(――奴を今日、ここで斬る。もはやその道しか残されてはいない)

また、同様にガブリエルを誅せんとするシャスターも心の内で殺意を研ぎ澄ませていた。

二日に及ぶ思索の果て、強大で邪悪な飢えを垣間見せる瞳のあの男を殺すしか和平を實現する道はないと。

たとえそれで自分が命を落とすことになろうとも、既に後の未来を託す義息がいる。

唯一の心残りは、結婚をしようと言つたばかりの愛しい女がここ数日顔を見せず、会えなかつたことだが……

(……いや。もしこのことを打ち明ければ、あやつは共に死のうとしたらう。だから、

これで良かったのだ)

それに、彼女にはイキシアがいる。

本当の息子のように育ててきたあの男が、リピアに対して友愛の他に淡い心を持つていたことは知っていた。

それを自分のために消し去ったことも。あの二人であれば良き明日を作っていけるだろうと、そう自分を納得させる。

「フウ……………」

心構えは十分。頭を垂れたまま、深く呼吸を一つ。

床に置いた愛剣に手を触れさせ、皇帝ベクタとの彼我の距離を確かめた。

初動は誰にも気取られずに。心を無に、されど剣には極限の意思を。

かつて血塗られた問答の末、自ら斬り殺した師より受け継いだ心意の刃を研ぎ澄ませ。

「——時に。短剣を髪に忍ばせ、私の寝床に忍び込んだ者がいた。一昨夜のことだ」

まさに、右手が鞘より剣を解き放とうとした瞬間だった。

前触れなくベクタの口から放たれた言葉に、シャスターは咄嗟に動きを止めた。

同時に周囲が大きくざわめく。ある者は息を呑み、ある者は唸り、ある者は率直に驚嘆の声を漏らす。

その中で、いつでもベクタへ斬りかけられるよう殺意を解かないまま、シャスターは考えた。

（一体、誰が？ オーガやゴブリン達等ではあるまい。奴らに暗殺は不向きだ）

では、異形の四種族が埋める五席を外した、残る諸侯か。

拳技を至上とするイスカーンではあるまい。とても姑息な手段を用いる小僧ではないのだ。

戦という大儲けの機会を前にした商業長レンギルもあり得ない。では暗殺者ギルド頭目、フ・ザか。

これも違うと断定する。力に恵まれなかった弱き者達が結集したあの一族には毒と

針などの暗器のみを用いる掟がある。

もつとも怪しいのは、権力欲の塊であるデー・アイ・エルだが……それならば術師を差し向けるだろう。

ここまで考えて、残るのはシヤスター自身のみ。

だが、それはあり得ない。自分はこの叛逆の意思を果たすのは己の剣でと決めていた。

この二日、誰にも……それこそイキシアにさえ伝えてはいないのだ。それに彼はシヤスター以上に慎重な――

（――いや。いや、まさか）

ふと。冷たい者が背筋を撫でる。

瞬くほどの刹那であらゆる可能性を考え、削ぎ落とした結果残った、一つの仮説。

それがまるで、冷たい毒のように体を駆け巡り、剣を握る指の感覚を臍げにしてしま

疑問。危惧。恐怖。そして、ある種の確信へと思考が至つたその時。

「我はその首謀者を詮議しようとは思わぬ。強欲大いに結構、それでこそ暗黒の民だ。これからも存分に我の首を狙うがよい」

絶対の自信と余裕を感じさせる薄笑いを浮かべたベクタの二言目に、更に玉座の間がざわつく。

それをニヤニヤと見つめる、皇帝の側に仕える騎士と従者の笑みがシャスターの神経を逆撫でした。

だが、そんな事に一片の意識を割くことすら惜しいほどに、今の彼は焦燥に包まれていたのだ。

「だが、その行いには代償がある事もまた、心しておくが良い。たとえば……このようにな」

ベクタが長衣の中から片手を上げた時、玉座から見て左側の扉が突然開く。

そこから一人の召使いが、銀の盆を携えて玉座の間に入ってきた。

何か、四角いものを黒い布で覆い隠して乗せたそれを、ベクタの足元へ置く。

それから恭しく一礼し、音もなく下がっていくのを皆が見届けた。

張り詰めた雰囲気の中、啞うベクタが長靴の足先で床に広がる黒布の端を踏み、自分の方へ引いて取り払った。

そして、隠されていたものの正体を知った時。

「リ…………ピ……………」

ア、と。

氷の箱の中で、永久に眠りについた愛する女の顔に。

掠れたシャスターの眩きが、小さく零された。



シャスターは、リピア・ザンケールという女に未来を見ていた。

彼女が親兄弟をなくした子供達を受け入れる養護施設を営んでいる事は、随分前に知っていた。

人族、ゴブリン族、オーク族……五種族分け隔てなく平等に愛するその心をこそ愛した。

だからこそ自分の考えをイキシア以外に唯一打ち明け、共に新たな時代を作っているかと考えていたのだ。

「
」
故に、目の前にある光景は。

シヤスターが、ほんの刹那の前まで抱いていた、未来へ繋ぐ意思を失うには十分で、己が心で理解するよりも早く、全身が暗い暗い感情で満たされていくのは必然だった。

（
——
殺す）

殺意。

たとえあらゆるものを犠牲にしようとも、あの男だけは必ず殺す。そう決断してから、剣を引き抜くまでには半秒もかからなかった。薄い影のようなオーラに包まれた全身をぐつと撓め、がばりと顔を上げる。その目は、おおよそ人の発するものではない真紅の光で満ち溢れて。

一秒が経過した時、既にシヤスターはベクタまでの距離を五メートルにまで詰めていた。

「殺ッ!!」
シヤ

全身全霊、生涯最速にして最強の一撃。

実体となって身の内より溢れ出ささんばかりの憎悪と嘆きが注ぎ込まれた、殺の心意。

それによって、愛刀オボロガスミ朧オホロガスミに長年暗黒騎士達が解明しようとした完全武装支配術をも発動させた。

刃としての形を失い、霧状になった刀身が神速でベクタへと迫る。

(ああ、こいつか)

それを、頬杖をついて静観していたベクタは酷く冷淡に見定めた。

不安は一切存在しない。膨大なステータス、纏った武具の力、そしてあらゆるコマンドを無効化する特殊設定。

スーパーアカウント《暗黒神ベクタ》に付与されたあらゆる特性によって、シヤスターの一撃が意味をなすとは思っていなかったのだ。

だが、ガブリエルはある一つの事実を知らない。

彼がたかがVRMMOの延長戦だと思っているこの世界が、人の魂と同質の光量子で構成されており。

憎しみによって研ぎ澄まされたシヤスターの剣が、STLを通してそのフラクトライトにまで届くのだという事を。

(一番使いやすそうなヒューマン型のリーダー・ユニットを失うのは少々惜しいが、やむを得まい)

どこまでも冷静な思考でそう考えながら、腰の剣へと手を伸ばす。

そんな二人の一瞬の攻防を、他の九人の諸侯も見守っていた。

暗黒領域は力こそ全て。それが武力であれ策謀であれ、あらゆることに勝ってきたからこそその諸侯。

そんな彼らの胸中を満たしたのは、驚きではなく、もうここで仕掛けるのかという感心だった。

異形達は皇帝とやらの実力を見極めようと、獣の目で静観し。

同じ技に生きる者として、イスカーンは一度抜いたのなら切り捨てろとさえ考えた。シヤスターとは因縁浅からぬデー・アイ・エルでさえも、動かなかった。

皇帝が死ねばそれでよし。そうでなくとも深手を負うだろうシヤスターを始末して自分が女王となろうと画策し、傍観した。

……………だからこそ。

それは、誰にとつても予想外の事態だったのだ。

「フツ——!!」

部屋の隅に立ち並ぶ、騎士団内でも屈指の実力を誇る序列持ちの暗黒騎士達。

その先頭にいた男が、シヤスターとほぼ同時に抜剣し、玉座に向かって駆け抜け。

大上段に愛刀を振り上げたその背中を、地面を削るような軌道を描いて一刀両断したのだから。

「ガッ——!!?」

シヤスターの苦悶が、玉座の間に木霊する。

その男の一撃によって、宙に浮かんでいた体が重力を思い出したように床へと失墜した。

鎧と床石が衝突するけたたましい音が反響し、今度こそ広間の全員が息を呑む。

「ほう……?」

それは、ガブリエルやヴァサゴ、ペーリツシュでさえも。

誰しもの注目を一身に浴びて、その騎士——イキシアは、ゆつくりと振り上げた剣を下ろした。

そして、自分の足元に転がっているシヤスターを冷酷な瞳で見下ろす。

「イキ……シ……ア……?」

「……………」

シヤスターは、心を埋め尽くした憎しみさえ凌駕するような驚きで義息を見上げる。

そうしているうちに、傷口からその体が徐々に石灰色に変色を始めた。「な、ぜ……お前、が……」

「……お別れです。我が師、我が父よ」

たった一言、一切の情が乗らない声によって告げられた言葉に瞠目し。

ビスクル・ウル・シヤスターは、瞬く間に物言わぬ冷たい石像へと姿を変えてしまった。

義父が命潰える様を最後まで見届けて、イキシアは毒々しい色の刃を鞘へと収める。

「誰か。コレを運び出せ」

「……………はっ」

あらゆる陣営のものが驚愕で困惑する中、二人の騎士が歩み出た。

序列付き騎士の側付きの鎧を纏ったその暗黒騎士は、素早くシヤスターの石像に近づくと担ぎ上げる。

「城の外へ。粉々に砕き、その愚かさを地獄の底で噛み締めさせるのだ」

冷徹なイキシアの命令に、騎士達はそつと頷いた。

「……………」

彼らへと小さく首肯を返したイキシアの目に、一瞬何かが過ぎる。

それは他の者に見抜かれる前に消え、扉から出て行く騎士達に背を向けるとベクタに向き直った。

自分を興味深げな目で見下ろす皇帝に、その場で恭しく跪く。

「我らが長の取り返しがつかぬ無礼。どうか、これにてお納めいただきたい」

「……面白い。貴様、名はなんと申す」

「イキシア・イヴェガン。元暗黒騎士序列二位、兼参謀役。今この時より、皇帝の慈悲により暗黒騎士団の新たな長としての地位を賜りたく存じます」

「なるほど、諸侯の椅子が目当てか。いいだろう、貴様が騎士達を従えるがよい」

「はっ、ありがたき幸せ」

淡々と答えるその様子に、やはりこの世界の人工知能は侮れぬものだとかブリエルは冷笑する。

同時に、あらゆる者はイキシアの行動が、シャスターの地位を狙つてのものだったと理解した。

その心酔ぶりを知っていたディーやイスカーンは一瞬疑問に思うも、欺きと裏切りなど常だと納得する。

「して。新たな暗黒騎士団長よ。余にひれ伏し、何を望む？」

「——武功を。あらゆる鬪争と、無上の誉れを」

「いいだろう。その力、存分に余の役に立てるのだ」

「はっ！」

力強い返答を、床へと叩きつける。

——俯いた彼の顔に浮かんだ、あらゆる苦渋と忿怒、自責の念を、誰も知ることはなく。

その表情を能面へと戻した彼が立ち上がり、新たに諸侯達に並んだ。

(——殺気。格別に濃い、嫉妬と憎しみに塗れたもの。私が閣下を仕留めたことを、誰かが恨んでいるのか)

その最中に感じた殺意へ僅かばかり同じものを返すと、まるで闇に紛れるように消え失せた。

新たな十人目として左端へ陣取るのを見届けたベクタは、大仰な仕草で立ち上がる。

「予定通り、一時間後に進軍を開始する。各自、準備せよ」

それだけを告げて身を翻した皇帝の背中に、誰もが跪いたまま首肯する。

『皇帝陛下、万歳!!』

次の瞬間、数百の喝采が大音声となって玉座の間を揺らしたのであった。

未来への布石

イキシアに斬られた時、シヤスターの中には不思議な満足があった。

それは彼が二十歳かそこらの若輩であった頃、同じように師を斬つたことに起因する。

先代の騎士団長でもあるその男は荒野にて最強の整合騎士、ベルクーリ・シンセシス・ワンと相見えた。

最強と信じた師が打ち合えたのは、たった一合。それだけで剣を握る腕が飛んでいった。

その時、師は見出したのだ。代々受け継がれてきた《無想の剣》とは対極にある、極限の《意思の剣》を。

これをシヤスターに受け継がせるため、師は己の命を賭した。

師が放った「心意の刃」にて消えぬ傷を頬に受けた代償に、若きシヤスターは見事そのとば口に立ったのだ。

(憎悪の念に満ちた、殺意の剣……それはかつて見た、奴の持つ強固な信念とは相反するものだった、か)

全霊を賭して託されたものを、シヤスターは最後の最後に忘れてしまった。

だからこそ、ただ一人己の技を受け継がせることを許した義息に斬られるならば本望とさえ思えたのだ。

息子の本心など知れるはずもないが、そんな納得と、仇を討てなかったことへの無念と共に闇へ魂を落としていき。

「——システム・コール。デイセーブル・ディープ・フリーズ・コマンド。ID：4

—8801—

流麗なその詠唱によつて、蘇つた。

昏い深淵に沈んでいた意識が、自分の体の中へ吸い込まれていくように奇妙な感覚。石となつた心の臓に血が通い、無類の寒さに侵された全身へ力が戻つていく。

パキ、パキ、という自分が石像から戻つていく音を聞き届けて……うつすらと目を開いた。

「……ん……………」

「閣下！ ああつ、よかつた！」

ぼやけた視界の中で、何者かが言葉紡ぐ。

続けて全身に軽い衝撃が襲いかかり、それによつてようやく意識をはつきりとさせた。

「……リピ……ア……………」

「はいつ、リピアですつ！ よくぞ、よくぞ無事にお戻りに……！」

「お前、なのか……………」

自分を抱きしめて泣きじやくる彼女の肩に手を置き、ああそうかと悟る。

「私は……地獄へと、落ちたのだな……………」

「いいえ。貴方はまだ生きております。イキシア様の尽力により、九死に一生を得まし

た」

突然返答した謎の声に、緩慢な動きで顔を上げてそちらを見る。

すると、床に横たわっていた己のすぐそばに立つ、頭髮から靴に至るまで純白の男がいた。

しばらく朦朧としていたものの、男を見続けていた瞳が徐々に驚愕へと見開かれていった。

「お、お前は……!?!」

「おや。こうして顔を合わせるのは初めてのはずですが。私のことを既にご存知で?」

「古文書の、『神の使者』……………!?!」

「……………ああ、なるほど。《鉄血の時代》の。当時の騎士団長様には、戦乱の平定にご協力いただきましたね」

懐かしいことです。そう言つて微笑む男に、シヤスターは一つの確信を得る。

暗黒騎士団には、《暗黒將軍》の座に着いた者のみに受け継がれる手記が存在する。

それは血塗られた《鉄血の時代》を生きた、当時の騎士団長のもの。

連綿と受け継がれてきた手記には、来る日も来る日も終わらぬ殺戮と絶望の日々が綴

られていた。

悲惨という言葉だけでは到底言い尽くせぬかつての時代に、シャスターも涙を流したものだ。

だが、ある時一人の“救世主”が現れた。

原初より全てを観測する者。創造神達により、ただ一人この世界に残された傍観者。課された役目の清純さを表すかの如く、その男は全てが純白の紳士であったというが。

まさに今、伝承の人物に巡り合った衝撃がシャスターを驚かせていた。

「では、改めて自己紹介を。私はスワロウ。この素晴らしきアンダーワールドを描き上げた御方より生み出された者です。以後お見知り置きを」

「本当に……貴殿は、神の使者だというのか……」

「少々我が身には分不相応な呼び名ですが、ええ。破滅を嫌うと言うのなら、違いはありません」

躊躇なき肯定が、その言葉の真実性を助長する。

呆気に取られていたシャスターだったが、すんと胸の中から聞こえた鼻を吸る音で我

に返った。

極力優しい手つきを心がけて彼女の両肩を掴むと、引き剥がしてその顔を今一度見る。

「そうだ、リピア！ お前、死んだのではなかったのか!? ベクタの暗殺を企てて……！」

「私も、死を覚悟しておりました。閣下の理想に殉ずるのであれば、悔いはないと……！しかし、この御方に救われたのです……！」

「なんと……?! い、いやしかし、私は確かにお前の首をこの目で……」

「それは私が作った身代わりでしょう。ミニオンと同じ土塊の人形に仮初の魂を吹き込んだのですが、今頃消滅している頃合いでしょね」

すかさず差し込まれた情報に、再び間抜けのように大口を開いてしまう。

そんなことは、暗黒領域最強の術師であるデー・アイ・エルですら到底手の届かぬ神業に違いない。

まさしく神の使者。その御業を唯一行使することを許された、尊き存在。

シヤスターは、徐に下半身を起こすとリピアから少し離れる。

そして、じつと下からスワロウの目を見つめ……両の握り拳を床につけると、深く頭を下げた。

「心より……心より、感謝する！ 愛しき女の命ばかりか、愚かな行いをした我が身まで救っていただき、敬服の念に絶えない！ この御恩は生涯忘れぬと、我が師の名に誓おう……！」

「閣下……！」

一筋の涙を零しながら、全身を震わせて訴えるシヤスターに、感極まったりピアが両手で口元を覆う。

そんな彼らに、優しい微笑みのまま膝をついたスワロウはそつと彼の肩に手を置いた。

「顔をお上げください。勇敢なる騎士、シヤスター様」

「しかし……」

迷いのある表情で顔を上げたシヤスター。スワロウは少し苦笑いしつつ言葉を返す。「私はすべきことしたまで。感謝をするというのであれば、どうか勇敢な貴方の参謀へ贈っていたいただきたい」

「参謀……そうだ！ イキシアは！ 彼奴は無事なのか!?!」

次に男の口から飛び出した言葉に、少しの間スワロウは動きを止めた。

僅かばかり目を見開き、驚きの眼差しで心底不安げな顔のシヤスターを見る。

「お怒りにならないのですか？ 貴方を背中から斬ったのですよ？」

「これでも私は、第二の父のつもりであいつを育ててきた。聡明なあの子が、意味もなく凶行に及ぶとは思わん」

第一、地位や名誉を理由に自分を斬ったというのであれば、石に変えた意味が分からない。

なんの因果か、生き延びてしまった今であれば、あれが全て故ある行動だと確信している。

「……………おみそれしました。どうやら私が解析していたよりもずっと、貴方は素晴らしい人物のようだ」

「……………いや。未来への希望を捨て、恨みに走った私に貴殿のような人物からそう言われる資格はない」

「それは私も同じです。かつて、許されざる行いをしてしまいましたから」
「貴殿が？」

信じられないという面持ちのシヤスターへ、先程より深い苦笑いで頷く。

これほどの聖人が侵した罪とは如何なるものかと考えていると、不意にスワロウは真剣な表情をした。

「貴方の仰る通り。あれは全て、シヤスター様とリピア様の死を装い、皇帝ベクタの目を欺く為の策略でございます」

「やはりか……！ となると、イキシアには辛い役目を負わせてしまった……！」

「立案したのは私です。恨むならばどうかこの身を」

「む………いや、やめておこう。命を拾ってもらったのだ、文句など言えようはずがない」

「………私もです」

これしきのことのでめくじらを立てては、イキシアの決断を踏み躪ることになってしま

う。

シヤスターは、そんな恥晒しになるつもりは毛頭なかった。

リピアも同じ考えを示し、スワロウに向けてはつきりと頷いてみせる。

両者の揺らがぬ意志を感じ取り、スワロウはふつと微笑んだ。

長い間、多くのことを「傍観」したが、生き続けてきたことは間違いはなかった。

彼を含め、多くの眩しい輝きを持つ魂の持ち主達と出会えたのだから。

(……)これ以上自分を貶めては、彼らへの侮辱になってしまいますね)

その感動によつて己を納得させると、今一度真面目な雰囲気を纏い直す。

「では、本題に入りましょう。現在、暗黒騎士団はイキシア様が新たな將軍となり、ベクタによる介入に目を光らせています」

「奴め、自ら獅子身中の虫となつたのか。最も辛い役回りを受け持つのは騎士学校の頃から変わらないな……」

「ああ、彼奴は昔からそういう男だ。……して。そうまでして我々を生かした理由とは？」

「全て、ご説明させていただきます」

そしてスワロウは、彼らを救出した目的を明らかにした。

「一つは、ベクタへの切り札として。既に死人となつたお二人への警戒はある程度薄れているでしょう。戦乱に乗じ、あの者をこの世界より退ける策の一つになっていたきたい」

「それはむしろ、望む所だ。リピアが生きていると知つた今、我が剣に曇りはない。今度こそ奴を斬つてみせよう」

「力及ばずながら、私も。今度こそ使命を全うしてみせます」

「待て、リピア。お前には二度と同じことはさせんぞ」

「しかし！」

「私に、同じ絶望を再び味わう可能性を考えろというのか？」

「う……それは……………」

自分の行動の性急さは理解しているのか、リピアは押し黙ってしまふ。

強い眼差しで彼女を諷めるシヤスターへ、スワロウはひとつ咳払いをして意識を促した。

「ご安心を。これは三つの理由のうち、最も弱いものです。本命は別にあります」

「とうとうと？」

「残る二つのうち、一つは人界と暗黒領域の戦争の後に果たしてもらふことになるでしょう」

「ふむ……………」

しばし、瞑目してその言葉の意味を熟考する。

十秒とかからずして、何かに思い至りハツと開眼した。

「そうか。和平交渉か」

「その通り。私は本来人界側に与する存在ですが、あらゆる策を講じてベクタを倒し、戦乱を終結させる準備を進めています。シヤスター様にはこちら側の代表となつていた

「だきたいのです」

「なるほどな。あい分かった、元よりそれは私の望みでもある。喜んで引き受けよう」
「ありがとうございます」

快く引き受けた彼へ、スワロウは一度感謝の言葉を述べた。

それから、不意にどこか柔らかさを残していた視線を鋭いものに引き締めて。

少しの間を置いてから、やや重々しい口調で最後の理由を語った。

「最後の理由。これはシャスター様とリピア様、両方に対することです」

「ほう……?」

「私にも、ですか……?」

「ええ………お二人は、既に知っていますね? かの邪竜——ロヴィナのことを」

その瞬間、カツと目を見開いたシャスターから圧倒的な覇気が発せられた。

間近でそれを受けたりピアは思わず尻餅をつき、スワロウは揺れた髪を為されるがままにする。

しばし、シヤスターはそれだけで子ウサギならば圧殺してしまえそんな眼光を放つていた。

そのうちリピアが怯えていることに気が付き、徐々に威圧感を収めると深く息を吐いた。

「……失礼した。少し、気が動転してしまったようだ」

「無理もないでしょう。しかし、その反応から貴方がどれほどの存在を危険視しているかは理解させていただきました」

「ああ……やはり、伝承は本当に？」

「残念ながら、既にその意思は覚醒している様子。その断片を人の身に潜り込ませ、神に等しい者達を操っています。覚えがありませんか？」

「覚え……」

シヤスターは首を捻り、二度ベクタと見えた時のことを思い返す。

「依代とされた者は、血よりも赤い瞳を得ると言います」

「……あ、あの女か！」

ベクタの側に仕えていた執事服の麗女を思い返し、大きく声を上げた。

騎士に扮してリピアと共に彼を運び出した時に、ペーリツシユを見たスワロウも重く頷く。

「終焉は間近に迫っています。ベクタは降臨し、人界では四聖竜の力を得た騎士達が目覚めています」

「それは真か!？」

「ええ。そして、戦乱が始まってしまえば……………」

そこから先は聞かずとも、容易に察することができた。

蔓延る阿鼻叫喚。渦巻く怒りと憎しみ。

絶望の元に血の雨が降り注ぎ、その破滅は災厄を呼び起こす。

神々から世界の理を読み解く術を与えられたとされるスワロウが語ったとなれば、それはもはや確定した未来だ。

「かの邪悪が復活した時、一人でも多く強力な剣士が必要なのです。その為に、突出した実力と神器を持つシヤスター様をお助けしました」

「しかし、私には整合騎士達のように摩訶不思議な絶技もないが……………」

「いいえ。貴方は既に、その力の片鱗を解放したはず」

「何?！」

そう言われて、ふと脳裏によぎるものがあった。

凄まじい憎悪に支配されたあの時、手の中で愛刀朧霞が霧へと変じたことを微かに覚えていた。

傍らに置かれていた朧霞に視線を投じて、あの時手の中に感じた「何か」を

「そうか……己の限界を超越するほどの激しい意志こそがあの剣訣の到達点……ベルクーリの親父が強固な信念で作っていた《心意の刃》も、それに起因するものだったのだな」

「世界を救う為です。私はその詳しい絡繰をお教えしましょう。しかし……」

「皆まで言わずとも良い、スワロウ殿。全てが終わった暁には、決して悪用しないことを誓おう」

すかさず言葉を重ねれば、スワロウはそれも分かっていたように頷いた。

するとそこで、ずっと黙して話を聞いていたリピアがおずおずと手を上げる。

「あの……それで私は、何をすれば……?」

「勿論、リピア様にもシヤスター様と同じほどの力を得ていただきます。貴女には十分に素質があると、私は確信しておりますので」

「そ、その評価は嬉しいのですが……私は神器すら持たぬ上位騎士の末端で……」

「ええ。ですので神器をお貸しします」

は? と、リピア本人のみならずシヤスターまでもが声を揃えた。

スワロウが指を鳴らすと、彼のそばの虚空に光の波紋が浮かび上がってきた。

そこからみるみるうちに一振りの剣が現出し、リピアへと差し出される。

「これは四聖竜の秘宝が一つ。かつて史上最大の落雷を受け、その力を宿した、ある霊峰の頂点に屹立する岩より削り出された細剣。十全に力を引き出せれば、雷いかづちの如き素早さを得ることもできるでしょう」

「そんな……これほどの神器を、私に………う？」

「貴女に、覚悟がおりならば」

リピアは、戦々恐々とした面持ちでその剣を見つめた。

心の中に様々な葛藤が吹き荒れる。

やはり自分などでは相応しくないという劣等感、伝説の厄災を相手にするやもしれないという恐怖。

何よりも、邪竜と共に戦乱を巻き起こすあの闇の皇帝の冷徹な瞳を思い出し、全身が震え上がって……

「リピア………」

不意に聞こえた声に、はっと右を見た。

そこには自分を心配そうに、諫めるか諫めまいかと悩ましげな目で見る愛する男がいる。

肩に置かれたシヤスターの手の、小さな暖かき。

それが、心の臓に突き刺さった、恐怖の茨を溶かしてゆく。

「……私、やります」

「リピア？ お前……」

驚きに顔を染めるシヤスターへ微笑みを向け、一転してスワロウの目をキツと見返した。

睨みつけているかのような鋭い目つきは、彼女の中で固まった覚悟の表れであり。

それを証明するように、両手で剣をしっかりと握りしめて受け取った。

「騎士、リピア・ザンケール。我が命運、我が心は、最後の時まで閣下と共にある！ その為ならば、あらゆる苦難をも乗り越えてみせよう！」

「……素晴らしい。では、その《雷霆の剣》は貴女に」

「はっ！」

リピアは、再び力強く頷いた。

それからシヤスターを見れば、彼もこれ以上の問答は不要と悟ったか、首を縦に振った。

喜色に頬を染めていくリピアと、彼女の手を握るシヤスターを眩しそうに見ながら、スワロウは立ち上がる。

「色良い返事がいただけで、私も嬉しい限りです。それでは最後の贈り物として、この場所もお貸ししましょう」

「む。そういうえば、ここは……」

そういうえと、シヤスターは周囲を見渡す。

これまででは、驚愕に相次ぐ驚愕で場所を確かめる余裕もなかったが……またしても大いに驚くことになった。

自分達がいたのは、広大な屋敷の広間だったのだ。

天井に吊り下がるシャンデリアや調度品、壁や床の造形に至るまで、オブシディア城に迫らんばかりのもの。

窓の外には薄暗い洞窟が広がっており、ここが何処かに秘された場所であると察する。

「この館を、貴方達のお好きに使ってください。食糧や寝床も最上のもを十分に。《武装完全支配術》の術式は既に作成して修練場に。これは館内の見取り図です」

半ば啞然としたまま、スワロウから丸められた一枚の紙を受け取った。

「何から何まで、なんと感謝を述べればよいか……これほどの大恩、返せる気がせぬ」

「私もです……」

「このアンダーワールドが存続することこそが、私にとっての何よりの報酬でございます。その為ならばあらゆる苦勞は惜しみません」

品の良い笑みを浮かべ、スワロウは踵を返して出現させた光の扉へと向かった。慌てて立ち上がった二人は、その背中を目で追って素早く問いかける。

「あ、あの！ 一体どこへ!？」

「貴殿、まだ何か用向きが!？」

「ええ。少々……不安要素を解消しに」

最後に一度振り返り、そう言葉を残してスワロウは光の中へと消えていった。

扉が消滅するまで見届けたシヤスターとリピアは、早速目に活力を漲らせていく。

「リピア。私について来てくれるか」

「どこまでもお供いたします、閣下」

彼らの未来を掴む密かな戦いが、始まった。

終末へのカウントダウン

北の辺境から東域への旅は長いものだった。

慣れ親しんだ北帝国を離れ、謎めいたイスタバリエス東帝国へと。

その地は全てが北帝国とは異なっており、木々から地形、村々や街の建築様式に至るまで何もかもが未知であった。

年頃の男として探究心を少しくすぐられながらも、戦場へと急ぐこと三日。

「……随分と、*「顕現」*させるのにも慣れたようだな」

「ああ、父さん。おかげでうまく維持できるようになった」

空の上、吹き荒れる烈風の中で術式を用いることでルークとバルドは言葉を交わす。

悠々と超高位神聖術で風をも操る彼らが駆るのは、おおよそこの世のものとは思えぬ

生物。

片や三十メルにも及ぶ、勇壮なる純白の大型竜——心意の剣者グウイバー。

そしてもう一方は、燃え盛る長大な体を四枚二対の翼で泳がせ、四肢で空を走る真紅の竜。

名を“ドララグ”。かつてウエスタリス西帝国の火山を統べた蛮王にして、四聖竜が一角である。

「竜の魂に刻まれた姿を呼び起こし、己が心意の力によつてこの世に顕現させる……これがただの基礎、か。驚くばかりだよ」

「お前には、私が積み重ねた智慧をできる限り伝授する。今更、親の真似事だがな」

「頼りにさせてもらう。父さんは竜騎士として大先輩だから、いろいろ学ばせてもらうよ」

「ふ……そうか」

仮面の下で、バルドの口元が微かに緩む。

息子に尊敬の眼差しを送られる未知の嬉しさに、柄にもなく心が高揚していた。

これが数百年に及ぶ復讐劇の果てに得られた報いだとするのならば、いささか分不相応が過ぎるだろうと考えてしまう程だ。

「はあ……あの二人を見てみると、どうにも常識というものが崩壊しますね」

「クルル……………」

「大丈夫ですよ、雨縁。貴方は十分に立派な飛竜です。あちらが輪をかけて異常なだけなので」

自信を失ったように鳴く相棒に、アリスは首筋を撫でてそつと諭す。

とはいえ、人界で最強種の一角である飛竜ですら、あの二匹の聖竜の前では霞んでしまうのも事実。

北帝国から東帝国にかけて、上空を通過した村や街は必ず彼女の耳にも届くほどの大騒ぎになっていた。

それが殊更に街で休息を取れなくなった要因でもあるのだが、元より野宿しながら進む予定だったのが幸いした。

「ハハハハア！ 俺様の勇姿に敵う奴なんざ、同胞を置いて他にいるはずもねえ！ その気落ちすんなよ、小僧！」

大口を開けたドラッグが、いかにも機嫌良さげに高い声音で笑う。

自らの力に絶対の自信を持つが故の発言。少し速度が落ちた雨縁に、アリスがやや渋い顔になる。

「あんたもそう思うだろう、兄者！」

「……貴様の尊大さもほとほと変わらぬと見える。我らは既に遺物なのだ、もう少し慎

め」

「相変わらずクールだねえ。ブレないあんたは好きだぜ」

「威勢の良い奴め」

呆れた様子でグワイバーに一瞥されるも、変わらずドラッグは快活に笑うだけ。

ルークの顔にも苦笑が滲み、バルドが行く先を見つめながら小さく嘆息した。

「すまぬな。金華の」

「いえ……雨縁に合わせていただいているのも事実なので」

「キリトにもあまり負担はかけられないからな。むしろ、それでこの移動速度を維持できたアリスの腕が俺は羨ましいよ」

最初はうまく乗れなくて落っこちてたしき、とおどけて笑うルーク。

今は氷で作り出した鞍に乗って自在に騎乗しているように見えるが、この三日間は惨憺たるものだったのだ。

アリスは二日前、真つ逆さまにグワイバーの背中から転げ落ちた兄を思い出してクスリと笑う。

「私とバルド殿の指導がなければ、まだグワイバー殿の首にぶら下がっていたかもしれませんか」

「本当だよ。おかげで……ここまで来れた」

その時、ふとルークは前方へと顔を向け、真剣な横顔を作った。ハッと察したアリスも、彼とバルドが見ているものへと視線を傾ける。

奇怪な岩の並ぶ河川の上を抜け、ついに到達したるは東帝国の端、果ての山脈。長い時をかけて辿り着いたそこは、北の山脈と変わらぬ黒々とした山々が連なっており。

そしてそこに、神が剣を振り下ろして生み出したように深々とした峡谷が走っていた。

遠目からは細々として見えるように見えたそれは、接近するにつれその威容を露わにする。

幅は百メルにも達するだろうか。オークやオーガどころか、ジャイアントの軍勢すら容易に進行できるだろう。

その手前、まるであちらとこちらを区切るようにそそり立つものの内側には草原が広がり、無数の白幕が張られている。

「あれが人界軍の野営地か……思った通り広大だな」

「……だが、数は芳しくないようだ」

一大野营地の中に感じる「音」の量に、ルークは重々しく頷き肯定する。

煮炊きの煙と訓練中の兵士の怒号が空まで届き、その士気の高さを伝えていた。

しかし、その量はわずか三千に届くか届かないかというもの。

カセドラルでのイーデイスの言葉を信じるのであれば、暗黒軍は五万にも及び、絶望的に数が足りていない。

「……はたして、我らが加わった程度で何かが変わるのでしょうか」

「変える為に、俺達はここまで来たんだろ」

「……恐れるな、金華の。我ら騎士、そう易々と闇に吞まれるほど懦弱ではあるまい」

アリスの心の隙間から欠け落ちた一片の弱音に、二人は力強く言い返した。

言葉一つに乗る圧倒的な覇気に、微かに瞠目したアリスは表情を引き締め直して「はい」と頷く。

そこで丁度、四人と三匹はそそり立つ山塊の間へと入り込んでいった。

途端に底冷えするような寒々しさが全身を突き刺し、嫌が応にも心が引き締められる。

左右の滑らかすぎる岩壁に驚く間も無く、眼前に巨大な構造物が姿を現した。

「これが……《東の大門》……」

「……世界を分け隔てる絶対の壁、か」

それは、人が見上げるにはあまりに巨大すぎる絶壁だった。

地面からの直径は目算でも三百メルの達し、壮絶なる神域の御業を実感させる。

人界を囲む《不朽の壁》を作り上げたアドミニストレータや、今やそれに等しい力を持つルークにさえこんなものは作れない。

この壁は、世界の始まりから数百に及ぶ年月、ここに聳え、光と闇の世界を分かっていたのだ。

今この瞬間、滅びが訪れるその時まで。

「壁に阻まれていけるせいとか、向こう側からは音が聞こえない。少し様子見をしてもいいか」

「勿論です。雨縁、もう少しだけ頑張つてね」

「行くぞ」

高度を変更しながら、ギリギリまで《東の大門》まで接近する。

停止したのは、地面から二百メル付近。門という名の通りぴつたりと接着した二枚の

大岩の中心。

そこに彫り込まれた巨大な神聖文字を、アリス達は龍の背の上から覗き込んだ。

「デストラクト……アット、ザ……ラスト、ステージ……？」

「終焉での崩壊……か」

見た通りのものを復唱した瞬間、隣から聞こえてきた言葉にアリスは振り向く。

「神聖文字が読めるのですか？」

「ある程度な。やっぱりこの壁は、最初から壊れることが決められ……っ！」

その瞬間、凄絶な音を奏でて大門が揺れ動いた。

峡谷の隅々にまで響いていくような凄まじい音に、間近で聞いた三人は顔を顰める。

そんな彼らの目の前で、なだらかだった漆黒の岩肌に細いヒビが走り、広がっていく。

耳を塞ぐ程の異音が収まってから改めて見ると、大門から剥落した巨大な石片が谷底に落下していた。

「……………これは」

反射的にキリトを片腕で抱きしめていたアリスは、呆然と大門を見上げる。

今しがた発生したものでだけではない。岩壁を覆いつくさんばかりのヒビが存在していたのだ。

震える彼女が変わって、ルークがその「目」を見開き大門を解析する。

「……………どうだ」

静かなバルドの問いかけに、すつと息を吸ったルークは。

「……………三百万四千五百十七のうち、残る天命は2785。保つて五日が、限度だろう」



「っ………！ もう、そんなに………！」

知らしめられた残酷な現実には、アリスはキリトを支えるものとは反対の手で口元を覆った。

脳裏に、故郷ルーリッドのことが過ぎる。

天真爛漫な笑顔を浮かべる妹、セルカ。頑固ながらも面倒見の良いガリツタ老に、気難しげな顔の父ガフスト。

その時、ルークの中にも優しく微笑む母セファイアや、今はその記憶を取り戻している大切な後輩の顔を想像する。

(もつと、猶予があると思っていた。いいえ、どこかでそう信じていたかった……！)

まだ、ルーリッドを守りきって安堵してから三日しか経っていない。

しばらくの間故郷は安泰だと思っていたのに、そのまやかしいとも簡単に打ち砕かれてしまった。

もしも、五日後に始まる戦争にて敗北すれば、闇の魔物達の飽くなき欲望は人界全てに広まっていき。

そして、恐ろしき凶手は北端の村ルーリッドにさえも――

「あと、五日……………」

「どうやら、長く寝すぎていたようだな……………」

「なんとか……………なんとか、しないと……………」

「……………アリス?」

うわごとのように繰り返し呟いたアリスが、不意に手綱を操る。

それに従った雨縁が上空へ尖った鼻先を向け、大門の上部へと飛翔してしまった。

「アリス! くそっ!」

ルークはそれを、すぐに追いかけた。

グウィバーに心意を通じて語りかけ、受け取った白竜はその翼を存分に羽ばたかせて飛び立つ。

バルドはそんな二人を無言で見送り、それから再び大門の神聖文字へと視線を投じ

た。

今の雨縁が出せる最速で飛んでいるのか、グワイバーを保つてしても瞬時に追いつくことはできなかつた。

それでも圧倒的な体格差故に、ものの十秒ほどで並ぶと一緒に空を駆け上がる。

やがて、ついには大門よりも高い場所に行き着いてしまい、そこでようやく両者は止まった。

「アリス！ 幾ら何でも不用心だっ！」

「……………すみません。居ても立っても居られず……………」

「気持ちに分かる。だけど、ここは今アンダーワールドで一番危険な場所なんだぞ？」

「はい、軽率な行動でした」

申し訳ありませんでした、と雨縁の背の上で頭を下げるアリスに、ルークは一つ嘆息した。

それから、どうせここまで来たのだからと大門の向こう側の景色へと視線を移す。

暗黒領域にも同じように峡谷が続いているが、決定的に異なるのはその先にある風景だ。

血のように赤い空と、焦げ付いたような黒い大地。まさしく暗黒の世界と呼ぶに相応しい。

「っ……………」

「ルーク兄さん？　どうかしましたか？」

「…………いや。少し、多すぎて驚いただけだ」

片手で耳を抑えながら、顔を擧めたルークの言葉に小首を傾げる。

なんであれ、原因は風景にあるのだろうとアリスも改めて暗黒領域を注視した。

そして、気付く。不毛の大地の上に揺れる、無数の小さな光を。

「あれ、は……………」

確かめるためによく目を凝らして、すぐにそれを後悔した。

どこまでも広がるそれがなんであるかを、理解してしまったから。

光の正体……それは、闇の軍勢の野営地だ。

何千、何万という怪物達が、まさに今あそこで、人界軍と同じように開戦を待っている。

暗黒領域全体の規模と峡谷の内部距離を思えば、もはや目と鼻の先と言っている。

あれは、その先鋒に違いない。

「軽く聞こえただけでも数千……第一陣だけでも、こつちの倍はいる」

「……あと……五日……」

再びこぼしたその言葉に込められた絶望は、より色濃いものだった。

ぐつと唇を引き結んだ彼女は、雨縁に繋がっている手綱を引くと踵を返させる。

ルークは、背を向けた彼女の胸の中で渦巻く、「音」をはつきりと聞き取った。

「………行きましょう、兄さん」

「……ああ」

微かな声で会話を交わして、二匹の竜は来た道を戻る。

今度は迫ってくる谷底の方をじつと見ながら、ふとルークが口を開いた。

「アリス」

「何ですか」

「よく、耐えたな」

アリスの体が、一瞬震えて。

だが、何も言い返すことなく首肯した彼女に、ルークも今度こそ口を噤んだ。

今にもあの野営地に飛び込んでいききたい気持ちは、彼にもよくわかったからだ。

だが、いかに一騎当千の実力があろうと、無策では自分も彼女もどうにもできない。

今はその気持ちを抑え込み、ただ、少しでも人界を救う確率を高めるべく。

「行こう、人界軍の野営地へ」

「ええ。なるべく早く……！」

——十一月、二日。

開戦まで、あと僅か。



「クソツ……いー あの小僧、よくもっ……いー」

フ・ザは、仮面の下で延々と怨嗟の言葉を吐き続ける。

足取りは暗殺者らしからぬ荒々しき、影に潜ませるには少々漏れ出過ぎている殺気。その全ては、彼の中に渦巻く怒りと嫉みに由来する。

(よくも……よくも、ビスクルを始末する千載一遇の機会を、あの若造めがッ！)

フ・ザこそが、シヤスターのあの場での反乱を誰より早く感じていた一人だった。

それはスワロウの予測に則って行動を起こしたイキシアとは異なり、常に彼を監視し

ていたからこそ。

今はギルドと共に受け継いだフ・ザの名を持つ男は、過去の怨念より寝ても覚めても常にその命を奪うことだけを考えていたのだから。

かつて、フェリウス・ザルガティスという者だった彼は、幼き頃に騎士団所属の幼年学校にてシヤスターに叩きのめされた。

あまりの屈辱から水路に身を投げたが、奇しくも暗殺者ギルドに拾われたことで命を落とし損ねた。

奴隷のように酷使されながら、日々シヤスターへの怨讐を増し、知識を蓄え、数々の毒を開発し、ついにはギルド頭首にまで登りつめたのだ。

多くを代償にして生きながらえた三十年、全ては憎き一人の怨敵を殺さんが為。

幾度も練っては頓挫してきた暗殺計画の数々。その度に積もりに積もっていく怨念。

そしてまさに、リピアの首を見た瞬間シヤスターが殺気を放った瞬間、まさに天運とさえ確信したというのに。

「許さん……！ 許しませんよ、イキシア・イヴェガン………！」

巡り巡って、その唯一とも言える大義名分の機会を奪った若き暗黒騎士へと憎悪は流

れた。

これから始まる戦の中で、どんな手を講じてでも殺してやると、そう決意する程に。己の憎悪を確かめるようにして、懐に忍ばせた毒針にそつと触れる。

(ビスクルを殺す為に貯め続けた、毒蛙を何十万と磨り潰し、濾過濃縮して作り上げた致死毒……！ 奴が亡き今、貴方にこれは受けてもらいましょう……！)

新たに見出した敵への暗殺の手立てを考えながら、なおも城下町の暗中进行を歩み続けた。

向かう先はスラム街地下、暗殺者ギルド総本山。

来たる戦に備え、暗器と皇帝に自分達の力を評価させる作戦を準備しなくてはならない。

そして、イキシアを確実に殺す手立ても。

「また、長い戦いになるでしょう。奴はビスクルの愛弟子にして、より頭が切れる。綿密に計画を練らなくては……！」

自分自身へと言い聞かせるようにそう繰り返しながら、心を悪意で満たしていく。

針に秘された致死毒よりも濃いであろう、濁りきつた害意が思考を埋め尽くし。

「……………」

だが。ふと感じたものによって思考が平静へと引き戻された。

否、常に憎しみに苛まれているフ・ザの心を思えば、そちらこそが異常だったのかも
しれない。

しかし、彼が暗殺が横行するギルドの中で培った極限の臆病さは、確かにそれを察知
したのだ。

スラムの一角、非常に複雑に入り組んだ裏道の終着点。

そこに存在しているギルド総本部の抜け口の前に立ち、フ・ザは訝しげにした。

「……………なんですか、この異様な程の死の気配は」

扉の向こうから漂う、濃厚な「死臭」を嗅ぎ分け、にわかに警戒心が沸き起こる。

日頃、ギルド内を満たしている昏い殺意の坩堝とは決定的に異なる空気。

何かしらの異変が起こっている。そう確信したフ・ザは別の入口を使うために踵を返
した。

「その感覚、お見事です。しかし、貴方に戻る道はありませんよ」

「——ッ!?!」

タアンツ!!

振り返ったその瞬間、胸部を何かに貫かれる。

体内から全身に伝播した衝撃は心の臓を破壊し、そのまま背中まで突き抜けていった。

「ガッ……オ、ア………!?!」

極限まで目を見開いたフ・ザは、数歩後ろへとよろめきながら胸元を見下ろす。

貧弱な身体を守る為、地竜の皮で作られた装束の心臓部分に小さな穴が開いている。

何かしらの飛び道具の痕跡。しかし、暗器や矢などの類ではない。

(これ、は………いつ、たい………)

ガハツ、と大きく血反吐を撒き散らしながら、床へと崩れ落ちる。

胸元からは絶え間なく血が流れ、それを抑えようと両手で塞ぐも意味をなさない。

ただ、喉を迫り上がってくる血塊への息苦しさにみつともなくもがくことしかできなかった。

「ゲボツ……ア、オ、ツ……ガッ……」

「残念です。貴方には壊滅したギルド総本部をその目で見ていただきたかったです
が」

霞む視界の中に、近づいて来た誰かの足が映り込む。

まともに呼吸をすることもままならない中、奇襲の主だろうその人物を必死に見上げて。

もがいた拍子に仮面が外れ、顕になったドロドロの顔を驚愕に引き攣らせた。

「心臓を撃ち抜かれても、天命が全損しない限りは生命を保ち続ける。この世界は不思議なものですね」

「あな、た……は……」

そこにいたのは、上から下まで純白の衣服に身を包んだ男。

顔にはほとんど装飾のない仮面を被り、右手には見たこともない筒状の武器を携えている。

その容姿はフ・ザにとって見覚えのあるものだった。

数年前から暗殺者ギルドに顔を見せるようになった、正体不明の人物。

元より自分以外を決して信用しないフ・ザだが、卓越した術の知識でギルド内での地位を獲得していた事で特に目を付けていた。

それが今、何故ここで自分をと凝視する。

「不思議に思っていることでしょう。何年もかけてギルドでの地位を築いた私がどうして、と」

「……………ツー！」

「そうですね。いくつか理由はございますが……私が人界側の者であり、戦争前に妨害工作をする為、というのがそれらしいでしょうか？」

言葉遊びをするような口調。それでいて話した内容は衝撃的。

残り僅かな命が零れ落ちる中で、フ・ザは幾度とない驚きに喘ぎ声を漏らす。

「ご安心を。死んだのは貴方だけではありません。先ほど申し上げました通り、ギルド総本部は掃除させていただきました」

「な、にを……………！」

「筋書きはこうです。ギルド内に滞在していた暗殺者の一人が偶然毒壺の棚をひっくり返してしまい、混乱が発生。連鎖的に至る所で毒性生物や有害物質が垂れ流しとなり、

暗殺者ギルドは自滅した。その露呈を恐れ、貴方は行方をくらませた……それなりの出来でしょう?」

「……き、さまア………!」

「それに、今貴方にイキシア様を害されては少々困りますので。これ以上予測から外れると、私としても対応ができなくなってしまうますから」

最も、と一度言葉を切り。

男は、手に持っていた筒状の武器の穴をフ・ザの頭に定めて。

「ここまでの段取りは全て、真実を知る者が誰一人生き残らないのであれば、の話なのですが」

「やめ………っ!」

タアンツ!!

再び響く、異質な音。

この世界ではまだ誰も知ることのない、リボルバー銃の銃声がスラムの裏道に木霊す

る。

それを直に受けたフ・ザは、激しく身体を一度痙攣させて……程なく、伸ばした手を地面に落とした。

血が飛び散ることはなかった。筒から発射された、凝縮した火サーマル・アロー。矢が傷口を焼き焦がしたが故に。

男はじつと完全に動かなくなるまで見届けてから、紫煙を燻らせる銃を下ろす。

「今までお世話になりました、フ・ザ様。貴方達が長い年月をかけて研鑽した毒の技術は、しっかりと有効活用させていただきます」

静かに述べるその言葉には、一切の感情が込められてはいない。

事実、極端に殺意に敏感なフ・ザも、死の間際まで一切の害意を感じ取れなかった。男にとってこの行為は、ただ必要な処理をしたに過ぎないのだから当然だ。

「これで当面の不確定要素は排除できましたね。次の生での幸福をお祈りしています」
最後まで不気味なほどに平坦な声でそう述べて、男は踵を返す。

カツン、カツン、という靴音だけが残響し、フ・ザの骸を吊つて。

その他に、彼を看取る者はいなかった。

戦場にて

大門から引き返した一行は、野営地の上空へと接近。

草原に展開された人界の砦の中心には、円形に大きな広場が空いていた。

近くに大きな天幕があり、それが騎士用の飛竜発着場であることを三人は理解する。

「流石に、俺と父さんはこのまま降りられないな」

「飛竜を想定されているので、少々手狭と言わざるを得ませんね」

「……直前に降りるしかあるまい」

アリスを中心に、左右ヘルーク達と隊列を組み直す間に、いよいよ真上へ到着した。

まずはアリスがと雨縁の手綱を引こうとした瞬間、下が騒がしいことに気付く。

野営地の至る所で騒めきが起こっており、一様に空にいる三人……正確には、二体の聖竜を見上げていた。

「あー……やっぱりここでもこうなるか」

「……必然であるな」

「仕方がないものだと思うしかありませんね」

至る所で同じことが起こっていた為、既に慣れた様子で苦笑する各々。

それを聞いていたドラッグが、ふとグウィバーへ一瞥を送った。

「兄者、一つ俺様達の威厳を知らしめてやるのはどうだ？」

「……己を誇示するのは性に合わぬ。だが、彼らの騒ぎを収めるには丁度よからう」

「は？ おい、何言って——っ!？」

勘付いたルークが諫めた時には、もう彼らの顎門は大きく開かれていた。

グオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!

キシヤアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!

雄々しい咆哮が、澄み渡る蒼穹と雄大な大地へ響き渡る。

ビリビリと物理的圧力すら伴うそれは、重なり合うことで殊更に力を増していた。野営地に集う全ての者が、全身を打ち付けるその覇気に圧倒され、畏怖し。また、魅入られた。

「……今のは……………」

その中の一人。物資の入った木箱を運んでいた少女が、ふと空を見上げる。

そして、ソルスの光を反射して眩く輝く白い竜を見つけ、驚きに紫色の瞳を見開かせた。

「……………これでよかろう」

「へへっ、さすが兄者。気前がいいぜ」

たっぷり十秒間かけて吠えた二竜は、どこか得意げな面持ちでそう語る。

「……無茶苦茶するなよ、お前ら」

「……本当に、我々の枠に収まりませんね」

呆れ、あるいは苦く笑い。

それからようやく、彼らは発着場へと降下していった。

予定通り、まずはアリスが雨縁を降下させる。

疾風を巻き起こしながらゆっくりと地面に近付いていくと、不意に首がある天幕の方へ向けた。

着陸を完了しないうちに甘い鳴き声をあげた彼へ、ややして天幕の中から低い鳴き声
が返答する。

兄竜滝割の声だろう。アリスは無事に着陸するや否や、キリトを抱えてその背から飛び降りる。

両脚から荷物を外してやると、雨縁はすぐさま天幕の方へと走って行った。

「つとー！ ふう、着地成功つてところか」

その直後、グウイバーの体を光に変えて剣に戻したルークが隣に着地する。

「ルーク兄さん、平気ですか？」

「ん？ ああ、成り損ないだった時に飛ぶのには慣れたからな」

軽口を叩く彼に頷いていると、更にルークを挟んだ向こう側にバルドが落ちてくる。

神聖術で風素を生成して利用し、衝撃と音のほとんどを殺して着地した。

鎧の上に揺れる炎だけが轟々と音を立て、それを眺めていると激しい足音が聞こえた。

「師よ！ 我が師アリス様！」

「つー！」

間髪入れず聞こえてきた覚えのある声に、慌ててアリスが表情を引き締める。

スカートの裾を直し、乱れた頭髪を整えたところで、背後から目の前に一人の騎士が回り込んできた。

「やはり貴女でしたか！ このエルドリエ、信じておりましたぞ！」

「……相変わらず、元気なようですね」

「勿論です！ こうして再び会えたことが、何よりの……」

そこで、エルドリエの言葉が止まった。

喜色満面の笑みから一転、顔を引き攣らせた彼の視線の先にあるのは痩せこけた片腕の少年。

信じられないといった眼差しの際は、高ぶった心に冷や水を浴びせられたからか、ようやくルーク達の存在に気がつく。

そして、長年騎士団に語り継がれている悪名高き炎の騎士の威容と……

「へえ……あんたがエルドリエか。アリスの弟子なんだつてな？」

自分に笑いかける、黄金の光彩を放つ銀色の瞳を持った男に、気圧されたように一歩下がった。

(なんだ、此奴は……!? この凄まじい剣気、騎士長閣下にも匹敵しうるほどの……!?)

ゴクリと大唾を飲み込んだ彼に、アリスが訝しげな目線を送る。

それによつて我を取り戻したエルドリエは、やや落ちた声音で苦言を呈した。

「……連れて、来たのですか。何故です」

「守ると誓つたのです。当然でしょう」

「し、しかし！ 我ら整合騎士はいざ戦が始まれば最前線に立たねばならぬ身！ どうされるおつもりか！」

「必要であるのならば、背負つてでも」

揺らぎのないアリスの言葉。よもや即答されるとは思わなかつたエルドリエはぐつと息詰まる。

しかし、アリスにも予想外だったのは、彼が大仰な身振りでさらに言葉を重ねてきたことだ。

「なりません！ 無礼を承知で申しますが、そのような重荷を抱えてはいかに我が師と言えども剣力は衰えてしまう！ それどころか御身を危険に晒すことになりかねない！」

「……っ」

「それに貴女は、彼らを導き、戦わなくてはなりません！ 持てる全てを發揮せずしてど

うするのです！」

周囲に集まった兵士や騎士達を横へ振るった腕で示し、訴え掛ける様はまさに本気。叩きつけられた正論と、自分にとつてのキリトの重要性の板挟みにあいアリスは奥歯を噛み締める。

同時に、彼の変質に大いに驚いていた。

以前であれば反論などせず、ただ崇拜するような眼差しを送つて来ていたものが、はつきりと意見した。

無論、彼はアドミニストレータの支配から脱したわけでも、“右目の封印”を解いてもいらないだろう。

それでも遥かに“己”というものを確立させているのは——やはり、キリト達と相対したからか。

(まるで貴方は、この世界に振り下ろされた一振りの鉄槌のようですね)

ユージオとルークにもう一度立ち上がる勇気を与え、ついには公理教会という大きな

楔を打ち砕いた。

学院では今のエルドリエと同じように、彼らの後輩が必死に嘆願してきたのもよく覚えてる。

関わる者全てを変えていく——それは勿論、自分も。

そのことが不思議と、心底から誇らしい。

(……枷の突破に到達せずともこれ程とは。やっぱりキリト、お前は俺の自慢の弟分だ)

同様の考えに至ったルークも、エルドリエの胸の内の「音」に淡く微笑む。

しかし、いつまでも傍観しては仮にも兄と慕われる身としてはいささか不恰好だろう。

そう思い、二人の間に割り込む為一步踏み出し。

「……せん……………ぱい……………?」

耳へ届いたその声に、動きを止めた。



何かを取り落とす音に合わせて聞こえた、小さな一言。
思わず足を止めたルークは、驚いてそちらに振り返る。

先輩。自分をそう呼ぶ人物は、この世界にたった一人しか存在しなかった。

「……………リイ？」

そして、広場を囲む人垣の一角にその少女を見つけ出す。

思った通り、そこにいたのは北セントリア修剣学院にて指導をしていた彼女。

ルークにとつて大切な後輩である、シャーリー・テイリーモアだった。

「お前、どうしてここに……ああ、そうか。お前も貴族だもんな。いてもおかしくは……ないのか」

貴族に課せられた義務を思い出して納得するも、まだ年若い彼女が戦場に出ることに渋い顔をせざるを得ない。

だが、その表情こそがシャーリーにとつては、他の何よりルーク本人だと確信させる証拠だった。

「っ、先輩………！」

大きく表情を歪めたシャーリーは、真っ直ぐに走り出す。

彼女の存在をよく知らない周囲の動揺など気にせず、一目散にルークへと駆け寄っていき。

驚く彼の胸の中へと、躊躇なく飛び込んだ。

「つとー！」

「先輩っ……せんぱいつ、せんぱいだっ………！」

「リィ………」

「良かった……無事で……元気で、ほんとうに………よかつたっ………！」

温かい涙が胸元を湿らせていく感触と、キツく背中に回された腕の力強さ。

二度と離れたくないと訴えかけるようなその熱が、彼女の思いを如実に伝えてくる。されるがままだったルークは、しばらくすると片腕を彼女の背中へと回した。

残ったもう一方で、泣きじやくるシャーリーの頭をそつと撫でる。

「ごめん、心配かけて。でも俺は、もう大丈夫だから」

「うん……うんっ………！」

半年ぶりの、優しい言葉。

胸に染み入ってくる、ずつと聞きたかった声をシャーリーは噛み締めた。

感動の再会を目の当たりにした周囲の雰囲気も、少しずつ変化していく。

エルドリエやアリスは毒気が抜かれたように表情が和らぎ、観衆もどこか柔らかい空気がとなった。

突然現れた巨竜を駆る男が、思っていたよりずっと人間味があつたと理解したことも

一因だろう。

「これは、少々介入するタイミングを逸してしまいましたね」

「全くじゃな」

「いいじゃねえか、俺は感動したがね」

そこへ、新たな参入者が現れる。

会話を交わす三人分の声。それにルークのみならず、アリスやバルドもハツとする。

振り返れば、人垣が自然と左右に割れていき、そこから件の人物達が姿を現した。

一人は、まだ十五にも満たぬ容姿の幼き司書。長杖を突きながら、少々呆れ笑いをしている。

その右に控えるのは純白の男。礼服に身を包み、従者然とした微笑みを湛えて付き従う。

反対にはニメルを変える巨漢。青地の衣服を纏い、腰には無骨な直剣。最も軽装ながら、分厚い体から発せられる覇気は随一。

「カーディナル様！ スワロウ殿に、騎士長まで！」

エルドリエが声を上げ、同時にその場にいたほぼ全ての人物が膝をついて頭を垂れた。

アドミニストレータに台頭した新たな最高司祭とその従者、並びに尊き整合騎士団の長。

広場の中にいたルーク達を除き、誰もがその威光に敬服の意を示す。

「エルドリエ。そこからへんにしておきな」

周囲の反応へ居心地悪そうに頭を掻きながら、ベルクーリがそう言う。

エルドリエは何事か口にしようとしたが、長に言われては断念せざるを得ないと考えたのだろう。

閉口して身を引き、ベルクーリは一つ頷いてから各々の顔を見回していく。

「よう、あの時の小僧じゃねえか。今はどつちだ？」

「俺でもあり、彼でもある。ある意味、一つだ」

「そうか。お前さん、真にその《竜具》の使い手になったんだな」

「ああ」

「よくぞこの世へ戻ってきたのう。先に帰還したライオット達に話は聞いておったが、改めて見ると驚きじゃ」

重ねて告げたカーディナルへ、ルークは視線を向ける。

「こうしてまともに言葉を交わすのは初めて、ですね」

「そういうことになるの。改めて、わしはカーディナル。今は最高司祭の代理をしておる」

「竜騎士、ルーク。我が最後の望みを聞き入れ、アリス達を守ってくれていたこと、心から感謝します」

ほう、と賢者が目を細める。

ルーリッドに立つまでの数ヶ月、カセドラルで生活していたアリス達のことをルークは聞いていた。

キリトを断罪すべしと口にする、真実の全貌を知らぬ騎士や修道士を取りなしていたのは彼女だったのだ。

「良い。お主には命を救われた借りもあるしの、すべきことをしたまでじゃ」

「こちらこそ、キリト達を導いてくれたことも含めて、ささやかながら敬意を。この御恩は、人界を守ることでお返しします」

「うむ。期待しておるぞ」

頷いたカーディナルと、大胆不敵な宣言をしてみせたルークにざわりと空気が揺れる。

前最高司祭を誅した反逆者が、自分達を守ると口にしたのだ。下位の整合騎士達の一部が殺気立つのも無理はない。

しかし、その全てを微塵も動じることなく受け止めたルークは、圧に少し震えたシャーリーを抱く腕の力を強める。

その剣呑な空気を打ち破ったのは、ベルクーリが両手を打ち合わせる音だった。

「まあ、剣呑なのも程々にしようや。伝説に名高き四聖竜の後継者ともなれば心強い。頼りにしてるぜ、坊主」

「ええ、騎士長ベルクローリ閣下。我が父と共に、必ずや未来を」

「父と共に、か」

復唱した騎士長の視線が、横にずれる。

そこでようやく、ベルクローリとバルドの視線が交差することになった。

最強の騎士と、最強の反逆者。

複雑に絡み合った因果を持つ、三百年來の宿敵にしてかつての親友同士。

「……お前さんは、オレの親友なんだってな。カーディナル様に聞いたぜ」

「……我にもお前にも、かつて人だった頃の思い出は既にないがな」

「ああ、そうだ。だが、一度だけ剣を交えた時のことはよく覚えてるぜ。あの時手の中に感じた、奇妙な感覚を……よ」

最後の一句まで語り切った、その瞬間だった。

絶大な二つの剣気が、彼らから立ち上ったのは。



原初の騎士と始まりの騎士、まるでコインの表と裏のような二人の騎士。

その体から発せられる力は強大の一言に尽き、先の聖竜達の一声にも匹敵する。

「父さん……!?!」

「小父様……っ!」

反射的に、それぞれが手の中に抱える者を庇いながらルークとアリスが声をかける。

しかし、一瞬たりとも二人が目線を外すことはなく、物理的圧力すら伴う覇気に圧倒されるばかり。

その場の全員が閉口を余儀なくされ、更に気迫は高まっていく。

魂までもが震えさせられるそれがいよいよ臨界に達し、ベルクーリとバルドがカツ！と開眼した時。

ギギインツ!!

突如、二人の間で発生した尋常でない剣戟の音。

間近にいたルーク達だけが、そこに発生した銀と真紅の火花を目撃した。

一陣の風が巻き起こり、草原を揺らす。

僅か一瞬、知覚することすら相応の力を備えるものにしか適わぬ攻防。

凡そ人域を逸脱した無類の意思力でしかなし得ぬことを果たした二人は、同時に笑った。

「……なるほどな。理解した。覚えちゃいねえが、確かにお前さんは俺と共に同じ剣を

振っていたようだ」

「然り。我が絆は血よりも濃く。故に、あらゆる生の足跡を奪われようと消えることはない」

「古風な台詞だな。だが……否定はしねえよ」

一層笑みを深める彼らの語り合いに、ルークはようやくその意図を理解する。

試したのだ、互いの心を。

極限まで研ぎ澄ませた心意によつて放たれる刃、すなわち《心意の太刀》。

それはあらゆる言葉や記憶よりも明白に、己の魂に刻み込まれた全てを語ってくれる。

故に、たった一太刀の応酬。竜騎士の力を得たルークを以つてしても未だ至らぬ極致。

(これが騎士。これが、俺の父……！)

ああ、なんて遠く、力強い背中だろうか。

かつては絶望にも等しかったその壁が、今度は熱くルークの心を奮い立たせてくれる。

追いつきたい。いいや、並び立ちたい。いつかあの、偉大なる父の隣に……！

そう思えば思うほどに、ルークの口元には獰猛なほどの笑みが浮かんでしまう。

「まったく、お主らは……派手な事も程々にしてほしいのだがな」

「悪い、つい気持ちが高揚してよ。さて……久しぶりだな、嬢ちゃん。ちよいと顔がふつくらしたかい？」

「……小父様」

ぱつと剣気を消し去り、穏やかな顔つきに戻ったベルクーリが気さくに呼びかけた。

それにアリスは、今にも涙をこぼしそうな声を必死に律して言い返す。

彼女にとつて、カセドラルで育った六年で唯一心を開き、父のように慕った男。その心の程は計り知れない。

きゅつと眉根を寄せた彼女に、腕を組んだ騎士長は片手を顎に添えて笑んだ。

「元氣そうで何よりだぜ。そっちの坊主もな」

「え……………」

「ん？　気づかなかったのか？」

突然の言葉に狼狽え、瞬時に理解することができずに戸惑うアリス。

そんな彼女に助け舟を出したのは、他でもないルークだった。

「さつき、ベルクーリ騎士長は父さんに向けて《心意の太刀》を放った時、同時にアリスにも飛ばしていたんだ」

「私に……!?!」

「まあ、ほんのちよびつとだけだな。よくわかったな、坊主」

「人より耳がいいもので」

吹き荒れる二つの心意の音に紛れていた、小さな音をしっかりと捉えていた。

ルークの言葉にようやく現実には頭が追いついたアリスは、何故そのような事をと訝しむ。

だが、すぐに先ほどのベルクーリの言葉を思い出して、ハッと大きく目を見開いた。

「まさか、小父様はキリトを試して……!?!」

「その通りだ。そしてさつき、一瞬だが坊主の心意が高まってオレの刃を防いでみせたのさ」

「そんな……」

唾然としたアリスは、その表情のまま答えを求めるように視線を彷徨わせる。

やがてルークに行き着くと、シャーリーを安心させるように背中をさすっていた彼は頷いた。

無論、視界の端で激しく体を震わせた弟分の、湧き上がった一筋の剣気を見出したが故だ。

アリスが、隣にいるキリトを見る。

自分が肩を貸さなければ自立すらままならない、弱々しい佇まい。

その漆黒の瞳には変わらぬ闇ばかりがあり、一欠片の意志も見えないというのに。

「その小僧の心は、今はここにはねえようだ。だけどな、嬢ちゃん。よく覚えておけ、いつか必ずそいつの心は戻ってくるぜ。本当に嬢ちゃんが助けを必要とした時に、な」

「っ……………」

いよいよ限界に達したアリスは、衆目も気にせずキリトを両腕で抱きしめた。

力のない瘦躯を手折らないよう、しかし溢れ出る思いを止められず、とても力強く。

それを見てあんぐりと口を開けたエルドリエへ、面白そうに笑ったベルクーリが声をかけた。

「こういうわけだ。若者一人くらい面倒を見てやろうじゃねえか、エルドリエ」

「し、しかし……多少生氣があるにせよ、たとえ正気に戻ったとて学生の剣がどれほど役に立つものか……………」

「そうは言うけどな、エルドリエさん。最終的にアドミニストレータを倒したのはキリトだけ？ 竜になり損なって記憶を失った俺でも、同等の力を持つカーディナル様でもなくさ」

再びざわめく周囲の人々。

ルークは覚えている。あらゆる絶望に膝を屈する事なく、争い続けたその背中を。

最後に目を閉じるその時まで、願いに羽ばたく眩しいその煌めきを魂に焼き付けた。知っているのだ。二振りの剣をその手に携え、真に自由を勝ち取ったのは……この人界で、誰よりも強いのは。

あの、いつも飄々としていて、少し抜けていて、だけど他の誰よりも未来を託せると信じられる、あの少年だと。

「キリトは戻ってくる。絶対に」

「っ……………」

いよいよこれ以上言葉を重ねれば不恰好なのは自分の方だと悟り、エルドリエは押し

黙る。

膠着の様相を見せた空気を断ち切ったのは、カーディナルの隣から一步踏み出したスワロウだった。

「ご心配には及びません。キリト様のことは私が責任を持って預からせていただきませぬ。元より私の役目は彼のような人間の治療でもありませんので」

「よし、それで決まりだ。これ以上ぐだぐだと言ひ合ひをしても無駄に時間を浪費するだけだからな」

「至言じゃな。今は一刻を争う時分、まだまだすべきことは山積みじゃ。ルーク、バルド、お主らにも会議には出席してもらおうぞ」

「心得ている」

「分かりました」

ベルクーリとカーディナルの一声で、ついに突発的な集会は解散と相成った。

極太の円陣を作っていた者達はそれに従って持ち場へと戻り始め、俄に騒がしくなる。

不承不承といった面持ちのエルドリエも、アリスへ一礼すると足早く立ち去っていった。

「来て早々、色々と騒がしくなっちゃったな」

「仕方がありません。ルーリッドで暮らしてらうちに緩んでいた心が引き締まる思いです」

「……違うない」

アリス達と言葉を交わしてから、ふとルークはずっと胸の中にいたシャーリーを見下ろす。

「ごめん、変なことに巻き込んでしまつて」

「いえ……久しぶりに先輩の温もりを感じられて、満足です」

「……おう」

連行された日のことが一瞬脳裏に浮かび上がり、返答が遅れる。

どうにかそれを記憶の筆筒の奥底に押し込むと、彼女と体を離れた。

「リイ。後でゆつくり、ちゃんと話そう」

「はい。待ってます、先輩」

頷いた彼女は、最後に一度ルークに抱擁すると小走りで走っていった。

それを見送つてから、もう一度アリス達を見ると……なんとも生暖かい視線が帰ってくる。

「随分と仲が良いようですね、兄さん？」

「……我が子にも春が来たか」

「やめてくれ、二人とも。色々複雑なんだ………そう、色々とな」

ルークの眩きに、二人は顔を見合わせるのだった。

愛の発露

「寝床はここを使え。生憎と貴賓用つて訳じゃあないがな」

そんな軽口と共に、騎士長ベルクローリはルークに一つの日幕を与えた。

発着場に程近く、ある程度の規模であるものの、確かに目立った装飾があるわけではない。

しかし、明らかに他の兵士達とは異なり、個人に一つの日幕を与えることから整合騎士に匹敵する扱いを受けていることは明白だった。

「これは、期待大つて感じだな」

改めて己の双肩にかけられた大きな責任を実感しながら、日幕を見つめて苦笑する。

既にバルドやキリトを伴ったアリスとは別れており、彼らも同じように日幕へ案内されていく頃だろう。

弟分の治療を試みると追隨したスワロウには、どうかよろしく頼むと念押ししておい

た。

(……ついに、ここまで来た。俺も、為すべきことを為さなければ)

匂い立つ戦の気配に、いよいよ実感を得ながら天幕に入ろうと入り口に手を触れる。

しかし、薄布と毛皮の二重となっている垂れ幕をずらしきる前に、耳がある。『音』を拾った。

「これは……」

入幕を中断し、『音』のした方へ体ごと振り返る。

三千以上の心意が充ち満ちるこの野営地に、新たに降り立ってきたその二つの魂。

それはルークにとって特別な人物の音であり、どれだけ大勢の人間がいようと聞き逃すものではなく。

故に、自然と足が広場の方へと引き返していた。

ものの五分で戻ると、新たに二体の飛竜が広場の上で寝そべっていた。

大柄な濃青色の鱗を持つ竜と白みがかかった美しい体色の竜は、長時間の飛行をした後

なのか半ば臉を閉じている。

そして、二人の整合騎士が彼らの体から荷袋や鞍を外していた。

「ライオット!」

「ん?」

その一方に呼びかけると、軽装に身を包んだ男騎士が緋色の髪を揺らして振り向く。つられてもう一方の女騎士も振り返るが、近づいてくるルークを認識すると大きく体を震わせた。

手の中の荷物を取り落とすや否や、素早く竜の影に隠れてしまった彼女に騎士が呆れた目を向ける。

ルークもやや苦笑いをしながら、彼の前へと到着した。

「よう、兄弟。やっと来たのか、待ちくたびれたぞ?」

「思ったよりも時間がかかった。これでもキリトの負担にならない限界で飛ばしてきたんだけどな」

「そりゃあ仕方がねえ。なんにせよ、元氣そうで安心した」

男臭い笑みを互いに浮かべながら、軽く前腕を組むルークとライオット。

共にルーリッドを守り、より強固な友情を結んだ彼らは十年來の親友のような雰囲気があった。

最初は罪人と騎士、次に同士となり、ついには竜に認められし聖なる騎士の同輩となっている。

一瞬で奇妙な縁を想起しながら、腕を外したルークはある方向を見る。

「えつと……一応、貴女にも色々とお礼を言いたいことがあるんだけど。俺の顔は見たくないかな？」

「……………ちよ、ちよつと待つて。少し心を落ち着かせるから、三分だけ」

「長えよ。何をビビってんだ」

「あつ、ちよつ！」

抵抗虚しく、ライオットのの手によって霧舞の翼の中から引きずり出されるその人物。

ルビーのように赤い眼で恨めしげに彼を睨んだ女騎士——イーデイスは、やや気まづげにルークを一瞥した。

「直に言葉を交わすのは、カセドラルで別れた時以来……かな」

「……………え、ええ。そうね。人間に戻れたみたいで、良かったわ」

「ん、昔ともちよつと違うから、自信はないけど」

あはは、と指で頬をかきながら、おどけるように笑ってみせる。

合わせてイーデイスもぎこちない笑みを浮かべ、なんとも綱渡りをするような雰囲気だった。

二人は今、ほぼ同一の気恥ずかしさに心を支配されている。

ルークは、北の洞窟で襲いかかったことへの罪悪感、そしてカセドラルで何気なく言い放った一言に。

全ての記憶を取り戻した時、当然あの時の会話も鮮明に思い出している。

(あれば、未来がないことを分かっていたからこそ本音を吐露したようなものだからなあ……)

こうして復活し、改めて顔を合わせると非常にむず痒い。

結果的に、言いたかったことの一割も話せないまま膠着状態に陥ってしまった。

(なんで!! どうして彼の顔を真っ直ぐ見れないの!! 私なんかおかしくない!!)

一方のイーデイスは、同様にカセドラルでの会話と、ルーリッドでの騒動が尾を引いていた。

最初に出会ってから半年の間、ずっと心の中で残留し続けていたルークの一言。

あの時の彼には、自我の消滅という意味では死を間際にした男の、奇妙な力強さと迫力があつた。

その為か、騎士として鋼のように固めていた心に強く響いた無自覚の独白は、強く留まつたのだ。

そして、ルーリッドを襲つた悲劇の最中での復活と再誕。

あの時見たルークの横顔が、鮮烈に瞼の裏へ焼き付いて離れない。

事あるごとに繰り返し脳裏に浮かび上がる記憶と、その度に激しく乱れる鼓動に振り回され、この八日の間ほど心休まる時がなかった。

今もまともに顔を直視できない。一見平静を装つた表情だが、視線がずれているし、口の端が引き攣っている。

(違うから！ 私そんなにチョロくないから！ 大体、話すのもこれで2回目だし！)
(……全力で心の音が俺から逃げてる。結構傷つくな、これ)

動揺を隠そうと躍起になるイーデイス、乱れに乱れた「音」を聞いて落ち込むルーク。

それをずっと傍観していたライオットは、大きなため息を吐いた。

「いつまで見つめ合ってたんだ、お前ら」

「いや、どう会話したものかと思って……」

「見つめ合ってたなんていないわよ、別に」

「つたく、これから一緒に戦っていくつてのにその体たらくでどうする」

「それは……」

「団長への報告は俺がしとくから、一回ちゃんと話し合ってみろ」

「あ、ライオット!」

有無を言わさぬ口調で締めくくり、ライオットは本部のある方角へ歩き出してしまった。

彼の姿が雑踏の中に消えると、残された二人は自然と互いのことを見る。

視線がかち合い、先に逸らしたのはイーデイスだった。

「……ライオットはああ言ってたけど、別に今度落ち着いた時でも」

「い、いえ。別に話しくらい、問題ないけど?」

「そう、か。なら……」

これ幸いと口を開きかけた所で、ルークは周囲の様子に気がついた。

つい先ほどひと騒動起こした為か、チラチラとこちらに目線が寄せられていた。遅れてイーデイスも察知し、僅かに顔を顰める。

「えつと……ひとまず、場所を移すか？」

「……その方がいいみたいね」



発着場から離れた二人は、野営地の端の河川に面した場所へ移動した。

「よつ、と。ここなら変に注目されることもないか」

「そうね。かと言つて、あまり遠くにも離れることはできないし」

距離としては、最も外周の天幕から数メートルといったところ。

緊急招集がかかっても即座に戻る、少し他よりも小高い場所で二人は向かい合う。

「……………」

しばらく、無言の時間が続いた。

時間を置いたことで先程より緊迫感はないものの、思うように話を切り出せない。

そんな二人を見守るように、柔らかな風で草原が揺れている。

「まず、礼を言いたい。ルーリッドの皆を助けるのに協力してくれた事、ありがとう」

数十秒に及ぶ思考の末、まず最初に言葉を投げかけたのはルークだった。

そう言つて軽く頭を下げるルークに、イーデイスは小さく息を呑む。

《雲上庭園》でアリスに謝罪していた時の記憶が蘇るも、それを振り払つて返事をした。

「騎士としてすべきことをしただけよ。闇の脅威に晒されている人々を助けるのは当然なもの」

「貴女がいなければ、被害はもつと拡大していたかもしれない。あの時はいてくれて心強かつたよ」

「そう。まあ……貴方も、すごく頑張ってたと、思う」

顔を上げたルークがきよとんとした。

賞賛されたことを遅れて理解し、照れ臭そうに破顔する。

「必死だったよ。ずっと尻に火がついたような気持ちだった」

「ふ、ふうん。そんな感じには見えなかつたけど？」

「母さん達を安心させたくて、見栄を張ってたから。もう誰も傷つけさせたくないって
思いでどうにか取り繕うのが精一杯で……」

実際、ルーリッドを守り切った後にはあらゆる精神的疲労が襲いかかってきた。

その消耗ぶりには、アリス達もひどく心配したものだ。

どれだけ強大な力を手に入れようと、常に失うことに怯えるこの心はルークのまま
だった。

「でも、今はそれが恥ずべき事だとは思わない。これが俺で、そういう自分のままでいて
いいと言ってくれた人がいた。それを信じている」

「その人のこと、随分尊敬してるのね？」

「ああ。俺の恩人だよ」

現の夢の中、彼女の背中に伸ばした自分の手をルークは見つめる。

かつて今も、ルークに行くべき道を示し続けてくれた。

それがなければきつと、自ら作り上げた心の牢獄から脱することは出来なかったに違いない。

「イーデイス」

「何？」

「——ありがとう。北の洞窟で、俺を斬らないでくれて」

そう言つて、ルークはイーデイスに笑いかけた。

あの日交わした、最初で最後の約定。

愛する人達さえ忘れ、獣に成り下がった時は断罪してほしいという願い。

それを確かめにルーリッドへやって来たイーデイスは、しかし彼を斬らなかつた。

何故見ているだけでライオットに加勢しなかつたのか、未だに彼女自身も分かつていない。

ただ確実な事は、あの結末を思えば傍観という選択は間違つてはいなかつたのだらう。

「お陰でルーリッドを守れたし、大切なことに気付けた」
「大切なこと、つて？」

頷いたルークは、不意に腰に差ししていた《白竜の剣》に手を置いた。

彼に害意がないことは理解している為、剣が引き抜かれるのをイーデイスは静観する。

西へ傾いたソルスに光に反射して、空に鋒を向けられた純白の刀身が輝きを放つ。

「この剣に、アリスを取り戻せるまでキリトとユージオを守ることを誓った。ルークという男は、その為の刃であり、盾であればいいと」

「……冷たい誓いね」

「使命であると同時に、この願いは贖罪でもあったんだ。そして事実、俺は身も心も潰えるまでその役目を全うし続けた」

何もかもを捧げて、呪いのように自分へ言い聞かせ続けた宿命を成し遂げた。

その滑稽な末路こそが、かつて犯した罪への報いのはずだったのに。

「だけど今、俺はここにいる。大事な人達に助けられ、支えられて、今度こそ正しく使命を果たす為に」

友の制裁によつて最悪の罪を犯すことを免れ、優しき母に諭され。

最後に、『彼女』に背中を押されてようやく知ることのできた、一つの真実。

それが今、ルークの心に新たな誓いとして刻まれている。

「愛は、決して一方的なものじゃない。愛することは愛されること。大切な人を守る為に、自分をも守り抜く事が本当にすべき事なんだと教えてもらった」

「……………そう。やっつと、貴方を愛する人達の心に気が付いたんだ」

憑き物が落ちたように純粹なその笑顔に、イーディスも目元を柔らかく緩めた。

初めて自然な表情を見せた彼女に頷いて、ルークは今一度《白竜の剣》の感触を確かめる。

「この真実を絶対に裏切らないと、俺は決めた。今度こそ、愛する全てを守り抜く。それが俺の——竜騎士ルークの、誓いだ」

二度と何かを諦めはしない。

あらゆる喪失を背負いながらも、最後まで立ち上がった、あの黒の剣士のように。

己が身の無力さに嘆きながら、それでも自分にできる精一杯をやり遂げた、青薔薇の青年のように。

彼らの兄だと言うのなら、それに恥じない強い想いを。

穢れなき純白の想いを掲げ、襲い来る絶望の悉くを乗り越えていく。『覚悟』。

それが、今のルークにはあった。

「良かったわ。これならアリスちゃんも、また悲しそうな顔をすることはなさそうね」
儂く笑うあの少年の面影は遠く、己の在り方を定めた「男」の顔になった彼に笑顔を送る。

精悍な姿に少さく胸は高鳴るが、今はそれが少し心地よいものになっていて……

「そうだな。俺はもう、自分に向けられる愛から逃げるつもりはない。そして……俺自身身の愛からも」

次の瞬間向けられた真剣な眼差しに、大きく心臓が跳ねた。

「……………どういう、意味？」

「ルーリッドでの事で、よく分かった。必ず続く明日なんてものはない。自分自身で踏み出さなきゃ、望んだ未来は決して実現しないんだと」

一言一言、噛み締めるように言うルークに、イーデイスの頬は熱を増していく。
その先にどんな言葉が待っているのか、彼女は既に理解していたから。

「だから俺は、生まれて初めて芽吹いたこの想いから目を逸らさないことにした」
それでも止める事が出来なかったのは。

「——イーデイス。俺は、君に恋をしている」

きつと、激しく高鳴る鼓動のせいだった。



「んなっ……………!!?」

「いきなりごめん。でも、また君に会えたら必ず言おうと決めていたんだ」

案外恥ずかしいものだな、と僅かに頬を朱に染めてルークがはにかむ。

だが、イーデイスはその比ではない。

頬どころか顔全体を耳や首に至るまで真っ赤にし、何度も口を開閉させている。

たった一言で思考を滅茶苦茶に乱され、ろくに言い返す言葉も浮かばなかった。

「分かつてる。ダークテリトリーとの戦争を前にして、不謹慎だっていうのは。それに、

まだほとんど初対面のようなものだってことも」

「ちよ、ま、待って……………」

「それでも、初めて北セントリア修剣学院で出会った時から思っていたんだ。——ああ、

なんて美しい人なんだろう、って」

「ッ!?!」

ルークにとってその邂逅は、今でも昨日のことのように思い出せる。

類稀なる容姿だけではない。魂の音を聞く彼にとって、彼女の心こそが何よりも美し

いと感じた。

運命の人との出会いというものがこの世界に存在するのであれば、まさしくあの瞬間

だっただろう。

「与えられた使命ではなく、自ら人界を守護しようという誇り高い志も、アリスを妹のように可愛がつてくれる優しさも……俺の無茶な願いを聞いてくれる慈愛も。君という存在の全てに惹かれている」

「だ、だから一旦待ちなさいってばっ！ 突然そんなこと言われても……！」

「勿論、今の俺程度が到底釣り合うとは思っていない。いくら竜騎士になつたからと言つて、あらゆるものが足りていないだろう」

それでも、と強く続けたルークに、イーデイスはぐつと口を噤んでしまう。

制止の言葉を飲み込まされた彼女は、自分に向けられる銀色の瞳に宿る熱に沸騰しそうだった。

「もし人界を守り、平和を勝ち取る事が出来たら……その先の未来で、君の隣にいても恥ずかしくない男になれたなら。どうか、この愛を受け取つてほしい」

最後まで臆することなく自分の気持ちを口にしたルークは、その場で跪いた。

そして、まるでイーデイスに捧げると言わんばかりに《白竜の剣》を地面へ突き刺す。

そのまま微動だにしなくなった彼を前に、イーデイスの思考は完全に止まった。

誰も見た事がないだろう、怒つていいのか喜んでいいのかわからないような半泣き顔

になつてゐる。

(なんでこんなことになつてゐるわけ?! い、いや、あの時変な質問した私が原因かもしれないけど! でも、本当にそうだとは思わないじゃないっ?!)

もし今の言葉を一字一句同じように、四帝国の上位貴族や皇族に囁かれても確実に一蹴した。

容姿を誉められたのも初めてではないし、これでも数百年生きてるので人格の良し悪しはすぐに見抜ける。

だが、言つてゐるのは他でもないあのルークだ。徹頭徹尾、心の底からの告白だろう。なまじアリスやキリト達に向ける愛の大きさを知つてゐるだけに、その中に自分が入つてゐたことが予想外で仕方がなかつた。

「……………とりあえず、顔を上げて。そんなんじや、まともに話もできない」
ロクに返事も作り出せなかつたので、とりあえず反射的にそう言う。

ゆつくりと立ち上がったルークは、ちよつと不安げな面持ちで口を開いた。

「やっぱり、俺みたいなのは好みじゃないか?」

「違つ……………! と、とにかくお願いだから待つて! 考える時間を頂戴!」

「あ、ああ。そうか、ごめん。なにぶん初恋だから、そういう段取り？　　っていうのが分からなくて」

そんなことを言っただけでまたはにかむルーク。イーデイスの胸がギュツとなった。

自分を内心引つ叩きたくなりながら、爆発しそうになった感情をグツと抑えて身を翻す。

静かなせせらぎを奏でる河川を穴が開くほど見つめて、なんとか心を落ち着けようと試みた。

（そりゃあ好きか嫌いかって言われたら、比較的好印象というか！　一度決めたことをやり通す律儀さとか、気遣いできるところとか、結構頭もいいみたいだし、実力もかなり………つて違うううううううううっ!!）

失敗に終わった。

むしろ余計に混乱を深めることになり、とりあえず振り返って恨めしげにルークを睨む。

不思議そうに首を傾げられた。整った顔の周囲がやけに輝いて見える。

「ぐぬぬぬ………」

「だ、大丈夫か？」

「あなたのせいでしょうっ！」

「す、すまんっ！」

八つ当たり気味に一喝し、その場にしゃがみ込んで両手で顔を覆う。

そのままの姿勢でいること約五分、ようやく彼女は立ち上がった。

振り返ったイーデイスの顔をルークが見れば、先程までの様子が嘘のように平静になっっている。

(これは駄目……いや、心意の音は変わってない？)

なおも荒ぶっているイーデイスの魂を聞いたが、そつと胸の内にとまっておくことにした。

「ひとまず、貴方の話は分かりました」

「本当か！」

「た、ただし！」

一歩踏み込んだルークだったが、素早く突き出された手に動きを止める。

「貴方もさつき言っていた通り、今は世界の命運を分ける戦争が始まろうという瀬戸際！ 私達がそんなことにうつつを抜かしているようでは、兵士達にも示しがないわ！」

「あ、ああ。勿論そのつもりだ。だから……」

「だから、この事は一旦保留！ もし戦争が終わった時、互いに生き残っていたらもう一度話し合います！」

イーデイスの宣言が、草原に木霊した。

ともすれば野営地にまで届いてしまうほどの大声で告げられた言葉を、ルークは受け止める。

じつと見つめてくる銀眼に気圧されて、イーデイスは無意識のうちに生唾を飲み込む。

まるで心を覗き込まれているような感覚に包まれていると——ふっとルークが破顔

した。

「分かった。ありがとう、拒絶しないでくれて」

「え、ええ。せいぜい、ダークテリトリーの怪物達に殺されないで」

「必ず、生きて未来に」

はつきりと頷くルーク。

イーデイスも首肯して、どうにか話を終わらせられたことに安堵し――
「最後に、一言だけ」

次に瞬きした後には、目の前にルークがいた。

もう一度跪くと、驚いているイーデイスが伸ばした手を取る。

そして、優しく手の甲に口付けを落とした。

「——竜は、狙った宝を逃さない。いつか必ず、君の心を手に入れてみせる」
「なあっ……………!?!」

再び硬直したイーディスへ、悪戯げな笑みを贈って。
そうして立ち上がると、野営地の方へと踵を返して歩き去っていく。

「いっ……………この卑怯者お——っ！」

絶叫が、草原中に反響した。

心の行方

一人で野営地に戻ってきたルークは、周囲の目線へ非常に注意した。

それは偏に、途轍もない速さで鼓動を打つ心臓の音が聞こえまいかという不安によるもの。

(……………すごい事、しちまった)

気がつけば自然とああしていたが、こんなに気障な行為をしたのは生まれて初めての経験だった。

やはり周囲の言や自覚しているように、復活した際から思考や性格といったものに少し変化が生じている。

その所以は竜の力の継承によるものだろうが、積極的な自分というものがどうにも気

恥ずかしい。

「しばらくイーデイスの顔は見れないな……」

「おい！ その君！」

どう心の熱を冷ましたものかと思案し始めた瞬間、声をかけられた。

すぐ近くから聞こえた為、足を止めてそちらに振り返ると自分に視線を向けている男がいた。

男はルークの顔を見て驚いたような表情をすると、小走りで駆け寄ってくる。

「やはりか！ その特徴的な髪の色、もしかやと思ったが！」

「……………お前、もしかしてリッターか？」

「うむ！ 学院以来だな、ルークよ！」

そう言って、北セントリア修剣学院の高等錬士の制服に軽装鎧をつけた男は笑った。名をリッター・ザードというその男に、ルークも親しげな笑みを浮かべる。

リッターは、まだルークが初等錬士だった頃に知り合った同級生だった。

とにかく力と知識をつけようと励んでいた当時、図書館で出会った事がきっかけ。

剣より学に至るの好奇心を捧げる彼はルーク以上の本の虫であり、よく居合わせるこ

とがあつた。

座学の内容の理解に少し苦しんでいた折、リッターの方から話しかけてきた事が始まり。

最初こそ上から目線の語り方が鼻についたものの、真面目な気質なことを知って意気投合。

それから講義でも何かと話すようになって、共に勉学に精を出していたのである。

「驚いたぞ。まさかお前がこんなところにいるとはな」

「それは俺の台詞だよ、リッター。まさか人界軍の中に、お前がいるなんて……」

「うむ、知つての通り僕は弱い。しかし、色々とあつてな……」

「色々？」

「端的に言うと、一番上の兄から兵役を押し付けられたのだよ。これでも四等爵家、貴族の義務からは逃れられない」

「それはまたひどい話だな……」

渋い顔をしてしまうと、まったくだとリッターも眼鏡の位置を直して嘆息する。

爵位が上位なほど、人格を構成する両親からの継承データが悪性になっていくのはルークも既知の事実。

四等ともなれば中級程度であり、その性質も強くなってくるのだが、リッターの兄は

まさしくその典型例だった。

「君には昔話したが、全くうちの兄は二人とも馬鹿者でな。ろくに劍の鍛錬もせず、知恵を最低限以上に磨こうともしない。そのくせ貴族の誇りだけは一人前だと言うのだから、手に負えぬよ」

「保身に走った結果、三男のお前が身代わりにされた、と……なんというか、不憫だな」
「ふん、僕は劍士としては二流もいいところだ。戦場に出ては半刻も持たん。今は物資調達と管理の部門に身を置いている」

「懸命な判断だ。俺も数少ない友人に死なれるのは嫌だからな」

リッターはシャーリーやロニエ達のように、貴族でありながら好感を抱ける人物だった。

兄達の醜態を見て育った為か、下級貴族と近い価値観を養い、多少高圧的なことに慣れれば良き友人である。

様相からしても、きっちり整えた焦茶色の頭髮や伸びた背筋、理知的な顔つきには清廉さがあつた。

もし上級修劍士になれば卒業後にうちの街へ来ないか、などと彼に誘われて曖昧に返事したのは、懐かしい思い出だ。

短くも楽しかった学院時代を思い出していると、不意にリッターが眉根を寄せた。

「そういえばルーク。君、罪人としてカセドラルに連行されたそうだな。何があった？」

「……まあ、色々とな。名誉の不名誉、ってやつか？」

「何だそれは？」

「俺が正しいと思ったことを貫いた。そういうことだよ」

「ふむ……正しいことを、か……」

目を伏せて何事か思案を始めた学友に、少し不安になる。

ルークは一度たりともあの時のことを悔いてはいないが、他人がどう受け取るかは別問題。

長い間積み重ねられたアドミニストレータの支配によって、多くの人々は極端に法を破ることに否定的だ。

特に、この謹直さの塊のような男にどう判断されるかと様子を伺うが……

「そうか。ならば、僕は君のことを信じよう」

「……いいのか？」

「なんだ。やはり一方的に非道な行いをしたのか？」

「それは断じて違うと言い切れるが……」

「だったらそれでいいだろう。それに、君やあの二人組の傍付きが、どんなに悪し様に陰口を叩かれようと毅然としているのも見ていたしな。極悪人の側にいた人間が、あんな顔はすまい」

いつそあつけらかんとした程にそう言ってくれたリッターに、ルークは驚いた。

彼は、エルドリエやアリスのようにキリトに強い影響を受けるほど関わってはいない。

せいぜいがルークを介した学友という程度で、ほとんど会話をしていた覚えもなかった。

だというのに、その思考の柔軟性には目を見張るものがある。

「まあ、僕は最初から信じていたがね。君が理由もなく凶行に及ぶはずがないと」

如何なる原因によるものかと考えた矢先、少し視線を外して呟かれた言葉にハッとする。

(もしかして、俺と関わっていたから?)

キリトが現れたことで、自分が劇的な変化を始めたことは理解していた。

彼との二年以上に及ぶ交流はルークという知性に特別な刺激を与え、結果としてある

存在に到達させている。

それは「彼女」や、このアンダーワールドを創造した神々が待ち望んだことだということも、今は知っている。

ではその自分が関わった他の知性には、キリトと接触した際に近似した影響が及ぶのではないか。

まさに今日の前にいる、リッターのように。

「ん？ どうした、変に固まって。何か間違っていたか？」

「あつ……ああ。いや、そうじゃなくて。この半年色々と言われてきてさ。そういう反応はちよつと新鮮で」

「相変わらず変なやつだな。まあ、あれだ。僕と君は友人なんだから、信頼はするよ。一応ね」

「……………ありがとう、リッター」

「うむ。ではまたな。ここにいるということとは、君も参戦するのだろうか？ せいぜい死ぬなよ」

そう言い残して、リッターは立ち去っていった。

彼の後ろ姿を見送りながら、ルークはふと真剣な面持ちとなる。

(……………今の俺が、これからアンダーワールドに与える影響。それはもしかしたら、竜の騎士であること以上の意味を持つものかもしれない)

まだ知らぬ、いつかの未来を想像しながら。



紆余曲折を経て、やっと天幕まで戻ってくる。

運命的な再会が重なった為、一時間も経っていないのにようやくといった気持ちにな

る。

今度こそ二重の垂れ幕をどかし、しばしの我が家となるそこへ足を踏み入れた。

「へえ……結構広いな」

内部は非常に暗い為、素早く神聖術を詠唱して光素を生み出す。

照らし出された天幕には、簡易ベッドが一つ、小さな丸机に椅子、床には真新しい羊革の敷物。

剣立てや木箱も設置されており、必要なものは全て揃えられているようだ。

「至れり尽くせりっていうところか……ん？」

興味深げに見渡していたところ、何やら布で覆い隠された大きな物体が一つ。

円錐型になった天井の中心に吊り下げられたランプに光素を定着させ、それに歩み寄る。

用心しながらそつと濃い青色の布に手をかけ、一息に取り払った。

「……鎧？」

隠されていたのは、整合騎士が身に纏うような全身鎧の一式。

光沢のある灰色に染め上げられたそれは美しくも力強く、高い防御力と天命を持つていることが一目でわかる。

肩当てから垂れ下がったきめ細やかな質感の布を留めるのは、四つの花弁を持つ花の

意匠。

胸当ての部分には公理教会を示す聖十字ではなく、四聖竜と人界を示す紋章が示されていた。

素晴らしいその鎧に見惚れて、もう一度手を伸ばす。

胸当ての表面に指先を触れさせ、そのまま下へと伝わせながらじっくりと観察する。

そうすると、自分の体格にぴったりと合わせてあることを理解した。

「俺の為の鎧……でも誰が……」

よもや、最高司祭カーディナルや騎士長ベルクーリはこんなものまで用意していたというのか。

だが、そうだとすれば何故紋章が四聖竜を示すものなのかと疑問を抱いていると、床へ広がった青布が目に入った。

「もしかして、ライオットか？」

口に出すと、急にそれが正解のような気がした。

このような最高級の防具を作る物質変換術を行使できるのは、竜騎士である彼だけだろう。

「つたく。何から何まで世話になりっぱなしだ」

自然と笑みを零しながら、布を拾い上げて丁寧に畳み、鎧の足元に置いておく。

（いつか、恩返しをしよう。あの時止めてくれたことも含めて）

天幕内の確認を終え、さてどうしたものかと思案する。

一度カーディナル達のところへ行くことも考えたが、思った以上に体が重い。慣れぬ空の旅と、イーデイスの件もあつてそれなりに疲れているらしい。

「一眠りしておくのも手、か……」

自然とベッドへ視線が吸い寄せられ、ルークは腰から《白竜の剣》を外した。剣立てに納め、ベッドに腰掛けた途端にどつと脱力感が解放される。

大きく息を吐き出すと、無事に到着できたことへの安堵が改めて湧いてきた。

そのまま横になろうとした時、ちりんと音が響く。

閉じかけていた目を開けて天幕の中を見渡すが、誰もいない。

「あ、呼び鈴か」

そこでようやく、入り口につけられた鈴の説明を思い出した。

ルークは一念発起して立ち上がり、来客を待たせぬよう速やかに入り口の垂れ幕を上げる。

すると、いたのは制服に軽装鎧を着た小柄な少女だった。

「……………先輩」

「リイ？ 急にどうしたんだ？」

「お夕飯。持つてきました」

そう言つて彼女が掲げたのは、蓋付きの小さな鍋。肘の所には質素な布がかけられたバスケットも下げている。

気がつけば随分と外は暗くなっており、もう夜のとぼりが落ち始めているといつて良い頃だ。

「シチューと、パンと、飲み物」

「持つてきてくれたのか。わざわざありがとう」

「ん」

短く答えたシャーリーに、ふとルークは眉を顰める。

自分を見上げてくる紫色の瞳を覗き込むようにして、何かを確かめた。

「……………シャーリー、何かあったか？」

「……っ……………何で?」

「いや、何だかいつもより元気がないから。もしかして俺のことで、誰かに何か言われたか?」

口にするのとややこしい事になるので控えたが、心の「音」も少し弱々しい。到着したあの時は以前より遥かに強い「音」だったので、殊更に気になってしまう。

そんなルークから表情を隠すように、シャーリーはその場で俯いてしまう。

「……………大丈夫。問題ない」

「そうか? もし困った事があつたら言ってくれ。ちゃんと相談に乗るから」

「……………ん」

「あつ、ごめん。夕食だよな。受け取るよ」

両手を伸ばして鍋を取ろうとすると、指の中からすり抜けていった。

一歩後ろに下がったシャーリーに、ルークは不思議そうな顔をする。

「……………やっぱり、少し話したい。中に、入っていいですか」

「あ、ああ。勿論」

どこか異様な彼女の雰囲気気圧されて、しどろもどろになりながら垂れ幕を横へず

らす。

地面を見たまま、シャーリーは天幕の中へと入っていった。

ルークも後を追いかけて、机の上に鍋とバスケットを置く小さな背中を見つめる。

「……………ここで、いいですか」

「ありがとう」

やはり、何かがおかしい。

数時間前とはまるで違う様子から異変を察したルークは、嫌な胸騒ぎを感じた。

このままでは取り返しのつかない事が起こる。直感したルークは、反射的に言葉を紡いでいた。

「そういえば、驚いたよ。前とは少し見違えて……………」

「——先輩」

……………だが、それはあまりに遅すぎた。

ルークが何かをすべきだったとすれば、それは彼女が現れた瞬間だった。

得体の知れない迫力を内包する言葉に口を噤むと、振り返ったシャーリーは。

「先輩は……あの騎士様のことが、好きなんですか」

どこか、深く沈み込んだ昏い瞳でルークを見つめてきた。



ちりん、と鈴が鳴る。

キリトの様子を見ていたアリスは、顔を上げて入り口に目をやった。

「日に二度も来客とは……今度こそエルドリエでも来たのかしら？」

夕暮れにある少女達がやってきたことを思い出し、車椅子から離れる。

時間が時間なので用心しつつも、垂れ幕を上げれば……そこにはルークがいた。

「兄さん？ こんな時間にどうしたのです？」

「よつ、アリス。ちよつとキリト達の様子を見に来た」

「ああ、そうですか。ではどうぞ」

一言断つてから、彼はアリスが支える垂れ幕を潜つて中に入る。

アリスも戻る。そしてキリトの前に座り込んだルークを見た。

「よう、キリト、ユージオ。長旅ご苦労さん。疲れただろ、今日はゆっくり眠れそうだな」

アリスが知る中でも、格段に優しさに満ちた声。

その横顔は慈愛に満ちている。復活してからいつも、ルークはこんな顔で彼らに語りかけていた。

だが、いつもより少しだけ影が差しているように見えるのは、ランプが天幕の中に作り出す陰影のせいか。

「あ……………」

一方、彼に左手を握られたキリトは少しだけ俯かせた顔を上げて反応した。半年世話をしたアリスにさえついぞ引き出せなかったが、帰ってきたルークには即座に反応したのだ。

それは、片腕と共に彼が心を失った理由である親友が、生きてそこにいることを感じ取っているように。

「あ……………」

「そうか、晩飯は美味かったか。お前は食いしん坊だからな、アリスがたくさん食べさせるのに疲れたんじゃないか？」

「ちよつと、ルーク兄さん」

「悪い、冗談だ」

軽口を叩いた兄に嘆息していると、次にルークはキリトの手の中を見る。

車椅子の上で動かないキリトが、今も抱えているふた振りの剣。

未だ名を持たぬ黒き剣と……ユージオの魂が眠る、青薔薇と金薔薇の剣。

そのうちの一方、《青金薔薇の剣》に触れたルークは、そつと瞼を閉じて語りかける。

「ユージオ。今日も、キリトの側に居てくれてありがとう。俺の代わりにこのお転婆野

郎を見守っててくれ」

懺悔するような、また、絶対の信頼をも内包しているように聞こえる言葉。

じつとそれを聞きながら、アリスはふとカーディナルに聞いた話を思い出した。

（ユージオは今、『青薔薇の剣』と融合することで少しずつ治癒している。そんな神の如き業、バルド殿以外には決して実現しなかったでしょう）

かつてのアリスの記憶の欠片をも内包するあの特別な神器の中で、彼は眠り続けているという。

どんな夢を見ているのだろう。かつての「アリス」と、泡沫の世界で幸せに暮らしているのか。

心意を自在に、それこそベルクーリ達よりも十全に操る彼の言葉は、ユージオに届いているだろうか？

「……夕方に、学院の子達が来ました。キリトとユージオの、後輩だった少女達です」

「ロニエとティーゼもいたのか。彼女達は、どんな風に？」

「涙を流していました。傷ついた二人を見て嗚咽し、悲しんで……彼女達からは、強い愛を感じました」

「そうだな。あの子達は、キリトとユージオに憧れていたから……」
「……………」

少し引つかかる部分はあるものの、アリスは小さく首肯する。

ロニエ達の涙が、キリトラが学院でどのように過ごしていたのかを雄弁に伝えてくれた。

きっと、カセドラルの外壁で自分に何度もバカと言って説得したように、誰より自由に生きていたのだろう。

セルカやルークの想い出話によれば優しく付き合いの良いユージオも、そんなキリトに振り回され、二人で騒ぎを起こしていたに違いない。

そんな二人をいつもうまく扱って、貴族達の悪意からはルークが守っていたのだ。

「…………ルーク兄さん。私達は、彼らが目を覚ますきっかけがあるのではここに連れられました」

「……………ああ、そうだな」

「貴方がお母様や、村の皆の危機を前に蘇ったように。だけど、彼女達を見て…………」

「不安になったのか？」

胸中を言い当てられ、一瞬言葉を詰まらせるも頷く。

「……私は怖いのです。具体的にどうするかもわからないまま、こんな危険な場所に二人を引っ張り出して、なのにどうにかなるという確信だけがある」

「……………帰ってくるさ。あいつらは、そういう男だよ」

「ええ、そうなのでしょね……でも、だからこそ分からなくなる」

ロニエとティーゼには、勇敢な二人の意思を継いで人界軍に参加するほどの強い思いがあった。

ルークと彼らの間にも、血の繋がった家族よりも濃い、確固たる繋がりが存在している。

各々が彼らとの絆を胸に抱き、ここに立つ中で——では、自分は？

「私は、彼らと長く関わったわけではない。貴方達のような、無二の繋がりが無い。だって私は…………」

今ここにいるアリス・シンセシス・サーティという存在は、偽物なのだから。

本来彼らと友情を結んだアリス・ツベルクの体を不当に占拠して、好き勝手している。

（それなのに、彼らを…………キリトを待ち焦がれるこの気持ちは、何？）

人界の為に戦う以外の意思を持つことは許されないはずの心に宿る、淡い熱。その正体がわからなくて、まだ知りたくなくて……だから、とても怖かった。

「……………心つて、不思議だよな」

けれど、彼なら、いつも行く道を照らしてくれた兄ならば、答えを持つのではないか。そんな風に思ったアリスの言葉を、ルークの沈んだ声が押しとどめてしまった。

「いつだって一つの想いじゃ纏まらない。大切なものがたくさん混じり合って、そのどれもを手放したくないと抱え込んでしまう」

「……………兄さん？」

「——俺さ。イーディスに『君に恋してる』って言ったんだ」

瞬間、凄まじい衝撃が心を突き抜けた。

思わずその場で尻餅をついてしまいそうな程の驚愕に、アリスは硬直する。

返事を待っているのか、ルークが黙ったことで数秒間の沈黙が生まれた。

「——っ!!? イーディス殿に想いを伝えた?! ルーク兄さんが!? い、いつですか!?!」

それによってどうにか正気に返った彼女は、荒々しい足取りで詰め寄る。

「彼女が偵察任務から帰ってきて、すぐ。幸い保留にしてもらえたよ」

「で、ですが！ 兄さんがイーデイス殿と交流したのはカセドラルで僅かな間のはず！
いつの間にそのような心境に!？」

次々に言いたいことが星のように浮かんでくるが、兎にも角にも思っただまに口にした。

兄のように思っている幼馴染と、姉のように接してくれた同輩の急接近に心穏やかではいられない。

「実は最初に出会った時から。彼女の心の在り方を知って、人生で初めて〃この人と生涯を共にしたい〃って思ったよ」

「な、なるほど……あの時もう既に……」

熱烈な言葉の数々に、アリスはなんだか動悸が激しくなってきた。

これは応援すべきか、否、そのような情勢ではないと諫めるべきか。

悶々と巡り続けるアリスの思考に楔を打つかのように、ルークは「でも」と続ける。

「俺は新しい大切なものを手に入れるのと同時に、多分失っていたんだ」

「失っていた、とは……?」

「……………リイキ」

重々しく告げられたその名前が、最初誰のものかアリスは分からなかった。

しかし、あの日ルークに剣を届けに来た、今日力強い抱擁を交わしていた少女だと思
い出す。

同時に……………連行する際、彼女がルークに行ったことをも。

「俺はイーデイスが好きだ。一緒にいた時間の長さなんて関係なく、本気で愛しいと
思った」

「……………しかし、あの時彼女は……………」

「……………実は、話しているところを見ていたらしくてさ。さつき晩飯を持ってきてくれた
時に問い詰められた」

「それは……………」

「多分、想像している通りだよ」

色恋沙汰に疎いアリスでも容易に想像できる。それは恐ろしい空気となったのだら
う。

連行した際の二人のやり取りはよく覚えているので、殊更に表情が引き攣る。

「ここに来た時表情が暗いように見えた原因はそれかと、今頃納得した。

「俺は彼女に、イーデイスと共に生きたいと打ち明けた。でも……………」

「もしや、あの子の想いに答えを返さなかったのですか？」

「言おうとはした。だけどその瞬間、前にリイを傷つけた時のことが思い浮かんで……」
また同じ顔をさせるのか。そう思った瞬間、ルークの口は糸で縫い付けたように動かなくなり。

これ以上自分にシャーリーを傷つける権利はないと……しかし、そうやって戒めたのが間違いだった。

「彼女は俺の前から去った。多分、今頃泣かせてしまっていると思う」

「……………どうするつもりなのです。人の心を悪戯に引き裂いたままにする事は、たとえ兄さんだろうと許しませんよ」

「当たり前だ。必ず決着はつける。……………この矛盾しきった心に、折り合いがつかない」

伝えなくてはならないという決意と、傷つけたくないという恐れ。

決して互いに劣らぬその思いがルークの心を締め上げ、今もジクジクと胸が痛む。

「答えは知っている。もう決まっているはずなのに、心はバラバラの方向に向いてる……………本当、厄介な代物だ」

そう言っただけで天井を見上げるルークに、アリスはハツとした。

(私はどうして、この人が完全完璧な英雄だなどと思っていたのだろうか?)

彼もまた、己の想いに苦しむ一人であったのに。

どれだけ凄まじい力を手に入れ、大人びて見えようが、その心は十九歳の青年なのだ。そのことをよく知っていたはずなのに、いつの間にか盲目的に彼の優しさを頼ろうと
していた。

「なあ、アリス。答えを出さなくちゃいけないんだ。俺も、お前も」

「……………はい」

「それがどんなに怖くて、未来がどう変わるのか不安でも……………それでも、俺たちは」

進まなくちゃいけないんだ、という一言が、アリスの胸に強く染み渡っていった。

竜の王

翌朝、ルークは妙な感覚に誘われて目を覚ました。

「ん……」

ベッドから体を起こし、軽く頭を振って眠気を払う。

ある程度意識が明瞭になると、入り口の方へ訝しげな目を向けた。

「何か、騒がしい……？」

天幕の外から、昨日野営地についた時とは違う騒々しさが聞こえてくる。

聞こえる「音」は一様に不安定なものになっていて、大勢が困惑しているのが感じ取れた。

体感と室内を包む冷たい空気から、時刻はまだ早朝であろう。こんな時間から何事かと首をかしげる。

「確かめに行くか……」

原因を探りに行く為、ルークはベッドから出た。

神聖術で生み出した水素で顔を洗い、寝間着を以前カセドラルで入手したものに着替える。

復活と共に修復されていた長衣を羽織り、腰に《白竜の剣》を差すと天幕を後にした。外に出た途端、分厚い幕で遮られていた喧騒が一気に増大。

僅かに残っていた気怠さを吹き飛ばすには十分なそれに、思わず顔を顰める。

しかし、次々に何処かへ走り去っていく人々の切羽詰まったような表情ですぐに異変を察知した。

「ルーク！ 起きたのか！」

「リッター」

偶然目の前を通りがかった学友は、まさに必死といった表情で口早にまくし立てた。

「何があつた？」

「なんでも、大量の竜がやってきたらしい！ 今は河川沿いのひらけた場所に集まっているようだ！」

「竜が？」

「ああ、警戒して騎士様達が集結している！ 君も来た方がいいんじゃないかなー！」
「あ、ああ」

竜と聞いて、何か自分と無関係ではないような予感を感じながらも頷く。

そうして、恐怖と好奇心が半分ずつ同居したような目のリッターと一緒に現場へと急行した。

肉体面では比較的貧弱な学友を気遣いながら、広い野营地の中を走ること十分。
竜が集まっているという場所に到着すると、そこには既に大勢が集まっていた。

まるで昨日の焼き直しをするように、何重もの人垣ができて行く手を塞いでいる。

「すまん！ 通してくれるか！」

神聖術で飛んでもよいが、これ以上混乱を強める可能性を危惧して大声を上げる。

近くにいた数人が胡乱げな眼差しで振り返るが、ルークだと分かると驚いて道を開けた。

そんな仲間が気がついて他の者が振り向き、またルークの存在を認知して引き下がっていく。

一連の流れが幾度も起こり、結果的に最前列まで一直線に道が出来上がってしまった

た。

「ど、どういうことだこれは？ ルーク、君は一体彼らに何をしたんだい？」

「何って……ああ。昨日あの場にいなかったんだな、お前」

疑問符を浮かべるリッターに苦笑しながら、ありがたくその道を通らせてもらう。

一応ついてきた彼と共にいよいよ丘の上に到着すれば、そこにはアリス達がいた。

「アリス！ ライオットも！」

「兄さん！」

「やっと起きてきやがったか」

ひとまず近くにいた二人に声をかければ、彼女達は既に完全武装状態だった。

すぐ側にはカーディナルと、ベルクーリを筆頭にした他の整合騎士も集合している。

皆、これ以上ないほど真剣な眼差しで丘の下の河川をじつと監視していた。

「キリトは？」

「天幕に置いてきました。スワロウ殿がついてくれています。竜達の前に連れてくるよ

りかは安全でしょう」

「そうだな。で……」

彼らが見ているものへ、ルークも視線を投じる。

そこには、夥しい数の飛竜が密集していた。

数頭などという生易しいものではない。目に見えるだけでも百以上、空に滞空するものを含めれば数百にも及んだ。

種類も豊かであり、騎士達の駆る種族だけでなく全く異なる見た目の竜も渾然一体となっている。

その為非常騒がしいことになっており、中には喧嘩をする個体もいるようだが概ね大人しかった。

おそらくは、彼らの中心に鎮座する、ひときわ巨大で立派な竜が理由なのだろう。

しかし、竜など騎士達の従えるもの以外見たこともない兵士達の間には不安が立ち込めている。

「あれは、西帝国の竜の巢の主……どうしてここへ？」

「西帝国のだけじゃねえ、こりや人界中の竜が集まってやがるな。ライオット、お前が呼んだのか？」

「冗談よしてくださいよ团长。それができるならルーリッドから帰還した時に連れてき

てる」

「……当然、我でもない」

即座に否定したライオットとバルドに、ふむとベルクーリが唸る。

そして、最後にこの場へやってきたルークに顔を向けるのはある意味自然な流れだった。

「とすると、お前さんか？ 坊主」

「たぶん違う、と思いますけど……」

断言できなかったのは、目覚めた時に感じた妙な予感が原因か。

実は今この瞬間も、あの竜達を見て胸の中に不思議な疼きが存在しているのだ。

そんな彼らに答えをもたらしたのは、他でもない竜達だった。

話し声が聞こえていたのか、何体かの竜が丘の上へと視線を向ける。

そしてルークを捉えた瞬間——一斉に空に向けて咆哮を上げた。

まるで何かを知らしめるかのようなそれは他の竜にも伝播し、次々とルークを見つけ
て声を上げる。

極めつきには、主がゆっくりと翡翠の瞳をルークへと定めたではないか。

「これは……!?!」

「どうやらお前をご所望らしいな、坊主」

「……みたいですね。行つてきます」

「気をつけろよ、兄弟」

「兄さん、どうか油断しないように」

ライオット達に一つ頷いて、何が何だかわからず立ち往生しているリッターのことを任せる。

素早く式句を唱え、空中飛行の神聖術を発動させると一人で竜達の元へと降りていった。

音もなく空へと浮かんだルークを見て、兵士達が大きくざわめく。

未だにその力を疑問視していた騎士達も、最高司祭にのみ許されたはずの術を行使する姿に唾然とした。

大勢の視線を背に受けて、竜達の目をも一身に集めたルークは、少し迷った末に主の前へと降り立つ。

「……お前が、竜達の主か?」

「……………」

数メルも上方から、湖のように凧いだ瞳が睥睨する。

その目を見上げたルークは、間近に見る主の美しさに心の内で感嘆のため息を吐いた。

(なんて綺麗な竜だ)

すらりと流線的な体軀は周囲の竜達と比べても一線を画して大きく、十分な迫力がある。

限りなく白に近い淡青色の鱗は光沢を帯び、端正と言える顔立ちには気品さえあった。

それとは裏腹に、鋭い形状の角や前肢と一体化した翼の雄々しき、揺れる尾の太さは別格。

心意の力強さもまた、四聖竜を除けばなるほど竜の頂点に君臨するに相応しいもの。

「お前達は、どうしてこんなところに？ 俺に何か伝えたいのか？」
重ねて問い掛ければ、主は僅かに口蓋を開いた。

——イイイン。

刹那、馴染み深い音が耳の奥で反響する。

そして次の瞬間起きたことに、ルークは心から驚愕することになる。

《貴殿が、新しい白き竜……聖なる守護者ですか》

心の中に響く、艶やかな女性の声。

深い知性と落ち着きを感じさせる声に、数秒ほど理解が追いつかず、その場で立ち尽くす。

しばらくして、ハッと目の前の主を食い入るように見つめた。

「……もしかして、お前が話しているのか？」

《聖竜様には遠く及びませぬが、ワタクシも百の齢を重ねている身。人の言葉を解しております》

おそらくはグウィバーの力で通じているのだろう、主の心の声。

アリスと雨縁の様子から意思疎通が可能なことは分かっていたが、ここまで明瞭なものともなると驚嘆するばかりだ。

その感情は意思を介して向こうにも伝わっているのか、主の顔が僅かに綻んだように思えた。

《ご降臨より数日、その存在を常に感じておりましたが、浮き立つ同胞らを纏めあげるのに時間を要しました。ご挨拶が遅れたこと、お詫び申し上げます》

「挨拶って、一体何のこと……」

予想外の事態に動揺するばかりのルークを前に、主は薄く目を閉じ。

そして、優雅な動きで頭を下げた。

前肢の鉤爪を合わせ、長い首を曲げて自分の前に立つた一人の人間に平伏する。それを見た他の竜達も、彼らに近いものから外に広がるようにして鼻先を地面に擦り付けたではないか。

空の者達も一様に頭を下げ、圧巻の光景はさながら空想小説に描かれる神話の光景のよう。

「なっ……!?!」

《我が王、新たな竜神よ。この女王クイーニ、貴方様に永遠の忠誠を》

「俺が、王だって……!?!」

《ワタクシの配下三百、そして各地より謁見に駆けつけた同胞六百余り。全て、貴方様の忠実なる僕。どうぞ、来たる厄災を打ち払うのにお使いください》

あらゆる竜の意思を代弁し、王竜クイーニは偽りなき心意を捧げる。

周囲の竜達から感じる本能的な意思も、揃って純粹な畏敬の念を送ってきた。

王などと呼ばれたことがあるはずもないルークは、それに狼狽えるばかり。

誰しもが、それを目撃した。

人界において権威と力の象徴たる整合騎士が操り、あらゆる生物に勝る最強種たる竜。

彼らでさえ調教の末に心を通わせる無敵の怪物達が、あの少年一人に絶対の忠義を誓ったのだ。

今の彼を知らぬリッターが、一夜明けてなお疑問視していた兵士達が、そして誉れ高き騎士達が。

皆が一樣に悟った。あそこにいるのは紛れもなく人界の希望、その一人なのだ。

「へえ。こいつは面白いことになった」

「思わぬところで強力な助力が得られたの」

「ハッ。流石は俺の好敵手、これくらい派手に度肝を抜いてくれなきゃな」

「……ライオット殿、やけに嬉しそうですね？」

予想だにしない戦力の参入に、最高指揮官たるカーデイナルとベルクーリが笑う。

皆の反応を見て得意げに胸を張ったライオットの隣で、呆れたようにアリスが半目に

なった。

「……………」

一方、彼らから少し離れた場所で様子を見ていた騎士が一人。

イーデイスは、竜達の心を一身に引きつける彼の姿に、どこかぼうつとした気持ちでいた。

「何よ……また凄い所、見せつけてくれちゃって」

頬が少し熱い。胸当てに乗せた手へ、自分の鼓動が脈打つ音が伝わってくる。

正体がわからないその感覚の中で、どうすればいいのかわからずに困った顔をする彼を見つめて。

何故か、その慌てふためく様子にさえ強く心臓が跳ねた気がした。

「い、いや、急に王だなんて言われても……俺は大切な人達を守る為に、この力を手に入れただけなんだ」

《それで良いのです。竜とは己が欲を何より優先するもの。あるがままの貴方様に、ワタクシ達は付いてゆきましょう》

面を上げたクイーニが唸れば、同意するかのように他の竜も嘶く。

本気で言っているのだと理解して、ルークは難しい顔をした。

彼女の言葉が聞こえている訳ではないが、竜達はどのように対応するのか皆が固唾を

飲んで見守る。

しばしの間黙考したルークは、ゆっくりと口を開いた。

「……こうして出会ったばかりの君達に、俺の都合で命を賭けろと無責任なことは言えない。それは、俺の誇りが許さない」

彼の言葉から竜が参戦の申し出をしていたと理解した途端、ざわめく観衆。

ダークテリトリーとの絶望的な戦力差の中、折角これ以上ないほどの戦力が手に入るというのに。

むぎむぎそれを手放すような所業に一部の者が声を荒げようとしたが、立ち上った二つの覇気に即座に飲み込んだ。

「黙って見ている」

最強の騎士達から揃えて告げられた制止——否、命令に、全員が口を噤む。

一括したベルクーリとバルドは、目線を交わすとルークに意識を戻した。

《では、ワタクシ達の力はいらぬと?》

「いや。そこまで自惚れるほど愚かでもないつもりだ。だから、一つ約束してほしい」

そう言って、ルークが右手を伸ばす。

不思議そうに目を細めたクイーニの前に、彼はその場の全ての竜へ宣言した。

「君達が俺に力を貸してくれるというのなら、それはもう共に戦う人界の仲間だ。つまり、俺が守るべき存在ということになる」

だから、とルークは不敵に笑って。

「俺が出来うる全ての方法で、一体でも多く君達を守る。こんな小僧を王と呼んでくれる以上、グウィバーの名に誓って守護してみせるよ」

《……………！》

「クイーニ。俺の為じゃない。君達の未来を掴む為に、共に戦ってくれないか？」

寄り添うような笑みでルークが言い切った時、静寂が訪れた。

詭弁だ、と誰もが思った。

どれだけ言葉を変えても、竜達をダークテリトリーの軍勢と戦わせるという本質は変わらない。

珍妙なことを、と一笑に伏す者がいた。呆れる者も、折角の希望がと悲嘆に暮れる者

もいた。

「大した弁舌じやの」

「ああ、だが……」

だからこそ。

「——その詭弁を貫く者こそが、担い手たりうるのだ」

目を見開いていたクイーニが、再びルークの前に頭を伏せたことに、息を呑んだ。

啞然とする彼らを嘲笑うかのように、兜の下でバルドは薄く笑う。

そんな彼の心には、溢れんばかりに息子を誇らしく思う気持ちがあった。

《謝罪いたします。貴方様を試すような真似をしてしまいました》

「いいさ。貴女も竜達の命を預かる身、警戒して当然だ」

クイーニの鼻先に触れて、ルークは快活に笑ってみせる。

「俺を助けてくれるか、竜の女王クイーニ」

《——御意。冥府の底までもお側に、我が王よ》

彼女が答えた瞬間、周囲の竜達が一斉に甲高い鳴き声を上げた。

まるで彼らの協定を祝福するかのように上機嫌なそれに、ほつと野営地の面々は安堵

する。

ともすれば竜達の機嫌を損ね、ダークテリトリーとの開戦前に壊滅する可能性もあつ

ただ。

張り詰めていた空気が弛緩していく中で、クイーニは至近距離からルークを見て目を弓形に細めた。

《しかし、残念です。御身が真に竜となっていたのであれば、ご寵愛を賜りたかった》
「は？」

そして、心の内でそんなことを言いながらルークの頬をひと舐めた。

騎士達が息を呑む。それは飛竜が番となる相手にする、最上級の求愛行動だったのである。

「……………」

「い、イーデイス殿？ その、顔が些か……」

「何か言ったかしら、エルドリエ？」

「い、いえ、なんでもっ！」

凍てついた雰囲気を纏い、妙に迫力のある笑顔を作るイーデイスにエルドリエは引き下がった。

当の本人も、何故自分がこんなにも苛立っているのか全く理解できない。

できないのだが、頬をルークに擦り付けるクイーニを見ていると妙に不快だった。

「……………先輩」

「シャーリー、大丈夫？」

「たくさん人がいるし、気分が悪くなったらすぐに言つてね」

「……うん」

喧騒に包まれる観衆の中で、一人の少女が友人に寄り添われ、ぼつりと眩くも周囲の声にかき消される。

——ほう。妾の伴侶が宿る男に言い寄ろうとは、あの小娘良い度胸じゃな

「うおっ!?! いきなりなんだ!?!」

突然激しく震え始めた琴剣に、ライオットが声を上げている。

彼方も此方も尋常でない雰囲気、カーディナル達が何とも言えぬ苦笑を見せ合つた。

「ちよつ、俺普通に恋愛対象は人間だから。それに今、好きな人がいるんだよ」

《ええ、ですので諦めましょう。代わりに、これからはワタクシにお乗りください。貴方様であればどこまでもお連れいたします》

「わ、分かった。そつちはありがたく好意を受け取つておく」

《ふふふ。末長くよろしくお願ひします、我が王》

そんな混沌とした空気などつゆ知らず、ルークはクイーニに気圧されるのだった。

心を一步、踏み出して

「軍議は午後から、か……」

カーディナルら竜の群れについての相談を終え、野営地の中を闊歩する。

クイーニ達はルークが責任を預かるところとなった。現在は、草原の空き地へ移動している。

数が数だけに、騎士達が総動員しても抗することは困難な存在だ。その重大性は極めて大きい。

そして、彼女達を新たに戦力として含めた開戦後についての作戦会議にルークは招集されている。

(現在は午前九時十七分。軍議の開始が午後六時。しばらく時間があるな)

《東の大門》の崩壊まであと四日。できる限りのことをしておかなくてはならない。

物資の備蓄や、他の兵士の練度の確認がまず頭に浮かんだが、おそらく会議で詳細な情報は開示される。

ならばもう一度、キリトの様子を見にアリスの所へ行くか。スワロウの診断も聞いておきたかった。

より綿密な協調を図る為、クイーニや他の竜との対話も早急に対応すべき事の一つだ。

「こや……」

ふと、一人の少女の顔が思い浮かんだ。

シャーリー。未だに彼女との軋轢を解消できていない。

目覚めて早々に衝撃的な事態となったことで頭から飛んでいたが、元よりの最優先事項はそれだった。

(開戦が近づくにつれ、状況は切迫する。話をするとなれば、今日しかない)

数秒のうちに思考を纏め上げ、結論を出すと早速足の向きを変える。

誰かに志願兵の天幕の場所を聞こうとした時、後ろから肩を叩かれた。

「どうした、何か困り事か？」

「ライオット。丁度良かった、聞きたいことが……」

聞こえた戦友の声に振り返ると、言いかけていた言葉が尻すぼみに消えていった。そして、不思議そうに首をかしげるライオットの隣に目線をやる。

彼の隣には、女神アドミニストレータの再来かと思紛うような絶世の美女が並んでいた。

170センチを超える長身は抜群の輪郭を描き、それを包み隠すのは東帝国風のやや扇情的な衣装。

切れ長の蒼い瞳には圧倒的な覇気が満ちており、同じ色の紅が塗られた唇や、筋の通った高い鼻も整っている。

だが何よりも目を惹かれたのは、彼女の目尻や肌に浮かぶ蒼色の鱗と、額から後ろへ伸びた一對の角だった。

「……ライオット、その女性は何？」

明らかに人ではない容姿をしていることから、少し警戒しつつも問いかける。

それで得心がいったライオットは、一つ頷いて親指で女性を指し示した。

「紹介する。こいつが俺の神器に宿る蒼き大竜。レヴィアだ」

「彼女が、竜……?」

「この姿は心意の力で人に近いものに変じた姿なんだよ」

「然り。妾達は既に魂だけの存在。姿形なぞ意想次第で思うがままよ」

初めて口を開いて紡がれた声も、また美麗。

それでありながら無二の貫禄を感じさせる声音と、圧倒的な「音」に彼女が竜であるという確信を得る。

グウィバーの生前の姿をそのまま作り出すこともままならぬ自分では、同じ芸当は不可能だろう。

「こうして言葉を交わすのは初めてじゃな、童^{わっほ}。その節は我が伴侶が迷惑をかけた」

「あれは必要な事だったと今では思ってる。だから、もう何も思うところはないよ」

「……ふ。良い目をする。あの戯け者には勿体無いほどじゃな」

即座に言い返すことに感心を唆られたか、レヴィアが薄く笑った。

それさえも妖艶で、イーデイスに心を定めたルークでも胸が高鳴る。

ふむ、と呟いたレヴィアは、一步踏み込むとルークをよく観察する。

まるで品定めをしているように全身へ向かう視線に、無意識に背筋が伸びてしまう。

最後に、もう一度瞳を覗き込まれ……満足げに笑った彼女は身を引いた。

「魂こころも澄んだ色だのう。彼奴が氣きにいるのもようわかる」

「あ、ありがとう……？」

「だが、少々実直すぎるきらいがあるの。これでは女子おなじは泣くじやろうて」

「え」

「うむ、女難が降り注ぐかもしれないぬの。故にこそ……貴様あなたが目を光らせておかなくてはならぬじやろう？」

突然、柔らかな言葉の裏側に冷たいものが入り混じる。

瞬時に体の芯まで凍りつきそうな声音に肩を震わせると、彼女は《白竜の剣》に目をやった。

「聞こえておるのだろう、馬鹿亭主。話がある、出てこい」

「出てこいって、まさか……」

——お前に命じられては、仕方があるまい

脳裏に響く声。直後、《白竜の剣》が輝きを放つ。

野營地のど真ん中で出現するつもりかと目を剥くが、予想に反して放出した粒子は少

なかった。

燐光はルークの隣に螺旋を描き、人型に固まってその形を得ていく。

数秒の後、竜を彷彿とさせる兜と純白の全身鎧に身を包んだ偉丈夫が姿を現した。

「……ふむ。今の我が担い手の心意では、この程度が限度か」

「お前、グウイバーか!？」

「うむ」

鷹揚に頷いた白鎧——人に近い姿を形作ったグウイバーは、レヴィアへと向き直る。

「して、我が妻よ。我に用向きがあるそうだな」

「……用向きがあるか、じゃと?」

何やら得体の知れぬ鬼気を立ち上らせたレヴィアに、ルークの全身が総毛立つ。

笑いながら怒る、という顔を蘇ってから何度も目にしたが、これほど恐ろしいものは

なかった。

「貴様。肉体を失って幾星霜、再び見えた己が妻に対する言葉がそれか? 戯れておる

のなら八つ裂きにするぞ」

「……承知した。心して話をしよう」

本気でそうすると分かる凄みの効いた脅しに、重々しくグウイバーが頷く。

一切口を挟めない雰囲気黙り込んでいたが、少々不安げに半身を見た。

「担い手よ。お前はお前のすべき事をせよ。我は少々、時間がかかる」

「あ、ああ。その……頑張れよ？」

「うむ」

「そういうことじゃ。少し暇をもらうぞ、主」

「おう。好きにやれや」

そうして、二人の竜人は何処かへと並んで歩き去っていった。

堂々と伸びたグウィバーの背中では、どこか哀愁を漂わせているように見えたのだつた。

「で。何か聞きたいことがあるんじやなかったか？」

「あ、そうだ。学院からの志願兵が暮らしてる天幕つてどこにある？」

「それなら北区画の共用天幕だ。誰に会いに行くかは知らんが、後は行けばお前なら見つけられるだろう？」

「ありがとう、助かった」

「おう」

気前の良い笑顔で頷いたライオットは、それから少し暇を意地悪い表情をした。

「まあ、レヴィアの台詞でなんとなく分かつてるけどな。せいぜい後悔を残さねえようにしろよ」

「分かってる。アドバイスどうも」

「じゃ、また後でな」

ひらひらと手を振っていくライオットを見送り、ルークは北の方を見る。

決意を秘めた表情で、シャーリーがいるだろう天幕を探しにいくのだった。



「ルーク先輩、凄かったね……」

「そうね。アリス様から聞いてはいたけど、まさかあんな力を手にしていたなんて……」

共用天幕の中で、ロニエとティーゼは言葉を交わす。

学生の身でありながら人界防衛軍に志願し、現在は補給部隊に所属している彼女達。つい今朝方見た光景は、彼女達の脛の裏に焼き付いている。

「私、竜の大群を見て震え上がっちゃった……これから侵攻してくるダークテリトリーの軍勢には、竜に乗る騎士もいるって話なのに」

「仕方がないよ。だってあれは……どう考えても、別格だもん」

「……………そう。先輩は、特別。私達なんか、遠く及ばないくらい」

そこに、一つの囁きが差し込まれた。

二人は、一番左端のベッドで体を丸めた「彼女」に視線を投じる。

ランプが作り出す影に溶け込むような彼女は、両手で抱えた膝に顔を埋めていて。

「シャーリー……………」

「……………昨日の事、まだ気にしてるの?」

ロニエは隣へ、ティーゼは正面に立ち、問いかける。

微動だにしないシャーリーだったが、その無言が肯定しているようなものだった。

それでも、止めどなく嗚咽を漏らしていた昨晚よりはずっと回復している状態なのだ。

しかし、ルークと竜達のやりとりを見てからというものの、打ちのめされように一層塞

ぎ込んでしまっている。

「……私は、先輩を好きになつちやいけなかった。あんなに凄い人が、振り向いてくれるわけがなかった」

「そ、そんな事ないよ！ シャーリー、凄く頑張つてたじゃない！ 学院じゃ、もう誰も敵わなくなつてたし……」

「何もルーク先輩は、シャーリーのことが嫌いになつた訳じゃないでしょう？ ただ……」

「……ただ、選ばれなかった。私は、先輩が隣にいてほしいと思う人じゃ、なかった」
整合騎士たるイーデイス。そして、四聖竜を除けば最強の竜であるクイーニ。

その他にも、今ルークの隣にいる人物達を思い浮かべるほど、シャーリーの心には影が差す。

誰より努力してきたつもりだった。

いつの日か救い出そうと決意し、神器まで手に入れたというのに、気がつけば遙か先にいる。

追いつけないことは分かっていた。それでも彼への強い愛が、心を支え続けていたの

に。

「……裏切られたとは、思っていない。先輩が愛する人を選ぶのは、先輩以外誰にも決められないから」

「……………うん、そうだね」

「けど……………だけど、もう私は……………剣を、握れる気がしない」

いつか、彼は言った。真に剣を極めるに必要なのは屈強な肉体でも、術技でもない。意思だ。唯一無二の意思が、望んだ全てを叶える力をもたらしてくれるのだと。

しかし、今のシャーリーは完全に挫折してしまっている。身体中に漲っていた剣力は霧散してしまった。

これではもう、ルークへの思いを成就することはおろか、戦乱で生き残る事すら……………でも、いつまでもそうやっていて、本当にいいと思ってる?」

「ティーゼー!」

「つ……………どういう、意味」

唐突に投げかけられた、感情を伴わない声で初めて体を震わせる。

知ったような口ぶりの友人に心がささくれ立ち、声音に怒りが宿った。

「好きな人に、別の好きな人ができて。その程度で諦めて、うずくまって。シャーリーの想いはその程度だったの?」

「やめなつて！ シャーリーだって、好きでこんな風になつてるんじゃない……！」

「……ティーゼには、私の悲しみは分からない」

「ええ、分からないわ。一度失恋したくらいで腑抜けてる、臆病者のことなんて」

嘲るかのように積み重ねられる言葉に、ついにシャーリーの堪忍袋の尾は切れた。

「じゃあどうすればよかつたのッ!? 全然自分が相応しいと思えなくて、苦しくてッ！

ティーゼなんか私の気持ち、分かる筈がないッ！」

弾けるように立ち上がったシャーリーが、ティーゼに食つてかかつた。

その小柄な体のどこにそんな力があるのかというほど、彼女の胸元をきつく掴んだ。

怒りと悲しみの雫で溢れていた瞳は――しかし、初めて見たティーゼの顔に見開かれ

た。

「……分かんないわよ。だって、私の好きな人はもう、二度と会えないかもしれないんだから」

「ティー、ゼ……」

彼女が流していた、一筋の涙。

それは整合騎士アリスによって明かされた、想い人が辿つた結末が故のもの。

最高司祭アドミニストレータに抗った「彼」は、その命を失う瀬戸際で一人の騎士に
よって封じられたという。

物言わぬ剣と成り果て、このまま永久に目覚めず、話すこともできないかもしれない
のだ。

「けど、ルーク先輩は生きてる。ユージオ先輩と違って、ちゃんと戻ってきて、シャー
リーの前にいるじゃない」

「……………」

「ねえ、本当に、それでいいの？ このまま、向き合うこともせずには終わって、いいの？」
みつともなくいじけたままでいいのかと、厳しい言葉で親友を諭す。

自分が永遠に失ったであろうその可能性を捨てることは、どうしても許せないから。
「もう、時間がないんだよ。これから始まる戦争で、今度こそルーク先輩はいなくなつて
しまうかもしれない。シャーリーの方がそうなることだつてありうる」

「……………」

「お願い。伸ばせる手を閉じないで。シャーリーは……まだ、間に合うはずだから」
彼女にだけは、同じ思いをしてほしくない。

自分の胸を掴む、力の緩んだ両手をそっと包み込んで、真正面から視線を交わした。
それに動揺していると、後ろから誰かの手が両肩に置かれるのを感じる。

「ロニエ……」

「私からもお願い、もう一回ちゃんと向き合って。そうしないと……」

今にも泣き出しそうに瞳を潤ませるロニエにも、ハツとする。

決してティーゼだけではない。彼女の想い人も生きてこそいるものの、心を失っていた。

シャーリーだけなのだ。今この瞬間、見える希望があるのは。

親友達はそれを気付かせてくれようとしていた。

「もう一度聞くとよ。本当に、これで終わりでもいいの？」

「っ……そんなの、嫌……！」

吐き出すように、絞り出すかのような声音でそう答える。

次の瞬間、前と後ろから同時に抱きしめられた。

驚いて硬直すると、くすぐすとロニエとティーゼがおかしそうに耳元で笑う。

「やっと思った。いつもの諦めが悪いシャーリーだ」

「……ロニエ」

「全く、嫌われ役なんてさせないでよね。私、こういうの苦手なんだから」

「……ごめん、ティーゼ」

「うん、許す。その代わり、わかってるよね？」

「ん」

どちらからともなく離れた三人は、互いの顔を見合わせる。

「私、もう一度しっかり気持ちを伝える。それで、ちゃんと決着をつける」

「その調子だよ。頑張ってるね」

「私達、応援してるから！」

「ん。私も二人のこと、応援してる」

笑って頷く二人に首肯して、シャーリーは覚悟を決めた。

最後にもう一度、彼女達を抱きしめると入り口の方へ駆け出した。

（もう、迷わない。私は、先輩のことが……！）

垂れ幕を突き破るようにして払いのけ、外に出る。

すると、目の前に誰かが立っていた。驚いて足を止めようにも、既に勢いがつきすぎている。

危ないと口に出そうとした瞬間、力強い手つきで受け止められた。

「つと！ すごい勢いだな」

「あ……先輩？」

天幕の入り口にいたのは、ルーク。

シャーリーを止めた彼は、やや苦笑気味に彼女の二の腕から手を離す。

「そんなに急いで、何か用事でもあったのか？」

「……はい。先輩は？」

「俺は……そうだな。俺も、ちょっとした用事だ」

徐に口元を引き締め、真剣な面持ちになったルークは。

「シャーリー。少し、話さないか？」

その問いかけに瞠目した彼女が頷いたのは、僅か一秒後だった。

これからも隣に

込み入った話になる為、二人はルークの天幕へ移動した。

ロニエとティーゼに見送られて、シャーリーは目の前にある大きな背中を見つめながら歩く。

(……もう一度、言う。今度はいきなりじゃなくて、正面から)

密かな決意を固めているうちに、昨晩来たばかりの天幕に到着した。

ルークは二重の垂れ幕を横にずらし、そのまま支えてシャーリーに振り返る。

「どうぞで」

「……ありがとうございます」

小さな拳を握り、薄暗闇へと踏み出した。

彼女に続けてルークも入幕すると、素早く神聖術を唱えて明かりを灯す。

「寒かったりしないか？ 必要なら調節するけど」

「大丈夫、です」

「そう、か」

ぎこちない言葉を拙く交わし、沈黙。

視線を彷徨わせたルークは、うまい言葉が見つからなかったのか胡乱げな声をあげた。

「あー。とりあえず、どこか好きなところに座ってくれ」

「……はい」

互いに立ったままでは、落ち着いて話し合いもできない。

それなりにしつかりとした作りの椅子はシャーリーに譲る為、率先してベッドに腰掛ける。

だが、そんなルークの気遣いに反してシャーリーが座ったのはベッドの端だった。

少しだけ驚くも、俯いた彼女に立ち上がる気配がないのでひとまず納得する。

「……………」

再びの、沈黙。

まるで時間が止まってしまったかのような静寂が、天幕の中を満たす。

厚布の壁の向こうから聞こえる喧騒だけが、実感をもたらしてくる。

だが、それに甘んじていても何も解決しないことは、ルークもよく理解していた。

恐れや後悔に震える心をぐつと抑えつけ、深呼吸をして心を落ち着けると、口を開く。

「リイ。俺は——」

「先輩」

乾坤一擲の気合いで放った言葉は、それ以上の質量が込められた一言で相殺された。

反射的に留めてしまうと、それを敏感に察した彼女はぐつと膝の上で両手を握りしめて。

「私は……ルーク先輩のことが、好きです」

絞り出すようにひどく小さく、微かに……だが、確かにそう口にした。

大きく息を呑む。あらゆる思考が堰き止められ、ただその四文字を受け止めた。

そこに彼女が込めた感情は、どんな優美に飾った言葉より強い力を秘めていたから。

「初めて会った時、本当は貴族達に囲まれて怖かった」

一言一言吟味するように語り出した彼女の言葉へ、静かに耳を傾けることにした。

「凄く不安で……学院に入ったら、上級の貴族達にもっと嫌な事をされて、大好きな剣も嫌いになってしまいかもしれないって。そう思ってた」

「リイ……」

修劍学院に入学するのは、そのほとんどが義務を課せられた貴族達。

ルーク達のような平民にも門は開かれていたが、その実情はさながら人界の縮図。

特権を持つ貴族達の傲慢な行いが横行し、ある種の無遠慮な悪意に満ちていた。

強かであるように見えて、とても繊細な心を持つ彼女はさぞ恐ろしかったことだろう。

「でも、先輩がいた。私が今も剣を握っていられるのは、先輩がずっと……側にいてくれたから」

そんなシャーリーにとって、ルークの存在がどれほど心の支えになったか。

類稀な容姿と剣才によって、妬みと色欲の目を向けられて育った彼女には、まさしく純白の光。

運命の出会いというものがあるのなら、シャーリーにとってあの瞬間だったのだろう。

大切な思い出のように、慈しみを込めた微笑みで語ってくれる。

その姿は、自然とルークにも同じ笑顔をもたらしていた。

「……少しでも支えになれていたのなら、嬉しいよ」

「……最初は、憧れと安心だった。けどその気持ちは、少しずつ強くなっていったんです」

そつと、自分の胸に手を置く。

ゆつくりと、今この瞬間も高鳴る心臓の鼓動。シャーリーの淡い心を表す恋文に等しいもの。

「ずつと一緒にいたい。他の誰より私がこの光の近くにいて、そして私の知った暖かさを返したい。そんなふうに、思い始めて」

日に日に積もる想い。心の中で紡がれ、結実していく感情の蕾。

大事に育て上げたその答えは——あの日、本音を全て打ち明けたのと共に花開いた。

「私は、きつと……貴方に恋をした」

「……！」

「置いていかれたのなら、追いつけるまで頑張ります。いつか並び立てる日まで、私は剣を握り続けるから」

だから、と彼女は大きく開いていた距離を一気に詰めて。

「私を、ずっと先輩の隣にいらさせてください。貴方の一番に、なりたいです」

万感の思いを込めた瞳で、そう言った。

真正面から受け止めたルークは、じつと黙しながらも決して目線を逸らさない。

だが、内心ではとても驚いていた。

彼女の想いは、ルークがイーデイスに抱いた愛にとっても似ていたから。

(……………まるで運命の悪戯だ)

そんな事を考えてしまうほどに、シャーリーの想いがどんなものなのか理解できて。

……………だからこそ、ルークが告げる答えもとづくに決まっていたのだ。

「……………すまない。リーの想いを受け入れることはできない」

「……………」

「勘違いしないでほしい。君が俺にとってかけがえのない、たった一人の存在だという

のは紛れもない事実だ」

「ならっ……!」

「だけど、それは女性としてではない。キリトやユージオに抱くものと同じ……守りた
い存在としてのものだ」

一秒たりとも目を逸らすことなく言い切れば、シャーリーの瞳が悲壮に歪んだ。
それさえも受け止める為に、怯える自分の心を押さえつける。

語った言葉に嘘はない。

彼女のことを何者にも、たとえルーク自身であろうと二度と傷付けさせないとあの和
解の日に誓った。

その自戒があるからこそ、曖昧な返事や誤魔化しは、絶対にしてはならない事。
「リーの気持ちは分かる。俺もイーディスに、とても似た想いを抱いているから」

「先輩、が……?」

一度頷き、俯いたシャーリーの両肩に手を置く。

「追いつきたい、隣に立ちたい。この想いに一切の遠慮も妥協もしない。そう決めた」

「……………私も、そうです」

「それも知っている。だからこそ、どんなにリイのことが大切でも……答えは変わらな
いよ」

それをしてしまえば、きつと裏切るのは自分の想いだけではない。

否と切り捨てないでくれたイーデイスを、母との約束を……何より、シャーリーを裏
切ってしまう。

彼女を傷つけるのは、悲しませるのは、もうこれで終わりにしよう。

それで憎まれたとしても、ルークが一生背負うべき罪なのだから。

(自分勝手なのはわかってる。けど、今の俺にはこれ以上の答え方ができない)

震えそうになる指先を叱咤して、待ち続ける。

凍てつくような静けさが支配する天幕の中、シャーリーのことだけを見つめ続けて。

「……………わかりました」

「そう、か。……その、リイ。本当にすまな」

「だったら、私も諦めません」

ほつと安堵したのも束の間、続けられた言葉に動きを止める。

驚きの目で彼女を見下ろすと、顔を上げたシャーリーはいつもの無表情を湛えてい

た。

「先輩は、私も大切な人の一人って言うてくれた。それなら、可能性はゼロじゃない」「い、いや待て。それは……」

「私の気持ちが変わるなら、簡単に手放せないのもよく知ってるはず」

「う……」

痛い部分を突かれた。

そんなルークに、弱々しさなど微塵もない眼差しを向けたシャーリーは宣言した。

「先輩は、あの騎士様を好きでいればいい。だけどそれは、私が今すぐ諦める理由にはならない。未来は、まだ決まってるじゃない」

ルークが彼女との明日を望むように、自分も立ち止まりはしないと、訴える。

精一杯の優しさを込めた拒絶は、むしろ彼女の心を燃え上がらせてしまったのだ。

狼狽えたルークのことを、今度はシャーリーが真っ直ぐに見つめる番である。

「いつか先輩に追いついて、守られるだけの存在じゃないって証明する。そして……あの人に向いた心を、私のものにしてみせる」

「なっ……!」

「覚悟して。私は……とても、負けず嫌い」
本気だ。

失恋したことへの強がりではなく、シャーリーは全力でルークを落とすつもりでいるのだ。

なまじそれが一目で看破できでしまう為、どこにも逃げ場が存在しない。

だが、何よりも問題なのは……

(……イーディスに出会っていないければ、こんな問答の余地もなくリイに心惹かれていたかもしれない、ってことだよな)

シャーリーという少女に魅力を感じないかと問われれば、断じて否。むしろ極上ときえ思えるほど。

守りたい者。それはルークにとって、これ以上ないほど愛する者ということも意味するのだから。

聡い彼女は、きっとそんな自分の内心さえも見抜いていて。だから宣言したのだろう。

私は、決して引くつもりはないと。

「少しでも望みがあるのなら、手を伸ばさずにはられない、か……」

「？ 先輩？」

不思議そうに小首を傾げるシャーリーを、じつと見つめる。

これが自分がした選択の結果だというのならば……やはり、受け止めるべきなのだろう。

一つの決意を固めて、諦めるように笑っていた表情を引き締める。

そして、強い光を称える紫水晶のような瞳を今一度見つめ返した。

「よく分かった。それがシャーリーの選んだことなら、俺にどうこう言う権利はない」

「ん。絶対、射止める」

「そう簡単じゃないぞ。何せ、生まれて初めての恋だ。絶対に成就してみせる覚悟がある」

「余裕でいられるのも今のうち。剣士として、女としても、もっと魅力的になつて惚れさせるから」

強気な笑みを、互いに浮かべる。

なんとも奇妙な宣誓だ。誰かが聞いていれば、きつと呆れることだろう。それでも二人の目に宿る意思是、これ以上ないほどに真剣なものだった。

しばらく睨み合いとも見つめ合いともつかぬ視線の応酬を続けた二人は、ふつと破顔する。

「そういえば、随分と背が伸びたな。髪も切ったのか」

「ん、変？」

「いや、似合ってる。シャーリーの活発さがよく出てるな」

「ありがとうございます。先輩もその目、綺麗です」

「ああ、これか。最初は自分でも驚いたんだけどな。父さんに近づけたみたいで気に入ってるんだ」

途端、これまでの空気を入れ替えるように和やかに語り始めた。

些細なすれ違いで生まれてしまった溝を埋めたあの日と同じ、柔らかな笑顔を浮かべて。

かつてのように、あるいは止まっていた時間を進めるような自然さで。

「先輩」

「ん？」

「聞きたいです。カセドラルに連れていかれてから……先輩が、どんな風に戦っていたのか」

「……分かった。でも、生易しいものじゃないぞ」

「ん。それでも、知りたい」

揺らがない目をするシャーリーに、ルークは頷いて語り出す。

自分がどのように戦い、苦しみ、失い……その果てに何を掴んだのかを。

そうして始まった談話は、長い間続いた。

【第七章】戦乱の狼煙

軍議

野営地の演習場に、異様な熱が渦巻いていた。

兵士達が修練に明け暮れ、早朝から日が落ちるまで活気の絶えることのない広場。今も、昼過ぎの演習場には数百人という武装した兵士が集合している。

しかし、誰も修練をしてはいなかった。

「おい、すげえぞ」

「ああ。こつちまで剣気が飛んでくるみたいだ」

「これが、選ばれた剣士の力か……」

円形に密集した彼らの意識は、一様にその中心へ集中していた。

すなわち、激しく剣戟を交わしている灰髪の青年と、小柄な紫髪の少女へと。

「シィッ!!」

「ふっ——！」

少女——シャーリーが疾風のような踏み込みで、不思議な煌めきを放つ小剣を突き出す。

兵士の多くが視認も難しい超高速の一撃。それは寸分違わず^音ルーク^年の心臓と喉を狙う。

負けじと手にした純白の剣……ではなく、似せた形に生成した氷の剣でそれを難くいなした。

的確に外へ外されれば、即座に足の位置を変えて体を沈み込ませ、刀身を地面近くに構える。

そのままルークと氷剣の間に小剣を差し込み、下から頭部を狙い穿つ。

「つとー！」

下顎へ切っ先が吸い込まれる直前、残った左手で刀身に軽く掌底を繰り出した。

刃は顔を逸れ、もみあげの髪を数本刈り取るだけに留まった。そのまま腕を掴もうとする。

「つー！」

しかし、シャーリーは片咄嗟に地面を蹴って空中で体を回転させた。

逃すのとはほぼ同時に襲いかかってきた頭狙いの袈裟斬りに、ルークが上半身を屈めて

回避。

着地してすぐ、返す刀で間断なく右足首を狙う。

すると、初めてルークは大きく足を引き、右からやってきた追撃を受け止めた。

甲高い音と火花が飛び散り、おおっと周囲にどよめきが広がる。

「前より、随分速くなった……！」

「先輩こそ……！ それに、足はどうしたの……！」

「人界一恐ろしい女に、一回斬られて、なっ！」

言い切ったのを皮切りに、氷剣を用いて力点をズラす。

腕を巻き取られたシャーリーが前へ姿勢を崩し、危うく転びそうになる。

しかし、彼女はまた剣を手放すと自ら地面へ倒れ、片手を使って全身を鮮やかに回転させた。

その過程で利き手に剣を握り直し、間合いを取るために後ろへ退いたルークに強烈なサマーソルトキック。

そこから畳み掛け、遠心力をかけた一撃を振り下ろす。

咄嗟に差し込んだ氷剣に、とても少女とは思えぬ重々しい衝撃が浸透した。

(凄い……！ 話すついでに久々に稽古したはいいが、まるで別人だ！)

次々と打ち込んでくるシャーリーの技量に、ルークは内心で舌を巻く。

たった半年の間に飛躍的な成長を遂げた後輩は、本気の殺意を込めた目で睨んできた。

それくらいでないとルークに及ばないことを解っているのだろう。一撃一撃が的確に、致命傷を狙っている。

神聖術で生み出した高優先度の氷剣も、この数分であつという間にボロボロになっていた。

「これも、先輩への、愛あつて、こそっ！」

「嬉しい、がっ！ 心に決めた人が、いるんでなっ！」

盛大な剣戟音に遮られ、二人の会話は外野にまでは届かない。

ただ、無敗を誇っていた少女と渡り合うルークへ驚愕の目線が寄せられていた。

今までこの中の誰一人、シャーリーには手も足も出なかった。

時には神器を持たぬ、下位の整合騎士すら超高速の連続剣技で下してみせた。

それと互角に打ち合うどころか、ルークの方が圧倒的に余裕があるように見える。

「いいぞ！ やつちまえ！」

「竜騎士だかなんだか知らないが、そいつを倒してくれー！」

中には年下の少女に惨敗して自尊心を傷つけられた者もいる為、格好の見せ物だった。

一方で、シャーリーの剣技に惚れ込んで応援を飛ばす声もあり、反応は二つに割れている。

（へえ。流石はあいつの後輩。果ての山脈の監視で本格的に腕を見てなかったが、大したもんだ）

そして、野次馬の中にはライオットも紛れていた。

会議まで暇があつた為、兵士達に手解きでもしようとして来れば、既にこのような状況。

ひとまず観戦を決め込んだが、思った以上の内容に彼も面白がり始めている。

「スワロウのやつが見込んだのも頷ける。いい剣気だ」

「——本当だ。いい傍付きを選んだようで安心だよ」

二人の稽古を注視していると、不意に受け答るような言葉が返ってきた。

反射的に周囲を見渡すが、野次を飛ばす兵士達しか見当たらない。

空耳だろうかと首を傾げて、もう一度ルーク達の方を向いた。

凡そ十五分に及ぶ模擬戦は、佳境を迎えていた。

苛烈に攻めるシャーリーと、完璧にいなしつつ反撃するルーク。まさに一進一退の攻防。

しかしそれも、二人が互いに大きく距離を取ったことで転機が訪れる。

(そろそろ剣が限界だな。リイが決めるとすれば、おそろく……)

氷剣を一瞥したルークは、シャーリーの一挙手一投足を見逃さないようにする。すると、深く腰を落とした彼女は半身を引き、両腕を胸の辺りで水平に構えた。ぴたりと小剣の位置が定まった瞬間——黄昏色の刀身に鮮やかな光が宿る。

「……………」これで、最後」

「ああ。来い」

刹那の、静寂。

二人だけでなく、全てのものが口を閉ざして彼らを見守る。

張り詰めた空気に、誰かが一步引いて靴裏で地面を擦った瞬間——始動する。

「シィッ——！」

最速の踏み込みを経て、裂帛の気迫を秘めた、胴体目掛けての三連刺突。

次に兵士達はその姿を視認したのは、彼女が彼の眼前へ到達した時だった。

一秒もかからずに懐まで潜り込んできたシャーリーの動作を、ルークは見極め——！

「フウッ——！」

眉間、喉、鳩尾を狙った切先を、全て剣の腹で滑らせるように防御。

その上で踊るように回転すると、シャーリーの背後に一瞬で回り込み。

氷剣が白い首筋に添えられた瞬間、一陣の風が吹き荒れた。

最前列の兵士達が体を押され、たたらを踏む。

それでも勝負の行方を知る為、誰もが注目する中——パキリ、と音が響き。

次の瞬間、氷剣が根元から砕け散った。

「引き分け、だな」

「……やっぱり、遠い」

一言交わした二人は、ふっと剣気を解いて得物を下ろす。

次の瞬間、割れるような歓声が演習場を包み込んだ。

口々に称賛や嘆きの言葉を投げかけながら、まるで四帝国統一大会を観たような満足感に喝采する。

二人は揃ってきよとんとし、次に気恥ずかしそうに苦笑する顔を見せ合った。

「いい暇潰しになった。……さて。おい、お前ら！　いつまで休んでる！　早く鍛錬に戻れ！」

同じく、一通り見届けたライオットが手を叩きながら大声で命令する。

それでようやく彼の存在に気が付き、兵士達は慌てて各々の修練に戻っていった。

「これで他の奴らにも発破がかかって……？」

ルーク達へと歩み寄ろうとして、不意に足を止める。

散開していく兵士達の中に、頭から足下まで長い外套を羽織った人物が紛れていた。

唯一露出した口元を満足げに笑わせて、他の者と同じように踵を返す。

(あれは……?)

見たことのない不審人物に、何故か心を掻き立てられたライオットはそちらへ踏み出す。

だが、目の前を兵士の一人が通り過ぎた後……そこには誰もいなかった。

「……………見間違い、か？」

数秒立ち尽くしていたが、幻聴の次は幻覚かと嘆息する。

連日の監視任務で疲弊しているのかと結論付け、再びルーク達に声をかけに行った。



ソルスが闇夜に眠る頃、軍議は始まった。

大天幕の中は決して平穏とは言えない、肌がひりつくように剣呑な雰囲気に含まれている。

発生源は二人の騎士。一人は金華の騎士、アリス・シンセシス・サーティ。

そしてもう一人は、ルークには初対面の女騎士。

波打つような紫がかった黒髪と伶俐な美貌を兼ね備えた、女らしい色気を放つ女性――名をファナティオ・シンセシス・ツィー。

ベルクローリに続く最古参の整合騎士団副長たる彼女とアリスは、互いに気迫のある笑

顔を浮かべていた。

「……アリス、何かあったのか？」

「いいえ。特に兄さんが気にかかるようなことはありません」

「いや、その心の乱れようでももないって事はないだろう」

「勝手に私の心を聞かないでください」

隣で直に圧を受けるルークは、密かに嘆息する。

（まあ、今のこいつが怒りそうな理由は大体予想できるけどな）

おそらくはキリトにちよっかいをかけられそうになったのだろう。

本人は判然としていないようだが、心を聞くことのできるルークが察するのは容易い。

分別がつく彼女であればそのうち切り替えるだろうと、議場に集まった人物を見回した。

「……思ったよりも整合騎士の数は少ないんだな」

総本部に集合したのは、現最高司祭カーディナルと従僕スワロウを錚々たる面々。整合騎士団よりベルクーリ、フアナティオら上位の騎士、及び偵察隊代表のイーディスとライオット、そしてアリス。

竜騎士として、ルークとバルド。皆一様に、人界軍の命運を左右する面子である。

「不甲斐ないことに、わしではアドミニストレータが『再調整』しようとしていた騎士を目覚めさせる事はできなんだ」

「その術式を完全に把握していたのは、アドミニストレータと元老長チユデルキンのみ。資料の類も残されておらず、私の方でも解析を進められませんでした」

「なるほど……だからこそその俺と父さんか」

「うむ」

あらゆるリソースを集中させた整合騎士が勢揃いしない以上、新たに強大な戦力が必要不可欠。

一人で万軍と同等以上の力を有する竜騎士は、まさにうつつつけの相手だったという事だ。

何より、これ以上騎士達の解凍と再調整にかける時間がなかったのだろう。

「幸い、単に凍結されていた騎士を一人だけ目覚めさせることはできたがな」

「小父様、その騎士とは……？」

「《無音》のシェータだ」

質問をしたアリスだけでなく、他の騎士達にもざわめきが広がる。

余程名高い剣士なのだろう。強力な騎士は一人でも多いに越したことはない。

「ベルクーリ騎士長。本格的に動員できる騎士の数は？」

「イーデイスとライオットを含めた四人の騎士が果ての山脈に。カセドラルと央都の管理の為に中央に四人残してる。そいつらを差し引いた十六人が、真正面から奴らと戦える全戦力だ」

「十六人、か……」

ルークは険しい顔をせざるを得なかった。

暗黒軍の総力は五万。

対するこちらは、実戦を経験していない五千の兵士と二十余名の整合騎士団。

頼みの綱の騎士達も、半数は未だ神器を持たず、アリス達に比べると見習いに等しいという。

無論、彼らとて人界最高峰の剣士。ゴブリンやオークの百や二百、容易に斬り捨てられる。

加えて指揮するのはカーディナル達なのだから、絶対に勝ち目のない戦いになるとは言い切れない。

「なんだ、坊主。怖気付いたかい？」

「いえ、そこまでは」

即座に答えた言葉に、ベルクーリは少し目を見張る。

それが一切の驕りや見栄というものがない、冷静な分析の上で成り立つたと思わせる返答だったからだ。

竜騎士。原初の人が生まれた頃より、光の大地を守護せし竜達の力と智慧を授かった者達。

整合騎士ライオットは、暗黒領域の侵略者に対しては《蒼竜の琴剣》を手にしてより、一度も敗北したことはなく。

炎の騎士バルドは、かつて己を傀儡にせんとした、とある女の引き連れた暗黒術師二千を豪剣の一振りで焼き尽くしたという。

そして聞いた話では、このルークという新米の竜騎士も、心意によつて数百の侵略者達の魂を刈り取ったとか。

実際に昨日相対した瞬間、ベルクーリは感じ取ったのだ。

この男は、あの車椅子の少年と同じかそれ以上の力を秘めている、と。

「十分な作戦と物資、戦力の使い方をすれば、一方的に負けることはない。少なくとも、俺はそう考えてます」

「では、別に関にかかるとしても?」

未だに受け入れきれていないのか、やや刺々しい物言いでエルドリエが問う。

ルークはまたしても難しい顔で黙り込んだ。どう言ったものか悩ましいとでも言いただげだ。

「我らの目的が、闇の者達の根絶ではないということだ。霜蛇の騎士よ」

そんな息子の内心を見抜いたようなバルドの発言に、天幕内が騒然とする。

「ど、どういうことか! 貴殿らは人界をダークテリトリーの侵略から守りに来たのではないのか!」

「勿論そうだ。だが、この戦争では双方の損害を最小限に抑える必要があるんだよ」

「双方……?」

訝しむエルドリエ。切れ長の瞳には濃い猜疑心が見て取れる。

詳しい話を聞いていなかったアリスも、やや困惑した面持ちで二人を交互に見やる。

他の者達も小声で何事か囁く中、唯一平静としているカーディナル達に言葉を投げかけた。

「とりあえず、作戦を聞かせてもらえますか」

「うむ」

一つ頷き、カーディナルはファナティオへ目配せした。

頷いた彼女は、ひとつ咳払いをして各々の喧騒を鎮めさせる。

それから、よく通る声音で作戦を語り始めた。

「この四ヶ月、あらゆる作戦を検討しましたが、敵の総攻撃に真正面から対抗することは不可能に近いです。《果ての山脈》のこちら側は十キロル四方に渡って平原、押し込まれば敵軍に包囲、殲滅されるでしょう」

よって、と彼女は鞆の付いた十字の細剣……神器《天穿剣》で地図を示す。

「我々はこの場所。《東の大門》へと続く幅百メル、全長千メルに及ぶ峡谷にて奴等を迎え撃たなくてはならない。ここに縦深陣を敷き、ひたすらに敵を削り続ける事になる。ここままで何か質問はありますか？」

素早く一人の騎士が手を挙げる。

彼女が頷くと、立ち上がったエルドリエは疑問を投げかけた。

「敵が歩兵だけならば、十万だろうと切り倒してみせましょう。しかし、奴らには大弓を用いるオーガもいれば、強力な暗黒術を行使する術師団もおります。その対応は如何に？」

「これは危険な賭けですが……峡谷の底は、昼でもソルスの光が届かない闇に包まれています。つまり、空間神聖力が薄いのです」

「——そこでわしが、開戦と同時に一つ特大の術式を行使して、神聖力を根こそぎ奪う」
平らな胸に手を置き、堂々と宣言したカーディナルに驚愕とも歓喜ともつかぬどよめきが起こった。

アドミニストレータと等しき力を持つ神の代行者。彼女の術式であれば、跡形もなく闇の者達は壊滅するだろう。

しかし、カーディナルはさつと毅然とした面持ちを暗くした。

「じゃが、これには一つ問題がある。一度神聖力を枯渇させてしまえば、しばしの間こちらの術師も動きを封じられることじゃ」

「そこで、大規模な術式による攻撃は諦め、使用する術式は治療術に限定。この野営地に運び込んだありつたけの触媒と治療薬を用いれば、5日は保つ計算です」

「微量ながら、私からも出資させていただきました」

カセドラルに保管されていた全ての軍備、及び数百年間コツコツとスワロウが溜め込

んだ触媒。

当初は3日が限度と計算されていたが、思った以上に物資が揃った為、防衛戦にも希望の芽が出ていた。

「以上が、基本的な作戦の概要じゃ」



「何か疑問はあるか、お主達」

賢者は順繰りに竜騎士の親子を見る。

天幕を炎上させぬ為、身に纏う獄炎を納めたバルドはまるで眠っているように微動だにしない。

文句はないということだろう。次に最も若き騎士へ回答を目線で訴える。

「ルーク、お主はどう考える」

「最善手だと思います。ただ、相手の騎士にも飛竜を扱う者がいたはずですが」

あの始まりの日に、整合騎士に撃ち落とされた暗黒騎士を思い出す。

北の洞窟や、他の人界の果てに存在するダークテリトリーに通じた場所は竜達に守護されていた。

それでも彼らが数百年に渡って《果ての山脈》を超えようとしたのは、空を渡る手段があつたからこそ。

「騎竜部隊については、騎士の一部を空中戦に充てるつもりでいた。じゃが、少し事情が変わった」

「……！ クイーニ達ですね？」

「うむ」

竜の群体という、誰にも予測できなかった強大な戦力の参戦。

カーディナル達はこれを、暗黒軍との圧倒的な兵力差を補う非常に重要なものと捉えていた。

大弓を用いるオーガ族や、巨岩すら易々と投擲するジャイアント族をも凌駕する力になりうる可能性がある。

「彼らはどれほど力を貸してくれそうじゃ?」

「話した限りでは、クイーニを介せば統率を取ることが可能そうです。竜の種類や個体差もありますが、複雑な作戦も実行できるかと」

「それは重畳。ではお主には、戦場にて竜達の指揮を取ってもらおう」
「分かりました」

改めて重要な役目を受け、ルークは身の引き締まる思いだった。

整合騎士達に匹敵する特級の戦力を預かるのだ。自らの采配が人界の未来を左右してしまおう。

無論、指揮の経験などない。ましてや相手は屈強な竜。

極度の緊張に、指先が微かに震えた。

その後、開戦して以降に各隊が取る戦術や騎士との連携、物資の供給等の議論が交わ

される。

幸いなことに、実戦経験の豊富な騎士達の意見と、アンダーワールドに精通するカーディナルの知識によって速やかに会議は進行した。

二時間も経過する頃には具体的な指示までもが決定され、残る準備を進めるのみとなる。

「さて……これで大体は片付いたようじゃな」

「ええ。細かい最終調整が必要となりますが、作戦は固まったと見て良いでしょう」

相槌を打ったファナテイオが、最高指揮権を持つベルクーリに目配せする。

時折意見を挟みつつ静観していた騎士長は、渋い笑みを湛えて深々と頷いた。

カーディナルもそれを見届け……ふと、スワロウの方へ視線を送った。

「皆様。一つ、お伝えしなければならぬことがあります」

不思議とよく通る声でそう言われ、騎士や兵士長達が何事かと意識を向ける。

使者は、躊躇するように一度瞑目し……やや重々しい口調で、宣言した。

「——破滅の主、ロヴィナの使者を暗黒領域で確認しました。かの厄災は、既に目覚めています」

……しん、と議場が静まり返る。

数秒の沈黙が続き、そのうち兵士長らが困惑の入り混じった表情を互いに向ける。

「ロヴィナって……あのロヴィナか？ 三女神様の神話の？」

「あれはお伽話のはずじゃ……実在していたのか？」

「いや、実際に竜の騎士もいたわけだし……」

彼らの反応は、半信半疑といったところ。

無理もない。その忌み名は遙か太古、創世記にのみ記された伝承の怪物でしかないのだから。

しかしそれは、アドミニストレータが作り上げた偽の歴史。カーディナルシステムが産み落とした実在する厄災などと知りようもない。

整合騎士達も、ベルクーリを除いてスワロウの発言に首を傾げるばかりだった。

だが、ルーク達は違う。

座ったままに殺気を発し、直後にそれを強靱な意志力で包み込むと露出を抑え込んだ。だ。

唯一、隣にいたアリスだけは機敏に察して兄を不思議そうな顔つきで見ると見る。

「ルーク兄さん？ どうし……」

一度も見たことがない、畏れと怒りが混同したような横顔にハツとする。

思わず目を逸らして、その拍子にバルドとライオットが同様の反応をしていることに気がついた。

「……………スワロウ。どういうことだ」

凍えるような冷気に等しい声音で、ルークが問う。

ゆるりと視線を向けた使者は、出会ってから最も厳しい表情だった。

「申し上げた通りです。暗黒領域の中枢部に潜入していた最中、皇帝ベクタの隣にその分身……………かの者の意思の欠片に蝕まれた者を見た」

「……………」

まさか、ベクタと手を組んだというのか。じわりと嫌なものが心に忍び寄る。

周囲ではスワロウの大胆な潜入に驚愕の声が上がっているが、それどころではなかった。

「やはりな。ペーリツシユの野郎も、傀儡の一人だったか」

「……………かの者の尋常ならざる力。それ以外には考えられまい」

「その通りじゃ。彼奴は人界にも忍び込み、猜疑心の強いクイネラすら言葉巧みに懐柔した。その懐に潜り込み、貴族達の腐敗と民の盲目化を進めさせておったのじゃ」

騎士達が息を呑んだ。

長年、共にアドミニストレータに仕えていたにも関わらず、あの元老長と双璧を成す男が厄災の使者だと知らずにいた。

それどころか最高司祭の代弁者と尊敬し、その言葉の多くを鵜呑みにしていたのだ。結果的に、知らずのうちに人界の弱体化に加担していたことを自覚して苦々しい顔をする。

「そして今は、ベクタに取り入り完全な復活を目論んでいるようです。おそらく今回の戦争にも積極的に絡んでくるでしょう」

「奴がねえ……確かに、ただならぬものを感じちやあいたが。まさか神話の怪物が化けた姿だとはな」

「正確には意思の断片、ごく僅かな欠片。本体はまだダークテリトリーの地の底で眠っています……微睡むように不確かなものです」

「伝承では、死と嘆きを喰らい、闇の皇帝の再来と共に女神の封印を打ち破り、混沌に目覚め終焉を齎す、だったか……成る程な」

ベルクーリの納得したような目線を受け止め、ルークは無言の肯定を返す。

彼の言によって、ようやく全員が理解した。

何故、人界の兵にも、暗黒領域の怪物達にも必要以上の被害を出してはいけないのか。戦乱が激化し、失われる命が増えるほどに——破滅の化身が、より早く蘇ってしまうのだと。

「ライオット、バルド。ペーリツシユと直接戦ったのはお主達だけじゃ。奴は……どれほどの力を秘めている？」

「怪物、としか言いようがないです。バルドの旦那と二人掛かりで、死に物狂いになってようやく倒せたくらいだ」

「お主達でも、か……」

忌々しげに答えたライオットから、次にカーディナルはもう一方を見る。

人界という枠組みを超え、数百の年月アンダーワールドの全てをその目で見てきた男。彼ならば他に何か知ってははいまいか。

バルドは……巖のような皺を眉間に刻みながら、口を開いた。

「我は長き放浪にて、闇の国をも旅した。そしてある時、奴の首の一つを見つけたが

……」

「だが？」

「……奴の邪気から、一体の怪物が目の前で生まれた。まるで首を守る番人のように、我

に襲いかかってきたのだ」

人と竜を合成したようなその怪物は、太古の昔アンダーワールドに跋扈していた獣達に匹敵する力を有していた。

人の体を持っていたペーリツシユ程ではなかったが、悠久の生の中で指折りの脅威と言って良いだろう。

「番人は倒したが、首を断つことは適わなかった。あの首と我では、属性が違った」

「属性？ 父さん、それは一体？」

「奴の弱点は頭部にある核なのじゃよ。それぞれの首を破壊するには、対応した守護竜でなくてはならん」

ルークの疑問に、カーディナルが説明する。

複数存在するロヴィナの頭部。それには特殊な結界が常に張られており、中和できるのは聖竜の力のみ。

厄介なことに、結界の性質は頭部によって異なり、それと相反する竜では傷もつけられないのだ。

「そうか……だから四聖竜の力を持つ者が揃う必要があった」

「左様でございます、ルーク様」

何があっても生き残らなくてははいけない。たとえば、大切な者が目の前で犠牲になった

としても。

その意味を改めて理解し、ルークはカセドラルでの自分がどれほど焦っていたかを今更自覚した。

「……奴には、分身を生み出す力があると考えてよいだろう」

言い切るのと同時に瞑目したバルドに代わり、ライオットが知らしめるように告げる。

「つまる所——奴は、軍隊を作れるかもしれないってことだ」

三冥将

軍議場が動揺に揺れる。

ライオットがもたらした一つの可能性は、元より圧倒的な暗黒軍を前に瀬戸際で士気を保っていた面々を容易に不安に陥れる。

ふむ、とベルクーリが顎鬚をさすりながら温厚とは呼べぬ眼差しを向けた。
「軍勢、ね。そいつはちつと大袈裟じゃねえか？」

「伝承では、奴は闇の神の降臨と共に目覚めを始める。そして実際に皇帝が暗黒界に現れた今、ロヴィナもまた力を増している可能性はあると俺は見ています」

「なるほどな。神話に基づく仮説というわけだ。だが、根拠としちや弱いな」
ベルクーリの眼差しには推し量る色があつた。

それはライオットという男が、騎士の中でも一二を争う勇猛さでありながら、同じほどこに思慮深いことを知っているからだ。

軽々にこのような発言を現状でするはずはない。何かもつと具体的な背景があるはずだと判断した。

ライオットは、微かに考えるそぶりをすると口を開く。

「……カーディナル様。これから話すことを、ここににいる者のみのもとする許可を。そうでなければ要らぬ混乱を起こす」

「うむ、よかろう。全員に箝口令を敷く。ライオットの語る一言一句、その胸の内に秘めるものと心得よ」

朗々と賢者が命ずれば、緊張の面持ちで全員が胸に手を当てた。

これで善し。カーディナルに目配せを送られ、いよいよ騎士は重々しく口を開く。

「ルーリッドに経つ前のことです。俺は僅かな未練からルークを元に戻す手立てを探し、ペーリツシュの部屋を改めました」

「ほう？ 彼奴の部屋をか。今更何が残っていたとも思えぬが」

アドミニストレータが斃れて後、ペーリツシュの件を報告されたカーディナルは優先的にかの者の居室を騎士達に調べさせた。

片眉を上げた彼女に、しかしライオットはかぶりを横に振った。

「いいえ、あったのです。ただ一つ、このアンダーワールド全てを記した地図が、絡繰と

術によって壁の内に埋め込まれていました」

「地図、じやと……？ そんな大仰なもの、誰も見つけられぬわけが……」
ハツと賢者が悟る。

そうして隣に佇む従僕を見上げると、彼もまた張り詰めた面持ちで主人のことを見返した。

「まさか、改竄か……!? 部屋の極一部にのみ、集中的にデータの隠蔽を……！」
「かの厄災もまた、我が身と同じく世界の理。その程度は容易かった、ということでしょう」

カセドラルは全て、アドミニストレータが作り上げた被造物である。

最高位の権限を用いて作られたそれは構築する全てが膨大な天命と優先度を有しており、並大抵の力では壁の模様一つ変えることもままならない。

女神の写し身たるカーディナルを除き、誰にも変えられず、侵すことのできぬ不変の塔だ。

一体誰が考えようか。

ペーリツシュが世界の破壊者に相応しい権限を用いて、己の居室のデータを書き換え隠蔽していた——などと。

ソルスが夜明けと共に昇ることを疑うのと同義だ。調査した誰一人として思いつかずとも罪には問えない。

「ライオット。お主はどうして見つけ出すことができた？」

「経験に基づく勘に従ったまで、としか。似たようなことをしたことがあつたのが幸いしました」

肩を竦めたライオットを見て、ルークはその腕に装着された手甲に目線を吸い寄せられた。

スワロウの分館へ秘密裏に渡っていた彼にこそ解き明かせたのだろう、と密かに納得する。

「その巧妙に秘された地図には、何が？」

「路みち」です。暗黒界から人界への侵入路が、そこには記されていました」

カーディナル達の顔が強張る。地図に刻まれた字を脳裏に浮かべ、ライオットは淡々と告げた。

それは、光の届かぬ冥府に至らんばかりの、地中深くに張り巡らされた空洞。

それは、渡り切るまでには水竜ですら力尽きるだろう、暗黒界の外れから壁の内さま

で繋がる長い水底の抜け穴。

凡そ並みの生物では生きて渡ることさえ叶わぬであろう、尋常ならざる隠れ路。

「共に神聖文字により、『崩壊と共に』——という一言も」

静まり返った議場の中で、ひゅつと息を飲む音がする。ルークはそれが自分の漏らし
たものか、判別がつかなかった。

ただ、カーディナルが微かに震える声音で問いかけるのを見つめていて。

「……その路の規模は、如何程じゃ？」

「記述によれば、連隊規模までなら容易く」

そんなものを何故、神話の怪物の傀儡たる使者が用意していたのか。

眞実は明白……かの者は備えていたのだ。

支配を悦びとする女神の傍らで人の皮を被り、じわりじわりと人界を己に相応しく腐
敗させ、その力を削ぎながら。

いつしか予定調和の滅びが訪れた時、白亜の円環を真紅の絶望に染め上げんと企てを
巡らせていた。

「——なんという、執念」

たまらず誰かが囁いた、恐怖に塗れた一言。

仮に全身を這い回るような暗い感情を言い表すのならば、それが最も近かったのだろう。

「奴がベクタが出現したことにより、生み出せる分身の数をどれほど増したのかはわかりません。百か、千か。だが、あれが単なる絵空事とは俺には思えない」

「……同感じゃ。これは最優先で対応する必要がある。ライオット、正確な場所と数を覚えておるか」

「無論です」

「よろしければこちらを」

「助かる」

スワロウが差し出した筆を受け取り、地図の前に歩み出たライオットは侵入路を書き込んだ。

「俺が確認したのは、この三箇所。後は不向きと判断したか、あるいは年月の経過で使えなくなつたか。全て破棄されていました」

「西の火山地帯、溶岩の流れる地下空洞と、南の樹海の奥深く。それに……」

「東の大平原にある湖の底穴、か」

示された地点は暗黒軍が全戦力を投入するだろう《東の大門》とは離れた場所ばかり。狡猾な野郎だ。もしライオットが気づいてなけりや、こりやおつ始めた途端に後ろから心の臓をグサリだぞ」

人界軍を背後から強襲することも、無視して都に侵攻することもできる。

一体でも最強の騎士が苦戦する存在だ。軍を成せば、いかに自己保身に走った貴族達が手元に独自の戦力を有していようと蟻を踏み潰すようなものだろう。

そして己を守る力もない民は……もはや、考えるまでもない。

「至急、人界中の『目』をこれらの場所に集中させよう」

すぐさま自分の目であり耳である者達に、移動と監視を開始するよう命令を送るカーディナル。

「……これで良い。少なくとも、知らぬ間に入り込まれる確率は低くなったであろう」
「さて。となると問題は一つだな」

目を閉じた彼女を見たベルクーリは、重苦しい口調で呟いた。

「万が一、ロヴィナの分身が現れた時——どう戦うか、だ」



——同時刻。

暗黒軍最奥、暗黒神の玉座にて。

「——それで。用向きとは何だ」

肘かけに頬杖をつき、「ベクタ」としての威厳を纏うガブリエルは眼前の女を見下ろす。

闇の民であれば竦み上がるだろう問いかけに応えるよう、黒衣の麗女——ペーリツシュの口より、クツと笑いが溢れた。

「いや、何。そろそろ貴様との約定を果たす頃合いだと感じてな」

「ああ、貴様の軍勢がどうという話か」

「そうだ。ああ！ これを忘れていたな。わざわざ私めの些事の為に、このような場を

設けていただき感謝いたします。コウテイヘイカ？」

なんともわざとらしい口調、仕草で慇懃に礼をされる。

ガブリエルは僅かに目を細めた。

一方で、万一の有事の際を考慮してその場に置かれているヴァサゴが強調された臀部に小さな口笛を飛ばす。

「……なるほどな。玉座の周辺から軍を退かせたのは、貴様の軍を呼び込む為というわけか」

「理解が早くて助かる。奴らでは我が写し身達を前に、逃げ惑うより先に恐怖で使い物にならなくなるやもしれんからな」

「大層なことだ」

このアンダーワールドで竜というモンスターが、強力な存在として設定されている事は既に知っている。

これまでの言動からこの女は己の力に余程の自信があるようだが、さて。実際はどれ程かとガブリエルは思索した。

「よかろう。では連れてくるがいい」

クツ、と。持ち上がったペーリツシユの口端が三日月を描く。

ゆるりとその愉快げな顔を皇帝に晒した使者は、両腕を広げると声高に宣言した。

「では、ご覧に入れよう。世界を喰み、滅ぼす——覇者の力をな」
世界にその言葉が開放された、刹那のこと。

どこからともなく、空にぽつりと黒点が現れた。

目を凝らさねば見落とすほどのそれは瞬く間に膨れ上がると、漆黒の暗雲と化して暗黒軍駐屯地を覆っていく。

遠ざけた闇の民達のざわめく声が、玉座まで届いた。

されどガブリエルは尚も硝子色の瞳で、暗雲に金色の雷鳴が轟くのを一言も発さずに見つめている。

グルル……

暗雲の中に、雷鳴とは異なる呻きが混じる。

ズルリと、雷光とは異なる不気味な黄金に輝く、鱗に包まれた腕が幾つも黒雲から突き出された。

それらは迷いなく雲を掴み、その身を引き上げる。

ガギユア!

現れたのは、無数の異形。

竜を人の形、大きさに歪ませたようなこの世ならざる肉体は、見るものを畏怖させる逆立つ輝きに覆われていた。

爛々と輝く眼に瞳は無く、知性や理性もまた有しているとは感じさせない。

「ほう……」

獣性。獣の本性を曝け出したその姿に、感心の声が漏れる。

次々と溢れ返る異形らの、ある一部は檻樓のような翼を広げて降り立ち、またそれ以外は地に落ちた。

天に渦巻き赤き空に蓋を被せ、闇の民を退けた地を埋め尽くす、それはまさに昏き黄金の影。

「我が分身、二二万。そして——」

その内より、三体の獣が玉座の前へと舞い降り、あるいは歩み出て跪く。

「《冥翼ノ竜》、ココニ」

一体は、オーガ族に匹敵する細い長身を六枚三対の翼で包み込んだ異形。

「……………《冥怪ノ竜》。ココニ……………」

一体は、ジャイアント族に迫る剛体を真紅の装飾具で彩り、薄布で顔を隠した異形。

「《冥角ノ竜》。此処ニ」

そして一体は、ペーリツシユの瞳を彷彿とさせる血塗れの一本角を備えた、鎧を纏う異形。

「「我ラ、《三冥将》。闇ノ神ノ御意志ガママニ、遍ク命ニ滅ビヲ齎サン」」

奇怪な声を揃え奏上する、その姿。

（——強い。あの諸侯達に匹敵、いやそれ以上か）

ガブリエルは一目で見抜く。

この《三冥将》と名乗った者達が、ただ言葉を解するだけでなく、尋常ならざる戦力であることを。

他の一般兵卒にしても、一体一体がこの世界で上位の能力値ステータスを持つことを感じ取った。これもスパーアアカウント《ベクタ》に備わった力だろうか。

「此奴らが、貴様にくれてやる『見返り』だ」

「——よかろう。お前の誠意、確と受け取った」

「ありがたき幸せ、と言っておこう。ああ、今日まで待たせたついでだ。一つおまけをしてやる」

ペーリツシユは手元に小さな黒雲を出現させ、そこから巻かれた地図を手元に取り出した。

「暗黒界より、人界に潜入するための秘密の抜け道だ。もつとも使えるのは我が分身のみだろうが、場所を教えてやる」

「抜け道、か……」

「へいへい、ボスの言う通りにしますよつと」

ガブリエルはヴァサゴにアイコンタクトを送った。

偽の暗黒騎士は肩をすくめ、やや乱雑な足取りで近づくと書簡を受け取って中身を確かめる。

隅々まで理解すると、振り返ってガブリエルに首肯した。ダイブ前に把握しておいたアンダーワールドのワールドマップと一致したのだ。

目線だけで了承すると、ペーリツシユに目線を戻す。

「有効活用しよう」

「ああ。せいぜい使いこなししてみるがいい。私の分身だ——人の身では御せぬほど、寧ろ猛だぞ？」

ガブリエルが鷹揚に頷けば、《三冥将》がさらに頭を下げて平伏する。

そうして、また一つ。人界に迫る破滅は、その色濃さを増していた。



シン——……と空気が張り詰める。

ペーリツシュが差し向けてくるやもしれぬ刺客へ、いかにして対抗するか……誰も答えを口にしない。

それが現状でどれほど絶望的なことかを、一人も余さず理解しているからだ。

ただでさえ頭数も練度も心許ない人界軍に、万全とは呼べぬ人数の整合騎士団。一人でも欠ければ、それだけ東の峡谷での防衛作戦は困難となる。

「閣下。発言の許可を」

「フアナティオか。許可する」

「は。肝心なのは、仮にこの三か所のいずれかに覇邪竜の軍勢が現れるとして、実際にどの程度かということですよ」

ハツといくつかの声が重なる。

それは暗黒軍以外の敵が現れる、という時点で停止しかけていた一同の思考を刺激するには十分だった。

「何か情報はある？ 些細な心当たりでも構わないわ」

「心当たり、ね……奴は今際の際に、〃目覚めに喰らうには十分〃と残しました。人界十
万の民を殺し尽くせる数を送ってきたっておかしくない」

「なるほど……ではバルド殿。実際に分身を討滅した実績のある貴殿に聞きたい。ライ
オットの言の通りの場合、いかほどの数が予想できますか？」

「二千もあれば、事足りるだろう」

四帝国中の皇帝や貴族の持つ近衛軍、またかろうじて剣を扱える者を加味した上で、
バルドは応じる。

その脳裏に浮かぶは、かつてその豪剣が切り捨てた数多の敵において最も悍ましき異
形。

「未だ色褪せぬ。己が血肉が焼かれ、引き裂かれようとも止まらず。事切れるまで眼前
の命を破壊せんと暴れ狂う。まさしく死の申し子よ」

「生まれながらの死兵、ですか……それが数千ともなれば、これほど厄介な相手もいな
い」

「故に。彼奴の手先が姿を現したその時は、我が引き受けよう」

間髪入れず。その宣言が、堂々と議場に響き回る。

それは断固たる意志を秘め、圧倒的な覇気は物理的な圧をも伴いびしやりと聞く者の
心と体を打ち据えた。

「彼奴の力の程は知っている。であれば、万であろうと冥府に送り返す事ができるであろうよ」

「っ。たった一人で立ち向かうと？」

「然り。そんな使者の力を借りれば、どこへだろうと赴けよう」

「確かに、私の門は数人が限度。バルド様だけをお連れすることなら、人界の何処であろうと造作もございせんが……」

「待ってくれ！」

多くの者が体に残る覇気の余韻から静観せざるを得ない中で、ルークが勢いをつけ立ち上がった。

「だったら、俺が行く。父さんはこの戦場に残るべきだ」

「できぬ」

「どうしてだ……?」

元より自分は成り損ないと墮し、戦力とは数えられてはいなかった身。だがバルドはライオットを遣わせてでもカーディナル達が欲した絶大な力の持ち主だ。

前線に出るならばそちらの方が理にかなっていると訴えるが——そんな息子を男は見返した。

「我が剣は修羅。他者を顧みぬ破壊者の術理。なればこそ、修羅には修羅を。これが自

明の理というものだ」

バルドは300年の時をただ一人で戦い抜いてきた騎士。共に歩むは竜の魂そののみであつたからこそ、誰かと共に戦う経験には乏しい。

ルークもカセドラルで試練を与えられた際、巻き込まれて焼死しかけていた幼い双子の整合騎士を思い出す。

「でも、今の父さんなら——」

「悪いが俺もそいつは聞き入れられねえな、坊主。お前さんには竜達の指揮をする責務があるだろう」

「っ、それは……」

「ルーク」

迷うように声を震わせた、その時。

一歩前に踏み出した父がその肩に手を置いた。沈み込む重さと、向けられる眼差し、強さに口が閉じる。

「息子よ。お前がいるから、行けるのだ」

「……俺が？」

「お前は我とは違う。刃に誓うは守護。瞳が見定めるは真に正しき義。何者にも恥じるゝことはなく、己が愛する者を守ることが出来る」

「でも……まだ父さんには遠く及んでない」

「断じて否だ。お前の信念は、この胸に宿っていた憎しみを上回っている。そんなお前を置いて、我が命を預ける者は他にいるはずもない」

ハッと顔を振り上げる。

故郷での戦いを経て輝きを取り戻した、鮮烈な銀の眼光。そこに宿るのは一人の騎士としての信頼と……父としての確かな愛。

バルドはルークの頭を一掴みに包むことができる大きな手を両方とも肩に置き、言い聞かせた。

「お前が私を守れ。お前達の背は、私が守る」

「父さん……」

自分が、父を守る。それは考えもしなかったことだった。

もしもこの東の大門での戦争に敗北すれば、闇の民が人界に雪崩れ込み、あらゆる略奪と暴虐の牙を剥く。

当然、どこかに現れるロヴィナの軍勢を相手するバルドにもそれは及ぶ。そうさせない為に戦えと言っているのだ。

「預かってくれるか。ルーク」

「断れるわけないだろ。父さん」

ゆつくりと、決意が定まっていくな。

すっかり胸の内に絡まる迷いを振りほどいたルークの瞳が薄く黄金に煌めき、バルドの瞳を見返した。

「必ず、みんなを守ってみせる。アリスやライオット達と一緒に」

「よくぞ言った。その言葉、我が心に刻むぞ」

「ああ」

互いに首肯し、親子は離れるとそれぞれ戻った。

するとまず最初に、事を見守っていたライオットがハッと笑いをあげる。

「思い直してくれて良かったぜ、兄弟。お前にはここにいてもらわなくちゃならねえ」

「どういう意味だ？」

「こいつはまた俺の見立てになるが、奴はおそらく峡谷の戦場にも戦力を送ってくるだろうからな」

「抜け道だけじゃない、つてことか」

「そういうことだ。まるつと奴の置き土産を信じてやるつもりはねえよ」

抜け道の方に全戦力を投入しかけたと見せかけ、暗黒軍と共に外と内から挟み撃ちにする程度の策略は繰り出してくるだろうと睨んでいた。

自分もバルドもないからこそ、ロヴィナの動向を想定して残る竜騎士であるルーク

がいなくてはならない。

その意見には納得できるものがあつたので、ルークもすぐに頷く。

「もし皇帝の横でしたり顔してるだろう新しいペーリツシユに辿り着いたら、そんな時は二度と湧いてこねえようぶつた斬つちまっていぜ」

「ああ。機があれば逃しはしない」

「うむ。全て、話はまとまったようじゃな」

カーディナルが裾を翻し、手を振り上げて宣告する。

「抜け道への対応は騎士バルドに一任。竜騎士ルークを含め、戦乱を終結させるが為に我らが狙うは闇の神ベクタ！ そして覇邪竜の傀儡たるペーリツシユの首である！ 各々、人界の未来の為、勇気を奮い立たせよ！」

「「はっ!!!」」

一斉に起立し、具足を踏み鳴らした剣士達が一糸乱れぬ礼を示した。

こうして、数時間に及ぶ軍議は終了した。

出陣

天幕の中に響く、硬質な音。

「これを……こう、だったな」

眩きながら、ルークは肩口の鎧を固定する留め具の位置を調節した。

数度のやり直しの末、定められた箇所にはまったりとはまったことではやく違和感から解放されて一息つく。

(着るのは三度目だったのに、まったく。覚束ないもんだ)

苦笑しながら、最後に手甲を取った。

寸分違わず自分の腕に合わせられたそれに、しっかりと指の先まで通す。片方が終われば、もう片方も。

そうして包み込まれた五指を握れば、ガチャリと物々しく音が返ってきた。

「……………」

満足げに頷いた瞬間、どつと湧き出る疲労感。

着けている最中は意識もしなかった、全身を覆う灰色の鎧が一気に重みを増したように思えて深い吐息が漏れる。

着用に費やしたのは、凡そ一時間弱。

それでも、アリス妹分に着方を教わった最初の時よりはずっと上達しただろうと自分を慰める。

「変じゃないよな……………」

どこか誤っているところがないかと、改めて自分の体を見下ろす。

これで鏡でも備えられていれば楽だったのだが、天幕毎ごとにそんなものがあるほど人界軍に余裕はない。

頭を左右に振っていると、パチリと頭の後ろで小さく音がした。

直後に髪が纏まりを失い、襟の上で広がる。振り向いてみたら、切れた革紐がはらりと床へ落ちて光の粒と化すところであった。

「あ……限界だったか」

天命を全うした革紐へ感謝の念を送る。

さてどうしたものか、と視界の両端で揺れる髪を見て思案し、ふともう一度机の上に目を向けた。

薄暗い天幕の中で存在感を放つ、四弁の花飾り。光素を内包したランプに照らされて赤く輝くそれを手に取る。

「お借りします」

断りを入れてから《窓》を開き、花飾りについてはいる紐の天命が十分であることを確認。

髪を束ねようと腕を回し——だが、そこで不幸が起こった。ガシャン！と大きな音を伴って張り出した肩鎧と手甲がぶつかり、途中で止まってしまう。

「うおっ!」

驚いた拍子に、衝撃で指の間から抜け出ていく花飾り付きの紐。

しまったと焦りに顔を強張らせる。床に落ちて欠ける飾りが脳裏をよぎり、慌てて体を反転させかけて——。

「——おっと。危ない」

その前に、軽く背中に添えられた手がルークを留めた。更にはもう一方の手が宙を舞う飾り紐を受け止める。

あまり大きくはない、おそらくは女性だろう手の感触。そして耳元で囁かれた声に、大きく目を見開いた。

「ふふ。少しせつかちなところは相変わらずじゃないか、後輩君？」

「っ!? ル——!」

「こちら。振り向いてはいけないよ」

シー、と。ルーク以外は誰もいるはずのない天幕に現れた「誰か」が戯れる。

半ばまで顔を向けていたルークは、もしこの言葉に従わず見てしまえば「誰か」がそよ風の方に消えてしまうことを直感的に理解した。

ゆっくりと前を向く彼に、「いい子だ」と褒めたその人が背中から手を離す。

「ふむ。これだと自分で結ぶのは難しいだろう。ああ、この鎧を脱いで、また着るつもりだったのかな？」

「……正直、勘弁したいところです」

「では、私に任せてくれ。生憎と君の想い人ではないがいいかい？」

いつだったか、まだお互い学院の先輩と後輩であつた頃のやりとりを思い出す。

確信を得たルークは、花のように鮮やかで美しい魂の音を放っている。『誰か』へと首肯した。

「では、恐れ多くもお願ひしていいでしょうか」

「はい、承りました。なんてね」

ゆつくりと指で髪を梳かれる感覚。

驚くほど滑らかな手つきで一本一本髪を解きほぐしていき、あるべき形に整えられていくのが心地良い。

瞼を閉じ、自分の心の音さえも忘れて身を委ねた。

「前にも増してよく手入れされている。並大抵の貴族の子女では、相手にもならないだろう」

「それでも、前より男らしくなりましたつもりなんですがね」

「だからこそさ。君がちゃんと、君自身を愛せるようになったのが分かる」

「沢山の人と約束しましたから」

「とても良い事だ。私のささやかな助言も役に立つてくれたようだね」

穏やかに紡がれる会話。彼女が消えたその日から過ぎていった月日を感じさせないほど言葉は軽やかだ。

だが、いつだって霞のように儂いその存在が、確かにここに実在していることを信じ

させてくれた。

(……もしかしたら、とは思っていた。母さんがライオットを見つけた経緯を聞いてから、その可能性は考えていたけど)

まさか、本当に彼女が自分の世界から再びこの世界へ降りてくるとは。

今や記憶の中だけにいるはずだった敬愛する人物との再会に、ルークの心は驚きよりも喜びで満たされる。

「後輩君が立派に成長してくれて嬉しいよ。やはり君を信じ、託したことは間違いではなかった」

「……ありがとうございます」

噛み締めるような感謝だった。

その言葉だけにではない。力も、未来も、道標や答えさえも。全てを彼女は与えてくれた。

一言では表し切ることが叶わないほどの想いを、せめてひと欠片だけでも伝えられることを願って口にする。

「こうしてまた話せるとは思っていませんでした。今度は、どうしてここに？」

「可愛がつっていた後輩の顔を見にきた、では駄目かい？」
「光荣です」

きつと悪戯げに笑っているだろう彼女の真意について頭を巡らせる。

掴みどころがなく飄々としているように見えて、その芯には目的と信念を持っている人なのだ。

数刻後に《東の大門》の崩壊が迫ったこの状況で自分の前に現れた、相応の理由が必ずある。

すると、気付く。

「……俺は、貴女のお眼鏡に適う存在になったんですね」

「ああ。今の君であれば、どこに行き、どんなことに直面しようとも乗り越えられるだろう」

「この世界を滅びから救うという約束は果たすつもりです。力の限り、これからずっと」
乱れることのなかった手つきが、ほんの一瞬硬直した。

髪を通して伝わる、微かな感情。

揺れる心の音は、しかしすぐに凧いだ湖面のように戻ってまた手櫛を再開した。

「そうか。少し、残念だ」

「すみません」

「いいや、君が謝ることではない。むしろ私の責なのだろう」

期待に応えられず、恩を返せないことに強く胸が痛む。

ルークの魂は既にこのアンダーワールドに縛られている。剣は翼を齎したのと同じに、*“守護者たれ”*と楔をも打ち込んでしまった。

故に、どれほど心苦しくとも彼女の望むことは叶えられない。

「何か、他に俺ができることはありませんか？」

「では、必ず生き抜きなさい。挫けず、折れずに。君に願うことは、変わらずそれだけだ」

「……はい」

「さて、これで良いだろう」

固く紐が結ばれ、一つにまとめられた髪が流れて背中へ落ちる。

同時に彼女の手が離れていき、ルークは自分の手で触れてしつかりと束ねられているのを確かめた。

「改めて、ありがとうございます」

「どういたしまして。次はちゃんとやり方を覚えておきなさい」

「はは……貴女ほど上手くやれるか分かりません」

「やれるさ。……ではそろそろ、お暇するでしょう」

一步。遠ざかった気配に去るのだと理解して、言葉を贈る。

「これからどうするおつもりで？」

「私も剣を振るってみるとするよ。君達と同じように、君達と一緒にね」

「……あいつには、会いましたか？」

「おや。ふふ、まったく……」

少し間を置いて。退けたはずの一步が、こちらに戻される音がした。

次の瞬間、後ろから両目を塞がれて。

これまでよりずっと近く——耳のすぐそばで、身震いするほど美しい声が囁かれる。

「どうやら、乙女心についてはまだまだ教えなくてはいけないようだ」

一瞬のことだった。

息を呑んだ時にはパツと視界が戻り、振り向くよりも先に気配が消えて。

ついに後ろを見た時には、やはり最初からいかなかったように影も形も残されていないかった。

「……また、いつか」

すっかり初頭錬士に戻っていた顔を凜々しく引き締めて、身を翻す。

白亜の円環が刻まれたマントが大きく広がる。

剣立てから引き抜いた《白竜の剣》を携え、竜騎士ルークは天幕を後にした。

外へ出ると、一人の少女が待ち構えていた。

軽装の鎧に身を包み、腰に履いたのは一振りの剣。戦場でもよく目立つであろう紫の髪と同じ色の目が、迷いなくルークを捉える。

「……先輩」

「リイ」

名前を呼び合い、小さく頷く。

ルークが歩き出し、何も言わずともシャーリーがその一步後ろに追隨して、二人は移動を開始した。

駐屯地は静けさに包まれている。既に人界軍は《東の大門》前に陣形を展開し、ここに残っている者は少ない。

補給部隊を含めた後詰めに先んじ、ルークは竜達の混成軍を率いて第一、第二部隊を追う手筈である。

「待たせて悪かったな」

「ううん。私は先輩の傍付きで、副官だから」

「心強いよ」

騎士に迫る類稀な実力と強い覚悟の上、自分の隣に残ってくれた後輩に本心から告げる。

事実アリスやライオットなどの知己が各々の戦場に旅立った後の駐屯地はどこか寂しげで、シャーリーの存在は頼もしいものだった。

反面、未だに「これでよかったのか」と勇ましい後輩に尋ねたい気持ちもある。

これから向かう先はこの世で最も苛烈かつ、凄惨な戦場。血で血を洗い、憎悪と欲望の渦巻く死の坩堝。

そこにロヴィナの手勢までもが現れば、ルークの戦場はこの戦争の中でも輪をかけて危険なものとなる。

斯様な所に連れて行くべきなのか。

ロニエやティーゼ、そしてキリトのいる補給部隊にいた方が……そう案じる彼に、しかし頑としてシャーリーは譲らなかつた。

勝利も敗北も、生も死も。最後まで自分と共に。陰りを知らない意思を汲み取り、こうして歩んでいるのだ。

真つ直ぐに竜達が待っている川辺へと向かうルークに、シャーリーはふと口を開く。

「キリト先輩達に会わなくていいんですか？」

「……ああ。あいつらとも、別れは済ませた」

この五日、幾度もアリスと四人で食事を摂つては、心残りなどなくなるまで話してきた。

次にキリト、ユージオと会うのは、生きて戦場から帰ってきた暁に。決心した横顔を見て、これ以上は無用と悟つた。

「リイこそ、最後に話す時間くらいはあるぞ」

「私も同じ。ちゃんと帰ってくるって、二人と誓い合いました」

「そうか。じゃあ、守らないとな」

「ん。守る」

同時に笑みを浮かべた。彼らは互いにどちらとも意味で言ったのか分かつていた。

程なく、河川の近くにまでやってくる。

竜達の為に川辺に作られた急拵えの第二発着場。その入り口のようになっている二つの天幕の間を通り抜けた。

その瞬間、ぶわりと全身を撫ぜる分厚い風。

黄昏色に染まった空を揃って見上げると、さながらもう一つのソルスのごとく輝きを放つ白がそこにあつた。

ゆるりと振るわれる翼で旋風を巻き起こしながら現れたるは、竜の女王クイーニ。

堂々とその威容を見せつけながら、幼子ほどもある鉤爪で地面を掴んで降り立つた彼女はこちらを見下ろした。

《お待ちしております。我が王よ》

「クイーニ。調子はどうだ？」

《王と共に大いなる戦いへ身を投ずることのできる幸福に、我が身、我が魂。打ち震えて

ございます》

「ありがとう。だが、気張りすぎなようにな」

《御意に》

クイーニが姿勢を落として寝そべった。

予備の飛竜の鎧を幾つも錆潰して作られた鎧に包まれた体の、翼の付け根の間には人間を三人は乗せられる鞍が装着されている。

ルークは垂れ下がっていた手綱を掴み取り、鞍の縁に足をかけて苦もなく騎乗した。

「リイ」

「はい」

差し伸べられた手を掴み、続けてシャーリーが乗り込む。

直後、二人を背にその重さなどまるで感じさせない挙動でクイーニが身体をもたげたことで、慌てて手綱を握り直した。

「つとー！ 大丈夫か？」

「っ。平気、です」

気丈に答えたが、少しだけ怖かったのだろう。きつく胴に回された手に自分のものを重ねて安心させる。

崖の縁に移動したクイーニの背中から見渡せば、竜達が一様にルークのことを見ていた。

飛竜や地竜、総勢九百に及ぶ瞳には整合騎士に劣らずの闘志が揺らめき、鱗を撫でる

鬪争の気配に昂っている。

それを瀬戸際で押し留めているのは、王の御前故に。号令を今か今かと待ち望んでいるのは一目瞭然だ。

《王よ。御言葉をいただけませんか》

「わかった」

背後のシャーリーを見る。

彼女は両手を離すと、もう大丈夫だと頷いて示した。それを見たルークは掴むものになくなった手を《白竜の剣》にかける。

——イイン。

震える愛剣を、鞘から払う。

涼やかな抜剣の音に竜達がいよいよと瞳孔を開き、僅かな理性で閉じていた顎門を僅かに開いた。

そんな彼らへ、切先を天高く掲げたルークは高らかに声を張り上げる。

「勝利と、未来を！」

——ギユアアアアアツ!!!

咆哮が、解き放たれた。

折り重なる野生の重奏に地が震え、大気がビリビリと波打ち、世界の全てが恐れ慄くよう。

己の叫びで耳が裂けんばかりに猛る彼らに、ヒインと《白竜の剣》を《東の大門》の方角に向けて命令を下した。

「全軍、大門へ！」

王の許しが出た。

竜達は我先にと翼をはためかせ、強靱な四肢で土煙を巻き上げて戦場へ向かった。

ルオオオオン——!!

負けじと空を射抜かんに嘸いた女王が、絢爛な群青色の翼を広げて飛び立つ。力強い羽ばたきで空を駆け上がり、あつという間に駐屯地を豆粒ほどの大きさにしてしまった。

それだけに飽き足らず、空の同胞達を悉く追い抜かし先頭へ辿り着く。それまでに一分も必要とはしなかった。

「……凄い」

「ああ。しつかり捕まってる、リイ！」

「ん……！」

茜の空に夥しく浮かぶ黒点。その先端で、竜騎士の剣が白線を描いた。

終末の崩門

《東の大門》。

いつしか言葉を持つ者達からそう呼ばれた黒壁は、生まれ落ちた瞬間ときに落とし始めた砂時計の最後の一粒を落とさんとしていた。

明々と輝くソルスが最後の茜を引き連れ、深く切り立つ峡谷の向こうへと消えていく。

六千弱の人界守備軍、及びに七万の暗黒侵略軍が看取る中、世界が闇夜に包まれた刹那。

《東の大門》は、断末魔を轟かせた。

それはまるで、神代より生き続けた最後の古獣が己の死を生きとし生ける者の心に刻みつけるように。

それはどこか、高らかに終末の始まりを世界中へ知らしめる大鐘の如く。

中心に雷鳴の如く大亀裂が生じ、恐るべき速度で縦横無尽に広がっていく。内側から溢れ出してくるのは目を眩ませる純白の光。

誰もが見上げるその光はやがて炎と成り、轟々と大門の表面を燃やしながら文字を描いた。

【Final Tolerance Experiment】——意味を理解するのは、

戦場に僅か五人。

「オオウ……こいつはすげえ。そこいらのVRじゃ滅多にお目にかかれねえ光景じゃねえか」

その一人、ヴァサゴは指揮用戦車から身を乗り出して笑った。

「よう兄弟、AIを確保するよりもこの映像技術をいただいた方が一儲けできそうだとは思わねえか？」

「残念ながら、これを映像として残すことは不可能だ。ポリゴンではなく、STLを通し

て見る幻フアンタズム 想なのだからな」

同じように荘厳とさえ言い表せる崩壊を目に焼き付けていたガブリエルはすげなく答える。

任務中でなければその美しさをいつまでも眺めているところだが、数秒で意識を切り替えると玉座から立ち上がった。

十候が一人、暗黒術師ギルド長デー・アイ・エルが献上した大髑髏の前に立つ。

音声を伝達する機能を持つそれを通し、「闇の神ベクタ」として声を張り上げた。

「聞け、闇の国の将兵らよ！ 古より待ち焦がれた時だ！ 触れるもの全てを奪え！

生きとし生ける者を殺し尽せ！ —— 蹂躪せよ！！」

ウオオオオオ——！！

小鬼が、巨人が、狼人が。戦士が、騎士が、術師が、歓喜と欲望を孕みに孕んで咆哮する。

鈍色に輝く槍や蛮刀を掲げ、足を踏み鳴らしてはガラガラと血走る目を怒らせた。

(よく吠えるものよ。瞬きの後、絶えるとも知らずにな)

心底嘲り笑う女を傍らに、その全てが目に見えずとも全身で感じた皇帝は黒毛皮を翻す。

「第一陣、突撃開始!!」

下された最初の命令コマンド。

さながらウォー・ゲームをプレイする気分で放ったそれに、確かな魂を持つ彼らは己の意思を以って呼応する。

平地ゴブリン、山地ゴブリン、共に五千。ジャイアント隊一千、オーク隊二千——しめて一万三千の大群が、早くも八割が消失している大門へと走り出した。

「戦闘準備開始！ 第一部隊、抜剣！ 修道士隊、治療術準備！」

人界軍副長ファナテイオは、鋭く声を発する。

じやりいん！ と重なる三百の音。鞘から姿を現した白刃が篝火と鎧に照らされて眩く出張する。

じとりと掌から滲み出て鎖帷子を濡らす汗と、早鐘を打つ心の臓。

血を知らぬ兵士達は、必死に今にも逃げ出そうとする体を叱咤してぐんぐんやって来る傭人達を見ていた。

彼らの心を支えるのは、先頭に立つた三人の整合騎士達。

その一人、右翼隊を率いる《熾^シ弓^{キウ}》デュソルバート・シンセシス・セブンが腕をもたげた。

びたりと愛弓をゴブリン達へと向け……一度、彼の視線が揺れた先は革手袋に包まれた左手の薬指。

——起きて、あなた。朝よ……

淑やかに、柔らかく、痛く。

過ぎる声^よが臉の裏を掠め、泡沫のように胸の奥底へと染みて消えていく。それを噛み締めながら、右手で矢筒から一気に四本の鋼矢を取り出した。

——その夢を見始めたのは、いつからだっただろうか？

（誰かが、眠る我を呼び起こす。指輪の嵌った白く小さな手を我の手に重ね、心安らぐ微笑みを伴って）

夜明けの前、自分の中に現れる一つの幻。

日暮れ無き無限の日々の中、いつか天上へ舞い戻った時、あの誰かに会うことだけを願いながら己を法と秩序の番人として律してきた。

だが、その夢はまやかしと打ち砕かれたのだ。三人の罪人と、他ならぬもう一人の最高司祭によって。

我が身は天の使いに非ず。誰かから命を授かり生まれ落ちた、血の通った人であると言おう。

ああ。ならばもう、あの小さな手は、向けられた微笑は——遠く昔に失われたのだ。
“デュソルバート・シンセシス・セブン”は、己を教会の機関ではなく人間たらしめる泡沫を失った。

それでも今、この戦場に立っている。

潰えた願いの残滓——自分が愛したのであろう “誰か” と過ごした儂い世界を、守る

ために。

「エンハンス・アーマメント！」

薬指に嵌った指輪の感触から意識を断ち切り、声高に詠唱する。

呼応した愛弓の周囲にはいくつもの丸窓が浮かび上がり、紅蓮が灯った。

轟々と燃え盛るそこに矢筒から取り出した四本の鋼矢を番え、先端にまで紅蓮が伝播したのを確認して引き絞る。

そして、ゴブリン軍の先頭との距離が二百五十、三十、十五——ついに、二百を切った瞬間。

「整合騎士、デュソルバート・シンセシス・セブンである！ 我が前に立つ一切、灰燼に帰すと知れ——！」

存分に隠し続けた《愛》を込め、限界まで溜めた炎矢が解き放たれた。

音を破り突き進んだそれらは闇の国の者達に炸裂し、盛大に炎の花を咲かせることで
始まりの狼煙を上げた。



響く獣声と爆裂。

萌芽の余波は第一部隊の遙か後方、その全てが竜で構成された第三特殊部隊にまで届く。

微かに肌を打ち付けられたシャーリーは慄然とした。恐怖とも、武者震いともつかぬ感情に《鬼蜂の剣》へ置いた左手が力む。

「――始まったか」

直後、ハツと硬直した意識が解放された。

遠い最前線に飛んでいた意識を目の前にやると、そこには一つの背中がある。

地に《白竜の剣》を屹立させ、円環を背負ったルークには一つの怯えもなければ、動揺もない。まるで鎧の上にもう一つ何かを纏っているようだ。

右に控えるクイーニもまた、涼しげな横顔で戦場を捉えていた。

更には背後の竜達から漂う濃厚な戦意に、いよいよくつと小さな唇を引き締めたシャーリーは胸を張り直す。

(私だけ、怖気付いていられない)

自分が今、誰の側にいるのか。それさえ思い出してしまえば、感情を律することは造作もなかった。

すつかり元の落ち着きを取り戻す心の音。

ふと少しだけ面に安心を浮かべたルークは、それを見る。

峡谷を水路に見立てるとすれば、満たすだけでは飽き足らず盛大に弾けさせんと押し寄せる暴流。

先端が数十と削れるも、勢いを失することなく迫ってくる様は一つの巨大な生物とさえ錯覚する。

（——壮観、と感じてしまうのは。この耳が受け取るものが彼らの魂だからだろうか）

伸ばされた巨獣の舌先は目を背けたくなるほど黒く、しかし欲望へ突き進む一貫した美しさをも放つ。

上回らねば、覇邪竜が目覚めるより前に人界が滅びるとわかつてはいる。

それでも……強固な“想い”を源とする一点において、彼らが自分達と同質の存在だった故に。

（大丈夫だ。ここにいるのは人界最高の戦士達。彼らを信じて、俺は俺のすべきことをするまで）

ルーク率いる第三特殊部隊の役割は、大きく分けて二つ。

一つは人界守備軍の上空で大術式を詠唱するカーディナルの護衛。これには飛竜の一部とアリスが付いている。

もう一つは、ロヴィナの手勢——軍議にて決定した呼称においては、“邪竜軍”が出現した際に応戦することだ。

それ以外の行動は初戦では認められていない。

未知数の邪竜軍を警戒し、一体でも多くの竜を温存する方針となった。万が一の事態が起これない限り、ルークは何があろうと動かない。

目の前で何十と死が積み重なり、魂の打ち砕かれる音が耳の奥に振じ込まれ。それに酷く胸が痛もうとも。

それを見届ける決意を胸に、凜と眼差しを最前線へ——中でも一際研ぎ澄まされた心意へと向ける。

最前線中央部隊。

ファナティオは、デユソルバートの放つ炎矢によって次々と剥がされていくゴブリン達の更に奥を見据えていた。

携えた神器《天穿劍》の石突を右肩に、刃を水平に保ち、切っ先を左手で支えた姿は射手を彷彿とさせる。

定めた狙いは、小鬼達より何倍もの体躯を持つジヤイアント族。その中でもたった一体。

（奴らはたった一つの掟によつて統率されている。 “力ある者に従う”。 それこそが闇の国を統べる理）

強者への畏怖と服従。

これによつて各部族、そして今や皇帝ベクタの下で一つとなった暗黒軍は統率されている。

とりわけ、ベクタの降臨以前は最高権力者であった《十候》の統率力は各部族を纏めていただけに凄まじいものだ。

そこに勝機がある、とファナテイオは見ていた。

指揮官として戦場に出ているであろう《十候》を討てば、それ以外の多くは一気に纏まりを失つて烏合の衆となるだろう。

（かつて、私達もそうだった。だが、我が輝きはもはや偽りの誉れに依らず。ただ、閣下と共に歩むのみ！）

彼女を突き動かすものも、デュソルバートと同じく《愛》という想いの力であった。慎重に、冷静に。峡谷の彼方まで見通す思いでつぶさにジャイアント達を観察し、その存在を探す。

（——見つけた）

眼差しが、あるジャイアントに定まった。

頭一つ抜けた、小山のような巨軀。一度だけ見かけたことがある、ジャイアント族の長シグログだ。

息を吸い、裂帛の叫びへ変換する。

「エンハンス・アーマメント！」

応じた《天穿剣》が震え、その刀身に純白の眩い輝きが宿った。

甲高く鳴くそれを、古傷だらけの巨大な胸元に合わせ——

「貫け——光よ!!」

一息に解き放つ。

唸る剣閃。ソルスの光を凝縮したかのような熱線が、空を食い破り直進する。

ゴブリンの頭上を悠々と飛び越えて、迷うことなくまず最初に手前にいたジャイアントの胸を背中まで貫いた。

そのままもう一体の頭を消し飛ばし、なおも勢い衰えずに目標へ迫って——唐突に、シグロシグの体制が崩れる。

「っー」

白光は倒れ込んだシグロシグの胸があつた場所を通過し、後方のジャイアントを三匹ほど屠つたところで消え去つた。

初撃、失敗。柳眉が僅かに歪む。

しかしその直後、ゴブリンを轢き潰さんばかりに猛進していたジャイアントがピタリと足を止めた。

彼らは地に倒れ伏した同胞の亡骸を見てどよめいている。人族より圧倒的に豊富な

天命を、一瞬で削り取った閃光に余程慄いたらしい。

(だが、奴はまだ……)

本来の標的を見れば、亡骸のそばで尻餅をついている。その厳つい相貌が周囲のジャイアントより明確に恐怖で歪んでいた。

好機。

今であれば確実に倒せる。飛び回る飛竜を駆る暗黒騎士やあの二人組に比べれば、へたり込んだジャイアントを射抜くことなど容易だ。

再び《天穿剣》を肩に担ぎ直し、僅か二秒で遠目にも巨大な顔面に照準する。

その唇が、完全武装支配術を紡ごうとして――。



連なる山々に木霊する鳴動。

遠く東の方角から届いた嘆きのような残響に、果ての山脈を蒼星に騎乗し飛んでいたライオットは片眉を上げた。

（大門が崩れたか。となると——）

これから先を予想した直後、凜と手元が鳴る。

手綱から左手を離し、無骨な手甲に張り付いているには愛らしい栗色の蝶に顔を寄せた。

「ライオットだ」

『——伝令。東の大峡谷にて戦闘を開始しました。敵部隊の総数は亜人を主として一万強。現在、第一部隊が応戦中です』

「了解。こちらは引き続き『果ての山脈』の警邏を行う」

『了解。交信を終了します』

蝶の触覚が発光を止める。

羽の間に括り付けられた極小の玉に触れ、蝶の『交信先』を変えてもう一度語りかけた。

「こちらライオット。各自伝達は受け取ったな。異常があれば報告せよ」

『イーデイスよ。今のところ問題はないわ』

『同じく、敵影なし』

『異変は見当たりません』

果ての山脈のどこかを飛んでいるのであろう騎士達から返答がやってくる。

「二十分毎に状況を報告。有事の際は即座に情報を共有だ。また、敵との戦闘で天命の残量が六割を切った場合には他の者へ援軍を要請。撤退行動に移行することを忘れるな」

『『了解』』

いくつか言葉を交わし、交信を終える。

再び眼前に広がる沈黙した山稜の監視へと戻り、一つの蠢く影も見落とさないよう目を凝らした。

(さて。皇帝とやらはどう動かしてくる?)

ライオットは暗黒領域に君臨したという、闇の神の皮を被った何者かに対し、慎重で、かつ相当に頭が切れると感じている。

それというのも、気性の激しい暗黒領域の者共を今日この日まで完全に統率していたからだ。

いずれも我こそ最高の種族と誇示して止まず、常に他を蹴落とそうと軋轢を抱えている五部族を纏め上げ、一切の先走りを許していない。

実際、山脈に幾度か潜り込んだ斥候部隊もルーリッドのような大事は起こせぬほど必要最低限かつ、任務に忠実な行動を取っていた。

無論、全て撃滅したが、結果的にそのような印象を与えるには十分だ。

(カーディナル様によりゃあ、外界——リアルワールドからの侵入者だって話だが、軍事に精通してる相手だっつのは間違いねえ)

おそらくは自分達と同じく、日頃戦いに身を置く者か。それも開戦までの一切無駄がない采配から、指揮官コマンダーとして長けている。

問題は、それがどれほどか。

（敵の構成を鑑みても、おそらく第一陣は小手調べ。さしずめ人界軍と暗黒軍、双方の力とその差を見極める布石つてところが妥当）

暗黒領域一の剣の使い手、シヤスター率いる暗黒騎士団や、強烈な暗黒術を駆使する暗黒術師といった主力の存在がいなかったのもその証拠。

ライオットが懸念しているのは、その小手調べがこの山脈にまで及ぶのかの一点。

（暗黒軍が保有する飛行戦力は二つ。暗黒騎士の飛竜と、術師が土くれから生み出すミニオン。どちらも序盤で簡単に捨てられるモンじゃねえ）

複数の整合騎士がここにいることは暗黒軍も把握しているはずだ。

開戦前までの印象からしても、迂闊に初手で峡谷の外まで手を広げたりはしないだろう……そう思えたのは、五日前まで。

——気にかけておるのは奴の尖兵か。

「大当たりだ」

ベクタの背後にはロヴィナ^{ペーリッツシュ}、そして邪竜軍が潜んでいる。

邪竜から生まれ落ちた魂無き分身であれば、その二つと比べて遥かに使い捨てやすいだろう。

もしかすると、秘密の抜け道、更には峡谷の戦場……と見せかけ、山脈側から分身を用いて奇襲してくるかもしれない。

心のどこかで、危惧する自分がいる。

「俺の考えすぎなら、そいつでいいんだがな」

疑り深いことは承知している。

万事において冷静に。余計に力まず、逸ることなく。秘訣はとうの昔に理解している。

それでも竜騎士の中でただ一人、知性を持つロヴィナの傀儡と長く接し、狡猾さを知るからこそ——用心に用心、更なる用心を重ねて。

常時よりもうひと匙気を張りながら、山上を通過していく。

二つ、三つ。脚を使えば踏破に数日とかかる峰々を、飛竜の優れた飛行力はたったの数分にできてしまう。

そのうち一段と大きな山に差し掛かったところで、体内時計が正確に二十分の経過を報せた。

イーデイス達と交信を行う為に、蝶へ視線を落とす。

——全身を、殺意が突き刺した。

「蒼星ツ!!」

顔を振り上げたのと、愛竜に叫びかけたのは同時。

あらんかぎりの力で手綱を引かれ、野太い声で呼応した蒼星が地上と平行にしていた体を百八十度左へ捻った。

バジュツ!!

体を傾け切る寸前、右翼膜を掠める黄金の影。

そのまま空中で一回転させて逃げおおせたライオットは、激しく乱れて戻った前髪を見て冷たく目を細めた。

(——俺の音刃と遜色がないか)

視界の端に通過する寸前で映り込んだのは、真紅の雷槍。

他に類を見ない驚異的な速度を心に留め、緋眼を山の向こうからやってきた殺意の源泉に移す。

ポツポツと、紺色の夜空に浮かび上がる影。

あらゆる敵を見定め、射抜いてきたその目が捉えたのは、ボロ布の翼を操り飛んでくる数百の竜人であった。

「……チ。予感つてのは、この世で一番言うことを聞きやがらねえ」

舌打ちを一つ。それは警戒から迎撃に意識を切り替える為の、ある種引き金であった。

蒼星の首筋を撫ぜ、両手を手綱から離す。主人の操作を失った竜は、揺れ一つなく飛行体制を維持した。

「いい子だ」

背に回った革帯から、《蒼竜の琴剣》を手収める。

(ハ。それにしたって、大胆さも待ち合わせるか。やりやがるじゃねえか、皇帝)

刃の向きを合わせ、出現した光の弦に指を乗せた流れのままに顔の横で構えた。

「各騎士へ伝達。『邪竜軍』の先鋒と思しき生物と会敵。これより撃滅する——」

!!」

飛竜と同等の速度で迫る邪竜達。

その先頭の一匹を補足し——音を解き放つ。

ライオットの戦いが、幕を上げた。